國文註釋全書

東宮侍講 本居豐頴
文學博士 木村正辭 校訂
文學博士 井上頼圀

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

緒言

一謠曲拾葉抄ハ一囊軒犬井貞恕ノ著ニシテ二十巻ナリ、此書ハ觀世ノ正本ヲ以テ本文トシ、和漢ノ諸書佛書等ヲ引キテ總計百壹番ヲ註釋セルモノ、明和九年ノ刊本ナレドモ磨滅シテ文字ヲ缺ケル處尠カラズ、内閣文庫本、黑川家所藏本、學習院本等數種ヲ對照シタルニ比較的學習院本鮮明完全ナリキ、本書ハ之ニ據リテ校合シタレドモナホ不明ノ箇所ハ△又ハ□ノ印ヲ挿入シテ缺如ノ儘ヲ存セリ。

明治四拾貳年壹月

編者織す

目録

謡曲指導抄

全

謡曲拾葉抄巻一

謡曲拾葉抄凡例

一此謡曲拾葉抄者花咲三世之老師一嚢軒大井貞恕撰し置れしを予も時々筆を加へしを老師死期の砌此抄を予に傳へて猶二度此功をとくへきよし堅く約しける凡此抄に筆を染る事四十餘年多の秘事家々の記録等をかり集しらさるは學者に尋ね問て以て漸く首尾せしもの歟おろかなる身の筆を加ふる事且は先師の名をけかすに似たれと遺言に任て梓にちりはむるものならし

一上かゝり下かゝりの謡の本文を勘ふるに共に誤り有り但此抄は當流觀世の本を以て本文とし是を註するもの也扨謡作者の事或抄に委く出たり予是を書寫し置ぬ尤佛者歌道者の作もあり然共數番おしならへ見るにあやまり有るに依て作者の名をあらはさす

一此拾葉抄は觀世の正本を本經としたるものなれ共たとへは玉のゐそのは同し面影なれはその はを除き錦木とくさなとも餘の謡の註に片付て共に是を除き或は又朝長清經なとの軍事多きも除きて外百番の内を共替りに組入たる也

一謡番組の事子細ある事歟此抄紙數の多少有乃至一冊五番六番も閉合せるもあり依て番組子細に不及也

一僧脇の事元來出所しれさる事なれは不記之たとへは歌婦妓狂言に繼母事を作るがごとく此謡もしての相手に出家を出し問答させて佛法の沙汰を作るは謡作者の常なり出生定かにしれたるは勿論記多くは出所無之事ぞとしるへし凡そ謡は出所有事にても寓言をましへて作れるもの也

一予嘗而能の所作をしらす謡のふしをもしらす笛皷太皷のはやし方もしらすたゝ此抄本文を拾ひて一々是を註する計也

一謡は多く佛法の沙汰を以て作る也依て智識に尋て注するといへ共予佛學をせされは其意味をしらず故に本文に叶ひたる佛書の文を拾ひて以て短筆に注し置もの也修羅の謡は多平家物語にてつゝけり平家物語盛衰記等はあまねく人のしれるものなれは大形是を略す然共平家物語を以て本文とせし物

なれは是非なく、少々注レ之多くは長門本盛長私記家々の實錄異本異說を以て注するもの也
一名所舊跡は近國の分は人に尋ね或は先達の抄物をもて書レ之遠國の舊跡なとは定かにしれかたし依て多く書もらしぬ
一たとへは三井寺の鐘に二說あり又淺香山陰さへ見ゆるの歌に三說有如斯異說の數を揚るといへ共よろしからぬ說は除レ之よき說は二說ともに揚レ之見る人所好にゑたかひて見るへし
一近來開板の歌書に御當代の御歌見へたり今此抄に此歌を用る事恐多しといへ共かなひたる歌且は謠にしれさる詞は此御歌を以て其まよひをたゝしぬ
一本文に相歌一首つゝけたるを注するには其歌の先達の抄を以て委く註レ之又一首一句か二句本文につつけたるには證歌一首を引て歌の注を略する也
一注の引歌の頭に ¬ 此印あるは詞書よりつゝきたる歌とゑるへし又頭に○此印あるは只歌はかりを引たるとしるへし
一或云或抄に云と書たるはたとへは其書を開き見るに文すくれてたゝ人の作共見へす然共書の名も作者もしれさるをは或抄云と書也又近來開板の書によろしき說は或云と引て書の名及ひ作者の名をあらはさす又先師の傳へ世の學者の語を引用る時なと或云と書也又書の名もかゝすして本文を注する事有も古人の說によれりとゑるへし

寛保元年辛酉立秋日

宜華庵恣銓七十二翁　誌之

謠曲拾葉抄卷一

高　砂

古今集假名序に高砂住江の松も相生のやうにおほへと貫之が書し處是古今集の秘說といふ此謠は此序に本付て作るなるへし然るに此唄をよろづの謠の最上とし又は祝言第一とする事始終釋教の語をまじへず神を崇め君を祝ひ或は萬葉古今兩集の本體をのべたり和歌のすなをなるは神の御心也和歌を託して君をまもり君は和歌を以て世の政をえろしめす　實治歌合爲家判詞云おほよそ大和歌は古も今も人の心より出て世のことはりをあらはし神のおしへにしたかひて君のまつり事たすくるにも此道いちしるかるへきをや此故に神代の始より今にたへさるなるへし云々　されは神といひ君といひ久しき諷詞に松の德をつらねたり松は是常住不變の形をあらはし和漢共に賞レ之　世阿彌口傳抄云高砂は松の目出度威德を作るものなれは初春に是をうたひ初る也云々　本朝綱目時珍曰松柏爲二百木長一松猶レ公矣　萬公記曰夫松木德之中正也五德具レ焉故其好レ生似レ仁其後レ凋似レ義其條理似レ禮其枝不レ生二汚下一似レ智其脂化爲二茯苓琥珀一似レ神矣　高砂は播州加古郡也昔より高砂をよめる歌あまたある中に播磨の高砂に非ずして法界の山を高砂とよめる歌多し高砂と云は山の惣名也後撰集に花山にてよめる素性法師「山守はいはゝいはなん高砂の尾上の櫻折てかさゝん　拾遺集春の上「高砂の尾上の櫻咲にけり外山の霞たゝずもあらなん　童蒙抄此歌の注に云高砂とは山の總名也本文石砂長成レ山といへり播磨の高砂には非ず云々　古今堯惠抄云法界の山を高砂といふ事ありそれらは松などをよまずして歌の差別なるへし播磨の高砂には山なとはなき所也云々　僻案抄云高砂は播磨の名所なれ共都て山をは高砂と云一說也云々　梁塵秘抄催馬樂(サイバラ)の歌にたかさごのさいさごのたかさこの註　愚案云高砂は山の名なりさいさごはちいさきいさご也高砂も小石のかさなりて山となる心なり云々此外證歌多し略レ之

今を始めの旅衣日も行すへそ久しき　旅衣の紐をゆふと云かけたり　韻會曰旅衆也衆出爲二旅寓一故

謂レ在レ外爲レ旅也矣　旅衣は都て旅立の衣服をいふべければ共別ては雨衣をいふべし

抑是は九洲肥後國　抑は孟子梁惠王下篇朱註曰抑發語之辭也矣助語辭曰抑有ニ還是之意一如レ胗レ脉以レ指按抑究ニ其所ニ以然一矣　九州は豐後豐前肥後肥前筑後大隅薩摩日向都て是を筑紫共云也筑紫は櫻川に注す

肥後國者先代舊事紀國造本紀云火國造瑞籬朝大分國造同祖志貴多奈彥命兒遲男江命定ニ賜國造一矣釋日本紀云肥後國風土記云肥後國者本與ニ肥前國一合爲ニ一國一昔崇神天皇之世益城郡朝來名峯在ニ土蜘蛛ニ天皇勅ニ肥君等祖健緒組一誅ニ彼賊衆一便巡ニ國裏ニ乃到ニ八代郡白髮山一日晩止宿其夜虛空有レ火自然而稍降下着ニ燒此山一健緒組見レ之大驚旣奏ニ朝庭ニ天皇下レ詔此國恠ニ火下一以可レ名ニ火國一文略　已上全

阿蘇宮の神主友成とは我事なり　肥後國阿曾神社三座所謂本宮武磐龍命二殿阿蘇姫三殿國造速甕玉命也矣　阿蘇記云中古加ニ鎭座一爲ニ十二宮一矣　一宮記云阿蘇健磐龍命後一宮本社也矣　諸社根元記云肥後國阿曾神景行天皇分ニ入彼國一之時此神見給也矣　阿蘇宮記云正二位阿蘇大神は神武天皇の御孫にして神八井耳命第五の子健磐龍命と號す往昔神武天皇豐葦原中國を始め給ひ和洲橿原に在せし時健磐龍命に阿蘇を封し給ひしかは神武帝七十六年春二月癸卯朔日に健磐龍命阿蘇にくだり居住し給ひ同所の草部吉見神の女比咩神を娶て生れます子を速瓶玉命と號す全文略　日本紀云景行天皇十八年六月十六日到ニ阿蘇國一其國郊原曠遠不レ見ニ人居一天皇曰是國有レ人乎時有ニ二神一曰ニ阿曾都彥阿蘇都媛一忽化レ人以遊詣之曰吾二人在何無レ人耶故號ニ其國一曰ニ阿蘇一矣　筑紫風土紀云肥後國閼宗縣縣坤二十餘里有ニ一禿山一曰ニ閼宗岳一頂有ニ靈沼石壁一爲レ垣淸潭百尋鋪ニ白緣一而爲レ質彩浪五色絙ニ黃金一以分レ間天下靈出ニ茲華一中略　伊無双居在ニ地心一故曰ニ中岳一所謂閼宗神宮是也矣　阿曾山は北史隨書月令廣義大明一統志等に載たり夫木集藻鹽草にあそ山を赤はだ山とよめり又吹見山共いふ云々　神主友成は友能か子也延喜の比の人也景行天皇阿蘇に遊歷の時速瓶玉命の子惟人を神職に定給ふ友成は惟人の神胤也神主者其神の主と云義也他の社て

は宮司社務社家祝部禰宜なと申也加茂住吉阿蘇三所に限りて古來神主と申習也神始て垂迹ましませし其時より相續て今に神職を司るを神主とは云也

我いまた都を見す候程に　釋名云國君所レ居曰レ都矣左傳曰凡邑有二宗廟先君之主一曰レ都無レ云レ邑矣帝王世記云 大昊都レ陳此稱レ都之始也三代而來夏曰二夏邑一商周曰二京師一京者衆也大也天子居必以二其衆大一稱レ之矣　神武紀云初居二日向國一後東征而兼二六合一以開レ都終都二大和國畝傍山東南橿地一矣是本朝都の始め也

播洲高砂の浦をも一見せはやと存候　播洲は國造本紀云針間國造志賀高穴穗朝稻負入彦命孫伊許自別命定二賜國造一矣伊呂波字類抄云播摩國垂仁天皇御宇始造二此國一矣　大和本紀云播摩國は神功皇后の御時夷國爲二征罸一攝津難波浦にて御船を撰せ給中略彼御船を出さんとするに霖雨暴風連日やまざりけりされ共或日晴間に御船を押出す故に彼處を晴間國と號す又播磨と書事は皇后此時武庫にて彼幡の手を開き上させ給し故に其心に應じて云也巳上文略　或云播洲風土記には昔は萩をはりと云神功皇后の時一夜の間にはりの木生して長生せり依てはりまの國と名つく云々　高砂の浦は大坂よりの船着也都て此所を高砂と云民家凡千軒はかり有海は南東に見る也

旅衣すへはる〲の都路を　衣を張と云かけたり

尾江の鐘もひゞくなり　當所に尾江寺とて有尾江の鐘は此寺に付たる鐘也尾江の松尾江の鐘此所都て尾江の里と云惣て尾江と云は山頂也山の尾の上と云事也　和歌色葉云おのへとは山の尾の上也と云々　但此所山なし只尾江の里とて所の名とするへし　古今榮雅抄云惣て山を高砂といひおのへを尾上と云には非ず播洲は尾江也假字つかひおの江と書よし云々」高砂尾江之鐘は凡高三尺八寸五分口指渡二尺四寸口厚二寸七分地文上下に唐草あり其間兩方天人の舞躰笙笛及攙箏の樂器の形有り

誰をかもしる人にせん高砂の松も昔の友ならて

古今集雜上藤原興風歌也留りは友ならなくに榮雅抄云誰をか昔のしる人にせんと思ふに高砂の松ならで昔の者なしされとそれは殘ても友にてはなけれはかひなしと舊友をしたふよし也云々　謠の心

は此老人たれをか知人にせん高砂の松によそへ神主友成を友として古今集の奥義を物語する也
つもり〳〵て老の鶴のねくらに殘る有明の春の霜夜の起ゐにも　和漢朗詠集都良香晩春題ニ天台山一詩云饑口軽躁忩々乳老鶴心閑纔々眠矣鶴は老松に記すねぐらは鳥の寢所を云とぐら共云也詩經君子于役篇曰鶏棲ニ于塒一日之夕矣　又桀共書　有明とは能因抄云十五日より後の月をいふと云々　綺語抄云有明は大方は十四五日より月いらぬ先に夜のあくるをは有明の月といふへけれと委しくいへは廿日の後をいふへきにやと云々　堯孝桂明抄云曉かけて待出るすへの月にて候又廿日より內の月をも殘月に及候へは有明と申へきよし先達申されしと云々高砂の松のねくらやをれぬらん霜夜の鶴の空に鳴なり
松風をのみ聞なれて心を友と菅蓆の思ひをのぶる計なり　思ひをのふると云ふは歌をよみて思ひをのふると云義也心を友とすと云も歌を詠ずるを云也又菅蓆とはのふると云緣にていへり菅はすくなりと云訓也萬の草は枝葉ありて生しげるもあるに菅はすぐにたてるもの也されは歌はすなをなるを本とすと古人の仰られし詞によりて菅蓆とは書る成へし劉越石答ニ盧諶一詩謂ニ心公朝一何以叙レ懷引レ領長謠矣　千載集序云春の花の朝秋の月の夕思ひをのべ心をうごかさずと云事なし云々　新勅撰序云神をうやまひ佛にいのりおのが妻をこひ身の思ひをのふるに至るまでと云々　東關紀行云やまと歌を詠じて思ひをのべけり云々
落葉衣の袖そへて木陰の塵をかゝふよ　落葉衣とは木葉の身に散かゝりたるを云也　後撰○秋の夜の月の影こそ木間より落葉衣と身にうつりけれ
老の波もよりくるなり　老人の面にえはのよるを波のよるにたとへたり　江匡衡壽考策文云太公望之遇ニ周文一渭濱之波疊レ面矣　古今の序云あるは年毎に鏡の陰に見ゆる雪と波とをなげきと云々
草根○老の波よるの衣をうつたへにこゝろうらかなし遠の秋風
猶いつまてか生の松　猶いつまてもといひて然るへしいつまでかとうたかひたるはよろしからず生の松は在ニ筑前早良郡一此松原は東西十二町南

北四町計西南東は陸にして北は海也世傳神功皇后三韓に趣給ふ時松の枝を此地に指て君事ゆへなく歸朝せは此松の枝いきなんと祈り給ひしが即其松いきたりし故に生の松と名付たりと云々　宗祇筑紫紀行云いきょとてさし給ひけん松ははやく朽てその根を人まもりにかけしなとかたるもむかし戀しきもよほしなりと侍れはすてに久しき事になん侍る云々　長嘯子九洲道之記云みちすから名所共尋とはせけれは是ぞ生の松原とは申といふさる事あり太宰帥隆家筑紫にくたりける時扇たまはせ給ふとて枇杷大后宮凉しさはいきの松原とよみし所にそあなるかまことに歌人はゆかずして名所をしるとことわさにいへるがことく松原の景氣海にちかく少しさしあかりたかき所なれは凉しかるへき境地なり云々○堀河院次郎百首枝毎に幾その千世を契るらんその神代よりいきの松原皇太后宮常陸○新續古浮事は色もかはらぬ同し世に哀れいつまて生の松原大僧正道順

老人夫婦きたれり　神代卷云於レ是陰陽始遘合爲二夫婦一矣是夫婦の始め也　周易曰有二天地一然後有二萬物一有二萬物一然後有二男女一有二男女一然後有二夫婦一有二夫婦一而後有二父子一有二父子一然後有二君臣一矣

高砂の松とは何れの木を申候ぞシテ唯今木陰を清め候こそ高砂の松にて候へ　高砂尾江の松は高砂より舩とまりといふ所へこゆる間川より東の方にあり昔の松は枯て今日の松は後植也　散木集云高砂にまかりて舟よりおりて濱に心なくさめけるにその名きこゆる松は何れぞと尋ね侍りけれは枯て久しくなりぬといふを聞て「高砂の松におくれて立波のかへる氣色そ我身なるらん俊頼　私云高砂の松は一木の松を云に非ず住吉の松もおほくの松をなへて住江の松といふなり高砂の松も是に等し榮雅抄云播洲高砂の松と云は高砂と云所の濱つゝきに松の一村あるを高砂の尾江の松といふと云々

高砂住江の松に相生の名あり　相おひの松と云は二木の松諸共に立ならびたるを相生の松と云也家隆卿和歌灌頂云古しへ崇神天皇御時住吉の濱に四本の松を生す是を相生といふと云々　拾　天くたるあら人神の相生を思へは久し住吉の松安法々師　榮雅抄云此歌は住吉の神木に相生の松と云をよめるにや云々

仰のごとく古今の序に高砂住江の松も相生の樣に覺へとあり　榮雅抄云高砂住江は播洲攝州兩國の松の名所を呼ひ出て兩所の松を相生の樣に覺ゆると也云々古今堯惠抄云口傳云高砂住江の松も相生のやうにおほへ(ム)と云所難ニ心得一也是秘する事也是は文武を高砂の松にたとへ延喜を住吉の松にたとへ奉る也中略文武人丸合躰ありて歌道をひろめ給ひて萬葉集を撰じ給ふことく延喜貫之合躰有て古今をえらはるゝ事同ことくなると云義を以て相生の樣におほへと兩帝同如くなると云義也云々　十口抄云古今集歌に「かくしつゝ世をやつくさん高砂の尾江にたてる松ならなくに「我見ても久しく成ぬ住吉の岸の姫松幾世經ぬらん　此歌を相生の兩首と云也と云々　堯惠抄云かくしつゝの歌の注云播磨の高砂に尾上の里と云所有それに松ありそれをよめり序に高砂住江の松も相生の樣にと侍り此等の歌也云々古今和歌集二十巻は人皇六十代醍醐天皇延喜五年乙丑四月十八日友則貫之躬恒忠岑此四人に仰出されて内裏承香殿の東の御殿にて撰之歌數千百十一首扨此集を古今と名付る事は當集以前神代の歌萬葉集の歌を指て古と云延喜聖代の時を指て今と云此集の題號初めは續万葉と云次に今古と號す其後古今和歌集と定められたる也假字序は貫之眞名序は紀長雄卿の末葉紀淑望が書り序の土代を漢字の文章にかゝせて假字序に和げて貫之書と也又貫之書たる假字序を淑望漢字に寫し書ともいへり又云奏覽の本には眞字序なしと云々　已上榮雅抄文略宗祇古今相傳云古今眞名序は當流に用されは貞應本には奥にかき嘉祿本には一向なし云々

序者文躰明辨曰按爾雅集之序緒也字亦作レ敍言下其善敍ニ事理次第ニ有レ序若中絲之緒上也矣　公羊傳疏曰序者舒也敍也舒ニ展己意一以次ニ敍經傳之義一述ニ巳作レ註之意一故謂ニ之序一也矣

攝津國住吉　攝津國は國造本紀云據ニ准法令一謂ニ攝津職一初爲ニ京師一柏原代改レ職爲レ國矣　色葉字類抄云延暦十二年停ニ攝津職一爲レ國正四位下和氣朝臣始爲レ守矣　日本紀云延暦十四年乙亥有レ勅停ニ難波大宮職一爲ニ攝津國一矣　大和本紀云天照太神の若尊を天鈿女尊に付て天降す時彼鈿女尊天の鳥船に乘て泊ニ難波浦一仍彼處を尊敬して高津と號

す後に云攝津國攝津と書て津の國と云は此國に
は船の着泊多し然れは彼高津に多く津を攝たる故
に攝津國と書也云々　住吉は郡の名也或云風土紀
云所以稱住吉者昔息長足比賣天皇世住吉太神
現出而巡行天下覓可住國時到於沼名椋之長
岡之前乃謂斯實可住之國遂讃稱之云眞住
吉國乃是定神社今俗略之直稱須美乃叡矣
妹背の道は遠からす　いもせとは夫婦也妻を妹と
いひ男を背共せな共云也袖中抄云いもせとは吾妹
子吾背子の詞を略したる也云々　舊事紀云伊弉諾
尊伊弉並尊吾妹吾夫君との給ふと云々　河海抄云
いもせとは日本紀のことくは伊弉諾伊弉冊尊兄弟
夫婦と成給へる因縁也いもうとゝせうとゝ云心也
云々　鎭火祭祝詞云伊佐奈伎伊佐奈美命夫二柱嫁
繼給天國乃八十國嶋乃八十嶋生給比八百萬神等乎生
給比弖下略
是はめで度世のためしなり　目出度とは舊事本紀
云天照太神從窟戶間出御目覽庶神見之悉悅
甚喜今以幸吉事云目出此緣也矣
高砂と云は上代の萬葉集のいにしへのぎ住吉と申は
今此御代に住結ふ延喜の御事松とは盡ぬことの葉
の榮へは古今あひおなしと御代を祟むるたとへな
り　萬葉集の古へといひ今此御代の延喜と云詞に
て古今の二字をのべたり〽秘說云高砂とは上古萬
葉の歌をさす住江とは當代古今集の歌をさす合せ
て一部となれは相生とて松は千歳をふるためしに
祝ひいへる也高砂といふに古しへをあふくひらき
あり住吉と云には彼御神此道の長者にておはしま
す上住江と申につきてめてたく聞ゆればなり都て
此集の躰たるを相生のやうにと書る也云々　上古
萬葉時代の歌延喜當代の歌共を取集て古今一部と
なる依て古今集を相生といへり都て相生とは古今
の本躰を云成へし　住吉明神は和歌の守護神也住
吉とはすみよきと云義也延喜聖代を稱美して住吉
と申は今此御代に住給ふ延喜の御事といへり松と
はつきぬことの葉とはよむうたのつきせぬを云也
榮へは古今あひおなしとは古今より和歌の道專さ
かんになれるを云也此謠は松の威德をつゝけ是に
よそへて古今の大意を記せり心をつけて見るへし
萬葉集廿卷は八雲御抄云奈良天皇御宇橘諸兄左大

臣撰レ之字細難レ多不レ決レ之歌數四千三百十五首長歌二百五十此內也但萬葉有ニ兩說ー與五十首或無矣　袋草子云萬葉歌數四千三百十三首此內長歌二百五十九首但本々不同難レ用ニ定數ー矣　拾芥抄云奈良天皇御宇橘諸兄公撰レ之　私勘右大辨家持同撰レ之矣　古今榮雅抄云萬葉集は聖武の御女孝謙の御時天平勝寶五年に井手左大臣橘諸兄勅をうけて撰する也一世に首尾せずして發帝稱德光仁桓武五代過て平城の御時撰定おはりて大同三年に世に流布す云々　袖覺抄云萬葉とはよろづのことの葉と云事也古今より以來代々の撰集皆題目の下に和歌の兩字あり所謂古今和歌集後撰和歌集等也萬葉集に和歌の兩字なき其故は萬のことの葉とは歌也萬葉の二字に和歌の心こもれり和歌と題せさる事尤也云々　延喜は醍醐天皇を云也竹生嶋に注す延喜は年號也年號を以て天子の御名によぶ也譬は天曆帝仁和帝と云に等し　帝王編年記云延喜二十二年昌泰四年七月十五日改元依ニ辛酉革命老人星ー也矣

四海浪しづかにて　爾雅曰九夷八蠻六戎五狄謂ニ之四海ー矣博物志曰天地四方皆海水相通地在ニ其中ー蓋無レ幾也七戎六蠻九夷八狄形類不レ同總而言レ之謂ニ之四海ー皆近ニ於海ー也矣　孝經四海註曰謂ニ之四夷ー矣　初學記曰凡四海通謂ニ之裨海ー矣　後拾遺集序云我君天下しろしめしてよりこのかたよつの海波の聲きこえずと云々　◉夫四の海浪しつかなる御代なればはらかのにゐもけふ備ふなり　衣笠內大臣

國も治る時津風　藻鹽草云時津風は四季のうちにいつにてもあれ一しきりあらく吹風を云也と云々　詞林采葉云時津風は大風也其名四時風とも云隨而時世の吉凶以レ之可レ計者也軍勝第七卷立春註曰正月戊申ー月己酉三月庚戌有ニ暴風ー從レ東來七日不レ止兵起取意　立夏立秋立冬等之暴風依レ時隨レ節吉凶且如レ是以可ニ進知ー然此風をは漢朝には四時の風と云和國には時津風と云已上　◉万時つ風涼しく成ぬかしゐ潟汐干の君は玉藻かりなん

枝をならさぬ御代なれや　王充論衡曰太平之世五日一風十日一雨風不レ鳴レ條雨不レ破レ塊雨必至レ夜矣◉拾玉吹風も枝をならさぬ行末はちらぬ花をや宿に詠ん　慈鎮

あひに相生の松こそめてたかりけれ　●祝ひつる
松に契りて君と臣あひに相生の春の藤波 後水尾院
夫草木心なしとは申せ共　江口に注す
花實の時をたかへず　春は花咲秋はみのるを云也
張景陽七命曰陽葉春青陰條秋綠華實代新承レ意恣レ
歡矣　花實の時を違へずとは古今集を指ていへる
也　玄旨抄云古今集は花實相對の集後撰集は實過
半とかや云々　無名抄云中比古今の時花實ともに
そなはりてそのさまち〳〵にわかれたり云々
陽春の德をそなへ　春は陽なれは陽春と云或は初
陽孟陽青陽共云也　前漢律曆志曰少陽者東方東動
也陽氣動レ物於レ時爲レ春春蠢也物蠢王矣
南枝花始て開く　菅原三位 文時詩 云誰言春色從
レ東到露暖南枝花始開 朗詠集
然れ共此松は其氣色鏁(トコシナヘ)にして花葉時をわかす　松
はいつも色靑して花と葉と時をわかぬ也　藻鹽草
云とこしなへは常の義也云々　又とこしへとも云
也　匠材集云とこしなへはたへぬと云こと也又つ
ねにと云事也云々　管子大匡篇曰智者窮レ理而長(トコシナヘ)
慮矣　色葉字類抄云終古(トコシナヘ)と書　一云とこしなへと
云訓はとこは常也しは休字也なへは時也云々

四の時至りても　四の時は四季を云也　記閒居篇
曰天有ニ四時一春秋冬夏風雨霜露無レ非レ敎也矣　論
語陽貨篇曰天何言哉四時行レ焉百物生レ焉矣
一千年の色雪の中に深く　源順歲寒知ニ松貞一と云
題にて作る詩に十八公榮霜後露一千年色雪中深矣
古今著聞云松樹を貞木と云事はまさしく人のた
めにかの木の貞有にはあらず霜雪のはけしきにも
色をあらためずいつもみとりなれば是を貞心にく
らぶる也貞松は年のさむきにあらはれ忠臣は國の
あやうきに見ゆと潘安仁が西征賦にかけるも此心
也云々
又は松花の色十歸り共云り　松は百年ぎりに枝も
梢ものびて百年後には延ず其氣本へ歸る事十度に
して花咲といへり　童蒙抄云松花は千年に一度咲
也云々　本朝文粹云後江相公內宴賦云椿葉之影再
改尊猶南面松花之色十廻豈只天意乎 上下略 ●松の花 新後撰
十歸咲る君か代に何をあらそふ鶴がよはひそ 基俊
ことの葉草の露の玉　ことの葉ぐさとはことばの
種也又和歌をも云りはぐさはの草共云也　匠材
集云はの草は少の草也云々　躬恒秘藏抄云は草と
はこまかなる草のあれたる所に生る也「作るへき

ぬしやなからん小山田にはぐさまじりのそろいおひたる伊勢　○行末の秋風いかにかはらしのことのはくさの露のちきりも通茂

いきとし生る物毎に敷嶋の陰によるとかや　古今序云いきとし生る物いづれか歌をよまざりける云々いきとし生る物とはいきと生る物と詞を重ねて云り千載集序云此世にうまれとうまれ我國にきたるときたる云々此等の出葉と等し　○あふけ此道は名におふ國の風生としいけることわさそこれ 水日集

敷嶋とは日本の惣名也昔大和に磯城嶋の都あり欽明天皇住給ひし都也萬葉にしき嶋の大和とつゝけたり大和は日本の惣名なれ共和洲一國の名によぶ也爰にしき嶋とうたふは歌を云也和歌は和國の風義なれは和歌をしき嶋の道と云也　古今堯恵抄云此國昔泥土かはきし跡に大日の梵字あり然るゆへ梵字を敷と云故に此國を敷嶋の大和と云也云々

○住吉の松のことの葉かはらすは神代に歸れ敷嶋の道 新千

然るに長能か詞にも　大系圖云大職冠十四世孫従五位上伊賀守藤原長能者伊勢守兵衛佐倫寧之次男也矣　長能家集奥書云藤原長能讃岐権介惟岳孫也寛弘二年正月廿七日叙二従五位上一同六年正月廿八日任二伊勢守一矣　長能を歌書にてはながたふとゝなふるなり

有情非情の其聲皆歌にもるゝ事なし　古今栄雅抄云此有情のみならす非情のひゞきも歌也一切の生類は五行の躰とす其聲は皆五行のひゝき也歌の五句は五行也されは生類の聲を歌といふ云々　和歌初心抄序云定家卿　田夫野人浦かつ山賤有情非情鳥類畜類までも皆歌に洩る事なし云々

草木土砂風聲水音まで萬物のこもる心あり　朱子太極註曰天下萬物化々生々有二此氣一則有二是形一以二形之變化一可レ見者一而言飛潜動植各具二一性一矣　莊子則陽篇曰萬物注物不レ止二於萬一而言二萬物一其總數也矣

春の林の東風にうこき秋の虫の北露に鳴も皆和歌の姿ならすや　長能私記云和歌は是五行の躰也詞に出すを歌とし心にしれるを躰とす春の林の東風に動き秋の虫の北露に鳴も皆和歌の躰にもれず有情非情共に歌の道をはおこす也云々　北露とは秋く

れは露ひやゝかになりて北より吹風のいたく身にしみ虫の聲よはりゆくを北露に鳴とはいへり

十八公の粧ひ　呉錄曰呉丁固初爲ニ尙書一夢ニ松生ニ其腹上一謂レ人曰松字十八公也后十八歲吾其爲レ公乎卒如レ夢矣○十とせあまり八とせの春の夢覺て

子日にあへる松のあけほの

千秋の緣をなして古今の色をみす　下かゝりには見ずと濁りてうたふ也其故は無ニ松古今色一といへる古語を以て濁ると見えたり當流には淸也此謠は始終古今集の大意をつゝけたれは淸てうたふ義是ゑかるへし

始皇の御爵に預る程の木也とて　史記秦始皇本紀曰二十八年始皇東行ニ郡縣一上ニ鄒嶧山一立レ石與ニ魯諸儒生一議刻レ石頌ニ秦德一議下封禪望ニ祭山川一之事上乃遂上ニ泰山一立レ石封祠祀下風雨暴至休ニ於樹下一因封ニ其樹一爲ニ五大夫一上下略　爵の字はくらゐと訓ず凡諸位の惣號也或は叙爵とは叙ニ五位一をいふ爵は諸位の惣號といへ共初て五位に叙する時を叙爵と云事和朝の法也　韻會曰爵量也量ニ其職一盡ニ其材一也大夫以上與宴享然後賜レ爵以章ニ有德一故因謂レ秩爲レ爵矣　始皇の傳は老松に注す

高砂の尾江の鐘の音すなり曉かけて霜や置らん

千載集冬部前中納言匡房歌也詞書云堀川院の御時百首の歌奉りける時よめると云々　童蒙抄云唐土に豐山と云所ありその峯に鐘あり霜の降をまちてなる也云々　山海經曰豐山有ニ九鐘一焉是知レ霜鳴郭璞注云霜降則鐘鳴故言レ知也物有ニ自然感應一而不レ可レ爲也矣

松の葉の散失せすして色は猶柾のかつらなかき世の

古今序云松の葉の散失せすしてまさきのかつら永くつたはりと云々正木のかつらはなかきといはん枕詞也まさきは柾也　古語拾遺云令ニ天鈿女命一以ニ眞辟葛(マサキノカツラ)一爲レ鬘矣

老木のむかしあらはして　○千首 高砂の松の老木の昔をもとへば尾上の雲ぞしらるゝ　後柏原院

相生の松の精夫婦と現じ來りたり　神仙傳曰呂洞賓憇ニ岳洲白鶴寺前一有ニ老人一自ニ松梢一冉々而下曰某松精也見ニ先生過一禮當ニ候見一呂因書レ壁云獨自行來獨自坐無レ限世人不レ識レ我惟有ニ城南老樹精一分明知道神仙過矣　是松の精老人に化するの證也

土も木も我大君の國なれは　田村に注す
波の淡路の嶋陰や　神代卷云伊弉兩神始遘合爲二夫婦一及レ至二產時一先以二淡路洲一爲レ胞意所レ不レ快故名レ之曰二淡路洲一矣　纂疏云淡路和訓猶レ言二吾恥一也二神始生二小洲一深爲レ耻耳矣　舊事紀云產二淡路洲一爲レ胞意所レ不レ快故曰二淡道洲一即謂二吾耻一也矣國造本紀云淡道國造難波高津朝御世神皇產靈尊九世孫矢口足尼定二賜國造一矣　大和本紀云淡路は伊弉諾尊大海原をさぐり給ひし鉾の滴混堅りて一國と成れり中略　路とは浪の上には道なし然るに浪の上は陸出始たるが故に路の字を書也云々

鳴尾の沖　鳴尾は攝洲武庫郡也○けふこそは都の千方の山の端に見えす鳴尾の沖に出ぬれ實家

我見ても久しく成ぬ住吉の岸の姫松幾世へぬらん
此歌伊勢物語に入詞書云昔みかど住吉に行幸し給ひけり云々　又古今集十七雜上に入題しらずよみ人しらすと有　榮雅抄云歌の心は住の江のきしの姫松はいく世かへぬらん我見ても久しくなりぬると松に打むかひて人にとひたるやうによめる也云々　愚見抄云姫松はおさなき小松には非ず女松とて葉のこまかなるを云也云々　應山公伊物聞書云姫松とは女松也と云儀あり當流には松の惣名也云々　玉傳秘抄云天安元年正月廿八日文德天皇住吉行幸ありしに業平供奉し侍りき業平玉壇に跪てよめる云々　應山聞書云我見てもの歌御製共いふ業平の歌共いふ云々　愚見抄云或說に文德天皇天安元年正月に住吉行幸し給ふといへれと國史なとに所見なければ更に信用にたらず新古今集にもむつましゝ君はしら波の歌神祇の部に入られたるにも住吉に行幸有し時と伊勢物語を引て載られたれどいつれの帝の行幸とは見へずいと覺つかなき事也古今の顯注に伊勢物語の異本を引てみかとのあそはしたる由しるせり此物語にもたしかに中將の讀るとはかゝず帝の詠といはんも相違なきにやと云々　惟清抄云此行幸國史にも實錄にも見えずしるしおとすにやと云々　榮雅抄云文武天皇天安元年の行幸と云々　帝此歌をよみ給ふに御神あらはれてむつましと君はしらなみみつかきのと御返し有しと也異說に平城天皇の行幸共いへり此事を業平朝臣きゝて住吉にまふでけるついでに「住吉の岸

の姫松人ならはいく世かへしとゝはましものを
とよみけるに翁のあやしげなるが出きてめでゝ返
しに「衣だにふたつ有せはあかはたの山にひとつ
はかさまし物を」とよみてきへうせにけり今思へ
は御神になんおはしける云々
むつまじと君はしらずやみづかきの久しき世々の
伊勢物語におほんかみげ現形ぎやうし給ひて「むつま
しと君はしら波みつかきの久しき世より祝ひそめ
てき
右の我みてもの歌に神の御返し也又新古今十九神
祇部に入闕疑抄云君はしら波は君はしらずやと云
心也獨知給ふへきと云也みつかきは久きといはん
枕詞也久き世とは當社垂迹の事成べし云々　寶濟
云久き世とは神功皇后よりの御事をの給ふ也落着
は神も君が御代を祝ひ給ふとの義也と云々　眞名
本に睦神代卷に親睦九禪抄に親旁と書
神々樂夜の鼓の柏子を揃へてすゝしめ給へ宮つこた
ち　　惣て神樂は夜分也依て夜の鼓とつゝけたり
神樂は三輪に注す宮つこは田村に注す
西の海あをきが原の波間よりあらはれ出し神松の

續古今集第七神祇部云光俊朝臣詠せ侍りける住
吉社三十首に神祇を卜部兼直　西の海やあをきが
原の鹽らより顯はれ出し住吉の神　是は住吉明神
始て出現し給へる事をよめる成へし　神代卷云伊
弉諾尊往至筑紫日向小戸橘檍原而祓除焉遂將
盪滌身之所汚乃沈濯於海底因以生神號曰底
津少童命次底筒男命又潜濯於潮中因以生神號
中津少童命次中筒男命又浮濯於潮上因以生神
號曰表津少童命次表筒男命凡有九神矣　檍か
原は神代卷に日向國とあれ共一説筑前にありと云
り今案筑前國那珂郡に住吉の社あり此所を住吉村
と云伊弉諾尊檍原にてみそき祓し給ふと云處の地
是なり日本紀私記に住吉三神は本筑前小戸にある
由ゑるせり又延喜式にも載たり又神中抄及宗祇の
説にも橘の小戸筑前國にありといへり然れは小戸
の橘の杵か原は筑前にありと心得へし今日向國に
は小戸橘檍原などいへる所なし然るを神代の卷に
は日向國とあり子細尋ぬへし　攝洲住吉に所祭
は　延喜神祇式云攝津國住吉坐神社四坐第一底筒
男神第二中筒男神第三表筒男神第四神功皇后靈神

也矣　日本紀云皇后伐ニ新羅一之明年二月又表筒男中筒男底筒男三神誨レ之曰吾和魂宜レ居ニ大津渟中倉之長峡一使因看ニ往來船一於レ是隨ニ神教一以鎮座焉矣渟中倉之長峡は今の住吉の神宮の南邊を云とぞ

春なれや殘の雪の　菅家文章第六詩新路如今穿ニ宿雪一舊巣爲レ後屬ニ春雲一矣

朝香潟玉藻刈なる岸陰の　朝香潟は攝州住吉郡也

太子傳暦云推古天皇三年三月土佐南海夜有ニ大光一亦有レ聲如レ雷經ニ三十箇日一夏四月著ニ淡路嶋南岸一嶋人不レ知ニ沈木一交ニ薪燒ニ於竈一其大一圍長八尺其香異薫太子遣レ使令レ獻是爲ニ沈水香一者也此木名ニ栴檀香木一其實鷄舌其花丁子其脂薫陸沉レ水久者爲ニ沈水香一不レ久者爲ニ淺香一文略　古老俗傳云此香木を是に寄せて淺香の號あり云々　玉藻は玉は美稱の詞也　毛詩註曰藻水菜也矣　崔禹錫食經曰沈者曰レ藻浮者曰レ蘋矣○身にしめと吹にけらしな玉藻刈朝香の浦の秋の初風　新續古

倚ニ松根一而摩レ腰千年之翠滿レ手折ニ梅花一而揷レ頭二月之雪落レ衣

文粹第十一橘在列入道尊敬作子日野遊之序也摩レ腰とはふれたつさふる心也千年の翠手に滿とは松を折或は引なとするは千年の翠掌にありと云心也二月とは仲春に非す梅月正月の二ヶ月也子日は初春の義なれは二月は去年今年を指て云也梅花を雪と見又實の雪と虛實の二つを合て殘雪花雪をまじへて降ぞといふ心なり○梅花折てかさしに指つれは衣に落る雪かとぞ見る　千

月すみ吉の神遊　神遊は諸神岩戸の前にて神樂を奏し給ふを云也今諸社の神樂皆神あそひ也三輪に注す○立歸る雲井の庭の神遊ひ糸竹の音も月にすみけり　爲兼　伏見院

松陰もうつるなる青海波とは是やらん　松は色青き故に松陰もうつるなる青海波とつゝけたり拾芥抄云青海波盤渉調矣　體源抄云青海波又作ニ蒼海波一龍宮樂也昔天竺彼舞儀浮ニ青海浪上一良下有ニ樂音一羅路波羅門聞レ之傳レ之漢帝都見レ之傳ニ舞曲一云々此曲昔平調樂也承和天皇御時依レ勅被レ遷ニ盤渉調曲一舞者大納言良峯安世卿作樂者和邇部大田麿作詠者小野篁所レ作也云々

神と君との道すぐに　○守るには神と君との中筒　雪玉

男へたてぬ道にたつ波もなし
都の春に行へくはそれぞ還城樂の舞　還城の二字はみやこにかへるとよむ也依て都の春に行へくはと云り　拾芥抄云還城樂乞食調矣　體源抄云還城樂中曲古樂此曲者西國之人好食レ蛇求ニ得其蛇一悦姿不可説間摸ニ其體一作ニ此舞一又名ニ見蛇樂一此曲唐目錄入ニ雙調曲ニ云々　又云此舞本者取レ蛇舞而宇治殿の童舞にをしへられける時は紙を卷て輪に作りてぞ持せ給ひたりける又秋の舞の時すゝき女郎花を折合て輪にしてまひければ殿下の仰にも童舞の時はかやうに成へし實の蛇形はうとましき也とその御定ありけり是より男舞にも紙の輪を今に用ひたる也うるはしく小蛇のかいまきたるを作たる也云々

小忌衣　大嘗會神今食(シンコンシキ)新嘗會等の時小忌の公卿大忌の公卿とて神事を預る公卿の着する神事の衣也小忌とは神事の深きを云大忌とは神事の淺きを云也卜部兼邦百首抄云小忌とはうしろの一の也大忌とは後のはたはりつねの衣のの人の衣裳の如く二はたはり也云々　平治秘記云小忌事其體如ニ缺腋一但身一幅也用ニ狩衣寸法一但前尻如ニ缺腋一ハ白布紛張而摺レ之形木文小草梅柳小蔵雉蝶小鳥等也無レ裏單也矣○榊葉にゆふしてかけて立舞しおみも大みも天の羽衣　百首　兼邦

さすかいなには惡魔を拂ひ　さすとは陽の形也舞の手にて惡魔を拂ふ也臑は脅と肩との間也

治る手には壽福をいたき千秋樂に民をなで　治るとは陰の形也上に臑といひて手と對したり　拾芥抄云千秋樂盤渉調無レ舞矣　體源抄云千秋樂新樂小曲無レ舞此曲後三條院康治三年大嘗會に風俗所預主監物賴吉(ヨリヨシ)奏レ勅作而入道左大臣殿此調子に小樂すくなしとて吹とゝめ給ふと云々　説郛一百唐明皇三十四曲曰千秋節明皇生日作矣　今案壽福とうたへ共地福といひて然るへしおさむるとは五穀成就して納るを云五穀納るは秋也故に千秋樂をまひ地福を以て民をなでやしなふ心也夫舞樂は世の政にして其行正しき時は天下太平也五穀熟すといへり　禮記樂記曰天子之爲レ樂也以賞ニ諸候之有レ德者一也德盛而敎尊五穀時熟上下略

萬歲樂　拾芥抄云萬歲樂平調矣　體源抄云萬歲樂

中曲新樂又名ニ鳥歌萬歳樂一云々　通典曰鳥歌萬歳樂武太后所レ造也　一說武后時宮中養レ鳥能如レ人言又常稱ニ萬歳一仍作レ樂以象ニ此舞一又曰此曲賢王御時來ニ鳳凰一囀音也件鳥音囀ニ賢王萬歳一也件音爲ニ此樂曲一也云々　說郛一百唐明皇三十四曲曰鳥歌萬歳樂此曲武后時有鳥能如レ人言萬歳矣

相生の松風颯々の聲そたのしむ　文選註曰颯々風聲矣　楚辭曰風颯々兮木蕭々矣拾得詩松風清颯々矣○たのしめる國に相生の松風や野山に吹もゆたかなる聲通茂

老松

老松社北野に所レ祭は　小神次第云老松社所レ祭本社北從レ東第二社又一殿合祭小社內有ニ二座一矣舊記云福部社老松社此兩社菅三品眷屬神也矣　扶桑略記云天曆九年三月十二日酉時天滿天神託宣記云有ニ我從者老松富部云者二人一笏持ニ老松一佛舍利令レ持ニ富部一上下略　續撰吟○年つもる名も老松の神なれはゆきにや跡をたれ初めけん雅世　今案老松は管家御存生の御時近習の人にて後に神に祝ふもの歟但世に傳ふ所は松を祝ふて老松の神と稱す此謠に作る所も是也何れか是なる追て尋ぬへし　榻鳴曉筆云菅家三年の春秋をおくらせ給ひしに都にて愛せさせ給ふ梅の花をおほしめし出て「東風ふかは匂ひおこせよ梅花主なしとて春を忘るな」と詠し給ひしかは此梅遙に飛去て配所の庭にそ生たりけるされは夢の告有て折人つらしとおしまれし西府の飛梅是也心なき草木迄も御別れを悲しみけるにや其後古鄕御庭の櫻は枯けるとなん此事を聞召及はせ給ひて「梅はとび櫻はかるゝ世中に松計こそつれなかりけれ」一捩こそ都の松は御跡を追て西府には生たりけれ追松と申侍るこれ也云々

實治れる四方の國關の戶さゝてかよはん　治れる御代を祝ひていへり關の戶さゝすと云事難波に注す

抑是は都の西梅津の何某とは我事なり　梅津は梅の原共いへり四條の末桂川の東也神社有梅宮・號す昔此所に梅津殿と云有　山槐記云梅津殿故顯親朝臣山庄下略　大梅山長福寺記云梅津邑長始祖藤原

惟隆至ニ清景ニ十八世清景號ニ豊前左衛門ト矣　今受
にうたふ梅津の何某も此等の末葉たる歟詳ぬへし
大井川行幸和歌の序貫之月のかつらのこなた春
の梅津より御船よそひてわたし守をめしてと云々
抑及都の字義は高砂に注す○名のみしてなれるも
見えす梅津川ゐせきの水ももれるなりけり
我北野を信し常に歩みをはこひ候處に　諸社根元
記云山城國葛野郡北野天神三座者中開御前菅丞相
東開中將殿西開吉祥女矣　舊記云北野天滿宮は菅
丞相の靈也昌泰四年正月廿日左大臣時平の讒に依
て筑紫宰府に左遷せらる延喜三年二月廿五日配所
にて薨す御年五十九葬ニ安樂寺ニ其後天慶三年七月
十六日七條坊門文子と云女に菅靈託云欲レ遷ニ右近
馬場ニ依レ之天暦元年六月九日鎮ニ祀北野ニ同九年三
月十二日近江國比良社禰宜良種に託云大内北野一
夜生ニ松千本ニ其所レ建社以可レ祟ニ天滿天神ト と有依
レ之朝日寺の僧最珍と右の文子と力を合て靈廟を
造る又天德三年右大臣藤原師輔改ニ社頭ニ造營云々
北野に北野天神宮とて在ニ菅原天神廟傍可ニ五十
歩ニ續日本後記云仁明帝御宇承和三年二月爲ニ遣
唐使ニ祠ニ天神地祇於北野ニ也蓋此神鎮座始乎矣
菅社は菅原天神地主の神にして菅廟より以前の神
也北野天神と云時は此神の事也北野天神と云時は
菅家の御事也同字同名にして別也まきらはしきゆ
へに記レ之
筑紫安樂寺に參詣申せとあらたに御靈夢を蒙て候間
安樂寺は在ニ筑前國御笠郡大宰府ニ天神の御廟
所也　或云延喜五年八月十九日安樂寺に初て被レ
建ニ菅公神殿ニ味酒安行といひし人是を奉れり一說
に藤原仲平此經營の事をつかさとれり法性坊其社
地を定め廟前の池には心の字の形を模寫す御社は
南にむかへり寶山東にそびへ天判山西にむかひ染
川前にあり石踏川北になかれ末は思ひ川となる西
に觀音寺あり都府樓のあとその西につらなれり云
々　帝王編年記云延喜三年癸亥二月廿五日於ニ太
宰府ニ薨御春秋五十九欲レ奉レ葬ニ三笠郡四堂邊ニ御
車途中留而不レ動仍奉レ葬ニ其處ニ安樂寺是也矣　筑
紫は櫻川に注す
九州は高砂に注す日の本は花筐に注す秋津洲は龍田
に注す四の海は高砂に注す

こまもろこしも殘りなき御調の道の末こゝに　こま唐土より日本へ御調(ミツキ)奉る事は君の御惠みひろきか故也こまは高麗也弓八幡に注す御調物日本に渡す事同しく弓八幡に記すもろこしは唐の惣名也或云もろこしと云訓は唐より日本へ諸々のものを越すゆへにもろこしといふ也云々

梅の花笠春もきて縫てふ鳥の梢かな　●古 鶯の笠に縫てふ梅花折てかさゝん老かくるやと

吳竹集云鶯の梅花の梢をあなたこなたと飛かふは笠をぬふに似たると也云々

時めきては野宮に注す十歸りは高砂に注す

風を逐て潛に開く年のはもりの松の戸に春を迎て忽にうるほふ四方の草木まて神の惠になひくかと

和漢朗詠集云逐レ吹(カゼナ)潛開不レ待二芳菲之候一迎レ春乍變將レ希二雨露之恩一矣◎是は延喜の御時內宴に進レ花賦也紀淑望作る共公乘億作レ之共いへり兩説也上句は年內の立春の心ある也吹は風也芳菲の候とは春花の盛なる時を云也　字書云芳菲茂貌矣　年內の春風をおひしたひて潛に綻ひたる心也下句は立春の氣を迎て乍に冬木の氣色を變したるか彌雨露のうるほひを希ひて心よくひらけんと思へる心也年のはもりとは年のはと葉守の神と二つをつゝけたり　萬葉集に每年と書てとしのはとよめり　匠材集云年のはは年每也又年の始也云々　新古今增抄云葉守の神とは樹木をまもる神也云々　天神を葉守の神になそらへたり仍神の惠になびくかとつゝけたり

歩みをはこふ宮寺の　宮寺とは安樂寺を指て云也當社天滿宮は兩部習合たるゆへに宮寺と云也蟻通に注す

敷島の道までも實末ありや此山の　敷島とは和歌の道也高砂に注す此山とは竈山天判山等をいへりいつれも安樂寺に近し

天きる雪のふるえをも猶おしまるゝ花盛　古き枝に雪の降をいひかけたり天霜雪は軒端梅に注す

聞及びたる飛梅とは何れの木を申候そあら事もおろかや我等は只紅梅殿とこそあかめ申候へ　飛梅は安樂寺の庭にあり　拾遺集云なかされ侍ける時家の梅の花を見て贈太政大臣「こちふかは匂ひお

こせよ梅花主なしとて春をわするな　縁起云此御詠により筑紫へ梅の飛けるとなん是より飛梅とは云也云々　源藤孝九州道之記云天正の比宰府は天神の住給ひし所と聞及しまゝ中略　飛梅も古木は燒てきりけるに若ばへの生出て有を見て「鶯のはねをやとひて飛梅のかこにはいかてのらてきにけん　紅梅殿と云は菅家の住給ひし御殿の名也梅をうへ愛せられし故に名とす　拾芥抄云紅梅殿五條坊門北町尻西町面北野御子家或云二天神之御所一矣　今案五條坊門西洞院東へ入北側持宝院これ紅梅殿の舊跡也一夜飛梅の天神と云是也則飛梅の跡今にあり　紅梅殿北野に祭る所は小神次第云東御門東三町坐二金山天王寺南傍一矣

忝も御詠歌によりと　御詠歌とは天神のよみ給ひしこちふかはの歌を云也右に注す

いか樣是は老松の　老松も安樂寺にあり上に記す

翁さひしき　實盛に注す

先社壇の躰を拜み奉れは北に峩々たる青山あり是より案樂寺の景氣をつゝけたり案樂寺のうしろに高山そびえたり

峩々は說文曰高貌矣　九州道之記云天正十五年五月廿六日宰府は天神の住給ひし所と聞及しまゝ見物のためまかりける彼宮寺は七とせ計さきに炎上してかた計なる假殿あり舊跡の有樣松杉の多くきられたるにさすかに所々に殘りうしろは青山そびえて右の方七八町計りもあらんと見えて觀音寺あり誠に西都共云つへき所なり下略

朧月松閣の中に映じ　朧月は山の月也　劉良注云朧山也矣　青山の松樹の中へ月の指入たる體也松閣とは松の茂りたるを閣に見たてたる也下掛（シモガヽリ）には松柏の中に映しとうたふ也是然るへき歟

南に寂々たる瓊門あり斜日竹竿のもとに透り　南に寂々たる瓊門とは安樂寺の南門を云也瓊門は結搆にかさりたる門也瓊は玉也　寂々韻會云靜也矣斜日はかたふく日影也竹竿は竹の竿なれ共爰は只竹也

左に火焔の輪塔あり　左とは安樂寺の東の方を指て云也塔の頭上に火焔の形を作る也

翠帳紅閨　江口に注す

右に古寺の舊跡あり晨鐘夕梵の響たふる事なし
右とは安樂寺の西を指て云古寺とは觀音寺を云也
菅家配所にて作れる詩に觀音寺只聽二鐘聲一とある
にて晨鐘夕梵の響とはつゝけたり晨鐘夕梵の響は
朝暮の勤行を云也觀音寺は道明寺に注す
心なき草木　江口に注す
殊に天神の御慈愛にて　慈愛とは說文曰慈愛也矣
左傳曰上愛レ下曰レ慈矣　北周書蘇綽敦二教化一書
曰慈愛則不レ遺二其親一和睦則無レ怨二於人一上下略
紅梅殿も老松も皆末社と現し給へり　紅梅殿老松
兩社共に安樂寺に祭れり　末社とは本宮に緣ある
神を云或は又緣なき神にても當寺の社司の意にし
て祭る事有神の尊卑によらす本宮に對して末社と
云也若宮攝宮も本宮に對しては末社也
我朝よりも猶漢家に德をあらはし　漢は前漢後漢
とて有前漢は最初太祖高皇帝より孺子嬰迄十四代
合而二百十四年後漢は最初光武皇帝より獻帝迄十
四代合而百九十五年也委く漢書に見へたり但漢は
惣名也爰に漢家とうたふはもろこしを指て云也
唐の帝の御時は國に文學さかんなれは花の色をまし
匂ひ常より增りたり文字すたれは匂もなく其色も深
からす扨こそ文をこのむ木也けりとて梅をは好文木
とは付られたれ　唐は最初高祖より昭宣帝迄二十
二代合而二百八十九年內太宗高宗及憲宗の世には
文學さかん也晚唐には詩をもてあそひたれ共文學
さかんとはいひかたし爰に梅を好文木と稱する事
は晉哀帝の時也唐の帝とうたふは唐はもろこしの
惣名にていへり　起居注曰晉哀帝讀レ書則四時隨
レ之開レ花故名レ梅云二好文木一矣
扨松を太夫と云事は秦の始皇の御狩の時　松を太
夫と稱する事始皇の御狩の時と作りたれともさに
はあらす始皇泰山におゐて封禪の祭をせられし時
の事也委しく高砂に注す
秦始皇本紀曰秦始皇帝者秦莊襄王子也莊襄王爲
レ秦質二子於趙一見二呂不韋姬一悅而取レ之生二始皇一以
二秦昭王四十八年正月一生二於邯鄲一及レ生名爲レ政姓
趙氏年十三歲莊襄王死政代立爲二秦王一立三十七年
七月丙寅崩二於沙丘平臺一年五十一矣　太夫の宮は
日本とは異也唐土にては高官とす秦には以二丞相
御史太夫大尉一爲二三公一也

帝太夫と云爵を　爵の字は高砂に注す
神さびて失にけり跡神さひてうせにけり　今は當
流下掛共に萬代の春とかや千世萬代の春とかやと
うたふ也是は神さひてと云をきらひてかくうたひ
かへたる歟神さひと云は神社の久しくふりたるを
云或はけたかく閑なる由也河海抄に神閑神宿と書
又褒美の詞にさびてとつかふ事も有叓にきらふ詞
には非す委しく犠遥に注す
風も嘯く寅の時　呉服に注す
千世にやちよに細石のいはほとなりて苔のむすまて
此歌は古今集賀の部によみ人しらすと有拾遺
集には安法々師か歌と有　詠歌本記云金剌宮御宇
天皇治レ世而大政不レ下ニ先皇一兆民悦レ之祝レ世而時
人謠レ之矣　上の五文字古今には我君はとあり朗
詠集には君が代はと有又古今六帖には我君は千世
にましませさゝれ石のと有　榮雅抄云君は千世に
ちよをかさね細石のいはほとなる迄久しくましま
せと也云々　堯恵抄云千代にやちよと重詞也八
千代に非すと云々　宗祇抄云にやはてにには也細
石は小石共書浪のすこし立をさゝら浪と云少しあ

る水をさゝれ水と云がごとし苔のむすとは苔のお
ふるを云也生の字を書也人の子をむすむすめこと
云も此心也云々　古今寶枝抄云苔のむすまてとは
年の重なるを云也○水隠れの井せきのいはほ苔重
て幾世かへにし玉の井の河　さればむすとは重な
るを云也又繁義也　苔の字也此歌は延喜御門の春
宮の御時寛平七年正月に人々を召て歌よませ給ひ
けるに讀る也云々
松竹鶴龜のよはひをさづくる此君の　古今風躰抄
序云作　君もみそなはさん事はむねとは松と竹と
の年をいひ鶴と龜との齢なとをこそひくへけれと
云々○あふき見る君にはあかし鶴龜に松くれ竹の
よをそふるとも　淮南子云鶴千歳極ニ其遊ニ
矣　廣五行記補云龜齡經ニ萬歳一又云萬年ニ謂ニ靈
龜一矣　鶴　鶴經曰鶴陽鳥也因ニ金氣一依ニ火精一火
數七金數九故十六年小變六十年大變千六百年形
定而色白又曰二年落ニ子毛一易ニ黒點一三年頭赤七
年飛ニ薄雲漢一又七年學レ舞復七年應レ節晝夜十二
鳴六十年大毛落茸毛生色雪白泥水不レ能レ汚百六
十年雄雌相見目精不轉孕千六百年飲而不レ食食ニ

於水故隊長軒於前故後短禰於陸故足高而尾凋翔於雲故毛豊而內踈行必依洲嶼止必集林木蓋羽族之宗長仙人之騏驥也矣　龜　大戴禮云甲虫三百六十四神龜爲之長也矣禮統曰神龜之象上圓法天下方法地背上有盤法丘山玄文夾錯以成列宿矣　玉篇云龞䵶大龜也矣　爾雅集注云攝龜一名陵龜矣　本草曰秦龜陶隱居注云此山中龜也矣

追考　大江佐國元永元年八月七日記云菅原院者是善卿之家也當初其見南庭有童兒五六歲計是善問云汝是何家之子答云我無居所又無父母欲以相公爲親也是善知其匪眞人而許之此即菅丞相也矣　或抄云庭の梅盛なる時男子來て歌をよむ是天神也「梅花へにの色にもにたる哉あこか顏にもつけてたべかし　此等の説を以て世に菅丞相を化人といへり但此説難信用歟　菅原系圖云穗日命十二世孫可美乾飯根命裔野見宿禰賜土師姓天應元年改土師賜菅原姓數代相續至從五位下文章博士是善娶伴氏生菅丞相文略

和論語云菅丞相是善四男母伴氏矣　菅家文草云生承和十二年乙丑矣　拾遺集菅原大臣かうふりし侍りける夜母のよみ侍りける「久方の月の桂も折はかり家の風をもふかせてしかな

右近

此唄を右近と名付る事　伊勢物語云昔右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりける車に女の顏の下簾よりほのかに見へければ中將なりける男のよみでやりける「みずもあらず見もせぬ人の戀しくはあやなくけふや詠くらさん　返し「しるしらぬ何かあやなくわきていはん思ひのみこそしるへ成けれ　此歌及詞書を以て此謠を作る成へし　右近の馬場は昔大內裏の時一條に右近左近の兩馬場あり　肖聞云一條より東は左近西は右近也云々　河海抄云右近の馬場一條大宮也左近馬場一條西洞院云々　今云所は右近の馬場にはあらず

四　方の山風長閑なる雲井の春ぞ久しき　次第の詞は帝都を祝し奉りてかくつゝけたり○新千梅か枝の花

は久しき匂ひにて雲井の春そ風も長閑き

抑是は鹿嶋の神職何某とは我事なり　此神職は伊勢太神宮の神職成へし然るを鹿嶋の神職と云事いぶかしや今案昔倭姫皇女伊勢國に至り太神の敎の儘に宮柱を五十鈴川上に建て給ふ于レ時以ニ中臣祖大鹿嶋命ニ爲ニ祭主ニ此大鹿嶋命より御食子に至る迄代々仕ニ伊勢神宮ニ司ニ祭祀ニ云々（大常國史及神皇正統記取意）しかあれば此神職大鹿嶋命の後葉たる故に鹿嶋の神職とは云歟　私云一説伊勢內宮を櫻宮と稱す又北野櫻葉明神を社僧の說に天照太神也云々同名同體也然るに此何某伊勢の神宮の神職にして都に登り花一見の折節櫻葉明神に逢奉りし事甚以て神慮にかなひたる成へし

抑の字は高砂に注す洛陽は野宮に注す

櫻狩雨はふりきぬ同しくはぬる共花の陰ならは

此歌は拾遺集春部に題不レ知よみ人不レ知と有下句はぬる共花の陰にかくれん　玄旨抄云ぬる共はぬるゝ共也とても櫻に心をうつして來れはぬるゝ共此花の陰にかくれんと也云々　僻案抄云櫻狩さまざまに說之おほくいへりたゞものを求め尋ぬるをは紫かゝりたけかゝり共云愚者說花を尋ぬるにすぐべからすと云々　尺素往來云雨御所爲ニ櫻狩ニ御ニ出于禁野片野邊ニ矣

北野の森　七本松の邊より西紙屋川を限り本社のめぐり皆北野の杜と云也（拾玉）神や又守るしるしの杉間とて北野の森に先あふくらん

春風桃李花のひらくる時　長恨歌云春風桃李花開日秋露梧桐葉落時（上下略）言は玄宗貴妃に別れ給ひて後春の朝花の開くるにも木葉のちる秋の夕にも共にもてあそびし事を思ひ時々につけて貴妃をわすれ給はぬ心也

あくかれは女郎花に注す見渡せは柳櫻の歌は盛久に注す

花見車の八重一重見えて櫻の色々に　八重櫻一重櫻をいへり又九重の都をもいひかけたり

右近の馬場の木の間よりかげも匂ふや朝日寺の　朝日寺は天神北野へうつり給はざる以前にあり本尊は十一面觀音也　指南抄云朝日寺御社西脇觀音堂南向矣　釋書云北野宮朝日寺沙門最珍與ニ右京婢文子ニ勠レ力造レ之矣（指南抄）ふりにけり北野の雪の朝日寺いつくを道に春のきつらん　匂ふ朝日とつゞけ

たるは春の日のうらゝかに指出たる氣色を云也○
新古朝日影匂へる山の櫻花つれなくきへぬ雪かとぞ見
る有家　○朝日影にほへる山に照月のあかざる君
を山こしにして萬

春の光もあまみてる神の御幸の跡ふりて　あまみ
てる神とは天滿宮をいへり神の御幸とは天神筑紫
安樂寺より北野へ影向ならせ給ふをいへり委く老
松に注す御幸は大原御幸に記す○年中行事賴む哉塵にまし
りて御幸する北野の露の深き惠を

初花車めくる日のなかえや北につゝくらん　秋は
日輪南をめぐり給ふゆへに日みしかく春は北をめ
くり給ふゆゑに日永し依て春の日のなかえや北に
つゞくとはいへり北野の花見なれは北につゞくと
のこと葉殊更おもゑろし

轅は野宮に注す彌生は田村に注す

陰ふむ道にやすらへは　○新古打なひき春はきにけり
青柳の陰ふむ道に人のやすらふ高遠　增抄云陰踏
とは柳のしたにやすらふ也冬は立とゝまるものも
なかりしが春になりて柳も青々としておもしろき
ゆへ行人も立とまると也云々

實や遙に人家を見て花あれは則入　雲林院に注す

右近の馬場のひをりの日　古今榮雅抄云ひおりの
日とは每年五月に秦氏の隨身が二度馬に乘てすゝ
め小弓の的程なるを立て射事也三日は左近の荒手
番四日は右近の荒手番五日は左近の眞手番六日は
右近の眞手番也其時隨身の褐の尻を引折てきる故
にひおりとは云り引おる心也褐とは裝束也荒手番
も同し姿なれとそれはならしなれはかたのやうに
て眞手番をむねとしてひおりの日とは云也文略
袖中抄云眞手番の日は紅の下の袴おり物の指貫に
くゝりをあげずそばをはさみて褐の尻を胯より前
さまに引たをりて前にはさめりされは此眞手番の
日をひをりの日とは云也云々　奧義抄云ひをりの
日はま弓の眞手番の日也五月五日也此日褐の尻を
引をりたれはひをりの日とはいふ云々　僻案抄云
右近の馬場のひをりの日とはまゆみの手結ひに舍
人ともの正しく褐を引折て來るをひをりといはん
にたがはす聞ゆ云々　一禪御說云ひをりの日の事
法性寺入道殿にて五月五日に俊賴卿の歌に「長き

ねも花の袂にかほるなりけふやま弓のひをり成ら
ん　此歌は五日の左近の眞手番をよめり今案の業
平の歌は六日の右近の眞手番をよめる成へし
みすもあらすみもせぬ人の戀しくはあやなくけふや
詠暮さん　◎古今集戀一に入業平の歌也詞書云右近
の馬場のひをりの日むかひにたてたりける車の下
すたれより女の貌のほのかに見えけれはよみてつ
かはしけると云々　古今槃雅抄云そと見し人の戀
しくはあぢきなくけふや詠めて暮さんと也戀しく
は見初て哀と思ふ人の猶切になりゆかはの心なり
あやなくはかひなく共云心也云々　今昔物語云今
は昔右近の馬場に五月六日弓行けるに在原業平と
云人中將にて有けれは大臣の屋に着たりけるに女
車の近く立て物見るあり風の少し吹けるに下すた
れの吹れ上りたりけるより女の顔の見えたりけれ
は業平中將小舎人童を以ていひやりけると云々
是業平の此所にて女車をよみし歌　伊勢物語詞書
には中將なりける男よみてやりけると有　古今集
には在原業平朝臣と有慈鎭和尚古今集注云業平右
中將也左近少將時事歟業平集には返歌なし云々

業平は杜若に注す
面白は三輪に注す口すさひは源氏供養に注す
何かあやなくわきていはん思ひのみ社志るべなりし
を　古今集戀一よみ人知す「志る志らぬ何かあや
なくわきていはん思のみ社志るへなりけれ　右業
平の歌の返し也　槃雅抄云志る共志らぬ共何あぢ
きなくわきていはん思ひこそしるへにてあれと也
心さしによるへきと也云々　大和物語に此返歌見
もみずもたれと志りてか戀らるゝおほつかなみの
けふのなかめやと有　俊頼云此返歌有はいつくそ
といひたらんにこそかくはよむへけれさし過たる
さまにやと云々
榻　卒都婆小町に注す
實や花の下に歸らん事を忘らるゝは美景によりて花
心　白氏文集十三云花下忘レ歸因ニ美景一樽前勸レ醉
是春風矣　詩の心は上句花の下の美景によりて家
に歸らん事をも忘るゝと也下句は春風の興に乗じ
て酒をもてあそふ心也
百千鳥花になれゆくあたし身は　此歌櫻川に注す
名にしおふは江口に注す時めくは野宮に注す

花のこそめの色わきて紅梅殿や老松の　こぞめと
は濃染と書こくそめたるをいふ也　續古紅梅殿老松い
つれも北野に祭れり老松に注す○けふも又人もと
はてや紅のこそめの梅の花の盛りを中務卿
一夜松も見えたり　北野小神次第云一夜松社經藏
北東向庫舟宮是也矣○新千一夜松千代の末葉の老木ま
て木高くなりぬ年も位も為長
あかねさす紫野ゆきしめ野ゆき野守はみずや君か袖
ふる　萬葉集第一天皇遊獵(カリシタマフ)蒲生野時額田王(ヌカタノオホキミ)作歌
云々　仙覺抄云此歌を釋するに茜草指(アカネサス)と云は天皇
の御幸なるが故に帝をは日にたとへ奉れは御幸な
れるをあかねさすと云也次に紫野は山城也しめ
野は大和也彼御遊獵の間紫野しめ野をも行めくり
給ふと云歟と釋せり此義可レ然とも覺えず或は紫
野も標野(シメノ)も蒲生野に近江ありといへり是はさもと
聞ゆ中略紫は根を用とするもの也その根あかきも
のなればあかねさす紫とつゝけたり云々
私云紫野は舟岡の北にありしめ野は北野にあり依
て此萬葉の歌を爰に取出したり又朝日の山の端に
指出るをあかねさすといへり依て帝を日にたとへ

御幸なれるをあかねさすと云也野守は野を守る者
を云山守と云に等し
ふるき御幸の物見とて車も立や御輿岡是ぞ此神の御
旅居の右近の馬場わたり神幸ぞたつとかりける　延
喜の御時數度北野行幸ある事帝王圖に記せり宗祇
名所集云御輿岡と申は北野鳥井の外也經堂の北也
岡とは名のみ也只平地也云々○指南抄云北野の經
堂の北の御代松(シロマツ)御輿岡のしるしに勝定院殿植られ
しと云々●新六帖御幸せしふるき北野の御輿岡哀れ昔
はさぞな戀しき為家　北野御旅所は在二勘解由小
路北紙屋川西一　私云御輿岡と御旅所と一所に非
す別也
謡には一所のやうに作るは誤也
後撰集云延喜の御時北野の行幸にみこしをかきて
「見こしをか幾その世々に年をへてけふの御幸を
待てみつらん枇杷大臣
袖中抄云此歌の注にみこしをかとはとたは林の西
にあり嵯峨野行幸の時御輿かきすへてまつる所な
りさていくその世々に年をへてとはよめるなり云
々又後撰詞書はみこしをかにてとあるへきをみこ

しをかきてと書なしたる也にの字をきとかける也
云々
岩代の松は佛原有明は高砂久方は烈衣に注す
あまてる神にては櫻の宮とあらはれ　あまてる神
とは伊勢天照太神を云也　匠材抄云櫻の宮とは伊
勢内宮の御事也と云々勢陽雑記云櫻の宮は内宮の
宮中にあり二の鳥居より本宮に参る左の方也是を
俗にさがり楠といひて枝の上につきたる木有そこ
に石つみの宮にておはします也と云々五柱皇神又
木花開耶姫命などの拜所と云々仍て櫻の宮と名付
しにや云々坂土佛伊勢太神宮參詣記云櫻宮と申は
大宮のまむかき所にましますが御殿もなしたゞ一
木の櫻を神體とすと承及ぶ計にて宮へは參らず云
々　續古今集に西行いせにてよめる歌に「神風に
心やすくぞまかせつる櫻の宮の花の盛りを
爰に北野の櫻葉の神と夕べの空晴て〳〵　宗祇名所集
云櫻葉宮老松一夜松皆宮中也矣　小補次第云本社
北十二所一殿内其第十櫻葉云々　薩戒記云聖廟一
日千句發句に「あひにあひて梅さくら葉の宮居か
な　私云朱雀東近衛南に櫻葉明神ありいつの比此

所に勸請申ぞ未レ考社僧説に所レ祭天照太神云々
或云此神宮者上古在二右近馬場一五月競手番之時太
陽光花降二下馬場之頭一也故世人稱云二日降神明一矣
皇のかしこき御代　難波に注す
花上苑に明にして輕軒九陌の塵にましはる　和漢
朗詠集云長讀閑賦花明二上苑一輕軒馳二九陌之塵一下略
上苑は上林苑也漢武帝の苑也輕軒はかろき車也
九陌とは九重の道也東西を曰レ陌南北を曰レ阡言は
上苑の花の盛りなる比九重の宮人車を馳せて行か
よふさま也
花もゆるかす治風も長閑なる　風枝をならさすと
いふ心也高砂に注す
曇らぬ威光をあらはしきぬの　源氏藤袴巻云此あ
らはし衣の色なくはえこそ思ひ給へわくましかり
けれとの給へはと云々　此意は玉鬘は源氏の子な
りと人は思ひつるに實は致仕大臣の子也時に此大
臣の母果給ひけるに致仕の子にて母のためには孫
なれば服衣を着し給ふ源氏の子ならは着服あるま
じきとの事也是に依て源氏の子にてなきと云事あ
らはれたるが故にあらはし衣とはいへり云々　私

云あらはし衣とつゞくる事神祇及祝義等の詞には遠慮すへき事歟

雪を廻らす神々樂　雪をめくらすは融に注す　神樂は三輪に注す

手の舞足ふみ拍子をそろへ　舞人のまふ體也禮記樂記曰歌之爲レ言也長言レ之也説之故言之言不レ足故長言レ之不レ足故嗟ニ嘆之一嗟ニ嘆之一不レ足故不レ知ニ手之舞之足之踏之一矣　孟子曰生則悪可レ已悪可レ已則不レ知ニ足之踏之手之舞之一上略新安陳氏曰手舞足踏天理之眞樂形ニ見於動容之間一不ニ自知一者也矣

雲の梯　淮南子云王曰公輸天下之巧士作ニ爲雲梯之械一設以攻レ宋上下略　註曰公輸魯班之號時在レ楚雲梯攻レ城具高長上與レ雲齊故曰ニ雲梯一矣　日本紀纂疏云逸ニ日於天一以ニ瓊矛一爲レ梯也矣　丹後風土紀云伊射奈藝尊天爲ニ通行一而作ニ立梯一矣　和歌秘决云雲の梯と云事はよしのゝ峯より泊瀨の溪のある所へ雲の梯をかけて天人來て泊瀨の觀音を供養せしより起たる事也云々○續千いかはかり嬉しかるらんとたへして又渡りぬる雲のかけはし大臣

東南西北も昔せぬ浪の　四海波しつか成事を云高砂に注す○月清四方の海浪もひとつに澄月の影かたふかぬ君が御代かな

御池の水に御影をうつし　北野池は經藏西連歌會所東也　百練抄云長保二年五月三日北野宮池紫雲立矣

櫻衣のうら吹返す　錺抄曰三月晴多著ニ用之一白櫻櫻萠木樺櫻等也永久三年二月十一日朝覲行幸新大納言樺櫻下襲保安四年二月廿九日朝覲新大納言櫻萠木二重織物下襲也矣　表色目云櫻の衣はおもて白くうら紫たるへし二月に著レ之其外くれなひさくら薄花櫻かばさくら色々有云々

花鳥のとふさは軒端梅に注す神はあからせ給ひけりは立田に注す

白鬚

白鬚明神者在ニ江州志賀郡打下一所レ祭之神一座也神祇正宗云打嵐白鬚大明神者猿田彥命也矣　兼邦百首抄云猿田彥は太神宮にては興玉神熱田にては源太夫日吉にてはさうい出雲にては手なつち足な

つち打おろしにては白鬚の明神道祖神ちまたの神舟たまさき玉なとゝ中神也まりの明神共云々　私云白鬚明神は比良山の麓湖水の汀に御座也依て打嵐とは云也　太平記巻十八云夫斯國の起は家々に傳ふる所格別にして其說區也といへ共暫記する處の一儀に天地已に分れて後第九の減劫人壽二萬歲の時迦葉佛西天に出世し給ふ予レ時大聖釋尊得ニ其授記ニ住ニ都率天ニ給しが我八相成道之後遺敎流布の地可レ有ニ何處ニ此南贍部洲を遍飛行して御覽じけるに漫々たる大海の上に一切衆生悉有性如來常住無有變易と立浪の音あり釋尊是を聞召て此波の流れ止らんずる所一つの國と成て吾敎法弘通する靈地たるへしと思召ければ則此浪の流れ行に隨て遙に十萬里の蒼海を凌給ふ此波忽に一葉の葦の海中に浮へるにこそ留にける此葦の葉果して一の嶋となる今の比叡山の麓大宮權現垂レ跡給ふ波止土濃也是故に波止て土濃也とは書る成へし其後人壽百歲の時釋尊中天竺摩竭陀國淨飯三宮に降誕し給ふ御歲十九にて二月上八の夜半に王宮を遁れ出六年難行して雪山に捨レ身寂場樹下に端座ゑ給ふ又六年後夜に正覺を成じ後頓大三七日遍小十二年蕩淨虛融の演說三十年一實無相の開顯八箇年遂に滅度を拔提河の邊雙林樹下に唱へ給ふ雖レ然佛は元來本有常住周遍法界の妙體なれは爲ニ遺敎流布ニ昔葦の葉の國と成し南閻浮提豐葦原の中津國に到て見給ふに時は鵜羽不葺合尊の御代なれば人未佛法の名字をだにも不レ聞然共此地大日徧照の本國として佛法東漸の靈地たるへけれた何れの所にか可レ開ニ應化利生之門ニ彼方此方を遍歷し給ふ所に比叡山の麓佐々名美也志賀の浦の邊に垂レ釣坐せる老翁あり釋尊向レ之翁若此地の主ならは此山を吾に與へよ成ニ結界地ニ佛法を弘めんと宣ひければ此翁答曰我は人壽六千歲の始より此所の主として此湖の七度迄桑原と變ぜしを見たり但此地結界の地とならば釣する所を可レ失釋尊早く去て他國に求め給へとそ惜みける此翁は是白鬚明神也釋尊因レ茲寂光土に歸らんしと給ひける所に東方淨瑠璃世界の敎主醫王善逝忽然として來り給へり釋尊大に歡喜し給ひて以前老翁が云つる事を語給ふに醫王善逝稱歎して宜く善哉釋迦尊此地に佛法を弘通

し給はん事我人壽二萬歳の始より此國の地主也彼
老翁未レ知レ我何此山を可レ奉レ惜哉機縁時至て佛法
東流せは釋尊は敎を傳る大師と成て此山を開闢え
給へ我は此山の王と成て久しく後五百歳の佛法を
可レ護と誓約をなし二佛各東西に去給ひけり下略
君と神との道すくに治る國そ久しき　新千○おこたら
す祈るも御代の爲なれは君と神とに身はつかへつ
ゝ津守國夏
抑是は當今に仕へ奉る臣下なり　抑の字義は高砂
に注す臣下は葵上に記す
江洲は田村勅使は呉服九重は田村花園の玄かの山越
は三井寺に注す
眞野の入江　江州也大和攝津に同名あり竹生嶋に注
す○續千旅ねするまのゝ入江の秋の夜に片敷袖はお花
なりけり親長
鳰の浦は源氏供養さへかへりは屋嶋海士は海人に注
す
風歸帆遥萬里程江天渺々水光平舟子解是明朝雨　本
文未レ考追而尋ぬへし
霞の衣ほころびて峯白妙に咲花の　ほころひと云
は何れにても物のひらくをいへり俗にふくろびと
云也　朗詠集清愼公詩云欵冬誤綻ニ暮春風ニ矣　白
妙は田村に注す○古靑柳の糸よりかくる春玄もそ亂
れて花のほころひにける貫之
あらしも匂ふ日影かな　○夫吹嵐あらしも匂ふ山高
み晴ぬ雲井や櫻なるらん
花さそふ比良の山風吹にけり漕行舟の跡見ゆるまで
新古今集春下宮内卿歌也詞書云五十首歌奉りし中
に湖上花をと云々　自讃歌注云こき行舟の跡の白
波と云歌をとれり浪はあとなきもの也花は舟すぐ
れともみえたるよし也と云々
天津雁歸る越路の　越地は山姑に注す○千天津空ひ
とつに見ゆる越の海の浪を分ても歸る鴈金頼政
あさな〳〵は賀茂近江の海は竹生嶋みつかきは高砂
に注す
我は心もなみ小舟　心もなみは浪に非ず心もなき
也赤人のかたをなみとよめる出葉テニハにひとし
夫此國の起家々に傳る所各別にして其說區々なりと
いへども暫く記する所の一義によらば　是は太平
記十八卷に記する所の發端の詞也但是より以下の

詞本文とは相違あり

天地既にわかつて後第九の減劫人壽二萬歳の時　劫と云に成住壊空とて四の品有最初に山川草木人倫生類のなき間を空劫と云是二十劫也それより次第に物出來て成就するを成劫と云其間二十劫也其後萬物悉備て不足なき間又二十劫也是を住劫と云それより次第に滅するを壊劫と云此間二十劫也是を八十増減と云也壊劫より本の空劫に還る事都て九度是を第九の滅劫とは云也見二倶舍論一

迦葉世尊西天に出世乄給ふ時大聖釋尊其授記を得て都卒天に住し給ひしかゝ　迦葉世尊は名義集云梵音迦葉波此云二飲光一二萬歳時出成二正覺一至二百歳時一釋迦牟尼居二兜率天一四種觀レ世矣　迦葉佛出世のことは長阿含經及大論に見えたり　授記は名義集云梵語和伽那此云二授記一達磨鬱多羅云聖言說與名・レ授果爲二心期一名レ記矣　兜率天は六欲天其一也名義集云梵音兜率陀此云二妙足一新云二覩史陀此云二知足一西域記云覩史多舊曰二兜率陀兜術陀一訛也於二五欲一知二止足一故佛地論名二喜足一謂後身菩薩於レ中教化多修二喜足一故矣　大聖釋尊は百萬に記す

我八相成道の後　八相とは如來の衆生濟度に出世乄給へるに八種の相あり此八相に小乘大乘のかはり有小乘には一降兜率天是は釋尊都卒天よりあまくたり給ふ二託胎とは摩耶の胎内にやどり給ふ三降生とは四月八日に誕生乄給ふ四遊城とは出家乄給はん爲に王宮をのがれ給ふ五降魔とは魔王を降伏し給ふ六成道とは菩提樹下にて正覺乄給ふ七説法とは四十九年が間諸經を說き給ふ八入涅槃双林の下にて入滅し給ふ也又大乘の八相は一降兜率二託胎三注胎四出胎五出家六成道七轉法輪八入涅槃也委く大藏法數に見えたり

遺教流布の地何れ（キノマヽ）の所にか有へきとて　法華藥王品曰我滅度後後五百歳中廣二宣流布於閻浮提一無レ令二斷絶一矣　釋尊の聖教日本にとゝまる中にも比叡山は佛法弘通の靈地也

此南瞻部洲をあまねく飛行して御覽しけるに　名義集云梵語閻浮提訛云二剡浮一此云二勝金一大論云閻浮樹名其林茂盛此樹於二林中一最大提名爲レ洲此洲上有二此樹林一林中有レ河底有二金砂一名二閻浮檀金一以二閻浮樹一故名爲二閻浮洲一中略西域記云南瞻部洲

北廣南狹三邊昔等其相如レ車俱舍云贍部洲人身多長三肘半人壽無二定限一矣　三界義云南洲佛出二於世一敎二化衆生一及二佛滅後一廣流二布遺法一東西二洲雖レ有二佛法一不二廣流布一北洲全無二佛法僧名一矣

漫々とある大海の上に一切衆生悉有佛性如來常住無有變易の浪の聲一葉の蘆に凋堅て一の嶋となる今の大宮權現のはしとのなり　〇神社考云台徒家說云于レ時見二大海一聞二波浪有二梵音一釋尊從二浪所二留止一來二日本國一其波止三一蘆浮二海上一蘆化爲二一嶋一謂二之波止土濃一今比叡山下大宮權現垂跡之地是也矣

一切衆生悉有佛性は涅槃經の文也大宮權現無跡之事何れも兼平に注す字彙云漫々水廣大貌矣

其後人壽百歲の時悉達と生れ給ひて八十年の春の頃頭北面西右脇臥拔提の浪と消給ふ　頭北面西右脇臥は釋尊入滅の儀式を云也但太平記十八卷には此文なし　後分涅槃曰世尊於二七寶牀一右脇而臥頭枕二北方一足指二南方一面向二西方一後背二東方一如來中夜寂然無レ聲於二此時頃一便般涅搫矣　婆娑九十二曰問世尊何故令レ敷二設北首臥牀一而臥耶答欲レ顯二彼國論師法應レ爾故謂彼國論師皆敷二設北首床一而臥世尊亦爾中略　問世尊何故右脇而臥答欲レ顯下佛如二師子王一而臥上故如二契經說一臥有二四種一謂師子王臥天臥鬼臥耽欲者臥師子王右脇而臥天則仰レ面鬼則伏レ面耽欲者臥左脇箸レ地佛是天上人中師子故右脇而臥矣　增一阿含曰北首而臥表二於佛法久住二北天一矣　雲玉集 右を下に枕を北に定めすはそゝなたにむきて月をまたまし　八十年の春とは佛二月十五日跋提河の邊にて入滅し給ふを云也春日龍神及安宅に記す　釋尊壽命之事は金光明經云二八十一增上阿含及中阿含云二年過八十一胎經云二八十有二一方等泥洹經云二七十九一天台玄義云二八十二歲一已上　跋提河は　名義集云梵音曰二阿恃多伐底河一西域記云唐言二無勝一舊曰二阿利羅跋提河一訛也中略　梁宗法師云佛來二此河邊一入滅有レ意河流奔注若二生死遄速一金砂不動喩二佛性常住一矣　悉達は世尊の童名也大原御幸に記す

されとも佛は常住不滅法界の妙體なれば　釋尊の入滅は衆生に無常をゑめさんが爲の方便なれは妙體とは云也　法花壽量品曰現二有滅不滅一矣　又曰爲レ度二衆生一故方便現二涅槃一矣

昔蘆の葉の觴と成し中津國を御覽するに　日本の
惣名をいへり　日本紀云天照太神勅二天稚彦一曰豐
葦原中國是吾兒可レ王之地也矣○久しかれ君かた嘉元百首
もてる中津國豐葦原の世々を重ねて宗舜
時
ほうかやふきあはせすの尊の御代なれは　地神
第五彦波瀲武鸕鷀羽葺不合尊は世を治め給ふ事八
十三萬六千四十二年父は彦火々出見尊母は龍神の
娘豐玉姬也海濱に產屋を作り用二鸕鷀羽一爲レ草葺
レ之葺未レ合時に兒生れ給ふに依て以て名とす已上神代
卷文略　釋日本紀云鸕口喉廣飮二入魚一又吐二出之一容
易之爲也是は象二產生平安一令レ葺二此羽於產屋一矣
私○うかやふき渚の跡をとゝめしぞ神代を請し始め
なりけり光房
比叡山は篠平に注すさゝ浪や志賀は三井寺に注す
佛法結界の地となすへしとの給へは　結界の地と
は佛法のひろまる所を云也比叡山を指ていへり
此湖の七度まて蘆原に成しをもまさに見たりし翁な
り　翁は白鬚明神也　太平記に此湖の七度迄桑原
と變せしを見たりと有神社考には見二湖水變爲一蘆
原一と有蘆原といへるも桑原といへるも元來世界
のはしまりを云也日本の惣名を豐蘆原とも扶桑國
ともいへり　或云江州高島に桑原濱と云所あり昔
白鬚明神會見淡海變爲而作二桑原七回一矣本朝樂府
に見へたりと云々○皇の御代は盡せし桑原の濱田
は三度海となるとも爲經○見るめなき泪にからは
にほの海や又桑原と成もこそせめ　詞林采葉云
大師根本中堂を建立し給ふとて地を開き給ひしに
樣々の靈瑞あり八舌の鑰蛤の貝多く有けれは大師
白鬚大明神に申されけるに老翁現して宣く此湖水
七度桑田と成しより爰の昔葦原の神たち集て伊勢
の海清き河の砂を運て此山をつき末世に佛法繁昌
の地として住劫二十番の時分に慈尊出世し給はん
曉迄鎮成へき山也と宣ふ云々　列仙傳曰麻姑謂二
王方平一曰自二接待一以來見二東海三爲一桑田一向
到二蓬萊一水乃淺二於往者一略半也豈復爲レ陵乎方平
曰東海行復揚レ塵耳矣
寂光土　邯鄲に註す
時に東方より淨瑠璃世界の主藥師忽然と出給ひて

藥師本願經曰東方去レ此過ニ十殑伽沙等佛土ニ有世界ニ名ニ淨瑠璃ニ有レ佛號ニ藥師瑠璃光如來ニ此佛修道之時持ニ瑠璃寶瓶ニ納ニ一切藥ニ隨ニ一切衆生之病ニ出與病即差云々　十二願中第七有ニ衆病悉除願ニ矣　忽然は野宮に注す

はや開闢し給へ　開闢は二字共にひらくとよめり説文曰闢開也矣　尚書璇耀曰天地開闢勞不レ闢矣神代卷曰開闢之初洲壤浮漂譬猶ニ游魚之浮ニ水上ニ矣

我も此山の王と成て　藥師如來の詞也山の王とは則山王權現とならんと也山王權現は本地藥師如來也

共に後五百歲の佛法を守るへしと　大集經曰如來滅後有ニ五五百ニ云ニ後五百歲ニ云ニ第五五百ニ也第五五百年末法初也矣　天台金剛經疏曰第二五百云ニ後五百歲ニ矣　曇無羅讖曰釋迦佛正法住世五百年像法一千年末法ニ萬年云々　猶論釋等にかはり有

二佛東西に去給ふ　夫此國の起と云より二佛東西に去給ふと云迄太平記十八卷に記せるを以て作るなるへし二佛とは釋迦藥師の二佛なり翁は白髭太明神也

天燈龍燈神前に來現の時節なれは　江南野史云太華山有ニ天燈ニ矣　又天竺に龍火を以て燈とする事西域記に見えたり又本朝にも丹後國天橋立に每年正五九月十六日夜天燈龍燈海上に出現す又安藝の嚴島相州江島にも龍燈出現する由いひつたへり

老の波は高砂に注す八乙女及ひ神さびは蟻通に注す

神は人のうやまふに依て威をます　御成敗式目云右神者依ニ人之敬ニ增レ威人者依ニ神之德ニ添レ運矣神は人の敬ひによりていよ〳〵神の威勢をまし人は神を敬ふ利生の德にえたかひて命も長く運もつよくなる也

あけの玉垣立田に注す

神樂催馬樂とり〳〵に　神樂歌催馬歌を云也梁塵秘抄に出たり道明寺に注す

糸竹は姨捨面白は三輪鼓は白髭打波の聲は白樂天松風は琴をえらへは千壽に注す

心耳をすますおりからに　李白詩曰南窓蕭瑟松風憑レ誰ニ一鳴清ニ心耳ニ矣

善哉々々と感じ給へは　陁羅尼品曰　佛告ニ諸羅刹

女善哉々々汝等但能擁護矣　大論五十三曰歎喜讃言善哉々々再言之者喜之至也矣

あまち　そらのみち也天路と書

白髭の神風おさまる御代とそ成にける　此つゝきよろしからす神風は伊勢の枕詞也伊勢に限也野宮に注す

玉井

神代巻曰兄火闌降命有海幸弟彦火々出見尊有山幸二人相謂曰試欲易幸遂相易之各不得其利兄悔還弟弓箭乞己釣鈎弟失兄鈎無由訪覓故別作新鈎與兄兄不肯受責其故鈎弟患即以其横刀鍛作新鈎盛一箕與之兄忿曰非我故鈎雖多不取益復急責故彦火々出見尊憂苦甚深行吟海畔時逢塩土老翁老翁問曰何故在此愁乎對以事之本末老翁曰勿復憂吾當為汝計之作無目籠内彦火々出見尊於籠中沈之于海則自然有可怜小汀於是棄籠遊行忽至海神之宮雉堞整頓臺宇玲瓏門前有一井井上有湯津杜樹枝葉扶疏時彦火々出見尊就其樹下徙倚彷徨良久有一美人排闥出以玉鋺來當汲水因舉目視之驚而還入白其父母曰有一希客者在門前樹下海神於是鋪設八重席薦以延内坐定因問其來意時彦火々出見尊對以情之委曲海神集大小之魚逼問之僉曰不識唯赤女比有口疾而不來固召之探其口者果得失鈎已而彦火々出見尊因娶海神女豊玉姫仍留住海宮已經三年彼處雖復安樂猶有憶郷之情故太息海神聞曰天孫若欲還郷者當授所得釣復授潮滿瓊及潮涸瓊而誨之曰漬潮滿瓊者則潮忽滿以此沒溺汝兄若悔而祈者還漬潮涸瓊則潮自涸以此救之如此逼惱則汝兄自伏及將歸去豊玉姫謂天孫曰妾已娠當產不久妾必以風濤急峻之日出到海濱為我作產室相待矣彦火々出見尊已還遵海神之教時兄火闌降命既被厄困乃自伏從今以後吾將為汝俳優之民於是隨其所乞遂赦之後豊玉姫果如前期將其女弟玉依姫直冒風波來到海邊逮臨產時請曰妾產時幸勿以看之天孫猶不能忍竊往覘豊玉姫方產化為龍甚慙曰如有不

レ辱レ我者則使ニ海陸相通一永無ニ隔絶一今既辱時何以結ニ親昵情一乃以レ草裹レ兒棄ニ之海邊一閉ニ海途一徑去故因以名レ兒曰ニ彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊一後久之彦火々出見尊崩ニ葬日向高屋山上陵一文略　此謠を玉井と名付る事今案に玉井とつゝきたる本文は日本紀神代卷及天書舊事本紀等に見へす但備前國に玉井社と云有所レ祭彦火々出見尊豐玉姫ニ座也此社の名によりて此謠を玉井と云成へし　玉井社者有ニ備前國幣立山(ヘイリウザン)ニ所レ祭神二座謂彦火々出見尊豐玉姫也本地虚空藏菩薩也昔讃州那珂郡有ニ長者一號ニ和氣九善資ニ天武天皇白鳳十四年乙酉有ニ靈夢一初而建ニ宮讃州那珂西里ニ又文武帝大寶三年癸卯正月廿五日の夜半に光明赫然本地虚空藏菩薩來現す有レ告宮殿を讃州より備前の光明崎に移す其後又有ニ託宣ニ今の幣立山に御鎭座ある也平城帝大同元年丙戌弘法大師歸朝の時此所に來て本地虚空藏の尊像を作る又建ニ立華表一額に玉井宮と記す已上當社緣起文略

それ天地ひらけはしまりしより　神代卷曰開闢之初洲壤浮漂譬猶ニ游魚之浮ニ水上一矣　萬葉仙覺抄云あめはひらく音つちはとづる音にて天地陰陽自言葉にあらはれたるもの也云々　神代直指抄云本朝最初言語音聲の初にあめと云て高き義たふとき義を取て陽道をあらはしつちと云はひきゝ義いやしき義を取て陰道をあらはす云々

天神七代地神四代にいたり　天神七代者第一國常立尊陽五行德神　第二國狹槌尊陽水德神　第三豐斟渟尊陽火德神　神代卷曰一書云天地初判一物在ニ於虚中一狀貌難レ言其中自在ニ化生之神一號ニ國常立尊一亦曰ニ國底立尊ニ次國狹槌尊又曰ニ國狹立尊次豐國主尊一亦曰ニ豐組野尊一下略　舊事紀神代本紀云天常立尊者更名天魂尊天御中主尊又名天心尊矣　日本紀纂疏云國常立者國指ニ天地一而言常者不レ易也立者卓然之謂言天地常然之理卓ニ爾於前一流ニ行日用之間一也矣又云國常立等三神象ニ三才一國常立者以レ天爲レ德故表ニ不易之理一國狹土以レ地爲レ德故表ニ不廣之形一豐斟渟以レ人爲レ德故表ニ和潤之澤一人物皆稟ニ和氣一而遂生者也又豐斟渟者豐國主之訛音也矣

第四泥土煮尊　陽木德神　沙土煮尊　陰

第五大戸道尊　陽金德神　大戸間邊尊　陰

第六面足尊　陽土德神　惶根尊　陰
第七伊弉諾尊　陽　伊弉冊尊　陰
已上天神七代之神者見ニ神代卷ニ巨細略レ之
地神第一天照太神治天二十五萬歳　第二正哉吾勝々速日天
忍穗耳尊治天三十萬歳　第三天津彥々火瓊々杵尊治天三十一萬八千五百三十二歳　第四彥火々出見尊此次に記す　此四代に彥波瀲武鸕
鷀羽葺不合尊を相加へて地神五代と云也葺不合
尊は白髮に記す

火々出見尊とは我事なり　彥火々出見尊亦名號ニ火
折尊ニ此尊能得ニ山幸ニ故號ニ山幸彥ニ父地神三代天
津彥々火瓊々杵尊也母大山祇神女鹿葦津姬也治ニ
天下ニ六十三萬七千八百九十三歳神代卷文略　神代卷云
鹿葦津姬一夜而有娠皇孫未之信汝所懷者必非ニ我
子ニ鹿葦津姬忿恨作ニ無戶室ニ入ニ居其內ニ而誓之曰
妾所娠若非ニ天孫之胤ニ必當燋滅如實天孫之胤火不
レ能レ害即放レ火燒レ室始起烟末生出之兒號ニ火闌降
命ニ次避レ熱而居生出之兒號ニ彥々火々出見尊ニ次生
出之兒號ニ火明命ニ凡三子矣

扨も兄火闌降命の　火酸芹命者亦名號ニ火進命ニ又
得ニ海幸ニ故號ニ海幸彥ニ同腹兄也神代卷　尊命二字者
纂疏云〻尊曰レ尊者指ニ帝者祖宗之神ニ自餘
曰レ命者指ニ人臣祖先之神ニ命猶ニ令也爲ニ臣者行ニ
君之命令ニ也曰レ尊曰レ命雖ニ別ニ君臣之義ニ至ニ於
人之所ニ敬則無ニ貴賤之殊ニ彼各訓曰ニ美擧等ニ美擧
等猶レ言ニ御事ニ吾國尊ニ其人ニ則言ニ其事ニ也矣　兄
をこのかみと云事は子の上と云事也兄は弟より上
なれは也

釣針をかりそめなから海邊に釣をたれしに彼釣針を
魚にとられぬ此由を兄命に申せ共唯もとの針を返せ
と宣ふ間　火闌降命の釣針を借といひかけたれ共
借給ふには非す兄の釣針と弟の弓箭と相易給ひて
後不レ得ニ其利ニ兄悔て弟の弓箭を返して己が釣針
を還し給へと弟をせめはたる也世話にもとの針か
へせと云事是より始る也赤魚の名を赤女と云神代
の卷に赤女即赤鯛(アカダイ)也云々　天書に鯛女と書　新古
今增抄云四女と云又なよしともいふと云々

劔をくつし針に作りてかへすといへ共猶もとの針を
はたる　神代卷云一書云以ニ所帶横刀ニ作レ鉤盛ニ一
箕ニ與レ兄兄不レ受矣はたるとは同卷云徵ニ責故鉤ニ
矣　史記晉世家曰讓責矣

わたづみのそこ共しらす塩土老の翁の敎に玄たかひて

わたづみは海の惣名也　萬葉集に海底と書或は海神海童海若少童共書　古今榮雅抄云わたつみと四字に書てもわたつうみと五字によむ也つの字濁るへき也云々　神代卷曰一書伊弉諾尊伊弉册尊生二海神等一號二少童命一矣　古事記云生二海神一名二大綿津見神一矣　塩土老翁は舊事本紀云有二一神一自號二事勝國勝長狹一其事勝國勝神者是伊弉諾尊之子亦名謂二塩土老翁一矣　纂䟽云塩土翁則初作レ塩之神此翁伊弉諾之子矣　𠔥邦和歌百首抄云此老翁は打扇の白鬚の明神是也云々

無目籠のたけき心すぐなる道を行ことく　𠔥國百首抄云無目籠は大竹をわりて籠をくみて入奉る也云々無目籠には目を細く作る故也籠をかたみ共いへはかたまと云也みとまと五音相通せり竹にて作る故にたけき心とはつつけたり　神代卷云一書云以二無目堅間一爲二浮木一以二細繩一繫二著火々出見尊一而沈之所謂堅間是今之竹籠也矣　天書云其籠浮レ浪發レ潮敢不レ覺二尊之補瀛一自然入二御于海之中一矣　纂䟽云無目籠者定惠之喩也無目者無レ見無レ見者無二諸見一也爲レ定籠爲二智籠之義一也爲レ惠海之喩二眞如一定惠皆歸二眞如一矣○行かへり心つくしの海へたにまなしかたまを作るうれしさ　𠔥邦百首

爰そ名におふ滄海の都としれは水もなく廣き眞砂に着にけり　神代卷云一書云于レ時海底自有二可怜小汀一尋レ汀進忽到二海神豊玉彥之宮一矣　名におふは江口に注す

是に瑠璃の瓦をしける光門あり　龍宮の結構なる躰を云也　遊仙窟云高閣三重悉用二瑠璃之瓦一矣

門前に玉の井あり　玉は美稱の詞也　釋名曰井清也泉清潔者也矣　字林云周云井以レ不二變更一爲レ義矣　周書曰黃帝作レ井矣　世本曰伯益作レ井矣　神代卷云一書門前有二一好井一矣

銀鋪赫き　銀鋪の字神代の本文に見えす赫の字は海人に注す

又湯津の桂の木あり　神代卷云井上有二湯津杜樹一矣　一書云井上有二百枝杜樹一矣　天書云其井上有二一木之湯津楓之樹一矣　湯津とは湯はいむと云訓にて神書の常の語清淨の義也　釋日本紀云湯者潔齋之義津者休字杜者桂字也矣

濁なき心の水の泉まで　心の水は寳嚴に注す〇濁 新古
なき心の水に影とめて二度宿れ山の端の月　大僧
正眞信
老せぬ門に出入や月日くもらぬ　和漢朗詠集云保
胤詩云長生殿裏春秋留不老門前日月遲矣
久堅の天にもますや此國の　天にもますやとは天
にもまさるや也此國とは龍宮を指て云也久堅は羽
衣に注す
月の桂は羽衣に注す枝をつらねては舟辨慶に注す
たゝすむ　神代卷に彷徨と書
その樣けたかき女性二人來り玉の瓶をもち水をくむ
けたかきは氣色高き也女性二人とは姉の豐玉
姬妹の玉依姬兄弟を云也　神代卷云一書云海神之
女豐玉姬手持二玉鋺一來將汲レ水矣　又云豐玉姬之
侍者以二玉瓶一汲レ水矣　玉の瓶は玉は美稱の辭也
倭名抄に鑵とも書　三教指歸に綆の字をつるへ
なわとよめり又桔槹と書てはねつるへとよむ也
玉井に立より底をみれは桂木の陰に人見えたり
一書云見二人影在一於井中一乃仰視レ之驚而墜レ鋺鋺
既破碎不レ顧而還入謂二父母一矣

なへてならざる御姿　なへてとはおしなへて也
人なみよりすぐれたるを云也
貌も殊にみやびやかなりたゞ人ならず見奉る　一
書云顏色甚美容貌且閑殆非常矣　八雲御抄云みや
ひやかとは情也云々　惟清抄云定家說にも情をか
はす心也みやびをかはすといひて風流にけさうす
る事也云々　天福本に閑伊勢眞名本に閑麗日本紀
に風姿と書
天の御神の御孫の尊を　天の御神とは天照太神を
申なり御孫とは彥火々出見尊を指て云也子の子を
孫といへ共都て天孫皇孫と云は一人の名に非す舊
事本紀に神武天皇をも天孫と有　釋日本紀云天孫
不レ可レ限二一人一未來稱皇尊也矣
我はせうとの玉依姬互に連枝の名乘して　玉依姬
は豐玉姬の妹也後鵜鷀草葺不合尊の妃と成て神武
天皇を生み給ふ也委く神代卷に見えたりせうとは
背人と書兄を云也但爰にては姉をせうとゝいへり
妹を指てせうとゝ云事古來よりも其例有又女の方
より弟をも云也　匠材集云せうとは兄弟何れもい
ふと云々　連枝は兄弟也舟辨慶に注す

つゝましなから　卒都婆小町に注す
かみにそなひく大ぬさの引手あまたの心かな　神
に紙を兼たり　大麻は紙と麻とをわかちて賢木と
すゞ竹と串二本に作る也　惟清抄云大麻は幣帛也
榊に麻の苧を長く付るを云也祓の具也云々○伊大ぬ
さの引手あまたに成ぬれは思へはえこそたのまさ
りけれ　愚見抄云祓は惡事をはらひきよむる心に
て其時大麻を各なづるものなれはひくてあまたと
はいへり云々眞名本に御麻(オホヌサ)と書
うちつけなる御事なれとも　うちつけは初也戀の
詞也卒爾(ウチツケ)當意と書(同)　匠材集云うちつけはやかてと
云心也云々　○喜言百首打つけにうつる心もあたなれはい
つしかぬるゝ袖としらせん爲藤
やかてかそいろにあはせ奉り　一書云還入謂ニ父
母ニ矣　袖中抄云かぞとは父を云いろとは母をい
ふ又いろかぞとさかさまによめる歌も有云々　纂
疏云父母和訓曰ニ加曾伊呂波ニ加曾猶レ言レ數也曾(ソ)須(ス)
音通(ココ)人幼時父教レ之以ニ一十百千之數ニ伊呂波者和
字四十七字也人之爲レ母者以ニ四十七字ニ始教ニ其

子ニ也四十七字天地自然之聲矣
然れは雉堞甍顛臺宇玲瓏　本文上に記す　舊
事本紀云城舍崇華樓臺玲瓏矣　纂疏云城高一
丈三尺曰レ雉城上女墻曰レ堞甍顛謂ニ簷甍有レ次也臺
則觀ニ四方ニ而高者宇則屋四垂者玲瓏明貌矣　玉篇
云城高一丈三尺爲レ雉矣　鄭玄周禮注曰雉長三丈
高一丈矣　左傳曰環城傳ニ於堞ニ堞女墻也矣　文選
注云堞城上短牆也矣　甍顛は龍宮の有樣種々の錺
をとゝのふるを云也　臺宇はうてなやと訓す樓也
玲瓏は增韻云明貌矣　文選曰珊瑚幽茂而玲瓏矣
遊仙窟云玲瓏映レ日注玲瓏者分明貌矣
雲の八重疊をしき　本文上に記す　纂疏云禮器曰
天子之席五重諸侯之席三重太夫再重此曰ニ八重ニ者
尊レ之義八之數陰道也矣　釋日本紀云新嘗祭神
今食神態之時神座八重疊横レ之者也矣○兼邦百首何事に爰
にきますそいかさまに八重の疊を敷てむかへん
釣針(テウシン)　釣の一字をつりはりと訓す
潮滿潮涸のふたつの玉を尊に奉りなは　本文上に
記す　釋日本紀云此滿瓊涸瓊二種在ニ何處ニ哉先
師申云元曆之頃宇佐宮監行之時本宮注文滿瓊涸瓊

二種在ニ當宮一之由注進矣神代卷垂加之抄云神宮皇后時滿干之玉是也云々　神社考云舊傳云皇后勅ニ礒良一乞ニ干珠滿珠於龍宮一龍宮乃献ニ兩珠一皇后於レ是以ニ兩顆珠一發ニ向三韓一時皇后投ニ干珠一潮退爲レ陸三韓士卒下レ舟相戰皇后又投ニ滿珠一潮忽來溺死者不レ知レ數中略或說曰干珠滿珠者納ニ于紀州日前宮一一云干珠滿珠納ニ于肥前國佐嘉郡河上宮一矣

私云按皇后以ニ干珠滿珠一三韓退治之事日本紀無レ之且又彥火々出見尊之時干滿珠神宮皇后時干滿珠共云ニ一物一未レ見ニ證文一可レ尋ニ追而一　經教本紀云王仁云奉ニ潮溢瓊一者曰レ教ニ潮滿之時一進ニ潮涸瓊一者曰レ教ニ潮乾之時一也矣○新六いにしへのさつけし玉はわたつ海の鹽干壚みつ心なりけり爲家

外祖となりて　外祖は母方の親を云也豐玉姬の親也號ニ豐玉彥一ト云々

有明　高砂に注す

大鰐に乘しはやてをふかせ　一書云乘ニ火々出見尊於大鰐一以送ニ致本鄉一矣　一云遣ニ一尋鰐魚一以奉レ送矣　又云海神所乘駿馬者八尋鰐也矣　兼邦百首抄云鰐は龍宮の馬也云々　文選劉良注曰鰐魚長二丈餘有ニ四足一似レ鼉喙長三尺甚利齒虎及大鹿渡レ水鰐擊レ之皆中斷生則出在ニ沙上一乳レ卵卵如ニ鴨子一亦有ニ黃白一可レ食斬ニ其頭一櫞ニ去齒一旬日閒更生廣州有レ之矣　はやてとは風也暴風と書　舊事本紀に迅風と書

金銀わんりに玉をそなへ　わんりは舊抄云椀裏と書歟云々　講述抄云玉鋺注云鋺字出所未レ詳古語謂レ椀爲ニ磨利一矣　纂疏云鋺當レ作レ椀盌同小盂也此猶瓶之意也矣

まうと(マウト)の君の命にしたかひ　まうとは火々出見尊を指て云也日本紀に客(マウト)とも眞人とも書

簪は楊貴妃に注す桂の黛は卒都婆小町に注す雪を廻らすは融に注す

姿は老龍の雲にわたかまり　老龍の字は詩人玉屑云學海波中老龍矣　白玉膽云老龍獨臥似ニ禪僧一矣　蟠野王按龍蛇臥貌矣　又蜿蟺と書　文選魯靈光殿賦曰虬龍騰驤以蜿蟺呂延濟注曰蜿蟺盤屈貌矣　廣雅曰未レ昇レ天曰ニ蟠龍一矣

かせ杖にすかり　倭名抄云漢語抄云鹿杖(カセツヱ)加世都惠矣　伊呂波字類抄云鹿杖横首杖と書筑波問答序云かせ

杖にすかりて欄の許へ立よりて首を垂て恐れたる趣もよに人々しくぞみえし上下略　なくさめ草云年の齢六十に近からんと見ゆる翁姿の髪髭白く末二股なるかせ杖にかゝりつゝ庭の灯爐の本に立てふし拜む有文略　私云かせ杖は鹿の角に似て股あるを云也

五丈の鰐にのせ奉り　神代巻に一尋鰐とも八尋鰐共あるを爰に五丈の鰐といひかへたり　經教本紀云王仁云八尋鰐者曰二八間舟一一尋鰐者曰二一間舟一矣

謠曲拾葉抄巻二

弓矢幡

此謠を弓矢幡と名つくる事は八幡大菩薩は源家の氏神弓矢の守護神なれば弓と矢と幡との三ツの兵具に譬して弓矢幡とは名付る也　石清水八幡宮在二山城國久世郡科手郷男山一所レ祭之神　諸社根元記云石清水三所應神天皇神功皇后玉依姫貞觀元年四月十五日奉二宣旨一行敎和尚參二籠宇佐宮一同年八月廿三日飯レ京奏二神告之由一同九月十九日於二男山峰一建二立御殿六宇一三字正殿三字禮殿自レ爾以來鎮二坐當山一矣　諸神記云貞觀元年四月十五日行敎和尚奉二宣旨一參二籠宇佐宮一祈二請之一處權現太神垂跡之本身顯二袈裟之上一仍以二其袈裟一八月廿三日到二來男山一勸二請之一同九月十九日橘良基造二御殿一矣　奉レ號二八幡宮一事　舊事本紀云　神功天皇二年十二月戊戌朔癸卯至レ自二新羅一辛亥譽田尊誕二生於築石一是時子レ天有レ物翻二飜於虛空一下百寮皆仰見皇后出見レ之須臾而降下白幡四流赤幡四流即時皇子誕生故字云二八幡尊一臂自有二鞆之形一故名云二譽田尊一皇子生

後幡乃返レ天其幡者是高麗錦也矣　諸社根元記云大隅國桑原郡正八幡宮三座應神神功仁德也兩八流之幡顯座最初垂跡之地也自レ此有二八幡之號一矣
神社考云緣起曰筑前宮崎有二八幡宮一昔白幡四赤幡四自レ天降二于此一故名二八幡一植レ松而爲レ標至レ今猶在矣

御代もさか行男山名高き神に參らん　さか行は榮へ行なり男山は女郎花に註す●續拾男山老てさか行契あらはつくへき杖も神そきるへき後嵯峨

抑是は後宇多院に仕へ奉る臣下なり　人皇九十代後宇多院亦號二大覺寺一諱世仁龜山太子也母皇后藤原岐子號二後京極院一左大臣實雄女也文永十一年甲戌三月廿六日即レ位治二天下一十三年弘安十年十月廿一日禪レ位德治二年七月廿六日御出家法名號二金剛性一元享四年六月廿六日崩壽五十八歳葬二蓮華峰寺一已上　抑は高砂に註す臣下は葵上に記す

扨も頃はきさらき初卯八幡の御神事也　志水唯心(シスヰユイシン)上人八幡宮年中讃記云二月御神樂事右件之御神樂者仲春卜二卯日一被レ行從レ宵及二曉天一令レ宴下略　當社の神事數多ある中にも毎年二月十一月初卯日御神樂あり禁中の御神樂に准して伶人山ノ井多文安(ヲホフンアン)倍坏是を勤む總て祭日に卯の日を用る事は始て神とあらはれ給ふ事卯の年卯の月卯の日なりしによれり是よりさき譽田の御陵の側に御社を立られしも欽明帝廿年己卯の年也又是より後淸和帝貞觀元年己卯の年石淸水に勸請あり然れは卯の日を八幡宮の祭日とし侍る事其理ある事なり石淸水及ひ譽田宮なとの緣起に卯日を祭日とするは八幡降誕の日なる由を記せるはあやまり成へし二月には雲林院に註す

郢曲の砌なれは　郢曲とは御遊或は神樂なとの時歌うたふを云也郢は楚國の都の名也楚國の歌を都て郢曲と云總て歌謠するを楚になそらへて郢曲とは云也　元稹梅詩云郢曲琴空奏矣文選四十五云客有下歌二於郢中一者上矣砌とは居所につかふ詞なり爰に砌とつゝけたるは時節の語につかふ也　飛鳥井雅康卿山の霞云御酒宴のみきる迄も其興をつくされ侍る云々　古今榮雅抄云此みこ應神愛子にて崩御の砌に御位を宇治宮にゆつり給ふ上下略　應永歌合持和歌に「長閑なるはこやの山にすむ鶴や千代

のみきりの春をしるらん此等皆時節の詞に使へり
陪従の參詣仕れとの宣旨を蒙り　天子神社への行
幸はかならす東遊の舞ありその發聲する者を陪従
と云也大形近衛司の役也陪従を歌人と云　藻鹽に
陪従をゆふすみ人と云なり云々又陪従の裝束には
しゆろの葉を紋に付る也　榮花物語云右馬頭たか
よしといひてうたうたひ折節陪従などにめさるゝ
ありけり云々

四つの海は高砂に注す九重及花の都は田村に注す君
か代はちよにや千世にさゝれ石の此歌老松に注す

松の葉色も常盤山　常盤山は山城葛野郡並岡の西
にあり此所を常盤と名付る事は昔嵯峨天皇の皇子
源常の住給ひし所なる故に常盤と云也但爰に常盤
山を取出したるは只常盤の松と云諷詞にてつゝけ
たり八幡山を指ていへり

關の戸さしもさゝざりき　難波に注す

月かけろふの石清水　かけろふの岩とつゝけたる
は萬葉集二に人丸歌に大船の思ひたのみてかけろ
ふの磐垣淵のかくれのみ下略總てかけろふは春天
の陽焔朝生夕死巨略蜻蛉等をかけろふと云り右の
萬葉のかけろふはほのほ也炎の字を書也火ニ石火
とて石にあれはかけろふの岩とつゝくる也或はも
ゆるとつゝくるも此義なりかけろふは月影をいへり石清水は末
養に注す爰のかけろふは月影をいへり石清水は末
社記云石清水東ノ鳥居ノ外矣　顯注密勘云石清水常
には八幡宮をそ申ス彼山に岩清水と云しみつあり
云々　慈鎭古今集注云いはしみつとは岩より流れ
出る清水也常には八幡宮を申す石清水とて岩の中
より清水の出たる故也云々或曰常山有ニ五井一岩清
水其一也所謂石清水獨鈷水阿伽井藤井筒井是也云
々　○石清水絶ぬ流は身にうけつ我世の末を神に
續拾
まかせん太上天皇

生るを放つ　女郎花に注す

鳩の嶺　神殿の地を云也歷代編年集成云見ニ巽方一
男山石清水鳩峰上屢現ニ大光一上下略
或抄云古老曰昔鳩鳥多住ニ此山一故曰ニ鴿峰一又云山
形似レ鴿故以爲レ名矣　住吉詣云源義詮夏山のしけ
みかするを見渡せは是なん八幡山鳩の峰なとふし
おかみて云々○老か身のかゝらん杖の鳩の峰さか
ゆく道は神のまに〳〵素然　世傳鳩鳥を八幡宮の

使者とす　昔寂山皇慶有ニ入宋之志一共ニ沙門寂照一
上レ船時鳩數千羽集ニ于檣一逐レ之不レ去人多曰八幡
大師留レ慶也國俗呼レ鳩爲ニ八幡使鳥一文略　神社考

久堅の月の桂　羽衣に注す

是なる翁錦の袋に入て持たるは弓と見へたり　是
なる翁とは高良明神を云り委く奥に記す　四聲字
苑曰弓者所ニ以遣レ箭器一也矣　太白陰經曰紀犧氏
弦レ木爲レ弓剡レ木爲レ矢矣　史記曰黃帝弓以曰ニ烏
號一矣神代卷曰賜ニ天稚彥天鹿兒弓　天羽々矢一矣
日本紀曰神渟名川耳尊使ニ弓部稚彥造ニ弓矢部作
レ箭矣

先々めでたき題目なり　目出度と云事高砂に注す
題目は名目と云に同じ二字共に名とよめり　韻會
云題は品也顯也目名也矣

手早振神の御代には桑の弓蓬の矢にて　千早振は
田村に注す　禮記內則曰生ニ男子一設ニ弧於門左一以
ニ桑弧蓬矢六一射ニ天地四方一矣　張平子東京賦曰桃
弧棘矢矣○桑の弓蓬のやしまおさまれる世にさへ
沈む我身かなしも　鵜飼

昔唐土周の代を治めし國の例には弓箭を包み干戈を
納めし例を以て弓を袋にいれ劍を箱に納むるを社泰
平の世のしるしなれ　周武王殷紂王を討て天下を
治め給ひし時を云也周の代の相續く事武王より赧
王に至て都て三十七世凡そ八百六十一年にして遂
に秦に入也　詩周頌曰明昭有周式序レ在レ位載戢ニ
干戈一載櫜ニ弓矢一我求ニ懿德一肆ニ于時夏一允王保レ之
矣　干戈は王子年拾遺記曰庖犧造ニ干戈一以飾レ武
矣　周禮注曰戈長六尺四寸廣二寸矣　增韻云雙枝
者爲レ戟單枝者爲レ戈矣　干者盾也楯大盾也俗呼
レ盾爲レ牌矣○もの丶ふのたけき心もやはらくや弓
を袋におさめしる世は　口村

名にも扶桑の國をひけは　扶桑國は日本を指て云
也桑の弓をいはんとて扶桑の國をひけはとはつゝ
けたり　按扶桑東夷國名在ニ東海中一以ニ扶桑一爲ニ
日本異號一誤歟元々集云或書曰日本國者自ニ大唐一
而所レ名也斯國自ニ大唐一東方萬餘里居ニ于東極一日
出ニ東方一昇ニ于扶桑一已近ニ日所レ出故云ニ日本一也仍
又號ニ扶桑國一也矣　王充論衡曰　日且出ニ扶桑一暮
入ニ細柳一扶桑東方之地細柳西方之地矣　太平御覽
曰扶桑國者齊永平元年其國有ニ沙門慧深一來ニ至荊
州一說云扶桑在ニ大漢國東二萬餘里一地在ニ中國之

東其土多扶桑木故以爲名扶桑葉似桐初生如筍國人食之實如梨而赤績其皮以爲布矣
東方朔十州記曰扶桑似桑樹長數十丈大千圍兩々同根生更相依倚是以名之扶桑矣

誓の海もゆたかにて　　八幡宮の御めぐみひろき事をいふなり

君は船臣は水穗の國々も　　君は舟臣は水と云語は養老に注す水穗の國は日本の總名也　神代卷曰葦原千五百秋之瑞穗國矣　纂疏云六千五百秋者長久義瑞穗者嘉穀義生此國者以穀食爲命故矣
釋日本紀云就瑞穗誠難寄時節之春秋是又年代之春秋國家之祝言不可背義理歟矣　或云瑞穗國は稻葉のみづ〳〵しく生する國をいへりと云々○四方の國君にとなびく芦原の水穗の國は千世もみたれじ通茂

なびく草木　　佛原に注す

しかるに神功皇后三韓をせめ給ひしより　　神功皇后三韓退治の事は日本紀に悉く見えたり略之
皇后の傳及三韓は呉服に注す　三韓は馬韓辰韓辨韓を云也又新羅百濟高麗を三韓とも云り　新羅は圖書編曰新羅魏時斯盧國焉其先本辰韓種也辰韓始有六國稍分爲十二國新羅其一也其國在百濟東南五百餘里東濱大海矣　南史曰新羅魏時曰新盧宋時曰新羅或曰斯羅無文字刻木爲信語言待百濟與後通矣　唐書曰龍朔三年詔以新羅國爲鷄林矣　高麗は太平御覽曰高勾麗國在遼東之東一千里其王都於丸都之下方一千里戶三萬多山林無源澤矣　後漢書東夷傳曰高勾驪在遼東之千里南與朝鮮濊貊東與沃沮北與夫餘接地方二千里多大山深谷矣　百濟は難波に記す

同じく應神天皇の御聖運御在位も久し　　御聖運とは聖德ある御壽命を云也　人皇十六代應神天皇或號譽田天皇胎中天皇仲哀帝第四子也母曰氣長足姬尊皇后討新羅之年庚辰冬十二月生於筑紫之蚊田既產之完生腕上其形如鞆是肖皇大后爲雄裝負鞆故稱其名謂譽田天皇四歲立爲皇太子七十一歲即位立仲姬爲皇后治天下四十一年春二月崩大和輕島豐明宮壽百十

一歳庚午歳也日本紀取意

ゆたかに治まる天下今にたえせぬみつきとかや

古今榮雅抄云昔唐船高麗百濟より調奉る時勅使を遣し給ふ是をからものゝ使と云神功皇后三韓を平け給ひし後毎年八十艘の舟に寶物をつみ奉る允恭の御代迄は奉る其後は絶々になれは聖德太子攝政し給ひし時隋朝へ使を遣し給ふ是を遣隋使と名つく其後唐の代に移りて遣唐使の官を置給ふ大使副使判官主典なと官を定め置れたり連々此使を渡し給ふ承和の帝遣唐使歸朝の時大内建禮門の前にて市を立て百官以下にはしき儘に是を給ひけるとそ延喜の御時迄は高麗より忘れず時々調を奉る同し御代に唐の代亡しより使を遣す事絶畢其後商船の往來する計也云々

かみ雲上の月卿より　月卿雲客は舟辨慶に註す

欽明天皇の御宇かとよ豐前國宇佐郡蓮臺寺の麓に八幡宮とあらはれ　欽明天皇三十二年依二託宣一宇佐八幡宮と崇奉る事女郎花に註す豐前國は夕顔に註す　蓮臺寺は今は絶たり其舊跡小倉山の東二町許大尾山の峰つゝきに寺址あり此寺は後冷泉院の勅願として都督正三位源資通卿是を草創し給ふとなん帝王編年記云人皇三十代欽明天皇諱　號二天國排開廣庭天皇一繼體天皇嫡子也母曰二皇太后手白香皇女一仁賢天皇女也太后攝レ之常置二左右一云々御宇三十二年自二庚申一至二辛亥一都二磯城嶋金刺宮一大和國山邊郡是歳四月天皇崩葬二大和國高市郡檜隈坂合陵一矣

八重旗雲をしるべにて　八重旗雲とは應神御誕生の時赤白八流の旗天にあらはれ給ふ事をいへり上に註す　瑞應圖云旗雲瑞雲也至二帝德一時出現雲之勢似レ旗矣

洛陽　野宮に註す

されは神功皇后も異國退治の御爲に九州四王子の峰において七箇日の御神拜ためしも今は久堅の　愚童訓云皇后三韓退治の御祈の爲に四王子山に御幸成て榊の枝に大鈴をつけ御手に捧て立給ひ七箇日御神拜あり文略　或抄云四王子は在二肥後國玉名郡長須一此所景行天皇經歷の事跡なる故に天皇を腹赤村に名石大明神と祝ひ帝の皇子四人を四王子と祝ふその社ある所を四王子山と云也云々　伊呂波字類抄云寶龜五年甲巳太宰府四王寺始置二四禪

師ニ矣檜垣家集云四王子山を題によめる「老ぬれは
年はかくして有ぬへししわらし山の人に見ゆれは
天の岩戸の神遊　天照太神岩戸に籠せ給ふ時の神
あそひを引ていへり三輪に註す
むれゐてうたふや榊葉の　むれゐてとはむらかり
ゐる也群と書　榊とは神樂の採物の歌の一名なり
依てうたふや榊葉とつゝけたり　梁塵愚抄云採物
とは榊以下皆手に取物なりと云々「榊葉のかをか
くはしみとめくれは八十氏人そまとゐせりける
青和幣白和幣とり〳〵成し神靈を　採物の歌の内
に幣と云有依て青和幣白にきてを出してとり〳〵
とはつゝけたり青和幣白和幣は龍田に註す
普（アマ子）しやひもろぎの　ひもろきは神籬と書一說神供
と云共　神代卷云起ニ樹天津神籬及天津磐境ニ當
爲ニ吾孫ニ奉レ齋矣　ひもろぎは神道の秘事也今爰
のひもろぎは神供を云歟　伊呂波字類抄云胙（ヒモロキ）
祭食也神籬（同）俗用之大學式昨書矣○玉柏岡玉の木の（日本紀竟宴之歌）
かゝみ葉に神のひもろきそなへつるかな
おがたまの木の枝に金の鈴をむすび付て　岡玉の
木は古今集三木の傳受也　おか玉おが玉清濁の兩
說有但古今物名のおか玉の木はすみてとなふる也
或抄云御賀玉樹は榊の名也古今集には榊の事に非
す別の樹を云歟三木の一也云々　私云爰にうたふ
岡玉の木は榊を云成へし或曰抑をかたまの木と申
は天子御即位の時三笠山の松を長さ五寸廻五寸に
削て御守を朱にて上に書て綿に包て御むねにかけ
させ奉り御即位の後天子生氣の方に御寶物をそへ
て埋み給也是れ安倍加茂兩家の陰陽頭の一大事也
柳にて作る例も侍にや松を用につきておかたまの
木と申玉（ス）は物をほむる詞也是を天子の御年木と申
なり云々○み吉野のよしのゝ瀧にうかひ出るあは（古今物名）
をか玉のきゆとみゆらん　金の鈴とは神代の器物
也昔天照太神五十金鈴天上圖像及天逆戈を天より
伊勢國五十鈴川上に投下し給ふを大田命八萬歲の
間此靈寶を守りおはします倭姬尋給ひて遂に宮所
を爰に定給ふ彼五十鈴ある流れを五十鈴川と名つ
く委く神皇正統記及鎭座本記等に見えたり依レ之
今榊に鈴を付て神を祭る事也
八幡三所の神託ぞめてたかりける　石淸水三所也垂

跡本緣記云應神天皇神功皇后玉依姬稱ニ之三所ニ矣

瑞籬の久しき代より　高砂に注す

生るを放つかはら神とは我なるか　生るを放つかはらとは放生川を云かけたり女郎花に注すかはらの神とは高良の神を云り八幡に上高良下の高良とて有石淸水別當澄淸云上高良武內也下高良玉垂也矣上高良在ニ廻廊乾神殿傍ニ神社考云高良明神者武內宿禰之靈也案ニ日本紀之說ニ孝元天皇妃伊香色謎命生ニ彥太忍信命ニ是武內宿禰之祖父也景行天皇三年屋主忍男武雄心命詣ニ紀伊國ニ居ニ于阿備柏原ニ娶ニ紀直遠祖菟道彥之女影媛ニ生ニ武內宿禰ニ由ㇾ此見ㇾ之孝元子彥忍信其子武雄心其子武內也下略　卜部兼隆抄云武內大明神は孝元天皇四代孫垂仁天皇十年景行天皇同日誕生故天皇殊寵愛給景行天皇御宇棟梁臣成務天皇三年正月大臣御年五十日本大臣始也仁德天皇五十年薨給景行成務仲哀神功應神仁德都六代朝政承行給御年三百六十二歲因幡國上宮山中衣冠正入給御沓留給ヘ一句文殘「法藏比丘豈異人乎彌陀如來即我身是有ㇾ日薨給名御沓墓所奉ㇾ崇云々

下ノ高良在ニ外院南ニ　諸社根元記云高良者藤大臣連保之御事也神號曰ニ高良玉垂命ニ以ニ干滿兩珠ニ令ニ奉行ニ之故奉ㇾ號ニ玉垂ニ住吉明神之化身也矣

八幡大菩薩の御神託そうたかふなとて　八幡宮を大菩薩と號し奉る事　諸神記云欽明天皇三十二年辛卯二月八幡宮託宣云我名曰ニ護國靈驗威力神通大自在王菩薩ニ矣　神社考云桓武帝延曆二年五月神託曰我無量劫來化ニ生於三有ニ修ニ善巧方便ニ濟ニ度諸衆生ニ我名曰ニ大自在王菩薩ニ矣　公事根源云八幡大菩薩と申御名は御託宣に得ㇾ道來不ㇾ動ニ法性ニ示ニ八正道ニ垂ニ權迹ニ皆得ㇾ解ニ脫苦衆生ニ故號ニ八幡大菩薩ニ云々　或云此託宣は勝尾寺の開成に告給ふ御託宣なり此より以來大菩薩の號あり桓武の末にあたると云々

本よりも人の國よりわか國他の人よりも我人と誓ひのす衛も明らけき　神祇正宗云人皇四十六代孝謙天皇天平勝寶七年乙未豐前國宇佐宮託宣云自ニ人之國ニ波吾加國自ニ人之人ニ波吾加人矣　異國の人よりも我朝の人を守らんとの御誓ひ有難き御惠み也

〇千ひとよりも我人なれは岩淸水淸き流の末守るら

より我國の爲平長時

續古 ○久にへて君〳〵なれと守るらし他の國

ん等持院贈左大臣

眞如實相　江口に注す

きさらぎの初卯の神樂おもしろやうたへや〳〵日

影さすまて　此歌藻鹽草に八幡大菩薩の御歌也と

云々一說に朝日さすまてと有

天下一統　說文曰續紀也矣廣韻曰總也矣禮記檀弓註

疏云天統地統人統統者本也謂二天地人之本一也矣

公羊傳曰大一統無レ音矣

印の箱　女郎花に注す

久堅の月の桂の男山さやけき影は所から　此歌女

郎花に注す

鳩吹松の風までも　袖中抄云鳩吹とは山鳩は秋さか

りになけは秋の比人鳩のまねをして手を合て鳩の

聲のやうに吹ならす也獵師の鹿まつにも人をよば

ふとても又人に鹿ありとしらせんと思ふにも手を

合てふくを鳩吹とは云也云々　童蒙抄云鳩吹秋と

は立秋の日より鳩なく也ふくとは鳴を云也云々

堀川院百首 ○朝またき袂に風の凉しきは鳩吹秋に成やしぬら

ん顯季

難　波

古今集假字序六義第一のそへ歌に「難波津に咲や

この花冬こもり今は春邊と咲やこの花といへる

歌幷に序の詞をもて此唄を作る也されは應神第四

の御子仁德天皇と申奉るは攝州難波高津の宮に住

せ給ふ高き屋の御製ありかたき御めぐみ也此帝の

御慈悲世にひろき事を始終此謠にのぶるならし

難波は元浪速共浪花共いひしをあやまりて難波と

いふ也　日本紀曰神武天皇戊午春二月丁酉朔丁未

皇帥遂東舳艫相接方到二難波之碕ミサキ一會下有二奔潮一太

急上因以名爲二浪速國一亦曰二浪華一今謂二難波一訛矣

山も霞て浦の春浪風しつかなりけり　泰平の御代

をいへり浦とは難波の浦也

抑是は當今に仕へ奉る臣下なり我三熊野を信し

抑は高砂に注す臣下は葵上に注す三熊野は舟橋に

記す　〽

年かへる春にも成候へは　年かへる春とは年くれ

て又タ春になるをいへり古歌に年たちかへるとも春

たち歸るともよめり年かへる春とつゝけたるはめ

つらし
風莫の濱　南紀云紀州牟婁郡風莫濱「風なきの濱の白波いたつらに爰によりくる見る人なしに」此歌萬葉集第九に長忌寸意吉丸か作也白崎三名郡由良崎黒牛潟等の歌と共に六首一所にあり諸書に風莫の濱紀伊國ト有然共今尋ぬるになし案するに瀬戸の庄瀬戸村の北十二三町計海濱に綱しらすと云村あり此所風莫の濱也つなしらすと云名風莫の道理に相叶たる也云々

濱の眞砂も吹上の　吹上同國也鸚鵡小町に注す○新千「吹上の濱の眞砂ハ鹽風に渚の千鳥跡も殘さす」光明峰寺入道

はやくも紀路の關越て　早くも來るといひかけたり紀伊國は蟻通に注す紀の關は誓願寺に注す

是も都か津の國の難波の里につきにけり　是も都かといへるは仁徳天皇の皇居の舊址をいへり　日本記云元年春正月丁丑朔己卯大鷦鷯尊即ニ天皇位一都ニ難波一是謂ニ高津宮一矣　今案攝州東生郡高津神社は比賣古曾神也日本紀及ひ延喜式に攝津國比賣古曾神社と載るは當社の御事也然るを以ニ當社一爲ニ仁徳天皇一者非也或云高津社所レ祭比賣古曾神本名ニ下照姫命一大己貴命女始乘ニ天磐船一降ニ于此一仁徳天皇墓ニ其舊跡一遷ニ都于此一號ニ高津宮一矣仁徳帝御製に「飛かけるあまの岩舟尋てそ高津の里に宮作けり」　當社昔は在ニ農人橋廣小路之邊一天正年中秀吉公築レ城時移ニ今之所一亦上難波博勞町稻荷神社あり所レ祭蒼稻魂牛頭天王仁徳天皇也此社も昔農人橋東にありて天正年中に被レ移ニ今地一此社の本の地を世に仁徳天皇の舊址といへ共仁徳の御製等による時は高津社の舊地を仁徳の皇居ハ跡とするがよろしき歟　難波の里は西成郡に屬す○續古「つの國の難波の里の夕凉みあしのしのひに秋風そ吹」信實

津の國は高砂に注す

君か代の長柄の橋もつくるなり　古今序云今は富士の山も煙たゝす長柄の橋もつくるなりときく人は歌にのみぞ心をなくさめける云々長柄の橋は攝州西成郡也今の北長柄村より豊島郡垂水庄に至る間を指て長柄の橋跡といへり一説長柄橋は渡邊の橋を云也云々　國史云嵯峨天皇弘仁三年壬辰六月遣レ使造ニ攝津國長柄橋一矣　百練抄云白川天皇延久元年二月廿五日覽ニ長柄橋一於ニ御船一有ニ和歌一廿七日

還御矣　古今栄雅抄云古今序の心は世中の昔にかはる事をいふ富士の山は煙のたへずたてるが今はたヽず長柄橋はふりてたへたるかあたらしく作る也と聞人は何事も昔にかはりたれは歌にぞ心をなぐさめけると云心なり扨長柄の橋もつくるなりといふに盡造の両説あり定家卿は盡の字也其故は長柄の橋も朽果て橋柱計殘れり我戀をは何にたとへん也（津の國の長柄の橋もつくるなり今は我身を何にたとへん伊勢〇芦間より見ゆる長柄の橋柱昔の跡のしるしなりけり猿丸　家隆卿は造の字也其故は朽果て幾ばく久しきとしらさりつる長柄の橋も今は造也我戀は改る方もなければ何にたとへんと也〇君か代は長柄の橋の千度迄造かへても猶やふるさんみヽね　此外説多し獨口傳有清輔集云かく夜長帯刀節信と云人能因に初て逢て互に物語すとて能因錦の袋より長柄の橋の鉋屑を取出し是吾重寶也といふ于レ時帯刀喜悦甚しく亦自懐中より井手の蛙のかれたるを取出して見せける共に感して退散すと云々　愚秘抄云俊惠法師長柄の橋の鉋屑をいかにとしてか感得し侍りける年頃錦の袋に入て首にかけて持けるを召れけれ共おしみ申によりて夜陰に及て勅使行向ひてうはひ取て參りければ俊惠法師足ずりをしてかなしみけるも優にこそ覺へ侍れ是さなから道をおもくするゆへなり云々　明月記云元久元年長柄橋々柱朽殘木被レ作ニ文臺一是院御物也今日始被レ出ニ和歌所一矣

天長く地久しくして神代の風長閑に傳はる　老子經曰天長地久天地所ヨ以能長且久ニ者以ミ其不ニ自生ニ故能長生矣　新葉集序云濱千鳥の跡たゆる事なく天長く北久しくて神代の風遙に仰がざらめかもと云々神代の風とは神代の風儀也

皇のかしこき御代の道ひろく　古今序云今すへらきのあめの下しろしめす云々皇はすぶる君と云心なりすべらはすぶる也きは君なり帝王は天下をすへて治め給ふ也一説女帝をすめろきととなふる也と云々

國をめぐみ民を撫て四方に治る八島の浪　志賀に注す

春日野に若葉摘つヽ萬代を祝ふ　心は神そしるらん古今集賀部に素性法師歌也詞書云内侍のかみの

右大將藤原朝臣の四十の賀しける時に四季のゑがけるうしろの屛風に書たりける歌と云々　歌の心は春日野に若菜をつみ君を萬代と祝ふ心は神ぞしろしめすらんと也　公事根源云内藏寮幷内膳司正月上子日獻二若菜一矣　荊楚歳時記云正月七日俗以二七種菜一作レ羹食レ之人無二萬病一矣

天津日嗣の御調物　天津日嗣とは天子御位につき給ふを云皆天照太神の御末なるゆへに天津日嗣とは云なり日本紀に天業天基天緒帝業宸極踐祚皆あまつひつきとよめり　○神代より定置てし久方の天津日嗣の限しられす（前太政大臣）　御調物とは諸國より天子へ捧くる進物を云也進貢　朝貢　來貢と書　日本紀云崇神天皇十二年秋九月始校二人民一更科二調役一謂二之弭調女手未調一也矣　舊事天孫本紀云猿田彦大神尋二分國州年氣豐氣一而納二取之一爲二年貢調一將二國州魂衆荒神等一使レ朝二於天廷一（瓊々杵尊）永爲二天道奴（ミヤツコ）一諸百姓伏二於朝廷一奉二御年貢一其法元也矣

關の戸さゝて千里迄　漢書曰三日一風風不レ鳴レ條不レ摧二林木一五日一雨雨不レ破レ塊不レ傷二禾稼一盜賊不レ生夜不レ扃レ戸行人讓レ路道不レ拾レ遺矣　事文類聚云子產治レ鄭城門不レ閉國無二盜賊一道無二餓人一矣　新續古今序云立田山の白波聲しつかにして夜半の關の戸さす事を忘れ云々○いつ方も關の戸さゝぬ御代にあひて今我道そ末徹りぬる（新千）（鶯世）

難波の浦　西成郡を云一說川邊郡難波村を云共云り

梅花を花の兄ともいへり　梅は萬花に先たちて咲ゆへに花の兄と云也　山谷詩含レ香體レ素欲レ傾レ城山礬是弟梅是兄矣　山礬とは水仙を云也

梅の名所〳〵國々所は多けれとも　唐土にては江南大庾嶺日本にては難波泊瀨春日暗布（クラフ）山小野なと古歌によめり

六義の初めのそへ歌にも　委くあふむ小町に注す

こや都路の難波津に　こやとはこれやの中略也難波津總て大坂の市中を云成へし隱に注す

難波津に咲や此花冬こもり今は春へと咲くやこの花

古今序云抑歌のさま六つありからの歌にもかくぞ有へきそのむくさのひとつにはそへ歌おほさゝきの御門をそへたてまつれる歌と云々　唐の歌にもかくぞ有へきとは唐土の詩に風賦比興雅頌是

を六義と云なり詩經の序に出たり　基俊口傳抄云御位につき給はぬをつき給へとすゝめ奉りたる歌なりその事といはずして外よりすゝめ奉りしゆへそへ歌といふ云々　古今序の古注云おほさゝきの御門のなにはつにてみこときこへける時東宮をたかひにゆずりて位につき給はで三年になりにければ王仁と云人のいふかゝり思ひてよみて奉りける歌也この花は梅の花を云成へし云々　應神天皇第四の御子を仁德天皇と申奉る御弟を菟道雅郎子と號す宇治に住給ふ故に宇治宮と申す此みこは應神の愛子にて崩御の砌に御位を宇治の宮にゆつり給へり然れども仁德御兄なれは天位を繼給へと宣ふ仁德は父の命なれはとてかたく辭し給ふ仁德は難波に住給ひ御弟は宇治におはしまして互に位につき給はて三とせ國王おはしまさす然るに宇治の宮崩し給ふ仁德深く歎き給へは王仁と云者今は御位をいなとの給ふへき事にあらすとて此歌をそへて御位につき給へとすゝめ奉るによりて御位につき給ふ也めてたき歌の德也八雲の御抄にこの花とは皇子をいふと云々　冬こもりとは仁德位につき給はぬ心也今は春へとは冬去て春のあるしとなる心也咲やこの花とは世をたもち民をめぐみ給へと也

御即位　花筐に注す

天下の春をしろしめせは　今は春へと咲やこの花の心也　盧洪景句云儲二萬斛香一先二天下春一矣

花の盛は大鷦鷯の帝を花にそへ歌の風もおさまり　仁德誕生の日木菟(ツク)と云鳥來て產殿に入同じ時に武內大臣も子を產り鷦鷯と云鳥來て產屋へ入應神是を聞召實あやうき事也君臣そのしるしを取かへて名付んとて仁德の名をは大鷦鷯といひ武內が子と木菟宿禰と號す日本紀第十一文略　そへ歌は六義の初め風の字也依て風もおさまりとはつゝけたりあふむ小町に注す

枝をならさぬ御代　高砂に注す

抑難波津の歌は帝の御初め又淺香山の言葉は釆女の土器とりとり也關寺及ひ釆女に注す

堯舜の御代　蟬丸に注す

萬機の政おたやかにして　尙書皐陶謨曰兢々業々一日二日萬幾蔡註萬機者言二其幾事之至多一也矣孝經諫諍章注曰天子有二天下一四海之大萬機之繁善則

億兆蒙ニ其福一不善則宗社受ニ其禍一故必有ニ諫諍臣一以救ニ其過一而後可矣　孔安國云機微也言當ニ戒懼ニ萬事之微一也矣　政は釋名曰政正也下所レ取レ正也矣左傳曰在レ君爲レ政有レ臣爲レ事又大曰レ政小曰レ事

慈悲の浪四海にあまねく　古今序におほんうつくしみの波八島の外まて流れと有是慈悲の波也奥に註す　禮記孔子曰舜其大孝也與尊爲ニ天子一富有ニ四海之內一矣　班固云其君天下也炎レ之如レ日威レ之如レ神涵レ之如レ海養レ之如レ春矣

君々たれは臣も又水よく船を浮ふ　養老に註す

高き屋にのほりて見れば煙たつ民のかまとはにきはひにけり　新古今集賀ノ部に仁德の御製也詞書云御調物ゆるされて國とめるを御覽じてと云々東野州云たかきやは樓閣なとの事也四方を御覽しめくらして民の福樂のけしきをうれしく思召たる御歌也かまとゝは只人家の事と心得へし云々　仁德天皇四年二月樓に登りて四方を見給ふに民つかれて朝暮の煙たゝさりければ今より三年調物をゆるし民をやすめ宮殿破るれ共修理し給ふ事をもとゝめ給ふ扨七年の四月に又樓にのほりて御覽するに百姓の楢にきはへる事を悦ひおほしめして讀せ給へる歌也日本紀取意

かけまくもかたしけなくそ聞へける　かけまくもとは花鳥餘情云宣命の詞也掛捲云々　玄旨云かけて申さんもおそれなれともの心也と云々　或云皆人萬のねかひありて神に頼みをかくる事當也依てかけまくと云也まくに心なし只かくると云事也まくと云はたとへは花の散をちらまくおしきといひ或はみまくおらまくなとゝ云出葉（テニヲハ）と同し事也

詔　説文曰詔告也上命也矣　釋名曰詔照也照人暗不レ見事以レ此示レ之使ニ照然一也矣　爾雅曰詔導也郭璞云敎ヲ導之一也矣　劉向傳云宜下拜ニ明詔一吐中德毒上矣　詔は天子の御語を云也又莊子曰子不レ聽ニ父之詔一又父詔ニ其子一矣上古には皆通し用たり　秦漢以下天子獨稱レ之

濱の眞砂の數つもりて　古今序云濱の眞砂の數おほくつもりぬれはと云々○我戀はよむともつきし有礒海の濱の眞砂はよみつくすとも

雪は豊年の御調物　詩烈祖篇曰自レ天降レ康豊年穰々矣　毛萇詩傳曰豊年之冬必有ニ積雪一矣　呂向曰

隱公之時大雪平地一尺是歳大熟爲ニ豐年一矣韓退之文詞云春雲始繁時雪遂降實豐年之嘉瑞也矣　唐張說詩曰觸レ石雲呈レ瑞合レ花雪告レ豐矣○（新勅）あらはれて年ある御代のしるしにや野にも山にもつもる白雪

内大臣

千秋萬歳　　盛久に注す

千箱の玉を奉る　　日本紀云宣化天皇元年詔曰黄金萬貫不レ可レ療レ飢白玉千箱何能救レ冷矣　袖中抄云ちはこの玉とは千の箱に入たらん玉也おほかるたとへ也云々　新續古今序云此外浦々にかきをく藻鹽草は千はこの數よりもおほくと云々　長嘯子玄旨法印をいためる詞云和歌の浦にしてひろへる玉の數々はやゝちはこにも過ぬらんかしと云々○（拳白集）秋の野に千箱の玉をなけ捨てとる人なしにみゆる白露

然れは普き御心のいつくしみ深うして八島の外まて浪もなく廣き御惠み筑波山の陰よりもしけき　　古今序云普きおほんうつくしみの波八島の外迄流れ廣きおほん惠みの陰筑波山のふもとよりもしけく云々　同眞字序云仁流ニ秋津洲之外一惠茂ニ筑波山之陰一矣○（古）筑波根のこのもかのもに陰はあれと君か御影にますかけはなし

大君の國なれは土も木も田村に注す名にしおふは江口に注す

一花ひらくれは天下皆春なれや　　大集經曰一葉落天下秋知塵起大地収一華開天下春矣

春鶯囀　　河海抄云春鶯囀壹越調也名ニ大曲新樂一又一名天長寶壽樂矣南宮横笛譜云此曲者左大臣源信朝臣及巨勢成人等依ニ承和御時勅一信朝臣以ニ此曲一令レ傳ニ習之一矣　體源抄云抑此曲は唐太宗皇帝の御製作也一說合管青と云人造レ之而皇帝同時に渡レ之云々　或書云合管青と云人造レ之大國の法にて春宮の立給日は春宮殿大樂管に此曲を奏せは必す鶯と云鳥來り集りて百囀をなす此朝にもさるためし侍る興福寺の僧圓憲得業と申ける人は僧の身なりけれとも管絃の道無双なりけれは天下にゆるされたりけり春の朝には住房淨明院のまかきの竹に向て此曲を吹給ひけれは鶯來て集る笛の音と同じやうに囀侍けるまして唐國の事はさこそ侍りけめと面白く侍り云々　仁明天皇御宇承和十二年正月

九日清涼殿にして尾張濱主生年百十五歳の時此曲をまふ又一首和歌を奏す「春毎にも丶色鳥のさへつりて今年は千代とまひそかなつる　天皇御感ありて天長寳壽樂と始て名ヲ付之ニ今の春鶯囀これなりと云々

我はしらすや此梅の春年々の花の精　唐書曰明皇宮人江氏好レ梅名ニ梅妃ト上曰此梅精也矣　趙師雄と云者羅浮と云所に遷て日暮て松林の酒肆の旁に見ル一美女ニ淡妝素服して出て迎ふ共に語るに芳香薰る酒家を扣て共に飲む師雄醉て寢たり醒て見れは大梅花下にあり月落烏啼て惆悵とし還る已上龍城錄

百濟國の王仁　佐々木高秀古今抄云王仁漢高祖八代末葉矣　舊事　天皇本紀云應神天皇十五年天皇問ニ百濟阿直岐ニ汝國勝レ汝博士有對曰有也王仁者是就中秀也仍遣レ使徵ニ王仁ニ于レ時十六年二月王仁參來矣　古今榮雅抄云王仁は百濟國の人也神功皇后三韓をたいらけて皇后國の寳を奉れと宣ふに此王仁を出すいかなる故ぞと問給へば此國には賢人を寳とすと答けれは召くして本朝に歸給ふ云々姓氏錄云王仁は漢の高帝の後鸞王より出る云々王仁つゐに日本にとヽまり年經て卒す河內國交野郡津田の新田に王仁の墓有又泉州堺の東蓼が池の邊に王仁の祉あり　百濟國は馬韓五十四國の內に夫餘國と云有是を後に百濟と云也　北史曰百濟之國者其先蓋馬韓之屬也出レ自ニ夫餘王東明之後ニ其國東極ニ新羅ニ北接ニ高句麗ニ西南俱限ニ大海ニ東西四百五十里南北九百里其都曰ニ居拔城ニ亦曰ニ固麻城ニ矣　昔槖離國の王御狩の頃宮中の侍兒遂に子をはらむ王還て是を殺さんとす侍兒の云我前に天上を見るに赤き氣有て鷄子の如し降て身上に觸たると王信じて殺さす後果して一男子を生す成長して東明と號す騎射を善す王其勇悍を恐れて又是を殺さんとす東明即ち南に走て淹滯水に至り弓を以て水を擊に魚類浮び集て橋となる東明是に乘て水を渡り夫餘國に至て王となる百家の人相濟か故に國を號して百濟と云北史文略

誰か言し春の色は東より來るといへとも南枝花初て開く　高砂に注す

この花咲屋姬　爰に此神を取出す事咲やこの花と云歌によりてかく作れり木花開耶姬は櫻川に記す

相人　書言故事云相人視二人貌一而知二其貴賤一矣　廣博物志云伯益始相レ獸周史佚始相レ人矣　和名類聚抄云史記云長安中有二相工田文者一相工俗云相人矣

仁德の御宇には　人皇十七代仁德天皇諱大鷦鷯應神帝第四子也母曰二仲姫命一五百城入彥皇子之孫也皇子兄弟相讓不レ即二于位一三年也癸酉年二十四歲即レ位二年立二磐之媛命一爲二皇后一都二難波高津宮一治二天下一八十七年春正月崩年百十也冬十月葬二百舌鳥野陵一廟號二平野大明神一紀日本　御宇の字義は田村に注す

御代の鏡の影を寫し　御代の鏡とは君の政のあきらかなるを云也　莊子天道篇曰聖人之心靜乎天地之鑒也萬物之鏡也矣　曹植魏文帝誄曰心鏡萬機鑒二照下情一矣　淮南子曰聖若レ不鏡レ將不レ迎應而不レ藏故萬化而無レ傷矣〔續雪玉集〕いさきよき君か心の濁なき御代の鏡のこやの池水〔藤原實隆〕

難波の事か法ならぬ遊ひ戯れ色々の舞樂おもしろや　女郎花物語云書寫のひしり結緣供養し侍りける時ひと〴〵あまた布施をおくりけるに遊女宮木といふものさゝくるを思ふ心やありけんしはしとらさりけれは「津の國のなにはの事か法ならぬ遊ひたはふれまふとこそきけ　とよみ侍し已上　此歌後拾遺集に入下句遊ひたはふれまてと註きけと有歌の心はうたふもまふも法の聲ときく時はたとへ罪深き遊女なりとも助け給はんと云心也

梅か枝にきゐる鶯春かけてなけともいまた雪はふりつゝ　是は催馬樂の呂の歌の中の梅か枝の歌也此歌古今集春部に入歌の心は春になりて梅かえに鶯は來居てなけとも猶冬のやうに雪はふると也　古今實枝抄云此歌は昌泰二年十二月の立春によみ給ひける中山右大臣長平の御歌也云々

古き皷の苔むして　諫鼓苔深鳥不レ驚と云詩の心なり山姥に注す

打ならす人もなけれは君か代にかけし皷も　堀川百首に紀伊が歌也留りは苔おひにけりと有又人しなけれはと有歌の心は右の詩の心にてつゝけたり

時守のねふり　時守の事ハ橋に注す　○時守の打鳴す皷數見れは時にはなりぬあはぬもあやし〔萬〕

難波の鐘　天王寺の鐘也三井寺に記す

入江の松風村芦の葉音　村芦はまはらに生たるを
云也○家霜に枯波におれふす村芦の葉分に殘る難波
江の里光廣
難波の鳥も　庭鳥をいひかけたり時の調子と有ゆ
へ也
時の調子　佐々木家之日記云時調子之次第
子呂般涉調　丑呂律神仙調　寅呂律鸞鏡調　卯呂
律雙調　辰律鳧鐘調　巳律上無調　午律黃鐘調
未呂一越調　申律呂斷金調　酉律呂平調　戌呂下
無調　亥呂勝絶調　如レ此雖ニ十二時調子一正體五調
子也其故五姓次第也　五姓之次第寅卯は木姓双調
より出る　巳午は火姓黃鐘より出る　丑未辰戌は
土姓一越より出る　申酉は金姓平調より出る　亥
子は水姓盤涉より出る
秋風樂　拾芥抄云秋風樂盤涉調也矣　體源抄云秋
風樂中曲新樂此曲弘仁天皇行ヨ幸南池院一之時常世
乙魚依レ勅作ニ此曲一樂者大戸淸上制ヨ作之一云々　秋
風辞有ニ文選一樂詞是也可レ秘レ之云々
萬歲樂青海波　高砂に註す
採桑老　拾芥抄云採桑老盤涉調也矣　體源抄云採
老中曲古樂唐作ニ採桑子一其體老人携レ杖着ニ紫淺ホノマヽ
蘊一徹々行身體如レ不レ堪云々多資忠被レ討時此曲絶
畢近方所レ被ニ習寫一也其後天承元年朝覲行幸始近
方舞ニ蒙ニ勸賞一即任ニ右近將監一云々
振頭の曲　蟬丸に註す
入日をまねき返す手に　富士太鼓に註す
今の太鼓は波なれはよりてはうちかへりてはうち
　太鼓は富士太鼓に注す波の鼓は白樂天に注す浪
かへしは梅か枝に注す

白樂天

白居易字樂天其先祖蓋太原人唐代宗帝太曆七年壬
子誕生七月而識ニ之無二字一媰展レ書指レ之示雖ニ百
數ニ不レ差敏悟絶レ人博才以ニ詩文一著レ名年十七登ニ
進士一憲宗帝元和二年丁亥任ニ翰林學士一號ニ醉吟先
生一慕ニ節惑ニ浮屠道一尤甚捨レ宅爲ニ香山寺一自稱ニ香
山居士一于レ時宣宗帝太中元年丁卯七十五歲而卒
葬ニ龍門山一其詩集名ニ白氏文集一行ニ于世一矣　一云
白は姓也秦白公と云し人の末流なるが故に白を姓

とせり居易とは母の胎内にして五體を苦しめざるゆへの名也云々此謠に住吉と白樂天との問答ありされは樂天なとの相手に住吉明神をあてかふ事作意不相應たりといへとも和漢詩歌の問答なるゆへにかく作れり是和朝の歌を稱美せんが爲なり扨樂天日本へ來ると云事曾而本說なき事也古今著聞云天暦六年十月十八日後江相公の夢に白樂天來給へり相公悦て其貌を見れは白衣を着したり面の色赤黑にぞおはしける青衣を着たる者四人相したかひたり相公都率天より來給へるかと問しかなりとそ答給ひける申へき事有て來るよし宣ひけるにいまた物語に及ばずして夢覺にければ口惜き事かぎりなし云々全文略

抑是は唐の太子の賓客白樂天とは我事なり　白氏文集第七十酒功贊序云唐太子賓客白樂天亦嗜酒作酒功贊上下略　謠の發端の詞是にてつゝけたり

抑の字義は高砂に注す　大唐唐鑑云起高祖武德元年終昭宣帝天祐四年凡二十帝二百九十年文略

太子賓客は官の名也日本にては春宮學士と云春宮にものおしへ奉る官也　唐書云太子賓客四人正三品掌侍從規諫贊相禮儀宴會則上齒侍讀無常員掌講導經學貞觀十八年以宰相兼賓客開元中定員四人矣史記云漢高祖欲易太子呂后用留侯張良之計迎四皓以太子賓客之名始起於此矣　太子春秋傳曰天子之子稱太子矣漢書高祖紀曰五年二月甲午漢王即皇帝位尊太子曰皇太子矣是太子號の始也本朝には神武天皇年十五にして太子と成給ふ日本紀　此謠の唐の太子は順宗帝の御子憲宗帝の太子たりし時を云也

扨も是より東に當て國あり名を日本と名つく

太平御覽曰日本國者倭國之別種也以其國在日邊故以日本爲名或云倭國矣　圖書編曰日本在溟渤之東其地形類琵琶東西數千里南北數百里九州居西陸奥居東山城居中今即都城之地也其西北至高麗南至琉球新羅百濟在西地矣

日本私記云日本國從大唐東方萬餘里日出東方昇于扶桑故云日本矣　天地靈覺秘書云大日本國者大八洲也惟大日靈貴治國也亦八葉蓮華也即金剛胎諸藏會大日宮世界國土也下略　今按日本の異名數多あり神代講述抄に十六の異名を記せり略之

日本の智恵をはかれとの宣旨にまかせ　智恵肇論鈔云智則知也恵則見也梵語云二般若一矣法界次第云秦言二智慧一照ヲ了一切諸法一皆不レ可レ得而能通ヲ達一切一無閡名爲二智慧一矣

雲の旗手の天津空　班女に注す

碇をおろし　四聲字苑云海中以レ石駐レ舟曰レ碇矣

千首
○いかりおろす沖の泊をしりもせてさそ松蔭の波のうかれめ爲尹

しらぬひの筑紫の海の朝ほらけ　九州を別て筑紫と云櫻川に注すしらぬひとは筑紫の枕詞也古歌によめり朝ほらけは善界に注す　日本紀第七云大足彦忍代別天皇御宇十八年五月壬辰朔從二葦北一發船到二火國一於レ是日沒也夜冥不レ知二著岸一遙視二火光一天皇梜ナシトリ杪者曰直指二火處一因指レ火往之即得レ著レ岸天皇問二其火光之處一曰何謂邑也國人對曰是八代縣豐村亦尋二其火一是誰人之火也然不レ得レ主茲知非二人火一故名二其國一曰二火國一矣　是をしらぬ火の筑紫と云なり又萬葉集第三の歌に「白縫の筑紫の綿は身に着ていまだはきねと暖に見ゆ　萬葉仙覺抄云白縫の筑紫の綿といへる古は可レ然人々綿を絹なとにも入ねともわたを縫つゞけてうへにき給ひけり云々今按しらぬ火の筑紫とよめる古歌多し證歌畧レ之右萬葉に白縫の筑紫の綿とつゝけたり但しらぬ火の筑紫白縫のつくし兩義ある歟

巨水滿々として碧浪天をひたし　巨水は大海也韻會云巨大也矣碧浪とは水の色青ければいふ也增韻云碧深青色矣　杜子詩春水船如二坐天上一矣　王勃詞云秋水共二長天一一色矣

越を辭せし范蠡か扁舟に棹をうつすなる五湖の煙の浪の如く　越王勾踐幷五湖の事委しく舟辨慶に記す扁舟とは小舟を云也楊愼丹鉛錄云或問レ予詩人多用二扁舟一何所爲レ始予按南史天淵池新製二魚舟形一甚狹故小舟爲二扁舟一矣　國語曰范蠡乘二輕舟一以浮二於五湖一矣　史記貨殖列傳曰乃乘二扁舟一浮二於江湖一矣江以言賦云陶朱辭レ越之暮眼混二五湖之烟一矣

江淹別策文云范蠡扁舟之泊烟波惟新矣　史記越世家載二范蠡之事一正義曰會稽典錄云范蠡字少伯越之上將軍也本是楚宛三戶人佯狂倜儻負レ俗矣列仙傳云范蠡字少伯徐人也事レ周師二太公望一好服レ桂飲レ水爲二越太夫一佐二勾踐一破レ吳後乘二輕舟一入レ海變二名姓一適レ齊爲二鴟夷子一更二後百餘年一見二於陶一爲二

陶朱公ニ矣
面白は三輪に注す松浦は女郎花に注す　有明は高砂
に注す　またきは融に注す　波濤は屋島に注す
漁翁は羽衣に記す　漢土は老松に注す
ことさやぐ唐人なれは〽ことさへぐ共云也言語通
しかたき心也　萬葉長歌に言佐敝久辛の崎有上下略
仙覺抄云言佐敝久とは詞のさへらるゝ也詞の定か
にも聞へぬ心也辛の崎は所の名也唐人のものいふ
詞のさきは何ともも聞しりかたきによそふる也云々
唐には詩を作てあそふよ　說文云詩志也　志發ニ於
言ニ釋名云詩之也志之所レ之也矣藝文志云誦ニ其言ニ
謂ニ之詩ニ矣論語　季氏篇曰不レ學レ詩無ニ以言ニ矣
吳訥文章辨體曰詩大序曰詩者志之所レ之也詩有ニ六
義ニ曰レ風曰レ雅曰レ頌曰レ比曰レ興曰レ賦矣
日本には歌をよっみて人の心をなくさみ候　古今
假字序云おとこ女の中をもやはらけたけきものゝ
ふの心をもなくさむるは歌也云々
夫天竺の靈文を唐土の詩賦とし唐土の詩賦を以て我
朝の歌とす　天竺の靈文とは經の陀羅尼を云なり
唐土の詩賦とは詩は五言七言にして句の短きを云
也賦は句の長くつゝきたるを云日本の長歌の如し
漢書　班固曰不レ歌而誦亦曰レ賦鄭玄云賦或造レ篇或
誦レ古然則賦有ニ二義ニ矣　金春口傳集云天竺の靈
文唐土の詩賦吾朝の風俗を合せて三十一字の歌に
よむと云々古今了譽抄云天竺には梵語とて經の陀
羅尼是也唐土には漢語とて詩賦是なり日本には和
語とて今の歌なれは大和歌とは云也云々
大きに和と書て大和歌とよめり　伊勢物語和歌抄
云やまと歌と名つけし事も心とはともにかよひお
ほきにやはらげしゆへ也云々古今假字序云おとこ
女の中をもやはらけたけきものゝふの心をもなく
さむるは歌也云々　或云やはらくと云はもろこし
の詩賦を我朝の歌にやはらけしと云義也大きにと
いひかけたる詞いふかし大は稱美の詞なるべし云
々　月清
〇敷島や大和言の葉尋ぬれは神の御代より出
雲八重垣〽
青苔衣をおびて巖の肩に掛り白雲帶に似て山の腰を
めぐる　江談云後中書王文藻詩云白雲似レ帶圍ニ山
腰ニ青苔如レ衣負ニ巖背ニ年々別思驚ニ秋鴈ニ夜々幽聲
到ニ曉鷄ニ矣此詩以後萬人歎伏已上日本風土記云

石以打以外果結ノ高戸矢鐵佉外和那各打尼革々而
法古渾乃和皮尼爾鐵陽脉那谷矢和理古雲山苔石

苔衣きたる巖はさもなくてきぬ〱やまの帶をする
かな　江談云後中書王文藻歌に「苔衣きたるいは
ほはまひろけむきぬ〱山の帶するはなそ　日本
風土記云岩衣山帶と云題にて「苔衣きたる巖はさ
むからてきぬ〱山に帶をする哉

生としいけるもの〳〵　高砂に注す
花に鳴鶯水にすめる蛙迄唐土はゑらす日本には歌を
よみ候そ　古今假字序云花に鳴鶯水にすむ蛙の聲
をきけはいきとしいけるものいつれか歌をよまざ
りける云々　同眞字序云 春鶯之囀二花中一秋蟬之
吟二樹上一雖レ無二曲折一各發二歌謠一矣色葉集序云鳴
レ花鶯住レ水蝦何不レ讀レ歌何況於二人倫一乎矣詩正義
曰哀樂起宜於二自然一喜怒端非レ由二人事一故燕雀哀二
啁噍感一鸞鳳有二歌舞形一矣(一本藤原義定ト有)　蛙の歌をよみたると
云事は古今秘書云紀良貞と云人住吉に詣て忘草を
尋ねありきけるに好女に逢けりさて別れに及ンて
女いはくわれ戀しくは此住吉の濱へかさねて來れ
と云けり後に行て見れは女はなくて蛙の出てはひ
渡るふしきに思ひて見れははひける跡に文字あり
よみて見れば歌なり「住吉の濱のみるめも忘れね
はかりにも人にとはれぬる哉

形のことく　關寺小町に注す
孝謙天皇の御宇かとよ　帝王編年記云四十六代孝
謙天皇諱阿閉武高野聖武天皇ノ女也母光明皇后淡海
公女也養老二年戊午誕生天平十年戊寅正月壬子立
爲二皇太子一年廿一　天平勝寶元年七月二日甲午卽二位
大極殿一年三十二御宇十年自二天平勝寶元年巳丑一
至二天平寶字二年戊戌一都二平城宮一云々天平神護元
年八月四日崩矣私云四十八代稱德天皇孝謙帝之重
祚也

大和國高天寺にすむ人の　和州寺社記云 高天寺
在二和州葛上郡奈良坤方九里半一當時金剛山の麓に
て草庵五六坊あり古へは七堂伽藍なる由いつの比
よりか零落してわづか三間四面の本堂に十一面觀
音幷釋尊の靈像を安置す其側に遍照院と云草庵の
庭前に古へ孝謙天皇の御宇に鶯とまり居て和歌を
詠じたる梅の木今にありと云々　稱名院殿大和記
行云高天寺に至りぬ初陽毎朝來の梅の樹ちかき比

風におれたるよし申て一丈はかりの數圍枯朽したるありかたはらに小枝あり「朽てたに梅もたかまの花の色に八雲を聲に殘す鶯　大和國は田村に記す

ゑき年の春の比　古來は或年の春の比とうたひける歟或の字を式の字に見あやまりて今式年とうたふと見えたり

初陽毎朝來不相還本栖となく文字に寫して是をみれは卅一文字の詠歌の言葉なりけり初陽のあした毎には來れともあはてそかへるもとの栖に　古今秘書云孝謙天皇の御宇大和國高滿寺に僧あり彼弟子に少兒の有しが或時死す歎く事尤深しゑかりといへ共月日を送りて愁をわすれけりかくて次の年鶯來りて鳴其聲をきけは初陽毎朝來不相還本栖となく是を文字に寫し見れは歌也初陽の朝毎には來れともあはでぞ還る本の栖に已上　古今了譽抄云近江國或山寺に少童あり幾くならずして死す師匠の僧かなしひ歎く事限りなし或年の春の朝彼兒の住ける後の軒に至りて思ひ出て歎き居たる所に鶯來て窓の梅にたはふれ鳴聲よの常ならす師匠あやしみ聞て書て見れは初陽毎朝來不相還本栖云々

有磯海の濱の眞砂の數々に　有磯海は在二越中國射水郡一又海の總名なり古今序「我戀は讀ともつきし有磯海の濱の眞砂はよみつくすとも

和國の風俗　風俗とは國ぶり也其國のならはしを云也　説文曰上行下効謂二之風一衆行安定謂二之俗一矣孔子家語曰遷レ風移レ俗矣　史記曰餘風振二乎殊俗一矣前漢王吉傳曰百里不レ同レ風千里不レ同レ俗矣神皇正統記云日本を漢土より倭と名付たる事は昔此國の人初て彼土に至りしに汝か國の名を如何云ぞと問ひけるを我國也と云を聞て即倭と名付たりと見ゆ云々

皷は浪の音　律書圖曰大皷黄帝臣岐伯所レ作也聞二波音一摸レ之矣○堀川院次郎百首立波に皷の聲を打そへて唐人よせぬおきの嶋守顯仲

笛は龍の吟する聲　千家詩云羌人聞二龍嗁水中一因作二其笛一以似レ之上下畧　長融長笛賦曰近世雙笛從レ羌起羌人伐レ竹未レ及レ已モチユル龍鳴二水中一不レ見レ己截レ竹吹レ之聲相似矣　銑曰羌西戎也其人伐レ竹未レ畢之間有三龍鳴二水中一不レ見二其身一羌人旋即截レ竹吹レ

之聲與レ龍相似也矣

海青樂　黄鐘調也拾芥抄云海青樂無レ舞矣　體源抄云海青樂古樂或新樂中曲承和御時行二幸神泉苑一而樂人乘レ船奏レ樂此時有レ勅云池上三匝之間一匝之後於二中島之程一作二新樂一奏レ之矣

西の海あをきか原の波間よりあらはれ出し住吉の神

此歌幷住吉明神鎭座之事高砂に注す

伊勢　諸神記之（内宮）度會郡太神宮三座天照太神一座相殿二座（左天手力男ノ神 右萬幡豐秋津姬）筑紫日向天降坐二（タマフ）神武以後九代宮中一崇神奉レ遷二大和國宇陀郡一又云十一代垂仁天皇御宇神鏡勸請今內宮倭姬命鎭座矣　諸社根元記（外宮）云度會宮四座豐受太神宮一座相殿三座（天津彥火瓊々杵尊天兒屋根命天太玉命）雄略十七年癸丑依二天照太神御神託一自二丹波與佐郡眞井原一奉レ迎二彼神一中略內宮鎭座之後經二十代及四百八十四年一鎭座也矣私云內宮相殿の神昔は兒屋根太玉なり神託有て皇孫尊に相副て外宮の相殿にましますも神名秘書及元々集に見えたり倭姬世紀に天照太神相殿神二座天兒屋根命太玉命と載するは上古のおもむきなり　內宮外宮根元記（トハ）云舊記云內者宇遲郷本名也故就二其地一因以稱二內宮一也云々外者遠也是天地開闢始神座故因二遠儀一號二外宮一矣神名秘書云村上天皇御宇祭主公節之時皇太神者與座故號二內宮一度相宮者外座故申二外宮一始レ自二此時一也矣

石清水は弓八幡に注す加茂は加茂に注す春日は春日龍神に記す

鹿島　常陸國鹿島郡鹿島神社者一宮記曰武甕槌神也矣神代卷曰伊弉諾尊斬二軻遇突智一劒鐔垂血激越爲レ神號曰二甕速日神一次熯速日神其甕速日神是武甕槌神之祖也亦曰甕速日命次熯速日命次武甕槌尊矣或抄云筑波山は昔欽明の御代迄は深山にて陰深かりき金毛の鹿王生剎にはがれて此山を恨て伏見の郷に迯去諸の鹿隨二鹿王一同く伏見に去于レ時山の火四面に起て諸木燒失て空き山となる鹿王伏見の澤中の小島に臥て死す伏見を改て名二鹿島郡一是則槌甕槌命の來去を示也云々

三島　延喜神祇式曰伊豆國賀茂郡三島社矣　一宮記云大山祇命也諸社根元記云伊豆三島神社伊古奈比咩神社物忌奈命神社矣　改曆雜事云崇峻帝御宇庚

戍歳出現矣社領五百三十石

諏訪　延喜式云信濃國諏訪郡南方刀美神社二坐健御號方富命彦神別神矣舊事記曰天孫降臨時大己貴神第二之子健御名刀命欲レ拒二天孫一於レ是經津主神遣下二岐神一遂之健南方命逃到二信濃國諏訪郡一追甚而請曰願得二此郡一而作二吾居一則吾豈奉レ背二天孫一哉因レ茲經津主神以二諏訪郡一附レ之是即諏訪明神也全文略

熱田　熱田の宮南向也鳥井三方にあり北にはなし南より西へ海あり熱田の潟といへり　延喜式云尾張國愛智郡熱田神社名神大　根元記云熱田大神者日本武尊留二其形影一天叢雲劍爲二神體一三種之寶物一種之實体也矣神名帳頭註曰人皇十二代景行帝十四男小碓尊後名二日本武一此神垂跡也大宮日本武東素盞烏南宮簀媛西伊弉並北倉稲魂中央天照太神矣　尾張國風土紀云熱田社者昔日本武命巡二歴東國一還時娶二尾張連等遠祖宮簀媛命一宿二於其家一夜頃向レ廁以二隨レ身劍一掛二於桑木一遺レ之入レ殿乃驚更往取レ之劍有レ光如レ神不レ把二得之一即謂二宮簀媛一云此劍神氣宜レ奉レ齋之爲二吾形影一因立二社熱田郷一爲レ名矣

安藝の嚴嶋の明神は娑竭羅龍王の第三の姫宮にて

神社式云安藝國佐伯郡伊都伎嶋神社號二嚴嶋一田心姫神湍津姫神市杵嶋姫神已上三座矣　神代卷云天照太神以二素盞嗚尊八坂瓊之曲玉一化生神號二市杵嶋姫命一是居二遠瀛一者也矣　一宮記云天照太神與二素盞嗚一誓生三女内市杵嶋姫也矣神社考云此神者天照太神之孫沙竭羅龍王之娘也矣根元記云或説曰推古天皇三十二年癸丑十二月十三日甲申顯座須船中仁女房三人御出現洣米進須陪志其數五十三進須佐伯鞍職御供仁天七島乎廻留中仁此恩鴛嶋古曾住倍計禮止天和伎乃浦笠乃濱乎御覽志天御殿造阿利一大宮のよるへはいくつ左八つ右は九つ中は十六　内舎人佐伯鞍職播磨國住人流當嶋仁在之時乃事也已上　長門本平家物語云嚴嶋明神と申はしやかつら龍王の第三の姫宮胎藏界の垂跡女體にてこそいます云々　又云此所々を御覽ずるに中にもこもりの浦みかさの濱と云所を御覽してあらいつくしと仰られたりしを以て嚴嶋と號す云々　市杵島記云嚴嶋安藝國佐伯郡の海中にあり元おんがの嶋といひ宮地をみかさの濱と云嚴嶋と云は市杵嶋姫命を祀故に號せり宮嶋といふは此神の宮地の嶋なる故也又我嶋と

もいへり云々安藝國國造本紀云阿波國造志賀高穴穂朝天湯津彦命五世孫飽速玉命定ニ賜國造一矣　大和本記云神功皇后難波の浦より播磨國を過牛窓の津に着給ふ時其所の長參りて先貢御を備へ奉る中略貢御を備へ奉る事あまりしげかりし故にもはや貢御に飽たりと仰ありし所を安藝國と號す是は假名書也云々　娑竭羅龍王は八大龍王の一也明神と稱するは總て唯一の神を大明神と云也たとへは加茂稻荷松尾等のことし又權現と稱するは兩部の神を云熊野日吉白山等是也　兼邦百首抄云大明神と申心は明の字は日月也日月をいたゞき申さるゝ神と云心也云々

八大龍王は八りんの曲を奏し　八大龍王は春日龍神に注す八りんは八音也金石絲竹匏土革木是を八音と名つく所レ謂金は鐘石は磬絲は絃竹は管匏は笙土は壎革は皷木は柷敔見ニ五行通義一　柷敔は釋名曰所ヨ以止レ樂ニ矣韓退之送ニ孟東野一序曰金石絲竹匏土革木八者物之善鳴者也矣周禮夏官曰大司樂以ニ六律六同五聲八音六舞一大合樂以致ニ鬼神一矣

小忌衣は　高砂に注す

手風神風に吹もとされて唐船はこゝより漢土に歸りけり　風の手と歌によめは手風とは云也神風は野の宮に注す　舊記云大元蒙古欲レ討ニ日本一以ニ高麗一爲ニ嚮導一催ニ大軍一後宇多帝弘安四年五月二十一日既來ニ于筑紫一國諸社祈願懇切也北條時宗在ニ鎌倉一命ニ築紫武士一防ヨ戰之ニ于レ時八月朔日神風大而破ニ賊船一皆溺死同七日筑紫官兵攻ニ殺其殘兵于八角嶋一數萬兵還者僅三人文略此等の義を爰にふくませたり

呉服

人皇十六代應神天皇三十七年春二月戊午朔呉國の縫工女を求させ給ひなんとて阿知使主都加使主と云者を呉國へつかはしめ給ふ則高麗の國に至りしが呉の通路をしらす高麗の國王にかくと奏しけれは久禮波久禮志の二人の道しるべをそへられしより呉にそ至りつきけるさて呉の王に奏しけれは工女に兄媛弟媛呉織穴織の四人の婦女をぞ給ひける

ゑかありてのち應神天皇四十一年二月に阿知使主等呉より筑紫に着岸す于レ時胸形大神工女を乞給ひしかは兄媛をぞ奉りけるそれより三人の婦女を卒て津國武庫に及ぶ然るに天皇崩御なりければ皇子大鷦鷯尊に彼三人の工女を奉りき日本におゐて絹をる事是よりぞはじまりける日本紀及ビ國史取意　又云雄略天皇十四年正月身狹(ムサノスクリアヲラ)村主靑等に勅有て呉國に渡て漢織(アヤハトリクレハトリ)呉織并に衣縫兄媛弟媛を求め奉る住吉の津にとゞまると云々日本紀文略　○夜をこめて春はきにけり朝日山くれはくれしのゑるへなければは日本紀

○あひみんと頼むれは社くれはとりあやしやいかゝ立歸るへき金葉

道のみちたる時とてや國々ゆたか成らん　道のみちたるとは君の政四海におよほし御めくみのひろき事を云也　古今假字序云おほんうつくしみの波やしまの外まて流れ云々　○野も山も道のみちたる君か世に旅行人のさそな嬉しき拾玉

抑是は當今に仕へ奉る臣下なり　此當今は何れの帝を指て云そ可レ尋　抑の字は高砂に住す臣下は奏上に記す

攝州住吉は高砂に注す西の宮は雲林院に注す

朝香潟玉藻刈は高砂に注すあま人は海士に注す

呉服の里に着にけり　攝州豐島郡池田村に呉織穴織の神社有呉織社は池田村の西南田圃の中にあり穴織の社は同民家の北の山上にあり兩社の間十町程隔たり毎年九月十七日綾服祭なり明十八日呉服祭也呉服の里は當所を指て云也但し謡のおもてにては住吉の邊と聞ゆ可レ尋　杜丹花家集云攝州呉織の里にかくれて室を夢庵と號して「笹の葉の音をたよりの霜夜かな

呉服とりあやの衣のうら里に　衣の浦は尾州の名所なれ共爰は只浦里と計つゝけたる諷詞にて衣の裏にもいひかけたり

身は唐土の名にしおふ女工の昔を思ひ出る　女工とは女のたくみにきぬを織也　干令昇晉紀總論曰未三嘗知二女工絲枲之業一矣　唐土は老松に注す　名にしおふは江口に注す

月の入さや西の海　入さは名所にあらず月の入方也さは助字也入佐山は紀州及但馬の名所也

波路はるかにこしかたの　こし方と云は年月の過さりし事を云也きしかたは旅也〔續拾〕つもり行月日の程を思ふにもこしかたおしき年の暮哉〇立歸りまつもかひあれ住吉のきしかたしたふ跡の白波秀經〔新千〕

おくりむかへしはた物の　おくりむかへしは緒を繰といひかけたり機の字をはたものと訓ず〇から衣立田の山の紅葉ははははた物もなき錦なりけり貫之〔後撰〕

やまとにも織からきぬのいとなみを　やまとゝいひて唐きぬとつゝけいとなみに糸をいひかけたりからきぬは褅子と書て別にからきぬと云物あり但し爰は其儀にあらす只からきぬ唐ごろもなと云に同し又見るから聞からなどいへるからの心もあり敷島の道言の葉草は高砂あらはし衣は右近心をくたく紫は朝貌やことなきは賀茂潮も曇るは融に注す

是は應神天皇の御宇にめてたき御衣を織そめし　准南子云黄帝臣伯余初作レ衣矣　原始云黄帝妃西陵氏始教下レ民養レ蠶以織ニ帛矣　國語注云織ニ設經緯一以レ機成ニ繒布一也矣　日本にては應神天皇の御宇始て絹を織事上に記す又神代卷に天照太神天上にして齊服殿に入せ給ひて神衣を織給ふと有　應神帝は弓八幡に注すめてたきは高砂に記す

吳服とりあやはとりと申し二人の者　此謠には二人と作る也日本紀に應神帝の御宇兄媛弟媛吳織穴織四人來朝すと有其後雄略の御時も四人なり委しく上に記す

またあやはとりとははた物の糸を取ひくたくみゆへ綾の紋をなすゆへにあやはとりとは申なり

袖中抄云くれはとりとは綾の名也くれはとりと云あやをりの名をあやにつけたる也云々　あやはとりのとりは糸を取引の心也日本紀に穴織と有又漢織と書てあやはとりと和したり古歌にもあやはとりあなはとり多くよめりなとやは假字相通せり

くたはとりとは機物の糸引木をばくれはといへはくれはとる手によそへつゝくれはとりとは申なり

糸引木をくれはと云事未レ聞按するに總て板をくれと云也榑の字をくれと訓ず　倭名抄云功程式云有ニ檜一椙一榑一矣　此等を以てかく云歟可レ尋日本紀に吳織と書又吳服の二字をくれはとりと訓す　袖

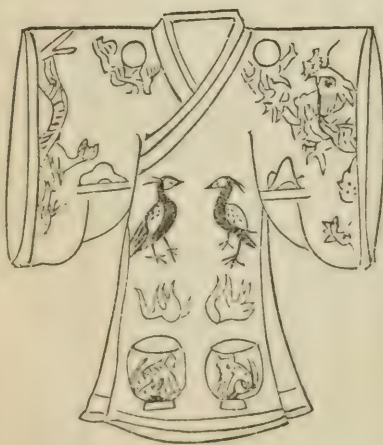
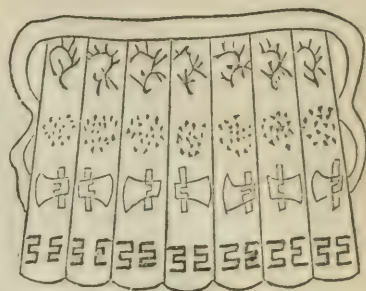
中抄云呉の字はくれとよむへきにや呉竹(クレタケ)と書てくれ竹とよめり服ははとりとよむ人の姓にもありされはくれはとりは呉服と云事にこそ云々　綺語抄奥義抄無名抄等にあやの名をくれはとり共いへり

やまと詞はしらね共　　日本の和語はゑらすと也やまと詞とは歌を云也神代の詞は皆歌也日本は一切の名を聲にていはす皆和してとなふる也依て日本を和國とは云也○敷島や大和言の葉尋ぬれは神の御代より出雲八重垣

くれはとりあやに戀しくありしかは二村山と讀し歌も　　後撰集戀三清原諸實歌なり下句二村山もこえすなりにきと有　詞書云おほふやけの御使にて東へまかりける程に初めてあひえれる女にいひ契りて出たちにけり後に改め定められて召かへされて京へまふてきにけるを此女恨ひなから問につかはしたりけれは道にて人の心さして侍りけるくれはとりといふ綾をふたむらつゝみてつかはすとてよめると云々　此詞書によりて諸抄にくれはとりとは綾の名也と評義せり　袖中抄云端はむらとよむ疋をもむらとよめりふたむらのあやをえたれはふたむら山にそふる也云々私云二村山は參川國にあり袖中抄には尾張國と有可レ尋

夫綾と云は唐土呉郡(ゴキン)の地より織そめて　倭名抄云綾似レ綺而細者也矣　說文曰綾東齊謂二布帛之細者一曰レ綾矣增韻曰綾文帛也或謂二之綺一又謂二之文一矣　或云有熟線綾長連綾二疋綾花文綾平綾等之數品一今唯稱レ綾者似二紗綾一而地文皆二重菱也矣

盛衰記云荊岫之玉呉郡(ゴキン)之綾蜀江之錦矣　呉國には珠玉織文象犀翡翠鸚鵡孔雀華果の類多し風俗豊にして山川江湖の風景を慕て遊宴歌舞を好む呉の服は華にして甚美也四方是にあらされはうるはしといはすと云々　呉國大明一統志曰周泰伯仲雍始居之地武王封二中雍曾孫於此一爲二呉國一自二闔閭一以後並都レ焉戰國時屬レ越後屬レ楚秦置二會稽郡一治レ呉漢初因レ之尋改屬二江都一東漢順帝始分レ此爲二呉郡一三國屬レ呉晉宋齊梁皆爲二呉郡一陳置二呉州一隋開皇中改曰二蘇州一因二姑蘇山一爲レ名大業初復曰二呉州一尋改二呉郡一唐武德中復爲二蘇州一置二都督一天寶初改二呉郡一乾元初復爲二蘇州一尋分置二長州軍一大

曆中軍廢南唐陞爲ニ中吳郡ー宋興平太國中改爲ニ
平江軍ー屬ニ浙西路ー政和中改ニ平江府ー元至元中改ニ
平江路ー隸ニ江浙行省ー矣
然るに神功皇后三韓をしたかへ給ひしより　皇后
三韓をしたかへ給ふ事は日本紀に出たり略レ之
帝王編年記云十五代神功皇后號ニ氣長足姬尊ー開化
天皇五世孫氣長宿禰女也母曰ニ葛城高額媛也ー成務
天皇四十年庚戌誕生幼而聰明叡智貌容狀麗仲哀天
皇二年癸酉立爲ニ皇后ー年二十四、九年庚辰二月天皇
崩是歲十月征ニ伐三韓ー時年三十一辛巳歲即爲ニ攝
政ー年三十二攝政六十九年己丑夏四月辛酉朔丁丑
崩ニ於雅櫻宮ー時年一百歲今廣田大明神此皇后也矣
三韓は一馬韓五十四國二辰韓十二國在ニ馬韓東ー三
辨韓十二國在ニ辰韓內ー相ニ接倭國ー三韓凡七十八國
地方各々四千里也東西限ニ大海ー後漢書東夷傳千首　又高麗新
羅百濟をも三韓と云此內也○たのもしな三の國迄
なひきしも四の社のちからならすや耕雲
さすかは安達原に注すひとの國は盛久に注す
東南雲おさまりて西北に風靜なり　雲西北より東
南に行は偏に泰平の世を云也　周易曰雲行雨施天
下平也矣
吳國の勅使此國に　勅は揩韻云天子制書曰レ勅往
初夏殷周の三代より上は王言を典謨訓誥誓命の
六等の名あり東て書と云漢の時に勅の名有て帝王
の命令を始て勅と云唐の高宗皇帝顯慶年中より鳳
閣鸞臺は經ざれは勅と云事を待ず勅の名是より定
る事物紀原
連日　日を重ぬる心なり
袞龍の御衣の紋　袞龍とは天子の御衣の名也詩經

大全曰袞衣繪二龍山華蟲火宗彜五章一天子之龍一升一降上公但有二降龍一龍首卷然故謂二之袞一云々繡裳五色備謂二之繡一前三幅後四幅繡 以二藻 粉米黼黻四章一矣　事物紀源云黄帝作レ畫象二日月星辰於衣上一以似レ天至レ舜始備二十二章一也矣

今案　衣裳九章 一龍二山三華蟲雉也 四火五宗彜虎蜼 皆績二於衣一六藻七粉米八黼九黻皆繡二於裳一天子之龍一升一降上公但有二降龍一以二龍首卷然一故謂二之袞一加二日月星一爲二十二章一云々粉米本作二黼黻一繡文如二聚米一黼繡二斧形一以二絳帛一爲レ質白黑爲レ文黻狀如レ亞黑與レ青相次文矣

山鳩色をうつしつゝ　山鳩色は天子の御服也名二黄櫨染一麹塵の袍也紋は桐竹鳳凰也山鳩の毛色に似たるを以て山鳩色と稱す下は黄にして上は青色也かりやすと紫とにあくをさすといへり衣色の秘書に見えたり

雲鳥のはふさをたゝむ綾となす　鳥の羽ふさとつゝけたり綾の紋に雲鳥を織付たるを云也　袖中抄云雲鳥のあやとはくもつるの文の綾也ととつとるとりと同音也百詠注云有レ鶴綾也云々　大和物語云くもとりの文をやそむべきと云々　○詞花雲鳥のあやの色をもおもほえす人をあひ見て年のへぬれは

絶せぬ御調　難波に注す

あやの錦のから衣かへす〳〵も君か袖　○行幸唐衣又から衣〳〵かへす〳〵もからころもなる　末摘君から衣と云こと葉を常にこのみてよみ給ふゆへに源氏君此歌をよみ給ふ也　錦以二五色絲一織二成文章一者也　說文曰錦金也其用功重價如レ金故制レ字從二帛與一レ金也錦織文也出二於蜀一爲レ上矣　或云

蜀江錦厚而美也其綱多雲龍也或皆織成金文者名金襴也織彩絲交金者名金入矣

有明は高砂に注す庭鳥は卒都婆小町に注す

錦の色は小車のうしみつの時過あかつきの　小車の錦共小車のうし共つゝくる也證歌略之袖中抄云小車の錦とは小車をちかへてまろにて文におれる錦也伊勢大神宮の御衣には此錦を用るといへり云々　菓子抄云小車の錦は御代に一度伊勢の御帳に参る錦也紺地也云々　うしみつ　時は舟橋に注す

風もうそふくとらの時　孝經序曰雲集而龍興虎嘯而風起矣　聖主得賢臣頌曰世必有聖知之君而後有賢明之臣故虎嘯而風冽龍興而致雲矣　管輅別傳曰龍者陽精以潜于陰幽靈上通和氣感神二物相扶故能興雲虎者陰精而居于陽依木長嘯動巽林二數相感故能運風矣　說文曰嘯吹聲也矣　朱子傳曰嘯蹙口出聲以舒憤懣之氣矣　詩曰其歗也歌矣○夕暮は戀そ衣身をとほりぬる虎のうそふく風ならねとも

君か代は天の羽衣まれにきてなつともつきぬ岩ほならなん　此詞羽衣に注す

千世にやちよを　君か代は千世にやちよにの歌をふくませたり此歌老松に注す

松の葉の散失すして色は猶正木のかつら高砂に注す

錦を織機の中に相思の字を顯し衣うつ礎の上に怨別の聲　和漢朗詠集云公乘億長安十五夜賦曰織錦機中已辨相思之字擣衣砧上俄添怨別之聲矣　上句相思之字とは竇滔と云人遠國に行て年月經て歸り來らさりけれは其妻の蘇若蘭と云女限なくおもふ心を廻文の詩に作て錦の文に織付て其夫に遣しけり其錦字詩の事を相思の字とは云也意は彼錦の廻文のまきれやすきも月の光明にして相思の字を辨つへしと云也下の句は蘇武胡國に行て久しく歸らさりしに其妻秋毎に衣を擣て歸り來らはきせんと待けり言は月の隈なく照す夜はひとしほ夫を戀て物を思ふて衣をうてば砧の音も別れを怨る聲をそふると云也俄の字に心をつくへしいつも打たる砧なれとも今夜の月の明かさに俄に物思ふ心のそひたるとなり

ふみ木の足音　宵胤記〇はた物のふみ木も橋と天川渡す
程なき秋もみしか夜
きりはたりちやう　機織音のかくきこゆるとなり
或云昔唐土より糸をもて九穴の玉をつなくへしと
さなくは此國をとらんといふ是をわつらはしく思
ふ折節嫁の機をる音のぎようちやくしきらけつだ
うと聞えけれは親是を聞て文字になしみるに蟻腰
著レ糸九穴導とよめる扨こそ彼玉に糸を通して唐
土に渡しけるとなん云々
織女のたまくあへる　七夕をいひかけたり朝顔
に注す
夢の精靈妙幢菩薩も　金光明最勝王經第五蓮華喩
讃品曰爾時佛告二菩薩樹神一善女天汝今應レ知妙幢
夜夢見下妙金鼓出二大音聲一讃佛功德幷懺悔法上矣
今考に新譯義淨三藏の譯に妙幢菩薩と有舊譯の金
光明には信相菩薩と有古今秦雅抄云戀しき人を夢
に見んと思へは双六盤を枕にして衣をかへしきて
夢の妙童ほさつを念すれば必夢に見ゆといへりト
云々

蟻通

蟻通明神者泉州日根郡諸吉村の東長瀧村大道の東
北の側林の内に社あり所レ祭一座也　清少納言
枕草子云何れの世にてか有けんもろこしより此
國をとらんとて先心みける時に七曲にまがりた
る玉の中はとおりて左右に穴あきたるがちいさ
きを奉りて是に綱とおして給はらんと申たるにそ
こヽらの人更に思ひよらさるに中將なりける人蟻
をとらへて二ッはかり腰にほそき糸を付てあなた
の穴に蜜をぬりて蟻を入たるに蜜の香をかきてい
とよくはひてあなたの口に出にけり扨その糸のつ
らぬかれたるを遣したれは日本の國はかしこかり
けりとてかたふけん事を思ひとまりけりその中將
はかんたちめ大臣になさせ給ひて後には神となり
けるその神のもとにまふてたりける人にあらは
れて宣る歌「七曲にまかれる玉の緒をぬきてあり
とをしとは我をしらすや奥義抄云此歌は和泉國に
います蟻通明神にまうてたりける人によるになり
てかの明神のあらはれてよみ給へりけるとなんま

うす此神の本躰は昔の帝四十より老ぬる人をは遠き國へ追遣しあるは殺なとうしなはれけるに老たる親もちたりける人の考の心深くして家の內を深くほりてそこに屋を立て此親を隱し置て日每にいたはりておかみつゝ過る間にならびの國の帝此國を打とらんとする心ありてはかりことを窺んとて白き木の上下同じさまにけつれるを本末玄るしつけてたべとて遣されけり帝人を集て問れけれと更に玄る人なし此男士のそこの親のもとに至りて此事をかたるに云やうその本を早き河にうかへんにすへは玄もになりなんとをしふその由を奏しけれはその儘にして玄るしつかはせるにさりけれは又た同じさまなるくちなわをふたつおくりて是にめおとこしるすへき由をいひけれはさきのことく此男おやにとふにくちなわふたつをならべてその尾の方にずはへをさしあてばめくちなわは尾をはたらかしてんといへはその由申に玄かあり又七わたの玉のわかれる穴に緒をぬきてといひおくれり是を又とふに蟻の腰に糸をつけて玉のかた穴に蜜をぬりてぬらぬ方より蟻をいれよといふその儘に玄たるに蟻蜜のかをかぎてとほりぬれはいと玄たかひてとをされぬかくてかへしをくれるに彼國の帝おそれをちて此國をえうちとらす成にけり帝此事をあやしみて尋ね給ふに玄か〱と申けれは是より老たるものを捨る事とゝまりて人皆悅びをなしけり此親といふはかの明神也さてかくよみ給へる也「なゝわたにわかれる玉の緒をぬきてありとほしとは玄らずやあるらん　貫之家集云紀伊國より上洛の道にて俄に馬の煩て死ぬへきあつかひをするに道行人見て云此所にいます神の所爲ならん年頃社もなくて知れる人も侍らすいとうくしておはします神也と申ければさて御幣もなければたゞ手をあらひひさまつきて山に向て抑何神と申ととへは蟻通の神となん申と云也依て歌をたてまつる「かき曇りあやめも玄らぬ大空にありとほしをは思ふへきかは

和歌の心を道として玉津島に參らん　玉津島明神は和歌の守護神なるが故に其心をもてつゝけたり玉津島社は在二紀州和歌浦民家東一所レ祭衣通姫也

小社也東にむかへり拜殿の歌仙の歌は逍遙院實隆公の筆也といへり古今榮雅抄云光孝天皇御惱ありしに御祈禱ある曙に赤き袴きたる女房御枕に立て「立歸り又も此世に跡たれん名もおもしろき和歌の浦波　と帝の御夢に見えければ夢中に誰人ぞと問せ給ふに衣通姬と答へ給ふによりて仁和三年九月十三日右大辨源隆行勅使として若浦玉津島の社を造立して信遍上人を以て勸請して崇め奉る本地聖觀音にておはしますと云々　續日本紀云神龜元年十月幸ニ紀伊國ニ詔曰登レ山望レ海此間最好不レ勞ニ遠行ニ足ニ以遊覽ニ故改ニ弱濱名ニ曰ニ明光浦ニ宜置ニ戸守ニ勿レ令ニ荒穢ニ春秋二時遣ニ官人ニ奠ニ祭玉津島之神明光浦之靈ニ矣

是は紀貫之にて候　崇神天皇二十五世孫土佐守木工權頭右京內膳從五位上御書所預紀貫之紀文幹子也元慶八年誕生朱雀天皇天慶九年丙午冬卒行年六十三歲矣　紀氏系圖云紀貫之孝元天皇御末武內宿禰十七代苗裔父紀望行矣　古今堯惠抄云貫之は泊瀨の觀音の御現に依て紀文幹のまうけたる子也やかて觀音の夢想に內敎房と名付よと有しに依て貫之童の時泊瀨にて名とせり云々　增運古今序注云紀文幹長谷寺に參て經を給はると夢に見て貫之をまうく三十四にて勅を承て七十九にて卒す云々　雨夜物語云元慶八年に貫之泊瀨にて誕生せりおさな名を內敎坊阿古屎とよぶ元服して紀貫定と名のる或時內へめされけるに御前にて頭をかたふくるとて冠をおとしけり左右の大臣見給ひて當座をつかうまつらずは勅許有へからずと仰られければ貫定冠をし直してかく讀侍ける「けふよりは紀の貫之とめさるへし紀の貫定が冠おとせり　と申されける是より貫定を改て貫之とはつきけるとなん云々

未住吉玉津島に參らす候程に　住吉は是も和歌の守護神也高砂に注す一云住吉四所の內玉津島を勸請す云々

唯今思ひ立紀の路の旅にと志候　舊事本紀云紀伊國造橿原朝御世神皇產靈命五世孫天道根命定ニ賜國造ニ矣　大和本記云紀伊國本來國（キノクニ）と書孝靈天皇御代に熊野權現來國鹽崎と云所に遷り給ふ其時

老翁老女二人の者を引連て入せ給ひき時に土民問云汝等はいづくの人ぞ老翁答云我は奇異の人に誘引せられて是迄來ると云其より此所を紀伊國と號す彼老翁は紀殷藏の先祖也熊野權現の御後見也云々

夜の關戸のあけくれに　　關戸村は紀州海部郡吹上の濱のつゝき也　私云明くれのくの字清はよろしからす清時は明暮の義也濁る時は曉の義也夜明んとする時しばらくくらくなるをあけくれと云也委く夕顔に注す夜の關戸とつゝけたるも明方の義也依て明ぐれ濁りて然るへし

燈暗くして數行虞氏か涙の雨　　朗詠集橘相公詩燈暗數行虞氏涙夜深四面楚歌聲　日暮雨降前後をわきまへずと云謡詞にて此詩を取出したり

足をもひかず騅ゆかずぐい如何すべき便もなし　ぐ如何すへきと云筈をぐい如何といふはよろしからすぐとは虞氏を云也いの字を一字そへたる事いふかし但うたひにくきゆへに云歟　史記曰楚項羽與二漢高祖一滅レ秦至レ是高祖追レ羽至二垓下一兵少食盡羽敗入レ城夜聞二漢軍四面皆楚歌一羽大驚曰漢皆已得レ楚乎遂悲傷而起二飲帳中一命二其妻虞氏一起舞而爲レ歌曰力拔レ山兮氣蓋レ世時不レ利兮騅不レ逝騅不レ逝兮可二奈何一虞兮虞兮奈レ若何矣　心言は項羽と高祖合戰事七十餘度遂に項羽戰負て垓下にいたり城に籠時に四面を取まはす所の軍兵共皆楚國の歌をうたふを聞て扨は楚の軍兵皆漢へ降參したりと思ひ最早運命是迄とさとり酒宴をまふけ虞氏と云寵愛の后に舞しめ自歌作りて曰力拔レ山我力は山をも崩し天下を一飲にせんと思ひしに以ての外高祖に責つけられて死なんとす是天運の傾く所故に千里をとぶ騅と云馬も足をなやまし不レ逝虞兮云々と后を携へて汝をいかんせんとて遂に指殺し烏江の亭の長に馬を賜て項羽自頸をはねて死せりと云々　騅毛詩注云蒼白雜毛馬也漢語抄云騅馬鼠毛也矣　爾雅注曰菼騅(エンスイ)青白如二菼色一也矣　俗に葦(アシ)毛馬是也

瀟湘の夜雨　　これ瀟湘の八景の一也瀟湘云二楚國在中二水一瀟水道州九疑山中流湘水流二出桂林海陽山中一經二靈渠一至二零陵一二水合流是云二瀟湘一大明一統志　瀟湘夜雨とは昔虞舜二妃娥皇女英悲二舜別一

放二此浦身一給ふより事起る名也　瑞溪詩湘江夜雨不レ勝レ情孤客舟中夢易レ驚誰把二二妃千斛涙一蓬底灑作斷腸聲矣〕竹の葉の色染かへし泪をも夜深き雨の枕にそしる普通院

遠寺の鐘の聲　これも瀟湘の八景の内遠寺の晩鐘をいへり　南宋僧玉磵詩雲遮不レ見楚王宮殷々鐘聲訴二晩風一此去上方猶遠近爲言只在二此山中一矣梵王宮と云も上方と云も皆寺の名也詩の意は雲さへきつて寺は見へず遠きと思へは晩風に鐘の音近く聞ゆるは此寺やかて此山中にありと告渡るやうなるぞと也　凡此八景の詩は南宋僧玉磵の作也古抄には樂天或は東坡が詩なりといへともあやまり成へし扨八景は唐土に燕山八景關中八景桃源八景とてあり爰にいふは瀟湘八景也〇世に歸る人待かほにひゝくなり遠山寺の木かくれの鐘爲家考ふるに事林廣記及翰墨全書等には烟寺晩鐘とあり

何となく宮寺は　兩部習合を以て祭る社を宮寺と云或は祇園八幡のことし本地藥師本地阿彌陀也と立る故に社僧是を守る也是を兩部の神と云也伊勢加茂松尾等は唯一也

神さび心もすみわたるに　神さひとは花鳥云神社の久しくふりにたる事を神さぶる共云也河海抄に神閑（カミサビ）神宿（同）と書又（タ）日本紀に閑雅（サビ同）と書神さひとは閑の字相叶歟たとへはけたかく閑なる山也さひしき心也俊成卿六百番歌合判の詞にさびてこそといへり褒美の心也嘉應住吉歌合の判の詞にも左その姿詞づかひしりてさひてこそ侍れと有神祇ならぬ事にもいふへき歟已上岷江入楚

神はきねかならはしとこそ申に　長明海道記云江尻大明神にまふず中略神慮は人しらすきねかならはしにしたがひて伏拜てとをりぬ云々〕狂歌神はきねかならはしなれは先つきてたんこにしたききひつ宮哉玄旨法印

沙汰は鉢木に注すなふ〳〵は江口に注す勿體なは鵜飼に記す

しかも乘たる駒さへ伏て前後を忘じて候なり　淸輔雑集云人々大原なる所に遊び行におの〳〵馬にのりてけり俊頼朝臣俄に下馬し給ふ人々驚て是を問云此所は良暹が舊房なりいかで乘なからゆかん

や人々かんたんして皆下馬す是能因が先例歟能因は兼房の車の後にのりて行時二條東洞院にて俄に下て數町歩行す兼房驚て問レ之能因か云伊勢の御が家の跡也前栽のむすひ松今に侍るいかで乘ながら過へきやとて松の梢の見ゆる迄車にのらざると也云々　私云かやうに舊跡の前を過るにさへ下馬したるためしありまして神前佛前においてをや或抄云周防國熊平郡岩國山に荒木楚の神とて社有旅人宮前にて馬より下歩行者は笠をぬき爲レ禮若不レ知して過る者は必落馬す昔宗祇法師此山を通るに馬倒れておつ里人云此神罸ニ無禮一給ふ能々神に侘給へと云則爲レ禮末世の旅人の助共なし神驗を感して「周防なる岩國山をこゆる日はいのりよくせよ荒木楚の神

扨下馬はわたりもなかりけるか　　下馬しては渡りもなかりけるかと云詞也しての字を略していへり荒政要覽云皇太子憫然乃下馬入ニ民舍一矣諸寺の門の傍に下馬及下乘を立る事その始めいまた不レ考下馬下乘同し義也　西域記云佛在ニ靈鷲山一說ニ妙法一中路有ニ二卒都婆一一謂ニ下乘一一謂ニ退凡一矣

下乘は西域より始ると見へたり　或抄云下馬の札を二字札と云也書樣の事死活の點殊に氣遣尤也板は少に字は大きなるやうに見ゆる事其心得有下馬のならひと云は方角體用とゝむる點入點おるゝ點と云事有立所板の寸法まで各極めしるを能書とは云也云々

神の鳥居の二柱　　春日龍神に記す

馬上に折殘す江北の柳陰の糸もてつなぐ駒　　此詞本文未レ考　阮瑀樂府詩云駕出ニ北郭門一馬行不ニ肯馳一下レ車少躑躅仰折ニ楊柳枝一矣（韓七百首）○春駒のいさめる心青柳の糸もてつなく風はふくとも

あま雲の立かさなれるよはなればありとほし共思ふへきかは　　上に記す貫之歌也貫之家集に上句かき曇りあやめもしらぬ大空にと有清輔集にはかきたれてあやめもしらぬ大空にと有又云貫之此歌をよめるは貫之集及清輔集に紀伊國より上洛の時と有又大鏡幷古事談には和泉國を能上る時と有此うたひには玉津島にまいると作る也　祖庭事苑云世傳孔子危ニ於陳一穿ニ九曲珠一遇ニ桑間女子一授レ之以レ訣云密爾思レ之思レ之密爾孔子遂曉乃以レ絲繫レ蟻引レ之

以レ蜜而穿レ之矣　格物論云蟻穴居卵生有二白黑黃赤大小數種一大蟻俗呼爲二蚍蜉一小者齊人呼爲二蟻蛘一又有レ翅而飛者其卵蚳其子喙矣　蟻穴を求て行時大雨かならず降と焦易林に出す又た千丈の堤も蟻の穴よりくづると韓子に見へたり

凡歌には六義あり是六道のちまたに定おいて　六義に六道を對していへり歌の六義はあふむ小町に注す六道は安達原に記す

されば和歌のことわさは神代よりも始り今人倫にあまねし　古今假字序云此歌あめつちのひらけはしまりける時よりいできにけりしかあれ共世につたはる事は久方のあめにしては下照姫にはしまりあらかねのつちにしてはすさのをのみことよりぞおこりける云々あめつちはしまりける時よりとは二神あなにへやの詞をいへり下照姫の歌はあもなるやおとたなはたのうなかせる下略の歌をいへりそさのおの歌は八雲たつの詠也是歌の始め也　眞字序云素盞嗚尊到二出雲國一始有二三十一字之詠一矣今人倫にあまねしとは延喜の御時あまねく歌を翫ふ事を云なり

中にも貫之は御書所をうけたまはりて　貫之古今集を撰ずる事をいへり古今假字序云御書所のあつかり紀の貫之云々　拾芥抄云一本御書所式乾門內在二侍從所南一有二公卿別當一預弁書手契食書也矣內御書所在二承香殿東片庇一下略

古しへ今迄の歌の品を撰ひてよろこひをのへし君が代の　古しへ今迄と云に古今の二字をつゝけたり榮花物語月宴卷云古しへの今のふるきあたらしき歌えりとゝのへさせ給ひて云々　貫之集云延喜の御時やまと歌しらぬ人々をめしてむかし今の人の歌を奉らせ給ひしに云々古今集の事高砂に注すよろこびを延し君が代は延喜帝を指て云也

人代に及んで甚をこる風俗　古今眞字序云爰及二人代一此風大起矣　風俗の二字白樂天に記す

長歌短歌旋頭混本　何れもあふむ小町に注す

雜體ひとつにあらされは源流やうやくしける木の　眞字序云雜體非レ一源流漸繁矣　雜體とは長歌短歌旋頭混本何れも體をましへたるを云也　文選序云源流寔繁矣　榮雅抄云古今第十九雜體部の注にざつたいとよむ人あれど猶さつていとよむべき也

風體の故なり云々

花の中の鶯又秋の蟬の吟の聲いつれか和歌の數ならぬ　假名序云花になく鶯水にすむ蛙の聲をきけはいきとしいけるものいづれか歌をよまざりける云々　眞字序云夫春鶯之囀花中秋蟬之吟樹上雖無曲折各發歌謠物皆有之自然之理也矣　十口抄云鶯蟬の春秋を待事もなし自然の理也歌人の心も是に同し歌をよむと云事人にかきらすと云事也鶯蟬の聲を曲折と見るへかず歌に曲あらんとするは嫌ふ也文略

われこしまをなさゝれはなとかは神も納受の　神道百首○宍貫わか邪をなさゝれはなとかは神の守らさるへき

かゝる寄特に相坂の關の清水の影見ゆるつきけの此駒を　望月の駒をいへり兼平に注す○相坂の關の清水に影見へて今や引らん望月の駒　拾　貫之　無名抄云相坂の關の清水と云は走井と同し水そとなへて人しり侍めりしかには非す關寺より西へ二三町計行て道より北のつらに少し立あかれる所に一丈計なる石の塔有それより東へ三段計至てくほめる所は則昔の關の清水の跡也今は小家の尻に成て水もなし文略　命特の二字當麻に注す

越鳥南枝に巣をかけ胡馬北風にいばへたり　是は舊國を思ふ事をいへりかやうの鳥獸の心も更に人間にかはらすと也　平治物語云越鳥南枝に巣をかけ胡馬北風にいはへけるも生土を思ふ故そかし上下略　文選古詩曰胡馬依北風越鳥巣南枝矣　李善注云韓詩外傳曰代馬依北風飛鳥捿故巣皆不忘本之謂也矣　李周翰注曰胡馬出於北越鳥來於南依望北風巣宿南枝皆思舊國矣　韻會云謂馬鳴聲爲嘶矣　公乘億愁賦云胡馬忽嘶矣

いで〱のつとを申さんと　祝　祝言　祝詞と書也のつとはのりこと也のたまふ言也神のゝたまふ言を人につくるを云也或は秡祭文と同し

神の白木綿かけまくも　木綿は卜部家には木綿を縄にしてかくる也中臣家には楮の皮也紙にすく木也麻の通用也釋日本紀云木綿者摩剝所成也自有木綿之樹即柔摩其皮爲之矣　舊事天神本紀云以天日鷲命令作本綿矣　かけまくもは難波に注す

おなし手向といふ花の雪を散して再拜す　ゆふ花は小籬に注す雪を散してとは切幣の事をいへり田村に注す

謹上弁拜敬白神司　大倉家書云神は弁拜佛三拜也佛は三身の德まします故也神は二度禮す是本地垂跡の德まします故也云々　白居易云三寶盡二三禮一神明致二再拜一人間成二一禮一矣　江家次第云本朝之風四度拜レ神謂二之兩段再拜一矣　神司は神祇官とも書百寮訓要抄云神祇伯從四位下神祇大副從五位下に至る中略　伊勢大神宮以下の神事祭禮をつかさとる昔は高家の人々是に任ずと云々　令義解云主神一人掌二諸祭祠事一矣　私云神司と云時は事むつかしき也爰の神司は只社人と意得へし

八人の八乙女五人の神樂男　八人の八乙女は巫八人つとむる事有五人の神樂男とは八乙女と云に對して云歟　神社考云八人乙女者表二胎八葉一五人神樂男表二金剛男五智一矣　枯杭集云五人の神樂男は五智如來をかたとる也八人の八乙女は八相成道の德をあらはせり太鼓は生死の夢をさますと云々

神慮をすゝしむる事和歌よりも宜きはなし　眞字序云動二天地一感二鬼神一化二人倫一和二夫婦一莫レ宜二於和歌一矣

面しろやな神の岩戸　三輪に注す

和光同塵は結緣の始め八相成道は利物の終　龍田に注す

神の代七代すなほに人あつうして精欲わかつことなし　眞字序云神世七代時質人淳情欲無レ分矣　此時代は正直にして情欲の差別なき也　天神七代は玉井に記す

天地開けはしまりしより歌舞の道こそすなほなれ　假字序云此歌は天地ひらけ始りける時よりいできにけり云々舞は神世にうすめの命の始め給ふ神代卷に見えたり

旅たつ空に立歸る　私云旅立空にいそくなりといひたきもの也立歸るといへは玉津島に參らすして都へ歸りしやうに聞て惡し

謡曲拾葉抄巻二

賀茂

上賀茂社在下山城國愛岩郡去王都北半里許山麓諸社根元記云上社一座別雷神也矣　倭姫世記云若雷神號賀茂社矣　下鴨社在王都東北數百歩平林中　諸神記云下社號御祖社二座一座玉依日賣別雷御母一座松尾大山咋丹塗矢矣　神名帳頭注云御祖社一社大己貴子大山咋神也一社玉依日女也矣　二十二社次第云御祖社別雷神御父大山咋神也松尾日吉同體也矣　公事根源云此御祖の神をは玉依姫と申賀茂建角命の娘也云々　社家說云當社鎭座雖經年序天武天皇白鳳五年丙子從被造營增有御崇敬矣　二十二社次第云天武天皇六年二月營社壇後一條院行幸之時寄進山城國因爲當國惣社矣　長明四季物語云當社はむかしやまあとのくに高鴨にものし給ひしを天武のすへらきの六とせにあたるきさらきのころ此みやこにうつされさたむみつかきいかめしうたゝせおはしましぬ仁和のはしめの年になんもろ〳〵の國に一の宮をさため給ひし内此みつかきをも山城の國の一の宮にさためられかけまくもかしこき御事よ云々　大江匡房記云賀茂神者日本國地主神也矣　太子瑠璃記云凡帝都守護の神明いつれもおろそかならす別て賀茂明神の守護深重也云々　㊂或云山城風土紀云可茂社稱可茂者日向曾之峯天降座神賀茂建角身命也神倭石余比古之御前立座而宿座大倭葛木山之峯自彼漸遷至山代國岡田之賀茂隨山代河下座葛野河與賀茂河所會至座見廻賀茂川而言雖狹小然石川淸川在仍名曰石川瀨見小川自彼川上座定座久我國之北山基從爾時名曰賀茂也建角身命娶丹波國神野神伊可古夜日女生子名玉依日子次曰玉依日賣玉依日賣於石川瀨見小川遊予時丹塗矢自川上流下乃取挿置床邊遂孕生男子至成人時外祖父建角身命造八尋屋堅八戸扉釀八腹酒而神集々而七日七夜樂遊然與子語言汝父將思人令飮此酒即擧酒杯向天爲祭分穿屋甍而升於天乃因祖父之名號可茂別雷命矣　舊事地祇本紀云

大己貴尊兒味鉏高彦根命座ニ大倭國葛城上郡高鴨社一神云ニ捨篠社一此神有レ勢美貌勇氣又任ニ護國一任意風雨故父大神以ニ倫獨數一用讓ニ此神一遊ニ國々一成レ雷淋甘雨養レ田或時成レ雷分レ雲昇レ天謁ニ日神月神天祖天尊神一請ニ國政之任一中略時月讀尊爲ニ水任信一以ニ天高田葵一乃授以下レ之遂成レ雷分レ雲下而至ニ於山背國御城上縣一永鎮坐以ニ天眞井水一盛ニ包葵葉一將爲ニ御手洗一故名ニ分雷神一下略　當社御鎮座の御事秘奥なるに依て社家年記を秘してかたらす況神の御事をや八所の攝社末社等の御事も同し　神祇正宗云社家神秘して申旨なし故に露顯しかたしと也云々　詞林采葉云大明神の御事社家の深秘にて兩氏にも被レ申旨なき故に上古の歌也すくなき也子細を知人まれなるもの歟云々

淸き水上尋てや賀茂の宮居に參らん「抑是は播州室の明神に仕へ申神職の者也扨も都の賀茂と當社室の明神とは御一躰にて御座候得共いまだ參詣申さす候程に此度思ひたち都のかもへと急候　播州室の明神は室津に御座也山城國賀茂明神と同躰也社領三十石嚴島御幸道之記云源通親午の時かたふきし程に室の泊りにつき給ふ中略此山の上にかもをそ祀ひ奉りける中略　此社は賀茂のみくりやにこのとまりの所なりしその神のふりわけ參らせて御しゑるしあらたなり社五六丈やかにてならひつくりたる鼓うちてひまなく神なき共あつまりてあそひあひたり是は御道のほと雨風の煩ひなとの御いのり申とそ聞ゆる雲わけんの御ちかひも思ひかけぬからのほとりにたのもしくそ覺ゆる云々ト　或云皇孫此國へ來臨の時大己貴命此國を去給はん事を嫡子事代主神に尋給へは事代主は其頃出雲國三穗崎に釣を垂てましませしが尤と領掌ありて則其所を去海中に造ニ八重蒼柴籬一蹈ニ船枻一避給ふと神代卷に見えたり八重蒼柴籬とは家の義也家を室と云則雲州より播洲へうつります其所を室と申て海邊に社頭有室の明神是也其後欽明帝の時山城國愛宕郡へ御詫有て移せ給ふと云々　風雅集神祇部に鴨祐光此心をよめる「君か爲三國移て淸き川の流れにすめる鴨の水がき　歌の心は事代主神雲州三穗より播州室へ移て今山州に社頭をしめ給ふ事を三國うつ

りとは云也清き川とは賀茂川をいへり次第の詞に
清き水上とは室也此人室の明神の神職なれは先我
社を貴んで其水上を尋て都のかもへ參らめと也
賀茂は鴨トモ可茂トモ書賀茂山は神山日影山　御
生山別雷山トモいへり　東野州云上かもを賀茂と
書下かもを鴨と書云々　抑及播州は高砂に注す
播磨潟室のとほその末明に　室のとほそは室を家
に取なして戸ほそとはいへり〇かくて社見るへか
りけれ奥山の室のとほそにすめる月影尊圓
ゑかまのかちゝは湯谷久方は羽衣月の都は揚貴妃に
注す
御手洗や清き心にすむ水の　袖中抄云見たらし川
とは神の御前の川を云也いつれの社にも河あらは
讀へしと云々　賀茂に不レ限和州春日の御手洗川
をよみ合せたる歌有賀茂の御手洗川は自二本宮西
邊一云二一鳥居間一河海抄云見たらし川は神山より流
れ出て賀茂の社貴布禰片岡の杜の中より流れとほ
る川也云々　注進略記云加毛神日向襲峯に天降り
座て漸山背の岡田に移り給ひ石川狹見小川を見廻
らし其清き流れに御手を洗せ給ふ故に御手洗川と
號す云々〇神も見よ御手洗川に行水の心淸くも世
を祈る哉雅有新續
神ぞたゞすの道ならん　河合は七瀨の一也只淵多
田須直澄と書也或は高野川と賀茂川と此杜の南に
て落合ゆへに河合共書云々　社家說云河合玉姬也
矣　年中行事秘抄云河合社件神是御祖別雷兩神苗
裔也矣〇名にしをへは浮世の人のいつはりをたゝ
すの宮にまかせてそみる慈鎮拾玉
なかはゆく空みな月の影更て　みなつきとは　奥
義抄云六月農の事皆ゑつきたる故にみなし月と云
事をあやまれり云々　或云水無月は此月誠に著し
て水泉枯つきたる故に水なし月と云を略してみな
づきとはいへり云々
秋程もなき御祓川風も涼しき夕浪に　御祓川は只
淵川を云也六月晦日社家此川に出て五十串に立あ
さの葉なとにて祓を修する也是をなごしの祓とい
へり　或抄云六月祓は天武帝の御宇より始る也
分類玉露集云名越祓六月晦日也夏秋交代之候而夏
火秋金火與金相剋故越二夏之名一攘二相剋之災一矣〇
鴨川の水庭澄て照月を行て見んとや夏祓する　爲後撰

家抄云夏祓に月をよむ事不審なるを昔は晦日に不レ限六月中に便宜ある時祓をしける也云々　定家卿云必晦日に不レ限六月河原に出て臨レ祓又納涼及糸竹の遊あり云々　但大祓と云は六月晦日の由云事根源に見えたり

心もすめる水桶のもち顏ならぬ　　もち顏ならぬとは望と書圓滿の義なり望月の心也　倭名抄云蔣魴切韻曰桶汲ニ水於井一之器也矣○山家刈殘すみつのまこもにかくろひてかけもち貌に鳴蛙哉

千早振は田村に注すよるへの水は櫻川に注す

御手洗の聲も涼しき夏蔭や　　御手洗の聲とは川音をいふなり○拾遺開毎に賴む心そすみまさるかもの社のみたらしの聲

紀の森の梢より　　只淵の森は下鴨也○五社百首河千鳥なれもや物はうれはしき糺の杜を行かへり鳴　後成

初音ふりゆく子規猶すきかてに　　格物論曰杜鵑一名杜宇一名子規三四月間夜啼達レ旦其聲哀而吻有レ血漬ニ草木一初聞則有ニ離別之苦一惟田家候ニ其鳴一興ニ農事一或以爲啼苦則自懸ニ於樹一自呼ニ謝豹一思歸樂一其音不如歸去矣　杜甫杜鵑行曰君不レ見昔日蜀天子化爲ニ杜鵑一似ニ老烏一寄レ巢生レ子不ニ自啄一群鳥至今レ與レ哺矣　寰宇記曰蜀之先肇ニ於人皇之際一黃帝子昌意娶ニ蜀人女一生ニ帝嚳一后封ニ其支庶於蜀一始稱レ王者自名ニ蠶叢一次伯灌次魚鳧后王曰ニ杜宇一號ニ望帝一荊人鱉靈其尸隨レ水上至ニ汶山下一見ニ望帝一立爲レ相自以ニ德不レ如ニ鱉靈一禪レ位鱉靈號ニ開明一遂自亡去化爲ニ子規一蜀人听ニ其鳴一曰我帝魂也矣○草根聞あへす人にかたれは我爲の初音ふりぬる郭公哉

行やらて今一とをり村雨の　　○拾行やらて山路暮しつ時鳥今一聲のきかまほしさに

雲もかけろふ夕附日　　此かけろふは野馬陽炎のかけろふに非ず日光のかけろへるを云り夕附日は夕日也

夏なき水の河隈　　涼しき川邊に向へは暑さを忘るヽ心地するを夏なき水とは云り河隈は猥々に注す　源英明詩云池冷水無ニ三伏夏一松高風有ニ一聲秋一矣○草根山陰やうだの氷室のうたかたも夏なき水の上そ涼しき

先々是成河邊をみれは新しく壇をつき白木綿に白羽の矢をたて剩へ渴仰のけしき見えたり　　上賀茂本宮の乾の方に御生壇と云所有齋院假殿の舊跡也或

は假寢野邊共云葵祭に注連を引きたる所也今も祭の前の日假殿を此地に立る也但爰にうたふ所は下鴨也新しく壇をつきとつゝけたるは此御生壇をふくみてかくいへる歟追而尋ぬへし　白羽矢は舊記に丹塗矢と有　舊事本紀云三輪大神成二鳴鏑矢一鳴至垂レ跡矣　神社考云昔城北出雲路有二小女一浣二衣鴨河一一箭流來鴨羽加レ箸女取歸レ家挿二之擔牙一下略此謠に白羽矢とあれ共未レ見二證文一　渴仰　長水楞嚴注曰渴仰者思渴膽仰也矣　潘安仁西征賦云如レ渴心翹勤以仰止注如レ渴如レ飢者思二賢人一而仰ニ止之一矣渴仰とは咽の渇時水を飲が如くあふきて信を起すを云也委く大論に見えたり　壇ハ孝聲切韻曰壇封二土四方一而高也矣　鄭玄注禮云封レ土曰レ壇除レ地曰レ墠矣　漢書音義曰築レ土而高曰レ壇除レ地平坦曰レ場矣　白木綿は蟻通に記す

ありしさま　千壽に注す

あざ／＼敷　鮮々敷と書あざやかなる事也

昔此賀茂の里に秦の氏女と申し人　秦の氏女とは秦氏の女也玉依姫を云依て下社を秦の社と號す秦氏本系帳云初秦氏女玉依日賣出二于葛野河一洗二濯衣裳一時有二一矢一自レ上流下女子取レ之還來刺ニ置於戶上一於レ是女子無レ夫懷姙旣而生二男子一也父母恠レ之責問爰女子答云不レ知云々因レ玆辨備大饗招ニ集諸人一令二彼兒執レ盃覓父母命云父止思人仁可レ獻レ之于レ時此兒不レ指二衆人一仰觀行指二戶上之矢一即使爲二雷公一破二屋棟一升レ天而去故鴨上社號二別雷神一鴨下社號二御祖神一也戶上矢者松尾大明神是也是以秦氏奉レ祭二三所大明神一而鴨氏人爲二秦氏聟一也秦氏爲レ愛レ聟以二鴨祭一讓ニ與之一故今鴨氏爲二禰宜一奉レ祭此其緣也矣

朝な夕な此邊に出て水をくみ　古今榮雅抄朝な夕なは朝夕也（アサナユフナ）と書又朝の食物夕の食物也云々なは付字也詩何草不黃篇曰哀我征夫朝夕不レ暇矣　古往生論曰傅大士云朝々與レ佛起暮々抱レ佛睡矣〇いせの蜑朝な夕なにかつくてふ見るめに人をあくよしも哉

まとゐして　安宅に注す

此矢即鳴雷となり天にあがり神となる別雷神是なり　此矢とは丹塗矢也　神社考云神書抄云丹塗矢者大己貴之所レ化也矣　或又大己貴御子大山咋命共いへり委く上に記す此謠に此矢鳴雷となり天にあ

かりと作るはあやまり也天にあかり給ふは玉依姫の御子別雷の命也　別雷と稱する事山城風土記に因ニ祖父之名一號ニ可茂別雷命一云々祖父とは建角身命也號ニ火雷命ニ神名帳頭注に乙訓座火雷賀茂建角身命也と有依て火雷の御孫なる故に別雷と云也別の字又作レ分共同訓也舊事本紀に分雷神と書分の字を置心は風土紀に分ニ穿屋甍一而昇レ天と有舊事本紀に成レ雷分レ雲昇レ天とも有（新古今鴨神臥）「我頼む人いたつらになしはては又雲分てのほるはかりそ（夫木）「神山の高根にかゝる白雲や分し名殘の雲のかよひぢ

又倭姫世記に若雷神號ニ賀茂社一と有若雷とは祖父火雷の御孫なれは若雷と名つくわかわけ五音相通せり此等の義をもてわけ雷とはいふならん　一説云別雷とはかも山の名也　注進略記當社神詠「千早振別雷山に宮居して天くたる事神代よりさき

又山の名を雷と稱する歌萬葉集第三に「皇は神にしませは天雲のいかつちの上にのほりするかも仙覺抄云總ていかつちは山の名也云々

其母みこも神と成て賀茂三ところの神所とかつ　母みことは玉依姫也拾芥抄云下鴨御祖皇太神二前上賀茂別雷皇太神一前矣　是を賀茂三所と云也又云上賀茂中賀茂下鴨是を三所共云詞林采葉云片岡社をば中賀茂と申す鶴岡に鎮座　多田須宮をは　號ニ下鴨社一御祖神と申とかや云々

片岡亦名云ニ鶴岳一本宮樓門外川東南也　神社考云母又同時登レ天今之賀茂中祠昔爲ニ田中一時田主播レ秧其苗俄變成ニ槻樹一母氏降ニ樹下一爲レ神今賀茂中宮是也

いさしらま弓やたけの人の　萬葉に白檀弓と書昔は弓を檀の木にて作る也やたけの人とはたけき人也

弓筆に殘す心なり　弓筆とは文武のふたつを云也

（雪玉）〇弓筆の道の外にも思ふ事手にとる春を宿にしるらん

賀茂の河瀬もかはる名の　社家云鴨有ニ七瀬川名一賀茂川宮川羽川石川瀬見小川月輪川御手洗川大井川云々

下は白川上はかも河　白川の水上は北白川南禪寺の奥より出て末は大和橋へ流れ三條と四條との間にて鴨川に落合なり墨田川に注す

諸の心は下はゑら川とゑの字をいひかけかみはか

も川とかの字をいひかけたり
石川や瀬見の小川の清ければ月も流れを尋てぞすむ
新古今集神祇部に鴨長明歌也詞書云鴨の歌合とて人々よみ侍けるに云々歌の心は月も一入清き流れを尋てすむと也　無明抄云瀬見の小川はかも川の異名也當社の縁起にあり此石川瀬見の小川長明始てよみてのち隆信朝臣顕昭なともよめり
年の矢の早くも過る光陰　年の矢とは月日の暮行事矢を射ることくとゞこほりなきを云也融に注す
歸らぬは本の水　長明方丈記云行川の流れは絶ましくしかも本の水にあらすと云々養老に注す
かもの川瀬の水上はいかなる所なるらん　鴨川は社の東の方に流るゝ也水上は車坂の麓より出る也
白玉の音ある水や貴船川　歌に貴船川とよむには白玉或は玉ちるなとよめり貴布禰は鉄輪に注す
〇(續千)貴船川うき年波のかゝれとはいのらぬものを袖の白玉　法皇御製
水もなく見えし大井川それは紅葉の雨とふる　賀茂川の水上を尋ぬる次手に是より大井川戸無瀬清瀧音羽の瀧まて取ませてつゝけたり後拾遺集秋下

中納言定頼大井河にてよみ侍ける「水もなく見え社わたれ大井河峯の紅葉は雨とふれ共　歌の心は紅葉の多く流れしさま也常は雨ふれは水あれと是は紅葉の餘りに降落て水もなきまてに見ゆると也
大井川は白萬に注す
嵐のそこの戸難瀬なる　嵐山戸難瀬は西行櫻に記
清瀧川の水くまは高根のみ雪とけぬへき　新古今集春上西行法師「降つみし高根の深雪とけにけり清瀧川の水の白波　東野州云清瀧は愛宕高雄の麓也清瀧と取出して結句に白波といへる賢作也其故は春來て雪消る時分はいかなる清水も濁る物也清瀧川の濁て流るゝを見て扨は高根の雪もとけゆくよとさとりしれる心也云々　清瀧川は丹波より出て栂尾高雄の前を流れてすへは大井川に入る也
くまぬ音羽の瀧波はうけてかしらの雪とのみ　音羽の瀧は山城に三所有一には清水の瀧一には相坂の南音羽山にあり一には比叡山の麓に有爰にうたふは比叡山の音羽の瀧也　類字名寄云在二西坂本松室所一云々　古今秘抄云白川音羽瀧は雲母坂の上水呑峠の地藏堂のわきより流るゝ瀧也云々　く

まぬ音羽とつゝけたるは人のもてはやさぬ心にてくり（古）落瀧津たきの水上年つもり老にけらしな黒き筋なし　是は比叡山の音羽の瀧をよめる也　長嘯叡山にまうてられけること葉に云忠峯がくろきすぢなしといひけん音羽の瀧の白糸くる人毎にとふある人のいふさる瀧はきらゝ越にこそとこたへしかはあないゑらてあらぬみちに來にけりとくちおし云々

老らく　　三井寺に注す

やごとなき神ぞかしと　　源氏桐つほの巻云いとやんことなききはにはあらぬがすくれてときめき給ふありけり云々　花鳥餘情云やんことなきとはきわめて上臈の品をいふ無止事と書云々　岷江入楚云位高くすくれたる人の事はさしおかれぬ物なれはやんことなしと云ほめたる詞也云々　伊物眞名本に貴（ヤンコトナキ）と書

神かくれに成にけり　　神代巻云伊弉諾尊構幽宮于淡路之洲寂然長隱矣　　又云大己貴命我當於百不足八十隈將隱去矣　神かくれとは是等の辭にていへり

法界無緣の衆生をたに一子とおほし見そなはす　本緣鎮座記云御本地上社無畏見下社釋迦牟尼佛矣　賀茂本地釋迦と云に付てかくいへり法華譬喩品云今此三界皆是我有其中衆生悉是吾子矣見そなはすと詞は養老に注す

感應あれは　　法花玄義云感即衆生應即佛也謂衆生能以圓機感佛佛即以妙應應之矣

みどりの袖を水にひたしてすゞみとる　　藻鹽草云みどりの袖あをき衣みどりのころも六位の裝束也云々　水の色みどりなれはみどりの袖といひかけたりすゞみとる清てうたふはよろしからすすゞみとるとは納涼の心也長明四季物語云すさましかりける扇なと給はれはおのつから夏山の陰もすゞみとるへくおぼいたり上下略　應仁記云扨又夏は涼みとる陰も岩井の眞清水にひやしむすひし大和瓜云々　澤庵和尚東關記云あつたに着夏を思ひ出して「夏とてもいかであつたの宮人は涼みとるらん月の入海　私云すゝみとるとはとるは納むるの義歟諸の心もすゞしさを袖にとり納むると云心ならん

二階堂會

○涼しさを待とる袖はきのふたに夏なきかけに秋

の初風改爲　此歌の心にてゑるへし　私云藻鹽草にすゞみとる但此詞は不レ詠也と云々依て古歌いまた見す

我は是王城を守り君臣の道別雷の神也　豐葦原ト定記云此後建角身命國々於見巡之御座須於是天鈿女命磐樟船乎槽奉利尊於神代乃浦乃浪靜奈留礒末天送利御座仍天天乃神與利賜之神寶乎以天此國乃固止成世玉波牟止天北山乃麓仁應化之百王於守利玉布經津主武雷神毋同此所仁垂跡之玉倍利上略

吉記云或古記云平安京百王不易之都也東有二嚴神一西仰二猛靈一嚴神者賀茂太神宮猛靈松尾靈社是也依二二神之鎮護一期二萬代之平安一然則永々不レ可二遷宮一矣○君を守るかもの川波代々かけてすむみつかきも猶そ久歟新續古

或は諸天善神と成て虚空に飛行し　此心舊事本紀を引て上に記す

和光同塵結緣　龍田に注す

風雨隨時のみそらの雲井　白氏文集六十一曰天地氣和風雨時若矣　日本紀仁德天皇卷云風雨順レ時五穀豐穰矣　續日本紀云天下太平風雨順レ時五穀成熟矣

光りいなつまの稻葉の露にもやとるほとたに　○秋の夜にいく度計照すらんいなはの露にやとる稻妻衆家

五穀成就も　もの字を一字入たるは惡し　三寶感應錄曰無レ愁二病苦一五穀成就矣　詞林采葉云欽明天皇御宇一天風吹雨零百姓含レ愁于レ時勅二卜部伊古若日子一卜レ之即賀茂神祟也仍撰二四月吉日一爲二祭祠一能令二禱祀一因レ之五穀成熟天下豐平也文略五穀者群書拾唾曰五穀禾麻粟麥豆矣　周禮曰以二五味五穀五藥一養二其病一鄭司農注五穀麻黍稷麥豆矣　孟子曰五穀熟而民人育矣　其外九穀百穀とて其數をあけたる事あり略レ之

神もあまぢによちりのぼり　天路と書そらのみち也○久堅のあまちは遠し猶々と家に歸りてなりをしまきに萬

竹生島

竹生島神社在二近江國淺井郡一所レ祭神一座宇賀御

魂命也矣神社考云昔行基菩薩來此島神女現形逢基基初建寺置辨才天女像云々此島辨才天者所謂南閻浮提中有湖海湖海中有水精輪山即天女所住也是曰大辨才功德天女本地法身大士而好音樂故名妙音天女垂迹于此因號竹生島大明神矣　舊事神皇本紀曰景行天皇十二年淡海湖水甚然炎端均日見嶽終日烘々不滅至初更地震二更尚不止三更涌出島炎出從島首島出火消地震又止神女坐島頭白龍廻島腹鬼形兵形充滿島中矣色葉字類抄云昔淺井姬命與氣吹雄命競勢爭力更去北邊下座海中其下海音稱云都布々々故云都布夫島即伴神凝水沫而爲盤積風塵而作島又召諸魚令運重石今云魚埼魚進集之處也名諸鳥令落殖木種今猶衆鳥來集之峯也此歷功長成林最初竹篠出生故云竹生島下略　都良香詣竹生島作詩三千世界眼前盡十二因緣心裏空和漢朗詠集　江談云古老傳云都良香此詩の上句を作て自愛して下句を思ひ煩ひけるに島の主辨才天夢中に下句をかく教させ給ふと云々辨天經曰宇賀神王從座中顯現其形如天女頂上有寶冠冠中有白蛇其蛇面如老人眉白此則每諸佛出世奉逢利益衆生年久瑞相後此神王身如白蛇如白玉有八臂左第一鉾第二輪寶第三寶弓第四寶珠右第一劒第二棒第三鑰第四箭頂有如意寶珠圓光復有十五王子其形童子也或時面々持三摩耶或同執如意珠圍繞神王左右云々

竹に生る丶鶯の竹生島まふて急がん　竹に生る丶とは竹生島を云かけたり總て竹に鶯は文の對句なれば竹に生る丶鶯とは置たり家[illegible]白敷のみかきの竹に鶯の己かねくらと思ひける哉經家　雜穎百首　山賤の薗生に近く伏なれて我竹かほにいとふうくひす定家

神社考云竹生島者在江州湖中其巖石多水精寶珠本朝五奇異之其一也傳言孝靈天皇四年江州地拆湖水始湛駿州富士山忽出焉景行天皇十年湖中竹生島初涌出矣　當社は巽に向へり延喜式に都久夫須麻と書或は筑生島と書島の周六十町許山の高さ都て十間計その高さいつくも高下なし山上は皆ときは木茂り山の根は岩石めぐりつ丶き岸高し社も寺も皆高き所に一所にありて其餘は皆石崖のみにて民家は一字もなし緣起の說に寺を岩金山太神宮

寺と號す社僧の寺十坊あり皆岩間に立り宅地甚せばし社領三百石○日吉百首目にたて丶誰か見さらん竹生島浪にうつろふあけの玉垣 隆祐

抑是は延喜の聖帝に仕へ奉る臣下なり　帝王編年記云六十代醍醐天皇諱敦仁宇多天皇第一皇子母贈皇太后藤胤子内大臣高藤女也仁和元年乙酉正月一日誕生寛平元年己酉十二月廿八日乙酉親王宣下年五同五年癸丑四月二日立爲二皇太子一年九同九年丁巳七月三日受禪同十三日於二大極殿一即位御宇三十三年都二平安宮一延長八年九月廿九日崩御年四十六十月十日奉レ葬二山科山陵一矣　抑字は高砂に注す

聖帝とは稱美の詞也臣下は葵上に注す

四の宮や河原の宮居　盛久に注す

名も走井の水の月　走井は追分と大津の間大谷と云處に走井とて南の方に水のわき出る井有關寺の近所也○後拾逢坂の關とはきけと走井の水をはえこそとゝめざりけれ 堀川太政大臣

逢坂の關の宮居は蟬丸山　越近き志賀の里は三井寺に ほの浦は源氏供養 面白は二輪 彌生は田村に注す

霞わたれる朝ぼらけ　霞わたれるとは霞のたなひきたるをいふ也朝ぼらけは善界に注す

志賀の都花薗は三井寺昔ながらの山櫻は忠度に注す

眞野の入江の舟よばひ　眞野は志賀郡也眞野の入江今は田地となりぬ唐崎に近し攝州大和奥州に同名あり舟よばひとは舟をよぶ事也○新後撰眞野の浦に舟漕出る音更て入江の浪に月そさやけき 法眼源承

誓の舟に乘るべきなり　辨天經曰第十五王子名二船車童子一矣

さゝ波や志賀の浦　三井寺に注す

所は海の上國は近江の江に近き　帝王編年記云孝靈天皇五年乙亥近江水海湛始矣湖海爲虛なきまゝ水海といへり歌に鹽ならぬ海共よめり凡瀨田より貝津迄南北二十里東西の廣き所凡九里今津と佐和山の間最廣し北の濱は西は貝津中は大浦東は鹽津也北の山を隔て越前に隣也此湖の形琵琶に似たり堅田より北十七里は東西廣く琵琶の腹に似たり堅田より勢田迄四里は東西狹し一里の內外あり琵琶に鹿首あるが如く狹し勢田より宇治迄は猶せばし琵琶の海老尾に比し竹生島を覆手に比すといへり

依て琵琶湖と號す云々　竹生島緣起云湖水を云琵琶湖者竹生島の天女音樂を好給ふ故海を名ニ琵琶湖ト神を云ニ妙音天女ト已上大略近江國は田村に注す

白雪のふるか殘るか時しらぬ山は都の富士なれや

伊勢物語云ふじの山を見ればさ月晦日に雪いと白うふれり一時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪のふるらん　實澄(サネスミ)云時しらぬ山とは富士の峯也五月晦日をいつと思ひてか雪はふるぞととかめてよめり云々此歌により富士山の異名を時しらぬ山とは云也爰に都の富士と云はひえい山を云也　伊物集註云愛宕山より叡山を見れば駿河國にて富士を見るに山のすかたかはる所なし云々

管見記云永享五年十一月廿日叡山之雪誠可レ謂ニ都富士ト者也入レ夜聊風氣之間不レ離ニ爐邊ニ上下略

嵯峨之記云藤原植通雪のつもりて比叡山の朝日の影に殊に聳へて見えけるに廿餘りをとさしはからひしもさこそと覺えて一降つもり雪の比猶さそな共都の富士の嶽のあけぼの内侍所十首和歌「時しらぬ高根も今やかすむらん都のふしは雪も殘らす日野大納言

さへかへる　屋嶋に注す

比良のねおろし吹とても　比良山は堅八町と云七高山の一つ也山頭に無レ樹くまさゝのみあり熊すめり京より北國へ行道十二里也麓の海の汀に白髭明神御座也　ねをろしとはみねおろしのみの字を略してねおろしと云峯より風の吹おろすをいへり又ねくだし共云也○雪(家)殘る比良のねおろし心あれな浪路はるけき雁の翅に堯空

綠樹陰沈て魚木に登る氣色あり月海上に浮ては兎も浪を走る　自休藏主詣ニ竹生嶋ニ作詩綠樹影沈魚上レ木清波月落兎奔レ浪靈灯靈地無ニ今古ニ不レ斷神風濟度舟矣　自休藏主は建長寺の廣德菴の僧元は奥州志信の人也

忝も此嶋は九生如來の御再誕なれは殊更女人こそ參るへけれ　竹生嶋緣起云辨才天は大自財天宮にては大日須彌山の頂上に顯れ給ふ時は辨才天下界にては伊勢天照太神宮と顯れ給ふ此時は曼荼羅の八葉の中におはします四佛四菩薩中央大日是以ニ九尊ニ名ニ九生如來ニ此時は本地大日如來にてましますも又本地阿彌陀の立る時は九品の浄土を指て九生如來と申也云々　和論語云竹生嶋神記云我常に

往所は西方にありその心は常に東方にかよはしぬ
虛空のうちに身をかくし大地のうちに身をかくし
てその聲をたえにしその音をあらはす下略　今案
竹生嶋御本地阿彌陀なる事明なる歟彌陀の三十五
の願に女人往生の願をちかひ給へり依て此謠に女
人こそ參るへけれとは云也阿彌陀を九生如來と稱
する事此緣起の外未レ見追可レ尋

辨才天は女躰にて其神德もあらたなる天女と現しお
はしませは　辨天經曰宇賀神王從ニ座中一顯ニ現其
形如ニ天女一矣おはしますとは御座と書也內裏にて
御座所をおましどころと云源氏物語其外古き草紙
におまししつらはせなといへる詞ありおはします
は此等の儀にていへる歟昔はおましますといへり
はとまと音相通也　古今春上君がため春の野に出
て若菜つむとある歌の詞書に仁和の帝みこにおま
しヽける時に人に若菜たまひける御歌云々　續
千載集に井手左大臣堀江には玉しかましを大君の
と云歌の詞書に元正天皇難波宮におましヽける
時にと云々　愚見抄云おはしましけりと云詞を昔
はいまそかりけりと云也云々　伊物集注云御座と
書ていまそがり共みまそがりともよむなりと云々
古今素純抄云おましますをはおはしますとよむべ
し云々

かヽる悲願をおこして正覺年久し　辨天經曰王
蒙ニ佛許一可レ滿ニ悲願懷一矣

獅子通王の古しへより利生更におこたらす　緣起
云疇獅子王佛の出世遙以前より辨才天は十惡五逆
蠢々蚑行之類闡提輩を濟度し給ふ事過阿僧祇利益
遙越ニ諸佛之大悲一云云　蠢々とは足なき虫のむく
めく類ひ蚑行は足ある虫のありく貌闡提は大不信
の者を云也今案獅子通王佛未レ考佛名經に獅子神
通幽王佛とあり追て可レ考

御殿しきりに鳴動して　辨天經曰爾時宇賀神王及
十五童子各說ニ此咒一已大地六反震動天雨ニ七珍萬
寶一矣

日月光輝て　同經曰正生身躰居ニ日輪中一照ニ四州
闇一矣

其時虛空に音樂聞え　最勝王經曰好ニ音樂一故名ニ
妙音天女一矣

本より衆生濟度のちかひ　辨天經曰化ニ度一切衆
生一令レ入ニ佛道一令レ得ニ安穩一矣

又は下界の龍神と成て　同經曰冠中有ニ白蛇一其蛇面如ニ老人一中略復此神王身如ニ白蛇一矣

忠度

桓武天皇十一代後胤備前守刑部卿平忠盛六男正四位下薩摩守忠度は一谷の西の手の大將にておはしけるが岡部六彌太討ニ取之一行年四十一歳平家物語盛長私記文略壽永三年二月七日一ノ谷にて範頼義經の軍中において討取同十三日忠度其外平民の首共を持ニ向八條河原一曝レ之東鑑文略平家物語云一門の人々古鄕を燒立る煙おひたヽしう云のほるを見て各肝をひやして落行中にも忠度は淀の河尻迄下りけるがそれより郎等六騎相具し忍びて都に登夜半に五條三位の許に來り一門の榮花つきはて西海へ下り侍る世しつまりて勅撰の御沙汰あらんに身は八重の汐路に沈む共後世迄も朽ぬ形見と傳はり侍れかしと思ひ出し登り候年比の愚詠波の下のみくづとなさん事遺恨にとて鎧の引合より卷物一卷取出し三位へ遣し給へは泪を流して納めらるヽ件の卷物の中にさりぬへき歌いくらも有けれとも其身勅勘の人なれは名字をはあらはされず古鄕花と云題にてよまれたる歌一首ぞ讀人不レ知と入られたる盛衰記同レ之「さヽ浪やしかの都はあれにしを昔なからの山櫻かな忠度百首此歌の詞書にためなり歌合に古鄕の花をと有此歌千載集春ノ上に讀人不レ知と有　詞書云古鄕の花といへる心をよみ侍ける云々　八雲御抄云千載平家依ニ勅勘者一不レ書レ名歟矣　長門本平家物語云忍戀一いかにせん宮木が原に摘芹のねのみなけともしる人のなき　千載集にさヽ浪の歌と此歌と二首をよみ人しらすと入られたり文略今案いかにせんの歌千載集戀一に題不レ知よみ人不レ知と入たり又みかきか原につむせりのと有長門本にみや木が原とあるは書寫のあやまり成へし千載集にさヽ浪の歌一首入たると思へは此歌と二首入と云事珍し尋ぬへし

花をもうしと捨る身の月にも雲はいとはし　花を愛する心なき身は月に雲のかヽるもいとはしと云義也世捨人の心さも有へし

新千○曇なきためしと見てぞ秋の夜の月にもわきて心

とゝめし後醍醐

後成は奥に記す行脚は屋嶋に注す

城南の離宮におもむき　或云白河天皇應徳三年修ニ宮於鳥羽殿一號ニ城南離宮一矣王城の南に被レ建たる故に城南の離宮といへり後醍醐の御代迄宮殿の名殘りしが其後絶たり今上鳥羽村の南道路の東に有ニ小岡一是離宮庭中の假山號ニ秋山一者也　文選長門賦曰期ニ城南之離宮一濟注曰離宮謂ニ天子行處別署一呂向注曰離宮天子出游之宮矣

郡を隔つる山崎や　○山崎は山城乙訓郡也○大原や小鹽につゝく山崎をへたては果ぬ薄霞哉知紀

關戸の宿は名のみして　山崎の西南にあり昔此所に有ニ宮舍一號ニ關戸院一後世指ニ其舊跡一名ニ關戸宿一世傳昔此所置レ關戒ニ非常一云々又有ニ關明神社一關戸は山城攝津兩國之堺也

浮身はいつも交りの塵の浮世の芥川　塵の浮世とは色聲香味觸法の六塵或は五濁を指て云也芥川は攝州島上郡也北より南へ流れたるほそき川也延喜式に阿久刀神社と載する所也○塵の世の夢やかけても渚行水のかもめの浮ねなからに雪玉

猪名の小篠を分過て　猪名野小笹は攝州川邊郡也猪名寺村の北にあり伊丹より四町辰巳にあたる也古歌に猪名の端山猪山の柴山猪名の中山なとよめり○ゑなかとりいなのゝ小笹打なひきゑのに吹しく秋の夕風新千　猪名野は古歌にも多くゑなかとり猪無野とつゝけたりゑなかとりゐなのと云事先達の釋さま〳〵也奥義抄云雄略天皇かの野にて狩し給ひしに白きかのゑしゝをひとつ取て猪はなかりけれは白鹿を取て猪はなき野と云也云々兼邦百首抄云上古に津の國ありまの郡の内廣き野ありあたりに近き田地をあらす事有是をかなしみて百姓に大儀を催して毎日に待暮しけりされ共いのゑゝは一つもうる事を得す鹿王を狩得たり鹿王とは白き鹿の事也歌にゑなか取とは白き鹿をとりえたりといへりいなのはいのゑゝはなしといへる事也それよりして此野を猪無野と云是皆万葉の風詞口傳の内にあり可レ秘事にや云々

月も宿かる昆陽の池庭清くすみなして　昆陽を小屋に取なして月も宿かるとはつゝけたり昆陽の池は攝州川邊の郡也宿より北にあり大田の宿よりは西也鳴尾の北也或は大池其云此池中に一目の金

魚ありと有馬温泉寺記に見えたり○五月雨に小笹新後拾
か原を見渡せはゐな野につゝくこやの池水
蘆の葉分の風の音　　○夏虫の光そそよく難波潟蘆拾
の葉分に過る浦風
すつる身迄も有馬山　　有馬山は攝州有馬郡也温泉
は在二山口庄一　或云風土記云有馬郡有二鹽原山一山
間有二鹽湯一因以爲レ名矣欽明天皇三年温泉始涌出
同九月帝行幸後孝徳亦行幸日本記文略　○珍しきみゆき千
をみわの神ならはしるし有馬の出湯成へし寛賢
當山に三輪神社ある故にかくよめり
さむる枕に鐘遠き難波は跡に鳴尾潟　　難波寺の鐘
也　難波寺は天王寺を云也富士太皷に注す鳴尾は
攝州武庫郡也
こりすま蟹のよひ聲は松風に注すなれ衣は融に注す
しばなく千鳥　　しばは數の字也兼平に注す
抑此須磨の浦と申はさひしき故に其名をうる　　須
磨の浦は攝州矢田部郡也惣て須磨はさひしき體に
歌にも詞にも多くつゝくる也　或云すまの二字に
さひしき心こもれりすは俗に素肌素足なと云心歟
まは間也或は物の陰をすまと云むかしより須磨の
浦は物さひしき所なる故にすまとはいふなるへし
抑は高砂に注す
わくらはに問人あらはすまの浦に藻鹽たれつゝわふ
と答よ　　中納言行平の歌也委しく松風に注す　和
歌色葉云藻鹽草とはしほやかんとて海にたゝよひ
ゆらるゝ藻くづをかきあつめて日にほしてそれを
たるゝを藻鹽草しほたるゝとは云也云々
又此すまの山陰に一木の櫻の候是はある人のなき跡
のしるしの木也　　或人とは薩摩守忠度を指て云也
忠度塚は在二矢田部郡驛之林村西一町許一兵庫より
二十町許西也塚の上に大木の松を植たり當村に名
木の松あり稱二一葉松一○一つの國の駒か林にきてみ
れは古葉もいまたかはらさりけり平判官康頼　案するに
此謠に櫻をなき跡のしるしの木と云は花や今宵の
あるしならましといへる歌をいたさんとてかく作
ると見えたり
足引の山　　檜垣に注す
おことは此山賤にてましますかさん候是は此浦の海
士にて候　　此浦の鹽やく海士なれ共鹽木こる爲に
山にかよへば山人共云へし　岷江入楚云山兒山勝

下下人と書　能因歌枕云山里に栖をはやまがつと
いふと云々
道こそかはれ里離れの 〻 松風に注す
近き後の山里に柴といふものゝ候へは　源氏須磨
巻云煙のいとちかうとき〳〵立くるを是やあまの
鹽やくならんと覺えわたるはおはしますうしろの
山に柴といふものゝふすふるなりけり云々　玄旨注
云煙の近く立を鹽やくとおほしたれは眞柴の煙と
なり爰は山中なるゆへなりと云々
須磨の若木の櫻は　須磨寺の門前にあり　須磨巻
云植し若木の櫻ほのかに咲そめてと云々　岷江入
楚云須磨の若木の櫻也是より須磨の浦に若木の櫻
をよむと云々〇草根形見とやすまの若木の櫻花霞のう
ちの春の俤
海少したにも隔ねは　須磨巻云すまにはいとゝ心
つくしの秋風に海は少し遠けれと云々
行暮て木の下陰を宿とせは花や今宵のあるしあらま
し　忠度の歌也此歌何れの集にも入らす東見記に
此歌具足肌百首にありと云々　平家物語云六彌太
忠度の首を取名をは誰共えらさりけるがゑひらに
ゆひつけたる文取て見れは旅宿花と云題にて此歌
有忠度とかゝれたるゆへに薩摩守とはえりてけれ
と云々盛長私記長門本同之　或記云文明の比上野國平井と云所
に或寺の住持古木の櫻の盛りなるを見て「行暮て
この下陰をと云忠度朝臣の詠歌を被レ吟ける所に
年の程五十計にてさも由々しげなる仁體太刀脇挾
めるが何方より來る共なく爰に徊て被レ申けるは
唯今吟給ふ歌は世間にて申も和尚の宣ふ如く行暮
てと云ての字澄て讀侍り某か申けるはての字濁り
て讀候淸濁り如何はんやと存也と云て姿は見えず
成にけり扨は忠度朝臣の精靈にてありけるに社と
て其視給へる處に墓を被レ立けると云々
値遇は盛久に注す定家は定家に注す
夕月はやくかけろふのおのか友よふ　かけろふの
小野と云かけたりかけろふの小野は和州の名所也
閼寺に注すかけろふは源氏供養に注す夕月は阿古
木に注す
須磨の關屋の旅ね哉　關屋の跡は攝州矢田部郡海
道の右手ちもり川の西北の方にあり●續千人のもるす
まの關屋の板びさし明行月も光とめけり定家

道ゆきふりに云源貞世須磨になりぬ所のさまはあなかちに是そと目とゝまる計のふしはなけれ共山かたかけたる家共の物はかなけなるにしはかきうちしつゝ竹のすがきのふしにくけに見えたるも彼むかしの御まし所のさまおもひよそへられたりこゝそ關屋の跡と計いへとこの頃はあれたるいた屋たになくまいてもる人もなかりき云々

まよふ雨夜の物語申さん爲に魂魄にうつり替りて來りたり　魂魄にといふはわろし魂魄のといひてよし魂魄は二字共にたましゐとよめり實盛に注す

何中々の千載集の歌の品には入たれ共勅勘の身のかなしさはよみ人しらすと書れし事妄執の中の第一なり　中々とはなましゐと云心也よみ人不レ知と書れし事妄執の中の第一なりといへる作意心得かたし千載集撰定の儀は文治の比にていまだ世しづかならず殊に忠度勅勘の身にてさゝ浪の歌一首にても撰集に入給ふ事規摸なるへしよみ人不レ知として入られし事世のはゝかり有ゆへ歟撰者俊成卿の心おしはかるへしされ共千載集以後の撰集に平家の人々詠歌その名をあらはし多入たり是は御代も過年暦も程經ての事なれはさも有ぬへし　勅勘とは帝王の御勘氣也　字彙云勅天子制書勘當也矣　增韻曰勘鞫也矣　禁秘抄云無二風情一不レ見二天氣一閉門之外無レ他矣　讀人不レ知と云に五の品有至て貴人或は賤人佛神示現の歌勅勘の人本より作者の實にしれぬと此五品也又云帝王の御製或は遊女の詠も有聞書

され共それを撰し給ひし俊成さへ空敷成給へは御身に御内に有し人なれは今の定家君に申然るへくは作者を付てたび給へと　俊成卿は元久元年に死去忠度は壽永三年一の谷にて討れぬしかあれは忠度うたれしより二十餘年以後に忠度幽靈出られしと見るへし凡撰集は天子の勅を承り撰定の後奏二覽之一然るをよみ人不レ知を改め作者をつけてたひ給へとは近比なるましき事也

けにや和歌の家に生れ　和歌は和國の風俗とはいへ共其家とて立たる事もなし俊成定家爲家三代の作名ありし故に爲氏爲相二流となりて二條冷泉の兩家となりしはひとへに俊成卿より始る也　此謠に和歌の家といふは誰人を指ていふそ尋ぬへし

娑婆は田村に注す　敷島は高砂に注す
文武二道をうけ給ひて　帝範曰文武二道捨レ一不可也矣　又曰文與レ武猶二車輪一矣　七書尉繚傳曰兵者以レ武爲レ植以レ文爲レ種武爲レ表文爲レ裏能審二此二者一知二勝敗一矣○弓（雪玉）筆の道の外にも思ふ事手に取春を宿にしるらん
世上に眼高し　或説云目の字をな共よめり依て世上に目高しといふを改めて眼高しといへりと云々案するに此説よろしからぬ歟　法花序品曰讃二妙光菩薩一汝爲二世間眼一矣詩人玉屑云眼高四海空無レ人矣かやうの證文もあれは眼高しとうたふ是然るへし
抑後白河院の御宇に千載集を撰はる　拾芥抄云千載集二十卷歌數千二百八十四首又短歌在レ之文治三年九月廿日依二後白河院宣一入道俊成卿奏レ之通世者撰レ之准二喜撰和歌式一有レ序假名入道俊成卿書レ之正曆以後歌撰レ之矣　後白河院は大原御幸に注す
五條の三位俊成卿うけ給はつて是を撰す　俊成卿は御堂關白道長公五代帥中納言俊忠男正三位皇太后宮太夫號二五條三位一左京太夫顯輔養子時云二顯廣一後改二俊成一安元二年九月廿八日六十三而出家號二釋阿一元久元年甲子十一月晦日九十一歲而卒矣　雜々拾遺云三位俊成卿は家號を御子左と云り五條に住めるに依て五條の三位と稱すと云々　俊成卿の家は五條京極にあり共又五條室町にあり共兩說也正徹物語云俊成の家は五條室町にて有しと云々　山槐記云治承四年二月十四日亥剋東南有レ火火起二高辻北萬里小路西一北至二綾小路一東指レ巽出二京極一南至二于五條北一右京太夫入道俊成家燒亡矣
年は壽永の秋の比都を出し時なれは　壽永二年癸卯七月廿五日平家都落也壽永は安德天皇の年號也景淸に注す
心の花か蘭菊の狐川より引返し　狐川は下海印寺圓明寺村の間を流れて水垂村の南にて淀川に落る也白氏文集第一凶宅詩云梟鳴二松桂枝一狐藏二蘭菊叢一矣○（文應七社百首）とにかくに人の心の狐川かけあらはれん時をこそまて　有家　高野之紀行云（烏丸資慶）狐川に至りし爰ぞ壽永の亂に平忠度朝臣駒引返して和歌の數申されし所とかやいひ傳るとて「一筋に引返け

る弓取の跡を尋ねてけふきつね川立印
しはしと賴むすまの浦源氏の住所平家の爲はよしな
しとしらさりけるそはかなき　須磨の卷に光源氏
の君すまの浦に蟄居し給へり依て源氏の住所とは
云也源氏の君を源氏の武士になそらへたり謠の心
はすまの浦は源氏の君の住所にて平家の爲にはあ
たなる所なるをそれぞとしらすしてよしなくも
須磨の浦近き一の谷にたてこもり責落されしはこ
とはりぞと也源氏君すまの浦に蟄居の事は松風に
注す

去程に一の谷の合戰　一の谷合戰は平家物語に出
たり略レ之一谷は在二攝州矢田部郡西須磨村一谷の
長さ四町餘横二十間高さ十二間法十七間谷口より
浪打際迄六十間餘二の谷に至るの間二町四十間餘
を隔て險阻の地也世に逆落しと稱す二の谷同所に
續り谷の長さ三町餘横八間高さ九間谷口より浪打
際迄四十間餘三谷に至るの間二町餘を隔たり三谷
同所に續く谷の長さ二町餘横九間高さ九間谷口よ
り浪打際迄五十間餘都て四町餘の間にあり東を一
と定て二三と西に相並びたり　盛衰記云一谷と云
所は口は狹して奥廣し南は巨海渺々として波繁く
北は深山峩々として岸高し屏風を立たるが如なれ
は人馬も通るへき樣なし誠に由々敷城墎也云々

武藏國の住人に岡部の六彌太忠澄　忠澄は大職冠
後胤藤爲憲七代岡部權守泰綱長男也武藏七黨の中
猪俣黨の侍也保元平治の時より高名の士也武州本
庄と深谷の間に岡部村有六彌太が舊宅あり駿河の
岡部に六彌太か宅ありと云は虚說也盛衰記云六彌
太忠度を討ける其恩賞に薩摩守の知行の庄園五ヶ
所を賜ると云々　武藏國は墨田川に注す

手綱　兼平に注す

むずとくみ　盛長私記に無手無寸と書
光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨　觀無量壽經
曰無量壽佛有二八萬四千相一々相各有二八萬四千
隨形好一々好復有二八萬四千光明一々光明遍照二
十方世界一念佛衆生攝取不レ捨矣選擇集云彌陀光明
不レ照二餘行者一唯攝二取念佛行者一之文也矣

あへなくは女郎花長月は紅葉狩錦の直垂は屋島に注
す

ふりみふらすみ定めなき時雨そかよふ　○神な月ふりみふらすみ定めなき時雨そ冬の初めなりける　後撰　定家

如何様是は公達の　公達とは攝家清華の子息を云也　枕草子云ほそやかにきよけなる公達のなをしすがたと云々　職原抄云公達者三家等華族也稱ニ三家一者中院閑院花山院此外大炊御門流以ニ此三流一爲ニ花族公達一也矣又云凡公達諸大夫號起ニ於執柄一執柄（ナマキンダチ）一門及可レ然人々子孫謂ニ之公達一又云有ニ生公達一注云生公達者非ニ三家事一三家流末也凡雖ニ三家之末流一代々經ニ中將一之家者可レ爲ニ生公達家一也是曰ニ生公達家一者三家者代々至ニ公卿一或至ニ太政大臣一又生公達者雖レ至ニ中將參議一數代不レ至ニ納言以上一家也矣

簱をみれはふしきやな短冊をつけられたり　平家物語云簱にゆひ付たる文取て見れはと云々盛衰記云一巻の巻物有披き見れは彼歌あり忠度と書れたりと云々其外盛長私記長門本等にも短尺の沙汰是なし　簱は字書曰音服盛ニ弓矢一器也以ニ獸皮一爲レ之矣周禮司弓矢曰中秋献ニ矢簱一矣弓道私記に簱に様々あり　花籠角籐筑紫簱柳簱忠度短尺簱等也皆品替れり略レ之短尺簱は鐶あるを云也

短尺の事　或抄云公方普光院義教公富士御覽の次て不破の關にて一葺かへて月さへもらぬ板庇とくすみあらせ不破の關守とよみて關屋の屋根の板に書給へるを初て學びたりといへり又定家卿の孫爲世より始ると云説あれ共今案に短尺は往古より是あり宇治左大臣頼長記に鳥羽法皇短尺をあそはされて女中に下しめ給ふと有短尺の事は三代實祿上古夜鶴等に書たり云々　短尺寸法の事幅一寸八分長一尺二寸飛鳥井家には一尺二寸二分を用ゆ三光院殿説には幅一寸八分長一尺一寸五分但平人用レ之御製を平人書時は幅二寸長一尺八分と有家々にて其品替る由也昔は白き短尺を用ゆ打曇の紙は後花園院の時より始る也云々

花は根に歸るなり　古詩云花散在レ根鳥歸ニ古巣一矣清原滋藤詩云花悔レ歸レ根無レ益レ悔鳥期レ入レ谷定延レ期矣○花は根に鳥は古巣に歸るなり春の行衛をしる人そなき　千　崇徳院

兼平

安寧天皇後胤木曾仲三兼遠四男今井四郎兼平者木曾義仲乳母子也然るに兼平武勇人に勝れ忠功他に異なり義仲義兵を起し北陸道へ出陣の初め一番に兼平に盃をさす今井頂戴し君御出世におゐては兄樋口次郎兼光を執權になし下さるべし君戰場にて御最期の時至らはそれかし一番に御供申さんといふ其後諸方の合戰に毎度高名をせすと云事なし壽永三年正月粟津の合戰に主君義仲討れ給ふと聞て兼平太刀のきつさきをくはへつゝ馬よりさかさまに落てつらぬかつて死したり（平家物語及盛衰記文略）

始て旅を信濃路や木曾の行衛を尋ねん　木曾義仲の最期の跡を尋ぬる也義仲は木曾に注す　信濃國は國造本紀云科野國造瑞籬朝御世神八井耳命孫建五百建命定二賜國造一　類聚國史云天平三年三月以二諏訪國一幷二信濃國一矣大和本紀云信濃國は木の中に級（シナ）と云木有彼木の皮は極て白し字にも此國の級の皮勝れて白き也是を被レ用二諏訪御狩裝束一也級と云に有二二義一一級二白此二義を取合て謂二信濃一白の字志奈と訓ず日本紀歌に白駒（シナコマ）と有信濃とは假字書也云々

是は木曾の山家より出たる僧にて候　木曾の山家は信州安曇（アヅミ）郡也　續日本紀云四十二代文武天皇大寶二年九月壬寅始開二美濃國岐蘇山道一矣　盛長私記云木曾と云所は究竟の城郭也東は上野武藏相摸に通て奥廣く南は美濃に境道一にして窄し行程三日の深山也譬數千萬騎を以も責落すへき様なし木曾爰に居て謀叛を巧むよし京都に聞えけれは平家大に驚き木曾は信濃にとりても南の端都も無下に近し武衛未雖伏せざる所に剩へ北國蜂起す如何せんと上下騒きけり（上下略）

江州粟津が原　三井寺に注す

信濃路や木曾のかけはし名にしおふ　かけ橋はあげ松と云宿より福島の宿へ越る間にあり則掛橋と云里有木曾川に掛たる橋には非す山のそは道の絶たるに掛たる橋也右の方は木曾川のきは也横二間長さ十間ある板橋也欄干あり昔は信濃美濃兩國の間嶮岨にして通路なかりしかは此時始てかけ橋を掛て通路出來る事續日本紀元明天皇記に見えたり

一書云推古天皇二十年百濟國來人中略巧懸二長橋一遣二于諸國一懸二三河八腥長橋水内曲橋木爨𣘺橋遠江濱名橋會津闇川橋兒岩猿橋等百八十橋一往還通路無レ惱矣

後拾　分暮すきそのかけ橋たえ〳〵に行末深き峰の白雪

名にしおふ　江口に注す

是は山田矢橋の渡し舟にてもなし　山田矢橋は二所にあり何れも東近江也粟津の向也打出より乗船して渡れは山田の渡りはちかし矢橋の渡りは五十町計也兩所の間十町也　親長卿記云矢馳と書　新撰歌枕には矢波瀨八橋と書　太平記廿一巻云或は浸々たる湖上に山田矢早瀨の渡し舟の棹さす人もあり云々

世の業のうきを身につむ柴舟やたかぬ先より　此歌の留りはこかれこそすれ也よみ人未レ考

出家の事にて候へは　維摩詰經曰夫出家者爲二無爲法一無爲法中無レ利無二功德一矣　又曰發二阿耨多羅三藐三菩提心一是即出家矣　瑜伽論云在家煩擾若レ居二塵宇一出家閑曠猶レ處二虛空一是故應下捨二一切於善説一毘奈耶中正信捨レ家趣中於非家上矣

實御經にも如渡得船　法華藥王品曰如二子得レ母如二渡得一レ船如二病得一レ醫如二闇得一レ灯上下略

近江の海　竹生島に注す

みなれ棹のみなれぬ人なれと　拾　水馴棹と書匠材集云みなれさほは水に馴る也云々〇大井河下す筏のみなれ棹みなれぬ人も戀しかりけり

船をはいかて惜むへきとく〳〵召れ候へ　とくとく召れとはとくと舟にのり給へと也　傳燈錄曰達磨遙觀三此土有二大乘根器一遂汎レ海得々而來單傳二心印一矣　五代史云僧貫休入レ蜀上二王建一詩曰一瓶一鉢垂々老万水千山得々休矣　東坡集十四云知二是多情一得々來矣

比叡山　江州志賀郡也本朝七高山の其一而諸山の司也此山は限レ峰東方近江國西方山城國也下學集云初曰二日枝山一朝日出二此山一而漸昇二其枝一故云二日枝山一後改曰二比叡山一山門日記云此山鎭護國家道場天子本命靈地故以二此山一比二叡嶽之無双一而云二比叡山一又云桓武帝與二傳教大師一比二同叡念一建二立台宗一故名二比叡山一矣帝都記云平安帝都は天上の名跡をあらはせる國也艮に當りて日得と云山有

日の神の御光を願へ共その光を得ざる所を諸神是を祈りて日を得べきと云心にて日得(ヒエ)の山と名付と云々山とはかりいひてはひえい山の事也○世の中に山てふ山は多かれと山とはひえの御山をそいふ（拾玉）

山王二十一社　舊記云日吉神號者傳教於小比叡峰見三光日輪現釋迦藥師彌陀像教問其名神告曰竪三點加横一點横三點添竪一點言已其光昇空而去教於文字見之竪三點横一點爲山字横三點竪一點爲王字高大不動者山也經緯三才者王也由是遂崇號曰山王矣　日吉神託曰我名山王表三諦即一也山字竪三畫者空假中也横一畫者即一也王字横三畫者三諦也竪一畫又一也二字三畫而有一貫之象故我立爲號也一心三觀一念三千亦復如是是以我護持台教鎭守護國家（下略已上神社考）　日吉社在淡海國志賀郡所祭之神七座

攝屬社十四座

大宮（大己貴命）　日吉鎭座記云人皇三十九代天智帝御宇白鳳二年三月三日琴御舘(コトノミタチ)奉祭山麓其後御舘乞奉拜尊神御形于時夜忽光曜如日其中有大字更無異物依之奉稱大宮也（文略）

二宮（國常立尊　神皇魂尊）　同記云此即天地二儀主神天地始其中間出現之故名二宮二字此天字略也天地陰陽兩儀加護神者是也垂跡始自神代已來波母山降現也矣

聖眞子（正哉吾勝尊）　同記云聖者神也言出生兩神眞心中故名矣天武帝白鳳年中影向矣

八王子（國狭土尊）　同記云八十萬神大祖元氣神也矣崇神天皇即位元年鎭座矣

客人（伊弉册尊）　同記云文德帝天安二年六月十八日遷宮矣

十禪師（瓊々杵尊）　同記云十者天七地三之數禪讓也師國也言十善天子讓國之義矣桓武帝延曆二年正月十六日影向矣

三宮（惶根尊一說云天照大神三女）　同記云三女影向故名三宮日本紀云天神第六惶根尊是也延曆二年陽春中比御臨幸矣　已上本宮七社也從是攝屬十四座之次

下八王子宮（天御中主尊）　鎭座記云　祭禮七社外當社有神馬也東有石名石船明神初降之地矣

王子宮（建御名方命）　同記云自信州諏方郡鎭座矣

早尾（素戔烏尊一說猿田彦命）　同記云馬場頂上鎭座也諸人加護深

重神之故坂口祭レ之矣
大行事（高ミ産靈尊）　同記云昔日神入二磐戸一閉居之時以二
此神之謀一而集二八百萬神一奏二神樂一日神再御怒解
矣
聖女（下照姫）　同記云延喜年中祭レ之矣
新ノ行事（瀛津姫）　同記云天照大神與二素戔烏一盟而所
生三女神之一也矣
牛尊　同記云八王子右祭レ之此殿底有二靈石一九
口傳矣
小神師（彥火々出見尊）　同記云地神第四尊也矣
惡王子（口傳）　同記云童子形出現矣
岩瀧（瑞穗姫命）　同記云竹生島神同體也神武帝后也矣
劒宮（素戔烏變神）　同記云童形出現也叡嶺凶事退散神也
矣
氣比（仲哀帝）　同記云從二越前國角鹿郡一影向桓武御
宇勸二請之一矣
大竈（瀛津彥命）　同記云此即大歲神子也大歲者杵築
大神御孫也諸家竈神是也矣
竈殿（瀛津姫）
右攝屬十四社加二上七座一稱二廿一社一

しげりたる峰は八王子　八王子上に記す二宮の上
の山腹三宮と相並ひたり麓より社迄八町計又神祇
宣令曰八子同天降故曰二八王子一矣本地は千手觀音
也
戸津坂本の人家迄　坂本は叡山の東西にあり西坂
本には新羅明神ましますニ井寺の鎭主也東坂本に
は山王權現ましますに爰に云戸津坂本は東坂本也或
云坂本に三津濱あり所謂戸津今津志津也一說志賀
津大津粟津是を三濱共云也云々
中々の事夫我山は王城の鬼門を守り惡魔を拂ふのみ
ならす　丑寅を鬼門と稱する事陰陽鬼神集會する
所なる故に皆人おそれをなす歟（拾玉）我山は花の都の
うしとらに鬼ぬる門をふたくとそきく（慈鎭）　韶府
云交趾有二鬼門關一多レ癘諺曰若度二鬼門關一十去九
不レ還矣　神異經曰東北方有二鬼星石室一屋三百戶
而共レ所石傍題曰二鬼門一門晝日不レ閉至レ暮則有レ人
語有二火靑色一矣、海水經曰東海中有レ山名二度索一上
大桃樹應枝名二鬼門一萬鬼所レ聚矣　事文類聚云東
海度朔山有二桃樹一蟠屈三千里其早坊向二東北一曰二
鬼門一万鬼出入也有二二神一一曰二神茶一一曰二鬱壘一

主ニ閲領一衆鬼之出入者執以飼レ虎於レ是黄帝法而象レ之因立ニ桃板於門戸上ニ畫ニ神茶欝壘一以禦ニ凶鬼一此則桃板之制也蓋其起自ニ黄帝一故今世畫ニ神像板上ニ其下畫ニ左神茶右欝壘一以ニ元日一置ニ之門戸一也矣

一佛乘の峰とや申は傳聞鷲の太山をかたどれり　一佛乘の峰とは比叡山を云也鷲の太山は天竺靈鷲山を云也春日龍神に注す凡佛法に小乘大乘とて其敎の深淺有此山に限て實大乘の成佛得脱を専要とひろめ給ふ故に比叡山をは一佛乘の峰とは云也法花に於ニ一佛乘ト説り　戒度開持記云乘者以ニ運載一爲レ義究竟不レ二名レ一即佛乘矣　憬興云一乘者即智雖レ有ニ三乘ニ其極無レ二故云ニ一乘ニ矣

又天台山と號するは震旦の四明の洞をを寫せり　比叡山を天台山といふは唐土の四明山になぞらへていへると也但此謠に唐土天台山と四明山と一所のやうに作るはあやまり成へし四明山は天台山とは別の山にて隣にあり此山のいたゝきの四方に石の窓有て日月の光其内に入四方なから光明あきらかなる故に四明の洞と云也　大明一統志曰浙江寧波四明山在ニ府城西南一百五十里ニ周廻八百里跨ニ紹興台州之境ニ二百八十峰ニ其巓五峰絶高形如ニ芙蓉ニ矣　陸龜蒙云山有峰最高四穴在ニ峰上ニ毎ニ天色晴霽ニ望レ之如ニ戸牖相倚ニ矣　福地記云上有ニ四門ニ通ニ日月星辰之光ニ故曰ニ四明ニ矣天台山は春日龍神に注す　震旦は拾萬に記す世傳天竺の靈鷲山は王舍城の丑寅唐土の天台山は長安城の丑寅本朝の比叡山は平安城の丑寅にして三國共に王城の東北の間にたてる山なりと諸抄に記するといへ共方輿勝覽及一統志を見れば長安城は天台縣より數百里にして西北にあたれば此説相違たるへし

傳敎大師桓武天皇と御心をひとつにして延暦年中の御草創　園太暦云延暦七年奉ニ爲桓武天皇ニ建ニ根本中堂ニ號ニ比江山寺ニ後號ニ一乘止觀院ニ矣　帝王編年記云延暦七年戊辰傳敎大師建ニ立根本中堂ニ號ニ止觀院ニ造ニ藥師像ニ同十三年甲戌九月三日壬午供ニ養根本中堂ニ天皇御願檀主最澄禪師大導師善殊僧正矣　伊呂波字類抄云延暦十三年造レ之元號ニ比叡山寺ニ而平城御宇改ニ延暦寺ニ矣　此山昔は三千

坊今は百二十五坊にして五千石を領す兵火炎上度々也今の堂は後陽成院天正十七年に再興有　帝王編年記云五十代桓武天皇諱山部柏原帝光仁天皇長子母曰二皇大夫人一高野新笠贈正一位乙繼朝臣女也天平九年丁丑誕生寶龜四年癸丑立二太子一年三十七天應元年辛酉四月三日受禪同廿五日即二位于大極殿一御年四十六御宇二十四年自二延曆元年壬戌至二同廿四年乙酉一都二平城宮一云々大同元年三月十七日崩四月七日奉レ葬二山城國柏原陵一矣　傳敎大師號二最澄一俗姓三津氏江州滋賀郡人也其先祖後漢獻帝末孫也日本應神帝御宇に來朝して江州滋賀の地に居住す其子孫百枝と云人夫婦子なき事をうれひて諸神に祈誓す或夜夢想を得て其妻忽に懷胎す于レ時神護景雲元年丁未八月十八日最澄誕生あり弘仁十三年六月四日に遷化年五十六歲已上今昔物語及釋書文略　帝王編年記云延曆二十四年天應二年八月十九日改元依二即位一也矣　續日本紀云桓武天皇詔曰自周以前未レ有二年號一至二于漢武一始稱二建元一自レ玆厥後歷代因循是以繼體之君受禪之主莫レ不二登レ祚開レ元錫レ瑞改一レ號朕以二寡德一纂二承洪基一託二于王公之上一君二臨寰宇一既經二歲月一未レ施二新號一今者宗社降レ靈幽顯介レ福年穀豐稔徵祥仍臻思下與二萬國一嘉二此休祥一宜上レ改二天應二年一曰中延曆元年上矣

我立杣と詠し給ひし　新古今集釋敎傳敎大師の歌に「阿耨多羅三藐三菩提の佛たち我立杣に冥加あらせ給へ　詞書云比叡山中堂建立の時と云々東野州云阿耨多羅三藐三菩提の佛とは無上正徧智覺とて佛の上もなくはかりもなく正しく御智の勝れたる事也佛の位を申と心得べき也云々我立杣とは比叡山也又材木を營を杣たつと云今かく杣だてゝ此中堂を建立して天下太平二世安樂の祈願の道場をいとなみ給ふ事を上もなく正しくあまねく諸の佛たち守りみそなはし給へとの心也此歌よりひえい山を我立杣と云也　彌陀經義疏曰阿耨多羅云此翻二無上一三藐云曰二正等一三菩提云曰二正覺一即佛果號也矣

根本中堂　止觀院也　河海抄云延曆七年傳敎大師建二立之一本尊藥師如來御長五尺五寸大師造二立之一其以後梵天帝尺四天王忠仁公日光月光菩薩宇治關白十二神將御堂關白被レ造二副之一矣　釋書智證傳

云初傳敎於ニ叡山一構ニ三字一北置ニ多門天王像一號ニ毘沙門護世堂一南度ニ經律論一名ニ一切經藏一中安ニ藥師像一曰ニ一乘止觀院一以ニ其居ルヲ中稱ニ中堂一久稍朽壞珍合ニ三字一爲ニ一堂一矣

大宮の御在所波止土濃　大宮權現御座所を波止土濃と號す大宮權現は上に記す太平記十八云此波忽に一葉の葦の海中に浮へるにそ留りにける此葦の葉果して一の島となる今比叡山の麓大宮權現垂レ跡給ふ波止土濃也是故に波止て土濃也とは書る成へし云々委く白鬚に注す○はしとのゝまさの板橋石橋に續きて登る山そかしこき祝部成仲　新撰諷枕云抑傳敎大師叡山を建立させ給ひて後さても我山の守護神にはいつれの神をか可レ奉レ請とありけるが何とかおぼし召けん地神二代の神三輪の明神をどおぼしつゝ彼社に參りて請じ奉らせ給ふに明神云其山に杉生たらは我影向としろしめせと約諾おはしましけり其後無レ程小比叡の杉生たりやがて明神唐崎の一松の陰に來りて住給ひ琴の御たちの許に立寄りて宿をからせ給ひて一夜を明して舟をさゝせて東坂本三河の川上波止土濃といふ所へいたり給ふ時二宮地去ていれ奉らる今の大宮權現是也仍て大宮と三輪と一體にて渡らせ給ふ御神也といへり「我國を守るは神のしるし哉小ひえの杉や三輪の山本

有難や一切衆生悉有佛性如來と聞時は我等か身迄も賴もしう社候へ　是は涅槃經の文也委く白鬚に出たり一切衆生に悉有ニ佛性一と云文にて我等が身迄も賴もしう候へとはいへり

佛衆生通する身なれば　惠心云應レ念ニ一切衆生悉有ニ佛性一矣　白樂天云寒冬天水結成靑陽春轉氷成レ水氷水不二也佛衆生豈ニ二法一矣

一佛乘の峯には遮那の梢をならへ　遮那者摩訶毘盧遮那也大日如來也　輔行曰毘盧遮那此云ニ徧一切處一煩惱體淨衆德悉備身土稱徧ニ一切處一矣傳敎慈覺入唐して大日覺王の三密の觀法を習ひ傳へて此山にひろめ給ふ故に遮那の梢をならへとは云也

麓に止觀の海をたゝへ　湖水漫々として山の麓にたゝへたるを止觀の海と云也止觀とは比叡山に立る所の天台宗也　止觀者梵語奢摩佗翻云レ止又毘婆舍那譯云レ觀梵語憂畢叉翻云ニ止觀平等一止觀曰

法性寂然名レ止寂而常照名レ観矣　弘決曰還レ源反レ本法界倶寂是名レ止法界同朗咸皆大明名レ之爲レ観矣
止観とは其教甚深廣大なるが故に海にたとへたり

又戒定惠の三學をみせ三塔と名つけ　戒定惠者三藏法數曰如來立レ教其法有レ三一曰戒律二曰禪定三曰智惠然非レ戒無ニ以生ヲ定非レ定無ニ以生ヲ惠三法相資一不レ可レ缺而皆稱爲レ學矣　安法師云斯之三者至道之由戸泥洹之關要戒乃斷ニ三惡一之干將也禪乃絶ニ分散一之利器也濟ニ乗病一之妙醫也今謂ニ防レ非止レ惡曰レ戒息レ慮靜レ縁曰レ定破レ惑證レ眞曰レ惠矣　三塔とは東塔西塔横川を云也東塔は止観院上に記す西塔は寶憧院本尊破釋迦横川は楞嚴院本尊彌陀観音也此塔に都て十六谷あり此三學を三塔の三ツの峯に配當してかく云也

人は又一念三千の機を顯はし三千人の衆徒を置き比叡山は一念三千の観行をこらす昔此山に三千坊ありしゆゑに是に對してかくつゝけたり鑑眞台宗章疏に安ニ三千之徒一とあるも是等の心歟　一念三千者止観ニ曰夫一心具ニ十法界一一法界又具ニ十法界一百法界一界具ニ三十種世間一百法界即具ニ三千種世間一此三千在ニ一念心一若無レ心而已介爾有レ心即具ニ三千一亦不レ言ニ一心在レ前一切法在レ後亦不レ言ニ一切法在レ前一心在レ後例如ニ八相遷ニ物物在ニ相前一物不レ被レ遷相在ニ物後一亦不レ被レ遷前亦不可後亦不可只物論ニ相遷一只相遷論レ物今心亦如レ是若從ニ心一生ニ一切法一者則是縱若心一時含ニ一切法一者此則是横縱亦不可横亦不可只心是一切法一切法是心故非レ縱非レ横非レ一非レ異玄妙深絶非ニ識所レ識非ニ言所レ言所以稱爲ニ不可思議境一意在ニ於之一矣　機とははたものと訓して織具也機より色々の綾羅錦繍を織出すかことく人の機より様々の事を思ひ出すを機と云也　列子天端篇曰萬物皆出ニ于機一入ニ于機一矣　傳燈錄曰人百歳不レ善ニ諸佛機一未レ若生一日而得レ了レ之矣

圓融の法も曇りなき　圓融とは法也圓は圓滿也融は融通也華嚴經曰顯ニ現自在力一爲説ニ圓滿經一釋籤一曰始自ニ華嚴一終至ニ般若一雖ニ多不同一但爲ニ次第三諦所攝一今經會レ實方曰ニ圓融一矣

月の横川もみえたりや　横川は江州の内也本宮より北十八町のほれは横川楞嚴院也堂は南向なり横川といへ共川はなし

さゝ波やしか辛崎のひとつ松　三井寺に注す
七社の神輿の御幸の粧成へし　日吉七社は上に記す　御幸とは日吉の神事を云也卯月中の申の日也此日七社の神輿唐崎において粟の神供を奉る也日吉鎭座記祭儀式卯月祭禮者琴御館以二大賢木一奏二神幸之祝詞一於二唐崎一如二先盟一恒世裔奉二粟御料一也出二御輿一而祭者桓武帝延暦十年又御舟祭始延文年中洪水已後例也矣●續拾和くる光さやかに照しみよ賴む日吉の七の御社　後村上院
昔なからの山櫻は忠度に注す
柴舟のしば〳〵も●説文曰屢數也矣　孟律抄云しば〳〵は細々也と云々菓子抄云しは〳〵は數の字也しけき心也云々　知題抄云もののしげきをはしば〳〵と云也鳥なとのおほく鳴をしは鳥なくと云又船なとの一二艘たま〳〵出たるをはをふねと云おほ〳〵こきつらねたるをはしば舟と云人の目なとをはやくたゝくをはしばたゝきすると云也此等皆しけき事につかふ詞也云々
白刄骨をくだく苦み眼睛を破り紅波たてを流すよそほひ　賴政に注す眼睛とは眼はまなこ睛はひとみと訓す戰場のありさま見る眼も苦しくおそろしきを眼睛を破りとは云歟
箙に殘花を亂す　紅波たてを流すといひやなぐいとつゝけたるは爰は水邊なれは簗の杭を兼たるとみえたり箙篠は花やかにかされる物なれは戰場の體殘花を亂すといへるさも有へし多唐韻曰箶簏矢室也矣　玉篇曰簶胡箭室也矣　唐令胡鐮と書西宮抄に箙と書也　毛詩大叔于田篇曰釋レ棚註毛萇曰棚所二以覆一レ矢也矣是は矢筒の蓋也矢を入爲にふたをとる也棚は小笠原家に秘藏する字也其外蔆胡箙壺胡箙平胡箙等品々あり
おろかと尋給ふ物哉御身是迄來り給ふも我なき跡をとはん爲の御志にてましますや　此僧木曾殿粟津か原にて果給ひたるその跡をとふらはんとて來りしに兼平ゆうれい出て此僧に向ていふやうわかなき跡をとはん爲の御心さしにてましますやと云事不傳也又次に所は爰そ我よりも主君の御跡をまづ弔ひてたひ給へと云事是又勿論也僧の心さしは木曾殿を弔らはんとてなれはいふに不レ及
修羅甲冑武士の矢は屋島に注す漁夫は羽衣に記す彼

岸は東岸居士に注す

有爲生死のちまた來て去事早し老少以て前後不同夢幻泡影何れならん　是は金剛經の文にてつゞけたり略レ之

槿花一日の榮は朝顔に注す弓馬の家は安宅に注す

僅に殘る兵の七騎と成て木曾殿は此近江路に下り給ふ　盛衰記云去年六月北陸道を登しには五萬餘騎と聞えしに今四宮川原を落けるには只七騎に不レ過けり巴といふ女も此七騎の內也粟津の軍の終りには主從二騎に成にけり文略長門本同レ之　巴は兼遠が娘兼平が妹也生年廿八歲也從レ是以下平家物語を以てつゝけたり

兼平瀨田より參りあひて又三百餘騎になりぬ　範賴はの勢田の橋なければ田上（タナカミ）の貢御（グゴ）瀨を渡し石山通りに責上兼平五百餘きにて防戰ふといへ共敵大軍なれは不レ叶して引返し木曾北國へ趣給はんと思ひて三百餘きにて尋ね行く終に粟津の濱にて行會ぬこゝかしこより五十騎三十騎馳集りて四五百騎に及べり兼平爰にて防矢して木曾殿を北國へ落しめんと思へ共終に敵に責つけられて又二騎にぞ成にける盛衰記長門本同レ之

駒手綱　手綱に品々有腰廻の手綱掛手綱自在手綱等也腰廻の手綱は刀帶のくわんに手綱を返してひかゆる也口傳有掛手綱は胸より肩に掛脇に引出すを云也自在手綱は口傳

自害　賴政に注す

頭は睦月の末つかた春めきなから冴かへり　下學集云睦月正月也睦或作レ昵新春新類相依娛樂遊宴故云二睦月一也矣　冴かへりは屋島に注す

くれはとりあやしや　吳服に注す

望月の駒　江家次第云本八月十五日也依二朱雀院御國忌一改二用十六日一矣　舊事紀云八月十五日天皇幸二南殿一行二駒牽節會一科野勅使奉二望月駒六十疋一天皇見レ駒司奏二頭駒文一中略　十六日牽二兜岩穗坂駒二十一日牽二胸刺小野駒四十疋交生駒二十疋立野駒十五疋一二十三日牽二科野霧原駒二十疋一二十八日牽二上野利根駒五十疋一矣　駒牽は貞觀の比よりはしめらるゝ由公事根源に見えたり

（後撰）望月の駒より速く出つれはたどる／＼ぞ山を越つる

いづくより來りけん今ぞ命はつき弓の矢ひとつ來て內甲にからりといるいた手にてましませはたまりもあへず馬上よりおちこちの土となる　木曾殿最後の事を云也爰にては流矢にあたりて死し給ふ樣に作れ共物語には石田次郎が矢にあたりて則首を取ると有委く木曾に注す　內甲は眼庇の內也或裏兜と書頭入共云也上を浮張共裏張共云也木綿麻布を用ゆ近來日をいとひ炎氣を避といひて金箔にてたえたるあり力革とて十文字に入たるも有一云甲は裏唯鍍は浮張と呼で詞を分つと云々　おちこちとは遠地近地の音也あちこちと云事也といへる說あれ共よろしからす

一騎當千　鳴鶯記云まことに一騎當千の勇士の心つかひと見えたり云々　文選李少卿答二蘇武一書曰再戰一以當レ千矣　涅槃經曰喩如三人王有二大力士一其力當レ千更無レ有下能降二伏之一者上故稱二此人一人當千一矣

其後自害の手本よとて太刀をくはへつゝさかさまにおちてつらぬかれうせにけり　長門本平家物語云日本第一のかうの者主の御供に自害する見習や八ヶ國の殿原とて太刀をぬきてきつさきをくはへて馬より前に落てつらぬかれてこそ死にけれ太刀のさき二尺計草ずりのはづれに出たりけり云々

實盛

或云實盛は田村將軍後胤齋藤太郎實直が子也初めの名は河合太郎大夫助彥と云後助房を改め齋藤一郎大夫實盛と號す實盛武勇の譽ある故に小松重盛殊更賴みおもはれて關東と和睦あるへき媒となされ武藏國武庫の別當となり長井の鄕に居住しけり云々准后親房記云昔日本武尊東夷征伐之時立二置武庫于武藏國一四藤翟衞レ之清盛以二齋藤實盛一爲二武庫別當一加二四藤一矣　或說云實盛は齋藤實方が子本姓は在原氏越前國坂北郡人其跡今在二丸岡一本六條判官爲義家人也云々　盛長私記云東國の勢討手の爲に實盛を案內とし平家の大將維盛重衡數萬の軍兵を催し富士河を隔て對陣す然るに別當實盛が智謀を用ず各遊宴に長し數日をおくる實盛兼て敵夜討に來るへき事をいへ共承引せす其上上

總介忠清と口論し千餘騎を引卒して富士川を立て歸洛せり于レ時武田太郎信義兵略を相廻し夜討せんとて及二半更一富士の根方に廻潜に平家の陣の後面を襲討んとせし所に富士沼に集り居たる水鳥共群立たる其羽音偏に時の聲と聞なしすは敵は夜討に寄たるはと云程こそあれ平家は大將軍を初めとし大に騷動す信義勝に乘て責入平兵若干討る殘る者共皆敗走す已上文略　其後實盛は壽永二年五月廿日加州篠原の合戰に平家落行中に只一騎返し戰ふといへ共老武者なれはかなはす終に手塚太郎に討れけり行年七十三歲平家物語文略」

加州江沼郡篠原と云砂原に實盛が首洗の地とて大き成池有其上を手塚山と云昔此所實盛光盛組討の場也所の人大剛の人の舊跡とて土器を以て塚をつく其後相摸國藤澤他阿彌上人元祖より十四代め　巡國の節此所を通られしに實盛の魂魄出て上人に逢て修羅道の苦患のかれかたき事を語て跡を弔給へと云て見えす上人感涙を流し此所に七日逗留して別時の大念佛を初め給ふ其因緣に依て代々他阿彌上人廻國の時はいつとても此篠原の砂原に假屋をたて七日の間別時の大念佛今の世迄も有事也江沼郡の大守定て逗留中は御馳走也時宗緣起文略

夫西方は十萬億土遠く生るゝ道なから愛も己身の彌陀の國　西方十萬億土とは彌陀經曰從レ是西方過二十萬億佛土一有二世界一名曰二極樂一矣　天台大師止觀二云意論二止觀一念二西方阿彌陀佛一去レ此十萬億佛刹矣

愛も己身の彌陀の國とは　大原談義云極樂不レ遠而構二萬億刹之西一彌陀在二己心一而現二一座華臺之形一矣　謠の言葉此等の文にてつゝけたり又柏崎に記す

貴賤群集の稱名の聲日々夜々の法の場　聖人藤澤を出給ひてより晝夜稱名おこたり給はぬ也　大倉家書云此謠のわきは遊行十四代他阿彌上人也元祖二代めより代々他阿彌と云也云々　法の場は誓願寺に記す

攝取不捨　忠度に注す

獨猶佛の御名を尋見んおの〳〵歸る　是は古歌歟未レ考歌の留りは法は庭入と云歟

誓の網にもるへきや　花嚴經曰佛敎網矣　張商英

集云漉レ沈極レ溺謂ニ之網一矣○唯ひとり殘て人をすくふへき網はあみたの名に社有けれ 神主康業

知人もえらぬ人をも渡さばや　彌陀成佛の願は智あるも愚なるも隔なし○知人もえらぬ人をも渡さるゝ佛誓の舟のかいせ見た佛滿ホ

笙歌遙聞孤雲上聖衆來迎落日前　是は大江定基入道寂照入宋して長元七年に清凉山の麓にて臨終の時作れる句也又歌をよむ「雲の上に遙に樂の音すなり人や聞らんそら耳かそも　參河守大江定基は參議左大辨式部大輔濟光子也圓融院の頃の人也或時妻を具して參河の任國に下る妻病を受て死す定基是を悲み且其國の人民殺生を好むを見て彌道心おこりて出家す名ニ寂照一其後震旦に渡る 今昔物語

攝取の光明曇らね共老眼の通路猶以て明かならず　惠心云我等在ニ彼光中一鎭被ニ照耀一煩惱障レ眼不レ得レ見レ之矣　是等の文にてつゝけたり　攝取の光明は觀經の光明遍照の文也

爰をさる事遠かるましや　觀經曰爾時世尊告ニ韋提希一汝今知不阿彌陀佛去レ此不レ遠汝當下繫レ念諦觀ニ彼國一淨業成上者我今爲レ汝廣說ニ衆譬一矣　去此不遠は疏文に擧ニ三釋一群疑論には十不遠の異解を明せり略レ之　疏文曰道里雖レ遙去時一念即到矣　天台云以ニ佛力一故欲レ見則叉光中現土顯ニ於佛力一一念能緣言ニ不遠一也矣○たのもしな西にはるけくきく國もこゝを去事遠からぬ身は 通茂

南無阿彌陀佛は百万に注すあまさかる鄙は道明寺に注す上人は遊行柳に注す

盲龜の浮木優曇花の花待えたる心地して　源氏若紫卷に北山の僧都歌に「優曇花の花待えたる心地してみ山櫻にめ社うつらね　源氏君わらはやみまじなひに北山の聖のもとへおわせしを此わたり近き僧都のよめる歌也　細流云僧都の歌也源氏を優曇鉢華に比する也云々孟津抄云源氏君の御出はうとんけを待えたるとおなしと僧都のおもはれたり僧都の詞には似合たりと云々委く若紫卷に見えたり

法華妙莊嚴王品曰佛難レ得レ値如ニ優曇波羅華一又如三一眼龜値ニ浮木孔一矣　優曇鉢華梵語也此云ニ靈瑞一亦云ニ瑞應一矣　大菩薩藏經曰此菓似ニ梨菓大如一拳其味甘無レ花而結レ子亦有レ華而難レ値矣　法華文

句云優曇華者此云二靈瑞一三千年一現現則金輪王出
矣妙樂云金輪王出大海減少金路現時此華乃出矣阿
含曰如乙大海中有二一盲龜一壽無量劫百年一遇二出于
水面一有二一浮木一只有二一孔一漂二流海內一隨レ浪東西
盲龜一出擬下値二此孔一穿レ頭向上中其木西浮龜或東
出圍繞亦爾雖二復差遠一倘或相値甲矣○目ゑゐたる玉葉
龜の浮木にあふなれやたまヽヽえたる法のはし舟
高辨上人
老の幸身にこえ悦ひの泪袂にあまる　新葉集序云
老の幸望にこへ喜の涙袂にあまれり云々　本朝文
粹云菅三品尙齒會序云遊二於勝地一一日是非二老之
幸一哉上下略
安樂國に生るヽかと無比の歎喜をなす所に　安樂國
は極樂をいへり　無量壽經曰無レ有二三途苦難之
名一但有二自然快樂之音一是故其國名曰二安樂一矣無
比とはたくひなき也歡喜は田村に注す
輪廻妄執の閻浮の名を　輪廻とは車の輪のめくる
がことく生死の道に久しくめくるを云也　原人
論云刧々生々輪廻不レ絕無レ終無レ始如二汲レ井輪一
矣　妄執は執心深くして果さる心也　閻浮は此界

也白鬚に注す
懺悔の廻心　罪を恥悔て罪惡をおもひつヽしむ心
也懺悔者梵語云二懺摩一又譯云二悔過一此二を下略し
て懺悔と云也　一切經音義云懺除悔梵音也具云二
懺摩一此云二請忍二賢聖一或請二淸淨僧一忍受二謝悔一矣
普賢經曰若欲二懺悔一者端座思二實相一矣
昔長井の齋藤別當實盛は　實盛は武藏國武庫の別
當たる故に齋藤別當と云也委く上に記す惣て別當
職は高官の人も是に補す無位無官の人猥に別當を
名のるは本式に不レ叶歟　別當と云意は　或云假
令有二內膳司一而被レ置下別當二管領一者上則云二之別
當一餘皆同レ之矣　軍防令義解云謂三關者國司別
當二守固一之類也三關者伊勢鈴鹿美濃不破越前愛發
是也各有二關塞之兵士一然令下二國司一別當中守固上矣
此御前なる池水にて鬢鬚をも洗はれしと也　盛衰記
云樋口次郞兼光水を取よせて自是を洗たれは白髮
の尉にそ成にけると云々　篠原の池は橋の宿より
二里あまり東也北國の海道也篠原は安宅に注す
深山木のその梢とは見えざりし櫻は花にあらはれ
たる　詞花集春部に入賴政歌也題不レ知と有留り

はあらはれにけりと古歌の心は深山木に交し程は
櫻共見えさりしに花に咲てぞまきるゝものなしと
也此歌袋記第四に近衛院の御位の時當座の御會
に深山見レ花と云題を給てし有

魂は冥途にありながら魄は此世にとゝまりて　魄
魂の二字は共にたましゐとよめり魂は父より受し
たましゐ也魄は母よりうけしたましゐ也魂は天也
陽也　魄は地也陰也魂説文曰神也陽也氣也身六精
隨レ神出入矣　魄説文曰精也朗也陰神也矣　記祭
義曰魄者鬼之盛矣　左傳曰物生始化曰レ魄矣　禮
會曰魂氣歸ニ於天ニ體魄復ニ于地ニ矣　淮南子曰天氣
爲レ魂地氣爲レ魄矣　朱褒詩云魂歸ニ冥漠ニ魂歸レ泉ニ

二百餘歳の程はふれ共うかびもやらて篠原の　壽
永二年五月實盛加洲篠原にて討れしより遊行十四
代他阿彌上人までを二百餘歳といふなるへし年數
追て考ふへし

翁さび人なとがめそ假初に　　實盛老人なれはかく
つゝけたり伊勢物語に中將なりける翁詠る「翁さ
び人なとかめそ狩衣けふはかりとそたづも鳴なる
此歌後撰集に入在原行平朝臣の歌也昔仁和の帝芹
川の行幸の時行平衰老の身にて大鷹の鷹飼に宣下
せられて供奉す摺狩衣の袂に鶴をぬひて此歌を書
付けるを御覧して公の御氣色あしくて行平こもり
をりけるとそ伊物眞字本に翁佐備と書細中抄云お
きなさびはおきなすさびと云詞也手すさびなと申
はたはふるゝ心にやすさひとは取蝕尾とも書たり
云々無名抄云おきなさひとは翁ざれと云詞也云々
奥秘抄同之　或云おきなさひとは年老てざれはみたる心
也と云々

法の水　法花懺法云諸佛菩薩惠明法水願以洗除矣
(金)○法の水深きさとりを種としてむねの蓮の花を開
くる

極樂世界に行ぬれは永く苦海を越過て輪廻の古郷へ
たゝりぬ歡喜の心いくはくそや　往生要集云永
越ニ過苦海ニ初往ニ生淨土ニ爾時歡喜心不レ可ニ以レ言
宣ニ矣　極樂者梵語須摩提此翻ニ極樂ニ又翻ニ安養安
樂ニ矣　彌陀經曰其國衆生無レ有ニ衆苦ニ但受ニ諸樂ニ
故名ニ極樂ニ矣

所は不退の所命は無量壽佛となふ　往生要集云處
是不退永免ニ三途八難之畏ニ壽亦無量終無ニ生老病

死之者一矣　不退者梵語云ニ阿鞞跋致一亦名ニ阿惟越致一此云ニ不退轉一矣　彌陀經曰極樂國土衆生生者皆是阿鞞跋致矣　平等覺經曰還ニ生我國一作ニ阿惟越致一矣　無量壽經曰皆悉到ニ彼國一自致ニ不退轉一矣　不退とは極樂をさす也慈恩の通贊に五種の不退を記せり略レ之　命は無量壽佛とは阿彌陀梵語翻云ニ無量壽一矣　彌陀經曰彼佛壽命及其人民無邊阿僧祇劫故名ニ阿彌陀一矣　阿彌陀は壽命無量の願あり無量報身如來也依て極樂國土悉く無量地也

念々相續する人は念々毎に往生す　源空云阿彌陀佛は一念に一度の往生をあて置給へる願なれば念毎に往生の業となる也語燈錄取意　一遍上人云口に南無あみだ佛ととなふれば聲則往生也と云々　山叢林云南無阿彌陀佛と稱念すれば毎レ念見佛し毎レ稱往生すと云々

南無といつは即是歸命阿彌陀といつは其行此義を以ての故にかならず往生を得べしとなり　善導玄義曰言ニ南無一者即是歸命亦是發願廻向之義言ニ阿彌陀佛一者即是其行以ニ斯義一故必得ニ往生一矣此言は歸命は正翻發願廻向は義翻也法藏因中の發願を以て衆生往生の行業を廻施し給ふ是を發願廻向と云阿彌陀佛は是即選擇本願の大行也即是其行といへり然れば南無は願也阿彌陀は行也　歸命本願抄云善導大師の南無者即是歸命との給へるも南無といふはたすけ給へと云詞と釋する也その詞のしたに三心あるべければ亦是發願廻向之義其云成べし阿彌陀佛者即是其行はたすけ給ふべき本願の名號なれは也しかれば南無阿彌陀佛ととなふるはたすけ給へ阿彌陀佛といふ詞也いふことばに思ふ心はあらはるゝ故に南無阿彌陀佛ととなふる詞にたすけ給へ阿彌陀佛とおもふ心ありとしられたりこれによりて十聲佛を念すれば十願十行ありといへり以ニ此義一故必得ニ往生一との給へばたのもしかるべき事ぞかし云々　南無者梵語漢語翻ニ歸命一　悲華經曰南無者此決定諸佛世尊名號音聲也矣　法華要解云南無者歸依之辭矣起信論疏曰歸者是依投趣向義命者總ニ御諸根一一身之要人之所レ重莫レ不レ爲レ先舉ニ此無二之命一以奉ニ無上々尊一矣

甲冑は屋島に注す埋木の人しれぬ身と沈め共は西行櫻に注す

心に池のいひかたき　心の池といふも池の心と云も同し義也謡には心の池と池のいひと二つを兼ていへり　白氏文集云樓額題ニ鸚鵡一池心浴ニ鳳凰一矣朗詠集云物部安興詩苔生ニ石面一輕衣短荷出ニ池心一小蓋跡矣注云池心池底也如ニ潭心一矣桐壺巻云山のたゝずまひおもしろき所なるを池の心ひろくえなしてめでたくつくりのゝしる云々岷江云池の心とは池のまん中の心にありと云々池のいゐとは匠材集云堤をつきて水を通す穴也と云々　倭名抄云樋と書　准南子云決レ塘發レ樋矣　許愼云樋所ニ以通ニ陂竇一矣〔壬生二品〕行備なく詠むる空も廣澤の池の心にすめる月哉〔後撰〕小山田の苗代水はたへぬ共心の池のいひははなたし

修羅　錦の直垂は屋島に注す寶の池は柏崎に記す

夜の錦の直垂に萠黄匂ひの鎧きて金作のたち刀　實盛最後の裝束也　平家物語云赤地の錦の直垂に萠黄おとしの鎧きてくはかた打たる甲の緒をしめ金作の太刀はきと云々盛衰記云赤地の錦の鎧直垂に黑糸威の鎧を着十八差たる石打の征矢負て只一人進出て死生不レ知にそ戰ける云也　盛長私記云實盛も存旨ありければ赤地の錦の直垂に萠黄威の鎧着て鍬形打たる白星の冑の緒を締金作の太刀を帶廿四差たる鷹石打の征矢を負重籐の弓を持連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍當紫の小總の鞦掛て乘たり云々

金の言葉おほくせば　佛語をとなふるを云也　釋尊一代の聖教を金口（キンク）といへり　釋門正統云金口宣揚五十年正教矣

一念彌陀佛即滅無量罪當廨に注す廻向發願心は誓願寺に記す

慚愧懺悔の物語　懺悔は上に記す　慚愧とは内に恥をえるを慚といひ外に恥をしるを愧と云也　涅槃經曰慚者自不レ作レ罪愧者不ニ敎レ他作一矣　又云慚者内自羞耻愧者發露向レ人矣

さても篠原の合戰破れしかば源氏の方に手塚太郎光盛木曾殿の御前に參りて申やう　これより以下の詞平家物語を以てつゝけたり　信濃國住人手塚太郎金刺光盛淸和天皇後胤木曾義仲之郎從也壽永二年加州篠原の合戰に實盛を討同三年正月光盛江州勢田にて討死木曾殿は木曾に注す

聲は坂東聲にて候と申　坂東聲とはなまりたる聲を云也坂東は盛久に注す

あつはれ　異本義經記に適と書舊事本紀及古語拾遺に天晴と書舊事本紀云天照太神從二天窟一出坐之時高天原及葦原中國自得二照明一矣當二期之時一天初晴謂二阿波禮一言天晴也矣

樋口の次郎　樋口次郎兼光安寧天皇後胤木曾仲三兼遠子今井四郎兼平兄也　東鑑云壽永三年正月廿一日樋口次郎兼光木曾が使として石川判官代を征せんが爲に日比河內國にあり然るに石川逃亡するの間むなしく京に歸る八幡の大渡の邊におゐて木曾滅亡の事を聞といへ共押て以て入洛する處に源九郎の家人數輩馳向相戰の後是を生虜已上文略　平家物語及盛衰記には小玉黨が中へ降人となり義經にかくと申せば終に首を討るゝと有

六十に餘て軍をせば　令義解云在レ軍者年滿二六十一免二軍役一雖レ未レ滿二六十一身弱長病不レ供二軍役一者亦聽二簡出一矣禮記內則曰五十不レ從二刀政一六十不レ與レ服レ戎矣

鬢鬚を墨にそめわかやき討死すべきよし　童蒙先習云やさしき物さねもりがひんひけ染たるもと云々　輟畊錄曰中書丞相史忠武王覽レ鏡見二髭鬚白一傷二年且暮一盡レ忠之日短一矣因染レ之使レ玄矣劉禹錫云近來年少輕二前輩一好下染二髭鬚一作中後生上矣

氣霽風梳二新柳髮一氷消浪洗二舊苔鬚一　朗詠集に都良香の早春の詩也氣霽と云は天氣のはれたる也風の柳を吹なびかしたるは髮を梳に似たりと云也苔生たる岩に浪のかくるは鬚を洗ふに似たりと也古老說云良香上句を作て下句を作り煩て羅城門の前を過けるに鬼樓上にて聲して此下句を云けり良香恐れながら菅丞相に逢てかゝる詩なん作て候と申ければひが言なり下句は羅城門の鬼のつけたるとこそ云しかと仰られければ良香泪を流して三度拜し奉て實はしか侍りし事なりとぞ申けると云々見江談抄東齋隨筆

又實盛が錦の直垂をきる事私ならぬ望なり　實盛日比の武功に依て宗盛公より赤地の錦の直垂を拜領す　長盛私記云富士川敗軍の次第を入道相國尋られしに別當實盛が軍評定幷敵夜討に來るべき事を掌を指て申たる事且又忠淸が申せし事少も不

レ隱申す入道彌怒て忠清を暫く出仕を留て蟄居させらる次に實盛を召て今度富士川にての軍評定誠に其武功奇と云べし自今已後は一手の軍將たらしむべしとて右大將宗盛に仰て赤地の錦の直垂弁鷹の羽石打の征矢を給はりけり時に取て眉目と云べし實盛頂戴して退出す云々

宗盛公に申やう古郷へは錦をきて歸るといへる本文あり　項羽本紀曰富貴不レ歸ニ故鄕一如ニ衣レ繡衣行一誰知レ之矣　次の漢書朱買臣が傳の辭も此古語を以てづゝけたり宗盛公は湯谷に注す

實盛生國は越前の者にて候ひしが近年御領につけられて武藏の長井に居住仕り候ひき　實盛生國は越前國坂北郡丸岡の人にて後武藏の長井に居住すといへり御領とは武藏の長井は宗盛の御領所と云義也越前は山姥に注す武藏は墨田川に注す　領者韻會曰領錄也又統領也矣　方氏云承レ上令レ下謂ニ之領一又官領也又受也矣

もみち葉を分つゝゆけば錦きて家に歸ると人や見るらん　後撰集秋下に入よみ人不レ知と有六帖には伊勢が歌と有歌の心は上の項羽本紀の詞にてよめり

されば古への朱買臣は錦の袂を會稽山にひるがへし　前漢朱買臣字翁子吳人也家貧好讀レ書常艾ニ薪樵一賣以給レ食擔ニ束薪一行且讀レ書其妻亦負載相隨羞レ之求レ去買臣曰我年五十當ニ富貴一今已四十餘女苦日久待ニ我富貴一報ニ女功一妻恚怒曰如ニ公等一終餓ニ死溝中一何能富貴買臣即聽去後數歲隨ニ上計吏一爲レ卒將ニ重車一至ニ長安一詣レ闕上書待ニ詔公車一會ニ邑子嚴助貴幸一薦ニ買臣一召見說ニ春秋一言ニ楚詞一武帝說レ之拜ニ中大夫一與ニ嚴助一俱侍中久拜ニ會稽太守一上謂曰富貴不レ歸ニ故鄕一如ニ衣レ繡夜行一今子何如買臣頓首謝入ニ吳界一見ニ其故妻一妻夫治レ道買臣呼令下ニ後車一載中其夫妻上到ニ太守舍一置ニ園中一給食妻自經死買臣與ニ其夫錢一令レ葬悉召ニ見故人一與飮食諸有レ恩者報復見ニ漢書六十四卷ニ略　會稽山は舟辨慶に注す

名は末代に有明の　名は末代は屋島に注す有明は高砂に注す

心の水の底清く　止觀曰心水澄清珠相自現矣○照[千]月の心の水にすみぬればやかて此身に光をそさす

朗等は主を討せしとかけ隔て實盛とおしならへてく
む所を　盛長私記に手塚が郎等諏訪小太郎主を討
せじと中に隔り實盛と組たりと有平家物語盛衰記
には朗等と計有て其名をさゝず
あつはれおのれは日本一の剛の者とくんでうつよと
て鞍の前輪におしつけて　平家物語云日本一の剛
の者とくんでうすよなうれとて鞍の前輪におしつ
けて上下略　くんでうとは軍爭ひの義也平家物語に
くんでうすよとあるを此謠にくんでうつよといへ
りすをつとあやまりたる歟又は軍爭ひにつよきと
いへる義歟尋ぬべし但平家物語の説可レ然くんで
うすよはくんでうするよと云義也するよのるの字
を略してすよといへり　盛長私記云日本一の剛の
者と組てうつよとて我乘たる鞍の前輪に押付上下
略此説は一向よろしからず　武備志云軍諍盡備矣
孫子曰軍爭之難者以レ迂爲レ直矣　平家物語にな
うれと云詞はむかしは言葉の跡になうれといへり
今も言葉の跡につゞけてなうと云者あり此たくひ
也なうれの沙汰此處へ出あはぬ事なれ共平家物語
にあるにより書レ之

草摺をたゝみあげて　草摺は下散とも腰甲とも云
也草摺と云は惣名也但今世下の際を草摺とし上よ
り一二三四を芝摺と云也　組談云惣名を下散と云
下の板を芝摺共草摺共云也云々
風にちゞめる枯木の力もおれて　陸佐公石闕銘曰
戰同二枯朽一矣　班固漢書賛曰鐫二金石一者難レ爲レ功
摧二枯朽一者易レ爲レ力矣

謠曲拾葉抄卷四

養老

續日本紀曰元正天皇臨レ軒詔曰朕以二今年九月一到二美濃國不破行宮一留連二數日一因覽二當耆郡多度山美泉一自盥二手面一皮膚如レ滑亦洗二痛處一無レ不二除愈一在二朕之躬一其驗又就而飲三浴之一者或白髮反レ黑或頽髮更生或闇目如レ明自餘痼疾咸皆平愈昔聞彼漢光武時醴泉出飲レ之者痼疾平愈符瑞書曰醴泉者美泉可二以養一レ老蓋水之精也寔惟美泉即合二大瑞一朕雖レ痛レ虛何違二天貺一可レ大二赦天下一改二靈龜三年一爲二養老元年一矣　亦曰養老元年十二月丁亥令下美濃國立春曉挹二醴泉一而貢二於京都一爲中醴酒上也矣　又曰同二年壬申行二幸美濃國醴泉一矣　寢覺記云昔元正天皇の御時美濃國にまづしき男あり老たる父をもちたりける此男山の木を切て代となし父をやしなふ此父常に酒をあひす有時山に入て薪をとらんとするに苔深き石にすべりてまろびぬかの石より水ながれ出其色酒に似たり汲てなむるに日出度酒也日々に是を汲て父にあたふ御門此事を聞召て靈龜三年九月に其所へ行幸なりて御覽じけり至孝の心指を天神地祇あはれびてその德をあらはすなりとかんせさせ給ひて此男を美濃國の國司になされ酒の出る所を養老の瀧と名付られ同じき十一月に年號を養老と改られけり文略　私云養老の瀧は垂井より二里南なり垂井より伊勢の桑名へ行道の西なる山の麓也瀧の邊に山神の社ありかの木こりの翁を祭る也又寺あり名二養老寺一本尊は觀音也當寺の緣記に具に記せり略レ之

風もしつかに楢の葉のならさぬ枝ぞ長閑き　ならさぬ枝といはんとて上に楢の葉とおけり是太平記の御代をいへり高砂に注す　唐韻云楢堅木也矣●枝をたに吹春風もならさねはあやなく花も嬉しとや思ふ 後鳥羽

抑是は雄略天皇に仕へ奉る臣下なり　續日本紀に元正天皇と有然るを此謠に雄略と作るは誤也抑の字は高砂に注す臣下は卷上に記す　二十二代雄略天皇諱大泊瀨幼武允恭帝第五子也殺二眉輪王市邊押磐皇子一元年丁酉即レ位立二草香幡媛姬之皇女一

爲皇后治天下二十三年八月崩明年葬于丹比
高鷲原陵十月四日太子即位矣
扨も濃州本巣の郡に不思議なる泉出くる由を奏聞す
本巣郡は垂井の南也續日本紀に美濃國當耆郡多度
山美泉と有濃州は美濃なり班女に注す爾雅曰水本
曰源源曰泉正出曰濫泉側出曰汎泉湧出曰
濆泉所出同歸異曰淝異出同流曰瀵矣本草綱
目云醴泉味如醴故名出無常處王者德至淵泉
時代昇平則醴泉出可以養老飮之令人多壽矣
六帖云醴泉美泉也水之精也君乘土王其政太平則
醴泉出湧其政和平則醴泉瀵神靈滋液百珍寶用則醴
泉出黃帝時以醴泉爲瑞堯之時德茂清平則醴泉
出夏后時醴泉出矣　東觀記云漢光武中元々年醴泉
出京師飮之者痼疾皆除又晉武帝泰始八年河州醴
泉涌出飮之不老矣　日本紀云持統天皇七年江州
益須郡醴泉涌出十一月遣沙門法員善往員義等試
飮而後諸疾病人停宿益須寺而療者衆也矣
四方に道ある關の戸の秋津島ねやあまさがるひなの
さかひに　〽四方にみちあるとは君の御めぐみのひ
ろきを云也關の戸のあくるといひかけて秋津島ね
とつゞけたり秋津島は立田に注す天降ひなは道明
寺に注す
美濃の中道ほとなく　中道は不破の關と野上との
間にあり○家梓山みのゝ中道終しより我身に秋のく
るとしりにき好忠
年を經しみのゝお山の松陰に　○續後撰いかなりしみの
ゝお山の岩ね松獨つれなき年をへぬらん知家　小島
之遊云美濃のお山とかやははやかのお島のあたり
近く聞しかば行さきも今はほとおらしと中略名に
しおふ一松猶所のまゝにて昔の跡かはらぬよし此
あたりの下部かたりしをよくも尋きかさりしぞ後
までくやしかりしと云々　不盡河記云國人の說云
此山には天人の影向あるによりて人來の松とも名
付侍るとかや云々「稀にきてみのゝお山の松のう
れの嬉しさ身にも天の羽衣兼良
かよひ馴れる老の坂　吳竹集云年のつもりて山の
ことく高くなりゆくを坂にたとへて云也云々古今
實枝抄云老の坂はゆくにしたかふて苦しき故に坂
にたとふ文選云千里榮葉非爲後世誰人歸行
路唯獨悲老坂道下略○千首しゐて猶年の暮れ行道しら

は老の坂にも關やすへまし宋雅

故人眠早く覺て夢は六十の花に過　是は古語を以てつゝけたる歟追而可レ尋

心は茅店の月に嘯き身は板橋の霜に漂ひ　温庭筠商山早行詩鷄聲茅店月人迹板橋霜三體詩茅店はかや屋也嘯の字は呉服に注す

白頭の雪は積れ共　年の寄にしたかひて頭の髮の白くなるはさなから雪の降積に似たりと也鄒陽傳曰白頭如レ新傾レ蓋如レ故矣○古春の日の光にあたる我なれと頭の雪となるそわひしき康秀

奥山の深谷の下のためしかや　荊州記云南陽酈縣北八里有二菊水一其源旁悉芳菊水極甘馨又中有二三十家一不二復穿一レ井即飮二此水一上壽百二十三十中壽百餘七十者猶以爲レ夭矣○新古山河の菊の下水いかなれは流れて人の老をせくらん興風

長生の家にこそ老せぬ門は有なるに　保胤詩云長生殿裏春秋留不老門前日月遲矣　此詩は天子萬年の心を作れり長生殿不老門は天子の居也

松陰の岩井の水は　○拾松陰の岩井の水を結ひあけて夏なき年と思ひける哉惠慶

有難や雲井遙にみそなはす　みそなはすとは御覽ずる也天子或は佛神の語につかふ也平人の詞にあらず　古今假字序云今もみそなはし云々　堯惠注に天章と書　日本紀に玄覽矣　倭姫世記に見定如見矣天書に曰御覽矣

やかて老をも忘れ水の　忘れ水は攝州の名所又大和播摩に同名有爰は只老を忘るゝと計の諷詞にてわすれ水とつゝけたり又當麻注す

いさむ心はまし水の　和語抄云まし水とはよく出る水を云也云々　袖中抄云まし水とは鹹にきよき水を云又せき入る水をも云有二二説一一眞清水一益清水也云々○袖中古歌我門のいさら小川のまし水のましてぞ思ふ君ひとりをは

御覽候へ瀧坪の少し此方の岩間より出くる水の泉なり　養老の瀧のこなたに泉あり名二菊水一此うたひに作る處是也委く縁起に見えたり

細石の岩ほとなりて　此歌老松に注す

蓬が島の遠き世に今のためしも生藥　文選註云海在二三神仙一曰二蓬萊方丈瀛州一其山相去各七里狀似レ壺矣　又揚貴妃に注す生藥とは不死の藥を云也

壬生二品
○君が爲蓬が島もよりぬへし生薬とる住吉の浦
夫行河の流は絶すしてしかももとの水には非す流れ
に浮ふうたかたは且消かつ結んで久しくすめる色と
かや　長明方丈記云河の流れは絶ずしてしかも本
の水にあらすよどみに浮ふうたかたは且消且結び
て久しくとまる事なし云々　是發端の詞也　論語
子罕篇云子在二川上一曰逝者如レ斯不レ舍二晝夜一矣
長明此語にてつゝけたりといへりうたかたは夕顔
に註す
甕（モイタ）の竹葉は　白氏文集十七云甕頭竹葉經レ春熟階
底薔薇入レ夏開矣　甕の字もたい共かめ共訓ず酒
を入る瓶也竹葉は酒の名也猩々に注す
籬の荻花は林葉の秋を汲なりや　本文ありや追て
可レ尋
晉の七賢か樂　晉は西晉東晉の兩主あり　西晉は
世祖武帝受二魏禪一四主五十二年東晉は世祖元帝十
一主一百三年七賢者嵇康字叔夜阮籍字嗣宗阮咸字
仲容向秀字子期劉伶字伯倫王戎字濬仲山濤字巨源
矣此七賢は西晉武帝の頃の人々也常に竹の林に住
て琴をしらべ詩をうたひ酒を飲で世をすごしき是
を竹林の七賢と云也晉書及事文類聚に委く見えた
り万○いにしへの七の賢き人とてもほりするものは
酒にそあるらし
劉伯倫が翫ひ　晉書列傳十九曰劉伶字伯倫沛國人
也身長六尺容貌甚陋放レ情肆レ志常以細二宇宙一齊二
萬物一爲レ心矣　酒德頌云挈レ榼提レ壺唯酒是務焉
知二其餘一矣　文集七十酒功贊序云晉建威將軍劉伯
倫嗜レ酒作二酒德頌一以傳二於世一矣
曲水に浮ふ鸚鵡は石にさはりて遲く共手に先とりて
鸚鵡とは鸚鵡盃とて盃の名也海中にあふむ貝あり
本草綱目云鸚鵡螺形如二鸚鵡頭一其質白而紫也肉常
離レ殼出食肉爲レ魚所レ食則殼浮出人取レ之作レ杯矣
公乘億賦曰新豐酒色淸二冷鸚鵡盃之中一矣　石に
さはりて遲く共とは　菅雅規詩云礙石遲來心竊待
牽レ流遄過手先遮矣曲水に觴をうかめて觴の流れ
來る時詩を作り盃を取て酒をのむ也遲來れは待か
ぬる也又早く流れて來れ共詩はいまだ心にうかま
ね共先手を出して盃を取心也千首○早く過をそく來る
もさま〴〵にあかぬながれの花の盃宋雅
曲水之宴者　陸翽鄴中記曰華林園中千金堤上作二

兩銅龍相向吐水以注天泉池通御溝中三月三日石季龍及皇后百官臨池實習矣南齊志曰三月曲水會禊祭也漢儀灌東流水上不見東流爲河水晉中朝公卿庶民皆禊洛水之側趙王倫簒位三日會天淵池誅張林懷帝亦會天淵池賦詩陸機云天淵池南石溝引御溝水池西積石爲禊堂跨水流杯飲酒矣　續齊諧記曰晉武帝問尚書摯虞曰三月曲水其義何答曰漢章帝時平原徐肇以三月初生三女至三日而俱亡一村以爲怪乃招攜至水濱盥洗遂因水以泛觴曲水之義起於此帝曰若所談非好事尚書郎束皙曰仲治小生不足以知臣請說其始昔周公成洛邑因流水以泛酒故逸詩曰羽觴隨流波又秦昭王三日置酒河曲見有金人出奉水心劍曰令君制有西夏乃因其處立爲曲水二漢相沿皆爲盛集帝曰善賜金五十斤左遷仲治爲陽城令矣　日本紀云顯宗天皇元年春三月上巳幸後苑曲水宴矣　是本朝曲水のはしめ也

彭祖か菊の水したゝる露の養ひに佛德を受しより七百歳をふる事も藥の水ときく物を　史記舜紀註曰索隱曰彭祖即陸終氏之第三子籛之後後爲大彭亦稱彭祖自堯時歷夏殷封於大彭矣　論語正義曰老彭殷賢大夫即莊子所謂彭祖李云名籛堯臣封彭城歷虞夏商年七百歳矣　世本曰姓　名籛商守藏史周柱下史年八百歳矣　神仙傳曰彭祖諱鏗帝顓頊之玄孫至殷末已七百六十七歳而不衰老遂往流沙之西非壽終也矣　列仙傳曰彭祖服菊長壽其年七百餘歳顏色壯而如十七八歳也矣　大明一統志七曰彭祖昔隱於雲母山服雲母壽八百歳矣　或云周穆王の寵愛の兒に慈童と云者あり有時誤て帝の御枕を越たり臣此咎により慈童を酈縣山に流す帝不便に思召普門品の二句の偈を慈童に教ゆ慈童忘れじと思ひ彼山の菊の葉に此文を書付明暮是を誦する其したゝる菊水を飲て七百歳たもちける慈童は彭祖を云也云々　私云太平記に慈童は彭祖を云とあれ共別人成へし

養ひえては花の父母たる雨露の　此詩湯谷に注す

袖ひちて結ふ手の　ひちては浸也高水とも書○古袖ひちて結ひし水の氷れるを春立けふの風やとくらん貫之

陰さへ見ゆる山の井の　此歌釆女に注す五日の風
や十日の雨に　高砂に注す
我は此やま神の宮居　濃州多度山に山神の宮居有
此謠に作る處の木こりの翁を祭るなり縁起に見え
たり
又は楊柳觀音菩薩　山の麓に養老寺とてあり本尊
は觀音也揚柳觀音の事遊行柳に注す
瀧津心をすましつゝ　瀧津心とはたゆみなき心也
古○足引の山下水のこ隠れて瀧津心をせきぞ兼つる
水沼々として浪悠々たり　釆女に注す
君は舟臣は水水よく舟を浮へうかへて臣よく君をあ
ふく　荀子曰君者舟也庶人者水也水則載ㇾ舟水則
覆ㇾ舟矣　家語解曰孔子曰舟非ㇾ水不ㇾ行水入ㇾ舟則
没君非ㇾ民不ㇾ治民犯ㇾ上則傾是故君子不ㇾ可ㇾ不ㇾ嚴
也小人不ㇾ可ㇾ不ㇾ整也矣古○水の上にうかへる舟の
君ならはこゝそとまりといはまし物を伊勢
上清時は下も濁らぬ　荀子曰君子養ㇾ源々清則流
清矣　後漢書曰澄ニ其源ー者流清溷ニ其本ー者末濁矣
文集四十九云源一澄則衆流清矣

紅葉狩

桓武天皇八代之孫従五以下鎮守府將軍平維茂上總
守兼忠子陸奥守繁盛孫也依院御宇人度々有ニ戦
動ー故至ニ將軍ー俗呼曰ニ餘五將軍ー昔在ニ奥州ー爲ニ藤
原諸任ー被ㇾ攻殆死幸得ㇾ免而還殺ニ諸任ー其威振ニ東
北ー矣　且又佛道に心さし深くしてやさしき人也
今昔物語云平維茂と云者有けり此は丹波守平貞盛
と云ける兵の弟に武蔵守重盛と云者の子上總守兼
忠が太郎也其を曾祖伯父貞盛が甥幷に甥が子など
を皆取集て養子にしけるに此維茂は中にも年若か
りければ十五郎に立て養子にしければ字を餘五君
とは云ける也下略　或云近江國餘五の渦邊に暫棲給
ふ因ㇾ之號ニ餘五將軍ー後登ニ天台山ー聽ㇾ法云々　世
傳平維茂一年信州戸隠山に入て斬ニ妖鬼ーと云事舊
記に見えたり是等の義にもとつきて此唄を作るな
るべし
時雨をいそく紅葉狩深き山路を尋ねん　紅葉狩と
は紅葉を尋ね求むる也櫻狩茸狩のたぐひ也惣て木
葉は一時雨々々々にて色こくなれは時雨をいそく

とはいへり紅葉とは萬の木葉秋色づくを都て紅葉と云也もみぢと云和訓は紅染の色より名付たり生絹を染るを紅染といひ練絹を染るを紅粉染といひて色も別なり紅染は生絹を染るにもみ付るゆへにもみ染と云也秋の木葉此紅葉の色に似たる故にもみぢと云也ぢと云は絹地紙地といふがごとく染寫したる處をぢと云也〇家時雨行片野の原の紅葉狩賴むかけなく吹嵐かな　俊頼

八重葎しけれる宿のさひしきに人社見えね秋のきて
拾遺集秋部恵慶法師の歌也留りは秋はきにけり詞書云河原院にてあれたる宿に秋來ると云心を人々よみ侍けるに云々　三光院御說云八重葎の閉たる宿は人見えたり共さひしかるへきに人影は見えすして結句物侘しき秋さへ來るよと三重に見るへしとぞ云々

庭の白菊うつろふ色も　　うつろふとは色のかはるを云也　古今榮雅抄云うつろふとは色のかはりゆくを云衰　將黄　變と書花のうつろふはちるに非す盛なる時にかはりてちりぬへき色のつくをいふ云々　菊は外の花のやうにちらぬもの也詩にも散とは作らぬ也ちる散らぬと云に古來より評論あり略レ之〇續後拾月ならてうつろふ色も見えぬ哉霜より先の庭の白菊　爲子

朝の原は昨日より　　朝の原は和州葛下郡にあり
〇拾霧立て鴈ぞ鳴なり片岡の朝の原は紅葉しぬらん

谷川に風の掛たるしからみは流れもやらぬ紅葉ばを
古今集秋下春道列樹歌に「山川に風の掛たるしからみは流れもあへぬ紅葉なりけり　榮雅抄云山川に流れやらぬ紅葉は風のかけたるしからみにて有と也風の掛たるしからみ初てよみ出せる也云々
しからみは柵と書　說文曰柵編ニ樹木一也矣增韻曰柵編レ木爲レ之矣　三才圖會云案柵排レ木障レ水也若ニ溪岸深田ニ在ニ高處一水不レ能ニ及一則溪上流作レ柵遏レ水使ニ之旁出ニ下溉以及ニ田所一矣

渡らは錦中絶んと　　龍田に注す

面白や比は長月廿日あまり　　面白は三輪に注す長月は九月也　夜長月の上略也　下學集云長月夜長時分故云也矣〇拾秋深み戀する人の明しかね夜を長月といふにやあるらん　みつね

夕時雨ぬれてや鹿のひとりなく　　新古今集秋下藤

原家隆歌に「下紅葉かつちる山の夕時雨ぬれてやひとり鹿の鳴くらん　詞書云和歌所にておのこ共歌よみ侍りしに夕の鹿といふ事を云々　自讃歌註曰此ぬれてやひとり鹿の鳴らんと云はしかをのみ思にはあらす村雨うちしもみちやう〳〵うつろひものゝあはれとりあつめ泪とゝまらぬおりふしゑかのうちわひてなくを聞てかやうにつくりなせるにや云々　下紅葉とは都て下くさの紅葉ゑたるを云也

明ぬとて野邊より山に入鹿の跡吹をくる荻の下風
新古今集秋上左衛門督通光歌也詞書云和歌所の歌合に朝草花と云事を云々　宗祇抄云夜もすがら野邊に鳴鹿の山深く打佗て入跡に荻の下風打吹て鹿のねゑたひかほなるをかくよみつゝけたり云々

鎰雄がやたけ心の梓弓
鎰雄は田村に注す彌猛心は屋島に注す梓弓も屋島に注す

入野の薄露分て
入野は名所也　勅撰名所和歌抄云未勘國此名又在二山城一在所不レ知矣　今案山城國乙訓郡有二入野神社一神名帳に見えたり尋ぬへし
（新後撰）〇人ゑれす思ひ入野の花薄亂れ初めける袖の露哉

山陰のしかきの道のさかしきに落くる鹿の聲聞ゆなり
古歌とみえたりよみ人未レ考しかきは鹿垣と書或云狩の時射手（イテ）のたつ所木の枝などにてかこひみえぬやうにするを云一説に獵師のかよふ道を云共いへり

やことなきは賀茂に注す　上﨟は志賀に注す

幕うちまはし
周禮幕人注曰在レ旁云レ帷在レ上云レ幕皆以レ布爲レ之矣　說文に帷幕周幃也矣　歸藏曰女媧張二雲幕一而枚占二神明一雖二女媧之世一有二幕之名一而其物之興當二自レ周始一也矣　秘記云幕有二三名所一左云二水門破一右云二風體門一中云二天文破一也幕は五畾の物也天布物見布中布勝布芝打布と云也乳の數男幕は二十八廿八宿を表す廿八の內廿一めの乳を廿めの所にて重ぬる也是は廿八宿の內牛宿を除く心也女幕は乳三十六也　物見の事男幕は七つ女幕九つ也九曜七曜を表す手綱の長さ五丈八尺青黑白の三色に染るなり幕の詞の事紺幕をはしらすと云葬禮の幕をはると云敵の幕を引と云味方の幕をうつと云常にはうつおさむるあぐると云也たゝむゑほるは禁句也總て幕は家々の相傳あり習な

くては成かたき事也其外樣々の子細あり略レ之
屛風をたて　下學集云屛風屛退也卽退レ風之義也
矣三禮圖曰屛風之名出ニ於漢之世一故班固之書多
言ニ其物一徐堅爲ニ初學記一亦載ニ漢劉安羊勝等賦一然
則漢制屛風蓋起ニ於周一矣
岩のかけぢを過給ふ　嶮路と書さかしき道也○古世
にふれはうき社增れみ吉野の岩のかけ道踏ならし
てん
數ならぬは源氏供養に注すゑのぶもぢずりは小鹽に
注す
一村雨のあま宿り一樹の陰に立寄て一河の流れをく
む酒を千壽に注す
さすが岩木にあらされは　さすがは安達原に注す
伊勢物語云昔男ありけり女をとかくいふ事月日へ
てけり岩木にしあらねは心くるしくや思ひけん云
々源氏蜻蛉卷六人木石にあらざれば皆なさけあり
云々　白氏文集四云人非ニ木石一皆有レ情矣　文選鮑
照詩云人非ニ木石一豈無レ感矣○新六岩木にも物の心は
ありといへはさそな別れの秋は悲しき
所は山路の菊の酒　菊の酒といへは連歌也菊酒と
いへは誹言也齊諧記曰作ニ菊花酒一矣　世風記曰漢
武帝九月九日佩ニ茱萸一食レ餌飮ニ菊花酒一令ニ人長
壽一矣○古ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千
とせを我はへにけん素性
實や虎溪を出し古へも志をは捨かたき　酒の緣に
てかくつゝけたり虎溪は廬山の麓にあり　大明一
統志五十二曰南康府廬山在ニ府西北二十里一古名南
障世傳周武王時匡俗兄弟七人結レ廬隱ニ居於此一故
名其山疊障九層崇巖萬仞周五百餘里實南方巨鎭也
下略　同卷曰九江府虎溪在ニ府城南一晉僧惠遠送レ客
過レ此虎輒號鳴因名道書以ニ虎溪山一爲ニ七十二福地
之一一矣　虎溪屬ニ廬山一廬山高二千三百六十丈晉
惠遠法師廬山に白蓮社を結ひて居事三十餘年此山
の麓に橋あり常に安居禁足とて此橋より外へ出ず
或時陶淵明と陸修靜と二人廬山の麓に來る時に遠
法師書を以てまねく淵明云當山は禁酒也我常に酒
を好む飮事をゆるし給はゝ行かんといひけれは遠
師酒を許してけり扨て此二人を送り出て互に物語
などし覺えず虎溪を過たり二人遠師に向て云禁足
は破れたりといひて三人一度に手を打て笑ふ世に

傳ふ三笑の圖是也（廬山記及潯陽記取意）
林間に酒を煖て紅葉を焼とかや　白氏文集十四云
林間煖レ酒焼二紅葉一石上題レ詩掃二緑苔一矣　此詩は
樂天仙遊寺と云寺にて作る即興の詩也●林あれて（拾遺愚草）
秋のなさけも人とはす紅葉を焼し跡の白雪
紅葉衣のくれなゐ　衣色目云紅葉衣はおもてくれ
ないうら青し九月着レ之其外青紅葉はおもて青く
うらくれない黄紅葉はおもてきうら青し云々又雲
林院に記す
竹の葉の露　竹葉は酒の異名也猩々に注す
殊に飲酒を破りなは邪婬妄語ももろ共に　邪婬妄
語は東岸居士に記す　或僧酒を飲て醉伏たる處へ
隣家より鶏來るを殺して食す女來て鶏を尋るを捕
て犯す此事奉行所へ聞えけれはからめ行て子細を
尋ねらるゝに此僧右の様子を僞にけり猶罪重くし
て終に殺さるゝ也此僧たち所に五戒を破る此悪逆
皆酒よりおこりしなり見二大論一
又世にもたくひあらしの山櫻　（玉）●又たくひあらしの
山の麓寺杉のいほりに有明の月（俊成）
草葉の露のかことをもかけてそ頼む　露ほとの詞
をもたのもしく思ふは戀路のならひ也此かことは
少しと云心也櫻川に注す
うちつけ　玉井に注す
うつり行雲に嵐の聲すなりちるか正木の葛城の山
新古今冬の部藤原雅經歌也　玄旨抄云ちるかはう
たがひ也雲に嵐は聲有へからすされ共空に音する
は正木のちりて雲にましはるが嵐の音いするはと
よめり云々　自讃歌註云此歌はかくれたる所なく
見るまゝの妙なる歌也云々
神の契りの夜掛ては葛城に注す雲をめくらすは融に
注す
堪ず紅葉青苔の地又是涼風暮ゆく空に雨打そゝく
白氏文集十三曰秋雨中贈二元九一詩不レ堪紅 葉青苔
地又是涼風暮雨天矣
山陰に月待ほどのうたゝねに　河海抄云寝と書
莊子に假寝と書（同）●有明の月待程のうたゝねは山の
端のみそ夢に見えける（土御門右大臣）
無明の酒の醉心　性靈集曰尋レ雨歎久醉二無明酒一
不レ知二本覺源一矣秘藏寶鑰云徒縛二妄想之縄一空醉二
無明之酒一矣　小學嘉言曰程子曰醉生夢死不二自

覺一也陳選註曰言迷溺之深如レ醉如レ夢自レ生至レ死
而不レ悟也矣
雷火亂れ天地もひゝき　　雷の事山姥に注す　筆談
云李舜擧家爲二暴雷一所レ震雷火自二窓間一出矣　雷
火に殿屋燒失する事和漢共に多レ之　世傳雷火以
レ火滅すと云事は止觀六曰如下水生レ火水不レ能レ滅
還用レ火滅上矣　弘決曰雲中起火以二龍力一故水不
レ能レ滅以レ火照レ之其火則滅矣
遠近のたつきもしらぬ山中に　　山姥に注す
咸陽宮の煙の中に　　咸陽宮は秦始皇の作りし宮殿
也城のめぐり三百餘里始皇隱れしかはいくほとを
經ずして項羽の軍兵亂入て咸陽宮をやく火の消ざ
る事三月餘といへり　本朝文粹第一源順河原院賦
曰秦衰兮無二虎狼一咸陽宮之煙片々上下略　大明一統
志三十二曰西安府咸陽縣在二城西北五十里一本秦舊
縣孝公徙都レ此其地在二山南水北一山水皆陽故名二咸
陽一矣
七尺の屛風のうへに　　常に咸陽宮にたておかれた
り　西京雜記曰七尺屛風矣　朗詠集云源順親王入
學詩序曰江都之好二勁捷一也七尺屛風其徒高矣

八幡大菩薩　　弓八幡に注す

田村

或人云伊勢より紀州へ越る道に八鬼山と云有世に
やけ山越と云やけ山に非す八鬼山也此處に田村將
軍の宮居有むかし此山に八人の鬼神住んて勢州鈴
鹿山に出向ひ太神宮參詣の人々にさはりをなす則
此八鬼山は鈴鹿山の本城也云々　日本後紀云弘仁
二年辛卯五月大納言正三位兼右近大將兵部卿坂上
大宿禰田村麿甍二粟田別業一時年五十四田村麿者從
三位左京大夫兼右衛士督苅田麿子正四位上犬養之
孫身長五尺八寸胸厚一尺二寸目如二蒼鷹一鬢編二金
絲一有レ事而重レ身則二百一斤欲レ輕則六十四斤隨二
心所一レ欲怒レ目轉視則禽獸懼伏平居談笑則老少馴親
毘舍門化レ身來護二我國一矣　又云弘仁二年五月庚
申宜レ詔贈二坂上大宿禰田村麿從二位一矣　又云弘
仁二年冬十月賜二山城國宇治郡地三町一爲二故大納
言贈從二位坂上大宿禰田村麿之墓地一矣　王代一
覽云被二甲冑一帶二弓矢一向二王城一宇治郡栗栖野土葬

矣神皇正統云桓武天皇御宇東夷叛亂しけれは坂上田村丸を征東大將軍になして遣されしに悉くたいらけて歸まふてけり此田村丸は武勇人に勝れたりき初は近衛の將監になり少將にうつり中將に轉し弘仁の御時にや大將にあかり大納言をかけたり文をもかねたれはにや納言にのほりける子孫は文士にてぞつたはれる云々　桓武天皇延曆十四年田村丸は奧州の逆賊高丸を征伐すへき綸言有しかは此事延鎭に語云我今度東夷を征せん事貴僧の法力の加護を蒙らんと深く賴て既に奧州に趣く去程に高丸は駿州淸見關迄攻上る其時田村の軍兵を出しぬと聞て立歸り奧州を堅たりしが官軍の翟夷賊としきりに合戰す將軍の身方には矢種つきて今は射當べき鏃に事をかく折節不思議成哉小き比丘小き男子來て落散たる矢を拾ひて持來る田村是を得て軍の勝利を得神樂岡と云所にて高丸を射殺す又惡路王と云賊をも平げけり扨都に上て彼比丘及男女の事を延鎭に語ければ鎭云されは我法の中に於て勝軍地藏勝敵毘舍門の行をしける其しるしにやと云田村感じて則膽澤郡に八幡宮を建て其弓矢等を納め又達谷窟（タチコクカイハヤ）の前に九間四面の精舍をいとなみ鞍馬多門天を勸請し西光寺と號す此寺に東西二十里南北三十里の水田を寄附せらるゝと也　清水寺縁起及釋書文略

和論語云田村丸者苅田麿男也鎭王府將軍延曆大同年中討二取鈴下之蝦夷一弘仁帝御宇誅二仲成一甚有レ功矣　或抄云中比坂上朝臣田村五郎利成といひし人有近江國鈴鹿山に立烏帽子と云化生の女有て太神宮へ參詣する者或は都に登る人の命をとり財寶をうはふ事限なし或時田村に行て彼立ゑぼしを殺へしとの綸言を蒙りいそき彼山に入て化生が住家を見るに見えず漸みれは一の池有其中に蓬萊の三ツの島現じて是に住けり此化生の女は奧州きりはた山の惡路王と云鬼と契りをこめてもろともに此池に住けり田村者共を退治有しとなり文略　此謠は是等の說に本付て作るなるへし

鄙の都路へたて來て九重の春に急かん　匠材集云ひなの都とは國毎の府中也云々　鄙とは田舍也萬葉仙覺抄云ひなとは日なかきと云事なり田舍はさびしく日永く覺ゆる故にしかいふ也云々　九重とは天子の門九有是になそらへ帝都を九重とは云也

楚辭云君之門以九重矣　文選呂向注云九重天子門數也矣　玉篇云天子門有レ九謂關門遠郊門近郊門城門皐門庫門雉門應門路門象ニ天有ニ九重一矣

是は東國方より出たる僧にて候　東國とは畿內の東東海十五ケ國東山八ケ國を指て東國と云也　觀世流秘書云僧わきのならひ住僧客僧法印惣して名のある僧は眞にうたふ名のなき諸國一見の僧はうつほ僧と云くらゐなくすら／＼とかろくうたふべしと云々　僧は要覽云梵語具云ニ僧伽一唐云レ衆今略稱レ僧善見律云等戒等見等智等衆是爲レ僧矣

比もはや彌生なかはの春の空　彌生は三月の異名也春三月の比若草のいやがうへにおひ出る故に彌生といふ彌生はいやおひの心也　下學集云一切草葉芽至ニ此月一彌生故云ニ彌生一也矣於ニ長嘯亭一催ニ花宴一和歌之序云藤原爲緣それ三春の中にもいやおひの月は勝れたる折節にて云々新六帖○梓弓すゑの丶草のいやおひに春さへふかくなりそしにける續古○まれにあふ彌生の月の影そへて春におくれぬ花を見る哉光俊

霞むそなたや音羽山瀧のひゞきも靜なる　音羽山音羽の瀧は牛の尾山の內也　牛尾山記云宇治之北郡有レ山曰ニ音羽一凡縱横八九里矣　音羽の瀧は有ニ牛尾山坂中一淸水山を音羽山といひ又淸水の瀧を音羽の瀧共いへり牛尾の音羽の瀧の末なれば云也古歌に音羽の瀧とよめるは牛尾の音羽の瀧なり淸水の瀧は古歌に只淸水の瀧とつゞけたり　和名集洛外名水部云音羽水淸水飛泉是也矣

地主權現の花盛り　神社考云淸水寺鎭守本地文殊號ニ地主權現一大己貴之垂跡也四月九日祭レ之矣一說云所レ祭天手力雄神也矣　又或說云地主權現は祭る所田村將軍の靈神也云々　默雲稿及五鳳集に地主の花を作れる詩有略レ之

大慈大悲の春の花十惡の里にかうはしく三十三身の秋の月五濁の水に影淸し　大慈大悲は三井寺に注す十惡は東岸居士に記す此十惡の人をも觀音の功力に依て助け給ふを十惡の里にかうばしくとはいへり十惡の里とは諸惡に手馴て此土に住るを云三十三身は普門品に出たり略レ之　倶舍論曰五濁者一壽濁二劫濁三煩惱濁四見濁五有情濁劫減將レ末壽等鄙下如ニ滓穢一故說名爲レ濁矣　五濁の事

委く地持論に出たり三十三身を秋の月にたとへそ
の光り五濁の水にうつりて衆生のにごりをすまし
給ふとの心也〇拾玉三十あまり三のちかひのうれしき
はさま〴〵になるすがたなりけり
千早振神の御庭の雪なれや〱　切ぬさと云事有紙と
麻とをこまかにきり庭にまきて神をいのる也是雪
の降に似たる也〇廣田社歌合はふり子がさす榊葉に降雪を散
て亂るゝぬさかとぞみる大法師蓮阿　詞林采葉云ちはや
ふると云事先達の異義多し或は千の磐屋に經フルとい
ひ或は千の磐を破るといひ又昔社のなかりし程は
茅葉にて葺たる屋に神は住給ひけるを申共其外さ
まざ〳〵申侍るにや所詮みちはやくふるといふ事也
日本紀曰于レ時高皇産尊以二眞床追衾一覆二於皇孫一
天津彦火瓊々杵尊使レ降レ之皇孫乃離二天磐座一且排
分天八重雲稜威之道別々々而天二降於日向襲之高
千穂峰一矣　是を以て心得るにちはやとはみちは
やしと云詞也ふるとは天降給ふ詞也皇孫尊路早降
と云也云々
白妙に雲も霞もうつもれて　萬葉仙覺抄云白妙と
はものをほむる言葉のその一也しろと云もたへと
云も共にほむる詞也云々
いつも花の比は木陰を清め候程に花守とや申さん又
宮仕へとや申べき　拾遺集十六雜春部云延喜の御
時南殿にちりつみて侍りける花をみて源公忠朝臣
「とのもりのとものみやつこ心あらば此春計朝き
よめすな」　とのもりとは主殿寮の事也禁庭の掃
除を職る也とものみやつことは主殿つかさの下部
伴氏の者なりみやつこは御奴と書師説に神につか
ふるを宮仕と書禁中につかふるを御奴と書云々朝
きよめすなとは散つもる花をなはき捨そと也　謠
の心は花の木陰を清め候程に花守とや申さん又地
主權現に仕へ申者なれば宮つことや申べきと云事
也下心は右のとのもりの歌をふくみていへり
抑當寺清水寺と申は大同二年の御草創な　拾芥抄云
清水寺中納言坂上田村麿延暦十七年造レ之千手矣
伊呂波字類抄云清水寺山城國愛宕郡八坂郷延暦十
七年戊寅中納言田村麿建二立之一中略　建立伽藍者
今清水寺也矣　帝王編年紀云延暦十五年三月坂上
田村麿建二立清水寺一寶龜九年沙彌延鎭於二淀河一
見二金色流水一尋レ源至二清水寺瀧下一于レ時有二白衣

居士名曰行叡住此處二百歲許心念觀音口誦千手咒年來待汝此處可建立堂此前株者可造觀音本也云々　即失乎山科東嶺落所著履定知觀音所現迄予今年止住田村開此旨即壞我家為堂矣（暦代編年集成同之）

此謠に大同二年の草創とあれ共右の說には延曆十五年或は十七年と有此等相違歟但緣起云寶龜十一年初建立延曆十七年更造大佛殿大同二年又造伽藍比觀音寺矣　河海抄云緣起云清水寺者在山城國愛宕郡八坂鄉東山千手觀音靈驗之地行叡居士孤庵之跡也寶龜十一年初建立草堂（下略）　大同は人皇五十一代平城天皇の年號也　帝王編年紀云大同四年延曆二十五年五月十八日改元依即位也矣　日本後紀云平城天皇延曆二十五年丙戌五月即位於大極殿御年三十三改元大同矣　草創とは草庵也俗に草むすびと云心也　論語憲問篇云子曰為命裨諶草創之朱注云草略也創造也謂造為草藁也矣　或說云引清水寺緣起抑當寺は往昔當國相樂郡木津川上大和國にあり今此處は桓武帝平安城遷都の後寺を此地に移さるゝ也又云元亨釋書以木津川作淀川是虎關和尚以推察せり其故は當寺は東山其草創の地と決する故に木津川をとらん事不當淀川也と今案也不可用云々

私云此說不審既に當寺東山草創事今昔物語帝王編年記暦代編年集成色葉字類抄等に詳に載たり是釋書の文法と等しくして殊に尋源至清水寺瀧下と有又淀川と有又山科東嶺落履ともあり是等の文を見る時は東山草創の事疑なきもの歟但當寺緣起の趣なれば難じかたし又云木津の川上は大和に非ず伊賀也猶尋ぬべし

昔大和國小島寺と云所に賢心といへる沙門　壒囊抄云子島寺住持報恩大師弟子賢心法師者少年出家後六時三昧累年不怠苦修練行積日無倦遂求山林厭聚落又我師與報恩大師共奉造八尺四十臂千手像于時改賢心曰延鎭（文略）　子島寺在大和國高市郡八多鄉土佐町之東十町餘元亨釋書云廢帝天皇天平寶字四年三月報恩法師於和州高市郡子島神祠畔建伽藍安一丈八尺觀自在菩薩像及四天王像號曰子島寺矣　或曰子島寺在土佐邑東今古堂存又寺東四町許有報恩塔矣

大和國舊事紀云橿原朝御世以二椎根津彦命一爲二大倭國造一矣　續日本紀云養老四年十一月乙亥堅下更號二大縣郡一天平九年十二月改二大倭國一爲二大養德國一同十九年三月依レ舊爲二大倭國天平勝寶年月日改爲二大和國一矣　沙門四十二章經云佛言爲レ道識レ心達レ本解二無爲法一名曰二沙門一矣　眞宗皇帝御注曰沙門梵語合レ云二沙迦門囊一已略二其二字一此云二勤息一謂能勤二修衆善一勤二息諸惡一矣

有時こつ河の川上より金色の光指しを尋登てみれは

こつ川は木津川を云也山城相樂郡也古歌にもこつ河とよめり泉川の一名也此川源は伊賀國山田郡阿和と云所より流れ出てするゑは淀川に落る也盛衰記云重衡中將小津に着給へはと云々中右記に生津(キツ)と書〇若(夫木)こすは誰にかみせんこつ川の瀬々にうつまく瀧の白糸讀人不知

清水寺の瀧の流れ鴨川に落入つて末は淀川に流れ行然るを此謠にこつ川の川上とうたふ方角相違せり但當寺緣起に木津川とあるにてつゝけたり

彼翁語て云我は是行叡居士といへり　今昔物語云瀧の西の岸の上に有二一草菴一白髮老翁あり其容七十許也上下略　曆代編年集成云于レ時有二白衣居士一名曰二行叡一住二此處二百歲許矣　翁說文曰鳥頸毛也又老稱言其頸毛白而彊短若二此鳥頸一矣　居士は自然居士に注す

汝一人の檀那をまち大伽藍を建立すへしとて

一人の檀那とは田村丸を指て云　釋書云延曆十七年鎭守府將軍坂上田村獵レ鹿來レ此因思レ菴延鎭語二上事一將軍感嘆與二妻善高子一謀移二口宅一爲レ寺刻レ像置焉上略　檀那梵語云二陀那鉢底一唐云二施主一　名義集云檀施也行レ施越二貧窮海一矣　法界次第云秦言二布施一若內有二信心一外有二福田一有二財物一三事和合心生二捨法一能破二慳貪一是爲二檀那一矣　伽藍法華玄義云伽藍者天竺言也此云二精舍一即賢聖所住處也矣

名に流れたる　櫻川に注す

實や安樂世界より今此娑婆に示現して我等か爲の觀世音　此意盛久に注す安樂世界に實盛に注す　娑婆とは此界也　名義集云梵語索訶舊曰二娑婆一又曰二娑訶一皆訛楞伽翻二能忍一悲華云何名二娑婆一是諸衆生忍二受三毒及諸煩惱一能忍二斯惡一故名二忍土一矣

末世愚癡の凡夫を救給ふ菩薩なれは我等が爲の觀世音とは云也

先南に當て塔婆の見えて候は如何成所にて候そ

清閑寺本堂の北に高倉院の陵有今爰に云所是歟百練抄云養和元年正月十四日太上天皇崩ニ于六波羅頼盛卿亭ニ御年二十一號ニ高倉院ト奉レ葬ニ閑清寺ニ矣　塔婆殘增圖經曰原夫塔字此方無ニ書乃是初隨譯本非ニ西土之號ニ若依ニ梵本ニ瘞ニ佛骨ニ所名曰ニ塔婆ニ矣　そとは小町に注す

あれこそ歌の中山清閑寺　歌の中山は滑谷道の北清水より清閑寺へ行路の西にあり宗祇名所集云清水寺の南に歌の中山と云所あり云々　伊勢守記云今出河殿廉中安產伊勢守爲レ納ニ胞衣ニ考ニ吉方ニ當年巽方吉也依て東山滑谷を經て歌の中山へ出ニ給ふ典藥頭狩衣にて參向す歌の中山にての處は清水より清閑寺へかよふ路より弓杖十四丈許あり云々親元日記同レ之

清閑寺々記云昔此等に眞燕僧都と云人有ある夕暮に門外にたゝずみて行かふ人を見居たる折節髮貌めてたき女只一人行を見て忽染心おこりけれど物いひかくべき便なくて清水への道は何れぞと問ければ女「見るにたにまよふ心のはかなくてまことの道をいかてしるへき」といひ捨てやがて姿をみうしなひけるとぞ女は化人にて侍りけるにやその歌よみし所をは歌の中山と云となん已上

清閑寺在ニ清水寺南滑谷北ニ　當寺緣起云清閑寺者桓武天皇御宇延曆二十一年紹繼法師開レ之本尊千手觀音御長三尺五寸菅丞相之眞作也文略　拾芥云清閑寺佐伯公行建立矣　寺記云清閑寺千手千眼觀自在菩薩垂應之道場高倉上皇陵廟之陳跡也矣

今熊野　湯谷に注す

上見ぬ鷲の尾の寺　藻鹽草に上みぬ鷲の雲のかよひ路とある歌にてつゞけたり三井寺に注す

鷲尾寺は靈山寺を云也　八雲御抄云鷲山は靈山也云々　拾芥抄云靈山釋迦在ニ清水寺北法觀寺東ニ矣　見聞隨身抄云元慶八年甲辰建ニ靈山寺ニ矣　今の正法寺阿彌陀堂國阿の開基也　私云天竺靈鷲山を表して鷲の山共靈山共云か

こと心なき春の一時　花より外に物思ふ事なきと云心也伊勢物語云男こと心ありてかゝるにやあら

んと思ひ云々眞名本に異情と書
おしむべしや春宵一刻直千金花に淸香月に影　東
坡詩云春一刻直千金花有二淸香一月有レ影矣○お家
しめたゝ猶一時も春の夜は千々のこかねにかへん
物かは光廣
名にしおふは江口に注す時めけるは野宮に注す
花の都　花洛共云花は稱美の詞也　師說云昔は都
の町に櫻と柳とを植たり櫻は水を生る德ある故火
災の恐れなしと也
素性法師歌に柳櫻をこきまぜてとよめる是也云
々
靑陽の陰綠にて　梁武帝纂要云春曰二靑陽一矣　舊
抄に靑揚と書
音羽の瀧の白糸のくりかへしかへしても　拾玉○くり
返し亂れて人を渡哉淸水寺の瀧の白糸
只賴めゑめちか原のさしも草我世中にあらんかぎり
は　新古今集第二十釋敎部卷頭の歌也詞書云此歌
は淸水觀音御歌となんいひつたへたると云々上の
五文字猶たのめと有袋草子に此歌の注云もの思ひ
ける女のはか〳〵しかるまじくは死なんと申ける

に示けると云々　袖中抄云下總國にゑめつの原と
云所有其原にさしも草多くおひたりされはしめつ
をしめちと云か同事也さしも草とはよもぎをいふ
云々　或抄云三界六道一切衆生と書てしめちが原
のさしも草とよめり
實や枯たる木なり共花さくら木のよそほひ　千手
陀羅尼經云此大神咒咒二乾枯樹一尙得二生枝柯華果一
何況有情有識衆生身有二病患一治レ之不レ差者必無二此
處一矣　金湯錄云十年拜二枯樹一枯樹生レ花矣　漢書
云昭帝時昌邑王國社有二枯樹一復生二枝葉一矣　唐書
云武德四年亳州老子祠枯樹復生二枝葉一矣　新續古
今集に淸水觀音の御歌に「梅の木の枯たる枝に鳥
のゐて花さけ〳〵と鳴そわりなき
長閑き影は有明の天も花にえゝりや　朗詠集云菅
家詩序云春之暮月月之三朝天醉二于花一桃李盛也
下略　天醉二于花一とは花は紅といへは花の盛りな
る時は其花の色に映じて空の色紅に見ゆるを醉の
やうに喩へたる也　有明は高砂に注す
おもしろの春へや　慈鎭和尙古今集注云はるべと
は春部也はると云詞也へは助け詞也むかしへと云

もむかしと云詞也と云々　面白は三輪に注す
芦垣のまちかき程か　芦垣とは間ちかくあめる物なれは云也○芦垣のまちかき程にすむ人のいつかへたてぬ中となるへき（六百番）
遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥哉　古今集の歌也山姥に注す
田村堂　在ニ清水寺朝倉堂側一　田村丸の木像行叡居士延鎭の像あり　或云寛永六年己巳九月十日清水寺炎上同八年二月征夷大將軍家光公造ニ立於清水寺一此時始建ニ田村堂一矣
月のむら戸を押あけて　萬葉集にねりの村戸とよめり仙覺抄云ねりのむら戸は麻がらをあみたる戸也編戸と書云々詞林采葉云むら戸は妻戸のあまた有を云也云々
內陣　佛殿に內陣外陣と云事は本內裏清涼殿前紫宸殿の西に陣の座と云有節會の時諸卿の座する所也是に本付て云歟　爾雅曰堂途謂ニ之陳一註堂至ニ門徑一也矣　戰國策曰美人充ニ下陳一猶ニ下堂一矣
讀誦　法華科注云看レ文爲レ讀不レ忘爲レ誦矣
一河の流れを汲て　千壽に注す

人皇五十一代平城天皇の御宇に有し　帝王編年記云人皇五十一代平城天皇諱安殿號ニ奈良帝一桓武天皇長子母曰ニ皇太后藤原乙牟漏一內大臣贈太政大臣正一位良繼女也寶龜五年甲寅誕生延曆四年乙丑十一月廿五日立ニ太子一年十二大同元年丙戌五月十八日即ニ位于太極殿一年三十二　御宇四年自ニ大同元年丙戌一至ニ同四年己丑一都ニ平城宮一云々天長元年甲辰七月七日崩御年五十矣　御宇とは日本紀にあめかしたしろしめすとよめり　釋名曰宇羽也如ニ鳥羽翼自覆蔽一也矣　尸子曰天地四方曰レ宇又屋四方垂爲レ宇言統ニ御天地四方一也矣
坂上の田村丸東夷をたいらけ悪魔をしつめ　東夷とは奥州の逆賊を指て云也此謠に平城天皇の御宇と作れり田村東夷を亡し給ふは桓武帝延曆十四年也委く清水寺緣起に見えたり　田村將軍の事上に記す追て考に或云田村將軍は後漢靈帝後胤高貴王と云人昔此國に來て住民となる帝あはれみ丹波國坂上の庄を給はりて知行とす其末葉と云々　神明鏡云多門天より神通の弓矢を給て高丸を令ニ對治一歸洛仕て鞍馬に奉レ納彼窟には利仁か等身の毘沙

門を奉二安否一彼利仁將軍は大職冠よりは九代貞名大臣よりは六代の後胤也云々

天下太平の忠謹たりしも　三略曰夫三皇無レ言而化流二四海一故天下無レ所レ歸レ功帝者體レ天則レ地有レ言有レ令而天下太平下略　白虎通曰天下太平符瑞所二以來一至者以爲王者承レ天順レ理調二和陰陽一々々和萬物序矣

忠謹忠節也晉書曰所レ謂劉超出二納王命一以二忠謹一稱矣

然るに君の宣旨には　禁秘抄云追討宣旨有二僉議一三關警固諸衛帶二弓箭一追討使給二宣旨一於二陣邊一大外記給二其人一其人作レ立給レ之熟　又召二御前一之時開二弓場南戸一參入只時不レ開レ之直職事給二宣旨一矣

都鄙安全　都はみやこ鄙は田舍也　左太沖吳都賦曰弁二都鄙一而爲レ一矣　馬季長長笛賦曰尊卑都鄙翰註曰都謂二天子所レ都鄙邊邑也矣　安全者爾雅注云安靜定也廣韻寧也平也矣　說文曰全完也矣　活法云萬國樂二安全一矣

歡喜微笑　歡喜慈恩大師通贊曰顏舒曰レ歡神悅曰レ喜故云二歡喜一矣　微笑は少笑也　宋玉好色賦曰含レ喜微笑矣

凶徒　元次山大唐中興頌云兇徒逆儔矣惡黨の義也

普天の下卒土のうちいつく王地にあらさるや　毛詩曰普天之下莫レ非二王土一卒土之濱莫レ非二王臣一矣　朱子詩傳曰普徧也率循也矣　皇甫湜曰一人莫レ非二王臣一尺土莫レ非二王有一山川林藪之所二產殖一雨露春秋之所二成就一莫レ非二王財一矣

關の戸さして相坂の　關の戸さゝすと云事難波に注す　逢坂帝王編年記云神功皇后元年皇后命二武內宿禰一率二數萬衆一令レ討二忍熊王一爰武內宿禰出二精兵一而追レ之遇二于逢坂一以破　號二其處一曰二逢坂一也日本紀同レ之　願注密勘云相坂關は山城と近江との境也云々　大關道小關道とて有平家物語にかけり又明月記にも見えたり大關道は常の海道を云小關道は廻地藏堂の東より左へ行路也（續古）關の戸をさゝぬ御代こそ立歸り又逢坂の賴めなるらめ宗直

粟津の杜　兼平に注す

かけろふの石山寺　古歌にかけろふの石ともかけろふの岩ともつゞけたりかけろふの岩は弓八幡に

注すかけろふは源氏供養に注す○露の世と見るに（石山月見の記）
つけても蜻蛉の石山ふかき寺をしそ思ふ藤原公條
石山寺拾芥抄云近江如意輪朗辨僧正矣　或曰石山
寺聖武帝御願良辨師開基本尊観音如意尊容土佛二
臂丈六興正菩薩之作也藏ニ御長六寸小像於胸間ニ此
小像者聖徳太子御本尊也云々　聖武帝東大寺建立
の時十六丈の遮那の銅像を鑄給へり于レ時多く金
箔を求め給へ共黄金なかりしかば帝良辨法師に語
て云傳聞和州金峯山は其地黄金也とあればいそぎ
金剛藏王にいのり金を得へしと良辨勅を受て金峯
山に入て持念しけり夢に藏王告云此山にて黄金を
求る事思ふまゝならず汝聞近州勢多の縣に一ツの山
あり如意輪観自在の靈地也彼地に至て持念せば黄
金を得へしと良辨おしへの如く彼の地に趣く于レ
時一人の老翁大石の上に坐して魚を釣良辨問汝は
何人ぞ答云は我是山の主比良明神也此地觀音の靈
場也といひて失ぬ良辨其跡に庵を結ひ如意輪の像
を安置して祈りしに程なく奥州より初て黄金を奉
る其後丈六の大悲の尊像を初の刻（キザミ）安置の像を此丈
六の像の内にこめ給ふと也已上釋書文略

頼はあひに近江路や勢田の長橋ふみならし　近江
國始書ニ淡海ニ後改ニ近江ニ　國造本紀云淡海國造志
賀高穴穂朝御世彦座王三世孫大陀牟夜別定ニ賜國
造ニ矣大和本紀云近江國とは湖水の名也近の字を
用る事は天智天皇の御時都を大津に建たる其時大
内に近き湖なるを以て近き江といひし也云々　勢
田は栗本郡栗津の南也　或云勢田橋は大小二あり
小橋は廿七間幅四間大橋は九十六間幅四間中島之
間十五間傳云後宇多院御宇恩性律師初而造レ之長
橋大橋唐橋共云又とゞろきの橋共云也云々○今度（蒙求和歌）
は春の日影に近江路や瀬多の長橋ふみもたがへす
弓馬の道も先かけんとかつ色見せたる梅がえの（家）
○冬木にはかつ色みせて行末の春の匂ひをこむる
梅が香　太平記に長崎九郎左衛門尉師宗發句に「
さき懸てかつ色見せよ山櫻
あら金の土も木も我大君の　土も木もの歌は奥に
注す　荒金（アラガネ）は渾金（同）　壙地と書　細川玄旨聞書云あ
らかねは地といはん枕詞也古今序云久かたのあめ
にしては下てる姫にはしまりあらかねの地にして
はすさのおのみことよりそ起りけると云々是はあ

らかねまかねと云々事の有也まかねとは吹たる金
のまことの金に成たるを云也あらかねとはいまた
ふかざるさきの金を云也ふかぬ金はつち也故に荒
金の地と云也云々（拾遺員外）わきそめし初もえらすあら金
の土よりなれる四方の海山

猶數々にますらをかまつとはえらて小男鹿の　益（マス）
雄（ラフ）　健男（同）　防人（同）　増荒男（同）　丈夫（同）　男子と書萬葉仙
覺抄云益雄はたけき兵を云也云々　詩經江漢篇曰
江漢湯々武夫洸々矣　謠の心はますらをを獵師に
いひかけたり古歌にも多くよめり待といへるは狩
人の鹿まちするによせていへり童蒙抄云さをしか
とはめしかの角おいたるを云と古人申けれと猶小
きおしかをいふ也と云々（風雅）ますらおは鹿待事のあ
れは社えけきなけきも絶えのふらめ　俊成

鈴鹿の御祓せし世々迄も思へは嘉例なるへし　勢
陽雜記云鈴鹿は東海道の驛村也江州土山への行程
二里嶮路也云々　鈴鹿倭姫世紀云倭姫命到二伊勢
國一時川俣縣遠祖大比古命參相汝國名何問賜白味
酒鈴鹿國白矣　鈴鹿川にて誰人の御祓せし事をい
ふそいまた不レ考尤齋宮下向の時鈴鹿に頓宮をま
うけ給ふ事はあれど御祓え給ふ事は見えす　今案
是は御祓に非ず御いそき也齋宮野の宮の御うつろ
ひはてゝいそき伊勢に下向え給ふ也新勅撰に道俊（ミチトシ）
歌に「急共けふはとまらん旅ねする蘆の刈ほに紅
葉ちりけりとよめるも齋宮御いそきの事を兼てよ
めり田村將軍も鬼神退治の宣旨をかうふりいそき
勢州へ下り給ふにつきてかの齋宮御いそきを取出
て思へは嘉例なるへしとはつゝけたり

千方といひし逆臣につかへし鬼も王位を背く天罰に
て

神社考云世傳千方者天智帝之叛臣也千方役二
使四鬼一所謂金鬼風鬼水鬼隱鬼在二伊賀伊勢之間一
不レ順二王命一於レ是勅二紀友雄一討二千方一友雄乃往
詠二和歌一送レ之一「草も木も我大君の國なれはいつ
くか鬼のすみかなるへき」一諸鬼讀レ之感而散去千
方失レ勢友雄終討二滅之一已上　私云千方が事出姓定
かならす系圖に有二鎭守府將軍藤原千方者一秀郷之
孫而千常子也或秀郷子千常弟共云然共是朱雀帝以
後人也追て考へし
友雄が歌は北條家の本にいづくか鬼の宿と定めん
と有　伊水温故云伊賀國勞生村三國嶽に千方將軍

の籠居の舊跡あり谷は北南十五間東西八間門は北向石柱二本有長一丈一本はおれたり　村上天皇御宇藤原千方正二位を望しに其甲斐なかりけれは是を逆心し日吉の神輿を取奉り彼山に取籠る千方にしたかふ山法師山の注記三河坊兵庫竪者筑紫坊此四人かれにしたかふ此法師等が力大木をたおし勢ひ嚴名をやふるゆへに官軍多くうたれて已に引しりそくべき所に討手の大將紀友雄六根淸淨の中臣祓を誦し神功ならひなかりしか共千方きく共せず然る所に河內國の領主岡田氏紀納言を勅使として一首の歌あそはして三國か嶽にはせ向て矢箭に取つけ敵陣に射たりしかは四人の惡徒是を見るに（火鬼水鬼土鬼隱形鬼と云たるはこれかの）「土も木もわが大君の國なるにいつくか鬼のすみかなるらん」との御詠歌なり惡徒これをみ扱は我國にはあらじといひて忽化生の形と成て大地をふみ破てならくの下に入けりと云其跡此山に歷然たり彼凶徒等に見捨られ千方は三國嶽を逃さり勢州家城の里瀨戸が淵の傍にして討死す紀友雄首を取て都に歸るとぞ云々下略

天罰何書曰我則致二天之罰一矣　春秋元命苞曰罔言爲レ詈刀詈爲レ罰罰从レ罔陷二於害一也矣　初學記云刀守レ詈爲レ罰或作レ罰用レ寸寸丈尺也言納（心ハ）以二繩墨一之事一矣

鈴鹿山ふりさけ見れは　〻鈴鹿山は伊勢近江伊賀三國の堺に有坂の下より土山へ越る間の山也坂の下に鈴鹿の宮有　ふりさけ見るとはふりあふきて見る心也　萬葉集に振放見と書堯惠抄に振離（フリサケ）と書し

續後撰　鈴鹿川ふりさけ見れは神路山榊葉分ていつる月影　僧正行意

阿野の松原　阿野は郡の名也鈴鹿より六里東也世紀云倭姬命到二伊勢國一時河野縣造遠祖眞桑枝大命汝國名何問賜白草陰阿野國白矣二　風土紀殘帖云阿濃津仁德天皇三年乙亥定二三津一其一也矣　勢陽雜記云あのゝ松原は古來名所と聞侍れ共今はなし是も明應年中の地震以前には津町と海とのあはひにふりたる松原有と云々その松原の邊入江物ふかく船のかゝり又往來のたよりよろしき湊なりけるに地震の時破却して松原共にあとかたもなく湊も今の遠淺に成かはり侍ると云々〇鈴鹿山ふりはへ越て見渡せはみとりにかすむあのゝ松原　家長

千の御手毎に大悲の弓には智恵の矢をはめて　千手千眼經曰若爲降ニ伏一切魍魎鬼神一者ト當レ於ニ寶劒手一矣　又曰若爲ニ榮官益職者一當レ於ニ寶弓手一若爲ニ諸善朋友早相逢者一當レ於ニ寶箭手一矣、大論曰引ニ禪定弓一放ニ智恵箭一破ニ諸煩惱賊一得ニ解脫一矣
盛長私記云田村麿奥州の夷賊退治の時自分の矢は不レ及レ申總軍勢の所持したる矢共悉く筈を不レ繼皆無レ筈是は敵に返矢(カヘシヤ)射さすまじき爲也無レ筈矢にて射る事傳受秘術なるを味方の兵士に悉く此射樣を敎へて射させらる夷賊の矢既に極るといへ共敵の矢を取て用射事不レ叶是筈なきが故也官軍の矢も盡けれは夷賊の矢を取て返矢射ける故に矢盡る事なくして終に夷賊滅亡したり云々

雨あられと降かゝつて　漢書曰匈奴圍ニ李廣一廣爲ニ圓陣一外向矢下如レ雨漢兵死者過半矣　東觀漢記曰積弩射レ城矢如ニ雨下一矣

咒詛諸毒藥念彼觀音の力を合てすなはち還著於本人
普門品曰咒詛諸毒藥所欲害身者念彼觀音力還著於本人矣　四明記云還著於本人者凡咒毒藥乃用ニ鬼法一欲レ害ニ於人一前人邪念方受ニ其害一若能正念還著ニ本人一矣　咒詛は人をのろふ也諸毒藥は諸の毒藥をあたふる也所欲害身者は人の命を害せんとする也其害を蒙る人觀音の名號を唱へ一心に是を念せは其咒咀も毒藥も還て咒咀し毒藥をあたふる人に蒙て觀音稱念の人には少も障なしと也觀音は平等の大悲なるに何とて咒咀する人に著ぞと云に咒咀をつかさどる神の法にて其術成就せされは還而本人に著也本人罸を蒙るも又利益也此文に付て古今の問答了見まち〳〵也文繁ければ略レ之

是觀音の佛力なり　菩薩力と云へきを佛力といふ事は　千手陀羅尼經曰此觀世音菩薩不可思議威神之力已於ニ過去無量劫中一已作佛竟號ニ正法明如來一大悲願力爲レ欲ト發ニ起一切菩薩一安ニ樂成ニ熟上諸衆生一故現作ニ菩薩一矣　普門品曰若有ニ國土一衆生應下以ニ佛身一得度上者觀世音菩薩即現ニ佛身一而爲說レ法矣

志賀

古今集假字序云大伴の黑主はそのさまいやしいはゝ薪をおへる山人の花の陰にやすめるがことしと

云々　是は黒主が歌のさまを云也此詞にもとづきて此謡を作るもの也又此謡をしがと名づくる事は江州志賀郡に黒主を志賀の明神と祝ふ故にしがとは云也　或云右大辨從四位上大伴黒主者天智天皇後也天智之御子曰二大友皇子一大友御子曰二內大臣武仁一武仁之子曰二右大臣武持一武持之子曰二大伴黒主一中納言家持黒主甥也矣　本朝遯史曰志賀黒主者與多孫也與多者大友皇子之子而創二造園城寺一曾賜二大友姓一其都堵牟麻呂而後大友字改作二大伴一也黒主之在二園城寺一亦自二與多一而連綿至レ此矣　三十六人傳云仁和初獻二大嘗會和歌一之由見二或集一者二後撰一於二志賀辛崎一拔頭レ祿爲二陰陽師一矣　黒主社在二江州志賀郡辛崎之邊一　古今榮雅抄云志賀明神を黒主とも云園城寺の地主也云々　無名抄云志賀郡に大道より少し入て山きはに黒主の明神と申神います是は昔の黒主が神になれる也云々

道ある御代の花見月都の山そのとけき　道ある御代とは君の御めくみのひろきを云也花見月は三月の異名也都の山とは洛外の山を指て都の山と云○藏玉 薄みとり空もひとつの花見月なへて心もあくかれぬらん

抑是は當今につかへ奉る臣下なり　當今とは何れの御代を指て云ぞ尋へし臣下も又是に同し抑の字は高砂に注す臣下は葵上に注す

江州及音羽山は田村に注す名におふは江口しかの山越及さゞ浪は三井寺に注す

志賀の都の名をとめて　滋賀の都は景行成務仲哀三皇の居地也此謂二高穴穗宮一今の比叡山の麓東坂本穴穗高島舊基也又天智天皇六年三月十九日都を近江國志賀に移し天武元年和州岡本の宮に遷す以上日本紀に見えたり

昔ながらの山櫻　忠度歌也忠度に注す

山路に日暮ぬ樵歌牧笛の聲　紀齊名暮春遊覽賦序云山路日暮滿レ耳者樵歌牧笛之聲澗戸鳥歸遮レ眼者竹烟松霧之色矣　上句樵歌はきこりの歌也牧笛は草刈の笛也下句都て夕部の心也　三才圖會云牧レ牛者所レ吹笛謂二牧笛一矣○柏玉 草刈の笛は麓の野邊の暮うたふ木こりは聲こたふらし　私云賤しき草刈童の笛吹を牧笛と云然るを世にとねりのやうなる姿のよき裝束を着し牛に乘て笛を吹是を牧笛の圖

とするはあやまり也又此童をさんろ殿といへり是又いふかし按するに是は齊名か句に山路日暮滿レ耳者樵歌牧笛の聲と有を取てさんろ殿と名つけたる歟

人間萬事樣々の　　詩人玉屑云冠萊公曰將相功名終若何不レ堪ニ景似ニ奔梭一人間萬事君休レ問且向ニ樽前一聽ニ豔歌一矣　杜詩云嘆息人間萬事非矣

さへぎる眼の前　　上の齊名が序にてつゝけたり

あまりに山を遠く來て雲又跡を立へたて　　紀齊名愁賦云山遠雲埋ニ行客跡一松寒風破ニ旅人夢一矣

實やあやまつて半日の客たりしも　　後江相公二條院文會詩序云謬入ニ仙家一雖レ爲ニ半日之客一恐歸ニ舊里一纔逢ニ七世之孫一 朗詠集 此心は晉の王質と云者木をきらんとて石室山に入て暫仙人圍碁をうつを見て歸らんとするに斧の柄くちたり驚て家に歸りてみれは我七世の孫になん有ける述異記に見えたり

道の邊の便の櫻折そへて薪や重き春の山人　是は雲玉集上に黑主歌と有又日本風土記に此歌の上句陸奥のしのぶの櫻折そへてとありて作者なし何れか是なる但雲玉集の說をとるへき歟

面目　　安宅に註す

去なから彼黑主か歌のことくそのさまいやしき山賤の薪を負て花の陰に休むすかたは實にもまた　古今假字序云大伴の黑主はそのさまいやしいはば薪をおへる山人の花の陰に休めるがごとし云々　同眞名字序云大伴黑主之歌古猿丸大夫之次也頗有ニ逸興一而體甚鄙如ニ田夫之息ニ花前一也矣　古今榮雅抄云黑主歌は其さまいやしたきゝをおへる山人の薪のおもさにゐはし休めるが所こそあれ花の陰なれは賤しき山人なれど心あるに似たりといふ歌のさま也云々　　悲俊口傳抄云必歌に心をつくさん共せず唯いはるゝに任せてよめる也薪負て出るは必花に心をうつして花の陰に休めるにはあらず我身の苦みを助けんとて休ゐ共よそにみる人は花に心あるさまにみなすなりさてかくたとへたり云々 水月集 ●山人の我里遠み月待て歸るやおもきたきゝおふらし

ゆるし給へや上臈たち　　上臈中臈下臈と云は內裏の官女の名也無位無官人をいふはあやまり也　職原抄云上臈二三位典侍號ニ上臈一大臣女或大臣孫

也小上臈公卿女侍臣女中臈内侍外不レ着ニ織物一類
也是昔號ニ命婦一侍臣女以下也矣　海人藻芥云大上
臈攝家御女也上臈三家等大臣女也矣　下臈の沙汰
は藤戸に註す
まさるをもうらやまざれおとれるをも賤しむなとの
故人のおきては誠なりけり　吉備大臣私教類聚目
錄第十七云不レ侮ニ愚夫一事矣　弘決一云高必以レ下
爲基貴必以レ賤爲レ本自從ニ有德一何必輕レ他况已無レ
德而欲レ勝レ彼矣　寶物集云金輪聖王をも敬ひ給は
ず田夫野叟をも欺給はず我觀ニ一切一普皆平等なり
と法花經に說給へるは是也云々
彼大伴の黑主が心をよする老の波　●古鏡山いさ立
寄てみてゆかん年へぬる身は老やしぬると黑主
和歌の浦わの藻鹽草かくたとへおく世語の　藻鹽
草はかき集るの枕詞也蜑のかきよする物なれはな
り浦輪は融に註す●後拾かひもなき和歌の浦わの藻鹽
草かき置迄を思ひ出にせん平貞直
筆を殘して貫之が言葉の玉のおのつから古へ今の道
とかや　紀貫之が古今序に黑主が歌の樣を書る事
を云也玉のをは命也古へ今といへるに古今の二字
をふくめり高砂に註す貫之は蟻通に註す
延喜の聖代のいにしへ國を惠み民を撫て萬機の政を
治め給ふ　延喜の聖代は竹生島に注す萬機の政は
難波に注す　史記黃帝紀云藝ニ五種一撫ニ萬民一度ニ
四方ニ矣　高辛紀云順ニ天之義一知ニ民之急一矣　論
語云君子之道焉可レ撫也矣　註云撫同也矣
古今の詠歌を撰ひ　高砂に注す
二聖六歌仙を始めとして　二聖とは人丸赤人を云
也　古今眞名序云然猶有ニ先師柿本大夫者一振ニ神
妙之思ニ獨ニ歩古今之間一有ニ山邊赤人者一並和歌仙
也矣　諸神記云三聖人丸赤人衣通姬矣　六歌仙遍
昭業平康秀喜撰小町黑主也　古今序に此人々の歌
の樣をかけり　家隆和歌口傳云歌仙とは此道に長
せる人を云也いつれも權化なるによてなり云々
古今榮雅抄云文武の御時人丸歌のひじりなりとい
ふ歌仙は歌の頭領と云心也中略此六人をちかき代
に其名きこゆるといふと云々
其外の人々は野邊の葛のはひひろこり林に茂き木の
葉の露の　古今假名序云此外の人々其名聞ゆる野
へにおふる葛のはひひろごり林に茂き木の葉のこ

とくにおほかれど歌とのみ思ひてそのさまえらぬなるべし云々　榮雅抄云前にいだせる六人の外に其名きこゆるおほかれど六人の人々には及ぶまじと歌のさまをえるまじきといふ云々

色にそみゆく歌人の心は花に成とかや　　同序云今の世中色につき人の心は花になりにけるよりあたなる歌はかなき事のみ出くれば云々　榮雅抄云今の世中とは延喜の頃をさす世くだり人の心花になりゆくによりて歌の道おとろへたる八雲たついつものいにしへ難波津あさか山の昔は心詞すなほにしてやかて人の心を感せしむる云々　古今秘抄云萬葉以後は歌を賞せられすおのつから家々思ひ〳〵の詠吟あれ共皆花にて實なし　花とはかされる也實とは其躰の實也云々

げに埋木の人しれぬことゝわざことの情とかや　　是も假名序の詞也關寺小町に注す

抑難波津淺香山の陰見えし山の井の淺くは誰か思ひ草の　　難波津の歌は難波に注す淺香山の歌は釆女に注す思ひ草は百萬に注す

露往霜來る色なれや　　露往とは秋の去年也　　霜來るとは冬の來るを云と　　文選呉都賦云露往霜來日月其除矣　續古今序云露往霜來る折節は心の内に催しと云々

濱の眞砂より數多き　　關寺小町に注す

然れは三十一文字の神も守護し給ひて無見頂相の如來も感應たれ給へは　　玉傳秘抄云抑歌に文字を三十一字に極る事は三十一神の御座故也彼神達各々一字つゝを守護し給ふ者也尤作者を守て安存せしむる故也中略　然者三十一神に法樂を給ひて國土も豐饒して萬民も皆安穩也云々略之三十一神　無見頂相の如來とは世尊を云也三十二相の終りの相を無見頂相といへり是を歌の三十一字に比して云也　鷄鷺記云歌の三十一字はこれ如來の無見頂の相を除て三十一相を表し又三十一尊に讃嘆する功德ありと云々

和歌六義抄云和歌の病を定めさとる事は後白河院の御宇より治定せり五條三位俊成卿に勅諚なされ三十一字の和歌ひとへに如來の三十二相にあてゝの義也將又無見頂相とて常には見えぬ相ましませは三十二三字にもよめる也云々　実隆卿和歌灌頂

云夫れ和歌は胎金兩部天地陰陽の二儀を具足して世界衆生佛身の如意をあらはして如來の三十二相を作る故に功德と成て現世も安穩に後生もうたかひなく往生する故に我朝の御法とす云々　大寶積經曰佛以普見天上世間魔ニ梵天無下敢當レ佛觀ニ其頂一者上矣　觀經觀音觀文曰其餘身相衆好具足如レ佛無レ異唯頂上肉髻及無見頂相不レ及ニ世尊一矣　法界次第には八十種好の第一を無見頂相といへり三藏法數には三十二相の終りの頂肉髻成相を無見頂相といへり

君も安全に萬民時を樂ひて都鄙圓滿の雲の下四海八島の外までも浪の聲萬歲の響はのとけかりけり

此等は玉傳秘抄及和歌灌頂の文を以てつゝけたり心は明に聞えたり安全都鄙は田村に注す四海は高砂に記す八島は日本の惣名也　新續古今序云わが八島四海の外までもなびき云々　史記云山嘆ニ萬歲一矣○拾聲高く三笠の山ぞよばふなる天か下社たのしかるらし

皇（スヘラギ）の御代は難波東南に雲治り西北に風靜は呉服こと葉の林は三井寺常盤の山は弓八幡に注す

巷（チマタ）にうたふ聲迄も是和歌の詠にもるへしや　列子曰堯理ニ天下一乃微服游ニ康衢一聞ニ兒童謠一曰立ニ我蒸民一莫レ匪ニ爾極一不レ識不レ知順ニ帝之則一矣　張景陽七命云玄齡巷歌矣　沈休文齊明王碑文曰老安少懷塗歌里詠矣　新續古今序云この道に入たらんともからも一度は巷にうたひ里に喜ひ云々　說文曰巷里中道也矣　增韻曰直曰レ街曲曰レ巷矣○萬代を治めし君かためしには巷にうたふやまと歌哉

天地を動し鬼神も感をなすとかや　軒端梅に注す

いさけふは春の山邊にまじりなん暮なばなけの花の陰かは　古今集春下に素性歌也　詞書云うりんゐんのみこのもとに花見に北山のほとりにまかりける時よめる云々　榮雅抄云いさやけふは春の山邊にましはりて有なん暮なばなかるべき花の陰かと也いさはさそふ心也なけのけを清てよむ也云々　後水尾院詠歌大概抄云なけのけの字他流には濁當流には澄也云々

時の調子は難波に注す　雪ならはいく度そでを拂はましの歌および花そのゝ里辛崎の松いつれも三井寺に注す

年へぬる身は老かみの　黒主がいさ立寄ての歌に
てつゝけたり
鏡山は三井寺かけまくもは難波神樂は三輪隆にまじ
はるは龍田に注す
薪の斧の永き日も　王質が古事にてつゝけたり前
に記す
雪ならはふむ跡までも心せよ　徒然草云泉には手
足さしひたして雪にはおり立てあとつけなと万の
ものよそながら見る事なし云々　雪は月花にも
おとらぬ景物なれは足跡付る事よからぬ事を云
御室撰歌合
●雪をとふ人有けりと見ゆはかり我とや庭に跡を
つけまじ賢清
小忌(ヲミ)の衣は高砂に注す白和幣(シラニキテ)青和幣は龍田に記す
梓弓(アヅサユミ)春の山邊を越くれば道も去あへず　古今集春
下に貫之歌也留りは花ぞ散ける也　詞書云しがの
山越に女のおほくあへりけるによみてつかはしけ
る云々榮雅抄云春の山邊を越くれは道も去りやら
ず花のちると也花を女によそへていふ去あへすは
過やらず也不レ敢也云々

頼政

頼政清和天皇第六皇子貞純親王二代苗裔多田新發(シンボ)
意滿(チヤウマン)仲子攝津守賴光三代後胤參河守賴綱孫兵庫頭
仲正子也母藤原友實女也治承三年十一月廿八日賴
政出家法名云二賴圓一後改二眞蓮一武道の外歌道にも
達し當時の歌仙也久敷五位にて昇殿をもゆるされ
ねば述懷の歌に「人しれぬ大内山の山守は木がく
れてのみ月を見る哉」　此歌により日來の武功を
思召出され四位に任じて昇殿せられき是迄は武功
ある德成しが叙位の望絶たる心を「上るへき便
なき身は木の下にしゐを拾て世を渡る哉　此歌
重而達二叡聞一三位にせらる依て源三位とは申也
治承大亂の起を尋るに賴政の嫡子伊豆守仲綱は
星鹿毛(ホシカゲ)と云名馬を所持す又名二木下(コノシタ)一然るに右大將
宗盛其馬を見せ給へとあれ共仲綱秘藏して見せす
是非一見の望有とて一日に六七度の使を立らる三
位入道是を聞假金銀をのへたる馬なり共それ程人
のたかけたらんに惜へきやうやある其馬速に六波
羅へ遣せと宣ひけれは伊豆守力及す一首の歌を書

添て六波羅へつかはしける一戀しくはきても見よかし身に添るかけをは如何はなちやるへき」宗盛卿此馬を見てあつはれよき馬なれ共あまりにおしみつるをにくみて主か名を鐵燒(カナヤキ)にせよとて仲綱と云かなやきして馬屋にこそ立られけれ客人(マウト)來て聞え候名馬を見はやと申けれはその仲綱めに鞍おけ引出せのれうてなとゝいへり伊豆守此由を傳へ聞賴政にかたる依て父子高倉宮をすゝめ申て謀反を起す其企平家にもれ聞ゆ宮を初め何れも三井寺に越たり其夜入道の侍に競瀧口(キヲフタキグチ)と云者六波羅をたはかりて宗盛秘藏の煖廷と云馬に打乘て三井寺にゆき入道殿に申やう木下がかはり煖廷を取て參りたりといへは入道父子悅ひかの馬のおかみを切鐵燒をして其夜六波羅に追歸すとねり驚き煖廷が參りて候と申宗盛卿見給ふに昔は煖廷今は平宗盛入道と鐵燒をこそしたりけれかくて軍に及ふ既に平家の大軍責來るに依て入道父子高倉宮を具し奉りて南都へ趣しが平氏急に押寄(ヨス)る賴政是非なく宇治橋を引て源平いどみ戰ふ平家の大軍宇治川を渡して責入は終に賴政大敵に碎れ治承四年五月廿三日に自害す行年七十五歳爰に賴政の家人丁七唱(テウシチトナフ)と云者入道の首を取て宇治川の深き所にしつめてけり 平家物語文畧 物槐記云飛驒守景家上總守忠淸等發ニ向宇治ニ之間宮先渡レ橋給彼方甲兵引レ橋景家責寄於ニ橋上ニ合戰之間忠景又追來伴類十餘騎作レ時打ニ入馬於河中ニ橋上方有ニ步渡ニ瀨或又雖ニ深淵ニ以ニ馬筏ニ郎等二百餘騎渡レ河於ニ平等院前ニ合戰景家得ニ賴政入道頸ニ忠淸得ニ兼綱頸ニ平等院廊自害者有ニ二三人ニ其中一人着ニ淨衣ニ無レ頸有レ疑賴政男伊豆守仲綱死生不レ詳又宮入ニ南都ニ給矣 百練抄云治承四年五月廿六日三條宮卒ニ賴政已下武士ニ赴ニ南都ニ官軍追ニ至於平等院ニ合戰宮并賴政法師已下黨類伏誅同廿八日新院密々幸ニ入道大相國第ニ御ニ覽賴政已下首ニ矣 盛長私記云皆首を得るといへとも三位入道の首はかの面にあらさるよし謳歌す 東鑑同レ之 長門本平家物語云宮をはしめ奉て源三位入道以下五十餘人が首をさゝけて軍兵都へ歸入事の有樣目もあてしれす賴政入道の頸とて持たりけるは遙にわかき首をぞ賴政がくびとてわたしける云々

盛衰記云丁七唱年來の主君を伐奉らん事のかなしさに御自害候へかし御頸をは給はり候はんとて太刀を指やりたりけれは入道池の水にて口すゝき西に向て念佛三百返計申てかの埋れ木の歌をよみて自害す首を下河部藤三郎取て平等院の後戸の板鋪の下の壁をつき破て隠し入云々　武者物語云源三位入道頼政自害の時郎等に向て云我白骨を平等院に納むへからず頭陀に入汝が首に掛て諸國を修行すへし我とゝまらんと思ふ所にて瑞相有へし其所に骨を納むへしと有て自害をとけ給ふそのことく白骨を首に掛て諸國を廻る爰に下總國古河と云所にてとある芝原に頭陀をおろえしはし休息し立て頭陀を取首に懸んとしけれ共あからす郎等ふしきの思ひをなしさらは爰に骨を納んと在所のものかたらひ古河村の近所に白骨を納め其所に彼郎等も庵結びおこなひすまして其所にて死たりと也今におゐて古河に頼政が塚あり今は古河の城内になる彼塚の有所を頼政曲輪と云也云々（武者物語ハ松田一樂入道秀任之撰作也）

是は諸國一見の僧にて候我此程は都に候ひて洛陽の寺社殘なく物み廻て候又是より南都に参らはやと思ひ候

僧は田村に注す洛陽は野宮に注す南都は玉葛に注す

ふま雲の伊奈利の社ふしおかみ　雲はゐると歌によめはあま雲のいなりとはつゝけたり後撰集に白雲のおりゐる山共よめり或は雲井と云も此心也或抄云神代巻に天熊人くまは雲也天村雲命同徳也ゐまくもの稲荷と云るも是より始る也云々

稲荷神社　神名帳云山城國紀伊郡稲荷神社三座（並名神大月次新嘗）神名帳頭注云本社（倉稲魂神也）此神素戔烏女也母大山祇神女大市姫也倉稲魂神播百穀神也故稲荷歟一座素戔烏一座（大市姫也）秘中秘也以上三座也矣　諸社根元記云延喜八年故贈太政大臣藤原時平朝臣脩造始件三箇社者也矣（拾）いなり山社の數を人とはゝつれなき人をみつとこたへん（貞文）神祇拾遺云亀山院弘長六年加田中四太神為五座也田中神者太田分身三峯地主乎（一説云大己貴）四太神四柱兒神也五十猛大屋姫狐津姫事八十神也矣又云稲荷者此山地主神號荷田神此所祭倉稲魂神故爾云矣先代舊事神祇本紀云食保媛神尸即化白野子而化惑國神天照太神詔曰地食保媛神者吾分魂神非邪妖神依悪神

中ニ且返レ怨理其氣爲レ魅汝月誦神宜レ祭ニ此神ニ時月弓尊設レ供祭レ之遂成ニ世間大富饒主ニ云々今在ニ山背國飲成出ニ大神使ニ天下狐ニ主レ富司レ驗能佛ニ災害ニ又伏ニ邪妖ニ矣　同神社本紀云企剌宮天皇時御食保姫大神化ニ白狐ニ出現鎭坐主ニ富贍豐饒ニ矣

猶行末は深草や木幡の關を今越て　深草及木幡の關は采女に注す

伏見の澤田見え渡る　伏見は融に記す澤田は伏見と宇治との間にあり紀伊郡也新撰歌枕に狹鯖と書一說相樂郡澤田河は泉川を云歟●續後撰 澤田川瀨々の白糸くり返し君打はへて萬代やへん 躬恒

宇治の里　倭名抄云宇治郡又在ニ久世郡ニ矣　花鳥餘情云宇治と云名は山城國の郡の名也やかて里をも宇治といへり云々●新續古 さ莚に霜を重ねて今宵もや衣うつらん宇治の里人

おちの里　彼方と云里也宇治橋の東北にあり今彼方町と云此所に神有神名帳云宇治彼方神社矣●浮舟 水まさるおちの里人いかならん晴ぬなかめにかきくらす比

なふ〳〵　江口に注す

いさ白浪の宇治の川に　宇治川の源は近江の湖より流れ勢田の橋を經て鹿飛櫻谷米炊と云所を通り此宇治川伏見淀川に行也　諸社根元記云平安帝都は天上の名跡をあらはせる國也辰巳に八十うち川あり天上の八十川是也云々●玉葉 山本の遠きあたりは見えわかて月にそ白き宇治の川浪 法印憲基

舟と橋とは有なから渡兼たる世の中に世　●世中に舟と橋とは有なから渡兼たる身をいかにせん　是は古歌也よみ人未レ考

勸學院の雀は蒙求を囀るといへり　勸學院は藤原家の學問所也其氏の子息集りて學問をつとむ　拾芥抄云勸學院三條北壬生西藤氏學生住也本冬嗣大臣家矣　貞觀格云勸學院ニ一區件院是贈太政大臣正一位藤原朝臣冬嗣去弘仁十二年所ニ建立ニ也即爲ニ大學寮南曹司ニ矣

神皇正統記云此大臣冬嗣遠きをもはかり　おはしけるにこそ子孫親族の學問をすゝめんために勸學院を建立す下略　世傳四條大宮の西に更雀寺とて淨土宗の寺有雀の杜其云是勸學院の舊跡を此所に移

したる也　蒙求は司馬李瀚が作也周より以後の名士五百九十餘の傳記を二千四百言にあけたり此外周興嗣が作れる千文字と胡元質(コゲンシツ)が記せる胡曾詩と此蒙求と三本を三註と名付て當世の實語敎庭訓往來を童子のよみならふやうに昔は敎へたり　李良蒙求序云瀚家兒童三數歲者皆善諷誦矣　王梅溪全集曰住近二孔堂一蛙呼二子曰一矣　雀とは僕隷の名也下部也學校の下部なれば不レ習して聞なれゝ所よくえるなり

先喜撰法師が住ける庵はいづくの程にて候そ　喜撰法師敏達天皇七代御末橘諸兄公孫子奈良麻呂孫周防守良殖子也醍醐法師也受二光孝仁和勅一作二和歌式一又學二仙術一後乘レ雲飛去矣　昔の名匠の書る古今眞名序に撰喜と有又基泉と云歌よみも有別と聞へたり

喜撰が跡は三室戶山の奧池尾村の西にあり云二喜撰嶽一山の半腹に大岩窟あり是舊跡也　無名抄云三室戶の奧廿餘町はかり山中へ入て宇治山の喜撰が住ける跡あり家はなけれど室の石ずへなどさだかにあり云々　私云大事の事を御尋ありといへるを按するに或書に百人一首の內五ヶの秘歌有喜撰か歌も五ヶの秘歌の內也此等の儀に依てかくいへるか尋ぬへし

我庵は都のたつみしかそすむ世をうち山と人はいふなり　古今集雜下に入喜撰一世に一首の歌也歌の心は世をのかれて宇治山の奧に入身をおさめ心を安して讀る也えかそすむとは我爰に住えたると云心也此歌の上の五文字六帖に我宿はと有又留り人はいふらんと有榻鴫曉筆云此歌世をうち山と人はいへ共とよむへかりしを世を宇治山と人はいふなりとよめるにそ古今序に喜撰が歌は詞かすかにしてはしめ終りたゝしからすとはかけるとそ云々

古今榮雅抄云貫之古今序によめる歌多く聞へねはと云るうへは我庵はの歌の外は有ましき事也孫姫和歌式を作るに撰喜基泉と云人を二人出して撰喜が歌には我庵はの歌をのせ基泉か歌には「木の間より見えつる谷の螢かもいさりの舟のおきへ行かも」と云歌をのせたり續古今集撰はるゝ時此歌を撰者おの／＼入へき由云るを爲家卿貫之が筆むなしくなるとつぶやきけれはいれさるを爲兼卿玉葉

集に喜撰と治定して此歌入たり故實なきのいへり第一失錯也と云り又樹下集に喜撰歌とて一はかれなんたふきはふれし極樂の西の風ふく秋の初花喜撰が歌と云事古來の說あれ共定說なし云々

槇の島共申又宇治の川島とも申也　宇治橋の西北十町餘にあり近世川を埋て陸地となる今此所を槇島村と云　百練抄云寬治二年七月廿四日己巳上皇承明門院大宮院御二幸前太政大臣宇治眞木島山庄一矣　長門本云平等院の艮の角橋の小島か崎より佐々木四郎高綱と梶原源太景季とはもとよりいとむ敵なれは我先にと二騎引かけ〳〵出來たり〇金宇治川の河せも見えぬ夕霧に槇の島人舟よはふなり藤原基光

名に橋の小島が崎　　土人云橋姬社邊ヲ今小島ト云宇治橋の南平等院の艮也　古今爲家抄云橋の大公と云人宇治橋小島といふ所に寺を建て山庄として山吹をうへて愛す云々

新後拾〇袖ふれし昔覺えて橋の小島にかほる山ふきの花　攝政太政大臣

惠心の僧都 の御法を說し寺候な　御法 をときし寺とは惠心院を云也　朝日山惠心院本名二龍泉寺一在二宇治橋東朝日山麓一本尊藥師弘法大師摸二唐青龍寺一創建二當寺一號二龍泉寺一眞言靈場也後台嶽惠心僧都來二住於此一改レ法改稱二惠心院一、鐘銘云宇治惠心院者在昔源信僧都卓錫遺跡矣惠心僧都名二源信一姓卜部氏和州葛木上郡當麻人父名正親母清氏父母詣二高尾寺一求レ子母夢二僧以二一顆玉一與レ之即有レ娠後上二叡山一事二慈惠一勵レ精二修學一寬仁元年六月十日七十六歲寂今昔物語　職原云僧都准二四位殿上人一矣　僧都の始は日本紀に欽明天皇三十二年四月數部德積を以て僧都とす又天武天皇二年十二月僧義成を以て小僧都とす釋書に文武天皇元年十一月沙門道顯を大僧都とす是等始也

朝日山　宇治川の東にたてり又近江に同名有朝日の里朝日の野邊と云も近江也〇新拾麓をは宇治の川霧立こめて雲井に見ゆる朝日山哉　公實

山吹の瀨　萬葉仙覺抄云宇治川にあり云々　八雲御抄云山城宇治川也又やまふきの崎共いふ云々〇新拾散果る山吹の瀨に行く春の花に棹さす宇治の川長　西園寺入道

山も川もおぼろ〳〵として　おほろ〳〵は霜わたりたるけしき也朦朧(オボロ〳〵)と書　說文曰朦朧月欲レ明也又月出貌矣　韓愈詩曰星月掩映雲朦朧矣○秋風ははや吹にけり萩の花ちらまくおしみおほろ〳〵に(萬)

名にしおふ　江口に注す

此所に平等院と中御寺の候　平等院は在二宇治橋南一號二朝日山一本尊阿彌陀定朝之作也　寺記云此堂移二漢例一兩樓爲レ翅後廊爲レ尾棟鑰金鳳凰雌雄居レ之隨レ風舞故曰二鳳凰堂一矣　緣起云本尊定朝圖光中梵字醍醐寺成尊僧都色紙形堀川左府俊房四壁幷扉淨土九品圖繪所長者爲成矣　歷代編年集成云永承七年三月廿八日關白左大臣以二宇治別業一爲二佛寺一平等院奉二供養一矣　伊呂波字類抄云永承七年供養五間四面東面中尊大日矣　花鳥餘情云河原左大臣融公の別業宇治鄕にあり陽成天皇しはらく此所におはしましけり宇治院と云所也宇多天皇朱雀院ト申も領し給へる所也承平御門の御遊覽ありける事李部王記に見えたり其後六條左大臣雅信公の所領たりしを長德四年十月の頃御堂關白此院を買取て同五年人々宇治の家に向て乘舟の遊なとありき宇治の關白の代になりて永承七年に寺になされて法花三昧を修せられ平等院と名付侍り治暦三年に行幸ありき今は藤氏の長者の知所也云々

又是なるは釣殿と申て面白き所にて候　釣殿は昔の遊覽の跡也河中へかけつくりにして魚を釣給ふ御殿の跡なるへし舊跡川邊にあり今漁人の栖となる扇芝の傍に最勝院と云寺有本尊十一面定朝の作也土人釣殿の觀音と云釣殿の舊跡にちかくまします故に釣殿觀音と云歟増鏡云平等院のつり殿に御舟よせておりさせ給ふと云々今案釣殿は宇治に不レ限いつくにも有へし　源氏常夏卷云ひんかしの釣臺に出給ひてすゝみ給ふと云々　楓江入楚云釣臺はちんなとの類也云々

此所に扇をしき自害し果給ひぬされは名將の古跡なれはとて扇のなりに取殘して今に扇の芝と申候

扇の芝は平等院の中にあり芝を扇のなりにすき殘して今扇の芝とよぶ事は後人のしはさならん　西三條實隆公此扇の芝にてよみ給ふ歌に　(雪玉)宇治平等院にて賴政が扇の芝とかやの花を見て「咲匂ふ情をとへは苔の下の其名も花にあらはれにけり　自害とは自死するを云也自害害彼彼此俱害とて三の

品あり　口筆抄云自害者自死害彼者害二他人一彼此俱害者互害死矣

行人征馬の行衛のことし　征の字はゆくと訓す人馬往來の路を云也　源順白河院にて作る詩の序云南望則有二關路之長一行人征馬駱二驛於翠簾之下一文粋

夢の浮世の中宿　釆女に注す

宇治の橋守年を經て　橋守とは橋姫明神を云也和歌色葉集云橋姫とは橋をまもる神なり橋守共いふ云々橋姫の事江口に注す○新拾年を經て戀渡身のくるしさを哀れと思へ宇治の橋守實綱　宇治橋は帝王編年記云孝德天皇大化二年丙午元興寺道登道昭奉レ勅始造二宇治川橋一矣○古今戀五忘らるゝ身をうち橋の中たへて人もかよはぬ年そへにける讀人不知　古今榮雅抄云國史孝德天皇御時大化二年道昭和尙始造二宇治橋一云々大化二年より延喜の御時にいたりて二百卅年を經たり道昭造りたる後此橋中絶たるにや云々或云宇治橋は長八十三間五尺幅四間一尺八寸云々

打渡す遠方人に物申す我そのそこに白くさけるは何の花そも　是は古今集の旋頭歌なり　榮雅抄云打過ゆく遠方人にも物まうすわが蘭そこにしろくさけるは何と云花そととひたる也打わたすはうち過るを云我そのそこには我蘭也そこは邊也しろくさけるは梅花也源氏にしろくさけるを何の花といふをくちなしの花と云說あれど定家卿も「打渡す遠方人はこたへねと匂ひぞ名のる野邊の梅かえ」とよめる此歌を梅と治定して人にしらせる也云々、

血は涿鹿の河と成て紅波楯を流し白刄骨をくだく　大軍入みたれせめ戰ふ討死する人多き故に河水のごとく血みなぎりて紅の波楯を流し白き刄は互に骨をくだくとはいへり宇治川の軍なればかくつゝけたり　史記曰黃帝乃徵二師諸侯一與二蚩尤一戰二於涿鹿之野一矣　正義曰涿鹿山在二嬀州東南五十里一山側有二涿鹿城一即黃帝堯舜之都也矣　大明一統志五曰保安州涿鹿山在二州城西南九十里一一名獨鹿山黃帝破二蚩尤於涿鹿一即此矣　又曰涿水源自二上谷涿鹿山一流至二涿州一北入二拒河一矣　太平御覽曰黃帝有二天下之半一戰二於涿鹿之野一血流漂レ杵矣　秦始皇本紀曰伏レ尸百萬流血漂レ鹵矣　呂氏春秋曰犯二流矢一踏二白刄一涉レ血盩レ肝以求レ之矣

世を宇治川の網代の浪　宇治の網代は今は所の名によぶ也貞徳百人一首抄云網代とはあじろもる人のみに非す　宇治にあじろと云所ありそこを栖にして網代をつかさどる也花鳥云内膳司式云山城國近江國氷魚網代各一所其氷魚始ニ九月ニ至ニ十二月卅日ニ供レ之今案近江の田上の網代にもれたる氷魚を山城の宇治にてとるといへり已上○拾數ならぬ身を宇治川の網代木に多くのひをも過しつる哉

閻浮戀しや　屋島に注す

伊勢武者は皆火おどしの鎧きて宇治の網代にかゝりける哉　仲綱軍中にてよめる歌也平家の方より伊勢住人黒田五平四郎日野十郎乙部彌七と云三人の者川を渡るとて網代へ流れかゝりうきぬしづみぬしけるを見てよめる也いづれも火おどしの鎧きたり已上平家物語　盛衰記に此歌の上の五文字白兒黨と有伊勢國住人古市白兒黨川中へはね入られて浮ぬ沈ぬしけるを源氏是を見てよめる也已上盛衰記　長門本には三位入道此歌をよめると有　火威緋威と書火威は火魚に準へて地を朱に塗小札の頭を銀の磨にして紅の糸を以て綴也故に火魚威共書又緋威は惣を紅にして問を水色の糸を以ておどす也氷魚は色葉字類抄云鮊俗作ニ氷魚一矣　和名抄云鮊白小魚名似レ鮊而長一二寸者也矣

うたかたの哀れはかなき世中に　末必は夕顏に注す○玉流れ行水に玉なすうたかたの哀あたなる此世なりけり西行

蝸牛の角のあらそひもはかなかりける心哉　白氏文集二十六曰蝸牛角上爭ニ何事一矣　爾雅翼曰蝸蟲以ニ其有ニ角故名ニ蝸牛一矣　莊子則陽篇曰戴晉人見ニ魏瑩一曰有ニ所謂蝸者一君知レ之乎曰然有下國ニ於蝸之左角ニ者上曰ニ觸氏一有下國ニ於蝸之右角ニ者上曰ニ蠻氏一時相與爭レ地而戰伏レ尸數萬逐レ北旬有五日而後反矣○爲家歌合家は出ぬ何かなにはのかたつふり津の國ありと身を賴らん爲顯

甲冑は屋島に注す紅は園生に植ても隱れなしは安宅に注す

五十展轉の功力たに成佛まさに疑なし　說文曰展轉也矣展轉は二字共につとふるとよむ也隨喜功德品曰若人於ニ法會ニ得レ聞ニ是經典一乃至於ニ一偈一隨

喜爲レ他說如レ是展轉教至ニ於第五十一最後人獲レ福矣　又曰諸人聞ニ是法一皆得ニ阿羅漢一具ヨ足六神通三明八解脫一最後第五十聞ニ一偈一隨喜是人福勝レ彼不レ可レ爲ニ譬喩一如レ是展轉聞其福尙無量何況於ニ法會一初聞隨喜者矣○續拾つたひ行五十(イソヂ)の末の山の井に御法の水を汲てしる哉　慈鎭

ましてや是は直道に　　法華經を聞事展轉して其最後の人さへ福を得るましてや是は直に御經をきくと也　譬喩品曰乘ニ此寶乘一直至ニ道場一矣

佛在世に佛の說し法の場　　世尊靈鷲山において法華經を說給ふ也平等院の庭を佛の說法の道場と見る也

爰そ平等大惠の功力に　　平等院によそへていへり見寶塔品曰爾時寶塔中出ニ大音聲一歎曰善哉釋迦牟尼世尊能以ニ平等大惠敎菩薩法佛所護念妙法華經一爲ニ大衆一說矣　文句八曰平等大惠者卽是諸佛智惠也平等有レ二一法等卽中道理二衆生等一切衆生同得ニ佛惠一下略化經には二乘單提女人惡人不成佛と說れたれ共法華經には諸法實相をゆるして持戒毀戒善惡共に悉皆成佛と立られたれは平等にして隔なし是を平等大惠と云也

抑治承の夏の頃よしなき御謀叛を進め申　　抑は高砂に注す治承は八十代高倉院の年號相續四年也百練抄云安元三年八月四日改元依ニ大極殿火害一也矣　平家の武威盛んなる折節賴政時節をはからすかゝる大亂を起し軍せん事蟷螂が斧也其上高倉宮をすゝめ奉りあえなくも御命をうしなはしめ奉る事賴政がふるまひあさましき事也依レ之よしなき御謀反すゝめ申とは云也

名も高倉の宮のうち　　高倉宮は後白河第二の皇子茂仁(モチヒト)と號す式子內親王一腹の御兄也能書管絃の道に長し給へと繼母建春門院御そねみに依て御弟高倉院は天位につかせ給ひ此君は閑居の身とならせ給へは出入人も稀也賴政此宮を取立申さんとてかく大亂をくはたて治承四年五月廿二日南都光明山の麓において爲ニ流矢一薨す御年三十云々長門本云一院第二御子持仁(モチヒト)の王と申は御母は加賀大納言末成卿の御娘とかや三條高倉の御所にまし〳〵けれは高倉の宮とそ申ける去永萬元年十二月十六日御歲十五と申しに太皇太后宮の近衛河原の御所にて

御元服ありしが今年は三十にもならせ給ひぬれ共未親王の宣旨をたにも蒙らせ給はず沈淪してそ渡せ給ひける云々　有職懐中抄云宮とは天子の位にゐ即せ給はす又親王の宣旨も蒙り給はぬは悉く宮と申也又皇子諸王共云一の宮二の宮などゝ申也云々

有明は高砂月の都は楊貴妃近江は田村三井寺は三井寺に注す

去程に平家は時をめぐらさす　孫子荊爲ニ石仲容一與ニ孫晧一書曰開レ地五千列レ都三十師不レ踰レ時矣

數萬騎の兵を關の東に遣すと聞や音羽の山つゞく　關とは相坂の關を云也相坂の關及音羽山は田村に注す

山科の里近き　山城宇治郡也北山科南山科とて有都て八郷十八村有東西は大谷より日岡の間一里餘北は御廟野より南一里餘有都て方一里餘あり

大和路　大和國は田村に注す

寺と宇治との間にて　寺とは三井寺を云也惣て寺とはかりいひては三井寺と心得へし其外山といへは比叡山佛といへは釋迦花といへは櫻なり○世の中に寺てふ寺は多けれと寺とは三井の御寺をそいふ

宇治橋の中の間引はなし　長門本云宇治橋を中三間はかりひきてしはらく平等院に立入せ給ひて御やすみあり云々

共に白旗をなびかして　白旗は風袋一文字紅色也或云白旗征夷大將軍朝敵追討之時指下旗也無ニ家紋ニ云ニ手長白旗一矣　侍用集云綸言の旗と申は地は錦にて日天月天を金銀にて織付られ又地には綾精好をなさるゝ儀も有此故に將軍家には白布を本とする也然共無紋の白旗將軍の外無レ用レ之是淸和天皇白布を用給ふ故に白旗の天皇と申奉る也されは源家に白きを用ゆ又絹旗は紗なとにて作る事も有一概には心得へからす

ときのこゑ矢さけびの音　屋嶋に注す

筒井の淨妙一賴法師敵味方の目を驚かす　筒井淨妙は云ニ明秀ニ三井寺の衆徒也盛衰記には明春と有
　今昔物語云比叡山の西塔に明秀と云僧あり天台座主暹賀僧都の弟子也云々　但或說に筒井淨妙同明秀は二人の名也と有　一賴は乘圓坊阿闍梨慶秀

が召つかひける法師也長門本云生年十七歳に成ける一來法師ぞ少もおとらずわたりにけり云々　盛長私記云三井寺の悪僧等橋の上にて合戰す平家の軍兵多く討る矢切の但馬坊一來法師等勇を顯す云々　平家物語云一賴法師筒井が頭に手を掛て悪しう候淨妙房とて肩をおどりこへたり文略　祇園御靈會の山に此兩人の形を作る名付てあすいしやうと云是あやまり也悪しう候なるへし

田原の又太郎忠綱と名乘て　忠綱俵藤太秀郷十代後胤下野國住人足利太郎俊綱子也生年十七歳童名王法師と云　東鑑云足利又太郎忠綱是末代無双勇士也三事越レ人所謂一其力對ニ百人一也二其聲響ニ十里一也其歯一寸也矣　平家物語云忠綱其日の馬は連錢芦毛なる馬に柏木にみゝつく打たる金覆輪の鞍おいてぞ乘たりける云々或云此鞍は公方光源院殿に有て細川幽齋拜領し給へり其後此鞍を見たりし人語云柏の立木にみゝつく四とまり居也平家物語及盛衰記には金覆輪とあれ共黄覆輪也貢うるしのふくりん也云々

くつばみは屋嶋に注すむれゐる同斷

流れん武者には弓彇をとらせ　はずは弓彇矢筈とて弓彇は上下にあり上を末彇と云下を本彇と云也釋名曰末云レ彇以レ骨爲レ之矣　曲禮曰右手執レ簫矣矢の筈は箭の弦をうくる所也弓の彇とは文字かはる也

きつさきを揃て爰を最期と戰ふたり　史記韓信傳曰漢兵遠鬪窮戰其鋒不レ可レ當也矣　前漢吳王濞傳曰吳楚兵銳甚難ニ與爭ニ鋒矣

賴政かたのみつる兄弟の者もうたれけれは　兄弟とは伊豆守仲綱次男源太夫判官兼綱也賴政が子也平家物語には右兄弟三位入道より先達て死したりと有此謡に作る所は平家物語にてつゝけたり　又盛衰記には源太夫判官は上總太郎判官が矢に内甲を射られ播磨二郎省と云者敵に首を渡さしとて取レ之三位入道より前に死したり又仲綱は入道の跡を尋ね平等院の御堂に立入て物具脱捨腹かき切て死す入道自害の後死したり文略仲綱は菖蒲の前が腹の子也

鎧は屋嶋に注すさすかは安達原に注す

埋木の花咲事もなかりしに身の成はては哀なりけり

頼政最後の歌也　長門本云えびらの中より小硯を取出して釣殿の柱にかくそかき付られける云々
歌の心は頼政累代源家の正統なれ共平家の盛氣に埋れ剩武運をひらかずかく成果る身の上を埋木の花咲實ならぬ事にたとへて哀れなりけりとはつゝけたり此哀れと云詞あつはれの義也と云説あれ共頼政が志に非す一首の躰只生涯の述懷をたとへに讀る歌也殊に平家物語及神明鏡にはかなしかりけると有私云此歌琵琶法師傳にはなし金澤本にあり又平家物語盛衰記長門本盛長私記等に此歌をのする頼政家集其外撰集に見えす

謠曲拾葉抄卷五

井筒

伊勢物語云昔田舍わたらひしける人の子供井のもとに出て遊びけるをおとなになりにけれは男も女もはぢかはして有けれと男はこの女をこそえめとおもふ女は此男をと思ひつゝ親のあはすれ共きかてなんありける扨このとなりのおとこのもとよりかくなん「つゝ井づの井筒にかけし丸かたけ過にけらしな妹みさるまに　女返し「くらへこしふり分髮も肩過ぬ君ならすして誰かあくへき　などいひ〳〵てつゐに本意のごとく逢にけり扨年頃ふるほとに女親なく便なく成まゝにもろ共にいふかひなくてあらんやはとて河内の國高安の郡にいきかよふ所出來にけりさりけれと此もとの女あしと思へる氣色もなくて出しやりけれは男こと心有てかゝるにやあらんと思ひうたかひて前栽の中に隱れゐてかうちへいぬる貌にて見れはこの女いとようけさうして打詠て「風ふけはおきつ白波立田山

夜半にや君か獨こゆらん　とよみけるを聞てかきりなくかなしと思ひてかうちへもいかずなりにけりまれ〳〵かの高安にきて見れははしめこそ心にく〳〵もつくりけれ今は打とけて手づからいゐかひとりてけごのうつはものにもりけるを見て心うかりていかずなりにけり下略

是は諸國一見の僧にて候　僧の字義は田村に注す

我此程は南都七堂に參りて候　拾芥抄云七堂東大寺興福寺元興寺大安寺藥師寺西大寺法隆寺矣東大寺は安宅に注す興福寺は海人に注す西大寺は龍田に記す元興寺は拾芥抄云推古天皇崇峻天皇元年始造レ之飛鳥寺本法興寺矣　又大樂寺建興寺建通寺共云也當寺の初は推古天皇四年高市郡飛鳥の地に建給ふ其後元正天皇靈龜二年五月に元興寺を今の奈良に移し給ふ也說多し今はおとろへ果て五重の塔一基大日如來います又堂一宇觀音菩薩をすへたり　大安寺は拾芥抄云皇極天皇元年始造レ之蘇我馬子大臣造レ之和銅三年遷造レ之本名二百濟寺一矣又名二大宮大寺一天平十七年改號二大安寺一又東大寺西大寺南寺に對して南大寺共云也此寺は本熊凝（クマコリ）の精舍にはしまりて後百濟河の邊に移して百濟大寺共云其後高市郡に移し大官大寺と云也其後伽藍幷丈六の佛像等を奈良に移されし也　藥師寺は　拾芥抄云天智天皇元年造レ之天武天皇矣　當寺は天武帝の皇后御なやみの爲に天皇藥師如來を作り堂塔を建んと御願ありしか其終に御造營ならすして淸御原（キヨミハラ）の宮にして崩す先帝の御遺勅なればとて持統天皇十一年に藥師の開眼有て扨文武帝二年十月に藥師寺成就す此時は和州高市郡岡本にあり其後元明帝養老二年に今の地に移す法隆寺は拾芥抄云聖德太子號二伊香留香寺一矣玉林抄云七德寺聖國寺寶龍寺來立寺法隆學問寺鳥路寺往生所寺共云也云々　當時は用明天皇の御惱御いのりに藥師如來の像を造營し佛閣を建立し給ひなんと然るに終に崩御成しかは御造營も絶たりしか其聖德太子いかてか止給ひなんと推古天皇十五年丁卯終に法隆寺御建立あるなり

初瀨　玉葛及三井寺に注す

扨は此在原寺はいにしへ業平紀の有常の息女住給ひ

し石上なるへし　在原寺は在ニ和州山邊郡ニ號ニ石上在原山本光明寺ニ本尊は觀音也又名ニ礒上寺ニ石上は丹波市より一里有町あり馬次には非す紀の有常が舊宅の跡石上の町より四五町南に別所といへる村有其東北の畠の中に有常田とて有井筒の形今に殘れり又一本薄と云有夜半にや君かひとり越らんとよみし前栽の薄也といへり　稱名院殿大和記行云道少し行てある女わらはへに問ければ昔のつゝ井筒井つゝにかけじとよみし井のもとなとおしへけるにかたのことく殘れりと云々榻鴫曉筆云棟梁大和守たりし時中將の骨を東山よりうつし大和國添下の郡に納めそこに寺を立られたり今の在原寺是也云々○形計其名殘て在原の昔の跡を見るもなつかし（爲子）　日本後紀云天長三年阿保親王上レ表高岳親王男女先停ニ王號ニ賜ニ朝臣姓ニ臣之子息未レ預ニ改姓ニ既爲ニ昆弟之子ニ於レ是詔賜ニ姓在原朝臣ニ（仲平行平守平業平等是也）在原の原の字氏の時は何時もはらとよむ也又所の名にてはわらとゝなふる也左兵衛尉紀有常は孝元天皇後葉正四位下左京太夫名虎子也文德帝御子惟高親王外戚也元慶元年正月十三日卒六十三歳女二人あり姉は業平の室となる妹は藤原敏行の室となるなり息女者三大部補注曰子初在ニ於胎ニ依ニ母息ニ故俗名レ子以爲レ息矣　抱朴子内篇曰胎息謂ト以ニ鼻口呼吸ニ如ヒ在ニ胞胎中ニ矣子の入胎する處母の息に依て住し産する時に息を分て誕生す依て子を子息或は息女共云也　私云井筒の女は有常がむすめにあらす悉く奥に記す業平は杜若に注す

風ふけば　此歌奥に記す

その業平の友とせし紀の有常のつねなき世　業平と有常は心友也後有常の娘のむことなる有常は家貧有けり謡にその心をふくめり惟仁は御位につかせ給ひ惟高は出家ましますに紀氏在原氏共におとろへたり大鏡云藤氏さかふる程に紀氏かれんとてかなしめり云々　東齋隨筆云内大臣鎌足藤原の姓を給はり給ふ時紀氏の人のいひけるは藤のかゝりぬる木は枯ぬるもの也今ぞ紀氏はうせなんするとぞ宣ひける誠にこそ左か侍れ云々

曉毎のあかの水月も心やすますらん　曉は人の心かならす淨清になる也佛家に後夜の法事をいとなみ曉に阿伽水をくむ皆淨心なる時を云なり　名義

集曰阿伽天竺語此云レ水矣　佛に手向る事人間の不淨を清て佛にむかふ心也

月もかたふく軒端の草忘れて過し古へを忍ぶ貌にて　軒端の草とは忘草を云榮雅抄云忘れ草は古宅なとの軒に生ふる草也又忍ぶ草をも云也云々謠の詞に忘草忍草の二名をつゝけたり梅枝に注す

唯いつとなく一筋に賴む佛の御手の糸　中國本傳曰祇桓西北角日光沒處爲二無常院一若有二病者一安置在レ中中略其堂中置二一立像一金薄塗レ之面向二西方一其像擧二右手一左手中繋二一五綵幡一脚垂曳レ地當下安二病者一在中像之後上左手執二幡脚一作中從レ佛往二淨刹一之意上矣　榮花物語云御堂殿御臨終の時御手には彌陀如來の御手の糸をひかへさせ給ひて云々●春雨 南無あみた佛の御手にかゝる糸のおはり亂れぬ心とも哉

まよひをも照させ給ふ御誓ひ　無量壽經曰惠日照二世間一消二除生死雲一矣　大論曰佛惠明淨日除二世癡暗冥一矣

有明　高砂に注す

定めなき世の夢心　●懷千 おとろかぬ心そつらきめの前に定めなき世の夢は見れ共　慈寬法師

いとなまめける女性　伊物眞字本ニ最嫋（イトナマメク）と書日本紀に生と書文選に弱の字をよむ愚見抄云最嫋と書也女の貌をほめたる詞也　伊物集注云一禪云なまめくと云詞所により用かゆる也生の字をもよめり至（イタル）が女車を見てなまめくといふはけさうする心也源氏の詞になま〳〵の上達部（カンタチメ）といへるは種姓よき人にてもなくなまなりなる意也云々

庭の板井を結びあけ花水とし　板井は板をもて組あけたる井也花水とは樒なとを手向る也●壬生ニ品 住わふる板井の淸水里よりも遠き昔の人そ戀しき

昔男は雲林院に注すさすかは安達原に注す

名計は在原寺の跡ふりて松も老たる塚の草　盃經新記云松栢即墳墓所レ植之樹矣　五雜俎云古人墓樹多植二梧楸一南人多種二松栢一北人多種二白楊一矣

草根 ○いつ迄か都の風のかよひけん荒にし磯の上寺の松　古

一村薄の穂に出るは　在原寺の一本薄をいへり○君か植し一村薄虫の音のしけき野邊共なりにける哉

草茫々として露深々と古塚の　茫々は廣貌也露深

々は露深也　白氏文集新樂府云草茫々土蒼々驪山脚下秦皇墓下略

礒の上ふりにし里も花の春月の秋とて住給ひしに花の春は稱美する詞也　後拾遺序云花の春月の秋おりにつけ事に望てむなしくすくしかたくなんおはします云々〇古日の光りやふしわかねは礒の上ふりにし里に花も咲けり

又河内國高安の里に知人ありて二道に玄のひてかよひ給ひしに　業平此高安の女にかよひ給へ共此女げす〳〵しさにかよひ給はずすさめられしは自飯かいとりし故とぞ委く物語にあり詞林采葉云高安の女は安大領と云ける者の女とかやされは大領が屋敷中將の垣内とて今にあり云々　冷泉流伊物注云河内國高安郡にかよふとは高安郡の郡司丹波介佐伯忠雄が娘のもとへかよふ也云々　河内は釆女に注す〇新六帖高安のみもとははやくなれにけり自けごの備をそとる

風ふけはおきつ白波たつた山夜半にや君かひとりゆくらん　伊勢物語に井筒の女がよめる歌也古今集雜下に入よみ人しらすと有物語にも古今にもひとり越らんと有歌の心は此女まづしく成て業平に相そふ事恥なげきて高安へかよふ二道の根も思はず出し立て過行山覺束なきにかゝる夜も獨やこゆらんとよめるを業平前栽の中にかくれ居て此歌を聞つゝ高安へかよふ事をおもひとまりしと也　白波とは盜人の異名也惟清抄云龍田山に盜人あるをいふ云々　袖中抄云ぬすむ人を白波共綠林なと云はつねの事也然而彼女かならずしもそれを思ひてよまずも有けん白浪とは立田山といはんとていひ置也云々伊物集註云實枝云女の心に高安郡は龍田よりあなたにやと思ひやりてよめる也委しくしらぬ所なれは大やうによめり實は龍田よりこなたにある郡也云々　大和物語に昔ある男の女をぬすみて立田山を越けるがあまりに泣を聞て男此歌をよめると有盜人を白波と云事熊坂に注す

かれ〳〵は定家に注すうたかたの哀れは夕貌に注す

昔此國に住人の有けるか宿をならへて門の前井筒に寄てうなひこの　此國とは和州なり住人とは業平也　詞林采葉云彼在中將奈良京春日の里に住ける

頭と云々伊勢物語の詞書にてつゝけたりうなひこは業平井筒の女共におさなき時を○也倭名抄云後漢書注曰髫髮俗用二垂髮一字一謂二之童子垂髮一矣

たかひに影を水鏡面をならへ袖をかけ　史記曰吾聞之鑒二於水一者見二面之容一鑒二於人一者知二吉與一レ凶矣　白氏文集十四云低レ頭向レ水自看レ稚矣

心の水は實盛に注すまめ男は雲林院に注す心の花は卒都婆小町に注す

おとなしくはちかはしく　おとなしくはおとならしく也はぢかはしとは恥かしき也伊物眞字本に慙通而と書

つゝ井筒ゐつゝにかけし丸かたけおいにけらしな妹みさるまに　業平井筒の女によみて贈りし歌也物語につゝゐつの井筒と有て又過にけらしなと有詞書云此となりの男のもとよりかくなんと云々となりの男とは業平を云也眞字本に筒井津々五幹と書袖中抄云或證本を見給しかはつゝゐつゝ井つゝとなん書て侍し中略つゝゐつのといへるは心得られす此故に登蓮法師は筒井つゝとあるへきをつ文字の文字相似たる故に書違たる也と云々　丸は男子の通稱也たけは身の長也謠においにけらしなとうたふおいは生の字也妹は女の通稱也　肖柏聞書云まろがたけとはたかひに身のたけをいかほとに成たらん時契をかはすへきなどいへる成べし云々麻呂と名付る事和泉式部の童名をおもと丸といへり然れは丸は男子の通稱共思はれず丸は圓滿の義歟船を何丸とよび或は城を本丸二丸なといへり然れは丸は美稱の詞か但先達の說に男子の通稱と云事明也

くらへこしふり分髮も肩すぎぬ君ならずして唯かあぐへき　井筒の女の歌なり業平の歌の返し也　愚見抄云ふり分髮は幼時の髮也物にたくらへあそふもの也肩過ぬは長くなりたると也誰があぐべきは君が手をふれんと○心也かんざしをし髮あげする事也云々　集註云女の裳着の時かんさしをするに髮をあぐるは然るへき男を用る事也源氏物語などに見えたり男の元服に同じおとなの妻になす也云々連集良材云唐に習にや我か妻にせんと思ふ女をはおさあひの時髮を結るを頼めとす云々　蘇武詩曰結レ髮爲二夫婦一恩義兩不レ疑矣　文集云與レ君結

レ髮五藏矣　記内則曰十有五年而笄二十而嫁註殿陵方氏曰三五而圓若月也故女子之年至ニ是數一而笄者婦人首飾蓋成レ人之服也矣　冷泉流伊物註云岡保親王と紀有常と隣なり大和國春日の南御吉野の里に住ける也有常か娘と業平がおさなかりし時の事也二人なから五歳に成し時ふうふの約束をして井の筒のさし出たるにたけをくらべてこれよりたかく成たらばと契てあふ事を云也長能私記に男女會合の道は七歳にして契を始む業平五歳にてとつく事五行陰陽の德をあらはせりされは五歳にてとつぎたりけるにや是は好色に長ずる故也云々

つゝ井筒の女共聞えしは有常か娘の古き名成へし

異說に井筒の女を有常が娘とす闕疑抄にも有常娘と名をさせり是等の説にもしつきて此謡に有常が娘と作る也然れ共有常が女は業平の本妻にて禮を以てまうけたり井筒の女はさにあらず集註云闕疑抄なとに此女を有常が女と名を指事あしく有常が女は業平の本妻にて禮を以てまうけたり爰は奔女の事を云たる段也古今にも新古今にも有常が女と云事なしをして名をさす事道理にそむけり

龍田山　龍田に注す

いふやしめ繩のなかき世を　いふに木綿をいひかけたり木綿に蟻通及加茂に注す世諺問答云しめ繩は左繩によりて繩の端をそろえぬもの也左は清淨なる謂也端をそろえぬはすなほなる心也天照太神天の岩戸を出給ひし時しりくめ繩をひかれたるは今のしめ繩也是始也云々　諸社根元記云石窟の前に繩を張て日神の還入り給はぬやうにする也今の注連是也注連は打ぬ藁を以て左繩に糾(ナハ)もの也七五三と數を分は七五三は合て十五也天道は十五にして成なり左繩にするは天道の左旋也左は陽也陽には陰かそふ者也繩の二筋縄ふは是陰陽也云々

あたなりと名に社たてれ櫻花年にまれなる人も待けり　伊勢物語に此歌の詞書云年頃おとづれさりける人の櫻の盛りに見に來りけれはあるじ云々　此歌古今集春の部に入よみ人しらずと有歌の心は花はあだなる物と名に立たれ共まれ〳〵くる人を待つけたる花なればあだならぬと也見に來りけるは業平也あるじは女の主也

かやうに讀しも我なれは人待女共いはれしなり

此爺に上の歌の人もまちけりといへるを取て井筒の女を人待女と名つけたり此說いぶかし上の歌は井筒の歌のつゝきにあらす別段にあり　私云物語に井筒の歌のつゝきの詞書にやまと人こんといへりよろこびて待にたびく過ぬれば「君こんといひし夜每に過ぬれはたのまぬものゝ戀つゝそふる

是は高安の女の歌也人待女とは此女をいふべきや

まゆみ槻弓年を經てり　伊物「梓弓眞弓つき弓年を經てわがせしかごとうるはしみせよ　知顯抄云あつさ弓ま弓つき弓とは三張の弓をよめる事は此女に契りて後三とせに成たれは三はる過ぬる也弓をはるといへは詞のたよりによめり三のはるは三年也然るに三とせ迄ちきりし中にかくあらたむへき事かはさは契りもとのことくせよと也うるはしみせよとはちきりたかへそとよめり此女は有常がむすめ也云々梓弓は梓の木にて作る弓也檀弓はまゆみの木にて作る弓也つき弓は槻の木にて作る弓也一說まゆみは白き弓也眞弓と書　三代實錄曰下ニ符相摸國ニ令レ採ニ進安房國槻弓百枝信濃國梓弓二百枝但馬國檀弓百枝一文略　あつさ弓は屋島に注す

形見の直衣身にふれて　直衣はなうしとなふる也當家裝束書云直衣童躰之時白浮綾織物直衣文小葵裏濃紫也元服後白志々良綾裏平絹染色從ニ年齡一矣　或云天子の名は小葵の御紋なり大中納言は臥蝶なり四位五位中將少將などは無紋也大形白きしゝらの綾を用ゆ裏は平絹なり袖ほそく脇ひろきものなり

雪を廻すは融に注す

月やあらぬ春や昔と詠めしもいつの頃そやつゝ井筒業平月やあらぬの歌をよめるは四十餘の時の事成へしつゝ井筒の歌は若年の頃と見るへし月やあらぬの歌雲林院に注す

しぼめる花の色なうて匂ひ殘りて在原の　是は業平の歌の躰を云也　古今假字序云在原業平は其心あまりてこと葉たらすしぼめる花の色なくて匂ひ殘るがごとし云々　同眞字序云在原中將之歌其情有レ餘其詞不レ足如下萎花雖レ少ニ彩色一而有ニ上薫香一矣　しほめる花の色なくては詞の不足を云也匂ひ殘りてとは餘情の義也十口抄云月やあらぬの歌大

かたは月をもめでじの歌ねぬる夜の夢の歌此歌深く案し給へるに言葉不足の所ある也餘情よりも深かるへし云々　基俊口傳抄云業平は限りなく歌の風情もめてたくとり心珍しく讀るがあまり歌面のものげなくして言葉おほく色もたゞさでうちきく所させる事なき也云々

芭蕉集の夢も破てさめにけり芭蕉に注す

木曾

伊豫守從四位下義仲者帶刀先生義賢次男六條判官爲義孫也母遊女童名號ニ駒王丸一　東鑑云源氏木曾冠者義仲者帶刀先生義賢二男也義賢者久壽二年八月於ニ武藏國大倉館一爲ニ鎌倉惡源太義平一被ニ討亡一于レ時義仲爲ニ三歳嬰兒一也乳母夫中三權守兼遠懷レ之遁ニ于信濃國一令レ養ニ育之一成人之今武略禀性征ニ平氏一可レ與レ家之由有ニ存念一下略　百練抄云壽永二年八月十日於ニ院殿上一被レ行ニ除目一義仲任ニ左馬頭兼越後守一矣　治承四年頼朝卿伊豆國にて起ニ義兵一平家を討と聞て義仲も軍兵を集め北陸道を平けんとて越後へ出陣す平家の大將維盛通盛等是を聞て數萬騎にて同北國に下向す義仲敵を嶮岨に引受數度相戰て得ニ勝利一維盛通盛終に戰ひ負て都に逃上る義仲勝に乘都に討て上る平氏こらへず西國に敗走す度々軍功の聞へ有故に被レ任ニ征夷大將軍從四位下一又朝日將軍共號す既而武威に誇り惡逆多し頼朝卿安からず思ひ範頼義經を大將として數萬の軍士を上せ義仲を退治せしむ壽永三年正月兩大將宇治勢多の手を責破木曾敗軍に及其後義仲只一騎に討なされ江州粟津の邊において終に亡命すと盛長私記云和田が從軍石田次郎爲久矢を放つ木曾が内冑に中る木曾額を馬の頭に當て傍に伏所に石田が郎等二人馬より飛下木曾を馬より引落して首を取る云々　盛衰記云元暦元年正月廿日相摸國住人石田小太郎爲久木曾の内甲を射爲久が郎等二人深田に入て首を取年三十七と云々長門本平家物語云元暦元年正月廿六日伊豫守義仲が頸渡さる法皇御車を六條東洞院に立御覽せらるゝ九郎義經六條河原にて檢非違使の手へ渡す檢非違使是を請取て東洞院大路を渡して左の獄門に前の樗の木にかく頸

四有伊豫守義仲郎等に高梨六郎忠直根井小矢太幸親今井四郎兼平也樋口次郎兼光は降人也渡して禁獄せらると云々　盛長私記云義仲の首劔に貫き赤絹を切て賊首源義仲と銘を書て鋒に付義仲左右の眉の上に疵を被りたれは粉米をそ塗たりける云々

此謡は義仲北國軍の事を作る也且又木曾羽生八幡において大夫坊覺明に仰て平家可レ亡願書を書しめ寶殿に是を納む神慮誠あるにや義仲北國の軍に勝利を得たり此願書を以て此謡を作るもの也

盛衰記云覺明馬より下木曾が前に跪く箙の中より矢立取出し墨和ニ筆染ニ疊紙ニ押開て古き物を寫がことく案にも不レ及書レ之其狀云「歸命頂禮八幡大菩薩日域朝廷之本主累世明君之曩祖爲レ守ニ寶祚ニ爲レ利ニ蒼生ニ改ニ三身之金容ニ開ニ三所之權扉ニ爰累年之間有ニ平相國ニ恣管ニ領四海ニ惱ニ亂萬民ニ猥蔑ニ萬乘ニ焚ニ燒諸寺ニ已是佛法之讎王法之敵也義仲苟生ニ弓馬之家ニ僅繼ニ箕裘之塵ニ見ニ聞彼暴惡ニ不レ能レ顧ニ思慮ニ任ニ運於天道ニ投ニ身於國家ニ試起ニ義兵ニ欲レ退ニ凶器ニ圖戰雖レ合ニ兩家之陣ニ士卒未不レ得ニ一塵之勇ニ之處今於ニ一陣ニ上ニ旌之戰場ニ忽拜ニ三所和光之社壇ニ機感之純熟已明因徒之誅戮無レ疑矣降ニ歡喜之涙ニ銘ニ渇仰於肝ニ就レ中曾祖父前陸奧守義家朝臣寄ニ附身於宗廟氏族ニ自號ニ名於八幡太郎ニ以降爲ニ其門葉ニ者無レ不ニ歸敬ニ矣義仲爲ニ其後胤ニ傾レ頭年久今起ニ此大功ニ喩如下嬰兒以レ貝量ニ巨海ニ蟷螂取レ斧向中奔車上然聞爲レ君爲レ國起レ之爲レ身爲レ私不レ起レ志之至神鑒在レ暗憑哉悅哉伏願冥慮加レ威靈神合レ力勝決ニ一時ニ怨退ニ四方ニ然則丹祈相ニ叶冥慮ニ幽贊可レ成ニ加護ニ者先令レ見ニ一之瑞相ニ給仍祈誓如レ件　壽永二年五月十一日　源義仲敬白

八百萬代を治むなる弓矢の道こそ久しけれ　八幡大菩薩は源家の氏神弓矢の守護神たる故に義仲願書に鏑矢をそへて羽生の神殿に納め其の神德を以て平家を追討せしこと始終次第の詞にふくませたり

抑是は木曾義仲とは我事なり　義仲嬰兒たる時信濃國木曾の山中にてそだち人と成し故に木曾と名づく　抑の字は高砂に注す

扨も平家は越前の火打が城を責落し　平家物語云

義仲信濃にありなから越前の國火打が城をぞかまへける四方に峰をつらね城郭の前には能美河新道河とて流れたり彼二の河の落合に大石を重ね上大木を伐てさかもきに引柵高くあげたれは東西の山の根に水せきこふて水海に向がことくおひたゝしく見せかけたれとも木曾方に平泉寺の長吏齋明威儀師と云者平家に返忠して落されき此長吏後に木曾に殺さるゝ也文略盛衰記云壽永二年四月廿七日平家十萬餘騎時を造りて推寄源氏時を合て戰ふ所に齋明心かはりして一千餘騎を引分て平家につき忠を盡て後矢を射る源氏不レ堪して引退き越前國河上城に立籠ると云々　長門本平家物語云火打が城はもとより究竟の城なれば南は荒地中山近江の水海北のはし鹽津海津朝妻の濱につゝき北は海津抽尾山木邊戸倉と一也東は歸る山の麓越のしらねに着たり西は能美越海山ひろく打めくりて來地はるかに見え渡り磐石を峙て山高く立上て四方峰をつらねたりけれは北陸道第一の城郭也云々
都合其勢十萬餘騎此砥並山迄責下る　壽永二年五月八日平家の大將小松三位維盛都合七萬餘騎加賀越中の境砥並山に向ふ其頃木曾は越後の國府を立て五萬餘騎にて砥並山へ馳向ふ五萬餘騎を七手にわかち其身は一萬餘騎にてとなみ山の北羽生に陣を取也平家物語盛衰記文略　長門本平家物語云五月十一日平家十萬餘騎の兵を二手に分て三萬餘騎をは志雄の手に向て指遣す七萬餘騎をは大手へ向て越中前司盛俊が一黨五千餘騎引分て加賀國を打過て終夜砥並山を越て中黒坂の猿の馬場にひかへたり木曾是を聞て五萬餘騎を相具して越中國へ馳越て池原の般若野にこそひかへたれと云々　砥並山は在二越中國礪並郡一號二倶梨伽羅嶽一○越路にはそり行程に成にけりとなみの關の雪のあけほの　盛衰記云平家一萬八千餘騎十餘丈の倶梨伽羅谷に馳埋ける抑倶梨伽羅谷と云は黒坂山の峠猿馬塲の東にあり其谷の中心に十餘丈の岩瀧あり千歳瀧と云彼瀧の左右の峰より栫の木多く生たり谷深くして梢高し其木半過る程馳埋みける澗河血を流し死骸岡をなせり依而地獄谷其名つく又馳籠の谷共申と云々　平家物語云此谷の邊には矢の穴刀の疵殘りて今にありと云々　盛長私記云大將軍維盛

希有にして加賀國へ引退く七萬餘騎が中より僅に三千こそ遁けれ抑倶利伽羅谷の方へ向て此方に道あり來々と空に聲有て喚たるは倶利伽羅不動源氏を守護し平家の軍士を悪所へ引導し給ふ者なりと披露して人奇異の思ひをなす所に後に聞ば今井四郎兼平謀を構へ木上(キノボリ)をたんれんしたる歩兵を十餘人倶利伽羅谷の方へ遣し大木の上に登置て右の如く喚はらせける程に此方に道ありと心得て皆彼谷へ落入しと也闇(クラサ)はくらし木の上に人のあるを見ずして聲に付て落しけりといへり誠に兼平が謀事圖に當ると云べし云々

龍虎の威をふるひ　　白氏文集三十八云凛ニ龍顔ニ而色作振ニ虎威ニ而辭厲矣　詩經常武篇曰王奮ニ厥武ニ如レ震如レ怒進ニ厥虎臣ニ闞如ニ虓虎ニ矣　龍説文曰鱗蟲之長矣　廣雅曰有レ鱗曰ニ蛟龍ニ有レ翼曰ニ應龍ニ有レ角曰ニ虬龍ニ無レ角曰ニ螭龍ニ未レ升レ天曰ニ蟠龍ニ矣　虎説文曰山獸之君矣　山海經曰幽都山多ニ玄虎ニ矣　格物論曰虎狀如レ猫大如ニ黄牛ニ黒章鈎爪鋸牙舌大如レ掌生ニ倒刺鬚ニ硬尖而光夜視一目放レ光一目看レ物獵人候而射レ之光墜ニ於地ニ聲如レ雷百獸爲レ之震恐風從而生矣

師子象の勢ひ　　師子大論曰如ニ師子王ニ清淨種中生深山大谷中住方レ頬大骨身肉肥滿頭大眼長光澤明淨眉高而廣牙利白淨口鼻方大厚實堅齒密齊利吐ニ赤白舌ニ雙耳高上髦髮光潤上身廣大膚肉堅著脩レ脊細レ腰其腹不レ現長レ尾利レ爪其足安立以ニ身大力ニ從ニ住所ニ出傻レ脊嚬申以レ口扣レ地現ニ大威勢ニ食不レ過レ時顯ニ晨朝相ニ表ニ師子王力ニ矣　象は江口に注す

帝釋修羅の思ひをなし日月も手の内に　　此事屋島に記す帝釋天王は梅枝に注す

梓弓　矢さけび　時の聲　くつばみ　此等皆屋島に注す

倶利伽羅が谷　　砺並山を云なり倶梨伽羅峠に不動明王あり一説云八劒大菩薩の變作にして靈驗甚掲焉云々盛衰記云倶梨伽羅山と云は加賀越中の境也嶺に一字の伽藍あり昔越大徳此所にて倶梨伽羅明王を行給ひしかは其より此山を倶梨伽羅が嶽と云也越中國礪並郡の内なれは礪並山共云也云々
倶梨伽羅毘盧遮那經名ニ倶里劍ニ勝天王般若云ニ加梨加龍ニ玄應意義云ニ迦羅迦龍ニ矣　陀羅尼秘密法

曰若欲レ使二古力迦龍王一者於二壁上一書二一劒一以二古力迦龍王一繞二此劒上一龍形如レ蛇劒中書二此阿字一心中亦自觀二此劒及字一了々分明心念二不動使者一誦二根本陀羅尼二一百八徧一日三時滿二六箇月一多誦益好若月滿已後古力迦龍王自現二其形一下略

今八幡共又は羽生の八幡共申候　羽生八幡宮在二砺波山北一號二新八滿一八幡の御領也盛衰記云木曾は當國住人池國次郎忠康を召て彼は何官と申ぞと尋給へば八幡大ぼさつを祝ひ祭る也埴生庄にましませは埴生新八幡と申候云々　盛長私記云木曾は羽生に陣取て四方を見れは夏山の峰の緑の間より赤の瑞籬ほの見えて片披作の社あり如何なる神を崇けるぞと問給へば石黒七郎あれは八幡にて此所は則八幡の御領たりと申す云々　覺明が書る願書鏑矢二筋當社の寶物として今に傳來せり

覺明　ヲ傳云康樂寺在二信濃國埴科郡鹽崎一號二白鳥山一開基西佛上人清和天皇第四皇子滋野親王九代後胤海野信濃守幸親之男初爲二勸學院文章博士一名二藏人通廣一出家號二西乘坊信救一爲二南都興福寺住侶一治承四年奉二茂仁親王令旨一書二平家追討返翰一有二清盛者平家塵芥武家糟糠句一淸盛後聞レ之大憤欲レ殺レ之信救遁レ下於當國一仕二木曾義仲一號二太夫坊覺明一義仲喪後隱二信州一又住二箱根山一建久六年登二叡山一列二慈圓僧正法席一名改二淨寛一其後到二信州一號二西佛一始終從二鸞師一聞レ法而以入二淨土眞門一于レ時仁治二年正月廿八日寂年八十五歳矣　㊂

今井樋口を初めとして　今井は兼平に注す樋口は次郎兼光と號す實盛に注す木曾殿の內にて今井樋口楯根井是等を四天王とよばれし也

願書を讀上猶神德をあふかん　木曾は當時軍の新禱の爲に覺明に仰て願書をかゝしめ十三騎が上矢の鏑をぬき相添て羽生の神殿に寶納す賴母敷哉八幡大菩薩信實の心指二つなきをや遙に照覽し給ひけん雲中より山鳩三つ飛來て源氏の白旗の上に反盤す盛衰記文略

何々歸命頂禮八幡大菩薩は　是願書發端の詞也但本文には何々の字無レ之又此謠に作る願書本文の詞を多く略したり歸命頂禮は實盛に注す八幡大菩薩は弓八幡に注す

日域朝廷の本主　卓氏藻林云日域日初出之所也今

指日本國之謂也矣　文選長楊賦曰東震日域師古云日初出之所也故吾邦人取用之矣　朝廷者禁中也文選兩都賦曰竊見海內清平朝廷無事矣蔡邕獨斷曰朝廷者不敢指斥君故言朝廷矣　新古今集眞字序云雖無隙帝道之諮詢日域朝廷之本主也上下略

累世明君の曩祖たり　累の字かさぬると訓ず　曩祖は爾雅曰曩久也矣　說文曰祖始廟也矣　廣韻曰本也上也矣　下學集云曩祖先祖之義也曩昔也矣

寶祚を守らんが爲蒼生を利せんが爲に　寶祚は日本紀に寶祚をよめり　賈逵國語注曰祚位也矣　文選沈休文恩倖傳曰寶祚夙傾寶由於此矣　李善注曰寶祚猶寶命也又張銑注曰寶祚謂國命也矣　蒼生は日本紀に蒼生とよめり　說文曰百姓曰蒼生矣　李白詩謝公終一起相與濟蒼生矣　璧論新疏曰蒼生卽衆生也謂蒼々然而生也亦可蒼者天也自天生故矣　利せんとは利益の下略也

三身の金容を顯はして三所の權扉を押開き給へり

願書に改三身之金容開三所之權扉と有本文とは相違せり　三身の金容とは大安寺の僧行教宇佐宮に詣けるに八幡大菩薩金色の三尊の御姿にて行教の着し給へる衣に移せ給ひ行教大安寺の房に將て安置してそれより石淸水へ移らせ給ひける此義に依て三身の金容を顯しとは云り（注安略任）三所とは石淸水八幡宮は所祭三座譽田天皇神功皇后玉依姬也是を三所と云歟又云八幡大菩薩は其初肥後國菱形池に顯れ給ひ其後鎭座豐前國宇佐宮貞觀年中に今の男山鶴峰に移せ給ふ是も三所と云歟長門本云八幡三所と申は大隅宇佐男山是を三所八幡とは申也云々　此三說の內石淸水三座の說を用ゆべし

權扉を押開とは權に扉を押開く也

爰に頻年より以來平相國と云者有て四海を掌にし

願書に爰累年之間有平相國恣管領四海と有　頻年は比年連年書湯誥王制曰比年一小聘註云比年每歲矣　漢書注曰比年猶頻年也矣　平相國は淸盛公を云也佛原に注す　四海は高砂に注す　掌は四聲字苑云手心也矣　◎說文曰手中也矣　楞嚴經二曰阿那律見閻浮提如觀掌中菴摩羅果矣　雲棲梵網發隱曰佛云觀大千世界如觀手掌

萬民を惱亂せしむ是佛法の讎王法の敵なり　願書

に惱二亂萬民一猥蔑二萬乘一焚二燒諸寺一已是佛法之讎
王法之敵也と有　清盛のはからひを以て都を福原
に移し南都の佛閣を焚又法皇を鳥羽殿に遷し奉る
此等の惡逆を云也

抑曾祖父前の陸の國の守　八幡太郎義家は清和天
皇七代後胤伊與守賴義嫡子任二正四位下陸奧守鎮
守府將軍一稚名號二源太一母上野介平直方女也於二石
清水神殿一加二首服一故名二八幡太郎一云々　少年より
智勇人に勝れ武藝の名將なり長治二年八月十八日
六十八歲而卒す　義家は木曾の爲には三代先也依
て曾祖父と云也　爾雅曰王父之考爲二曾祖王父一又
王父之妣爲二曾祖王母一矣

名を宗廟の氏族に歸附す　願書に寄二附身於宗廟
氏族一と有　宗廟說文曰宗尊祖廟也徐曰宗廟神祇
所レ居一曰宗尊廟尊二先祖一貌也矣　釋名曰宗尊也
廟貌也先祖形貌所レ在矣　中庸曰宗廟饗レ之子孫保
之矣　宗廟とは八幡大菩薩を云也氏族は末孫也神
祇正宗云廟社稷神之事先神の宗廟は天照太神宮と
八幡宮と也社稷の神は此二神の餘社を云也 中略 人
皇十六代應神天皇は母神功皇后の胎內に在て鎮二
外國一其功德廣大神也此則八幡大菩薩也吾國者千
界の源萬國の爲レ元故に以二此神一千界の爲二宗廟一
其餘の神を萬國の定二社稷一也云々

義仲いやしくも其後胤として此大功をおこす事
願書に義仲爲二其後胤一傾レ頭年久今起二此大功一と
有心明に聞えたり後胤の字義は前辨慶に注す

たとへは嬰兒の蠡を以て巨海をはかり　己が分際
を知て其智愚の及ざる所をよく思へといへるたと
へ也又卑下の語也　蒙求朱公績註云以レ管伺レ天少
レ知以レ蠡伺レ海少レ知矣　漢書曰以レ管窺レ天以レ蠡
測レ海以レ莛撞レ鐘矣　大論偈曰譬如下以二蚊嘴一猶可上
測二海底一矣　巨海は韻會曰巨大也矣　嬰兒は蒼頡
篇曰男曰レ兒女曰レ嬰矣　釋名云人始生曰二嬰兒一
胸前曰レ嬰抱二之嬰前一而乳二養之一故曰二嬰兒一矣

蟷螂が斧を取て隆車にむかふことくなり　是も己
が分際をしれとの喩也淮南子曰齊莊公出獵有二螳
螂一擧レ足將レ搏二其輪一矣　莊子曰猶下螳螂之怒レ臂
以當二車轍一則必不上レ勝レ任矣　文選四十四云欲下以二
螳螂之斧一禦中隆車之隧上註曰　前有二兩足一擧レ之如二
執レ斧之象一矣

壽永二年五月日　盛衰記の願書にには壽永二年癸の卯五月十一日と有長門本願書にには壽永二年六月一日と有壽永は景淸に注す

義仲願書に鏑矢を神前に捧申せは　嚆矢一名鳴鏑

本草綱目云罌粟其嚢形如二髇頭箭一者是又似二蕪根一

其鏑飛則鳴矣　前漢匈奴傳云冒頓作二鳴鏑一矢　日本私記云八目鏑矢　盛長私記云或時盛長鎌倉殿の御前にして木曾殿願書に鏑の上差を副られたる事如レ斯事にも故實ある事や否を大庭平太景義に尋けるに景義云皆古法ある事也願書は眞字に認る墨付文字の句連續の字切ざる樣に書故實多し矢は神通鏑或は神鏑等を用る也神鏑と云は四目鏑の事也凡願書を寶殿に納るは末代迄殘る故にに猶以て古法を用る事也是後代に誹謗を受まじき爲也木曾殿の願書に副て奉納せられしは略神通鏑也といへり

略神通鏑之圖

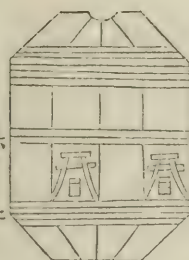
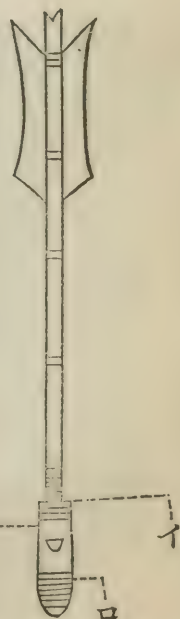
鏑ハ丸ク榊ノ皮付内ヲ隔テ目ヲ二ツ明ルナリ

（イ）　麻　糸　三　卷

（ロ）　麻　糸　七　卷

（ハ）　長サ二寸五分廻六寸

右羽ハ白鳥俗是ヲ白羽ノ矢ト云見ヒ白[illegible]所々皮付

神鏑之圖號二四目鏑一

（イ）　麻糸七卷

（ロ）　麻糸三卷

（ハ）　目如斯四アリ目柱ヲ竹ヲ以テ鳥居ノ如ク立ルナリ柾ヲ以テ作ル柾ハ直ニシテ裏表ナシ故ニ神木トス

（ニ）　麻糸五卷

（ホ）　目　柱

八角長三寸八分廻り六寸

已上此圖盛長私記に見えたり

追手の大將　城の表を追手と云城の裏を搦手と云

追手の城戸口搦手の城戸口など云也　東鑑云範頼を追手の大將とし義經を搦手の大將と定む云々略文

名乘よはゝる其聲は天地もひゝく計なり　史記項羽本紀曰楚兵呼聲動レ天諸侯軍無レ不二人々惴恐一矣

魚鱗鶴翼定めもなし　帝範上曰夕對二魚鱗之陣一朝臨二鶴翼之圍一奕楠正成神武奇法卷六云魚鱗之陣説魚者司二南火星一是夏王故也又曰南三角也法曰魚者得レ水能生離レ水必亡水性靜而弱也魚其弱乘爲二自由一以二此心一敵陣專弱則以二魚鱗一勝云々　鶴翼之陣説鶴者司二乾星一是鳥者北方王故北之察所乾也法曰鶴陽上陰下而其形長大也兵數多勢遥遠行不レ勞高上安故以二其心一名二鶴翼一鳥得レ風魚得レ水踊故魚進レ鶴不レ能レ制云々

魚鱗權形圖

鶴翼權形圖

能々見れは鳩鳥を藏き忍辱の御鎧　韻會曰鳩奴也鳥九聲一矣　禽經曰九鳥曰レ鳩矣　鳩は八幡の御使者といへり弓八幡に注す　忍辱の鎧　法華經曰當レ著二忍辱鎧一矣　菩薩藏經曰夫忿恚者速能損二害百千大劫所集善根一乃至是故我當レ被二忍辱鎧一以二堅固力一摧中忿恚軍上矣　忍辱の字義は葵の上に注す

鎧は屋嶋に注す

雪のしつえや霜くづれ　しすえは沈枝と書雪のしつえとは雪の降かさなりて諸木の埋たるを云也霜くつれとは山の土霜にこほれるに陽氣にとけてくつれ落るを云也春北國方にある事也○いほあるゝ冬田のあせの霜崩れ道たえぬとてとふ人もなし　宗貞親王千首

ちりひぢ　山姥に注す

七萬餘きはくりからか谷の千尋の深をも淺くなるほとむめたりけり　盛長私記云平家七萬餘騎が中より僅に三千こそのかれけれと云々千尋は海人に注す

屋島

讃州屋島におゐて源平たかひに挑み戰ふといへ共平家既に滅亡せり平家物語に委く出たり　其外數多の舊記等引合見れは相違多し但此謡は平家物語に依て作る成へし　屋島は讃州北の濱也島の形如屋棟因云屋嶋盛長私記屋島圖云屋島は艮の方かけて坤の方へ出張たる所也形似牛月長一里横廿町已上取意古所に寺あり號屋嶋寺山上南向號屋島寺千光院本朝律寺之最初也本尊は千手座像三尺弘法大師の御作也開山は鑑眞大師弟子下野藥師寺三祖惠雲律師也號登盛寺より東坂十町下麓に佐藤次信の廟壇あり領主より一丈四方の切石にて壇をきつく其上に五尺の石碑を立後小松院御宇至徳元年四月五日奥州より佐藤氏族の沙門次信といへる斗藪此墓に詣來て廻向渇仰して「痛はしや君の命を次信が印の石は苔衣きて　とよみけれは廟壇動搖するかと覺えて「惜む共よも今迄はなかるへし身を捨てこそ名をは次信　墓の内より聲しけるよし屋島軍緣紀にかけり此謡には義經の幽靈と作れり作者寄所尋ぬべし

月も南の海原や屋島の浦を尋ねん　南海道なればその心をふくみて南の海原とはいへり

是は都方より出たる僧にて候　都の字義高砂に注す僧は田村に注す

我いまだ四國を見ず候ほどに　阿波讃岐伊與土佐是を四國と云　舊事紀云伊豫二名島此島者身一面四毎面有名伊與國謂愛比賣在西南角讃岐國謂飯依比古在西北角阿波國謂大宜都比賣在東北角土佐國謂速依別在東南角矣　大和本紀云四國とは伊弉諾伊弉冊尊淡路國に下て一女三男を生先小國を作り四人の尊を居置給ふ所なりと云々

西國行脚と志候　行脚とは佛道修行の爲に國々をめぐる也　祖庭事苑云行脚云郷里於遠離矣

讃岐國　舊事本紀云讃岐國造輕嶋豐明朝御世景行帝兒神櫛王三世孫須賣保禮命定賜國造矣　大和本紀云天照大神初衣を始て替給ひし所なる故に云爾也別の御衣に更給ふより産と云詞を奉擧此讃の字の讀によせて讃岐と書也云々

月海上に浮んでは波濤夜火に似たり　明月海に浮んで照す時はさながら浪をたくかことしとなり杜

荷鶴詩に漁舟火影寒燒ㇾ浪矣此等の語をふくめる歟
波濤は說文云波水涌流也濤大波也矣（家）波をやく海
士のいさり火待ほとや夕日を照す嶺の山本　（榮雅）
漁翁夜西岸にそふて宿す曉汲ニ湘水一楚竹をたくも
古文前集云柳子厚詩漁翁夜傍ニ西岸一宿曉汲ニ淸湘一
燃ニ楚竹一矣　湘水は夕顏に注す
月の出鹽は謡に注す海人のよび聲は松風に注す
一葉萬里の舟の道たゞ一帆の風にまかす　一葉は
舟をいへり自然居士に注す東坡詩十八灘頭一葉身
矣
志らぬ火の筑紫　白樂天に注す
照もせす曇もはてぬ春の夜のおぼろ月夜に志く物も
なき　新古今に大江千里(チサト)歌なり留りは志く物ぞな
きと有詞書云文集嘉陵春夜詩不レ明不レ暗朧々月と
いへる事をよみ侍けると云々歌の心は詩の詞を其
儘にて明也志く物そなきとは似たる物なきと云心
也加の字をよめり
屋島にたてる高松の苔の莚は痛はしや扨慰みは浦の
名の〳〵むれゐる田鶴を御覽せよなどか雲井に歸ら
さらん　牟禮は所の也和名類聚抄に武例は讃岐國

三木郡と有當時は山田郡に屬す牟禮高松續き也屋
島迄三十餘町あり依て浦の名のむれゐるとはつゝ
けたり　東鑑云元曆二年二月十九日今日辰尅到ニ
于屋島內裏之向浦一燒拂牟禮高松民屋一矣　袖中抄
云田鶴は鶴をいふ也云々
揚氏抄云鶴曰ニ多豆一俗曰ニ葦鶴一矣　文選謝玄暉詩
田鶴遠相叫矣　むれゐるは群居也（新古）天津風吹ゐの
浦にゐるたつのなとか雲井に歸らさるへき（藤原淸正）
いかで其頃は元曆元年三月十八日の事成しに平家は
海のおもて一町計に舟をうかへ源氏は此汀にうち出
給ふ　いでの字は景淸に記す元曆は八十二代後鳥
羽院年號也但御兒安德天皇は御存生にて西海にま
します故に平家方にては壽永と云也百練抄云元曆
壽永三年四月十六日改元依ニ代初一也矣　此謠に元
曆元年とうたふ是あやまり也元曆二年也平家物語
に二月十八日酉剋合戰の日と有盛衰記には三月十
八日とあり東鑑及盛長私記長門本に三月廿四日と
有東鑑云元曆二年三月廿四日於ニ長門國赤間關檀
浦海上源平相逢各隔ニ三町一艚ニ向舟船一平家五百艘
分ニ三手一以ニ山峨兵藤次秀遠并松浦黨等一爲ニ將軍一

桃戰手源氏之將御矣

大將軍の御出立には赤地の錦の直垂に　東鑑云屋島合戰之時義經著赤地錦直垂紅下濃鎧駕黑馬矣　後漢書百官志曰將軍不常置本註曰掌征伐背叛比公者四第一大將軍次驃騎將軍次車騎將軍次衞將軍又有前後左右將軍矣　事物紀原曰周禮天子六軍軍萬二千五百人其將皆命卿蓋在國稱大夫在軍稱將軍自晉獻公作二軍而公將上軍故將軍名出於此矣　日本にては崇神天皇の時に四道將軍に命而四方に遣す將軍の名是より始る也　景行天皇の時に日本武尊を以て大將軍とし武日命武彦命を左右の將軍として東夷を征す日本紀

錦の直垂は一方の大將めさるゝ也　殂談云上古任將時給此服行其國也然得此服士見易故無無禮失應時應令不可有用地用錦裏朽葉薄紅板物矣　賴義記云長三尺五分　袖長一尺六寸　但可依人矣○紅葉々に月の光をさしそへて是や赤地の錦成らん院御製

紫裾紺の御著長　大將の甲を云著長其製雖不異名目以別貴賤也惣を紫糸にて威し裾を紺の糸にておどしたる也末濃下濃と書　將紡切韻曰

鐙ふんばり鞍かさにつゝたちあかり

鐙鞍兩邊承脚具也矣　鞍は寶蓋に記す鞍かさは鞍つぼ也馬の背の上に置ゆへに鞍かさと云也

一院の御使源氏の大將撿非違使五位の尉源義經一院とは七十七代後白河院を云也大原御幸に記す撿非違使名使廳　或云撿非違使は別而本官也此官に任するを一級とす左右衞門左右兵衞必此官の先途とす非違をたゞすとよむ心は使の宜旨にて事の相違をたゞす官也仍而規模とす云々○類聚三代格曰弘仁十三年二月七日太政官符應定罪人亂徒年限事右撿非違使解偁下略　園太曆曰撿非違使承和元年正月廿七日參議從四位上文屋秋津始之矣　百寮訓要抄云撿非違使別當は大納言殊器量をえらにるゝ職なり白川院の仰には五ヶの德あるものを任ずべしと仰られけるとぞ容儀才學富貴譜代近習也云々撿非違使尉稱之判官犯人追捕權舍任之源平武士雖諸大夫多補之源義經爲大夫尉剰爲昇殿廷尉云々　源義經清和天皇十代後胤左馬頭義朝朝臣九男從五位下左衞門少尉兼伊與守源九郎童名

牛若又舍那王丸と號す母は九條院雜仕常盤と云女房也文治五年四月奥州衣川にて自殺す行年三十一歳委く二人靜に注す　東鑑云義經與㆓殿三位中將良經㆒依レ爲㆓同名㆒被レ改㆓義行㆒之由云々　其後又大夫屬入道申云義行者其訓能行也能隱之儀也故于レ今不レ獲レ之歟如レ此事尤可レ思㆓字訓㆒可レ憚㆓同音㆒依レ之猶可レ爲㆓義經㆒由被レ申㆓攝政家㆒云々其後又改名㆓義顯㆒矣

天晴　實盛に注す

其時平家の方よりも言葉たゝかひ事おはり　平家物語云伊勢三郎物盛進み出て清和天皇十代の後胤鎌倉殿の御弟太夫の判官殿と大將の名を名乗ければ越中次郎兵衛盛次聞て（盛長記有㆓武藏三郎左衛門尉有國㆒）去平治の合戰に父討れてみなし子となり鞍馬の兒して後には金商人の所從となり奥の方へ落下りし其小冠者めが事かと云ける義盛聞て君の御事な申そさいふわ人こそ北國砺並山の軍に打まけからき命生つゝ北陸道にさまよひ乞食して上ッたる其人かとぞいひける盛次重て左云わ人こそ伊勢國鈴鹿山にて山立し妻子をはぐゝみ過ける人かといふ金子十郎進み出て詮なき殿ばらの雜言かなと云ける（上下略）此事を詞戰ひと云也

三尾谷四郎　武藏國住人也四郎は三尾谷十郎か弟也或は丹生屋三穗屋と書長門本平家物語に水保屋十郎と有先祖不レ詳此謡には四郎と作る平家物語及盛長私記にも十郎と有

惡七兵衛景清　景清に注す

景清追懸㆓三尾谷か着たる甲の錣をつかんで後へひけは三尾谷も身を遁れんと前へひく互にえいやとひく力に鉢付の板よりひきちきつて左右へくはつとそのきにける　盛長私記云大長刀持たる男飛で掛る十郎太刀打折れて逃を左の手をのべ三尾屋が錣を取て引切遁延たり時に件の錣を長刀に指貫き惡七兵衛尉景清なり組で勝負せよと喚上　同云盛嗣は小船に乘り小林神五宗行が胄の錣に熊手をかけたり神五は強き馬乘也手綱を強く堅め一角當ける程に小船を錨にて汀へ向て行舟既にすはりければ小林首を延て引程に鉢付の板より引切たり盛嗣錣を能手に掛て越中二郎兵衛と名乘て沖に歸る（文略）今案平家物語及長門本は三尾屋と景清との事あり

て盛嗣と宗行か沙汰なし盛衰記には盛嗣と宗行が事ありて三尾屋景清沙汰なし盛長私記には右兩義共に載たり錣は景清に注すえいやと云詞は英々雄の鬨を以て云歟 伊呂波字類抄云曳々推レ船ニ云ニ曳々一矣鉢付の板は甲に鋼を取付る所の板なり

判官　職原大全云判官者勘解由判官宮城使判官之類皆呼レ官也廷尉判官者不レ呼レ官而只稱ニ判官一則廷尉尉也彼源義經今世俗稱ニ判官一者任ニ當使尉一故也矣又云判官五位者曰ニ勘解由大夫一矣

佐藤次信　〃鎮守府將軍俵藤太秀郷十一世孫信夫庄司元治嫡子三郎兵衛と號す義經の內にては忠義の侍也　盛長私記云盛嗣忠光景清三人鏃を揃て判官を見て引詰々々射郎従等主を射させじと矢表に駈塞の間源兵多く被レ射中にも佐藤繼信胸板被レ射て馬より落文略　東鑑云于レ時越中二郎兵衛尉盛繼上總五郎兵衛尉忠光等下レ自レ船而陣ニ宮門前一合戰之間廷尉家人繼信被レ射取一畢廷尉大悲歎屈ニ一口衲衣一葬ニ千株松本一以ニ秘藏名馬一賜ニ件僧一矣　平家物語に此邊尊き僧に一日經書て次信を弔給へとて大夫黒とよはれし馬によい倉おいてかの僧にそ給はりける云々盛衰記に薄墨と云馬に金覆輪の鞍置て御房に被レ送けると云々　盛長私記云大夫黒と云秘藏の名馬を以て僧に賜る是戰士を撫るの謀なり云々八栗寺より辰巳の方廿町計に六萬寺といへる寺の跡有判官次信か爲に大夫黒と云馬をひき冑甲を施入して佛事を賴み給ふ寺也先年掘上して今は舊跡のみ殘れり

能登殿　桓武天皇十一代後胤門脇中納言敎盛次男正五位下能登守敎經と號す　平家物語に檀浦にて安藝太郎次郎兄弟を脇の下にはさんで入水行年二十六歳と有東鑑及盛長私記には遠江守安田三郎義定が手にて獲レ之云々　西海において能登殿の沙汰曾而是なし又平家物語盛衰記長門本琵琶法師傳等には敎經事をのせたり或云屋島において能登守と名乘者は敎經の郎等讃岐六郎經時也嗣信は流矢に中たるものなるべしと云々　長門本云所々にて高名せられたりし能登守も如何思れけん平三武者かうす雲といふ馬に乘て須磨の關屋へおち給ひてそれより舟にて淡路の岩屋へおち給ひけると云々　琵琶法師傳云今度は如何思れけん薄墨と云

馬に打のり西を指て落給ふが播磨の高砂より御舟に召れ讃岐の八島へわたり給ふと云々私云是は屋島において能登殿を出さんとての拖へこと葉成へし能登殿をは屋島まて存生のやうにいひなせしは平家能登殿の死を隱せしもの也一本云教經同腹の弟に小次郎と云あり幼少時淵名鄕司と云者の養子となる成人して紀景擧と號す屋島の軍に召出され能登殿の遺跡を續しめ紀氏を改め能登守平朝臣教經と名のると云々　異本義經記云壇浦にて平家の人々入水の時能登守教經義經を目懸て義經の舟に乘り移り給ふの由いへり東鑑に教經の頸一谷の時遠江守義定の手へ討取と見へたり或は飛彈三郎左衛門景經義經を目掛其船に乘移義經味方の舟の間遠に輕々と飛乘給ふ故景經輕業ならす又伊勢三郎か舟に乘て討死したる沙汰有云々右異說まち〳〵也尋ぬへし

菊王　　能登殿の內の童也忠信が矢にあたりて死す平家物語云此童は本は越前三位道盛卿の童也然るを三位討れて後能登殿に仕はる生年十八歲と云々一本云菊王に非す紀九郎と云者也紀九郎は新教經養父淵名鄕司が甥也紀七紀八が弟也新教經の從兄弟也紀九郎菊王音相似たれは誤る成へし云々

相引にひく鹽の　　屋島と新高松との間に相引と云所有屋島より坤の方にあり滿潮には海常は干潟也屋島と新高松の間凡一里なり敵味方の相引を兼たり　昔は干潮の時も人馬步渡りは成かたかりしか共近年淺く成て潮だにひけば跡は自徒にて步行自由也

跡は鬨音たえて　　鴉鷺記云時の聲は師呼の音を以て合戰の勝負をしる事是は傳ありよする時の聲は三度初めほそく終つよかるへし勝時は一度初めつよく終ほそかるへし云々　盛長私記云大將軍九郎判官は牀机に腰を掛扇子を以て太刀の柄を三ケ度打て自英々と聲を發せらる時に惣軍請レ之一同に雄と唱是勝時なり斯のごとく鬨を唱ふる事都て三ケ度也抑鯢波を英々雄と唱ふる事は千人に勝を英と云萬人に勝を雄と唱是故實也云々

朝倉や木丸の殿におらはこそ名のりをしてもゆかまし　　○朝倉や木の丸殿に我をれは名乘をしつゝ行は誰子そ　此歌は神樂の歌也新古今集に入　奧義

抄云天智天皇世につゝみ給ふ事ありて筑前國上座郡朝倉山と云所の山中に黒木の屋を作りておはしましけるを木の丸殿と云丸木にて作れる故也用心をし給ひけれは入くる人とはぬに名のりをしつゝ入ける也云々委しく日本紀に見えたり神名帳云土佐國土佐郡朝倉神社矣　土佐國風土記云土佐郡有二朝倉郷一郷中有レ社神名天津羽々神天石帆別命今天石門別神子也矣今案朝倉は右の與儀抄及八雲御抄藻鹽草等に筑前國にありとしるせり又梁塵愚抄に朝倉の丸殿は土佐國に侍るを古来あやまりてつくしにありといへりと云々何れをか是とせん尋ぬへし

小忌衣　高砂に注す

春の夜の潮の落る曉ならは　潮の落るとは汐のひくを云也　菅家仁和年中に讃岐の任國におはせし時晩春遊二松山館一と云題にて作れる詩に低レ翅沙鷗潮落曉亂レ糸野馬草深春矣菅家集

松か根枕そはたてゝ　○わけくれて尾上の花に宿かれは松か根枕苔のさむしろ

落花枝に歸らず破鏡二度照さず　是は輪廻せざるを云なり　傳燈錄曰落花難レ上レ枝破鏡不二重照一

瞋恚　東岸居士に注す鬼神軒端梅に注す鵜飼實盛に注す

淺からさりし業因かな　業因深くして修羅道に沈事をいへり　法苑珠林曰由二瞋慢及疑三種因業一得二彼生報一矣　是は修羅道業因の事を釋せり

甲冑を帶し　黄帝内傳曰玄女請レ帝制二甲冑一以備レ身矣　禮記儒行曰儒有二忠信一以爲二甲冑一禮義以爲二干櫓一矣　史記張儀傳曰由東之士被レ甲蒙レ冑以會戰矣　周禮夏官疏云古用レ皮謂二之甲一今用レ金謂二之鎧一矣　甲はよろひ冑はかぶと也然るをいつの頃よりか甲はかふと冑はよろひとよみあやまりたる也

生死の海に沈倫せり　生死の海に沈て長く輪廻するをいへり　往生禮讃云煩惱深無レ底生死海無邊矣　法事讃云不レ得二自悟一永沈淪矣

愚やな心からこそいきしにの海共見ゆれ眞如の月　心にまよふが故に生死の海と見る也まよひを去ては眞如妙躰にして月のかゝやくかことし往生禮讃曰衆生盲冥不二覺知一永沒二生死大苦海一矣　眞如の月は山姑に注す○いき死の二つの海をいとはれてしほひの山をしのひつる哉

武士の矢島にいるや月弓の　　源氏の武士多く矢島にあつまり居たる事を思ひ出てものゝふの矢島にいるとはつゝけたりものゝふとはやといはん爲の枕詞也古歌にものゝふのやそ宇治川なとよめり袖中抄云ものゝふとは人の惣名也と云々　奥儀抄云ものゝふとはたけきものといへ共たゞ男をなべていふにこそと云々○喜撰式云若詠レ人時ものゝふと云云々　按するに或云日本紀に神武天皇元年宇摩志摩治命道臣命兩人に軍兵を卒して內裏を警固す道臣命の司軍兵を來目部と云宇摩志摩治の司軍兵を物部と云也武士をものゝふと云事是より始るといへり古今序にたけきものゝふの心をもなくさむるは歌なりと有此等の說を以て見れは武士をものゝふと云事尤也しかあれはものゝふを人の惣名共いひかたき歟月弓は弓張月を云也弓は槻の木にて作る也依てつき弓と云也

閻浮の故郷　　閻浮とは南贍浮洲を云也此娑婆世界を閻浮の故郷と云也白髮に注す

年なみのよるの夢地に　　年なみは年次也月次と云に同し波のよると云緣にて年波と云かけたり　（眷玉）

諸手なる習はいかにつれもなき我年波のよるの泪は

修羅道の有樣　　往生要集云明二阿修羅道一者有レ二根本勝者住二須彌山北巨海之底一支流劣者在二四大洲間山巖之中一雲雷若鳴謂二是天鼓一怖畏周章心大戰悼矣　六道講式云言二修羅一者常含二瞋恚一鎭懷二怨毒一與二天帝一諍一權屢侵二喜見城一或時撐二須彌山一或時把二日月輪一然爲二天帝軍一被二摧破一時怖畏萬端矣

山家　○はかなしやあらそふ事を橋にしていかりをのみも結ふ心は

さへかへり　　詞林三知抄云沍回と書二月中頃を云也餘寒の心也　○山は今宵の衣きさらきの空も雪けにさえかへるなり　雙忠

くつばみ　　轡也銜（クツハミ）勒（同）と書說文曰轡馬轡也矣　陸佃云御者銜馬以レ鞭爲レ主騁馬以レ轡爲レ主矣くつわと云訓は口輪也馬の口のわ也くつばみはくちはめ也口にはむるかね也昔は革にて作ると見えたり或は鳫木轡と云有はみをがんきにすり口強き方の手綱を引へし馬を乘入るにもよし軍陣てもよし忍之轡は絹にてまく也緒子綱有

其時兼房申樣口惜の御振舞やな渡邊にて景時が申し
も是にて社候へ　義經流れし弓を取給ふは大將の
身として御身のかろ〳〵しき事を兼房が申せし也
文治元年二月十八日渡邊にて義經と景時と逆櫓の
論に義經押て舟を出し給ふ是も御身のかろき事を
云也委く平家物語に見えたり兼房は二人靜に注す
渡邊は攝州也　景時は桓武天皇後胤權八郞景經孫
景長子梶原平三と號す賴朝の近臣坂東八平氏の內
也　盛長私記云正治二年庚申正月梶原駿州狐崎の
戰に矢部の小次郞討二取之一矣
縱千金をのべたる御弓也共御命にはかへ給ふへきか
と平家物語に縱千疋萬疋にかへさせ給ふへき御た
らし也と申共いかてか御命にはかへさせ給ふへき
かと有盛衰記には縱金銀をのべたる弓也如何樣に
替させ給ふへきと有兼房とはなし軍兵等かいひし
也　智度論曰設滿二世界一寶無レ有レ直二身命一矣　論
衡曰世稱利劍有二千金之價一矣
佳名はいまだ半ならす　佳名とはよき名也三體詩
陸龜蒙句蓮華峯下得二佳名一雲褐相兼上二鶴翎一矣
矣

名は末代にあらすやと　本朝文粹十云夫形者百年
之旅館也名者萬代之嘉賓也矣
智者は不レ惑勇者は不レ懼　論語子罕篇曰子曰知者
不レ惑仁者不レ憂勇者不レ懼矣　朱註曰明足二以燭一
理故不レ惑理足二以勝一私故不レ憂氣足二以配一道義一
故不レ懼此學之序也矣
やたけ心のあづさ弓　やたけ心は猛心也あつさ弓
は梓の木にて作る弓也　續日本紀云文武天皇大寶
二年信濃國獻二梓弓一千二十張一矣　古今堯惠抄云
梓弓に三儀有一には巫の口よするとて打弓二には
梓の木にて作りたる弓東國にはあづさの木と云餘
國にはちさの木と云也三には陸奧國足懸郡と云所
に作る弓也公家の年貢に奉る弓也云々○武士のや
たけ心の一筋に身を捨てこそ浮む瀨もあれ
惜むは名のためおしまぬは一命なれは身を捨てこそ
○惜むとて惜まれぬへき此世かは身を捨て社身を　玉葉
も助けめ西行
こうきにも佳名をとゝむへき弓箭の跡成へけれ
こうきに謠抄に後規とかけり但後記と書が然るへ
き歟弓箭は文武の二つをいへりよき名は後代の文

にもとゝめ置と云事也鶉鷺記云今度の合戦は希代の珍事たる間定而後記にとゞまるべしと云々 上下略

矢さけひ　たがひに矢を放てわめきさけぶ也

壇の浦の其舟軍　壇の浦は長門國に屬す　道ゆきふりにいふ 源貞世 此浦を壇の浦と云事は皇后のひとの國うち給ひし御時祈の爲に壇をたてさせたまひたりけるよりかくは付けるとかや中也其時の壇の石にて侍るとて御社の前の神功みちの邊にしめ引まはしたる石あり云々　日本紀に神武天皇自諸皇子舟軍帥て東征し給ふ是舟軍の始め也

陸には波の楯　楯の多きを波に見たてたるなり陸は說文曰高平曰レ陸又路也矣　楯は舊事紀に天照大神の時彥狹知神作レ盾と有楯の板は榎木か楠などにて作る也厚さ三寸計かいたて午楯共云也又車楯とて有又屏風楯とて舟軍に用る有猶口傳有

潮にうつるは冑の星の影　星冑は冑にいくつも星のあるを云也星は筋の間にあり大星小星打出とて有大星とは座の有を云座なきを小星とす又鋲を以て織て鋲の頭を打返したるを打出と云也王元長曲水詩序曰魚甲煙聚貝冑星羅矣　呂向註曰魚甲以ニ鮫皮ニ爲レ甲貝冑以ニ貝珠ニ爲レ冑也矣

水やそら〳〵　袋草紙云俊綱朝臣家に詠ニ水上月哥ニ講レ之而田舎兵士中門の邊に宿りて聞ニ此事ニ予靑侍に語て云今夜の題をこそつかふまつりて候へと云々　侍云有レ興事也如何兵士詠云　水や空そらや水共見えわかすかよひてすめる秋の夜の月　侍來て申ニ此由ニ萬人驚歎て詠吟して且つかんし且恥て各退出云々　此歌新後拾遺集に入かよひてうつると有

定家

正二位中納言民部卿藤原定家は御堂關白道長六代後胤俊成卿之子息也母若狹守親忠女云ニ美福門院伯耆ニ定家卿本名光季又改ニ季光ニ後號ニ定家ニ二條京極におはしければ京極中納言といへり又蓮眼の小倉に山莊あり依て小倉黄門共申也二條院應保元年に誕生す後堀川院貞永元年十一月に出家法名云ニ明靜ニ死去の改名を以靜といへり四條院仁治二年八月廿日行年八十三歳にて逝去云々　此卿の行

狀諸記に具に出たり略レ之
雜文集云今は昔後白河院の皇女式子内親王と申奉るあり初は加茂の齋宮にそなはり程なくおり居させ給ふに定家卿をよばすなから御心さし淺からさりけり有時まいり給ひて「歎共戀ふ共あはんみちやなき君葛城の峰の白雲　と口すさふやうにて申させ給ふ此卿はけしからずみめわろき人なりければ齋院御返しにも及ばすその御つらにてやと計仰られて打そふかせ給へは御こと葉の下より定家「されは社夜とは契れ葛城の神も我身も同し心にとよみ給ひけるとなん已上
徹書紀物語云爲重卿秋夕「一方に思ひ知へき身のうさのそれにもあらぬ秋の夕暮　とよめり爲重は以之外眉目わろくわたりし也　内裏にて女房の有しに手をとらへて今宵と契給ひけれは女の返しにおぬしの顏にてやといひけれは詞のしたにて「されは社夜とは契れ葛城の神も我身も同し心に　とよめり已上　私云右の雜文集と此物語の説と相違せり何れか是なる是等の説に本つきて此謠を作る成へし

山より出る北時雨行衛や定めなかる覽　時雨は北より降くる物なれは北時雨とは云也但北時雨とよめる歌未考　胡蝶云冬のけしきにかはりきて木の葉をさそふきた時雨云々　倭名抄云𩅿𩃼云一雨小雨也和名之久禮矣　爾雅曰小雨曰ニ𩃼雨ト時雨曰ニ澍雨ト矣
是は北國方より出たる僧にて候　上に北時雨とあるによりて北國方とつゝけたり僧の字は田村に注す
都の字咊は高砂に注す朝またきは融に注す山又山は舟橋に注す花の都は田村に注す
急候程に是ははや都千本のあたりにて有けに候
千本の寺は光明山引接寺と號す在ニ朱雀通北限舟岡南ト開基定覺上人也琰王の像は定朝の作也千本と云事西行櫻に記す○春は又所も花の千本に見せをく棚の鳥の色々
面白は三輪神無月は湯谷なふ〳〵は江口に注す
それは時雨の亭とてよしある所なり　時雨の亭は定家卿時雨を愛し給ふ所とて其古跡所々にありといへとも慥成證文なけれは治定しかたし西陳般

舟三昧院は元伏見にありて天正年中に此地に移す此所歡喜寺の舊跡也又此邊に同名有て雨歡喜寺と號す此所に式子内親王の塚有則此所時雨の亭の古跡といへり　應仁記云千本に雨歡喜寺此寺に定家葛の墓あり云々此謠に作る所是也今案　相國寺の内普光院に其舊跡ありヨ長嘯子叡山にまうでられける詞に云まことは九重のかたはら柳原のほとり今の相國寺のうちに時雨の亭も有しとぞ長錄の頃ほひ毎年の八月廿日にはすいたる人々秋の半も過ぬへしと云句を一もじつゝはじめに置て歌よみとふらひしも此所なるへしと云々　同妙壽院をいためる詞に云ひつきは定家卿の古き跡時雨の亭とかやいへる所におさめはふむりつ云々　考ふるに妙壽院殿は定家卿より廿五代にして死去あり相國寺の塔頭普光院に葬す則此内に定家の石塔有此時雨の亭の古跡なる事うたかひなきもの歟其外さがの厭離庵にあり共又絹笠山松原村にあり共又小倉にあり共いへり證文あらされは決定しかたし

逆緣の法をも説給ひて彼御菩提を御弔ひあれと

此僧式子内親王の爲に心指て此所へ來りたらは順緣成へし何となく都一見の爲に此所へ來り給ふ故に逆緣の法をも説給ひて彼御菩提を御弔ひあれと女の進め給ふ也仍而逆緣とはいへり菩提の字義は三井寺に注す弔の字は　説文曰弔問ㇾ終也古之葬者厚衣ㇾ之以ㇾ薪双ニ人持ニ弓會敺ㇾ禽矣　韻會云弓蓋往復弔問之義徐曰弔喪當ㇾ有ㇾ助故双ニ人持ニ弓矣　廣韻云弔ㇾ生曰ㇾ唁弔ㇾ死曰ㇾ弔傷也矣　公羊傳註云弔ニ亡國一曰ㇾ唁弔ニ失國一曰ㇾ弔弔ニ喪主一曰ㇾ傷矣

時雨時を知と云心を一僞りのなき世なりけり神無月たかまことより時雨そめけん此ことかきに私の家にてとかゝれたれはもし此歌をや申へき　是は中納言定家卿の歌也　拾遺愚草詞書云時雨知ㇾ時私家矣　又續後拾遺集に時雨知ㇾ時といへる心をと計ありて私の家とはなし歌の心に時雨時をたかへす必神な月の頃ふる物也それはたがまことより時雨降初けるぞ定めなき世と思へば扨は僞りのなき世にて有けるぞと也古今集に時雨ぞ冬の始め也けるとよめる心をとれり

一樹の陰の宿り一河の流れ　　千壽に注す

庭も籬もそれとなくあれのみまさる　　〇古里はあれ

て人は古にし宿なれや庭も籬も秋の野らなる　遍昭
草村の露の宿りもかれ〳〵に　賢木巻云淺芽が原
もかれ〴〵なる虫のねに云々匠材集云かれ〳〵は
わかれ〳〵也云々　詞林三知抄云離々と書人の中
はなれに成也云々夜をへだてたる事を夜離といへ
り又目離といふも同じ
星霜ふりたるに　遊行柳に注す
是は式子内親王の御墓にて候　式子内親王は後白
河第三の皇女也大炊御門齋院共萱齋院共申也高倉
宮同腹の御妹也母は大納言季成女從三位成子と號
す簾中抄云後白河院御女式子内親王平治元年卜定
加茂齋院に立給ふ云々　墓は千本兩歡喜寺にあり
委く上に記す　職原抄云内親ニ帝王姉妹娘必内親
王宣下未ニ宣下一則可レ稱ニ皇女一矣　歌書にては内
親王をひめみことよむ也
又此かづらを定家葛と申候　定家葛は葉は橘のこ
とく又五味子に似たり花は梔（クチナシ）に似て小さく白し年
を經て久しきは四五月に小さき白花咲て香あり其蔓
細く長し垣及石にはふ　訓蒙圖彙云名ニ絡石一又石
綾石龍藤葉頭尖而赤者名ニ石血一矣

賀茂の齋の宮　伊勢の齋宮に等しく賀茂へも皇女
を立給ふ也　玄旨云伊勢にては齋宮かもにては齋
院と申也何れもいつきの宮とよむ也　延喜式第
六云凡天皇即位者定ニ賀茂太神宮齋王一内親王未レ
嫁者卜定若無ニ内親王一者依ニ世次一簡ニ諸王女一卜定
矣帝王編年記云弘仁九年五月以ニ皇女有智子内親
王一始置ニ賀茂齋院一天皇與ニ奈良帝一不快時御願也矣
神社考云平城嵯峨帝爭ニ帝位一時嵯峨帝爲ニ祈願一
以ニ皇女有智子内親王一始立ニ齋院一至ニ土御門院元
久元年三十四代齋院一斷絶矣　盛衰記云嵯峨天皇
御宇大同五年庚寅平城の先帝内侍典勸に依て世亂
れ給ひければ其祈に始て帝の第三の皇女有智内親
王を加茂の齋に立奉らせ給ひき是齋院の始也云々
齋院の地は大德寺の北今宮の東に大源庵と云禪寺
あり是其古跡也といへり
、今案賀茂の齋院は卜定有て東河に望み見そぎの事
有て直に初齋院へ入給ふ初齋院とは大内の中に大
膳職或は左近府などを點してそれにて三年潔齋の
事有其年の四月に御社へ參り給はんとて祭の前に
吉日をえらひて又御禊の事有則紫野の野宮に入給

ふ是を二度の祓(ハラヒ)と云也掛中の酉の日賀茂社へ参り給ひて祭事に随ひ給ふ也 巳上花鳥餘情 伊勢の齋宮の事は野宮に記す

邪婬の妄執　東岸居士に注す

心の奥のしのぶ山忍ひてかよふ道芝の　伊勢物語業平の歌に「しのぶ山忍ひてかよふ道も哉人の心のおくも見るへく　愚見抄云信夫山は奥州の名所也人の心の奥とそへたり云々　九禪抄云人の中へ忍ひてかよふ道のあれかし底から真女取しからぬかを見たきと也云々　伊勢物語詞書略レ之

玉の緒よ絶なはたえねなからへはしのふる事のよはりもぞする　新古今集戀の一式子内親王歌也　詞書云百首の歌の中に忍戀を云々　東野州云歌の心は忍びあまる思ひを押返し／＼月日をふるにかくなからへは必しのふる事のよはらんと思ひ侘て命も絶なは絶ねといへりあらはれはいかなる名にか立んと深くしのふ心也云々　自讃歌注云是はしのぶ戀の心ふかきさま也よはりもぞするとはかくしのひてもなからへゆかば心もよはりこそせめとなり云々　與竹集云玉の緒は命を云也又しばしと云心も有此歌の玉の緒は命也又あふ事は玉のを計名のたつはといへるはしばしの心によめり云々

心の秋の花すゝきほに出そめし　○拾遺員外 昔人の心にしのふ秋の野をほに出てなびく花薄哉

昔は物を思はさりし後の心そ　○拾 逢見ての後の心にくらふれは昔は物を思はさりけり　定家卿自筆の小倉色紙には昔はものもと有

哀れしれ霜よりしもに朽果て世々にふりにし山あいの袖　藤原定家卿の歌也拾遺愚草に入て世々にふりぬると有歌の心は述懐の體をよめり山藍の袖とは小忌衣を云也山藍とは自然に山に生ずるは清し此藍を以て白張の布に紋をすりつくる也是を青摺の衣共云也田畑の藍にて染るに非ず　玄旨抄云舞人の装束に忌衣は白布に山藍にて繪をかく也あの字を略して山ゐ共云也云々　錺抄云小忌衣山藍葉取集摺レ之無二山藍一時用二蔓葉目渡志木一矣　若菜巻に舞人の山あゐの小忌をきたると有

うき戀せじと御祓せし　古今集戀一よみ人しらず「戀せしと御手洗川にせし御祓神はうけずも成に

けらしも　伊勢物語には成にける哉と有歌の心は今より戀せじと御手洗川に禊せしかと神はうけすもあるか猶戀しきと也御手洗川は賀茂に注す古今實枝抄云此歌は二條后の御事坐に思はれてほころびぬへかりしかは業平賀茂の河原に行て吉備大明と云陰陽士を請じて戀せじと云祭をしけれ共いとゞ戀しさ増りければよみて后に奉る歌也云々

雲の通路絶果て乙女の姿とゞめえぬ　此歌羽衣に注す

歎共戀ふ共あけん道やなき君葛城の峰の白雲　定家卿歌也拾遺愚草に入歌の心は君を葛城の峰の雲にたとへ及ばぬ戀なれば歎共戀ふ共あふへき道なしと深く思ひ入たる様なるへし

荊の髮は山姑に注すくれはとりあやしやは呉服に注す

淺茅生の霜に朽にし　〇新古淺茅生の袖に朽にし秋の霜忘れぬ夢をふく嵐哉通光

よしや草葉のしのふ共色には出よその名をも　伊勢物語云昔宮の中にてあるこたちの局の前をわたりけるになにのあたにか思ひけんよしや草葉よならんさか見んと云おとこ「つみもなき人をうけへは忘草おのか上にぞおふと云なる　私云謠の詞是にてつゝけたり伊物の心は宮の中は禁中也こたちは九禪抄に女房衆なと云心也局の前をわたりけるは業平の過ける也あたは清てよむ也眞名本に怨と書たりよしや草葉よならんさかみんとは實齋云此詞は古歌の下句かと思へ共いまだに見あたらず意は聞えたり春夏の盛りの草も秋冬おとろふることく終には業平の盛りなる身もおとろふるあきあらんとのろふ詞也さがは不祥共惡共書也云々　業平の歌の罪もなき人をうけへはとは　愚見抄云うけへは日本紀に誓の字をよめり爰には咒詛をうけへと云八雲御抄に見えたり闕疑抄云とがもなき我を咒詛しのろはゝ却てそなたの身の上におふへきと也云々　愚見抄云忘草生といふも死ぬる事也人のなく成て久しくなるを忘草生と云也云々　續日本紀に石上蟲丸か歌に「忘れゆくつらさはいかに命あらはよしや草葉にならんさが見ん

かけろふの石　弓矢幡及田村に注す

それ共見えすつた葛若しみを助け給へと　つたか

つらにはくるゝと云諷詞有依て苦しみとはつゝけたり

思ひの玉　　念珠也盛久に注す

夢か・よゝの現の宇津の山月にもたとるつたの細道

是は古歌蔦末レ若宇津の山は駿河也蔦の細道は宇津の山の海道の下にあるほそき道を云也　蔦の下道共いへり

昔は松風羅月に詞をかはし翠帳紅閨に枕をならへ江口に注す

花も紅葉もちり〳〵に　　新古○見渡は花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮定家

朝の雲夕の雨は夕顔に注す無常は墨田川に注す

佛平等説如一味雨隨衆生性所受不同　　法花藥草喩品の文也佛平等の説は一味の雨のことし衆生の性に隨て受る所同しからすと訓讀する也たとへは空より降雨は同しけれ共千草萬木の大小によりて受る所不同有と也　新拾遺集に普賢菩薩の御歌とて

一諸共に一味の雨はかゝれ共松は緑に藤は紫

唯今讀誦し給ふは藥草喩品よなふ　　讀誦は田村に注す藥草喩品は芭蕉に注す

中々なれや此妙典にもるゝ草木のあらされは　　妙典とは法花經を云也妙は妙法也典は爾雅云經也法也矣○徒にもるゝ草木もなかりけり一味の雨の所わかねは後鳥羽院

是ぞ妙なる法のをしへ　　妙法蓮花經のをしへ也

二ツもなく三ツもなき一味の御法の雨　　一味の雨と云にて二もなく三もなきとつゝけたり　　方便品曰十方佛土中唯有二一乘法一無レ二亦無レ三矣　鵜飼にも出たり　○妙法の只一のみ有ければ二つ共なく又みつもなし源信

皆うるほひて草木國土悉皆成佛　　芭蕉に記す

釋相集○大空の雨はわきてもそゝかねとうるふ草木は己かさま〳〵同

足弱車（アシヨハ）　　湯谷火宅は軒端梅小忠衣は高砂おもなやおもはゆは葛城柱の篁は卒都婆小町葛城の神よるの契りは葛城に注す

歸るは葛の葉の　　玄旨云葛は初秋よりうらを返すもの也と云々依て歸るは葛の葉とつゝけたり新古○葛の葉のうらみに歸る夢のよを忘かたみの野邊の秋風

芭蕉

潮海新聞曰安成彭元功築ニ庵於山中ニ使ニ一奴ヲ守レ之ニ一日暮時有ニ婦人ニ求レ宿自稱ニ小小人ニ奴固拒レ之婦人入ニ奴臥室中ニ不レ去奴推レ之夜中又登ニ奴榻ニ奴舉而擲レ之輕如ニ一葉ノ奴懼取ニ佛手ニ執レ之婦人笑云汝謂レ提レ經耶天將レ明庵有ニ神鐘ニ起擊レ之婦人云莫レ打々レ々打得人頭碎遂去奴趁出レ門觀レ所レ向入ニ松林間ニ忽不レ見蓋林中芭蕉叢生也奴歸見レ壁有ニ五言詩ニ意婦人芭蕉精也詩云「妾住ニ小水邊ニ君住ニ青山下ニ青年不レ可レ再白日座成レ夜只見ニ船泊レ岸不レ見岸泊ニ船豈讀深谷裏風雨謾ニ芳年ニ薄情君抛棄叺石萬里遠ニ夜月空明芭蕉心不レ展解下綵羅裙充情對ニ有情ニ那知妾意重只道妾身輕羅縱ニ佛口ニ出佛不レ在ニ經裏ニ郎在ニ妾心頭ニ郎身隔ニ万里ニ月色照ニ羅衣ニ永夜不レ能レ寐莫レ打ニ五更鐘ニ打得人心碎矣　此謠は此潮海新聞を以て作る成へし謠の文句は法華經に依てつゝけたり

是は唐土楚國の傍小水と申所に山居する僧にて候

楚國は本名レ荊至ニ成顒ニ始改號レ楚成顒楚成王名成王文王子也楚州今屬ニ南京ニ楚州之事大明一統志及學府全編等に見えたり小水は所の名に非す水の少し流るゝ所なるへし潮海新聞五言詩に妾住ニ小水邊ニとあるにてつゝけたり

扨も我法華持經の身なれは　法華經は大會及鶏飼に注す

人のおとなひ聞へ候　日本紀に宣響(ヲトナヒ)と書音なひはきぬのおとなひより云也源氏初音の卷に見えたり

既に夕陽西にうつり山峽の陰冷しくて　纂要曰日光已出曰ニ朝陽ニ日暮曰ニ夕陽ニ矣　悉く誓願寺に註す山峽とは山のあひ也冷しとは秋寒くなるを云秋の詞也

寂寞とある柴の戸に此經を讀誦する　法華法師品曰獨在ニ空閑所ニ寂寞無ニ人聲ニ讀ニ誦此經典ニ我爾時爲現ニ清淨光明身ニ矣寂寞楊貴妃に注す讀誦は田村に注す

芭蕉に落て松の聲あだにや風の破るらん　松の聲とは松の風也物にあたりて風の下るをおち風と云也倭名抄云唐韻曰芭蕉其葉如レ席者也兼名苑云一名甘蕉矣錢起詩云葉大怯ニ秋風ニ〇後拾風吹は先破れぬ

る草の葉によそふるからに袖ぞ露けき公任
風射ニ破窓ニ燈易レ滅月穿ニ疎屋ニ夢難レ成　此詩は在ニ百聯抄解ニ　上句の心は破れたる窓へ風の矢をいることく吹入れば燈きへやすき也下句はあばら屋の板間より月の指入てねられざる氣味也但謠には風破窓をひてとうたふ也杜律八十三に風飄ニ破窓ニと云句有是を取あやまれる歟
友こそ岩木なりけれは　紅葉狩に註すからきぬは杜若に註す衣の珠は班女に注すうたかたは夕顔に記す
さも値かたき御法をえ　値かたき御法とは法華經をさして云也法華方便品曰說ニ是法ニ復難無量無數劫聞ニ是法ニ亦難矣
一樹の陰　千壽に注す
愁は崖寺のふるに破れたましゐは山行の深に傷しむ　杜子美詩云神傷ニ山行深ニ愁破ニ崖寺古ニ矣杜子美集に見へたり上句は杜子美旅行の時山中深く入て神を傷しめ愁たる義也下句は崖陰の古寺に入て山行の愁を打破て心をなくさむると云義也
蘭省の花の時錦帳の下とは廬山の雨の夜草庵の中　白氏文集十七曰蘭省花時錦帳下廬山雨夜草庵中矣樂天廬山の草堂に雨の夜獨宿して都の友に寄られし詩也上句は彼友都に在て朝につかへ榮達にほこる有樣也蘭省は尙書省を云本朝の太政官也彼蘭省の繁花の所の花の時に錦の帳の下に奕榮へてこそおはすらめと思ひやる也下句は其榮達にひきかへて我只今の有樣匡廬の山中殊に雨夜の草庵の中さびしくたえがたきを云也廬山は紅葉狩に注す
拾遺員外
○蘭省の花の錦の面影に應かなしき秋の村雨
我等ごときの女人非情草木の類迄も賴しうこそ候へ　此女芭蕉の精なるが故に此法華經を聽聞せは非情草木の類迄も賴しきと也
唯一念隨喜の信心なれば　隨喜功德品曰其有レ聞ニ是經ニ若能隨喜者爲レ得ニ幾所福ニ矣
藥草喩品あらはれて　法華第五藥草喩品者文句七云藥草者能除ニ四大風冷ニ補ニ益五臟ニ還レ年駐レ色令レ蒙ニ甘雨ニ忽成ニ藥王ニ餌レ之遍治ニ衆病ニ變レ俗成レ仙譬下諸無漏聞レ經破ニ無明惑ニ開ニ佛知見上文云我等今日眞是佛子乃至面於ニ佛前ニ得ニ受記ニ[illegible]稱レ徹故言ニ藥草喩品ニ也矣

草木國土有情非情も皆是諸法實相の　　諸法實相の文は方便品に說り　經律異相云一切万物無レ非ニ諸法實相ニ矣實相は江口に注す草木成佛の事即藥草喩品に長々と說り略レ之　新勅撰云大僧正明尊山階寺供養の導師にて草木成佛の由を說侍りけるを聞て朝に遣しける大僧正深觀歌に「草木汔佛の種と聞つれはこのみとならん事も賴もし

峰の嵐や谷の水音佛事をなすや　　是即諸法實相の心也或は是を法身說法とも云也法身說法は杜若及放下僧に記す

燈を背けて向ふ月の下共に哀む　　采女に注す

思ひの家なから火宅を出る道なれや　　軒端梅に注す

柳はみとり花はくれなゐ　　山姥に注す

有明　　高砂に注す

値難き法にあひ受難き身の人界を　　卒都婆小町及江口に注す

さやかは　　景淸に註す

雪の中の芭蕉のいつはれる姿のまことを見えはいかならんと　　筆談書評云王摩詰畫多不レ問ニ四時一以ニ桃李芙蓉蓮一同畫袁安臥雪圖有ニ雪中芭蕉一得レ心應レ手意到便成矣簡齋詩云雪裏芭蕉摩詰畫矣　此心は雪の時分芭蕉はなきものなれ共王摩詰畫の上手にて不レ論ニ時節一筆に任せて雪の中に芭蕉を書たる也謠の心は芭蕉の精女と化したるを雪中の芭蕉に喩へたり依ていつはれる姿といへり

鐘の聲諸行無常湯谷及三井寺に注す優曇花待えたるは實盛に注す

庭野もせ山陰のみそねられねは　　庭もせ野もせと云詞のあれは庭野もせとはつゝけたり野もせは野ノ狹(モセ)と書せばき心也佛原に注す

あらかねの土　　田村に注す

花そめならぬ小袖のほころびも愧しや　　花そめとは女心のあたなるを云也はころひと云は俗にふくろびといふに同し　(古)世の中の人の心は花染のうつろひやすき色にそ有ける　讀人不レ知

夫非情草木といつは誠は無相眞如の體　　是等は藥草喩品の文の心也眞如は江口に注す

一塵法界の心地の上に雨露霜雪の形を見す　　圓悟錄卷一云一塵含ニ法界一一念徧ニ十方一盡大地是眞實

人矣慈覺云舒之法界還小縮之塵猶大也矣大惠書云於一々塵中以夢自在法門開悟世界海微塵數衆生住邪定者入正定聚矣雨露霜雪とつゝけたるは藥草喩品に一味の雨と説り此文の心也定家に注す●賴しな一つの塵の中にたに四方の佛のこもらぬはなし 光後

然るに一枝の花をさゝけ御法の色をあらはすや花供養の心也又世尊拈華（ネンゲ）の心も含ませたり　如來於靈山會上説法の日大梵天王來下して金色の波羅華を以て佛に供養して白言如來一代の説法は悉く是應病與藥の教門にして未顯實心願は直に眞心を指給へと爾時如來其供養する所の花を以て拈じて大衆に示す人天百萬、杲更に心を得ず金色頭陀〈頭陀第一摩訶迦葉其身如金の色〉破顔微咲す爾時如來言吾有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門付屬摩訶迦葉矣〈大梵天王問佛決疑經取意〉

一花開けて四方の春　如來一句の法門を以て世界の衆生を教化し給ふを云也證文雜波に記す

色香に染る心まて諸法實相隔もなし　山河草木土石風聲水音一切萬物或は色にそみ香にめつる心まて當躰即諸法實相と見る也　拾　色も香も誠の法と聞しより花に心の猶うつるかな 僧正慈能

水に近き樓臺は先月をうるなり陽に向へる花木は又春にあふ事やすきなるそのことはりも様々の　事文前集薦擧門云范文正知杭州蘇麟爲屬縣巡撿城中兵官往々皆獲薦書獨麟在外邑未見收錄因公事入府獻詩曰近水樓臺先得月向陽花木易爲春矣文正薦之已上詩の心は上句に樓臺は高き所也水邊の樓臺なれは月の影早くうつり見ると也下句向陽花木とは南は陽也南面にある木は花早く開けて春となりやすきと云義也○水に近き臺の上に待出ん月は手にとる光とや見ん 後柏原

秋くる風の音信は庭の荻原先そよぎ　○秋きての 新續古 風の宿りは爰にのみありとやそよく庭の荻原 入道一品親王永助

身は古寺の軒の草しのふとすれといにしへも　しのふ草をいひかけたり梅か枝に注す

芭蕉葉のもろくも落る露の身は置所なき　維摩經曰是身如泡不得久立是身如芭蕉中無有堅矣葵上に記す○ 新勅 浮世をも秋の末葉の露の身に置所

なき袖の月影侍従具定母　○延文百首あさ地原うらかれ行は露の
身の置所なく虫や鳴らん右大臣
虫の音の蓬かもとの心の秋とてもなとかかはるらん
○千露しけき蓬か本の虫の音をおほろけにてや人の
尋ん業式部　○蓬生尋ても我こそとはめ道もなく深き蓬
の本の心を
よしや思へは定めなき世は芭蕉葉の夢の中に　列
子穆王篇云鄭人有下薪二于野一者上遇二駭鹿一撃而斃
レ之恐二人見一レ之也藏二諸隍中一覆レ之以レ蕉俄而失二其
處一遂以爲レ夢順レ途而詠二其事一傍有二聞者一取レ之歸
告二室人一曰薪者夢得レ鹿不レ知二其處一吾今得レ之彼直
眞夢者矣　是を芭蕉の夢と云也○藏玉吹風の夢や破ら
ん庭忌草花は軒端のともし火の影　庭忌草とは芭
蕉の異名也
小鹿の鳴ねは聞なからおとろきあへぬ人心思ひ入さ
の山はあれと　○聞なからおとろきあへぬ人心思
ひ入さの山になく鹿是は古歌也但よみ人未レ考入
佐の山は但馬の名所也○金戀佗て思入さの山の端に
出る月日のつもりぬる哉大中臣公長

おきふししけき小篠原しのに物思ひ　起伏とは常
住也しのに物思ひとは忍ぶに物思ふ也又篠にしの
と云諷詞有○新千小篠原しのに亂て飛螢今幾夜とか秋
を待らん土御門院
白妙　田村に注す
氷の衣霜の袴　氷の衣、水衣、苔衣なと古歌によ
めり霜の袴證文未レ考　今案袴は下に着する物な
れば下の袴といはんとて氷に霜を對していへる
歟
霜のたて露のぬきこそよはからし　古今集秋の下
に入藤原の關雄歌也下句は山の錦をおれはかつち
ると有榮雅抄云霜のたて露のぬきにて山の錦を織
るがぬきうすければやふれやすきと云世上のなら
ひになそらへて此錦もおれはかつちると云霜露の
たてぬきは紅葉を錦と云に付て也詩に織レ霜織レ露
三秋錦と有云々
久堅の天津乙女の羽衣なれや　久堅乙女羽衣何れ
も羽衣に注す一休水鏡云君が千とせをへん事も天
津乙女の羽衣よなふと云々
是も芭蕉のは袖をかへし　芭蕉布多出二琉球國一剃二

芭蕉莖皮ヲ淹レ之瀑乾紡ヲ績之ニ爲レ布但着レ之ょはき
もの也依て上に露のぬきこそよはからじとこたふ
也

芭蕉の扇の風　格物論曰芭蕉一名芭苴叢生大者三
四尺圍葉如レ扇廣尺餘長一尺矣　李義山詩云芭蕉
開ニ綠扇一矣

范々　井筒に注す

庭の淺茅生女郎花苅萱係うつろふ　淺茅は茅の短
きを云爰は秋をつゝけたれば長たる茅を云也女郎
花菊なとのしほるゝをうつろふといへり苅萱は亂
るゝと云也何れも證歌略レ之　苅萱生ニ山原一高二三
尺細莖細葉毎五葉兩々對生八月抽レ莖開ニ細花一矣

おみなへしは女郎花に注す

芭蕉は破れて殘りけり　夫木○風吹はあだにやれゆく
芭蕉葉の哀れと身をも頼むへき世か西行

謡曲拾葉抄巻六

江口

江口は在ニ攝州西生郡中島北寅河端一近世一宇を建
立して本尊に普賢菩薩ヲ安置し普賢院と號す江口
の君の御影あり其邊に小き池有云ニ君淵一高野之紀
行云烏丸資慶卿之作　漸々流れ行程に佐太の宮を一里計過て
川の西に小さき森の見えたるは江口也遊女の旧跡と
てなんあるを見んとて指よせて上りぬ川堤を一町
計り行てわらやのこなたに二間四面の堂あり普賢
堂成へし前にふりたる碑有よりてみれば彌陀の名
號をすへて其下に世をいとふ人とし聞はかりの宿
に心とむなと思ふ計そと書り右には攝州西成郡中
島江口と見ゆ左は文字消たり云々　撰集抄第九云
過にし長月廿日あまりの比江口と云所を過しに家
は南北の川にさしはさみ心は旅人の往來の舟を思
ふ遊女の有様いと哀れにはかなき物と見たりし程
に冬はまだ時雨のさへくらし侍りしかは賤がふせ
やに立寄晴間待まの宿をかり侍りしにあるじの遊
女ゆるす氣色見へさりしかは西行取あへず「世中を

いとふ迄こそかたからめかりの宿りをおしむ君哉とよみ侍りしかはあるしの遊女うちわびて「家を出る人としきけはかりの宿に心とむなと思ふ計そと返して内に入侍りき時雨の程しばしの宿とせんとこそ思ひしに此歌の面白さに一夜のふしとゝし侍りき此主の女今四十あまりにも成らんみめことからさもあてやかにやさしく侍りき夜すからなにとなき事共かたりて年頃そのふるまひをし侍りぬれともいとしくもなくそ覺ゆ女はことに罪ふかきとうけたまはるにこのふるまひをし侍る事先の世の宿執のほとおもひしられ侍りてうたてしくおほへしか文略　同第六云性空上人は日比法花讀誦の刧によりまのあたり六根淨の功徳を得たりといへ共生身の普賢菩薩を拜み奉らぬ事を恨み七日祈念しけり七日の曉天童來りて室の遊女が長者をおかめそれこそ眞の普賢なれとしめしてうせぬ教のまゝに室の長者が家に行て宿り給ふに長者出合酌取て上人に酒をすゝめ奉りて周防いみたらしの澤邊に風の音信てとうたへは並び居たる遊女共同聲にさゝら浪たつやれかとうたひはやしけり是ぞ生身の普賢にやと思ひ目をふさぎ心をしつめ給へはたんけん柔和の生身の普賢白象に座し給ひて法性むろの大海には恒順の月の光ほかからかなりとうたはせ給へり又目をあきて見れは遊女長者也うたふ聲さゝら浪たつといふ也上人たつとくたのもしき事限もなし扨いとまこひて出給ふ程に一町計去給ひてのち此長者俄に身まかりけり遊女として年をおくりしか共たれか是を生身の普賢とはおもひ侍らじと文略　古事談云書寫上人可レ奉レ見二生身普賢一之由祈請有二夢告一云欲レ奉レ見二生身普賢一者可レ見二神崎遊女長者一依行ヨ向神崎一相ヨ待長者家之處一只今自レ京客群來遊宴亂舞之間也長者橫座居執レ皷拍ヨ子之一上句詞云周防むろづみの中なるみたら井に風はふかねとさらゝ浪立と云々此時聖人成二奇異之思一眠合二掌之一時件長者應現普賢之貌乘二六牙白象一出二眉間光一照二道俗一以二微妙之音聲一說曰實相無漏大海五塵六欲之風不レ吹隨緣眞如之波不レ立無レ時云々其時聖人信仰恭敬拭二感淚一開レ目之時又如レ元爲二女人之貌一彈二周防室積一給開レ眼之時又現二菩薩形一演ニ觀法文一如レ此數個度敬禮之後聖人渧泣

退歸于レ時件長者俄起レ座曰ニ閑道一追ニ來聖人之許一示云不レ及ニ口外一即逝去于レ時異香滿宣云々長者俄頓滅之間遊宴醒レ興已上東齋隨筆同レ之

私云此謠は西行法師江口の遊女に宿かり給ふ事と性空上人室の遊女普賢ほさつとおかまれ給ふ事と此二義に依て作るなれ共謠の始終は皆西行法師の事に作りなしたり今案室の遊女は播州の室にあらす周防國室積也則室積に普賢堂有本尊は普賢菩薩出ニ現於海中一此所昔は船付也遊女すめり　鹿苑院准后義滿公嚴島詣記云源貞世之作周防國むろつみと云所に至ぬむかし生身の普賢のみかほおかまんとちかひける人につげ有て是こそ生身の普賢よとて此所の遊女をおしへける所ぞかし所の樣まことに面白し岩を高くきりしきてそびへたる峰三ッ四ッならびつゝ松柏むろなど云深山木苔おひさかりて浮雲うすくかゝれり云々　撰集抄に性空上人室の遊女とあるは周防國室積の遊女なる事明か也又古事談には神崎の遊女と有又曉筆抄には江口の遊女とあり異説まち〱なれは一決し難し追て尋ぬへし

月はむかし友ならは世の外いつくならまし　閑居の身は鳥の聲松の風月雪を友とすしからば世を外にする身の月を友とするならはいつくにか世を外にせんと也

僧は田村津國は高砂天王寺は富士太鼓從は融にしるす

宇殿の芦のほのみへし　宇殿は在ニ攝州島上郡上牧村之南一　親長卿記云文明十五年四月廿三日早旦歸京有ニ渡部一乘レ船及レ晩雨下宿ニ宇殿一矣　高野之紀云行水無瀬の洲崎を過ぬれは鵜殿の芦葉分涼しく風渡りて杳々と見えわたさると云々　一云宇殿の芦名物にてひちりきの舌にもちゆと云々○家世中ようとのゝ芦のよしとてもほの出けるな秋の夕風　光廣

松の煙の浪よする江口の里に着にけり　總て松の煙と云は古歌に遠山の松の青きを見て松の煙とつゝくる也爰にうたふ松の煙は此所水邊なれは松明をともし魚を取也それを松のげふりとは云也　枕草子云おほきなる木のもとに車たてたれは松のけふりたなひきてと云々注云是は篝火也打松とて松をたく也と云々　松の煙は鉢木に注す江口の里は

上に記す又美濃及筑前に同名あり（家）あぢきなく江口に立て古とへは戀しき毎に田鶴ぞ鳴なる　菅家

扨は是なるは江口の君の舊跡かや　　江口の遊女はいつの頃よりすめるその始をしらず法然上人九卷傳云昔小松天皇八人の姫宮を七道に遣して君の名を留め給ひき是遊君の濫觴なり云々　翼賛云一書に遊女が家の長が先祖を注して小松の天王の娘宮玉刺加陵風芳と云有けり江口神崎室兵庫の傾城はこの末なりと云々　古今集第八離別歌にしろめといへる讀人有

新撰歌枕云古今作者白女は江口の遊女也美女の聞えあり嵯峨天皇御思ひ人也云々　古今素純抄云遊女しろめは大江のたまぶちが女也云々　榮花物語云後三條院住吉行幸の時江口の遊び二船計參り錄なと給はせけると云々　大和物語云亭子の御門河尻におはしましてうかれめにしろめと云もの召てけり歌なと奉りけれはものなと給ひける云々　今案しろめと云名は遊女の總名と聞ゆ貌をつくろはず器量よきといへる義にてしろめといふと見えたり今世に白人といへるも此義によれりとぞ

其身は土中に埋といへ共名はとゞまりて　　源氏供養に注す

實や西行法師　　百練抄云保延六年十月十五日西行法師出家矣　西行の系圖は西行櫻に注す法師者十住毘婆沙論云應行二四法一名二法師一廣博多學能持二一切言辭章句一二決定善知二世間出世間諸法生滅相一三得二禪定智一於二諸經法一隨順無レ諍四不レ增不レ減如二所說一行矣　職原云法師位准二四位一大法師准二三位一矣

世中をいとふまでこそかたからめ假の宿りをおしむ君哉　　新古今集羇旅部に西行法師歌也　詞書云天王寺へまふて侍りけるに俄に雨降けれは江口に宿をかりけるにかし侍らさりけれはよみ侍りけると云々　昔は京より天王寺へ參るに江口長柄など經て行しと也天王寺へまふで侍ると云事撰集抄には是なし歌の心は世をいとふ程の事こそなるましけれせめて假の宿りはおしむましき事とうらみたる心也逆旅寄寓假舍と書て假の宿りとよむ也

なか〳〵あれなる御僧　　音義云傖儜夷語相呼聲矣劉禹錫傳云鼓吹回裴其聲傖儜矣

世をいとふ人としきけは假の宿に心とむなと思ふ計そ　新古今集に遊女の妙が讀る歌也右の西行の歌の返し也上の五文字撰集抄及山家集には家を出ると有歌の心は世をのがれ家を出る人と聞からには假の宿りに心とめて宿かり給ふまじきとの答へ也

此方も名におふ色好の家にはさしも埋木の人忘れぬ事のみ多き宿に　古今假字序云色好の家に埋木の人忘れぬ事となりてと云々關寺小町に注す　名におふとは只名付たる心也　古今榮雅抄云名におふと云に付て佛弟子に大鈍根の人あり我名をわするゝ程に名を書て負(オヒ)てありきけりされ其證果の羅漢となる其墓より生たる草を名荷(ミヤウガ)と云名をになふとよめり云々　色このみのこの字すむべし色好は二字共に男女の美稱に限也

說文曰色顏氣也矣　詩序疏云謂㆓女人㆒爲㆑色矣　說文曰好美也双㆓女子㆒徐曰子者男子之美稱矣(ナリト)　韻會云好於㆑文女子爲㆑好矣

たそかれにかげろふ人はいかならん　たそかれは雲林院に注すかげろふは源氏供養に注すかげろふ人とははかなき人也

河隈　隈の字は猩々に注す

我宿の梅のたち枝やみえつらん思ひの外に君がきませる　拾遺集春部平兼盛歌也　詞書云冷泉院御屏風の繪に梅の花ある家に客(マロウト)きたる所と云々　歌の心はとふまじき人の思ひの外にきたるは宿の梅の立枝の外に見へてそれを見過しがたさにやと也

一樹の陰に宿りけん又は一河の流の水　千壽に注す

遊女のうたふ舟あそび　遊女に二義あり一には遊女を名付てあそびといふ人の遊興となるものなれば遊女と云也　榮花物語云江口のあそび二船計參りて祿など給はせけると云々　藻鹽草に遊女をあそびといへり一には遊はゆくとよむ也遊行する女也　倭名抄云楊氏漢語抄云遊女遊行女兒也一云晝遊行謂㆓之遊女㆒待㆑夜而發㆓其淫奔㆒者謂㆓之夜發(ヤホチト)㆒矣　或は遊女をうかれめうかれ妻など云はうかれありく〳〵と云義也又たはれめと云はたはふれの女と云義也　○河の瀨に浪の浮草うかれありくそのたはれめを如何賴まん　夫木

河舟を留て逢瀨の浪枕浮世の夢を見ならはしおとろ

かぬ身のはかなさよ　命の定なき事はつながざる舟のごとしとしりながらも遊女の有様常にゆきかふ舟をとどめて愛執のおもひをなす目の前の無常おどろかぬ身のはかなさよと也　或云一休和尚或女の死せるが水葬にせんとて鴨川の邊につれ行て彼死人の首に繩をつけひつかたげて川岸に立て河舟をとめてあふせの浪枕浮世の夢を見ならはしおどろかぬ身のはかなさよととなへて川へざふとなげ捨て歸り給ひける云々

さよ姫が松浦潟片敷袖の泪の唐土舟の名殘なり　さよ姫は俊寛に注す松浦は肥前也女郎花に注す

又宇治の橋姫もとはん共せぬ人をまつも身の上と哀なり　とふ人をもとはぬ人をも待は遊女の常也とはん共せぬ人をまつもといへるはさむしろの歌の心を以ていへり此歌左に記す　橋姫社在二宇治橋傍一　花鳥云宇治の橋姫は橋下の姫大明神と申神也云々　橋姫濁るべし　古今集戀四よみ人しらず

「小莚に衣片敷今宵もや我を待らん宇治の橋姫

榮雅抄云せばき莚に衣を片敷て今宵も宇治の橋姫の我を待らんと也伊物には戀しき人にあはでのみねんと下句を取かへて有宇治の橋の下に姫大明神とておはする神を宇治の橋姫と云その御もとへ宇治の北におはする離宮と申神のかよひ給ふ事となり中略　隆縁云住吉大明神の宇治の橋姫にかよひ給ふといへり何れにても有べし○橋姫物語云むかし妻二人もたりける男本妻のつはりして七礒の和布をねがひ求むるに海邊に行て龍王にとられて失にけるを本妻尋行ほどに濱邊なる庵にやどりけるおのづから此男に逢にけりさむしろに衣片敷の歌を諷て海邊よりきたれりける也さて事のやうをいひて明にければ歸りにけり今の妻此事を聞て始のごとく行て此男を待に此歌をうたひてきたりければ我をば思ひ出ずして本妻を戀るにこそとねたく思ひてつまにとりかゝりたりければ男も家も雪などのきゆるがごとくに失にけり云々十口抄云此歌の心は思ひかはしつる舊妻に立別て戀しきまゝにかれも我をや待らんと橋姫を我妻によそへいへる成べし此歌に付てさまざまの義侍れ共その證なき由定家も仰られし也都て物語の説用ゆべからずと云々

よしや芳野の花も雪も雲も浪もあはれ世にあはばや
花の雪花の雲花の浪いづれも古歌によめり但爰は
無常の心をいへる歟芳野の花は二人静に注す
藻塩草和歌集○いとはしよ月をへたてゝかゝるともよしや吉野
の花の白雲

江口の君の河逍遥の　古今集云加茂の川原に河逍
遥しけると云々　榮雅抄云川逍遥とは賀茂川大井
川桂川せうえうしけるを云せうえうは遊也云々
伊物集注云水についてあそぶを逍遥と云也云々
古今素緬抄云河せうえうと上よりつゞく時はにご
りてよむ也と云々
禮記云逍遥於門矣　詩白駒篇曰所謂伊人於焉
逍遥矣　註云逍遥遊息也矣

いや古しへとは御覽ぜよ月は昔にかはらめや　い
や古しへとは何を切て御覽ぜよ月はむかしにと
うたひて可然候古しへとは御覽ぜよとつゞけて
はてにはよろしからず但古しへとは御覽ぜそとう
たへばつゞけてもくるしからず

秋の水みなぎり落てさる舟の　和漢朗詠集云鄙展
詩云秋水漲來船去速夜雲收盡月行遲矣

月も影さす棹の歌　匠材集云さほの歌は舟さす人
の歌也と云々　東關紀行云夜の舟の棹の歌は枕の
上に音信て云々　左太沖呉都賦云方舟結駟唱
棹奏又云櫂謳唱簫籟鳴矣　呂向註曰棹鼓棹行而
歌也矣

うたかたのあはれ　夕顔に注す

夫十二因縁の流轉は車の庭に廻が如し鳥の林に遊に
似たり　六道講式云流轉無窮如車廻庭昇沉不定
似鳥遊林矣　十二因縁は圓覺經に說り一は無明
二は行三は識四は名色五は六入六は觸七は受八は
愛九は取十は有十一は生十二は老死此十二を三世
にわかち因と緣とに依て果を得る事車の庭に廻
がごとしと也十二因縁は委く名義集にみえたり略
之

前生また前生曾て生々のさきをしらず來世猶來世更
に世々の終りをわきまふる事なし　愚迷發心集云
鎮墮三途八難之惡趣所導苦患而既失發心之
謀或時適感人中天上之善果顛倒迷謬而未殖解
脫之種先生亦先生都不知生々前來世猶來世全

無辨世々終矣　秘藏寶鑰云生生生生闇生始死死死死冥死終矣　是より以下發心の媒をうしなふと云迄發心集を以てつゞけたり

或は人中天上の善果をうくといへども　地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道の中にも人中天上に生るゝは善果なれ共迷妄して出離をえぬと也　竹馬經云依五戒十善四禪八定功動力而得人中天上善果雖然善惡二業共是有爲法而未離三毒之窠窟矣

顚倒迷妄して未解脱の種をうへず　弘决曰顚倒者顚頂也頂墜於下故名顚倒矣　迷妄はみだりがはしくまよふ心也萬事さかさまに心得たる事を顚倒迷妄と云也解脱はときまぬかるゝと訓ず譬喩品云但離虚妄名爲解脱其實未得一切解脱矣

或は三途八難の惡趣に墮してや　淨心誡觀云四百四病以夜食爲本三途八難以女人爲本矣　三途は三惡道也一には火途地獄也八熱の火に燒るゝを云也二に血途畜生也肉骨血を食とす三には刀途餓鬼也刀杖驅逼とて刀杖などに打おはれて苦みをうくる也　西域記云春秋有三途危險之所借此名途猶道非謂三塗炭義矣　惡趣とは即三途の事也名義集云梵語云阿波那伽低經音義此云惡趣有三惡趣亦名三途矣　八難は八ヶ所の障難ある所を云也　金光明經云一心輕躁二近惡友難三有險難四貪難五遇無難難六値好時難七修功德難八値佛亦難矣淨名經八難は一地獄二餓鬼三畜生四北鬱單越五長壽天六佛前佛後七盲聾瘖瘂八世智辨聰矣又界外の八難と云有大藏法數及普賢記等に出たり

苦患にさへられて既に發心の媒をうしなふ　人間一生の内色々と心にまかせず苦患惡緣にさへられ菩提をねかふべき心をうしなふ也發心集には謀を失ふと有媒謀文字相似たれば書あやまれる歟但何れにても心は同じ　苦患反觀矣　玉篇云黨口澳切燒藏矣　字彙云口喚切宜去聲矣　發心は發菩提心中略也智度論云發心菩提於無量生死中發阿耨多羅三藐三菩提心故名爲菩提矣

然るに我等適受難き人身を受たりといへ共罪業深き身と生れ　適受難き人間に生れたるに男とは生れ

ずして罪深き女の身と生れたると也　四十二章經云離二悪道一得レ爲レ人難既得レ爲レ人去レ女即男難矣
王葉○いせの海あまのうけなは受難き此身を又はえつめすも哉御製
ことにためしすくなき河竹の流れの女となる先の世のむくひまで思ひやるこそかなしけれ　罪深き女と生れたるにあまつさへためしすくなき遊女となるは過去のむくひにてあらんとおもひかなしむなり詩周南云漢有二遊女一不レ可レ求矣法華安樂行品云販レ肉自活衒二賣女色一如レ此之人皆勿二親近一矣　萬古源云河竹は浮草の事也云々匠材集云河竹はまこもを云又浮草をも云又川の異名也云々　伊呂波字類抄云皮閑と書　遊女を流れの女と云事は浪にたゝよふがごとく一生身のより所なきにたとへていへり　本朝文粹以言見二遊女一詩序云維二舟門前一遲二客河中一○哀にも浮て世渡る契哉たゝよふ舟を住家にはして義政續後撰　河竹の流て來る言の葉は世にたくひなきふしと社きけ肥後
紅花の春の朝紅錦繡の山粧をなすとみえしも夕の風にさそはれ　花は朝を賞翫する故に春の朝とはいへり錦繡は錦はにしき繡はぬいものと訓ず山々の花の色を錦のぬひものに見たてそれを又遊女の姿にたとへてかやうの身も夕の風にさそはるゝと也
江相公王昭君賦詩云翠黛紅顏錦繡粧泣尋二沙塞一出二家郷一矣
紅葉の秋の夕黄纐纈の林色をふくむといへ共朝の霜にうつろふ　紅葉は夕部をもてなす故に紅葉の秋の夕部とはいへり鵝鷺記云白花の春の朝には美景を比叡の嵩に詠じ紅葉の秋の暮に逸興を愛宕の山に催す云々　以上の詞是に等し　黄纐纈と黄赤あひまじはる色也朽葉色を云　和名類聚抄云夾纈東宮切韻云纈結レ帛爲二文綵一也　孫愐曰縑之有二夾花一也矣説文曰纈繫レ繒染爲レ文也矣白氏文集二十四云黄纐纈林寒有レ葉碧瑠璃水淨無レ風矣　曾子建送二應氏一詩云人命若二朝霜一矣短歌行曰人壽幾何逝如二朝霜一矣○染つくす時雨の跡の紅葉はや又色かはる霜や置らん後柏原集
松風蘿月に詞をかはす賓客もさつて來る事なし　賓客は客なり月によせ花によせ來れる客も皆一旦の遊興なれば更に定る事なく或は死し去てきたらぬ

也愚迷發心集云我自何所來又去何身矣　文粹十一云松風羅月借老於煙巖之間矣　普化和尙云我家尺八本無孔著意吹時敢不鳴正是松風蘿月夜君於曲所試斯聲矣　普化は五燈第三盤山寶積弟子也

翠帳紅閨に枕をならべし妹脊もいつのまにかはへだつらん　かやうの結講なる所にていもせのごとくかたらひをなすといへ共いつとなくかれ〴〵になると也　以言遊女序云翠帳紅閨萬事之禮法雖異舟中浪上一生歡會是同矣

凡心なき草木情ある人倫何れ哀を遁べきかくは思ひ去りながら　有情非情共に無常の道理はのがれがたきとさりながらも色にそみ聲を聞て愛念をなす也　歐陽永叔秋聲賦曰嗟夫草木無情有時飄零人爲動物惟物之靈（上下略）

有時は色にそみ貪著のおもひ淺からず　譬喩品云於諸欲染貪著深故是以方便爲說三乘矣　法花懺法云衆生無量世以來眼根因緣貪著諸色以著色故貪愛諸塵矣　佛祖三經曰佛曰愛欲莫甚於色色之爲欲其大無外矣　詩序疏云女有美色男子悅之故經傳之文通謂女人爲色矣

又有時は聲を愛執の心いと深き心に思ひ口にいふ妄語の緣となる物を　色にそみ聲を聞ば皆是六根よりなすわざ也或は身口意の三業皆妄語煩惱の因緣となる也　私云妄染とうたふ歟有是然るべし妄語は上に口にいふとあれば重言なるべし

實や皆人は六塵の境にまよひ六根の罪を作る事も見る事きく事にまよふ心なるべし　六塵とは色聲香味觸法也六根とは眼耳鼻舌身意也境とは境界也常に向ふ六根に對する相手也　起信論云三界虛僞唯心所作離心則無六塵境界矣　三藏法數云六塵出涅槃經塵即染汚之義　一色塵謂男女形貌色等二聲塵謂男女歌詠聲等三香塵謂男女身分所有香等四味塵謂肴饍美味等五觸塵即著也謂男女身分柔軟細滑等六法塵謂意根對前五塵而起善惡諸法矣

實相無漏の大海に五塵六欲の風はふかね共隨緣眞如の浪のたゝぬ日もなし　普賢菩薩室の遊女と現じ此法文を說て性空上人に示し給ふ也古事談東齋隨筆抄等に載する所是に同じ又撰集抄に記せるは此文に異也實相は法花方便品曰諸法實相矣　文句疏

曰實相者是實智境一理非レ虚故言二實相一矣　法花論云言二實相一者謂如來藏法身之體不變義故矣無漏とは漏は煩惱の名也　俱舍頌疏云漏謂煩惱泄レ過無窮煩惱名レ漏矣成實論云失レ道故名レ漏矣　漏の字はもるゝと訓ず迷ひにもれざるを實相無漏と云也此無漏の當體を大海に喩て此次に眞如の波とうけたり五塵とは右の六塵の內法塵をのぞきて殘る五つを云也六欲は彼六根より起る所の欲心也隨緣眞如者起信論疏云法藏師云眞如有二二義一一者不變義二者隨緣義矣　筆削云隨緣者隨レ染順レ流而成二九相一矣　隨緣眞如と譬は浪は本水なれ共忽然の動風に依て千波万波となる其波の體は元一の水なるがごとく眞如は本湛然無相なるものなれ共無明の緣に隨て人畜草木などの万法となる其万法の體は元眞如也されば緣に隨て万法と顯たれ共其體は全眞如にてあれば隨緣眞如とは云也眞如者自性眞實の體を指て云也　唯識論云眞謂眞實顯レ非二虛妄一如謂如常表レ無二變易一矣　起信論云心眞如者則是一法界大總相法門體所謂心性不生不滅一切諸法唯依二妄念一而有二差別一若離二心念一則無二一切境界之相一是故一切法從レ本已來離二言說相一離二名字相一離二心緣相一畢竟平等無レ有二變異一不レ可二破壞一唯是一心故名二眞如一矣

心とめずは浮世もあらじ人をもしたはじ待暮もなく別路もあらしふく花よ紅葉よ月雪のふることもあらよしなや　此世を假の宿りと思ひて心とめざる時は浮世もあるまじ戀しき人を待暮もなければ別路をいたふ事も有まじ花紅葉月雪に心をよせて興を催し古歌をつらねて心をなぐさむ事もなければあらよしなき事よと也待くれの字清べしにごるは惡しあらしふくはあるまじと云義也此次に花紅葉をいはんとて嵐吹とはいひかへたり月雪のふることは古歌などの心にていへりそれを雪の降にいひかけたり

思へば假の宿思へは假の宿に心とむなと人をだに江口の妙がよめる歌にてつゞけたり思へば此世は假の宿なる程に心とめなと也　莊子曰吾生特適旅耳矣　尸迦羅越六方禮經曰父母妻子居處如二寄宿客一夜寒共安レ身天明各消散矣

普賢菩薩とあらはれ身は白象と也つゝ　普賢菩薩

は法華文句云太論觀經同名遍吉此經稱普賢矣又云伏道之頂其因周遍曰普斷道之後隣極聖曰賢矣　悲華曰我誓於穢惡世界行菩薩道使得嚴淨我行要當勝諸菩薩寶藏佛言以是因緣今改汝字名曰普賢矣　法華普賢行願品云欲修習此法花經於三七日中當一心精進滿三七日已我當乘六牙白象與無量菩薩而自圍遶以一切衆生所喜見身現其人前而爲說法示教利喜矣　明眼論云普賢座白象者用法身無色止行矣　四聲字苑云象獸名似水牛大耳長鼻眼細牙長者也矣　虞衡志云象出交趾惟雄者有兩長牙頭不可俯頸不可回口隱於頤去地尙遠運動以鼻爲用一軀之力皆有鼻將行先以鼻柱地以移足鼻端深可以開闔取物每以鼻取食飮水亦以鼻吸而捲之足如柱無指而有爪甲形如栗登山涉水甚據出象山矣

光と共に白妙の白雲にうちのりて　莊子天地篇曰乘彼白雲至于帝鄕矣　白妙は田村に注す

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

葛城

葛城神社在大和國葛木上郡葛城山所祭神一座號一言主命　舊事本紀云葛木一言主神座倭國葛上郡是素戔嗚命神子也矣　日本紀十四云雄略天皇四年二月天皇射獵於葛城山忽見長人來望丹谷面貌容儀相似天皇天皇知是神猶故問曰何所公也長人對曰現人之神先稱王諱然後應導天皇答曰朕是幼武尊也長人次稱曰僕是一事主神也因名號一言主之太神下略　舊事天孫本紀云火々出見尊十三万六千年時速刺利主神又云一言主住葛城國其業奸妄生一美女云速刺等媛心情太柔輭父神嫁之爾時從天降高賓鬼神擊一言主神一言主神闘與鬼神雖不至死悉所爬斬成凝黑身成貌怖醜不能會見於諸神等矣

葛城山は篠峰の南にあり號金剛山本朝七高山其一也山上に葛城の神社有山上より西の方に金剛山の寺あり轉法輪寺と云山上は大和也寺は河内に屬せり舊事國造本紀云橿原朝御世以劒根命初爲葛城國造矣　日本紀云神武天皇己未春二月高尾

張邑有土蜘蛛其爲人也身短而手足長與侏儒相類皇軍結葛網而掩襲殺之因改號其邑曰葛城矣　葛木寶山記云一言主飛神行夜叉所變號孔雀王　乘無二一法守護之故名一言主尊故當所名一乘峯又謂神祇寶山峰矣　詞林采葉云此山は過去迦葉佛說法の道場今は寶喜菩薩の法砌あり昔鑒眞和尚天平中に渡我朝平城宮へ入給ふとて此山を通られけるに布薩の鼓の聞えければ尋行て見給ふに赤面の鬼王鼓をうつ和尚問云いかなる靈場ぞや答云昔迦葉說法の所今に有寶喜淨土也云々

神のむかしの跡とめて葛城山に參らん　一言主の神は神代より葛城山にましますが故に神のむかしとはいへり

是に出羽の羽黑山より出たる山伏にて候　出羽國は舊事本紀云諾羅朝御世和銅五年割陸奥一郡始置此國也矣　拾芥抄云或說云大寶元年辛丑始置矣　大和本紀云出羽國は奥州の內也允恭天皇の御代に鷲の羽を御調物に備へ奉けるに御褒美ありて彼羽の出る所に準へ出羽國と名付給ひし也又彼國の中に平賀鷹夷千島なとゝ云所鷲の會住所也云々

羽黑山權現は在最上領所祭神一座倉稻魂神推古天皇元年出現社領千五百石羽黑月山湯殿三山爲一坊舍三十一院山伏之住家數十軒在麓山伏は舟橋に注す

篠懸の袖の朝霜おきふしの　修驗抄云夫鈴懸者金胎兩部直質入峰修行法衣也秘記曰鈴懸者鈴也鈴者南天塔婆衆生體性也五古形金五智下八葉胎藏也表金胎不二自性法身說法故鈴者行者之六大法性眞如寶玉也以法性眞如玉懸兩部直質之衣修行金胎本有一乘菩提之峰故號鈴懸法華云以無價寶珠繫其衣裏矣以是可觀知黑色眞如不變之義也是則心性不動無相法身位也一露者垂染不動之二明王也行者大日也是爲一佛二明王秘觀矣

山又山は舟橋に注す大和は田村に注すなふ〳〵は江口に注す

雪のふゝきにかきくれて　雪吹と書○おのつから關をは越て降雪のふゝきにとまる不破の中山　爲尹

夕の山の常陰より　常陰は常に日影のうとき所を云　新千　夕されは霧たちなれし小倉山やまの常陰に鹿ぞ鳴なる　鎌倉右大臣

笠は重し呉山の雪鞋は香し楚地の花　詩人玉屑云閩僧可士有下送二僧詩一云一鉢即生涯隨レ緣度二歲華一是山皆有レ寺何所不レ爲レ家笠重呉天雪鞋香楚地花他年訪二禪室一寧憚二路岐賖一矣　本文に呉天雪とあるを此謠には呉山雪とつゝけたり是相違せり

肩上笠傾二無影月一擔頭柴捕二不香花一　此詩作者未レ考此上句は無聞觀の序に出たり　不香の花は雪也詩の意傳抄に出たり　新後撰○通夜降つむ雪の朝ほらけにほはぬ花も梢にそ見る

山人の笠も薪も埋もれて雪こそくたれ谷の下道

是は菅家の御歌なり心は明也

實に古き大和舞の歌の昔を思出の　左に記する古今集の詞書に古き大和舞の歌と有にてつゝけたり　古今栞黒抄云古き日本舞の歌是は昔天照太神天の岩戸に閉籠らせ給ひし時中略其時の神樂の例なれは古きやまとまひと云り神樂をうたひ舞ふ故也云々古今榮雅抄云大和舞とは大嘗會にある事也大和舞神樂也吉野にて天人の舞し事を今に舞姫とて女のまふ也昔の事を學びたる也駿河舞と云も昔宇渡濱に天人の降て遊びけるさまを寫しとめたる故也東遊とも是をいふ也云々

しもとゆふ葛城山に降雪はまなく時なくおもほゆる哉　古今集第二十大歌所御歌の部に入て葛城山に降雪のと有詞書云古きやまとまひの歌と云々しもとは標と書日本紀に楉木林と書杖のやうなる枯たる薪也袖中抄云正月初卯の日に天子へ奉る杖をしもとゝ云杖をはかづらにてゆへばしもとゆふ葛城山とつゝけたり是を卯杖と云云々　雲玉集云しもとゆふはかつらきの枕詞也正月初卯に椿を四本杖にけづりてつたかつらにてひるまきにして檜の木の皮をたきてふすべて天子后關白攝政つき給ひて千年の坂をこゆると祝給ふと也しもとは四本の心或は標はつえの事也云々

餘所にのみ見し白雲や高間山の　新古○よそにのみ見てやゝみなん葛城や高間の山の峰の白雲　此歌花鑑に注す　高間山は葛城のゐはひ也泊瀬より西也高天共高間共書麓に高間寺有山の腹に朝原寺有

葛城や木間に光る稻妻は山伏のうつ火かと詠みれ堀川院次郎百首に兼昌歌也但上句かつらきや木陰にひかる稻妻をとあり此歌夫木集に入て歌のつゝ

き謠の通り也　總て山伏は山野に臥故に常に火打を所持する也歌の心は電光石火の無常をよめり

世中は電光朝露石の火の　　柏崎に注す○長秋集石を打光の中によそふなる此身の程を何なけくらん

思ひ眞柴をたかふよ　眞柴は只柴也眞に心なし

白妙の雪にや色をそみかくたの　そみかくたは山伏の下部といふなり「しらかしのしらぬ山路のそみかくた高嶺のつゝきふみやならへる　和歌色葉集云此歌は長徹が歌也しらぬ山路といはんとてしらかしとつゝけたりしらかしは白樫也そみかくたは修行者也云々　童蒙抄云そみかくだは山伏をいふと云々白妙は田村に注す

名にしおふは江口に注す加持は老上に注す五障の罪は梅枝に注す咒詛は田村に記す

蔦葛にて身をいましめて猶三熱の苦みあり　舊記云役小角金峰山與葛城峰爲行道於南山召集衆神令渡石橋時金峰太神不勝咒力且作始之葛城一言主神又始作之小角呵神曰何不早成一言主神對曰其形甚醜難晝役待夜出故遲耳小角從之一言主一言主不肯小角怒咒神縛葉之深谷一言主託宮人曰我是宮遁遁之神也竊見役小角謀傾國家不久將殆乎危宮人以聞文武帝下勅召小角小角騰空飛去不得追捕官吏設計略收其母小角不得已自來就囚使配豆州大島金峰山雜記也反喋譯云　今案謠に三熱の苦みありと云事は長阿含經及俱舍論等に出たり神に三熱の苦み有事會而神道に沙汰なき事也且又役行者蔦葛を以て一言主神を縛と云事舊記に載るといへ共此等の說いふかし

葛木寳山記云四十一代高天原廣野姫朝廷御宇葛木一言主神與役優婆塞互相合心合德爲大法導師而金剛大悲勝才無盡能滅衆生苦惱逼遊國土以清淨法披衆蒋降伏魔緣矣

明王の索　明王とは不動明王也善界に注す明王の字義は安宅に注す索は舟辨慶に記す

石はひとつの神躰として　寳山記一言主神天神降坐時率金剛矣　百因縁云藏王御體石像也金峰山三尺各開由荏尺入石箱奉安置淨地底矣　一言主神藏王權現垂跡同じければかくいふ歟

岩ほになつ其つきし　此歌羽衣に注す

明るわひしき葛城の神　拾遺集に春宮女藏人左近
歟也上句は岩橋の夜の契りも絶ぬへしと有詞書云
大納言朝光下﨟に侍りける時女のもとにしのびて
まかりて曉かへらしといひけれはと云々
五衰は羽衣神かくれは加茂法の蓮は道明寺常住は佛
原無上正覺の月此意兼平に注す
法味をなして　佛道修行してそのあぢはひを覺知
するを法味とは云也
一心敬禮　佛に向て敬時の詞也　南岳懺法云一心
敬禮十方一切諸佛矣
法性眞如の寶の山に　法性眞如とは悟の躰也千草
萬木に至る迄當躰則覺也と云事を寶の山に喩たり
寶の山とは大峰を神祇寶山といへは寶の山といへ
り上に記す法性眞如は源氏供養及江口に注す
峩々たる　老松に注す
女躰の神とおほしくて　一言主神は男體也　然る
を此謠に女體に作るは是いぶかし　和州寺社記云
葛城大明神は一言主として女體にておはします本葛
城山の嶽に宮居し給ひしが今は其麓の田の中に御
在す云々

玉の釵は楊貴妃に注す小忌衣は高砂に注す
いちしるき　掲焉と書あらはなる詞也只しるき共
云　匠材集云いちじるきとはもつともしるき也云
々●詞花三笠山神のしるしのいちしるくしかありけり
と聞そ嬉しき定光
見くるしき顏の神姿ははづかしや　一言主神其形
見くるしと云事舊事本紀に見へたり上に記す
高天の原は是なれや　高天山を高天の原にいひか
けたり高天原は天上を云也 舊事紀云於高天原
化生神號曰天讓日天狹霧國禪月國狹霧尊矣
中臣祓云高天原神留坐矣神代口決云高天原空虛清
淨名也矣　經教本紀云王仁曰高天原者曰天命之
高性矣
神樂歌は道明寺に注す白和幣は龍田に注す岩戸の舞
は三輪に注す
天の香久山もむかひに見えたり　香來山共香籠山
共云初瀨より西にあたれり香久山耳無山畝火山
此三の山は東西にならびたる山也いつれもひくき
山也萬葉及風土記等に此三つの山を大和の三山と
いへり萬葉集に天降付天之芳來山とよめり　仙覺

抄云天のかく山とは空の香のかほる所なれはいふといへり天降村とは空の香のかほりくれはあもりつく天の香來山とよめると心得へし云々　或云伊豫國風土記云天香山天より落て二つにわれて一つは大和の香久山一つは伊與の天山（アメヤマ）となる云々　詞林采葉云凡此山は我朝の靈山として陰陽家に沙汰せらるゝ山也云々　古語拾遺云取二天香具山銅一鑄二日像鏡一矣　但神代にいへる天の香具山は天上を云也●續後撰 久方の雲井の春の立ぬれは空にそ霞む天のかく山 後京極

おもなやおもはゆや　おもなやは無二面目一也おもはゆはおもてはつかし也　紅葉賀卷云おもなのさまやと云々　岷江入楚云面つれなきさまやと云々

あさましやあさまにも　●古 雲晴ぬ淺間の山のあさましや人の心を見て社やまめ

楊貴妃

楊貴妃は蜀州司戸楊玄琰が女即蜀國にして誕生す小字を玉環と云幼時父母に離れ孤となれり誤て大きなる池中に墜ちたる事あり後人其池を呼て名二落妃池一叔父河南府士曹楊玄珪が家に養れけるが後に玄宗皇帝第十八の御子壽王の妃となる或人楊氏の美麗なる事を奏す帝行幸の折節御覽有て潜に高力士に詔して楊妃の意として壽王の宮を出さしめ壽王には左衛中郎將韋昭訓が女を娶らしむ楊氏其名を號二大眞一大眞宮に納給ひ寵愛是甚し然に天寶十四載安祿山が亂に依て帝貴妃と共に蜀に趣給ふ中路馬嵬の驛に入せ給時に六軍の將士飢疲れ怒て動ず陳玄禮思ふ樣禍本楊國忠が爲所なりと將士を招て國忠を誅す然る上に貴妃も供奉に預へからずとて帝に乞て高力士貴妃を引起て佛堂の方に連行羅の巾にて縊殺し尸を茵に裹西郭の外一里計道の側に埋みける年三十八歳亂おさまりて帝蜀より還幸なりて長安に入せ給ひ明暮貴妃の事を思ひなげかせ給ふ其頃蜀國の道士楊道幽と云者失にし人の魂魄を尋求むる術を得たり上皇彼を召て貴妃の魂を尋させ給ふ道士承て其術を竭し上には碧落九天を窮下は黄泉地の底に沒て金輪際に至て徧求むれ共

茫々として見えず聞ならく渤海の東天涯を極つくして蓬壺仙山ありと急ぎ三山に至てみるに最高き佛山なり是蓬萊宮たり上に樓閣多し西の廂の下に洞の扉あり金玉を以て飾り東に向て大門あり額有て仰き見れば玉妃太眞院と書せり方士悦入て玉の扃を叩く童女出て門を開く又俄にして碧衣着たる侍女出て問方士因て唐の天子の使也と侍女の云玉妃は方に寢たり暫此に待れよ方士金殿の階の上に座す時に日晩たり既に夜明なんとする時侍女導て内に入且日に玉妃唐の天子の使なりと聞九華帳の裏に夢魂驚き衣を攬とり枕を推起堂より下來る装ひ霓裳羽衣の舞に似たり玉の容寂寞として出給ふ左右に侍女七八人倚方士に向て上皇の安否を問次に天寶十四載より已還の事を問給ひ言訖て涙を流し我は本上界の諸仙たりしが先の世に上皇と恩愛あるが故に下界に謫居して夫妻爲事を得たり既に死して後音容兩なから渺茫たり今汝此に來て我を求て恩愛亦生せり玉妃金の釵を取て其半を折是を上皇に獻じて舊き好みを繼給へと申へしとあり方士信を受て去とせしか其此金の釵は人の常に用る物なり當時の一事に他人の聞ざる事を承り得て上皇に驗とし奉らんといへり玉妃聞て退き立て思ふ所有が如し徐有て言て日昔天寶十載輦を同して暑氣を驪山の長生殿に避り秋七月七日牽牛織女相見ゆるの夜殆半也侍衛の武士東西の廂に休めり獨上皇と私語に願は世々夫婦とならん天に在は比翼の鳥となり地にあらば連理の枝とならんと相誓ひて手を執て互に泣咽しを上皇與のみ知り給ふへし此一念に依て又此蓬萊に居事を得ず復び下界に隨て且後縁を結ばん互に相見えて好合舊の如ならん是に依て上皇も亦人間世に久からじ幸に惟は自安じ自苦む事なしとて錦帳の内に入給ふ方士も泪を押へて其より唐土に還て上皇に奏て信の釵を献ず上皇笑て是は世に有物なりと因て彼貴妃の私語を語上皇涙を流し御衣の袂をしぼらせ給ひ感歎更に止ず日々に玉顔衰させ給て程なく崩御成給ふ已上長恨歌及物類相感志取意

我まだしらぬ篠目の道をいつくと尋ねん　心明に聞えたり篠目は安宅に注す源氏夕顔巻に源氏と夕顔と同車にて河原院へ行給ふ時源の歌に「古もかくやは人のまよひけん我またしらぬしのゝめの道

是は唐土玄宗帝に仕へ申方士にて候　唐玄宗明皇帝諱隆基睿宗皇帝第三御子也母竇氏號ニ昭成皇后ト太極元年壬子八月受レ禪在レ位四十三年于レ時寶應元年四月五日於ニ西内神龍殿ニ崩御讓ニ位肅宗ニ相ニ當七年ニ御齒七十八歲已上唐書取意　方士は云ニ蜀國道士楊道幽ニ也長恨歌曰臨卭道士鴻都客能以ニ精神ニ致ニ魂魄ニ註曰道士姓楊名通幽矣　綱鑑大全注曰方士方外之士矣　杜預曰方法也法術之士也矣　方士とは總て仙術をおこなふ人を云なり

扨も我君政正しくまします中に色を重じ艷を専とし給ふにより、開元の初には玄宗天下の政を正しくし給ひ驕をとゞめ珠玉を捨錦繍を焚神仙の道をそしり萬天下の儉約を専にし政道おだやかなりしか共今其末に及んでは諫める者は殺れ直を云者は怒に逢へり女色に惑ひおごりを極め長生の術を求め喜瑞の祥を悦び給へり新唐書取意　色を重じとは長恨歌曰漢皇重レ色思ニ傾國ニ矣是にてかくつゞけたり

容色無雙の美人を得給ふ　綱鑑玄宗記云壽王妃楊氏之美絶世無双上見而悦レ之矣

楊家の娘たるに依て其名を楊貴妃と號す　楊玄琰が女なれば楊家と云也楊は姓貴妃は官の名妃は后也委く上に記す

然共去子細有て馬嵬が原にて失給ひ申て候　大明一統志三十二曰西安府馬嵬坡在ニ興平縣西二十五里ニ唐楊貴妃葬所矣　唐本馬書云馬嵬漢武時文成方士王利三人仙士乘ニ神馬ニ爲ニ種々不思儀ニ其馬廣野古墳出ニ不意ニ因其所曰ニ馬嵬ト全文略

上碧落下黄泉迄尋申せ共更に魂魄のありかをしらず候　長恨歌云上窮ニ碧落ニ下黄泉兩所茫々皆不レ見矣　韻會曰碧落天也矣　增韻曰碧深青色矣　黄泉は左傳曰天玄地黄泉在ニ地中ニ故言ニ黄泉ニ矣　魂魄の二字は寶篋に記す

爰に未蓬萊宮に至らす候程に　十洲記曰蓬萊山對ニ東海之東ニ高一千里周迴五千里外有ニ圓海ニ繞レ山海水正黑而謂ニ之冥海ニ無レ風而洪波百丈不レ可レ得ニ往來ニ上有ニ九天眞王宮ニ蓋太由眞人所レ居矣　山海經曰蓬萊山在ニ海中ニ上有ニ仙人宮室ニ皆以ニ金玉ニ爲レ之鳥獸盡白望レ之如レ雲在ニ渤海中ニ矣　神社考云支那諸書指ニ言蓬萊ニ者於ニ日本ニ有ニ三所ニ一曰

紀州熊野一曰駿河富士一曰尾州熱田 中略 曉風集云尾張之熱田大明神則楊貴妃也楊什伍云東海上蓬萊是指二熱田一蓋熱田廟前有レ山松茂森々然是號二蓬萊一俗相傳云熱田大明神化二楊貴妃一亂二彼大唐一故玄宗困二天寶之蒙塵一熱田之廟背有二一基之石塔一其長二尺計其形太醜巫覡等指レ之曰二貴妃之塔婆一也又廟外有二玄太輔之祠一僉云玄宗三郎之祠也矣 私云方士貴妃の魂魄を尋し所の蓬萊山は尾州熱田を指て云也又秦の始皇の時徐福不死の藥を求る所の蓬萊山は熊野富士熱田此三所を指て云也

尋ねゆくまほろしもかなつてにても玉のありかはそことしも 源氏桐壺巻に更衣の果給ふを御なげきのあまりに御門の御歌也下句は玉のありかをそことしるへく〱有河海抄云まほろしは方士が事也幻術士の名也玉の有かは魂の在所也云々 岷江入楚云方士がやうなる幻術の士もあらばいつこにありとたにもしろしめすへきものをとなり云々 今按此詞にまぼろしも哉つてにてもと此歌をもて方士が道行の詞につかふ事如何まほろしとは則方士が名なれは我と我名を云事よろしからす

常世の國 蓬萊山也常盤の國と云事也神代卷に出たり 垂仁紀曰常世國則神仙秘區非二俗所一臻矣

宮殿盤々として更に邊際もなく 宮は周易曰上古穴居而野所後代聖人易レ之以二宮室一上レ棟下レ宇以待二風雨一矣 殿は史記秦始皇本紀曰始作二前殿一上可以坐二萬人一下可以建二五丈旗一矣 是宮殿の始め也盤々は杜牧阿房宮賦曰盤々焉矣 註曰盤々盤桓之貌矣

巍々 由緒に注す七寶は源氏供養に記す

漢宮萬里の粧ひ長生驪山の有樣も 漢宮は漢の宮結構なるを云長生は長生殿をいへり則驪山にあり驪山は關内道の京兆府臨潼縣の東南にあり其麓に在二温泉一昔秦始皇石を疊みて温湯の所とせり漢の世に至て武帝重て加二修理一先帝太宗貞觀十八年此所に離宮を營建て名二温泉宮一今玄宗皇帝天寶六年十月再温泉宮を造營して改二華清宮一凡此所に十八の宮殿を建給ふ安禄山以二珠玉一魚龍鳧雁石の蓮華等を作て献る玄宗悦て是を温湯の中に入る時に蓮華は開き魚鳥は動ておよぐ楊貴妃是を恐れければ皆取捨て石蓮のみ殘せり 明皇雜錄及一統志取意

太眞殿と額のうたれたる宮あり先此所に徘徊し　長恨歌傳には太眞院と有今熱田に春叩門と云額有て門有彼方士尋來てたゝきたる門也と云傳ふ徘徊は鉢木に注す

昔は驪山の春の園にともに詠めし花の色　明年の春貴妃と輦を同して驪山の花淸宮に臨幸なる帝此時新に一湯を廣て池を作る其體最美景なり玄宗本言古

獨ながむる月影もぬるゝ貌なる袂かな　○あひに逢て物思ふ頃の我袖にやとる月さへぬるゝ貌なるる伊勢

唐の天子の勅の使方士是まで參りたり　長恨歌曰聞道漢家天子使矣　此事委く上に記す

九花の帳を押のけて　長恨歌曰九華帳裏夢魂驚攬レ衣推レ梳起徘徊矣　九花帳は花を紋にぬひたる垂布のやうなる物也九つ重ねたる帳也

玉の簾をかゝげつゝ　同云珠箔銀屏邐迤開矣

雲の鬢花の顏　同云雲鬢半偏新睡覺花冠不レ整矣　又云雲鬢花顏金步搖矣　曹子建洛神賦曰雲髻峩々矣呂延濟註曰雲髻美髮如レ雲也矣

寂寞たる御眼の內に淚を浮べさせ給へば　長恨歌曰玉容寂寞淚闌干矣　韻會曰寂寞無聲也矣

梨花一枝雨をおびたるよそほひの　淚のこぼるゝは雨の梨花に降かゝるがごとしと也長恨歌曰梨花一枝春帶レ雨含レ情矣　詩人玉屑云一雨云梨花一枝春帶レ雨桃花亂落如ニ紅雨一下略

大液の芙蓉のくれない未央の柳の緑も是にはいかで增るべき　大液は池の名なり芙蓉は蓮花なりあふむ小町に注す未央は未央宮とて御殿の名也大液池に芙蓉あり未央宮に柳あり此芙蓉の柳も貴妃のうつくしき色には及はじと也　長恨歌曰大液芙蓉未央柳芙蓉如レ面柳如レ眉矣　一統志三十二曰西安府未央宮在ニ府城西北一十四里一漢高帝建内有ニ東闕北闕前殿一下略　源氏桐壺卷云繪にかける楊貴妃のかたちはいみじき繪師といへども筆かぎりありければいとにほひなし大液の芙蓉未央の柳もげにかよひたりしかたちをからめいたるよそひはうるはしうこそありけめ下略　是は御門更衣の別れをおしみ楊貴妃のためしをひき出て思ひなげかせ給ふ詞也

實や六宮の粉黛の顏色のなきも理りや　長恨歌曰回レ頭一笑百媚生六宮粉黛無ニ顏色一矣　六宮とは

周禮曰天子后立二六宮一鄭氏註云前一宮後五宮也五者后一宮二夫人矣　後漢后妃紀序註云皇后正寢一燕寢五是爲二六宮一也矣　粉黛はおしろいまゆずみ也卒都婆小町に注す

朝政はおこたり給ひぬ　韓詩外傳曰明君將修レ禮以齊レ朝矣　蘇文忠集曰所レ重在二君德一爲二親臣一六卿所レ事在二朝政一爲二重臣一輔臣者所三以成二就君德一也矣　朝政とは朝廷の政を云也政の字難波に注す

夫木○さはかりの朝まつり事しけゝれど世々に捨ぬは敷島の道

問につらさのまさり草かれ〲ならば中々に

かれ〲は別れ也定家に注すまさり草は菊の名なれ共つらさのまさるといふ諷詞にてつゞけたり

續古○忘れても有へき物を中々に問につらさを思ひ出けり后宮　四条皇同○吹風も問につらさのまさる哉なくさめかぬる秋の山里右大臣

戀慕は安宅に記す筐(カタミ)は花かたみに注す

是社有し筐よとて玉の釵取出て　長恨歌曰鈿合金釵寄將去矣　釵は實錄云燧人氏始作レ髻女媧女荊梭以レ竹爲レ笄貫レ髪至レ堯以レ銅作レ之又舜時以二象牙瑇瑁一矣是釵之始也四聲字苑云簪低レ冠釘也矣　蒼頡篇曰簪笄也釋名曰笄係也所三以拘レ冠使二不レ墜也矣　說文曰簪其端刻二雞形一矣

いやとよ是は世中に類(タグヒ)有へき物なればいかでか信じ給ふへき御身と君と人しれず契り給ひし言の葉あらばそれを驗に申べし　長恨歌曰致レ別殷勤重寄レ詞詞中有レ誓兩心知矣長恨歌傳曰方士受二辭與一レ信將レ行色有レ不レ足玉妃固徵二其意一復前跪致レ詞請當時一事不下爲二他人一聞上者驗二於太上皇一矣

其初秋の七日の夜二星(チヒ)に誓し言(コト)の葉にも天にあらは願は比翼の鳥とならん地にあらば願は連理の枝とならんと誓し事をひそかに傳へよや私語(サヽメゴト)なれ共今もれそむる涙かな　長恨歌曰七月七日長生殿夜半無レ人私語時在レ天願作二比翼鳥一在レ地願爲二連理枝一矣　長恨歌傳曰秋七月牽牛織女相見之夕中略仰レ天感二牛女事一密相二誓心一願世々爲二夫婦一言畢執レ手各嗚咽矣　比翼鳥は山海經曰崇吾山有レ鳥如レ鳧一

翼一目相得乃飛名曰鶼矣　爾雅曰南方有比翼鳥不比不飛其名謂之鶼々注曰似鳧青赤色一目一翼相得乃飛矣　博物志曰比翼鳥一青一赤在參嵎山矣　連理枝は文德實錄云美作常陸二國獻白鹿連理之瑞矣　日本後紀云弘仁三年二月右京人弓削宿禰弓麿獻連理木矣　搜神記曰宋大夫韓馮取妻而美康王奪之馮怨王囚之俄而馮自殺妻歎之自投臺下死遺書於帶曰願以尸骨與馮而合葬乎王怒弗聽使人埋之冢相望也王曰爾夫婦相愛不已能使冢從則吾弗禁一夕有大梓木生於二冢之端旬日其大合抱屈體以相就根交於下又有鴛鴦雌雄各一恒栖樹上晨夕交頸悲鳴宋人哀之號其木曰相思樹矣　二星之事朝顏に記す　玉葉集に天曆の御製に「いきての世死ての後の後の世もはねをかはせる鳥と成なん　同集に女御藤原芳子御返し「秋になることの葉だにもかはらすば我もかはせる枝と成なん

流轉生死　柏崎に注す

三重の帶　詞林三知抄云三重の帶は戀にやせて身のほそき故にふたへの帶をみへにする事也云々

○二つなき戀をしすれは常の帶三重にゆふべく我身はなりぬ

寳や驪山の宮の内月の夜遊の羽衣の曲　羽衣の曲とは霓裳羽衣の曲也開元六年秋八月望日玄宗南樓に出御有て月を翫ぶ御側に中天師といへる妙術の僧と鴻都客といへる道士と二人侍座す然るに天上の月宮殿の快樂を主上に見せしむ忽大虛より雲の棧御殿に近くさしかゝり二人則主上を供奉し到著月中御見るに一の大門あり其内に樓閣各玉光の中に湧出し飛浮める宮殿彼此に動搖して往來定なし直に見下せば萬里に隔て一面に瑠璃の田を連たり仙人道士雲に乘り鶴に駕して遊ぶ美女十餘人皓衣白裳をかざり白鸞に乘て往來諸々の樂器を飾種々の音樂を奏す角て中天師還幸有べき事を奏す皆諸共に飛下て夢の覺が如く南樓の上に忙然として御座す帝月中に入り仙女の舞曲を忘れ難く思ひけるにや律を定め音を成して霓裳羽衣の曲を製し給ふと云々　玄宗本紀取意

驚破霓裳羽衣の曲　長恨歌曰漁陽鼙鼓動地來驚破霓裳羽衣曲矣　天寶十四載祿山率蕃兵十餘

萬起漁陽鞞鼓を鳴し地を動して羽衣の曲をも
打破し事を驚破とは云也そよやと云詞は世にすは
やといへるに同じ　長恨歌傳曰貴妃進見之日奏
霓裳羽衣以導之矣　霓裳羽衣曲一越調也體源
抄云玉樹後庭花號霓裳羽衣曲但舞與樂別也云
々陳後主所作也有亡國音有云三女序此內云
有亡國音矣　西淸詩話曰葉法善引明皇入月
宮聞樂聲飯但記其半會西京府楊敬述進婆羅
門曲聲調脗合按之便韶乃合二者製霓裳羽衣
之曲矣　說郛一百卷　唐明皇三十四曲曰河西節度
使楊欽述獻說羅公遠與明皇遊月宮見仙女
數百皆素練霓裳間其故云々故作是曲矣
そゞろは景淸に注す胡蝶の舞は源氏供養に注す
夫過去遠々の昔を思へばいつを衆生の始としらず未
來永々の流轉更に生死の終りもなし　大圓覺修多
羅了義經曰一切諸衆生無始幼無明皆從諸如來圓
覺心建立矣　弘決五曰此眞性遍於法界迷謂內
外悟唯一心矣
然るに二十五有の內何れか生者必滅の理にもれん
廿五有とは三界六道の間也大論曰三界摠擧則六道
別分乃二十五矣　翻澤頌曰四洲四四惡趣四六欲天
六梵天一無想天一五那含天一四禪天四四空所四矣合
て二十五所也有とは生あり死ありて因果亡せざる
義也　生者必滅は涅槃經曰一切諸世間生者皆皈
死壽命雖無量必有終盡夫盛必有衰合會有離
別矣　大法句經偈曰常者皆盡高者亦墮合會有離
生者有死矣　後江相公願文曰生者必滅釋尊未
免栴檀之烟樂盡哀來天人猶逢五衰之日矣
天上の五衰須彌は羽衣に記す
須彌の四洲の樣々に北州の千年終に朽ぬ　四州は
東弗婆提南閻浮提西瞿耶尼北鬱單越　是を四州と
云也　東弗婆提は西域記曰東毗提訶洲舊曰弗婆
提謂日初出所也俱舍曰東毘提訶洲其相如半月
身長八肘壽二百五十矣　南閻浮提は白髭に記す
西瞿耶尼は此云牛貨藏疏云以彼多牛以牛爲
貨俱舍鈔云劫初時因高樹下有一寶牛爲貨易
故俱舍曰西牛貨洲壽五百歲相圓無缺長十六肘矣
北鬱單越は西域記曰云北狗盧洲舊曰鬱丹越於
四洲中有情所貨皆最勝故亦云高上出餘三方故
形如方座四面量等長三十二肘壽滿一千歲矣

長阿含經曰北鬱單越地平如レ掌無レ有ニ蚊虻蚖蜒惡
獸一四時和順不寒不熱無レ有ニ冬夏一華菓茂盛其土常
有ニ自然粳米一無レ有ニ糠糩一形貌常壯如ニ閻浮提二十
許人相貌一平等不レ可ニ分別一手取ニ種々樂器一調ニ絃
鼓之音一以ニ妙聲一和矣

老少不定の境　北州は壽命千年なれば常に老少な
し此南閻浮提は老少不定にしておくれ先たつ事眼
前たり是故に無常を覺悟し修行する事北州の果報
に勝れたり　觀心略要集云世人之愚也於ニ老少不
定之境一成ニ千秋萬歳之執一矣

歎き中のなけきとかや　新勅○たれも皆花のさかりは
散ぬへき歎きのほかの歎やはする　大貳三位

我も當時上界の諸仙たるが往昔のちなみありて假に
人界に生れきて　長恨歌序曰我本上界諸仙先與ニ
玄宗一有ニ恩愛一故謫ニ居於下界一得レ爲ニ夫妻一矣　有
時白鸚書をくはへ飛來て貴妃の手に移して雲路に
歸る宮女に命じて其書を讀しむるに其文に曰
勅ニ謫仙子楊氏一爾居ニ玉闕一之時常多ニ傲慢一謫ニ塵
寰一之後轉有ニ驕矜一以ニ聲色一惑ニ人君一以ニ寵愛一庇ニ
族屬内則韓虢外則國忠秉レ權殊無ニ知レ過之心一顯
有ニ亂レ時之迹一比當ニ限滿一令レ議ニ復歸一其如レ罪更
愈深法不レ可レ貸專茲告示且與沉淪宜ヨ令レ死ニ於人
世ニ矣　此意は貴妃本前世は仙女にて暫人間世へ
謫去せられて楊家に生れ楊貴妃となる然其限り
あり早人世を去て仙家に歸るべしと云事也貴妃此
事を深くつゝしみかくして其書を玉匣に納て三日
の後開て見るに跡なく失たり　楊貴外傳取意　愚見抄云當時
とは昔と云事也土佐日記に往日と書伊物眞名本に
當初昔時最初と書往昔は增韻云前代也矣

楊家の深窓に養はれ　長恨歌曰楊家有レ女初長成
養在ニ深閨一矣

偕老同穴　髮白くなるまで諸共に添て死なば同じ
穴にうづまれんと云事也詩邶篇曰及レ爾偕老老使ニ
我怨一ヲ　同大車篇曰穀イケル則異レ室死則同レ穴矣　左
傳王風大車篇曰偕老同穴注云穀則異レ室死則同レ穴
穴壙也矣

たまさかに逢みたり　たまさかは邂逅と書　增韻
曰不レ期而會曰ニ邂逅一矣　詩經曰邂逅相遇矣○き　新古
の國や由良の港に拾てふたまさかにだにあひみて
し哉　長方

其文月の七日の夜　　古今榮雅抄云ふん月は七月也ふみひろけ月と云常にはふ月と云也云々　下學集此月七夕諸人以二詩歌之文一獻二於二星一或晒二書籍一以供レ星故云二文月一也矣

篠の一夜の契りたに名殘は思ふならひなるに
伊物秘抄　○君ならず篠の一夜の契さへ名殘を思ふならひとぞきく

世中にさらぬ別れのなかりせば千世も人には
伊物　○世中にさらぬ別れのなくも哉千世もといのる人の子のため

會者定離　　前に記す又源氏供養にも出たり

袖うちふれる心しるしや　　しるしやとはしるや也
紅葉賀　○物思ひに立まふべくもあらぬ身の袖打ふりし心しりきや

蓬(ヨモギ)が島津鳥(シマツトリ)　　蓬が島は蓬萊也島津鳥は鵜を云也此二つをつゞけたり蓬萊山は前に記す　萬葉集に島津鳥鵜かひがともはとよめり　仙覺抄云しまつ鳥とは鵜を云此鳥こそ水をかづきて魚をくふ能をほどこす故に絕島に住ゆへに島津鳥と云魚をくふひまゝには翼をほさんがために島をすみかとする也と云々　辨色立成云大曰二鸕鷀一小曰二鶿鷀(シヤツトリ)一矣　爾雅注曰鸕鷀(シヤツトリ)水鳥也喙頭如レ鉤好食レ魚者也矣○玉葉　白波に墨の色なるしまつ鳥筆に及ばゞゑに書てまし

四條

はかなや別れの　　日本紀に無道(ハカナヤ)と書　伊物眞字本に無墓と書河海抄云はかなきはいふかひなき心なり云々　寢覺記云昔の人は父母の墓をいみじくかまゆるを孝養とす報恩の心指なき愚者を無墓といひそめて今もおろかなる人をはかなしといへり云々

半部

源氏夕顏卷云六條わたりの御しのびありきの頃うちよりまかで給ひなかやどりと大貳のめのとのいたく煩ひて尼になりにけるとぶらはんとて五條わたりなる家に尋ねおはしたり御車いるべき門はさしたりければ人して惟光めさせてまたせ給ひけるほどむつかしげなる大路のさまをみわたし給へ

◉るに此家のかたはらにひがきといふ物あたらしうして上は半蔀四五間ばかりあげわたしてすだれなどもいとしろうすゞしげなるにおかしきひたいつきのすきかげあまた見へてのぞくたちさまよふらんしもつかた思ひやるにあながちにたけたかき心地ぞするいかなるものゝつどへるならんとやうかはりておぼさる下略　花鳥餘情云半蔀とは下はかうしはた板などにて上にしとみをつりて外へあくるやうにしたるを云車にも半蔀とてあり上の蔀計をあくれば半のしとみと名つけるなりと云々　是は夕顔の君の宿を云也爰の體は二階づくりのやうに少し高き所と見へたり　此謠は夕顔巻を以て作るもの也委く夕顔の謠に注す見合しるべし

紫野

是は都北山陰紫野雲林院に往居仕僧にて候

紫野は愛宕郡也雲林院は雲林院に注す勅撰名所和歌抄云紫野は船岡の北と云々北山に七野とて有紫野は其一ッ也大和近江に同名有中右記云寛治六年四月廿二日上皇爲ニ御見物一有レ御ニ幸紫野一矣〇我宿の松に久しき藤の花紫野には咲もしぬらん　忠見家

爰に北山陰と云ふ舟岡山を指て云也今案此謠に雲林院を出す事當時に紫式部の墓あり又淳和帝此所にて六十巻と云文を式部に說せ聞給ふと宇治寶藏記に見えたりと云々是等の緣を以てかく作る成べし

扨も我一夏の間花を立候早安居も過方に成候へば

安居は百萬に注す

敬白立花供養の事

法華經曰以ニ一華一供ニ養於畫像一漸見ニ無數佛一矣止觀曰燒ニ一捻香一奉レ獻ニ一華一如レ是小行必得ニ作佛一矣　立花功德の事賢愚經或經律異相等に見えたり供養の字は源氏供養に注す

右非情草木たりといへ共此花廣林に開けたり豈心なしといはんや

此花とは夕貝の花を云也謠の心は夕貝の花は凡籬などに咲べきをいかに非情のものなりといふ共廣き林に咲たるは心なしといはんと也豈の字味は盛久に注す

就レ中泥を出し蓮ニ一乘妙典の題目たり

是は法華經を讃したる詞也大會及鵜飼に注す

草木國土悉皆成佛道

鵺に注す

手にとればたぶさにけがる立ながら三世の佛に花奉る

後撰集に遍照歌也五文字折つればと有女郎花

に注す
草花りようとして見えつる中に　　りようは侶
容と云歟侶容はむらがるすがたとよむ也
白き花のをのれひとりえみのまゆをひらけたるは
夕顔卷の詞なり夕顔の謠に注す
たそがれ時の折なるになどかはそれと御覽せざる
是は夕顔卷の源氏の君の歌にてつゞけたり委奥に
記すたそがれ時は雲林院に注す
名は人めきていやしきかきほにかゝりたれば　　夕
顔卷云御隨身ついゐてかのしろくさけるをなん夕
顔と申侍る花の名は人めきてかうあやしきかきね
になんさき侍けると申上下略人めきてとは名ばか
りは人々しきと也皃と云に付て云成べし女の名に
夕皃なでしこ玉かづらなどやさしくつきぐくし
何がしの院にも常はさぶらふ誠には五條あたりとゆ
ふがほの　　何がしの浣は河原院を云也夕皃の上此
所にて果給ふ也はじめ五條に住給ひ八月十五夜源
氏の君と同車にて六條河原院へうつらせ給ひ明る
十六日の夜身まかり給ふ夕顔の上の靈魂常は河原
院はさぶらふと云義也委く夕顔に注す

空めせしまに夢となり　　同卷に夕皃の上の歌に
「光ありと見し夕皃のうは露は　たそかれ時のそら
めなりけり
瓢簞屢空草滋二顔淵之巷一藜藋深鎖雨濕二原憲之樞一
是は橘直幹が民部大輔申たる文の句也瓢簞とは瓢
はなりひさご也簞は竹にて作る器也皆食物を入る
物也屢空とは飲食ともしくて彼瓢簞も空しかりし
事度々有しと也藜藋はあかざと云草也顔淵は孔子
の弟子也原憲は魯の國の人也心賢く才勝れたり極
てまづしけれ共是をうれへとせず上句の心は食物
なければ瓢簞常に空し問人なければ草深ソして跡
絶たりといへり下句は庭の草深く雨樞を濕して心
細きよし也直幹我身の貧き事を顔淵原憲に寄て書
る也此申文は直幹いみじく書る上に清書を道風に
させたり天曆帝是を秘藏せさせ給ひて內裏燒亡の
時出させ給ひける道にて直幹か申文出したるかと
御車より仰出されけるとかや後拾●人とはぬ草の樞に
降雨はたのしむ道に聞はうからし基綱
夕陽のさんせいあらたに窓をうがつてさる　　證文
追而可レ尋

愁難の泉のこゝろ　愁歎はうれへなけくとよむ也
善導定善義云到處無ニ餘樂一唯聞ニ愁歎聲一矣　泉と
は愁歎のつきせぬを云也
廬山の雪の明ほの　大明一統志五十二曰南康府廬
山在ニ府西北二十里一古名ニ南障一世傳周武王時匡俗
兄弟七人結レ廬隱ヲ居於此一故名其山疊障九層崇巖
萬仞周五百餘里實南方巨鎭也矣
そうとうにむかふろうげつはきむしつにあたりしう
しやうの秋の山　證文未レ考そうとうは窓頭と書
歟ろうけつは朧月と書かきんしつは琴瑟かしうし
やうは愁傷か追て尋ぬへし
簀戸の竹かき　〇家山里はすとの竹垣咲さかす萩お
みなへしこきませてけり俊頼
山の端の心もしらて行月はうはの空にて影や絶なん
夕皃の歌也委く夕顔の謠に注す
山賤の垣ほある共折々は哀をかけよなてしこの花
是は帚木卷に夕皃の上頭中將へつかはす歌也本歌
には折々に哀はかけよと有　宗祇云歌の心は山か
つのかきほあるとはあるゝ共也卑下の心也我有さ
まのはかなきやうの事也下句玉葛の事にかけて哀
はかけよと頭中將をかこつ心也歌のさま物哀れな
るにや云々　此事玉葛に注す
草のはしとみおしあけて　當流におし明てとうと
ふ也　中院前太府はおし揭て也と仰られし也夕顔
卷云上ははしとみ四五間はかりあけわたしてと云
々
其頃源氏の中將と聞へしは此夕皃の草枕唯かりふし
の夜もすから隣をきけは三吉野や御嶽精進の御聲に
て南無當來導師彌勒佛とぞとなへける　夕顔卷云
鳥の聲なとは聞えて御嶽さうじにやあらん只おき
なさひたる聲にぬかづくぞ聞ゆる立居のけはひた
えかたげにおこなふいと哀れに朝の露にことなら
ぬ世を何をむさぼる身のいのりにかと聞給ふなも
當來導師とぞおがむなるかれ聞給へ此世とのみは
思さりけりと哀れかかり給ひて云々是は源氏の君夕
皃の宿にとまり給ひて隣に御嶽さうじする人のつ
との聲を聞給し事を云也　御嶽とは和州金峰
山を云也號ニ吉野山國軸山一或曰ニ耳香山靑垣山一本
朝七高山之內其土皆黃金也因稱ニ金御嶽一頂上金剛
藏王堂南向本尊二丈六尺文武天皇大寶元年役行者

建立矣（萬）朝もよひ紀ハ川上を今朝みれは金の御嶽に雪は降けり　御嶽精進は大和國なとに今もする事也枕草子云あはれなるものよき男の見たけさうじゐたると云々　金峰山の金剛藏王は彌勒出世の時地に敷へき金を守護し給ふ神也仍て御嶽精進に彌勒を禮する也彌勒は一生補所のほさつ也釋尊の付屬をうけて第十減劫の始に下生して三會説法し給ふ故に當來導師とは云也（已上或江入楚）　彌勒西域記曰梅呾麗耶此云慈氏舊曰彌勒矣　淨名疏曰過去爲王名曇摩流支慈育國人自爾至今常名慈氏矣　慈恩疏曰當來人壽八萬歳時出世三會説法度人無量是釋迦遺法弟子也矣　彌勒下生經曰彌勒菩薩即於出家之日便得成佛坐龍華樹下花林園中三會説法故云龍華三會矣　精進は梵音云毘梨耶法界次第云秦言精進欲樂勤行善法不自放逸謂之精進精進有二種一者身精進二者心精進若身勤修善法行道禮誦講説勸助開化是爲身精進若心勤行善道心々相續是爲心精進矣

そゞろ　景清に注す

源氏此宿を見初給ひし多つかた惟光を招きよせあの花おれと宣へは白き扇のつまいとうこがしたりしに此花を折て參らする　夕貝卷云口惜の花の契りや一ふさ折て參れとの給へは此おしあけたる門に入てをるさすがにされたるやり戸口に黄なるすゞしのひとへはかまなかく着なしたるわらはのおかしげなるいできて打まねく白き扇のいとうこがしたるを是に置て參らせよ枝もなさけなげなめる花をとてとらせたれば門あけて惟光の朝臣の出きたるして奉らす云々　此謠に惟光を招きよせあの花おれと宣へはなと作るは本文と相違せり　白き扇のつまこがしたるとは河海抄に白き扇の香にしみたる也俊成卿の女の説にこがすとは薫物のしみたる心也（已上或江入楚）　惟光は太貳のめのとの子也

打渡す遠方人にとふとても　夕顏卷云遠方人に物申とひとりこち給ふをと云々證歌類顯に注す

定めぬ蜑のこの宿のあるじを誰としら浪の　夕顏卷云蜑の子なれはとてさすがに打とけぬさまいとあいたれたり云々　新古今集に「白波のよする渚に世をつくす蜑の子なれば宿も定めす　卷の詞

は此歌を以てつゝけたり　此謡に此宿のあるしとは夕貞の上を云也源氏の君惟光をして問せ給ひて後夕貞の上とはえり給ふ也

折てこそそれかとも見めたそかれにほの〳〵みへし花の夕貞　同巻に源氏の歌也夕顔の歌に心あてにそれかとぞ見ると云歌の返し也本歌には五文字よりてこそと有又はの〳〵見つると有　弄花云なれたるこゝろ也夕貞を女によそへよめり云々　岷江云近くよりてこそ何とも見つけんすれよそめ計にて夕貞と定めたるは不審也と云也云々

夕付の鳥は湯谷に注すしのゝめは安宅に注す

夕顔

本草綱目云壺盧以ニ正二月一下レ種生レ苗引レ蔓延其葉似ニ冬瓜葉一而五六月開ニ白花一結レ實白色大小長短各有ニ種色一矣　夕顔は源氏の巻の名也心あての歌を以て巻の名とせり扨夕顔の上は三位中將の女也夕顔いまだおさなき時父の中將かくれ給へり其後頭の中將少將といひし時夕顔を見そめ給ひて三とせの程かよひ給ひしに玉葛の君生れ給ふ頭の中將の北の方とがめ給ふをせんかたなくおそれて西の京なるめのとのもとにかくれ居給へりこの住居いぶせかりしゆへ山里にかくれ給ふへき方たかへのために五條あたりに渡り給へり源氏十六の年六條わたりの御しのびありきのついで源氏のめのと大貳といひし尼五條の家に煩ひしをとふらひ給ひしに此家のあたり近き所に夕顔の君うつり居給ひしに夕顔の花軒のつまに咲かゝりしを隨身を召て折せ給ふに此夕顔の宿より是にのせて奉れとて出しける扇に一心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花　と書て奉れり是より源氏御心つきてひそかに夕貞の宿にかよひ給ふそれより淺からず契り給ひしに八月十五夜夕貞を同車にて六條河原院へうつり給ひ十六日の夜物におそはれ十九にて頓死し給ふ此時源氏は十六歳也委く夕顔の卷に見えたり

是は豐後國より出たる僧にて候　先代舊事國造本紀云豐國造志賀高穴穗朝御代伊甚國造同祖宇那足尼定ニ賜國造一矣　大和本紀云豐前豐後は崇神天皇

彼國に大内を建給き依レ之民家富貴せり國中豐也然共此國は便宜悪き樣なればとて都を西へ引て被レ建故に前に宮造せし所を云ニ豐前一後に宮造し所を號ニ豐後國一又大内の名を豐浦宮と申也云々　僻の字義は田村に注す

さても松浦箱崎のちかひ勝れたりとは申せ共猶も名高き男山に參らんと思ひ　源氏玉葛卷云やはたの宮と申はかしこにてもまいりいのり申給ひし松浦箱崎をなし社なりと云松浦鏡の宮も箱崎もやはたと同體也依て猶も名高き男山に參らんといへり男山は弓八幡に注す　松浦神社在ニ肥前國松浦郡一上松浦下松浦鏡宮三座也　上松浦號ニ田島神一　神名帳頭註云仲哀天皇弟稚武王也矣　下松浦號ニ志々伎神一　同頭註云　稚武弟十城別王也矣　鏡宮或云風土紀云昔氣長足姬尊在ニ松浦山一遙覽ニ國形一而勅祈曰天神地祇爲レ我助福乃用ニ御鏡一安ニ置此所一其鏡化爲レ石而在レ山故名ニ鏡宮一矣　此鏡の宮を藤原廣繼が靈社と云はあやまり也廣繼が靈は同國松浦郡に板櫃社とて一座あり是を云也鏡の宮とは別なるべし○新千 あひみんと思ふ心は松浦なる鏡の神や空にしるらん紫式部　筑前國箱崎八幡宮は在ニ那珂郡宮崎村一今其地屬ニ粕屋郡二十二社註式云筥崎神三座神功皇后應神武内也人皇六十代醍醐天皇延喜廿一年六月廿一日依ニ託宣一建ニ宮柱於筥崎松原一書ニ新羅降伏之旨ニ而置ニ御座下一立ニ石柱一祈ニ神誓不ヿ朽矣　或云神功皇后應神御誕生の時御胞衣を箱に入納め給し所なる故に箱崎と名づくと云々御社は乾に向へり松林四方につらなり其廣き事南北二十町東西七八町もろこし人は此所を十里松と名つく　大江匡房筥崎宮記曰箱崎宮在ニ西海道筑前國那珂郡一蓋八幡大菩薩之別宮也其所爲一體也北方臨ニ巨海一西方向ニ絶域一爲レ防ニ異國之來寇一垂ニ跡於此地一潮汐之聲常滿ニ宮中一坤艮三十餘里乾巽七八里計敢無ニ他木一只青松而已矣　鴨長明文字繼云箱崎宮ははかたにつゝきたる所なればはるかに唐の海にむかひて社坦は西むきにおはします是は異國降伏の御ため也といへり云々　私云佛家の説に戒定惠の箱うつまれし故箱崎と名つくといへ共いまた此時佛法我國に渡らす曾て戒定惠の沙汰なし續古 千早振神代にうへし箱崎の松は久しきしるしな

りけり行清
雲の林の夕日影うつろふかたは秋草の花紫の野を
分て　雲の林は雲林院に注す紫野は半蔀に注す
賀茂の御社伏拜み糺の森もうち過て　賀茂の御社
糺の杜は賀茂に注す　伏拜は總て神社にある也社
のさし入に木を横さまに立て不淨觸穢のものを是
より奥へ入へからずとのしるしにせる也此所にて
ふしおがみけるによりてかくいへり熊野などにも
本宮へ參る一里計こなたに臥拜と云在所有是も其
心也今は在所の名とせり〇道の邊のかもの河原の
伏拜み古木の樗陰も馴にき信實
歸る宿りは在原の月やあらぬとかこちける五條あた
りのあばらやの　在原業平の月やあらぬの歌は五
條の西の對のあるじなき所にてよめる也今夕顔も
五條の東あるし定かならずすめる事を取あはせお
もしろし業平は杜若に注す月やあらぬの歌は雲林
院に記す　五條は昔大內裏の時東京にては宣風坊
西京にては宣義坊といへり已上拾芥抄　五條は今の松原
通を云也六條坊門を今五條と云はあやまれり昔大
橋松原にありしを天正十八年に六條坊門に引渡せ
しより誤て六條坊門を五條通とも五條の橋通共い
へり
ふしきやなあのやづまより　やつまとは家の軒
なとの心也廣異記云夜中偶副鴨ニ其屋端一矣榮花物
語云長歌にあやめ草ながきためした引なしてやづ
まにかゝると云々〇見渡せはふかぬ屋端もなかり
けりよとのゝぬまにひけるあやめを
山の端の心もしらて行月はうはの空にて影やたへな
ん　是は六條河原院にて夕顔のよめる歌也夕顔卷
にあり　弄花云山の端は月をかくす所なるをしら
て行月の心也山のはは源氏によそへたり源の心を
もしらて我身はうはの空にさそはれ行よと也次の
夜うせぬへき人なれはなにとなくあぢきなき心有
成べし云々
巫山の雲はたちまちに陽臺のもとに消やすく　宋
玉高唐賦曰旦爲ニ朝雲一暮爲ニ行雨一朝々暮々陽臺之
下旦朝視之如レ言故爲立レ廟號曰ニ朝雲一矣　昔楚襄
王陽臺と云所に行幸有て夢に神女來て會合をなす
別れに望ッて我は巫山の陽にあり朝には行雲とな
り夕には行雨とならんと誓て夢覺て心苦くおほし

て後神女を祭る其廟を巫女廟と云　大明一統志七十日神女廟在二夔州府巫山縣治西北一矣　又云陽臺在二巫山縣治西北一南枕二大江一宋玉賦云楚王遊於陽雲之臺一望二高唐之觀一即此矣　又云陽臺山在二巫山縣治北一高百丈上有二雲陽臺遺址一矣

湘江の雨は屢ゝ楚畔の竹を染るとや　博物志云舜南巡崩遷葬二蒼梧一娥皇女英追レ之不レ及至二洞庭山一涙下染レ竹即班死爲二湘水神一矣　堯帝に二人の女あり姉を娥皇と云妹を女英と云共に舜帝の后也舜御狩の時蒼梧と云所にて崩御ある二人の后別れをしたひて楚國の畔をさまよひ湘江の岸に泣こかれて死す則葬りて二女の廟をきつく其泣泪竹にかゝりて色班に染たり今の世に班竹とて班なる竹はかの竹也　元徽之詩云一枝班竹渡二湘沅一萬里行人感二別魂一知是娥皇廟前物遠隨二風雨一送二啼痕一矣　大明一統志六十五日湘江在二永州府城北一十里一源出二廣西興安縣陽海山一流經二郡界一至二湘口一與二瀟水一合水至清矣

古き軒端のしのぶ草　しのぶ草は梅枝に注す（續後撰）百敷や古き軒端のしのふにも猶あまりある昔なりけり順徳院

紫式部が筆の跡に只なにがしの院と計書置し　紫式部は源氏供養に注す何某の院は融公の舊跡を云也夕顔巻云かろらかに打のせ給へれは右近そのりけるそのわたりちかきなにがしの院につきてと云々　岷江入楚云何かしの院とはそんぢやう其院と云也人の實名をいはすしてそれかし何かしと云同事也と云々

泪の雨は後の世のさはりとなれは　（古今）○なく泪雨とふらなん渡り川水増りなは歸りくるかに　小野篁　篁朝臣妹のみまかりける時よめる歌也心はなく泪雨とふれ渡り川の水まさりなは別れ行人の歸り來るへきと也此歌の心にて泪の雨は後の世のさはりとつゝけたる歟

眞如の月　山姑に注す

なにかしの山何某の寺は　何某寺は鞍馬を云也若紫巻に北山になん何かし寺と有今爰へ是を取出せるは何某院に對して云なるべし

融の大臣は融に注す光君は葵上に注す

また夕貝の露の世に上なき思ひを見給ひし名もおそ

ろしき鬼の形それもさなから苦むせるかはらの院と御覧せよ　夕皃の上はかなくうせ給ふへき人なれは自然に源氏の思ひのせつなる事を今爰に上なき思ひとは云也　又鬼の形とは河原院にて夕皃の果給ひし時うつゝに化したる女のかたち見えたる事有依ておそろしき鬼の形といへり夕顔の巻に委し又鬼瓦をいはんとて鬼の形かはらの院とうけたる河原院は融に注す

名におふ　江口に注す

我等も豊後の國の者その玉葛のゆかりとも　頭の中將夕皃の上にかよひ給ひて玉葛の君生れ給へり太郎の豊後の介と云者肥前國より玉葛の君を具して都にのほりし也委く玉葛に注す　謠の心は豊後國より出たる僧なれは玉葛のゆかり共なして夕皃の世かたりを物語し給へやと云義也

夕皃の露きえ給ひし世語りを　末摘花巻云猶あかざりし夕貌の露におくれしと云々　玉葛巻云年月へたゝりぬれとあかざりし夕貌の露忘れ給はずと云々

抑光源氏の物語言葉幽艶を本として理淺きに似たりといへ共心菩提心をすゝめて義ことに深し誰かは假にも語つたへん　源秘抄云言葉幽玄義理甚深矣秘抄之序云藤原公條我國の至寶紫式部が源氏物語は心詞幽玄にして義理甚深し云々　明星抄云此物語一部の大意面には好色妖艶を以て建立せりといへ共作者の本意人をして仁義五常の道に引いれ終には中道實相の妙理を悟らしめて出世の善根を成就すへしと也されは河海にも君臣の交仁義の道好色の媒菩提の緣に至るまて是をのせずと云事なしと云々岷江入楚云一部之作意比ニ天台四教之法門一矣　又云此物語は盛者必衰會者定離生老病死有爲轉變の理を深くえめす此上に於て世間相常住之法文をたて煩惱即菩提生死即涅槃の旨を明す煩惱即菩提之文此物語之大意也云々　抑の字は高砂に注す源氏物語は源氏供養に注す

中にも此夕顔の巻は殊に勝れてあはれなる情の道も淺からす　夕顔の巻は帚木巻の第二の巻也初巻桐壺よりは四巻め也此巻は夕皃の上河原院にて果給ふ事を書る故に勝れてあはれなるとはつゝけたり此巻の始終あら／＼此謠の本文の下にて記レ之

契り給ひし六條の御息所に通給ふよすがによりし中宿に　六條の御息所は野宮に注すよすがは便也中宿とは惟光が母大貳の乳母の家五條也　夕顔巻の發端の詞に云六條わたりの御しのひありきの比うちよりまかで給ふ中宿りに大貳のめのといたく煩ひて尼に成にけるとふらはんとて五條なる家尋ねおはしたり上略〻源氏の君六條の御息所にかよひ給ふをり大貳のめのとか家に尋ねおはしける此あたり近き所に夕皃おはしましけるを源氏御心つきてそれより淺からす契り給へり

只やすらひの玉鉾の便りにたてし御車なり　御車とは源氏ののり給ふ車也　夕皃巻云御車はいるへき門はさしたりければ人して惟光めさせてまたせ給ふける程上下略　又同巻に源氏の歌に「夕露にひもとく花は玉鉾の便に見えしえに社有けれ三光院殿説云玉鉾の便も見えし緣にひかれて夕露に花の開くる時に成たると也夕皃の花の心を含めり玉鉾は道の枕詞也玉鉾と計詠ずる事此物語始也云々玉鉾の道とつゝきたる歌萬葉第十に「玉鉾の道行うらにうらなへはいもにあはんと我にいひつる

詞林采葉抄云玉鉾の道と云事昔は刀を持事すくなし鉾をのみつきて遠近をいはす道の兵具とせり人の所へ入ては妻戸に立よせて置けるなり但萬葉相傳には鉾には鞘あり柄ありみあり然れば玉鉾のみとつゝくる也鞘とつゝけたる歌當集十一巻云遠くあれど君をぞこふる玉鉾の里人みなにわれ戀ぬかもさやを略してさとつゝけたり古歌の躰如レ斯已上其外古歌に玉鉾の道とつゝかぬ歌も多し略レ之榻鴫曉筆云玉鉾の道と云事住吉記云昔鉾を住吉に立て其鉾の光十方へさす其光に任て諸國七道を分るといへり依レ之玉鉾の道と云也云々　神代直指抄云天瓊矛を解云玉ほこの道行と云熟語も此事也二神ほこを以て道をふみ分給ひて天下を一統し給ふと也云々

物のあやめも見ぬあたりの小家かちなる軒のつまに咲かゝりたる花の名もえならず見えし夕皃の　夕顔巻云かの白く咲るをなん夕皃と申侍る花の名は人めきてかうあやしき垣ねになん咲侍けると申けにいと小家がちにむつかしけなるわたりのこのもかのもあやしくうちよろぼひて云々又同巻云物の

あやめ見給へわくべき人も侍らぬわたりなれどら
うがはしき大路に立おはしましてと云々　河海抄
に文目善悪と書同　孟津抄に綾目黒白と書同　古今榮
雅抄云綾目とは錦ぬいものを始て文なき物はすく
なし綱の目絹目布目など物の色ふし見えぬ時は綾
目もわかずしらぬ也夕暮のくらくなりはつるを物
のあやめわかぬをいふ云々　えならずと云詞は所
によりて心かはり有えもいはれずともたゞならぬ
とも面白き心をも縁ならぬをも云也今爰にいへる
はおもしろき心也（家）奥山のゆづりはいかに折つら
んあやめもしらず雪のふれゝば兼盛（紅梅）もとつか
のにほへる君が袖ふれは花もえならぬなをやちら
さん

心の色は白露の情をきける言の葉の　古〇白露の情
をきけることの葉やほの〳〵見えし夕㒵の花

閨の扇の色ことにたがひに秋の契りとは　班婕妤
が古事にてつゞけたり又かの心あての歌を扇に書
て源氏に奉りしその心をもふくませたる歟

篠目の道のまよひのことの葉も　しのゝめは安宅
に注す夕顔巻に源氏の歌に「古しへもかくやは人
のまよひけんわかまたしらぬしのゝめの道

はかなかりける蜉蝣の命かけたる程もなく　此等
は夕顔の身の上を云也蜉共書千壽に注す　曾禰好
忠家集云ひを虫の日を暮し草葉の玉の風を待程な
れば水の泡よりも殊に春の夢にもことならず云々
小夜の寝ざめ云藤原真甚すべて人の身は朝顔の露消
るを爭ひひを虫の朝の命夕をまたぬ物ぞかし云々

宵の間過る古郷の松のひゞきもおそろしく　夕顔
巻云夜中も過にけんかし風やゝあら〳〵しう吹た
るはまして松のひゞき木深く聞えてと云々

風にまたゝくともし火のきゆると思ふ心地して
同巻云火はほのかにまたゝきてもやのきはに立た
る屏風のかみこゝかしこのくま〳〵しく覺え給ふ
と云々是等皆河原院にて夕㒵の果給ひし時の詞也
風にまたゝくとは風に光のちらめくか人の目た
ゝきするやうなるをいふ（建長七年百首）おきをあめるこやのか
りねのたゝ一夜風木またゝく宵のともし火定家
あたりをみればうば玉の闇の現の人もなく　是も
夕㒵の果給ふ時の事をいへりうば玉は三輪に注す

古○うば玉の闇の現の定かなる夢にいくらもまさらさりけり
いかにせんとか思ひ川うたかた人はいき消て歸らぬ水の淡とのみ　淮南子注云沫雨(ウタカタ)雨ニ潦上ー沫起若ニ覆盆ー矣　万葉に未必(ウタカタ)歌方と書　綺語抄云雨のたまりてかなまりのやうになるをうたかたといふと云々　奥義抄云うたかたは水の上につぼのやうにてうきたる沫也又詞にうたかたと云事有それに添てよめる也云々　万葉仙覺抄云うたかたは忘れずと云事也云々　袖中抄云あまたの歌にて心をうるにうたゝと云心かと見ゆ文字をひとつくはへたる也と云々　又うたかた人とは詞林采葉云先達云あだなる人をうたかた人とは云也云々万古源云うたかた人とは心の定らぬ人也と云々○後撰思ひ川絕す流るゝ水の淡のうたかた人にあはて消めや伊勢
光廣卿詠歌大概云此歌の心二ッ有一には仲平と云男の有しが伊勢が死にたると聞しといへりければかくよめりとはいへり今一にはしばしも人にあはてきえん物かはと云心也うたかたは水の沫の事ながらいかでかなど云詞也又はしばらくもと云心もありうたかた人とひ文字を淸(スム)也うたかたといひ切て又人と云べし六字につゞくべからずと也云々
私云謡の詞は右の後撰集の歌にてつゞけたり思ひ川は名所也在ニ筑前國御笠郡竈門山麓ー但此歌の思ひ川は泪也袖の海の類也
法花は大會に記す讀誦は田村に注す五障は梅が枝に注す
聞も氣疎(ケウトキ)ものゝけの人失ひし有樣を　物のけとは六條の御息所の生靈也夕顏卷にその心あり河海抄に氣外(ケウトキ)と云岷江云けうときとは人氣のうとき也云々
末(スヱ)葉の露の消やすき本の雫の世がたりを　新古○末の露本の雫の世中のおくれさきたつためし成らん　遍昭
東野州云末の露とは梢の心をよめり本の雫とは木の本の雫也少し遲速はあれ共何れもきゆる事を命にたとへたりと云々
氣疎秋の野らと成て池は水草(ミクサ)に埋(ウツモ)れて　夕顏卷云けぢかき草木などはことに見所なく皆秋の野らにて池もみくさに埋れたればいとけうとげに成にけ

る所哉と云々　河原院のあれたる様也野らとは岷江云野等也らの字に心なしと云々　和歌秘決云のらと云は夏野などにはよむまじき也秋などはよむ也其故は秋のするゑに霜をきなどしてあれたるをのらと云也云々万葉に藪草と書○里はあれて人は古にし宿なれや庭もまかきも秋の野らなる　遍昭

又鳴さはぐ鳥のから聲　同巻云けしきある鳥のから聲に鳴たると云々岷江云から聲とは聞なれぬからびたる聲也云々

優婆塞がおこなふ道をしるべにて來世も深き契り絶すな　同巻に源氏の歌也留りは契りたがふな也是は夕貌の宿に源氏のとまり給ふ明方にみたけさうじする人のつとめの聲を聞てよめる也佛に四部の弟子あり優婆塞は其一也　釋氏要覧云優婆塞秦言二善宿男一謂離二破戒一宿故也又梵語云二鄔波索迦一唐言二近事男一謂親二近-承-事諸佛法一故也矣　涅槃經曰若有二善男子善女人一諸根完具受二三歸依一是則名爲二優婆塞一矣○うはそくかおこなふ山の椎が本あなそは〳〵しとこにしあらねは

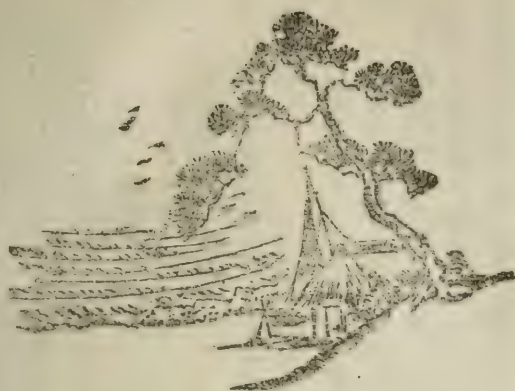
夕貌のえみのまゆ　同巻云白き花ぞおのれひとりえみのまゆひらけたると云々○數々に君がたよりて引なれは柳のまゆは今ぞひらくる　蜻蛉日記

開くる法花の英も變成男子の願ひの儘に　花ぶさとは夕貌の花ぶさ也謠の心は夕貌の上法花の功力に依て變成男子となり成佛し給ふと云義也龍女が成佛をも兼たり海人に注す

解脱の衣の袖ながら　皆八業にしばられ不自由なるを今ときまぬかるゝ事を衣によそへたる也　賢愚經曰著二袈裟一者當下於二生死一疾得中解脱上矣　一如云解レ縛得レ脱故名二解脱一矣

音羽山峰の松風かよひきて　夕顔巻云寺々の初夜も皆おこなひはてゝいとしめやかなり清水のかたぞひかり多く見えてと云々是は夕貝の果給ひて東山清水のほとりにおくりし時の詞也是によりて爰に音羽山とは出したる也　又琴の音に峰の松風の歌をもつゞけたり　千壽に注す

あけぐれの空かけて　夜明んとてしばしくらくなるをあけぐれと濁りて云也あけくれ清て云時は朝夕の事也　枕草子云明くれのほどに歸るとてと云

云　文選に味爽と書（御法）しいにしへの秋の夕の戀しさに今はと見えし明くれの夢

謠曲拾葉抄卷七

大原御幸

西海におゐて平家悉くほろび安德天皇海に沈ませ給ふ女院も同じく入水まし〳〵けるを渡部源五馬允熊手にて引上奉るそれより都へ登り給ひけれど御心ならず世かはり侍ればまめやかにつかふまつる人もなししばらく吉田のほとりにやどらせ給ひ元曆二年五月一日御年廿九にて終に御出家あり御戒師は長樂寺阿證上人也それより大原へうつらせ給へるをそのあくる年文治二年卯月廿一日法皇御幸有て女院へ御對面なされけりしのびの御幸なれば行列に及ず供奉の人々には德大寺花山院土御門公卿六人殿上人八人北面少々也女院いつしかむかし戀しうもや思召されけん御庵室の障子にかうぞあそばされける「古しへも夢になりにし事なれは柴のあみ戸も久しからじな　御供の德大寺御庵室の柱に書つけられける「いにしへは月にたとへし君なれど其光なきみ山邊の里かくて女院はむなし

く年月をおくらせ給ひれいならぬ御心地いできて建久二年二月中旬に大原におゐて終におはらせ給ふ臨終のよそほひ音樂空にきこへ紫雲四方にたなびきて目出度往生をとげ給ふとぞ（平家物語文略）　長門本平家物語云貞應二年春御往生御年六十一妙音ぼさつの化身にておはしますと云々盛衰記云貞應三年の春御年六十八にておはらせ給ふと云々今案平家物語に女院の往生は建久二年と有又長門本及盛衰記には貞應二年と有是大きに相違せり何れか是なる

是は後白河院に仕へ奉る臣下なり　此時の天子は後鳥羽院也然共後白河御存生なればかくいへり後鳥羽院は後白河の御孫也百練抄云後白河天皇諱雅仁鳥羽院第四皇子母待賢門院大治二年丁未九月十一日誕生同十一月十四日爲親王久壽二年十月廿六日即位在位三年嘉應元年六月七日落飾法號行眞建久三年壬子三月十三日崩御年六十六矣　臣下は奏上に注す

扨も此度先帝二位殿を初め奉り平家の一門長門國早鞆（ハヤトモ）の沖にして悉く果給ひて候女院も御身をなげさせ給ひ候を取上奉りかひなき御命たすかりおはしまし候　東鑑云元暦二年三月廿四日午剋於長門國赤間關檀浦海上平氏終敗傾二品禪尼持寶劍按察（アゼチ）局奉抱先帝共以沒海底建禮門院入水御之所渡部黨源五馬允以熊手奉取之按察局同存命但先帝終不令浮御（下略）　百練抄云文治元年三月廿四日於長門々司關爲源軍平氏悉被責落畢前帝外祖母二品奉抱幼主投海中内大臣父子平大納言時忠卿父子前内藏頭信基生虜也女房建禮門院已下存命矣　先帝とは八十一代安德天皇を申也　百練抄云安德天皇諱言仁高倉院第一皇子母建禮門院治承二年十一月十二日誕生同十二月七日爲親王同十五日爲皇太子同四年二月廿一日受禪以關白基通爲攝政同四月廿六日即位同二年七月廿五日赴西海文治元年三月廿四日崩海中于時八歳矣長門本平家物語云此御門受禪の日は晝の御座の御しとねの縁を犬食破り夜の御殿の御帳の内に鳩入こもる御即位の時は高御厨後に女房俄に絶入御禊（ミソギ）の日は百子の帳の前に夫男上居る御在位三ヶ年が間天變地變打續き諸寺諸社より恠を奏する事隙なし（下略）　長嘯子九州道之記云あかま

が關にあがりにけりある寺に先帝のみかたち幷に一門の公卿殿上人局內侍以下まではかなき筆の跡にのみうつしおきたり世へだゝりたることゝおもへど其時の心うきしづみ給ひしありさままでかず〳〵におもひ出られてかなしく覺えければ云々

二位殿は太政大臣淸盛の內室也贈左大臣時信の女建禮門院の御母也建春門院の妹平大納言時忠の姉也建禮門院は號二中宮平德子一高倉院后淸盛女安德帝之御母也　長門本云女院は年十五にて內へ參り給ひて女御の宣旨を下されき　十六にて后妃の位にそなはり廿二にて皇子御誕生有廿五にて院號有て建禮門院と申き今年は元曆二年廿九にて御ぐしおろさせ給ふ文當二盛長私記一云女院も御燒石と御硯とを左右の御袂に入海に入給ふ所を渡邊源次兵衛尉番が子源五右馬允眡と云者急ぎ飛入て潜上奉る眡が郞等熊手を御髮に掛て引上けり云々　拾芥抄云長門元云二穴戶一矣　國造本紀云穴門國造纏向日代朝御世櫻井田部連同祖邇伎都美命四世孫速都鳥命定二賜國造一矣　大和本紀云長門國は山陰海の龍王の中に赤目とて眼の赤き魚龍あり大龍王の勅使として山陽海へ行事あり然るに兌より奥の國を回れば海路遙なる故直に國中を蹴破て通レ水行其所を云二赤目國一其より彼所の舟着を號二赤目津一又赤間關と云所も是也彼赤目の魚龍命長く門を榮へて此所に住依て其所號二長門一云々⦿早鞆は門司關を云也赤間關門司關昔は五百檣の關と申て長門路につゞきて一つ也門司今は豐前也一里の海上隔あひ漲所也はやとも共云也門司の地に神社あり號二波夜度毛神一俗說云早鞆神は龍王の眷屬也云々

道ゆきぶりに云源貞世　赤間の關と門司の關とのあはひは山のひとつにて其中にわづかにしほのみちひの道計穴のやうにて侍るに其岸の東西に人家しげかゝりけりあなとゝはさていふなりけり其を皇后のいくさの御舟とをりがたかりけるに御舟よそひて後一夜のほどに此穴戶の由引わかれて今のはやとものわたりになりぬ云々　かひなきは融に注す

三河守範賴九郞大夫判官義經兄弟供奉し申　右兄弟供奉とあれ共義經一人也　東鑑云義經供二奉內侍所神璽一元曆二年四月廿五日入二奉京都一納二朝所一同廿七日義經被レ補二院御厩司一八月十四日任二

伊與守ニ文略
百練抄云文治元年三月廿五日戊寅戌時神鏡璽自ニ
鳥羽ニ入ヨ御朝所ニ權中納言經房卿參議泰通卿權辨
兼忠朝臣已下次將等供奉太夫判官義經等奉レ相ヨ具
若宮ニ御入洛侍從信清相ヨ具院御車ニ奉レ迎矣　從五
位下三河守範賴は淸和天皇十代後胤左馬頭義朝子
也母池田宿遊女也於ニ遠州蒲生御厨ニ誕生因號ニ蒲冠
者矣　異本盛衰記云範賴は梶原が讒言により賴朝
の勘氣を得て在ニ伊豆國修善寺ニ景時又賴朝に申て
越ニ伊豆ニ景時父子三人五百餘騎にて押ヨ寄修善寺ニ
範賴終にかなはず坊に火をかけ自害す景時煙をし
づめ範賴の燒首取て賴朝に奉る云々長門本云扨は
九郎は賴朝を敵にせられたり此事今は何に包むと
も叶まじとて二位殿の賴朝弟三河守範賴を大將軍
にて六萬よき指上せらる三河守小具足計にて熊王
丸と云童に甲持せて二位殿の見參に入給ふに二位
殿和殿も九郎が樣に二の舞し給ふぞと宣へば小具
足ぬぎ置て爭其儀候べき起請仕べしとて留給ひて
一日に一枚づゝ百日が間百枚の起請書て二位殿に
奉給ひけれ共不レ用して終に三河守切れ給ひにけ
り大將軍にて上給ふべき三河守は切れ給ひぬ切給
ふ心を人是を知らず大名小名惟をなす其後北條四
郎時政を大將軍にて三萬餘き都へ上せらる云々
右兩說不同也何れ歟是なる　義經は屋島に注す
三種の神寶事故なく都に納り給ひ候　三種とは神
璽寶劔內侍所也但寶劔は海に沈て神璽と內侍所と
御上洛也　盛衰記云神璽は海上に浮けるを常陸國
住人片岡太郎經春奉ニ取上ニ寶劍は失にければ嚴島
の神主景弘に仰て探ヨ求海底ニ其後讃岐の老松若松
と云二人の潜女に探らしむれども見えずと云々
文略　神璽は號ニ八坂瓊曲玉ニ　舊事本紀云令ヨ玉作
祖櫛明玉神作ニ八ニ坂瓊之五百箇御統玉ニ矣　寶
劔は麗氣記云草薙劍亦名ニ天叢雲劍ニ是也矣
日本紀云素戔嗚尊乃拔ニ所レ帶十握劔ニ寸ニ斬其蛇ニ
至レ尾劔刃少缺故割ニ裂其尾ニ視レ之中有ニ一劍ニ此
謂ニ草薙劍ニ也素戔嗚尊曰是神劍也吾何敢私以安乎
乃上ニ獻於天神ニ矣　內侍所は八咫神鏡也日本紀云
使ニ鏡作部遠祖天糠戸者ニ造ニ鏡矣　麗氣記云八咫
鏡火珠所レ成玉本有ニ法身妙理ニ也亦名ニ邊都鏡ニ亦
名ニ眞經津鏡ニ亦曰ニ白銅鏡ニ矣　名法要集三種者一

十種圓滿之靈是云ニ八咫鏡ニ二十種成應之寶是云ニ八坂瓊曲玉ニ三十種成就之加持是云ニ草薙劔ニ此三種者寶而具レ權故有ニ權實ニ無ニ勝劣ニ者是也十種三種之靈德畢竟統御之神寶是云ニ神籬磐境ニ無上靈寶是也矣　神皇正統記云三種の神器世に傳ふ事日月星の天にあるに同じ鏡は日の躰也玉は月の精也劔は星の氣也云々　三種は智仁勇の三德をそなへたり神璽は萬物涌出の如意寶珠柔和慈悲の形是仁の本源也寶劔は惡魔を平げ國土を治むるの德是勇の源也内侍所の御鏡は正直にして萬境を寫し拂ふ時は一物も殘らず一天の君を初め下萬民に至る迄眞實にして人を救ふの事是智惠の根源也（已上舊事本紀取意）私云此三つの神寶は神と君との御傳授にておぼろげならぬ事也今更凡下の筆に述べき事に侍らず

（玉葉）●神代より三種の寶傳はりて豐蘆原のしるしとそなる教言

大原の寂光院　大原は愛宕郡也矢背の北にありおはらと唱ふ和歌にはおほはらとよめり此所に八の村有都て大原と云也　寂光院は大原草生村にあり此寺に建禮門院の木像并阿波内侍の木像あり女院の陵は寺の前の少し上高き所にあり堂の前に昔は汀の櫻とて池のほとりに櫻ありしが今は池もなし澤庵和尚有由紀行云越ニ川至ニ寂光院ニ本尊ハ地藏菩薩也平清盛公之作云々　有ニ女院嚴容ニ即建禮門院是也自ニ西海ニ入レ洛之後自ニ東山麓ニ又遷ニ此山ニ不レ滿ニ十年ニ終焉ニ此院ニ崩御成矣

法皇御幸をなされ　法皇とは後白河院也　仙洞落飾し給ひて稱ニ法皇ニ宇多天皇昌泰二年落飾法名曰ニ金剛覺ニ又寛平法皇共申す仁和寺御室是也是法皇の始め也　御幸とは獻江入楚云天子を行幸とも書院を御幸と書何れもみゆきとよむべしと云々　海人藻芥云帝王は行幸仙院は御幸親王攝家は御出と云也云々　幸の字は天子巡行用レ之蔡邕獨斷云天子車駕所ニ至見ニ令長三老官屬親臨レ軒作レ樂賜以ニ食帛ニ民爵有レ級或賜ニ田租ニ故謂ニ之幸ニ矣　有職懷中抄云行幸とはゆきてさいわいすとよむ也天子の行給ふ所は幸を受る故に申侍る也云々　長門本云法皇寂光院御幸の事夜を籠て補陀洛寺の御幸とて出させ給ふ忍びたる御幸なれば古たる御車に簾をかけて奉る近習の人々少々召せぐらる後德大寺右

大臣公能御子内大臣實定右大臣實隆當關白花山院
太政大臣忠雅御子大納言兼雅侍從大納言成通御子
宰相泰通二條内大臣公教御子大納言實雅土御門内
大臣雅通御子宰相中將通親閑院大將吉田中納言
なとぞ候ひける其外若殿上人北面少々供奉す云
々
山里は物のさびしき事社あれ世のうきよりはすみよ
かりけり　古今集雜下よみ人しらずと有　榮雅抄
云世中のうきよりは山里のさびしきは住よきとな
り云々
間遠にゆへるませ垣や　間をあらけて結ひたる垣
也是より以下の詞平家物語盛衰記長門本を以てつ
ヽけたり
賤が妻木の斧の音梢の嵐猿の聲　長門本云巴峽の
猿の一さけびしつが爪木の斧の音と云々　倭名
抄云風土記云猨善負レ子乘レ危而投至倒而還者也兼
名苑一名獼猴文選猿沇失レ木唐韻猴獼矣　妻木は
通小町に注す
正木のかづら青つゞらくる人まれに成果て　總て
つたかつらにはくるとつヽくる也正木のかつらは
高砂に注す青つヽらは山路に生る青きつるあるか
づら也○今はとて入にし山の青つヽら猶もくるし
き此世なりけり了然上人（續千）
草顔淵が巷にしけき思ひの行衛とて雨原憲か樞（トボソ）とも
是は橘直幹か申文にてつヽけたり　半部に注す
大納言の局　鳥飼中納言伊實（コレザネ）女五條大納言國綱養
子也云々　長門本云先帝の御乳母五條大納言邦綱
の御娘太夫三位の御妹大納言佐殿とて本三位中將
重衡卿の北の方なり云々　山槐記云藏人頭重衡朝
臣妻前大納言邦綱卿三女號二大納言局一矣　百察訓
要抄云大納言は天子喉舌の官也下の申事を上へ申
上の事を下にのふる職也又君のあしき事を御らる
ヽをはすてよき事を申由令條にも見えたり始は四
人にて有しが次第に多く成て當時は十人にて有也
下略　令義解云大納言謂レ納レ言王者喉舌之官也納二
下言於上一宣二上言於下一也矣　延喜式云天智天皇
十年正月五日始置二御史太夫一天武天皇元年八月改
爲二大納言一矣　園太曆云天長五年三月十九日以二
從三位京野一爲二權大納言一是權官始矣
樒を摘候へし　唐韻曰樒香木也矣　謠曲抄云之岐

善矣苔深き樒も水もしほるらん暁をきの峯の山
寺
びんなき事なれども　びんなきとは便りなき也
枕草子云ひんなき所にて人に物をいひけると云
々
悉達太子は浄梵王の都を出檀特山のさかしき道をし
のき　是は長門本にてつゝけたり　中天竺摩訶陀
國浄飯王の子悉達太子十九にて出家し給ひ檀特山
に登て阿羅々迦摩羅の二人の仙人に仕へ難行し三
十にして成道し給ふと也　悉達は名義集云梵語
曰薩婆悉達唐言頓吉太子生時諸吉祥瑞悉皆具
故大論翻為成利西域記云薩婆曷剌他悉陀唐言一
切義成舊云悉達訛也此乃世尊小字耳矣　浄飯
は名義集云梵音云首圖馱那或名閱頭檀此云
浄飯或翻眞浄或云白浄矣　檀特は名義集云
梵音云彈多落迦西域記云舊曰檀特山訛也矣
菓つみ水くみ薪とり〳〵様々に難行し仙人に仕へさ
せ給ひて終に成道なるとかや　提婆品曰即隨仙
人供給所須採菓汲水拾薪設食矣世尊成道
の事湯谷に注す仙人の意味鉢木に記す●拾法花經を

我えし事は薪こり菜つみ水くみ仕へてそえし　行基
花筐は花かたみに注す九重は村田に注す
深み草　牡丹の異名なり　本草綱目云群花品中以
牡丹第一芍藥第二故世謂牡丹為花王矣　五
雜組云牡丹正黄者不可得正紅者難得矣　亦有
墨色者須苗芽時以墨水漑其根頭開花作
翡藍色尤奇也矣　事物紀源云隋煬帝世始傳牡丹
華西唐開元年中宮中及民間競尚賞之自此有
數品花矣　陳眉公秘笈云世謂牡丹近有蓋以國
朝文士集中無牡丹詩張公嘗言北齊楊子華畫牡
丹極分明則知北齊已有牡丹矣　或抄云日本に
上古は牡丹なかりしにや萬葉古今等に其詠なし詞
花集に新院崇徳院位におはしましゝ時牡丹をよませ
給ひけるをよみ侍りける關白太政大臣藤忠道「咲
しより散はつる迄見し程に花の本にてはつかへに
けり　此歌牡丹を始てよめるといへり但萬葉に
「ふかみ草庭に茂れる花の香をいへよきてへよう
けもちの神　是は牡丹をよめる歌か待ぬへし　或
は廿日草富貴草名取草花の王共云也　又一捻紅鼠
姑百兩金鹿韭共云也

岸の山吹咲みだれ　秘傳花鏡云棣棠花(ヤマフキ)藤本叢生葉
如二茶蘼一多レ尖而小邊如二鋸齒一三月開レ花金黄色圓
若二小球一一葉一蕊但繁不レ香矣　棣棠は園史及允
齊花譜導生八牋等に其形詳也　順和名に欵冬をや
まふきと訓じ朗詠集にも欵冬をやまふきとす皆あ
やまり也　酴醾をやまふきと訓ずるも非也余醾は
こやおき也訓は山にありて其花の色欵冬に似たれ
はやまふきと云也云々

池水に汀の櫻散しきて浪の花こそ盛なりけれ　千
載集春下院御製也後白河詞書云みこにおはしまし
ける時鳥羽殿に渡らせ給へりける頃池上花といへ
る心をよませ給ひけると云々　盛衰記には池水に
岸の青柳散しきてと有長門本云此歌の詞書に殘の
花の水の面に散しくを御覽して法皇御心のうちに
と云々

綠蘿の垣水苔の山繪に書其筆にも及びがたし　長
門本及盛衰記にてつゝけたり是等皆寂光院の景氣
をいへり　文選游仙詩云綠蘿結二高林一矣　呂向注云
綠蘿松蘿也矣　毛萇曰女蘿松蘿也矣爾雅注云水苔
一名石髮江東人食レ之矣　廣志曰空室無二人行一則
生二苔蘚一或青或紫矣○うすくこく遠近かすむ山の
はにたかうつし繪の筆も及はし定誠

一字の御堂あり　長門本云西の山の麓に一字の草
堂あり則寂光院是也云々釋名云宇羽也如二鳥羽翼
自覆蔽一也矣　尸子曰天地四方曰レ宇又屋四方垂爲
レ宇矣やねの兩方へたれたるが鳥の羽に似たれは
宇とは云也

甍破れては霧不斷の香を燒樞落ては月も又常住の燈
をかゝく　寂光院のあれたる體をいへり平家物語
盛衰記長門本にあり何れの古語に依てつゝけたる
ぞ本文未レ考

藜藋深くとさせり　直幹か申文を又愛にも出した
り　藜は說文曰草也徐曰今落帚或謂二落藜初生可レ食
矣　爾雅曰藜之科大爲レ樹可レ即レ帚　又疏云可レ爲
レ杖矣　藋は說文曰藋草矣　爾雅曰商藋亦似レ藜又
灰藋寸炊爲レ飯香滑葉心有レ粉似レ藜心有二赤莖一大
堪レ爲レ杖矣　左傳曰斬二之蓬蒿藜藋一而共處矣
藜藋はあかざとよめり

是は萬里の小路の中納言にて候　平家物語盛衰記
長門本に法皇の御供の中萬里小路といへる名是な

し大系圖を見るに從三位左京太夫資通卿を萬里小路の祖とす弘安の頃の人也但平家滅亡の時よりは遙に後の人也此萬里小路資通卿の先祖を吉田と號す今案上に記する長門本に御供の中に吉田大納言と云ありし是を萬里の小路と云歟　百寮訓要抄云中納言つかさとる所大納言に同し又任る人も大略同事也昔は員數四五人迄有しかど次第に多く成て今は是も十人也云々　伊呂波字類抄云持統天皇元年丁亥始置二中納言官一矣　拾芥抄云文武天皇元年以二大神高市麿一始レ之矣

やあ如何にあのあませ汝はいかなる者ぞ　あませ清は悪し濁るべし　清少納言松島日記云かたらひ契りてすみ侍るに此あませつとめてのとし身まかりぬ上下略　按ずるにぜは禪尼と云ふを略してぜと云歟又一説に御前也ごぜんを略して姫ごぜ尼ごぜといふ又こせを略してぜといへりむかしは君につかふる人を何御前何の前共いへり御は稱美の詞也其後は君につかへざる人にも何のまへ何でせんとよひ來れり

是は信西が娘阿波の内侍がなれる果にて侍ふ　山井三位永頼卿八代後胤越後守季綱孫進士藏人實兼子也正五位下少納言日向守通憲入道信西正六位加賀掾實兼一男也母信濃守源有房女也諸道才人也平治元年十二月十三日信頼亂逆之時見二天變一兼知二彼災瑞一入二大和國多原山一求レ死前入レ棺被レ埋同十五日伊賀守光保尋出即堀出斬レ首渡二大路一被レ梟二獄門一畢矣　阿波内侍通憲女大僧都澄憲妹也已上大系圖一云内侍は通憲の孫貞憲の娘光憲の妹母は紀伊の二位後白河の乳母也と云々内侍の官は玉葛に注す極重悪人無他方便は柏崎主上は舟辨慶成等正覺は源氏供養閻浮は白鬚つゝましやは卒都婆小町に注す

中々に猶妄執の閻浮の身を　按するに閻浮の身を閻浮の世とうたふはこゝろへず閻浮は南閻浮提にして此世界を云しかあれは世と云時は重言なるへし古今短歌にふる雪のけなはけぬべく思へともえぶの身なれは猶やます上下略

一念の窓の前に攝取の光明を期しつゝ十念の柴の扉には聖主の來迎を待つるに　女院念佛御つとめの外他事なき事をいへり是も長門本にてつゝけた

り
往生要集云聖衆來迎樂者彌陀如來以ニ本願一故與ニ諸菩薩百千比丘衆一放ニ大光明一皓然在ニ目前一時大悲觀世音申ニ百福莊嚴手一擎ニ寶蓮臺一至ニ行者前一大勢至菩薩與ニ無量聖衆一同時讃嘆授レ手引接是時行者目自見レ之心中歡喜身心安樂如レ入ニ禪定一當レ知草菴瞑レ目之間便是蓮臺結レ跏之程即從ニ彌陀佛後一在ニ菩薩衆中一一念之項得レ生ニ西方極樂世界一矣、

大原や芹生の里　芹生の里は元草生村の南にあり近世勝林院村の内北邊にうつる長門本に瀬料と書

夫木
○大原や芹生の里の月はみついつか我身も住へかるらん　寶家

朧の清水月ならて　草生村寂光院の東南に有ニ小泉一此所の人是を云ニ朧清水一或は古歌におほろの里おほろの山とよめり袖中抄云能因歌枕云おほろの清水は山城國大原郷にありといへり　或人の申侍しは江文の東にあり良暹が大原の山庄の邊ト云々

後拾
○水草ゐし朧の清水底澄て心に月の影はうかふや　素意

北祭の折なれは　加茂の祭四月にあるを北祭と云也此月兩度有中の申の日有は國祭と云　是は欽明天皇の御宇四月に吉日をえらひて祭よし也又和銅に詔ありて山城國司是を檢祭すと見えたり又中の酉の日の祭は昔夢の告侍りしよりけふ人々葵かつらをかくる也　加茂松尾の社司前の日より然るへき所々へ奉る欽明の御宇より此祭始る已上岷江入楚　臨時の祭は十一月也

げに寂光の靜なる　寂光院を兼たり　盛衰記云寂寞の柴の樞なれは無人聲として答ふる人もなしと云々　說文云寂無ニ人聲一也矣　廣韻云靜也集韻云レ聲矣

青葉かくれの遲櫻初花よりもめつらかに　金葉集夏の部云二條關白家にて人々殘花の心をよませ侍けるによめる藤原盛房歌に「夏山の靑葉ましりの遲櫻初花よりも珍しき哉

中々やうかはる有樣を　源氏須磨卷云かややども蘆ふけるろうめくやなどおかしうえつらひなしたり所につけたるすまゐやうかはりてなとと云々やうかはるとは樣體の替る也

かけまくも　難波に注す

思はすも深山の奥の住居して雲井の月を餘所に見んとは　女院の御歌也平家物語盛衰記長門本に上の五文字おもひきやと有　長門本云御休所とおほしき所には大和繪書たる紙屛風をたて女院の御手にてあそはされける云々　平家物語盛衰記に御腰障子に書付られたりと有

さいつ頃ある人の申しゝは女院は六道の有様まさに御覽しけるとかや佛菩薩の位ならては見給ふ事なきにふしんにこそ候へ　女院は西海におゐてまのあたり六道の有様を御覽しけると云事を法皇の聞及はせ給ひて女院へ御尋有しなり　長門本云人は生を隔てこそ六道を經まはりさむらふなるに見つからこそ此身をかへすして六道をまはりて候そや云々　是は女院六道めくりの物語の最初の詞也　扨此謠に作る所はされは天上のたのしみも身にしら露の玉かつらと云は天道の心をいへり海に望め共潮なれは飲水せすは餓鬼道也啼さけふ聲はけうくはんの罪人と云は地獄也陸のあらそひある時とは修羅道をいへり駒の蹄の音聞はは畜生道也見聞も同し人道の苦しみとなりはつるとは六道なから人道のうちにあるといへる事也平家物語及盛衰記長門本等に記せるとは少し相違あり見合しるへし六道は安達原に注すつら〳〵は安宅に記す

さいつころ　さきの頃也つは休字也河海抄云近曾と書　萬葉におとゝひのさいつ頃と有一昨日のさき也と云々紹巴源氏抄云さいつ頃は去頃（サイツコロ）也と云々伊呂波字類抄云頂背（サイツコロ）と書云々枕草子云さいつ頃加茂にまふづとてと云々

觀ㇾ身岸額離ㇾ根草論ㇾ命江頭不ㇾ繫舟　羅維無常詩也在二和漢朗詠集一　草根　人の世は根を離れたる草か江につなかぬ舟の岸による浪

天上の樂も身に白露の玉葛なからへ果ぬ年月も終に五衰のおとろへの　長門本云　女院云　天上の五衰のかなしみ人間にも有ける物をとそおほしめし合せられける云々　往生要集云今此娑婆世界無ㇾ可二耽玩一輪王之位七寶不ㇾ久天上之樂五衰早來矣　因果經云天人身淨不ㇾ受二塵垢一有二大光明一心常歡悦無二不ㇾ適ㇾ意之事一爲二欲火一所ㇾ煎福盡之時五衰相現矣　五衰は羽衣に注す

潮なれは飲水せすは餓鬼道のことくなり　汐水にて

のみかたきは只餓鬼道なりといへり●河と見てのめはほのほと成物をいつくをさしてやせ渡るらん

祐盛法師

舟こそりつゝ　墨田川に注す

叫喚の罪人　三界義曰叫喚地獄者彼諸有情多受レ苦已尋ニ求舍宅一覓ニ藏身之所一便入ニ大鐵室中一入已即大火起由レ之燒レ身苦痛逼切之時發レ聲叫喚長時受レ苦故名ニ叫喚地獄一又大叫喚地獄者在ニ彼地獄一受ニ種々苦一彼從ニ地獄一出已便入ニ鐵室之中一遍裹ニ其身一猶如ニ胎藏一發レ聲轉大倍ニ於前叫喚地獄一故名ニ大叫喚地獄一矣

修羅道　屋島に注す

駒の蹄の音きけは　說文曰蹏足也通作レ踶　踶　蹋也亦作レ蹄矣　孫愐切韻云畜足圓云レ蹄矣　ひづめと云訓は地をふみつめ也ふみの反はひ也

筑紫　櫻川に注す

緒方三郎が心かはりせし程に　緒方三郎は豐後國姥が嶽の大蛇の子孫といへり長門本云緒方三郎伊能は赤雁大太タウダが五代の孫也云々　西國の武士は皆平家にしたかふなれ共今度緒方三郎兄弟源家に一味する也　東鑑云元曆二年正月十二日豐後國住人臼杵二郎惟隆同弟緒方三郎惟榮者志ニ源家一之由兼以風聞之間召ニ船於彼兄弟一渡ニ豐後國一可レ責ヨ入博多津一之旨有ニ儀定一仍今日參州範賴歸ニ周防國一矣又云同廿六日惟隆惟榮等含ニ參州之命一獻ニ八十二艘兵船一矣

薩摩　俊寛に注す

能登守敎經は安藝太郎兄弟を左右の脇にはさみ最期の供せよとて海中に飛で入　是は平家物語の趣也盛衰記云能登守敎經阿波國住人安藝大領子安藝太郎時家同郎等一人右兩人を左右の脇に挾て海に入と云々　平家物語云土佐國住人安藝の鄉を知行しける安藝の大領實康か子に安藝太郎實光弟を次郎と云也云々盛長私記云安藝太郎をは盛嗣組て海へたぶと投入たり同く太郎が郎等萩野六郎薗田四郎兩人を忠光景淸等組て首を取文略　東鑑盛長私記には敎經の沙汰なし委しく屋島に注す

新中納言知盛は沖なる舟の碇を引上甲とやらんにいたゝき乳母子の家長が弓と〳〵を取かはし其儘海に入にけり　知盛は舟辨慶に記す家長は伊賀平內左

衛門と云也經盛の家人也　平家物語盛衰記長門本に知盛碇をいたゝきたる事なし弓を取かはしたると云事もなし知盛家長手に手を取組て海に入と平家物語にあり盛衰記にはもろ共に自害して死すとあり碇を負たるは教盛經盛也資盛有盛なとも碇を負て海に入乳母とは順和名にめのおとゝと訓ず神代巻に豐玉姫うかやふき合せずの尊をうむ玉依姫この尊をそだて給ふ是乳母の始也玉依姫は豐玉の妹なればめのおとゝと云也　花嚴經云擾波羅蜜爲レ乳戸波羅蜜爲ニ乳母一矣　或説に女院は武家の御女にて甲は能しり給ふへきを甲とやらんといひしは然るへからすといへり　私云甲とやらんとつゝけたるは文の餘情にて此例多し源氏須磨巻にうしろの山に柴といふもののふすふるなりけりと又長嘯子の作れる春の山ふみにかさといふもののうちきつゝと云々柴及ヒかさは上古よりありてあまねく人のしれる物なれ共文の餘情にて柴といふ物をかさといふものなとゝつゝけたる成へししかあれは甲とやらんといへるもくるしからぬ歟

鈍色のふたつきぬ　鈍色は服衣也ふたつ衣とは鈍色を二つ重ねたる也　禁裏政要云鈍色諒闇之時用レ之重服之人同用レ之矣西三條加不離抄云鈍色はうつし花にて染る也花田染也又云青花に墨を入也又青鈍色あり青鈍は花田のこき色也尼などの用る色也云々　花鳥餘情云服者の所の御簾のへりもつかうにはにひ色の布を用る也云々

今そしるみもすそ川の流れには浪の底にも都ありとは　安德天皇御最期の時御歌也といへり此歌上句の留りと下句の留りに同字有和歌七病第六に聲韻とて嫌ふ事なれ共御幼少の時の御歌なれは其沙汰に及はじ歌の心はもすそ川の流とは御裳濯川は伊勢也代々の帝天照太神の御末なれはかく云り波の底に都ありとは龍宮を云龍の都とも云り　勢陽雜記云御裳濯川は内宮の神前より流れ出るを五十鈴川といひ鏡石の方よりなかれ出るを御裳濯川といふといへ共兩川なから宇治川の總名也　倭姫命世記云垂仁天皇廿六年天照太神五十鈴之河上仁遷幸于レ時河際仁天志倭姫命御裳齊長計加禮侍於介留洗給倍利從レ其以降號ニ御裳須會河一也御裳濯と云は太神宮御鎮座の時よりの河の名也と云々大常國史同レ之

長門本云二位殿は是を聞召鈍色の二ツ衣にはかまのそはとりてはさみ八歳に成せ給ふ先帝をいたき奉り我身に二所ゆひ付奉る寶劍をは腰に指神璽をは脇にはさみて出給ひけれは先帝是はいづくへそと仰有けれは彌陀の淨土そ我君とて波のしたに沈み給ふとて「今そしるみもすそ川の流れには下句略
今按此説を思へは此歌二位殿のよめるやうに聞ゆる也何れ歟是なる
御製は立田に注す千尋は釜に注す　龍顔は天鼓に注す
還幸　海人藻芥云還幸は帝王仙洞還御は親王執柄を云也云々
女院は柴の戸に　職原抄大全云女院は中宮隱居也天子母也天子母始居ニ中宮ー者曰ニ女院ー有ニ門號ー未レ得ニ中宮位ー人無ニ門號ー矣

西行櫻

西行法師は田原藤太秀郷九代末孫佐藤左衛門太夫藤原康清二男從五位下右兵衛尉憲清と號す從ニ大職冠鎌足公ニ十五世の後葉鳥羽院北面侍　四條家餘流母大監物源清經女也然るに憲清は武藝の達人歌道の名匠也嵩秘抄云西行上人そ此道の權者と覺え侍る天氣も常には無上レ達者と思召て柿本の再誕かなどのみ勅定有しにぞと云々保延ニ年八月有レ事遁世す號ニ圓位房ー後に改ニ大寶房西行ー建久九年戊午二月十六日に寂す「ねかはくは花の本にて春しなんその二月の望月の頃　とよみて果給ふ世に十五日といふはあやまり成へし　西行上人はいつくにて果給ふと云事證文いまた見ず按するに續草庵集雜云西行上人洛の双林寺にすみ侍りし頃二月十六日人々來て佛事行ヒ歌讀侍し事を思ひ出て「昔とそ又しるのはるゝ跡とひし其二月の春の面影　巳上此説をみれは西行上人東山双林寺にて果給ふとしれり　西行櫻は西山大原野勝持寺にあり　世に西行寺といふ又花の寺共いへり山家記云小鹽山麓に蘭若あり勝持寺と號る道風が額あさやかなり方丈の前に西行が植たると云つたふる老木の櫻ありくち殘れる枝のさすかに春をわすれぬ心はへもむかしおほえてなさけふかし云々　於ニ長嘯亭ー僅ニ

花宴ノ和歌之序云藤原爲景勝持寺の花狩まかりて見侍るに是ゟ劣らぬ夕映の色々に咲亂れたる梢の中にも西上人の愛たりし櫻ぞげに木高くふりて昔むせる云々　又世傳嵐山と松尾との間に西行が愛する所の櫻有此所に庵をかまへて住けり其後寺となる今眞言宗證菩提院と云也又小倉山二尊院の北に西行がすめる庵有山家集云小藏の麓に住けるに鹿の鳴けるを聞て「小鹿鳴小倉の山のすそ近み只ひとりすむ我心かな西行此謠に所はさかの奥なれ共と歌ふ何れ此あたりの事を云ならん　雲玉集云西行にし山に山居の時花に人あつまりきにけれは「花見にとむれつゝ人のくるのみそあたら櫻の科には有ける　かくよみしくれつかた花のもとに白髪の老人あらはれて「つみとかはいかゝあらしの花櫻なかむる人のわか深山木を　と返してうせにけり花の精なるへし云々此説にもとつきて此謠を作る成へし

頃まちえたる櫻かり山路の春にいそかん　櫻かりとはさくらをもとめありくをいふなり右近に注す

加樣に候者は下京邊に住居仕者にて候　下京邊とは四條通より下を下京と云也又四條より二條迄を中京といひ二條より上を上京と云也

東山地主の櫻地主は田村に注す庵室自然居士に注す

百千鳥さえつる春は物毎にあらたまりゆく　此歌は古今集春上に入題不知讀人しらすと有下句はあらたまれとも我そふりゆくと有　百千鳥は古今集の傳受なり萬葉仙覺抄云もゝちとりとは人のなへて云は鶯也と鶯はもゝさえつりの鳥といへはそれを云共ありされ共萬葉に吾門の榎の實もり喫(ハム)百千鳥此歌によりていへは僻事也只百千の鳥と云心也榎の實は秋ある物也又云それも心得られず只千鳥と云鳥のある也それをよめる成へしそれに千々と云心のあれはもゝといふ詞をそへてよめる也といふ云々

頃も彌生の空なれややよとゝまりて花の友　彌生は田村に注すやよとはしはしと云心歟彌生にやよと重て云り袖中抄云やよやまてとはやしはしまてと云詞也やと云詞をは世俗にはやよとも云也云々

夫春の花は上求本來の梢に顯れ秋の月下化迷暗の水にやとる

三伏の夏もなく灞庭の松の風一聲の秋を催す事
草木國土おのつから見佛聞法　右いつれも東北に
出たり
四の時は高砂に注す機謙は千壽に註す洛陽は野々宮
に註す
櫻花咲にけらしな足引の山のかひより見えし　古
今集春上に入貫之歌也留りは見ゆる白雲と有又咲
にけらしもと有詞書云歌奉れと仰られし時によみ
て奉れると云々　後水尾院詠歌大概抄云山のかひ
は峽の字山の間に水有を峽と云字注也爰は水少も
用にたらす山のあはひ也歌の心はきこへたる分也
山のかひより白雲かと見へて花の咲たる躰也只心
かにもしたてのさはやかに幽玄に面白躰也云々
足引の山は檜垣に注す
飛花落葉　柏崎に注す心の花そとは小町に注す悪サカ
は佛原に注す
捨てたに此世の外はなき物をいつくか終の住家なる
拾玉
是は古歌歟未考○あたなりと何か思はん草枕い
つくか終の住かなるへき
捨てすむ世の友とては花ひとり　杜子美詩山鳥山
花吾友于矣　意は別に友はなし我は花鳥を友とす
ると也
花見んとむれつゝ人のくるのみそあたら櫻の科には
有ける　玉葉集春下に入西行歌也五文字花見にと
有詞書云しつかならんと思ひ侍る頃花見に人々ま
うてきたりけれはと云々歌の心は人の來れるをい
とふ心なりあたらは俗にあつたらと云事也
古
◎此里に旅寢しぬへし櫻
木のもとに家路忘れて
花ちりのまかひに家路忘れて
新後拾
◎吉野山の下臥日數へて匂
今宵は花の下臥して
ひそ深き袖の春風道命法師
埋木の人しれぬ身と沈め共心の花は殘けるこそや
西行歌といへり何れの集にあり哉未考
上人は遊行柳に注す非情無心は殺生石に注す
浮世と見るも山と見るも只その人の心にあり
浮世とは在家の心山とは山居の躰也心をすまし佛
道を行に誠の人は里にても山にても何ぞ心のすま
さらんうき世と見山と見るは只その人の心のひら
けざるが故也◎風心たにとまらはすまん山里にのか
れえぬ世を花に任て爲定

老木の櫻　　龜山殿七百首●今ぞ見る谷の老木の櫻花風たにしらて春やへぬらん

花物いはぬ草木なれ共科なきいはれをいふ花の陰唇を動す也　此詩雲林院に注すいふ花は夕花共木綿花共書也小鹽に注す爰はいはれを云とつゝけたりいふとゆふと音同じといへ共假字相違せり

草木國土皆成佛芭蕉に注す値遇盛久に記す

花笑二檻前一聲未レ聽鳥啼二林下一涙難レ盡　是は百聯抄解之詩也但本文には涙難レ看と有檻前とは欄干の前也笑とは花咲也花の咲は人の笑ふに似たれ共花に聲なきと也詩ノ意は花は咲共聲なし鳥は鳴共涙は見えざると云心也

朝踏二落花一相伴出暮隨二飛鳥一一時歸　此詩白氏文集三十三にあり言は朝に花を踏て李二賓客と云知音と伴ひ出夕には飛鳥にしたかひておなしくともなひ歸ると云心也

九重にさけ共花の八重櫻　九重は田村に注す●金九重に久しく匂へ八重櫻のとけき春の風にしらすや實行

近衛殿の糸櫻　近衛殿とは上立賣南新町西五辻北近衛辻子東ニ有レ櫻御所ニ近衛殿別第也今爰にうたふ所是なり　私云近衛殿とはいつれを指ていふそ按するに古今傳授の書の奥書信尋公を糸櫻殿といへりしかあれは爰にいへる近衛殿は近衛信尋公をいふ歟尋ぬへし　童蒙先習云たをやかなるもの近衛殿の糸櫻云々

見渡せは柳櫻をこきませて　此歌盛久に注す

錦さんらんたり　粲爛はあきらかにかゝやく也韻會云粲爛鮮明且衆多之貌矣　說文曰爛孰也明也矣源順題ニ花色浮ニ水上ニ序云蜀人濯レ文之錦粲爛矣班固典引云備哉粲爛眞神明之式也矣

千本の櫻を植置其色を所の名に見する千本の花盛り千本櫻を植たるが故に千本と名付ると云事本說更になし千本の櫻を植るとは嵐山の事也昔清和の御時吉野の櫻をあらし山へ千本植させ給ひし也〇新千嵐山是も吉野やうつすらん櫻にかゝる瀧の白糸　後宇多洛西千本は世傳日藏上人夢の告に依て延喜帝追善ノ爲に此所に千本の卒都婆を立給ふ依て千本と名つくといへり但釋書を見るに萬本の卒都婆を立るとあれは是も相違せり　今按北野天神託宣云

大内北野一夜生ニ松千本一其所レ供社以可レ崇ニ天滿天神ニ云々依レ之此所を千本と名付る歟尋ぬへし

毘沙門堂の花盛り　毘沙門堂は今搭壇内有ニ毘沙門町首北二町一是世に毘沙門堂の花盛といふは此寺の事也其舊跡歟寛文年中門主公海僧正於ニ北山科地ニ被ニ再興一也　應仁記云毘沙門堂光明峰寺攝政御建立百櫻うゆると云々　明月記云貞永二年二月廿一日毘沙門堂花半開矣　後愚昧記云應安二年二月十九日向ニ毘沙門堂ニ一ニ見花矣一

四王天の榮花も是にはいかてまさるへき　上に毘沙門堂とあるゆへに四王天とつゝけたり四王天は欲界の六天の最初也一切の天衆其樂み多し三界義曰四大天王一東方提頭頼吒天王此云ニ持國天一二南方毘留勒叉天王此云ニ增長天一三西方毘留博叉天王此云ニ廣目天一四北方毘沙門天王此云ニ多聞天一矣持國天梵音云ニ提多羅吒一大論曰秦言ニ治國一主ニ乾闥婆及毘舍闍一矣　光明疏曰上升之元首下界初天居ニ半須彌東黄金埵一王名ニ提頭頼吒一又翻ニ安民一矣　增長天梵音云ニ毘流離一大論云秦言ニ增長一主ニ鳩槃荼及薜茘多一矣　光明疏云南瑠璃捶王名毘留勒叉一又翻ニ免離一矣　廣目天梵音云ニ毘流波叉一大論云秦言ニ雜語一主ニ諸龍及富樓多那一矣　光明疏云西白銀捶王名ニ毘留博叉一又翻ニ非好報一又翻ニ惡眼一矣　毘沙門天は鞍馬天狗に注す

上なる黒谷下河原　上なるとは下河原といはんとてかくいへり黒谷は愛宕郡岡崎の北也淨土宗四箇の一本寺也名ニ金戒光明寺一法然上人始住ニ比叡山西塔黒谷一其後此寺再興弘ニ淨土專念之宗一故是稱ニ新黒谷一又號ニ紫雲山一古紫雲起レ自ニ斯山之石上一其石于レ今在ニ西雲院中一金戒光明寺は上人再興し給ふ以前よりある名なり　下河原は永觀堂門前の西半町計の地を云也

昔遍昭僧正の浮世をいとひし花頂山（クヘチヤウサン）　遍昭は雲林院に注す花頂山は愛宕郡也在ニ粟田山西靑蓮院東一今粟田口天王の社の東山の麓是古へ花頂院の舊跡といへり應仁記云花頂山は唐の天台山を移して嶺にも尾にも雲の端の咲うづもれて夕日影豊に花の照をひて云々　爰に遍昭僧正の浮世をいとひし花頂山とうたふはあやまり也遍昭が浮世をいとひしは花山也花山と花頂山とは別也花山は在ニ清閑寺

山東ニ寺元慶寺とも云寺有又花山寺とも云今花山村の北に小堂残れり拾遺抄云花山は山階にあり元慶寺と云御寺たてられたり花山院は彼寺に御幸ありて御出家あり仍號ニ花山法皇ニ遍照僧正も住ニ彼寺ニ仍號ニ花山僧正ニなり云々 大木「咲と聞てのぼりやすくそ思ひやる予向る法の花の山寺

鷲のみ山の花の色枯にし鶴の林まで　　鷲のみ山は靈山を云也田村に注す鶴の林は双林寺にあり一説鳥部野をも云也佛入滅の時双樹かれてさなから鶴林の如し此義に依て鶴のはやしと云也涅槃經云序品云爾時拘尸那城娑羅樹林變白猶如ニ白鶴ニ矣

清水寺の地主の花　　田村に注す

松吹風の音羽山ゝ　同　○夕されは松吹風の音羽川 後集 あたりも涼し山の下道 後西園寺入道

嵐山戸難瀬（トナセ）に落る瀧津波　　嵐山は在ニ大井川南法輪寺西ニ　松尾鎮座記に荒子山と書麓より十町計登れは千光寺と云寺あり號ニ大悲閣ニ本尊聖観音御長貳尺五寸角倉了誓坊開基也則了誓の木像あり當山絶頂に香西又六郎が城の跡有又千光寺より二町計前道の左に昔し芳野を移されし時勸請する藏王堂の跡あり士人權現祖とよぶ也　戸難瀬を藻塩草云となせの瀧山城大井川の上也云々　今案戸難瀬の瀧は大井川の内に有と見えたり古歌の意も是に等し或説云戸難瀬山は嵐山の別號也云々○ 續古 嵐吹山のあなたの紅葉はを戸難瀬の瀧に落してそ見下る 經信

大井川ゐせきに雪やかゝるらん　　百萬に注す○ 續後拾 大井川ゐせきの水や氷るらん早瀬にをしの聲下るなり 家隆

春宵一刻價千金花に清香月に影　　田村に注す

小倉の山陰に　　小倉はさか二尊院の後の山なり○ 新千 月の入跡は小倉の山陰にひとりさやけき小男鹿の聲 法印辨叡

花を踏ては同しく惜む少年の春　　二人靜に注す

翁さひて跡もなし　　實盛に注す

朝顔

朝顔とは源氏の卷の名也花鳥餘情云源氏君の歌に「見し折の露忘られぬ朝顔の花の盛りは過やしぬらん　又源の詞に枯たる花ともの中に朝顔のこれ

かれはいまつはりと云々依而以二歌并詞一爲二卷名一
云々扨朝顔の齋院と申せしは桐壺の帝の御はら
から桃園の式部卿の宮の御女也賀茂の齋にそなは
り給ふ事榊の卷に見えたり御父かくれ給ひし事は
薄雲の卷にあり是によりて齋院御服にており居給
ひ桃園の宮にまし〳〵きはしの齋に居給ひし時よ
り源氏君思ひかけ給ひ齋院おり居給ひてさま〳〵
心をつくし給へ共終につれなくてやみ給ひし源氏
一部の中の貴女なり後に御髮おろし給ひし事若菜
の卷に見えたり

加樣に候者は本は都の者にて候ひしが親におくれし
愁歎により　　都の字義は高砂に記す愁歎とはうれ
へなげく也　善導定善義曰曠劫來流轉六道盡皆經
到處無二餘樂一唯聞二愁歎聲一矣

身をかへて後も待見よ此世にて親をわすれぬ　　此
歌朝顔卷に源氏君の歌也下句は親をわすれぬため
し有やと故院の御時に召つかはれし女に源內侍と
て有年の程より心わか〳〵しき人なりし源氏君た
はふれ給ひし事有年老て女五の宮に尼になりて侍
りし此時齋院おり給ひて桃園の女五の宮にあい住
し給ひし時源氏とふらひ給ひし折此內侍にあい給
ひて御物語の次てに內侍の尼「年ふれと此契こそ
忘られね親のおやとかいひし一言　といひし返歌
に源氏のよみ給ひし歌也

迷はぬ法の道とへは本のさとりの名にしおふ　名に
しおふは江口に注す○續千うけかたき身をしほりてそ
迷ひこし本のさとりの道はしりける法印俊譽

一條大宮佛心寺とかや申候　佛心寺は號二平安山一
寅庵四六後集云號二桃園山佛心寺一矣　和漢禪刹次
第云平安山開山無象和尙法海禪師塔曰二正宗一庵曰
塔名二三會一中石溪左無象右大林佛殿云二覺雄寶殿一
寢翰也矣桃園を後に寺となし佛心寺と名つく今は
絕たり并花云桃園の宮は今の佛心寺其跡也云々
桃園は拾芥抄云世尊寺南保光卿家來行成傳二領之一
矣瀛涯入楚云桃園在所一條北大宮西一條面中許世
尊寺南當時枸杞町黃師氏大納言宅也保光中納言傳
領仍號二桃園中納言一矣○草根花さけは錦かけほす桃園
の寨の古宮人しなければ一條大宮は拾芥抄云一
條號二桃花坊一矣　大宮は或說に大宮通の上今宮の
地に大宮權現とて神ましますに大宮通と名つく

といへり此説よろしからすむかし大内裏の時東大宮西大宮とて二筋有今の大宮通は東大宮也大宮とは内裏の別名也其通路たるが故に大宮と云也　今案朝顏の齋院果給ふ事源氏物語には是なし但此謠に朝顏の情此所より出て僧と問答せし事を作るは應仁記云一條大宮に圓興寺佛心寺此寺と申は賀茂齋院に出給ふ朝顏の更衣の墳あり云々此義に本付てかく作る歟

殊に萩槿（ヘギアサガホ）の今を盛りと咲亂れて候　萩は爾雅集注云萩一名蕭矣　楊氏漢語抄云鹿鳴草矣　國史云芳宜（ギ）草矣　辨色立成云芽矣　槿は本草綱目卷之三十六載二木槿一一名曰二朝開暮落花一又曰レ蕣又曰二日及一又曰二藩籬草一又曰レ椵又曰レ櫬時珍曰此花朝開暮落故名二日及一曰レ槿曰レ蕣猶二僅榮一瞬之義一也矣又曰槿小木也其花小而艶或白或粉紅有二千葉者一五月始開矣　今案右何れもあさかほとはよめ共皆むくげの事也古來よりとなへあやまるものならし多識編云牽牛子和名爲二阿左可保一木槿和名爲二牟久計一矣　又奥に記す

秋萩をおらでは過じ月草の花摺衣露にぬるとも

新古今秋上に入權僧正永緣の歌也增抄云月草とは露草と云あほ花共云也靑花にてすりつくる故露がかゝりてはぐる也たとへての大事の摺衣ぬれてはぐるとも秋萩を一枝おりて歸らんとなりすきじとは行過しと也云々　詞林采葉云月草は百夜草と云百夜花咲ゆへに此名ありと所謂鴨頭草鷄冠草唐棣花韓藍花翼酢花此等皆月草とよめり云々古今榮雅抄云月草は露草也月の光りに咲ゆへに月草と云也云々

なふ〳〵御僧其萩の露にてさふらはず共所に付たる古歌は有べきぞかし紫のゆかりの有て秋萩をおらては過しと宣ふやらん　此僧佛心寺に詣て秋萩をおらては過しといへる古歌をよめるを朝顏の情あらはれ出て云樣その萩の歌にてさふらはす共此所に付たる朝顏の古歌をよみ給はぬそと也紫のゆかりとは總て紫にはゆかりといへる諷詞あり然るに源氏物語は紫式部が作也且又萩は紫色の花也是に依て紫のゆかりの有て秋はきをおらては過しと云古歌を宣ふらんと僧の心を察していへり　紫のゆかりと云は古今集雜歌上よみ人不レ知「紫の一もと

ゆへにむさしのゝ草は見なからあはれとぞ見る紫雅抄云紫の一もとゆへにむさしの　草は皆なからむつましきと云たとへにて我思ふ人ひとりゆへにそのゆかりまてあはれと思ふと也紫は女にたとふる草也草のゆかり紫のゆかり一もとゆへなとよむは此歌よりはしまる也むさしのとさしたるは紫の此野におほくあれは也云々　河海抄云紫式部は一條院の御めのとの子也上東門院へ参らせらるゝとて我ゆかりのもの也あはれと覺しめせと申させ給ひけるによりて此名あるか又武藏野の義也共いへり云々　私云武藏野の義也とは此歌をいへり一首の內ゆかりと云詞はあらね共心は紫の一もとのゆかりにてむさしのゝおほくの草はみなむつましきと也むさし野は紫の名所也

咲花にうつるてふなはつゝめ共おらて過うき今朝の槿　夕顏卷に源氏の歌也六條の御息所の方にとまり給ひて翌朝歸り給ひし時中將の君とて御息所の官女にたはふれ給ひて源氏のよみかけ給ひし歌也御息所を置て外に心をうつすと云名はつゝましけれ共見すくしかたき中將の君ぞと云心也

ともてはやさるゝも有物をたゝ萩のみを御賞翫の謠の前後此所にてよく聞えたり僧のよめる古歌におらては過しとならはおらて過うき今朝の槿といへる古歌も有物を只萩のみを御賞翫あるはうらめしきと也

手向草　海人に注す

一句をも聽聞申佛果をえんと思ふゆへ　一句とは聖敎の一句也法師品曰聞妙法華經一偈一句乃至一念隨喜者我皆與授記當得阿耨多羅三藐三菩提矣

唐朝の古も帽上の紅槿とて紅の槿を簪の上に餝つゝ曲をなしつるためしあれは　唐玄宗皇帝の兄寧王の御子に汝陽王李璡と云人帽を載き羯鼓を打玄宗自紅槿を摘で帽の上に置く音曲終れ共花は墜さると也見羯鼓錄全文略　東坡詩汝陽真天人絹帽著紅槿と作る是也

狂言綺語　源氏供養に記す

いさむる神のあらやせん　○戀しくはきてもみよかし千早振神のいさむる道ならなくに

霧の籬に立かくれうせにけり　朝顏卷に源氏の歌

に見し折は露わすられぬ朝顔のとよめるを斎院の返しに「秋はてし霧の籬にむすほゝれ有か無かにうつる朝貞　と云歌を爰にふくませたり新古今增抄云霧の色とはかきは物をへだつるものなれは霧も物をへだつる故にかく云也云々

其槿の色深き花のゆかりを詠ん　　斎院の事をいへり青き朝貞の色こきは少し紫色也仍て花のゆかりといへり

抑此寺と申は桐壺の帝の御弟に式部卿と申せし人の住給ひし桃園の宮の御舊跡　　此寺とは佛心寺也委く上に記す桐壺の帝とは延喜になぞらふる式部卿は桐壺の御弟槿の斎院の父也桃園と云所に住給ふ故に桃園の式部卿とは申也秋の末に果給ふ事薄雲の巻に出たり是物語の趣也　朝貞巻云なか月になりてもゝそのゝ宮にわたりたまひぬるを云々　河海抄に實に二品兵部宮敦國と云有寛平第四の御子延喜の御弟也延長五年九月七日に薨す是を彼物語の式部卿になぞらへたり大和物語に桃園の兵部卿宮うせ給ひつゝ御はて長月晦日にし侍ると云々是よく相似たり又醍江に桃園は保光中納言傳領仍而號㆓桃園中納言㆒今按敦國親王の事歟と云々いつれか是なる　式部卿に職員令云式部卿一人掌㆘内外文官名帳選叙禮義版位位記校㆓定勲績㆒論㆑功封賞朝集學校策㆔試貢人㆒祿賜假使補㆓任家令㆒功臣家傳田事㆖矣　百寮訓要抄云式部卿に第一の親王是に任す更によのつねの人臣は任せぬ事也親王も宿老の人極官にて有へし又云内外の文官の事をつかさどる兵部は武官をつかさどる式部は文官をつかさどる也云々

其御息女のまします賀茂の斎に備りて槿の斎院と申也　槿の斎院は槿の巻に賀茂のいつきに立給ひて薄雲の巻に父宮果給ひ其御服により斎院をおり給ひ桃園に住給ふ也賀茂の斎院の事定家に注す息女の字喉井備に注す

光源氏は折々に露の情をかけまくも忝と神職にかことをなしてなびかず　此かことかこつけ也斎院なるが故に神職にかこつけてなびき給はず光源氏は葵上に注すかけまくもは難波に注す

たはふれにくゝ紫の色にくたきし御心も　斎院は貞心をたて給ふ故に源氏のたはふれにくき也紫は女

に比して齋院の事をいへり紫に根をくたき物を染る故に色に心をくだくとつゝけたり　菅三品詩蘭蕙に嵐耀矣　○秋風の紫くたく草村に時うしなへる袖ぞ露けき

△牽牛花　牽牛子其云あさかほと訓す古今集にけにごしとよめる是也　陶隱居本草注曰牽牛子此出於田舍凡人取之牽牛易藥故以名之矣　下學集曰宋人詩權花籬下黯秋事早有牽牛上竹來以此詩意見則權舜與牽牛各別也　牽牛花本之名藤生花狀如逼豆矣

遊子伯陽といひし人偕老を契る事二八三四の旬也其に玉兎を愛して　鴛鴦記云曩に夫婦あり夫を遊子といひ婦を伯陽といふ偕老をちぎる事子は二八の候陽は三四の旬也と此文の心は遊子十六歳伯陽は十二より夫婦となりて互に心さし切也ともに月を愛する事限なし夕には月の出る事をまちて里にゆき曉は月の入事をおしみて高峰にのほる伯陽九十九にして死せり遊子深くなけきて月をかたみと見る程にある夜伯陽陽にのりて空をとひ行けれは遊子ことになけきて百三にて死せり天星となりて烏にのりて天をとひ行て銀漢にのそみて河をへたてゝ居たりきされとも帝釋毎日此川にて水をあみ給ふ故に水のけかれありて渡る事をゆるされすしかりといへ共七月七日に帝釋善法堂へ御參の日にて水をあみ給はすして此川を渡る事をゆるさる年に一たひあふといへ共人間の爲には一日一夜也此時烏と鵲と羽をならへて橋として彦星織女をとをす也是を鵲の橋と云也云々　玉兎は月の異名也玉は美稱の詞也張衡靈憲曰月者陰精之宗積成爲獸象兎形矣　陸佃云兎吐也明月之精視月而生故曰明視矣　月を兎と云事未曾有經にも說り略之　偕老は楊妃に注す

牽牛織女の二星　晋傅玄擬天問曰七月七日牽牛織女會天河矣曹植九詠注曰牽牛爲夫織女爲婦織女牽牛之星各所一旁七月七日得一會同矣文選張銑註曰牽牛織女二星名隔天河相望婦人自恨與夫離絕述異記曰天河之東有美麗女人乃天帝之女機杼女工年々勞役織成雲霧絹縑之衣辛苦殊無歡悅容貌不暇整理天帝憐其獨處與河西牽牛之夫婿自後竟廢織紝之功貪歡不歸帝怒責

歸二河東一但使下一年一度與二牽牛一相會上矣

烏鵲紅葉の橋　玄旨抄云紅葉の橋は鵲の羽をならべて七夕を渡し侍る是をよめり羽の橋ともいへり曉の別れをかなしむ泪に此羽紅に染たるを烏鵲紅葉の橋といへり云々冷泉流伊物注云織女七月七日にあふに紅葉の橋を渡すと云は是は實の紅葉には非ず七夕のあかぬ別れを歎く涙の紅なるが鵲の羽にそみて紅なるを紅葉の橋と云也是はさぎ鳥の羽をそみて紅なるを云也さき烏羽をならへて橋となす也云々　淮南子云烏鵲塡レ河而渡二織女一矣○天の河秋を契りしことの葉やわたる紅葉の橋となるらん　新十　國道

朝開暮落渾閑事祇要人知二色是空一　是は事文類聚後集僧紹隆色別是空の意を作れる詩なり人知二色是空一とよむへし朝開暮落は槿の一名閑事とは徒事とよむ人間しはらくさかゆるも此槿の花のことし色にあらはれたるもの皆空なるといふ心也

色則是空　山姥に注す今按此所へ色則是空の文を出せる心は槿巻に齋院の歌に「秋果て霧のまかきにむすほゝれあるかなきかにうつる朝顔」孟津抄にあるかなきかとは世間の無常を槿上にて色則是空を觀し給ふとあり此義に依てかくつゝけたると見えたり

朝菌不レ知二晦朔一蟪蛄不レ期二春秋一　是は在二莊子逍遥遊篇一本文には不レ知二春秋一と有註曰朝菌犬芝也亦名二日及一生二於糞土一暮生見レ日則死彼但知レ有二朝暮一而已安知レ有二晦朔一也蟪蛄寒蟬也春生夏死夏生秋死不レ見二四時之全一矣　淮南子注曰朝菌朝生暮死之蟲也生二水上一狀似二蠶蛾一矣　朝菌は草の類と虫の名と二義ある歟尋ぬへし蟪蛄は蟬の類也徒然草云夏の蟬の春秋をしらぬも有そかし云々此事也

千年の松も終るは枝くちぬ　白氏文集曰松樹千年終是朽槿花一日自爲レ榮矣　此槿花もむくけの事也

三千年になるてふ桃園もなし　○三千とせになるてふ桃の今年より花咲春に逢にける哉　拾　みつれ　童蒙抄云此歌拾遺第五にあり延喜十三年亭子院歌合に躬恒かよめり此時上の五文字みちよへてとよめりみちとせといふへきをみちよとよめりとてまけた

る也と云々　私云拾遺撰定の時みちとせとなおし
いれる歟　園を今此桃園になそらへて今はなきと
也　漢書云武帝時一足青鳥來帝前止東方朔曰當
來西王母隱身而王母來奉桃實二七枚是三千
年一實上界果隱屛風後者三盜食之耳矣
夢の中なる夢の世そや　莊子曰方其夢矣不知其
夢也夢之中又占其夢焉覺而後知其夢也矣○
旅の世に又旅ねして草枕夢のうちにも夢を見るか
な家長
草木國土悉皆佛心の此御寺は　佛心寺を兼ていへ
り草木國土の文は法花の肝要也　芭蕉に記す
野分の風　松風に注す

千壽

三位中將重衡は生田の森の副將軍にて有しを一の
谷にて庄四郎高家生捕て義經相具し上洛す京都
逗留の間黑谷法然房を請じ受戒し給ふ壽永三年三
月十日梶原平三景時に具せられ鎌倉へ下られける
鎌倉にては狩野介宗茂に預られて去年より伊豆國
におはしけるが南都の大衆しきりに申ければ源三
位入道の孫伊豆藏人太夫頼兼に仰て終に奈良へ渡
されける文治元年六月廿三日於木津川邊誅せら
るゝ也平家物語取意　東鑑云元暦元年四月廿日本三
位中將依武衛御免有沐浴之儀其後及秉燭之
期稱爲慰徒然被遣藤判官代邦道工藤一﨟
祐經幷官女一人號千手前等於羽林方剰被副送竹葉
上林已下羽林殊喜悅遊興移剋祐經打鼓歌今
樣女房彈琵琶羽林和横笛先吹五常樂爲下
官可爲後生樂由稱之次吹皇麞急謂往生
急凡於事莫不催興及夜半女房欲歸羽林暫
抑留之而盃及朗詠燭暗數行虞氏淚夜深四面楚
歌聲云々其後各歸參御前武衛令問酒宴次第給
中略武衛又令持宿衣一領於千手前更被送遣其
上以祐經邊鄙士女還可有其興歟御在國之程
可被召置之由被仰云々祐經頻憐羽林是往年
候小松内府之時常見此羽林之間于今不忘
舊好歟已上
是は鎌倉殿の御内に狩野介宗茂にて候　鎌倉殿は
頼朝卿を云鎌倉にまします故に鎌倉殿と云也鎌倉

は飼に注す頼朝卿は舟辨慶に注す　將軍家譜云治承四年十二月鎌倉大倉郷新造亭有二移徙儀一出仕侍三百十一人東國見二其有道一推爲二鎌倉主一矣　狩野介宗茂伊豆國住人也　二階堂系圖云宗茂狩野介茂光子也伊東祐親甥也矣　一説云不比等御子治部卿乙麿後藤工藤介茂光子也矣

抑も相國の御子重衡卿は此度一の谷の合戰に生捕られたまひ候を某預り申て候　相國は太政入道清盛公を云也佛の原に注す一の谷は忠度に注す某の字は鉢木に注す　公卿傳云本三位中將重衡太政大臣清盛公五男母贈左大臣平時信女號二從二位時子一矣

東鑑云壽永三年四月八日本三位中將自二伊豆國一來二着鎌倉一仍武衛點二郭内屋一宇一被レ招二入之一狩野介一族郎從等毎夜十人令二請番一守二護之一元暦二年六月九日被レ渡二源藏人太夫頼兼一同廿二日被レ遣二南都東大寺一依二衆徒申請一也明廿三日殞レ頸文略

盛衰記云南都の舊き御堂の後にて潜に中將の首を落す友時來て空き身を輿にのせて日野におはしける北の方へ歸る首は衆徒の手へ渡されける一説には奈良坂にて首斬其後般若野の道のはたに大卒都婆を立て張付に是をさらすと云々　重衡を生捕事は平家物語に一の谷にて庄の四郎高家生二捕之一と有　盛衰記には庄三郎家長生捕と有　東鑑云壽永三年二月七日平氏一谷敗軍時棄レ馬出二一谷之舘一或棹レ船赴二四國之地一本三位中將重衡於二明石浦一爲二景時家國等一被二生虜一矣　長門本平家物語云一の谷にて梶原平三景時はとく／＼御馬に召れ候へとて我乘たる馬に重衡を打乘申てさしなわにて鞍の前輪にしめ付て我身は乘易に乘て先に立てぞまかりける文略

朝敵の御事とは申なから　朝敵とは平家の一族を指て云也　朝とは禁中也湯谷に注す　東鑑云廷尉云朝敵追討使暫時逗留可レ有二其恐一不レ可レ顧二風波之難一矣

彼千壽の前と申は手越の長が娘にて候　千壽の前は駿河國手越の長者が娘也長門本には白川の宿の長者か娘と有長の字義は班女に記す　東鑑云文治四年四月廿五日於二鎌倉一千壽前卒去年廿四其性太穩便人々所レ惜也前左三位中將重衡參向之時不慮相馴彼上洛之後戀二慕之一朝夕不レ休憶念之所レ積

若爲二發病之因一歟之由人疑レ之矣　盛衰記云平六兵衛が姪に伊王の前と云女も千壽と共に中將にかしつき參らする也中將果給ひて後三年の遠忌に暇を乞つゝ尼になり千壽は廿三伊王は廿二一所に庵室をむすび往生をいのりける文略　重衡千壽の前と酒宴の時の盃也とて相州の敎恩寺にあり大さ今の平皿に似て內外黑塗內に梅花の蒔繪有

琴の音そへておとづるゝ是やあづまや成らん　東琴をいはんとて是やあつまやとはいへり所から東路なればかくつゝけたりあづまやのやの字は助字と知へし和琴を東琴共日本琴共云也琴は羽衣に注す和琴一名東琴體似レ箏而短小有二六絃一萬葉集云梧桐日本琴一面矣　河海抄云和琴は二神作らしめ給ふと云々　無名抄云和琴は元弓六張を引弁へ用けるが後に琴に作ると云々　卜部兼邦百首抄云昔弓六張をはりて一つにゆひ合せて菅を組てそれにて引けり是をすがゝきといふ云々　花鳥餘情云和琴は伊弉諾伊弉冊の二神の御代よりいてきたる物といへとも日本紀なとにはみへ侍らす又天の岩戸に天照太神のこもり給ふ神宴よりいてきたるともいへり最初は弓六ちやうをならへてつるをうちならしゝより和琴と云物はつくり出したるともいへり今の代巫の口よするとて弓のつるをうつはかゝる事よりおこれるにやと云々　詞林采葉云和琴者依レ爲二本朝之歌器一云二拍子調一嵯峨天皇此曲傳二尙侍廣井女王一其後中絕而承和御門召二慈賀善門於階下一傳二其曲一給矣○東琴春の調をかりしかはかへしものとは思はさりける中務親王

それ春の花の樹頭にさかへ秋の月の水底に沈むも　是は世上の盛衰重衡の身の上を云也　秋夜長物語云夫春の花の樹頭にのほるは上求菩提の機をすゝめ秋の月の水底に下るは下化衆生の相をあらはす云々

陸奥のしのふに堪ぬ雨の音降すさひたる折しもは　陸奥にしのふの郡有にてかくつゝけたり陸奥は自然居士に注す長六文云雨降すさむは雨の晴たるを云也云々○新古誰すみて哀しるらん山里に雨降すさむ夕暮の空西行

御機嫌を以て申さうずるにて候　機嫌と云語はよきとかあしきとかいはねば義にかなはす機嫌の二

字は共にそしるとよめり　楞嚴九曰詐-露人事-不レ避-譏嫌-矣　涅槃經曰具-足智惠-預見-譏嫌-矣

身は是槿花一日の榮　朝顏に注す

命は蜉蝣の定めなきに似たり　淮南子曰蜉蝣朝生暮死而盡-其樂-矣　本草綱目時珍曰蜉蝣一名渠略似-蛣蜣-而少大如レ指頭身狹而長有レ角黄色甲下有レ翅能飛夏月雨後叢-生糞土中-矣

心は蘇武が胡國にとらはれ岩窟の内にこめられて君邊を忘れぬ志それはやうりがはかりことにて敵を亡し舊里に歸る　前漢書列傳二十四曰蘇武字子卿杜陵人武帝時以中郎將時レ節使-匈奴-單于欲レ降之迺幽レ武置-大窖中-絶不-飲食-天雨レ雪武臥齧雪與-旃毛-幷咽レ之數日不レ死匈奴以爲レ神乃徙-武北海上-使レ牧レ羝々志乳乃得レ歸武杖-漢節-牧レ羊臥起操持節旄盡落昭帝即位數年匈奴與レ漢和親漢求-武等-匈奴詭言-武死-常惠教-漢使者-言天子射-上林中-得レ鴈足有レ係-帛書-在-某澤中-由レ是得レ還拜爲-典屬國-秩中-二千石-賜-錢二百萬公田二頃宅一區-武留-匈奴-十九歲始以-强壯-出及レ還鬚髪盡白至-宣帝時-以-武著レ節老臣-令レ朝-朔望-號稱-祭酒-年八十餘卒後圖-畫其人於麒麟閣-法-其形貌-署-其官爵姓名-已上文略今按やうりかはかりことゝ云事未レ知是は廣利が事を誤てやうりと云歟史記匈奴傳に蘇武胡國にある内に漢より廣利と云者に三萬騎そへて夷一萬餘の首を取と有但はかりことを以て蘇武を漢へ歸すと云事見えず尋ぬへし

縲絏の責をうくる　論語公冶長篇曰雖レ在-縲絏之中-朱注曰縲黒索也絏攣也古者獄中以-黒索-拘-攣罪人-矣　絏字又作レ紲韻會云紲長繩矣

琵琶もたせて參りたり　琵琶者　釋名曰推レ手前曰レ琵引レ手却曰レ琶故因以名矣　唐書樂志曰自レ下逆鼓曰レ琵自レ上順鼓曰レ琶矣　文獻通考云傳玄琵琶賦曰漢遣-烏孫公主嫁昆彌-念-其行道思慕-故使-工人裁-箏筑-爲-馬上之樂-今觀-其器-中虛外實天地象也盤圓柄直陰陽叙也柱有-十二-配-律呂-也四絃法-四時-也矣

其時十手立よりて妻戸をきりゝと押ひらく　きりゝは轔と書妻戸は葵の上に注す　巨門本云湯屋の

妻戸をほそめに明て御みあか參候はんと申ければ
中將こはいかにとあきれ給ひて是は誰そと有ければ
は女申す兵衛佐殿より參らせられて候と云々
御簾の追風にほひくる・　薰物の匂ひ也　源氏初音
巻云御簾の內の追風なまめかしうふき匂はして云
々
花の都人にはつかしながら見々えん　花の都は花
洛共云田村に注す　見みえんとはたがひに見つ見
られつするを云寶物集云娑婆世界の親子親類は如
何すへきと哆吽べ共生を隔つれは見みゆる事なく
して應訪者なし上下略　私云古き物語にたかひに見
もし見へられてといへる詞多し是を略して見みえ
んなとつかふなるへし
昨日あからさまに申つる　匠材集云あからさまは
假初なる事也白地と書云々又あらましの心也　又
しはらくの儀也世に明かなるやうに思ふはあやま
り也左傳に昨木玄虛海賦に暫江文通上書に蹔日本
紀に天折(アカラサマ)𠎝忽色葉字類抄に欻忽(アカラサマ)𠎝閑と書中○山里に
あからさまなる都人さひしとやみん住うからぬを
又思はすも父命(ブメイ)により佛像を亡し人種(ニンジュ)をたちし現當
の罪を果す事前業より猶はつかしう社候へ　百練
抄云治承四年十二月廿八日藏人頭重衡朝臣追二討南
都一中略今日東大寺興福寺堂舍僧房不レ殘二一字一悉以
燒拂佛法之滅亡偏在二此時一矣　私云南都又一味し
て平家の讐と成ゆへに重衡に仰て南都をせめ佛像
をやき數多の人をころす也現當の罪とは現在當來
の罪也共に今此むくひを見るそと也百練抄云養和
元年閏二月四日入道太政大臣薨天下走騷日來有二
所惱一身熱如レ火世以爲下燒二東大興福一之現報上矣
盛長私記云大庭平太景義云卿今度重衡卿を衆徒に
被レ下條本意にあらさる歟其故如何となれは奈良
炎上の事は重衡放火するに非す大衆の無慙無愧嗔
恚の猛火の燒所なれは重衡の罪とすへからず文略
空蟬の唐衣は山姥に注すきつゝなれにしの歌は杜若
に注す水行川の八橋は同杜若に注す
かけぬ情の中々に　かけぬ情とは眞實なきを云也
中々とはなましゐなと云詞にかよへり
今日の雨中の夕の空御つれ〴〵を慰めんと　つれ
〴〵とは閑靜なる義也但爰に云つれ〴〵はさひし
き義也伊物眞名本に徒然と書明心寶鑑云得失榮枯

纔在レ天機關用盡也徒然矣　瓮經新記云立レ今歴レ古必不二徒然一矣　扶桑隱逸傳には寂寞の字をつれ〴〵とよませたり○つれ〴〵と雨降暮す春の日は常より永き物にそ有ける（玉葉）

樽を抱きて參りつゝ　禮記曰禮始二飮食一爲二汗樽一杯飮注曰堀レ地爲レ樽矣　菅家文草云浮レ酒滿レ鐏矣

手先さへきる盃の　　養老に注す

羅綺之爲二重衣一妬二無レ情於機婦一只今詠し給ふ朗詠は忝も北野の御作此詩を詠せは聞人迄も守るへしとの御響なり　菅家文章第二早春内宴詩序曰羅綺之爲二重衣一妬三無レ情於機婦一管絃之在二長曲一怒レ不レ關於伶人一矣　菅家御作也本朝文粹第九にも入又和漢朗詠集にも有依て只今詠し給ふ朗詠はとはいへり平家物語云三位中將此朗詠をせん人をは北野の天神毎日三度かけつて守らんとちかはせ給ふと也云々長門本同レ之　右序の心は羅綺はうすもの重衣は重き衣也さはかりうすき衣なれとも此美女の爲には重き衣也と思ふ也機婦とは機をる女此美女の氣力なき心には厚く重く情なくもおれる衣哉と機織女を妬と也長曲とは管絃の長く久しき事也是も此美女の舞なとまふに氣力なけれは音樂の長く終らざる事をいきとおり思ふ也伶人とは樂人也　和漢朗詠集は四條大納言公任卿之撰する所上下卷有昔はふしをつけてうたひけると也和漢とは唐土の詩吾朝の詩并に和歌を集め撰ひ給ふ故に和漢といへり朗詠とは此集に秀逸の詩歌あれは昔人是を詠む依て朗詠と云　文選天台山賦曰朗二詠長川一善註朗猶二清徹一也又李周翰註朗高也或抄云大納言公任卿は大二條關白教通公を聟にとり此朗詠集を引出物に撰ひ硯の蓋に入て出し給ふと云々

十惡と云共引攝すと朗詠してそかなてける　平家物語云千壽の前やかて十惡と云共引攝すと云朗詠して極樂ねかはん人は皆彌陀の名號をとなふへしといふ云々（盛衰記ニ見　長門本同レ之）　文粹十二云後中書王讃二極樂寺一文云雖二十惡一兮猶引攝甚二於疾風披一レ雲霧一矣　是も朗詠集にありかなでると云詞は絃をかくといひ琵琶を撫るといへりかなてるとはかきなでると云略語也舞をまふもかなつるなと云事あれど元引物の類を奏するをかなでるとは云也

津の國の生田の河に身を捨て　生田川は攝州矢田郡生田村にあり小川也北より南へ流たり布引の瀧の流れ也津國は高砂に注すり昔津の國にすむ女有けりそれをよばふ男二人有ける一人は同國さい田の內にすむ男姓は菟原になん有ける今一人は和泉の國の人姓は陳努となんいひける共に志あさからず有ける女せんかたなく思ひて後三人なから生田川に身をなけて死にけり委しく大和物語に見えたり是に依て生田の川に身を捨てとはつゝけたり
拾遺愚草 ○いかはかり深き心の底を見て生田の川に身をしつみけん

森のした風木の葉の露落されけるこそ哀れなれ
重衡は生田の社へ向ひ給ふ副將軍也其手も責落されたり生田の森は海道の右にあり茂りたる森也○
新續古 生田川水の秋さへとゝまらて木葉を送る杜の下風

寵愛は花筐に注す梓弓は屋島に注す

何方もあみを置たることくにて　文選南都賦曰天以二日月一爲レ綱地以二四海一爲レ紀矣　歐陽堅臨レ終詩曰恢々六合間四海一何寛天綱布二紘綱一投レ足不レ獲レ安矣

のかれ終たる淀鯉の　淀は瀧に注す○夫 我戀は淀の河瀨のつなき鯉身をも心にまかせさりけり

河越の重房が手に渡り心の外の都入　河越重房桓武天皇後胤武州河越重頼子小太郎と號す義經の舅也　今按是は重衡一の谷より都入の事をいへり爰に重房が手に渡りと作る事いぶかし一の谷に於て重衡を生捕て義經相具し上洛し給ふ也但是は八島の大臣關東下向の事を取違へたる歟此時は重房共に下向す　平家物語云壽永三年二月十四日生捕本三位中將重衡都へ入て大路を渡さる小八葉の車の前後の簾をあげ左右の物見を開く土井次郎實平はむくらん地のひたゝれに小具足計して隨兵三十餘騎引具して車の前後を打かこんで守護し奉ると云々

實や世中は定めなき哉神無月時雨降おく奈良坂や
後撰 ○神な月ふりみふらすみ定めなき時雨そ冬の初めなりける　古今 ○神な月時雨降をけるならの葉の名におふ宮のふることそこれ　此二首の歌を取てつゝけたり　奈良坂は春日補神に注す　詞林采葉云抑一天下の神無月を出雲國には神在月共神月とも申

也我朝ニ諸神參集し給ふ故也其神在の浦に神々來臨の時少童の作れる如なる篠舟波の上に浮事不ㇾ可ㇾ及ㇾ算數ㇾ其諸神は彼浦の神在の社に集り給ひて大社へは參給はずと申此神在社は不老山と云所に立給ふ神の號をは佐太明神と申也云々　社說云出雲國秋鹿郡佐陀神社者所ㇾ祭伊弉並尊也此所に神在の祭と云事有當社は諸神の尊祖なれは万の神々每歲十月此所に會集し給ふ故に其餘の國には此月を神無月と云出雲國には神在月と稱すと云々　或云神無月之事十月は極陰の月にて地より上に陽なきと云義にてかみ無月と云也十一月をしも月と云事は此月下に一陽來復する故にしも月と云也云々

衆徒の手に渡りなはとにもかくにも果はせて　◯萬奈良坂やこのてかしはのふたおもてとにもかくにもねしけ人は　此歌を以てつゝけたり百万に注す

三河の國や遠江　三河は杜若に注す遠江は景清に記す

足輕箱根打過て　足輕箱根は神社也班女に注す上古には足柄の清見が横走とて足柄山より出て富士の山のすそを通りて清見が關へ出る道有是昔の海道也萬葉仙覺抄

明もやすらん星月夜鎌倉山に入しかは　星月夜の井は極樂寺の切通へ上る坂の下にあり昔此井に晝も星の影見ゆる故に名つく此邊の女此井を汲に來り誤て菜刀を井の中に落しけるより以來星の影見へずといへり扨此井の西に虛空藏堂あり星月山星井寺と號す　緣起云聖武天皇天平中に此井に光あり是をみれば井の邊に虛空藏の像現し給ふ此由を奏しければ行基に勅し此像を作らしめ爰に安置す云々又盛久にも記す◯後堀川百首我ひとり鎌倉山を越行は星月夜こそ嬉しかりけれ常陸

燈暗しては數行虞氏が淚の雨さへしきる夜の空四面に楚歌の聲のうち　橘相公賦ニ項羽ニ詩云燈暗數行虞氏淚夜深四面楚歌聲矣　此詩は史記項羽本紀を題とせり　和漢朗詠集にあり詩の心は蟻通に記す

平家物語云障子の透間より風吹入て燈きへけれは中將爪講して此詩を二三返朗詠し給ふ云々　盛衰記同之

泪をそへて廻らすも雪のふるえの枯てだに花咲千手の袖　廻らす雪とは廻雪の曲をいはんとてつゝ

けたり融に注す古枝は雪の降にいひかけたり花咲千手とは觀音のちかひに枯たる木に花咲と云心を千手の前によそへたり田村に注す

一樹の陰や一河の水皆是他生の緣と云　蕭堯濟孝傳曰昔三人各一州背孤露宅獨三人暗會ニ於一樹下ニ相間無爲ニ斷金之契ニ二人曰善乃相約爲ニ父子ニ梁朝破三人不レ離已上見ニ注類ニ　三略曰昔者良將之用レ兵有下饋ニ簞醪ニ者上使下投ニ諸河ニ與ニ士卒一同レ流而飲上夫一簞之醪不レ能レ味ニ一河之水ニ而三軍之士思ニ爲致ニ死者以ニ滋味之及レ己也矣　明眼論云或處ニ一村ニ宿ニ一樹下ニ汲ニ一河流ニ一夜同宿上下略　雲井御法云藤原直基一樹の蔭の契りも此世ひとつならぬ事とおほえ侍しに云々（親長家歌合）暮にけり一樹の陰も契そと山路の花に宿やからまし實淳

白拍子は佛原に注す輿に乘しは姨捨に注す

また玉琴の緒合に（續後拾）　玉は美稱の詞也緒合は琴の末らへ也○我よはひ立ることとちの緒合の只せめにのみせめも行哉

峰の松風かよひきにけり　拾遺雜上云野宮に齋宮の庚申志けるに松風入ニ夜琴ニと云題をよみ侍ける　齋宮女御一琴の音に峰の松風かよふらしいつれの尾より調そめけん　歌の心はいつれの山の尾より調初けんと云に琴の緒をそへていへり松風入ニ夜琴ニと云は百詠の詩の句也

志のゝめは安宅に注すものゝふは屋島に注す

かくて重衡勅によりまた都に上り有しかは　南都の衆徒重衡を志きりに申請るに依て鎌倉よりすくに南都へ渡さるゝ也此時都へは入給はぬ也　又或説に衆徒重衡を申請る旨法皇へ申上るにより法皇より鎌倉へ勅定あり依て重衡を南都へ渡さるゝ也是によりて勅によりとはうたふ也と云々

早きぬ〳〵に引はなるゝ袖と〳〵の露泪　きぬ〳〵は戀也別れのかへ詞也　貞德御傘云夫婦曉起別るゝ時おのがめん〳〵（上聲）の衣裳をとりきるより別れの異名と見へたり云々○衣々に別乘つる体らひに明過ぬへき歸るさの道

〰〰〰〰〰〰

雲林院

雲林院は大德寺の東南うちゐと云所舊跡也本尊觀

昔の像に今醍醐成身院に有と今案雅抄云雲林院は紫野にあり東西七十三丈南北七十三丈也舟岡山の東からすきがはなの近所うちゐと云所也と云々
三代實錄云雲林院者故無品常康親王之舊居也親王出家爲二沙門一貞觀十一年二月十六日以二此院一付二屬遍昭一曰深草天皇賜レ此居之天皇登遐常康落髮旲天罔レ極德猶雖レ報レ恩欲下永爲二精舍一令レ學中天台教上伏思永賜二年分度者二人一傳二天台之法門試學之道一請以爲二元慶寺別院一成二親王之心願一矣　花鳥餘情云雲林院は今の大德寺也昔淳和天皇の離宮にして稱二里內裏一宇多帝行幸有し所也仁明天皇所分し給ふ次に常康親王の傳領也本堂は彼親王の室也其後御願寺として天曆の御時に實性僧都を別當に補せられ尊敬ありき御記にも本尊千手觀音有二靈驗一云々或云雲林院に紫式部の墓有又此所に十三層の高塔有式部ために築也後小松院御宇至德三年に作レ之此所にて淳和帝六十卷と云文をしきぶに說せ聞給ふと宇治寶藏の日記にあり云々
藤咲松も紫の雲の林を尋ねん　雲の林とは雲林院を云也松に咲かゝりたる藤を紫の雲の林と見たる也又雲林院は紫野にあり依て紫の雲の林其つゝけたり花鳥云雲林院は天下無双の花の名所也云々〇新千紫の雲の林を見渡せは法にあふちの花咲にけり肥後

是は津の國芦屋の里に公光と申者にて候　津の國は高砂に注す公光は不レ知二案図一芦屋は天王寺より乾也伊勢物語云昔男津の國むはらの郡芦屋の里にしるよしまていきてすみけり昔の歌に芦の屋のなだの鹽燒いとまなみつげの小櫛もさゝすきにけり　とよみけるそこの里をよみける哥をなん芦屋のなだとはいひける下略　闕疑抄云芦屋の里は業平の領知なるへし云々冷泉流伊勢物語注云津國うはらの郡は有常娘母のもとより遺得たる所なり云々

我幼かりし頃よりも伊勢物語を手馴候所に　伊勢物語は杜若に注す　私云此謠に芦屋の里の公光伊勢物語を手馴れ或る夜の夢に業平二條の后を見てそれより雲林院に參ると作る事證文未レ見案ずるに業平二條の后凡伊勢物語一部におゐて雲林院にその緣束になし是は伊勢物語と源氏物語と取ちか

へたる歟其所謂は雲林院に源氏物語の作者紫式部の墓あり依て次第の詞に紫の雲の林を尋ねんとつゝけたり且又弘徽殿の細殿に人めをふかくしのひとうたふ伊勢物語に弘き殿のほそとのと云文なし是は源氏花宴卷に源氏の君弘き殿の細殿にて朧月夜の内侍にあひ給ふ事あり謠の作者是を業平二條の后に取あやまれる歟近來の板本に玉箒と云る草子有此謠のおもかけを具にかけり此草子證文もなし但此玉箒は此うたひに本付て書る歟尋ぬへし

花新開日初陽潤鳥老歸時薄暮陰　菅三品春色雨中盡と云題にて作れる詩詠和漢朗詠集にあり初陽は正月を云薄暮は夕暮也

春の夜の月の都にいそくなり　月の都は月宮殿の事なれ共爰は春の夜の月とつゝけたる諷詩也月宮殿は楊貴妃に注す

芦屋の里を立出て　續拾○ほの〳〵と我住方は霧こめて芦屋の里に秋風そ吹く定家

汐のひるこの浦遠し　蛭兒の浦は攝州武庫郡西の宮の濱邊也此所ニ神社あり號ニ廣田明神ㇾ蛭子を祭る也依て浦の名とす　廣田社は所ㇾ祭一座今は五座也五座之說略ㇾ之　神代卷云伊弉諾尊伊弉冊尊生ニ日神ㇾ次生ニ月神ㇾ次生ニ蛭子ㇾ雖ニ已三歲ㇾ脚猶不ㇾ立故載ニ之於天磐櫲樟船ㇾ而順ㇾ風放棄矣　先代舊事神武天皇紀云天皇問曰汝神者是奇不ㇾ測神也誰也欲聞矣　廼對奏曰吾質者是去來諾尊去來冊尊其初ㇾ生兒豐蛭兒太神海守ㇾ鼠得ㇾ幸市守ㇾ賈得ㇾ幸田守ㇾ種得ㇾ幸軍守ㇾ戰得ㇾ事朝守ㇾ事得ㇾ幸天下宮持神往住ニ廣田國ㇾ如若燕飛去矣　同神社本紀云廣田神社若櫻宮天皇時天照大神告ニ天皇ニ曰吾荒魂不ㇾ可ニ皇居同在ㇾ欲ㇾ宿ニ御心之廣田國ㇾ依ㇾ之立ㇾ祠矣　倭邦百首抄云攝州西宮の奥にすめるあらえびすと云者つりあげてそだて申き三郎殿とは蛭子の宮也えびすとは彼つりあけたる浦人を云也云々

松陰に煙をかづく海士か崎　かつさの海人をいひかけたり海士か崎は攝州川邊郡也　舊事本紀云履中天皇二年到津國波花浦有ニ二神ㇾ一神乘ニ青舟ㇾ一神乘ニ黄舟ㇾ天皇遣ニ木菟臣ㇾ問ニ其由ㇾ神曰吾舟止所造ㇾ社祭ㇾ吾必有ㇾ國益ㇾ木菟臣令ㇾ一海士以從御舟ㇾ上自ㇾ海至ㇾ河此海士宅所名云ニ海士崎ㇾ云々　同書編曰和泉其南海與泊ㇾ舟者爲ニ阿賀介撮凡ㇾ矣

難波津に咲やこの花冬こもり　難波に注す
櫻にまきれあか雲の林に着にけり　櫻を雲と見る
と云事二人靜に註す
遙に人家を見て花あれば即入なればと　白氏文集
三十三云尋春題諸家園林　遙見人家花便入不論貴賤
與親疎矣　詩の心は題にてよく聞えたり（草櫻）暮ぬ
とてとゝむる人の聲せねと花あれは入道野邊の
宿
たそやう花折は　たそとは何誰と書　郭景純詩云
借問此何誰矣　晋賈充詩云室中是阿誰矣
嵐の山は名にこそきけ　嵐山は山城也西行櫻に注
す（千）けふ見れは嵐の山は大井川紅葉吹おろす名に
社有けれ後拾
花をちらすは鶯の羽風に落るか松の響か人かそれか
あらぬか木の下風か　説文曰歟疑辭也又嘆辭也又
語助也矣（千）梅かえに降つむ雪は鶯の羽衣にちるも
花かとそみる顯輔（拾玉）袂しるやみ山の秋の物うき
にそれかあらぬか風の夕暮
落花狼籍の人そこのき給へ　朗詠集云江相公詩落

花狼籍風狂後啼鳥龍鐘雨打時矣　狼籍は韻會云狼
多藉其草而穢亂故曰狼藉矣　蘇鶚演義曰狼藉草
而臥去則滅亂故物縱横敗亂者謂之狼藉藉踏也矣
素性法師は見てのみや人にかたらん櫻花手毎に折て
土産にせん　古今集春上素性法師歌也　詞書云山
の櫻を見てよめる云々奈雅抄云人に語る計はおろ
かにあるへけれは花を手毎に折て家つとにせんと
也家つとは土産也世俗にみやけと云事也萬葉に裹
と書つゝみてくる物なれは云也山つと濱つと都の
つとなど云也云々　古今寶枝抄云詞書に山の櫻を
みてよめる云々　山の櫻とは比叡山の櫻也中堂止
觀院の庭前の櫻也云々　素性は遍照の俗たりし時
の子也俗名玄利又は維時其號す　大和物語云維時
遍昭の許へ行たれは法師の子は法師こそよけれと
て法師にし給ふ也と云々文　堯恵古今抄云素性
は遍昭の二男俗名は藏人義方廿一にて出家して淸
水法師となる後長谷に住けり權律師に任す云々
春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふ
と見ん　古今集春下藤原好風歌也詞書云春宮のた
ちはきのちんにて櫻の花のちるをよめる云々　榮

雅抄云風は花のあたりをのぞきてふけ心づからうつろふと見んと心なき風に人に物いふがごとくいへりよぎてはのぞきて也云々

春の夜の一時を千金にかへしとは　田村に注す

千顆萬顆の玉よりも　菅三品冷泉院宴花光浮二水上一序云瑩レ日瑩レ風高低千顆萬顆之玉染レ枝染レ浪表裏一入再入之紅矣　朗詠集にあり顆は玉のつぶ也

花物いはぬ色なれば人にて花をこひ衣輕漾激して影唇を動かせば　同序云誰謂花不レ語輕漾激兮影動レ唇矣　輕漾はかろき波なり激とは水のうづまくを云なり白居易詩云落花不レ語空辭レ樹矣東坡詩云盡日問レ花々不レ語（草樹）●思ふ事色にいつとも人とはゝ花物いはん影やたのまん

柳櫻をこきまぜて　盛久に注す

紅の袴召れたる女性束帶給へるおのこ　二條の后業平を指て云　束帶とは袍以下の裴束表袴を着し石の帶を以てつがぬるを束帶と云也　論語公冶長篇曰束帶立二於朝一矣

在中將業平　在原を略して在中將といへり　或云中將は大將少將の間におかるゝ故に中將といへり天平神護元年以來此官名有中將少將の員數むかしは定めありき後世は數定らずして皆權中將少將となれり云々

又ねの夢を待給はゞ　又ねの夢は戀の詞也　〇（新千）鳥のねの二度つらき別哉又ねの夢のさむる名殘に

蓮知法師

昔男となどしらぬ　伊勢物語の段々の最初に昔男とあるは業平を指ていへり　愚見抄云昔とは廿年三十年以往のみを云に非ず大かた過にしは去年も今年のむかし昨日は今日のむかし又今日は明日の昔也と云々　惟清抄云昔男とつゞけて業平の名とせり左樣の節なき事を除てよむ故に昔といひ切て男とよむ也段々男と有は業平の事也云々　宗祇抄云昔と云に業平の歌の躰こもるとは昔と云字に色々の餘情千萬の意こもるされば業平の歌如レ此也其心あまりて詞たらずと紀氏貫公が古今の序にも有云々

夕ばへの花おし思ふ　夕ばへとは夕べの花の氣色を云也俗につやなど云事也榮映光三字共にはへとよめり〇（夫）三吉野の水分山の高根よりこす白浪や花

の夕はへ
木がくれの月にあらはれぬ　〇新千人しれぬ大内山
の山守は木かくれてのみ月を見るかな經政
暮なばなけの花衣　なけのけの字濁てよむ也無の
字也〇古いさけふは春の山邊にましりなん暮なばな
けの花の陰かは素性
月やあらぬ春の昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身
にして　伊勢物語及古今集戀の五に入業平歌也詞
書略之是は二條の后にはなれて後我心の思ひな
しにかはらぬ物もかはりて覺ゆる事をよめる也
愚見抄云月やあらぬとは月をとがめて月は去年の
月にてはなきか春は昔の春にてはなきかととがめ
て更に去年に似ざるは何としたる事ぞと云心也面
がはりするはその人の心から思ひなす也云々　肖
聞云月やあらぬとはあると云詞也こしかたにかは
らぬと云事也されど只其人に逢事叶はねば月も春
も我身ももとの様に思はぬ由也古今序に其心あま
りて詞たらずと云は是等の歌成べし俊成定家卿共
に此歌をくりごとのやうに褒美せられたり云々
まづは弘徽殿(コウキデン)の細殿(ホソデン)に人めを深く忍び心の下簾(シタスダレ)のつ

れ〴〵と人はたゞずめば我も花に心をそみてとも
にあくがれ立出る　是は業平二條の后にあへる
事をつゞけたる歟但伊勢物語にはかやうの文更に
是なし　弘徽殿は拾芥抄云七間四面清涼殿北矣
桐壺のすぢむかひ也　細殿は釋名陸德說云廊の字
をよめり云々　岷江入楚云弘徽殿の東にわたり廊
ありそれを細殿と云云々　あくがれは友鄰花に注
す
きさらぎや　二月也衣更着共云　下學集云二月也此
月餘寒猶嚴故衣更着也矣
抑日の本の内に名所と云事は我大内にあり　業平
東に下ると云は物語の作也業平あまりにみだりな
るゆへ東山に蟄居せしをあづまと作り三河國八橋
は紀有常が娘二條の后取わきさたしき八人を八橋
といひ實は吾妻に下らずといへり難義抄都本不下
本冷泉流注等に見えたり然れば諸國の名所大内に
ありとつゞけたるはより所有也又杜若にも注す抑
は高砂に注す日の本は花筐に注す
彼遍照がつらねし花の散つもるあくた川を打渡り
遍照が歌に花の散つもる芥川と云はなし古今集物

名にくたにをよめる遍昭歌に「散ぬれは後は芥になる花をおもひしらすもまどふてふ哉　又伊勢物語云昔男有けり女のえうまじかりけるを年をへてよばひわたりけるをからうじてぬすみ出ていとくらきにあくた川と云川をゐていきければと云々　是は業平二條の后をぬすみ出たる事也略レ之今案爰につゞけたるは遍昭が物名の歌と此物語と二つを取合て作る成べし芥川は内裏に塵芥を流す川也是を御溝と云、藻鹽草云櫻の花の御溝水に散て流るゝをと云々　只遣水を云也　冷泉流伊物注云あくた川と云は津國あくた川には非ず内裏にあり是は常寧殿の下より流れ出て朝ぎよめの塵はき入る也塵の入義をもてあくた川と云是は堀川をまかせたる川なり云々　藻鹽草云中殿の前也云々知顯抄云大宮川を芥川と云大宮川の略名也云々遍昭は號ニ花山僧正一又號ニ良僧正一俗名良峰宗貞桓武三世孫大納言安世子也仁明帝寵臣輔ニ藏人右近衞權少將一聖朝晏駕後嘉祥三年三月廿八日出家齊衡二年五月十二日慈覺受ニ圓頓戒一又安惠和尚受ニ三部大法一貞觀十一年叙ニ法眼一元慶元年十二月九日授ニ僧正一寛平二年正月十九日寂年七十六（已上古今傳）今昔物語云宗貞は深草天皇の寵臣也天皇崩じ給ひければ世中ものうく思ひ且文德帝をおそれ奉りて出家名を云ニ遍照一七十二にて寂す云々

かづける衣は紅葉重　錺抄云十月十一月晴著レ之青紅葉黃紅葉紅々葉色々仁安三年十月廿一日大嘗會御禊散殿黃紅葉下襲同年特著レ之保延五年十月廿六日成勝寺供養守宗左府著ニ紅葉下重一云〇山櫻や岩かきがくれたはるらん紅葉重の袖の見えつる

緋の袴ふみしだき　緋の袴は赤き袴也官女著レ用之下官は不レ著レ之　ふみしだきは玉傳深秘抄云花ふみしだくと云は踏蹴義也或云踏躙義也蹈躙事也云々

さそひ出るやまめ男　伊勢物語云かのまめ男うちものかたらひてと云々　源氏夕霧卷にまめ人と有も是也河海抄に履李と書文選に眞人と書　愚見抄云まめなると云詞又まめ人などいへるは皆實なる心也云々　惟清抄云爰は好色の方に實人也人の妻に心かくるは大方の思ひにてはあらじ志の實なる思ひの切なればは也云々

紫の一もとゆひの藤袴　一もとゆひとは如何本歌に一もとゆへと有　藤袴蘭と書和名にふぢばかま共あらゝぎ共云古歌にらに共よめり葉は麻に似て兩岐あり野にありて秋紫白花を開く是眞蘭也葉に匂ひ有詩經楚詞などに詠ぜし蘭是也世に賞する蘭と云ものは大葉の麥門のごとく花に香あり眞蘭に非ず遯齋閑覽曰今人所レ種如二麥門冬一者名二幽蘭一非二眞蘭一矣　古人もあまりて今の世俗に蘭と云ものを眞蘭といへり本草綱目に詳に見えたり

古○紫の一本ゆへに武藏野の草はみなから哀とそ見る

信濃路やその原しげる木賊色の　信濃國は兼平に注すその原は基俊口傳抄云美濃信濃兩國の境にありと云々　園太曆云木賊色狩衣事貴命云木賊有二三色一黃青黑等也皆以二老色一也此內黑木賊至極老色也不レ用二吉事一也黃木賊ヒハ色樣々青木賊短澤共表也矣

夫○木賊刈その原山の木の間よりみかゝれ出る秋の夜の月

狩衣の袂を冠(カフリ)の巾子(コジ)にうちかつぎ　狩衣の裝束に冠を着す事常には無レ之但野行幸の時は天子も冠を着し狩衣を召也供奉の人々も是に等し狩衣の袂を冠の巾子に打かつぎとはしのぶ躰を云也外に子細なし冠の巾子は竪に高き所を云髻を入る所也辨色立成云巾子幞頭具所三以挿レ髻者也矣　狩衣は松風に注す冠は杜若に注す

たそかれ月もたや入て　たそかれ月は三月四月の月を云也又夕暮をたそかれ時といふ曉をかはたれ時と云也ほの闇き時はくる人もえ見わかねばかれはたぞといふ事をたそかれ時といふ也かはたれ時もかれはたれ時と云事なり云々

降は春雨か落るは泪かと　名○春雨の降は泪か櫻花散をおしまぬ人しなければ黑主

山あゐのは袖　小忌衣を云定家に注す

つげの枕　壬生二品○そてなから今は泪に朽なましつけの枕の行衛志らせは

松の葉の散うせずは高砂に注すことのは草は同高砂に注す

謠曲拾葉抄卷八

小鹽

大原野社は在山城國乙訓郡所祭之神同春日社二十二社次第云仁壽元年二月乙卯依大皇大后御祈建宮柱大原野矣　神祇正宗云人皇五十四代仁明帝嘉祥三年爲王城守護閑院左府冬嗣申沙汰勸請之矣　又云和州春日社遠帝闕后妃夫人有參詣之便故移于大原野矣有兩説アリ伊勢物語云昔の二條の后のまだ東宮のみやす所と申ける時氏神にまふで給ひけるにこのゑつかさにさふらひけるおきな人々のろく給はるつゐでに御車により給ひてよみて奉りける「大原や小鹽の山もけふこそは神代の事も思ひいつらめ　此歌古今雜の部に入その詞書云二條の后また東宮のみやす所と申ける時に大野野にまふで給ける日よめる云々歌の心は二條の后小鹽山に行啓の時業平御供にて此歌をよめる也　古今榮雅抄云小鹽山もけふ后の御參りに神代の事も思ひ出てうれしくおぼしめすらんと也神代の事もは昔の事を云也今二條の后藤氏にて此宮へまふで給事なれば神も定てむかしをおほしいだすらんと也神代の事もは天照太神と天兒屋根命は陰陽二神の末君臣余躰の神にておはしますなり云々　江家次第云大原野行啓起五條后順子以藤氏勸學院衆爲車副二條后高子以姪乘車後在五中將書和歌興二條后矣　大原の小鹽の山もけふとこそ神代の事を思ひいつらめ

花にうつろふ嶺の雲かゝるぞ心なるらん　嶺とは小鹽の嶺也小鹽の花を心にかけて見に行也山家吉野山雲をはかりに尋入て心にかけし花を見る哉西行

下京邊　西行櫻に注す

面白やいづくはあれど所から花も都の名にしおへる　昔桓武帝延暦年中山城乙訓郡長岡と云所に都を建給ふ也大原野社の北也依て花も都の名にしおへるとはつゞけたり面白は三輪に注す名にしおふは江口に注す

大原山の花櫻　古今榮雅抄云花ざくらは櫻花を打かへしたる也々顯註密勘云絹の色にさくらと云は表白く裏花田なりそれを花櫻共いへば花櫻櫻花

じ事也云々　平安帝都之記云山城國は日本の正中にあたりて高天の原を降し給へる靈地なれば北には小原南には大原と云所あり是則高天の原の本末なり云々　古○容輝の世にも似たる花櫻咲と見しまにかつ散にけり

今を盛りとゆふ花の　ゆふ花は夕のを云歟萬葉集歌に木綿花のさかゆるときにわか君の上下略　或抄云見安云木綿花と云木有に如二芙蓉一實如二柴孫子一云々　童蒙抄にも有

神も交る塵の世の　和光同塵の心也龍田に注す

恙ほりして　鞍馬天狗に注す

年ふれは齢ひは老ぬしかはあれど花おし見れは思物ひもなし　古今集春上に入忠仁公の歌也詞書云染殿の后のお前に花がめに櫻の花をさゝせ給へるを見てよめると云々染殿は忠仁公の御娘也榮雅抄云かめにさせる櫻を后の容顔美麗なるを父自愛のあまりに老てあれど見れば物おもひなしと花によそへてよめり此歌字あまりたれどきゝあしからすか樣にあるはよろしきとなり云々

今白雪を戴く日光りにあたる春の日の　古今集春上云二條后の東宮のみやす所ときこえける時正月三日おまへに召て仰ごとあるあひだに日はてりながら雪のかしらに降かゝりけるをよませ給ひける文屋康秀「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるそわひしき　榮雅抄云東宮の御めぐみにあへる我なれど頭の雪となるぞわびしきと只今ふる雪を老て白髮によそへてよめる也云々

散もせず咲も殘らぬ花盛り　永福門院〇今日見ずは甲斐なからまし散もせず咲も殘らぬ山櫻哉爲冬

姿こそ山のかせぎに似たり共心は花に　夫木集に友則歌也下の句は心を花になさばならめやと有かせぎとは綛巴云鹿を云と云々一云由賤の柴をになふ木をかせぎ共云也或は賤の世わたるかせぎにもいひかけたり○古かたち社み山かくれの朽木なれ心は花になさは成なん

色も香もしる人ぞ　古○君ならて誰にか見せん梅の花色をも香をも知人そしる

大原や小鹽の山の小松が原より　小鹽山は善峯山より大原野邊迄の山を都て小鹽山と云也榮雅抄云

大原野南の山を小鹽山と云云々○後撰大原や小鹽の山の小松原はや木高かれ千代の陰見ん貫之
煙る霞の遠山櫻　○玉葉春霞あやなくたちそ雲のゐる遠山櫻よそにても見ん
里は軒端の家櫻　○小鹽の里は在ニ善峯寺麓ニ粟生野より二十町許乾也家櫻とは里にうゆるを云也
にほふや窓の梅もさき　○新拾朝明の窓吹入る春風にいつく共なき梅かゝそする爲世
あかねさす日も紅の　萬古源云赤根指とは朝日也非ニ夕日ニ云々萬葉に茜草指とも書但入日の影をもあかねさすと云歟金葉集歌に●日の入は紅に社似たりけれあかねさす共おもひける哉
都邊はなへて錦と成にけり櫻をおらぬ人しなき
藤原定家卿の歌也拾遺愚草に入下の句のとまりは人しなければと有
彌生　田村に注す
大原や小鹽の山もけふこそは神代の事も思ひ出らめ
伊勢物語及古今集に入詞書上に記す　愚見抄云大原は春日也第三の社天津兒屋根命は藤氏の祖神也此社に合殿とて天照太神まします也又必伊勢太神宮の中に春日まします也是は神代に天照太神と兒屋根命と陰陽二神の末若臣合體のちかひありて萬民を守護し給也東宮の御息所行啓あれば天照と春日の契り給ひし昔を思ひ出す也小鹽山も藤氏のさかへつゞきて今日の御參を嬉しく見るらんと也春宮の母儀なれば如レ此云也云々
大原野の行幸に　春宮及后宮のを行啓と云也行幸は天子御幸は院也爰は二條の后大原野行啓なれは行啓と云べし行幸御幸の沙汰大原御幸に注す
在原業平　杜若に記す
空おそろしや天地の神の御代より人の身の妹背の道は淺からぬ　天地の神の御代よりといふに二義有一には天とは天神七代也地とは地神五代を指て云されば天神第七代伊弉諾伊弉冉尊男女交合の道ををしへ給へり又地神第一天照太神と兒屋根命と君臣合體のちかひにて萬民をまもり給へり一には天地とは天神地祇の二つを略して天地といへり天神とは天上の神也高位の神を云也地祇は臣下を祝ひ

無位の神と云春日も祇の最上也されば天とは天照太神也地とは兒屋根命をさしていへり此二神君臣御心を合て國土をまもり給へり

昔男　雲林院に注す

實山賤のさしもけにしはふる人と見ゆるにも　賢木卷云このもかのもにあやしきしはふるひ人ともあつまりゐて泪をおとしつゝみたてまつると云々

皺古人柴振人兩説有穀古人佛源抄云穀産説は老人也皺ありて古き人也阿佛房物語の西は賤き者の體也老とは見えずと云々弄花に柴振人柴など取いやしき人成べし木の葉などかきあつむる賤きしづのを也木の葉の散かゝり打はらふ心也日本紀に折枝(シハフル)薬人と有たとへべいやしきしづのをなど頭にも柴のかゝるを袖にて打ふるふよし也あながちに袖にて打ふるはす共柴を持ありくを柴ふるひ人と云にこそと有　已上㠀江入楚　實と云こと葉間近く二所にありてきゝにくし但ヶ樣の例もある歟尋ぬべし

老かくるやとかさらん　老かくるとは老隱なり

古○鶯のかさにぬふてふ梅花折てかさゝん老かくるやと

このもかのもの陰毎に　河海抄云此面彼面也こなたかなたと云に同し詞也遊仙窟に兩邊と書てこなたかなたとよめり古○筑波根のこのもかのもに陰はあれと君かみ影にます影はなし

轅は野宮に注すさそらひは卒都婆小町に注す天も花にやえゝるは田村に注すかげろふ人はさだかに見えぬ心也かげろふは源氏供養に注す

和光の影に業平の花に詠じて衆生濟度の姿顯し給ふぞと　阿古根浦口傳云月やあらぬの歌の注云法性寂光之地を出て常沒之衆生利益せり其ために伊弉諾尊と現じて國土を造り業平と化しては男女の習を旨として衆生の縁をむすび云々

たまさかは楊貴妃に注す月やあらぬ此歌雲林院に注す

やでとなき人は加茂に注す

けふこすはあすは雪とぞ降なまし消すはありと花と見ましや　伊勢物語に業平の歌也あだなりと名にこそたてれ櫻花とよめる歌の返し也此歌古今春部に入榮雅抄云花はあだならぬよしを云るを業平われけふきたればこそあだにはなきやうなれあすは雪と降て消ずあり共花とは見まじきとなり云々あ

たなりとの歌と見合しるべし
皆しら雲の上人の櫻かざしの袖ふれて　雲の上人
は卅辨慶に記す櫻かざしての歌は采女に出す
春宵一刻價千金花に淸香月に影　田村に注す
思ふ事いはてたゝにややみぬべき我にひとしき人し
なければ　伊物に業平の歌也詞書云昔男いかなり
ける事を思ひける折にかよめる云々實澄公云思ふ
事をいはでおけば万法にはづるゝ事なし楚忽にい
ひ出せば後悔あるもの也との敎也常に此心を心に
しめばよろづにあやまりはあるまじきもの也云々
たゞは徒也只其儘の心有人しのしの字はやすめ字
也此歌新勅撰雜二に入
思ひ内より言の葉の露品々にもれけるぞや　此意
松風に記す
春日野のはか紫のすり衣しのぶの亂れ限りしらすゞ
伊勢物語に業平の歌也歌の留りはかぎりしられず
新古今に入聞見抄云紫と云草の根にてすれるを紫
の根摺の衣とよめり忍摺は初終なく亂たる摺也忍
草は摺衣の紋也戀の心の亂をよそへてよめり云々
實澄公云若紫をば女に比す歌の心は限りもなく女
に思ひみだれたると也
陸奥のしのぶもぢずり誰ゆへに亂れんと思ふ我なら
なくに　古今集戀四に河原左大臣融公の歌也此歌は
融公の歌なるを伊物には女此歌を取て右業平のよめ
る春日野の歌の返歌にしける也仍てといふ歌の心
ばへなりとはいへり此歌伊物には亂れそめにしと
有榮雅抄云左融大臣此歌をよみて有常が姉娘に
あひ給へり然るを業平後に若紫の歌をよみてかの
妹が懸想しける程に此歌の心ばへなりとは書る也
と云々　伊物集注云融公の心　我心は誰故に亂れ
べきぞ君にこそ亂れんと思ふとよめり伊物の心は
業平は誰ゆへに亂れ給ふぞこなたの事にては有ま
じきと也作意を用かへたり同じ時代の歌を取てい
ふは不審なれ共當意に能叶たる程につかはしける
最神妙也此等を例とし後々に古歌を用たる事多し
云々榮雅抄云天智天皇の時陸奥州信夫郡よりもぢず
りとてぬひすりのごとくなる文の亂れたるを年貢
に奉るもの也一說陸奥の信夫郡に大なる石二つ有
その面平にしてもぢのやうなる文あり　藍にてす
りたる布を年貢に奉るを狩裝束にしたるなりと云

々或云信夫の里もちずりの石は福島の府より一里計隔て山口村の山下にあり方二尺長八尺計也云々九條禪閤抄云忍摺うつくしき物にや僧正遍照が寺を遍照寺と云此寺の簾の縁をはりたると也云々遍照寺は廣澤の池の西に舊跡あり袖中抄云遍照寺の御簾のへりにぞすられてありしを四五寸計きりとりて故帥大納言の清和院の御簾のへりにまねばれて有しかば世人見て興せし此比は皆やりとられてうせにけるにや云々

唐衣きつゝなれにしつましあればはる〴〵きぬる旅おしそ思ふ　此歌杜若に注す

心のをくまではいさしら雲のくだり月の都なれやひがし山是も又あつまのはてしなの人の心や　上にはる〴〵きぬる旅をしぞ思ふと云詞をすぐにつゞけたる諷詞也心のおくとは陸奥をいへりくだり月は東にくだるといひかけたり降月と書入方の月を云釆女に注す都なれや東山是も又あづまのはてしなのとは　云業平東にくだらずといへり皆都にての事也業平東山に蟄居せしをあづまといへる說有是等の事をいへり墨田川及雲林院に記す

武藏野はけふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり　伊物に二條の后の歌也伊物詞書云昔男ありけり人の娘を盗みて武藏野へゐてゆくほどに盗人なりければ國の守にからめられにけり女をば草村のなかにおきてにげにけりみちくる人この野はぬす人あなりとて火つけんとす女わびて「武藏野は…とよみけるをきゝて女をばとりてともにゐでいにけり云々　愚見抄云古今第一春歌に入て五文字春日野とあり又題しらず詠人不知と有定家卿の云古今に春日野と書かへたる計也異なる子細なしとはいへりつまとは草の萠出たるはしをいへり人の妻によせて也又若草は女に喩若草のつまとつゞけたり榮雅抄云春は野をやく事のあれば野遊の人の春日野はけふはなやきそつまも我もこもれりといへる歌也又云或說に春日野に武藏の國司の墓をつくりそこをむさし野といへり云々　喜撰式云婦をば若草と云也云々萬葉仙覺抄云つまといふはつはつゞくと云ことばまはまとはると云詞也草のおひ出ていまだ葉もひらけざるはつゞきまとはれたりおとこ女もつながれまとはれてはなれ

ぬものなればわかくさにたとへてつまといふ也云々　此歌の妻は業平を指て云也男を女は妻と云男を妻とよめる歌多し拍崎に注す　大鏡云二條后のいまだ姫君にておはしける時業平中將のしのびてかくして侍けるを御せうとの君達基經大臣國經大納言などのわかくおはしけんほどの事也けんかしとりかへしにおはしたりけんをりつまもこもれり我もこもれりとよみ給へるは此事なるべしと云々

纎草　百萬に注す

昔哉花も所も月も春　月やあらぬの歌の心なり

夢かうつゝかよひと定めよ　○かきくらす心の闇（古今戀三）にまとひにき夢現とは世人さためよ（業平）　是は次の君やこしの歌の返し也伊物にはこよひ定めよと有榮雅云かきくらす心のやみにまどひて夢共現共我はえ定むまじければ世の人さだめよと也伊物にはこよひさだめよと有齋宮にこよひ來りて定めよと云ふ也云々　詞書曰レ之一說龜山院の御いみ名を世仁（ヨヒト）と申奉ればそれをはゞかりてこよひと直し傳來る云々應山公伊勢物語の聞書云今宵さだめよとは今一夜あはんと也云々

ねてかさめてか　○君やこし我や行けんおもほえす夢か現かねてかさめてか　此歌伊物にあり又古今戀三に入讀人不知と有

春の夜の月あけぼのゝ花にや殘るらん　（草根）光みぬ月ともわかす世は花の匂ひに霞む春の曙

誓願寺

誓願寺號二大本山一始在二南都一天智天皇御本願開基惠隱僧都三論宗也桓武天皇遷都之後遷二城州深草里一圓空上人改二淨土宗一則西山立義內深草派之一本寺也中世移二京北舊誓願寺通小川西一旦此寺回祿文明九年六月造營其後移二三條京極一今の堂は豐臣秀吉公　愛妾松丸殿の再興也　天智天皇西方淨土の彌陀如來を拜し給はん事をねがひて天に祈誓し給于レ時天より女人あまくだる生身の彌陀をおがませたくは賢問子芥子國父子の佛師に作らせ給へとの告により二人して作りし所に夜な／＼春日大明神あらはれ出て二人の佛師に交り給ひ尊像を作り給ふ此故に春日の眞佛と號し奉る也然るに越

前守雅致が女和泉式部齢三十五の時小式部を先たてかなしみのあまり發心して當寺に籠居し念佛三昧にして往生をとげぬ然而一遍上人熊野の御示現により當寺にて御札を結緣し給ふ時和泉式部亡靈と成あらはれ出て誓願寺の額を六字の名號にあらたむる事當寺の緣起に見えたり委き事略レ之　半陶藁云京師誓願寺者西方敎主無量壽大願王道場也天智天皇勅創二其基一殿裏底乃春日慈悲滿行菩薩之所二親刻一也爾來八百餘載感應無レ比矣

おしへの道も一聲の御法を四方にひろめん　おしへは念佛の一聲にて六十餘州をめぐる聖なり無量壽經に乃至一念と說り

是は念佛の行者一遍と申聖にて候　傳云一遍字知眞伊州之河野七郎通廣二男也在俗時有二二妾一供幸一日二妾並レ枕臥時兩婦之髮忽化二二蛇一喰闘良久見レ之大驚拔レ劍斷レ之忽發二菩提心一上二台峰一薙髮自稱二知眞一愛二學於西山善惠一十餘年感得二念佛之敎法一自レ是巡二廻諸州一西抵二八角島一東抵二外濱一常唱二念佛一無二他業一對レ人不レ交二餘談一天性精勤數月不レ臥非二沐浴一不レ解レ帶三衣弊無二綴緝一人與二衣服一替棄二初縵衣一人缺二供食一雖二數日一不レ食莫二乞求之心一建治元年乙亥十二月來二相州藤澤一構二道場一始開二時宗一矣　一遍上人緣起云伊豫國河野七郎通廣次男別府七郎兵衛尉通秀出家而號二知心房一遍上人一童名松壽丸と云始は天台たりしが十八歲の時西山善惠上人にまみへ淨土の一家を試る事十一年其後建治の比時宗を建立す建長中法師になりて學問などありける比親類の中に遺恨をさしはさむ事有て殺害せんとしけるに疵を蒙りながら敵の太刀をうばひ取て命はたすかりにけり發心の始此事也于レ時伏見院正應二年八月廿三日於二攝州武庫一寂す年五十一文略　一遍上人發心の始右兩說いづれか是なる哉　聖の字は遊行柳に注す

我此度三熊野に參り一七日參籠申證誠殿に通夜申て候へばあらたに靈夢を蒙りて候　一遍上人は後宇多院御宇建治二年丙子三月廿五日詣二熊野證誠殿一三七日念佛す衆生利益の結緣を普く弘通せん事をいのり給ひしに權現衣冠正く上人に對して七言四句の文を授記し給ふ謂六字名號一遍法十界依正一遍躰萬行離念一遍證人中上々妙好華于レ時　上人此

御示現に依て六十萬人決定往生の札を書テ老若男女に配與へ六時不斷に踊念佛とて鐘を打大皷をならし彌陀の名號を唱て諸國を弘通し給ふ也已上國阿問答　證誠殿は　舊記云熊野本宮證誠殿號ニ證誠大菩薩ニ或號ニ泉津御子ニ稱ニ地主權現ニ矣　神社考云熊野權現證誠殿本地阿彌陀矣　三熊野は舟橋に記す

ねがひも三の御山を　ねがひも滿るとつゞけたり

三の御山は舟橋に注す

けふ立出る旅衣紀の關守がたづか弓　紀の關は宗祇名所集云高野とかぶろとの中間に紀關有と云いかゞ又蟻との渡と云所也云々　南紀云紀の關の跡は何れの所と云ヿ不レ慥或記云名草郡山口庄中筋村の北六七町計雄山にありたると也云々藻鹽草にたづか弓それは紀國雄山關守が持弓也とつかをたづか弓と云也云々　袖中抄云たづか弓とは考ニ紀伊國風土記ニ云弓のとつかをおほきにする也それは紀伊國雄山の關守が持弓也とぞいへるされはとつかと云をたとゝいへ同五音なればたづか弓と云成べし云々　詞林采葉云爰柿本人麿天平勝寶七年春二月於ニ在大臣橘諸兄卿之東家ニ宴ニ饗於諸卿大夫等ニ于レ時主人大臣問ニ人丸ニ曰古歌云「あさもよひきの關守かたつか弓ゆるす時なく先ゑめる君曰ニ安佐母余比紀ニ其情奈何人丸答曰式部卿石川說曰古俗語傳朝炊食謂ニ之阿佐母與比ニ紀薪也以燎レ之炊レ飯因レ之紀伊國發語以爲ニ阿佐毛與比ニ耳

昔河內國にある男いと志深き妻有或夜男の夢に此歌をよみて云われ君と日比の契り朽ずといへ共明日は遠所へまかる是を形見にし給へとて弓を置けり夢さめてみれば枕の上に弓有て女は行方なし男なげき此弓を手なれ愛しけるに月日へて弓白鳥と成て南へ飛去ぬ男跡をしたひ行に紀伊の雄山と云所にて又女に成てかき消如く失ぬ後に聞ば彼山の關守が持たる弓也と云々已上詞林采葉及袖中抄文略　萬葉仙覺抄云あさもよひと云事ふるくは炊ニ朝飯ニ義也と釋せり然れ共是は必しも飯をかしく義にはあらざるにやもよひと云詞によりて朝飯のよしにいひなせる成べし只寒天にはいつも爐邊をはなれがたく大切なるなかに燎レ火こと朝にはことにすぐれたればあさもよひきとつゞくる事はあたにもえ

てよき木といへるもと云はもゆることは也と云々

花の都　田村に注す

袖をつらね踵を繼て　踵は俗にきびすと云也
説文曰踵追也一曰往來貌也矣　廣韻曰足後也矣王
元長曲水詩序曰中鉉繼二踵平周南一矣

念佛三昧の道場に　念佛三昧は當麻に注す三昧は
善界に記す　道場者天台大師觀經疏曰得道之場名
曰二道場一矣　止觀曰道場即淸淨境界也治二五住糠一
顯二實相米一亦是定惠用莊二嚴法身一矣　弘決曰世
以レ治レ穀及以祭所一俱名曰レ場今依二淨境一以治五住
故曰二道場一矣

名におふは江口に注す洛陽は野宮鬼鐘は隅田川一聲
の内に生るゝは遊行柳に注す

蓮葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあさむく
古今集夏之部僧正遍照歌也詞書云はちすの露を見
てよめると云々榮雅抄云蓮葉の濁りにしまぬ淸淨
なる心をもちながらなど露をば玉と見するぞ正直
にこそ有べけれといへりあざむくは詐と書云々
法華曰不レ染二世間法一如二蓮花レ在水矣　周茂叔愛
蓮説云蓮之出二淤泥一而不レ染濯二淸漣一而不レ妖中通
外直不レ蔓不レ枝香遠益淸亭々淨植上下略

上人　遊行柳に注す

六字名號一遍法十界依正一遍躰万行離念一遍證人中
上々妙好花　六字とは南無阿彌陀佛也名號とは即
ち念佛也此名號一遍唱れば万善万行の功德納る御
法なる故にかく云也十界とは地獄餓鬼乃至佛界也
依とは其十界の國土を皆こめて云正とは十界の中
の心ありて生てはたらく程の品々を皆つがねて云
十界に各依報正報あるを一遍唱れば此名號により
て十界共に成佛する也万行離念一遍證とはもろ
〳〵の功德皆こもる名號なれば終に一遍にて得道
する程に一遍證とは云也證はさとるとよむ也人中
上々妙好花とは念佛の行人は上々の人也故に分陀
利華に喩たり　觀經曰念佛者當レ知此人是人中芬陀
利華矣　善導云言二分陀利一者名二人中好花一亦名二
希有花一亦名二人中之上々花一亦名二人中妙好花一若
念佛者即是人中好人人中妙好人人中上々人人中希
有人人中最勝人也矣

光明遍照十方世界　忠度に注す
唱ふれば佛も我もなかりけりなむあみた佛の聲はか

り　是は一遍上人の御歌也留りは聲ばかりして至誠心深心廻向發願の鐘の聲　是を淨土の三心と云也發願の鐘とつゞけたるに自然居士に詳也　觀經曰若有二衆生一願レ生二彼國一者發二三種心一即便往生。一者至誠心　二者深心三者廻向發願心具二三心一者必生二彼國一矣　疏曰經云一者至誠心至者眞誠者實欲レ明下一切衆生身口意業所レ修解行必須中眞實心中作上矣　又曰言二深心一者即是深信之心也矣又曰言二廻向發願心一者過去及以今生身口意業所レ修世出世善根及隨二喜佗一切凡聖身口意業所修世出世善根一以二此自佗所修善根一悉皆眞實深信心中廻向願レ生二彼國一故名二廻向發願心一也矣　一言芳談云然阿上人云三心を具せざる者もおして決定往生と思へば此故實によりてはじめて三心を具する也云々　又敬佛房云三心をばならひて具するものとな習ひそ云々　一枚起請云三心四修と申事の候は皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふうちに籠候也云々〇極樂へ生れんと思ふ心にてなむあみたふといふぞ二心

十聲一聲數わかて　往生禮讃云稱二名號一下至二十聲一聲等一定得二往生一乃至一念無レ有二疑心一矣〇六の道殘めぐりし〻逢ぬらん十聲一聲捨ぬちかひに　續選擇　滿空上人

夕陽雲にうつろひて西にかげろふ夕月の　夕陽は爾雅曰山東曰二朝陽一山西曰二夕陽一矣　纂要曰日巳曰二朝陽一日暮曰二夕陽一矣　私云毛詩の辭などを考ふるに山の義を斥りと見ゆ又朝日夕日を朝陽夕陽共云兩儀共に用レ之　此かげろふは虫のかげろふに非ず月の影ろふ也夕月は阿古木に注す

五障の雲　梅枝に注す

二世安樂の國にはや生れゆかんぞうれしき　現當二世安樂也彌陀の淨土を安樂國といへり實盛に注す法花云現世安穩後生善所矣

蓮葉の臺の緣ぞまことなる　平等覺經曰於二七寶水池蓮華中一化生矣五會讃云一々池中花臺滿花々惣是往生人矣

涼敷道　利益無量罪　當麻に注す

又は餘經の後の世も彌陀一教と開物を　末の世に成ては一切の諸經皆つきはつる也されど其時は彌陀如來の一教計は世に殘して衆生を利益あると也

無量壽經曰當來之世經ニ滅盡我以ニ慈悲ニ哀愍
留ニ此經ニ止住百歳矣、法ハ御名きへなん後の末迄
も彌陀の敎そ猶殘るべき
八万諸聖敎皆是彌陀佛なるべし　是ハ阿字十方三
世佛彌字一切諸菩薩陀字八萬諸聖敎皆是阿彌陀佛
といへる文によるも也八萬諸聖敎とは世尊一代の説
敎を云也そのおしへひろきといへ共皆是阿彌陀に
こもると云事也 ⊗ 又曰此文の事了譽の二藏義に平
等覺經ニ有と今此經を見るに彼の文更になし又實
惠の摧邪興正集に秘密神呪經にありと今尋ぬるに
此神呪經と題せる經も是なし云々如レ此經文にこ
れなしといへ共淨土三部經の取意を以て祖師たち
の釋し給ふと見へたり　惠心云唱ニ阿彌陀三字ニ即
唱ニ一万三百二十四卷一切聖敎ニ矣
誓願寺と打たる額をのけ上人の御手跡にて六字の名
號になして給はり候へ　當寺六字の額は一遍上人
の筆也當寺再興大施主大和國　御方　々木京極女
爲ニ一世安樂ニとある額は大覺寺ニ菴空ホ親王の筆
也額はつつといはずかくると云也徒然草云門に額
かくるうつと云はよからぬにや勘解由小路二品禪
門は額かくるとの給ひきと云々注云大鏡の上に實
頼公の傳に万のやしろに額のかゝりたるとかけり
平家物語に額うち論有よからぬ言葉成べしと云々
額の字はひたいとよめり人に對するに其額を見て
則何某としるがごとく殿門を望て速に其名をしる
の義に因れりとぞ　或云昔は平人額をかくる事な
し禁中三十六殿九重の門より外にはなし社にては
伊勢岩淸水など天子同體の社寺は七十二ヶ寺天子
御祈願所の外はならぬ事也然るに一條院の時東二
條兼家公に始て法興院と云院號を御免にて額をか
けられしより攝家に額をかくる也額かけぬ家には
下馬もなし今以勅額ならねば門にかける事ならず
と云々
あの石塔は和泉式部の御墓と社聞つるに　誓願寺
の南隣誠心院の庭に和泉式部の墓及影像有式部系
圖に東北に注す謠の前後縁起に見えたり
我も昔は此寺に値遇のあればむすぶ水の　式部當寺
に籠居し尼になり專意と名つく則此寺にて往生せ
り値遇は好久に注す
春にも秋やかよふらし結ふいづみの　○下くゝる水 新千

に秋こそかよふらし結ふいつみの手さへ凉しき
中務　和泉式部をいまんとて此歌を出せり
石の火の光りは柏崎に注す異香薫じは當麻に注す
二十五の菩薩聖衆の御法には紫雲たなびく　十往生
經曰若有衆生念阿彌陀佛願往生者彼佛即
遣二十五菩薩擁護行者矣　選擇決疑抄云二十
五菩薩觀世音大勢至藥王藥上普賢法自在王師子吼
・陀羅尼虚空藏徳藏寶藏金藏金剛藏光明王山海慧花
嚴王珠寶王月光王日照王三昧王定自在王大自在王
白象王大威徳王無邊身已上○續千紫の雲晴引て甘あま
り五の姿待見てしかな
抑當寺誓願寺と申奉るは天智天皇の御願　抑の字
義は晶抄に注す誓願寺は上に記す帝王編年記云三
十九代天智天皇諱葛城近江帝舒明天皇第一皇子母
皇極天皇也二岡本宮踐政九年御宇十年自壬戌
至辛未岡本宮五年大和國高市郡　大津宮五年近江國滋賀郡　元年
佛滅後一千六百九年當唐高宗龍朔二年也十年
十二月三日天皇崩御云々或曰天皇驚馬幸山階
鄕更無還御永交山林不知崩所以御沓落
所爲其陵矣

御本尊は慈悲萬行の大菩薩春日の明神の御作とかや
本尊者　秘藏記云我本來自性清淨亦於世間出世
間最勝最尊故曰本尊矣　慈悲萬行は春日の菩
薩號也春日龍神に注す　菩薩の字は自然居士に
注す世に春日の作と云事春日と云は佛師の名也樂
の假面にも春日が作餘多あり　或云稽文會稽主勳
は河内國春日部邑人兄弟共に佛師也云々是て春日
の作と云也一説に或八一生佛を作り死する時鷲と
成て春日山に飛去けり世に是を春日の作共いへり
又鳥の作と云も此人の作也舊記云鞍作鳥俗云鳥
佛師司馬達等之孫飛彈國鞍作手爲名之子也一日
手爲名入深山求良木見一人神女遂愛之娠
而生兒其貌似鳥故稱鳥其工妙絶最神工也善作
佛及堂聖徳太子寵之而其議工法稱飛驒工匠
飛驒乃生國也興寺丈六釋迦像法隆寺十六羅漢土
佛其外此人之作多矣
神といひ佛といひ只是水波の隔なり　誓願寺の如
來を春日の御作と云に付てかくいふ也
されば毎日　度は西方浄土にかよひ給ひて　釋書
六十九に釋圓能と云人誓願寺の如來を年供養せし

故に地藏菩薩にいざなはれ極樂世界行此如來を拜せし事有此義に依てかくいへる歟

來迎引接のちかひをあらはします　彌陀の四十八願の内第十九の願也聖衆現前ノ願也

笙歌遙に聞ゆ孤雲の上なれや聖衆來迎す落日の前

是は大江定基入道寂照が詩也實盛に注す

昔在靈山の御名は法花一佛今西方の彌陀如來慈眼視衆生あらはれて娑婆示現觀世音三世利益同一体

或曰古德云昔在靈山名法花今在西方無量壽娑婆示現觀世音大悲一躰利衆生矣此文の意尋久に注す私云爰に慈眼視衆生とは法花普門品の文也娑婆示現觀世音とある故に此文を爰に出せり

若我成佛の光りをうくる世の人の　無量壽經に設我得佛とあるを善導大師は若我成佛といへり此故に設猶レ若と釋し給へり又稱讃經には若我得佛と有此文の心柏崎に注す

我力　は行難し　我力とは自力を云也自力他力の事遊行柳に注す

みなれ棹は衆平彼岸は東岸居士樂を極る國は實盛に注す

十惡八邪のまよひの雲も空はれ　十惡は東岸居士に注す　八邪者毘婆娑論曰一邪見二思惟三邪語四邪業五邪命六邪方便七邪念八邪定矣　下掛には十惡萬邪とうたふ也萬は定數に非ず數の多きをいふ歟

眞如の月は山姥爰を去事遠からずは實盛唯心の淨土は柏崎に注す

獨猶佛の御名を尋みんおの〳〵歸る法の庭人　是は古歌歟しらず實盛にも出たり

奇瑞　奇異也亦非常詞瑞とは說文曰嘉祥簡應曰レ瑞矣前漢書董仲舒傳曰天瑞應レ誠而至矣

杜若

伊勢物語云昔男ありけりその男身をえうなき物に思ひなして京にはあらじあづまのかたにすむべき國もとめにとてゆきけりもとより友とする人ひとりふたりしていきけり道しれる人もなくてまどひいきけり三河國八橋と云所にいたりぬそこを八橋といひけるは水行河のくもでなれば橋を八つわたせるによりてなん八橋といひけるその澤のほとり

の木の陰におりゐてかれ飯くひけりその澤にかきつばたいと面白く咲たりそれを見てある人の曰くかきつばたと云五文字を句のかみにすへて旅の心をよめといひければよめる「唐衣きつゝなれにし妻しあればはるぐ\きぬる旅おしそ思ふ　とよめりければ皆人かれ飯の上に泪おとしてほとびにけり云々　從四位上左近衛權中將兼美濃守在原業平朝臣平城天皇御子三品彈正尹阿保親王第五男也故號二在五中將一行平弟也母桓武第八皇女伊登内親王也童名云二曼多羅丸一天長二年八月七日誕生天長三年賜二在原氏一元慶元年正月十五日任二左近權中將一業平躰貌閑　放從不レ拘略無二才學一善作二和歌一于レ時元慶四年五月廿八日辛巳卒歲五十六在原氏系圖三代實錄 伊物諸抄文略　榻鴫曉筆云業平子息滋春父の遺詞に任せ東山吉田の奥におくり納て廟をつく同九月十三日宇治中納言藤原朝雅卿熊野詣の時和泉國大鳥郡を通られしに彼中將靑き衣を着し黑馬のふとうたくましきにのり供奉の者十人計前後に從へて見えられたり朝雅卿夢の如く覺えていかになき人と成給て侍るものをといはれければ中將當時は常に住吉に

こそ侍れとてかきけす樣に失ぬ行平中納言此事を傳聞若や彼中將にあふとて住吉に下りこゝかしこあるかれけれ共音信かはす面影もなし空しく歸らんとせられし夜夢に業平きたり打えみて「思ひ出て神代の事も忘しな昔なからの我身也とは　其儘夢覺ぬそれよりしてこそ人皆彼中將をば住吉明神とは思ひけれ其後七條中宮の御夢に業平見えられ君願くは我骨を和泉國行基建立の地榊の生たらん所に納させ給へと是により形部少輔平之名に仰てかの骨を和泉國へおくり御夢想の地を尋させられしに大鳥の大明神の社の戌亥にこそかゝる所は侍るめれやがてかしこに其骨を納め寺を立出泉寺と名付られたり今の濱寺是也塚を中將塚とぞいふめれ又棟梁大和守たりし時中將の骨を東山より堀うつし大和國添下郡に納めそこに寺を立られたり今の在原寺是也其後延喜の御宇在原寺の柱に虫食の歌あり「在原や中なる里の道とめて祝ひかしつけ宿はしらせん　是により天曆元年七月十一日左少辨菅原光任に仰て中將の靈を神と崇め給へり今の大和の內明神是也又池田社共申とかや又業平今

の平安城にては三條坊門より南高倉面に住れける
となん其家の柱常にも似ずちまき柱と云物にて皆
まろに侍り中頃補明が封せしによりけるとて火に
もやけず久しくありけれど世の末になりて甲斐な
く一とせの火に焼にきと鴨長明は書ける云々　玉淋深秘抄同之

是は諸國一見の僧にて候　此僧は何れの僧ぞしら
ず僧の字は田村に注す

都の字は高砂洛陽は野宮行脚は屋島に注す

同じ浮寝の美濃尾張三河の國に着にけり　浮寝浮
枕など云は水邊の旅體也さだまらずおちつかぬ哀
れをいへり美濃は班女に注す　尾張は景清に注す

三河國は　舊事本紀云參河國造志賀高穴穗朝以二
物部連祖出雲色大臣命五世孫知波夜命一定二賜國造一
矣　大和本紀云三河國は此國に有二三河一一には男
河二には豐河三には矢作河是稱因二此三河一號二三
河國一又男河とは河上に山神あり女神男神一處に
は不レ住而互に峰を隔り其谷より出るを男神河と
云此神世俗には白髭明神と申すかや次に豐河とは
昔此所に長者あり此河上に住居する人屋榮る事卅
里也彼民家豐に榮る故に其流を號二豐河一又矢作河
とは日本武尊東夷征罰の時此所にて多く矢を作り
給ひし故に其處を矢作共いひ河の名にも付給ひし
也文略

又是なる澤邊に杜若の今を盛と見えて候　杜若は
やぶみやうがと云もの也葉は生薑に似て廣し藪の
内陰地に生ず楚詞に出たり杜若をかきつばたと云
はあやまり也世にかきつばたと云は燕子花成べし
杜若には非ず燕子花は三四月に花開く見二福州府
志一水草也又陸地にもうゆ濃紫色にして四時花開
く有又白花あり

光陰は融に注す草木心なしには江口に注す

かほよ花共申やらん　顔吉花と書又かほ花共云毗
江入楚云常陸國にかきつばたをかほ花と云此花咲
時かほ鳥鳴と云々　萬葉仙覺抄云かほ花とはかき
つばた也かほ鳥の鳴時にさけばかほ花と云也云々
八雲御抄云かほ花はうつくしき花也云々

なふ／＼は江口而白は三輪流石は安達原名におふは
江口に注す

色もひとしほこむらさきのなへての花のゆかり共

こむらさきはこき紫也なべてはおしなべて也ゆかりは縁の字也惣て紫にはゆかりとつゞくる也古歌多し又朝顔に注す　拾玉○紫の色にぞ匂ふ杜若ゆかりの池もなつかしきかな

伊勢物語にいはく　一部の中好色の事をほのめかし女の貞節をあらはし又歌の贈答の奇妙なる事を敎へたり全部百二十五段あり此物語を伊勢物語と名付るに古來の說あまた有いもせの物語と云を中略して伊勢物語と名づく或は此物語の內伊勢の狩の使の段に業平齋宮にあふ事第一の不義也物語一部の意伊勢の狩の使の段にこもれり依て伊勢物語と名づく共或は伊勢の二字は陰陽共又金胎兩部に作るなど云說此等は古流の說にて當流には不用よし云り　定家卿伊勢物語奥書云抑伊勢物語根源古人說々不同或云在原中將自記云々又云伊勢筆作也似ニ彼家集文體一是故號ニ伊勢物語一以ニ此兩說一案レ之更難レ決レ之伊勢家集其端文體偏以同レ之是又見ニ先達舊記一庶ニ幾其體一歟兩 不レ知レ之加之此物語名字非ニ彼筆者一何稱ニ伊勢一乎或說云爲ニ狩使一下ニ向伊勢一仍有ニ此名一其說又難レ信文略　宗祇注云非ニ彼筆者一何稱ニ伊勢一哉とあれば黃門の心も伊勢が筆作を以て物語の題號と定らるゝと見えたりされば當流の義也伊勢が筆作に付ても七條后宮へ業平の一期の事を語り奉る事を記せりと定る也此內に業平の自記も詞も相交る所謂作り物語と見るべし云々

爰を八橋といひけるは水行河のくもてなれば橋を八つ渡せるなり　伊勢物語とは詞少し相違せり上に記す八橋は岡崎の宿よりちりふの宿へ越る中間より半道計北の方八橋と云村の中に有南より北へ流るゝ小川に渡したり　闕疑抄云八橋は八には不レ可レ限水は河縱橫なるにあなたこなたへ掛たるを云成べし物の數を八を限りにして云もの也と云々　宵聞云蛛手とは四方より水落あひ縱橫に水の行をいふと云々　東關紀行云行々て三河國八橋のわたりを見れば在原業平杜若の歌よみたりけるに昔人かれいゐの上に泪おとしける所よとおもひ出られてそのあたりをみれ共かの草とおぼしき物はなくて稻のみぞおほく見ゆる一「花ゆへに落し泪の形見とや稻葉の露を殘し置らん　丙辰紀行云三河國八橋は杜若の名所なる事在中將の歌にてかくれなし

今岡崎より地鯉鮒（チリフ）にいたる道より北の方一里計にそれなん昔の八橋也とて所の人遙に指をさしておしへ侍る久敷田と成て今は杜若なし云々　うたゝ寐云三河國八橋と云所を見れば是も昔にはあらず成ぬるにや橋も只一つぞ見ゆる　杜若多かる所と聞しか共あたりの草も皆枯たる頃なればにやそれかと見ゆる草木もなしと云々

ある人杜若と云五文字を句の上に置て旅の心をよめといひければ　　ある人とは業平吾妻くだりの同道の友也物語に友とする人ひとりふたりしていきけりと有此人々也知顯抄云友とする人は紀としさだと云者也此人は正五位上あわのかみになりて貞觀七年四月廿九日に罷下けるにつれたる也云々

唐衣きつゝ馴にして妻しあればはる〴〵きぬる旅おしぞ思ふ　是は折句の歌也古今集旅の部に入古今榮雅抄云唐衣きつゝなれにし妻を都に殘してはる〴〵としらぬ旅の道を來ぬる事よと思ふよし也きつゝもつまもはる〴〵も皆衣の縁の詞也秀句なき歌は常に嫌也是は難題の折句を所望せられてかくのごとくよまでは不レ叶事也當意即妙あはれ深し

云々

跡な隔そ杜若　　かきつばたを垣によそへたり○拾遺愚草關路こえ都戀しき八橋にいとゝへたつる杜若かな

契し人も八橋の蛛手に物ぞ思はるゝ　此意奥に記續古すし戀せよとなれぬ三河の八橋の蛛手に物を思ふころ哉袖中抄に此歌の注云くもでとは橋の柱につよからせんれうにすぢかへて打たる木をばくもでと云に又くもと云虫の手は八つあればそれをやつはしと云にそへてくもでに物を思ふとよめる也云々無名抄云板はさだめもなく置ちらしたるまのくもでに似たればよそへてよめるにや云々

なふ〳〵此冠唐きぬ御覽候へ　禮冠義曰冠者禮之始嘉事之重矣　兼名苑注曰冠黄帝初造レ之也矣日本推古天皇十一年十二月始制二冠位十二階一孝德天皇大化三年制二七色十三階冠一同五年造二十九階一天智帝三年定二二十六階一天武帝十四年正月更改二爵位號一爲二十二階於四十八階一文武帝大寶元年八月改二位階一一品二品三品四品爲二親王位一一位以下初位以上三十階爲二諸王諸臣位一矣已上見二日本紀及國史等一唐ぎぬは

倭名抄云辨色立成云背子(カラヌス)形如二半臂一無レ腰襴之袷衣矣　揚氏漢語抄云背子婦人表衣以レ錦爲レ之矣からぎぬはうはぎの上にかさぬるしり短きぬ也青色赤色の唐衣は色ゆりぬ人は着ざる事也されども昔より女孺は青き唐衣をきたる也　枕草子云おのわらはのきるやうになぞからきぬはみじかききぬといはめ云々

透額(スキヒタヒ)の冠を着し　伊物集註十六歳より内はすきひたひとて額の透たる冠を用ゆと云々　或云額に六七分の穴あり少年は血氣甚敷故に穴をあくると見えたり云々　東齋隨筆云忠義公の御子閑院大將朝光(アサミツ)と申はいみじかりし御世のおぼえにてまじらひの程ことの外にきらを好み給ひて（中略）冠のすき貌も此殿の思ひより給へる也と云々

高子の后の御衣にて候へ(ト)　高子はたかいこととなふる也清和帝の后也號二一條后一贈太政大臣正一位藤原朝臣長良女也陽成院御母也天安二年十一月清和九歲にて即位し給ふ次の年貞觀元年十一月廿日高子十八歲にて五節の舞妓たり同八年に女御にそなはり入内ありいまだ帝につかふまつらでおはしける時業平思ひを深くすと也延喜十年二月廿四日に薨ず年六十九

又此冠は業平の豐の明の五節の舞の冠なれば　豐の明の節會に五節の舞を奏せし也五節は女の舞なり然るを業平五節をまふ事いぶかし公事根源云豐明節會は十一月中辰日也是は今年の稻を神に奉らせ給ひて今日君もきこしめして臣下にも給ふ故に節會行はると云々但諸節會をとよのあかりといふ義あり　日本紀に樂府(トヨノアカリ)宴會と書　塵添壒囊抄云本朝月令曰五節儛者淸御原天皇所制也天皇吉野宮に御座時日暮琴を彈じ給ふに雲氣忽に起て神女髣髴として應レ曲舞擧レ袖五たび變ずる故に此云二五節一云々　伊呂波字類抄云五節舞文德天皇御宇齊衡三年丙子始レ之寬平御時舞姬公卿可レ進レ之由始被二宣下一矣　古今素純抄云或說云大智の御宇震旦より崑崙山の玉を五渡さる其玉暗を照す事一玉の光り十五兩の車に至る其頃又商山より仙女五人來て庭に廻雪の袖を翻す事五度也但天暗き折也彼玉を出して其形を御覽ずる也五仙の舞名異躰也故に名二五節一と云々右說々不レ同也（天乙女玉もすそ

ひく雲の上の豐の明は面影に見ゆ太上天皇
誠は我は杜若の精なり植置し昔の宿の杜若とよみし
も女のかきつばたになりし昔の言葉なり　後撰集
夏部云藤原のかつみの命婦に住侍ける男人の手に
うつり侍にける又の年杜若につけて遣しける良峰
義方（ヨシカタ）「いひ初し昔の宿の杜若色計こそ形見也けり
歌の心は昔いひ初し宿も今はこと人の手にうつり
かはりたれば此杜若の色計こそ形見と見ると也
雲玉集云としかたと云人藤原のかつみにうとくな
りたる人のよみてかきつばたにつけてつかはして
「いひ初し昔の宿の杜若：：男の夢に女のかへしけ
る歌「紫の色に出ずはそれと見しいとゝへたつる
宿の昔を　杜若の精の歌也是より女をかきつばた
と云也云々、今案雲玉集に昔の宿の杜若とよ
みてつかはしけるを夢に杜若の精女に成て紫の
色に出すはと返歌しける也然るを此謡には昔の宿
の杜若と云歌を杜若の精のよめるやうに作るはあ
やまり也又後撰集及雲玉集に上の五文字いひそめ
しとあるを植置しとうたふは相違也又此謡の奥に
此歌の下句色計こそ昔成けれとあるも相違せり又

後撰に義方と有雲玉にはとしかたと有但後撰の説
を是とすべし
又業平は極樂の歌舞の菩薩の現化なればよみ置和歌
のことの葉迄も皆法身說法の妙文なれば　鵝鷺記
云かの中將は極樂の歌舞の菩薩まさに觀音の化身
なり內にはひそかにちかひの道をまもるといへ共
外にはみだりに色をむさばるに似たりと下略　歌舞
の菩薩は法花經に說り又十往生經に遣㆓二十五菩
薩㆒念佛の行者を擁護し給ふ事を說り二十五のぼ
さつとは歌舞のぼさつ也誓願寺に記す　和歌を法
身說法と謂事高砂に記す　止觀曰風音水音我等言
語鳥鳴聲何者不㆓三諦口性聲㆒是曰㆓法身說法㆒矣玄
義云蝦蟇上㆓荷葉㆒唱㆓正覺㆒蜩蟬鳴㆓黃樹㆒轉㆓法輪㆒
矣
此男　雲林院に注す
假に衆生と業平の本地寂光の都を出て普く濟度利生
の道に　阿古根浦口傳云月やあらぬの歌の注に云
法性寂光之地を出て常沒之衆生を利益せり其爲に
伊弉諾尊と現じて國土を作り業平と化しては男女
のならひを旨として衆生の緣を結ぶと云々　玉傳
深秘抄云同歌の注に云月やあらぬと云は我は法身

の如來の變化(ヘンゲ)也衆生化度の爲に此國に來れるに難化衆生のおほきは昔本覺の月にあらぬやらんと讀り春や昔の春ならんとは本覺の春寂光淨土を出てかしこへ歸らんずる道を忘れて本覺の春を忘たるかと云也我身一は本の身にしてとは只我身のみも本覺の薩埵なるとよめり云々

寂光は邯鄲に注す抑は高砂に注す

抑此物語はいかなる人の何事によつて思ひの露の忍ふ山しのひてかよふ道芝の始のもなく終りもなし伊勢物語に業平はしのふ草の思ひ亂るゝがごとく一生好色にめで給ひしやうにかきたれ共元業平は無始無終一心一念の本佛也と云儀にてかくつゝけたり　莊子則陽篇曰無レ終無レ始無レ幾無レ時矣

伊物 ○忍ふ山しのひてかよふ道もなし人の心の奥もみるへく

昔男うゐかうふりしてならの京春日の里にしるよししてかりにいにけり　物語發端の詞なり　うゐかうふりは元服(ウヰカウブリ)　弱冠　初位　初冠いづれもうゐかうふりとよむ也　愚見抄云元服と叙爵と兩説共に用ゆうゐは初也かうふりは爵也五位のかうふりと云は叙爵をいへば業平初て叙爵したる事也と云々　宗祇抄云今は元服の説を用ゆ元服は男の立身の始俗躰の定まる前也云々

元服は　前漢書昭帝記曰元鳳四年春正月丁亥如帝加二元服一注　如淳曰元服謂二初冠一加二上服一也師古曰如淳以爲二元服之服一此説非也元首之所レ著故曰二元服一矣　其下汲黯傳序曰上正元服レ冕是知謂レ冠爲二元服一矣　しるよししてとは知行所の事也奈良に業平の知所あると見てよし業平は平城帝の御孫阿保親王の子なれば御讓の領知もあるべし

私云しるよしと云詞はなべて知行所の事につかふと見えたり　奉納菅廟詩歌之序云藤原爲景此秋文月ふたゝびみことのり有て知よしの地を給ふと云々　かりにいにけりとは愚見抄云鷹狩にいきたる也云々逍遙院堯空云假初に行けり也鷹狩の義は狩衣と云詞に付ていへるにや只暫時の事成べし　狩衣は鷹狩に不レ限いづくもにても着する物也云々いにけりとはいきけり也神代卷に行と書業平元服して奈良へ行たるとつゝけて見る事惡し元服の後いつにても奈良に行と見るべし奈良の京は玉葛に

拾玉 誰すしならの都春日の里に我ゆかはしる由すへき
人のなきこそ

仁明天皇の御宇かとよ　帝王編年記云五十四代仁明天皇諱正良嵯峨天皇第二皇子母曰二太皇大后橘嘉智子一内舎人贈大政大臣正一位清友女也弘仁元年庚寅誕生同十四年癸卯四月十八日辛丑立爲二皇太子一年十四天長十年癸巳二月廿八日乙酉受禪癸巳即二位於大極殿一御年廿御宇十七年都二平安宮一嘉祥三年庚午三月十九日落レ餝同廿一日崩二于清涼殿一御年四十一同廿四日奉レ葬二山城國紀伊郡深草山陵一號二仁明天皇一又深草帝矣

いともかしこき　最貴と書　藻鹽草云いともかしこしは穴賢なり又恐有と云詞也いとは最也かしこしはおそろしき也畏心也云々　拾玉〇けふはいな浮身の跡をつけしとそいともかしこき庭の白雪

大内山の春霞立や彌生の　大内山は内裏を云也春かすみはかの字清てとなふる也彌生は田村に注す孟津抄云末摘花巻に頭中將歌に　諸共に大内山は出つれと入かた見せぬいさよひの月　帝王系圖注云宇多院山陵在二大内山仁和寺西一云々李部王記云天暦二年正月十日大内山火起不レ滅矣又云承平三年四月六日天子放二若狹國所レ獻雉於大内山一矣今案大内山は仁和寺の名所なれ共爰には内裏の事に用たり日本紀に内裏と書ておほうちとよめり源頼政も大内守護の武士にて三位をのぞみし歌に大内山の山守はとよめり云々續拾〇今は又霞隔と思ふ哉大内山の春のあけほの　後嵯峨院

春日の祭の敕使として　冷泉院伊勢物語注云承和十四年三月十三日業平春日祭の使に行也かりと云は假初の儀也是は五位の檢非違使の行使也業平は親王の子なれば此使をすべきにあられ共時のきらにつきて假初の使に行也云々　舊記云春日祭は五十六代清和帝貞觀元年十一月九日に始る臨時祭は九十一代伏見院正應三年二月九日に始る云々　私云春日祭には毎年十一月臨時の祭は二月也此謠に彌生のはじめつかたと作るは相違歟但右の冷泉流伊物注には三月と有是いふかし　江次第云春日祭勅使宇治關白十二歳時寛弘元年二月勤レ使大略濫觴也舞人十人陪從四位八人五位六人五位中將又八人矣殿上にての元服の事當時其例稀なる故に　背聞云

古注云仁明天皇承和七年業平十六歳に元服云々冷泉流伊物注云業平十一より東寺僧正眞雅の弟子にて有けるを十六の歳承和十四年三月十一日仁明天皇の內裏にて元服する也此時業平は五位無官にて左近太夫といふ云々　今案當時其例まれなるによりと作るは業平此時無官といひ若年の時なれ共親王の子なる故に殿上にて元服ある也依てその例まれ也と作る成べし

然れ共世中の一度は榮へ一度はおとろふる　莊子天運篇曰四時迭起萬物循生一盛一衰文武倫經矣前漢韓安國傳曰夫盛之有レ衰猶ニ朝之必暮一也矣

住所もとむとて東の方に行雲のいせやおはりの海つらに立波を見て　住所もとむとて東の方にとつゞけたるは物語にしなのなるの歌の詞書にて云り又いせやおはりの海つらとつゞけたるはいとゞしくの歌の詞書にていへり委く此次に記す　海つらは海きは也海のほとり也眞名本に海頭（ウミツラ）と書萬葉七に川邊（ツラ）と書　伊勢國は野宮に注す●家都思ふいせやおはりの海つらに昔おほえて歸る浪哉光廣

いとゞしく過にし方の戀しきに昔おぼへて歸る浪哉

物語に此歌の詞書云昔男有けり京にありわびて東にいきけるに伊勢おはりのあはひの海つらを行に波のいとしろく立を見て云々又本歌には過行方のと有此歌後撰集十九に入歌の心は都をはなれ田舍へ行事の物かなしきに浪の歸る如く都へかへり度の心也餘情限りなしいとゝしくはいとゞさへ也

信濃なる淺間の嶽に立煙遠近人のみやはとがめぬ

物語に此歌の詞書云昔男有けり京やすみうかりけん東の方に行て住所もとむとて友とする人ひとりふたりしてゆきけりしなのゝ國淺間の嶽に煙の立を見て云々　此歌新古今集に入歌の心は旅にて侘（ワビ）しき心にも淺間の煙の面白さを見て都にのみ住なれてかゝる山の景色をも始て見て我心に感じて遠近人も哀れと見とがめぬ事はあらじと也やは助字也　信濃國淺間山高四里半也腰以上常燃而薰烟無ニ休期一盤石燒飛如ニ浮石一絕頂凹而矣火散每年四月八日唯一日潔齋登レ山人皆以ニ竹筒一貯レ水攜上以浸ニ草鞋一防ニ火氣一也矣

然るに此物語其品多き事ながら取わき此八橋や三河の水の底ゐなく契りし人々の數々に名をかへ品を

かへて　都本及難義抄其外古注に業平吾妻に下りしとは物語の作也都にて好色のあまり悪事など多かりければ大やけのせいむにてつかへをやめさせ東山に蟄居しせしを東と作る也實には下らずと云り但榮雅抄云業平伊勢の齋宮をおかし又二條の后と密通しけるにせうとの人々いきどをりてもとどりをきりて長髪のほど東の方に下向すと云々　私云業平吾妻に下りし事古今後撰大和物語等に分明に載たり然あればあづまに下し事疑なきもの歟見聞抄云只かけたる橋の八あるに非ず業平に契りをこめし人々あまたある中に紀有常が娘二條の后取わきしたしき八人を八橋と云也云々　冷泉流伊物注云八橋とは八人をいづれも捨ず思ひ渡す心也八人といふは三條町有常娘定文妹伊勢小町當純妹染殿内侍初草女也云々　三條町は惟高の母也有常娘を若紫女と云定文娘を疑冬女と云伊勢を唐衣女と云小町を千草女と云當純妹を浮雲女と云染殿内侍を白雲女と云初草女は中將の妹也 已上玉傳秘抄

人まつ女物やみ玉すたれの　人待女は井筒に記す物やみとは物語に行螢の歌の詞書に昔男有けり人の娘のかしづくいかで此男に物いはんと思ひけり打出ん事かたくやありけん物やみに成てしぬべき時にかくこそ思ひしかと下略 玉すだれと云詞も物語の歌にあり「吹風に我身をなさは玉すだれひまもとめつゝいるへき物を

とふ螢の雲の上迄いぬへくは秋風吹とかりにあらはれ　物語に業平歌に「行螢雲の上までいぬへくは秋風吹とかりにつけこせ　惟清抄云後撰五秋部に入たり鳫を本にしたるにや叓は夏の歌也云々　宵闇云宵は暑氣甚しかりしも小夜更て風いと身にしむ計吹て中秋の天の心したる折節鳫も渡るべき程の心地すれば鳫に告こせ也云々　九禪抄云雲の上まて行へくは也鳫來れと螢にいひやる也云々

衆生濟度の我そとは知やいなや世の人の闇きにゆかぬ有明の　鵜鷺記云しるらめや我にあふ身の世の人の闇にゆかぬ便ありとはいひて我に契る所の女をして皆佛果に至らしめんと也住吉の行幸には大悲の權跡を思ひ出て岸の姫松いく世へぬらんと詠め五條のあばら屋にては本地の風光を忘れす月やあらぬとなげく化緣かぎりありて元慶四年五月廿

八日戌の時に五十六にして北に向て終り給ひぬと云々　難義抄云元慶四年五月廿七日の夜よわけに見え給ふ時有常の息女枕により面を合せて悲の泪を流して云君失なん後は思ひの闇にまよひて罪深き道におもむき暗きより暗きに至りなんといへるによめる「知や君我になれぬる世の人の暗にゆかぬ便ありとは　暗より暗きに入と云事東岸居士に注す有明は高砂に注す

月やあらぬ春や昔の春ならぬ　雲林院に注す

本覺眞如の身をわけ陰陽の神といはれしも只業平の事ぞかし　玉傳秘抄云我身一は本の身にしてとは只我身のみも本覺の薩埵なると云々又云伊弉諾化して住吉となり住吉化して業平となる云々阿古根浦口傳云月やあらぬの歌の注に伊弉諾尊にて陰陽の二神とはいはれし神宗化度の都も我伊弉諾の垂迹と云業平と云は只本の身也云々　見聞抄云業平は法身大日如來含那內證意密也云々　又云業平は愛染明王又は天照太神春日太明神也云々　略日本紀云住吉之化身云々　本覺眞如とは天台に立る處止觀に云ニ本理三千ニ眞言には是を云ニ本不生ニ神道には名ニ陰陽不測ニ云々

花前蝶舞紛々雪柳上鶯飛片々金　此詩湯谷に記す

昔男の名をとめて花橘の匂ひうつる（伊物）五月待花橘の香をきけは昔の人の袖のかそする

似たりや〳〵かきつはた花あやめ　あやめの花はかきつはたに似たるゆへににたりや〳〵といへり菖蒲は總名而本草有ニ五種ニ今分爲ニ三種ニ菖蒲石菖白菖是也白菖蒲葉花皆似ニ燕子花ニ而瘦小其花紫色如ニ飛燕狀ニ又有ニ白花者淡紅花者ニ皆變種也

あやめのかづらの　天平十九年五月節會に菖蒲の鬘を冠にかくる當時も女の髮にあやめをむすふなり公事根源に見えたり

蟬の唐衣の　山姥に注す

袖白妙の卯花の雪の夜もしら〳〵と明るしのゝめの　皆白き事をつゞけたり衣色目云卯花衣はうらおもて白し或はおもて白くうら靑き也四月に着ニ用之ニ卯花を雪見草共云白妙は田村に注す東雲は安宅に注す

淺紫の　二位のうはきぬ也天武の御宇八階に着ニ淺紫ニ又持統の御宇には親王の爲ニ服紫五斤にて染る也（衣服令）

花もさとりの心ひらけて　◉心なき植木も法を説なれは花もさとりをさそ開らん　大僧正隆辨

草木國土悉皆成佛　鵜に出たり

遊行柳

遊行柳は下野國と奥州との境芦生(アシノフ)と云所に有右の方に道野邊の清水とて清き流れあり今に名水とす又大木の柳に垣を結ひてむかしの根さしとせり此謠には上總より陸奥へ行に白川の關をも過ぬ是に遊行柳とて名木ありとは謠の作者聞あやまれる歟道筋相違せり芦生は白坂白川よりもこなた也西行此柳を見て道野邊の歌をよめると云事新古今集詞書にも見えず外に證文ありや尋ぬべし　六十餘州

歸るさしらぬ旅衣法に心やいそくらん

をめぐる聖(ヒジリ)なれば歸るさをしらぬもことはり也

是は諸國遊行の聖にて候我一遍上人の教を受　大倉家書云此聖は元祖より十二代目也大塔宮の御子也二代目より代々他阿彌と云也云々　一遍上人は誓願寺に注す　聖者僧之通名也　孔氏傳曰於レ事無レ不レ通謂ニ之聖一孔子對ニ魯哀公一云所謂聖人者智通ニ大道一應レ變不レ窮測ニ物之情性一者也矣釋氏に聖或は聖人とよぶは此義に等し　上人者　般若經曰若菩薩一心行ニ阿耨菩提一心不ニ散亂一是名ニ上人一矣

増一阿含經曰夫人處レ世有レ過能自改者名ニ上人一矣　事物異名之稱ニ僧上人一內有ニ德智一外有ニ勝行一在ニ人之上一名ニ上人一矣

遊行の利益を六十餘州に廣め六十萬人決定往生の御禮をあまねく衆生にあたへ候　六十餘州に六十萬人を對していへり委く誓願寺に注す

此程は上總國に候ひしが　先代舊事國造本紀云上海上國造志賀高穴穗朝天穗日命八世孫忍立化多比命定ニ賜國造一矣　又云下海上國造輕島豐明朝御世上海上國造祖孫久都岐直定ニ賜國造一矣（私云上海上下海上は上總下總を云也）　帝王編年記云安閑天皇元年甲寅四月始建ニ上總國一矣　大和本紀云上總下總の總は木の枝也昔此國に有ニ楠木一其長數百丈帝怪レ之勅使を立て吉凶を勘へさせ給ひけるに天下調伏の木也依て彼木を切せられしかば兩方へ倒けり故に上枝の伏所をば云ニ上總一下枝の伏處を名ニ下總一云々

秋津洲　日本の總名也龍田に注す

心の奥を白河の關路ときけば秋風もたつ夕霧の

能因が歌をふくませたり班女に注す　白河の關は芦生と云所とはたの宿と云所と二所にあり依て白河二所の關と云也能因がよみしははたの宿とてむかしの海道也此謠に昔の海道とうたふははたの宿を云也

いつくにか今宵は宿をかり衣日も夕暮に成にけり

新古今集羇旅部に入定家卿の歌也下句は日も夕暮の峯の嵐にと有詞書云攝政大臣家歌合に羇中晩嵐と云事をよめると云々拾遺愚草に上の五字いつこにかとあり　東野州云分こし方も遠く行末も深き山にて今宵もいつくにか宿をかり侍らん思ひ煩てたゝすみたるにさても今宵に限りたるやうに思ひし事よ峰の嵐に祇宿はからめと理をつけて云歌也云々自讃歌註云旅行の夕の哀れ思ひさとるべし我思ふ人を旅にやりて日もくるればいづくにか宿をまどふと云心也云々

急候程に昔に聞し白川の關をも過ぬ　白川とはいへ共川はなし山道也　愚秘抄云橘爲仲奥州の任にて下りし時白川の關ちかくなりて裝束をあらため從僕まできらびやかにして通られけり下部共いと不審しあへりけるに爲仲云いかにぞさしも名高き白川をみぐるしき體にて通るべきかとこたへ侍し也いとやさしく風流の人也云々

なふ〳〵は江口に注す草木迄も成佛は鵜及芭蕉に注す

老たる馬にはあらね共道しるべ申なり　韓非子曰管仲從二桓公一伐二孤竹一春往冬返迷惑失レ道 管仲曰老馬之智可レ用也仍放二老馬一而隨レ之遂得レ道矣○大和物語夕されは道も見えねと古郷はもとこし駒にまかせてそ行

淺茅生や袖に朽にし秋の霜　新古今集雜上に入左衛門督通光の歌也下句は忘れぬ夢をふく嵐哉と有詞書云寄レ風懷舊と云事をよめる云々東野州云五文字茅屋の心也誠に懷舊也花よ紅葉よと成かはる世上の哀を觀想すれば只袖の泪と成て散失ぬると云事を秋の霜といへり忘れぬ夢とは浮世の夢也風に夢をさます物なれば夢をさまさんと云やうに吹嵐哉とよめりと云々　自讃歌注云あさぢふや袖に

朽にしとは淺茅生の霜に朽る折節我袖は思ひにくつる義也中略忘れぬ夢を吹嵐かなとは往事の夢のうつしこしを淺茅生の若葉より次第々々に朽果るを思ひつらねてゐたる折節嵐は此夢をおどろかすやと云よし也下略

露分衣きて見れは　旅衣也雨の裝束也或は山分衣草分衣の類也（草庵集）夏草の露分衣たちぬれはともしにあくる宮城野の原

朽木の柳枝さびて　さびてと云詞は蟻通に注す
○道の邊の朽木の柳春くれは哀れ昔にしのはれそする（新古）菅家

陰ふむ道はすへもなく　陰ふむ道は右近に注す
○淺見とり先染てけり青柳の陰ふむ道はいまた冬野に爲家

河そひ柳朽殘る　和歌色葉集云河そひ柳とは川のきしに生たる柳を云也　藏玉集に柳の異名を河そひ草といへり（新續古）さほ山の峯に霞はたな引て河そひ柳春めきにけり衣笠内大臣

誠に星霜年ふりたり　星霜とは年月といふに同じ　杜牧集云經ニ幾年ヲ一日ニ幾換ニ星霜矣　白氏文集云荏苒星霜換矣　千載集序云千々の春秋をおくり世々のほし霜をかさねと云々

鳥羽院の北面佐藤兵衛憲清出家し西行と聞えし歌人　佐藤兵衛憲清は西行櫻に注す鳥羽院は殺生石に注す　職原大全云上北面諸大夫四位五位任レ之是令レ昇殿ニ下北面不レ昇殿ヲ但白河院時始置ニ北面ヲ矣私云院の侍を北面と云當今の侍所を瀧口と云春宮の侍を帶刀と云也　禮記曰君之南嚮答陽之義也臣之北面答君之義也矣　周易正義曰不レ易者其位也天在レ上地在レ下君南面臣北面矣　文選曰北面稱レ臣南面稱レ王矣

水無月は賀茂に注す六時は三井寺に注す

新古今に　拾芥抄新古今集廿卷元久二年乙丑三月廿六日依ニ鳥羽院宣ニ參議右衛門督通具大藏卿有家右近中將定家前上總介家隆右少將雅經等撰レ之上皇有ニ御合點ニ被レ定有レ序眞名親經假名攝政書レ之歌數千九百七十八首矣　八雲御抄には歌數千九百八十八首と有　近來風體抄云新古今程おもしろき集はなし初心の人にはわろし心得たらん人は此集を見ん事いかでゐしかるべきと云々

道の邊に淸水流るゝ柳陰しはしとて社立とまりつれ
新古今集夏部題しらず西行歌也　東野州云炎天の
くるしき道を過行に柳の陰に淸水の流るゝを見て
は立寄べき所也結句　立とまりつれと云字此眼也
と云々　雜桟聞書云但立とまりけれなどゝ同じ事
と見るべからずつれのつ文字きとく也しばらくと
思ひて立とまりつるに日をくらし時をうつしける
よと云心也云々　光廣卿詠歌大概云凉しげなる木
のもとなればかりに立よりしに暑氣を忘るゝま
ゝ日も暮したるやうの心なるべし立とまりつれと
云本多分あり堯孝法印の自筆の本にはけれと有け
れにても心同じ云々　此歌新古今に道のべのと有
を此謠には道のべにとうたふ然るべからず謠の作
者失念歟

凉みとるは賀茂に注す思ひの珠は盛久に注す

沅水羅紋海燕回柳條牽レ恨到ニ荊臺一　三體詩李群
玉送レ客詩也沅 水は水の名羅紋は浪の紋也海燕回
と云も春春の景氣をつゞけたり柳條は離別に用語
也荊臺は在ニ江陵府一楚王遊ニ荊臺一即此也　方輿勝
覽曰荊臺在ニ監利縣西三十里士州之南一矣　又云沅
水在ニ辰州沅陵西一矣

今ぞ御法にあひ竹の　竹にとりては唐竹、くれ竹、
河竹、しの竹、なよ竹、さゝ竹、村竹、うへ竹、われ
竹、あはら竹、わか竹、より竹、まの竹、のたけ、とよ
竹、いし竹などさま〴〵有い、れも證文略レ之但あ
ひ竹と云は未だ歌書にも見あたらず　今案體源抄
に笙に合竹と云事あり十二調子の內一調子を四本
五本にて調へ候ゆへ其四本五本を合竹と云也謠に
つゞけたるあひ竹も是にて云成べし◉おさめしる
君と臣とのあひ竹に萬の聲をしらへそふらん 雅朝

衆生稱念必得往生　無量壽經曰衆生稱念必得ニ往
生一矣　又彌陀經にも說り

忽然　野宮に注す

烏帽子も柳さびたる有樣なり　烏帽子に柳佐比或
はもみ烏帽子と云有無位の社人等著レ之　私云柳
さびと云は烏帽子の惣地にあらめのやうなる形あ
るを柳さびと云也

烏帽子狩衣　烏帽子は卒都婆小町に注す狩衣は松
風に注す

あらはし衣は右近に注す非情無心の草木は殺生不及

江口に注す

中々あれや一念十念　無量壽經に乃至十念乃至一念と說り　義寂云言二一念一者謂二事究竟一爲二一念一非二唯生滅刹那等一謂聞二佛名一歡喜回向願生此事得成レ以爲二一念一矣　選擇集云言二一念一者是指二上念佛一矣又十念者義寂云說下憑心稱二佛名一時自然具中足如レ是十念上非下必一々別緣中慈等上亦非下數二彼慈等一爲上十矣

唯一聲の內に生るゝ彌陀の敎を身に受て　般舟讃曰一念之間到二佛國一即現二眞客菩薩衆一矣　往生禮讃曰至二十聲一聲等一以二佛願力一易得二往生一上下略

此界一人念佛名西方便有一蓮生但使一生常不退此花還て爰にむかひ上品上生に至らん事ぞうれしき　五會法事讃曰此界一人念二佛名一西方便有二一蓮生一但使二一生常不退一此華還到二此間一迎矣　言は此界にして中念佛を種として極樂に一ツの蓮花生ずる也其人命終の時は此花還り來て迎といへり　上品上生は極樂の九品の最上を云也觀經に說り

釋迦旣に滅し彌勒いまだ生せず　卒都婆小町に注す

南無や灑濁歸命頂禮　灑濁とは彌陀の智水を我等に灑給へと云心也南無歸命は寶盛に注す

超世の悲願　當麻に注す

他力の舟にのりの道　淨土宗において自力他力と稱する事源は龍樹菩薩の十住毘婆娑論に難易二道を判じ給へり是則自力他力の心也但まさしく自力他力と云詞は曇鸞大師の淨土論注に始て出たる名目也　聖光上人云自力他力聖道淨土相對所西也聖道行修二三學一經二多劫一故名二自力一淨土行信二佛願一順次往生故名二他力一矣　他力の舟の心は柏崎に注す　勸修念佛之記序云藤原兼良他力の舟に掉さして苦海の波をしのぎ樂む國の岸に至るにはしかざる事をしりぬ云々

彼岸は東岸居士に注す一葉の舟皇帝貨狄蜘蛛船の起り皆自然居士に注す

其外玄宗華清宮にも宮前の楊柳寺前の花とて　三體詩云王建華清宮詩酒漫高樓一百家宮前楊柳寺前花內園分レ得溫湯水二月中旬已進レ瓜矣　此詩は玄宗皇帝華清宮を作り楊貴妃と遊覽せし事を作る也詩の心舊抄に記せり略レ之　玄宗帝は楊貴妃に注

す　華清宮は大明一統志三十二曰華清宮在ニ西安府驪山下ニ唐太宗建以ニ温湯所ヲ在初名ニ温泉宮ニ玄宗改曰ニ華清宮ニ治レ湯爲レ池環レ山列レ宮毎歳臨幸内有ニ碧霜九龍長生等殿ニ久廢今湯存焉矣　又楊貴妃に記す

當時洛陽や清水寺の古しへ五色に見えし瀧浪を尋登りし水上に金色の光さす朽木の柳忽に楊柳觀音と顯れ今に絶せぬ跡とめて利生あらたなる歩をはこぶ異地也　楊柳觀音ハ事此謠に作るは清水寺の觀音をいへり但朽木の柳忽に楊柳觀音と顯れ給ふと云事證文いまだ見ず　帝王編年記に此前株者可レ造ニ觀音ニ木也と有又釋書には指ニ庭前株杌ニ曰我以レ是擬ニ大悲像材ニと有案ずるに株　は木の根共木のきりかぶ共よむ也其外今昔物語及字類抄等にも朽木の柳と云事見えず田村と見合しるべし或云楊柳觀音は朽木の柳の儀に非ず觀音應心慈悲にして兎も角も機の樂欲に應同する事楊柳の春風に靡が如し故に惣して六觀音に亘る也云々　觀音懺法に楊枝淨水唯願大悲・云文を唱へ楊枝を以て觀音に水を手向る事有　請觀音經云毘舍離國觀音手中握ニ諸藥ニ楊柳而是洒ニ病人ニ矣　千手陀羅尼經云若爲ニ身上種々病ニ者當レ於ニ揚柳枝手ニ矣　高峰錄云觀世音菩薩現ニ慈悲相ニ聖皎潔眉灣如ニ擘柳ニ矣

蹴鞠の庭の面　公羊傳注曰蹴鞠以レ足逆蹈也矣

劉向別錄曰蹴鞠者黄帝所レ作矣　傳玄彈棊賦序曰漢成帝好ニ蹴鞠ニ矣　魏略曰矣太祖愛レ之毎在ニ左右ニ矣　日本にて蹴鞠の始は拾遺納言譜に用明天皇の御時より始ると有古今著聞には文武天皇大寶九年に始と書り是兩説也案ずるに日本紀に皇極天皇の御時中大兄中臣鎌子など法興寺の槻木の下にて鞠をうつ事見えたり然らば用明より始る説是を用ゆべし

四本の木陰枝たれて　四本懸の事也一本懸三本懸五本懸六本懸などあれ共四本懸を本とする也親長卿記云四本懸松々柳梶矣　鞠秘書云御家には懸の松四本又柳櫻楓松又松三本或又紅葉・本卒人には切立とて竹を四本立る也云々　尺素往來云近日於ニ禁中ニ可レ有ニ蹴鞠御會ニ候隨雨懸之庭候・莊嚴ニ候櫻艮柳巽楓坤松乾各棟ニ奇木怪株ニ被ニ移植ニ候　上下略　飛鳥二樂

〇二本も三本も松は我家のゆるしのなくは誰か植

けん　○同皆の松四本かゝりは位ある人の立たる庭と社きけ

暮に數ある沓の音　　鞠に序破急あり序に鞠の長のびらかに蹴る也破は中程の蹴やう也急は晩景の蹴樣也鞠の長つめてけるゆへに暮に鞠の數しげくなるを暮に數あるとはいへり

柳櫻をこきませて　　此歌盛久に注す

鈎簾の隙洩くる風の匂より　　鈎簾は御簾也　端有レ鈎以揭二卷之一因名二鈎簾一其簾青翠色故名二翠簾一矣　内侍所千首○一夜あけて春たつ今朝の朝戸出にこすの隙もる風も長閑し左大臣

手飼の虎の引綱もながき思ひにならの葉のその柏木の及なき　　源氏柏木卷云夕霧の大將柏木右衛門督など鞠をけ給ふ折節女三の宮の飼給へる猫御簾の內より出たる綱にて御簾のあがりたるに女三の宮を見そめ右衛門督思ひとなる也取意手飼の虎は猫の事也　野王按猫似レ虎而小能捕レ鼠爲レ粮矣○夫人心手飼の虎にあらね共なれしもなとかうとくなるらん

是は老たる柳色の狩衣も風折も　　惣而柳色は青き色を云也　禁裏政要云柳色宿老人着二用之一矣　衣色目云柳かさねはおもて青しうらうす青也二月迄用ゆべし花柳の衣はおもて白しうらあおし青柳の衣はうらおもてこく青しと云々　錺抄云元永元年正月廿六日立后關白柳下重紺地平緒矣　柳若の狩衣は春也二月迄着用する由也　風折烏帽子は卒都婆小町に注す

老木の柳氣力なうしてよは〳〵と　　文集二十八絶句詩云柳無二氣力一條先動池有二浪文一氷盡開矣　柳氣力なうしてとは春は柳の風になびきてしなやかによわき心也

柳花苑とぞおもほえにける　　伊呂波字類抄云柳花苑双調樂也矣　體源抄云柳花苑新樂中曲本者云二柳花怨一而天暦内宴之日有二儀定一被レ改二怨字一定二置苑字一或名二柳花闕樂一云々貞保親王譜云件舞延暦遣唐時生久禮貞茂取レ傳舞也即賜二內敎坊一於二御前一奏レ之渡二大食調曲於雙調一忠房朝臣改レ之矣　岷江入楚云此樂上古には舞ありき今は斷絶と云々　河海云此舞女乃形也如二吉祥天女一舞の躰柔々靜々云々　婆羅門僧正持來云々　大唐には人の死

したる時をたらしく樂を作りて葬送の時是をする
也此柳花苑も人の葬送に作りたる樂也拙吹て見た
れば吉の聲有不審なるとて棺槨を開きてみれば彼
死人蘇生したりそれより吉の樂に用る也云々　已上
岷江入楚

歌舞の菩薩　誓願寺に注す

悅ぶ報謝に舞ふも是迄なりと　報恩謝德と云を略し
て報謝といへり　觀念法門云報ニ謝佛恩一由來稱ニ
本心一上下略　禮記疏曰謝ニ其恩一謂ニ之報一矣　史記大
宛列傳曰與烏孫遣使數十人馬數十匹報謝矣

玉にもぬける春の柳のいとま申さんと　古 ○淺みと
り糸よりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

夕附の鳥　湯谷に注す

別れの曲には柳條を綰　三躰詩云張喬寄ニ維楊故
人一詩離別河邊綰ニ柳條一千山萬水玉人遙月明記得
相尋處城鎖ニ東風一十五橋矣　柳條を綰とは唐には
柳の枝を折輪にして離別の人におくる也心は遠く
ゆくともやがて歸れとの事也

ふし柳　木のよこたはりて伏たるを云也　玉葉 ○浪か
ゝる龍田川原の臥柳梢はそこの玉藻なりけり　俊惠

說文曰柳小楊也矣陸佃云柔脆易レ生與レ楊同類縱橫
顚倒植レ之皆生矣　本草曰時珍曰楊枝硬而楊起故
謂ニ之楊一柳枝弱而垂流故謂ニ之柳一矣

羽　衣

三穗神社在ニ駿河國有度郡一所レ祭一座也神名帳頭
註云三穗津姬矣舊事神社本紀云三穗神社檀原宮天
皇時大戶日別大神出現鎮座矣本朝事跡考云昔神女
飛來懸ニ羽衣於松枝一漁人取レ之神女失レ衣不レ能レ飛
屢求レ之不レ畀焉遂相約授ニ衣神女一悅而飛去其後又
來於レ是土人立レ祠奉レ之矣一云此所有ニ三穗神社羽
衣社兩社一三穗社在ニ平林中一羽衣社去ニ平林一數十
步在ニ沙陵之下一矣　今案三穗神社羽衣社所レ祭別也
彼神女をまつるとと云は此羽衣の社を云歟　神社考
云風土記古老傳言昔有ニ神女一自レ天降來曝ニ羽衣於
松枝一漁人拾得而見レ之其輕軟不レ可レ言也所謂六銖
衣織女機中物乎神女乞レ之漁人不レ與神女欲レ上レ天
而無ニ羽衣一於レ是遂與ニ漁人一爲ニ夫婦一蓋不レ得レ已
也其後一旦女取ニ羽衣一乘レ雲而去其漁人亦登仙矣

長明海道記云昔稲荷太夫と云人天人濱松の下に樂を調て舞けるを見て學び舞けり彼天女人の見るやと思ひて飛去て雲に入其跡を見れば一川の面形を落せり太夫拾ひ取て濱松寺の實物とすそれより此寺に舞樂をしらべて法會を始行す其太夫が子孫舞人氏とす二月十二日當樂會とて寺中の大營也云々

風早の三穂の浦わをこぐ船の浦人さにぐ波路かな

萬葉集第七作者不レ詳「風早の三穂の浦廻をこぐ舟の船人さはく波たつらしも此歌玉葉集羈旅の二に入よみ人しらずと有一本に上の五文字風はやみと有浦廻は總に注す八雲御抄云風早の三穂の浦駿河國と云々又攝洲に同名有萬葉集第三云和銅四年辛亥見二嬢島松原美人屍一哀慟作河邊宮人歌に「かさはやの美保の浦わの白つゝし見れ共さひしなき人思へは嬢島の松原は攝州也

是は三保の松原にはくれうと申漁夫にて候　神社考云三保松原在二駿河國有度郡一有度濱北有二富士山一南有二大洋海一久能山東二於西一清見關田子浦在二其前一松林蒼翠不レ知二其幾千萬株一也殆非二凡境一誠天女降童之所二遊息一也矣はくれうと云名は謠の作者の名付たる歟長明海道記に稲荷太夫と有或抄云安閑帝御宇於二駿河國有度濱一天女降現而爲二舞樂一道守氏翁者傳二此曲一矣　漁夫とは漁はすなどりと訓す說文云漁捕レ魚也矣

万里の好山に雲忽に起り一樓の明月に雨初て晴り

詩人玉屑四云千里好山雲乍斂一樓明月雨初晴矣詩の意明也謠に作る處本文とは相違せり

心そらなる景色かな　續後拾〇いかならはなき世とか思ひ見るからに心空なる天の羽衣　圓融院

忘めや山路を分て清見潟遙に三保の松原に　續古〇忘れすよ清見が關の波まより霞てみへし三保の浦松　中務卿

風むかふ雲のうき波立と見て釣せで人や歸るらん

是は瀟湘の八景の內遠浦歸帆の歌也下句は釣せぬさきに歸る舟人と有凡此八景の歌は皆冷泉中納言爲相卿の作也

松は常盤の聲そかし　天智天皇花畫云松の異名常盤草矣　藏玉〇河すかき立つる宿の常盤草風も夏なき時に

ここそあれ

波は音なき朝なきに　古今榮雅抄云海になぐと云は風ふかで波たゝぬを朝なぎ夕なぎと云莫の字を書云々又和とも書證歌略之

天人の羽衣　長阿含經廿卷曰四天王身長半由旬衣長一由旬廣半由旬衣重半兩矣神の書云風土記云其輕軟不可言也所謂六銖衣乎矣

天人の五衰　往生要集云如彼忉利天雖快樂無極臨命終時五衰相現一頭上花鬘忽萎二天衣塵垢所著三腋下汗出四兩目數眴五不樂本居是相現時天女眷屬皆悉遠離棄之如草偃臥林間悲泣矣

天の原ふりさけ見れば霞たつ雲路まどひて行衛しらずも　元々集云丹後國風土記曰比治山頂有井其名云眞井今既成沼此沼天女八人降來浴水于時有老夫婦其名曰和奈佐老夫和奈佐老婦此老等至此井而竊取藏天女一人衣裳即有衣裳者皆飛上但无衣裳女娘一人即身隱水而獨懷愧居爰老夫謂天女曰吾無兒請天女娘汝爲兒天女答曰妾獨留人間何敢不從請許衣裳老夫曰天女娘何存欺心天女云凡天人之志以信爲本何多疑心不許衣裳老夫答曰多疑无信率土之常故以此心爲不許耳遂許即相副而往宅相住十餘歲爰天女善爲釀酒飮一坏吉万病除之其一坏之直財積車送之于時其家豐土形富故云土形里此自中間至于今時便云比治里後老夫婦等謂天女曰汝非吾兒暫借住耳宜早出去於是天女仰天哭慟俯地哀吟即謂老夫等曰妾非以私意來是老夫等所願何發厭惡之心忽存出去之痛老夫增發瞋願去天女流涙微退門外謂鄉人曰久沈人間不得還天復無親故不知由所居吾何々々哉拭涙嗟歎仰天歌曰天の原ふりさけみれは霞たち家路まとひて行衛しらすも遂退去而至荒鹽村即謂村人等云思老夫婦之意我心無異荒鹽者仍云比治里荒鹽村亦至丹波里哭木村據槻木而哭故云哭木村復至竹野郡船木里奈具村即謂村人等云此處我心奈具志久乃留居此村斯所謂竹野奈具社座豐宇賀能賣命也已上

私云右の丹後の風土記の歌を今爰に出せり家路まどひてと有を爰に雲路まとひてといひかへたり但

雲路といへるが可レ然歟
迦陵頻伽縛捨に注す天路は加茂に記す
はつかなる　かすか也又わづかと云心も有伊勢物
語云昔男はつかなりける女のもとにと云々わづか
なるとはそとあひみし女なり此心也
天人の舞樂　拾芥抄云天人樂大食調曲也無レ舞矣體
源抄云天人樂新樂此樂和邇部大田麿所レ作也東大
寺惣供養之日天童於ニ棟上一令ニ行道一奏レ之矣　但
爰にうたふ天人の舞樂は只天人の歌舞するをいふ
なるへし　雑阿含經曰時有ニ六天女一各乘ニ宮殿一淩
レ虚而行彈ニ奏清琴一我當ニ歌舞一矣天人の舞樂の事
楊貴妃注
天に僞なき物を　蘇子瞻韓文公廟碑云惟天不レ容
レ僞矣馬融忠經天地神明篇曰天無レ私四時行上下略
丹後國風土記云天女云凡天人之志以レ信爲レ本矣
霓裳羽衣の曲　楊貴妃に注す
吾妻遊ひの駿河舞此時やはじめ成らん　冷人家に
東遊と云事有此謡に記する處天女有度濱に降て爲
ニ歌舞一是を濫觴とする也袖中抄云昔し駿河國有度
濱に神女のあまくだりてまひしを野叟のまねびつ
たへてまふを今は駿河舞とてあすまあそびにする
は是也云々　陪従(バイジュウ)云禁裏にてまふを加太舞と云是
は駿河舞也大嘗會にまふを乙女子と云駿河舞乙女
子を合せて神前にて舞を東遊と云也東遊譜云先一
二歌次駿河舞次求　加太於呂之調子高麗双調也矣
それ久堅の天と云は二神出世の古へ十方世界を定め
しに空は限りもなければとて久堅の空とは名付たり
或抄に二神は伊奘諾尊伊奘冊尊を云と有但天地相
定れる事既に國常立尊の御時に始る也案するに此
二神は天神第四の御神埿土煑尊沙土煑尊を指て云
歟公望私記云天地剖判泥末レ乾爾時初生之神也故
云泥土也其後漸々堅固沙土既成是爾時土地之形容
而所レ名也矣久堅とは空といはん枕詞也但古歌に
久堅の月共久方の都共久方の雲井共つゞけたり喜
撰和歌式に月を久堅と云古髓腦に空を久堅と云万
葉仙覺抄云久ガは空也世界を建立するは天地也天
地の間にして八方をも立る也然れば下地堅固なら
ざれば塵灰となる下地つきぬれば四方四維もなし
然るに上天計は替る事なければ久しく堅しと云事
にて久堅のそらとはつゞくる也云々　十方世界は
楞嚴曰世爲ニ遷流一界爲ニ方位一汝今當レ知東西南北

東南西南東北西北上下爲界過去未來現在爲世矣

月宮殿の有様玉斧の修理長にして　酉陽雜俎云大和の初鄭仁本と仁表と云者有時嵩山に遊ぶ忽に路に迷へり人のよく寢たるを見て呼之其寢たる人襆を枕にして座して同君しるや月は七寶を以て合成す其勢は如丸其凹所常に有八万三千戸是を修理するに予も其中の人數なりと則襆を開て見するに斧鑿ありと云々全文略或抄云襆とは頭巾のやうなるもの也と云々玉斧とは玉は稱美の詞也長は鎮共書高砂に注す。。　月宮殿は起世經曰佛告比丘月天子宮殿縦廣正等四十九由旬四面垣牆七寶所成月天宮殿純以天銀天青瑠璃而相間錯二分天銀淸淨無垢光甚明曜餘之一分天青瑠璃亦甚淸淨表裏映徹光明遠照亦爲五風攝持而行矣

白衣黑衣の天人の數を三五に分て一月夜々の天乙女

惠心三界義曰月宮殿内三十天子十五人青衣天子十五人白衣天子月内常有十五天子從月一日至白衣天子一人入月宮殿青衣天子出宮殿外如是次第十五日唯十五白衣天子在月宮中故月圓滿從十六日至三十日每日白衣天子一人去青衣天子一人入月宮故月輪漸缺減也矣　河海抄云おとめはおさなき女を云也万葉に未通女など色々にかけりいまだ嫁せぬ女の事也といへりあまおとめは天人の事也只女の惣名歟云々

ほうしを定め役をなす　ほうしとは拍子也眞字にてもかなにてもひやうしと書てほうしとよむ也然るを本文にほうしとかくはよろしからず

月の桂　酉陽雜俎曰月中有桂有五百丈下有一人常斫之樹創隨合其人姓吳名剛字西河人學仙有過謫令伐樹云々　本草綱目云月桂治小兒月蝕瘡時珍曰吳剛伐月桂之說起于隋唐小說月桂落子之說起于武后之時矣　唐書云垂拱四年三月有月桂子降于台州宋仁宗天聖卯年八月杭州靈隱寺月桂子降如雨拾以進呈寺僧稱之得二十五株下略　世說云徐孺九歲或人曰月中無物當益明徐曰如人眼中有瞳無此必不明矣三界義云世人云月中有桂者爲是實乎答新心論曰須彌山南有大閻浮樹高四千里其影現月中矣世人見彼謂月中有桂非實有桂又瑜伽論曰大海有魚鼈等影現月輪故於月内有黑相現矣

春霞にたなびきにけり久堅の月の桂の花やさくらん
後撰集春上に入紀貫之歌也詞書に延喜御時歌召けるに奉けると云々歌の心は春來れば萬木の花も咲べきに空に霞もたなびけば月の桂も花さかんとなり

天津風雲のかよひち吹とぢよ乙女の姿しばしとゞめん　古今集雜上に入良峰宗貞歌也詞書に五節の舞姫をみてよめると云々心は舞姫を天乙女になして姫のかよひち吹とぢよ乙女の姿の難レ忘ければしばし也其止べきと也此舞姫に心をかけたるには非ず只舞の妙なるをほめてよめり此歌百人一首には僧正遍昭と有古今集には良峰宗貞と有古今素純抄云古今によしみねのむねさだと書は僧の節會に交る事似合されば僧正遍昭とは書ざる也と云々

三保の崎月清見潟富士の雪　いづれも駿河の名所なり富士は富士太鼓に注す

その上天地は何を隔ん玉垣の内外の神の御末にて
玉垣の内外とつゞけたるは日本の惣名を玉垣内國と云也内外とは伊勢の外宮内宮を云也世々の帝天照太神の御末にてましますと云事也日本紀云大己貴大神目ニ此國ヲ曰ク玉牆内國ト矣集韻ニ云玉垣内國謂ニ神國ノ之義ヲ也
玉かきの内津御國の朝日光りへたてぬ春はきにけり　法印定圓

君か代は天の羽衣稀にきてなづ共つきぬいはほならなん　拾遺集に入讀人不レ知と有頭義抄に經曰四十里四方の岩を三年に一度梵天より下りて三銖の衣にそ撫つくしたるを一劫といへり君が代はケ樣に撫ても〳〵つきせぬいははほならんと也云々瓔珞經曰譬如ニ一里若ハ万至十里石ヲ方正等シ以ニ淨居三銖衣ヲ三年ニ一拂ニ盡ス此石ヲ名ニ一小劫ト矣百法抄云廣八百里石三年ニ一拂盡爲ニ一劫ト矣

簫笛琴箜篌　簫釋名云簫肅也其聲肅々而淸也矣文獻通考云簫世本曰舜所レ造其形參差象ル鳳翼ニ長二尺傳雅曰編ニ二十二管ヲ長一尺四寸曰レ簫長尺二寸者曰レ〻　蔡邕曰簫編レ竹有レ底大者二十三管小者十六管長則濁短則淸以ニ蜜蠟ヲ實ニ其底ヲ而增減之則和風俗通云〻一尺〻釋名云二一尺四寸ノ矣　笛風俗通曰笛滌也所ニ以滌ニ邪穢ヲ納ニ之於雅正ニ也長一尺四寸七孔笛音一定盖差歌者從レ笛矣　前漢律曆志曰笛黄帝臣伶倫大夏西方嶰谷竹取造レ笛矣　太平御覽

曰黄帝伶倫毘溪竹取作レ笛矣　琴白虎通曰琴禁也禁二止邪一以正二人心一也矣、山海經曰南方之神祝融生二長琴一是處二搖山一始作二樂風一矣　廣雅曰伏羲氏作レ琴長七尺二寸矣桓譚新論曰神農氏始削レ桐作レ琴絲繩爲レ絃廣雅曰神農琴長三尺六寸六分五絃隋音樂志曰周文王加二二絃一爲二七絃一矣禮記云舜作二五絃琴一以歌二南風一矣爾雅曰大琴曰レ離二十絃矣處胎經曰天帝使三執樂神持二九十九弦之琴一矣琴論曰伏羲氏削レ桐爲レ琴面圓法レ天底方象レ地龍地八寸通二八風一鳳池四寸合二四氣一琴長三尺六寸象二三百六十日一廣六寸象二六合一前廣後狹象二尊卑一也上圓下方法二天地一也五絃象二五行一大絃爲レ君小絃爲レ臣文武加二二絃一以合二君臣之恩一矣右記する處の琴は今の琴には非ず今世に用ゆる琴は箏といひて別なり隋音樂志曰箏十三絃所謂秦聲蒙恬所レ造也矣傳玄箏賦云彈レ箏以二骨爪一阮瑀曰身長六尺應二律數一也弦有二十二一四時度也柱高三寸三才具也二手動應二日月務一也今十三弦其一以象レ閏也矣箜篌文獻通考曰劉熙釋名曰箜篌師延所レ作靡々之樂蓋空國之侯所レ好也矣圖會曰又有レ云二豎箜篌一胡樂也漢靈帝好二之體曲長二十二弦豎抱二於懷中一兩手以齊奏之俗謂二之擘一矣隋音樂志曰箜篌出レ自二西域一非二華夏舊器一樂府雜錄云其掴二十有四弦那知之曰二十五絃矣風俗通曰漢武帝令二樂人侯調依レ琴作二坎侯一矣坎侯箜篌本名也

孤雲の外にみち／＼て落日のくれなひは　大江定基入道寂照詩作歌道聞孤雲上華雜衆迎落日前矣此詩をふくみていへり孤雲とは一片の雲を云也孤はみなしごと訓す落日は夕日を云也書明遠東門行曰杳々落日晩矣

蘇迷盧の山をうつして　蘇迷盧即須彌山也長阿含記云唐言二妙高一舊曰二須彌一又曰二須彌婁一皆訛也高八萬由旬出レ自二金輪際一在二大海中一日月周二其中腹一諸天所二遊舍一四面各一色所レ謂東白銀南瑠璃西玻璃迦北黄金矣○北は黄に南は青く東は白く西は紅なゐにそめいろの山紫式部　此歌の前書に落日の紅葉は波に雪を廻らす白雲とつゞけて此歌をふくませたり是は北の一色を略して殘る三色を云ふかやうに悉くいはずして一つを略する事其例有之也草根○そめ色の山の四おもてめぐりこし心のはて月明夜の空

浮島が拂ふ嵐に　浮島が原をいひかけたり駿河也宗祇名所集云浮島が原は東西三十里也但六町を一里とす富士より南也富士と此原との間は水海也原より南は大海也下略吾妻の道の記云藤原光廣浮嶋が原と云は何となく四方へ遙に廣き野徑也南のはては海北は不盡足高山の麓也云々又陸奥及常陸に同名有東關紀行云此原昔は海の上にうかびて蓬萊の三の嶋のごとくに有けるによりて浮島となん名付たりときくにもおのづから神仙のすみかにもやあるらんといとゞおくゆかしくみゆ云々長門本平家物語云昔は海上に浮て蓬萊の三の嶋のごとくありけるによりて此島をば浮島と名付たるとかや云々風雅（　）吹おろす富士の高根の朝風に袖しほれそふ浮島か原 前参議俊言

雪をめぐらす　廻雪の舞せいへり融に注す

南無歸命月天子本地大勢至　姨捨に注す

左右左さゆふ颯々の　宗筠口傳集云舞は左右左と舞也先づ翁の舞を初とす是返閉のふみ足にて左右左とまふて拟拍子を七ッ／＼と蹈留て五七十二代の神の舞をかなづる也云々　拾芥抄云舞蹈事再拝置レ笏立ニ左右左ニ居ニ左右左ニ取レ笏小拜立再拜矣颯々は高砂に注す○柏木を椎のしづえに折そへて左右さまてやふしまろふへき 堀川院二百首 俊頼

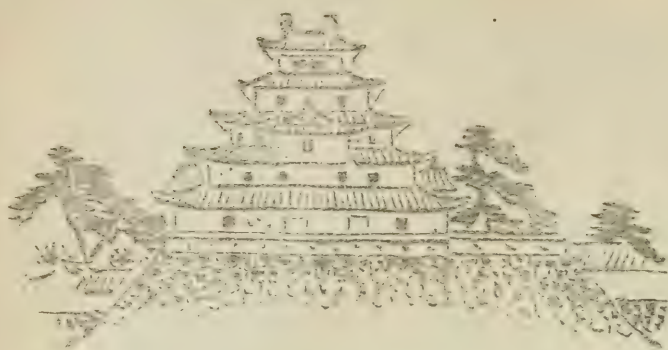
其名も月の色人は三五夜中の　月の色人とはいぶかし是は月の宮人歟宮の字を色の字に書あやまりたる歟但樂天が詩に三五夜中新月色と云を案にふくませたれば月の色人とは云歟

滿願眞如の影となり御願圓滿國土成就　右心明に開へたり眞如は江口に注す

七寶充滿の寶をふらし　三界義云兜率天上雨ニ摩尼ニ雨ニ種々莊嚴寶ニ矣七寶は源氏供養に注す

足高山　在ニ富士ノ東ニ　萬葉仙覺抄云䓍高は五の嶺あり䓍高大明神と申御神まします本地金剛界の大日也富士䓍高南山の間昔は東海道の驛路也云々神社考曰愛鷹大明神本地毘沙門又日不動明王矣富士緣起曰愛鷹明神所レ謂竹取翁是也矣

富士の高根幽に成て天津み空の霞にまぎれて失にけり　富士緣起云貞觀五年秋白衣神女出現雙立舞遊矣都良香富士山記云貞觀十七年十一月五日天甚晴仰觀ニ山峯ニ有ニ白衣美女二人ニ雙ニ舞山嶺ニ上去レ嶺

一尺餘矣○富士（夫）のねの風にたゞよふ白雲を天津乙女の袖かとぞ見る

謠曲拾葉抄卷九

姨捨

大和物語云信濃の國更科といふ所に男住けりわかき時に親は死ければ姨をなん親の如くに相添てあるに此よめの心いと心うき事おほくて此姑の老かゞまりて居たるをつねににくみて男にも此姨のみ心さがなくあしきよしをいひきかせければ昔のごとくにもあらずおろかなる事おほく此姨のために成にけり此姨はいたう老て二重にて居たり猶よめは所せがりて今まで死なぬ事とおもひてもていまして深き山に捨給てよとのみ責ければ月のいとあかき夜女などもいざ給へ寺にたうときわざす見せ奉らんといひてかき負ていと深く山の麓に住ければ其山につる〳〵と入てかぎりなく高山の峯のおるべくもあらぬに置てにげてきぬやゝといへ共いらへもせで家に歸りきておもひおるにいひはらたちてかくしつれど年頃親のごとく養ひつゝ相添にければいとかなしく覺えけり此山の上より月の

いとかぎりなくあかくて出たるを詠めつゝ夜ひとよいもねられずかなしく覺えければ「我心なくさめかねつさら科やをはすて山にてる月をみて　とよみてまたいきてむかへ返してきにけりそれよりのちなんをはすて山といひける云々　又俊頼卿の記に云信濃の國更科郡にをばすて山と云あり昔人のめいを子にして年來やしなひけるが母のをば年老てむつかしかりければ八月十五夜の月のくまなかりける此母をば山にすかしのぼせて歸りにけり只一人山にいたゞきに居て夜もすがら月を見て詠ける歌也さすがにおぼつかなかりければみそかに立歸りて聞ければ此歌をぞうち詠めて泣おりけると云々今案此說は姨が此歌をよめる也又大和物語の說は甥がよめる也いづれか是なる今昔物語に此事委しく出たり其說大和物語に等し

月の名ちかき秋なれや姨捨山を尋ねん　月の名所なるが故に姨捨山を尋ね行也○姨捨山在二信州更科郡屋代宿戶倉宿中間一向有二筑摩川一山の半腹に寺有長閑寺と號す此山のめぐりに十三所の景あり第一を田每の月有明の峰一重山賓が池などゝて其風景見つくしがたき所也　今昔物語云姨捨山其前は冠山と云ける山の頂の巾子に似たりと云々袖中抄云坂東には一に高き國は信濃なり甲斐よりものぼりみのよりものぼり越後よりも上る也其國中におばすて山たかければ月はまことにあかしとぞ申す云々○千忘るなよ姨捨山の月見ても都を出し有明の空頓寶

名におふは江口に注す隈なき月に猶々注すなふ〳〵は江口に注す面白は三輪に注す

秋心なくさめかねつ更科や姨捨山に照月を見て

此歌古今集雜上に入題不レ知よみ人しらずと有古今集雅抄云姨をいざなひて捨たる山に月はかぎりなくあかくあかく出たるを夜もすがら打ながむれどかなしくおほへければ我心なぐさめかねたると甥のよみたる歌也云々　或抄云二條爲氏の說にかの姨の怨念石になりにけると云々　今此石を姨捨石と號す山の腰にあり

是に木高き桂の木の陰社昔の姨捨の其なき跡にて候へとよ　神代卷云門前有二一井一井上有二湯津杜樹一矣　源氏花散里卷云おほきなる桂の木の追風

に祭の頃おほく出られてと云々徒然草云桂の木の
大きなるがかくるゝ迄今も見送り給ふとぞ云々私
云古來の文に桂を用ゆる事は神代巻に本付てつゞ
くる成べし此國の桂の木は月の縁にていへり依て
照月を見てと詠めし人の跡ならばとはつゞけたり
一重山　嵯峨山のめぐり十三所の景の内也○壬生二品花の
色衣かへうき一重山猶白雲はかたみなれとも
風冷スサまじく　御　冷しくはおそろしき事にあらずひや
ゝかなる義也冷しくとばかりいひて秋の季に用る
なり
三五夜中新月色二千里外古人心　三井寺に注す
明はまた秋の半も過ぬへし今宵の月のをしきのみか
は　新勅撰秋上に入權中納言定家歌也下句かたぶ
く月のと有詞書云後京極攝政左大將に侍ける時月
五十首歌よみ侍けるによめる云々歌の心はかたぶ
く月のおしきのみならずはや秋も半過行と也今物
語云有時攝政殿宮内卿を召て近き世の歌にいづれ
か秀逸ありやととはせ給ひければ重て考へ奉るべ
しとて退散しける跡小紙に此歌を書て取落しにる
躰にて指置れけると也　金文略　正徹物語云八月廿日
は定家卿の忌日也我々幼少の頃は常歌所に此日は
歌よみとぶらはれし也時は又秋の半も過ぬべしか
たぶく月のおしきのみかはの歌を一首を一字つゞ
一首の頭に置てよまれける也此歌はらりるれろの
なき故にこの歌にてよまれし也云々
たくひなき名を望月のは三井寺に注す白衣の女人は
羽衣に記すまとゐは安宅に注す
女郎花の草衣　女郎花は女郎花に注す　衣色月云
女郎花衣はおもて青しうら　もゑぎなり　八月着之
云々
思ひ草　百万に注す
寳や興にひかれて來り興つきて歸りしも　晋王子
猷と云者山陰と云所に居たるが冬の夜雪晴て月の
色清く朝也其時戴逵と云者子猷が友たるが剡溪と
云所に有つるを床敷思ひて小船に乗て戴逵が居所
まで往けれ共門に不入返る人其故を問へば對曰
乘興而來興盡而返何必見戴安道耶といひて終
に戴逵に逢ずして返と也安道は戴逵が字也　事文類聚
一輪満清光の影團々として海崎を離　三井寺に記
す

超世の悲願　當麻に注す　無量壽經曰威神光明最尊
第一矣　大彌陀經曰阿彌陀佛光明最尊第一無比諸
佛光明皆所不及也矣
去程に三光西に行事は衆生應じて西方に勸いれんが
爲とかや　是より已下勢至菩薩の因位をのぶる也
三光は日月星也
須彌四域經曰天地初開之時未有日月星辰縱有
天人來下但用項光照用爾時人民多生苦惱於是
阿彌陀佛遣二菩薩一名寶應聲二名寶吉祥即
伏羲女媧是此二菩薩共相籌議向第七天上取其七
寶來至此界造日月星辰二十八宿以照天下定其
四時春秋冬夏時二菩薩共相謂言所以造日月星辰二
十八宿西行者一切諸天人民盡共稽首阿彌陀佛
是以日月星辰皆悉傾心向彼故西流矣　天地本起
經曰阿彌陀佛遣應聲吉祥二菩薩爲日月應聲是
觀音吉祥是勢至矣
月はかの如來の右の脇士として　月は勢至菩薩也
と云事上にも記せり　法花文句云名月是寶吉祥
月天子大勢至應作矣　右の脇士とは勢至ぼさつ

は如來の右の脇たちと云也脇は身の左右の腋の下
也士は大士也觀經曰觀世音大勢至是二大士侍立
左右矣　鈴虫卷云けうじのぼさつと云々脇士と計
云時は觀音勢至の二ぼさつを云也
有縁を殊にみちびき　觀經曰以身光明照十方國
作紫金色有縁衆生皆悉得見矣
重き罪を輕んずる天上の力をうる故に大勢至とは號
すとか　觀經曰以智慧光普照一切令離三
塗得無上力是故號此菩薩名大勢至矣　疏云
明光之體用即無漏爲體故名智慧光又能除息
十方三惡之苦名無上力即爲用也矣　觀經には
無上力とあるを謠には天上の力と作るは相違せり
光と力と有を見て光の字を天の字に見あやまると
見えたり　勢至菩薩は觀經曰此菩薩行時十方世界
一切震動此菩薩坐時七寶國土一時動搖矣　思益經
曰我投足之所振動三千大千世界及魔宮殿故名
大勢至矣知此威勢通方あるぼさつなるが故に大
勢至とは云也
天冠の間に花の光かゞやき玉の臺の數々に他方の淨
土をあらはす　勢至菩薩の天冠の間に西方の淨

土のみならず十方の諸佛の淨土悉うつり顯るゝと
也　觀經曰此寶ニ又庭有ニ五百寶華ニ一々寶華有ニ
五百寶臺ニ一々臺中十方諸佛淨妙國土廣長之相皆
於ㇾ中現矣疏云明ニ他方土現彼此都無ニ增減一矣
玉珠樓の風の音糸竹のしらべとりどりに　此等皆
極樂の體相を云也　往生要集云無量樂器懸ニ處ニ
虛空ニ不ㇾ鼓自鳴皆說ニ妙法一矣　糸竹の調とは絲は
糸のかゝりたる樂器也竹は竹にてしたる吹物也
はち色々に咲ましる寶の池の邊に　蓮者由ニ十三所
の景の內に寶か池と云あり是等を愛にいひかけた
り　藻鹽草云はちのたちはと云々はちすは蓮の葉
に似たるゆへにと云一說也と云々　私云はちといふ
もはすと云もはちすの略語也　長能集云故伊勢守
の娘にものいはんとてはゝの御やすところに「老
らくのなれるすかたの池におふるはちなき戀も我
はする哉
寶の池は極樂の八功德池を云也稍時に注す○いつ（もしほ）
か見ん八のくどくの池に咲四いろのはちす淸き光
に
たつやなみ木の花散て　極樂の池の上の七重行樹
を云也一行々々に並をそろへて植たるやうに見ゆ
る故に行樹といへば愛になみ木とうたふ也たつや
なみ木とは池の波に云かけたり
芬芳しきりに亂たり　芬芳は二字共にかほはしと
よむ也文選ににほやかとよめり　說文云芬芳香也
矣
迦陵頻伽のたくひなき　極樂の六種の鳥の內也六
種とは白鵠孔雀鸚鵡舍利迦陵頻伽共命也觀經曰水
鳥樹林及與ニ諸佛所出音聲一皆演ニ妙法一矣迦陵頻伽
此云ニ妙聲鳥妙音鳥一也大論曰如ニ迦羅頻伽鳥一在ニ
殼中ニ未ㇾ出發ㇾ聲微妙勝ニ於餘鳥一矣　正法念經曰山
谷ニ曠野ニ其中多有ニ迦陵頻伽ニ出ニ妙音聲一如ㇾ是美
音若天若人緊那羅等無ニ能及者ニ唯除ニ如來音聲一
矣
孔雀鸚鵡　孔雀南方異物志曰交趾雷羅諸州甚多生ニ
高山喬木之上ニ大如ニ鴈ニ高三四尺不ㇾ減ニ於鶴一細頸
隆背頭戴ニ三毛一長寸許數十群飛棲ニ遊岡陵一晨則鳴
聲相和其聲ニ曰ニ都護一雌者尾短無ニ金翠一雄者三年尾尚
小五年乃長二三尺夏則脫ㇾ毛至ㇾ春復生自ㇾ背至ㇾ尾
有ニ圓文一五色金翠相繞如ニ錢自愛ニ其尾一山棲必先

捍ニ沼ノ尾之地ニ雨則尾重不レ能ニ高飛ニ商人因往捕レ
之云々鵜鶘はあふむ小町に注す
至らぬ隈もなければ無邊光とは名付たり　無邊光
とは大勢至の事也觀經曰但見ニ此菩薩一毛孔光ニ
即見ニ十方無量諸佛浄妙光明ニ是故號ニ此菩薩ニ名ニ
無邊光ニ矣　釋讃法師妙宗抄云光照ニ十方ニ故立ニ無
邊光ニ稱ニ名矣
然れ共雲井の有時は影みち又ある時は影かくる有爲
轉變の世中の定めなきをしめすなり　罪業應報
經偈曰日出須臾沒月滿已復缺尊榮高貴者無常速過
是矣　見聞集曰日中則昃月盈則缺　天地盈虚
與レ時消息而況於レ人乎況於ニ鬼神ニ乎矣　史記云日
中則移月滿則虧物盛則衰矣　有爲轉變とは花嚴經
日有爲有爲法所謂三界衆生矣　衆生のなす處
皆無常にしてうつりかはるを有爲轉變と云也○誰
も見よみつれはやがてかく月のいざよひの空や人
の世中　定家
胡蝶の遊たはふるゝ　莊子が夢をふくませたり舟
橋に注す
戀しきは昔しのはしきは闇浮の　闇浮は屋島に注
す世を捨て宿を出にし身なれ共猶戀しきはむか
しなりけり　顯基

檜　垣

大和物語云筑紫にありけるひがきの御といひける
はいとらうありおかしくて世を經けるものになん
有ける年月かくて有わたりけるを純友がさわぎに
逢て家もやけほろび物の具も皆とられはてゝいと
いみじう成にけりかゝり共しらで野大貳うての使
に下り給ひてそれが家の有しわたりを尋てひがき
の御といひけん人にいかであはんいづくにか住ら
んと宣へば此わたりに住侍しなど供なる人もいひ
けり哀れかゝるさわぎにいかになりにけん尋てし
哉と宣ひける程にかしら白きをうなの水くめるな
んまへよりあやしきやうなる家に入けるある人有
て是なんひがきの御といひけり哀れがり給ひて呼
すれど恥てこでかくなんいへりける「むば玉の我
黒かみは白川のみつはくむ迄なりにける哉　とよ
みたりければ哀れがりてきたりけるあこめひとか

されはさてなんやりけると云々後撰集云筑紫白川といふ所に住侍りける大貳藤原興範朝臣のまかり渡るついでに水たべんとて立寄てこひ侍りければ水をもて出てよみ侍りけるひがきのうば　一年ふれは我黒かみも白川のみつはくむまて老にける哉　今案朱雀院御宇伊與守從五位下藤原純友筑紫において叛逆をくはたて村上天皇天慶四年にほろびたり大和物語にうての官野大貳は參議小野好古を云也後撰集には藤原興範と有又ひかきが家集には清原元輔と有何れか是なる但此謌は後撰集にもとづきて作る成べし　ひかきの御は清輔袋草紙に肥後國の遊君檜垣とあり又或抄云檜垣の遊女は本筑前にすみて後に肥後國に來り飽田郡白川の邊に住すひがきが墓白川の邊九品山蓮臺寺にあり云々

是は肥後國岩戸と申山に居住の僧にて候扨も此岩戸の觀世音は靈驗殊勝の御事なれば　〽　寶華山雲巖寺巖殿は在ニ肥後國飽田郡ニ本尊は觀音也　緣起云此尊像は昔自ニ異朝ニ至ニ海上ニ値ニ風濤ニ難ニ船頭取テ楫誤融ニ之其像獨乘ニ片板ニ至ニ此岸ニ自入ニ岩洞中ニ故曰ニ巖殿ニ亦號ニ山下巷ニ寂心居士此所に三年居住し給ふ

本堂の右の方に大石有寂心の歌をほり付たり　一立出し旅の衣の日もくれは歸ぞゆかんもとのすみかに此曲の僧に此寂心居士を云或說肥後國は高砂に注す

致景　　風景致景として其所の景を云也

漫々は白髪に注す　あかの水は井筒に注す

かけ白川の水くめは月も袖やからす覽　袋草紙云肥後國の遊君檜垣老後に零落し白川は彼の所にある河也云々　或抄云白河は肥後國阿蘇山より流れ出て阿蘇河と云あそ川南北にわかれ出る南は白川といひ北は黒川といふと云々今案一說白川は筑前國御笠郡今の宰府の町の西南にあり昔の說白川は肥後にある由見え侍れど太宰の大貳の檜垣のおうなが家のわたりを尋ねしは太宰府に至りし時の事也且又純友と好古との軍も宰府にての事也八雲の御抄藻鹽草にも白川は筑後國と記せり但白川は肥後筑前兩國に同名ある歟名寄には肥前國とのせたり

夫籠鳥は雲をこひ歸雁は友をしのぶ　文粹五云有ニ籠鳥戀ニ雲之思ニ來ニ兎ニ轍魚追ニ潭之意ニ實明云

世兵曰籠中之鳥空覩不レ出矣　鶴林玉露曰拘束以
度ニ日月一若ニ鳥在一籠中ニ矣　杜子詩曰孤雁不ニ飲
啄一飛鳴聲念レ羣誰憐一片影相失萬里雲矣　・
貧家にに親知すくなく賤しきには故人うとし　文
粋第一橘在列秋夜感懐探韻曰家貧親知少身賤故人
疎文寒山詩曰富貴疎親聚祇爲レ多ニ錢米一貧賤骨離
非レ關ニ兄弟少一矣
老悴衰へかたちもなく露命極て霜葉に似たり　老
悴及霜葉は卒都婆小町に注す　露命は金剛般若經
曰如ニ露亦如レ電矣　史記曰李陵曰人生如ニ朝露一何
久自苦如レ此矣
値遇をはこふ足引の山下庵りに着にけり　値遇は
醫久に注す山下庵は岩屋を云上に記す足引とは山
といはん枕詞也古今實枕ニ云伊弉諾伊弉冉尊國作
給ひけるに此國には草のみ茂りたるによりて日本を
葦原中津國と云也然るを二柱の神葦を引捨平地と
なし給ふ其所葦積て山と成依レ之葦曳山と云云々
万葉仙覺抄云有抄云山を足引と云に四義有一には
三方の沙彌が羅日に山を越けるに大雪に逢て道を
失ひける時あしひきの山路もしらすしらかしの枝
もたはゝに雪のふれゝはと詠しけれは足を引たる
故にあしひきと云也二には推古天皇山に入て狩し
給ひしに御足に杭を踏たてなやみて引給ひけるに
より山を足引と云三には天竺に一角仙人と云有雨
降て山道にたふれて足を引けるによりてしかいふ
智度論十七に見えたり四には昔天地さけ分れて日
本の土泥いまたかたまらさりける時に人皆山にあ
り山におりのほりするは足を引に似たれば足引と
云也此等の義共はいふにたらず山をあしびきと云
事はやと云は高き義まと云はまろむる義圓也と云
詞也然るに山麓と云は殊に榮へたる木也此木は昔
筑紫の方に多かりけり萬葉第七の歌にあしひなす
榮へし君かほりし井のとよめり山は高く圓なれは
山をいひ出んとする諷詞にあしひきと置る也あし
びと云木なればあしひきといふたとへは櫻を櫻木
柏をかしは木と云がことし然れは山麓と書てやま
と訓するも此義也大宰帥大伴卿歌に「妹として ふ
たり作りし吾山麓は木高くしげく成にけるかも
彼後撰集の歌に　拾芥抄云後撰集二十卷歌數千四
百廿首或千三百五十六首天暦五年辛亥十月於ニ梨

壺一以ニ藏人少將伊尹一爲ニ和歌所別當一能宣元輔順時文望城等撰レ之矣　袋草紙には歌數千三百九十六首と有榮花物語月宴云此御時にはその古今にいらぬ歌を昔のも今のもせんせさひ給ひて後に撰ずとて後撰集と云名を付させ給ひてと云々

古今素純抄云後撰集は獨立の集也其ゆへは萬葉集古今まては知る人まれなれは也後撰といふは古今よりのちの名にあらす萬葉の後撰と可ニ心得一故は順に仰せて萬葉を讀とかしめしより萬葉のこゝろを此ときえて古躰を本とせりされは後撰は詞のとゝのほらぬ歌多し心はしかもゆふに侍る也と云々　此集には序なし

年ふれは我黑かみも白川のみつはくむまて老にける哉　後撰集雜の三に入ひがきの嫗が歌也詞書上に記すこの歌大和物語にはむは玉の我黑かみは白川のと有又檜垣家集には老はてゝかしらのかみは白川のみつはくむまてなりにける哉と有みつはくむとはみつはさす供いふ也老て腰のかゝまりたるを云也白かはのみつくむ事によそへてよめり惣してみつはとは老女を云也　日本紀云罔象罔象女水神也伊弉冊尊所レ生神也矣又髮白老嫗の體也　玄旨云一説云年よりぬれは腰かゝまりせくゝまり二の膝とかりたる中にかしらまじはりて三の輪をくみたることく也云々童蒙抄に與離と書

昔筑前の太宰府に庵に檜垣しつらひて住し白拍子

筑前筑後二ヶ國を筑紫と號す深川に注す　大和本紀云崇神天皇夷國征伐の時紀伊國より御船を押出して筑紫の地を指て漕渡り給ふ中略難風俄に吹來て御船を磯に吹付然れは左右へ押出し漕渡るに又荒磯に吹着たり仍前に御船付たる處を筑前と號す後に付たる所を筑後と云つくちくつとちと相通一韻なる故也云々

太宰府は御笠郡にあり都督府共又西の都共いへり太宰府の跡は國府村の東觀音寺村の西につき山と云小山有其西の田の中にあり大きなる礎多く殘れり其北に都府樓の跡有南に大門の跡あり職原注云太宰府帶ニ筑前國一聖武天皇天平十五年始置ニ鎭西府一先レ是有ニ太宰府號一矣　又曰昔筑前國置ニ太宰府一筑紫是邊要而兵事賊徒多或異朝境界而藩屏地

也故置レ府以防二非常一矣檜垣はたくみなる垣にはあらず檜杉なとの若木にて何となくきれいにゆひたるを云歟○心ある宿のとなりの中檜垣交のかよひのはさまやはなき信實 とよめる體成へし白拍子は佛原に注す　私云爰に檜垣の嫗を白拍子とよふ事よろしからす白拍子は鳥羽院の御時はしまる也檜垣か時分には白拍子といへる名なし時代相違せり

藤原の興範通りし時　三代實錄云仁和三年八月廿二日掃部頭從五位下藤原興範爲二筑前守一文略大系圖云興範守令五代孫因幡守正世子彈正大弼正四位下參議太宰少貳矣

風收二綠野一煙條直雪定二岩頭一月桂圓　此詩作者未レ考詩の心明也

朝に有二紅顏一世路にたのしむといへ共暮爲二白骨一朽二郊原一　和漢朗詠集云義孝少將詩云朝有二紅顏一誇二世路一暮爲二白骨一朽二郊原一矣　此詩無常の意を作れり上句紅顏は若き時うるはしき顏也下句郊原は文選注曰野外曰レ郊矣　或人云是は冷泉院の御時麗景殿女御中陰の時義孝少將の作れる願文也云云

有爲の有樣無常のまことと　心明也

老少と云は分別なしかはるを以て期とせり　老少の姿のかはるは實の變りの期には非す有爲の間の轉變の形也只死する處をかはりの期とするなり　廣韻曰期限也要也矣　眞俗雜書曰來終竟以爲レ期矣

泪曇りの貌ばせは　泪ぐみたる顏也　新古今 有し夜の面影殘る月にさへ泪くもりて遠ざかりぬる　源頼之

今も執心の水をくみ輪廻の姿見え給ふぞや　經にも瞋恚を火にたとへ愛欲の執心を水にたとふる事多く說り楞嚴曰情積不レ休能生二愛水一矣東坡句にも愛河水と作る也輪廻は實盛に注す

今もくるしみを三瀬川に　苦みを見るとつゝけたり三瀬川は三津河也葬頭河共云　十王經曰前大河即是葬頭見レ渡亡人名二奈河津一所レ渡有レ三一山水瀬二江深淵三有二橋渡一官前有二大樹一名二衣領樹一影住二鬼一一名二奪衣婆一二名二懸衣翁一矣　是三津川の翁婆也衣をはき樹にかくると云是也　濟法花陀羅尼

曰亡者往ニ黄泉之道ニ其間有レ河名ニ三津河ニ矣〇物(山家)
思ふ泪ややかて三瀬川人をしつむるふちと成らん
熱鐵の桶を荷ひ猛火の瓶をさげて此水をくむその水
湯と成て我身をやく事隙もなけれとも　ひがきの
御は罪重き遊女なるゆへにかく云也　六道講式云
先言ニ地獄ニ者鐵城固閉熱鐵爲レ地猛火洞然西面充
寒乃至雖レ求ニ清然水ニ鑊湯沸而溺レ身矣
殘星鼎波ニ北溪水ニ後夜爐燒ニ南嶺柴ニ　是は誰の句
ぞ未レ考心は舊抄に見えたり略レ之　鼎説文曰鼎三
足兩耳和ニ五味ニ之寶器也昔禹收ニ九牧之金ニ鑄ニ鼎
荊山之下ニ下略
それ氷は水より出て水よりも寒く青き事藍より出て
藍より深し　荀子勸學篇曰君子曰學不レ可ニ以止ニ
青出ニ之藍ニ而青ニ於藍ニ氷水爲レ之而寒ニ於水ニ注喩ニ
學則才過ニ其本性ニ矣　史記三王世家曰傳曰青采出
レ於レ藍而質青レ於レ藍者教使レ然也矣　意は青き色
は藍より出れ共藍よりも勝れて青し學問油斷なく
勤むれは才本性にすぎ弟子も師匠にまさるへしと
也元ひかきの御は苦み深き遊女の身にして又罪に
沈みくるしみを更るといふ事をいへり〇いか計池(水無瀬殿)
の心も寒からん水より出てゝむすぶ氷に 政秀 〇夏
きては藍より出てあいよりも若葉凉しき山の色か
な 弘貴
いや増りぬる思ひの色紅井の河に身をこかす　思
ひのひの字を火に取なして身をこがすとうけたり
紅の泪は血の泪を云也　袖中抄云つよく泣ぬれ
ば泪つきはてゝ終に血を流す云々　開元遺事云楊貴
妃初承レ恩召時與ニ父母ニ相別泣涕登レ車天寒淚結
爲ニ紅氷ニ文略 大和物語云深草帝の御時良少將と云
人世を捨て法師になりて泊瀬寺に行ふ程に少將の
妻も參詣して二度逢て夜一夜語あかしてあくる朝
に見れは簑も何も淚のかゝりたる處は血の泪にて
なん有けるいみじうなけば血の泪と云ものはある
物になんありけるとぞ文略　禮記曰子皐執ニ親之喪ニ
血泣三年矣　韓非子曰卞和乃抱ニ其璞ニ而哭ニ於楚
山之下ニ三日三夜涙盡而繼レ之以レ血矣〇紅の泪に
袖をせきかねてけふぞ思ひの色に出ぬる 後法性寺
紅花の春の朝紅葉の秋の夕暮も　江口に注す
翡翠のかつら花しほれ桂の眉も　卒都婆小町に注
す

陸奥のけふの細布胸あはす　鉢木に注す

何とか白拍子其侍の有へき　此有へきは有ましきのてにをは也愛の意は世にある時はほまれ有舞なれ共今幽靈の身にて白拍子の舞は心元なきといひたるつゞき也

芦田鶴　屋島に注す

鸚鵡小町

阿佛鈔云あふむかへしと云事歌の返歌にありもろこしにあふむと云鳥は人の物云詞をまねてなく鳥也そのことく人のかたよりきたる歌をその内に文字ひとつふたつ取かへて我歌になして返しするをあふむかへしと申也ある人かよひなれたる女房の所へ行けれはみやつかひ人の事にてその宿へ出あはさりけれはよみてその宿におく也「しらせやは月打受て寒き夜にあはてむなしくかへる心をとよみおけは歌をその次のあしたかの女房宿へ出て此歌を見てあふむかへしになせり「しらせはや月打受て寒き夜にあはでむなしくかへす心をかやうに文字一二の間にて我歌になせり又小町おいおとろへて後大内をゆかしけに見物申けるに大内の女房たち見て小町がはてなるといひ又それにはなきなとゝいひあらそひけるがある女房のいひ給ふやうは歌をよみかけて心を見給へ小町ならは返歌をすへしといひければ歌をよみかけたるに「もとの身の有しすみかにあらね共此玉簾の内やゆかしき　小町はもと大内にはすまぬ也たまたれのうちとはすたれの内の事也此返しに一もとの身の有しすみかにあらね共此玉簾の内ぞゆかしきかやうにあるはみなあふむ返し也已上　寢覺記云中納言重範卿局所よりかへりて内へ参り給ふ時局わたりし給ふを女房たち見給ひて一首「雲の上は有し昔にかはらねと見し玉たれの内や戀しき　と書てなげ出しけるを重範見給ひ折ふしむかひより小松の大臣來り給ひしかは返しに及はすとうろの火のかきあけ木のはしにてやの字をけちてぞと云字をかたはらに書てかへし通り給ひしとなん已上文略私云小町あふむ返しの歌は阿佛抄にあるを此謠に重範卿のあふむ返しの歌を小町歌に作りなしたり

謡の作者阿佛抄をいまだ見ざる歟但歌から異なる
といへ共心は等し

是は陽成院に仕へ奉る新大納言行家にて候　帝王編年記五十七代陽成天皇諱貞明清和天皇太子母皇太后藤高子號二條后贈太政大臣正一位長良二女貞觀十年戊子十二月十六日乙亥誕生於染殿院十一年己丑二月一日立太子二歳十八年丙申十一月廿九日受禪十九年丁酉正月三日即位豐樂殿御年十御宇八年都平安宮天暦三年己酉九月十日庚戌出家同廿九日崩御八十一奉移圓覺寺矣　新大納言行家は系圖未考　新の字を官の頭に置事大納言にても中納言にても宰相にても其官の中の下﨟を云也たとへば大納言今世十人其末座を新大納言と云也　大納言の官は大原御幸に記す

扨も我君敷島の道に御心を懸られ　我君とは陽成院を云也敷島の道は和歌の道也高砂に注す

普く歌を撰せられ候へ共叡慮にかなふ歌なし　陽成帝の御時は和歌撰集の沙汰曾て是なし

爰に出羽國小野良實が娘に小野の小町　小野良實が系圖及小町は卒都婆小町に注す出羽國は葛城に注す

上手は葵上に注す關寺は關守小町に記す

今は百年の姥となりて　世に小町を百とせの姥と云事いぶかし小町は六十九歳にて死すといへり案ずるに小町を百とせと云事は伊物歌に百とせに一とせたらぬつくもがみとよめるは小町業平を戀ける時業平のよめる歌也依て小町を百とせの姥とは云成べし委くしそとば小町に注す

其返歌により重て題を下すべきとの宣旨に任せ　此事何れの抄にも曾て是なし　或云藻壁門院中宮少將は近江國あふきと云所に尼になりて居たりけるに禁中より七夕衣と云題を下されしに新古一秋きても露置袖のせはけれは七夕つめになにをかさましとよみ奉ると云々此ことを小町ことに作りなせる歟韻會云題名也品也一云題也丘陵歌題彼泰山矣歌の題にかな題文字題と云事有かな題とは詞書をながくつゞけて是を題とする也文字題と云はたとへば寄月戀霞間花此等を文字題と云或はむすび題共云也然るにむかしはかな題計にて文字題なし文字題は凡俊成定家爲家三家よりはじま

る也

我は誰をか松坂や四の宮河原四の辻いつまた六の道またならん　四の宮に四の辻とうけたり松坂四の宮は盛久に注す六のちまたは六道を云也數字をつゞけたり○玉葉六の道四のちまたの苦みをいつかかわりて助はつへき行西上人

昔は芙蓉の花たりし身なれ共今は藜藋の草と成　玉造云昨曄面子疑ニ芙蓉之浮ニ曉浪一矣　冷齋夜話云李太白詩曰昔作ニ芙蓉花一今爲ニ斷腸草一以レ色事ニ他人一能得ニ幾時好一矣　格物叢話曰芙蓉之名二出ニ於水一者謂ニ之草芙蓉一出ニ於陸一者謂ニ之木芙蓉一矣　說文曰芙蓉荷華木芙蓉秋花矣　藜藋は大原御幸に注す

顏ばせは憔悴とおとろへ　玉造云容貌顦顇矣　屈平漁父曰顏色憔悴形容枯槁矣　韻會云憔悴憂患也或作ニ顦顇一矣

肌は凍梨のなしのごとし　以上小町が老衰したる事をいへり　玉造云頭如ニ霜蓬一膚似ニ凍梨一矣　郭璞方言注曰梨面色似ニ凍梨一矣　韻會云梨果名又老也矣　爾雅梨耇面凍梨色似ニ浮垢一矣　注疏云凍梨老色也矣　私云注疏の意は凍梨とつゞけたるは老人の膚の色の事なりと云義也色凝て梨肌になるを云也　凍梨のなしと云詞重言なれども古來かやうの例多し若菜上云不定のさだめなき云々　柏木卷云をくれ先だつ道の道理のまゝならで云々　長明海道記云民烟のけふりは父君心體の恩火よりにぎはひ云々　古今榮雅抄云法驗のしるしあるによりて云々　かやうのたぐひを見れば凍梨のなしとつゞけたるも苦しからぬ歟

去とては捨ぬ命の身にそひて　或人是は古歌也といへり下句なかき思ひのうらめしき哉追而尋ぬべし

面影につくもがみ　卒都婆小町に注す

かゝらざりせばかゝらじと　後拾遺集に懷圓法師王昭君をよめる「見る度に鏡の影のつらき哉かゝらさりせはかゝらましやは

實に閑寺はさすがに都遠からで閑居には面白き所也　文選有ニ閑居賦一李善注曰不レ知ニ世事一閑靜居坐之意也矣文中周公云子謂ニ賈瓊王孝逸凌敬一曰諸生何樂瓊曰樂ニ閑居一子曰靜以思レ道可矣　さすがは安

逢原に注す面白は三輪に注す
前には牛馬の通路有て　關寺は逢坂の關の東右の方にありて大津の驛路也依て牛馬の通路といへり
後には靈驗の山高うして　三井寺を指て云歟
松風もにほひ　〇散かゝる花のさゝ浪吹よせて松風匂ふしかの辛崎（家）實隆
しが辛崎の一松は三井寺に注す石山の觀世音瀬田の長橋は田村に注す
たえぬ時は泪の關寺にふり候　泪をせきとゝむるといへる諷詞にて泪の關寺とはつゞけたり名所の關に泪をむすぶ古歌多し略之
我いにしへは百家仙洞のまじはりたりし時こそ
小町盛なりし時は高位に交る事多し小町殿上の交りせし事は何れの抄にも見えず　百家とは百官諸家を云也　百寮訓要抄云百官と云は天子にしたがふ内外の諸官也必百の員數にてはあらざれ共百寮の儀にて申侍る也又百は數の多き義也云々　仙洞は院の御所也奏上に注す
今は花薄穂に出そめて　關寺小町に注す

雲の上は有し昔にかはらねど見し玉たれのうちやゆかしき　此歌は寢覺記に大内の女房重範卿へよみかけしを重範やの字をけちてぞと云文字にて返歌し給へり本歌には内や戀しきと有是を此謠に帝の御歌になし扨小町返歌しけると作れり阿佛抄に小町があふむがへしの歌あり上に記す
かなしやな古き流れをくんで水上をたゞすとすれど
小町衣通姫の流をくんで和歌の源をたゞすとすれど歌はよみがたき物ぞと也此觀一云挹レ流尋レ源聞レ香討レ根矣
貴からずして高位に交ると云事只和歌の徳とかや
江口に白女は弘仁帝にまみえ源さねがつくしへ罷ける時別を惜てよめる歌古今和歌集に入肥後國ひがきの御は參議小野好古にあふてみつわぐむの歌をよみ後撰集に入神崎の宮木は後拾遺集をけがす青墓の傀儡名曳は詞花集をゆり江口の妙は新古今の作者也其外あやしのしづ山賤までも歌をよみて代々の撰集に入事今その例多し
長歌短歌　長歌と短歌は古來より異說多し長歌をば短歌共又三十一字を短歌共いへり　詞林采葉云

東三條入道左大臣圓融院へ奉る皆長きを長歌とし短きを短歌とし侍る也又五條三品京極黄門共に長を長歌短を短歌と分明に被ニ注置一云々　古今榮雅抄云初の五七五の後七五七といくつもつゞきて尤結句に七七ととめたれば始終を見れば普通の三十一字の歌也よみつゞけて見れば又長歌也其句五七五七ときれ〲にあるかたは短歌といはるゝ也云々　私云長歌短歌の沙汰家々の說まち〲也略之

旋頭歌　古今素純抄云旋頭歌は文字の心はかしらにめぐると云心也又はじめにかへるやうの心也三十一字の歌に一句あまりたる歌を云也はじめにかへると云義也云々「萩の花尾花くず花撫子の花女郎花又ふぢはかま朝貌の花　山上憶良

折句　基俊口傳抄云折句とは題の詞を一字づゝ句のかしらに置てよむ歌也小町が人に琴かる歌にことたまへ「ことの葉もときはなるをはたのまなんまつはみよかしへてはちるやと　返しことはなし「ことの葉はとこなつかしみはなせるとなへての人にしらするよ夢

誹諧　榮雅抄云誹諧歌はざれ歌と云利口したるやうの事也世間にはあれたる様なる詞などを云と思へり此集ノ心更にしからずたゞ思ひよらぬ風情をよめるを誹諧と云也躬恒秘藏抄云俳偕と云は狂歌也云々　桐火桶云古今の誹諧には相傳の人またくなし公任卿に御堂殿問給ひしかども終に秘し申てしらずと答へ申されけるとかや古今の大事此事也人毎にたゞ誹諧とは狂歌を云と心得たる計にて侍る程に小智の妨にて至極をしらぬ成べし誹諧と申は譏は利口也物をあざむきたる心成べし心なき物に心をつけ物いはぬものをいはせ利口したる姿成べし可レ秘事也と云々　慈鎭和尚古今集注云誹諧有ニ九種名一一俳階二誹諧三俳譃四滑稽五諧讔六謎字七窓戲八鄭諺九俳言矣

混本歌　基俊口傳抄云混本歌は三十一字の五句の内一句はぶくを云也云々　公任抄云混本は旋頭歌の異名也云々　童蒙抄云混本歌は四條大納言抄に後悔病の歌にぞ入たるいそぎてよみ出るが故に文字の數定らぬを後にくやしく思ふ成べし云々

「朝皃の夕かげまたず散やすき花の世ぞかし　安部清行

あふむ返し　玄旨聞書云鸚鵡かへしの事此鳥の人まねをするやうに同じ詞を取て返歌する事を云也云々童蒙抄云あふむ返しとは本歌にいへる心をことざまならでこたへたるを云べき也返し必さもなきがゆへ也云々　基俊抄云かけ歌の詞を取て同じさまにて返歌するを云也後一條院の春日行幸に上東門院行啓ありしを見て法成寺入道殿よみ給ふ歌に「そのかみや祈り置けん春日野の同じ道にも尋行哉　上東門院の御返しに「曇なき世の光にや春日のゝ同じ道にも尋行らん

廻文歌なり　基俊抄云廻文は上よりよみ下しても下よりよみかへしても同じ歌也云々　をしめ共つゐにいつもと行春はくゆ共終にいつもとめじを

唐土にひとつの鳥あり其名をあふむといへり　本草綱目云鸚鵡如嬰兒之學母語故字從嬰母大者爲鸚鵡小者爲鸚哥矣　說文曰鸚鵡能言鳥也前武紀曰南越獻能言鳥師古曰今鸚鵡隴西南海有之一種白一種青一種五色矣　山海經曰黃山及數歷山有鳥名鸚鵡矣　爾雅曰鸚鵡青羽赤喙如鴞郭璞云舌似小兒有五色者白者赤者凡鳥四指三指向前一向後此鳥兩指向後矣　夫實其いはゝやいはんことの葉を返すあふむの同じ心を

歌のさまさえおうなにて　關寺小町に注す

家々の書典にも紀し置給へり　壒嚢鈔云書者如也寫其言如其意矣　釋名曰書庶也以紀庶物矣　說文曰典五帝之書也矣　爾雅曰典經也法也矣　爰にうたふは家々のつたへと云心なれは書傳と書へき歟

和歌の六義を尋しにも　古今假字序云抑歌さま六つなり唐の歌にもかくぞ有べきそのむくさのひとつにはそへうた大さゝきの御門をそへたてまつれる歌風　難波津に咲やこの花冬こもり今は春へと咲やこの花御位につき給はぬをつき給へとすゝめ奉りたる歌也其事といはずして外よりすゝめ奉りしゆへにそへ歌と云添の字を書べきを風とは如何風は其體なしよそなる木竹にあたりて體を顯すゆへに風をそへ歌と云歌の題を詞にあらはさずしてよそなる物にさにたるをよみたり　ふたつにはかぞへ歌賦　咲花に思ひつくみのあぢきなく身にいたつきのいるもしらすて是は心を思ひ定て慥に

よみたる也數ある物を據にかぞへ置たる體也賦の字はつくすとよむつくすは數のきはまる義也此歌の心は咲花に思ひつきてかぎりなく散をかなしみ咲を待事こそよしなけれと也いたづきは苦み也煩の字を書いるとはしゆく也此歌は拾遺物名につぐみをよめる大伴黑主歌也〻みつにはなずらへ歌「比君に今朝あしたの霜のおきていなは戀しき毎にきへや渡らん　是は一切の物になぞらへて云也霜を我身になして今朝おきていなばとはいへり比の字はならぶとよむ也なすらふりはかならず二つならべてある事也　よつにはたとへ歌興　「我戀はよむ共つきじありそ海の濱の眞砂はよみつくす共我戀を濱の眞砂にたとへたる也打きく時ははじめのそへ歌に似たるやうなれ共是はたとへ物をきらりと出してたとへたりはじめのそへ歌は思ふ事をいはずして外よりにたる事をそへたる也興の字はたとふとよむ也　いつゝにはたゞこと歌雅(カ)　「僞のなき世なりせはいか計人の言の葉嬉しからましことなる風情もなく只見る物きく物をありのまゝに讀る也少もいつはりかさらされはたゞこと歌と云雅の字はまことゝよめり第二のかぞへ歌に似たるやうなれどちがひたりかぞへ歌はたゞふかく思ひ入てよめり　むつにはいはひ歌頌(セツ)　「このとのはむへもとみけりさき草の三は四葉にとのつくりせり　萬の事にほめ悦びたる歌也依ていはひ歌と云頌の字はむるとよむ也歌の心はむべは道理也と云事也とみは榮えけりと也さき草はひの木也さいはひ草と云を略してさき草と云也但幸をはさちといへばさち草と讀べきにひゞきひとつなればさき草と云也三ばは四ばは七つの字を多き事につかふ也

已上恭俊抄

古今序に唐の歌にもかくぞ有べきとは詩の六義を云也詩經大序曰詩有二六義一焉一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌中略一國之事繫二一人之本一謂二之風一言二天下之事一形二四方之風一謂二之雅一雅者正也言王政之所二由興廢一也政有二小大一故有二小雅一焉有二大雅一焉頌者美二盛德之形容一以二其成功一告二於神明一者也是謂二四始一詩之至也矣大全注曰賦者直陳二其事一如葛覃卷耳之類一是也比者以レ彼狀レ此如二螽斯綠衣之類一是也興者託レ物興レ詞如二

關雎兎罝之類一是也矣
小町が歌を社たゞこと歌のためしにひくのみか
小町歌をたゞこと歌のためしと云事未レ勘　恭俊
抄にたゞこと歌は只みゐ物きく物をありのまゝに
よめるとあれば小町が歌の躰もさやうにあるべき
と云事歟
よじやうの花とつくられ　小町が容儀をほめたる
詞也よじやうは舊抄に餘條と書又餘情と書て可
レ然歟花は稱美の詞也
桃花雨をおび柳髪風にたほやかなり　玉造云桃顏
露咲柳髮風梳矣　萬葉集云開二柳葉於眉中一發二桃
花於頰上一
紫筍猶うごきほこり　紫筍とは筍の初て生出るを
云也　白氏文集二十四云青娥遞舞應レ爭レ妙紫筍
齊聲各關レ新矣　同二十六云紫筍折二新蘆一矣
梨花は名のみなりしかど　美人を梨花にたとふる
事楊貴妃に注す　◎
今顦悴とおちぶれてしんていひしゆつする小町ぞ哀
也ける　顦悴は上に注すしんていひしゆつは舊抄
に心底悲怵とかけり玉造云容貌顦顇身體疲瘦矣

如何に小町業平玉津島にての法樂の舞をまなび候へ
此等の事證文いまだ見ず　業平は杜若に注す玉津
島は蟻通に記す
稻荷山　賴政に注す
葛葉の里も浦近く　浦とは和歌の浦を云歟　但
若の浦迄は遙に遠し葛葉の里は河内國交野郡也
日本紀第五崇神天皇卷曰彥國葺射二埴安彥一中レ胸
而殺其軍衆怖走屎漏二于褌一乃褌屎處曰二屎褌一今謂二
樟葉一訛也文略
和歌吹上にさしかゝり　和歌吹上は同じつゞき也
南紀云弱ハ浦は紀州海部郡府城の南一里計にあり
弱或は作二和歌若一海濱に松林あり是は中古植也古
歌にいへる弱の松原に非ず土人いへるは宮山の麓
弱村の中に古へ松原有たる由也昔寺有蘆邊寺と云
土俗相傳弱村の北二町計田疇の中に少し丘あり是
其寺の趾也と云々　吹上の濱は同府城の西南弱の
浦の北にあり松原あり田疇あり人家多し其間に散
在す昔神あり吹上の神と云今尋るに社なし趾も土
人知者なし按に關戶村の北に矢大明神と云あり昔
は大社の由是吹上の神なる歟云々

忍摺木賊色(シノブズリトクサ)の狩衣に大紋(モン)の袴(ハカマ)のそばをとり　伊勢物語に業平しのぶずりの狩衣をなんきたりけると有物語の説は業平の狩衣忍草を紫にてすれる也此謡の狩衣はしのぶ草木を賊色にてすれる成べし大紋の袴は奴袴に八藤の大紋あるを大紋の袴と云四十より以上は淺黄四十より以下は紫也これ大略也しのぶずりの事小鹽に注す狩衣は松風に記す木賊色の狩衣は雲林院に注す

風折烏帽子は卒都婆小町に注す　波かへりは梅が枝に注す

若の浦に鹽みちくればかたをなみの芦邊をさして田鶴鳴わたる　萬葉に赤人の歌也かたをなみは浪に非ず瀉なき也無の字也委く松風に注す此謡にかたをなみのとうたふ事赤人の御心にそむけり唄の作者何と心得ての丶字を一字入られたるぞ恐るべしつ丶しむべし

月にはめてじ是ぞ此つもれば人の老となる物を　伊勢物語云昔いとわかきにあらぬこれかれ友だち共あつまりて月を見てそれが中にひとり「大方は月をもめてじ是ぞ此つもれば人の老となるもの

此歌古今雑上に業平歌と有歌の心は何にても一物に貪著して一身を忘る丶心のおこたりのつもれば老となる處を思ひかへして大方は月をもめでじと思ひとりたる心也　應由公聞書云大かたとは十の物七つ八つの心也云々程に早き光の陰の時人をまたぬならひとは　古語云光陰可レ惜時不レ待レ人。矣　陶淵明雜詩云盛年不二重來一一日難二再晨一及レ時當二勉勵一歳月不レ待レ人矣

卒都婆小町

拾芥抄云小野小町出羽國郡司女或仁明天皇御時承和比人矣玄旨法印百人一首抄云小野良實女又當澄矣二光院御説云當澄女矣　古今榮雅抄云小町が事分明ならず仁明承和の比の人なり出羽郡司が女好色無双の事と云老後は沈倫して奥州にて死去するにやと云々楊鴫曉筆抄云小野小町は好實が女也好實大和守になりて上洛し侍る時近江國玉造の庄にて獨の小女に行あひ則猶子と次云々私云玉造と云一卷の書に大師と小町との問答有則大師の御作と

いへり此謠は彼玉造を以て作る成べし但卒都婆の事玉造には是なし此謠にそとばに腰を掛たると作る故にそとば小町とは名付たる也　又云大師と小町とは時代同じからず曉筆抄云弘法入定は承和二年也其頃小町は三四歲成べしと云々今案弘法入定は仁明天皇の御宇承和二年三月廿一日也小町が盛りは後の事と見えたり多くの人に通じ歌よめる事引合見れば時代相違せり徒然草云おとろへたるさまは玉造と云文に見えたり此文淸行(キヨユキ)がかけりと云說あれど高野大師の御作の目錄に入れりと云々同諸抄に此玉造の事今眞言家へ尋ぬれば御作の目錄に入らずといへり　玉傳深秘抄云小野小町事小町は大師御入定の時は四歲なり爰に大師御作の玉造と云ふ小文に小町衰老の事見えたり此義如何答云此は大師御作の書の中には現世記未來記と云あり今此玉造は未來記の中に入れり然れば小町が末の事を考へ見給へる歟又云仁海僧正の作共云然共大師未來記に入事勿論也實義には此書大師之御作也其故は仁海之夢に大師見えさせ給へて其後仁海作り給へり云々　通念集云玉造の文の事一とせ三

宅昌三寶性院政算に尋けるに大師御製作の目錄九十二番目にありと答られたりとなん其時昌三又問云大師と小町との時代前後せり大師は承和のはじめにかくれ給へり小町が盛りなる事其後の事也其說如何いぶかしとあれば政算重て曰されば小町若年のはじめより其人相をよくしり老衰の末々かくあらんと考へ給ふ成べし是等の事凡慮の及ぶ所にあらずと答給ふとなんいとたふとし下略享德三年甲戌孟夏十日南都東大寺總持院玉造之奧書云右玉造者高祖大師御製作也云々　玉造の文は大師の御製作にうたがひなきものなり作者部類云玉造云小町非二此人事一矣　按ずるに彼玉造の文に倡家の子とあるを見れば歌よみの小町と玉造の小町と別人共見えたり　所詮玉造小町事先達の異義まち〳〵にて一決ならず依レ之徒然草に小野小町事きはめて定かならすといひ榮雅抄にも小町事分明ならずと書給へる實ことはりならんかし

山はあさきに隱家(カクレガ)の深きや心なるらん　心は淺き山にかくれても心のおくは深きものと也　文選五云王康琚反招隱詩小隱隱二陵藪一大隱隱二朝市一矣白

居易歌云大隱住二朝市一小隱入二丘樊一々々太冷落朝市太囂喧不レ如作二中隱一々作二留司官一矣　道を志す者は身を市朝の際に棲しめて心を山林の中に止め置るゝ所必しも山谷深遠なるに非ず只其心意を修るにあり○思ひ入心の奥のかくれかに住はや山はよし淺くとも　後水尾院御製　○おもふそよ市にもすめは住山の嵐はさはく心あさゝを　同　○世をいとふ心はさても過ぬへしかならす山のおくならす共　懷旧　圓經

是は高野山より出たる僧にて候　此僧は弘法大師と見るべし弘法大師姓佐伯氏讃州多度郡人父田公母阿刀氏夢梵僧入レ懷而有レ妊在レ胎十二月生二寶龜五年一十八就二沙門勤操一落髮受二沙彌戒一初名教海後自改二如空一延曆十四年登二東大寺壇一受二具足戒一又改二空海一同二十三年五月入唐中略于レ時承和二年三月廿一日寅時寂年六十三元亨釋書略　高野山は紀州伊都郡也號二金剛峯寺一弘仁七年丙申六月空海初開二高野山一矣　御廟所のめぐりに轉軸山楊柳山摩尼山とて三山あり此三ツの山かなへの如くにたてり高野山と云は惣名と心得べし但外に高野山あり昔より人間不通の所なれば行てふたゝび歸らざると也常に仙人の住ければ姑射山共云歌によむたかの山と云は是也とぞ通意集取　帝王編年記云弘仁七年弘法大師入二高野山一占二入定處一中略異朝取レ投之三鈷在レ此密教可レ弘之一境決定七里之外西鬼却去八葉之峯善神擁護捨二高雄一住二此處一移二經像一安置中金堂者天皇御願大師建立也四面周帀七間々々四十九間四表二都卒内院四十九重摩尼殿一也大塔高十六丈其中一丈八尺大日一丈四尺四佛是則天皇御願也中間二天持國多聞實惠僧都建立也西塔九丈塔本尊金剛界五佛眞然僧正建立也御影堂者實惠僧都造二立之一奉二大師御弟子眞如親王一令レ書二御影一給大師自手入二御眼一給矣

夫前佛は既にさり後佛はいまだ世に出す夢の中間に生れきて　前佛は釋迦後佛は彌勒也夢の中間は今生を指て云也　菩薩處胎經曰彌勒出世五十六億七千萬歲之後化二生儴佉王項上一文略　婆沙云經二於五十七倶胝六十百千歲一慈氏如來應正等覺矣　釋迦入滅は安宅及春日龍神に記す　愚迷發心集云遙生二佛前佛後之中間一無二出離解脫之因緣一矣　本朝

文粹第七云江匡衡願文云涅槃山上釋尊日早藏生死海中慈氏月未レ照悲哉我等衆生進不レ遇二釋尊一退不レ期二慈氏一恨止二其中間一空欲レ歸二三惡一是而不レ勤後悔不レ及矣

適受難き人身をうけ値がたき如來の佛敎に逢奉ること　心要雜和集云悲哉我等雖下受二難レ受人身一値中難レ値佛敎上出離生死思闕無二頓證菩提志一矣（新古）受難き人の姿に浮ひ出てこりすや誰も又沈むへき　慶政上人（玉葉）○逢難き御法の花に向ひてもいかて誠のさとり開けん　爲家

生れぬさきの身をしればあはれむべき親もなし親のなければ我爲に心をとむる子もなし　一切衆生は本來本覺の如來なれども煩惱惡業の緣に依て自他の形相となる也心地觀經偈曰世人爲レ子造二諸罪一墮二在三途一長受レ苦男女非レ聖無二神通一不レ見二輪廻一難レ可レ報有情輪廻生二六道一猶如二車輪一無二始終一或爲二父母一爲二男女一世々生々互有レ恩若生二極樂一知惠高明神通洞達世々生々恩所知識隨レ心引接以二天眼一見二生處一下略　一休水鏡云抑皆人たちのさとりやらん云事をさとるそのならひ初めに父母もなきとつと以前の我が身は何者ぞいへきかんと云何としてしらぬ事が可レ被レ申候哉只へんてつもなき物也と思ふべしたとへば吉野初瀨の花紅葉色々に咲て散て又もとの根に歸るがごとし「本來もなき古しへの我なれはしに行方も何もかもなし

千里を行くも遠からず　戰國策曰儼然不レ遠二千里一矣止觀曰千里三路不二謂爲一レ遙數歩之地不二謂爲一レ近矣

野に臥山にとまる身の是ぞ誠の住家なる　法花方便品曰我常獨處二山林樹下一若坐若行矣　藥草喩品曰獨處二山林一常行二禪定一矣（古）いつくにか世をはいとはん心こそ野にも山にもまとふへらなれ　素性

身は浮草をさそふ水　此歌關寺小町に注す

哀や實古へは憍慢尤はなはだしう　小町若かりし時は人に寵愛せらるゝゆへに夫に奢る心有　玉造云壯時憍慢最甚矣　大論曰憍慢是顚惡之本矣　倶舍論曰憍由レ染二自法一慢對二他心一擧矣　弘決云自矜曰レ憍陵レ他曰レ慢矣

翡翠の簪は嬋娟とたをやかにして楊柳の春ハ風になびくが如し　玉造云嬋娟腰支誤二楊柳之亂二春風一

矣翡翠は鳥の名也又翹共書簪には鳥の形を作る也
楊貴妃に注す楊柳は二字共にやなぎ也　翡翠は格
物論云形小不レ盈レ握一種而二色翡赤羽翠青羽矣
色葉字類抄云翹鳥尾上長尾也俗云二翡翠一也矣　婀
娜は韻會云美貌矣　曹子建洛神賦云華容婀娜令二
我忘一レ餐矣　遊仙窟云華容婀娜矣
又鶯舌の囀りは　小町がものこしをほめたる
玉造云鶯囀三春之始早翫二雪梅一矣
露をふくめる糸萩のかごと計に散そむる　又咲そ
むるとうたう流もある是然るべしかごとは少しの
心也櫻川に注す
都は人目つゝましや　つゝましとははづかしき也
人めをつゝむ心也　源氏帚木巻云いとはづかしく
つゝましげに云々
雲井百敷や大内山の山守もかゝる浮身はよもとがめ
じ木隱てよしなや　大内を雲井といへり　天子を
日にたとへて諸卿を月卿雲客或は雲の上人共云ケ
樣の詞により雲井と云也　百敷とは河海抄云百官
の座を敷ゆへに百敷と云也云々　八雲御抄云百礒
城　同百寮と書後水尾院詠歌大概抄云もゝしきのき
の字逍遙院は濁稱名院は淸と云々惣じて逍遙院は
濁かち也稱名院は淸たる事おほしと也云々大内山
の山守とは禁中守護の武士を云也　○新千人しれぬ大
内山の山守は木隱てのみ月を見るかな賴政　賴政家
集云此歌の詞書に大内守護ながら殿上ゆるされぬ
事を思はぬにしもなかりける頃行幸なりて侍ける
に大宿直小家にかくれ居て侍るに月あかゝりけれ
ば丹後の内侍のもとへ遣はしけると云々
鳥羽の戀塚秋の山　戀塚は在二下鳥羽一號二戀塚寺一
盛衰記云遠藤武者所盛遠は他の妻の美なるを見て
其夫を殺し妻を奪はん事を則て其妻にかたる妻詭
て其夜我室に入夫を殺し給へと云盛遠悅び或夜忍
び入て夫の首を得て去出て見れは妻の首也盛遠此
妻の貞心を感じ且悔且泣て髮をきり僧となり改二
文覺一高雄山に隱ると也又略此戀塚は彼妻の首を埋
める地と云　長門本平家物語云盛遠が殺しゝは渡
左衛門が妻也母を衣川と云彼女房を鳥部山へおく
りにける盛遠出家して盛の字を法名として盛あみ
だ佛とぞ申ける失にし女の骨を取てうしろの園に
塚をつき三年の忌景迄ぎやうだう念佛退轉なくつ

とめつゝかの往生をぞいのりける渡左衛門も出家して法名渡あみだ佛と申ける取意　或云中比津の國の渡部黨に左衛門尉渡と云者の妻にあとまといへる女あり母の名を衣川と云そのむすめなればとて袈裟とも人はよびけり云々　秋の山は在二上鳥羽南一昔此所に鳥羽法皇の離宮あり秋の山は四季遊覽の地の一つ也と云り　安樂壽院記云古老傳鳥羽秋山者離宮掖庭之假山又今中島村者南庭池中之芳洲云矣　衣うつ鳥羽田の里の稲莚夜さむになりぬ秋の山風續後拾後光　鳥羽は紀伊郡也 小枝橋を隔て北を上鳥羽南を下鳥羽と云也

月の桂の川瀬舟　月の桂は羽衣に注す桂川は野宮に注す

是なる乞食の腰懸たるは　善見曰分衛此云二乞食一矣僧祇曰乞食分二施僧尼一衛護令レ修二道業一故云二分衛一矣彌陀經義疏云比丘或云二苾蒭一此翻二乞食一資身乞レ法練レ心矣　是は佛法修業の爲に食を乞也此謠の乞食は世におちぶれたるを云也

敎化してのけうするにて候　增韻云凡以二道業一誨レ人謂二之敎一躬行二於上一風動二於下一謂二之化一矣

いかに是なる乞丐人　說文曰乞求也丐乞也亡人爲レ丐矣　蒼頡篇曰乞行請丐字體从レ人从レ亡言人亡二財物一行求匃矣　無量壽經曰貧窮下賤乞丐孤獨矣　乞匃丐の三字共に字意同じ

忝くも佛體色性の卒都婆にてはなきか　佛體にひとしき卒都婆と也　釋氏要覽云梵語塔婆此云二高顯一今略稱レ塔也又梵云二蘇偸婆一此云二實塔一又梵云二窣堵婆一此云レ墳又云二抖擻婆一此云二讃護一或云二浮圖一此云二聚相一矣　秘藏記云有二舍利一曰二卒都婆一无二舍利一曰二制底一又曰二斯底一漢家省略而呼二卒都婆一曰レ塔矣

是程に文字も見えず刻める形もなし唯朽木と社見えたれ　九相詩第九古墳相詩云石上碑文消不レ見矣

二人比丘尼云々　宵は此堂にあかさばやと思ひ立よりてあたりの體を見侍るに苔むしたる石塔に蔦かづらはひまとひ朽たる卒都婆文字も見えず上下略　父子相迎云なきあとのしるしに殘る卒都婆だにもたか爲とかく文字さへかすかに消ぬる社かなしけれそれもかたなく朽ぬれば古墓何世人不レ知二姓與一レ名とゆきゝの人のくちすさみになりゆく身の

はて社はかなくあぢきなき云々
夫卒都婆は金剛薩埵(コンガウサツタ)假に出化(シユツケ)して三摩耶形(サンマヤギヤウ)を行(コナイ)給ふ　金剛薩埵者金剛部諸尊通號也十六尊最初金剛薩埵亦曰二金剛手一　大疏一云梵云二播尼一即是手掌掌持二金剛一與二手執一義同故經中二名互出也矣　理趣釋上云此菩薩本是普賢從二毗盧遮那佛二手掌一親受二五智金剛杵一即與二灌頂一名レ之爲二金剛手一矣　三摩耶形者梵語也又曰二曼荼羅一唐云二本誓一曼荼羅有二四種一一色大曼荼羅云二衆生地水火風一二三摩耶曼荼羅衆生心法有二半月蓮華形一三法曼荼羅指二諸尊陀羅尼一四羯磨曼荼羅行住座臥威儀爲二即身成佛儀式一已上大日經文略　謠の意は卒都婆の中に金剛薩埵の出化し給へる三摩耶形も皆こもるぞと云義也●大日の種字より出て三摩耶形さまやきやう又尊形となる鎌倉右大臣

地水火風空五體五輪は人の體
金剛經略疏曰卒都婆是密教胎大日三昧耶形而以二

キャ　カ　ラ　ア

五字一爲二五輪種子一人々色身五體也謂二之如意半月三角圓方一本長作二三尺七寸一者三十七尊表示也矣　五輪者長阿含經曰二肘二膝頭項謂二之五輪一輪者圓轉之義也亦云二五體一矣　人間の體に地水火風空の五つを具す地とは身の亂れずしてたもてるを云水は身にうるほひ有を云火は身のあたゝかなるを云風はいきの出入を云空は耳鼻などのうとろなるを云又頭の丸きは天にかたどり足の方なるは地に表す扨胎内にやどる時初七日赤白二滯凝よりの乃至五七日迄其形五輪に似たり今卒都婆の形則人間の體也見二圓覺經及倶舍論一

一見卒都婆永離(ヤウリ)三惡道　和泥合水集云一見卒都婆永離三惡道と云は直に自性を見得すれば永く解脱を得義也云々　無垢淨光陀羅尼經曰窣都婆陰辰時至二日中一入二無間八難底一日中至二日沒一至二非想天一故衆生皆離レ苦得レ樂矣

一念發起菩提心　大般若經曰起二一念無上菩提相應之心一即能折滅矣　華嚴經曰一念發起二菩提心一勝三於造二立百千塔一寶塔破壞成二微塵一菩提心熟即

成ニ佛道一矣

姿が世をもいとはゞこそ心社いとへ　（金）心こそ世をは捨しがまほろしの姿も人に忘られにけり　行尊

それは順縁にはづれたり逆縁なりと浮ぶべし　卒都婆に腰をかけたるは順縁共に非ず逆なれ共此卒都婆によりたるが故に逆縁に浮ぶべしと云心也　圓覺普覺章曰現ニ逆順境一猶如ニ虚空一矣　同疏四曰違レ情曰レ逆隨レ情曰レ順矣　大惠答ニ王内翰一書曰或逆或順都莫ニ思量一矣　惠心観心略要集云逆順倶結レ縁五欲レ蒙ニ引導一矣

提婆(ダイバ)が惡も観音の慈悲　法華玄義曰調達是賓伽羅菩薩先世大善知識矣　入大乘論曰問彼提婆達多世々爲ニ佛怨一云何而言ニ是大菩薩一答若是怨者云何而得ニ世々相値一矣　無住云提婆が惡逆は衆生の爲の善知識也醫師の藥を用ゆるに下醫は藥を毒とす中醫は毒を毒とし藥を藥に用ゆ上醫は毒を藥に用ゆ此を以て知べしと云々観音の慈悲は三井寺に注す提婆五逆は熊坂に注す

槃特(ハンドク)が愚癡も文殊の智恵　槃特は釋尊の弟子也往昔大學匠にて法をおしみけるむくひに依て極て愚鈍也守口攝意身莫犯如是行者得意世と云十四字を佛五百の弟子に仰て三年の間をしゆれ共終に覺えず依て愚癡第一の槃特とはいへり見ニ出曜經及法句經一　槃特者名義集云梵語云ニ周陀一或云ニ周利一此云ニ大路邊生一佛本行經曰其母是長者之女隨ニ夫他國一久而有レ孕垂レ産思レ歸行至ニ中路一即誕ニ其子一如レ是二度凡生ニ二子一乃以ニ大小一而區ニ別之一大即周陀小即莎伽陀矣　文殊者　名義集云文殊師利梵語此云ニ妙德一大經云了々見ニ佛性一猶如ニ妙德一淨名疏云若見ニ佛性一即具ニ三德一不縱不横故名ニ妙德一無行經名ニ滿殊尸師利一或翻ニ妙首一下略　不動經曰是大菩薩戴ニ五髻冠一顯ニ五種智惠一矣

惡と云も善なる煩惱と云も菩提なり　此意山姥に記す　上の詞を今爰にて結していへり提婆が惡も観音の慈悲槃特が愚癡も文殊の智惠とは則是を善惡不二共　煩惱即菩提共或は邪正一如共云也悟の眼からは提婆も観音と槃特も文殊も惡も善も煩惱も菩提も皆悉く平等一致と見るなり是を中道實相とは云也

菩提本樹(モトヨリキ)にあらず明鏡(ミヤウケウ)又臺(ウテナ)になし實(ゲニ)本來一物なき時

は佛も衆生も隔なし　神秀首座頌云身是菩提樹心如二明鏡臺一時々勤佛拭勿レ使レ惹二塵埃一と作れるを六祖惠能頌云菩提本無レ樹明鏡亦非レ臺本來無一物何處惹二塵埃一 傳灯錄文略 六祖壇經文

本來より愚癡の凡夫を救はん爲の方便の　愚癡は東岸居士に注す方便は湯谷に注す　凡夫者　釋氏要覽曰大威德陀羅尼經曰於二生死一迷惑流轉住二不正道一故名二凡夫一梵云二婆羅一隋言二毛道一謂行心不定猶如二輕毛隨レ風東西一故矣

誠に悟れる非人なりとて僧はかうべを地につけて三度禮し給へば　小町憍慢の甚しきを破し悟れる非人と成て乞食する事をいへり　法集經曰出家爲レ成二道行一乞食者破二一切憍慢一故矣　禮拜の事は道明寺に注す

極樂の內ならは誹あしからめそとば何かは苦しかるへき、　歌の心は小町そとばに腰をかけたるを僧のとがめたる故に佛體のそとばに腰をかけたるは極樂の內にてならばあしからめ今生にては苦しかるまじと云心也內外と云詞に卒都婆を兼ていへり但此歌詞不足せりあしからめ苦しかるまじとは何ゆへにいふぞ今少しいひたらず又云極樂の內外と差別する事如何上の問答に惡と云も善也といへる向上の法問より見る時は此歌の心大きにおとれり此歌小町が歌に作りなしたり小町が歌にあらず何れの集にもなし謠の作者のよめるなるべし

扨おことはいかなる人ぞ名を御なのり候へ　玉造云予問レ女曰汝何鄕之人誰家之子中略女答曰吾是倡家之子良室之娘矣

是は出羽の郡司小野良實が娘　大系圖云出羽守良眞小野篁二男大內記石見守俊生之弟也一本當澄又名二當澄一有二女二人一妹名二小町一歌人也矣　古今集戀五に時すきてかれゆくをのゝとよめる歌小町があねと有小町があねを備前と云同戀の卷軸に流れてはいもせの山の歌よみ人不知とあれ共實は小町があね備前が歌也古今素純抄に見えたり羽州之人語云當國仙北の湯澤と院內の間小野村に良實の居所とて有此道の東の方田の中に小町の塚有此所に薄赤の芍藥ありて毎年九十九輪咲と云り　職原大全云郡司者昔毎二一郡一有二大領少領主政主帳一曰二

之郡司今世如郡代者也矣　出羽國は葛城に記す

痛はしやな小町はさも古へは遊女にて花の貌かゝやき　玉造云朝向鸞鏡點蛾眉而好容貌矣

私云小町は遊女に非ず優なる女と云義歟但玉造に倡家之子と有　說文曰倡樂也矣　增韻曰倡優女樂也矣　六書正譌云倡作娼非也矣　倡家之子とは遊女白拍子の類を云也此義に依て玉造の小町と歌よみの小町と別なるとは云也

桂の黛靑うして　桂は月の異名也說文曰黛畫眉墨也矣　釋名云黛代也滅去眉毛以此代其處也矣黛のほそくまがりたるを三か月の形に似たる故桂の黛と云歟　遊仙窟云出雙眉漸覺天邊失月矣　一說額の白ぎはの下に墨を二つ點じたるをこねつけ共こねずみ共云是を桂眉と云共いへり追而可尋

白粉を絶さず　白粉はおしろい也　玉造云面不絶白粉顏無斷丹朱矣　說文曰粉傳面也矣　周禮註曰古傳面亦用米粉又染之爲紅粉後燒鉛爲粉矣　博物志曰燒鉛成胡粉矣　續事始云鉛粉殷紂王時始造出之矣　實錄云輕粉秦穆公所造矣

羅綾の衣多うして桂殿の間にあまりしぞかし　玉造云羅綾之衣多餘桂殿之間矣　羅綾はうす物綾也　桂は稱美の詞也

歌をよみ詩を作り　玉造云待花時乘玉筆詠紅櫻紫藤之和歌矣

醉をすゝむる觴は漢月袖に閑なり　玉造云手取鸚鵡之觴漢月落而影靜矣　韻會云漢天河也矣　詩云維天存漢矣

首には霜蓬を戴き　玉造云頭如霜蓬膚似凍梨矣又云鶴髮如霜蓬鮐背似凍梨矣　白氏文集二十云愁集鬢似蓬矣

嬋娟たりし兩鬢も肌に悴て髮亂れ宛轉たりし双蛾も遠山の色をうしなふ　嬋娟は韻會云美容矣　宛轉はまがりたる貌也双蛾は眉也蛾と云虫にたとふ陸佃云蛾似黃蝶而小其眉句曲如畫矣　遠山の色をあさむける黛も今は悴たると也　說文曰悴憂也矣　廣雅曰困悴也矣　白氏文集云嬋娟兩鬢秋蟬翼宛轉双蛾遠山色矣　西京雜記云司馬相如が妻卓文

君が眉遠山の如し時の人是に効て遠山眉をゑがく
と云々
百年に一とせたらぬつくもがみ　伊勢物語の歌也
下句は我も戀らし面影に見ゆ〳〵有詞書略レ之　脊
問云あながち九十九に非ず老てすさまじきをいへ
りつくもがみは海につくもと云藻有人の髮のちゞ
みたるに似たり筑藻と書云々關疑抄云江浦藻髮は
老人の髮短くなりて藻をつくねたるやうなるをい
ふ云々　九禪抄云作物所とて有物を作る所也細工
に物を作りつられたるやうなる髮ゝ也云々　異字
本に蔡蛛神と書　此歌は小町年老て業平を戀ける
時業平此歌をよみける也世に小町を百とせる姥と
いふは此歌に依て云成べし小町百とせに非ず冷泉
流抄に六十九歳にて卒すとあり　經信卿知顯抄云
小町四十八にしてなごりなくすいへいし果ておに
のごとくなりければさがのゝ邊に人の草を結びて
とらせたりける所に住つゝ野邊の蕨をおり田のく
はいをひろひて世をわたり里に出ては乞食をして
命をたすかりける時しも北山のれうしにて有ける
たんぢなりさとゝいひけるもの年來の妻におくれ
て孝養の爲に善根をいとなみけるあくる年の佛事
に乞食非人集り來りける中にいとあやしきことや
うなるものありなりさとあやしみて人に問ければ
あれこそ世に聞えし小町と云色ごのみ也といへば
なりさと哀れに思ひてものくはせ酒などのませて
佛事果て後かたはらに庵を結びておきやしなひ妻
にしけり小町五十歳なり子三人あり二人はさきの
さきの腹の子也一人は小町子にて三郎にあたりけ
り名をたむらの三郎なりたゞとぞいひける扨なり
さと身まかりて後小町昔に立歸りいかにしてなさ
けあらん男にあはましものなど夢物語しけるをま
ゝ子二人はいとなさけなくいらへてやみぬ三郎な
りけるは實子なれば我母の昔時めきたる事を聞傳
へていかなる人にても我母にあはせんと思ひて折
しも在中將さが野に出て狩しける所に行て馬の口
に取つきてかう〳〵といひてよびあはせけり天慶
元年の年也小町六十九業平は五十三歳なりたゞは
十八歳也業平歌に「百とせに一とせたらぬつくも
かみ我を戀らしおもかけにたつ　といへり百とせ
に一とせたらぬとは九十九と云心をよめり誠に九

十九にはならね其年おほくつもるをいはんとてかくよめり業平はおもはしき人をも思はしからぬ人をもならべ置ていづれもおなじやうにおもひたる也云々

有明　高砂に注す

粟豆の餉を袋に入て侍たるよ　玉造云嚢容何物粟豆之餉矣　餉は干飯其書粟豆なとまじりたる食物なるべし　廣韻云自レ家之レ野曰レ餉矣　詩經良耜篇曰載筐及筥其饟伊黍註　廬陵彭氏曰　其饟伊黍無二珍味一也矣又無二筐筥一何以饟何レ筐或負二其餘一

後におへる袋には垢膩のあかづける衣あり　玉造云背負二一袋一々容何物垢膩之衣矣　法華信解品曰即脱二瓔珞細軟上服嚴飾之具一更著二麁弊垢膩之衣一矣　垢膩とは垢づき油づきたる衣也

臂に掛たる筐には　玉造云左臂懸二破筐一矣　筐は竹にてあめるかご也　史記方言注曰筐形小而高者江東呼爲二筲今按又用二筐字一矣　白氏文集云右手秉二遺穗一左臂懸二弊筐一矣　寶物集云小野小町が老衰して貧々なりしさまは弘法大師の玉作と云文に末世を嘆て書給へるこそ哀れなれ着物なくて簑を以て衾とし畳なくして俵を以て敷物としけり自野の蕨を折て筐に入て臂にかけたりき云々

白黒の烏芋あり　玉造云嚢入何物白黒烏芋矣　白黒の烏芋とは白黒の二種を云也本草綱目時珍曰烏芋其根如レ芋而色烏也頌曰烏芋根如二指頭大一黒色皮厚有レ毛又有二一種一皮薄無レ毛者亦同田中人並食レ之矣　時珍曰慈姑一根歳生二十二子一如二慈姑之乳二諸子一故以名レ之頌曰慈姑生二水中一葉似二箭族一頌曰根大者如レ杏小者如レ栗色白矣

破れ簑破れ笠　玉造云右手提二壞笠一矣　又云頸懸簑纏レ腰矣

泪をだにもおさふべき袂も袖もあらばこそ　おさふべきとはおさゆべき也小町おちぶれて泪をだにおさゆべき袂も袖もあらじと也〇もらさしと心の内におさふるは袖につゝむ泪也けり　運伊法師

今は路頭にさそらひ往來の人に物をこふ　玉造云今見寡獨而跰二道路一無[illegible]人間一從[illegible]生前之耻一矣　路頭とはみちのほとり也　朱子語類云這是生死路頭矣　さそらひとはさまよふ心也さすらひ共云そとすと相通也　當本卷云はかなき世にぞ

さすらんあはれと思ひしほどに云々　日本紀に流離河海抄に吟遊津抄に伶傳と書杜甫詩云已忍伶傳十年事矣

けしからず　　墨田川に注す

あまりに色が深うてあなたの玉章こなたの文　　玉造云君臣子孫爭ニ婚姻於日夜一富貴主容競ニ倜儻於時辰一矣

かきくれてふる五月雨の　　寶治百首　○かきくらし降五月雨の比をへて谷の小川の音まさるなり少將内侍　さみだれとはさは五月の略語みだれはみだると云儀なり源氏明石の巻云空のみだれにいでたちまいる人もなし注　細流云空のみたれはたゞ雨風のみだれ也云々雲葉集云一あやめおふるぬまのいはかきかき曇りさもさみだるゝきのふけふ哉　雨のつよくふりみだるゝと云儀にて五月の雨をさみだれと云成べし

深草の四位の少將　　傳記定かならず車の榻は通小町に注す

淨衣の袴　　白き袴也或は明衣共云布にてしたゝむる也惣じて神官皆着ニ用之一

立烏帽子を風折狩衣の袖を打かつひて　　立烏帽子は本式也風折は略儀也　立烏帽子は堂上一同ニ着用す或は右眉諸眉に子細有右眉は仙洞召給ふ攝家は小諸眉諸家十六歳以前は諸眉十六以後は左眉也風折は左折右折依レ家替る也老者折レ之攝家は不レ折清花大臣家等も不レ折歟　西三條加不離抄云攝家清花弁中院三條正親町等家には立烏帽子着用あり其外羽林家名家等には多分十六才迄立烏帽子其折烏帽子を着し給ふ鷹狩蹴鞠馬上の時は何れも風折の由云々　同抄云立烏帽子と風折と各別に候所に卒都婆小町の謠やらん立烏帽子を風折狩衣の袖を打かつひてと申事如何續世續と申書云むかしは烏帽子こはくぬり事もなかりける成べし此比こそさびえぼうしきらめきえぼうし折々かはりて侍るめれど云々又なでえぼうし引立烏帽子など云色是等はいかやうにもなるべし然らば小町の謠もさもあるべきや近世えぼうしこわく塗しより各別に成たると覺候已上　狩衣は松風に注す

木の葉の時雨　　木の葉の落るを時雨と見る也證歌略レ之

軒の玉水とく／＼と　（古今著聞）雨降は軒の玉水さぶ／＼
といはゞや物を心ゆくまで
一夜二夜三よ四と七よ八よ九よ十夜　世俗に小町
算とて此數を九十九に合せり一夜を一つとし二夜
を二とし三夜を三とし四夜を四とし七夜を七とし
八夜九夜を七十二とし十よを十とす合せて九十九
夜となる也其外說多し略レ之
豊の明の節會　杜若に記す
庭鳥の時をもかへず　鷄は家々に畜レ之庭に馴る
る故に庭鳥と云也又家鷄共いへり匠材集云いへつ
鳥にはつ鳥はには鳥を云と云々說文曰雞知レ時畜
也矣韓詩外傳曰雞有二五德一首戴レ冠文也足搏レ距武
也敵在レ前敢鬪勇也見レ食相呼仁也守レ夜不レ失レ時
信也矣本草綱目時珍曰雞者稽也能稽レ時也廣志曰
大者曰レ蜀小者曰レ荊凡人家無レ故群雞夜鳴者謂二之
荒鷄一主二不祥一若黃昏獨啼者主レ有二天恩一謂二之盜
啼老雞一矣
曉の榻のはしかき　通小町に注す
砂(イサゴ)を塔(タウ)と重(カサネ)て黃金(ワウゴン)の膚(ハダヘ)こまやかに花を佛に手向つゝ
悟の道に入給ふよ　童子敎云聚レ砂爲レ塔人早磨二黃
金膚一折レ花供レ佛速結二蓮臺跡一矣　方便品曰乃至
童子戲聚レ沙爲二佛塔一如レ是諸人等皆以成二佛道一矣
文集二十五云弄レ沙成二佛塔一（拾玉）鏤レ玉飾二玉宮一彼此兒
戲矣　花供養は半蔀に注す〇納おく千々の金も身
にそひてきなる膚とならは社あらめ　（玉葉）一ふさを折
て手向る花のえに悟ひらくる身とそ成へき

關寺小町

宇治殿物語云小野小町が事一旦大江惟章が妻たり
しが心がはりせしより都にのぼり仁明の御子基蔭
親王に仕へ住吉に居て尼になり其後井出寺ハ別當
の妻となるおとろへて後は逢坂の邊に骸をさらす
云々　愚見抄云小野小町大江惟章が妻になりて筑
紫へ下りけるが後に尼になりて近江國關寺のあた
りに有ける云々〆鴉鷺記云いくばくか人の心をな
やましゝといへ共おとろへぬれば鄙にさすらひ都
にさまよひはては關寺の邊に庵をむすびて野邊の
わか草にいのちをさゝへうきすまゐをせしを智證
大師御覧じまし／＼て寺にて七日の御說法ありと

てめされしに身のありさまをはぢて參らざりし時御使たび〳〵成しかば名事はおのゝやけばとわびけんも誠にあはれに覺えたりそのまゝ乞食と成て昔しのばれし程今はいとはれ終に路次の骸となる云々　光廣卿百人一首抄云御子左の家の記爲定曰小野小町のおはりける所は山城の井出の里なりとなん可レ尋云々　今案冷泉家の抄には小町六十九歳於二井手寺一死すとも有又江談及無名抄には業平奧州八十島に至り小野小町が尸を求と有何れか是なる小町事在古事談小町二說　伊呂波字類抄云關寺會坂關之東近江國之內有二道場一舊跡不レ知二何代之草創一舊傳云此地者是關寺也容貌壯麗佛像高大往年頹毀多經二星霜一下略　今昔物語云此寺の佛は彌勒にて座ます然るに佛堂も破壞し佛も朽て失ければ昔の關寺の跡とて礎計殘れり其後橫川の源信僧都是を悲ひて本の如くに造り立んとし給へ共僧都失給ひければ此次の聖人故僧都の宣ひ置ける樣に佛を作り堂を二階に造て上の階より佛の御貌は見へ給へば往來の人よく拜み奉りけり云々　扶桑略記云萬壽四年三月一日沙門延鏡供二養近江國志賀郡世喜寺一奉レ安二置舊造五丈彌勒菩薩像一體一矣　字類抄云治安元年十一月十一日松崎寺僧叡昭來語云去八月夜夢一僧來告云汝奉レ拜二關寺彌勒佛一哉答曰未レ奉レ拜僧云今生若不レ奉レ結緣一者當來何欲レ蒙二引攝一哉件佛者迦葉佛之世爲二純金五丈之像一釋迦出世之後又奉レ造二其像一矣、歷代之間頹以毀失然而今又上人改奉二造立一也下略　今昔物語十二云今は昔左衛門大夫平朝臣義淸と云人有けり父は中方と云越中守に有ける時國より黑き牛一頭を得たり中方年來此に乘て行淸水に相知れる僧に此牛を與へつ僧此牛を大津にある周防掾正則と云者に與へつ然るに關寺の聖人關寺を修造するに雜役の空車を持牛の無を見て正則此牛を聖人に與へつ聖人此牛を得て喜て車に懸て寺の材木を引しむ後に三井寺の明尊前大僧正の夢に關寺に詣て彼牛堂の前に繫たり僧都是はいづくの牛ぞ牛答て云我ハ是迦葉佛也此關寺佛法助けんが爲に牛と成て來ると云と見て夢覺ぬ僧都是を怪て多くの僧を引得て關寺に詣づ牛山より歸て堂を三返廻て佛の御前に向て庭に臥す僧都此牛を見て佛を三返廻事希有の事也とて彌貴み

給ふ京中の人衆不レ言云事なし入道大相國閑院太政大臣公季公卿殿上人女房は廳司殿關白殿の北の方皆參り給へり或時聖人の夢に此牛我此寺の事を勤め畢(ヲヘル)明後日の夕方歸りなんとすと云と見て夢覺ぬ此事を三井寺の僧都の許に告三井寺にも然る夢見給ふ扨其日に成て山三井寺の人參集りて彌陀經をよむ事山を響かす漸く晩方に成て臥たる牛立て堂を三返廻て後牛屋に返て枕を北にして臥て寢入如にして死す其時に來れる上中下の道俗男女音を擧て泣合へり則牛を此處に葬てそとばを立て築きけり其後所々に佛事をおこなふと云々或云牛塔塚は在二大津長案寺竹林一云二靈牛塔一或曰二迦葉塔一古供レ蓮祭レ之今廢而知者鮮云々

待えて今ぞ秋にあふ星の祭を急がん　星祭は七夕祭共又乞巧奠共云也天寶遺事云唐帝宮中七夕結二綵縷一陳二瓜菓酒一祀二牛女一妃嬪各執二九孔針五色線一向レ月穿レ之者爲レ得レ巧矣日本にては孝謙天皇天平勝寶七年に始る御殿の庭に机を置色々の物をかざりたらむに水を入大空の星をうつす又五色の糸を竿に掛て事をいのる三年の内にかなふとろふ

(公事根源と年譜拾遺に見えたり)

是は江州關寺の住僧にて候　逢坂の關のあなた右の方に關寺有此邊關の明神關の清水關の小川など云は皆逢坂の關に付ての名也江州は田村に註す

けふは七月七日にて候程に織女の祭を取おこなひ候　荊楚歲時記曰七月七日世謂織女牽牛聚會之日矣晉傳玄擬天問曰七月七日牽牛織女會二天河一矣　又朝顏に記す

颯々(サツサツ)たる凉風(リヤウフウ)と衰鬢(スイビン)と一時に來る初秋の　白氏文集十九云蕭颯凉風與二衰鬢一誰教二計會一一時秋矣

糸(シ)竹呂律(チクリヨリツ)　糸竹は絃管に註す呂律の事呂と律とのわかちは陰陽十二調子の中六呂は陰の音にて和か也六律は陽の音にてこはく上りたるを云本朝催馬樂には呂を春とし律を秋とす是異調とのかはりめ成べし鶏鷺記云呂律の事律は雄鳳の鳴也そのこゑ淸くながし呂は雌の鳴也そのこゑ濁り短しと云々漢志曰陽律爲レ律陰律爲レ呂律以統レ氣類レ物呂以旅レ陽宣レ氣呂替曰レ律陽統レ陰也矣

敷島の道をねがひの糸はへて　敷島の道とは和歌の道を云也二輪に注ミ願の糸は五色の糸を竿に掛

て七夕に手向て心に願ふ事をいのる是を願の糸と云也古今素純抄云願糸の事竹の末にかくる也よりやうは左より七筋右より七筋といへり云々　白樂天詩云憶得少年長乞巧竹竿頭上願絲多〈朗詠集〉　初學記云女子以二五色縷一慣二金銀針一献二牽牛織女一矣　〇古七夕にかしつる糸の打はへて年の緒なかく戀や渡らん　糸はへてとは糸をのべたるをいへりはへは永の字延の字などかけりながくつゞく心也おりはへ打はへなどいふも同じ心なり袖はへてといへるは袖をふりたる成べし又ふりはへてはわざとがましき心にもいへり時鳥などにおりはへて鳴と云は折はへにおなじ聲はながく鳴心也所によりて心かはるべし

織や錦のはた薄（スヽキ）　錦の機と云かけたり童蒙抄云はた薄とはもの薄を云なり云々　袖中抄云或萬葉裏書にはた薄とは穂の出て旗をさゝげたるやうなる薄を云とぞ能因申ける云々

露の玉琴かきならす松風までも折柄（ヲリカラ）の　琴の音に峯の松風かよふらしの歌をふくませたり〈玉葉〉庭に琴をならべて是に手向るを庭の立琴と云也〇庭の西にひかで手向る琴のねを要ゐにかはす軒の松風〈大政大臣〉

朝に一鉢を得され其求るにあたはず　傳燈録曰一瓶兼二一鉢一到處是生涯矣　佛祖統紀曰畜二一鉢一無二長物一躬拾レ薪汲レ水矣

花因二雨過一紅將老たり柳被二風欺一緑漸低　是は百聯抄解之詩也本文に紅將レ老と有詩の意は雨つよく花にあつる時は其色もあしく成事なりあざむくとは風の枝をうごかすなり

人更にわかき事なし　安達原に注す

老の鶯の百囀り（モヽサヘツリ）　老の鶯は湯谷に注す百囀とは春多く鳥の集て鳴を云也　文粋云前中書王詩月蒼々鶯百囀矣〇鶯の百囀りをいくかえり永き春日に鳴くらすらん〈顯昭〉

稽古　鞍馬天狗に記す

埋木の人しれぬ事となり花薄ほに出すべきにしもあらず　古今假字序云色好みの家に埋木の人しれぬ事となりてまめなる所には花薄ほに出すべき事にもあらず上下略榮雅抄云色このみのいへ、埋木の人しれぬ事となりてとは好色の家には埋木の如く人しれぬ戀路のあだなるいたづら事のたよりと歌

をすると云まめなる所には花薄ほにいだすべき事にもあらずなりにたりとは實法なる所には上下に云所の歌をいひ出しがたき事を花薄のほに出ぬやうにあるとたとへていふむもれ木は人しれぬ花薄はほに出すべきといはん料也埋木に花薄を對して書たる筆勢也云々

心を種として言葉の花色香にそまば　古今假字序云やまと歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける云々榮雅抄云人の心をたねとしてとは心のたねより歌の出生して萬のことの葉となれりとかける貫之の筆舌玄妙也云々

夫歌は神代より始れ共文字の數定まらずしてことの心わきがたかりけらし　同序云ちはやふる神代には歌の文字も定まらずすなほにしてことの心わきかたかりけらし云々歌の文字定まらずことの心わきがたかりけらしとはいづれの歌となく神代七代の時分の歌の事をかけると心得べき也今三十一字の歌は素盞嗚尊よりよみはじめ給ふ也榮雅抄取意

今人の世となりてめでたかりしよつぎを讀治めし詠歌なればとて難波津の歌を翫び候　假字序に人の世となりてとあるをうけて爰に今人の世となりてとはつゞけたれ共かな序の詞爰にかなはず今人の世と成てとは仁德天皇の御代を指て云也めでたかりしよつぎを讀治めし詠歌とは王仁と云者難波津の歌をよみ帝に奉り御世につき給へとすゝめ申せし也委しく難波に記す

又淺香山の歌は大君の御心をやはらけし故に　大君とは葛城の王也左大臣諸兄公を云也淺香山の歌大君の事釆女に注す

此二歌を父母として手習ふ人のはじめと成て　古今假字序云此二歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人のはじめにもしけると云々榮雅抄云難波津あさか山の此ふた歌は歌の父母のやうにて德ある歌なれば手習ひそむる歌にて有といふむかしの能書の手本におほくかける見ゆ昔は手習ひ始にいろはをならふ事なし此ふた歌を書てならひけるにや云々若紫卷云まだ難波津をだにはか〴〵しうつゞけ侍らずと云々　是物書手ならひの事をいへり或抄云初て文字を習ふを手ならひと云それには非ず手習の手本にはいろはをするやうに歌をよみ習ふ始に

は此二歌を手本にしけると也と云々此説不レ用歟
庶人は蟬丸に注す近江の海は竹生島に注すさゝ波は
　三井寺に記す
濱の眞砂はつくる共よむことの葉はよもつきじ
　同序云濱の眞砂の數多くつもりぬれば今はあすか
川の瀨になるうらみもきこへずと云々・榮雅抄云
此集えらばれて歌の數多くつもりぬれば今はあす
か川の淵は瀨にかはる恨もきこえずして悅びばか
りぞ有べきと祝言をいひて上の段々の心を結する
也云々　（新後拾）盡もせし濱の眞砂の數々に今もつもれ
るやまと言の葉
青柳の糸絕ず松の葉の散うせぬ　同序云青柳の糸
絕ず松の葉の散うせずして正木のかづらながくつ
たはりと云々皆なかく久しき祝詞にて云り○青柳
の糸絕すして万代をすむへきかけや庭の池水（後水尾院）
種は心と思召せ　同序に人の心を種としてとある
　にてつゞけたり
たとひ時うつり事さる共此歌の文字あらば　同序
云たとひ時うつり事さりたのしびかなしびゆきか
ふとも此歌の文字あるをや云々榮雅抄云たとひ時

うつり事さりたのしびかなしびゆきかふ共今えい
ぶ歌の文字はとゞまりてかはる事有まじきと也云
々　長恨歌云時移事去樂盡悲來上下略（草根）○閑なる心
をもては時うつり事さりかねてゆらく玉の緒
鳥の跡もつきせじや　同序云鳥の跡久しくとゞま
れば歌の樣をもしり云々上の詞のつゞき也釆女に
注す
我せこがくべき宵なりさゝかにの蜘の振まひ兼てし
るしも　同序に衣通姬の歌也日本紀には下句蜘の
おこなひ今宵しるしもと有榮雅抄云此歌は衣通姬
の獨ゐて帝を戀てよみ給ふ我せこがくべき宵なり
と蜘のさがりて兼てしるしをしらすとよみ給ふ云
々　釋日本紀云凡歌意者奉レ待二天皇一之處蜘蛛下レ
檐之間爲下可二臨幸一瑞上之由古今也佐々蟹謂二蜘蛛一
也其躰如レ蟹往二左々原一故云矣　摩訶止觀曰蜘樹
掛則必有二喜事一矣　西京雜記云蜘蛛集百事喜矣日
本紀十三云取意衣通姬は允恭天皇の后大中姬の妹
也時に隨て近江の坂田に有天皇召といへ共姉姬の
御心をはゞかりて參り給はず七度迄召共猶いなみ
給ふにより御使中臣烏賊津と云者七日庭中に伏て

夓歎申ける程に衣通姫いなみがたく參り給ふ也殿屋を藤原に作りて衣通姫を置給ふ其後宮室を河内の茅渟チヌに造りて置給ふ也衣通姫我せこの歌を詠給ふ天皇此歌をきこしめし御心にいとめておはしまして御返し〇日本紀さゝらがた錦の紐をときさげてあまたはねずに只一夜のみ哉此歌續古今集には小車の錦の紐をときかけてあまたはねすな只ひとりのみと有釋日本紀云凡御歌意者恐ニ皇后之威一不レ累レ夜之由也佐瑳羅餓多佐々良形也言ニ小形文一也矣

衣通姫とは允恭天皇の后にてまします　衣通姫は允恭帝の后には非ず妾なり　日本紀云雅渟毛二岐皇子御女允恭帝后忍坂大中姫御妹也容姿絶妙無レ比其艶色徹レ衣而晃是以時之人號曰ニ衣通郎姫一也矣　或説に應神天皇の御子二流皇子の女也と云々　又衣通姫を玉津島明神と崇給ふ事蟷通に記す　細川玄旨聞書云衣通姫ひの字にごる也と云々　帝王編年記云二十代允恭天皇號ニ雄朝津間稚子宿禰天皇一仁德天皇第四子也反正天皇同母弟也甲戌年誕生壬子歳十二月即レ位年三十九御宇四十二年癸巳崩時年八十葬ニ河内國長野陵一矣

形のごとく　卑下の詞なりおし出して云詞に非ずわづか其形計はまなびも致さんといふ卑下也撰集抄云かたのごとくなる菴をむすびてと云々　親長卿記云於ニ一條道場玄阿弥一如レ形作善矣

小野小町こそ衣通姫の流とはうけ給れ　同序云小野小町はいにしへの衣通姫の流なりと云々　榮雅抄云衣通姫の流なりとはやうなると云流字をたくひなりとよむ説あれどりうなりとよむべし云々

侘ぬれは身を浮草の根を絶てさそふ水あらはいなんとそ思ふ　古今集雜下に小町歌なり詞書云文屋康秀が三河のぞうに成てあがた見にはえいでたゝじやといひやれりける返事によめると云々榮雅云世にありわひぬれば身を浮草になしてさそふ水あらばいなんと思ふと也云々

是に大江の惟章コレアキが心かわりせし程に　惟章は平城天皇五世孫内匠頭從五位下大江千古子也千里甥也惟章が心かわりせし時は色みへての歌也次に記す

文屋の康秀が三河守に成て下りし時　昔は天子より諸國に司を置四ケ年の間其國を治め守らしむ當

時の守護人の如し賢者の聞へあるよき國司をば重任とてかさねて又四ヶ年を給る也又延任とて任をのべらるゝ事もあり惡敷沙汰したる人はやがて一任にてかへらるゝ也　大國小國のかはりに依て位に高下あり百寮訓要抄々略　和歌色葉集云　文屋康秀先祖不レ知学文琳縫殿助云々宗于男云々古傳云陽成院御時人又淳和仁明比人任ニ參河掾一或中納言朝康子云々

わすれて年を經し物を　續古「忘れても有へき物を中々に聞につらさを思ひ出ける　西院皇后宮

色見えてと社讀し物をうつろふ物は世中の人の心の花や見ゆる　古今集戀五小町歌に「色見えてうつろふ物は世中の人の心の花にそありける　榮雅云色見えずしてうつろふ物は人の心の花にてあると也みえて淸てよむ說もあり此歌は大江惟章が妻となりしに心かはりして藤原朝行が聟になりける時によめると也云々

つゝめ共袖にたまらぬ白玉は人を見ぬめの泪の雨　古今戀二安倍淸行朝臣歌東留りは泪なりけり詞書云しもついづも寺に人のわざしける日眞せい法師の導師にていへりける詞を歌によみて小野小町がもとにつかはしける云々歌の心は包め共袖にたまらずこぼるゝ白玉は人を見ぬ目の泪にてあると也同集に返し小町「おろかなる泪そ袖に玉はなす我はせきあえす瀧津せなれは

思ひつゝぬればや人の見えつらん　下句夢としりせはざめさらましを　古今戀二小町歌也榮雅云戀しく思ひつゝぬればや人の見えけん夢としりたらばさめましき物をと也是は業平を戀てよめる歌と也云々

思ひ草は百萬に注す露往霜來は志賀に記す槿花一日榮は朝顔に記す

あるはなくなきは數そふ世中に哀れいつれの日まで歎かん　新古今哀傷題しらず小町歌也歌の心はいつれの日迄我ながらへて人の上を歎くべき終に其數になるべき身なる物をとなり此歌榮花物語には東宮の女藏人小大進君が歌とありて下句あはれいつまであらんとすらんと有

いつまで草　班女に注す

戀しの昔や忍ばしのいにしへの身やと　●世を捨て宿を出にし身なれ共猶戀しきは昔也ける　顯基

初の老ぞ戀しき　禮記王制篇曰五十而始衰矣日本には四十を老の初めとす賀をつとむるにも四十を發端とする也稱名院說云賀は四十歳にて始て是を賀すると云々素問經曰年四十而陰氣自半也起居衰矣　靈樞經曰人年四十腠理始疎榮華頽落髮斑白矣

一夜とまりし宿迄も瑇瑁をかざりし　玉造云家裝ニ瑇瑁一　陳傳絳歌曰新人新寵任ニ蘭堂一翠帳金屏瑇瑁狀矣　曹憲曰瑇瑁如レ龜出ニ大海一大者如ニ籧篨一背上有レ鱗鱗大如レ扇有ニ文章一將レ作レ器則煮ニ其鱗一如ニ柔皮一任レ意用レ之矣

垣に金花をかけ　玉造云垣畫ニ丹青一矣　六逸淸談曰梁魚容造ニ象牙沈檀床一周鏤ニ金花寶鈿一矣

戶には水精をつらねつゝも　玉造云戶浮ニ水精一矣　本草綱目曰水精一名水晶一名水玉一名石英時珍曰水精亦頗黎之屬有ニ黑白二色一倭國多ニ水精一第一南水精白北水精黑矣　述異記曰闔閭構ニ水晶宮一尤極珍異皆出レ自ニ水府一矣

鸞輿(ランヨ)屬車(シヨクシヤ)の玉衣の　鸞輿とは鳥をかざりたる輿也屬車とは天子の御跡に臣下の乘車也玉衣は玉は美稱の語只きぬ也　文選西都賦曰乘ニ鸞輿一備ニ法駕一矣貞觀政要云鸞輿在レ前屬身車レ後矣

敷妙(シキタヘ)の枕つくつまやのうちにしては　敷妙とは枕といはん爲の諷詞也但萬葉に敷妙の衣とも敷妙の袖ともよめり仙覺抄云しきといふもたえと云も共にほむる詞也云々東野州云しきたへとはしきて堪忍する心也との云々○(吉)しきたへの枕のしたに海はあれど人の見るめはおひすぞ有ける　仙覺抄云枕つくとは枕なれたりと云也つまとはつゞく也人の家居は殊によろしき人などは夫婦必しも一宅の內におらず造りつゞけたる屋の別の屋に妻はすめばかの婦人の居たる家をつまやと云べしつまといひ出んために枕つくとはそへたる也と云々或說云枕つくとは人に別れて又枕取事也と云々又一本に夫婦枕と枕をならぶるを枕つくといふと云々○(万)家に行ていかにあかさん枕つくつまやさふしもおもほゆべしも

花の錦の茵(シトネ)の　しとねは世俗の蒲團なり字類抄云茵裀と書天子親王后宮の外臣下にはならぬ由也倭名抄云野王曰茵茵褥又以ニ虎豹皮一爲レ之矣　三才圖會云黃帝內傳曰王母爲レ帝列ニ七寶登眞之床一敷ニ

昔海光之特ニ疑ニ一物此其起耳矣
今は土丹生の小屋玉を敷し床ならん　土丹生の小
屋は梅がえに記す玉造云床鋪ニ瑚瑚ー
諸行無常是生滅法　三井寺に記す
老耳には益もなし　年寄は耳きこへず益なきと也
老耳に老尼を兼ていへり
飛花落葉　柏崎に注す
硯をならしつゝ　硯する事也八雲御抄云席にて上
座を見つくろはでは下より硯をならす事あるべか
らずと云々鴉鷺記云墨淵ハ硯をならし云々○ね（家）か
はくはならす硯も手向てんけふ七種の花のことの
葉光廣
藻鹽草志賀に注すかれ〳〵は定家に注す
哀なるやうにてつよからずつよからぬはおうなの歌
なれば　古今假字序云小野小町はいにしへの衣通
姫の流なりあはれなるやうにてつよからずいはゞ
よきをうなのなやめる所あるににたりつよからぬ
はおうなの歌なれば成べし云々同眞字序云小野小
町之歌古衣通姫之流也然艶而無ニ氣力ニ如ニ病婦之
着ニ花粉ニ矣　榮雅云歌はつよくよめるがよけれ共

つよからぬはくるしからずおうなの歌なればとこ
とはる也又云思ひつゝの歌色見えての歌わびぬれ
ばの歌右三首の歌にて哀れなるやうにてつよから
ずの所を工夫すべし又云おんなをうな各別と云人
あり然るべからず五音通用なり或説におんなは女
也おうなは老女といへり云々（巳上古今榮雅抄）
いとゞしく老の身の　呉竹集云いとゞしくは彌助
と書心はいとゞさへ也云々證歌杜若にあり
手向草　海人に記す
かげろふの小野の小町の百年に　かげろふの小野
といひかけたり蜻蛉の小野は和州吉野郡の名所
なり秋津の小野共云なり○知れしを霞にこめてか（後撰）
けろふの小野の若草下にもゆ共（爲家）　日本紀十四
云雄略天皇四年秋八月吉野宮に行幸し給ふ河上の
小野にして狩人にからしめ躬も射給ひなんと待給
ふに虻飛來て噆ニ天皇臂ー於レ是蜻蛉忽に來て虻を
くらひて飛去ぬ天皇悦て蜻蛉をほめて歌をよみ給
ふ「虻がきつ〳〵そのあふをあきつ羽のくひはふ
虫も大君にまつらふながたちをはんあきつ島大和
とよみ給ひしより此地を蜻蛉小野と云也（取意）小町

を百年と云事などは小町に注す

或は糸竹に懸て廻らす絃の雪をうけたる童舞(ドウブ)の袖　舞の曲に廻雪と云名あり依てかくつゞけたり融に注す童舞とは童部のまひ也蝶と鳥とをまふ也　百練抄云承安三年九月廿五日上皇於二法住寺殿一覽二童舞一矣帝王編年記云仁平二年壬申三月六日於二鳥羽殿一賀二法皇五十算一舞人樂人殿上人有二童舞一矣

くれ竹の世々をへて○　古今假字序云くれ竹の世々にきこへ片糸のよりよりにたえず云云　顕昭云くれ竹は竹の惣名なり竹の中に指入ぬれば日の暮たるやうに覺ゆる故に暮竹と書基俊云くれ竹は紫竹を云定家家隆の説には唐竹を云昔呉國より始て竹を渡すゆへに呉竹と名づくと云々伊呂波字類抄云呉竹似レ篁而下節武葉矣〇（大和物語）くれ竹の世々の都と聞からに君かちとせのうたかひもなし

萬歳樂は高砂に注す豐の明の五節の舞は杜若に記す

狂人はしれば不狂人も走るとかや　淮南子曰狂者東走逐者東走東走則同所二以東走一則異矣　徒然草云狂人の眞似とて大路を走らば則狂人なり惡人のまねとて人を殺せば惡人なり云々

百年は花に宿りし胡蝶の舞　莊子が古事を以てつゞけたり　止觀第五曰莊周夢爲二胡蝶一翔翔百年悟知レ非レ蝶亦非二積歳一矣又舟橋に注す胡蝶ハ舞は源氏供養に注す　〇（堀川院百首）百年は花に宿りてすぐしてき此世は蝶の夢にてぞ有ける　江匡房　此歌詞花集雜下に入

さす袖も手わすれ　〇（六帖）手忘れていをそねにけるあかねさす晝はさはかり思ひし物を

初秋のみじか夜　〇（金）天川また初秋のみしか夜をなと七夕の契りそめけん　匡房

東雲は安宅に注す羽東師の杜は三井に注す

謡曲拾葉抄卷十

采女

大和物語云昔奈良の御門につかふまつるうねめ有けり顔かたちいみじうきよらにて人々よばひ殿上人などもよばひけれ共あはざりけりそのあはぬ心は御門をかぎりなくめでたき物になん思ひ奉ける御門召てけり扨後又もめさゞければ限りなく心うしと思ひけり夜晝心にかゝりて覺え給ひつゝ戀しく覺え給ひけり御門は事共おばさすさずがに常には見え奉る猶世にふまじき心地しければよるみそかに出て猿澤の地に身をなげてけりかくなげつ共御門へしろしめさゞりけるを事のついでありて人の奏しければ聞召てけりいたう哀れがり給ひて池のほとりにおほんみゆきし給ひて人々歌よませ給ふ柿本人丸「わきもこがねぐたれかみを猿澤の池の玉藻とみるぞかなしき　とよめる時に御門「猿澤の池もつらしなわきも子が玉もかづかは水ぞひまなし　とよみ給ひけり扨池に墓せさせ給ひて歸らせおはしましけり已上　此謡は此物語を本として作る成べし且又葛城大君に采女がはらけ取て朝香山の歌を詠り奥に記す此等の事を取合せて此謡を采女とは名付たる也　日本紀第十一に仁德天皇の御時に始て采女の名あり同第十二に履中天皇の御宇倭直等己が罪を免されんがために妹の日之媛を以て爲二采女一貢二天皇一蓋始二于此時一又諸國より采女を奉る事は續日本紀云聖武天皇天平十四年采女者自今以後毎レ郡一人貢二進之一矣　采女とは一人の名にあらず采女寮とて節會配膳の役など勤むる女中也昔は身のかざりにたすきをかけたりしが中比より止給ふ不レ亂して奉行する官職也　職原云陪膳采女尤可レ然事也近代漸零落無レ極尤可レ有二沙汰一事也陪膳采女典侍御レ之應和例也矣　注云采女自二諸國一奉レ之郡少領以上女也陪膳今世曰二給仕一者是也勤二天子御膳給仕一也後代采女職零落於二御給仕一者典侍勤レ之也又陪膳采女典侍撰二用之一村上天皇應和年例也矣　又云有二髮上采女一注云采女中能撰二結レ髮者一是曰二髮上采女一矣　延喜式云凡采女四十七人賜下近二宮城一地上凡采女養田三町采女月料白米四斗五升日一升七合也鹽四合五勺下略

是は諸國一見の僧にて候　僧は田村に注す
洛陽は野宮南都は玉葛彌生は田村しのゝめは安宅に
注す
影ともに我も都を下り月　藻鹽草云下り月は夜の
ふくるを云或は傾(カタムク)也云々万葉に望降と書てもちく
だるとよめり
深草山のするつゝく木幡の關を今朝越て　深草は山
城紀伊郡也稲荷の山つゞき也東は小栗栖南は伏見
西は竹田北は稲荷此間を深草の鄕と云也　木幡の
關は宇治郡也矢島畔と城山との間を木幡の關と云
今關山と云也木幡山は今の伏見の城山を云〻春は千首
はや木幡の關の朝ほらけ都のたつみやゝかすみぬ
る爲尹
宇治の中宿　宇治は頼政に注す　椎本卷云宇治の
わたりの御中やどりと云々花鳥餘情云南都下向の
人は宇治を中宿にす後々の御幸にも平等院にて御
儲の事あり云々
井堤の里　山城相樂郡也下井手の里上井手の里と
て有下井手の里は今玉水町の東五町計にあり上井
手の里は又それより五町計東の山際にあり昔此所
井手寺とて有號ニ光明寺ニ諸兄公の建立也惟清抄云
井手左大臣橘諸兄公境地面白に依て井手に新造有
て山吹を植などして此水を愛せり我一期の後に我
を思ひ出さば此水へ來て見よ影をうつして見せん
といへり後に行て見れ共そのかけなし下略　古今榮
雅抄云橘諸兄井手に寺を立て堤に山吹をうへ池に
蛙を放て花をみ蛙の聲をきかれし也云々○古今蛙なく
井手の山吹散にけり花の盛りにあはまし物を清友
和歌色葉云此歌の注に井手の山吹とは或書云昔橘
大臣諸兄井堤の寺を造りて金堂の四面の廻廊のめ
ぐりに山吹を殖て廊の內に水を湛て花さかせて水
にうつして見るべきやうをかまへたりけるに寺供
養の日思はざるに讒言をおひて身まかりにければ
山吹の花を水にうつして見る事もなくてやみける
をよめる歌也云々　清友は諸兄公の男也云々
奈良坂　春日龍神に注す
宮路正しき春日野の寺にもいさや參らん　宮路と
は春日の神社を云寺とは興福寺を指て云海人に注ス
更闌夜靜にして　朗詠集云更闌夜靜長門闃而不レ
開月冷風秋團扇杳而共絕矣　更闌とは夜のふけた

る事也

四所明神　　春日四所明神也春日龍神に注す

耿々(カウ〳〵)たる燈(トモシビ)も夜を背たる影かと　共に憐む深夜の月　白氏文集十三云背レ燭共憐深夜月踏レ花同惜少年春矣背燭とは月を翫ばんが爲也燈を壁の方にむくる也耿々の字義は盛久に注す

朧々(オボロ〳〵)と杉の木の間をもりくれば神の御心にもしく物なくやおぼすらん　　上に朧々といひてしく物なくやとつゞけたるは新古「照もせず曇も果ぬ春の夜のおほろ月夜にしく物もなき　此歌にてつゞけたりしくは如の字也是にましたる事はなしと也朧々は頼政に注す

宮めぐり　　朧田に注す

まだ色そへて紫の花をたれたる藤の門　　春日明神藤氏の祖神たり藤氏の門葉繁榮なる事をいへり委しく海人に注す

抑當社と申は神護景雲二年に河内國平岡より此春日山本宮の峯に影向ならせ給ふ　　神護景雲二年正月九日天兒屋根命河内國平岡より和州春日山に影向なる事春日龍神に注す

河内國平岡神社者所レ祭四座也第一天子屋根命第二鸕鷀草葺不合尊第三大國主神第四天照太神也矣　先代舊事神武天皇紀云天種子命於二凡河内國一祭二天物梁命一納二其所持寶一平岡社是也矣　神護景雲ハ稱德天皇之年號也帝王編年記云神護景雲天平神護三年八月十八日改元大宮東南角有二七綵麗雲一仍爲レ瑞矣◎續日本紀云天皇詔曰今年乃六月十六日申時仁東南角爾當天甚奇久異爾麗岐雲七色相交天立登又伊勢國守從五位下阿倍朝臣東人等我奏久六月十七日爾度會郡乃等由氣乃宮乃上仁當天五色瑞雲起覆彼形手書寫以進復陰陽寮毛七月十日爾西北角仁美異雲立天在同月廿三日仁東南角仁有レ雲本朱末黃稍具二五色一止奏利瑞書細勘爾是即景雲爾在實爾二大瑞一止奏是以改二天平神護三年一爲二神護景雲元年一全文略

河内國は舊事本紀云橿原朝御世以二彥己曾保理命一爲二凡河内國造一矣伊呂波字類抄云河内國神護景雲三年十一月改レ國爲レ職寶龜元年八月依レ舊爲レ國矣大和本記云河内國は神武天皇の御宇銀河を遷し給ひし其内の河なれは彼處を河内と號す云々河内を凡河内(オホシカウチ)といふは日本紀にも凡を大ともかけり

もと河内國を大河内國といへり抑の字は高砂
に注す
陰賴まんと藤原や氏人よりて植し木の　天智天皇
御宇大職冠鎌足初爲二内大臣一改二大中臣姓一爲二藤
原一鎌足御子號二淡海公不比等一不比等御子有二四人一
所謂武智麻呂房前式部卿宇合左京太夫麻呂也此等
を藤原氏人とは云也今の攝政家皆此末也春日山の
木を藤原氏の植給ふ事もあるべし（海人手子良集）昔より春日の
藤のさかゆれは今のつかひもかさしなりけり
慈悲萬行 〃 春日明神の菩薩號也春日龍神に注す
五重唯識の月の光は春日の里に隈もなし　南都法相
宗には唯識を旨と極るなればかくつゞけたり唯識
義章云五重唯識一遣虚存實識是虚實相對門二捨濫
留純識是心境相對門三攝末歸本識是本末相對門四
隱劣顯勝識是王所相對門五遣相攝性識是相性相對
門矣　隈もなしは猩々に注す
あらかねは田村に注す久堅は羽衣に注す
あめはゝこぎのみどりより花開け香殘りて　紀納
言仙家春雨詩云養得自爲二花父母一矣　雨は母子は
木也とつゞけたり　又云天神第三豊斟渟尊名二葉

木國尊一此神は火德の神也依て萬木の葉をあらは
し花を咲せ香まであらはすは此神の德也はゝこき
は此葉木國尊を云也はゝこきはこくに音かよへり
佛法流布の種久し　上來の詞は佛法始て顯れたる
事神代の昔よりはじまりて今世に流布すると云事
をいへり　法花化城喩品に三千塵點劫の往昔大通
智勝佛より其教ある事を說り又壽量品には五百塵
點劫の昔より佛法の種ある事を宣給へり
昔は靈鷲山にして妙法花經を說給ふ今は衆生を度せ
んとて大明神とあらはれ此山に住給へば　春日大
明神解脫上人に示給ふ御神託也神明鏡に見えたり
但本文とは相違あり春日龍神に注す
鷲の高根共三笠の山を御覽せよ　此意春日龍神に
注す
さて菩提樹の木陰とも　名義集云菩提樹梵語西域
記云即畢鉢羅樹也昔佛在世高數百尺屢經二殘伐一猶
高四五丈佛座二其下一成二等正覺一因而謂二之菩提樹一
矣
猿澤の池とて隱なき名池の候　大和寺社略緣起云
猿澤池在二興福寺南大門之前一其緯五十間餘經四十

徐也蓋摸ニ擬天竺獼猴池ニ故名池中有レ井傳云此井通徹龍宮ニ也此池西有ニ采女祠ニ東有ニ衣掛柳ニ是采女投ニ軀池水ニ之時掛ニ衣于樹上ニ故後人呼曰ニ掛衣柳ニ已倫今存者後人識碑者也矣　和州寺社記云猿澤池は古へ此池の邊に猿多く集り居て池水に移れる月影を見て手に手を取くみ月影を取らんとせし處に跡にひかへたる猿手をはなちければ因レ玆猿多く池水に沈みて死す其後此池を猿澤とは名付し彼猿埋みたるしるしとて池の側に松あり云々　又一說松院と云寺に古へ弘法大師住給ひ毎朝勤行の時猿菓を持て來り捧しが有時佛境の前にて死す此池の邊に埋み墓つかせ給ひそれより猿澤と名付し共いふ云々

さればあめの帝の御歌に「わきもこがねくたれ髮を猿澤の池の玉藻と見るぞかなしき　此歌大和物語にあり又拾遺集にも入わぎもこは采女を指て云童蒙抄云ねくたれがみとはつとめてなど寢をきたる髮とぞきこえければ身なげたらん人の髮にはたがひたるやうにこそきこゆるはひがことを思にや只かみのみだるを云べき歟云々歌の心は明に聞えたり此歌は人丸が讀る歌也天の帝の御歌とはあやまり成べし天の帝の事大和物語には奈良の帝と有是文武天皇を申也　或抄云猿澤の池に身をなげたる采女はあめの御門の御時と云々　此說に依て此謠に天の帝とは云也古今目錄に號ニ天帝ニ者天智天皇也と有然れ共物語に奈良の帝とあるは天智にて非ず天智天皇は一切平城宮におはしまさず近江大津の朝也天智天皇にてなき事明けし扨天の帝と云は聖武天皇を申也諱を天璽國押開豐櫻彥天皇と號す此故に略して天の帝と云也　大鏡云天の帝の作り給へる東大寺も佛計こそ大きにおはすめれと云々　是聖武の御事也又奈良の宮におはします故に稱ニ奈良帝ニ也案ずるに天の帝と云時は聖武の御事成べし大和物語の奈良の帝はたとひ天の帝と云說あり共文武の御事と治定すべし其故は人丸あるを以て也　袋双紙云人丸勘文如ニ万葉ニ人丸歌始ニ於文武藤原御宇ニ云々　敦光卿人丸贊云仕ニ持統文武之聖朝ニ云々　又一說人丸は神龜元年三月に卒す　聖武帝は同二月に即位有かの朝に仕る事いく程ならす又貞應本古今集注に文武と有然れは

大和物語のならの帝は文武天皇にうたがひなきもの也
御幸は大原御幸に注す翡翠の簪嬋娟の鬢桂の黛何れも卒都婆小町に注す
丹花の脣柔和の姿引かへて　丹花の脣は紅粉を付たる脣也　曹子建洛神賦曰丹脣外朗皓齒内鮮矣　柔和は二字共にやはらくと訓ず　法花法師品云柔和忍辱心矣
及なき水の月とる猿澤　此意善界に注す
心の水は實盛に注す
さはがしく共おしへあらばうかぶ心の猿澤の　安樂集云諸凡夫心如二野馬一識劇二猿猴一馳二騁六塵一何曾停息矣　心地觀經第八曰心如二猿猴一遊二五欲樹一不二暫住一故矣　此意盛久に記す
本よりも人々をなし佛性なり　大經曰一切衆生得二阿耨菩提一故我說二一切衆生悉有一佛性矣一云惠心云應レ念一切衆生悉有二佛性一矣
乃至草木國土悉皆成佛　發微錄云乃至超間之辭矣　心經注云乃至者擧二其始末一而略二其中一也矣　草木國土の文は鵜及芭蕉に出たり

龍女がごとく我もはや變成男子　海人に注す
ふだらくの南の岸に至りたり是ぞ南方無垢世界　何れも海人に注す補陀洛山は玉葛に記す
裏紫の心をくだきは朝顏に注す情内にこもり詞外にあらはるゝは松風に注す
葛城の大君勅に隨ひ　正一位井手左大臣橘諸兄公敏達天皇五世孫美奴王之子母從四位下犬養東人女也聖武孝謙之愛臣萬葉集之撰者也孝謙帝天平寳字元年正月六日薨行年七十四歲云々聖武帝天平元年冬十一月帝自取レ橘賜二葛城王一使三以レ之爲二姓且改二名諸兄一同十年補二右僕射一同十五年轉二左僕射一號二井手左大臣一云々橘を給はりける時の御歌に「橘はみさへ花さへ其葉さへ霜はをく共いやときはなれ　此歌萬葉にあり」
陸奥のしのぶもぢずり　此歌小鹽に注す
こともおろそかなりとてまふけなどしたりけれど猶しもなどやらん大君の心とけざりしに采女なりける女のかはらけ取しことの葉の　此采女は猿澤の池に身なげしとは別也此次に記す古今集假字序古注云葛城のおほきみを陸奥へつかはしたりけるに

國の司ことおろそかなりとてまうけなどしたりけれどすさましかりければうねめなりける女のかはらけ取てよめるなり是にぞ大君の心とけにける云々　かはらけ取とは盃取也

淺香山陰さへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふ物かは

此歌は古今序に入萬葉集に此歌の下句淺き心をわれ思はなくにとも有歌の意は山の井深き水にて山も陰うつる程深きごとく上は淺きやうなれ共心深き國守と也　古今秘抄云天智帝第一の臣葛城の王を陸奥の守に成して下し奉りし時内大臣在丸の女近江の采女を召具して下向ありしが國のまふけおそくして國の司ことおろそかなりとて大君の氣色あしかりければ采女かはらけ取て此歌をよみけり云々　此歌に三説有一には右の説一には大和物語云ある女をつれて陸奥までいきて住けり山の中に置て男はありきてものなどこひてくはせけり其間に女此歌をよみて死けり云々文略　今一には　先代舊事詠歌本紀云日本武皇子伏ニ日高見國一至ニ惡生國一時國造等奉ニ饗爲ニ事跡一大王不レ喜已欲ニ餘物一采女春婉知ニ無爲ニ好一取ニ奉觴一奉ニ上交酒一調曲謠レ之大王解情致平均　采女春婉「淺香山影さへ見ゆる山の井の淺くは人を思ふ物かも　右三説おなじからず

しかれば采女の戯れの色音にうつる　　古今假字序云あさか山のことばは采女のたはふれよりよみて云々　戯れとは采女淺香山の歌をよみて諸兄公の心をなくさめける事をいへり

花鳥のとぶさ　　軒端梅に注す

大宮人の小忌衣櫻をかざす　　小忌衣は高砂に注す

（新古）○百敷の大宮人はいとまあれや櫻かざしてけふも暮しつ赤人　萬葉に此歌の下句梅をかざしてこゝにつどへりと有

けふもくれはどり聲のあやをなす舞歌の曲　　くれはとりあやはとりをいひかけたり呉服に記す詩序曰聲成レ文謂ニ之音一矣　禮記注疏曰雜比曰レ音單出曰レ聲矣　筑波問答云毛詩と云文に聲のあやをなすといふも詞の花の事にや同じき文に嗟嘆するにたえざれば詠歌するといへるも其開所のおもしろきを申侍るにや云々

遊樂快然たる　　廻雪とうたふ流も有舞の曲に廻雪

ﾄ云名あり謡に注す　快然は説文曰快喜也矣　唐韻曰快稱レ心也可也矣

取分忘れめや曲水の宴の有し時御土器度々めぐり有明の月更て出郭公きそひ鳴なるにｪ　曲水は養老に注す有明は高砂に注す郭公は賀茂に記す　今案曲水宴は和漢共に三月三日におこなふ事也有明は十五日より後の月を云也然るに曲水に有明を取むすぶ事是時節不同也又郭公は夏也上に曲水とあれば暮春の郭公を云歟愛のつゞき何れもよろしからず但曲水宴三月三日に不レ限三月中旬におこなはれしためしも有古今著聞云後京極殿は詩歌の道に長せさせ給ひて寛弘寛治の昔の跡を尋て建永元年三月京極殿にて曲水ノ宴をおこなはんとおぼしたちけり巴字の羅陵を流し住吉の松を引などしてさまぐ\に御いとなみ有けるに熊野山炎上の聞え有ければ三日はのびて中の巳を用られたる例も有とて十二日と定られたりける程に七日の夜俄に失させにけり人々の秀句むなしく家に殘て社待らめ御年三十八云々　帝王編年記云堀河院寛治五年辛未三月十六日内大臣曲水宴矣

月になけ同じ雲井の郭公天津空ねの萬代迄に　是は古歌歟未レ考

萬代と限らじ物を　或云千年の松千年の鶴萬年の亀など云詞祝言にあらず幾千代いくよろづ世千代にや千世などは祝言成べしと云々

なづ共つきぬ巖ならなん　此歌羽衣に注す

松の葉の散失ずして植のかつら長くつたはり鳥の跡絶す　高砂に注す　鳥の跡絶すとは文字のつきせぬ事をいふ也　淮南子曰蒼頡回レ目觀ニ鳥跡一而制レ字矣

四海波静なり　高砂に注す

水滔々(タウタウ)として浪又悠々(ユウユウ)たりとかや　文選陸士衡歎逝賦曰水滔々日度川閲濟註滔々水流貌矣　同雜體詩曰悠々清川水呂向註悠々流水貌矣

石根に雲起(ヲコツ)て　石根は雲の異名也雲は石根より出る也

雨は踈牖(ヨウ)を打なり　踈はひすあくと訓す　牖は窓なり　説文曰牖穿レ壁以レ木爲レ交窓也一曰在レ墻曰レ牖矣

遊樂のよすがら是采女のたはぶれとおぼすなよ讀佛

の因緣なる物を　今うたひまふを采女のたはぶれとおぼすなよ讃佛乘ノ因緣其ならんかしと也此意源氏供養に注す

佛原

其比世に聞へたる白拍子の上手祇王祇女とておとゞひありとじと云白拍子が娘也然るに入道相國姉の祇王を寵愛し給ひ母とじにもよき家作りてとらせ毎月百石百貫おくられければ家内富貴してたのしむ事なのめならずかくて三年といふに加賀國より佛と云白拍子の上手來れり年十六と聞えし有時西八條殿へ來り筑後守家貞を以て申入たり入道宣しは左樣の遊びものは召にしたがふべし推て參る條心得がたしとて歸されしを祇王さま〴〵御すゝめ申すにより入道の御前にぞ出けるまづ今樣ひとつうたひける「君をはじめて見る時は千代も過ぬへし姬小松おまへの池の龜岡に鶴こそむれゐてあそぶめれ　とおしかへし三返うたふ次に舞一番「德は是北辰椿葉の陰ふたゝび樽をあらたむ猶南面松花の色十歸り是は後江相公文也新撰朗詠集入　入道相國是にめで給ひて佛に心をうつしいつしか又祇王を追出さる祇王せんかたなく障子に一首の歌を書付ける「もへ出るも枯るも同し野への草何れか秋にあはて果へき　其後入道殿よりほとけがつれ〴〵をなぐさめよと祇王の許へ文を立らる母とじが教訓によりて是非なく西八條殿へぞ參りける祇王心には口惜くもかなしくも思へどなく〳〵今樣ひとつうたひけり「佛も昔は凡夫なり我等も終には佛也何れも佛性具せる身をへたつるのみ社かなしけれ御いとまたまはり其後親子三人尼になりてさが野の奧に庵を結び念佛してぞ居たりけるかくてほとけ此事をほの聞てひそかに西八條の亭をしのび出尼になりさが野の奧に尋行四人一所にこもり居て他念なく念佛し皆往生のそくわいをとげゝるとぞ平家物語及盛衰記

全文略

餘所は梢の秋深き雪の白山尋ねん　餘所は秋の心なれ其白山は常に雪あれば早く冬のちかづくと也梢の秋は九月の異名也白山は美濃飛彈越前加賀四ヶ國にまたがれり加賀國にては石川郡にあたりて

しら山といひ越前にては大野郡に當りて白山と云也山頂に千蛇が池とて有見どりの池共いへり　事跡考云加賀國白山雪不レ消故名矣　伊呂波字類抄云白山者在二美濃飛彈越前加賀四箇國之境一其高幾千仭其周遙亘二數百里一天地積レ陰夏有レ雪譬如二葱山嶺一故曰二白山一夏季秋初氣溫雲消四節之花一時爭レ開矣下略（古）きへ果る時しなければ越路なる白山の名は雪にそ有ける躬恒　二川分流記云天文廿三年甲寅五月六日加賀國白山麓地獄出來由申候也矣

私云立山の地獄はあまねく人の云處也其比白山にも地獄ありと世にいひける歟

我未白山禪定せず候程に　白山權現在二加賀國石川郡一　一宮記云伊奘並尊也上社菊理姫矣　改曆云靈龜二年丙辰顯形也我當山地主伊奘並垂跡也又左峯老翁現云吾白山輔佐也稱二小白山一又右峰老翁現云吾白山㚑也即大己貴垂跡也矣　舊事神社本紀云廬戸宮天皇時去來諸大神和魂影向鎭坐其象中年美女之姿也右手持二十握劒一左手執二五顆珠一白龍纏レ躬置二頭於頂上一依レ之崇祭矣　昔越前國泰澄と云人あり四十四代元正天皇御宇養老元年天女の吉に依て彼白山に登れば天女即伊奘並尊にして今は妙理大菩薩と名のり給へり澄まのあたり十一面觀音にあふ又大行事及大己貴に逢給へり是を白山三所權現と申奉る也（釋書、神社考取意）私云禪定とは三學の其一也今山に登るを禪定といへり此詞は富士立山白山三所に限る也案ずるに古記に山の頂を絶頂と云也絶頂をあやまりて禪定と云歟又云昔佛道修行の人深山に登て禪定を勤むる事あり故に今禪定石とて有は其謂也然るに當時山伏禪定勤むる事はなけれ共此等の義に依て山に登るを禪定といひならはせる歟尋ぬべし

越の白山しらざりし　此歌花筐に注す

天照す神のはゝその紅葉々の　はゝそは柞と書柞の紅葉をいへり天照す神とは天照大神を云白山權現は伊弉並尊にして天照大神の御母也依て神のはゝそとつゞけたり

いや高き　彌と書はいよ〳〵高き也

是は早加賀國佛の原とやらん申候　佛の原は今越前にあり佛原月窓寺と號す本尊阿彌陀也彼白拍子佛の原より出たる人なれば佛御前とは云也　宗祇

囘國記云衆の頂上云る所を通侍るとて「わか頼む佛の原を分きてそおこなう道のかひもしらる丶 加賀國舊事本紀云賀我國造泊瀬朝倉朝御代三尾君祖石撞別命四世孫大兄彦君定ニ賜國造一矣 帝王編年記云弘仁十四年癸卯三月割ニ越前國一置ニ加賀國一矣日本後紀云郡内闊遠多煩ニ巡撿一官舍之損農桑之怠莫レ不レ由レ此伏請別建ニ一國一名曰ニ加賀國一矣 大和本紀云日本武尊退ニ荒血山一北陸道へ下り給ふに尊の兄大碓皇子思く北陸道は難所也尊の勢少にして定而夷等に破レ滅なんとて數万の軍兵を引率して從江沼國にて追付奉るに尊賀給ひて今こそ異なる事なし是一ッの賀也又御方の勢の加ふる事二ッの賀也賀を加へたりと仰られき故に江沼國を又加賀國と號る也云々

なふ〳〵は江口に注す 機絲は機の字彙中に注す

さなきだに五障三從の此身なれば 五障は梅枝に注す 三從記緇衣篇曰婦人者從レ人者也幼從ニ父兄一嫁從レ夫々死從レ子是故有ニ三從之義一矣大論曰女人之體幼則從ニ父母一少則從レ夫老則從レ子矣

心の水の濁りをすまして涼數道に引導し給へ 心の水は實際涼敷道は當麻引導は盛久に注す

いにしへ佛御前 申し白拍子は 本白拍子云は鼓太鼓の拍子なく舞計まふを云也其後拍子を用たり 下學集云日拍子歌舞而街ニ賣女色一之者也矣盛衰記云世に白拍子と云者有漢家には虞氏楊貴妃王照君などいひしは皆是白拍子也我朝には鳥羽院の御宇に島の千歳若の前とて二人の遊女舞はじめけりと云々徒然草云通憲入道舞の手の中に興ある事共をえらびて磯禪師におしゆ禪師が娘靜此藝をつけり是白拍子の根源也と云々 續古事談云妙音院大相國禪門曰舞を見歌を聞て國の治亂をしるは漢家の常の習也然るを世間に白拍子と云舞有曲をきけば五音の中には是商の音也此音は亡國の音也舞の姿を見れば立まはりて空を仰ぎて立り其姿甚物思ひ姿也詠曲身體共に不快の舞也と仰られけると云々

一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛 鵺に記す

野もせにすだく虫の音迄も 匠材集云野もせとはせばき心也野狹と書也々 僻案抄云野もせ水もせ是皆野の面水のおもてと云事也云々 私云此外庭も

せ道もせ宿もせ國もせなど古歌によめりすだくと
はあつまる也聚と書○新千虫のねも露の宿りに恨む也
野もせの月の有明の比爲世
昔平相國の御時 ◦ 平相國は清盛の事也鞍馬天狗に
注す相國は太政大臣の唐名也　百寮訓要抄云一人
に師範し四海に儀ニたり國を治め道を論じ陰陽を
おさむる由令にも見えたりされば王佐の才をたく
はへて天子をたすけ奉る器用の人のなるべき官也
其人なければ是を闕此故に則闕の官と申也云々
職原云太政大臣左大臣右大臣已上謂ニ之三公一　注
云但左大臣關白之時着ニ太政大臣着ニ其座下一例也矣
漢書百官表曰相國秦官秦昭王時以ニ穰侯魏冉一爲ニ
相國一是始也漢高祖十一年更相蕭何始任ニ相國一是
漢家相國始也矣　日本にては天智天皇十年正月五
日以ニ大友皇子一爲ニ太政大臣一是始也日本紀
祇王祇女佛とじとて〻　祇王祇女は兄弟也母をとじ
と云六條坊川に居けると也佛御前事上に記す　と
じと云名は諸抄に老女をいへり刀自共負共書○
後撰今こんといひし計を命にてまつにけぬへしさくさ
めのとじ　倭名抄云劉向列女傳云古語謂ニ老母一爲レ
ニ負今案則轉負之負字也俗老女名用ニ刀自二字一者
訛也云々　袖中抄云とじは或は老母の名或は老
女の名也但惣じて女の名にてもあるにや云々　童
蒙抄云さぐさめのとじとはしうとめの年おいたる
と云也云々詞林采葉云萬葉集には母刀自ともよめ
り又高貴の夫人なんどもを我身の卑下に刀自と被
ニ御たり天武帝の后藤原夫人字を大原の刀自と云鎌
足内大臣の御女に刀自と云有云々　又刀自は女官
也　職原云着ニ唐衣一是一向御膳役者也矣　禁秘抄
云刀自剌餉上臈女房候ニ朝餉南端一中臈内侍或小上
臈候ニ障子外一取傳下臈又傳ニ之中臈下臈得ニ選又傳
ニ之刀自持ニ參膳一近代無ニ何往反矣　侍房記云御膳
之時刀自持ニ御膳一往ニ反鬼間一矣
思顏　舊抄に温顏と書にごやかなる良也　前韓
信傳云以ニ温顏遜辭一承レ上接レ下矣
遊女は江口に注す寵愛は花筐に注す
涙の雨もおやみもせず　小止ヲヤミと書少しやむ也○つ
れ〳〵と身をしる雨のおやまねは袖さへいとゞみ
かさ增りて
思ふ事かなはねは社浮サ世なれ　此歌安宅に注す

いつなけきいつおとろかん　○新古いつなけきいつ思ふべき事なれば後の世しらて人の過らん西行

西山や浮世のさかの奥深き草の庵に隠家の　嵯峨野の奥小倉山の麓往生院に清盛の塔三尼并刀自が塔有或は祇王妓女等始観生法橋の草創にして後爲尼寺本尊は阿彌陀座像三尺計平家物語云とじは四十五祇王は廿一祇女は十九佛は十七にて出家して共に此所に住けり文略　盛衰記云後白川法皇此由を聞召て哀に貴き事也とて六條長講堂の過去帳に此四人を被入又大安寺の過去帳にも入と云々　浮世のさかとは嵯峨をうき事にいひかけたり　神代巻に悪と書又不祥共書萬葉に恐と書　伊勢物語云さがなきえびすごゝろを見ていかゞせん云々　増鏡云ものいひさがなきつみさり所なければと云々　○新續古昔人の往て生るゝ宿り社浮世のさかの西にありけれ　古今著聞抄云一篇御説小野篁流罪は仁明天皇承和五年に遣唐使にさゝれたるが一の舟にのらずは渡るまじきと申て被流たる也慈覺大師圓仁渡唐の時也嵯峨の御時無悪善と云落書を篁さかなくはよからんと讀ひらきて流罪也篁われ智あるによりてよめると云ければ一伏三仰不來待書降雨戀筒寢と書て見せければ「月夜にはこぬ人またるかき曇り雨もふらなんわひつゝもねん　此歌によみひらきて名譽也とて被召歸と歌一伏三仰を萬葉には夕づくよとよめり此歌には月夜にはとよめりと云々

我は誰とか岩代の松の葉結ぶ露の身の　万葉集第二巻有間皇子自傷結松枝作歌「岩代の濱松か枝を引むすび眞幸あらは又歸りこん　昔有間皇子は孝徳天皇の御子也齊明天皇の御時帝を傾給はんとて紀伊國岩代の松の枝をむすび此歌をよみて外へ出給へり然るに皇子の謀叛あらはれて終に藤代の坂にて殺し侍りき歌林良材及袖中抄全文略　無名抄云松の葉をむすびて是がとけざらんさきに歸りこんとちかひてむすぶ也さてまさしくあらばとよむ也云々　○萬岩代の野中に立る結び松心もとけすむかし思へは人丸　曉筆抄云岩代の松と申侍るは紀伊國岩代と云所の野中にある松也岩代の結松と云事は公宴にはゞかるべき事といへり或は人の墓より生たるを云共又塚にうふる松を結びて置を云共いへり但是

等難二信用一歟又住吉にも岩代と云所有又萬葉家持歌に一やち草の花はうつろふときはなる松のさ枝を我は結はん此歌は岩代ならねど結び松と謡り又無名抄には結松と云は手向と同事也云々南紀云岩代の結松に紀州日高郡岩代の庄岩代村の峰の上にありと云々按ずるに萬葉に岩代の濱松が枝共野中に立る結び松共よめり何れか是なる哉

尾花が袖の露分　尾花は薄也通小町に注す袖とは薄の風のなびくを袖と見る也證歌略レ之

草の假ねのとことはに　常住と書常にと云心也

金○常住に吹夕暮の風なれと秋立日社涼しかりけれ

月落かゝる山葛の　月落かゝるとは入方の月を云也山葛とは匠材集に曉の雲の事也と云々古○卷向の穴師の山の山人と人も見るかに山かづらせよ　袖中抄云山かつらとは神樂するに正木のかつらにこかしらをゆふをやまかつらといふ云々　綺語抄云明ぼのにたつ雲を山かつらと云或人云彼山かつらする人は夜の明る程に葛を取のくれば山かつらはなると云は其時と云也曉の山のはのしらむを山かつらはなると云はその時をさす也云々

輪廻は實盛に注す極樂世界は同實盛に記す

草木もなびくけしきかな　史記曰上合二淳德一以過二其下一下懷二忠信一以事二其上一上化猶二風靡一レ草矣劉向說苑曰上之化レ下猶二風靡一レ草矣

ひとり猶佛の御名を尋見んおの〳〵歸る法の場人

是は古歌歟追て考ふべし

前佛は過ぬ後佛はいまだ也夢の中間は　卒都婆小町に注す

一炊の内ぞ佛も有まじまして人間も　一炊は邯鄲に注す是等の詞舊抄に出たり略レ之

天に浮べる浪の一滴の露の始をば　古今眞字序云浮レ天之波起二於一滴之露一矣

一歩あげざるさきを社佛の舞とはいふべけれど

不レ擧二一歩一前とは一念不起を云一歩とは識前の一歩也禪家は階級を不レ立一念不生を爲二佛心一故に一念不起の處を佛の舞とはいへり

野宮

御息所と申は大臣の御女也十六の御年故宮に參り

給ふ故宮とは桐壺の帝の御弟前坊の御事也十七にて秋好中宮をまふけ給ふ是齋宮の御事也廿の御年前坊におくれ給へり中宮御年十四にて齋宮に立せ給ふ是よりさきに源氏御息所の御方へしのび〲にかよひ給ふ處に源氏の御室左の大臣の女葵上男子をうみ給ひて夕霧の大將と號す葵上御年廿五にてかくれ給ふ但御くわいにんの後御物のけのなやみ有是六條の御息所の生靈つきてかくれ給ふ也是より源氏と御息所の御中かれ〲に成しかば萬に賴みなく思召て齋宮につきそひて伊勢へ御下向あり又野宮は齋宮群行の潔齋し給ふ假座也御息所と一所に野宮にまし〲ぬ源氏の大將もさすが淺からず契り給ひし中なれば御せうそこにて度々問せ給ふ齋宮の御下向は九月十六日源氏野の宮に尋ね給ひしは九月七日なれば野の宮にも心あはたゞしき折なれ共あからさまの御對面成共と源氏あながちに宣ひて野宮に分入給ふ榊の枝を折もちかはらぬ心を榊の色によせて互によみ給ふ歌有狹衣に記す總夜日比のうらみ聞へ給ひて侍ふに御息所思ひあつめ給ひしつらさもはるゝ計かたり給ひて別れ給へりかくて齋宮は十六日桂の御祓有て內に參り給ひて伊勢へ下り給ふ也委く賢木卷に見えたり

是は諸國一見の僧にて候

洛陽の名所舊跡殘なく一見仕て候　日本にて洛陽と名づくる事は異朝の名をかりて云也　大明一統志曰洛陽縣本成周地居洛水之北故曰洛陽矣又云西安府長安故城在府城西北二十里本秦離宮漢高帝自櫟陽從都于此惠帝城長安矣　和朝にては桓武天皇延曆年中に都を山州平安城に移して東西二京を建て西京を長安東京を洛陽と云也帝王編年記云延曆十二年正月十五日始造平安城東京愛宕郡又謂左京唐名洛陽西京葛野郡又謂右京唐名長安南北一千七百五十三丈除大路小路東西一千五百八十丈除大路小路矣　名所舊跡と云は歌によみし所を名所といひ歌によまざるを舊跡と云也

嵯峨野の方ゆかしく候間　さが野は野の宮のあたりを云古歌にさか野原由よめり　長秋秋は先都の西を尋ぬれはさか野の花そ咲はしめける擧白集云さがにまうで給ひし比「夏草のしけるにつけてゆかし

きは花虫のねの秋のの丶宮
野の宮の舊跡とかや申候程に　野の宮は小倉の麓椿原にあり　一葉抄云さがの有栖川と云所に野の宮有と云々野の宮と云は女王内親王齋宮に立せ給ふ時神宮に入給ふべき前に御潔齋ある假の宮殿也常の御殿にかへてあらたに清淨の地をえらびて外に住給ふ物いみの質素をまもり給ふと云心にて野の宮と云也今此所に小社有伊勢太神宮を勸請す
新古●賴もしな野の宮人のうふるきくしくるゝ秋にあへす成とも順　●
黒木の鳥居小柴垣むかしにかはらぬ有様也　賢木卷云物はかなげなる小柴を大垣にて板屋どもあたりくいとかりそめなめり黒木の鳥居どもはさすがにかうぐしく見えわたされて云々　黒木の鳥居は皮付の木を以て是を造る質素にしてかざらざる義也　河海抄云黒木とはくろもんさと云木也と云々　岷江入楚云又皮の付たる木を云歟黒木の屋は仁德帝の御時始る云々　新拾遺に尾花さかふき黒木もてつくれるやとよみしは淳素なる躰也云々
鳥居ニ天門、神門、瓶闕、鷄栖、衡門、額木、助木、花橋共書岷江入楚云鳥居は天の字をかたどる神前に立るも天地の間を人の出入心也と云々或云鳥居は天照太神天の岩戸にこもり給へば諸神謀て常世之長鳴鳥を鳴しめ給ふ時のとまり木也云々
舊事本紀云神武天皇四年頭八咫烏奏曰於二宗宮之前一者當レ立二神門一謂二神門一者衛氣柱立天之蓋棟地之橫梁人心柱總是神形吾是天魂彌二於八極一有二八箇頭一天照太神分爲二荒魂一吾常棲二其神門一天皇御世供奉今此門謂二鳥居一總立二於神前一者矣此卷に小柴を大垣にてとは岷江云垣大は惣まはりの垣也云々　花鳥餘情云延喜式に大嘗會の垣は椎ニ柴爲レ垣由見えたり齋宮の野の宮も是に准ずべし云々　孟津抄云太神宮は柴をもて垣にする也不淨をとをざくるゆへ也云々●續古神さす柴の垣ほの數々に猶かけそふる雪のしらゆふ
伊勢の神垣へたてなく法の教の道すぐに　謠の心は僧の野の宮へ參詣申さるゝ也野の宮には伊勢太神宮を勸請す伊勢にて出家は髮長とていむ事を今爰にていへり玉葉集の歌に一天照す月の光は神垣や引しめ繩の內外共なし　此歌は西行太神宮に詣

て遙にあしがきの外にて心の内に法施奉て本地はへだて有べきにあらぬに垂跡の前に近く參らざる事を思ひつゞけて少しまどろみけるに告させ給ひけるとなん云々

何としのぶの草衣きてしもあらぬ　しのぶの草衣はしのぶずりの衣を云歟　衣色目云しのぶの衣はおもてうすもへぎきもあるべしうらあをし或はするも有べし云々

いと媚ける女性一人忽然と來り給ふは　最媚けるは井筒に注す　忽然は　說文云忽忘也矣　爾雅注云忽然盡貌矣　荀子注云無二根本一貌云　論語子罕篇曰忽焉在レ後矣

是に古へ齋宮に立せ給ひし人の　齋宮とは內親王を天照太神の御杖代に定め奉らせ給ふ事也此始は垂仁天皇の御代に倭姬命を始て立二齋宮一後代々皇女立レ之深草院非子內親王に至て斷絕す　延喜式云凡天皇即位者定二伊勢太神宮齋王一仍而簡二內親王未レ嫁者一若無二內親王一者依二世次一簡二諸王女一卜定畢即遣二勅使於彼家一告二示事由一神祇祐以上一人率二僚下一隨二勅使一共向卜部解除神部以二木綿一著二賢木一立二殿四面及內外門一矣　又云凡齋內親王定畢即卜二宮城內便所一爲二初齋院一祓禊而入至二明年七月一齋二於此院一更卜二城外淨野一造二野宮一畢八月上旬卜二定吉日一臨レ河祓禊即入二野宮一自二遷入日一至二明年八月一齋二於此宮一九月上旬卜二定吉日一臨レ河祓禊參二入於伊勢齋宮一矣　齋宮は都て三年の御神事にて其中に三度の御祓有初齋院へ入給はんとて御祓明年野宮へ入給はんとて又次の年伊勢へ下り給はんとて御禊有事也野宮の御うつろひは二年めの八月の事也 己上岷江入楚

長月七日の今日は又むかしを思ふ　年々に人社しらね宮所をきよめ御神事をなす處に　長月七日は御神事には非ず源氏野宮へ詣給ふ日なり賢木卷云人きゝなさけなくやと思し起して野宮に詣給ふ九月七日ばかりなればむげにけふあすと思すに云々野宮の神事は愛岩祭と一所也每年四月中の亥の日也世にさが祭と云長月は紅葉狩に注す

世を捨人は松風に注す光源氏は源氏供養及葵上に注す

其時聊持給ひし榊の枝をの井垣內にさし置給へば

賢木巻云月頃のつもりをつき〴〵しう聞え給はんもまばゆき程に成にければ榊をいさゝか折てもたまへりけるをさし入てかはらぬ色をしるべにてこそ非がきをもこえ侍にけれ云々　みすの下より榊を源氏のさし入給ふ也野宮にての事也　榊は日本紀に眞賢木眞坂樹と書　河海抄に龍眼木と書　色葉字類抄云榊漢語抄用レ之本名未レ詳矣　寶基本紀云榊一名眞坂木受二持自然正氣一冬夏常青故衆木中以二賢木一號レ榊矣　兼倶神代鈔云眞坂樹は木名神道是を尙正直の德あるを以て也云々　或云天照太神天の岩戸をとぢ給ひし時八百萬の神たち天香具山の坂樹をねごしとて、ていのり給ひしより神の緣木とす榊は非二本字一本朝の作字也云々　萬葉仙覺抄云さかきとはさかへたる木と云也かの木ときはにして枝葉しげゝればさかきと云也云々　先代舊事本紀第六に盛木と書

御息所取あへず一神垣はしるしの杉もなきものをいかにまかへておれる榊そとよみ給ひしもけふぞかし賢木巻に見えたり心は戀しくはとふらひきませ我庵は三輪の山本杉立る門と云歌をとれり　弄花云しるしの杉とは尋給ふべきしるしもなきものをと云也いかにまがへてとは思ひたがへてやなどの心也云々或云野の宮の神がきにはしるしの杉もなきをいかに折まがへて榊をしるべとして是へ御出ぞと云也云々同巻に源氏の返歌に一乙女子かあたりと思へは榊葉のかをなつかしみとめて社おれ

實面白き言の葉の今持給ふ榊の枝も昔にかはらぬ色よなふ　同巻にかはらぬ色をしるべにてとあるにてつゞけたり見レ上　孟津抄云榊は不變なる色なれば我心と同じと源の詞也と云々岷江云我心のかはらぬさまを榊の色によそへての給ふ也と云々

後撰○千早振神垣山の榊葉は時雨に色もかはらざりけり

あさぢが原もうら枯の　慈鎮和尙古今注云あさぢは淺茅也ちのみじかくておひたる也あさぢふは淺茅生也云々　詞花○思ひかね別れし野邊をきて見れば淺茅か原に秋風そふく

今も火燒屋の幽なる光は我思ひ内にある　賢木巻云火燒屋かすかに光りて人げすくなくしめ〳〵として云々　河海抄云炬舍火爐と書　色波字類抄云

助鋪如二衛士一屋也齋宮式云炬舍矣　花鳥云火炬小子二人山城國葛野郡秦氏之童女を取由延喜式に見えたり云々　岷江云春宮にも有レ所レ用不二分明一野宮の火燒屋に神膳をしたしむる用成べし云々○いつくしきかさりと見えし火燒屋もけふは心をこかす也けり　出羽辨

思ひ內にある色や外に　　松風に注す

抑此御息所と申に桐壺の帝の御弟前坊と申奉りしが

桐壺の帝とは源氏の御父太上天皇の御事也　延喜になぞらふる也花鳥云前坊とは東宮坊を辭退し給ふを申也坊とは東宮を稱する也立坊ながら位をもち給はぬ也云々　御息所は桐壺の御弟前坊の室也六條に住給ふ故に六條の御息所と云也父は系圖に大臣と出て源氏の詞には見えず澪標卷に齋宮おり居させ給ひて御息所かざりおろし給ひ其後七八日ありてうせ給ひぬと有也職原大全云御息所者東宮表者有二傳學士官一以備二其禮其家內一後宮者有二休息者一故曰二御息所一是東宮妻也東宮未レ可レ有二后妃之名一因レ之雖二嫡妻一號二御息所一矣　古今榮雅抄云東宮まではた后女御など云事なしされば御息所と號する也本儀は更衣也云々

時めく花の色香まで　　時めくは春めく色めくなど云也　桐壺卷云すぐれて時めき給ふありけり云々　細流云時めくは時にあひたる也云々

會者定離　　楊貴妃に

つらき物にはさすかに思ひはて給はす　　賢木卷云いとゞ御心のいとまなければどつらきものに思ひはて給ひなんといとおしく云々　岷江云御息所の心を源のおしはかる也御心つかひは殊勝也云云　さすがと云詞は安達原に注す

はるけき野の宮にわけ入給ふ御心いと物哀れなりけりや秋の花皆おとろへて虫の聲もかれ〴〵に松吹風のひゞき迄もさびしき道すがら　　同卷云はるけき野邊を分入給ふよりいと物哀れ也秋の花皆おとろへつゝ淺茅が原もかれ〴〵なる虫のねに松風すごく吹合てその事共聞わかれぬ程に物の音どもたえ〴〵聞えたるいとえんなり云々源氏野宮へ入給ふ道すがらの詞也かれ〴〵は定家に注す○虫のねもかれ〴〵に成長月の淺茅か末の露の寒けさ　後拾

秋のかなしひもはてなし　　楚辭曰悲哉秋之爲レ氣

也矣　劉禹錫詩云自レ古逢レ秋悲ニ寂寥ニ我言秋夕
勝ニ春朝ニ矣　○覺束な秋はいかなるゆへのあれは
すゝろに物の悲しかるらん西行
其後桂の御祓　賢木卷云十六日桂川にて御祓し給
ふ常の義式にまさりて云々齋宮伊勢に下り給ふ日
也花鳥云齋宮群行の日は西川にて御禊の事有幄の
屋にて中臣御麻を奉る事有と云々桂川を西川共云
大井川の流の末也川の西に桂の里有依て桂川と云
或云山城風土記云月讀尊受ニ天照太神勅ニ降ニ于豊
葦原中國ニ到ニ于保食神許ニ時有ニ一湯津桂樹ニ月讀
尊乃倚ニ其樹ニ立之其樹所レ在今號ニ桂里ニ矣　○侘
身は浮草のよるべなき心の水にさそはれて
ぬれは身を浮草の根を絶てさそふ水あらはいなん
とそ思ふ
行衛も鈴鹿川八十瀬の波にぬれ〳〵ず伊勢迄たれ思
はんの　賢木卷にあり御息所と齋宮と同車にて下
向の時二條よりとうゐの大路をおれ給ふほど源氏
の御所二條院の前なれば大將の君いとあはれにお
ぼされて榊にさして「ふり捨てけふはゆく共鈴鹿
川八十瀬の波に袖はぬれじや　岷江云心づよく思
ひきりたるやうなれ共さすがは袖はぬるべしと也
鈴鹿川は八十瀬とてあまた渡る川なれば袖のぬれ
ぬ事はあらじと也ぬれしやとはぬれまいとおぼし
めさばぬれん物をと也云々關のあなたより御息所
の返しに「鈴鹿川八十瀬の波にぬれ〳〵ずいせ迄
誰か思ひおこさん　岷江云ぬれ〳〵すとはぬるゝ
共ぬれず共思ひおこする人はあらしとかこちたる
心有云々勢陽雜記云鈴鹿川は關地藏新所と中町と
の間へ北より南へ流行するに河を鈴鹿川といへり
水上ははぐろ山よりいづと云々坂下明神の前より
關地藏迄二里の流れ古來幾瀬もわたるにや是なん
八十瀬と云りと云々　丙辰紀行云關の地藏より鈴
鹿坂の下まで數多の川有八十瀬の川とは是也云々
ことの葉はそひ行事もためしなき物を親と子の〻
母添てと云かけたる詞也御息所齋宮に付そひて下
向の事也賢木卷云親そひて下り給ふためしもこと
になけれといと見はなちがたきありさまなるにこ
とづけて浮世をゆきはなれんとおぼすと云々花鳥
云村上の御女規子内親王天延三年に齋宮に立て下
向し給ふ時御母徽子女王重明親王の女そひて下り

給へり今の物語に六條の御息所の徽子女王になぞらへて申侍れば是よりさきに母子あひそひて下向の例なきによりかくはいへる成べし云々　岷江云圓融院の御時規子女王齋に下り侍けるに母の齋宮ともろ共にすゞかやまをこゆとて「世にふれば又もこえけり鈴鹿山昔の今に成にや有らん

竹の都路におもむきし　竹の都は齋宮の御在所也勢州多氣郡にましますゆへに多氣の宮共云也勢陽雜記云齋宮は宮川の西二里程にあり此所今もさいぐう村と云參宮の往還の道也管笠を作り土產とす多氣　都共多氣の宮共云也宮ト都同義成べし今は竹の都竹の宮と書と云々　倭姬世記云景行天皇二十年宇治の齋宮を多氣郡に移して五百野皇女久須姬を皇太神の御杖代とし給ひ倭姬の皇女は猶宇治の機殿の磯宮に座給へり文略神名秘書云孝德天皇御宇始建ニ離宮院ニ淳和天皇二年始建ニ多氣齋宮ニ矣私云此說難ニ信用ニ倭姬世記の謠を可レ用歟　大和物語云彼齋宮のおはします所はたけの都となんいひける云々伊物集註云齋宮に立給ふ皇女は代々親王宣下ある故に齋內親王と云親王の唐名を竹園と云故竹の都と申也云々○思へ只竹の都はかすみつゝしめの內なる御代の氣色を後頼　一說伊勢齋宮の御在所をいもゐの都とも云萬葉長歌にわたらひのいもゐの都神風に下略

かひなきは融に注す羽束師のもりは三井寺に注す

森の木の間のゆふぶくよ影幽なるこのしたの　賢木卷云はなやかにさし出たるゆふづくよにうちふるまひ給へるさまにほひにるものなくめでたし云々此森のゆふづくよは夕月夜也夕月夜と書てゆふつくよ共よめり阿古木に注す　徹書紀物語云萬葉にゆふづくよと云に書やうあまた也夕月夜と書たるはゆふべより出る月の頃也又夕附夜と書たるは月には非ずたゞ夕暮からやうやうくらくて夜るに成を夕附夜とはいふ也云々

鳥居の二柱　春日龍神に注す

車の音のちかづく方を見れば網代の下すだれ　網代車は御息所の乘給ふ車也　葵卷云ざうざうの人なきひまを思ひさだめてみなさしのけさする中に網代の少しなれたる下すだれのさまなどよしばめるにいたうひきいりて云々　是は御息所賀茂御禊

〻の神事を見に出給ふ時の事を云也委細此次に記す

獻江云網代車は女の乗用する車也路次にて人に禮などもなき物也しのぶ時は男も是にのると云々

孟津抄云あじろ車あんとよめりと云々又云左册の車には青末濃の下すだれをかく網代の車には下すだれをかけず但女房の乗用するには八葉の車にも下すだれをかくる事に侍ると云々錦抄云秘記云賀茂祭見物雲客久壽二年四月廿一日隆長見物其車上檜網代矣

賀茂の祭の車あらそひ主は誰共白露の所せきまでたてならぶる物見車の様々に　賀茂祭は四月中の酉の日也今爰にいへるは御禊の日也齋院卜定ありて祓あり是を御禊と云祭の前也此日源氏の君も供奉にて出給ふ御出たちの花やかなるを見んとて葵の上御息所をはじめ女車多くひきつゞき其外あやしのしづの女までも共に見に出てたる也所せきは所狭也藻鹽草云所せきはせはきば小家などの身は自由なきを所せき御身なればと云也云々　物見車は御禊見物の車也　葵の巻云かねてより物見車心つかひしけり一條の大路所なくむくつけきまでさはぎたり所々の御棧敷心々にしつくしたるしつらひ人の袖口さへいみじき見もの也云々〔集〕あらそひし車をかこつ初めにて思ひのそはぬ所やはある〔親長〕

〔夫〕葵草かざり車の氣色迄けふはことなる物見とぞきく〔爲家〕

孟津抄云或説云左近のむまばは一條大宮也右近馬場とは一條西洞院也此大路に昔より女車をほく立所也彼御息所の車あらそひも此所與爰に必物見車立と云事は馬場一町がほど西は洞院をかぎり東は町を限て北南に棧敷をうつ事當時も同じ棧敷は馬場の西東にうつといへり此馬場にて五月五日にはま弓有隨身あくやをうちて上卿たつ左大將の役にて近衛舍人居る也云々

殊に時めく葵の上の御車とて人を拂ひ立さはぎたる其中に身は小車のやる方もなしと答へて立置たる車の前後にばつとよりて人々ながへに取付つゝ人たまひの奥に押やられて物見車の力もなき身の程ぞ思ひしられたる　葵上は引入大臣の御娘母木上天皇の御妹宮也源氏の君の御本妻也依て時めく葵の上とはつゝけたり葵上も御息所も賀茂御禊の物見に

出給ひしを下部の者共葵の上のけんにて御息所の車を人たまひの奥に押やりしを御息所口惜もつらくもおぼしていきとほり給ふて生靈と成て終に葵の上かくれ給へり　やる方もなしとは匠材集云やるせもなきなりと云々　葵の卷云つゐに御車共たてつゝけつれば人たまひの奥に押やられて物も心やましきをばさる物にてかゝるやつれをそれとしられぬるがいみじうねたき事かぎりなし榻なども皆押おられてすゞろなる車のどうに打かけたれば又なう人わろくくやしうなにゝきつらんと思ふにかひなし云々　說文曰轅輈也矣　詩詁曰車前曲木上句衡者謂二之輈一矣　倭名云唐韻輧車轅也俗在レ前謂二之轅一在レ後謂二之鴟尾一矣　河海云人給は出車の名也云々花鳥云出車をば公方より點せられてその人に給ふゆへに人給と名づくる也云々岷江云人たまひとは供の女房共の車也副車也物見なとに家禮の人などの車を點じて女房などをのする事也人給共副車共書也云々。孟津抄云雜車也云々枕草子云所もなく立かさなりたるによき所の御車人だまひなどあまた引つゞきてと云々

身は猶牛の小車　百萬に注す

庭のたゞずまゐよそにぞかはる氣色もかゝりなき　賢木卷云わかきんだちなどうちつれてとかく立わづらふなる庭のたゝづまゐもげにえんなるかたにうけばりたるありさまなり云々　岷江云野宮の氣色也云々

たれ松虫のねはりん〳〵として　同卷云風いとひやゝかに吹て松虫のなきからしたる聲もおりしりがほなるを上下略御息所歌に「大かたの秋のわかれも悲しきに鳴ねなそへそ野邊の松虫　說文曰凜々寒也矣潘安仁寡婦賦曰寒凄々以凜々呂延濟註凄々凜々冷貌矣

茫々　井筒に注す

爰は本より忝も神風や伊勢の　爰はとは野宮を指て云神風は伊勢の枕詞也野宮は伊勢齋宮の假殿なる故に神風や伊勢とつゞけたり能因歌枕云神風とは伊勢を云と云々綺語抄云神風とは神の御惠を云也通宗朝臣筑紫安樂寺にて神風と詠たりけるを人わらひけり伊勢太神宮の御事ならずはよむまじきにや可レ尋云々袖中抄云神風とは神の御惠を云とぞ數多の文に申たれどいかなればめぐみをは風とは

云ぞ共釋せねば覺束なし心みに是を思ふに神の御惠はひろく限りなし大空を吹風のあまねくしてきはまりなきがごとし帝德のかぎりなきをも風にたとへて風化と云り是も同事也と云々　詞林采葉云日本紀一曰取意　高皇產靈尊は經津主神武甕槌神二神を使とし出雲國に天降對二大己貴神一曰皇孫尊此國の君とし給はんと申給ふに大汝貴命御子の事代主神に問給ふ早く避奉給へと申其弟健御名方神は武荒神にていなび申給ふ然而父命國平廣矛を以て二神に授て曰天孫此矛を以て國を平け給はゞ必平げ給ひてんとて百不足八十隈に隱の御子達都て一百八十神おはするも處々に隱給ふ健御名方神は伊勢國より風神と共に信濃國諏方郡へ遷給ふ然れは風神は伊勢諏方兩所におはします神風と云事諏方にも可レ置也　又云活目入彥五十狹茅天皇廿五年倭姬を御杖として天照太神の鎭給ふべき所を求め伊勢國度遇宮に遷給ふ時太神倭姬命にかゝりて宣く此神風伊勢國は常世の波敷浪に寄國也此國に居らんと思ふ也と仍て五十鈴宮大宮柱太敷立て鎭給へり云々　大和本紀云伊勢國に神風と申事如何答云其子細異義あり一義には御裳洗川に神が瀨と云有是は天照太神常に下り涼み給ふ瀨也故に神風と云也一義には天照太神の御威光の風の喩也一義には諏方太明神天照（本ノマヽ）邊を濱給ふ時神風と云義有又神風は諏方太明神の眷屬也云々○（萬）神風の伊勢の濱荻折ふせて旅ねやすらんあらき濱邊に

內外鳥居に出入姿は生死の道を　內外とは伊勢の外宮內宮を云也白樂天に注す　衆邦百首抄云諸社へ參詣の事神社の前の鳥居より宮中に入事迷ひ衆生此肉身を捨て大日世界へ生るゝ心也然る間鳥居は女の女根を表したるもの也と見えたりされば鳥居を入時は阿字觀をこらすもの也と云々○（續拾）神風や內外の宮の宮柱千度や君か御代に立へき　衣笠內大臣

火宅の門をや出ぬらん火宅の門　火宅は軒端梅に注す　此唄の終りを火宅の門と留る事いぶかし惣て文法におゐて一部の末をかやうに留る事は女文字にては枕草子男文字にては莊子及史記等の文法也但此うたひは音樂の草紙なればかやうに留る事よろしからぬ歟

班女

班婕妤(ハンシヤウヨハ)左曹越騎校尉況之女彪之姑也少有二才學一孝成帝初即レ位班婕妤選入二後宮一始爲二小使一俄而大幸爲二婕妤一後趙飛燕寵盛婕妤失レ寵故作二是篇一新裂二齊紈素一鮮潔如二霜雪一裁成二合歡扇一團々似二明月一出二入君懷袖一動搖微風發常恐秋節至涼颷奪二炎熱一棄二捐篋笥中一恩情中道絶漢書取意　班婕妤は漢成帝の后成しが趙飛燕と云美女に思ひかへられて寵愛おとろへたりしかば我身を扇にたとへて恨み奉り此詩を作れり扇はもてなす時は袖ふところに出入すといへ共秋風ふけばなげ捨らるゝにたとへたり今此花子は吉田の少將と契り別れに扇を取かはし出られたれは朝夕かの女扇をのみもてあそび少將を戀こがれけり依て此女を班婕妤になぞらへて班女とはいふ成べし

ケ様に候者は美濃國野上の宿の長にて候　國造本紀云三野前國造春日率川朝皇子彦坐皇子八爪命定二賜國造一三野後國造志賀高穴穂(ワカアナホ)朝御代物部連祖出雲大臣命孫臣賀夫良命定二賜國造一矣大和本紀云崇神天皇御宇東夷蜂起しけるに御門足井の東原まで行幸なる仍其處を號二御野一今青野原云々　野上の里は關が原と垂井の間也不破の關より二里東也今は民家少し有○六百番一夜かす野上の里の草枕結ひ捨たる人の契りを定家　長とは爰にては遊女を抱置ものをいへ共元來長とは長也其所の司たる者を云也令義解曰凡驛各置二長一人一取二驛戸内家口富幹レ事者一爲レ之下略周禮太宰二曰長以レ貴得レ民　註長諸侯也疏曰謂二一國立諸侯與レ民爲二君長一又都鄙建二其長一註謂公卿大夫士子弟食二采邑一者今曰二令長一又夷狄首領亦曰レ長矣

上臈は志賀に注す吾妻は湯谷に注す

吉田の少將殿　未レ知二傳記一

浮伏しけき河竹の流れの身社かなしけれ　江口に注す　兼良美濃道記云うきふししけきくれ竹のはしになりぬる身をうれへ云々○續古くれ竹のうきふししけく成にけりさのみはよもと思ひし物を後頼

近江路は田村に注す　富士は富士大鼓に注す

都をは霞と共に立出てしはし程ふる秋風の音白川の關路　後拾遺集羇旅部云みちのくにゝ罷下りける

に白川の關にてよみ侍りける能因法師　都をは霞と共に出しかと秋風ぞふく白川の關

袋草子云能因實には不レ下二向奥州一爲レ詠二此歌一ひそかに籠居して下二向奥州一之由を風聞すと云々

愚秘抄云此歌を披露せんために洛中の好士等に關東修行に出る由の暇を乞て半年あまり居所にわざと棧敷をかまへて軒の板を日のさし入る程にこぼちあけて顔を日にあてゝくろめて後出て修行より歸りぬとて此歌を披露しける云々

紅は　賀茂に注す

春日野の雪間を分て生出くる草のはつかに見えし君かも　古今集戀一壬生忠峯歌也留りは君はも也

詞書云春日の祭にまかれりける時に物見に出たりける女のもとに家を尋てつかはせりける云々古今

榮雅抄云雪間にもえ出る若草にたとへてけふほのかに見えし君がおもかげわすられずと也祭春なれば雪間の若草おもひよそへり草のはつかに見へしはけふほのかに見たる心也君はもは君はと云詞也云々

世を秋風の便りならでは　(續千)思ほるゝ霧の絶間の秋風を便になして出る月哉　親範

夕暮の雲の旗手に物を思ひうはの空にあくがれ出て

古今集戀　よみ人しらず　一夕暮は雲のはてに物ぞ思ふ天津空なる人をこふとて　榮雅抄云天津空なる人を戀とて夕暮につきせぬものを思ふと也雲は盡せぬ物なればたとへていへり雲のはたては日の入ぬる山に光の筋々に立のぼりたるやうに見ゆる雲の旗の手に似たるを云又蜘の手のよしに書たる物もあれどあまつ空なるなどよめる歌雲ならでうたがふべき事なし云々袖中抄云くものはたてとは空の廣き心也はたは將と云心也ては萬の事にわたりたる事也常には夕部の雲の旗の手に似たるを雲のはたてとはあまたの文に申たれど萬葉集の長歌を見るに國のはたてに咲にける櫻の花と讀たれば國にははたて有といふべくもなければ空の廣をば雲のはた手といひ地のひろきをば國のはたてとよめるにやとなずらへて思ふ也下略あくがれは女郎花に注す

それ足柄箱根玉津島貴布禰や三輪の明神は夫婦男女のかたらひを守らんと誓ひおはします　足輕明神

在二相州駿州之堺蛤坂之峠一所レ祭之神　一座　神社

考云足柄明神昔赴レ唐其妻神獨留守三歳明神歸朝妻神色白肥美明神曰思慕之情待レ歸之心必可二痩衰一今何肥而麗哉不レ思レ我也遂去二妻神一矣箱根權現在二伊豆國一社檀西向也神社考云安貞二年十月筥根山神社檀佛閣燒亡當社垂跡滿月上人草創以後五百餘歳未レ有二廻祿之例一北條武藏守泰時頻歎息潛有二解謝之義一彼レ捧二願書一仍造營十二月二十八日遷レ宮東鑑社家云伊豆箱根者共本社彦火々出見尊也矣　私云地神第四彦火火出見尊龍宮に入て豐玉姫と契り給ひうかやふきあはせずの尊生れさせ給ふ也委く玉井に記す玉津島明神は在二紀州和歌浦一允恭天皇の妾衣通姫をいはひ奉りし也帝を戀奉りて我せこの歌をよみ給ふ委く關寺小町に記す垂跡の事は蟻通に記す　貴布禰明神は鐵輪に注す　後拾遺集云男に忘られて侍る比きふねに參りみたらし河に螢のとび侍るを見てよめる和泉式部「物思へは澤の螢も我身よりあくかれ出る玉かとそ見る御返し「奥山にたきりて落る瀧津せの玉ちる計物な思ひそ　此歌は貴船の明神の御返し也男の聲にて和泉式部が耳に聞へけるとなんいひ傳へ侍ると云々

童蒙抄には保昌に忘られて侍ける時と有　沙石集云和泉式部保政にすさめられ貴船にまふでいのりけるに神主たはふれ赤弊をたて樣々に作法して皷をうちまへをかきあけて三返めぐり給へといへば式部面うちあかめてかくなん「千早振神の心もはつかしや身を思ふとて身をや捨へき彼心の內わりなく優に覺へければ保政是に侯そといひて具して歸りて心ざし不レ淺なんありける文略　三輪明神は三輪に注す　右五所の明神男女の中を守り給ふといふ事明に聞へたり

謹上再拜　蟻通に注す

戀すてふ我名はまたき立に鳬人しれず社思ひ初しか

拾遺集戀一壬生忠見歌也詞書云天暦御時歌合と云々歌の心は我かく物思ふと云事は聊いひ出る事なく隨分人しれず戀るをいかなれば早くも人のしりて名に立る事かなとうちわびていふ也戀すてふとは戀する也まだきははやき也初しかのかの字は哉と云心なれは淸てよむ也沙石集云天德の歌合に兼盛忠見左右につがひて初戀と云題にて忠見歌に一戀すてふ下略　兼盛歌に「つゝめども色に出け

り我戀は物や思ふと人のとふまで共に秀歌なりければ小野宮殿しばらく天氣にうかゞひけるに御門兼盛が歌を兩三返微音に御詠じ有けり仍天氣左にありとて兼盛勝にけり忠見それよりむねふさがり不食の病となりて死しけるとなん文略　拾遺集には天曆とあれども袋草子及八雲御抄等には天德の歌合とあり

實やいのりつゝみたらし川に戀せしと　此歌定家に記す御手洗川は賀茂に注す

心たにまことの道にかなひなはいのらすとても神や守らん　金玉抄に菅家つくしにてよみ給へる歌也と有　又愚童訓には心だに誠の道に入上はとありて神功皇后三韓退治の時御誓願の御詠歌也と有歌の心明也

眞如の月　山姑に注す

衣の玉は有ながら　法華五百弟子受記品曰譬如下有レ人至ニ親友家一醉レ酒而臥上是時親友以ニ無レ價寶珠一繫ニ其衣裏一與レ之而去其人醉臥都不ニ學知一矣言は昔佛に逢奉りて法華經を聞て信じたる心を名付て信樂の衣と云然るを無明の酒に醉て忘れたる處を衣の玉は有ながら迷ひけるよと後悔する也　續古夢覺て衣の裏を今朝みれは玉かけなから迷ひぬる哉　慈惠

風狂したる秋のはの　朗詠集云江相公詩落花狼藉風狂後啼鳥龍鐘雨打時矣

形見の扇手にふれて　扇は楊雄方言曰關東謂之箑關西謂ニ之扇一矣崔豹古今注曰舜廣開ニ視聽一求ニ賢人一以自輔作ニ五明扇一矣　黃帝內傳にも五明の羽の起り有和朝にては神功皇后三韓征伐の時蝙蝠の羽を見て扇を作りたまふなり　○白川殿手枕の閨の扇を露よりもいつれ形見と契りおかまし　爲氏

班女閨中秋扇色楚王臺上夜琴聲　朗詠集尊敬雪詩也上句は班女とは班婕妤也雪の色はかの班女が扇に似たり閨の中とは美人常に紅閨の中にある也下句は雪のふるありさま楚王の臺の上にて琴をひくがごとし是廻雪の曲といへり　○續後撰雪に社閨の扇はたとへかし心の月のしるべなりけり

夏はつる扇と秋の白露といづれかさきに置んとすらん　新古今集夏部壬生忠峰歌也詞書云延喜御時月次屏風にと云々歌の心は夏の程は手をはなたざる

扇を夏果て露も捨風も涼しくなれば打捨心を詠り此歌秋の白露とあれ共萌詠集曉夏ノ部にも入たり

月重山に隠ぬれは扇をあげて是をたとへ　止觀第一曰如月隠二重山一擧レ扇類レ之風息二大虚一動レ樹訓レ之矣下略 ○月影の重る山に入ぬれは今はたとへし扇をそ思ふ　基俊新千

花きん上に散ぬれば雪を集めて春をおしむ　章孝標詩梅花帶レ雪飛二琴上一柳色和レ烟入二酒中一矣

鐘の音鶏籠の山に響つゝ明なんとして別れを催し

野上の南ニ鶏籠の山あり　大明一統志五十九云湖廣武昌府鶏籠山在二通城縣南一十五里一狀如二其名一夜靜常聞二鼓聲一矣　一統志を見るに凡唐土に雞籠山十三所あり今爰にうたふ雞籠山はいづれをいふぞ尋ぬべし　文粹八曰僕夫待レ衢雞籠之山欲レ曉惚侍二岑月之席一獨歩二凌レ雲之詞一　紀齊名

翠帳紅閨に枕をならぶる床の上なれし衾の夜すがらも同穴の跡夢もなし　是は二人比丘尼の詞を直につゞけたり翠帳紅閨江口に注す同穴は楊貴妃に記す

いつまで草の露のまも　匠材集云いつまで草は壁に生たる草なり見なしろ草ともといふと云々　○誰もわれいつまて草の庵とは見るらん物をかべよ生つゝ　草根

比翼連理のかたらひ其驪山宮の私語も　楊貴妃に注す

欄干に立つくしてそなたの空よと詠むれは　欄檻は唐韻云欄階陛木也矣　漢書注曰檻殿上欄也矣和名於波之万矣　詩人玉屑云獨來成二帳望一不レ去泥二欄干一矣

野分　松風に注す

團雪の扇も雪なれば　文捽曰江匡衡對二水石一詩序云班婕妤閑雪之扇代二岸風一兮長忘下略 ○雪の色の夏も消せぬかひや是扇の風の秋よりもけに　夫木

あふに別れなるべし　白氏文集云合者離之始樂兮憂所レ伏矣○始より逢は別れと聞ながら曉しらで人を戀ける　定家續拾

世をも人をもうらむまじ　○身をしれは人をも世をも恨ねとくちにし袖のかはく日ぞなき　拾遺愚草

身の程を思ひつゝけてひとり居の　○身の程を思　權千

ひつゝけてうき時はことはりにのみぬるゝ袖哉
繪にかける月をかくして懐に　白氏文集云盛夏不消雪終レ年無レ盡風引レ秋生ニ手裏ニ藏レ月入ニ懐中ニ矣
持たる扇とる袖も三重かさね　或云堂上公家の裝束のえり三重也夏は上青くこめ織也中白く平絹也下紅の綾也冬は上黒しこめ織下は夏と同じ云々　三重の扇は河海抄云檜扇の兩方の上三重つゝ薄様に包て色々の糸にてとぢてあはひ結びにしておきたる也五重も同じ風情也云々　枕草子云なまめかしきもの三重の扇五重はあまりあつくなりてもとなどにくげ也云々謠に作る處は裝束の三重と扇の三重と二を兼たり
秋風はふけ共荻の葉のそよとの便もきかで　○世の常の秋風ならは荻の葉にそよと計も音はしてま新古
ー安法々師女
かれ〳〵　定家に注す
形見こそ今はあたなれ是なくは忘るゝひまもあらまし物を　此歌松風に注す
さすが　安達原に注す

磐手の杜　磐提森　磐提山　磐手里奥州也　在ニ南部領ニ古しへの關所也岡つゞきに里及森あり
○陸奥のいはての森のいはてのみ思ひをつくる人もあらなん
野上とは東路の末の松山浪越て　謠のつゝきよろしからず末の松山は奥州也海邊の山也或云末松山は松島の内にて小き山也今は末松山沖石寺と云寺にて松はばら〳〵として透間〳〵に慕そとばなど見ゆる松島のつゞきなる島山也云々　袖中抄云末の松山とは陸奥にあり能因坤元儀には末の松山中の松山本の松山とて三重にありといへり又或本には末の松中の松ともいへり云々　又云末の松山浪こすと云事は昔男女にあひて末の松山をさしてかの山に浪の越ん時ぞこと心は有べきと誓ひけるより男も女もことふるまひするをば末の松山浪こすとはよむ也何事によりて思ひかけず山に浪のこえん事をば誓ひけるぞと覺束なきに彼山は遠くてみれば山よりあなたに浪のたつが山より上に見こされて山をこゆとみゆるによりてまことの浪のこゆべき由をちかへるなめり下略○契りきなかた見に後拾

袖をしぼりつゝ末の松山浪こさしとは元輔
折節たそがれにほの〴〵見れば夕皃の花を書たる扇
なり此上は惟光にしそくめしてありつる扇御覽ぜよ
此等は夕顔及半蔀に委く注す今爰へ此詞を取出し
たる事は扇のえんにてかくつゝけたると見えたり
たそかれは雲林院に注す
いもせの中　高砂に注す

軒端梅　號二東北一

拾芥抄云東北院一條南京極東上東門院御所元法成寺内東北角也後移レ之矣　近年遷二東山眞如堂西北一　扶桑略記云長元三年庚午八月廿一日上東門院供二養東北院一願文云聊捨二信忍之淨材一將レ構二方丈之梵宇一鳳城東面鴨水西頭有二一伽藍一則是我先考所二建立一也云々。斯中弟子建二立常行堂一宇一奉レ造二金色阿彌陀如來像觀音勢至地藏龍樹菩薩等各一体一矣　康平記云康平四年七月廿一日壬寅被レ供二養東北院一矣本是建二立法成寺東北一故有二此號一而去康平元年爲二灰燼一佛纔免二烟炎一仍此地如レ舊建二立堂舍一安二置本佛一也矣　續世繼云彼東北院は此院の御願にて父大臣の御堂法成寺のかたはらに作らせ給へり山のかたち池のすがたもなべてならず松の陰花の梢も外にはすぐれてなん見え侍ると云々此堂土御門のすへにあたりて上東門院と申なり云々　和泉式部軒端梅は昔東北院にあり此謠に作る處是也　應仁記云東北院は上東門院おり居給ふ寺也和泉式部が軒端梅あり云々　又京極誓願寺の南に誠心院と云あり又小御堂と號す此内に和泉式部の石塔有傍に梅あり世に軒端梅と名づく此誠心院は元一條の北小川に在て隣二誓願寺一也近世誓願寺遷二三條一之時同遷二彼寺南一又和泉式部の寺共いへり　私云當寺に和泉式部の石塔あるにて後の人此梅を軒端梅と名づけしと見えたり鶯宿梅の事大鏡第八云村上天皇天暦年中淸涼殿の庭の梅枯たり帝おしませ給ひ此梅に似たるを尋べしと勅あり或人奏聞しけるは西の京何がしが家にある梅こそ枯しにおさ〳〵おとるべからずと直にほりおこして叡覽にそふるに枝に歌一首かきつけ侍る「勅なれはいともかしこし鶯の宿はとゝはゝ如何答へ

んとよめる帝これをあはれみ給ひあるじの女はいかなる者ぞと人に尋させ給へば紀貫之がむすめなりける云々　或云彼梅の種猶殘りてありけるが其後足利義詮公爰に林光院を建て梅を愛せらる應仁の亂の後此院相國寺の内に移し梅も同じく植かへらる今方丈の庭にあり云々　私云軒端梅と鶯宿梅は別也

年立歸る春なれや花の都にいそかん　花の都は花洛共いへり花は美稱の詞也田村に注す

春立や霞の關を今朝越へて　霞の關は在二武州江戸大名小路一西高岡あり東向の所なれば富士見えず　風土記殘帖云霞關日本武尊東夷征罸之時蝦夷之儲關也爾來連綿太被レ賞レ之擧レ國之勝景而然其遠眺隔二霞雲一故有二霞關之號一矣○拾玉よふこ鳥霞の關に聲す也過行人を立とまれとや

果はありけり武藏野を分暮しつゝ　○新古武藏野はゆけ共秋の果そなきいかなる風の末に吹らん通具此歌を取て爰に果はありけりとはいへり　宗祇名所集云鎌倉より奥州へ下るに先武藏へ出る也武藏野といひ初る所は鎌倉より五六里也一國をしなべて野也鎌倉より北にあたる也國中に山なし秩父山の嶽は西のはし也武藏根と云は此秩父山也此山より見こしに富士はみえたり云々更級記云むさしの國になりぬことにおかしき所も見えず濱も砂子白くなどもなくこいぢの樣にて紫生ときく野もあらじ荻のみ高く生て馬に乘て弓もたるすへ見えぬ迄高く生しげりて中を分所に云々　武藏野紀行云平氏康　武藏野をかり行に誠にゆけ共果のあらばこそ萩すゝき女郎花の露にやどれる虫の聲々哀を催す計也「武藏野といつくを指て分いらん行も歸るも果しなければ　日光山紀行云藤原光廣山の端しらぬ武藏野に分いらせ給ふ草より出るは月のみかはあかねさす日も同じ云々　私云今の江戸町中昔は皆むさし野なり

山又山の雲をへて都の空も近づくや　山又山とは旅行の體也舟橋にも注す　長明海道記云日數ふるまゝに古郷も戀しくて立歸り過ぬる所を見ればいづれか山いづれか水雲より外に見ゆる者なし云々「古郷は山の幾重に隔きぬ都の空をうつむしら雲和泉式部　上東門院女房也號二辨内侍一幼名云二御

許丸ニ　八雲御抄云大江雅致女母越中守保衡女也爲ニ和泉守道貞妻ニ依號ニ和泉式部ニ生ニ小式部内侍ヲ云々被レ捨ニ于道貞ニ嫁ニ藤原保昌ニ任ニ丹後ニ其後出家而號ニ專意ト長和三年三月廿一日逝去矣

なふ／＼は江口に注す好文木は老松に注す

又は鶯宿梅などゝこそ申べけれ　拾遺集雜下云内より人の家に侍ける紅梅を掘せ給ひけるに鶯のすくひて侍ければ家のあるし女まづかくそうせさせ侍けるニ勅なればいともかしこし鶯の宿はととはゝいかゞこたへん　かくそうせさせければほらずなりにけり已上　此歌のよみ人大鏡に貫之女とあり拾遺集にはあるじの女と計ありて名をあらはさず又鶯宿梅といへる名も拾遺及大鏡に是なし雲玉集下學集等には此梅を鶯宿梅と記せり鶯の宿はとゝはゝ如何答へんといへる歌の心をもて後の人鶯宿梅と名付しと見えたり又云下學集に後鳥羽院の時と有又雲玉集には右大將道綱母の歌と記せり此等あやまり成べし大鏡及拾遺の說を是とすべし

此等いまだ上東門院の御時和泉式部此梅を植をき

此寺とは東北院を云り此東北院は元法成寺の東北にありて上東門院の建立也上東門院彰子御堂關白道長公女也母云ニ左大臣雅信公女倫子ニ長保二年二月廿五日十三歳而立ニ一條院后ニ生ニ寛弘五年後一條院同年人ニ上東門院萬壽三年正月十九日成レ尼號ニ清淨覺尼ニ白河院承保元年十月三日八十七歳而薨去矣

東練抄云萬壽三年正月十九日太皇大后出家停ニ宮號ニ爲ニ上東門院ニ矣

めかれせす詠め給ひしとなり　匠材集云めかれせずとは目もはなさぬ也云々　古今榮雅抄云めかれぬとは目もわかれぬにや目不離と書侍かれと云も又人の中のたゆるをもかるといふ云々〇古くるとあくとめかれぬ物を梅花いつの人まにうつろひぬらん貫之

讀誦は田村に注す逆緣は卒都婆小町に注す

又あの方丈ニ和泉式部の御げ所にて候か　東北院の方丈を云成べし方丈とは一丈四方に作るが故に方丈とは云也　要覽云方丈蓋寺院之正寢也矣　王簡棲頭陀寺碑文曰宋大明五年始立ニ方丈ニ注高誘曰堵長一丈高一丈而環一堵爲ニ方丈ニ矣　西域記云唐

顯慶中王玄策使西域至毗耶城有維摩居士石室以手板縱横量之得十笏故云方丈矣　傳通記粲木鈔云時居士即以神力移彼高廣座入方丈室室不成大座不成小大小相攝圓融無导也矣

みやびたる玉井に注す久方は羽衣に注す

久堅の天ぎる雲のなべて世に　古〇梅花それ共見えす久方の天きる雪のなへてふれゝは人丸　古今榮雅抄あまきるの淸濁いづれも苦しからず兩說也あまきるは天霧と書空のくもる心也云々　古今了譽抄云天切横天極天天霧と書天切と書心は天半分曇りて降雪也片時雨と云がごとし横天と書心は風に吹れて横さまにふるを云極天と書心は天にみち〳〵てふる也きはまると云を略していへり天霧と書心は霧のごとくに雪の空に散みだれたる體也萬葉にあまきらしふる共よめり云々

春やむかしの春ならぬ　此歌雲林院に注す

誰にとはまし道芝の露の世になけれ共　狭衣云物思ひの花のみ咲まさりて汀かくれの冬草はいづれ共なくあるにもあらぬ中にもお花のもとの思ひ草は猶よすがとおぼさるゝをむげに霜に埋れ果ぬるいと心ぼそく覺しわびて「尋ぬへき草の原さへ霜枯て誰にとはまし道芝の露　下紐云誰にとはましとは飛鳥井君の行衛を云也云々

とぶさにちるか花鳥の　とぶさとは木を切時飛こつはを云也　八雲御抄云とぶさは木の梢也云々　萬葉仙覺抄云をのまさかりをとぶさといふ云々　萬「とふさたつ足柄山に舟木切木に切よせつあたら舟木を詞林采葉歌今推此歌之心木を切時木足とてきりくづのちるが鳥の翅のとぶに似たるをとぶさと取に木足のかろくちるを足柄とよせたるにや又鳥の翅は鞦緫のごとく也鳥のとばんとては先翅を立て足かろくと云言にやと覺ゆ「我思ふ都の花のとふさゆへ君も下枝のしつ心なし祭主輔親　此歌も必落花にてもあらざるべし只花の枝とよめるにや朶の字をとぶさとよめる上は何の木の枝にてもとぶさと云べき歟已上

花も妙成法の道　妙法蓮花經をいへり

閻浮　白髮に注す

御堂の關白此門前を通り給ひしが　此門前とは東

北院をいへり前後の言葉證文未レ考追而可レ尋　從一位攝政關白太政大臣道長公東三條關白太政大臣法興院大入道殿兼家公三男也康保三年誕生寛仁四年二月作二法成寺一建二大御堂一因號二御堂關白一矣帝王編年記云寛弘八年八月廿三日爲二關白一長和五年正月廿九日改二關白一爲二攝政一寛仁元年十二月十六日讓二攝政於長子賴長公一三年三月廿一日出家法名行覺萬壽四年十二月四日薨年六十二號二法成寺攝政一矣　職原注云萃卷曰攝政者主上幼時置レ之或女帝置レ之常不レ置レ之關白者常置レ之凡此職者三公之兼官也矣◎有職懷中抄云關白は天子の勅を奉りて人臣の最上として天下の政務をとり行ふ職也關白に任ずれば人臣の上に座するに依て一の人と云又殿共殿下共異朝にて關白の始は漢宣帝の時霍光任レ之本朝にて關白の始は陽成院の朝に昭宣公基經〈忠仁公子也〉爾以後攝政關白彼家に傳はりて他家にうつる事なし關白ある時は攝政なし攝政あれば關白なし何れにても一職づゝ有レ之もの也云々

法花經の譬喩品を　譬喩品は法花經の第二之卷にあり譬喩の二字は共にたとへとよむ色々の譬を說給ふ品なれば譬喩品とは云也　文句五云以二世法一比二出世法一因二於曾有一聞二未曾有一踊躍歡喜如二經世間子父譬二出世師弟一乃至當レ知佛以二一音一說二於譬喩一巧令下二中下一得中四悉且益上故言二譬喩品一矣法花經の題號は大會に記す

門の外法の車の音きけは我も火宅を出にけるかな

是は和泉式部の歌といへり但いづれの集にも見えず隨喜功德品に乃至一偈にても此經典をきく人其福尙無量也と說り又譬喩品には三車火宅の事を委く說給ふ也御堂殿車の內にて譬喩品をよみ給ふを式部聞て隨喜の思ひをなし此車の音をきくだにも火宅を出ぬる心地するぞといへる歌の心也

歌舞の菩薩　誓願寺に注す

三界無(ム)安(アン)の內を去て三の車に法の道　譬喩品曰三界無レ安猶如二火宅一衆苦充滿甚可二怖畏一矣　又曰爲レ求二牛車一出二於火宅一矣　又曰以二三車一誘二引諸子一然後但與二大車寶物莊嚴安穩第一一矣　三の車とは羊鹿牛車(ヤウロクゴシヤ)を云也此意は一人の長者ありおさなき子供あまたあり俄に大火出來て長者の家燒來る時父の長者早く此家を出よと子供にいさむれ共は

かなき戯ぶれに心をそめて出ざりければ長者方便をなして羊鹿牛の三の車を作りて是を與へんと乗て出よといひければ子供是にひかれてやう〳〵出たるに又大白牛車とて種々の寶を以てかざりたる大きなる車をあたへて安穏ならしめたるたとへ也意は三界は安からず火宅のごとし其中の衆生を救はんためにさま〴〵の方便をなし花嚴阿含方等等の小乘をとき其機を熟せしめ扨一乘妙法を説給ひ終に成佛せしめ給ふ羊車は聲聞に譬へ此修行は四諦の法門也鹿車は縁覺也十二因縁の修行也牛車は菩薩六度の修行也大白牛車は大乘妙典の法花にたとふる也是法花譬喩品の說相也〇拾遺世中にうしの車のなかりせば思ひの家をいかで出まし〇拾玉今そしる三の車にのりの道は門より外にありける物を

成等正覺は源氏供養に注す和歌と云は發心說法の妙文は杜若に注す

適後世にしらるゝ者は唯和歌の友也と貫之も是を書たる也　古今眞字序云骨未レ腐二於土中一名先滅二於世上一適爲二後世一被レ知者唯和歌之人而已矣　今案此眞字序は紀淑望(ヨシモチ)がかける也貫之がかける假字序には此語なし諸の作者あやまれる歟假字序に又すぐれたる人もくれ竹の世々にきこえと有貫之は蟻通に注す

かるが故に天地を動し鬼神を感ぜしむることわざ神明佛陁の冥感に至る　毛詩序曰動二天地一感二鬼神一莫レ近二於詩一矣　古今眞字序云動二天地一感二鬼神一化二人倫一和二夫婦一莫レ宜二於和歌一矣　十口抄云天地を動と云に事理の二有事に動すとは能因歌に「天の川苗代水にせきくたせあまくだりますかみならは神

此歌の類也又理の義は天の德は地にあらはれ地の德は天にあらはれ天地の德は人にあらはる天地は我をひらき我は天地をひらくもの也然れば心ざしをのべ心を感ずる處天地を動す也云々　萬葉仙覺抄云悉曇に天はう也地はた也故に天地を動し鬼神を感ぜしむるは歌也といへりうはうとろ其うつほ共云心也たはたまる共たゝえる共云心也云々鬼神は魂の義也天の魂を神といひ地の魂を祇といひ人の魂を鬼と云也　禮記註曰鬼者精魂所レ皈聖人之

精氣謂二之神一賢知之精氣謂二之鬼一矣佛陁は梵音也大論曰秦言二知者一知二過去未來現在衆生非衆生數有常無常等一切諸法一菩提樹了々覺知故名二佛陁一矣冥感とは目に見えぬ暗き所より感應ある心也

天道にかなふ詠吟たり　詩人玉屑曰詩之爲レ經人事浹二於下一天道備二於上一而無二一理之不一レ具矣　白氏文集六十四云教倚レ文文本二於天一天道垂レ文而人則レ之故曰文者天之教也矣　詠吟とは　説文曰詠歌矣　書虞書曰歌永レ言聲依レ永矣　廣韻曰吟哦也歎也咏也鳴也矣松風虫鳥萬籟の音聲皆吟と云也

所は九重の東北の靈地にて王城の鬼門を守りつゝ　王城の鬼門とは元比叡山を云也謠の作者是になぞらへて此東北院も九重の東北にあたりたるがゆへに王城の鬼門とは云成べし　九重は田村に注す王城の鬼門は兼平に注す

雲水の水上は山陰の鴨河やすへ白川の浪風も　東北院は一條の南京極の東鴨河のほとりに建立ありし也依て爰に鴨河白川を取り出せり雲水の水上とは雲水の身といひかけたりけり雲水は僧の異名也穀生石に注す上賀茂に雲水及び山陰などいふ所ありといへり尋ぬべし從レ是以下東北院の風景をつゞけたり

いさきよき響は常樂の縁をなすとかや　常樂とは常樂我淨の四德の一也山姑に注す謠の心は人間有情の類は濁れり非情風聲水音は貪欲もなければ清し是を法門の縁に聞なすを常樂の縁とは云也

庭には池水をたゝへつゝ　東北院の庭の池水を云也上に記す

鳥は宿す池中の樹僧は敲月下の門　融に注す

見佛聞法の數々順逆の縁はいやましに　見佛聞法とは佛を見法をきく也いやましは彌増と書

九夏三伏の夏たけて秋きにけりとおどろかす　九夏とは夏九十日也伏とは金氣伏藏の日也四時の移かはり皆相生を以てす春は木にして冬の水にかはる水生木也夏は火にして春の木に替る木生火也冬は水にして秋の金にかはる金生水也只秋は金にして夏の火にかはる火剋金にて金は火を恐る故に庚の日に至てかならず伏す庚は金也三伏とは夏至の後第三の庚を初伏とし第四の庚を中伏とし立秋の後第一の庚を末伏とす是を三伏と云也　史記註曰

六月三伏之節起ニ秦德公ニ前漢郊祀志曰秦文公作ニ伏祠ニ註孟康曰六月伏日也周時無至レ此乃有レ之師古曰立秋之後以レ金代レ火金畏ニ於火ニ故至レ庚必伏矣歷忌曰四氣代謝皆以ニ相生ニ至ニ立秋ニ以レ金代レ火金畏レ火故三伏皆庚日也矣

澗底の松の風一聲の秋を催して上求菩提のきを見せ池水にうつる月影は下化衆生の相をえたり　上求ニ菩提ニ下化ニ衆生ニと云は菩薩大乘心の修道を云也上に菩提を求るは自利の行也下に衆生を化度するは利他の行也二利双行して大道を成す是菩薩の修行也　名義集云賢首菩提此謂ニ之覺ニ薩埵此曰ニ衆生ニ以レ智上求ニ菩提ニ用レ悲下救ニ衆生ニ矣　謠の心は澗底の松風一聲の秋を上求菩提にたとへ池水にうつる月を下化衆生にたとへたり　澗底は谷の底也　白氏文集云雪壓不レ折澗底松矣　晉左思云鬱々澗底松離々山上苗矣　說文曰澗山夾レ水也矣

東北陰陽の　　東北院をいへり東は陽北は陰と云を兼たり

春の夜の闇はあやなし梅花色こそ見えねかやはかくるゝ　古今春上躬恒歌也　詞書云春の夜梅花をよめる云云　●榮雅抄云春の夜のやみはかひなし梅花色こそ見せねど香をはえかくさぬといふ　あやなしとはたとへばかひなき事をあぢきなくなどいふやうなる詞也無益無詮と書云々

花は根に鳥は古巣に歸るそとて　忠度に注す

謡曲拾葉抄巻十一

二人靜

此謡を二人靜と名付る事は靜が亡魂勝手明神社人の女について舞をまふ靜が幽靈も共に立ならひてまふ故に二人靜とは云也是等寄處未考謡の作文なる歟　義經大物の浦より吉野へ落給ふ事舟辨慶に出たり　東鑑云文治元年十一月十七日豫州籠大和國吉野山之山風聞之間執行相催惡僧等日來雖索山林無其實之處今夜亥剋豫州妾靜自當山藤尾坂降到于藏王堂其體尤奇恠衆徒等見咎之相具向執行坊具問子細靜云吾是九郎大夫判官妾也自大物浦豫州來此山五箇日逗留之處衆徒蜂起之由依風聞伊豫守者假山臥之姿逐電訖于時與數多金銀類於我付雜色男等欲送京而彼男共取財寶棄置于深峯雪中之間如此迷來矣　義經記に載るは靜を吉野の麓に捨置各中院谷に籠りけるそれより靜は夜半にまぎれ思はずも藏王權現にまふで給ふ多くの衆徒靜を見て法樂の舞をすゝめける其時治部法眼といひしものよく見しりて義經の行衛を尋ね散々に制しけれ共修行坊の情によりて馬にのせて北白川へぞおくりける月頃靜はたゞならぬ身となりて此事六波羅に聞え謙倉殿へ訴申ける扨堀藤次親家に仰て靜と母とをつれて下りける則親家は母子を預り月日經てすでに男子出きにければあだち新三郎清經うけたまはりて此男子を由井濱につれゆきしつめにかけにける是は賴朝兄弟不和の中なれば義經の末孫絶さん爲也かくて文治二年四月八日賴朝卿並に御臺所鶴岡の社參に左衛門祐經に仰て靜を廻廊へ召出され舞曲を望ませらる于時祐經は鼓畠山は銅拍子靜先歌を吟ず「しつやしつしつの小手卷くり返し昔を今になすよしも哉」次に別曲の和歌を吟ず「吉野山峯の白雪踏分て入にし人の跡ぞ戀しき　上下みな興感を催す賴朝卿八幡宮の寶前において關東の萬歳を祝ふべきにしづのおだ卷くり返しとは九郎義經が世になれとの舞やう聊奇怪也とあれ共御臺御申なだめ有ければ其憤を休め給ふ其後靜母共にいとま給り都にのぼり十九にて母共に出家をと

げ天龍寺の麓に庵を結びておこなひ住けり年比の思ひやつもりけん其次の年の秋の暮に念佛申終に往生とげにけるとぞ　今案右の吉野山の歌は古今集壬生忠岑歌に「み吉野の山の白雪踏分て入にし人のおとつれもせぬ　と云を取てつゞけたり又小手卷の歌は伊物にあり奥にて注す　異本義經記云義經奥州にて自害の由を聞て靜尼に成て名をば再性と付て暫嵯峨の邊に住しが後南都に住し廿四の歳終命しといへり又奥州の方へ下りし共いへり傳云少納言道憲入道信西時勢舞の上手にて面白き舞の手を撰び出し磯前司に敎て舞せたり靜其藝を習ひたるに母よりも勝れたり殊に容貌姝にして心緒綾也とぞ元暦元年六月始て義經に奉公す前司は阿波國磯と云所の者故に磯の前司といへり今は其所を磯崎と云靜　淡路の志津賀と云所にて出生したる故名とす今は所の者あやまりて志津木といへり云々　和田宗允丹後海陸巡遊目錄云丹後に磯と云所有磯前司及靜此所より出る也靜が塔在二于此一云々

是は三吉野勝手の御前に仕へ申者にて候　勝手神社在二大和國吉野郡吉野山一所レ祭之神一座愛鬘命也　六十四神式云天孫臨降之時三十二神相添而奉二天降一也次爲二護國後見一被レ下之三十二神矣　吉野緣起云勝手大明神社奉レ祀子愛鬘神一也愛鬘神者饒速日尊降臨之時隨神三十二神之中也或云本地毘沙門樓門安二置子夷大黒一也門之左右謂二之東經藏西經藏一有二峰八王子社一兩方有二廻廊一自二三月十日一百僧相集讀二誦法花千部一矣　稱名院殿大和紀行云子守勝手の兩社に參り金の華表目おどろかれたり鳥形の額あり字形辨へがたし人に問ければ發心門とぞ申ける云々　靜法樂の舞の裝束幷に義經の鎧など當社の寶藏にありしが正保の比火災に燒失す○三家吉野の勝手の宮の山からす神はつかふる名はふりぬなり師兼

扨も當社におき御神事樣々御座候中にも正月七日は菜摘川より若菜をつませ神前に備へ申候　或抄云むかし此所に姥祖父ありて若菜及びくす魚を當社の供御に奉りしなり依て菜摘川と號す云々　夏箕川は吉野川の上也夏箕村は河むかひにあり蟬が瀧の下に櫻尾の茶屋とて有それより三町計行けば夏箕也○玉春も猶菜摘の川の朝氷また消やらす山陰にし

て（西音法師）
見渡せは松の葉白き吉野山いくよつもりし雪ならん
拾遺集に平兼盛歌也下句はいく重つもれる雪にか
有らん詞書云入道攝政家の屏風にと云々家集には
大入道殿御賀御屏風の歌と云々ゑかける雪の消せ
ぬ心にや大入道殿を祝ひて幾世つもれるなど雪の
縁にてよめり
三山には松の雪たに消なくに都は野邊の若菜摘
古今集春上題不知讀人不知と云々留りは若菜摘け
り歌の意は三山には松の雪たに消ぬに都は春めき
て野邊に若菜つむと也
木の目春雨ふるとても　○（續後撰）霞たつ木のめ春雨古郷
の吉野の花も今や咲らん後鳥羽
雪の下なる若菜を今いくかありてつまゝし　○（古）春
日野の飛火の野守出て見よ今いくか有て若菜摘て
ん　此歌春日龍神に出たり
春たつといふ計にやみ吉野の山も霞て今朝は見ゆ
らん　拾遺集卷頭壬生忠岑歌也詞書云平貞文が家
の歌合によみ侍けると云々此歌忠岑家集にも卷頭
也公任卿の和歌の九品を立らるゝに上品の歌とす
又道濟十躰をたてたるにも此歌を最上とす三家卿
秀歌の躰の大略にも最上と書給へる也後水尾院詠
歌大概抄云宗祇注に春たつといふ計といへるは只
口すさひに云計にやと云心也されと人の心の別な
る故にいつしか山もかすみて今朝は見ゆるといへ
るなるべし云々山ものもの字肝要也吉野は深山に
て雪ふかければ春もしばらく寒也如此の高山さ
へ春たつといふばかりにいつしか今朝はかすみて
みゆるといへり見ゆらんは見ゆるらん也云々堯孝
は此歌の至て面白きは何ともいはれぬ境也といひ
しと也云々
なふ〳〵は江口に注すみ吉野は舟橋に注す
一日經かいて我が跡とひてたび給へと　一日經は
頓寫の事也又日數をこめて書を漸寫と云也　鵜鷺
記云護摩をたき一日經をかき何れも嚴重の追善也
云々　百練抄云久安六年五月十日美福門院於法
勝寺金泥一日經供養法會已始之矣
うき水莖の筆の跡　匠材集云みづくき筆を云也云
々○（家）水莖の跡ふみならす我ならは筆のほとりをよ

そに見ましや慶恵

唯よそにて社み吉野の花をも雲と思ふへけれ　古今序云吉野山の櫻は人丸が心には雲かとのみなん覺えける云々拾遺抄云人丸が心には櫻を雲かと覺えけると云歌見えず或説に人丸集に文武天皇吉野に御遊覽の御供にて一白雲の色の千種に見えつるはこのもかのもの櫻なりけり　此歌を出す但櫻を雲かとのみ覺えけると云歌見えずと也已上　水無瀬殿にある人丸の賛に一條禪閤書給へる歌に「ととはん吉野の櫻雲と見しやまとことのは有やなしやと是は人丸が目には雲かと見ると云歌のなき由をよめる成へし古今實枝抄云雲花に似たりと云事文選云白雲峰立遠花添レ色青水滿レ谷松影深云々長房記云雲似レ花雪如レ鶴青色燕々不レ盡云々　萬葉云山櫻あくまて色の重なるは谷にも尾にもかゝる白雲依二此等義一花に雲の似たりと云也と云々　吉野の花は凡六田の方の麓より奥の院迄百餘町の間民家なき所は左右皆並木の櫻也左右の傍も下の谷も所々の谷々皆櫻多し春は麓より先花開き初てやうやく山に咲のぼりて奥の院にておはる其間大やう三十日計有吉野縁起云自二蔵王堂一至二安禪寺一都五十町夾レ道皆櫻錦綉厭レ枝此間有稱二千株櫻四本櫻日本櫻雲居櫻布引櫻花櫻花源關屋一者上矣

櫻は花にあらはるゝ物を　〔二〕詞深山木の其梢共見えさりし櫻は花に顯れにけり賴政

言語道斷　安宅に注す

衣河の御最期迄御供申たりし十郎權頭兼房は判官殿の御死骸心靜に取納め腹きり焔に飛て入　文治三年十月廿九日秀衡卒去の時子共一族に向て云我存生のことく伊豫守殿を守護し爲二大將軍一可レ令二國務一遺言しけれ共惣領泰衡心を變じ賴朝の命に隨ひ衣河の館を責落す也　東鑑云文治五年四月卅日於二陸奥國一泰衡襲二源豫州一是且任二勅定一且依二二品仰一也豫州在二民部少輔基成朝臣衣河館一泰衡從兵數百騎馳二至其所一合戰豫州家人等雖二相防一悉以敗績豫州入二持佛堂一先害二妻子一次自殺妻二十二子四歲矣　義經記云十郎權守兼房は淸和天皇十代の御末八幡殿には四代の孫鎌倉殿の御舍弟に九郎太夫判官殿の御內に十郎權守兼房本は久我大臣の侍也今は源氏の郎等也と云々　又云十郎權守今は中

々心にかゝる事なしとひとりことしかねてこしらへたる事なれは走りまはりて火をかけ折節西風ふき猛火は程なく御殿につきけり御死骸の御上にはやり戸かうしをはづしおき御跡の見えぬやうにこしらへける兼房はほのほにむせび東西くれてありけるが中略長崎次郎は兼房に打てかゝる兼房はしりちがふやうにして馬より引落し左の脇にかいはさみてひとりこゆへきまでの山供してこえよやとてほのほの中にとび入けり下略異本云増尾十郎權頭兼房は近衛院の役人にて有しそ常盤の門葉にて義經の乳母の親也丹波國馬路の郷領知せり彼所の百姓と平家の侍越中守盛俊が領分の百姓と水掛の論に付兼房が百姓を農具にて打殺たり兼房此事を聞安からず思ひ殺されたる者の一子十四五に成ける童に吾家人を指添盛俊が百姓の家へ押込念なう敵を討せたり此事兼房が所爲の由にて善惡の沙汰もなく清盛公計ひにて馬路の郷を沒收せられて山階香羽の郷に閑居したり云々

誠は我は女也しか此山迄は御供申爰にて捨られ

東鑑に文治元年十二月吉野法師靜をとらへて鎌倉へ注進申す同二年三月鎌倉へ下ると有

つゝましは卒都婆小町に注す上手の字は葵上に注す

袴は精好水干は　精好はうすき衣也緊は少しふとく織也大口に用之今爰に袴といへるも大口の事也水干は上に着うすき衣也一重の紗也胸紐有桃花蘂葉云水干は紗或は生平絹色は白くても何にても大納言の時迄内々に着二用之一矣

河淀ちかき山陰のかもなつかしき　川淀は所の名と見えたり太平記卷七云大塔宮の籠らせ給へる吉野の城へ押寄る菜摘河の川淀より城の方を見上たれは略上下（新古）吉野なる菜摘の川の河淀に鴨そ鳴なる山陰にして

義經凶徒に准せられ　義經は矢島に注す凶徒は田村に注す

小船に取のり渡邊神崎より押渡らんとせしに　義經都落の時は大物の浦を出られし也渡邊より舟にのられしは屋島へ渡りし時の事也此時神崎より舟を出せるは範賴也爰にうたふは義經都落の事なれは相違せり舟辨慶に記す　渡邊は屬二攝州西成郡一但方角所レ指不レ詳　古歌に渡邊や大江の岸とつゝ

けたり大江の岸は西成郡今の八軒屋のあたりを指といへり〇わたのへや大江の岸に宿りして雲ゐに見ゆる伊駒山哉（後拾 良暹法師）神崎は同く川邊郡自二大坂一天滿一亥方一里餘

天命かと思へは　論語季氏篇曰君子有二三畏一畏二天命一畏二大人一畏二聖人之言一矣　万葉仙覺抄云久方の天にゐらるゝ君ゆへにと云歌の注に人はむまれおつるより壽限いつ迄も有へしと梵天帝釋日月星宿皆照しみ給へり人の壽を天命と云也云々

此山に分入給ふ頃は春　上に記することく義經吉野へ入給ふは冬也春とはあやまり也

み吉野の花に宿かる下臥も　（新後拾）ヽ吉野山花の下臥日數へて匂そ深き袖の春風（道命法師）

一榮一落　一たびは榮へ一たびはおちふるゝ也

大鏡云菅丞相筑紫へ下り給ひける時明石のむまやにとゝまり侍りけるにむまやの長いみしくおもへる氣色御覽して作り給へる　驛長莫レ驚時變改一榮一落是春秋矣

昔清見原の天皇大友の皇子におそはれて彼山にふみ迷ひ　帝王編年紀云四十代天武天皇諱大海人號二淨御原帝一舒明天皇第二皇子母同二天智天皇一天智天皇七年戊辰二月立爲二皇太弟一白鳳元年壬申即位御宇十五年自二壬申一至二丙戌一都二飛鳥淨御原一秋九月九日崩御奉レ葬二高市郡大内陵一矣淨御原とは所の名也同紀云同元年九月還二幸于倭京一居二岡本宮南一是謂二淨御原一矣　大友皇子は天智天皇の御子也元明帝の弟也母は伊賀采女宅子也曰二伊賀皇子一後任二太政大臣一天智帝未太子なかりし時御弟天武に位を讓りて後大友生れさせ給ふ于レ時皇子天下をうばはんとす天武覺レ之大友に代をゆつり出家して吉野山に入り籠り給ふ于レ時白鳳元年五月大友聚レ兵襲二吉野一天武吉野を出て伊勢國へ行向て太神宮を拜し美濃尾張の軍を起して京に歸給ふ時同八月廿七日於二江州勢國一皇子の大將軍戰ひまけて皇子の頸を取つ其後天武大和に皈りて位に即給へり（日本紀神皇正統記文略）

櫻木の宮　宮瀧より五町計芳野へ歸る道側（ハタ）也左の方小山の林の内に小社有是櫻木の宮也飛鳥井雅章（マサアキラ）卿吉野記云櫻木の宮は高瀧（タカタキ）のかたはらに見えて櫻の錦も瀧の糸もて織出したるやと艶におほえ侍れ

は「瀧の糸を花に折はへ吉野山錦おりなす櫻木の
宮

神の宮瀧　　宮瀧は夏箕より三町程ゆけは宮瀧有西河より一里餘有吉野河の流れなり宮瀧は瀧に非す兩旁に大きなる岩有岩の高さ五間計川の廣さ三間計景氣甚妙也大河爰に至てせばき也　菅原御記云昌泰元年十月廿五日宮瀧につきてあそふ立やすらふに日の暮る事もしらす其瀧の有様めくり三四町計たかくさかしからねど音はいと高く早く流れたる岩につもれる雪のくつれかゝるがごとし水の中の所々に大なる石有あひさる事遠きは一丈あまり近きは七八尺下略吉野記云宮瀧と云所にて「流れ行花のしらゆふかけ添て春にいさめる神の宮瀧

西河の瀧　　號大瀧吉野川の上也清明が瀧より五町計有此瀧急に流て大水岩間を漲おつる也よい常の瀧のことく高き所より流るに非ず岩間の漲わく事甚見事也近く寄て見るべし遠く見ては賞翫なし爲「大瀧を過てなつみにそひてゐて清き河瀬を見るかさやけき　或云中頃今春及圓と我流を立る弟子と二人靜に立ならびてまひけるに弟子は此瀧を上に見る及圓は兼て此瀧の案内をよくしりたるが故に下に見る見物不審しけり其後此瀧の様子を皆人聞て師の及圓を感じけるとそ云々

さるにてもみよしのゝ頼む木陰の花の雪雨もたまらぬ

是は頼む木の本に雨もるといへる世の諺にてつゝけたり　太平記云主上笠置を御沒落の時梢をはらふ松の風を雨のふるかと聞しめして木の陰に立よらせ給ひたれは下露のはら／＼と御袖にかゝりけるを主上御覽せられて「さして行笠置の山を出しより天か下にはかくれ家もなし　藤房卿なみたを押へて「いかにせん頼む陰とて立よれは猶袖ぬらす松の下露東關紀行云源親行前島の宿を立て岡部のいますてを打過る程片山の松の陰に立よりてかれ飯なと取出たるに嵐冷しく梢に響渡りて夏の儘なる旅衣うすき袂も寒く覺ゆ「是ぞ此頼む木のもと岡部なる松の嵐よ心してふけ

足引の山　　檜垣に注す

唐土の佐國は花に身を捨て　大系圖云從五位上掃部頭大江佐國平城天皇後葉式部大輔通直子矣　本朝蒙求云佐國は何の許の人と云事不レ知其生甚愛

レ花園中に花を植て目を悦て爲レ樂佐國死して蝶と成て園中に來ると其子の夢に告たり文略　新撰朗詠云大江佐國詩云六十餘回看未レ飽他生定作ニ愛レ花人一遙年未飽花ト云題也　此謠に唐土の佐國と有唐土に佐國と云者ありや未レ考或抄云樂天詩煙霞埋レ跡惜ニ花暮一佐國弄レ身不レ待レ春矣 此義に依てかく作る歟猶尋べし　或說に吉野に唐土と云所有此所に佐國住けりといへり此說よろしからす

遊子殘月に行しも　　賈島曉賦云遊子猶行ニ於殘月一函谷鷄鳴矣　遊子は旅人也殘月は有明也

花を踏では同く惜む少年の春　白氏文集十三云背レ燭共憐深夜月踏花同惜少年春矣背レ燭とはほのほの方を壁の方に向る也月をもてあそばんがため也憐は面白き事を云踏レ花とは庭に散つもる花を踏て春の暮るをおしむ也

み吉野の奥深くいそく山路かな　續後撰　○いそきたて爰は假ねの草枕猶奥深しみ吉野の里

賴朝は弁辨慶に注す

賤やしつ賤のト手卷くりかへし昔を今になすよしも哉　此歌は伊勢物語にあり上の五文字いにしへのと有　河海抄若菜卷の引歌にはしつやしつと有愚見抄云下略 兒女の苧をうみて卷たるをへそと云それを小手卷共いふ云々眞字本に麻手卷と書榮雅抄に小環と書順和名に小團卷と書又しづた卷共よめり實澄云苧を長くうみて籆にてくるものなれば繰かへしと云下略をだ卷はくりもてゆけはもとへ歸るもの也女の心もとのやうになりかへれかしと願ふ心也云々

衣河　奥州磐井の郡也駒形嶺の麓より流れ出て逢隈河に流れ入逢隈は大河也衣川は小川也

ものゝふ　屋島に注す

〰〰〰

松風

此謠は源氏須磨卷の詞を取て行平須磨の浦に住給ふ事を作る也又須磨卷は行平の事を下心にして源氏の君すまの浦にうつり給ふ事をかけり又源氏の卷の名に松風と云有名は同じきといへ共別の事也是は明石の尼君住給ふ大井の里の事なと有此唄を松風と名つくる事は松風といへる海人の名によせ

てかく名つけたるなり行平須磨の浦に蟄居し給ふ事を尋ぬるに古今集にわくらはの歌の詞書云田村の御時に事にあたりて津の國すまと云所にこもり侍りけるに下略　古今秘抄云中納言行平はそると云草を紹巴云そるの花は俄翁花な云也云々好て庭に植られける庭をはく卑此草をしらすして引捨てけり行平是を腹立して此草を罪せんとからめ置けり賤き者なれ共心に思ふやう世は何事も歌になびくと申なるに哀れ歌をしらはよみて此難をゆるされはやと天に仰き地にふし念願をそしけるいましめられける苦みに身も心もつかれて少しまとろみける夢の内にしらぬ人の來て歌一首耳にうつして失にけり目さめければ只今罪おこなはるへき由いひて命の限ちかつく程に歌をよみて行平へ聞せける「陸奥のあたちが原の白ま弓そるとしりせばけづらさらまし　行平打案し給ひしが是はおのれがよみたる歌にてはよもあらじとて罪許さゞりけるを此事御門聞召て行平を勅勘有て須磨へ流し遣さるかの卑は命たすかりぬかくて行平はすまの浦に月日をおくる或時京に有人の方へかのわくらはの歌をおくりける如何してかは此歌を帝聞召て御あはれみ有て三とせといふに歸洛ありしと也西行聞書同之　或云光孝天皇仁和二年十二月四日芹川の行幸の時行平供奉す衰老の身にて大鷹の鷹飼に宣下せらる于時述懐の心をよめる「翁さび人な咎そ狩衣けふ計とぞ田鶴も鳴なると詠し摺狩衣の袂に書付て出にける主上御覧じ逆鱗有て官爵を解て攝洲須磨浦に被二近流一云々

・右異説多しいづれか是なる哉　須磨寺縁起云須磨寺は在二攝州須磨郡一號二上野山福祥寺一本尊は觀音漁人の網にかゝりてあからせ給ふ檀木の聖像也光孝天皇仁和二年に文鏡上人に勅して寶殿を造營あり在原行平此浦に謫せられ此菩提をいのりて歸京し給ふと文略

是は諸國一見の僧にて候我未西國を見す候程に此度思ひ立西國行脚と志て候　僧の字義は田村に注す行脚は屋島に記す

是ははや津の國須磨の浦とかや申候　津の國は

・高砂に注す須磨は矢田部郡也津國の名所なれども西行法師の歌に山家「播磨路や心のすまに關すへていかで我身の戀を留めん

扨は此松はいにしへ村雨とて二人のあまの舊跡かや
松風村雨の古跡は攝州矢田邊郡田井の畑村にあり
といへり或云松風村雨の二人は元讃岐國鹽飼大領
と云者の娘也繼母の讒佞により此所に離れ來り田
井の畑と云郷の名主の方に召仕れ月日をおくると
云々准后親房記云鷲尾庄司家久は熊王とて生年十
八歲大力の剛者を子にもつ母は田井の畑と云所の
美女也此里は松風村雨が出し所にて昔より惡女す
くなしと云々 文略 撰集抄云昔行平中納言と云人
いまそかりけり身にあやまつ事侍りて須磨の浦に
なかされもしほたれつゝ浦つたひありきけるにあ
るあまにいつくにやすみする人にかと尋ね給ふに
此あまとりあへず「白浪のよするなきさに世をす
こすあまの子なれば宿も定めすとよみてまきれぬ
中納言いとゝかなしうおほえてなみだもかきあへ
給はずとなん云々

海人は海士に注す其身は土中に埋れぬれ共は源氏供
養に注すあの山本の里迄は程遠く候ほとに山本の
里は須磨村を云東西二ヶ邑に有

鹽汲車わづかなる浮世にめぐるはかなさよ　鹽汲
車とは潮を桶にくみ車にのせて引也いやしき躰也
楚辭曰驥垂二兩耳一服二鹽車一兮矣 雲玉集「忘くれてはから
くも物を思ふ哉鹽汲車わづかなる世に

浪爰もとやすまの浦　源氏須磨卷云四方の嵐をき
ゝたまふに浪たゞこゝもとに立くる心地してと云
々

心つくしの秋風に海は少し遠けれ共彼行平の中納言
關吹こゆると詠め給ふ浦わの浪のよる〳〵は　須
磨卷云心つくしの秋風に海は少し遠けれと行平の
中納言の關吹こゆるといひけん浦浪よる〳〵はと
云々增鏡云後醍醐天皇隱岐へ移せ給ふ時の道すか
らの詞に彼の行平中納言關吹越るといひけんは浦
よりをち成へしと云々 心つくしの秋風とは古今集秋の上 よみ人しらず「木間よりもりくる月の影
見れは心つくしの秋はきにけり此歌は阿古木に注
す關吹こゆるの歌の事　觀江入楚云忠見集に天暦
の御時の屛風の歌「秋風の關吹こゆる度每に聲
うちそふる須磨のうら波　續古今集注の國すま
と云所に侍りける時よみ侍る中納言行平「旅人の
袂涼しく成にけり關吹こゆるすまの浦風　關吹こ

ゆると云詞は忠見歌と行平歌とにあり此物語の詞せき吹こゆるといひけん浦浪といへるは忠見か歌の心はなはだあひかなへり今案行平は忠見よりは先輩也然は此行平の歌より忠見か歌も出來ぬるかと見えたり此段の心は彼行平の中納言の關吹こゆるといひけん所の浦波と云心也（已上畧 江次略）　中納言行平は平城天皇御子阿保親王子息也至二正三位中納言一業平兄也器量人に勝れ歌道衆にこへたり然るに惟高ハ外戚の一族にて侍ける惟仁御位につかせ給ふ後惟高は出家し給へは在原の家いつしか衰へぬされは心ならすして諸國をさまよふ于レ時寛平五年七月十六日に薨す年七十六云々　中納言の官は大原御幸に注す浦わは融に注す

實音近き海人の家里離れなる通路の　須磨巻云昔こそ人の住家なとも有けれ今はいと里離れ心すごくて海士の家だにまれになと云々　岷江入楚云昔高鹽の事有さやうの時より家なともまれに成たると也云々

月より外は友もなし　〇金草枕この旅ねこそ思ひ志る月より外の友なかりけりうたかた　夕貌に注す

かく計へかたく見ゆる世中にうらやましくもすめる月かな　藤原高光歌也拾遺集に入詞書云法師にならんと思ひ立侍ける比月を見侍てと云々又家集詞書に村上の帝かくれさせ給ふての頃月を見てと有和漢朗詠集に上の五文字志ばしたにと有歌の心はかく志はしも住かたき世に月はうらやましくもすめる事と也澄の字をそへてよめり高光は九條殿の御子也此歌をよみて其曉に出て名を如覺法師と改め多武峯に籠りていみしうおこなひける由榮花物語にあり

跡に殘れるたまり水いつまですみははつへき　是も上の歌の心と等しく澄と住との兩字を兼たり或說にいつまてといひて山といへり但いつまてといひて苦しかるまし

海士のよび聲幽にて　あまの海よりあかりていきつくをとの人をよふに似たれはよび聲と云也〇萬大みやの内迄聞ゆあびきすとあご調るあまのよびこゑ

野分鹽風何れも實　野分とは秋風のつよきをいふ

也枕草子云野分の又の日こそいみしう哀れにおほゆれと云々倭名抄云暴風漢語抄八夜知又乃和木乃加世矣○吹見たる野分の風のあらければやすき空なき花の色々

かゝる所は秋なりけり　秋はさひしき物なれば須磨の浦によせてかくいへり　桐壺巻云泪にひちて見奉るさへ露けき秋なり云々　新拾〽身にそしむかゝる所のよはも又なれぬ旅ねをすまの浦風為子　○哀いかて幾夜をすまの浦波のかゝる所の月にあかさん道晃

よせては帰るかたをなみ芦邊の田鶴　万〽若の浦に汐みちくれは潟をなみ芦邊をさして田鶴鳴わたる赤人　古今集序に有又續古今にも入古今榮雅抄云和歌の浦に汐みち來て潟なくなれは芦邊をさして田鶴の鳴渡ると也云々古今堯惠抄云かたをなみとは潟なしと也無の字也浪に非ずと云々帝王編年記云聖武天皇神亀元年十月幸二紀伊國一是時山邊宿禰赤人有二若浦詠一矣　和歌の浦は南をうけて入海也此浦におなみ有てめなみなし故に片男波と云說有是大きなる非也赤人の歌の心とは相違せり

松島や小島の海人の　善知鳥に注す

陸奥の其名や千賀の鹽かま　融に注す

賤が鹽木をはこびしは阿漕か浦　阿古木に注す

その伊勢の海の二見の浦二度世にも出はや松の村立

霞む日に　二見は宇治山田より東行程三里也　古今榮雅抄云天照太神此浦を御覧して面白と御感有て又重て御幸なれは二見の浦と云也云々　勢陽雑記云天照太神天上よりくたし給ひし金札を此浦にして人見そなはし給ふ故二見と號す又說にむかしは札見と云文字を用ゆと云々　倭姫世紀云倭姫命二見濱御船坐于レ時大若子命國名何問給白速雨二見國白矣舊事神皇本紀云昔日天照太神從二尾張海一神幸坐時一見二此浦一今日也又天照太神自二堅田一於二神幸坐一二見二此浦一仍船倚之上二於此浦一故云二二見一矣　金葉集雑部大中臣輔弘歌に　玉くしけ二見の浦の貝しけみまきゑに見ゆる松の村立　私云此謡に二見の浦松の村立といへるは此歌を以てつゝけたり伊勢二見の浦の邊に蒔繪の松といふ有松の村立と云はかのまきゑの松を云り　坂士佛大神宮

參詣記云所〻の松繪にかけるが如し是や昔に聞えし蒔繪の松ならんと磯ものとる泉郎の乙女にとへ共こたへす舟さしのぼるますらおありもしやと尋侍し程に此入江をまきゑとや申覽それはしらず云々　勢陽雜記云蒔繪の松又卷江の松とも書ニ見の鄕三津村と江村の間に有山松を云と云々一本をさして云に非ず　或說に今一色と西村との間の松原を云と又立石の南の山の尾崎にあり一本の松を云共いへり玉くしけの歌より名付たる成へし或云江村の江はまがりて山を卷たる故卷江と云其むかひ東の方に見ゆる松を云也と云々

それは鳴海潟爰は鳴尾の松陰に　鳴海は尾州也鳴尾は攝州武庫郡也〳〵續古鳴海潟あさりに出る蜑ならは身を恨てゝ袖そぬれけるよみ人不知　續千秋寒く鳴尾の浦の蜑人は波かけ衣うたぬ日もなし大江貞重

芦の屋なだの鹽汲浮身ぞと人にや誰もつけのくし

伊物○芦の屋の灘の鹽やきいとまなみつげの小櫛もさゝずきにけり　此歌𪀚に注す黃楊の櫛は人に告るといひかけたり說文曰灘水濡而乾也矣　萬葉仙覺抄云なだのたは高き義也海の面渺々として波高き所をなだと云也云々　河波國風土記云奈汰其浦波之無ニ止時一依而云ニ奈汰ト海邊波立者云ニ奈汰等一云々

嬉しや是も月あり月はひとつ影はふたつみつゑほの

續拾○影は又あまたの水にやどれ共澄ける月はふたつ共なし　雲葉○うつしとる水なかりせは久方の月を一夜にふたつ見ましや小辨　華嚴廿三兜卒偈讚品曰普現ニ十方剎一其實無ニ二種一譬如ニ淨滿月普現ニ一切水一影像雖ニ無量一本月未ニ曾二一矣

世を捨人　匠材集云よすて人は世をのかるゝ人也桑門と書云々文選張平子西京賦曰展季桑門李善注曰桑門沙門也矣

よし〳〵かゝる海人の家松の木柱に竹の垣　須磨卷云所のさま繪に書たらんやうなるに竹あめる垣ゑ渡て石の橋松の柱をろそかなる物からおかしと云々白氏文集云石階松柱竹編墻矣●夫木集山里は竹あめる垣石のはしおろそかなるそ心とまれる●拾遺愚草竹の垣松の柱は苔むせと花のあるしそ春さそひける

わくらはに問人あらばすまの浦に藻鹽たれつゝわぶと答よ　古今集雜下在原行平朝臣歌也詞書云田村の御時に事にあたりて津國のすまと云所にこもり侍けるに宮のうちに侍ける人につかはしける云々　古今榮雅抄云たまさかに我事を問人あらはすまの浦に藻鹽たれてわびぬると答よと便ある人にいへる由なりあはれなる歌也と云々　後水尾院詠歌大概抄云古今集詞書に田村は文德の御時也ことにあたるは罪にあたる也宮の內の人は行平妹西條后也わくらはゝ邂逅の心也罪にあたる人をとふらふものは同罪といましめらるゝ事なればとふ人は有ましき也もしまれにも問人あらはもしほたれつゝわぶと答よと也もしほたれつゝはわびしくかなしき心也云々　詞林采葉云行平須磨にて此歌をよみて都にありける舊友はらからなとの方へ音信たりければ左近中將業平片野の御狩に事よせてひそかに彼浦に詣行てやがて別れける時よめる「すまの浦秋萩ゑのき駒なめて鷹狩をだにせでや別れん　榮雅抄云古き物にわくらはとはたまさかと云詞也と書たれど何故に云ぞと注さねば只古歌に任せてよみけるにやと云々　新古今集戀四攝政太政大臣歌に「わくらはに待つる宵も更にけりさやは契し山の端の月　玄旨抄云此歌の注にわくらはと云はそとなとゝ云義也と云々　増抄云わくらはとは病葉、書也わづらふ木の葉と云事也夏の紅葉也秋をまたで赤く成はわづらふ義也虫などくひてあかく成也秋のやうにおしなへての紅葉ならねは少あれはそとの事といへるも其儀なきに非すされはたまさかの心にて歌の心もふかき也と云々　西行聞書云わくらはに問人あらはとは五月雨の頃紅葉ゑたる葉也まれなる物なれはまれにとふをわくらはにとふとはいへる也と云々　古今堯惠抄云邂逅たまさかとよめりわくらはとて秋より前に紅葉の有を云義有曾て歌道になき事也只邂逅と書てまれなる事を云計也と云々　邂逅の字は楊貴妃に注す逆緣は卒都婆小町吊の字は定家閑浮は屋嶋に注す

二人共に御愁傷候　說文曰愁憂也矣　廣韻曰悲也矣　增韻曰傷痛也矣　爾雅曰思也矣

實や思ひ內にあれは色外にあらはれさふらふぞや

淳于髡曰有二於內一必形二於外一矣　子夏毛詩序曰情

動ニ於中ニ而形ニ於言ニ矣　新古今序云心動レ内言顕レ外矣○家隆
人のとふまて
こりすまのうらめしかりける心かな　榮雅抄云こりすまは只こりずと云詞也云々八雲御抄云須磨こりすまの浦は同所也但別なるやうに云人も有云々
須磨巻
○こりすまの浦のみるめもゆかしきを鹽やくあまの如何思はん

扨も行平三とせか程御つれ〳〵の御船あそひ　帝王正統録云行平仁和三年配ニ流須磨ニ矣　私云古今集わくらはの歌の詞書に田村の御時と有田村は文徳の御時也文徳御在位より光孝帝仁和中迄は凡三十年餘以後也尋ぬへし　惣て流移の人罪の輕重によりて或は三年或は六年にてゆるさるゝ事也　花鳥云獄令云凡流移人至ニ配所ニ六載以後聴レ仕即本犯不レ應レ流而特配流者三載以後聴レ仕矣　行平も其罪輕かりし故に三とせ經りて歸京せられたる成へし

つれ〳〵は千壽に注す

月にもなるゝすまの海士の鹽燒衣色かへて
新後撰
○鹽風の波かけ衣秋をへて月になれたるすまの浦人　爲氏
新千
○すまの海士の鹽燒衣おのれのみなれてもかゝる袖の波哉
かとりのきぬの空燒なり　緗衣とは衣裝に燒物する時伏籠に直にかけず一重なる物を掛て其上に衣をかくる也下にかくるを緗のうす物と云也藻鹽草云すゝしの綾と有又水色のすゝし或は白く紋なき也空燒とは衣類に留るに非ず只何となく香をたくを云也　若紫卷云空燒物心にくゝかほり云々○新「立かふるかとりの衣の白かさね重ても猶うすき袖哉
内大臣
新拾
○玉たれのみすの内より出しかは空燒物と誰かゑりにき　清輔

身にも及はぬ戀をさへすまのあまりに　新勅
○朝な朝な海士の棹さす浦ふかみ及はぬ戀も我はする哉○水無瀬殿戀十五首歌合
打わすれもにすむ虫はよそにしてすまのあまりに恨かねつゝ　左大臣

戀草　百萬に注す

巳の日の祓やゆふしての　須磨卷云彌生の朔日に出きたる巳の日けふなんかくおぼすことある人は御祓し給ふべきとなまさかしき人の聞ゆれは海つ

らもゆかしくて出給ふと云々巳の日の祓に公事根源に見えたり　漢書外戚傳曰孝武帝祓二霸上一還孟康曰祓除也於二霸水上一自祓除今三月上巳祓禊也矣漢志曰日三月上巳日百官於二東流水邊一禊飲自レ魏以後只用二三日一不レ用二上巳一矣　應劭風俗通曰周禮女巫掌二歳時一以祓二除疾病一禊潔故於二水上一禊除鄭國俗三月桃花下之時以二上巳一溱洧於二二水之上一執二蘭葉一招レ魂續レ魄而祓二除不祥一矣　ゆふしではに注す

御立烏帽子狩衣を　立烏帽子は卒都婆小町に注す

布狩衣は鷹狩に不レ限いつくにても着するもの也布衣獵衣鷹衣と書冬は裏ある狩衣夏はすゝしの狩衣也但紗の狩衣は四季通用也凡五位以上は織物六位以下は無文定る制也然れ共今世六位の人も皆織物の狩衣を用るは非也桃花蘂葉云狩衣其色不定若年の時は紅梅蘭木の浮文の織物盛年は遠文壁十五未滿の時は袖括毛祓形若年は濃平の紺蘭木紫紅等の打更次は紫匂次は薄色等也淺黄などを用ゆる程にあらば小直衣を着すべき也狩衣は大納言迄着用する也云々

思ひ草葉末に結ぶ露の間も　思ひ草は百萬に注す○金思草葉末に結ふ白露のたま〳〵きては手にもたまらす　俊成

形見こそ今はあたなれ是なくは忘るゝ隙も　古今集戀四に題忘らす讀人不知と有下句忘るゝ時もあらまし物を榮雅抄云逢事も今はなければ形見こそあだなれこれなくは忘るゝ時も有へき物をと也云々十口抄云あたは仇也講師などにて此歌を讀あげんに仇とよめらんはおそろしかるべき也化と可レ讀也定家卿は仇は不レ可レ然化をはかなき心に用よといへり云々　古今寶枝抄云業平の許より形見に志給へとて双紙を奉りける時よみて返し給ふ二條の后の御歌也云々　古今素純抄云父の説業平齋衡三年三月二日直子に遇て三日攝津國へ下しに小車の錦の文の守を形見に奉る直子は業平に扇を與ふ縫射山の位に上る共是をえるへに尋よと也月隱二重山一擧レ扇喩レ之と云心はへ也云々

宵々にぬきて我ぬる狩衣　下句かけて思はぬ時もまもなし　古今集戀二に友則歌也榮雅抄云我心にかけて思はぬ時の間もなしといはんとて夜々ぬるゝと

てぬける衣をかけてをく衣架によせたり云々
枕より跡より戀のせめくれは　下句せんかたなみぞ
床中におゐ　　古今集誹諧歌也素純抄云前後の戀に
せめられて身を持わつらひたる樣也思ひの忐きり
なるをかく跡より枕よりといへり云々
三瀨河絕ぬ涙のうき瀨にも亂るゝ戀の淵は有けり
歌の心は思ひ亂るゝ戀に死なには絕ぬ涙の數つもり
て三瀨川の淵と成べしと也此歌何れの集にも見え
ず諸人も未レ考古今類句に新續拾遺集にありと云
々但廿一代集に新續拾遺といふはなし追て尋ぬべ
し三瀨川は三津川也榾垣に注す
立別れいなはの山の峰におふる松としきかは今歸り
こん　　古今集離別巻頭題しらず在原行平朝臣の歌
也榮雅抄云立別れいぬる共人の待ときかはやかて
歸りこんといふ別れていなはとそへ嶺におふる松
を待にいひなせり是は因幡國の任はてゝ上洛の時
よめると云々　俊成卿云此歌あまりにくさり過て
よろしからさるを今歸りこんといひなかしたる所
幽玄也と云々　定家卿云今古集秀歌十首の内にい
れり云々　後水尾院詠歌大概抄云此いなはの山は
美濃國と云說因幡國とも云說兩義也中略　又は此行平
にてはなし別の人也と右兩義のうちみのゝ國とい
ふ說多分也云々　宗祇說云因幡國山は濃州の稲葉
山也其故は因幡山の國司の事は別の人也云々　或
云文德實錄云齋衡二年正月丙申從四位下在原朝臣
行平爲二因幡守一矣　又行平家集に此歌の詞書にい
なはの守なりしが任はてゝみやこにのほりけるに
思ふ人によみてつかはすと有右いづれをか是とせ
ん尋へし
すまの浦わの　○雲玉雲の浪分行鴈や小舟さす須まの浦
わの夢の明ぼの
そなれ松の　須磨の浦にあり海道砂川二筋あり其
の間道の左手也行平別れに臨んで手つから松を植
置れをし磯馴松と云とも也古歌に皆磯の心をよめり
○續後拾すまの浦や汀にたれるそなれ松下枝に波のかけ
ぬ日そなき宗牧連歌抄云そなれ松はちいさきより
そひ馴たる庭なとの松也證歌に「植置し我古郷の
そなれ松いく秋風にそなれきぬらん
松に吹くる風も狂して　狂じてとは風あらく吹也
後江相公詩云落花狼籍風狂後啼鳥龍鐘雨打時矣

うしろの山　忠度に注す
關路の鳥　須磨の關也忠度に出たり

湯谷

八島内大臣宗盛卿遠江の國守たりし時池田の宿の長者遊屋が娘侍従といひし女を都にめされ御寵愛なゝめならず侍従は古郷に殘り給ひし老母をゑたひ常にはいとま申しか共給はさりければ比はやよひの初めにてもや有けん「いかにせん都の春はおしけれとなれし吾妻の花や散らんと　云歌をよみけれはいとまを給はりあづまに罷下りし也其後三位中將重衡關東下向の時池田の長者に一宿せられけり侍従三位中將殿を見奉りて日比はつてにだに思召寄給はぬ人のけふはかゝる所へ入せ給ふ事のふしきさよとて一首を奉る「旅の空はにふの小屋のいふせきに古郷いかに戀しかるらん　中將の返事に「古郷も戀しくもなし旅の空都もつゐのすみかならねは　中將梶原を召て只今の歌の主はいかなるものぞと尋ねさせ給へは景時申けるは君はいまだゑろし召れ候はずやあれこそ八島の大臣の御さいあひ有し侍従と申女にて候と事のやうすをかたりける（平家物語盛衰記今文略）

是は平の宗盛なり　　内大臣従一位平宗盛者太政入道三男號㆓八島大臣㆒舍兄小松殿他界の後は此内府淨海の遺跡を相續して威勢高し元暦二年三月廿四日於㆓西海㆒前内府宗盛子息右衛門督清宗爲㆓伊勢三郎能盛被㆓生虜㆒父子共に鎌倉へ具し下る其後又歸洛有て同六月廿一日近江國篠原にて誅㆓宗盛㆒次至㆓野路㆒梟㆓清宗㆒大原本性上人の（盛衰記には全性房湛豪とあり）教化に依て父子共に忽に翻㆓怨念㆒住㆓欣求淨土之志㆒（東鑑取意）　長門本平家物語云大臣殿をは讃岐權守末國と改名して又九郎判官に請取せて京へ返し給ふべきに定りけり云々　異本義經記云頼朝公終に義經に御對面なくして大臣殿父子を請取京都へ歸り給ふ近江國篠原にて宗盛公を右馬允公長斬奉り子息右衛門督清宗は堀彌太郎景光截てけり云々　百練抄云文治元年六月廿一日前内大臣并右衛門督清宗於㆓近江國勢多㆒斬㆑首同廿三日檢非違使請㆓取之㆒懸㆓獄門樹㆒法皇於㆓三條東洞院㆒御見物下略

偖も遠江國池田の宿の長をは湯谷と申候　遊やとは母か名也宗盛の愛せられしは湯谷が娘侍從成べし叢に作る處相違せり遠江の天龍川の東なる藪の內に湯谷が石塔有天龍灘と云所を池田の渡り共云也此所に宿有是を池田の宿と云也丙辰紀行云遠江の池田中略彼江口の津にもいかておとり侍らん矢嶋大臣のめされし湯谷も此池田の宿の娘にて侍る事世にかくれなし今は此宿天龍の河の東のはたに形はかり殘てわづかなる小民共わたりを守て居侍りける云々　遠江國は景淸に注す長の字は班女に注す

朝貌と申女にて候　湯谷か召つかひの下女也謠の作者の名つけたる歟但平家物語異本等に此名あり哉尋ぬへし

此程の旅の衣の日もそひて　衣の紐といへかけたり證歌高砂に注す

草木は雨露のめくみ養ひえては花の父母たり　和漢朗詠集云紀納言家春雨養得自爲ニ花父母一洗來寧レ辨ニ藥君臣一矣○かそいろの養たてしかひもなくあらくも雨の花をうつ聲

是に御文の候御覽候へ　ふみと云和訓は直指抄云古きを見ると云義也又或說にふみはふくみの中略萬の義理をふくむ故にゑかいふ又一說にふみは文の字の音を用てふみと云也むとみと相通せり音を其儘用て和語とする事多し此外あまたの義ありといへ共此等の說をよろしきとす

びんなう候へ共　大原御幸に注す

甘泉殿の春の夜の夢心を摧く端となり驪山宮の秋の夜の月おはりなきにしもあらず　甘泉殿は漢武帝の李夫人を愛せられし處の宮殿也花筐に注す驪山宮は玄宗の貴妃を愛せられし處の宮殿也楊貴妃に注すかやうに春秋の詠もいつしかなからへはてぬとの心也今娘の宗盛に愛せらるゝも終にそのごとく成へしと也端となりとははしめと云心也　長門本平家物語十七云かのりさんきうの秋の夕の契り終には心をくたくはしとなり甘泉殿のゑやうせんのおんもおはりなきにしもあらず云々

末世一代教主の如來も生死の掟をは遁給はす　是より老母が身の上をいへり　敎主は釋尊を云なり安宅及び自然居士に注す世尊入滅は春日龍神に記す

きさらき　雲林院に注す
年ふりまさる朽木櫻　◯續千いかにせん朽木の櫻老ぬ
とて心の花はしる人もなし常磐井入道
今年計の花をだに待もやせじと心よはき　◯新十折し
もあれ心つくしにまたれすは今年計の花は見てま
し從三位藤子◯續古命あれは多くの春に逢ぬれど今年計の
花は見さりき輔顯
老の鶯あふ事も涙にむせふ計なり　老の鶯とは暮
春の鶯をいへり　古今榮雅抄云鳴とむる花しなけ
れは鶯もはては物うくなりぬへらなりと云歌の注
に鳴とむる花なけれは老の鶯のつゐに物うくなり
ぬへきと也々云菅三品尚齒會詩云林霧校レ聲鶯不レ
老上下略　言は我生は晩春の鶯の聲よりも老たると云
義也是老の鶯の心也◯畢白集春寒み花も匂はぬ梅かえに
宿りやわふる老の鶯
親子は一世の中なるに同し世にだにそひ給はずは
童子敎云師者三世契祖者一世眤矣　法苑珠林六十
一曰父母之恩云何可レ報慈深ニ河海ー孝若ニ山塵ー永
慕長號痛貫ニ心首ー俗稱乳哺生ニ我肉身ー一世之恩尙
復難レ報矣　同卷曰引ニ四十二章經ニ云飯ニ辟支佛百
億人ニ不レ如下以ニ三尊之敎ー度中其一世ニ親上矣
老ぬればさらぬ別のありといへはいよ〳〵みまくほ
しき君哉　業平の母の歌也　伊勢物語に此歌の詞
書云昔男ありけり身はいやしなから母なん宮也け
るその母長岡と云所に住給ひけり子は京に宮仕し
けれはまうづとしけれどしば〳〵えまうてずひと
つ子にさへ有けれはいとかなしうし給ひけりさる
にしはす計にとみの事とて御ふみありおとろきて
みれば歌あり云々此歌古今集十七に入愚見抄云さ
らぬ別は不去也死ぬる事をのかれぬ也云々　肖聞
云辭退せられぬ也無常のならひ寂滅は一度ある定
事なれ共老ぬれは殊にたのまれぬ程にいよ〳〵也
云々老たるといひ煩はしきといひ心ほそくていよ
〳〵見まくほしきと也云々
そも此歌と申は在原の業平の其身は朝に隙なきを長
岡に住給ふ老母のよめる歌也　在原業平は杜若に
注す朝とは禁中也字彙曰朝觀レ君之總稱朝晨朝也
人君視レ政臣下覲レ君尚貴ニ於早ー　轉爲レ朝也矣

周禮註曰朝猶レ朝也欲ニ其來之早一也矣　毛氏曰本朝夕字借爲ニ朝廷字一矣　長岡ハ乙訓郡也大原野社の北に有或說云長岡宮城跡在ニ上羽村一云々桓武帝延暦三年五月山城國乙訓郡長岡の地を見立て六月より内裏を造り十一月天皇奈良より長岡へ行幸あり同十三年十月今の平安城に遷り給ふ也續日本紀に見えたり業平の母は桓武天皇第八の皇女伊登内親王と號す世傳業平母寺樓搭任ニ上羽村内人家境内竹林中ニ云々○さり共と今年も心長岡にいよ〳〵見まくほしき暮哉

さてこそ業平もさらぬ別れのなくも哉千世もといのる子のためとよみし事こそ哀れなれ　伊勢物語云かの子いたうなきてよめる「世中にさらぬ別れのなくも哉千世もといのる人の子の爲　業平歌也有の母の歌の返し也物語にかの子と云は業平の事也古今集には千世もとなげくと有

玉の緒のなかき別と成やせん　玉の緒は命也、新古是も又長き別れに成やせん暮を待へき命ならねは

牛飼車よせよとて是も思ひの家の内　孟津抄云牛飼は應神天皇の御時より始ると云々思ひの家とは火宅の心也軒端梅に注す

あしよは車の力なき　河海抄云あしよは車ノ輪のひよはき車也云々　眠江入楚云源氏異本にあしよはき車と云々

名も清き水のまに〳〵とめくれは　清水をいひかけたり田村に注す○古花ちれる水のまに〳〵求くれは山には春もなく成にけり深養父

音羽の山　田村に注す

春前に雨有て花の開くる事早し秋後に霜なうして落葉遲し　百聯抄解詩云春前有レ雨花開早秋后无レ霜葉落遲矣　詩の意明に聞えたり

山外に山有て山盡ず路中に道おほうして道極りなし　百聯抄解詩云山外有レ山山不レ盡路中多レ路路无レ窮矣　詩の心明に聞えたり　山外とうたふは悪しさんくわいと云筈也壁とよみとつゝくるは湯桶詞とて用ず然共古來よりあやまりて此類多し

山青く山白くして雲來去す人樂み人愁ふ是皆世上の有樣なり　百聯抄解詩云山青山白雲來去人樂人愁酒有尤矣　詩の心目前の境界をいへり

誰かいつし春の色實長閑なる東山　菅三品詩云誰

言春色從レ東到露暖南枝花始開 朗詠集

四條五條の橋の上　四條の橋は度々の洪水に流れ落る也今は假橋也　百練抄云久壽元年三月廿九日供二養祇園橋一矣改暦雜事記云寶德二年十月十八日四條河原大橋成矣　五條の橋は元榮二松原一天正十八年六條坊門に引渡さる正保年中石橋に改らる其後又成二板橋一也　百練抄云保延五年六月廿五日淸水寺橋供養矣或記云後小松院應永十六年新供二養五條橋一矣　或云今五條橋は長六十四間幅四間一尺云々○いかにせん五條の橋のしたむせひはては泪のなかれかんじやう 職人盡歌合

都鄙は田村に注す九重同前名におふは江口に注す

車大路や六波羅の地藏堂より伏拜む觀音も同座有　六波羅密寺は在二五條南鴨川東一　拾芥抄云十一面八尺容也上人建立矣伊呂波字類抄云六波羅密寺容也上人應和年中所二草創一也本號二西光寺一矣地藏堂は退轉す今は地藏菩薩觀音堂の内にあり世に鬘掛の地藏と稱す昔地藏堂は六波羅密寺の境内にあり太平記に地藏堂の鐘を鳴し在京ノ武士を催とあるは此地藏堂の事也　今昔物語云但馬前司國擧と云人死して閻魔の廳ニ趣く地藏菩薩を拜して半日を經て活り忽に出家す即大佛師定朝を語ひ等身金色の地藏菩薩の像を六波羅密寺にして供養す講師は大原淨源供奉なり其地藏菩薩は六波羅寺に安置して今にましますなり文略私云地藏堂は絕て本尊地藏今六波羅密寺の觀音の左脇にならびおはします按するに宗盛公の時分には六波羅密寺の觀音を彼地藏堂にならべ置たる歟謠の作りやう心得かたし尋ぬべし

闡提救世の方便　闡提とは大惡不信の人を云也かやうの大惡の人をも觀音の慈悲にて救ひ給ふと云事也　一闡提者梵語也此云二多貪一或曰二極惡一　梵行品曰一闡提者不レ信二因果一無レ有二慚愧一不レ信二業報一不レ見二現在及未來世一不レ親二善友一不レ隨二諸佛所說教誡一如レ是之人名二一闡提一矣　方便とは當世を利益するには此法よく便宜を得と云義也　止觀曰方便名二善巧一矣　慈恩曰利レ物有レ則曰レ方隨レ時而濟名レ便矣　淨名疏曰方便是權智權智外用能有二成辨一如三父能營二求長成一所レ言權智亦名二如量智一備觀二俗諦一如二事數量則攝一切一矣

たらちねを守り給へや　　たらちねは親を云也　万葉に垂乳根垂血根と書ニ譯御說云たらちねは父母に通する也云々紹巴云父をたらちおといひ母をたりちめといふと云々

賴む命は白玉の愛宕の寺も打過ぬ六道の辻とかや實おそろしや此道は冥途にかよふなる物を　　玉の緒とつゝけたり玉の緒は命也　六波羅密寺乾五條の北に念佛寺と云有本堂は千手影堂は千觀内供也此念佛寺を世におたき寺といふはあやまり也愛宕寺は六道也當寺開基千觀内供と云々按するに念佛寺は千觀の宿坊ならん歟日本往生記長明發心集等に見えたり六道は珍皇寺共號す本尊は丈六座像の阿彌陀今藥師堂有是珍皇寺の本尊と云り建仁寺大昌院の管領也　色葉字類抄云珍皇寺愛宕寺　參議小野篁卿建立士俗云此寺者山城國國分寺弘法大師幼少之時相ニ從慶俊僧都一久住ニ此寺一給云々　又篁卿爲魔廳集本朝賢臣爲ニ此寺檀越一依ニ此緣一修ニ盂蘭盆涌經等一篁卿冠牙笏位袍等累代之寶物納ニ置寶藏一云々　去永久年中本寺炎上次燒失畢矣　賦江入楚云桓武皇平安城に都うつりの時此所を諸人葬所に定らるると延暦遷都記に見えたりかれに珍皇寺と云寺をたつ弘法大師の舊跡として今に東寺一長者管領也云々六道の辻は世傳小野篁冥途にかよふ所也と云り依て此所を六道といふと見えたり親長卿記云長享三年七月十二日參ニ六道一矣　古事談云六道の辻に人待と覺しくて上下略　細流云おたぎ今の六道是也云々　和漢朗詠集古注云小野篁は清原夏野大臣の娘を望み聟となる其後大臣俄に失られき閻王宮に至てみれは我聟の篁執筆の臣にて居たり淺猿と思程に罪の沙汰共有けるに少も語事なかりしかは大臣など吉樣に一言も被レ申さらんと恨み思ふ程に既に惡趣へ遣べきに定らるゝ時篁申曰かれには金泥の大般若經を書て供養すへしとの宿願侍り閻浮に皈さるべきにや侍らんと申質もとて皈さると思ひて蘇生す其後大臣彼經を急き書て供養せらる扨大臣は篁の妻に逢て此事相いかなる事かあると問給ひけれは晝三時夜三時眠れる事有と答ふ或時篁車に乘なから愛宕寺ヶ内に入給ふと見えけるが車ながら失て見えずなりにけると云々

心ぼそ鳥部山煙の末も薄霞む　　鳥部山は六波羅密

寺の南東にあり今の豊國山也艱昭拾遺抄云鳥戸山はあみだが嶺也その裾を鳥部野といふ無常所也云々　河海抄云風土記云南鳥部里稱鳥部者秦公伊呂具的餅化鳥與飛居其所（云々）今鳥部云々　拾芥抄云法皇寺號鳥部野寺矣（新續古）鳥部野の煙の末も哀れなりいつかはと思ふ心ほそさに（僧正宋縁）

聲も旅雁の横たはる北斗の星の曇りなき　朗詠集云（閑夜砧 劉元叔）北斗星前横旅雁南樓月下擣寒衣矣

昔下河原の邊に北斗堂とて有舊跡定かならす此北斗堂を爰にふくみていへり拾遺古徳傳云吉水者感神院東邊北斗堂北面也矣黑谷上人傳云花園准后花園北北斗堂西矣　應仁記云下河原坂面には北斗堂と云々

招搖　輔　開陽　衡　權　璣　璇　樞

北斗七星樞星曰貪狼璇星曰巨門璣星曰祿存權星曰文曲衡星曰廉貞開陽曰武曲招搖曰破軍

史記索隱曰春秋運斗極云斗第一天樞第二璇第三璣第四權第五衡第六開陽第七搖光第一至第四爲魁第五至第七爲標合而爲斗矣　晉天文志曰北斗七星輔一星在太微北北斗七改之樞機陰陽之元本也運乎天中而臨制四方以建四時而均五行也輔星傳乎開陽所以佐斗成功也矣　整長曆云北斗七星星間相去九千里其二陰星不見者相去八千里也矣

經書堂は是かとよ　經書堂在清水坂北側優婆堂向號來光院　寅菴四六後集云城州愛宕郡清水來光院廼豊聰太子親染聖翰書妙經之靈場也古來宰院者緇卷聚石每一枚寫一字々々傳人致一錢以備補葺繇是俗號之曰經書堂矣

子安塔を過ゆけば　號泰産寺在西門側　盛衰記云坂上田村麿女（春子嵯峨帝之女御）御懐姙の時御産平安ならば我氏寺に三重塔を組んと御願を被立たり其驗にや平かに皇子御誕生あり三品葛井親王とは此御事也承和四年建立云々

隙行駒　日影也百萬に注す

車宿り馬留め　西門の下刻階の北にあり檜殿車寄車宿者園太曆に見えたり

忍より花車おりゐの衣播磨方しかまの歩行路清水の　此處へ播磨を取出す事は播磨に餝磨ト云郡ありて褐ノ染物を出す所也又清水寺に鹿間塚とて有餝磨鹿間塚同じ唱へなればかくつゞけたりされは車よりおりゐとつゝけて下乘の心をいひ又衣をはるといひかけ餝磨に鹿間塚をむすひ歩行に褐を取合せたり褐は推色也　字書褐黄黑色矣　呉竹集云播磨のしかまにかちんそめの上手有て色をよくそむる故名物となれりかちんは藍染也と云々　盛衰記云筒井淨妙法師着ニ餝磨褐胄直垂一矣○金いとせめて戀しき時は播磨なるしかまに染るかちよりそくる　鹿間塚は在ニ清水寺鐘樓傍一　或云延鎮欲レ建ニ伽藍斯山一夜雷雨しきりにす夜明て見れは山の樹木皆たふれて地勢平になる堂を建に便あり傍に鹿の死せる有鎮以爲此鹿の所レ作則築レ塚葬レ之云々升霞記云常の御幸にかはらぬ有さまさすかにしかまのかち地の道より行そむる跡も覺えす 上下略 私云此升霞記は内大臣通親の作也高倉院御送葬の事をかけり高倉院六波羅の池殿にて果給ひ東山清閑寺へ葬り奉りし也其時より此所をしかまのかち地と云と見えたり

なふ〳〵は江口に注す思ひ内にあれは色外にあらはるは松風に記す

花前蝶舞紛々雪柳上鶯飛片々金　百聯抄解の詩也本文には花間蝶舞と有詩の心明也

花隨ニ流水一香來疾鐘隔ニ寒雲一聲至遲　此詩作者未レ考

清水寺の鐘の聲祇園精舍を顯し諸行無常の聲やらん　平家物語盛衰記長門本等の發端の詞に云祇園精舍の鐘の聲諸行無常の響あり娑羅双樹の花の色盛者必衰の斷を顯はす云々　清水寺の鐘は鹿間塚の傍にあり清水寺は田村に注す諸行無常の文は三井寺に記す　祇園精舍鐘は祇園經曰無常院中有ニ一堂一但以ニ白銀一飾院有ニ八鐘一四白銀四頗梨銀　鐘在ニ院四角一起レ堂置レ之頗梨鐘在ニ無常堂四角一其形如ニ腰鼓一中略鐘即自鳴音中亦說ニ諸行無常乃至寂滅爲樂一病僧聞レ音苦惱即除得ニ清涼樂一矣　往生要集曰諸行無常中略寂滅爲樂祇園寺無常堂四角在ニ頗梨鐘一々中亦說ニ此偈一矣　言は祇園精舍に無常堂とて病惱の者を送て置し堂あり其四の角に頗梨の鐘有其鐘の聲に彼四句の文を說しと也謠の意は清水寺の

鐘を此無常堂の鐘の聲に聞なす也　祇園は在ニ中天竺舍衛國ニ波斯匿王御子祇陀太子園田須達長者既布レ金買ニ得之ニ奉ニ世尊ニ內一百二十院七十二講堂千二百五十房舍三千六百間屋宇又建ニ四十九院ニ元祇陀太子園故略云ニ祇園ニ或名ニ抄逝祇陀祇樹逝多給孤獨園ニ（十二遊經及涅槃經意）　精舍は長水楞嚴疏曰精舍者即沙門精行所レ舍也矣　釋要鈔云精舍者非ニ麁暴者所ニ居故曰ニ精舍ニ矣

地主權現は田村に注す生者必滅は楊貴妃に注す

婆羅双樹　名義集云婆羅梵語此云ニ堅固ニ北遠云冬夏不レ改故名ニ堅固ニ西域記云其樹類レ槲而皮青白葉甚光潤四樹特高華嚴音義翻爲ニ高遠ニ其林森聳出ニ於餘林ニ也後分云婆羅林間縱廣十二由旬天人大衆皆悉徧滿尖頭針峰受ニ無邊衆ニ間無ニ空隙ニ不ニ相障蔽ニ矣　又春日龍神に注す

佛も本は捨し世の　釋尊の出家し給ふ事をいへり　普賢菩薩證明功德經曰十九而踰レ城捨ニ國王位ニ三十成道敎ニ化衆生ニ矣　本起經因果經思惟經金剛疏智論等同レ之　增一中雜阿含出曜悲華和須密論善見論者廿九出家卅五成道云々　又雜寶藏經說ニ十九出家二十四成道ニ云々　梵網經七歲出家云々

鷲のお山の名を殘す　靈山を云也田村に注す

寺は桂の橋柱　昔桂橋寺とて下河原にあり此寺一年洪水に流れて退轉す本尊は座像の千手觀音也今中間寺の內に并びおはします也俗に中間寺を目疾の地藏と云也

花やあらぬ初櫻の祇園林下河原　祇園林は社の南石の鳥居の邊を云也盛衰記云祇園社の南門鳥居の芝草の西に當て光物こそ見えたりけれ祇園林の古狐などか人を誑にこそあるらめ云々鵜鷺記云祇園林に烏あり東市佑眞玄（ヒ・シイチノセウマグロ）とそ申ける云々　祇園は放下僧に注す　下河原は祇園の下巷社の南也昔此所河原也水上靈山より流れ出る谷川也此流れ西の方安井の內に入て建仁寺方丈の北を流れて宮川町の北にて鴨川に入也　應仁記云下河原坂西には北斗堂云々

南を遙に眺れば大悲擁護の薄霞熊野權現のうつります御名も同じ今くま野　今熊野は清水寺より南にあたる也　熊野權現をゆや權現と云事いふかし

按するに熊野をいうやと音にて云故に略してゆやと云と見えたり此謠の女遊やといへる名によせて御名おなしとはつゝけたり大悲擁護とは紀州熊野三所の内那智は本地千手觀音也且又今熊野に觀音寺有等身千手弘法作二十三所の内也世に今熊野觀音と云也仍而大悲擁護とはつゝけたり或云弘法大師當山建二草堂一刻二彫大悲像一安置其後山本左大臣被レ造二營伽藍僧房一應仁兵亂伽藍僧房等破壞矣長門本十七云此御山の景氣誠に心も詞も及はれす大悲擁護の霞は熊野山の峰にそひき云々謠の詞是にてつゝけたり　新熊野社は坐二三十三間堂東南三町許一　百練抄云應保元年十月十六日奉レ移二熊野御體於新造社壇一今熊野是也後白河御願也矣相國寺御塔供養記云後白川法皇熊野御參詣は三十三度にも及しやらん御信仰のあまりに今熊野を勸請し給ふ云々

稻荷の山の薄紅葉の青かりし葉の秋　　古今著聞云和泉式部稻荷へ詣けり田中明神の西の程にて時雨しけるに如何すへきと思ふ間に田刈ける童のあをを と云物をこひてきて參りけり還向の程は晴にけれは此河をゝとらせてけり扨次の日式部はしの方を見出して居たるに彼童の文を持てたゝずみけれはあれは何者そといへは此文を參らするよみてみれは「時雨する　いなりの山の紅葉はゝ青かりしより思ひそめてき」書たりけり式部哀れと思ひて此童を奥の方へよひ入にけるとぞ　十訓抄同レ之　或云あをは襖と書袍也うへのきぬ也云々　呉竹集云あをとはけだいと云物を云賤き人みのゝやうにしてきる物也云々　稻荷社は賴政に注す

只賴め賴もしき春もちゝの花盛り　　只賴めとは清水の觀音の御歌にてつゝけたり田村に注すちゝの花盛りとは觀音千手のちかひをふくめり

山の名の音羽嵐の花の雪　　山の名のとは音羽山をいはんとて也　新後拾遺集秋下前關白近衞歌に「山の名をわきてはいはじ月影のにほてる海も鏡なりけり」是も鏡山をいはんとて上に山の名とは置たり此歌の躰に同じ

春雨の降は涙か櫻ちるをおしまぬ　　古今集春下題不レ知大伴黑主歌也留りは人しなけれは也歌の心明也古今賓枝抄云大伴黑主清和御時備前國吉備

津宮の長宮に成て下りし時彼宮の櫻を見てよめる也云々　定家卿家本には貫之歌と有

いかにせん都の者も惜けれとなれし東の花やちるらん侍從か歌也いかにせんといふ五文字よくいひかなへたりあつまの花とは侍從が母をいへり一首の躰よく聞えたりいかにせんといふ詞善知鳥に注す

あらうれしやたうとやな是観音の御利生なり　　あらはあな共やら共云也たふとは貴き也　梁塵秘抄云催馬樂の呂の歌にあなたふとけふのたふとさやいにしへもはれと云々　愚案抄云あなたふとはあなは嗟嘆する聲也たふとは貴き也云々

夕つけの鳥が鳴吾妻路さして行道の　　夕つけ鳥は庭鳥を云也つの字すみてとなふる也古今榮雅抄云世中さはかしき時は君の御祈に四境の祭と云祓有庭鳥に四手を付て陰陽師にあしき事をいのり付させて四境の關にはなさるれは木綿付鳥と云四境とは東は相坂北は有乳南は龍田西は穴生云々　袖中抄云敎長卿鷄の尾の長きはゆふしでを付たるに似たればやがて鷄の名を木綿付鳥と云也云々　萬葉仙覺抄云あづまといはんとて鳥か鳴と上に置る事はあつまと云あの字にあくと云心あれば鳥はあくるを見て鳴物なれば鳥かなくあつまといへり夜のあくるは東より玄らみはしむる故也曉に鳥の鳴べき折節に成ぬれは先づ女鳥時を玄りてくゝと鳴をきゝてお鳥のなくならひなれはあづまと云詞につきて鳥がなくあづまとよそへつゞけたる也云々

萬葉○鳥が鳴東をさしてふさへしにゆかんと思へとよしもさねなしあつまは吾嬬共書景行天皇御時日本武尊東征し給ふ相模より上總國に往まさんとする海中にして暴風忽に起て御船あやうかりしに尊の妾弟橘姫海神の恋にてかくはありなんとて海に沈て尊の命にかはれり時に尊思ひ玄たひ給ふ事やます碓日嶺に登て東南を望て三歎云吾嬬者耶故に山の東の諸國を名付て吾嬬と云事是よりはじまれり日本紀取意

逢坂の關の戸さしも心して　　とさしは俗に關木のゑひを云也扃と書　倭名抄云野王按扃戸扇鐶鉤所用ニ於内以關ㇾ門也和名度佐之矣○戸さしせぬ御世に心やとゝむらん往來さはらて越る關路は信量

藤　戸

東鑑第三云元暦元年十二月七日平氏左馬頭行盛朝臣引二卒五百餘騎軍兵一搆二城郭於備前兒嶋一之間佐々木三郎盛綱爲二武衛御使一爲レ責二落之一雖二行向一更難レ凌二波濤一之間濱漘案レ轡之處行盛朝臣頻招レ之仍盛綱勵二武意一不レ能レ尋二乗船一乍レ乗レ馬渡二藤戸海路三町餘一所二相具一之郎從六騎也所謂志賀九郎熊谷四郎高山三郎與野太郎橘三橘五等也遂令レ著二向岸一追二落行盛云々　又云同廿六日佐々木三郎盛綱自レ馬渡二備前國兒嶋一追二伐左馬頭平行盛一事今日以二御書一蒙二御感之仰一其詞曰自レ昔雖レ有下渡二河水一之類上未レ聞下以レ馬凌二海浪一之例上盛綱振舞希代勝事也云々

春の湊の行すへや藤戸の渡りなるらん　匠材集云春の湊は春の暮行事也秋の湊同前也水邊に非す云々藤戸は兒嶋への舟渡し也此所藤戸の渡しと云也長門本平家物語云備前備中兩國の境西河智河尻藤戸の渡しと云所に押寄て陣をとる云々　藤戸の海上の事平家物語には廿五町と有盛衰記には海上四五町には過さりけると有長門本には五町計へたゝりたると有拾玉〇波に行心の果や是ならん春の湊の春のあけほの夫木〇大御船したふに浪はかくれ共藤戸をさして嶋かくれつゝ　顯季

是は佐々木三郎盛綱にて候扨も今度藤戸の先陣を仕し御恩賞に兒嶋を給て候今日は日も能候程に只今入部仕候　盛綱は宇多天皇九代後胤佐々木源三秀義三男加地三郎兵衛と號す右大將家の忠臣後入道して西念と云佐々木は江州の在名也此先祖を神に祝て佐々木の宮と號せり　平家物語云馬にて海を渡す事天竺震旦はしらす我朝には希代のためし也とて備前の小嶋を佐々木にたふ鎌倉殿の御教書にものせられたり又舎弟四郎高綱も宇治川の先陣比類なき高名也云々　佐々木日記云右大將家書翰云今月七日平氏左馬頭行盛五百餘騎軍兵を相随て備前小嶋之城にたてこもるの處盛綱藤戸の海を渡して行盛以下之者ともを追討之事まことにむかしより河水を渡事はあれどいまた馬にて海をわたすの例をきかす盛綱ふるまひ希代之勝事とそ覺へ候へくはしき事は猶跡より可申候也

元曆元年十二月廿六日　　賴朝在判

佐々木三郎殿

盛衰記云右大將家御自筆之御下文云自レ古渡レ河雖レ有ニ先例一未レ聞ニ遙渡レ海之例一即賜ニ彼嶋一之上賜ニ伊豫讃岐兩國一畢矣恩賞とは恩はめくむとよむ賞はたまものと訓ず恩をたまはる也入部は知行所へ初て趣を云也　備前國兒嶋は凡東西十里南北二里昔ははなれ嶋にてありしか段々新田になりて今は陸路相つゝけり古城の跡は下津井と云所にあり又黑山と云所にも城跡あり兒嶋は郡の名也

秋津洲の浪靜なる嶋めくり　秋津洲は日本の總名

立田に注す〇拾いさりせし海士のおしへもいつくそや嶋めくるとてありといひしは高岳相如

松吹風も長閑にて　〇續後拾君か代の久るしとそ見る住吉の松吹風ものとけかりけり經房

老の波は高砂に注す某の字は鉢木に記すさめ〳〵となくは何事にて有そ　澤女（サハメ）々々（サメ）と書さめ〳〵と云詞は神代卷に啼澤女（ナキサハメ）命といへる神の御名よりいひしこと葉也　直指抄云今の人泣涕するをさめ〳〵となくといふ是也云々　或云さめ〳〵とは雨々と書雨の字をさめとよむは春雨村雨なと同しと云々　鶯の春さめ〳〵と鳴ゐたる竹の雫や泪なるらん西行

海士のかる藻にすむ虫の我からとねをこそなかめ世をは　古今集戀五典侍藤原直子朝臣の歌也留りは世をばうらみじ也歌の心は萬事我からとこそねをなかめ外に世をうらみじと也蜑の刈藻に付て此虫我からと身をほろほすゆへの名也愚見抄云我からは和布苔抔に付たる小貝をいふと云々八雲御抄云虫の部に我からは藻に住虫也云々實淸云藻に付てあがる虫也其時藻を離れたらは命あるへきに藻に付て陸へあけられ身を失ふゆへに我からと名付たり云々

因果のめくる小車の　六道講式云流轉無窮如ニ車廻ニ庭矣　因果の二字舟橋に注す

やたけの人は屋嶋に注す

𛀙のふ山忍ふかひなき　𛀙のふ山は奥州信夫郡に有海邊にある山也甲斐なきは融に注す〇伊物𛀙のふ山忍ひてかよふ道も哉人の心のおくも見るへく

世の人のあつかひ草　　あつかひ草とはかこち草笑
ひ草なとの類成へし徒然草云其頃人のもてあつか
ひ草にいひあへる事と云々匠材集云あつかひ草と
は人の上もてあつかふなりと云々
苦しみの海に沈め給ひしを　　往生禮讃云衆生盲冥
不二覺知一永沒二生死大苦海一矣　靈芝疏云久沈二苦海一
漂二流生死一矣○玉葉世にこゆるちかひの舟を賴む哉苦
しき海に身はしつめ共經長
言語道斷　　安宅に記す
扨も去年三月廿五日の夜に入て　　平家物語及盛衰
記等に壽永三年九月廿六日辰の剋と有此謠に四月
とあるはあやまり歟
浦の男を一人近つけ此海を馬にて渡べき所やあると
尋ねしに　　浦の男とは藤戸の渡しの案內をしらせ
し者也七書孫子傳云不レ用二鄕導一者不レ能レ得二地
利一矣　鄕導とは案內の事也惣て軍には必其所の
案內者を不レ用勝事あたはすと也平家物語云壽永
三年九月十二日大將軍三河守範賴を初め源氏の軍
兵都合三萬餘騎鄕を立て播磨の室に着平家の大將
には小松新三位中將助盛を初め軍兵五百餘艘兵船

に乘て備前の小島につく源氏やかて室を立て是も
備前の西川尻藤戸に陣をとる去程に源平南方陣を
あはす陣のあはひ海のおもてわづか廿五町源氏心
はたけく思へ共舟なかりければ力及ず徒に日數を
送りける同廿五日辰の剋平家の軍兵舟に乘てこぎ
出し扇を揚て源氏をまねく源氏方の兵如何せんと
云處に近江國住人佐々木三郎盛綱夜に入て浦の男
一人かたらひ直垂小袖大口白さやまきなんとをと
らせすかし仰て此海を馬にて渡すべき所を開けれ
は男申けるはたとへは川の瀬のやうなる所の候が
月頭には東に候月末には西にて壇の瀬のあはひ海
のおもて十町計も候らん是は御馬なとにてはたや
すく渡らせ給ふへしと申ければ佐々木さらば渡し
て見んとて彼男と打つれ渡りて見るに實も深うは
なかりけり膝腰肩にたつ所もあり鬢髭ぬるゝ所も
あり深き所をおよひて淺き所におよきつゝ男申け
るは南は北より遙に淺く候とおしへて共に歸りけ
るが下﨟はとこ共なきものにて又人にも語り案內
もやすらんとて彼男を指殺し首切て捨てけり明れ
は廿六日辰の刻盛綱藤戸の先陣と名乘て渡りけり

源氏の軍兵三萬餘騎皆打入て渡す源平いとみ戰ふ平家は軍に打まけそれより讃岐の屋島にこきしりそく文略　私云平家物語には平家の大將小松新三位中將助盛と有　盛長私記長門本には大將軍平氏左馬頭行盛と有說々不同也

さん候河瀨の樣なる所の候月頭には東にあり月の末には西にありと申　長門本平家物語云此渡に瀨は二候也月頭には東が瀨に成候是をは大根河と申す月の末には西が瀨に成候是をは藤戸の渡と申當時は西か瀨になりて候云々　月の上下にて瀨のかはると云に付て此所の人語云藤戸の堅海苔を取に朔日より十五日迄は和か也十六月より晦日迄取のりはかたことといへり

八幡大菩薩　弓八幡に注す

いや〳〵下﨟は筋なき者にて又ちや人に語らんと思ひ　上﨟下﨟は內裏の官女の名也無官無位の人を云は誤り也中原職忠記云下﨟は諸家格勤侍下北面帶刀或加茂日吉社氏の女なと參る六位を經る輩は必其女下﨟となり云々爰にいへる下﨟は賤しき者を云也

取て引よせ二刀さし其儘海に沈めて歸りしが　是は平家物語の趣也盛衰記盛長私記長門本には男を殺す事なし海路の案內しらせたる褒美に白鞘卷直垂などとらせたりと有

あれに見えたるうきすの岩の　浮洲岩號藤戸石今醍醐三寶院殿の庭にあり盛綱導たる男を此石の上にて殺せしといへり大閤秀吉公此石を備前の小島より取よせ聚樂の城に置給ふ其後當院に御寄進ある也云々

好事門を出す惡事千里をゆけとも　よき事あれは人是をそねみて人にもかたらす世に風聞なし惡事はいか程つゝみてもよくしれやすく遠國までも沙汰する事と也　北夢瑣言卷六曰相公所謂好事不レ出レ門惡事行二千里一矣

人の親の心は闇にあらねと共　此歌蝉田川に注す

老少不定の境なれは　楊貴妃に注す

老鶴の眠の中なれや　都良香詩老鶴心閑穩々眠矣

高砂に記す

はたちあまりの年なみ　はたちは或抄云廿と書くはたはふた也はとふと相通すちは十年也としの反

はち也と云々一説云はたちとははたつ也ちとつと
通すはたは將の字を書つは十也つゝと云時は二十
也依てつゞはたちなどつゞくる也つを二つ重ねた
るゆへに將の字を書てはたち共はたつともいふな
り年なみは屋島に注す

世にすめはうきふししけき河竹の　河竹は呉竹に
似て葉廣し徒然草云呉竹は葉ほそく河竹は葉ひろ
し御溝に近きは河竹云々　新續古呉竹の葉にをく露や世
中のうきふししけき泪なるらん　前大僧正禪寺

杖柱共頼みつる　我子を力とし頼む心也
垂仁記云天皇以二倭姫命一爲二御杖一貢二奉於天照大神一
是以倭姫命以二天照大神一鎭二坐於磯城嚴橿之本一
矣

浪にうきねのよるとなく　新古今增抄云うきねと
は水鳥はうきてあるゆへ也又さたまらぞおちつか
ぬ哀を云也云々〇新拾思ひやれなれたる海士の袖たに
も浪のうきねはぬるゝならひを　忠基

般若の船のおのつから其ともつなをとく法の　般
若は翻二智惠一佛の智惠を舟にたとへて愚痴の凡夫
を助け給ふを般若の舟とは云也　弘誓海惠經曰
知二一切法一得二般若船一値二智惠風一得二善方便一度二
一切人一越二大苦海一矣〇雪白集舟人のけふともつなをと
くのりに苦しき海は跡の鹽風

一切有情殺害三界不墮惡趣　大般若經五百七十八
卷理趣品曰金剛手若有レ聞二此理趣一受持讀誦殺二害
三界一切有情一不レ墮二惡趣一矣實相般若經曰假令其
有レ人殺二害三界一切衆生一終不三因レ斯墮二於惡道一
矣　諸の詞つゝき此經文とは前後せり

忘れんと思ふ心こそ忘ぬよりは思ひなれ　〇後拾忘れ
しといひつる中は忘れけり忘れんと社いふへかり
けれ　道命

よるべの水　は櫻河に注す　三途は江口に記す

氷のことく成刀をぬひて　張京陽七命曰神器化成
陽文陰縵光如二散電一質如二晴雪一霜鍔氷刄氷凝露
結矣

千尋の底　海人に注す

即弘誓の舟に浮へは　弘誓とはひろきちかひ也
法花普門品曰弘誓眞如海矣〇拾遺愚草歷劫の弘誓の海に舟
渡す生死の浪は冬あらくとも〇知人もしらぬ人を
も渡さるゝ弘誓の舟のかいをみた佛　滿永

みなれ掉は兼平に注す生死の海は柏崎に注す彼岸は東岸居士に注す

天鼓

天より一ッの鼓降といへる寓言を以て此謠を天鼓と名づく按ずるに天より虫の降事春秋に見えたり魚降事漢書及唐書に載又毛の降事漢書或は晋書に見ゆ穀の降事史記漢書博物歴史綱鑑等に記せり又金の降事漢書唐書に記す後漢書光武建武十二年夏甘露降事あり日本にも甘露降事國史百六十五卷祥瑞部に見えたり聖武帝の御時京師に飯降事あり後深草の御時叄常陸にふる後花園の御時大豆小豆ふる此等俗傳歴代記に記せり然れ共鼓の降と云事和漢共にこれなし但寄所なきにしも非ず　後漢書云天雨レ石從レ高及レ下民困レ之象甘氏云無レ雲而雷石墜レ地大及二一丈一形如二雞子一兩頭銳名曰二天鼓一所レ下之邦必有二大戰一矣　又通鑑大全元宣宗至順三年五月天鼓鳴二西北一同年八月天鼓鳴二東北一同順帝至正二十七年正月絳州夜聞二天鼓鳴一矣　法花序品云天鼓自然鳴矣　化城諭品云諸天擊二天鼓一幷作二衆妓樂一矣此等の文を緣語として天より鼓ふるとは作る成るへし

是は唐土後漢の帝に仕へ奉る臣下なり　後漢は光武皇帝より献帝まて十四代凡百九十五年也今此帝は何れをいふぞしらずもろこしは老松に注す臣下は葵上に注す

扨も此國の傍に王伯王母とて夫婦の者あり　王伯王母は何れの人と云事しらす謠の作文なる歟

內裏は富士太鼓に注すいつくか王地ならねばは田村に注す

天鼓をは瀘水の江にしつめ　大明一統志三十六曰慶陽府瀘水在二寧州境一晋明帝時李驤入寇刺史王遜遣二將姚岳一大破レ之追至二瀘水一而還矣　文選諸葛亮出師表云五月渡レ瀘李善註曰漢書云瀘水出二牂牁郡句町縣一矣

阿房殿雲龍閣にすへ置れて候　阿房殿は邯鄲に注す雲龍閣は何れの代に被レ建けるぞ未レ考三輔黃圖に記する由或書に見えたり追而可レ尋

傳へ聞孔子は鯉魚に別れて思ひの火を胸にたき

家語曰孔子年十九娶二于宋之幷官氏女一一歳而生二伯魚一伯魚之生也魯昭公使レ人遺二之鯉魚一夫子榮二君之賜一因以名二其子一爲レ鯉也矣　史記孔子世家曰伯魚年五十先二孔子一死矣　孔子姓孔名丘字仲尼魯國鄒邑平昌鄕里人爲二魯司寇一自レ衞反レ魯刪二詩書一定二禮樂一修二春秋一贊二易道一以二六經一爲レ敎也于レ時孔子周第廿四代靈王廿一年庚戌十一月四日生同二十七代敬王四十一年壬戌七十三歳他界史記世家文略

白居易は子を先立て枕に殘る藥をうらむ是皆仁義禮智信の祖師文道の大祖たり　白居易は白樂天に記す　仁義禮智信の祖師文道の大祖とは孔子を指て云也今爰に孔子と等しゝ白居易を取出す事不相應なれ共白居易も文道の達者世に聞えある人なる故にかくつゝけたり謠の心は仁義禮智信の祖師たる孔子も文道の達者たる白居易も恩愛の離別を思ひかなしむと也貴きも賤きも人情かはる事なしと也　白居易か子を先立て枕に殘る藥をうらむといふ事は白氏文集第十四病中哭二金鑾子一と云題にて作れる詩云豈料吾方病翻悲二汝不レ全臥驚從二枕上一扶レ哭就二燈前一有レ女誡爲レ累無レ兒豈免レ憐病來纔十日養得已三年慈涙隨レ聲迸悲傷遇レ物牽故衣猶架上殘藥尚頭邊送出二深村巷一看レ封二小墓田一莫レ言三里地此別是終天矣　五常は　白虎通曰五常者何謂仁義禮智信也仁者不レ忍也施レ生愛レ人也義者宜也斷決得レ中也禮者履也履レ道成レ文也智者知也獨見前聞不レ惑二於事一見レ微者也信者誠也專一不レ移也故人生而應二八卦之體一得二五氣一以爲レ常仁義禮智信是也矣　論語疏曰人有二博愛之德一謂二之仁一有二嚴斷之德一爲レ義有下明辨二尊卑一敬讓之德上爲レ禮有下不二虛妄一之德上爲レ信有二照了之德一爲レ智此五者是人性恒不レ可二暫捨一故謂二五常一矣　今案此謠に後漢の帝の御時と作れり白居易は唐の世の人也時代相違せり　但唐と宋との間に後漢あり號二高祖劉暠一本名知遠其先沙陁人也此うたひに作る後漢は是をいふ歟尋ぬへし

思ふおもひに堪かぬる　思ふおもひとは深く物おもふ也　○鳴社百首 わらきなやつれなき人をいたつらに思ふ思ひのおしくも有哉俊成

泪いとなき袂かな　匡村集云いとなうくるしとはいとまなくくるしき也いとなく共いふと云々　源

氏若紫巻云とり〳〵のざえともならひ給ふいとな
しと云々　古戀五○哀共うし共物を思ふ時なとか泪のい
となかるらん讀人不知　紫雅抄云いゝなかるらんは
いとまなかるらん也最流にあらずいとまなき也ま
の字を略したる也云々

思はしとおもふ心のなとやらん　玉葉○世中を思ふも
苦し思はしと思ふも身には心なりけり

よしさらは思ひ出じとおもひねの闇の現に生れきて
思ひねとは物思ひつゝ寝ぬるを云也おもひねと云
詞には大形夜分をむすふ也依ておもひねの闇の現
とはつゝけたり○新千思ひねの心かはらぬ夢ならは人
もや今宵あふと見るらん實教　或說に此謠のおも
ひねは思ひ子也子の字をねの字に書あやまる也と
いへり私云此說尤也後撰戀三兼輔朝臣「人の親の
心は闇にあらね共子を思ふ道にまよひぬる哉　と
いふ歌の心もあり

忘れんと思ふ心こそわすれぬよりはおもひなれ
後拾○忘れじといひつる中は忘れけり忘れんと社いふ
へかりけれ道命法師

久方　羽衣に注す

翫ニ其磧礫ヲ不レ窺ニ玉淵ヲ者未レ知ニ驪龍之所ニ蟠也
是は文選第五左太仲呉都賦之文也磧礫とは淺き水
の沙石をあらはせる貌也玉淵は水の深き所美玉の
出る所也驪龍はたゝ龍の名也言心は西蜀の公子の
習所淺くして此水の淺がことし我國の玉淵の深き
がことくなるをしらさると也

愛別離苦　源氏供養に注す

生々世々　心地觀經曰或爲ニ父母ト爲ニ男女ト生々世
々互有レ恩矣

苦みの海　實盛に注す

地を走る獸空をかける翅まて親子の哀しらざるや
世範曰造物者設ニ爲自然之理ヲ使レ之生々不レ窮雖ニ
飛走微物亦然方ニ其子初脫ニ胎卵ヲ之際ニ乳飲哺啄必
極ニ其愛ヲ上下略　言心は鳥獸形微小なるまてゝ其子を
思ふ事人にたかふ事なしと也飛走とは飛鳥走る獸
を云也　文選注沈約曰天寒飛鳥走獸何知相依矣

佛性同躰の人間　涅槃經曰一切衆生悉有ニ佛性ー矣
般若經曰一切有性皆如來藏矣

生死の海は柏崎彼岸は東岸居士三界の㘴は百萬泪の
雨は通小町甲斐なきは融老波は高砂に注す

玉のきさはし玉の床に　玉は美稱の詞也堦は砌に
記す
薄氷を踏は立田心耳をすますは白鬚に注す
龍顏に御涙を浮へ給ふそ有難き　漢高祖の父を大
公と云母を劉媼と云或時母大澤と云所にて晝寢す
空俄に曇り雷電せしかは大公往て見る劉媼の上に
龍のとつぐを見けり其後程なく孕て子を生其子の
顏に龍の氣色あり鼻たかにして鬚髯うるはしく左
の股に有二七十二黑子一これ高祖也依而帝王の顏を
龍顏と云事是より始る也（史記文略）　帝王世紀云周文王
龍顏虎眉身長十尺矣
管絃講にて御弔有へきとの勅諚なり　亡者追善の
爲に管絃を奏し佛事をいとなむ是を管絃講と云也
或は最勝講法花八講なとの時管絃あり是も管絃講
と云也　管絃の二字は富士太鼓に注す
御幸は大原御幸糸竹呂律關寺小町三伏の夏たけ風一
聲の秋は軒端梅水滔々波悠々は采女天罰は田村呵
責は阿漕月宮は楊貴妃に注す
天人も影向菩薩もこゝに天くたります氣色にて
快祐法師七回忌和歌序云（藤原公夏）引聲の阿彌陀經音曲
の醍醐妙典の絃管伎樂の調へ造佛施僧のまうけに
至る迄晨昏日をかへて尊重座をさまさすおほよそ
此追修の趣き善盡し美盡せり梵天々衆の影向疑
なく諸佛々陀の降臨賴みあるものをやと云々
新猿樂記（シンサルガクノキ）云非調子琴音天神地祇垂二影向一無拍子鼓
聲野干必傾レ耳矣　私云音樂の妙なるに諸天感應
ある事和漢共に多し略レ之
秋風樂　難波に注す
烏鵲の橋の本に紅葉をしき二星屋形の前に風ひやゝ
かに夜も更て　紅葉をしきとは紅葉の橋をいへり
いつれも朝良に注す鵶鷺記云漢主傳云烏鵲の橋
の口に紅羽を敷二星の屋形の前に風冷々たり是は
紅葉にはあらね共紅葉と云につけて羽の字をえう
とよむ也七夕のあかぬわかれの泪鵲の羽を染て紅
になるといへりとぞかたりける云々
夜半樂　拾芥抄云夜半樂平調樂也無レ舞矣　體源
抄云夜半樂拍子十六新樂唐玄宗擧レ兵夜半誅二韋
皇后一製矣　說郛一百卷唐明皇三十四曲曰夜半樂
明皇自二潞州一入平內難レ正夜半折二長樂門關一領レ兵
入レ宮剪二逆人一後撰二此曲一名二還京樂一矣

人間の水は南星は北に拱の　圓悟禪師錄云天上有レ星皆拱レ北人間無ニ水不レ朝レ東矣上句天上有レ星とはもろ〳〵の星皆北震に向ひ敬ふと云義也論語云如下北辰居ニ其所一而衆星共上レ之矣　此語をとれると見えたり北辰は北極星只有ニ五星一拱の字はたんたく共こまぬく共訓ず廣韻云拱手抱也矣　增韻云兩手合持曰拱矣　下の句人間水としてとは人間を水にたとへていへり五行方角に配置（ツカサトリ）する時は水は西方の金生水と相生して北を主水生木と東に趣て萬木を潤養す故に水朝レ東と云也（性理大全取意）引竟此文の意は衆星の北辰にむかひ水の東に朝するがごとく或は春は花咲秋は實のる此等皆天地自然の道理也一切の人間も又々如レ斯と也　今案此謠に人間の水みつゝけての丶字を一字入たる故に人間の水とて一物あるやうにて聞にくし只人間を水にたとへたる也又た本文に水東に朝すとあるを南と作りかへたり惣而北は高く南は低し是常也依て水は南といへるは聞えたる歟　澤菴和尚相州英勝寺石盤銘云星拱レ北兮水朝レ東矣

月に嘯き　嘯の字は吳服に注す

五更の一點鐘もなり　顏氏家訓云漢魏以來甲夜乙夜丙夜丁夜戊夜爲ニ五更一更歷也經也言心自レ夕至レ旦經ニ渉五時一矣　應劭曰五者訓ニ於五品一更者五也又更漏也夜漏五々相遞爲ニ二十五一矣　五更とは曉の寅の刻を云更はふくると訓ず初夜の戌の刻より寅の時迄を五更と云也一點と云は一時の內を五つに分て其一つを一點と云也一時の間に五點つゝなれは五更には五々二十五點にて日出る也

鳥は八聲のほの〴〵と　庭鳥を八聲の鳥と云盛久に注すほの〴〵は墨田川に注す

時の皷數は六つの街の聲に　寅の刻過て卯の刻は明六つ也是を六の街にいひかけたり六の街は地獄餓鬼畜生修羅人間天上の六道を云也街の字は善知鳥に注す

謡曲拾葉抄巻十二

梅枝

此謡を梅枝と名付ること越殿樂（エテンラク）の唱歌に「梅かえにこそ鶯は巣をくへ風ふかはいかにせん花に宿る鶯とあるに本つきて梅か枝とは云也 ○又富士淺間二人の樂人内裏にて管絃の役をあらそひ富士淺間に討れし事富士太鼓に出たり見合しるべし

捨てゝもめくる世中は心の隔なりけり　捨てゝもめくるとは世捨人の制國也心の隔とは物に差別するを云捨てゝも世をめくるは心に自他の隔ある故かと卑下の詞にていへり

是は甲斐國身延山より出たる沙門にて候　甲斐國身延山號ニ久遠寺一人皇九十代後宇多院御宇文永十一年六月十七日々蓮上人五三歳開基也上人九ヶ年修行讀誦說法の山也檀越は波木井（キリ）南部六郎實長法名號ニ日圓一清和天皇より十二代也身延初は蓑府（ミノフ）と書日圓改ニ身延一云々　甲斐國は國造本紀云甲斐國造纒向日代朝世狹穗彦王三世孫臣知津彦公此宇鹽海足尼定ニ賜國造一矣　大和本紀云甲斐國は昔富士山の麓に竹取翁とて竹を植て商ける者あり或時竹林に鶯の卵（カイコ）を得て暖置（アタヽメオク）其後成レ姫彼翁田を作るに無レ養母も身苦を思ひて無レ情いへは鶯姫怒て登ニ富士峯一蹴ニ破岩釜一走レ湯田作る人皆燒て成レ石祖父祖母・遁て行ニ白根嵩一耕馬皆逃ニ往信州駒嵩ニ其駒主を不レ忘常に來しかは彼馬を心に入て飼し故に此所を飼の國と云然るを假名書に甲斐と書也甲斐の黑駒と云は此駒の事也云々沙門は田村に注す

我緣の衆生を濟度せんと多年の望にて候程に　我に緣ある衆生を濟度せんと也我緣の衆生とつゝけたるは何とやらんこと葉つまりて聞ゆ緣に法緣愛緣無緣とて三の品有法緣とは相逢當對の者に慈悲する也愛緣とは親類又は友などに別れてあはれむ心也無緣は無差平等に慈悲をほどこすを云也此沙門は日蓮の末流たる歟何れの人と云事未レ知爰につゞけたる詞又は上の次第の詞等を考ふれは近比殊勝なる出家たるべし但し蓮祖の御心とは各別也

雲水の身　殺生石に注す

我衣手や住江の　黑染の衣をいひかけたり住江は

高砂に注す

津の國　高砂に注す

正木のかつらくる人もなく　總てかつらにはくると云緣あり○後拾旅ねする宿はみ山にとぢられて正木のかつらくる人もなし民部卿經信

一宿は利益成へけれ共　出家一宿の功力は鵜飼に注す

はにふの小屋のいぶせくて　はにふの小屋は赤土と書万古源云はにふの小屋は土にてぬる家也賤しき住居也云々無名抄云はにふの小屋はあやしの家の板敷などもなくてわづかにねところ計に板のまねかたをひろひしきたるを申とかや云々　万葉仙覺抄云かきかべを草木にてもせす土してかべぬりたるをいふと云々○萬遠方のはにふの小屋にこさめふり床さへぬれぬ身そへわきもこ：いぶせくとは万葉に悒憤(イブセシ)と書匠材集云いぶせくとは物かなしき體也又おそろしき事なり云々○千いとゝしく賤のいほりのいふせきに卯の花くたし五月雨ぞふる

呉竹　關寺小町に注す

葎の宿はうれたく共　うれたゝは愁はしき也匠材集云うれたきはうき也うれい也と云々○伊勢物蒲生て荒たる宿のうれたきはかりにもおにのすたくなりけり

西北に雲起て東南に來る雨の足　呉服に記す

松吹風も心して旅人の夢をさますなよ　紀齊名詩云松寒風破ニ旅人夢一朗詠集

昔當國天王寺に淺間といひし伶人あり同しく此住吉にも富士と申伶人有しが　淺間及富士といへる伶人いまた出生不レ考　或云富士か舊宅は住吉明神の巽の方三町計に大木の松あり此所富士がやしきの跡といへり　伶人は書言故事曰――矣呂氏春秋曰――矣天王寺は富士太鼓に注す

管絃一　富士太鼓に注す

なふいつれも女は思ひふかし　廣博嚴淨經曰女人之性多ニ諸慳嫉一矣　諸法集要經曰女人多ニ諂曲一常懷ニ於嫉妬一常生ニ和合想一矣

太鼓は朽ず苔むして鳥おどろかぬ　山姥に注す

夫佛法樣々也と申せ共法花は是最第一　法華法師品曰藥王今告レ汝我所說諸經而於ニ此經中一法華最第

一矣此文の意は釋迦一代の所說雖レ有ニ大小權實顯密等不同ニ而於ニ此諸經中ニ法花最爲第一也と文の意也文句八曰藥王今告レ汝下第三一行歎ニ經尊妙一矣秀句下曰當レ知斯法華經者諸經之中最爲第一釋迦世尊立レ宗之言法華爲レ極金口校量深可ニ信受一哉矣

⊛三世の諸佛の出生の本懷衆生成佛の直道なり　法華方便品曰諸佛世尊唯以ニ一大事因緣一故出ニ現於世一矣　文句四曰諸佛覺ニ知實之相一乘ニ此實道一出ニ應於世一只令ニ衆生得ニ此實相一唯爲ニ此事一出ニ現於世一曾無ニ他事一除ニ諸法實相一餘皆名ニ魔事一矣　玄義八曰故知諸佛爲ニ大事因緣一出ニ現於世一只令下衆生開ニ佛知見一見中此一實非因非果之理上耳矣　釋籤一曰出世本意在ニ佛乘一佛乘方名爲ニ大事一當知佛乘只是妙法也矣　此經釋の意は三世の諸佛世々番々に世に出給ひ說法利益し給ふ本懷者說ニ唯一佛乘法花經一普及ニ一切衆生一爲レ令レ成ニ如我等無異佛果一也曾無ニ他事一故以ニ法華經一爲ニ三世諸佛出世本懷ニ云文の意也直道とは此經をたもちてすくにさとりを開くをいへり

一者不得作梵天王二者帝釋三者魔王四者轉輪聖王五者佛身云何女身速得成佛　法花提婆品の文也是を女の五障と云也云何女身速得成佛は云何女身にして速に成佛する事を得んと訓讀する也かくのことく女には五の障ありと定たれは只今龍女が速に成佛する事を得たりと云は不審也と舍利弗が疑をなしたる文也　大梵天王者西域記曰唲囕摩此翻ニ離欲一或云ニ清淨一或云ニ極淨一矣　楞嚴經曰身心妙圓威儀不レ闕淸淨禁戒加以ニ明悟一矣　荆谿曰梵即色界主亦三界主餘皆臣屬良由下此天內有ニ覺觀一外有中語言上故也矣　帝釋者大論曰梵語云ニ釋提桓因一秦云ニ能天王一合而言レ之云ニ釋提婆那民一或云ニ釋迦提婆因陀羅一今略云ニ帝釋一矣　淨名疏曰若ニ此間帝釋一是昔迦葉佛滅有ニ一女人一發心修レ塔復有ニ三十二人一發心助修修レ塔功德爲ニ忉利天主一其助修者而作ニ輔臣一君臣合レ之名ニ三十三天一矣 ⊛ 魔王者梵語云ニ魔羅一大論曰秦言ニ能奪命一又翻爲レ障能爲ニ修道一作ニ障礙一故或言ニ惡者一矣　垂裕云能殺害ニ出世善根一第六天上別有ニ魔羅所居天一他化天接矣　轉輪聖王者或遮迦越羅此云ニ轉輪王一俱舍論曰從ニ此洲人壽

無量歳ニ乃至ニ八万歳ニ有ニ轉輪王一生滅八万時有情
富樂壽量損減衆惡漸盛非ニ大人器一故無ニ輪王一由ニ
輪旋轉一應導威ニ伏一切一名ニ轉輪王一矣　佛身者觀
經玄義曰言レ佛者乃是西國之正音此土名レ覺自覺覺
他覺行窮滿名レ之爲レ佛矣

なにうたかひかありそ海の　〻　有磯海は越中の名所
なり爰は只ありと計の諷詞にていひかけたり

或は若有聞法者無一不成佛とときー度此經を聞く人
成佛せすと云事なし　法華方便品曰若有レ聞レ法者
無ニ一不ニ成佛一矣　文の心は謠の詞にてよく聞え
たり

碧玉寒蘆錐脫レ嚢　野相公の詩也葵上に注す

受持　うけたもつと訓ず大論曰信力故受念力故受
持矣

變成男子　蟹に注す懺悔は實盛に注す惡趣江口に注す
狩衣は松風に注す

ねもせす起きもせす　伊物 ○起もせすねもせてよはを明
しては春の物とてなかめ暮しつ

泪敷妙の枕かみに　敷妙は關寺小町に注す枕上は
枕もと也夕顏卷云からうすの音も枕かみとおぼす
云々

一念の起はやまふと成つゝ續ざるは是藥也と故人の
教なれば　一たび惡念の起るはやまひなれ共二念
と續ざるは是藥となり　大惠書云先聖云瞥起是病
不レ續是藥不レ怕ニ念起一唯恐ニ覺遲一矣　宗鏡錄云瞥
起是病不レ續是藥以ニ心生即是罪生時一故是以初心
攝レ念爲レ先是入道之階漸矣

戀忘れ草も住吉の岸に生てふ　古今集貫之歌に道
しらばつみにもゆかん住吉の岸に生てふ戀忘草古
今堯惠抄云てふとは謂此字也云と云詞也云々　愚
見抄云忘草に二種あり万葉に萱草の二字を忘草と
よませたり住吉の岸に生たるは萱草也と云說あり
又しのふ草の一名也軒のつまなどによめるは忍草
の事に用ゆる也と云々　袖中抄云わすれ草は萱草
也云々　說文曰萱令レ人忘レ憂矣　嵇康養生論曰萱
草忘レ憂矣　毛詩曰北堂栽ニ萱草一能忘レ憂矣　古今
集栄雅抄云わすれ草は古宅なとの軒に生ふる草也
しだと云草に似たるは忘草也云々藻塩草云忍草は
細長にて星のやうなるものあり穗なし忘草はあら
〳〵として穗に出る也云々　閑疑抄云兼載聞書に

檜木葉に似たるを忍草と云ひとつ葉に似たるを忘草と常にいふ云々〇(伊物)わすれ草おふる野へとは見るらめとこは草のぶなり後も頼まん〇(續古)忘るゝもしのぶも同じ故郷の軒端に生る草の名そうき　此等は一草二名によめる也右説々不同也尋ぬべし

夜半樂をかなてん　夜半樂は天鼓に記すかなでんは千壽に注す

住吉の松のひまより詠むれば　下句は月落かゝるあはち島山　此歌富士太鼓に注す

浪もてゆへるあはぢ潟　「(古今雜)わたつうみのかさしにさせる白妙の浪もてゆへる淡路島山此歌の心は榮雅抄云海神のかざしにさせる白妙の浪をもてあはち島山をゆへると也淡路島のちいさきが浪の立まはりたるは浪にてゆへるやうに見ゆるとよめり云々

青海波の浪かへし　青海波は高砂に注す　浪反は太鼓の秘事也　雌浪雄浪とて習有　太鼓のあけやう也

越殿樂　拾芥抄云越殿樂盤渉調也無レ舞矣　色葉字類抄云越天樂平調也矣體源抄云越殿樂新樂中曲無レ舞殿字作レ天本平調曲也名ニ林鐘州林羽越天一此破渡ニ黄鐘調安城樂一爲ニ平調之物一矣

梅か枝にこそ鶯は巣をくへ風吹かはいかにせん花にやとる鶯　越殿樂の唱歌也

鶯の聲に誘引せられて花の陰に來りたり　白氏文集十八云鶯聲誘引來ニ花下一草色拘留坐ニ水邊一矣誘引はさそはるゝ也拘留はかゝはりとゝまると云也〇(後撰)鶯の鳴なる聲にさそはれて花の下にぞ我はきにける

是こそ女の夫を戀る想夫戀の樂　拾芥抄云想夫戀平調樂也無レ舞矣　文集韻府等には想夫憐と書　花鳥餘情云唐書には想夫憐と書日本には想夫戀と書也同心也夫を思ふとよめる故に女はその心して引へしと云々　盛衰記云仲國嵯峨の法輪へ小督の局を尋行て其琴をきくに夫を想ひて戀るとよむ想夫戀と云樂也(文略)　徒然草云さうふれんと云樂は女男を戀る故の名には非す本は相府蓮文字の通へる也晉の王儉大臣として家にはちすを植て愛せし時の樂也是より大臣を蓮府といふ云々太平廣記二百

四十二經誤部曰唐司空于頔以ニ樂曲有ニ想夫憐之名ー嫌ニ其不雅ー將欲レ改レ之客有レ笑曰南朝相府曾有ニ瑞蓮ー改レ歌爲ニ相府蓮ー自レ是后人語誤及レ不レ改矣

富士太鼓

此謡に作る處萩原院の御時富士淺間といへる二人の樂人管絃の役をあらそひ淺間富士を討と云事何れの書にありやしらず今案大系圖云花園院(號ニ萩原院ー)御宇文保三年十一月大嘗會の日正三位中將參議有時卿淸暑堂神宴拍子に參仕する處に陣中において敵人討レ之後日の相爭となる今夜拍子勤しむ紙屋川顯香これを討と風聞す依而顯香卿於ニ關東ー罪せらるゝと云々此等の義を以て名をかへ品をかへかく作るもの歟且又樂人の名に富士淺間と云もいまたしらず追て尋ぬべし

是は萩原院に仕へ奉る臣下なり　九十四代花園院亦號ニ萩原院ー諱富仁伏見第二子母顯親門院藤原子左大臣實雄女也延慶元年戊申十一月廿六日即レ位治ニ天下ー十一年文保二年讓レ位建武二年出家法諱遍行貞和四年十一月十一日崩云々　臣下は葵上に注す

扨も內裏に七日の管絃の御座候により　內裏は大內共云總て禁中を內といへり　帚木卷云內の御物いみと云々　漢鼂錯傳曰天子宮禁謂ニ之內ー漢制天子內中曰ニ行內ー行內猶ニ禁中ー也矣　管絃は　文選註曰吹曰レ管撫曰レ絃矣　笙笛篳篥都て吹物を管と云琴瑟琵琶等のひき物を絃と云り又管と云樂器別にあり　說文曰管六孔矣　應劭云長一尺六寸矣

天王寺より淺間と申樂人　禁中の樂人は從四位下まて叙し若し天子御師範なれば正四位上にもすゝむといへり天王寺の樂人は太子の御時より今に傳來する也　天王寺在ニ攝州東生郡ー名ニ荒陵山敬田院ー亦號ニ荒陵寺難波大寺堀江寺法花園ー東西八町南北六町今之天王寺是也　三十二代用明天皇二年丁未八耳皇子討ニ守屋ー皇子斬ニ白膠木ー刻ニ四天王像ー安ニ髮中ー發ニ大誓ー曰官兵得レ勝當レ建ニ護世四天王寺ー守屋亡乃於ニ玉造岸上ー營レ寺安ニ四王像ー五年後推古天皇元年癸巳移ニ難波荒陵東ー故曰ニ荒陵寺ー

又此內建ニ悲田敬田之二院一故號ニ敬田院一南北一里
東西里餘有レ池曰ニ荒陵池一（元亨釋書 文略）　帝王編年記云
推古天皇元年癸丑太子攝津國西生郡玉造岸上草ニ
創四天王寺一依ニ守屋追討之願一也守屋資財田宅皆
爲ニ寺領一寶塔金堂者相ニ當于極樂淨土東門中心一矣
是はならびなき太皷の上手にて候を　風俗通曰皷
者春分之音萬物皆鼓レ中而出以助ニ萬物發生一故謂ニ
之皷一矣　器錄曰蓋鼓勇也定也矣　帝王世紀曰黃帝
殺レ夔以ニ其皮一爲レ鼓矣　爾雅曰大鼓謂ニ之鼖一矣
通考曰後世大鼓古鼖鼓也矣　陳氏樂書曰鼓之小者
謂ニ之應一大者謂ニ之鼖一又曰鼓之制始ニ於伊耆氏一少
昊氏夏后氏加ニ四足一謂ニ之足鼓一商人貫レ之以レ柱
謂ニ之楹鼓一周人懸而擊レ之謂ニ之懸鼓一矣
上手は葵上住吉は高砂面白は三輪に注す
ゑなのなる淺間の嶽ももゆるといへば富士の煙のか
ひやなか覽　後撰集離別の部に駿河が歌也淺間の
山ももゆなればと有　詞書云ゑなのへまかりける
人に薰物つかはすとて云々　歌の心は駿河が薰物
なれば富士の煙とよめり淺間の煙名たかければ富
士かひなしと卑下也私云富士淺間といへる樂人の
名によりて此歌を爰に取出したり
あつぱれ淺間はまさふする物をと勅諚有しにより重
て富士と申者もなく候去程に淺間此山をきゝにくき
富士が振舞かなとて彼宿所に押寄あへなく富士を討
て候　此詞つゞきよろしからず梅が枝の謠に作れ
るは富士に太鼓の役仰付らるゝにより淺間遺恨に
おもひふじを討し事尤聞えたり此謠には淺間に仰
付らるゝからは富士に恨みなき筈をふじを討たる
事聞えずあつぱれは實盛に注すあへなくは女郎花
に注す
雲の上猶はるかなる富士の行衛を尋ねん　○富士（新勅）
のねはとはても空にゑられけり雲より上にみゆる
白雪（守覺）　富士山在ニ駿河國富士郡一故名ニ富士山一
富士淺間大權現在ニ富士山一一宮記云富士權現大山
祇女木花開耶姫命也矣　平城天皇大同元年建ニ社
於山頂一號ニ淺間大權現一役行者始登山云々空海圓
珍兩大師多作ニ佛像一寄レ之延喜年中勸ニ請富士本宮
神於麓一稱ニ之新宮一山之北甲州口有ニ華表一額曰三
國第一山矣富士山の姿は北へ遠く足をはりて南面
は嶮岨に見えたり遠江駿河宇津の山迄も富士の形

は同じやうに見ゆる也清見潟を過て神原を行々見れば丑寅にあたりて嶮岨に見ゆる也浮島が原より見ればふせこのなりに見えたり箱根山鎌倉或は武藏の國中より見るにも北へ足を遠く南は嶮岨也惣じて富士は東八州より見ゆる也細天章書に富慈(フジ)義楚六帖に富二(フジ)婦盡富兒大明一統志に不盡不兒舊事本紀に降士と書躬恒秘藏抄云富士十名藤嶽鳴澤高根常盤山塵二十山三重山新山見出山三上山神路山矣　藻鹽草云戀の中山たからの山云々　其外般若山柴山しづはた山時しらぬ山共云也　下學集云不盡山此山至高而瞻望不レ盡故云二不盡山一又四時之雪不レ盡故云レ爾富士者此山之神女体而心欲レ富二男士一故世俗祝以名二富士一也矣　詞林采葉云富士縁起云此山者月氏七嶋第三也天竺列擲三年飛二來我朝一故云二新山一本號二般若山一其形似二蓮花一頂上八葉也中央有二大窪一窪底湛二滿池水一色如二青藍一下略舊事本紀云孝靈天皇三十六年正月駿河國東西南北剌國中出二大海一一夜從二海中一出二大山一埋一日從レ天雲降犧土績レ嶺像如二八坂瓊一又若二精米累一絶頂見二天女一十五童左右又鬼伯天兵群二々左右一矣

萬葉仙覺抄云富士とは火しげしと云詞也はひふへほ共に火界を結べる詞なれ共ふといへるは黒色をあらはす詞なれば煙にかたどるべし然ればふじと云は則けぶりしげしと云詞也云々　私云富士山は孝靈天皇の時一夜に涌出すと諸書に出たり是は舊事本紀の說に本づきてかくいへる歟但萬葉集山邊赤人富士山を望む歌に「天地のわかれしときに神さびて高く尊き駿河なる布士の高根を天の原下略　此歌を以て見る時は富士山神代よりある事明けし○新拾神代より煙絶せぬふしの根は戀や積りて山と成らん素暹法師　○大かたは消てもきえぬ神代よりなかめにつゝくふしの白雪雅章

津の國　高砂に注す

わらはが妻も太鼓の役　女房の方より夫を指て妻といへり此事柏崎に注す

心にかゝる月の雨身をしる袖の泪かと　古歌に身をしる雨とあるを爰にいひかけたり匠材集云身をしる雨はたゞ雨也泪にあらずと云々但此うたひにては泪を云り　榮雅抄云古今集戀四に「數々に思ひおもはすとひかたみ身をしる雨は降ぞ增れると

云歌の注に云身を忘る雨は此雨にてわが人に思ひ思はぬを知と云心也是を本にて今の世人身を忘る雨とはよみぬるとぞ見ゆるを泪を云なと申人あるは僻事也古くより皆雨の降につきて詠ずる也と云々　愚見抄云我身の程を雨にて忘るべければ身を忘る雨と云也或は又我身を知雨を泪になしたる歌も有べし云〃〃又身を忘る露とはよめり○跡たらて風たにとはぬ萩のえに身を忘る露は消る日もなし（拾遺愚草下）　伊物集注云身を忘る雨とは静にふる雨の中には我身の事を思ふよし也云々○時雨つゝ身を忘る袖をほしわひぬ神は日吉の名を頼め共（知家白歌合）

住吉の松の隙より詠むれば月落かゝる　玄旨聞書抄に頼政歌とあり留るはあはぢ嶋山定家卿愚秘抄云名歌とて勅撰に入ぬ歌有一住吉の松の木間より詠むれば月落かゝるあはぢ嶋山此歌を新古今撰せられし時さたありていかにとして今まで代々の勅撰にもれ侍りけるやらんと御不審有しに一同に此歌はさしたる難侍りと申上しかばいつれぞと勅定有しに松のこまよりと云詞のつたなきによりて今迄もれ侍りけるにやと勅答つかふまつり侍しにさて是を何とよみてかよかるべきと仰られしに各所存を申き西行は松の木の間よりと置べきにやと申たりき心は憐なれ共あまりに長く聞ゆるにや愚老は松のひまよりとぞ申たきと直し侍りきいづれのよろしきやらん是非は定めがたくこそ摂政殿有家朝臣などは松のひまとて尤よろしかりなんと申されき云々

山城は通小町に注す男山は女郎花に注す

八幡にいのり掛帯の　掛帯は巫女の服也或は官女内侍命婦までも懸る由也位の品によりて地色縫紋などかはり有岷江入楚云掛帯とは物詣などに女のかくる帯也唐衣の引腰を云也唐衣にそひたる物也小腰引腰とて有一説に玉手織とて袍の上に玉々飾りてかくる也女に掛帯と云是を蜂の比禮蛇の比禮只物の比禮など云也と云々　八幡は弓八幡に注す

されば社思ひ合せし夢の占　周禮春官曰占夢以二日月星辰一占二六夢之吉凶一注六夢者正夢噩夢思夢寤夢喜夢懼夢矣　劉向新序曰諸候夢悪則修レ徳大夫夢悪則修レ官士夢悪則修レ身如レ是則禍不レ至矣大論曰五夢一熱氣多故夢レ火二冷氣多夢レ水三風氣多飛

レ二四見聞多入レ夢五天神與矣　法數云四夢一無明習氣夢二善惡先徵夢三四大偏增夢四巡遊日識夢矣　善見律云四夢四大不和夢先見夢天人夢相夢矣　東萊讀書記曰一飲盈虛消息通二於天地一應二於物類一故陰氣壯則夢レ涉二大水一恐懼陽氣壯則夢レ涉二大火一燔焫陰陽同壯則夢生殺甚飽則夢レ施甚飢則夢レ取是以二浮虛一爲レ病者夢レ揚以二沈實一爲レ病者夢レ溺藉レ帶而寢則夢レ蛇飛鳥銜レ髮則夢飛矣

甲斐もなきは謡に注す狩衣は松風に注す

まことにあるき鳥甲　あるきとはあらはなる義也

葛城に注す鳥甲は天照太神天の岩戸にこもらせ給ふ時諸神神樂を奏し常世の長鳴鳥を鳴しめ給ふ事神代卷に見えたり長鳴鳥とは庭鳥を云也然るに鳥甲の形は長鳴鳥を表したるもの也已上師說　隱士にも鳥甲あり鶡冠トモ云是也千家詩註云鶡冠隱士之冠以二鶡雉毛一爲レ冠矣本草綱目云鶡鷄出二上黨一魏武帝賦云二鶡雞一猛氣其鬪期二於必死一今人以レ鶡爲レ冠象レ此也矣

おして參れば下として上をはかるに似たるべし

論語曰子曰不レ在二其位一不レ謀二其政一矣　史記李斯列傳第廿七曰且夫從レ外制レ中謂二之惑一從レ下制レ上謂二之賊一矣

其上御身は當社地久の樂人にて　當社は住吉を指て云也一說地給と書地久可レ然歟

秋猴か手を出し班猿が泪にてもとむべき物を今更に　師聞書云秋猴は秋の猿也秋はらめるに手を出し木の實を取事を苦むなり班猿はまだらの猿也恩愛の差別なくたけき獸也有人問二大惠禪師一別レ子不レ歎如何師答材猿云々言は子の別れを歎は人の常也不レ歎は材猿に等しと云義也謡の心は富士が妻我身秋猴なりとても手を出しせひ夫をとむべき物を我身班猿なりとても泪を流してとゝむべき物をと後悔するなり云々私云秋猴が手班猿が泪は古來よりの難義なり心は明かに聞へたる歟秋猴の二字は漢文に見えたり班猿の二字はいまだしらず證文可レ尋

神ならぬ身をうらみかこち　〇雲玉神ならぬ身はいかさまにゆふたゝみしらぬ心の末をたよりて

鼓を苦に埋まんとては山姑に注す時の夢は屋島に記す

うてや〳〵と責鼓　合戰の時太鼓を打て責よするを責鼓と云也　江源武鑑云太鼓打樣陰者陰打陽者陽打也懸太鼓者次第上數不レ定三度後陳懸者次第上數不レ定五度左右備懸者次第上數不レ定七度横鎗懸者亂調子也矣

あら扨こりのなく音やな　こりの泣音未レ考こりは孤嫠と書歟　蘇子瞻前赤壁賦曰客有三吹二洞簫一者一倚レ歌而和レ之其聲嗚々然如レ怨如レ慕如レ泣如レ訴餘音嫋々不レ絶如レ縷舞二幽壑之潜蛟一泣二孤舟之嫠婦一上下略　右の孤舟の孤の字と嫠婦の嫠の字とを取て孤嫠の泣音と云歟孤舟はひとつの舟也嫠婦はやもめ女とよめり富士が妻もやもめなれば此謡と赤壁賦の文とよく相似たり

嗔恚の焔は東岸居士に注す伶人の舞は梅が枝に注す

名の下むなしからず　名を取たる人の家に生る丶子孫は定まつてむなしうになき物ぞと也書言故事云國史纂異曰閻立本家代善レ畫到二荊州一觀二張僧繇舊迹一初往曰虚得レ名耳明日又往曰猶是近代佳手明日又往曰名下定無二虚士一坐臥觀レ之留二宿其下一十日不レ能レ去矣尺素往來云宇治者當代近來賞翫栂尾者此間雖二衰微之儀一名下不レ虚矣

煩惱の雲晴て五常樂を打給へ　本文に五常樂と書て常の字清てうたふ事いぶかし但謡の心は女の五障を五常樂にいひかけたり煩惱は三井寺に注す五障は梅が枝に記す東鑑云重衡先吹二五常樂一爲二下官一以可レ爲二後生樂一矣　是よく相似たり千壽に注す〇聖廟御詠　世中を何歎くらん笛竹のこしやうらくなる身とはしらすや　體源抄云五常樂中曲或中大曲新樂又名二聖樂禮義樂一或譜云大食調曲又博雅三位説此曲入二平調一云々一唐太宗朝貞觀末天觀初帝製二五常樂曲圖一五常公作レ之云々仁義禮智信謂二之五常一此人可二常行一也五常即配二五音一此曲能備二五音一云々　抑平調は金音也此音は義德に主る而此調子の樂の中に殊に五常樂の名を得たる事此樂の義の一音を以て本として能五常を調るが故也五常樂と云は仁義禮智信也土の君王に信德あれば水は北闕の臣禮むる也如レ此五常を調る故に上に義あり下に禮あり王臣の道合て國の中に殃なき也故に五常樂と云也云々

修羅の太鼓は打やみぬ　惠心云明二阿脩羅道一者有

レ二一根本勝者住ニ須彌山北巨海之底一劣者在ニ四大洲間山巖中一雲雷鳴是謂ニ天皷一怖畏周章心大戰悼矣

これ修羅の太鼓也修羅は屋島に記す

千秋樂　高砂に注す

太平樂　拾芥抄云大食調也矣　體源抄云武將大平樂中曲新樂又稱ニ武昌樂一號ニ巾舞一又謂ニ項莊鴻門曲一常云ニ太平樂一或云ミ拔レ劍舞ニ之曲一云々　群書會要曰立部伎八部樂一安樂後周平レ齊所レ作也周代爲ニ之城舞一二太平樂又謂ニ之五方師子舞一矣

日も既にかたふきぬ山の端を詠めやりてまねきかへす舞の手の　拾芥抄云陵王壹越起内沙陁調曲也矣體源抄云羅陵王名ニ蘭陵王沒日還午樂一日搔返手「今も世にまねかはさこそとはかりに雲のま袖の入日をそみる　淮南子曰魯陽公與レ韓戰日暮援レ戈麾レ之日退三舍矣源氏橋姫卷云雲かくれたりつる月の俄にいとあかくさし出たれは扇ならてこれしても月はまねきつべかりけりと云々　岷江入楚云舞に入日をかへす手ありと云々　私云入日をかへす手とは彼羅陵王の曲にある事也

道明寺

河内國志貴郡土師里道明寺號ニ土師寺一濟家之尼寺也本尊十一面觀音御長三尺天神之御作也寺領百七十石　道明寺緣起云當寺往昔推古天皇御願聖德太子開基土師連八島奉レ勅造ニ寺於土師里一也此寺に菅相丞の伯母御覺壽と申おはします菅相丞左遷の御暇乞に立寄せ給ひ夜もすがら御物語つきなくに東雲の鷄かしましく思召て「鳴はこそ別れをいそげ鳥のねの聞えぬ里の曉も哉それより此里には庭鳥をかはずと申傳ふるなり于レ時菅公配所に薨じ給ひて後村上天皇天曆元年菅靈を都北野に移し御社を建同年當所道明寺にも三町の內に御社をたて左右に松櫻を植て天滿大自在天神と崇め給へり同緣起云土師里と申は垂仁天皇の御宇野見宿禰に始て土師の姓をたまはりてより里の名とし此地を領す敏達天皇の御宇土師八島に至り相繼て住居す于レ時聖太子伽藍建立の志あるを八島力を合せ自の住宅を捨て梵剎となせり云々　されば野見宿禰は菅相丞先祖當時は菅家の氏寺也已上　江談云菅

家本姓土師氏也河內國土師寺是其先祖氏寺也矣
色葉字類抄云土師寺號ニ道明寺ト土師氏寺也俗爲ニ
菅原ノ姓ト菅家氏寺也矣　同縁起云元慶八年菅相
丞於ニ當寺ニ五部の大乘經を書寫す此經を納むへき
地を求め給ふに講堂の西の傍にあたりて石函を得
ゑ則此經を彼函に納めて土を以て上をきつく其後
かの傍より木槵樹自然に生ひて年々しげみをそふ
一とせ回祿のわざはひにあひて枯しか共其根猶殘
りて二度枝葉を生じ今に至りて盛也人々此實をた
ふとみて數珠につなぐなり同縁起云相州田代寺の
尊性と云る僧信州善光寺に參籠する事一七日我命
終の後かならず西方極樂に往生せしめ給へと一心
に祈願せしかばある夜の夢に內陳より如來の告給
ふと覺て木槵樹一百八をつらぬきこれをもて數を
取て念佛百万遍を修行せは決定し極樂に生れんそ
の木槵樹は河州土師寺にありと尊性夢さめて後は
る〴〵尋きたりけるに一人の老翁出てあないして
木槵子をおしゆ此僧是を得て念數とし敎のごとく
修しせかば臨終正念にして往生の本意を遂たりか
の翁は白太夫の神の化現にてありしと也云々

善光りそと名をきくや佛の御寺なるらん　此僧善
光寺の如來のをしへに依て河內國道明寺に參詣す
る也次第の詞に善光寺如來をいひかけたり
加樣に候者は相摸國田代と申所に尊性と申者にて候
相模國は景淸に注す　田代と云所は田代冠者信綱
が舊跡なるがゆゑに田代と云田代寺の西の方を田
代屋敷と云今は畠也田代寺は號ニ普門寺ト妙本寺の
東南也安養院の末寺也堂の額に白花山とあり本尊
は千手觀音也坂東順禮札所の第三也尊性は田代寺
にすめる出家なるべし出生しらず尋ぬべし
善光寺の如來は柏崎河內國は釆女長月は紅葉狩梢の
秋は佛原に注す
てるや紅葉のはしの里　櫨の木の紅葉をいひかけ
たり黃櫨は漆ぬるでの類也其葉秋紅也其實蠟燭に
作る也本草綱目云黃櫨生ニ山谷ニ葉圓木黃可レ染ニ
黃色ニ矣天子御袍稱ニ黃櫨染ト是也
天照神の宮寺に　天照神は天滿宮を云也宮寺とは
南部習合を以て祭る社を宮寺と云也蟻通に注す
値遇　盛久に注す
神さぶる松は十歸り千代の秋　神さぶるは神さび

と云に等し嶬通に注す十歸りは高砂に注す
續拾遺 神さふる葛城山の高ければ朝ゐる雲のはるゝまそなき公實
宮路久しき瑞籬の　瑞籬とは久しきといはん枕詞也或云火難をしりぞけんが爲にみづかきといふ云々
菜は鉢木巫は遊行栁信濃國は兼平香の衣に香の袈裟は盛久に注す
しからば五畿內河內國土師寺は　山城大和河內和泉攝津是云二畿內五箇國一　日本紀云孝德天皇二年春正月詔曰凡畿內東自二名墾横河一以來南自二紀伊兄山一以來西自二赤石櫛淵一以來北自二近江狹々浪合坂山一以來爲二畿內國一矣　大和本紀云畿內とは都は國の中なる故に今の五箇國をば日本國の中央と云也畿は幾也畿の字は近と讀都に幾國なる故に畿內と云也又畿の字は囘とよめり都を中に置て四方をめぐる圍也開云日本國を八ツに分る時七ヶ國に道の字あり何ぞ畿內には道の字なきや答云畿內は日本の中にして近き國の故に道の字を不付也東海道より等諸道と號する是は畿內を中にし　勅使を諸國へ下さる順道の名也仍而畿內五箇國と云也云々
諸社根元記云畿內とは皇城千里を畿と云其心には非ず是は神代の古しへ天照太神天上にて機を織給ひし宮殿の打掩ひたる分際此五ヶ國の天なる故に機の內と云心にて畿內とは申也云々　說文曰畿天子都也或作レ圻矣左傳曰昔天子之地云二一圻一注千里曰レ圻矣吳氏季子曰古者方千里曰二王畿一蓋自レ東而西自レ南而北皆千里也千里之內爲レ畿矣　類說拾遺曰帝畿千里象二日月經圍一故曰二日畿一矣
彼所に神明を初め奉り七社の神々を勸請申されたり
當所に祭る處は北野本宮及末社の神等祭レ之或は天穗日命白山稻荷八島社祭レ之
五部の大乘經を書供養して埋まれたり　五部大乘經者　第一大方廣佛華嚴經六十卷東晉佛馱密多譯也　第二大集經日藏分月藏分合五十卷北凉曇無讖譯也　第三大品般若經三十卷姚秦什共僧叡等譯也第四妙法華經八卷同譯也第五大般涅槃經四十卷大集經同譯也已上供養は字義は源氏供養に注す
其軸より木槵樹の木生ひ出たり其菓をとり數珠とし念佛百萬遍申さば往生疑あるまじきと承つて夢さめ

ぬ　本草綱目釋名古今注曰世人相傳以此木爲器用以厭鬼魅故號曰無患人訛爲木患(モクゲン)又云高山大樹也子黑如漆珠今釋氏取爲念珠矣　多識編云無患子今俗云菩提樹異名油珠子矣　木槵經曰若欲滅煩惱障報障者當貫木槵子一百一八以常自隨若行若坐恒當至心無分散意稱佛陀達磨僧伽名乃過一木槵子如是漸次度木槵子若十若二十若百若千乃至百千萬若能滿二十萬遍身心不亂無諸諂曲者捨命得生第三燄天衣食自然常安樂行若復滿一百萬遍者當得斷除百八結業始名背生死流趣向泥洹永斷煩惱根獲無上果上下略　選擇決疑抄云道綽曰須依小阿彌陀經一七日相續無間念名號若滿一百萬遍必得往生上下略　以上道明寺緣起を以て作る也上に記す

天神と申に其御本地救世觀音にてましまさずや

本朝文粹云江匡衡奉天滿宮祭文云天滿自在天神或鹽梅於天下而輔導於一人或日月於天上而照臨於萬民就中文道之大祖風月之本主也下略　其夜の夢想に匡衡我に手向る所よろこべり但天上に日月として云詞我心に聊かなはず家は十一面觀音也と仰らるゝと見て夢さめぬと云々　是より天神の御本地觀音とは申奉る也江記文略　救世觀音者弘猛海慧經曰衆生有苦三稱我名不往救者不取正覺矣　觀世音ほさつは世間の音聲を觀じて自在に救度し給ふ故に救世(クセ)とは云也

昔在靈山名法花今在西方名阿彌陀娑婆示現觀世音

三世利益同一躰　盛久に注す

其外神や佛とは唯是水波の隔にて神佛一如なる寺の名の道あきらかに曇らぬ神の宮寺ぞたつとき　神佛水波の隔にてとは神は本地佛は垂跡根本一躰と云也誠に當社は兩部の神なればかくつゞけたり寺の名の道あきらかにとは道明寺をいへり

夫佛の昔神の今五々の時代に至るまで　佛の昔とは世尊の在世を云神の今とは天照太神より今日迄を云五々の時代とは佛入滅の後五々二千五百年は末法の初也菅家の都にうつり給ふ頃を指ていへり

正像末の沙汰は東岸居士に注す

二月下の五日にして都を出させ給ひつゝ　二月廿五日は菅家配所にて薨じ給ふ日也都を出させ給ふ

此は昌泰四年正月廿日に筑紫へ流れ給ふべきに定りて同く二月朔日に都を出させ給ふと古記にあり

きさらぎは雲林院に注す

君がすむ宿の梢をゆく／＼もかへるゝ迄に歸り見そする　拾遺集別に贈太政大臣の御歌也留りは歸り見しはや〻有大鏡にはかへり見しかなと有　拾遺詞書云流され侍りて後いひをこせて侍ると云々菅家左遷の御時北の方へつかはし給ふ歌也

名におふ心つくしとて　筑紫をいひかけたり筑紫は櫻川に注す　名におふは江口に注す

天降鄙の國に　天離天下書天さかるとはひなと云ん爲の枕詞也鄙の國は田村に注す萬葉仙覺抄云鄙は田舍也日の雲をめぐり給ふ事髪筋一つをきる程もよどみ給ふ事なく長時不斷の雲をさかりゆき給へば天さがるひなとはつゞけたり云々◯萬天さかるひなのなか地を濟くれば明石のとより大和島見ゆ

あたりは都府樓の瓦觀音の鐘の聲朝暮にひゞく折々は　菅家後集云都府樓纔看瓦色觀音寺只聽鐘聲矣是は菅家配所にて作れる詩也都府とは都督府也太宰府是也檜垣に記す菅家のおはします配所より太宰府の樓の棟計纔に見ゆる也又觀音寺此所に近く時々鐘の聲聞ゆると也世繼云此詩白居易が遺愛寺の詩よりも猶まされりと時の博士どもいひけると云々觀音寺は在筑前三笠郡法相宗也元明天皇和銅二年二月草創天平十八年六月供養導師玄肪僧正此時玄肪藤原廣嗣が靈難にあへり其後滿誓法師加修理云々百練抄云康治二年六月廿一日太宰府觀音寺堂塔燒亡此寺天智天皇以後齊明皇后以往五代聖主相續草創御願也矣

離家三四月落淚百千行萬事皆如夢時々期彼蒼　此詩在菅家後集菅公太宰府につかせ給ひ懷をのべ給ふ詩也本文には仰彼蒼と有

昨日は北闕に悲をかふふつしたり今日は西都に恥を淸むる尸たりと御神感あらたに生ての恨死しての喜びあまねしや　一條院御宇正曆五年勅使を筑紫安樂寺に遣され正一位太政大臣に贈號あり勅使廟前に於て詔書を讀上給へは天に聲有て云昨爲北闕被悲客今作西都雪恥尸生恨死歡其奈我今須望足護皇基（巳上見聖廟記及帝王編年記）北闕とは禁中を云西都は太宰府を云也生て恨とは御存生の時は時平の讒言

に恨ふかきをいへり死しての歎とは薨じ給ひて後度々叡覽あるを悦び給ふ也天神の御望み足て今よりは内裏を守護すべしとなり

天満陽感そめてたかりける　天満とは天神満足の心也　陽感とは陽は神也感は感應也天神の御望み足し御心のあらはれたるを陽感とは云也

草も木も皆成佛芭蕉枯たる木にだにも誓の花は咲ぞかしは田村に注す思ひの玉は盛久に注す

名をば誰とか白太夫の神と申　白太夫は勢州の神主春彦を云也北野及當社の攝社たり　禰宜補任云禰宜外從五位下神主春彦在レ任十六年又云渡遇春彦天御中主三十六世孫也即神主二門大内人高主六男也承平三年十一月廿辭レ職讓ニ男晨晴ニ天慶七年正月九日卒叢管三品在世之日有ニ幽契睦ニ故爲ニ第一攝社ニ也然今略不レ記社官謂下於太宰饗ニ酒醴ニ之翁ニ者非也矣

翁草の霜曇りしてんけりや　匠材集云翁草は白頭の菊をいふ云々　或云おきな草は松の異名也云々　霜曇略レ之　霜曇りとは霜深き時は曇るやうにてくらくなるを云也（霜曇りすとに歸らん久方の夜渡る月の見えぬ思ひは

久方の天の岩戸の神遊び　久堅ニ羽衣に注す　神遊は三輪に注す

琵琶琴和琴笛竹の　琵琶は千壽に記す琴笛は羽衣に注す　和琴ニ東琴共日本琴共云也　和名類聚抄云天平元年十月七日大伴淡等附ニ使監ニ贈ニ中將衛督房前卿ニ之書所レ記也體似レ箏而短小有ニ六絃ニ俗用ニ倭琴二字ニ矣又千壽にも注す

缶の役者　詩宛丘篇曰坎其擊缶矣　漢徐幹論曰聽ニ黄鐘之音ニ知ニ擊缶之細ニ矣　風俗通義曰缶瓦器所ニ以盛ニ酒漿ニ秦人鼓レ之以節レ歌也矣　事物紀原曰唐大中初年郭道源善是以レ筋擊レ之矣　詩大全孔氏曰易離卦云ニ鼓レ缶而歌ニ是樂器坎卦云ニ樽酒簋貳用レ缶又是酒器左傳

襄公九年宋災具ニ綆缶ニ則又是汲器然則缶可レ節レ樂若ニ今擊甌ニ又可ニ盛レ水盛レ酒即今瓦盆也矣

韓神催馬樂　韓神とは神樂歌の部の採物歌十首の内に韓神と云あり其歌に一みしまゆふかたにとりかけわらからかみのからをきせんやからをき

木やひらてを手にとりもちてわれからかみのからをきせんやからをき此歌をうたひまふ也韓神とは元禁中の宮内省に祭る神社の名也　延喜式云園韓神宮内省居園神一座韓神二座矣梁塵愚案抄云からかみは宮内省にましま す韓神二座を申侍るにやと云々神樂歌は庭燎の歌一首採物歌十首大前張七首小前張十一首星歌三首雜歌七首都て是を神樂歌と云也愚案抄云此歌のおこりはその由緒なに事のおこりといふ事をしらずと云々　催馬樂は律歌二十五首呂歌三十六首都て此惣名を催馬樂と云也　愚案抄云催馬樂はむかし諸國より御調物を大藏省へおさめし時民の口ずさびにうたひける歌なれば催馬樂と名付る也馬をもよほすとかけるは御調物おほする馬をかりもよほす心也云々　愚案抄奥書云催馬樂の譜は一條左大臣の時にしたゝめて律呂の歌を定められたりと云々　或云此歌ちり／＼にありしを後鳥羽院集て梁塵秘抄と名づけ給ふなりそれに一條禪閤の抄をし給ひて愚案抄と名付給ふ也云々　私云催馬樂は惣名也韓神は神樂採物十首の内也然るを此謠に韓神催馬樂とつゞけたるはいぶかし但し神樂催馬樂と云へきをあやまりたる歟

笏拍子　於二庭上一立樂之時打レ之或は三席御遊御舟樂の時にある事といへり花鳥餘情云臨時客には樂器を用す郢曲の人も笏拍子にてうたふ也と云々私云惣て舞曲に樂器なき時笏拍子を用ゆると見えたり古事談云後一條院御時清暑堂の御神樂に公任卿可レ取二拍子一にて有けるに臨レ時濟信卿の上に被レ座たりけるに笏を少し遣て氣色計讓る由をせられけるに頓而笏を取て被レ取二拍子一公任あえなく恐れて始終聞之失なく事畢て後いつより此事は御沙汰候哉と問ければ是迄は公事なれば習ひて候也と被レ答云々　笏は廣韻曰一名手板品官所レ執天子以レ玉諸侯以レ象太夫魚鬚又竹士木也矣　釋名曰笏忽也有レ事記二其上一以備二忽忘一也矣　周禮曰諸侯象大夫魚鬚士以レ竹晉宋以來謂二之手板一西魏以後五品以上通用二象牙一矣　徐廣曰長　尺二寸濶三寸厚五分矣覽初要集云元正天皇養老三年職事主典已上把レ笏其五位已上牙笏六位已上木笏大同四年五位已上通用二白木笏一矣

庭燎のかけや　庭燎とは神樂部の第一の歌を庭火と云其歌に「見山には霰ふるらし外山なる柾木のかつら色付にけり」此歌を庭火の曲と名づけてうたひ侍る也（逹塵秘抄）庭燎者　神代卷云天照太神入二天石窟一八十萬神於二岩戸前一覆二誓槽一擧二庭燎一作二俳優一相與歌舞（文略）今諸社におゐて庭火をたくは是より始る也　詩經庭燎篇曰夜如何其夜未レ央庭燎之光註孔氏曰庭燎者樹二之于庭一燎之光明可烜供レ之樹二于門外一曰二大燭一門內曰二庭燎一矣

星霜つもる遊行柳あけの玉垣は小忌の袖老の波は高砂に注す

七德双調七拍子　案ずるに今此所七社の御前にて舞樂を奏する故に七社に對して七德双調七柏子とはつゞけたり　體源抄云秦王破陣樂中曲新樂乞食調曲一名神功破陣樂齊五破陣樂又曰二七德一舞有二七帖一柏子各廿擬二七德意一裝束如二毘沙門一云々七德者左傳云夫武禁レ暴戢レ兵保レ大定レ功安レ民和レ衆豐レ財言武力有二七德一唐太宗皇帝誅二隋代暴逆一致二天下泰平一故歌二舞其武力功一（已上體源抄）　白氏文集曰武德中天子始作二秦王破陣樂一以歌二太宗之功業一貞觀初太宗重制二破陣樂舞圖一詔二魏徵虞世南等一爲二之歌詞一名二七德舞一自二龍朔一已後詔二郊廟一享宴皆先奏レ之矣通鑑註曰太宗爲二秦王一時破二劉武周一軍中相與作二秦王破陣樂曲一及二即位一宴會必奏レ之以二百二十八人一被二銀甲一執レ戟而舞凡三變每レ變爲二四陣一象二擊刺往來一後更名二七德舞一矣　雙調は拾芥抄云双調呂木音四月調子矣　體源抄云双調と云事上無調を父とし下無調を母として生たる音なる故に双べ調と云也云々　觀世極意抄云双調は目出度調子也春三月の調子に定む方角に取時は東也木性と定む五臟に取時は肝の臟也其色青き也云々世阿彌集云移徙の調子双調也昔は盤渉を用ゆ盤渉は水性なれば火難を退くる故也今双調に定る事双調は木性也春の調子にして目出度調子なれば也云々　七柏子は觀世極意抄云早し輕しうはかふき中おそしえたるしえづか是を七柏子と云也云々　私云拾芥抄及體源抄に秦王破陣樂は乞食調の樂と有然るを爰に七德双調と續くる事不審追て可レ尋

膝を屈して佛をうやまひ　大論曰禮有二三品一一口但稱二南無一是下品禮二屈レ膝著レ地頭頂不レ著レ地

是中品禮三五輪著レ地是上品禮矣
千秋樂萬歲樂　高砂に注す
法の莚を敷妙の枕は袂　法の莚とは法をきく座席を云也一云莚にはのふるといへる縁有法をのふると云諷詩にて法の莚といふと云々　性靈集曰敬爲ニ凶息周忌一聊設ニ法莚一禮ニ一百三尊一矣　敷妙の枕は關時小町に注す　千更にまた花をふり敷鷲の山法の莚の暮かたの空俊成
一味の雨は定家百八煩惱は三井寺に記す

邯鄲

大唐開元七年呂翁と云者あり仙術を得たり邯鄲の道中に行て邸舍に息で嚢に隱て座す于レ時少年盧生と云者短褐の賤を衣て靑駒に乘て同じく此所に來て呂翁と共に物語す于レ時盧生我衣の敝て哀れなる樣を嘆云大丈夫生レ世不レ諧困如レ是也呂翁云其困窮を歎事何ぞや盧生云吾常に學に志す自惟我用られて宮職にも進べしと今已に壯を過て猶畎畝につとむ困に非して何言訖て盧生目瞽してねぶたき事を覺ゆ其時主は黍を蒸せり呂翁乃嚢の中より枕を出して盧生に授云子此枕をして眠らは萬志の如くならんと其枕靑磁にして兩の端に竅あり盧生首を俛て是に就其竅を見れば大に明也乃身を竅の中に入と忽吾家に歸る數月有て清河の崔氏の女を娶明年進士に擧られて登第す渭南の尉となる俄に監察御史に遷起居舍人知制誥に轉ず三年して同州を典どり陝牧に遷河南道の採訪使を領じ徵て京兆尹となる又戎狄起る御史中丞河南道の節度に除せらる大きに戎虜を破て功あり吏部侍郞に轉じ戸部尙書御史大夫に遷故ありて端州の刺史に貶たり三年にして徵て常侍となる又程なく中書門下平章事となる讒言せられて官を止られ驩州に流れ數年してゆるされて復進て中書令となる燕國公に封せらる此時子五人孫十餘人あり盧生年八十にして病で命終ㇳ覺て欠し伸して夢覺たり其身其儘邸舍にあり呂翁も其傍に座す主の蒸る黍いまだ熟せざる間なり盧生乃夢の事を呂翁に語て後互に去是を盧生が一炊の夢と云也　沈旣濟枕中記異聞錄大平廣記に見えたり
浮世の旅にまよひきて夢路をいつと定めん　世を

夢と觀じ出離生死の道をもとめんとなり〔後撰〕あかす
して枕の上に別にし夢ちをまたも尋ねてし哉
是は蜀の國の傍に盧生といへる者なり　盧生は枕
中記云少年盧生矣　蜀國は大明一統志六十七卷云
四川成都府古爲二蜀國一秦置二蜀郡一漢分置二廣漢郡一
云々唐改爲二益州一云々天寶初改爲二蜀郡一矣
怳然　盛久に注す
まことや楚國の羊飛山に貴き知識のまします由
大明一統志七十卷云四川夔州府羊飛山在二萬縣西南
五十里一相傳昔有レ人學二道于此一常養二一羊一忽一日
乘二童子一云勿レ放レ羊童子放レ之一羊冲レ天而去因名
矣　夔州府は戰國の時楚の地也楚國は芭蕉に記す
知識は摩訶般若經曰能說二空無相無作無生無滅法
及一切種智一令三人心入二歡喜信樂一是名二善知識一矣
私云枕中記に盧生が相手は呂翁也然るを此謠には
貴き知識と計いひて其名をさゝず　一統志四云呂
僊祠在二邯鄲縣北二十里一矣
身の一大事をも尋ねばやと思ひ　一大事とは法華
方便品曰唯以二一大事因緣一故出二現於世一矣　天台
大師釋云一中諦大空諦事假諦矣　又云一即法身大

即般若事即解脫此三法衆生本具爲レ因諸佛顯レ示爲
緣出世元意秖爲レ此矣
山又やまを越ゆけば　舟橋に注す
野くれ山くれ里暮て　東關海道記云十日豐河を立
て野くれ里くれはるばる過れば峰野の原と云所有
云々野くれ山暮などいふは旅行のいそぐ體也又
伊豆國所の名に野くれ山くれと云あり太平記十四
卷云伊豆の府を打立て今夜野七里山七里を越ると
聞えしかば 上下略 ○いつくにかありとしきかはな（うない松）
き人を野くれ山くれ行て尋ねん
名にのみ聞し邯鄲の里にも早く着にけり　史記正
義曰邯鄲洛洲縣也謂趙都也矣　前地理志曰張晏云
邯鄲山在東城下二今屬二磁州一洛州肥鄉縣本邯鄲縣
地有二邯溝一矣　一統志曰邯鄲縣在二廣平府城西南
五十五里一本戰國時趙都秦置二邯鄲郡一漢廢レ郡爲
縣屬二趙國一曹魏屬二廣平國一、下略
借は是成は聞及にし邯鄲の枕なるかや　枕中記
に其枕青磁而兩の端に竅あり呂翁嚢の中より出し
て盧生に授くと有
一村雨のあま宿り千壽に注す勅使は吳服に注す

光りかゞやく玉の輿　玉は美稱の詞なり　說文曰輿車底也矣　周禮曰輿人爲レ車車以レ輿爲レ主矣　詩詁曰輿軵軸之上加レ板以載レ物矣　今案天子皇后の乘所の車を輦と云也輿は車の輿也有レ輪車といひ無レ輪輿と云也

槿花の花も一時　白氏文集に槿花一日自爲レ榮と云詩をふくませたり

雲龍閣　天皷に出たり

阿房殿　史記曰始皇以二先王宮廷小一乃營二朝宮渭南上林苑中一先作二前殿阿房一東西五百步南北五十丈上可三以坐二万人一下可三以建二五丈旗一周馳爲二閣道一自二殿下一直抵二南山一表二南山顛一以爲レ闕爲二複道一自二阿房一渡レ渭屬二之咸陽一以象三天極閣道絕レ漢抵二營室一也離宮三百帷帳鐘鼓美人充レ之矣　括地志曰秦阿房宮亦曰二阿城一在二雍州長安縣西北一十四里一顏師古云阿近也以下其去二咸陽一近上且號二阿房一矣前漢賈山傳曰阿房之殿阿房者殿之四阿者爲レ房也矣

庭には金銀の砂をしき　帝釋の所住喜見城の有樣かくのごとし又彌陀經曰黃金爲レ地矣

四方の門邊の玉の戸を出入人迄も　○（萬）我宿は菊賣市にあらね共四方の門邊に人さわく也

誠や名に聞し寂光の都喜見城の　盧生が夢中の觀樂は寂光の都及喜見城の樂に等しと也　寂光の都は名義集云常寂光即妙覺所居上下略　觀普賢菩薩行法經曰時空中聲即說二是語一釋迦牟尼佛名二毘盧遮那遍一切處一其佛住處名二常寂光一矣四敎義云破二一品微細無明一入二妙覺位一永別二無明父母一究竟登二涅槃山頂一諸法不レ生般若不レ生不生名二大涅槃一以二虛空一爲レ座成二淸淨法身一居二常寂光土一即圓敎佛相也矣　觀經疏曰常即法身寂即解脫光即般若此以二不遷不變一名レ常離レ有離レ無名レ寂照レ俗照レ眞名レ光矣　喜見城は佛祖歷代通載曰妙高山頂上三十三天中央城曰二善見一純金所成矣　三界義曰忉利天者亦名二三十三天一住二蘇迷盧山頂一山頂有レ宮名二善見城一亦名二喜見城一有二千門一中有二金城一高一由旬半用二百一寶一嚴錺是天帝釋所住也矣

千貨萬貨の御寶の數をつらねてさゝけ物　說文曰貨財也矣　鄭康成曰金玉曰レ貨布帛曰レ賄錢穀曰レ財矣　唐劉晏曰爲二轉運使一能權二萬貨一使二天下

無ニ甚貴賤一矣
千戸萬戸の旗のあし　說文曰戸護也半門曰レ戸象形又外曰レ門內曰レ戸矣　韻會曰民居曰レ戸矣　史記趙世家曰以ニ萬戸都三一封ニ太守一千戸都三封ニ縣令一矣
天にも色めき地にひゞく雷の聲もおびたゞし　天に色めきとは上の旗のあしの色めくをいへり地にひゞく雷とは雷にあらず是は籟也地籟をいへり　莊子齊物云汝聞ニ人籟一而未レ聞ニ地籟一汝聞ニ地籟一而未レ聞ニ天籟一人籟則比竹是巳地籟則衆竅是巳天籟則人心之自動是巳矣　杜詩注云笙竽爲ニ人籟一水聲爲ニ地籟一風聲爲ニ天籟一　河圖曰風吹レ物有レ聲曰レ籟矣　張景陽七命曰百籟群鳴嚶ニ其山一劉良注曰百籟謂ニ林木孔穴激レ風成レ聲矣
東に三十餘丈に白銀山をつかせては金の日輪を出されたり西に三十餘丈に金の山をつかせてはしろかねの月輪を出されたり　是等謠の作文成べし　一統志五十六曰江西吉安府龍泉縣西有ニ金山一有ニ銀山一二山爲ニ龍之雙角一文略
長生殿の裏には春秋を留たり　養老に注す

そも天の漿とはこれは仙家の酒の名なり　漿はつくりみづと訓ず　陳嘉謨本草曰漿酢也炊ニ粟米一熱投ニ冷水中一浸五六日味酢生ニ白花一色類レ漿故名矣　韓退之句曰舉レ瓢酌ニ天漿一矣　觀無量壽經曰瓔珞中盛ニ蒲桃漿一蜜以上レ王矣
沆瀣の盃と申事は同じく仙家の盃なり　說文曰沆瀣氣也　韻會曰海氣也一曰沆瀣北方露氣也矣　王逸楚辭六氣註曰冬食ニ沆瀣一北方夜半氣矣　文選相如大人賦曰呼ニ吸沆瀣一兮飡ニ朝霞一矣　文集曰一盃沆瀣矣　私云此唄に沆瀣は仙家の盃と云事未レ考
菊の酒　紅葉狩に注す
猶よろこびはまさり草の　まさり草は菊の異名也
藏玉〇すへらきの萬代迄にまさり草たましいたねを植しきく也
流れは菊水のりうにひかれてとく過れは手先さへきる　菊水の流れを曲水の宴にいひかけたり曲水は三月三日也養老に注す
菊衣の花の袂をひるかへして　禁裏政要云菊衣十月十一日晴着ニ用之一菊色々在ニ人情一矣　衣色目云菊衣はおもて白く裏紫也九月に着レ之其外くれな

ゐに菊うつろひ草黄菊つぼみきく色々あり云々
我宿の菊の白露けふ毎に幾世つもりてふちと成らん
拾遺集秋之部元輔歌也　詞書云三條のきさいの宮の裳ぎ侍る屏風に九月九日の所と云々　奥義抄云仙宮の菊の露つもりて淵となる事のある也云々
呑は甘露もかくやらんと　博物志曰甘露天酒也其凝如脂其甘如飴矣　維摩經註什曰諸天以ニ種々妙藥ー著ニ海中ー以ニ寳山ー摩レ之令レ成ニ甘露ー食レ之得ニ仙名ニ不死藥ー矣　光明文句曰甘露是諸天不死之神藥食者命長身安力大體光矣　華嚴搜玄記曰甘露有ニ四義ー一除レ渇如レ水二潰レ飢如レ食三療レ病如レ藥四生レ樂如レ蜜矣　日本にて天より甘露の降事　類聚國史百六十五卷祥瑞部に見えたり
有明　高砂に注す
月人男　匠材集云月の名也桂男也云々　姫娥男書月讀男月弓男左佐良挍壯子桂男いづれも古歌によめり皆月の異名也○秋風の清き夕に天川舟こき渡る月人男
女御更衣の聲と聞しは松風の音となり　女御は周禮天官曰女御者御妻也掌レ叙ニ御于王之燕寢ー註曰女御則八十一御妻也御猶レ進也侍也矣　日本の女御は殊之外賞翫す后次にする也いかなる親王攝家の女もすぐに后になり給ふ事はなし先女御入内とて參り給ふ也　扨可レ然人はやがて后に立也是を中宮と云又其外女御にて有べき品の人も第一の皇子など生れ給ひて若春宮などに立給へはいかやうの人の女も后に立也漢朝とは聊相違也已上岷江入楚　日本紀曰雄略天皇七年求ニ雅媛吉備上道女ー爲ニ女御ー是始也矣　呼花云女御は無位以上二位三位に至迄有由也云々　更衣は呼花云更衣は女官之名也矣　凡更衣は天子御衣を召かへらるゝ役也漢朝にては漢武帝始て是を置史記及漢書に見えたり河海抄云仁明天皇承和三年正五位上紀朝臣乙魚女授ニ從四位下ー柏原天皇更衣也是始也矣　清涼殿記云更衣其員十二人以下不レ備ニ其數ー尙侍宣ニ下諸司ー若ニ禁色ー矣　此意は其數十二人とあれ共必其數ほどなけれ共苦しからずと也女官もその役々のさたまりたるは數がたらで不レ叶更衣はさやうの官にてはなき也內侍のかみの諸司に宣下して更衣に禁色をゆるさるゝ也是を內侍宣下と云也已上岷江入楚

榮花の程は五十年扨夢の間は粟飯の一炊の間なり　異聞錄曰主人方炊ニ黃粱一爲レ饌矣　枕中記には黍と有炊の字はかしぐと訓ず　周書曰黃帝炊レ穀爲レ飯矣　又炊字作レ爨也　說文曰爨齊謂ニ之炊一爨字曰象レ執レ甑門爲ニ竈口一廾推レ林内レ火　徐曰取ニ其進レ火謂ニ之爨一取ニ其氣上一謂ニ之炊一矣○枕かる五十の夢の春秋も粟飯かしく程とこそきけ　澤庵

熟人間の有樣を案ずるに百年の歡樂も命終れは夢ぞかし　樂天詩云百年富貴夢事一旦榮華風前塵矣　止觀曰如下夢見ニ七寶一親屬歡樂覺已追念不上レ知レ在ニ何處一矣　熟の字は安宅に注す

南無三寶々々々々よく〳〵思へば　鵝鷺記云南無三寶々々々々骨をもおらで能をする物は念佛なり　上下略　南無は實盛に注す三寶は自然居士及放下僧に注す

夢の世ぞとさとりえて望みかなへて歸りけり　新後撰○覺やらぬ浮世の外の悟りぞと見しはきのふの夢にそ有ける　私云盧生邯鄲の枕によりて五十年の夢さめさとりを開くと云事枕中記太平廣記等に是なし此等は謠の作者の文なるべし二人比丘尼云傳へ聞かんたんの枕の夢は五十年の榮花をきはめ只夢の世の樂のあたなる事をさとりえて望をかなへ侍るとかや云々　曉筆抄云彼楚國の盧生は邯鄲の里に至り一夢によりて無常をさとりしには枕をこそ善知識とはおほせけめと云々

安宅

盛長私記文治三年二月十日前伊豫守義顯度々の追討使の害を遁れ頃日叡山に隱れ居て遂に伊勢美濃を經て奧州に趣く相從郎從悉く山臥の姿を假并叡山の惡僧俊章承意仲敎三人を先達として都合三十餘人漸く加賀國に至る爰に加州の住人富樫介は義顯山臥の姿を借て奧州へ下向の由を聞て安宅の邊に新關を搆へ往還の旅人を改む就レ中山臥に於ては抑留して僉議す近邊より修驗道を能心得たる山臥五三人を召寄置て問答をさせ分明ならざる山臥をば搦捕て獄舍に入置無智の山臥此災難に逢て籠舍する者六七人に及べり于レ時各々關所に至る關守見て此山臥は義經なるぞと騷動す先達俊章云

是は東大寺造立に依て俊乘坊より諸國へ勸進す巡行の山臥都合二百餘人也是は北陸道より出羽奥州へ勸進する山臥也と云富樫介云やう面々は定て實の山臥にて候らん夫山臥の法をも承て後兎も角も計候べしとて彼呼寄置たる山臥と問答させけるに俊章仲敎承意は叡山の學匠武藏坊も西塔に居住して多年の學者也何の夷中山臥の尋るを答へざるべき結句彼山臥に返て不審を尋けるに答る事更になし各大きに怒て往還の山臥に非茂を申掛け多人を惱事是に增たる國賊なしとて件の山臥を引出し山臥の法に行はんとひしめきける富樫介大きに驚き樣々に佗言し慥に豫州也とは思へ共何共して此關所を通さんと思ひ俊章に向て各は東大寺勸進の爲に諸國を巡るの由承はる若勸進帳あらば聽聞仕富樫が如きも奉加仕らんと申ける俊章則笈の中より天台止觀を一卷取出して勸進帳と稱し高聲に讀上敬白し笈に入たり其文章詞華を飾り其正理詳也是頗凡人の及所に非ず富樫介は究竟の事と思たる氣色にて此上は紛なき山臥也とて悉く通しけり剩樣々の奉加しけり卅餘人の者共危き命を助りて件關所を通れけり富樫介も勸進帳にあらざる事は慥に知けれ共命危く思ひて勸進帳に事よせて無義に關所を通しけり（已上文略）　辨慶狀云雖ニ天高一跼雖ニ地厚一不ニ蒞踏一漸忍通之處折節被レ弃（アヤシメ）ニ關守富樫ニ而叩ニ辨舌ニ敵陳而採ニ當廻文笈ニ少不レ騷捧レ逝遂ニ披露ニ遁ニ鰐口ニ下ニ著當國ニ天命期レ今（上下略）　此謠に阿吽の二字と云語又兄弟不和の事又言語道斷の詞或は金脇兩部の詞など皆彼辨慶狀に出たり此謠は辨慶狀を以て作る成べし安宅の關の事は義經記にも見えたり平家物語盛衰記東鑑等には是なし

ケ樣に候者は加賀國富樫の何某にて候　異本義經記云加賀國富樫介家直が關所（下略）大系圖云富樫介家直二郎家經子也云々盛衰記云利仁將軍三人の男を生嫡男在ニ越前ニ云ニ齋藤一次男在ニ加賀一云ニ富樫一三男在ニ越中ニ云ニ非口ニ云々　此富樫介家直も此末葉たり富樫は所の名也加州石川郡にあり　盛長私記云加州住人富樫介は以前木曾義仲に相屬して上洛しけるが京都の軍に打負て義仲討れ給ひし後本國に逃皈り樣々歎き申御免を蒙り鎌倉殿の御家人に列しけれ共未本領安堵には不レ及僅に懸命の

地を賜て加州に居住す鎌倉殿より別て仰は蒙らざれ共今度豫州を搦捕は忠賞として本領安堵相違有べからじとて一族郎等も皆此義に同意して安宅の邊に新關を搆へけり文略加賀國は佛原に注す

扨も頼朝義經御中不和にならせ給ふにより　兄弟不和の事は舟辨慶に注す　左傳曰兄弟雖レ有二小忿一不レ廢二懿親一矣　無住云父子兄弟等の不和なる時は天神地祇も人を助け守り給はず必飢饉疾疫兵亂等の災難しば／＼來る者也云々　仁王經曰六親不和天神不レ祐矣頼朝は舟辨慶義經は屋島に注す

判官殿十二人の作り山臥と成て奥へ御下の由　奥とは奥州也義經記に主從十六七人と有盛長私記に都合卅餘人と有又異本に主八十二人又山門の僧北の方と共に都合十六人と有　一本云常陸坊海存をばこ先達として筑前房長寛とぞ申ける辨慶を荒讃岐坊と申へし判官殿も自大和房勝運と付給ふ片岡は京の君伊勢三郎をばせんじの君熊井太郎は治部の君とぞ申ける其外上野坊上總坊大正坊仙覺房など樣々に假名を付にけると云々　判官は屋島山伏は葛城に記す

旅の衣は篠掛の露けき袖やしぼるらん　篠懸は大峰は深山なれば露深きによりそれを拂はんための上着也と云々葛城に注す○家み吉野の苔路をつたふ山伏の篠掛衣露にぬれつゝ衣笠内大臣

某の字義は鈴木越路は山姑に注す

鴻門楯破れ　高祖項羽と參會の時項莊と云者劒を拔て舞便よくは高祖を誅して項羽の天下になさんとせしを樊噲此事を聞て鴻門を破て押入し也委く史記列傳三十五に出たり鴻門は高帝紀註孟康曰在二新豐東十七里一舊大道北下坂口名也　私云爰に此詞を出せるは義經武功ある身なれ共其甲斐なく終に北國に落下るひとへに鴻門のたてやぶれたるに等しと云義なるべし

伊勢三郎駿河次郎片岡增尾常陸房辨慶は　伊勢三郎は異本義經記云義盛は伊勢國河島次郎俊盛が子三郎武盛と號す後義經の家人と成て義盛と改む文略長門本平家物語云伊勢三郎義盛は日光そだちの兒けれは云々　盛衰記云義盛は義經都をなり落けるとき思ふ樣有とて暇を乞て故郷伊勢國に下り其時の守護人首藤四郎を伺ひ討國中の武士追かゝりけ

れば義盛鈴鹿山に逃籠て戰ひけれ共大勢なれば終に自害すと云々　駿河次郎は異本義經記云駿河次郎淸重事義經駿河國浮島が原を通り給ひし時獵人有て行逢終道物語する如何成者ぞと名を尋給ふ時に駿河國竹下二郎淸重と答ふ其時見參して義經に奉仕す云々片岡は號二八郎弘常一片岡次郎經春弟也經春は賴朝の郎從也弘常は義經の手の郎從也盛衰記には八郎爲春と有　増尾は號二十郎權頭兼房一二人靜に注す　常陸房は異本義經記云常陸房海尊事園城寺の出家刑部卿禪師といへり强力者ゆへ荒刑部と云ける義經法眼が許に在時も志を通じ崇敬けると也平家追討の時義經に屬し常陸房海尊と名乘云々辨慶は舟辨慶に注す

時しも頃は二月の十日の夜月の都を立出て　二月十日は盛長私記及義經記等如レ斯平家物語には文治元年十一月六日の夜都を出て北國へ落給ふと有東鑑同レ之三月は雲林院に注す月の都とは稱美の詞也

是や此行も歸るも別れては知もしらぬも相坂の
　此歌蟬丸に注す

山かくす霞ぞ春はうらめしき　下句いづれ都の境なるらん　古今集羇旅部におと歌也詞書云あづまのかたより京へまうでくとて道にてよめる云々榮雅抄云立別れつる名殘のおしさに今は引かへて都のさかひいづくと見るに霞の山をかくすかうらめしきと也云々

海津の浦に着にけり　北近江也甲斐津共書　○有夫乳山雪氣の空に成ぬれは海津の里に霰降つゝ

東雲早く明行ば　篠目共書万葉に小竹之眼同細竹目書夜の明かたを云也曉篠の葉のほそき筋のはじめて見ゆる時をいふ也○玉葉しのゝめに起て別し人よりは久敷とまる竹の葉の露

淺茅色つく有乳山　荒血山は近江越前の境也甲賀郡也海津より敦賀へ越る七里半の山中にあり阿羅千山共書又嵐山共云也○新古矢田の野に淺茅色つく有乳山峰の淡雪寒くぞ有らし人丸　後水尾院詠歌大概抄云此歌の注に云矢田野あらち山は兩所共に越前の名所也やたの野を通りてあらち山へゆく旅行の躰也あらち山は高山にて秋より雪のふる所也云々

氣飯の海宮居久しき神垣や　此浦の惣名を氣比の海と云　此宮居は敦賀津にありて西南に小川流れ

て宮作は南にむかひ鳥井は西にあり地方百間餘あり　諸社根元記云延喜神祇式云越前國敦賀氣比神社七座氣比神社者宇佐同體也仲哀天皇與ニ行宮一謂ニ笥飯宮一矣　神名帳頭註云風土記云氣比神宮者宇佐同體也八幡者應神天皇之垂跡氣比明神仲哀天皇之鎭座也矣　日本紀云仲哀天皇二年二月癸未朔幸ニ角鹿一即興ニ行宮一而居レ之是謂ニ笥飯宮一矣○けいの海よそにはあらし芦の葉に亂れて見ゆる蜑の釣舟（夫）

松の木の芽山　越前木芽峠を云也盛衰記に木邊坰ト書新保より木芽峠まで三十五町有敦賀の內也

猶行さきに見えたるは杣山人の板取　杣人は木を切板に引ゆへにかくつゞけたり板取も杣山も越前なり板取は近江越前の境也中河內より板取の宿迄三里あり本海道也盛衰記に虎杖と書杣山は湯尾と淺水の間右の方に見えたり義貞北國軍の時瓜生判官保が籠し城有し所也但し板取は杣山より三里下也

河瀨の水の淺洲津や（夫）　越前也在ニ府中福井之間一淺生水淺水共書○誰そこのね覺て聞は淺生水の黑戸の橋を踏とゞろかす

末は三國の湊なる　同國坂井郡也海道より一里半西の海ばた也

あしの篠原波かけて　加州江沼郡篠原は安宅の浦と立花の間也篠原は里也又近江常陸に同名有○世中は浮ふししけし篠原や旗にしあれは妹夢に見ゆ（新古）

なびく嵐のはげしきは花のあたかに着にけり　嵐は花の讎といひかけたり安宅は加州石川郡也篠原より三里北也一說に家直が新關はあたかに非ず月津のあなた柏野と松任の間にありしといへり

言語道斷　惣て善惡共に詞も斷ていはん方もなき事を云也　天台大師釋ニ妙法一云言語道斷心行所滅矣　維摩九阿閦佛品曰不來不去不出不入一切言語道斷矣

一大事　邯鄲に注す

唯何共して無爲の義が然るべからふずると存候

只何となく關をおとをりあれと云心也　莊子曰虛靜活談寂寞無爲矣　論語衛靈公篇曰無爲而治者其舜也矣

あの强力が負たる笈をそと御肩におかれ　强力は

山伏の下部也笈をかくる役也　說文曰笈本作レ极矣韻會曰徐曰极之言𢓭也今作二笈板一即笈字古人多言二負笈一謂二自負一レ之也矣　史記蘇秦傳云負レ笈從レ師矣　風土記云笈學士所二以負一レ書矣　案高野山行人泒笈の形右に等し但修驗行者笈を負て山にのぼる是を山伏の笈と云高野の笈とは形狀異也　修驗抄云夫修驗所具笈者形𠀋字也從二胎藏八葉之中臺一出二六趣迷倫之穢土一飯二入眞如寂光之眞理一義相也口傳曰笈像二悲母之體內相一是有二皮肉骨一以レ皮裹レ之皮中殺味肉也笈板背也上縚(カラム)二八角一母胎八分肉團自性本分八葉也笈板長一尺八寸十八界橫一尺二寸十二因緣厚九寸九界兩足各一尺十界也文略

冥加もなき事にてはなきか　冥加なる事とか冥加に叶ふとか云べし冥加は神明の加護を云也或は冥慮冥感と云に等し神代口决云天照太神託宣曰冥於加留仁正仁直(冬留於以天本登壽)云々孝衡曰加護有二二種一一顯加謂現二身語一讃二印其所作一二冥加謂潛垂二覆攝一不レ現二身語一矣

實や紅は園生に植てもかくれなし　それ〳〵の人の品を見て名をとはね共しれるとのたとへ也くれないはべにの花也　孔子家語曰何獨丘哉且芝蘭生二於幽林一不下以二無人一而不上レ芳矣〇深山木のその梢共見えざりし櫻は花にあらはれにけり　賴政

麻の衣を御身にまとひ　蠶の口より出たる糸にて織たるは殺生戒を嫌ふ事あれば麻にてやすらかにこしらへたる三衣を云也　僧靈徹詩云年老心閑無二外事一麻衣草座亦容レ身矣

笈の上には雨皮形箱とり付て　雨皮は油紙にして縱橫共に厚紙四枚つぎ合せたる雨防也海人藻芥云雨皮は生絹を淺黃に染用レ之云々私云是は修驗道の雨皮とは別なる歟形箱は即二笈肩一故名二肩箱一修驗抄云修驗所具形箱者其形[梵字]字也從二金剛界九會曼荼羅一出二生萬法一如實歟一義相也云々先達秘口云形箱者虛心合掌形定惠和合姿也虛心合掌者十界不二染淨一如之內證也以レ之顯二即身成佛實儀一荷二此箱一入峰修行者同二金胎兩部秘密灌頂三世諸佛万行一是則眞言秘兩行者心藏也箱長一尺八寸十八界橫六寸六大高五寸五智上縚二蓮葉一蓮花合掌形也白色綱自性不染蓮糸也金剛界者智曼荼羅故中納二聖教一一々表義大綱如レ此文略

あや菅笠にて顔をかくし　菅の笠に非ず修驗抄に班蓋と書てあやいがさとよめり又檜笠を用ゆ　增鏡云賓朝も山伏の眞似して柹の衣にあやは笠と云物着てと云々　修驗抄云修驗所具班蓋者佛界薩埵天蓋慈悲覆護形相也凡天蓋者一切衆生住悲母胎內載袍衣義表也其形圓形者表五位圓滿之相圓形金界月輪也白綾裹之八葉胎藏也云々　檜笠者天蓋也雖班蓋可用之文略

金剛杖にすがり　修驗抄云就修驗所持杖有三種差別一者金剛杖二者檜杖三者檐木云々　金剛杖者此三杵之中獨古杵也獨古即護佛法要樞破魔軍智劍也高祖役行者入胎時母儀夢自虛下獨古入我口經七箇月誕生依之獨古山伏三形也云々口傳云金剛杖者役優婆塞三形金胎不二塔婆也上劍頭金剛界智下方胎藏[illegible]字地大也四方四面顯發心修行菩提涅槃四德方各一寸五分合而六寸也表地水火風空識六大長同行者之身量云々檜杖者先達所持智杖也其形圓形表一利圓滿之義檜者火也火者智也智能摧破煩惱是故號檜杖云々檐木者初入新客杖也凡初度入峰行義者每朝結三荷之閼伽水每日運三荷小木故謂檐木矣

是は南都東大寺建立の爲に　東大寺は續日本紀に金光明四天王護國寺トモ國分寺トモ號す傳通記には大華嚴寺トモ恒說華嚴寺トモ城大寺トモ云也　拾芥抄云東大寺聖武天皇神龜五年始而造之矣　帝王編年記云天平十五年癸未天皇立願曰我欲鑄金銅盧舍那佛諸智識等可同心之由被宣下十月十五日於近江國滋賀京始鑄之不成給同十七年乙酉八月廿三日於大和國添上郡始鑄之三箇年間奉鑄八箇度成畢高五丈三尺五寸熟銅七十三萬九千五百六十斤白鑞一萬二千六百三十八斤錬金一萬四百三十六兩水金五萬八千六百二十兩炭一萬八千百五十六石矣　又云天平勝寳四年四月乙酉東大寺大佛開眼有行幸請一萬口僧同年東大寺供養矣

私云八十代高倉院治承四年十二月廿八日惟平重衡之兵火悉爲灰燼後乘坊に勅有て御建立ある也此謠に作るは此時の事也又百七代正親町院永祿十年十月十日信貴城主松永彈正兵火回祿而大佛御頭燒落有佛無殿凡百二十年于時東大寺僧龍松院發再興志願奉勅許台命勸貴賤建堂新始

貞享五年四月二日千僧供養棟上寶永二年四月十日
堂供養同六年四月八日矣
なふ〳〵は江口　容僧は舟橋南部は玉葛に注す
北陸道　若狹越前加賀能登越中越後佐渡合せて七ヶ
國を北陸道と云北方の陸に就て行國なるが故に北
陸道とは云也
奥秀衡を頼み給ひ　　秀衡は藤原秀鄕九代嫡孫出羽
押領使基衡之子鎭守府將軍從五位下任二陸奥守一累
代富家大名仁義勇者也文明四年十二月廿二日卒行
年九十二歲
夫山伏といつは役の優婆塞の行義をうけ其身は不動
明王の尊客をかたどり　　修驗抄云夫曩祖役優婆塞
者毘盧覺王變化不動明王分身假出二眞如本覺宮一
趣二大悲利生門一然則受二化用於我朝一包二利益於法
界一現二身相於俗形一被二慈於眞俗一誠是日域無双行
者靈驗無窮大士也華嚴經云從レ此東方有レ山曰二金剛
山一彼山有二菩薩一曰二法起一與二千二百人一倶而爲二說
法一云々法喜菩薩者役優婆塞密號金剛山者今葛城
是也出二月民國一號二迦葉尊者一禀二如來心印一至二震
旦一名二香積仙人一顯二生滅不二秘術一來二我朝一稱二役
優婆塞一示二十界一如密行一誠知三國一躰聖者隋機
應現行者也云々　秘記云高祖役小角者和州葛木上
郡茆原村人也父加茂役間賀介麻呂母同氏白專母
夢自二天降二金色獨古一思レ入二我口一忽懷孕人王三
十五代舒明天皇御宇聖德三年辛卯經二七箇月一十月
廿八日寅刻誕生自二七歲一始誦二慈救咒一學究二一山一
致勤二三密一行滿二六度位一十九歲時入二攝州箕面山
瀧穴一奉レ値二龍樹大士一相二承兩部大日秘密灌頂一三
十二棄レ家入二葛木山巖窟一居三十餘歲藤葛爲レ衣
松葉充レ食驅二逐鬼神一以爲二給仕一四十二代文武天皇
大寶辛寅曆六月七日乘二五色雲一入二唐朝一終無二皈
朝一于レ時年七十三已上
優婆塞は夕顔に記す不動明王は善界に注す明王の
意味は此奥に記す
頭襟といつは五智の寶冠也十二因緣のひだをすへて
戴き　　修驗抄云夫山伏者大日遍照智身即身即佛覺
體也故頭襟者五智寶冠也其形寶形也顯二五智圓滿
內證一云々秘記云頭襟者無明所生頂上襟者無明能生
妄心十二縮表衆生所具十二因緣一其色黑色表二最初
無明一無明黑闇煩惱之義也前八分着レ之示下不動頂

上八葉在二頭襟之中一上次長頭襟者是有二二種一一者螺髮形二者滿字形也螺髮形者前結レ之長五尺五智黑色法身不變色相也表二佛身相好螺髮一也是名二佛部山伏一優婆塞形山伏着レ之次滿字形者後結レ之長八尺表二不動頂上八葉一滿字者八葉也摘山伏着レ之文略又云五智寶冠者金色五角也按今直着二寶冠一惣而山伏者大日遍照覺躰也於二先達之自宿一着二寶冠一全無二相違一也文略五智五佛は阿閦寶生彌陀釋迦大日也菩提心論曰五方佛位各表二一智一東方阿閦佛由レ成二大圓鏡智一亦名二金剛智一也南方寶生佛由レ成二平等性智一亦名二灌頂智一也西方阿彌陀佛由レ成二妙觀察智一亦名二蓮華智一亦名二轉法輪智一也北方不空成就佛由レ成二成所作智一亦名二羯磨智一也中央毘盧舍那佛由レ成二法界智一爲レ本矣十二因緣は委く舊抄に出たり略レ之

九會曼荼羅の柿の鈴掛　九會者一印會理趣會降三世會降三世三昧會成身會羯磨會微細會供養會四印會是云二金剛界九會一也柿鈴掛者柿衣也鈴掛者法衣惣名也　修驗抄云柿衣者赤色無文也住二母胎八分肉團之中一姿也開悟解脫前即自性本分心蓮也實是不苦不樂無相法身極位也至二先達位一着レ之上九布金剛界九會下八布胎藏八葉也二露表二福智二胎一或白色或青色長無二定量一下略曼荼羅の意味は當麻に注す

胎藏黑色の脚半をはき　修驗抄云修驗脚半者修行堅固德用迅速不退要法也是分二二種一依二順逆二峰修行一有二金胎兩部脚半一先胎藏黑色脚半者脩脚半是也從レ因至レ果修行者レ之春峰其形四角表二大地一五大分別時地大丸字也胎字胎藏大日種子也胎藏界東方因曼荼羅故順峰修行着二此脚半一其色黑色顯二風輪一次金剛黑色脚半者劒前脚半是也從レ果向レ因修行着レ之秋峯其形劒前表二金界智斷之義一金剛界西方果曼荼羅故逆峰修行着二此脚半一已上　又有二金胎不二脚半一略レ之　金胎南部傳來之事葵上に記す

扨又八ツ目の鞋は八葉の蓮花をふまへたり　藁鞋は修驗十六道具之其一也　或云一足に乳八ツあれば八ツ目の鞋と云也云々

出入息に阿吽の二字をとなへ　阿吽の二字は一切の文字音聲の根本也阿は開聲吽は合聲也劫初に梵王の口より此二字を唱出す也大日經第三悉地出現品云以二阿字門一作二出入息一三時思惟行者爾時能持二壽命一長劫住レ世矣菩提心論云阿字者一切諸法本不

生義矣　吽字義云阿字者即是字之母一切聲之體一切實相之源凡最初開レ口之音皆有二阿聲一若離二阿聲一則無二一切言說一故爲二衆聲之母一若見二阿字一則知二諸法空無一是爲二阿字字相一矣　吽字義云吽字者一切如來誠實語所レ謂一切諸法無因無果本來淸淨圓寂義矣

即身即佛の山伏を爰にて討とめ給はん事　秘記云入峰修驗意我等色心六大即胎金兩部躰性故不レ動二行者當位一證二舍那覺體一色即五大本有胎藏理躰心即識大本有金剛智性也色心不二處衆生本有佛體也此不二位曰二即身即佛山伏一也矣　又云談二三種即身一一即身成佛始覺二即身即佛本覺三即身即身始本不二即身成佛與二即身即佛一顯敎始本偏理所談同二性佛對辨義一即身々々一義當道不共極談也實是修驗即坐正覺當位佛源底也矣

明王の照覽計かたふ熊野權現の御罸をあたらん事　異本義經記云加賀國富樫介家直が關所を通り給ふ家直が弟齋藤次郎助家其場に在て見とがめたりしを富樫大きに制して誠の客僧達にて渡り給ふものを不淨の身として近付申さん事明王の照覽計難し當には定て熊野權現の移給ふらんとて椽より降りて蹲踞頭を傾て皆々通したりと云々　明王とは不動明王也　眞俗雜記云明王者明者光明義即象智惠所謂忿怒身以二智力一摧二破煩惱業障一之主故云二明王一矣熊野權現は舟橋に注す

唵阿毘羅吽欠（ウンケン）と數珠さら〳〵とおしもめば　胎藏界の大日の眞言也唵は歸命也阿毘羅吽欠は地水火風空也安達原に注す數珠は自然居士に記す

笈の中より往來の卷物　卷取出し勸進帳と名付つゝ　義經記に辨慶勸進帳をよむと有又盛長私記に叡山の僧俊章讀レ之一と有往來の卷物とは庭訓往來尺素往來の類成べし但し盛長私記に俊章笈の中より天台止觀を一卷取出して勸進帳と稱し高聲に讀上敬白すと云々勸進帳は文選に劉越石勸進表あり是琅邪五睿に天子になり給へとすゝめし表也然れば勸進の二字はすゝめすゝむると云心也　觀無量壽經曰深信二因果一讀二誦大乘一勸二進行者一矣

それつら〳〵おもんみれば　つら〳〵は熟の字也　無量壽經曰當熟思計矣　後漢馬后傳曰計レ之熟下學集云日本世俗呼二倩字一作二熟之讀一不レ得二其意一

可レ檢レ之矣　おもんみればは思ひ見る也惟の字也
又文選に仰願伏以爲意者と書史記に怨と書
大恩教主の秋の月は涅槃の雲にかくれ　大恩教主
とは釋尊を云也釋尊は此土の衆生の爲に主と師と
親との三德ある故に大恩教主とは云也　法華信解
品云世尊大恩以二希有事一憐愍教化矣　涅槃の雲に
かくれとは釋尊入滅を云也　涅槃經曰二月十五日
臨二涅槃一時以二佛神力一出二大音聲一矣　遺教經曰
於二娑羅双樹間一將入二涅槃一矣　涅槃者　大經曰涅
言二不生一槃言二不滅一不生不滅名二大涅槃一矣　智論
曰槃名爲レ趣涅名爲レ出永出二諸趣一故名二涅槃一矣
生死長夜のなかき夢驚すべき人もなし　唯識論曰
未レ得二眞覺一恒處二夢中一故佛說爲二生死長夜一矣
續古○長き夜の夢の中にも待わひぬ覺るならひの曉の
空
聖武皇帝と名づけ奉り　帝王編年記云聖武天皇豐
櫻彦命號二奈良帝一亦稱二勝寶感神皇帝一文武天皇太
子母曰二大皇夫人藤原宮子一贈太政大臣正一位不比
等女也大寶元年辛丑誕生和銅七年甲寅六月廿八日
庚辰立爲二皇太子一年四十神龜元年甲子二月四日甲
午受禪同日即二位于太極一御年二十四御宇廿五年
自二神龜甲子一至二天平廿年戊子一都二平城宮一云々
天平勝寶八年五月二日崩御年五十六奉レ葬二大和國
添上郡佐保山陵一矣
最愛の婦人に別れ　此婦人は誰人を指て云哉聖武
の后光明皇后は大佛建立の時は御存命也又聖武の
御母を藤原夫人といへ共是にては前後の詞相違せ
り
戀慕やみがたく涕泣眼にあらく　戀慕はこひした
ふ也　韻會云戀慕也矣　增韻眷也念也通作レ孿也矣
漢外戚傳云孿々顧念矣　壽量品曰衆見二我滅度一
廣供二養舍利一咸皆懷二戀慕一矣　涕泣者說文曰涕泣
也矣　廣韻曰涕目汁也矣　詩傳曰自レ目曰レ涕矣
說文曰無聲出レ涕曰レ泣矣　涅槃經曰涕泣盈レ目矣
涙玉をつらぬく　述異記云南海中有二鮫人室一水居
如レ魚不レ廢二機織一其眼能泣則出レ珠矣　榮花物語
楚王の夢の卷云御目より水精をつらぬきたるやう
につゞきたる御泪いみじうて云々源氏總角云我泪
をば玉にぬかなん云々伊勢集○寄合てなくなる聲を糸に
して我泪をは玉にぬかなん

思ひを善途にひるがへして　愛善の思ひを善根の途にひるがへして大佛建立あると也

盧舍那佛を建立す　盧舍那佛建立供養は上に記す　賢首梵網疏曰梵本盧舍那此云二光明偏照一照有二二義一一內以二智光一照二眞法界一此約二自受用義一二外以二身光一照二應大機一此約二他受用義一矣　淨覺雜編云盧舍那實梁經翻爲二淨滿一以二諸惡都盡一故云レ淨衆德悉圓故云レ滿矣

俊乘坊重源諸國を勸進す　重源上人は左馬大夫季重孫右衛門大夫季能息男黑谷法然弟子也仁安二年入唐至二明州一見二舍利瑞光一經二三年一歸朝其後爲二東大寺再興勸進一于レ時建久六年六月六日於二東大寺一寂云々

東鑑云元曆二年乙巳三月七日東大寺修造事殊可レ抽二丹誠一之由武衛被レ遣二御書於南都衆徒中一又被レ送二奉加物於大勸進重源聖人一訖所謂八木一萬石沙金一千兩上絹一千疋矣

一紙半錢の奉財の翟は　涅槃經曰以二一紙半錢志一可レ願二德果一矣　大實積經曰一枚紙施レ人令レ書レ經福滿二三千界一矣

歸命稽首敬白　歸命は實盛に注す　釋氏要覽云稽首謂屈レ頭至レ地故也矣　又云稽謂首至レ地稽二留少時一也矣　周禮大祝辨二九拜一一曰稽首拜中最重臣拜レ君之禮矣　文粹云藤原道長供二養寺塔一願文曰啓白如レ此弟子某婦命稽首敬白上略

日高くは能登國迄さそふずると思ひつるに　さそふとは指也ゆかんと志也　司馬長卿上林賦曰李乎直指呂向註直指謂レ行也矣　今も丹波大原太神宮へ參を大原ざしといふ也　能登國舊事本紀云能等國造志賀高穴穗朝御世活目帝皇子大入來命孫彥狹島命定二賜國造一矣帝王編年記云養老二年戊午五月割二越中國一置二能登國一矣　大和本紀云能登は此國西は越前東は越中其中國にして遙の海中に指出たる國也然るに此國上下往來の船共此國を泊宿と す故に能門と云也門とは海上なる鹽合の名也然れば能門なりとて能門國と號す今は登の字を書なりと云々

いで物見せてくれんとて金剛杖をおつ取て散々に打擲す　此謠には辨慶金剛杖を取て判官殿を打擲すと作る也義經記には越後國如意の渡にて平權守強

力をあやしむ跡にさがればとて辨慶は主君を扇にてつよく打と有異本には直江にて龜井六郎聞も敢ず此長旅に所々にて渠故に咎めらるゝこそ安からね思へは〳〵腹立やと義經を提行緣より下へかはと拋散々に打擲すと有

打刀ぬきかけて　或云打刀は說多しといへ共凡一尺七八寸の身を太刀拵へにしたる物也是は首をかく時の用也當代は一尺二三寸をよしとす云々東鑑云上總五郎兵衛懷中帶二一尺餘打刀一矣　平家物語云乘圓坊慶秀衣の下に萠葱にほひの腹卷大なる打刀まへだれにさしほらし云々　壒囊抄云足もなくて大なるを野太刀といふ打刀といふ名古きものに見えす近比云出したるにや大人の短刀を長くなして野太刀と云故に昔の短刀を今打刀といふ云々

拔群は鷄倒に注す生涯は安達原に注す

夫世は末世に及といへ共日月いまだ地に落給はず　袁彥伯三國名臣序贊曰日月麗レ天瞻レ之不レ墜仁義在レ躬用レ之不レ匱矣　光明童子因緣經曰日月星辰可レ墜レ地山石從レ地可レ飛レ空海水淵深可レ令レ枯佛語決定無二虛妄一矣○さりともと作て空を賴む哉月日のいまたおちぬ世なれは　風雅

實や現在の果を見て過去未來をしると云事　天台釋曰欲レ知二過去因一見レ期二現在果一欲レ知二未來果一見レ期二現在因一矣　因果鈔曰要レ知二前世因一今世受者是要レ知二後世果一今生作者是矣

弓馬の家に生れきて　弓馬の家とは武家を云也　令義解云宿衛如レ法便レ習二弓馬一者爲レ上矣　晉紀總論曰弓馬之士驅走之人矣

かばねを西海の浪にしづめ　源平西海の軍は屋嶋に注す

有時は舟にうかび風波に身を任せ有時は山脊の馬跡も見えぬ雪の中に　風波に身を任せとは元曆二年二月十八日義經攝州渡部より舟にのり風波の難をしのぎ阿波國に着給ふ事　或は文治元年十一月大物の浦より舟にのるの時惡風俄に起て逆浪覆船之間渡海をやめ各々分散せし事此等の義を以てかくいへり　山脊の馬跡も見えぬ雪の中とは壽永三年二月七日一の谷軍の時をいへり山脊とは山のせなかとよめり義經一の谷のうしろ鐵枴峰鵯越より責落し給ふ仍て山脊とはいへり餘寒の比殊に深山な

れ雪深し馬蹄とは馬のひづめ也謡のつゞき前後相違あるといへ共此等の義に以てつゞけたり　詩人玉屑云雪晴山作見沙淺浪痕交矣

海少しある夕浪の立くる音やすまあかしのとかく三年の程もなく敵を亡しなびく世の　平家の一門悉く滅亡せし事凡三ヶ年是義經の軍功に依てなり光源氏の君すまあかしに三とせ蟄居し給へる事をも取合せいひかけたり須磨巻に心づくしの秋風に海は少遠けれど丶有依て爰に海少しあるとはつゞけたり海少しあるとは海少し遠くあると云義を略していへりすまあかしのとかくとつゞけたるはあかしの門といひかけたりととはみなと也萬葉に人丸歌にあかしのとより大和島見ゆとよめり

忠勤は田村に注す因果は舟橋に注す

思ふ事かなはねばこそ浮世なれ　是は神道三百首にある歌也下句は是神道のいのる理をしれと有

梓弓の直なる人は苦しみて　梓弓は屋島に注す

記射義曰内志正外體直而能中レ之矣○武士の神の（雪玉）力の梓弓ひかですくなる道に歸らん

讒臣はいやましに世にありて　讒臣は梶原を指て云歟いやましは彌增と書但し讒諂の二字を用ゆ共にそしるとよめり　華谷漢氏曰經營謀レ爲ニ讒諂一而已矣　荀子曰傷レ良曰レ讒矣　左傳曰靖レ譖庸レ回矣

遼遠東南の雲を起し西北のゆきしもに責られ埋る浮身を　雲東南に起て西北に行は天氣不順なるをいへる東南とは吉野落をいひ西北とは此謠にいへる北國落を云歟義經身の置所なく諸國をさまよふと云義をいはんとて東南西北とは作るなるべし

面目もなく候　前漢李陵傳曰李陵伐ニ匈奴一四面射レ矢如ニ雨下一士卒多死陵弓矢倶盡虜騎數十追レ之陵曰無ニ面目一何以報ニ天子一遂降矣　古きかな文にはめいぼくとかけり　紫式部日記云さき〴〵の行幸をなどてめいぼくありとおもひ給ひけんと云々源氏物語にもめいぼくと有

くれはとり　呉服に注す

まとゐして　岷江入楚云圓居と書居まはりたる也（占）詩團欒などと作れり云々●思ふどち圓居せる夜は唐錦たゝまくおしき物にそ有ける

曲水の手先さへきる　養老に注す

本來辨慶は三塔の遊僧　三塔は東塔西塔横川を云也盆本に注す辨慶是に住居す遊僧とは一所に足を止す遊行の僧を云也　傳大士錄曰過遊僧遇レ門乞レ食矣

まひ延年の時の和歌　或云延年の舞は惣而舞樂の時最初にある義也此舞の始は御室より起れり右は南都北嶺共に仁和寺へ年始の御禮勤しに門主御盃を被レ下其時御前にて舞けると云々其後南都北嶺大會おこなふ時は必延年の舞を奏す今は共に絶たり但し南都藥師寺に此舞を傳へ知るといへり甲斐國身延に毎年十月御影講に此まひあり

なるは瀧の水日はてる共絶ず滔たり　是は式三番の詞也滔たりとは文選呂延濟註滔々水流貌と有當世酒宴に三國一じやといふがごとくむかしは酒宴毎になるは瀧の水をうたひし也　長門本云清水寺の法師に觀音房勢至房金剛房力士房とて四人あり中略茅のはのごとく成大長刀を以て走廻て散々に打破て延暦寺の額をきりたをしてうれしやなるは瀧の水とはやして興福寺の衆徒の中に走入ぬ下略

たつか弓の心ゆるすな關守の　誓願寺に注す

虎の尾をふみ毒蛇の口を遁たる心地して　あやうき事をいへり　周易履大象履二虎尾一不レ咥レ人亨矣　心地觀經曰毒蛇口害二一身一矣　大論曰如二虎尾踏一如二毒蛇首踏一矣○草根身を捨ん浮名はたてゝいはす其尾をふむ虎の口はのかれし

陸奥國　自然居士に注す

謠曲拾葉抄卷十三

船辨慶

義經西海におゐて平家を滅亡し宗盛父子を生捕鎌倉に下向す義經既に自立の心有と腰越より追返さる是は梶原が讒口を頼朝卿信じ給ふ故也依て其身置所なく既に西海に赴かんとて大物の浦より舟にのる惡風しきりにして渡海をとゞまりそれより吉野山に至る五ケ日逗留して和州多武峰に入其後國々をしのびありき給ひて後奧州衣河の舘に入此時一兩年安堵の思ひをのぶるといへ共終に舍兄頼朝の爲に責落され不レ叶して自害す　東鑑云文治元年十一月六日義經於二大物濱一乘レ船之刻疾風俄起逆浪覆レ船之間慮外止二渡海之儀一伴類分散相二從豫州一之輩纔四人所レ謂伊豆右衛門尉堀彌太郎武藏房辨慶幷妾女靜一人也今夜一二宿于天王寺邊一自二此所一逐電云　此謠は義經大物浦にて難風に逢給ふ事を作る成べし　異本義經記云武藏坊辨慶は紀州住人岩田入道寂昌が子也仁平元年四月八日に誕生す比叡山西塔櫻本坊の辨長僧都の弟子となる只常に力業太刀打を好む依て異名を鬼若丸と呼ける其頃西塔の北谷定泉坊附の武藏坊といへる明房に入自剃髪して武藏坊辨慶と名のる全文略

同云武藏房辨慶事安元二年六月十二日の夜五條の天神にて初めて見參したるとぞ義經時に十八歳辨慶は二十六歳の事也辨慶色々義經を嬲しゆへ後には口論になり打物の勝負に及といへ共辨慶叶はずして歸るといへり同十七日の夜五條の橋にて往逢たり此度は勝負に依て負たらん者家人とならんと約諾して戰ふ此時も辨慶勝事あたはず是より主君と仰ぎ其心金鐵の如にして影の樣に付屬奉り忠勤を盡ける文武二道の者といへり

今日思ひたつ旅衣歸洛をいつと定めん　旅衣をきるといひかけたり又思ひたつといへるも衣の縁にていへり次第の心聞えたる通りなり

加樣に候者は西塔の傍に住居する武藏房辨慶にて候　比叡山に東塔西塔横川とて有是を三塔と云也兼平に注す武藏房は上に注す

扨も我君判官殿は頼朝の御代官として　頼朝は清

和天皇十代後胤左馬頭源義朝ノ三男征夷大將軍正二位前權大納言兼右近衛大將源朝臣頼朝卿母ハ熱田大宮司散位藤原季範女也久安三年四月八日誕生正治元年正月十三日五十三歳而薨 系圖　盛長私記云建久九年相摸國相摸川の橋は稻毛三郎重成法師妻の爲に新に造レ之供養を遂る結縁の爲に將軍家も御出あり折節天俄に替り雲覆て雷鳴す雲の間に異類異形の者且ッ甲冑を帶したる如きの者光にまたがひて人の眼に遮る御馬雷の音に驚き馳出る口付ニ人被ニ引倒一河原にして御落馬既に御胸を石にて强く討給ふ故に御絶死あり明十年正月十三日薨去云々　代官とは當世年稅をおさむる人を云也今院の廳に判官代主典代とて有禁中にかはりて天下に政をなし給ふゆへ代々と云此例也又勘解由使判官是諸國より年貢を納むる官也　判官殿は屋島に注す

御兄弟の御中日月のごとく御座候べきを　神代卷に日ノ神月ノ神是レ兄弟也兄弟を日月と云事是始也云々　論語顏淵篇曰君子敬而無レ失與レ人恭而有レ禮四海之內皆兄弟也矣山谷絕句曰鬼門關外莫レ言レ遠四海一家皆弟兄矣

ゆひかひなき者の讒言により　ゆひかひなき者とは梶原景時を指て云也いひかひなきをゆひかひなきとは假字相違せり但しゆといと五音相通也　家　世中は斷に花を折そへて思ふ儘にはゆはれさりける　甲斐なきは融に注す

然れ共我君親兄の禮を重んじ給ひ　義經兄頼朝を重んするが故に異心なき由以ニ起請文一申遣はさるゝといへ共頼朝曾而承引なく次第に不快の中となる也　左傳曰君義臣行父慈子孝兄愛弟敬所レ謂六順也矣　史記李斯列傳曰亥曰廢レ兄而立レ弟是不義也矣

津の國尼が崎大物の浦へと急ぎ候　津の國は高砂に注す尼が崎は雲林院に注す大物の浦は川邊郡尼が崎にあり

比は文治の初つかた頼朝義經不會の由既に落居し　盛衰記云頼朝に不ニ申合一して義經五位大夫に成ル事又檀の浦の軍敗て後女院の御船に參り會事又平大納言時忠の聟になる事此三ヶ條頼朝心得ざる由其上折々景時讒し申に依て土佐坊昌俊を討手に遣さ

る是より義經身の置所なく都を立出給ふ也　百練抄云文治元年十月十七日今夜子刻許義經宅（六條堀川）軍兵等自二四方一攻二寄之一有二夜打之企一義經忽合戰襲來之勇士皆悉逃散畢此間院中騷動四面門等被レ閉義經進レ使云奇怪之輩皆逃散畢不レ可二驚思召一者也件張本字土左房矣　長門本平家物語云鎌倉殿梶原を召て今は日本國に頼朝が敵に成べきもの誰か有と仰ければ梶原申けるは今は九郎判官殿の外は覺えず候其故は今度數度軍のはたらき（中略）凡夫の所爲と覺えず鬼神の振舞也定而君の御敵と成給ふべき人也と申ければ源二位殿我もさ思ふぞと宣けるぞおそろしき（文略）　文治は後鳥羽院の年號也相續五年也　百練抄云元暦二年八月十四日改元依二火災地震一也矣

只十餘人すごくと　東鑑云文治元年十一月三日義經零二落鎭西一御供之人々前中將時實侍從良成伊豆右衞門尉有綱堀彌太郎景光佐藤四郎兵衞尉忠信伊勢三郎能盛片岡八郎弘經辨慶法師已下彼此之勢二百騎歟矣　平家物語は五百騎と有此唄に只十餘人とあるは相違成べし又盛衰記に義經都を落給ふ時は十郎藏人行家と同道也相具しける女房達皆こゝかしこに被レ捨と有

雲水の身　殺生石に注す

世中の人は何共石清水すみ濁るをは神ぞ志るらん

此歌日本風土記にあり或云是は石清水八幡の御神詠と申傳云々　歌の心明也石清水は弓八幡に注す

菜の字は鉢木に注すゑづかは二人靜に注す

天晴は實盛に注す

神妙に思召候　韻瑞云易係辭神妙也者妙二萬物一而爲レ言者也矣　古今眞名序云高振二神妙之思一矣

波濤は屋島に注す面目は安宅に記す

唯人口を思召也　人口は物いひさがなきを云也

○世中に虎狼も何ならず人の口こそ猶まさりけれ（月清）

別れよりまさりておしき命哉君に二たびあはんとぞ思ふ　千載集離別部に前大納言公任歌也本歌にはあはんと思へばと有詞書云有國大貳になりて下りける時よみ侍ける云々　歌の心明也

時の調子　難波に注す

渡口郵船風靜出波頭謫處日晴看　野相公隠岐國に流れける時の詩也朗詠集に入本文には風定出と有

渡口とは渡の邊也郵船は驛路などにある渡し舟也郵は驛也波頭は波の邊也謫處は左遷の所を云　説文曰謫罰也廣韻云謫責也矣

烏帽子　卒都婆小町に注す

立まふへくもあらぬ身の袖うちふるも　紅葉賀　○物思ひに立まふへくもあらぬ身の袖うちふりし心しりきや

傳へ聞陶朱公に勾踐を作ひ會稽山に籠居て種々の智略をめぐらし終に呉王を亡して勾踐の本意を達すとかや

史記越世家曰范蠡事越王勾踐既苦身戮力與勾踐深謀二十餘年竟滅呉報會稽之耻北渡兵於淮以臨齊晉號令中國以尊周室勾踐以覇而范蠡稱上將軍還反國范蠡以爲大名之下難以久居且勾踐爲人可與同患難與處安爲書辭勾踐曰臣聞主憂臣勞主辱臣死昔者君王辱於會稽所以不死爲此事也今既以雪恥臣請從會稽之誅勾踐曰孤將與子分國而有之不然將加誅于子范蠡曰君行令臣行意　乃裝其輕寶珠玉自與其私徒屬乘舟浮海以行終不反於是勾踐表會稽山以爲范蠡奉邑矣陶朱公范蠡者也又曰鴟夷子皮　史記貨殖列傳曰變名易姓適齊爲鴟夷子皮之陶爲朱公矣索隠曰鴟夷子皮范蠡自謂也若盛酒之鴟夷也用之則多所容納不用則可卷而懷之不忤於物也矣　韋昭曰鴟夷革囊也或生牛皮也矣　括地志曰陶山在濟州平陽縣東二十五里今南五里有猶朱公冢矣　范蠡事白樂天に註す　勾踐は史記越世家曰越王勾踐其先禹之苗裔而夏后帝少康之庶子也封於會稽以奉守禹之祀文身斷髮披草萊而邑焉後二十餘世至於允常允常之時與呉王闔廬戰而相怨伐允常卒子勾踐立是爲越王　下略　呉王は名夫差闔廬子也　越絶書曰呉大伯到夫差二十六代且千歳矣　會稽山は越傳曰禹到大越上苗山大會計爵有德封有功因而更名苗山曰會稽矣　國語曰乃環會稽三百里以爲范蠡之地矣　大明一統志四十五曰浙江紹興府會稽山在府城東南一十二里揚州之鎭山也矣　會稽山は夏の禹王の時諸侯を集て其功を計見られたる所な

る故に會稽といへり春秋の時には雯を越國と名づく秦の世には會稽郡と云劉宋の世には東陽といへり隋唐には越州と號し宋には紹興と云今大明にも又紹興府と號する也此所は府城の東南にあたりて會稽山あり 記中意 一統志廣輿

然るに勾踐は二度代をとり會稽の恥をすゝぎしも陶朱功をなすとかや　越世家曰滅吳報會稽之耻矣　貨殖列傳曰范蠡既雪會稽之耻乃喟然而歎矣　陶朱公を功の字にいひかへたり勾踐に功をつくせし范蠡なればかくいへり

されば越の臣下にて政を身に任せ功名富貴心のごとく成べきを功成名遂て身退くは天の道と心えて　此等皆范蠡が賢忠をいへり

老子曰持而盈之不如其已揣而鋭之不可長保金玉滿堂莫之能守富貴而驕自遺其咎功成名遂身退天之道矣

小船に棹さして五湖の遠島をたのしむ　五湖は史記索隱曰五湖者具區洮滆彭蠡青草洞庭或曰太湖五百里故曰五湖也矣　張勃吳錄曰五湖者太湖之別名以其周行五百里三萬六千頃故名五湖矣

此事白樂天に注す

有明の月の都　有明は高砂に注す月の都は楊貴妃に注す

枝をつらぬる御契　枝をつらぬるとは兄弟を云連枝と書　胡蝶巻におなしかざしと有　鶴林玉露云法昭禪師兄弟偈曰同氣連枝各自榮矣　藻鹽草云つらなれる枝兄弟也かみつ枝兄なりしかれは弟をは下つ枝と云へき歟云々

○いにしへにたくひもあらし我宿の枝をつらぬる柏木の陰 光數 玉葉

唯賴めしめぢが原のさしも草我世の中にあらん限りは　此歌田村に注す

船子共はや纜をとく〳〵と　船子は舊事紀云天押穗耳尊御子天照國照彦天火明櫛玉饒速日尊を天より降し給ふ時船長提取船子を率領て天降供奉す船子は倭鍛師等の祖天津眞浦と云者也 文略 舟子は是より始る也　纜考聲切韻云纜維舟索也矣

〳〵やとりかかる湊の里の川橋にとも綱かけておるゝ 草根

舟人

直垂　屋島に注す

其上一年渡邊福島を出し時は以外の大風成しを君御船を出し平家を亡し給ひし事今以て同じ事ぞかし

渡邊福島は攝州西成郡の內也義經梶原さかろあらそひの時の事を云也　東鑑云元暦二年二月十八日廷尉昨日自渡部欲渡海之處暴風俄起舟船多破損士卒船等一艘而不解纜爰廷尉云朝敵追討使暫時逗留可有其恐不可顧風波之難仍丑尅先出舟五艘卯尅着阿波國勝浦矣

あの武庫山おろし弓弦羽が嶽より吹おろす嵐に

武庫山は攝州武庫郡也弓弦羽嶽は同國兎原郡遠目村の北にあり爰にいへる弓弦羽は是を云歟但淡路國に弓弦羽峯あり武庫山と相向ふが故にかくつゞけたる歟尋ぬべし或說云攝州武庫は今の兵庫也武庫山は又六甲山共云神后三韓より歸り給ふ時兜鍪六頭を此山に埋給ふ故かぶと山と云又山の惣名を六甲山共いふとぞ　釋書云昔神功皇后征新羅而還埋如意寶珠及甲冑弓箭寶劍衣服等故曰武庫矣○よもかさしむこ山おろし河風に秋さり衣鴈は鳴とも

此御舟にはあやかしか付て候　或云舟破んとて前表には見しらぬ女など忽然と有もの也船中のならひ是を見ぬふりをする也案ずるにあやかしとはあやしきと云事也惣而船中にてあやしき事の有をあやかしと云也恠と書雜々拾遺に妖恠と書　說文曰恠異也矣　增韻曰奇也矣　楊倞曰非常之事曰恠矣

神明佛陀の冥感は軒端梅に注す天命は二人靜に注す

主上を始め奉り　主上とは安德天皇を指ていへり大原御幸に注す　主上者主は老子曰有天下者天下之主也矣　上は廣韻曰君也矣　蔡邕曰上者尊位所在矣　文選長門賦曰爲文以悟主上矣　白氏文集四十四云四夷側耳顒々然以聽主上之風矣

月卿雲霞のごとく　月卿雲客を雲霞といひかへたり下學集云三位以上云月卿公卿也四位以下云雲客殿上人也又云月卿君喩日臣喩月故云爾矣一云天子を龍にたとへ日にたとふる故に月卿雲客と云雲客は殿上人也雲の上人共云

抑是は桓武天皇九代の後胤平知盛幽靈なり　抑の字は高砂に注す桓武天皇は兼平に注す　桓武天皇

十一代後胤正三位新中納言平知盛太政入道浄海三男任征夷將軍智深兼文武平家一族之中殊に名高し元暦二年三月西國にて滅亡す此唄に桓武九代と作るは相違せり　天皇とは日本紀に神武帝の御名を神日本磐余彦天皇と申奉る天皇の號此時より始る也玉林抄云地神第三代瓊々杵尊と申は天照太神にも皇産靈尊にも共に御孫なるを以て皇御孫尊と號す此尊豐葦原の中國の主として三十二神を添て三種の神器を奉り日向國高千穂峰に降臨ましますも也依て天の字と皇の字と兩字を取合て天皇とは云也云々後胤者纂要云後代子孫也矣說文曰胤子孫相承續也矣　廣韻曰繼也嗣也矣

長刀とりなをし巴波の紋　くる〳〵と長刀をふりまはすはうずまく水の形に似たると也　朗詠集云篤茂詩水成巴字初三月源出周年後幾霜矣　巴は水を畫形也字の本體は　如此又蛇の名水蛇水に在て貌巴のごとし　博物志曰呑巴蛇象三歳而出其骨矣　三巴記云閬白水東南流曲折三迴而如巴字矣

東方降三世南方軍吒利夜叉西方大威德北方金剛夜叉明王中央大聖不動明王　岷江入楚云五檀の御修法こそ禁中にておこなはるゝ事也私の家にてはなき事也不動を中尊にして五大明王の法を修せらるいかめしき事也云々　降三世明王は形三面八臂所謂三世者名貪瞋癡降此三毒名降三世左足踏自在天表斷煩惱障右足踏烏摩后表斷所知障軍荼利夜叉形六臂左肩有輪寶青龍疏曰摧伏一切阿修羅諸惡鬼神大威德形三面六臂　青龍疏曰摧伏一切惡毒龍光明疏曰大威德者勝群輩乘牛帶弓矢金剛夜叉形三面六臂青龍疏曰摧伏一切可畏夜叉左手捧輪寶右手持矢不動明王青龍疏曰降伏一切鬼魅諸障惱者佛像圖彙　不動講式曰東方阿閦佛化降三世明王南方寶生佛化軍荼利夜叉明王西方彌陀佛化大威德明王北方釋迦佛化金剛夜叉明王中央大日尊化大聖不動明王也矣

索にかけて　索の字はなわとよむ也不動經曰如羂索縛大力魔矣不動十界私記云不動明王十界所具尊王也十界之中第六索人道矣

跡志ら波とぞ成にける　枕草子云あとの白波は誠にこそきへもてゆけよろしき人はのりてありくまじき事とこそ猶おほゆれと云々〇拾難波潟雲井に見ゆる島かくれこきゆく舟の跡の白波

船橋

萬葉集にかみつけやさのゝ舟橋取はなし親はさくれと我はさかるかもと云歌にもとづきて此謠を作る成べし舟橋とは上野國佐野の舟橋也道の南方水田也古歌にさのの田の苗とよめり舟橋は舟にて渡したる橋には非ず板を打渡し掛たる也定家卿歌に「行末の河瀬も見えず茂りあひて草葉に渡るさのゝ舟橋　此歌にて河にかけたる橋にてなき事明なり

山また山の行末や雲路のしるべ成らん　毎日山々を越行を山又山といへり又雲路のしるべとは旅行の客毎日雲の行かふを打詠め行心也軒端梅に注す

是は三熊野より出たる客僧にて候　三熊野とは新宮本宮那智を云也又三のお山共云り　熊野社在紀伊國牟婁郡所祭之三座伊弉冊尊事解男速玉男也　神代卷曰伊弉冊尊生火神時被灼而神退去矣故葬於紀伊國熊野之有馬村焉土俗祭此神之魂者花時亦以花祭又用鼓吹幡旗歌舞而祭矣又云伊弉諾尊與伊弉冊尊盟之乃所唾之神號曰速玉之男次掃之神號泉津事解之男凡二神矣古今皇代圖云崇神天皇六十五年始建熊野本宮景行天皇五十八年建熊野新宮矣　神社考云本宮證誠殿本地阿彌陀新宮藥師那智飛龍權現本地千手觀音矣　熊野緣起云神武天皇三十一年辛卯高倉下尊亦名天香語山命自乘磐船此秋津島を廻給ふ時に紀州の南郊に至る一の大熊あり其長一丈餘金色の光を放ち無量の奇瑞を現ず尊此示現を拜し天の告を承り又靈夢を感じて神藏の寶劒を得て州中の邪神を伏し六合悉く安じ給ふ今の神藏即其地也熊野の號此時にはじまれり文略　舊事本紀云神武天皇四十二年丙寅木齋國熊野山之曲有熊部血代狹田命者當好狩遊于時見長一丈之大熊即放大箭射之熊負其箭入深山尋血跡晚至大湯原峰爰有三株櫟木大熊死樹根血代狹田命至此驚光輝見月輪於樹上其面五尋汝何神答曰吾

者天神高皇産靈尊也降在日沒方大國宇降山住八十萬歳萬歳成一角既而八角成畢移豐國日子之嶺其魂形在八角八尋住十五歳又移淡路國弓弦羽峰住十六年移木獲國高月山松下住八年遂遷于茲留檪樹枝今亦三年汝速至帝都奏由於天皇血伐禮田命驚走急奏之時天皇大悅勅天村雲命遣藥石令問其事國民答曰昔於日子峰有天降靈神其神形體者竪横五六尋八角五光玉石也人欲奉親倚即吐血熱惱然數年在後更無也又尋至淡路問其事國民曰昔日見長二丈八角白玉石神降弓弦羽嶽晝夜光輝後飛去東方今不知在處天村雲命歸洛奏天皇又詔天村雲命添血伐禮田命遣之見之又遍二輪以三輪在時月輪詔二輪去來諾尊並去來冊尊也(中略)我今見出永留居茲天皇萬應發信參來無不滿祈吾祠八棟造三所十二前天神七代地神五代天地人主請暮無跡依高皇靈尊奉鎭坐本宮拜去來冊尊奉鎭新宮拜去來諾尊奉鎭西宮下津磐根宮柱太敷立高天原案村高知奉崇高皇祖宗宮之大神(下略)〇若か爲三のかゝみにあらはれて明けき世と定め置けん(爲家)

客僧とは山伏の名也　修驗抄云凡山伏有三種差別一者山伏二者修驗三者客僧也(中略)　客僧者一念法界名爲行體内證也三界如客舍住之迷倒未息一心是本居忘之流來既久然則住無所住之心地達無所得之本源是謂客僧矣　秘記云客僧者一身一念法界道場無住無著是名客道住無所住心地證阿字本不生覺位號客僧矣

我いまだ松島平泉を見ず候程に　松島平泉は奥州也松島は善知鳥に注す平泉には秀衡が三男泉三郎忠平が古城の跡無量光院の北の方にあり

幾瀬渡りのやすの川彼織女の契りまつ　野洲は江州栗本郡鏡と守山の間也鏡の宿の西にあり野洲川は町の西のはしに有又銀河を安河共いふゆへに彼織女の契りまつとはつゞけたり　神代卷云日神與素戔烏尊隔天安河而相對矣　纂疏云天安河者天漢名也矣　織女は朝顔に注す〇(新勅)遙なる三上の嶽をめにかけて幾瀬渡りの安の川波(後京極)〇(風雅)七夕の逢瀬はかたき銀河やすの渡も名のみなりけり(重家)

醒井の宿を過伊吹おろしの音にのみ　醒井は番馬

より一里あなた也醒井の宿は山中也醒井は岩根よりわき出る水也東より南へ流れたり石地藏の中に御座也東關紀行云昔に聞し醒井を見れば陰くらき木の下の岩根より流れ出る清水あまり涼しきまですみわたりて誠に身にしむばかり也云々兼良美濃道記云醒井と云所に清水岩根よりなかる一筋は上より一すぢは下より流れて末にてひとつに流れあふまことやらんみのゝ養老の瀧に續きたりといへり「岩かねをわかれて出るさめか井の流れやつゐにあふみちのすへ　伊吹山は美濃近江の境にあり伊吹の里は近江也伊吹山には神あり號膽吹明神八岐蛇の所變也日本武皇子東征歸尾張聞近江國異布貴山有荒神欲伐之以行神化爲蛇當路皇子以爲此蛇非眞荒神因跨蛇行時山道雲霧大起皇子迷而失路遂痛身如醉偶得泉而醒因號其處曰醒井世俗以此故謂膽吹神爲八岐大蛇所變也日本紀及ヒ今昔物語文略　（山家）覺束な伊吹颪の風さきに朝妻舟はおひやしぬらん

美濃は班女に注す尾張は景淸に注す上野は鉢木に記す

法による道そと作る舟橋は後の世かくる賴み哉

因果經曰今身喜造橋船濟度人者所生之處七寶具足衆人敬歎莫不瞻仰行來入出家人扶攝矣

正法念經曰若有衆生於河津造船橋以善心度衆生不作衆惡命終後生持鬘天受五欲樂人中爲王典藏矣　又東岸居士に注す

往事渺茫は善知鳥に注す夢の浮橋は源氏供養に注す

舟きほふ堀江の川のみなきはに此歌角田川に注す

六の道は安達原に注す生死の海は柏崎に注す

二河の流れは有ながら科は十の道多し　此所に渡瀨川佐野川とて二つの流れあり又善導觀經疏の二河白道をも兼たり　大論二十七卷曰譬如人行狹道一邊深水一邊大火二邊俱死矣　涅槃經三十二卷に此譬の意有委く柏崎に注す十の道とは十惡也

東岸居士に注す

萬葉集の歌に東路の佐野の舟橋取はなし　此歌萬葉集第十四卷にあり上の五文字かみつけのと有又下の句親はさくれと我はさかるかもと有此唄に作る處本歌とは相違せり歌の心は親にしらせず人に契るを其道の舟橋をはなちさくれ共我はさかるか

はとよめり万葉仙覺抄云親はさくれと我ははなるるかはとよめる也云々詞林采葉云とりはなしとは此橋を河には渡さゝるにや路の南方水田にて板を打渡し〳〵するとかや然れば水なき時は取はなして置と申す云々或云古き抄物に云彼國の俗かたり傳へて云古しへ此國に住る男女有けり共に父母にしらせずして夫婦となりて有けるに其後男の親女のおやともに聞つけてよからぬ事なりといひ合せて彼ものゝかよふ道にさのゝ舟橋とて橋の有けるをとりはなしてあはせざる心をかくよめりかのものゝかよひける道は古戀路と名付て今もその跡ありといへり云々　萬葉集は高砂に注す

淺間山は信濃也三瀨川は檜垣に注す

山伏　夫山伏者有眞言天台之兩流天台山伏屬聖護院門主每秋自三熊野山入葛城大峯修鍊故稱修驗道又謂入峯或云順峯入是謂本山衆矣　眞言山伏悉屬醍醐寺三寶院門主中世大蛇住大峯前路山伏不得入大峯年舊醍醐寺聖寶歎之入自大峯後山劍之自是行路平安而山伏再得入峯故是傳當山衆然共先登大峯出熊野依謂逆峯入或又本山門葉云袈裟引當山謂霞引大和一國山伏云內山伏也矣　修驗抄云夫於當道名義有山臥山伏之二義山臥者秘記云山者母胎八分肉團本有八葉蓮臺也臥者住彼自性本分蓮臺也不苦不樂無相眞如也乃至此山臥之二字名有山臥或號本覺山臥矣　次山伏者我等出母胎分八分肉團入金胎兩部峯經斷惑證理修行始開自性本分心蓮故此位名修生山伏或號始覺山伏日藏上人傳云入法性眞如山降伏無明煩惱敵故名山伏矣　山伏の形相は通道俗是本小角者優婆塞聖寶者剃髮の故也　河海抄云山伏野伏とは只世をのがれて山林に伏心也熊野山伏に不限云々　岷江入楚云世をのがれて野山に臥を山伏野伏と云也云々（拾）山伏も野ふしもかくや心みつ今はとねりのねやそゆかしき

役の優婆塞　役小角は安宅に注す優婆塞は夕顏に記す

葛城や新し久米路の橋　久米の岩橋共云葛城に注す（新古）葛城やくめぢに渡す岩橋の絶にしなかと成や

果なん能宜

一言にて止ましや　葛城神を一言主神と號す○かげろふ日記つらきや神代のたゆるし深からはたゝ一言に打もとけなん

葛城や夜作るなる岩橋ならば　何れも葛城に注す

所は同じ名の佐野のわたりの夕暮に袖打拂ひて御通りあるか　○駒留て袖打拂ふかけもなし佐野のわたりの雪の夕暮定家新古今　此歌は和州三輪が崎の佐野のわたりにてよめる歌也此歌のさのを東の佐野に取むすびて所は同じ名のといひかけたり　此歌鉢木に注す

篠掛の頭も春なり河風の　篠掛の衣を春にいひかけたり篠掛は葛城に注す

東路の佐野の舟橋取はなし又鳥はなしと二流によまれたるは何と申たる謂にて候ぞ　取はなしと云説は上に記す又鳥はなしと云說はいまだ知らず但し此歌に異說ある歟追而考ふべし世傳水におぼれて死せる人を尋ぬるには板に庭鳥をのせて求るに死骸ある所にて鳴といへり此等の義を爰にいひかけたる歟

妄執と云因果といひ　妄執は實盛にいでたり因果は善惡共に通ずる詞也然るを今あしき事にのみ心得ぬるはあやまり也　十六觀曰發菩提心深信因果矣　止觀云招果爲因克獲爲果矣　因果錄曰因者種也果者也種穀得穀食也種善而得善果是自食其種也又何疑乎矣

三途は江口に注す紅蓮大紅蓮は善知鳥に注す

磐石に押れ苦を受る　是は衆合地獄の苦みをいふ也　往生要集云衆合地獄者在黑繩下或有鐵山從空而落打於罪人碎如沙揣或置石上以巖押之殺生偸盜邪婬者墮此地獄文略

心の鬼と成かはり　枕草子云心の鬼出來ていひにくゝ侍りなん物をと云々葵卷云心の鬼にたるく見給ひてと云々　河海抄云心の鬼とはおそろしき心也と云々○とにかくに心の鬼は目にそへておそろしき世にふるそかなしき爲家夫木

邪婬は東岸居士に注す雲となり雨となるは夕顏に注す

中有の道もちかづくか　大論曰死生二有中五蘊

名二中有一矣　新婆沙論曰居二死有後一在二生有前二一有中間有二自體一起矣　中有を梵語に名二健達縛一譯云レ香謂有中の生は唯香を以て食とし存立するが故に其壽量は以二七日一其中有の受限は或は生緣の遲速に依て不定也　瑜伽論曰人死中有身若未レ得二生緣一極二七日一住若有二生緣一即不二定若極二七日一必死而復生如レ是展轉生死乃至七々日住自レ此已後決定得レ生又此中有七日死已或於二此類一由二餘業一可レ轉中有種子便於二餘類一中有生矣

三寶加持　神道有二隨身三寶加持一第一壽命第二無病第三福祿也是云二隨身三寶一一二身內之寶也第三身外寶也第一壽命者存命故治レ病保レ命故求レ財第二無病者得レ病者恐二壽命危一沈レ病者忘二財寶重一第三福祿者壽命者身之根本也諸病身之枝葉也福祿身之花實也 下略見二三妙加持經之註一　加持の字義は葵上に注す

行者　葵上に注す

なく泪雨とふらなん渡川水まさりなはかへりくるかに　古今集哀傷に小野篁朝臣歌也詞書云いもうとのみまかりける時よみけると云々　歌の心はなく泪雨とふれ渡り川の水まさりなは別れ行人の歸り來るべきにと也

見我身者發菩提中略知我心者即身成佛　不動明王四句偈云見二我身一者發二菩提心一聞二我名一者斷レ惡修レ善聽二我說一者得二大智惠一知二我心一者即身成佛矣　安達原に注す

いふならくならくの底のみくづとも成しを　發菩提の功力を受ていう奈落ならく底のみくづと成しをとつゞけたるはよろしからず何とぞうたひやうも有べき事歟白氏文集及文選等に言說着即開導と書諸の心はならくを那落迦の地獄にいひかけたり那落迦は鵜飼に注す〇いふならく奈落の底に入ぬればせちりもすたもかはらさりけり眞如皇子

懺悔は實盛に注す眞如の月は山姥に記す五障は梅枝に注す

胡蝶の夢のたはふれに　莊子曰昔者莊周夢爲二胡蝶一栩々然胡蝶也自喩適レ志與不レ知レ周也俄然覺則蘧々然周不レ知周之夢爲二胡蝶一與胡蝶之夢爲レ周與周與二胡蝶一則必有レ分矣此之謂二物化一矣　又關寺小町に注す

よしや芳野の山ならねと是も妹背の中河の　古今 〇流

れては妹背の山の中に落る吉野の川のよしや世の中上野下野の兩國の中間に佐野菅懸野とて二の野あり其野中に佐野の中川とて有此歌を爰によせて是も妹背の中川とはつゞけたり○住なれし佐野の中川瀨絕して流れかはるは泪也けり　仲綱

人もねにふし丑みつ寒き。伊勢物語云子ひとつより丑みつまでと云々　是は漏剋の事也漏剋とは銅壺に水を入て箭を立て其箭に四十八剋を付て彼銅壺の水のしたゝりて一つのきざをあらはせは是一剋也二つあらはせば二剋也かくて四つあらはせは一時也一時に剋を四つ付る也其漏剋を守る者其時々々に鐘皷を打也是に依て丑みつとは云り漏剋の始は天智天皇十年夏四月廿五日漏剋を新臺に置き始めて時を打ち鐘皷を用ゆと日本紀に見えたり職員令云漏剋博士二人掌率守辰丁伺漏剋之節守辰丁伺廿人掌伺漏剋之節以時擊鐘皷矣　百寮訓要抄云漏剋博士是は漏をつかさどる晝夜の時を伺也漏水のうつるをまもりて時をたゝしくする職也云々〇長月やねにふし丑におくるまも寐の一夜の程はへにけり　草根

より羽の橋か鵲の行あひのま近く成まゝに　佐野の舟橋につきて是等のこと葉を取出せり　より羽の橋とは鵲の羽をよせならへて銀河の橋となし七夕を渡せると云事にてかくいへり委く朝貌に注す

鵲のよりはの橋をよそながら待渡る夜に成にける　新勅

[illegible]　行會の間とは新古今神祇部に住吉の御歌に一夜や寒き衣やうすきかたそぎの行會の間より霜や置らん　此神詠に不限古歌に多くかたそぎの行あひの間とつゞけたりかたそぎとは千木のかたそぎとて社の上に打ちがへて置木也千木とはちがひ木也片そぎにするゆへにちぎのかたそぎといへり伊勢内宮は内をそぎ外宮は外をそぐ是陰陽の心也大社は長一丈三尺中社は一丈小社は八尺數は皆四支也　袖中抄に此神詠に付て片そき鵲の兩說をあげたりかたそぎの行あひといへるをかさゝきの行あひとあやまり來れるかといへり但し七夕に付て鵲の行會といへる證文ある也　孫姬式云銀漢鵲之會橋在夜遊而降風霜矣　〇夜やふくる衣やうすき鵲の行あひの橋に霜やふりける　孫式

共に三途の川橋の橋柱に立られて惡龍の氣色にかは

り
昔垂仁天皇の御時津國長良橋を五十町かけさせ給ひて其後修理するにやゝもすれば此橋落やすく成ぬ如何はせんと橋守案じ煩て居たるに折節道行人の云けるは是は龍神のわざなれば龍神は死人をいめば人柱をば立此橋落まじきと申時さらばかく申ものを取立よとて押へて人柱にたてぬ其娘大和なる人に迎られたりける親の物いひて身の科に成侍るを深く侘づみて三とせ迄物をいはざれば女をおしにて片輪なりとて輿にのせてゆかりのもとへおくり行時道にて雉子の鳴ければ聲を留て射てとれば其時女こしの内より一物いへは父は長良の橋柱なかずは雉もいられざらましとよめるにぞ女をばかへしてけり定家卿撰題百首之抄　今案に橋柱に立られてとうたふは此物語によりてかく作るなるべし

眞如發心の玉橋の　眞如發心の體を明玉のかゞやくにたとへたり玉は美稱の詞也眞如は江口に記す

通小町

歌論義云昔あやにくなる女をよばふ男有けり心ざしあるよしをいひければ女心見んと思ひて常にきて物いひける處に榻を立て是が上にゐきて百夜臥たらん時にいはん事はきかんといひければ男やすき事也といひて雨もふれ風もふけくるればまどひきて其榻の上に臥けり榻の上にぬる夜の數を書付たりければ九十九夜に成にけり今宵ふしなばあすよりは何事もえいなび給はしなどいひ置て出てとく暮よかしなと思ひけるに親の俄に死にければそれにさはりてとゞまりにけり其時此女のもとより此歌をよみておこせたりける「曉の榻のはしかき百夜かき君がこぬ夜は我ぞ數かく　又云古今集戀五よみ人しらず「曉の鴫の羽かき百羽かき君がこぬ夜は我ぞ數かく　と云歌の心は昔あだなる男を賴む女有けりこぬ夜の數は多くくる夜の數はすくなかりければ彼こぬよ數をかく事なん曉の鴫と云鳥の羽かくよりもおほかると云成べし已上補中抄
古今榮雅抄云定家卿云鴫榻兩歌昔よりともにあひ

ならびにたりともに用ゆべきにとりて古今には鵰の羽がき諸本一同也用ゆべし古今にいらぬ古歌證歌勝計すべからず云々案ずるに是等の義に基きて此謠を作るなるべし小町事は卒都婆小町に注す洛北市原村有小堂號補陀落寺庭小野小町四位少將の塔有且又兩人畫像幷に緣起あり此謠は彼緣起に寄て作る成べし　今案緣起に秋風の吹につけてもの歌を市原野にむすぶ事いぶかし楊鴫曉筆に此僞をかけるといへ共市原野の沙汰曾而是なし何れの抄にも見えず匡房江談にどくろの薄あなめ〳〵といひしは業平奥州八十島に至りし時と有諸抄同之尋ぬべし　太政大臣藤敎通公第二之女歡子十六而治曆四年四月後冷泉院爲皇后其夜帝崩承曆元年皇后五十七薙髮以台嶺座主良眞爲戒師隱小野離宮後改宮爲常壽院康和四年八月十八日崩年八十二（釋書文略）　或云市原村補陀落寺世謂常壽院之舊址彼二石塔云後冷泉院幷歡子之塔土人曰小町少將墓者誤來耳

是は矢背の山里に一夏を送る僧にて候　矢背は叡山の西の麓高野村の北にあり　大原紀行云大友皇子をこゝにして追付奉りて吉野の宮軍の射かけ奉る矢皇子御背にあたりしにより矢背と云となんされば今は八瀨と大やうはかける瀨八あらば橋もその數あるべければ參川のなにがしの橋にかよひておかしからんものを瀨は只一つ有けり云々　又鞍馬天狗に記す一夏の事百萬に注す

毎日木の實爪木を持てきたり候　爪木とは木の枝也貞德云つまむ木と云事を略してつま木といふと云々○（風）雪の日もけふは暮しつ山里は爪木の煙心ほそくて（兼俊）

捨ふ爪木もたき物の匂はぬ袖ぞかなしき　燒物を薫物にいひかけて匂はぬ袖とつゞけたり

市原野　愛宕郡二瀨村の南にあり鞍馬路也　薩戒記云應永八年後正月十二日參詣鞍馬寺於市原野獻酒矣　山槐記に櫟原と書

いにしへ見なれし車に似たるは嵐にもろき落しゐ　四位少將車の榻に百夜かよひて死せると云事をふくみてかく云る歟　下學集云椎木斷也然日本俗呼菓子曰椎不知據矣（草根）　○秋深き山風きよく木間もる月におち椎霜をうつ聲

歌人の家の木實には人丸の垣ほの柿　姓氏錄云人丸敏達天皇之後也家門前有柿樹因云柿本矣古今集雅抄云人丸は五帝につかへたりと見ゆ天武の御宇朱雀天年に出世して聖武の御時神龜元年三月十八日卒す云々石見國高津にて臨死の時よめる「石見潟高津の松の木間より浮世の月を見はてつる哉」詞林采葉云石見國風土記曰天武三年八月人丸任石見守同九月三日任左京大夫正四位上次年三月九日任三位兼播磨守矣其以來至持統文武元明元正聖武孝謙御宇奉仕七代朝者哉於是持統御宇被配流四國之地文武御宇被左遷東海畔子息躬都良者被流隱岐島於謫所死云々續日本紀云天平九年三月十八日人麿於石見國卒矣　宗祇古今相傳云人丸は石見國塔田と云所のある人の柿樹の本より出生し持統文武につかへ播州明石に隱居すといへり云々　榻鴫曉筆云人丸の賞名をば珍玉と云七歲の秋八月十五夜父を捨て都にのぼり文武天皇につかへ奉る云々　雨夜物語云人丸の墓所三所にありと云一には大和國添上郡なる杜のなかにありと云二には長門國村島の里に有三には石見國大山の里此三所也と云々され共その骨をとめず實には天上して失たるといへり化生の人にて出生さだかにしれずとなん人丸は妙音ぼさつの化身也と云々　石見國田村庄小野と云所に人丸の社有社家の園に柿あり氏姓柿本の根さしといへり筆柿也他の木につぐに必す本木にちがふといへり高津は是より三里あり人丸寺及び庿所あり當國津和野の太守御崇敬ゆへに宮殿別院等美麗をつくせり拜殿に人丸社と額あり日光宮二品守全親王の御筆也人丸の木像長四尺五寸則御自作也といへり　和歌祕講抄云人麿榮雅云人丸行年四十二歲云々卒去の歲四十二しかるを今畫圖に白髮にかけるは大に非也云々

山の邊のさゝ栗　山邊赤人をいへり　姓氏錄云山邊宿禰赤人垂仁天皇裔孫也正六位上山邊大老人矣古今集雅抄云赤人は上總國山邊郡人也彼所に廟今にあり旅客歌を書付ると也此所に笹栗とて長一尺計あるに栗のなるとかの國の人語りけると云々　榻鴫曉筆云或說云赤人は異國の賢臣也倭人の爲にそねまれ流されて此國に來り上總國山邊郡澤井と

云里に住顔の色赤ければ赤人とは云也都に登り帝につかへ奉り上總權守從五位に任せらる程なく從三位兼伊與守に任ずと云々　崔禹錫食經曰杭子一名鷄栗栗相似而細小者也矣　伊呂波字類抄云杭子似レ栗而小又鷄栗書云々〇(山家)山風に峰の笹栗はらはらと底におちしく大原の里

窓の梅園の桃　上に歌人の家とあるゆへに爰に窓園の居所の詞を出したり

花の名にある櫻麻のおふの浦なし猶もあり　櫻麻の苧とつゞけたり苧生の浦は伊勢也　袖中抄云伊勢國に有二齋宮御庄一献レ梨之處也云々　一説おふの浦は伊勢國とあれども志摩國にあり櫻麻片枝の梨子ならず梯有七ふしぎの內也云々　又云櫻麻とは麻の花は白き中に少しうすすはう色ある麻のある也それを櫻麻とは云也云々綺語抄云さくらあさとはあさをの中に櫻の色したるあさを云也云々

櫻麻は春也〇(新古)櫻麻のおふの浦なみ立歸り見れ共あかぬ山なしの花俊成

いちゐかしゐまでばしゐ　櫟は位の字によりて笏に用ゆ飛彈玉位山に生る櫟の木を以て笏に作るといへり　崔禹錫食經曰櫟子相似而大二於椎子一者也矣かしゐは柏の實也まてばしゐは櫧の一種也葉は櫧に似て厚く實は櫧より大也人食レ之〇大井川時雨る秋はいちゐたに山の嵐や色をかすらん(大木)

大小かんじ金柑　かんじは柑子也大小は大きなると小きとを云也伊勢物語にせうかうじくりのおほきさにてと有是等を云歟　周處風土記云柑橘之屬矣本草云柑子無レ毒矣河海抄云聖武天皇神龜二年柑子從二唐國一植レ種結レ子矣　金柑は金橘也花果録云其實小如レ彈黃如レ金謂二之金橘一矣　ヶ樣の類皆九種の橘の內也拾遺集物名に花かんじをよめる

五月雨にならぬかぎりは郭公何かはなからん杰のふ計に仙覺法師

あはれむかし戀しきは花橘の一枝　〇(伊物)五月待花橘のかをかけは昔の人の袖のかぞする　日本紀云垂仁天皇九十年春二月庚子朔天皇命二田道間守一遣二常世國一令レ求二非時香果一今謂レ橘是也矣　古今榮雅抄云彼田道間守いまだかへらぬさきに帝かくれさせ給へは昔を忍ぶ事には橘をよみならはせり又間守が袖に橘を包みて此國へきたれればむかしの人

の袖の香とはいへり云々　慈鎮和尚古今集注云或云宇佐の使のくだるにもと志れりける女ある國のつかさのめにてありけるが橘をさかなにて酒のませける時此歌をよめりけりさてむかしの人の袖のかとはそへたり共いへり云々

秋風の吹につけてもあなめ〳〵小野とはいはし薄生けり　雑談集には秋風のうち吹毎にと有又應山公聞書に秋風の吹度ごとにト有袖中抄云あなめ〳〵とはあなめいた〳〵と云也云々　榮雅抄云悲々ﾄ阿那目ﾄ書也云々　東齋隨筆云二條の后いまだ内へ参り給はざる時業平中將志のび〳〵にかよひ侍り或時后をいでかくし奉らんとせしをせうと達うばひかへして則中將の本鳥を切けり中將髪生ん程とて歌枕見ん爲に關東に下向す奥州の八十嶋に宿せし夜野中に和歌の上句を詠ずる聲あり其詞秋風の吹度毎にあなめ〳〵と聞ゆ音につきて求るに人なし唯一ッのされかうべあり明日朝猶是を見るに彼かうべの目より薄生たりけり風の吹毎に薄のなびく音歌の上句に聞たり奇異の思ひをなす間或人の云小野小町此國に下向して此所にて死去せり

そのかうべなりと云爰に中將哀れに思ひて下句を付て云小野とはいはし薄をひたり件所をは玉作の小野と云となん云々　江記云在五中將爲嫁二條后出家相搆其後爲生髪到陸奥國留八十島求小野小町尸夜宿件島終夜有聲曰秋風之吹仁津氣天毛阿那目云々後朝求之髑髏目中有野蕨生中將涕泣曰小野止波不成薄出計里即斂葬矣　曉筆云和泉式部法輪に参りけるにさが野にて日暮たりければ彼野に宿したりしに夜野中に秋風の吹につけてもの歌を詠ずる聲有夜明て見れば髑髏の目より薄の生出たるあり其夜の夢に我は小町也といへり　又云弘法大師小町が最後の有樣を聞あはれに思ひ野山を分入給ふに白骨前後にみち〳〵たり何れ其と志りがたく露をそゝくたる泪の袖まねくに似たり花薄ほのかなるけしきもあはれにて「世中に秋風立ぬ花薄まねかはゆかん野へも山へもと口すさみ草村を過行給へば件の秋風の歌を詠するもの有聲を尋て見給へはどくろより薄生出たる有大師小町なる事を志りて哀に思ひかの白骨を取て高野に納め給ふとぞ云々

座具をのべ香をたき　名義集云座具梵語云尼師壇或尼師但那此名座具或云隨座衣長四尺廣三尺矣　座具は比丘僧受用する六物の内也佛弟子に勅して三寶師長上座等を禮する時必是をのべ敷て禮拜せよとおしへ給ふ也　燒香は清淨のわざにより人間の臭氣を除く故に諸天も來下ある也　明眼論燒香品云至心燒香木天魔及波旬聞香失心退猶如入死門矣止觀曰燒一捻香如是小行必得作佛矣　華嚴に定香十種の功德を說り略之

南無幽靈成等正覺出離生死頓證菩提　是は死たる人を弔時の廻向の文也幽靈とは幽はかすか靈はたましゐ也成等正覺とは佛も共に覺を得るの心出離生死とは生死に迷ふ身を離出る也頓證菩提は早くさとりて佛智になり給へと也

戒さづけ給へ御僧　名義集云戒梵語云尸羅此云清涼秦言性善經音義曰梵言三婆羅此云是戒矣優婆塞戒經云戒者名制能制一切不善法故矣　大論云何爲戒若惡止不更作若心生若口言若從他受息身口惡是爲戒矣

おもきが上のさよ衣　新古今集寂然法師不邪淫戒の歌に「さなきたにおもきは上のさよ衣我妻ならぬ妻なかさねそ　増抄云一人にてさへおもきにそのうへ人の妻子などおかすなと也　さよ衣にて女とぬる義をもたせたり云々

三瀨川　檜垣に注す

我は曇らし心の月　菩提心論云我見自心形如月輪矣○新千晴曇る思ひを捨て見る程や心の月はさやけかるらん

尾花まねかはとまれかし　榮雅抄云薄を尾花と云は白馬の尾に似たる故に云と云々　源氏云お花の後拾物よりことに手をさし出てまねくかと云々○さらてたに心の留れ秋の野にいとゞも招く花すゝき哉　師賢

思ひは山のかせぎにて招とも更に留るまじさらば煩惱の犬となつてうたるゝとはなれじ　犬は人に馴てはなれざる物なれば犬を煩惱にたとふる也大品經曰狗押作務矣　寒山詩云慈悲如野鹿瞋忿如家狗家狗趁不去野鹿好走矣　涅槃經梵行品云家犬不畏於人山林野鹿見人怖走瞋恚難去如守家狗慈心易失如彼野鹿矣寶物集云煩惱は

家の犬打ども去ず菩提は山のかせぎ絆とも留らず云々　かせぎは鹿也角の杵に似たれば云也○後の世も哀れなる哉里の犬のうてともさらぬえにし也けり後陽成院

深草の少將　　傳記定かならず

車の榻に　　榻はくらかけのやうなる物にて長柄をうくるもの也　孟津抄云車には榻を用ゆのほりくたりのやすからんためなりと云々　說文曰榻牀也矣埤韻曰牀狹而長者矣　莊子註曰榻車枕矣　伊呂波字類抄云榻亦作レ○本朝事始云文武天皇慶雲元年正月五位已上坐始設レ榻停二百官蹲伏之禮一矣

つゝましや〳〵　卒都婆小町に注す

山城の木幡の里に馬はあれ共君を思へはかちはたし　萬葉集第十一人丸歌に「やましなのこはたの山に馬はあれとかちよりわれくなれを思ひかね　此歌拾遺集十九雜戀に入題しらず人丸「山科のこはたの里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へは　河海抄に上の五文字山城のと有孟津抄下句かちよりそくる君を思ひかねと有歌の心は君を思ふ故に辛勞をするると也云々　山城國は舊事紀云橿原朝御世阿多根命爲二山代國造一矣　日本後紀云延暦十三年十一月丁丑詔曰宜レ改二山背國一爲中山城國上矣　大和本紀云山城國は厩戸王子四天王寺の材木を取し處也今の平の京は其迹也總じて材木を取處を杣人の言には山開と云也然れば此所を昔は山開書其後山代と書物の種を取所を代といふ苗代殖代と云が如し其材木取置し處なれば山代と云也云々　雞邦百首抄云天照太神天上にして齋服殿に入せ給ひ神衣を織給ふ此はたどのゝ下にあたる國を畿内五ヶ國と云也其内山背は太神の御背中のとをり也然る間山背といへり云々　木幡の里は釆女に記す

目に見えぬ鬼一口もおそろしや〳〵　目に見えぬ鬼とは古今假字序に目に見えぬおに神をもあはれとおもはせとあるにてつゞけたり鬼一口とはいせ物語に鬼はや一口にくひてけりと有鬼とは女を云也闕疑抄云人のつれ行て女のなき體也云々愚見抄云鬼一の字は周易の文に鬼一車とあるを以て鬼一口と云かへたり云々　毗江入楚云伊物に鬼はや一口にくひてけりと云は堀川大臣國經大納言などの二條后を取りかへしたりし事を鬼といへるなり是は

人をたとへていふ誠の鬼には非ず江談云小松帝時仁和三年八月武徳殿松原有鬼食人則大怪也同廿六日帝崩御是其徴歟矣是は鬼の人をくふ例なり巳上　師云東國方に調食を毒味するをおにすると云也是は伊物に鬼一口と云詞にてかくいひならはせる成べし云々

身ひとりにふる泪の雨か　　志ば〳〵くだる泪なるゆへに身獨に降とはいへり　李白詩云沉憂心若醉愼恨涙如雨矣○古鳴泪雨とふらなん渡川水まさりなはかへりくるかに

夕暮は一かたならぬ思ひかな　　源氏早蕨卷云一かたならずわづらはしけれど丶云々○草根夕暮は心にあらぬ思ひ哉ひとり身を置宿の松陰　古郷の時雨につけて言傳よ一かたならす思ひやるとは

九十九夜　　風折烏帽子　卒都婆小町に注す

花摺衣色重ね　　色々の花をすりつけたる衣の色を重たる也公家衆官位にしたがひ裝束の色變るべし

裏紫の藤袴　　従三位の奴袴也表はうす紫也藤の花の紋有裏は紫也四位は只紫の無紋也

狩衣　　松風に注す

飲酒はいかに　　五戒の内殊に酒を大事といむ也大莊嚴經論曰身口意三業之惡行唯酒爲根本矣長阿含經に飲酒者有六種失沙彌尼戒に説三十六失智度論に擧三十五過○新古花の本露の情は程もあらし酒なすゝめそ春の山風李廣

盛久

○水日集足曳のやまとゝいふも山の迹これよりなれる此國の名そ　主馬八郎左衛門盛久主馬入道盛國子也又號櫛笥盛久琵琶法師平家物語云小松殿熊野參詣に櫛笥盛久御供して今樣なと舞かなで興を催しける文略　長門本平家物語廿卷云主馬入道盛國末子主馬八郎左衛門尉盛久は京都にかくれ居たるが年來の宿願にて等身の千手觀音を造立し清水寺の本尊の右脇に置奉り千日參詣す中略右兵衛佐殿北條四郎時政に仰られ盛久京都に居る由聞へければ北條京中を尋ね求けれ共尋ねえず或時下女來て云盛久は清水寺へ夜毎に參詣すと申ける北條悦で清水寺の道にて盛久を召捕て佐殿へ奉る盛久已に鎌

倉に下着す梶原景時仰を承て心中の所願を尋ね申に子細を不レ述早く斬刑に墜べしとて土屋三郎宗遠に仰て首を刎らるべしとて文治二年六月廿八日に盛久を由比の濱に引すへ盛久西に向て念佛 遍計申けるが如何に思ひけん南に向て又念佛二三十遍計申けるを宗遠太刀を拔頭を打其太刀中より打折ぬ又打太刀も目貫より折にけり不思議の思ひをなすに富士のすそより光二筋盛久が身に當たるとぞ見えける宗遠此由を佐殿に申す又佐殿の北方の夢に老僧來て盛久斬首の罪の當られ候狂て宥免候べき由申す北方誰人に御座するぞ僧申けるは或は清水邊に候僧也と申と覺えて夢さめて右兵衛佐殿に此由申さる依而盛久を召返されたり佐殿所帶はなきかと問給へば紀伊國に候しか共君の御領に罷成て候と申すさぞ候らんと仰られて件の所帶永く相違有べからずと安堵の御下文を給る云々　同巻云盛久同七月下旬の比歸京して先清水寺に參詣して本尊を拜し奉る當寺の師匠の良觀阿闍梨に由井の濱にて首きられんと云ける事を語申に良觀泪を流し去六月二十八日午刻に御邊の安置奉り給ひし本尊俄にたおれおはしまして御手二つにおれぬ一寺奇特の思ひをなしつるに扨は遼遠の道を分て信敬の人を助け給ひつる御心指誠に上代にも超たり新造の觀音の御利益古佛身に勝れたりと貴賤上下あおがぬはなかりける云々

いかに土屋殿に申べき事の候　土屋三郎宗遠は桓武天皇十代後胤中村庄主宗平子土肥次郎實平弟也已上大系圖　坂東八平氏の內也

唯今關東に下りなば　相坂の關より東を指て關東と云也又箱根を限りて東を坂東といへり續日本紀云坂東八國　東鑑云關東二十八箇國地頭矣　坂東八ヶ國と云時は武藏相摸安房上總下總常陸上野下野を云也

清水の方へ輿を立て給候へ　清水寺は田村に注す輿は邯鄲に注す

南無や大慈大悲の觀世音さしも草さしもかしこき誓の末一稱一念猶賴みあり　是等皆三井寺に記す

南無の二字は實盛に注す　さしも草は田村に注す

多年値遇の御結緣　値遇は二字共にあふとよめり法花壽量品曰諸佛出世難可値遇矣

音羽山濃つ心を人しらし　濃つ心とは切なる心也

音羽の瀧は田村に注す

見渡せは柳櫻をこきませて都ぞ春の錦なりける

古今集春上素性法師歌也詞書云花盛りに京を見やりてよめると云々　古今栄雅抄云柳はみどりに花は紅に咲まじりて見ゆれば都ぞ春の錦を織かけたる如くなると也こきませては混亂したる也掻雜と書也云々　劉后村詩云洛陽三月春如錦矣

錦と見ゆる古郷の空　古郷へ錦をきて歸ると云事をふくませたり實盛に注す

弓馬の家は安宅に注す白川は墨田川に注す

松坂　粟田口より日の岡に登る坂路也　平家物語云賀茂川さつと打渡り粟田口松坂にもかゝり云々　明月記云朝雞首已以到來云々持向松坂懸之矣　長明方丈記「歸りこん程をちきらん忘るなよ我まつ坂の松ならはまつ

四つ宮川原四の辻　四の宮河原は在安祥寺村東南　盛衰記云粟田口兩葉山四宮河原を打過て云々　河原今無諸羽明神の社の邊昔は河原也四の辻とは十禪師の辻を云歟十禪寺の辻は粟田口の北南禪寺の前を號鳥居小路此四衢曰十禪師辻歟○夫木明渡る四の宮河原衆踊て遠方人の數そ見えける　四宮は神社也在宇治郡山階郷所祭二座第一天兒屋根命第二太玉命也所謂世云諸羽明神是也矣　四宮とは所の名也昔此所に人康親王の山庄ありと土俗云其舊跡諸葉山の下十禪寺の西北にありといへり此人康親王と申は仁明帝第四の御子也世に山科宮と號す此親王の御事三代實錄に見えたりしかあれば四の宮とは仁明第四の宮の舊跡なる故に此名ありと云々　小町家集云西のみこのうせ給へりつとめて風ふくに「今朝よりはかなしの宮の山風やまた逢坂もあらしと思へは今案世の諺に蟬丸は延喜第四の宮と云故に今爰に四の宮といひて此次に蟬丸の歌の是やこの歌をつゞけたり蟬丸を延喜第四の宮にてましますと云事あやまり也蟬丸に注す

是やこの行も歸るもわかれては知もしらぬも逢坂の關　蟬丸の歌也蟬丸に注す逢坂の關は田村に注す

勢田の長橋　田村に注す

立寄かけも鏡山さのみ年へぬ身なれ共　鏡山は三井寺に記す○古鏡山いさ立寄て見てゆかん年經ぬ

る身は老やしぬると黒主

老曽の杜　江州也武者の宿と愛智川との間にあり観音寺山の麓清水と云所の少し西にあり海道のはた也小島之遊云老蘇の森と云所は只杉の梢ばかりにてあらぬ木は更にまじらず山もとかけて詠めのすへ見所多し云々〇續古立よれば袖こそぬるれ年へぬる身さへ老曽の杜の下露道圓

美濃尾張熱田の浦　美濃は班女に注す尾張熱田は景清に注す

廻れば野邊に鳴海潟　鳴海は尾張也　在熱田之巳方一里自此至参州八橋五里有潟名鳴海潟潮滿る時は行人上野を通る也〇詞花古郷にかはらさりけり鈴虫の鳴海の野邊の夕暮の聲爲仲

八橋　杜若に注す

高師山鹽見坂橋本の濱名の橋を打渡り　いづれも遠江也高師山は在三河白須賀之交北は山南は海也中間原也過れば鹽見坂也富士見ゆる也又攝州に同名あり高師の濱は和泉也〇續古猶しはし見て社ゆかめ高師山麓にめぐる浦ハ松原爲氏　鹽見坂は麓は白須賀の宿なり南は遠州洋也無双の風景也丙辰紀行云白須賀より西の方へ登る一つの坂あり大洋眼前にあれば潮見坂と名づく云々澤庵和尚東關記云鹽見坂を登りて中略坂とはのぼり行道を云にあらずのぼり〳〵てうへなるを坂とは云也誠に此所はうへ平にして海を見おろす是を坂の本意とぞ思ふ云々〇堯孝富士紀行今そはやねかひみちぬる鹽見坂心ひかれし富士を詠て橋本は白須賀濱より一里也橋本の北に水海有其流れの川の橋也今の海道なり長明海道記〇橋本やあらぬ渡りと聞しにも猶過かねつ松の村立濱名の橋は水海より北の山きは也橋本より三里計北也古は海道也　扶桑略記云遠江國濱名橋長五十六丈廣三丈三尺高一丈六尺貞觀四年修造二十餘年既以破壞勅給彼國正税稻一萬二千六百三十束改作矣　濱名橋始て作る事桑平に注す〇拾汐みてる程や行かふ旅人や濱名の橋と名付そめけん兼盛

思ひきや命なりけりさよの中山は是かとよ　新古今集羇旅の部に西行法師歌に年たけて又こゆへしと思ひきや命也けりさよの中山　右詞書云あづまの方に罷けるによみ侍りける云々歌の心は西行老後に二たび此山をこゆるとてよめる成べし佐

夜の中山は遠江也在新坂金谷之交峰有観音堂只廣くひくき山也山の中五十町也
愚秘抄云さやの中山にて侍るを夜の詞大切なる時はさ夜の中山とも云也本はさやの中山也やとよと聲かよへり云々古今榮雅抄云前中納言師仲卿五條三品入道などさよの中山と歌に讀給へるを源三位頼政は父仲正が下總守にて下りける時に土民さやの長山と申といふに西行も其定めにて長山とぞ申ける又寂蓮法師は古の中道をも長道と申とぞ申侍りし云々

かはる淵瀬の大井川　丙辰紀行云大堰河は駿河と遠江との境なり明日香川ならねど霖雨ふれば淵瀬かはる事たびたびなれは東の山の岸を流れて島田の驛河原の中に有事も有西の方に流れて金谷の山にそふ事も有一筋の大河となりて大木沙石をながす事も有あまたの枝流となりて一里ばかりが間にわかるゝ事あり下略○名寄思ひ出る都の事は大井川幾瀬の石の數も及ばし　安嘉門院四條

宇津の山　駿河也宇津の谷共云蔦の下道岡邊の里なと同所也峠より富士は東に近く見えたりと山を越過ればまりこ川と云あり證歌略之

清見潟は三井寺に記す三穗の入海は羽衣に注す

田子の浦うち出て見ればましろなる　萬葉集に赤人歌に「田子の浦に打出て見ればましろにぞ富士の高根に雪は降ける　此歌のましろを白妙になし雪は降けるを降つゝとあらためて新古今集に入たり田子の浦は駿河也ましろはしろき也

雪の富士のね箱根山　富士は富士太皷に注す箱根山は伊豆相摸兩國にかゝりたる山也一云元明天皇和銅七年始開箱根山矣　權現は班女に注す箱根關は小田原を上り樫木坂白水坂を過て箱根の驛の入口にあり

猶明行や星月夜はや鎌倉に着にけり　相州極樂寺の切通へ登る坂の下に星月夜の井とて有委く千壽に注す　堯惠北國紀行云極樂寺へ至る程にいと闇き山間に星月夜と云所ありむかし此道に星の御堂とて侍りきなど古き僧の申侍りしかば「今も猶星月夜こそ殘らめ寺なき谷のやみのともし火　鎌倉は鵜飼に注す

夢中に路有て塵埃を隔つ　夢中に行路は塵埃をも

いとはぬと也　詩人玉屑云杳無車馬送塵埃雁飛雲路聲低過客近天門夢易回矣大惠書云於一々塵中以夢自在法門開悟世界海微塵數衆生住邪定者入正定聚矣

百年の榮花は塵中の夢一寸の光陰は沙裏の金　百年の榮花も只塵の世の夢のごとし一寸の光陰をもいたづらに思はず砂中の金をゆり出せしがごとくと也樂天詩云百年富貴夢中事一旦榮花風前塵矣盧山外集云十年枕上塵中夢矣　沙裏の金といへる證文いまだ見あたらず

あつはれ　實盛に注す

盛久の獨言を仰候　獨言はひとりごち共いへり韓退之詩云無人坐獨謠矣是等ひとりごと也○誰かとふ哀友ある世ならはとひとりことして月をみる哉　學白集

讀誦　田村に注す

大慈大悲は薩埵の悲願　大慈大悲は三井寺に注す薩埵は自然居士に注す悲願とは衆生をかなしひて助んとの願也

定業亦能轉は菩薩の直道とかや　妙樂大師疏記十卷觀音品釋云若其機感厚定業亦能轉若過現緣淺微苦亦無徵矣　言は定て苦を受る身なれ共若機分厚く觀音を信ずるならばいかなる定業も轉ずべし又過去現在の緣淺くして信ふき者は少の苦なりとても徵なしと也菩薩の直道とは此釋の文觀音ばさつの直なる道と也

願は無緣の慈悲をたれ我を引導し給へ　大論曰慈悲有三種一衆生緣二法緣三無緣矣　此三種は空假中の三諦にあたる也無緣は中道の慈悲也中道とは寂而常照の理なるが故に無緣にして法界を緣するを無緣の慈悲と云也何れの途にも緣なき者に施などを無緣の慈悲と心得るは大きに非也　止觀第六曰無緣慈悲者即如來慈悲此慈悲與實相同體不取衆生相故非愛見不取涅槃相故非空寂非空寂故非法緣慈悲非愛見故非衆生緣無二邊相故名無緣矣　引導とは佛道に引導也　法花方便品曰但以假名字引導於衆生矣

法師品曰引導諸衆生集之令聽法矣
今生の利益若闕ば後生善處をも誰か頼まん　此世にて佛を供養せずしてそのまゝ果なば誰を頼みて善處に到べきぞと也　藥草喩品曰聞是法已現世安穩後生善處矣
二世の願望若空は大聖の誓約豈虚妄にあらずや
今生後生の衆生のねがひむなしくんば佛の誓約も皆いつはりにてあらんと也　如意輪經曰若我誓願大悲中一人不成二世願我墮虚妄罪過中不還本覺捨大悲難度衆生衛度相現悲愛衆生一慈如一子矣　大聖とは釋尊を云也百萬に記す　豈と云は俗になせにと云心也　廣韻曰豈安也焉也曾也矣　增韻曰豈非然之辭矣
或遭王難苦臨刑欲壽終念彼觀音力刀尋段々壞　法花普門品文也或は王命にそむける難に遭て既に刑罰の場に臨て身命終らんと欲する時彼觀音を一心に念せば害せんとする刀段々に折て其難を脱べしと也　補正記云今言刀杖段々壞者由人執殺具一折一來隨來隨斷轉顯力大矣
又衆怨悉退散と云文は射矢も其身に立まじければ

普門品曰諍訟經官處怖畏軍陣中念彼觀音力衆怨悉退散矣　言は公事沙汰諍に付て官處へ出るか又は軍陣の場に出て矢などの雨霰のごとく降來て甚怖畏事あらんに彼觀音の力を念せば衆の怨敵悉く退散すべきと也　補正記云怨者此難重也賊本求財怨本奪命此怨賊遍滿大千尚能攘之輕者豈不能救矣
種々諸惡趣地獄鬼畜生生老病死苦以漸悉令滅
普門品文也言は地獄餓鬼畜生種々の惡趣の苦或は人間の四苦等此觀音の力を頼み奉らば漸々に悉く滅し給ふべきと也　補正記曰種々惡趣通指九界九界望佛皆名爲惡次別舉三途地獄餓鬼畜生極惡故也九界二死皆有四相生老病死漸令除滅歸於常寂矣
生老病死四相長阿含經曰一生相謂五陰與起已得命根二老相謂生壽向盡餘命無幾三病相謂衆苦迫切存亡無期四死相謂盡也風先火次諸相敗壞身亡異趣故矣
三惡道　江口に注す
昔在靈山の御名は法花一佛今西方の主又娑婆爾現し給ひて我等が爲の觀世音三世の利益同じくは

南岳大師云昔在靈山名法華今在西方名彌陀濁世末代名觀音三世利益同一體矣畢竟此文の意は釋尊彌陀觀音御一體也と云心也　孝養集云嘆三寶云佛阿彌陀法法花經僧觀音也或曰昔在靈山名法花下略無住云古德口傳云昔在靈山名法華今在西方無量壽娑婆示現世觀音大悲一躰利衆生云々此文符合高野大師法華御開題之意引金剛頂經釋云妙法蓮花經者觀自在王密號也此佛名無量壽於淨名國土現成佛身於雜染世界名觀自在法花彌陀觀音一躰事此釋分明也矣

刑戮　鄭玄周禮註曰刑正人之法也矣　說文曰戮殺也矣　論語公冶長篇曰邦無道免於刑戮以其兄之子妻之矣

終の道　卒道共書今はの時なり　西要抄云つゐの道は人毎にのかれぬならひなれはかなはさらん事を下略　伊物○終に行道とは兼て聞しかときのふけふとは思はさりしを

睡眠　三井寺に注す

既に八聲の鳥鳴て　八聲の鳥とは鷄鳥を云也　袖中抄云鷄をば八聲の鳥といふ八聲なくゆへ也常に八聲なくには非ず曉にははつどりなかとりしばとりとて三しきりなくにはつとりには必ず八聲なく也云々一說此鳥夜の八つに鳴初め晝の八つに鳴終る故に八聲の鳥と云又一說八の字は和朝の文に用る所只數多く鳴と云儀にて八聲の鳥と云又四季共に鳴やむ事なき故に常世ハ長鳴鳥共いふと云々
新後撰○せめてたゞ聞もつくさは別路の八聲の鳥をさのみうらみし

金泥の御經　法涌菩薩金字にて般若經を書寫し七寶の函に盛事大般若經に出たり　榮花物語本雫卷云こんじやうを地にして金のでいして書たれば金泥の經也と云々

おもひの玉のを、の命も今を限りなれば　思ひの玉といひて玉緒とつゞけたりおもひの玉は念珠也玉の緒は命也

是ぞ別れの鳥の聲鐘も聞ゆるしの〻めに　別れの鳥別れの鐘は曉也戀の詞也東雲は安宅に注す

牢より籠の輿にのせ　盛久を牢より引出し籠輿にのせたり　字彙云牢所以罪人拘矣　說文曰牢閑養牛馬圈也矣　周禮曰充人繫于牢芻閑也必有

閽者防禽獸觸當疏云閽閽衛也牢牢固也矣　說
文曰獄确也矣　増韻曰狂獄所以繫囚也矣　說文
曰𤜓獄也矣　禮記月令疏曰𤜓牢也矣　惣而牢は材
木を以て作之獄は土の穴也　風俗通曰三王始有
獄夏曰夏臺商曰羑里周曰𤜓圄

由比の汀にいそきけり　相州由比の濱は東は飯島
西は靈山が崎其間二十三四町を由比の濱と云也賴
朝卿此浦邊にて弓馬の藝を興し給ひてより代々の
將軍此濱へ出遊し給ふ事あり東鑑に見えたり

敷皮しかせ　敷皮は凡寸法三尺二寸横二尺五寸也
裏は布本式也但主の好に順べし黑革菖蒲革にて緣
を取べし革は鹿の夏毛を用ゆ緒には黑革を好とす
緒付の方の上を櫛上其櫛形共云末々白毛と云敷用
口傳有

取落したゝ太刀を見れば二つにおれて段々となる
唐高僧傳云孫敬德と云人信觀音臨刑刀折て爲
二段其刀三度替るに折る事如前觀音の像の頂に
有三刀迹德終に免死也已上取意

たゞ茫然とあきれ居たり　韻會曰茫憂貌矣　増韻
曰茫失據貌也　列子曰茫然無以應矣　孟子曰芒
芒然歸矣

鎌倉殿　千壽に注す

それ不取正覺の御誓ひ　千手經曰復白佛言世尊
若諸衆生誦持大悲神呪墮三惡道者我誓不成
正覺矣

過去久遠の大悲の光り　壽量品曰我實成佛已來
久遠若斯但以方便教化衆生令入佛道矣
普賢觀經曰以大悲光明爲於行者說無相法
矣

初夜より後夜の一點迄　天鼓に注す

蕭然として座したりしに　蕭然は心をすましづ
かなる體也　韻會曰蕭然寂寥貌矣　前食貨志曰
江淮之間蕭然煩費矣

六窓いまだ明ざるに　六窓は六の窓也是を六根に
たとふ然るを上の諷詞によりて六窓を夜の明六に
いひかけたり　傳燈錄曰仰山慧寂禪師過朗州
洪恩禪師問如何得見性師曰譬一屋有六窓內
如有一獼猴東邊呼東邊應西邊呼西邊應六窓俱呼
亦俱應矣　言心は六窓を六識に喩へ獼猴を意にた
とふ世の人の意常に五塵六欲に馳てしづかならす

其嘆事獼猴のことしと也

耿然たる一大　韻會曰錢氏云耿小明也矣　杜林説曰耿光也矣　今案本文耿然と書たれ共耿灯の光り也謡の心は佗の明方をいへば果の字成へし　毛詩注曰果々然日復矣　説文曰果明也叉日在木上日登于扶桑是謂朏明故果字日在木上矣

八旬　八十歳を云也　説文曰旬徧也十日為旬　師古曰旬歳滿歳若十日之一旬矣

香染の袈裟　袈裟に三種の色有一には青色銅青とて銅のさびより出たる色のことく也二には黒色菓の汁を鐵器の中に入又池井の泥にて染る也藍染の色は斥之也穀生あるが故也三には木蘭色木蘭樹の皮にて染れは香氣あり香染の袈裟は此三種の中の木蘭色を云也

水精の數珠をつまぐり　つまぐりとはつまみくる也　數珠功徳經曰若為自他有念誦諸陀羅尼及佛名木槵子千倍求生淨土者受此珠水精有萬倍菩提子無量倍矣　水精は聞寺に記す數珠は自然居士に注す

鳩の杖　鳩は食するに噎ざるもの也依て老人の杖の頭に鳩の形をきざみて是をつく也周禮羅氏註曰鳩性不噎食之助氣矣　後漢書禮儀志曰仲秋之月縣道皆安戸比民年始七十者授之以玉杖餔之糜粥八十九十禮有加賜玉杖長尺端以鳩鳥為飾鳩者不噎之鳥也欲老人不噎矣　古今原始云漢高祖與項羽戰敗追急匿井中有鳩鳴其上帝得免及即位制鳩杖示不忘患難也矣

年中行事
○積けき君かよはひをさかさまに年月ゆかん鳩の杖なり

洛陽　野宮に注す

唯一音なりとても我を念する　普門品曰一心稱名觀世音菩薩即時觀其音聲皆得解脱矣

發心　熊坂に注す

歡喜の心限なし　法華偈曰或以歡喜心歌唄頌佛徳乃至一小音皆已成佛道矣　歡喜二字は田村に注す

頼朝　舟辨慶に注す

千秋萬歳　戰國策曰寡人千秋萬歳之後誰與樂此矣　韓非子曰巫祝之祝人曰使君千秋萬歳之聲聒

耳矣（秋十五ノ歌合）●君かへんよはひに契れときは山千秋万世露をかさねて書仍

菊の酒　紅葉狩に注す

平家譜代の侍　譜代とは代々主人につかふるを云也　韻會云譜者普也序世數事又世系曰譜矣又譜第共書　弘安禮節云侍曰五位六位下北面者是也又公家諸司官人源平兩家武士任五位六位者皆曰之侍矣

武略の達者　武略とは武は武士也略は計也　左傳曰使敗王略王與之武公略註略界也矣　白氏文集五十四曰蕃武略於韜鈴宜吏能於符冊矣

堪能　藝能に上手なるを云也　廣韻曰堪可也矣　万善同歸云所有衆善隨己堪能矣

一年小松殿北山にて茸狩の遊路の　公卿傳曰小松内府重盛太政大臣従一位清盛公一男母右近將監高階基章女也云々　琵琶法師平家物語云小松大臣熊野より下向ありていくほとなく病ひつき給ひぬ治承三年七月廿八日出家し給ひ法名證蓮とそつき給ふやかて八月一日臨終正念に住して失給ふ御年四十三云々　山槐記云治承年中重盛公熊野參籠下向之後數日臥不食病薨又略　小松殿茸狩の事未考

主馬の盛久　職原抄云主馬者重代侍等所望補也　職員令云主馬首一人掌供進乘馬鞍具之屬矣　百寮訓要抄云主馬は春宮の内の御馬を奉行する職也云々

一天四海　高砂に注す

人の國まて日の本の　匠材集云ひとの國は他國也又唐國を云也云々但爰にては唐を指て云也　伊勢物語云人の國にても猶かゝる事なんやまさりける云々是は他國を云也眞名本に他國と書　冷標卷にひとの國にも事うつりと有是は唐を指て云也又八幡の託宣に他國より我國とあるもろこしをいへり　續古（長時）●久にへて君々なれと守らし他國より我國の爲　是も唐をよめり日の本は花筐に注す

唐が原　相州片瀬川の東の原を云也　更級記云唐が原沙子いみしくしろく大和撫子こくうすく錦をひけるやうになん咲たりと云々（夫木）●名にしおはゝ虎や臥らん東野にありといふなる唐の原（忠房）

鶴岡の松の葉の　相州鎌倉鶴岡は雲井か嶺と云り

社檀西河也在所雪の下と云礒邊十八町に大鳥井有改暦雜事記云鶴岡八幡宮後冷泉院天喜六年癸卯鎮座矣　二十二社註式云本社者人皇七十代後冷泉院御宇伊與守源朝臣頼義奉勅定征伐安陪貞任之時有丹祈之旨康平六年八月潜勧請石清水建瑞籬於當國由比郷今號下若宮保元年二月陸奥守源朝臣義家加修復云々其後治承四年十月十二日源頼朝崇祖宗奉遷小松郷矣

新拾〇鶴が岡こだかき松を吹風の雲居にひゞく萬代の聲　基氏

松の葉の散うせすして正木のかづら　古今集假字序の詞也正木のかつらは長きといはん枕詞なり依て長居はおそれありとつゝけたり高砂に注す

長居は恐れありとまかり申仕り　史記越世家曰范蠡以爲大名之下難以久居矣　古今榮雅抄云國子任に趣に參內する時暇乞をまかり申といふ日本紀に辭見と書暇乞也云々

女郎花

藻鹽草云平城天皇の御時小野頼風と云人男山に住けり京の女と契りし後彼女八幡へ尋ね行て頼風が事をとふ家なるもの答云此程はしめたる女房ましますが其所へ行給ふとこたふ此女うらめしく思ひて八幡の川の端に山吹重の衣ぬき捨身をなけ死けり其衣くちて女郎花生出たるなりと云々　古今秘抄云頼風あはれみて遂に河に飛入て死す世の人是を哀み同所に塚をつきしなりと云々　改暦雜事記云大同元年小野頼風妻化女郎花矣

是は九州松浦方より出たる僧にて候　松浦は　日本紀第九曰神功皇后元年夏四月到火前國松浦縣而進食玉島里小河之側於是皇后勾針爲鉤取粒爲餌抽取裳糸爲緡登河中石上而投鉤祈之曰朕西欲求財國若有成事者河魚飲鉤因以擧竿乃獲細鱗魚時皇后曰希見物也故時人號其處曰梅豆羅國今謂松浦訛也矣　松浦は郡の名也筑紫の人の物語に松浦玉島川の鮎は女のつれはかゝり男つれはかゝらずといへり　九州は高砂に注す僧の字は田村に注す

するしらぬひの筑紫かた　しらぬひの筑紫は白樂

天に注す筑紫は櫻川に記す
急候程に是ははや津の國山崎とかや申候　山崎は山城乙訓郡也津國にあらす津國は高砂に注す
石清水八幡宮　弓八幡に記す
我が國宇佐の宮と御一躰にて候程に　我國とは此備肥前國松浦より出たり但し宇佐宮は豐前國にましします我國の宇佐宮と作るは相違せり
宇佐宮は在豐前國宇佐郡所祭神三座也　延喜神祇式曰三座一八幡大菩薩二比賣神社三大帶姫廟神矣　御鎮座本緣云欽明天皇三十一年於菱潟峰現三歳小兒立竹葉詫宣云我是日本人皇十六代譽田天皇廣幡八幡麻呂也矣　廿二社註式曰豐前國宇佐郡菱形山廣幡八幡大神坐郡家東馬城峰頂後人皇四十代聖武御宇神龜四年就此山奉造神宮名曰廣幡大神宮矣　此二所の宮所は山也名小倉山高さ十二丈めぐり三百九十餘歩ありめくりに川流て島のことし依て日本紀に宇佐島と稱す西より北に寄藻川なかれ南より東に御物川なかるやかて其下にて一川となる小倉山は兩川の中にあり

野草帶花連蜀錦桂林拂雨調松風　證文未考追而可尋
此男山の女郎花は古歌にもよまれたる名草也　古今榮雅抄云男山は女郎花の名所也云々男山は八幡山を云也　末社記云雄德山と書或は鳩峰共稱す行教又香爐峰と名つく一云香爐山共云　男山の女郎花古歌に多くよめり證歌略之
家づと　雲林院に注す
花色如蒸粟俗呼爲女郎戯に名を聞てたに偕老を契るといへり　文粹第一云源順詠女郎花詩云花色如蒸粟俗呼爲女郎聞名戯欲契偕老恐惡衰翁首似霜矣　詩の心は女郎花の色黃にしてむせる粟に似たり女郎の名に付て偕老の契を結はんと思へは我身の老衰へて首の霜の如になるをいとひやせんと恐るゝ也偕老は楊貴妃に注す
或抄云此詩に如蒸粟と作る一說如蒸粟云々
但蒸粟はむしたる粟に非す木の名に蒸粟と云有魏文帝與鍾大理書曰赤擬雞冠黃作蒸粟矣　王逸正部論曰赤如鷄冠黃如蒸粟白如猪肪矣
女郎花さけるはむせる粟に似て姿は老の女成けり

名をえて咲るをみなへしのおほかる花に取分て
古○女郎花おほかる野邊に宿りせはあやなくあたの
名をやたちなんおのゝよし木
彼菅原の神木にもおらで手向よと　菅原の神木と
は筑紫安樂寺の飛梅を云也　新古今集神祇云建久
二年の春の比筑紫へ罷けるものゝ安樂寺の梅を折
て侍ける夜の夢に見えけるとなん「情なく折人つ
らし我宿の主わすれぬ梅の立枝を　聖廟此梅を愛
し給へるを折けるによりて折人つらしとの御神詠
也依てをらて手向よとはいへり
折とらはおふさにけかるたてなから三世の佛に花奉
る　後撰集春下僧正遍昭歌也五文字をりつれはと
有詞書云彌生はかりの花の盛りに道まかりけるに
と云々歌の心は手にておれはけかるゝ間其儘三世
の諸佛に花を供すると也八雲御抄云たふさは手也
と云々
僧正遍昭は名にめてゝおれる計そ女郎花我をちにき
と人にかたるな　古今集秋上に題しらす僧正遍昭
と有　同序古注云さか野にて馬よりおちてよめる
と云々歌の心は女と云名にめてゝ馬よりおちたる

計そ我落たると人にかたるなと也出家落墮したる
はよからぬ事なれはたはふれていへり僧正の官は
大會に注す遍昭は雲林院に注す
しのふの摺衣　小鹽に注す
女郎と契る草の枕を　續後拾○女郎花よるなつかしく匂ふ
哉草の枕もかはす計に安撰
女郎花うしとみつゝそ行過る男山にしたてりと思へ
は　古今集秋上に布留今道歌也　詞書云僧正遍昭
がもとにならへ罷ける時に男山にて女郎花を見て
よめる云々　榮雅抄云男山に女のたてるがよから
ぬ事とみつゝそ行といへり女郎花とかけは女によ
そへてよめりと云々
なまめきたてる女郎花　なまめくは井筒に注す
古○秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし
花も一時遍昭
うしろめたくや思ふらん　うしろめたくは熊坂に
注す古○女郎花うしろめたくも見ゆる哉あれたる宿
にひとりたてれは兼覧王
邯鄲の假枕は邯鄲に注す和光のちりは龍田に注す

河水に浮ふうろくつはげにも生るを放つかと　毎年八月十五日八幡宮神事に放生會を行はるゝ也　今昔物語云八幡大菩薩は初め大隅國に現れ給ひて次に宇佐宮に遷せ給ひ遂に此の石淸水に跡を垂おはします御託宣に依て生類を放つ毎年八月十五日を定て大菩薩の寶前より宿院に下せ給ひて放生の員を申上る　又こゝに法會を儲て最勝王經を令講給ふ其故は彼經に流水長者が放生の功徳を佛とき給ふ故也 文略　公事根源云石淸水放生會者八月十五日也毎年自八月一日至十五日遣人諸處買數萬膳魚而放之山下小河十五日早朝爲其供養神輿降山下祠官雖衣服伶人奏伎樂供奉甚嚴法會雖神輿還山上時祠官等脱禮服着淨衣簪白枝着草鞋蓋准葬儀也是日朝廷差上卿宰相辨衛府命于男山内藏寮使受宣命自延久二年准行幸儀式六府已下供奉矣續日本紀云元正天皇養老四年九月異國襲來日向大隅國大亂朝廷祈宇佐神宮平寇賊大神託曰是戰其死傷多我甚憐之願寇平之後置放生于諸國八幡放生會自此始 文略　是よりさき敏達天皇七年冬放生事月毎に六日又持統天皇三年秋八月詔放生所又天武天皇五年八月十七日詔諸國放生せしむ 日本紀取意　石淸水放生會は貞觀五年八月十五日始て行はる後醍醐天皇の後世中靜ならすして中絶す延寶七年に如昔行はる云々

唐土にては唐肅宗乾元二年詔天下置放生池是始 見唐年中行事

○世にかくてなかるゝ身もすくはなん生る放つ神のめくみに

惠みぞしげき男山さか行道の有難さよ　さか行は榮へ行也山坂とつゝけたり○今社あれ我も昔は男山さか行時もありこし物を よみ人不知 古

此は八月半の日神の御幸なる御旅所をふし拜み　當社神事八月十五日は唐土の例に寄此日獻神の御幸とは總而諸社の祭禮を御幸といへ共別て當社の神事は天子の御幸に准ずる也　社記云後三條院延久二年八月十五日自今年上卿以六衛府馬寮准行幸扈從御輿矣　御旅所は男山の麓凡神を云也或は宿院とも下院共いへり　社記云貞觀二年六月十五日行敎造神殿矣　毎年放生會の時此宿

院にて法會をおこなひ給ふなり
久堅の月の桂の男山さやけき影は所からかも　續古今集神祇に卜部兼直歌也　詞書云大納言通方よませ侍りける石清水歌合に社頭月と云事をよめると云々歌の心は桂男は月の異名なれは男山の月は所から影もひとしほさやけきと也久方及月の桂は羽衣に注す
かけろふの石清水　　弓八幡に注す
苔の衣も妙なりやみつの袂に影うつる　　和州大安寺の行教和尚は姓は紀氏武内宿禰之後益信僧正の舍弟也帝に八幡大菩薩を信じ貞觀元年宇佐宮に參り一夏寶前にして晝は金剛般若夜は密教を誦す九旬不レ怠于時歸洛する間七月十五日夜半に大菩薩示し給ふ我王城を護らん汝我を具し行とて行教の着たる衣に金色の三尊の御姿にて遷らせ給ふ行教歡喜して同廿日上京す八月廿三日山崎の邊に宿す廿五日の夜又示現有南方男山に向て大菩薩を拜し奉る山城巽の方の山頭に和光の影日月の如く照耀し給へり和尚件の事を奏聞するに九月十九日勅使を被レ下石清水に勸請して宮殿をいみじく作らせ給ふ今昔ノ語文略金色の三尊行教の衣に移らせ給ふが故に三の袂に影うつるとはつゝけたり三の袂とは三衣の事也三衣とは　釋氏要覽云薩婆多論云僧伽梨有三品一自九條十一條　三條名下品衣皆兩長一短作十五條十七條十九條名中品衣皆三長一短作二十一條二十三條二十五條名上品衣皆四長一短作矣（夫木）石清水すみ初めけん月影のみつの衣に影そうつりし衣笠内大臣
玄るしの箱を納むなる　璽の箱は御神體勸請の箱なり　眞言傳云貞觀七年九月十九日勅使を被レ下御殿を作る造り終て後御體を安置し奉る彼御體と云は行教和尚の三衣の上に阿彌陀三尊移り御座す件の三衣を以て御體とす云々今案彼三衣を箱に納め是八幡の御垂跡の印なればとて此箱を玄るしの箱と云也草根集に此心をよめる「八幡山三の衣の玉手箱ふたつはたちぬ雲よ霞よ　百練抄云大治二年十月二日諸卿定申宮外記勘申八幡宮璽御宮破損可レ被修補哉否以件璽宮為御正體矣　園太曆云貞和二年八月石清水放生會時璽御箱自御輿令落給准據例大治二年八月廿六日彼宮寺言上

云當宮中御前與御宮破損以今月十五日卯時所見付也同九月十一日宮寺所司等請文云件御宮者當宮建立當初物也然者建立祖師行教和尚被始置歟不銘日時隨則毎年放生大會之外輙無奉取出之例者爭准神寶破損例可令勘申哉下略件破損宮不及修補以舊損宮被納新造宮依難動靈物也云々垂御宮一合高二寸餘口徑一尺五分八角矣

法の神宮寺有難かりし靈地かな　　神宮寺は號大乘院在宿院北科手里中興祖叡尊改爲律院今千手堂古金堂也惣而神宮寺は八幡に不限兩部習合の社にあり或は神宮院共云也社に附たる寺院也社僧此所にあり

鳩の嶺は弓八幡あけの玉垣は白髭なふ〳〵は江口に注す

みとしろの錦かけまくも忝と伏拜む　　續千載集に見としろ小田にしめはへてとよめるは神の田をいへり　匠材集云みとしろは神田也云々爰の見としろは戸帳也御戸代と書　おちくぼ草子云澤野中納言六角堂の觀音へ子たぬを願ひ七日通夜なされしにまんずる夜の曉の夢にみとしろの内より金の箱を給はりしと云々かけまくも忝は難波に注す

又此山の麓に男塚女塚とて候を　　志水町の東左の田の中に女郎塚あり是女塚也土人此地云女郎花頼風が塚は道の右にあり其間三十間計有是男塚と云今は男塚の側に寺を立常念佛あり万稱寺と號す

小野の頼風と申しゝ人　　平城天皇御宇人也系圖不詳舊抄云少將小野良實四世孫云々

一夜ふす男鹿の角のつかの草　　古歌熊坂に注す塚の草といひかけたり

南無幽靈出離生死頓證菩提　　通小町に注す

あふ廣野人稀なり我古墳ならで又何者そ骸をあらそふ猛獸は禁するにあたはす　　九相詩云野外人稀何物有爭肺猛獸不能禁矣　　二人比丘尼云ところ〳〵の肉もきれ腸は破れてあたりに見たれ犬はあらそふて東西にむらかる云々　　父子相迎云たゞ野原に行てしにかばねのふせるを見よ四支肪脹て虫うみしるをはみてむぐめき五體爛壞して烏鷹をつかみて爭ふ是なんさなからありの儘なる姿なる

愛着の心猶いかゝおもふと云々　私云あふ廣野と云事いぶか　是は大廣野と云義歟さあれはかなもちがひ其上湯桶文章とて音とよみとをつゝくる事よろしからず猶可レ尋

うら紫か葛の葉のかへらばつれよいもせの波　玄旨云葛は初秋よりうらを返すもの也と云々　紫は色のかへりやすきもの也依てうら紫か葛の葉のかへらはとはつゝけたりつれよとはかへらばつれだゝんと云義也（新古）葛の葉のうらみに歸る夢のよを忘れかたみの野への秋風

少し契りのさはりある人まを誠と思ひけるが　人まとは人のすき間也　浮舟巻云御身づから人まにめしよせたりと云々○（古）くるとあくとめかれぬ物を梅花いつの人まにうつろひぬらん

都をひとりあくがれ出て　古今榮雅抄云あくかるゝはあちこちゆく也浮宕と書と云々　又あこかれ其云也くとこと相通也（後拾）物思へは澤の螢も我身よりあくかれ出る玉かとそ見る　和泉式部

放生河に身をなぐる　放生川は源河内國烏帽子山より出又木津川を流れわかれて男山のふもとをめぐる末は淀川に入なり

あへなき死骸計なり　あへなきとは物のもろき事をいへり無安倍と書　竹取物語云安倍多と云者かくや姫にめでゝ火鼠の皮を求けるに試んとて火の中に入けるにめら〳〵ともえけるより安倍なしとはいひそめたる也と云々　綺合巻云安倍多がちゞのこかねを捨て火鼠のおもひ片時きえたるもいとあへなしと云々　河海抄に無敢と書

其墳より女郎花一本生出たり　靈鬼志曰漢有二一女子一容貌美卒死葬曰明日見二其塚一盡成二菊花一故名二菊花女一亦名二女郎花一矣　白氏文集三十一題二木蘭花一詩曰應レ添二一樹女郎花一矣　今案女郎花は木蘭及菊花とは其形異也追而可レ尋　和名抄云新撰万葉云女郎花和歌云女倍之矣　女郎花其葉細長七月出レ穗開レ花最細小正黄色也花白者男倍芝云云々

爰によつて貫之も男山の昔を思つて女郎花の一時をくねると書し水くきの跡の世迄もなつかしや　是に依てといふへき筈を爰にとうたふはおやまたる

歟　古今假字序云男山の昔を思ひ出ておみなへしの一時をくねるにも歌をいひてぞなくさめけると云々　古今榮雅抄云「今社あれ我も昔は男山さかゆく時もありこし物を讀人不知一秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花も一時僧正遍昭此兩首の心にて男に女を對してかけりしかも男山の歌は男の遁世のとき昔を思ひ出てよめり女郎花の歌はをみなへしのなまめきたてる花の姿ものいひかしかましく見ゆれと花もたゞ一時の程にてあるそと女のさかりの程なき事を男のそねみたるよし也男山の昔を思ひおみなへしの一時をくねるにも歌をいひてぞ心をなくさむると歌の徳を書たる也云々一時とはめでつる心は〻也と云々藻鹽云　古今序に女郎花の一時をかねるとは彼賴風が事をもて貫之かける也又くねりと云事は違する亦也取意一說くねるはなまめく心又はしたなき心なりと云々　貫之は蟻通に注す水くきは筆也

閻浮（エンフ）　屋島に注す

邪婬（ジヤイン）の悪鬼は身を責て其念力の道もさかしき劔（ツルギ）の山の上に戀しき人は見えたり嬉（ウレ）しやとて行登れは劔は身通し　往生要集曰又復獄卒取地獄人置刀葉林見彼樹頭有好端政嚴飾婦女如是見已即上彼樹々葉如刀割其身肉次割其筋如是劈割一切處已得上樹已見彼婦女復在於地以欲媚眼上看罪人作如是言念汝因緣我到此處汝今何故不來近我何不抱我罪人見已欲心熾盛次第後下刀葉向上利如剃刀如前遍割一切身分既到地已而彼婦女復在樹頭罪人見已而復上樹如是無量百千億歲正法念經

こはそもいかにおそろしや劔の枝のたはむまて如何成罪のなれる果そやよしなかりける　金葉集云地獄の繪に劔の枝に人のつらぬかれたるを見てよめる和泉式部「あさましや劔の枝のたはむ迄こは何のみのなれる成らん　辨乳母集云宮程なくうせさせ給ひてその御いみに姫宮の御前御たうにおはしましゝに十さいとうの地獄へを人々よむに十八日つるきに人のつらぬかれたるを「いかにせん劔の枝のたはむ迄おもきは罪のなれる也けり　或抄に

は坂本來迎寺の十六幅の繪を見てよめると有異說多し

謡曲拾葉抄卷十四

山姑

此謡の大意に付て二義有一には旅行人の行くれて一夜の宿をかり山姑にあへると云事昔より童部なとの物語にいひもて來れるを此唄に作る成へし山姥とは山にすむ鬼女をいへり　本草綱目曰述異記曰南康有神曰山都形如人長一丈餘黑色赤目黃髮深山樹中作窠狀如鳥卵高三尺餘內甚光采體質輕虛以鳥毛爲褥二枚相連上雄下雌能變化隱形罕覩其狀若木客山操之類也矣　永嘉記曰安國縣有山鬼形如人而一脚僅長一尺許好盜伐木人鹽炙石蟹食人不敢犯之能令人病及焚居也矣　海錄碎事曰嶺南有物一足反踵手足皆三指雄曰山丈雌曰山姑能夜叩人門求物也矣　茅亭客話云邕宜以西南丹諸蠻皆居窮崖絕谷間有獸名野婆黃髮椎髻跣足裸形儼然一嫗也上下山谷如飛猱自腰以下有皮纍垂蓋膝若犢鼻力敵壯夫喜盜人子女下略　此謡に作る山

姥はいつれ此類ならん　二には山姑とは輪廻無窮の體を名付て曰山姑山者云世界姑者云凡夫一切衆生生死に沈輪するをよしあし引の山姥が山めくりするとは云也よしあしとは善悪の二つを云欲界に生るゝ衆生は智あるも愚なるも輪廻やむ事なし依て善悪共に山姥と見る也

よき光ぞと影頼む佛の御寺尋ねん　彼童部の昔物語をもて次第の詞とせりよき光そとは善光寺をいはんとてつゝけたり善光寺は柏崎に注す

是は都方に住居仕者にて候又是に御座候御事は百魔山姥とてかくれなき遊女にて御座候　衆生皆山姥なると云事をあまねく人にしらしめんがために諸國をめくる然るに眞の山姥出て姿をあらはし其に悟道の妙句をのふるならし　百魔とは百に不限種々に變化する心にて百魔山姑とはいへり山姑の一ふしをうたひまふ故に此名を得たり遊女とは女色をてらひうる遊女に非す遊はゆくと訓じて諸國を遊行する心也遊女は江口に注す

山姥の山廻りすると云事を曲舞に作つて御うたひ有により　宗筠口傳集云四座に曲舞と云字四品に替有觀世座に久世舞金剛座に口勢舞保昌座に九筒舞今春座に曲舞と書云々　又大倉家説には金剛久世舞觀世口勢舞と書也家に依て替有　うたひの字も四座にて替也　宗筠口傳集云觀世謡金剛保昌謡今春詠云々　或云うたひとはうたと云事也うたといへは和歌に紛るゝが故に是をうたひとゝなふる也惣て謡は和歌を以てつゝけたりうたひの字四座にかはるといへ共四字なからうたとよむ也

楽の字は鉢木に注す信濃國は兼平に注すさゝ浪やしかは三井寺に注す有乳山は安宅に記す

袖に露ちる玉江の橋　越前也朝水と云所に江川有是を玉江といへり昔は大きなる橋なるが今は小き橋也又攝州に同名有いづれも蘆の名所也（後撰）玉江こく蘆刈小舟指分てたれを誰とか我は定めん

梢波たつ鹽こじの安宅の松の夕けふり　安宅は在加州石川郡安宅松は鹽こしの松とも云也鹽こしは所の名也松は海邊にあり此所の前の内也　宗祇同國雑記云しほこしの松を尋ね侍りて「年波のほかにも高きしほこしの松の昔ぞくみてしらるゝ　○（雲玉集）越路行旅そ物うきくれ〳〵とあたかの松にかゝる

白雲衲叟

きえぬ浮身の罪をきる彌陀の劒の砥並山　　砥並山は在越中國木曾に注す彌陀の劒とは善導釋云利劍即是彌陀號一聲稱念罪皆除矣　是ゝ念佛を劒にたとへて極重の惡人成共此念佛を申せは即劒と成てもろ〳〵の罪過をきる也劒の砥並山とつゞけたるは劒をとぐといひかけたり○夫いづくにか我宿かせんやき太刀のとなみの關に越ぞ暮せる

雲路うながす三越路の　　雲路うなかすとは雲の行を云也　催と書櫻川に注す三越路は童蒙抄云越前越中越後を三越と云也云々越路と計云時は越前越中越後加賀能登を云又三越路と云時は越前越中越後を云なり

堺川にも着にけり　　越後越中の境川也○舟もなく　堀川百首岩浪高き境川水まさりなは人もかよまし　頼季

越後越中　　大和本紀云神武天皇元年見巡諸國山城近江を經て荒乳山を越給ふ都の外北陸道へ越初め給ふ山なればとて前に越る所を越前と號す次に利並山の中路を越る所を越中と號す又其次の國を越る處を越後と云是を三越路と號す云々　林逸節用集

云越中國上管四郡四方三日鹽藻魚龍多五穀器械多以漆致貢大々中國也矣　越後國上管七郡四方六日田當南帶北海五穀不熟糸麻多大々上國也矣

西方の淨土は十萬億土　　寶盛に注す

是は又彌陀來迎の直路なれは　　此人々善光寺の如來へ參詣する故にかくつゝけたり

あけろの山とやらんに參り候へし　　山姑の住家をいはんとてあけろの山を出したりあけろの山道筋にあらす越中越後の堺川の奥山也上道下道あけろ越とて難所也多くの谷峰繩を以て橋とせり乘物にて十度行より一度かちにて行を功德勝ると所の人申也

なふ〳〵は江口に注す鄙は田村に注す

よし足引の山姥か山廻すると作られたり　　足引の山は檜垣に注すよしあしとは善惡の二道を云也善惡共に誠の悟を得ずして皆輪廻にとゝまる也是を山めくりするといへり○心にし山姥と云名を付て道しれとてのうたふ曲　雜澤庵和尚　此謡の大意此歌にこもれり善惡の二つをよしあしとつがふ事は御裳瀰川歌合之序云　俊成　難波津の歌は人の心を和

くる中立と成にけれは是をよまさる人はなかるへししかあれと善とは如何なるをかいひ悪とはいつれを定むへきとは我も人も知所にあらさるもの也云々〇続拾もかゝり舟只同し江のよしあしを分るそよゝのまよひ也ける　藤原則俊
世情萬徳の妙花を開事此一曲の故ならすや　世間の人情になす程の事其一徳有事はひとつとして佛法にあらさる事なし皆萬徳具足の實相に相應する時は妙徳の蓮花のひらくる道理なり
舞歌音樂の妙音の聲佛事をもなし給はゝ　經文及歌舞音樂惣而聲を以て佛に手向るを聲佛事をなすといへり　法花疏曰論ニ娑婆國土ニ音聲爲ニ佛事ニ則甘露門開矣
などか童も輪廻をのかれ歸性の善所に至らさらん　善根の縁によりて輪廻をまぬかるへし歸性とは法性に歸入する善所に至らんとなり
時の調子　難波に注す
志ばさせ給へ　呉竹集云志ばらくまたせ給へと云詞也云々　古歌に志ばしのしの字を略して志ばとつかふ事多し万葉十四に志ばらくを志まらくともよめり
すはやかげろふ夕月の　すはやは咄哉其書楊貴妃に記すかげろふは月のかげろふるを云はかなきかけろふは源氏供養に注す夕月は阿漕に注す
あらはし衣の袖つきて　あらはし衣は右近に注す袖つきてとは或説に袖繼にはあらす袖着也万葉に袂著衣と書　雲玉集云袖つきは袖とき衣也わきをときたるかわ衣なるべし云々
手先さへぎる曲水の　養老に注す
岸林に骨をうつ靈鬼なくゝゝ前生の業をうらむ深野に花を供ずる天人返すゝゝも殺生の善をよろこふ　岸林とうたふは本文に不レ叶下かゝりには寒林とうたふこれは然るへし　名義集云梵音尸陀正云ニ尸多婆那ニ此翻ニ寒林ニ其林幽邃而寒也僧祇云此林多ニ死屍ニ人入レ寒畏也下略　寒林は天竺にて死人を葬する所也　昔外國に人有死して魂返て自其屍に鞭傍に沙門有て問云此人既に死す何を以てか鞭ぞ答云此屍は我もとの身也我前身經戒を見て不レ讀偸盜欺作し人の婦女をおかし父母兄弟に孝あらす實をおしみて布施せす死して惡道に落苦痛

いふはかりなし此故に來て鞭といへり又ゑはらく有て一人の天人來り花をさゝけ一の白骨に向て禮物す又沙門其故を問答云此白骨は我前生の骨也前生の戒法慈悲の故に今天人と生れたり故に來て禮拜すと云々 分別功德論乃阿育王譬喩經取意へ

いや善惡不二何をか恨み何をか悅はんや　善惡の二法もと眞如實相の妙法の一理なるが故に善惡不二也　誌公和尙云我自身心快樂翛然無善無惡法身自在矣　參問語錄曰至人逢苦不憂遇樂不喜矣〇あらましのねかひも移りかはる世に何を悅ひ又なけくらん 時方

万固目前の境界　万箇と万事也　碧巖曰滿目靑山矣　性靈集曰不假天眼万里目前矣

懸河渺々として巖峩々たり　あけろ山の景氣を云也　懸河者瀑の異名也瀧のおつる體さなから瀑布のかゝりたるやうなれは懸河とは云也　白氏文集二十七曰心如定水隨形應口似懸河逐病治矣　唐王勃傳云楊烱文如懸河之不竭矣　又云郭象淸言如懸河久而不竭矣　韓退之石鼓歌曰願借辨口如懸河 上下略　渺々は遠視之貌也花筐に注す

峩々は高貌也老松に注す

山復山何工削成靑巖之形水復水誰家染出碧潭之色　是は江澄明水策文也和漢朗詠集に入　上句山々の形おのつから靑き巖の削れるやうなるはいかなる工のゑはさそと也下句水の水色藍のことくみとりなるは誰家の染殿の染出せるそと云也碧潭はみとりのふち也此等皆天地自然の形そとなり 新古今〇山陰や水また水のふかみとりかはらぬ色に誰か染けん

うは玉　三輪に注す

髮には荊の雪を戴き　荊はいばらを云也蕪共書いはらのかたまりたるやうなる白き髮を云也　文集二曰綠窓貧家女寂寞二十餘荊釵不直錢矣〇夕 堀川七百首暮は玄ところに見ゆる山陰におとろの髮も葵かけたり

眼の光りは星のことし　論語隱義曰子路目如明星之光耀矣

さて面の色はさにぬりの軒の瓦の鬼の形を　さにぬりは沙丹塗と書丹にて赤くぬりたる也瓦とは河

原と云事也瓦屋の水の落流るゝ事さなから河原に似たればか原とは云也鬼丸は龍神の形を表したる也甍はいろゝ也龍鱗に似たればいらかと云也らとろと相通也又瓦の巴の紋は波也皆火災を退けんがためにかくなそらへたる也別行頌云龍有四種一守天宮殿持令不落人間屋上作龍像之下略

鬼一口　通小町に注す

かみなりさはきおそろしや　公羊傳曰有聲曰雷無聲曰電矣　淮南子曰陰陽相薄感而爲雷激而爲霆矣　月令曰仲春之月雷乃發聲仲秋之月雷乃收聲矣　抱朴子曰雷天之鼓矣　王充論衡曰圖雷之狀纍々如連鼓形而圖一人若力士謂之雷公矣　捜神記曰雷神色如丹目如鏡毛角長三尺餘狀如六畜頭似獼猴矣　大明一統志及廣輿記の雷州府の部を見るに英靈岡と云所より雷起り出春夏雷多秋は雷地中に伏て其形彘のことし或は人取之食す云々　かみなりとは上になると云訓也文字には鳴神共書伊勢物語に神さへいといみじうなりとあれ共神の事には非ず詞林三知抄云鳴神といかづちの事也非神祇云々

忘ら玉か何ぞととひし　○白玉か何ぞと人のとひし時露と答へて消なまし物を

春の夜の一時を千金に替しとは花に清香月に影此詩田村に記す

一聲の山鳥羽をたゝく　山鳥とは郭公也　朗詠集云許渾詩云一聲山鳥曙雲外万點螢秋草中矣

鼓は瀧波袖は白妙雪を廻らすこのはなの難波の事か法ならぬよしあし引の山姥が山廻りするぞ苦しき

鼓は瀧波は白樂天に注す白妙は田村に注す雪を廻すは融に記すこの花とは難波をいはんとてこの花とはいへり難波づに咲やこの花といふ歌をつゝけたり難波に注す　難波のことか法ならねといふ歌も難波に注すよしあし引とは是も難波に對していへり

夫山と云はちりひぢより起て天雲かゝる千丈の峯　古今序云高き山も麓のちりひちよりなりてあま雲たなびくまでおひのぼれる云々古今榮雅抄云一條禪閤御說二條家にはちりひぢとよめり冷泉家にはちりいちとよむ云々塵泥　塵土　塵居地と書　万葉仙覺抄云ちりひちとは草木のくたけたるをはち

りと云人馬などにふまれたるが風にふかれてたつをばひぢといふなり云々　說苑曰土積成山則豫樟生矣　文集曰千里始足下高山起微塵矣○白雲の八重たつ峰もちりひぢのつもりてなれる山にし非や後山本前左大臣

海は苔の露より玄たゝりて波濤をたゝむ万水たり
山谷詩云岷江始濫觴入楚則無底矣　後撰集に筑波根の峯より落るみなの川とよめる歌の心也波濤字は屋島に注す

一洞空しき谷の聲梢に響く山彥の一理の萬物に應じてひゞく處を名付て一洞空しき谷と云也むなしきとは閑がなる義也　山彥とは山谷の響なり山びゞきと云を略して山びこと云也きとこと五音相通也俗に山彥と木魅と一物にするはあやまり也木魅は木の靈精也本草綱目云彭侯木之精也千歲之木有精狀如黑狗無尾人面可烹食味如狗吳時敬叔伐大樟樹血出中有物即彭侯也矣

無聲音をきく便となり　莊子天地篇曰視乎冥々聽乎無聲冥々中獨見曉焉無聲之中獨聞和焉矣　楞嚴經耳根圓通曰音聲性動靜聞中爲有無無聲號無聞非實聞無性無聲既無滅聲有亦非生滅二圓離矣

前には海水瀼々として月眞如の光をかゝげ後には嶺松巍々として風常樂の夢を破る　、長門本平家物語第六云前には海水瀼々として月眞如の光を浮め後には嚴松森々として風常樂の響を奏す雲漾天に晴波西海に靜也誠に三尊來迎の儀式も便あり九品往生の望たりぬべし荊棘がま朽て螢窓しくさるかんこ苔深うして鳥驚ず上下略是は大納言成親卿吉備の中山の麓有木別所と云所にて果給ひ存命の間に古き障子に是を書置給へり其後成經康賴入道歸洛の時此所へ尋寄てかの手跡を見給ひ泪にむせび給ふ長門本取意　私云今案にうたふ處此長門本の文を以てつゞけたる成べし　瀼々者木玄虛海賦曰瀼々濕々銑注曰瀼々開合貌矣　月眞如の光とは眞如は自性眞實の躰を指て云也是を月にたとふる也　心也觀經曰凡夫所觀菩提心相猶如淸淨圓滿月輪於胸臆上明朗而住矣　菩提心論曰我見自心形如月輪矣　眞如は江口に住す巍々者　韻語朱子註曰巍々高大之貌矣　常樂とは佛果に常樂我淨の四德

と云事有此我淨を略して常樂を出せり　光明玄曰常樂我淨是爲徳無二生死爲常不受二邊爲樂是八自在爲我三業清爲淨矣

刑鞭蒲朽螢空去諫鼓苔深鳥不驚　朗詠集に江相公詩也上句は刑鞭は刑罰也鞭はむちうつ也蒲を鞭にして罪人を打事後漢書に見えたり聖王の代には罪ある者もなくむちせし蒲も朽て螢と成て去となり螢空去とは月令腐草化爲螢と云心也下句諫鼓とはいさめの鼓也帝堯の時始て諫鼓を置也民の憂有て訴る時は此鼓を打也然るに明王の代にはおのづから民のうれひなければ此鼓を打者もなく苔むして鳥も不驚庭におりゐると云也（堀川百首）打ならす人しなければ君が代にかけし鼓も苔おひにけり

紀伊
遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥かな　古今集春上に入題不知よみ人しらずと有よぶこ鳥は古今集三鳥の傳受也　古今寶枝抄云此歌は但馬守に成て下りける時中山と云所に留りたりけるに彼鳥の鳴を聞てよみける猿丸太夫が歌也云々

伐木丁々として山更に幽なり　杜詩曰山無伴獨相求伐木丁々山更幽矣　集註曰丁々伐木聲矣　詩經曰伐木丁々鳥鳴嚶々出自幽谷矣

法性峯そびえては上求菩提を顯し無明谷深きよそほひは下化衆生を表して金輪際におよべり　上求菩提下化衆生は菩薩の修業也　軒端梅に注す詞心は法性の峯そびゑたるを上求菩提にたとへ無明谷深きを下化衆生にたとへ菩薩の慈悲深き事金輪際までもおよべりと也　弘決曰法性不動如山衆生惡深如海矣　無明は源氏供養及び紅葉狩に記す
○菩提とは性をさとれる事そかし峯にたとへて上求とはいふ（澤庵和尚）○無明とは迷ひの名也まよひをは谷の深きにたとへてそいふ（澤庵和尚）

下化衆生を表して金輪際に及べり　下衆生の無明を化度し給ふを下化衆生とはいふなり上求菩提下化衆生の文は軒端梅に記す　金輪際とは此世界の下に地輪金輪水輪風輪空輪とて有　三界義曰水輪上有金輪厚三億二萬由旬水金二輪廣皆各徑十二億三千四百半由旬也矣　善見毘婆沙律第四曰地厚四那由他二萬由旬此大地底曰金輪際矣　際者窮

極名也　廣韻曰際邊也畔也矣
抑山姥は生所もしらず宿もなし　　此意卒都婆小町
に注す抑の字は高砂に注す
唯雲水を便にて至らぬ山の奥もなし　　文集八曰行
々弄雲水歩々近郷國矣　○雲水に乘ていつく
に行へきも心は念に引に任する同　○山姥と云は
心の名也けり心のゆかぬ奥山もなし同
假に自性を變化して　　自性とは其白の本分を指て
云也　四明教行錄曰眞如不守自性變爲諸法
矣　變化者　荀子註曰因形而易謂之變離形而
易謂之化矣　禮記月令註疏曰謂先有舊形漸
々改者謂之變離有舊形忽改者謂之化又天
地陰陽運行則爲化春生冬落則爲變又自少而
壯自壯而老則爲變自有而無自無而有則爲化
寒暑相易則爲變萬物生息則爲化又泛言改易亦
曰變化矣
一念化生の鬼女と成て　　一念の機に依て鬼共なり衆
生共なり佛共なる也　　倶舍頌曰地獄及諸天中有唯
化生鬼通胎化二矣　婆娑論曰毘曇中說天及地獄
一向化生鬼趣唯二謂胎及化人及畜生各具四生矣

邪正一如と見る時は　　邪は邪魔正は正見にて中道
實相也一如とは其邪正共に一眞如也善惡不二と云
に等し　知覺云眞僞皆一眞如皆一法身無有別
異不斷除矣○邪も正も其時々の當[illegible]り見は常
にひとつ也けり同
色即是空其儘に　　般若心經曰色不異空々不異
色々則是空々則是色受想行識亦復如是矣　寶藏
論曰空可空非眞空色可色非眞色眞色無形
眞空無名無名名之父無色々之母爲萬物之根源
作天地之太祖矣
沸法あれば世法あり　　華嚴曰佛法不異世間法
世間不異佛法矣　天台釋云若深識世法即是佛
法矣○佛法と世法は人の身と心ひとつかけてはた
ゝぬものなり同
煩惱あれば菩提あり　　仁王經曰菩薩未成佛時
以菩提爲煩惱菩薩成佛時以煩惱爲菩提矣
疏曰譬生死中有涅槃煩惱中有菩提矣　止觀曰
煩惱即是菩提矣　六祖大師曰煩惱即菩薩凡夫即佛
矣○煩惱は此身に逢ふほたいとは心を悟る事を云
なり同　石山紀行　○煩惱も菩提もひとつ心そと見ゆる物か

ら月の村雲稱名院
佛あれば衆生あり　惠心云懸念一切衆生悉有佛性矣　傳心法要云此心即是佛佛即是衆生爲衆生時此心不減爲諸佛時此心不添矣○佛とは心を悟る衆生とは身にまよふ物の名とは知へし澤庵和尚
衆生あれば山姥もあり　○身にまよふ衆生のあれは身に迷ふ山姥ありとうたふ一ふし同
柳はみどり花はくれなひの色々　東坡詩云柳緑花紅眞面目矣　一休水鏡云うたふもまふも法の聲柳はみどり花はくれなゐあら面白の春の氣色や云々
有時は山賤の樵路にかよふ花の陰休む重荷に肩をかし　○山賤の身を受へきも心にて重荷に肩をやつすはかなき同
又ある時は織姫の五百機立る窓に入て　織姫とはきぬをる女をいへり五百機とは五百立てをる機には非ずはたばりの廣きを云也○萬棚機の五百機立てをる布の秋去衣誰かとり見ん
紡績の宿に身を置　小學注曰紡以車績以指矣
貞觀政要曰毎一衣則思紡績之辛苦矣
志づの目に見えぬ鬼とや人のいふらん　目に見えぬ鬼とは古今序に目に見えぬおにかみをも哀れとおもはせとあるにてつゞけたり
世を空蟬の唐衣掃はぬ袖にをく霜は　世を空蟬のからとつゞけたるは世のはかなき事をいへり林希逸列子口義曰人世相代如蟬蛻矣　靈芝曰驅留刪去如蟬蛻十萬億剎剎那即至矣◎古今榮雅抄云空蟬の世ははかなき世を云うつせみはもぬけを云うつといふはむなしきといふ事也うつせ貝といふも身もなきから也云々　萬葉仙覺抄云うつせみとは我身をうつくしむ義也昔は物をほむる詞にうつ其いつ其いひし也うつせ貝も同じ云々　古今實枝抄云うつせみとは三義あり一には空蟬と書二には小蟬と書三には遷蟬と書云々○數ならぬ身を空蟬の世にかくてむなしく過ん果そ悲しき續後拾　衣色目云蟬の羽衣はうらのなきすゝしの惣名也或はおもてひわだ色にてうらのあをきよし也云々　覺悟抄云蟬の羽衣はうらなきすゝしの總名也一鳴聲またきかね其蟬の羽のうすき衣はたちそきてける
夜寒の月にうつもれ打すさむ人のたへまにも
夜さむと云時は秋なり夜を寒み夜る寒しなどいへ

ば冬なりうちすさむとは打やむ也源氏供養に注す
千聲萬聲の砧に聲のしでうつは唯山姥がわざなれや
砧に聲のしでうつとは山彦のひゞきを云也　文集
十九聞夜砧と云題にて作る詩に八月九月正長夜
千聲萬聲無止時矣　倭名抄云唐韻曰碪擣衣石
也和名岐沼伊太矣しでうつとは匠村集云しげく打
也云々○拾遺愚草白妙の衣してうつひゞきよりおきまかふ
霜の色に出らん○寶治百首山賤の袖の初霜よや寒きしてう
ち衣今いそくなり此等はしげく打心歟又萬葉仙覺
抄云衣しでうつとはしづかなる心也云々和歌色葉
集云しでうつは閑にうつ也云々　綺語抄云衣しで
うつとは一義にしめ〳〵とうつと云也一義にはし
と〳〵とうつと云也一義につちをいふ云々　私云
しでうつはしげきとしづかなるとの兩義ある歟
一樹の陰一河の流れも千壽に注す　○李花集おのつか
ら音する人もなかりけり山めぐりする時雨ならて
は西行
狂言綺語の道すぐに　源氏供養に注す
塵積て山姥となれり　○草根塵のなる山より高く出て
けり積し老の秋のよの月

東岸居士

傳云東岸居士自然居士弟子名玄壽字東岸東山雲居寺之僧也自少壯留志於頓宗以參禪爲業不被僧衣登高座説法或撃羯鼓踊躍或執扇舞人詰問不剃髪不着緇衣之故卒然日無從來之住所莫出家之謂不有出家不被僧衣髮者長亂恃自入道以東岸之柳爲拂拂知解之塵聞者鉗口不言弘安六年癸未夏寂矣　一遍上人緣起云或人法問尋申けるに書て遺されける理の法語云春過秋來れ共すゝみ難きは出離の道花をおしみ月を詠てもおこりやすきは輪廻の妄念也罪障の山にはいつとなく煩惱の雲厚くして佛日の光り眼に遮らず生死の海にはとこしなへに無常の風はげしくして眞如の月やどる事なし生をうくるに隨て苦に苦をかさね死に歸るに隨て闇よりくらきに趣く六道のちまたにはまよはぬ所なく四生のとぼそにはやどらぬ住家もなし生死の轉變をば夢とやいはん

うつゝとやいはん是を有といはんとすれば雲と登り煙ときへてむなしき空にかげをとゞむる人なしなしといはんとすれば又恩愛離別の歎き心の内にとゞまりて腸をたちたましゐを迷はさずと云事なし彼芝蘭の契りの袂に尸をば愁歎のほのほにこかせ共紅蓮大くれんの氷はとくる事有べからず鴛鴦のふすまの下に眼をば慈悲の涙にうるほせ共焦熱大焦熱のほのほはさめる事なかるべしいたづらになげきいたづらに悲て人もまよひ我も迷はんよりははやく三界苦輪の里を出て程なく九品蓮臺の都に詣ずし愛に苦惱のさやばはたやすくはなれがたく無爲の境界はなをざりにして至る事を得ずたま〳〵本願の强緣にあへる時いそぎはげまずしてはいづれの生をか期すべき他力の稱名はふしぎの一行なり彌陀超世の本願は凡夫出離の要道也身を忘れて信樂し華にまかせてとなふべし已上　今案此上人の法語を以て此謠を作る成べし

是は遠國方の者にて候我此程は都に登り　都の字味高砂に注す

清水寺　田村に注す

松をさへみな櫻木に散なして花に峰ある眞かな

是は古歌實未考追て尋ぬべし

是は承及たる東岸居士にて渡り候か　東岸の傳は東陽隨筆にも出たり居士は自然居士に記す

萬事は皆目前の境界なれば柳は綠花は紅說醉宵の春の氣色やな　是等の證文自然居士に記す

扨此橋はいか成人のかけ給ひたる橋にて候ぞ一是は先師自然居士の法界無緣の功力を以て渡し給ひし橋なれば今又ヶ樣に勸むる也　此橋とは謠に作る處白河の橋を云成べし三條の東白川の上に有此橋を自然居士の掛給ふと云事未考自然居士は東岸の師たるが故に先師自然居士といへり自然居士は自然居士に注す　法界無緣とは緣なき衆生をいへり盛久に注す法界大乘止觀曰法者法爾界者性別以此心體法爾具足一切諸法故言法界矣淸涼大師曰法界者一切衆生身心之本體也矣妙樂云所詮無外故名法界矣　說文曰橋水上橫木所以渡也矣　橋の始は唐土にては帝堯の時橋梁を作て以行往來を通すと古今原始に見えたり日本にては孝靈天皇五年始て勞多の橋をかくると云々橋の功德

の事正法念經云若有二衆生一於二河津一造二船橋一以テ
善心ヲ度二衆生一不レ作二衆惡一命終後生二梵天一受二
五欲樂一人中爲二王與藏一矣　大集經に橋の十德を
說り略レ之

扨々東岸西岸居士の鄉里はいづく如何成人の父母を
離れ御出家ぞや　西岸とは東岸の名に對してい
へり或は又保胤が作れる文會の序に東岸西岸之柳
とあるにてつゝけたり鄉里は古鄉也　史記秦始皇
本紀曰使三各反二其鄉里一矣　韻會云古人稱レ妻曰
鄉里一矣昔廬已隱士と云人假名乞兒と云出家に向テ
云君は何の國何の里の人誰の子ぞ乞兒大きに笑て
云三界は家なし六趣は不定也或時は天堂を國とし
或時は地獄を家とすいかでか決定の鄉里有べきや
と答ふ三教指歸諺の本文是に能相似たり

元來きたる所もなければ　維摩經曰文殊師利言如
是居士若來已更不レ來若去已更不レ去所以者何來
者無レ所二從來一去者無レ所レ至去矣又曰我觀二如來一
前際不レ來後際不レ去今卽不レ住矣

出家にあらねば髮をもそらず衣を墨に染もせで唯
自道に入て　莊嚴法門經曰金色女白二文殊一言聽二
我出家一文殊言汝出家者非下以二自剃髮一爲中出家上
若能發二大精進一爲レ除二一切衆生煩惱一是名二出家一
非下以二自被二染衣一自持中戒行上名二出家一能令三毀禁
者安二住淨戒一是名二出家一矣

善を見ても進まず惡を捨ても愚ならず　老子還淳
章曰絕レ聖去レ智河上公註曰棄二智惠一反二無爲一矣　三
略云善レ善不レ進惡レ惡不レ退矣　國語云郭公善レ善
而不レ能レ用矣　秦皇本紀云善尚不レ取況惡矣

東岸西岸の柳の髮は長く亂るゝ共南枝北枝の梅の花
文粹第八云東岸西岸之柳遲速不レ同南枝北枝之梅
開落已異矣是は二條殿の文會の序也保胤が作る也
隱岐百首注云昔榮花の御時は東岸西岸の柳南枝北
枝のちそくを御覽じてこそ春の立をもしろしめし
儀が今は引かへたる住居なれば略

彼岸に至り給へや　天台羅門云生死爲二此岸一涅槃
爲二彼岸一矣　章師云彼岸涅槃岸也彼涅槃岸豈崖岸
之有以三我異二於彼一故借レ我謂レ之耳矣隨身鈔云彼
岸渡二生死此岸一到二涅槃彼岸一故云二彼岸一矣

狂言綺語を以て讚佛轉法輪の眞の道にも入なればに
此意源氏供養に注す

御法の舟の水馴棹　御法の舟とは涅槃經曰乘大涅槃大乘寶船周旋往返濟度衆生乃至具是義故如來名曰無上船師矣　又柏崎にも注す水馴棹は兼平に出たり○賴もしなちかひの舟の水馴棹さすか心にかけぬ日そなき國冬

心の花は卒都婆小町に注す胡蝶の夢は舟橋に注す遊びたはぶれ舞とかや此歌難波に注す

鈔に又まうさくあらゆる所の佛法の趣箇々緣生の道すぐに　鈔とは誰の鈔ぞ未考鈔は師の釋したる云也　說文曰鈔義取也矣通俗文曰遮取謂之鈔又寫錄之目矣廣韻曰略也或作抄寫錄纂專之目也或云略取也矣　箇々緣生は舊抄云因緣所生と云文字の意歟と云々但禪錄等を見るに箇々圓成とつゞけたり心はひとつ〳〵の我等が本心を云成べし

但正像既にくれて末法に生を受たり　正像末の三時の事一如云如來入滅之後其教法住世有此三時不同也一正法時正證也謂如來滅後教法住世人有稟教者即能修行證果二像法時像者似也有教有行似正法時故也三末法時謂如來滅後教法垂世人雖有稟教而不能修行證果是名末法矣

曇無讖曰釋迦佛正法住世五百年像法一千年末法一萬年矣

春過秋來れ共進み難きは出離の道花をおしみ月を見ても起り易きは妄念なり　一遍上人の法語には花をおしみ月を詠ても起り易きは輪廻の妄念也と有則發端の詞也此意は飛花落葉の無常觀をいへり柏崎に注す

罪障の山にはいつとなく煩惱の雲厚して佛日の光晴難　上人法語には佛日の光眼に遮らずと有罪障の山は柏崎に注す　發心集云煩惱雲厚覆而長夜猶深矣

淨影曰佛能破壞衆生癡闇如日除昏故曰佛日矣新華嚴八十偈曰譬如淨日放千光不動本處照十方佛日光明亦如是無去無來除世暗矣文粹紀齊名句云夫應身早滅佛日之光西藏矣

生死の海には鎭に無明の波荒くして眞如の月宿らず　上人法語には生死の海には鎭に無常の風はげしく玄て眞如の月やどる事なしと有心は明に聞へたり生死の海は柏崎に記す鎭は高砂に注す無明は源氏供養に注す眞如の月は山姑に出たり

生を受るに任て苦にくるしひを受重ね死に歸るに隨て闇きより闇きに迷ひ六道の街には迷はぬ所もなく生死の扉に宿らぬ栖もなし　上人法語には四生の扉には宿らぬ栖もなしと有心明に聞へたり無量壽經曰善人行善從樂入樂從明入明惡人行惡從苦從冥入冥誰能知者獨佛知耳矣法華曰從冥入於冥永不聞佛名矣　大藏一覽云佛言從冥有四句一者從冥入明二者從明入冥三者從冥入冥四者從明入明矣新拾　六道は安達原に記す街の字は善知鳥に注す〇五月闇木の下道は冥きよりくらきに迷ふ道はくるしき　入道二品親王道圓

生死の轉變をは夢とやいはん又うつゝとやせん是等ありといはんとすれは雲と登り煙と消て後其跡をとゝむへくもなし　上人法語には雲と登り煙と消て空しき空に影をとゝむる人なしと有生死の轉變とは生死のうつりかはるを云是等とは生を受たる此身を云也死して後其かたち一片の雲煙と成て空にのほれ共其後はいつくに跡を留むる影もなしと也〇鳥部山おほくの人の煙たち消行末はひとつしらくも

なしといはんとすれは又恩愛の中心とゝまつて腸をたち魂をうこかさすと云事なし　法語にはなしといはんとすれは又恩愛離別の歎き心の内にとゝまりて腸をたち魂を迷さすと云事なしと有此意は本來一物なしといはんとすれは恩愛離別の歎きに心をとゝめ萬事に付てまよひみたれすと云事なしと云也斷腸とは至て悲しき心也鞍馬天狗に注す

彼芝蘭の契りの袂には襟をは愁歎の焔にこかせ共紅蓮大紅蓮の氷をは終にとかす事なし　法語には紅蓮大紅蓮の氷はとくる事有へからすと有芝蘭の契りとはよき友を云也有心明なり紅蓮大紅蓮は善知鳥に注す　家語大本篇曰子曰與善人居如入芝蘭之室久而不聞其香即與之化矣與不善人居如入鮑魚之肆久而不聞其臭亦與之化矣常に善人と交居れは芝蘭のある宮室に入か如く日久しく自其香を聞され其身即芝蘭の香に化す不善人も同之　說文云蘭香草也矣本草曰葉似澤蘭澤蘭方莖蘭圓莖白華紫萼生澤畔八月華一名水香俗呼燕尾香矣

鴛鴦の衾のしたに眼をは慈悲の涙にうるほせ共焦熱大焦熱の焔をは終にしめす事なし　法語には焦熱

大焦熱の焔は忘める事なかるへしと有是迄上
人の法語を以てつゝけたり是より以下略之鴛鴦
の衾とは妹背の中を指て云也心は明か也　太平記
十二卷云鴛鴦の衾の下に恩愛の養育を爲事生行
奉り御名をは菅少將とこそ申ける上下略　焦熱大焦熱
は善知鳥に注す　陳子昂鴛鴦篇曰劃翻清江浦交
頸紫山岑文章合奇色和鳴多好音聞有鴛鴦綺
復有鴛鴦衾特爲美人贈最此故交心矣唐李德
裕鴛鴦篇曰君不見昔時同心人化作鴛鴦鳥和鳴
一夕不暫離交頸千年尚爲少矣崔豹古今注云鴛
鴦雌雄未嘗相離人得其一則其一思而死故名
匹鳥矣陸佃云雄鳴曰鴛雌鳴曰鴦矣

殺生偸盜邪婬は身に於て作る罪なり　殺生は涅槃經
曰一切惜身命無不畏刀杖恕己不爲喩勿
行杖矣　正法念經曰造一所寺不如救一命
矣　智論云一切實中命爲第一諸罪中殺生罪爲
第一諸善中不殺生戒爲第一矣　偸盜地持論云
偸盜業墮三惡道人生得二果一貧窮二國王大臣
水火賊五家失財矣　方等經曰華聚菩薩曰五逆四
重我亦能救盜僧物者我不能救矣　邪婬十住毘婆
沙論曰或於自所有妻妾若受戒若懷姙若乳兒若非
道是名邪婬矣知論曰婬欲者雖不惱衆生繫
縛心故立爲大罪矣・

妄語綺語惡口兩舌は口にて作る罪也　妄語は正法念經
曰甘露及毒藥者在人舌中實語成甘露妄言則
爲毒矣又曰實爲第一善妄語第一惡矣　綺語成
實論曰語雖是實非時而說亦名綺語矣　地持
論云綺語業墮三惡道人生得二果一所說言
語人不信受二言說不明了矣　惡口雜阿含經
曰利斧在口中還自斬其身斯由惡言矣　地持
論云惡口業墮三惡道人生得二果一常聞惡音
二所可言說恒有諍訟矣　兩舌華手經曰惡口
而兩舌好出他人過如是不善人死墮惡道矣
地持論云兩舌業墮三惡道人生得二果一得弊
惡眷屬二得不和眷屬矣

貪欲瞋恚愚癡は又心に於て絕せず　貪欲は成實論曰
實苦凡夫顚倒妄生樂想智者見苦矣　又曰譬如
狗齩血塗枯骨增涎唾想謂有美貪欲亦爾矣
瞋恚大論曰以自大心故則喜生瞋恚憍慢是瞋恚
之本瞋是一切重罪之本矣華嚴經曰一切惡中無過

是惡一起一瞋心一則受二百千障礙法門一矣惑難　荀子曰非是是非之謂愚矣　法界次第曰迷惑之心名之為凝若迷二一切事理之法無明不了迷惑妄取起諸邪行一即是凝毒矣

とても物の事に羯鼓をうつて御見せ候へ　羯鼓錄曰以戎羯鼓故曰羯鼓矣　通典云以出羯號羯鼓矣　鼓鼓錄云羯鼓出夷以戎羯為名繁用南技矣　唐書云玄宗善擊之有時春寒花遲玄宗登樓擊羯鼓而催花百花一時開謂之羯鼓樓　文略

颯々は高砂に注す　范々は井筒に注す名におふは江口に注す洛陽は野宮に注す波の鼓は白樂天に注すさゝらは自然居士に記す

玉きぬのさい〳〵沈みうき波の　○萬玉きぬのさいさいゑつみ家のいもに物いはすきて思ひかねつも　万葉仙覺抄云玉きぬとはよき衣也物をほむる詞に玉と云常の事也さい〳〵ゑつみとはさいとはゐるなりゑづみとはゑつむる也いかなるきぬなれともよくゐれはゑつまれはなり事やみて靜かになるにいたくいそきてものいはすきてくやしき心をよめる也云々　袖中抄云さい〳〵はいとやと同音也きぬのあたらしきはさや〳〵となる也ゑつむはさてゑつかにゐたりしと云歟云々初音卷云ひかりもなく黑きかいねりのさい〳〵しくはりたる一かさねと云々　岷江入楚云さい〳〵しくはさや〳〵となるゐ也云々

八桴　桴の數八つ有には非す打たびの數をいはん為に八撥と云歟八は常に用る數也　尺素往來云祇園御靈會所々跳舞家々笠車風流之造山八撥神輿在地之所役定叶於神慮矣

百千鳥囀る春は物毎にあらたまれ共我そふりゆく　古今集の歌也西行櫻に注す

さゝ浪は三井寺に注す歌舞のほさつは誓願寺に注す

實太鼓も羯鼓も笛篳篥絃管共に　太鼓絃管は富士太鼓に記す笛は羽衣に注す篳篥は通考云陳氏樂書云篳篥一名悲篥一名笳管羌胡龜玆之樂也以竹為管以蘆為首狀類胡笳而九竅所法者角音而其悲篥胡人吹之以驚中國馬矣私云世に篳篥といひへるを此謠に絃管と打かへしたる也但し此例もあり快禰法印七回忌和歌序云[illegible]引聲の阿彌陀經音曲の醍醐妙典絃管伎樂の調へ讃佛施僧のまふけ

に至るまで下略

雪や氷と隔つらん　○いかなれは雪や氷と隔つらんとくれは同し谷川の水天皇

萬法皆一如　大乘一味と成處を萬法といひおさむる處を一如と云也臨濟錄曰光透十方萬法一如矣宗鏡錄云眞實性中無差別相無種々相無無量相萬法一如何有不等矣　首楞嚴三昧經曰不二不異名曰一如矣

實相の門　江口に注す

自然居士

自然居士和泉國人始學法相後入禪宗爲南禪寺大明國師弟子爲東福寺聖一國師孫弟子也居東山雲居寺爲群生說經又爲歌舞而斷其染心且又東福寺龍吟菴者大明本菴也此東谷有自然居士墓云々　或云自然居士舊跡在和泉國日根郡自然田村自然居士出生此地故號自然居士又東山高臺寺舊雲居寺舊跡也居士即雲居寺住侶也矣膾餘雜錄云俗謠有自然居士及東岸居士曲世傳自然居士者東岸居士之師也茲二人不髡首不披緇半著袈裟或登高座而說法或擊羯鼓舞扁木執扇而舞欲使愚昧者入佛道之手段也蓋庶乎寒山拾得布袋之徹聖風顛漢者耶矣　居士普門品疏曰多積賄貨居業豐盈謂之居士矣書舊行經曰有居財之士居家之士居法之士居轄之士居山之士道名居士矣　祖庭事苑云凡具四德乃稱居士一不求仕官二寡欲蘊德三居財大富四守道自悟矣

ヶ樣に候者は東山雲居寺のあたりに住居仕者にて候

雲居寺は今は絶たり　拾芥抄云雲居寺花園向祇園南阿彌陀矣　伊呂波字類抄云承和四年丁巳參議眞道奉爲桓武天皇建立云々瞻西聖人此寺之西建立一堂安置八丈阿彌陀像堂號勝應彌陀院今付本堂稱雲居寺矣　百練抄云天治元年七月十九日瞻西上人於雲居寺供養金色八丈阿彌陀如來像貴賤結緣矣

爰に自然居士と申喝食の御座候か　喝食とは食を喝とよめり僧には非す本如寒山拾得形寺院に入て齋非時に食物等をよびつく役也今其形及衣をか

さるは五山より始る也

一七日說法を御宣候　毘婆沙論曰食竟上座說法有四事爲一爲消信施二爲報恩三爲說法令歡喜淸淨善根成就四在家人應行財施出家人應行法施矣　智度論曰以諸佛甚妙善之法爲人說是法施矣　釋氏要覽曰食後說法其儀久亡今漸僧食次誦一卷般若心經亦是說法法施也矣

夕の空の雲井寺　雲居寺を云也雲孤寺共云○すむ月をみだのみかほに詠むれは雲ゐる寺も名のみ也けり式部大夫定業

月待ほどのなくさめに　○金夏の夜の月待程の手ずさみに岩もる淸水いく結びしつ基俊

說法一座宣んとて導師高座にあがり　導師華首經曰能爲人說無生死道故名導師矣　佛報恩經曰大導師者以正路示涅槃經使得無爲常樂故矣　又盛久に注す　高座者縄牀禮盤等の事也僧家說法の時必高座を設る也律制に高一尺六寸廣四尺長八尺の外をいましむ又阿含經に八種の床に座する事をいましむ皆佛制也　十住婆沙論曰欲升高座先應恭敬禮拜大衆然後升矣

發願の鐘打ならし　發願鐘者　資持記云最初鳴鐘集衆總爲十法今時講導宜依此式矣　又云初禮三寶二升高坐三打磬靜衆四讚唄五正說六觀機進止問聽如法樂聞應說七說竟廻向八復作讚唄九下座禮辭矣　是皆說法の規則なり

謹敬白一代敎主釋迦牟尼寶號　大莊嚴經曰隨應演說法敎化諸群生能到於彼岸故名爲敎主矣釋迦牟尼佛は百萬に注す寶號とは如來の名號を稱美せし詞也

三世の諸佛十方の薩埵に申てまうさく　心明かなり薩埵者肇曰正音云菩提薩埵菩提佛道名也薩埵秦云大心衆生有大心入佛道名菩提薩埵矣　大論曰菩提名佛道薩埵名成衆生矣　大般若經曰爲利有情求大菩提故名菩薩而不依著故名摩訶薩矣

惣神分に般若心經　神分とは大小の神祇を云也明眼論に五種の神分出たり般若心經を用は功德甚深なれば魔王障を破んとするに心經の無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法と云文を聞て六根六境もすきと

なきものとならば何者か殘て障をなさんや此念をなせは三業もきへ諸天善神歡喜し法味を聽受し三寶力を得て施主を守給ふ故に萬の法事のはしめに神分と云事をおこなひて般若心經を法樂する也

般若心經は　心經秘鍵曰大般若波羅密多心經者即是大般若菩薩大心眞言三摩地法門矣　中國師云般若者智惠也又般若經般若如火炎不可取四邊取者即燒手心者大智惠到彼岸心體不生不滅心也經者訓法訓常法則群機所執焉常則百世不易也矣

實是はうつくしき小袖にて候　小袖とは當家裝束書云袖口大廣曰衣袖口小限手出入曰小袖矣或云小袖は今世俗に多などの着物の事をいへり元は天子公卿の禮服の御下着也上着は大袖と云袖口大也小は口小き故に小袖と云とそ然れは公卿方にも常には着用なきものと見えたり云々　無名抄云けふの細布と云は陸奥に鳥の毛して織ける布也多からぬ物にておる布なれははたはりも狹くひろも短かけれは上にきる事はなくて小袖などのやうに下にきる也云々

敬白諷誦の事三寶衆僧の御布施一裹　諷誦は周禮春官諷誦註曰背文曰諷以聲節之曰誦矣名義集曰諷誦梵音云伽陀此云諷起亦曰諷頌矣　西域記曰云偈又云偈他矣　三寶は佛法僧の三寶也所謂住持三寶同體三寶別相三寶大乘三寶小乘三寶等委く花嚴にとけり又於下僧にしるす衆僧とは現前住持の衆也其に三寶の中なれ其次の布施の義に待ていへり一裹は韻會曰裹包也又指所包之物也矣　布施は源氏供養に注す　本朝文粹云諷誦文曰敬白請諷誦事三寶衆僧御布施信濃布百端下略

身の代衣一重三寶に供養し奉る　袈にては身を貢し代の衣也首見集云祈禱加持の時その人の小袖帶なとを撫物とて上るを身のしろ衣といふと云々八雲御抄云みのしろ衣は雪の降に上に著の代にきるをいふ云々歌にはさまざまよめり　後撰　降雪のみのしろ衣打きつゝ春きにけりと驚かれぬる　敏行

供養の字は源氏供養に注す

彼西天の貧女が一衣を僧に供せしは　賢愚經曰佛世に檀膩伽と云貧女夫婦の間に衣一ッ有夫外へ出

は女裸也女出れは男裸也其時僧來るに彼一衣をおします僧に奉るその功德によりて舍衛國の大長者と生れ彼貧女は長者のむすめと成て一生すと云々文暗百緣經にも貧女一衣を布施する事有ㇾ之

先考先妣もろともに　◎記曲禮曰生曰ㇾ父曰ㇾ母曰ㇾ妻死曰ㇾ考曰ㇾ妣曰ㇾ嬪矣　爾雅曰父曰ㇾ考母曰ㇾ妣矣郭璞曰古者通以二考妣一爲二生存之稱一矣　蒼頡篇曰考妣延年明ㇾ此非二死生之異稱一矣　後世父母亡則稱二考妣一矣　性靈集曰先考契二一賓於如々一先妣得二十力乎智々一矣

こなたはひか言にて候程に　僻事共書ひがめる心なり枕草子云あいなくひが事も出くるぞかし云々源氏若紫卷云少しおくふりたる山住もせでさる海づらに出たるひか〳〵しきやうなれと云々○いせ人はひか事しけり津瀬より甲斐川⑩けは泉のゝ原

大津松本へ某走にきとゝめうするにて候　或云大津宮者天智天皇七年遷二筑前朝倉宮於江州一故云二大津宮一舊墟今爲二田字一其地を御前跡と云昔の大津と云は尾花川邊を云なるへし古大津と云今の大津の濱は後にひけたると見えたり松本は膳所のこなた也一條禪閤兼良藤河記云松本を過大津にいたりて過來方をかへり見て云々親長卿記云明應四年三月六日參二詣石山寺一中略頭右中辨宣秀朝臣四條少將隆永神光院法印等同車自二松本一乘ㇾ船參詣畢宿二關寺一矣　或云大津松本に申此松本民部と云人有弓の上手也子今民部か古城と云有岩の字となる此人越前にて打死す云々　某の字は鉢木に注す

善惡の二道　山姥に注す

願以此功德普及於一切我等與衆生皆共成佛道　此文は法花化城喩品に出て尸棄大梵天の廻向の文也文の言は願は此功德を以てあまねく一切に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道を成せんとの義也此文の心をよめる○おこなひの果にとなふることわざをかけゝる袖や天の羽衣

なふ〳〵　江口に注す　山田矢橋は兼平に注す

余所にも人そ白浪の　白波は盜人の異名也熊坂に注す

艫にはからろと云物有人買と云櫂はなきに　唐韻曰艫與二艪同所三以進二船也矣　倭名抄云櫂在二旁撥一水曰ㇾ櫂矣　小夜更て浦にかちの音す也天の戸

渡る雁にや有らん長房

水の煙の霞をは一霜二かすみ一ゑほ二ゑほなんとゝいへは　水煙を霞とみる也遥に海上を見渡すを一霞二かすみ一しほなとゝ云也　増鏡云後醍醐天皇隠岐へうつらせ給ふ時の詞に大船二十四艘小舟共橋に数ゑらすつけたり遥に押出すほと今一かすみ心ほそう哀にて云々

あら腹たちや　腹立るをはらぐろ共いへり○拾玉言の葉をみれは心を浮島の腹たつましと云は誠か

衣におそれてえはうたず　えはうたずはえうたす也はの字は助字也　衣は釈名曰服上曰レ衣衣依也所ニ以庇ニ寒暑一也傳云衣身之章也上曰レ衣下曰レ裳矣白虎通曰衣者隠也裳者障也所ニ以隠レ形自障蔽一也矣　心地観経曰袈裟是佛浄衣永断二煩悩一罪業消除ス猶如二良田一能背増二長菩薩道一故猶如二甲冑一煩悩毒箭不レ能レ害故矣

口にはわだの轡をはめなけ共聲が出はこそ　わたの轡は或説云轡をはむるに口脇に綿を用るといへり猿轡の類なるへし但しわたのたの字にごりてとなふる也云々篠才藏傳云猿轡之圖

イ

ロ

此玉口中に入也玉は堅にて作るほうはさみは中に蝶つがひ有緒は髪の結目にて結ぶ此轡にては息は通聲不レ出
此轡はのこぎりばのことくにして舌をはさむ也　ほうはさみの緒の留やう右同事也

こたび庵室へ帰らぬ法にて候程に　庵は　釈氏要覧曰釈名曰草為レ圓屋一曰レ庵庵庵也以二自覆庵一也西天僧俗修行多居レ庵矣　室は要覧云西方名ニ僧堂一為ニ健陀倶胝一此云ニ香室一矣周書曰黄帝始作ニ宮室一矣

奥むつの國へはくたる共　みちのおくみちのくなといひてよし　顕注密勘云むつの國と云はいやしく聞ゆと云々○大和本紀云陸奥都外到ニ近江國一分留中山道者六箇國也此六箇國之奥故名ニ此國一云ニ六奥一又六字後作レ陸矣ヽ或云みちは陸也くが地のおく也是をみちくのと略していへり日本の東北の奥にある國なれは也云々萬葉仙覺抄云陸奥國は東山道のはてなれはみちのゑりといふ云々

撓訴といつは捨身の行　撓訴とはとがある人を

刑罰におこなふ事也　玉篇曰搒笞老切打也矣
居家必用云考問謂加刑也漢趙熹考問其婕妤
矣　此等搒訴の事也捨身の行とは佛法の爲に命を
おしまぬを云也　提婆品曰觀三千大千世界乃至
無有如芥子計非是菩薩捨身命處爲衆生
故也矣
一大事は鄙鄂に注す狂言綺語に源氏供養に注す
志賀辛崎のひとつ松つれなき人の心かな　松につ
れなきとよそへたる詞は天神の御詠に「梅はとぶ
櫻はかるゝ世の中に何とて松はつれなかるらん
是より松をつれなし草といへり辛崎の松は三井寺
に記す
抑舟の起を尋るに水上黄帝の御宇より事起て流れ貨
狄が謀より出たり　世本曰共鼓貨狄作船黄帝臣
雲笈云帝見浮葉方爲舟一臣助爲舟楫矣
古今原始曰黄帝時夷笲刳木爲舟共鼓削木爲楫
化弧作檝伯益作棹矣　山海經云番禺始作舟矣
束晳發蒙記云伯益作舟矣　五帝記曰黄帝者少典
之子姓公孫名曰軒轅生而神靈而能言幼而徇齊
長而敦敏成而聰明治五氣藝五種撫萬民度

四方實爲文明之始祖都子孫鹿文略
爰に蚩尤といへる逆臣ありかれをほろほさんとし
給ふに　通鑑外紀曰蚩尤姜姓炎帝之裔也好兵喜
亂作刀戟大弩以暴虐天下兼幷諸侯貪欲無
度炎帝楡罔不能制居少顥以臨西方蚩尤益
肆其惡出羊水登九淖以攻炎帝于空桑炎帝
遜居于涿鹿軒轅乃徴師諸侯與蚩尤戰于涿
鹿之野蚩尤能作大霧軍士皆迷軒轅爲指南車
以示四方遂擒蚩尤戮于中冀矣
鳥江と云海をへだてゝ責へきやうもなかりしに
此處へ鳥江を取出せる作意いぶかし鳥江は史記項
羽本記に出て黄帝の傳には無之此次に記す　史
記項羽本紀曰項王乃欲東渡鳥江鳥江亭長檥
船待矣　正義曰括地志云鳥江亭即和州鳥江縣是也
晉初爲縣矣　大明一統志十七曰和州烏江浦在州
城北故烏江縣東四里項羽敗於垓下東走至烏
江亭長檥船待羽即此矣
黄帝の臣下に貨狄といへる士卒あり　貨狄が傳は
未考臣下の意味奏上に注す　士卒者軍中力人者
士卒と云也説文曰士事也矣周禮士師注曰士察也主

衞宗弑之事矣　韻會曰卒衆也二百人爲卒矣
左傳註曰歩卒七十二人甲士三人矣　項羽本紀曰
持三日糧以示士卒必死無還心矣
寒き嵐に散柳の一葉水にうかびしに又くもといふ虫
前後の詞證文未考　東坡句曰落日出柳看垂蛛
矣格物論曰蜘蛛大腹身灰色多於空中作圓網長
蹄者名蠨蛸小而長脚名喜子有赤班者有五
色者矣私云蜘蛛一葉に浮ぶを見て舟を作ると云
事本文未見又烏江と云海を隔てとつゞけたる事
史記及通鑑等の黄帝傳に烏江の沙汰是なし按ずる
に　臂長私記云安倍高丸弓矢傳云黄帝御時蚩尤と
云有逆臣不隨王命然共烏江を隔たれば船な
くして渡り難し此時貨狄と云臣下柳の一葉に蜘蛛
一乘之水上に浮ぶを見て始て船を作ると云々
此說に寄て此謠を作る成べし
さゝがには關寺小町に注す立くるくものふるまひ同
前
御代を治め給ふ事一萬八千歳とかや　皇甫謐曰黄
帝在位百年而崩年百一十一歳矣　謠の心は黄帝
の御代をあがめ萬歳萬々歳と祝ふ詞にて一萬八千
歳とはつゞけたり只數おほくいはんが爲也史記索
隱曰按大戴禮宰我問孔子曰榮伊言黄帝三百年
請問黄帝何人也抑非人也何以至三百年乎對曰
生而人得其利百年死而人畏其神百年亡而人
用其教百年則士安之說略可憑矣
然れば舟のせんの字を君にすゝむと書たり　說文
曰前本作歬不行而進謂之歬从止在舟上徐
曰坐而至者舟也　私云前の字又歬共云也舟のせん
の字と云は歬の字を云也すゝむとよめり君にすゝ
むとは君は添字也すゝむとつゞけんがために君の
字を一字加へて云なるべし
扨又天子の御かほを龍顏と名付奉り　天子の御顏
を龍顏と稱する事史記高祖本紀にみへたり天皷に
記す今此謠の前後皆舟の事を續けたり然るに今爰
に龍顏を出す事不相應也下かゝりには天子の御
舸を龍舸と名付奉りと謠ふ也是は然るべし但し天
子の乘給ふ舟を龍舸と名付ると云り本文未考小
補韻會云說文曰舸舟也又大船也方言南楚江淮凡船
大者謂之舸小舸謂之艖杜詩富豪有錢駕大
舸矣　韻府注曰前蜀王北狩浮紅而上龍舟畫舸

矣事易緯曰天子者繼天治物改正一統各得其宜父天母地以養生人至尊之號也矣　帝王世紀曰天子至尊之定名也應神受命爲天所子故謂之天子矣　春秋繁露曰德似天子者稱皇帝天祐而子之號稱天子矣

舟を一葉と云事此御宇よりはじまれり　此御宇とは黄帝を指て云也　上に記する雲笈語黄帝見浮葉爲舟と有故に舟を一葉と云也　樂天詩云千株松下雙峯寺一葉舟中萬里身矣　御字の字意は田村に注す

又君の御座舟を龍頭鷁舟と申も　源氏胡蝶卷に龍頭鷁首と有　孟津抄云龍は水を得たり鷁は風を得る也雌雄ありておとりを見てやがてはらむ鳥也風に向て前へ飛也さるほどに船の首に是を作て置也云々　淮南子曰龍舟鷁首浮吹以虞矣　班孟堅西都賦曰登龍舟呂向註龍舟畫龍於舟矣鷁首張平子西京賦曰浮鷁首矣　薛綜註船頭象鷁鳥厭水神故天子乘之矣　玉篇曰鷁水鳥也善高飛矣

とてもの事にさゝらをすつて御見せ候へ　詩經有瞽篇曰柷圉既備乃奏註曰圉亦作敔狀如伏虎背上有二十七鉏鋙刻以木長尺櫟之以止樂者也矣　日本にてさゝらと云は竹を以てかきならせ共元來是よりおこれる成べしさゝらはつくとかかきならすなどいひてよし榮花物語云作々良といふものつきさまざまの舞あやしの男共歌うたふ云々　枯杭集云簓は或說に延喜帝の姫宮逆坂のあなた關寺と云所に流れ給ふその宮につかふまつる内侍のすけ此簓をすりて往還の旅人をすゝめけるといへりかくして此宮失給へば神に祝ひ奉りて關の清水殿と號して守今所の氏神として九月廿四日に神事を祭れる也是よりつたはりて世に簓すりひろまれると云々

佛の難行苦行を給ひしも一切衆生を助ん爲ぞかし　花嚴經隨疏演義鈔に如來の十恩有其第一に難行苦行恩と說り又同經に佛の昔の生には衆生を助ん爲には頭目髓腦國城妻子身命にても少も惜まず或は一偈の爲に鬼神に身を與へ虎に身を與へさまざまの恩有菩薩本行經及法苑珠林等に見へたり

身をこつかにくだきても　上の花嚴經の心成べし又法花云頭目髓腦身肉手足不惜軀命矣　遊仙窟云

粉身して苦行す矣　或云こつかは谷下と書古實云谷下は出家の苦行在こゝめの修行の心也云々　數珠は梵語云鉢塞莫訶利匠迦唐翻ス

百八の數珠

貫珠ニ矣　色葉字類抄云數珠念誦同數珠矣　木槵子經曰當ニ貫ニ木槵子一百八箇ヲ常自隨レ身志心稱ニ南無佛陀南無達摩南無僧伽乃過ニ一子ヲ當ニ斷百八ノ結業ヲ獲ニ無上果ヲ矣　數珠にさまぐ數にかはりあれ共先百八煩惱をくだくためなる故に百八の數珠を通用する也　古今原始云漢武帝時西僧作ル念珠ヲ象ニ一年十二月二十四氣七十二候ニ其數都一百八矣　管の子といふはさゝらをうくる刻ある物を云子といふ心はたとへば箱子匣子鳴子などの類也

さゝ波は三井寺に注す　簫鼓は東岸居士に注す　鼓は波の音は白樂天に注す

あま雲まよふ鳴神のとゞろ〱もなる時は　鳴神は山姑に注す　東坡句云腹鼓有レ面如ニ春雷ニ矣とゞろは轟と書　說文曰轟群車聲矣　小補韻會云詩ニ飲食豈知ニ味絲竹徒轟ニ矣

池の水のとう〱と鼓をまたうち　和漢朗詠集云藤原篤茂詩云池東凍頭風度解窓梅北面雪封寒矣　鼓の音のとう〱を此詩の東頭にいひかけたり韻會云法華鼓聲也矣　白氏文集曰鐵上琴々鼓矣

菩提の岸　彼岸也東岸居士に注す

ていとうとうちつれて　傳抄に丁東と書　圓機活法云丁當鳳聲或謂ニ丁東ト矣　璫の字はおびものと訓す博士には帶に色々の物結びさけて身のかざりとせり往來時かのおびものゝ鳴音を丁東と云也但此說愛にかなはず按ずるにていとうは鼓の聲なり一言芳談云有云比叡の御社にいつはりてかんなきのまねしたるなま女房の十禪師の御前にて夜打更て人靜りてのちていとう〱と鼓をうちて心すましたる聲にてとてもかくても候なふ〱とうたひけり其心を人にしゐ問れて云生死無常の有樣を思ふに此世の事はとてもかくても候なふ後世を助け給へと申也

殺生石

源翁禪師ハ相州海藏寺ノ開山ナリ諱心昭號ス空外ト姓源越前ノ荻村人也康治帝御宇ニ有ニ玉藻前一放ニ光於身一照ニ

殿階帝於是不豫安部易説卜之曰是玉藻所爲也忽化狐逃東國帝詔三浦介義明千葉介常胤上總介廣常國狐穴下野州那須野義明射而殺之爾後百年餘狐靈爲石世俗曰殺生石觸其石則鳥獸人民皆死甚苦時有僧大徹者欲止其石怪不能實治帝後深草詔源翁曰師往野州熄此怪翁到石之左右白骨累山積翁拈破竈墮機緣曰汝既是石靈何處來性向何收題偈曰法々塵々端的底本來面目未曾藏現成公案大難事異類中行任度量一喝拄杖卓下石忽破碎其夜一女子現曰我得淨戒生天言訖翻沒自此翁聲名籍甚於洛鄙鎌倉副元帥平時頼聞翁之道驗以奥州會津利根川庄爲翁饘粥之資時建長年間也（下略見海藏寺開山傳）◎簠簋抄云人王七十六代近衛院の御時容顔無双の女人宮中に化來す名を玉藻前とやがて后に成て帝を惱す時に左方博士隨て安部光榮を召て此事を占申せとある光榮申上るは安部清明は不思議至極の博士也かれに可被仰付と申ける依而清明が方へ勅使立て清明參内申て御惱の由を占ひ申は狐美女と成て今后に立給ふ妻愛有が故に其祟あり彼狐周の幽王の后と成て褒姒と云夏桀王の后と成て妲己と云殷の周土にては末嬉と云昔國々を惱し今日本に來て玉藻前と云也彼婦を寄に立置幣をもたせ是をいのる女則七色の狐と成て下野國那須野の原に飛去ぬ時に上總介三浦介兩介に仰て那須野に行て獵す彼狐を射んとすれ共不中故に伊豆箱根若宮八幡に祈念す其夜の夢に兩介に鏑矢を給はり百日犬を射習ふべしと有則百日稽古して彼狐を射とめて上洛す彼野にて獵しける様に方八町に埒を結び犬を入て騎馬の支度して射之帝御覧有て叡慮に備ふ是犬追物の初め也と云々彼狐殺しける所那須野の原にこぼれて石と成て人を惱す或時玄能法師彼石にむかひ汝元來殺生石と察し給へば石忽に破碎す云々（中略）　神明鏡云久壽元年仙洞に一人の化女出來す後には玉藻御方と號す天下無双の美人也天人の化現か又聖衆の影向かとうたがふ計也去程に叡慮不斜思食けり仍又内外典佛法世法迄も不暗才人也諸事問に一々答誠に權者也（中略）此狐の腹内に金の壺あり其中に佛舍利あり是を院へ進上す額に白玉あり三浦の介に賜ふ尾の先に針二つあり一つは

赤し上總介に給ふ孤をば宇治の寶藏に被レ納けり
那須野の殺生石は此靈也云々
心をさそふ雲水の浮世の旅に出ふよ　雲水は旅體につかふ詞也又僧の異名也委く奥に記す
是は玄翁といへる道人なり　源翁禪師初曹洞宗也後嗣二法大覺禪師一爲二臨濟派一在二奥州會津若松示現寺一凡住二當寺一殆二十六年弘安三年庚辰正月七日寂門人理二骨於山之坤隅一勅謚二源翁禪師一　寶鑑抄には玄能と書海藏寺傳記には源翁と有世に石を割ものゝ名にけんのうといへるは是より名付たり　道人者　大論曰得道者名爲二道人一餘出家者未二得道一者亦名二道人一矣
我知識の床を立さらず一大事を歎き　師に仕へて省悟を求といへ共未レ開二心眼一事を歎息するなり
知識及一大事は那鄲に注す
一見所をひらき終に拂子を打振て世上に眼をさらす　一つの見所をひらくとは心頭工夫の所において心性の元眼開けたるを云也拂子を打振てとは鎭州の普化和尚往來の人に向て一鈴鐸を拂て明頭來也打暗頭來也といへるがごとし眼とは五眼の中の法眼なるべし　拂子は佛器にして蚊虻を拂ふ道具也　釋氏要覽云律云比丘患二草虫一佛聽レ作二拂子一僧祇云佛聽二線拂裂氎拂芒拂樹皮拂一制下若二猫牛尾馬尾拂一并金銀裝レ柄者上皆不レ得レ執矣
冬夏をも結はやと思ひ候　冬夏とは冬の安居を云也西域記云覩貨邏國舊訛曰二吐火羅國一東阨二葱嶺一西接二波刺斯一南大雪山北據二鐵門一氣序既溫疾疫亦衆多冬末春初霖雨相繼而諸律僧以二十二月十六日一入二安居一三月十日解二安居一矣
雲水の身はいづく共定めなき浮世の旅に迷ひ行　僧の異名を雲水といへり白氏文集八云行々弄二雲水一歩々近二郷國一矣　同六十九云水二其心一雲二其身一矣　山谷云去レ國行二萬里一淡如二雲水僧一矣　法蓮云雲水の身はしらぬさかひにもやさすらへんと云々○身をは雲心は水になしつれは世をも人をもうらみさりけり　後光明峯寺攝政
心の奥を白河の　白川は奥州なれは心の奥とつゞけたり白川は遊行柳に注す奥州は自然居士に記す
新續古○へたて行人の心の奥にこそ又白川の關はありけれ　源滿光朝臣

結びこめたる下野や那須野の原に着にけり　結び
こめたるとは上に冬夏をむすぶとあるにてつゞけ
たり下野は鉢木に注す　○武士の矢なみつくらふ
小手の上に霰たはしる那須の篠原鎌倉右大臣
それは那須野の殺生石とて人間は申に及はず鳥類畜
類までもさはるに命なし　陸奥下野兩國之堺有
川自此南曰那須野廣大野原也向有三高山
曰茶磨嶽阿彌陀嶽毘沙門嶽多生硫黃少登山
有殺生石有垣方五間許中多有石昔地震山略崩
尋常石相雜甚難辨今亦捉蟲置石面立遽死谷
有溫泉常浴湯人數多有寺名高湯山月山寺勸
請出羽羽黑權現矣
かくおそろしき殺生石共しろしめされで　此て文
字を不のてと云いづれも濁る也初心の人は此て文
字となへがらいやしくおもへりさには非ず此出葉
多し古今集戀の歌に人にしられでくるよしもかな
上略　源氏手習卷にひとり物おそろしかりしかば
きしかた行さきゝ覺えで 上下略 是等の出葉に等
し
昔鳥羽院の上童に玉藻の前と申しゝ人の　百練抄

云七十四代鳥羽天皇諱宗仁堀河院第一皇子母女御
苡子權大納言實秀卿女也康和五年癸未正月十六日
誕生同六月九日親王同八月十七日爲皇太子以
關白右大臣忠實爲攝政十二月一日即位治天
下二十六年保安四年正月廿八日遜位保元々年丙子
七月二日崩五十四矣　海藏寺傳記及籃簋抄神社考
盛長私記下學集等に近衞院と有但此時鳥羽院御存
生也神明鏡に久壽元年仙洞に一人の化女出來す玉
藻の御方と號す是鳥羽院を指ていへり籃簋抄云玉
藻前とはあまり美女にて玉のごとくなる女なれば
玉藻前と云也云々　上童と云は內裏にて女孺より
上品の女房也 職原大全
天離鄙は道明寺に注す抑は高砂に注す
梟松桂の枝に鳴つれ狐蘭菊の花にかくれ住　白
氏文集第一凶宅詩云梟鳴松桂枝狐藏蘭菊叢
矣
有時帝は清涼殿に御出なり　拾芥抄云清涼殿曰
中殿又云御殿七間四面南殿西常寢居也矣○名 延文百首
にしおへばきよく涼しき住居して我宿からは夏も
いとはし 後光嚴院

月卿雲客は舟辨慶堪能は盛久管絃は富士太鼓松明は鵜飼に注す

萩の戸　大要抄云清涼殿西矣　禁秘御抄云常御所也不レ限レ萩色々秋華皆被レ栽レ之昔瀧口承レ之植ニ萩戸萩一矣　萩の戸の花の下なるみかは水千とせの秋の影そうつれる後京極

闇の夜の錦なりしかと　此故事實盛に注す

安倍の泰成占なつて勘狀に申やう　安倍泰成は大藏少輔從四位上仲丸十五世後葉也矣海藏寺傳記に安部易読卜レ之と有　神社考云召ニ安倍泰成一占レ之泰成入レ宮令下玉藻並持中御幣上泰成宣ニ祝詞一玉藻前捐レ幣而去化爲ニ白狐一走入ニ下野國那須野原一害レ人惟多矣　簠簋抄には安部清明占申とあり是いぶかし清明は六十四代圓融院の比の人なり時代相違せり　勘狀に申とは吉凶を占ひ勘へ奏るして狀を奉る也

然らば衣鉢をさづくべし　傳燈錄云佛傳ニ金襴僧伽黎衣於迦葉尊者一矣　六祖壇經曰五祖忍大師傳ニ衣鉢於六祖能大師一矣

木石心なしとは申せ共　妙樂大師云木石無心言生從ニ小宗一隨緣不變說出レ自ニ大敎一矣　止觀曰對レ境覺知異ニ乎木石一名爲レ心矣　性靈集云木石知レ恩人鬼感激矣

草木國土悉皆成佛　芭蕉に記す

汝元來殺生石問石靈何れの所より來り　是は玄翁禪師殺生石に向て示し給ふ偈也但海藏寺傳記に記せるとは異也上に記す

佛體眞如の善心　此意江口に注す

石に精あり　幽冥錄云五色浮石化爲レ女矣　蜀王本紀云秦王獻ニ美女于蜀王一蜀王迎レ之美女化爲レ石矣　左傳云昭公八年春石言ニ晉魏楡一杜預註曰謂下有ニ精神一憑ニ依石一而言上矣

水に音あり　普門品云妙音觀世音梵音海潮音矣大明一統志云四川重慶府ニ潮泉在ニ南川縣一早晩三潮毎レ潮則泉下有レ聲如レ雷聞ニ十里一矣　或は諸行無常の四句の文波の音に聞へし事今昔物語にみへたり是等のたぐひ和漢の舊記にあまた見たり略レ之

風は大虛にわたる　風は虛空のごとし形なけれ共物にさはりては音ありと云詞を殘していへり顯識

經曰如風大無色無形不可顯現而能發動萬物示衆形狀或搖振林木摧折破裂出大音聲或爲冷爲熱觸衆生身作苦作樂風無手足面目形容亦無黒白黄赤諸色矣

天竺にては班足太子の塚の神　仁王經曰昔有天羅國王有一太子欲登王位名班足太子爲外道羅陀師受敎態取千王頭以祭塚神自登其位已得九百九十九王少一王即得一王名曰普明王下略天竺は百萬に注す

大唐にては幽王の后褒姒と現じ我朝にては鳥羽院の玉藻の前とはなりたるなり　下學集云昔西域有班足王其夫人惡虐過人勸王取千人之首其後出生支那國爲周幽王后其名曰褒姒滅國惑人死後出生于日本近衛院御宇號玉藻前傷人無極後化成白狐害人惟多下略　周十二代幽王は字宮湦宣王子也在位十一年褒姒を寵して太子宜臼を逐て犬戎の爲に驪山の下にして褒姒と共に亡さる　史記周本紀曰幽王得褒姒愛之云々昔二神龍止夏庭而言曰余褒之二君也龍亡漦在櫝而去之櫝亡傳此器周至厲王末發而觀之漦流于庭漦化爲玄黿入王后宮後宮之童妾無夫生子懼而棄之云々宣王見鄕後宮童妾所棄妖子於路哀而收是爲褒姒矣私云幽王の后褒姒は狐の所爲に非ず帝寵愛甚しきに代亂れたるなり　殷紂王の代に冀國侯蘇護に女あり名は妲己年十六歳姿色世に絶て双なし是を紂王に献ず于時蘇護女及侍女を將て城を出て行數月ならずして恩州の館驛に宿す已に半夜の比九尾の狐金毛粉面なるが衆妾の寐たるを伺て飛來て妲己が精血を吸盡て其魂魄を絶し其軀殼に入換りて帳中に臥蘇護是を知らず夜明るに及で車馬既に朝庭に至る于時妲己其容儀妖艶とたおやかにして花の顏嬋娟とかほよし紂王熟と其貌の宮庭に双なきを見て妲己に命じて歌操ゑむるに百樂に通せずと云事なし紂王大に喜で是を愛し掖庭に受仙宮を建て皇后とす寵のあまり遊宴超過して臺下に酒池肉林をつくり嬪妃を集て裸身にして歌舞せしめて華なきもの丶脛をきり孕婦の胎を割て樂とす諫を云者は悉く罪せらる依て諸侯うらみ百姓うとみ國中恐れずといふ事なし

于レ時西伯侯軍を率て春二月甲子の日紂王及妲己と共に是を亡す紂王火中に入て燒死たり妲己も牟て其貌を顯し共に誅せらる云々　唐則天皇后の時有二女人一不レ知二生處一宮中に來りて皇后に近づき奇特を現じ能諸人の心念を識り其思ふ處悉く知佗心智通を得て亦た佛法を談ず內外兩典其深き旨を宣るに辨舌あり即聖菩薩と稱して皇后を初め各〻是を恭敬する事限なし或時大安和尙禁中に參內して彼女にあふ其心念を云事見るが如し和尙問云我心は如何女云胸中に在りと又問今何に在やと女云塔露盤輪相の間にありと又問答云兜卒天彌勒の宮殿にありと和尙即心を阿羅訶の無生地に置て曰今我心何にありやと女知レ事能す辭屈して變じて狐と成て逃去ぬ已上太平廣記

玉體は禱に注す五色の幣帛及肝膽を摧きは鐵輪に注す

三浦介上總介兩人に綸旨をなされつゝ　綸旨とは綸言と云に等し神社考に三浦介義純上總介廣常と有海藏寺傳記には三浦介義明千葉介常胤上總權介廣常と有何れも關東八平氏の內也　大系圖云三浦介義明三浦庄司義次子也千葉介常胤下總介常重子也上總介廣常常澄子也矣

野干は犬に似たれば犬にて稽古有べしとて　上掛下掛共にけいこのこの字濁りてうたふ然るべからず是は警固と心得たる歟稽古也清てよし黨纂抄に百日犬を射習べしと有則百日稽古して彼狐を射とめて上洛　云々稽古の字は鞍馬天狗に注す　野干は射干犴　共書　詩經大全安成劉氏曰犴作レ豻胡地犬也矣　字彙云豻同二野犬一似レ狐而小而出二胡地一矣　名義集云野干似レ狐形小色青黄如レ狗群行夜鳴如レ狼矣　祖庭事苑云野干形小尾大狐即形大矣

是犬追物の始とかや　謠の前後黨纂抄にてつゝけたり信濃守賴實犬追物秘記云本朝に犬を射事は昔神功皇后三韓を從へ給ひし時御弓の弭にて異國の夷は日本の犬也と石に其文字を顯し給ふ是により本朝御祈禱不レ過レ之云々其時皇后の副將軍に諏訪明神を天照太神より添給ひしに諏訪明神御船のともに立て追物射にいさせ給ひし也于レ今諏訪明神の御神事には犬を射させらるゝ也然る間犬を射る事は神功皇后より始る也云々前備前守持清犬追物

秘書序云馬上作物雖レ有ニ其數一當時所レ用者流鏑馬笠懸犬追物也流鏑馬笠懸面々雖レ有ニ其益一猶於ニ犬追物ニ者射馭之肝要馳逐之妙術也然間鎌倉右大臣家御時權ニ輿之ニ入道將軍御代嘉禎年中泰時并經時彼時被ニ評定ニ有ニ興行之沙汰一或就ニ矢所之批判一被レ定レ法上下略或云秘記ニ云犬追物は世々の帝將軍家にも度々上覽有しか共後醍醐天皇の御時暫天下に停止あり其故は罪なき犬を射て殺さん事不便也との御慈悲に依て也然るを小笠原信濃守貞宗弓の家にして此事絶ん事を歎き頻に奏し奉りて御免を蒙りけり根元此事は小笠原家に代々傳へ來りしを正保年中に將軍家光公御上覽可レ有との御事故島津家よりつとむ也昔貞應年中鎌倉御所の南庭にて犬追物有し時島津三郎兵衛尉忠義撿見の役たり云々犬追物之事馬場の廣さ近代は凡そ四町四方程にして埒を結ぶ也其中に膀爾とて有馬を立る所也又大きなる繩を以て方四五間程の圜をなす是を大繩と云又た方一間計の圜をなす是を小繩と云其內に色砂を蒔也埒の一方に口有是を犬塚口と云又一方に口有物陰口と云犬を犬塚口より一度々々に放て騎士追廻りて射る也是に撿見と云者一人有矢の中不中を改る役人也奥次の役人有執筆の人有日記付の小屋有て撿見より受て呼次の者日記所へいひつぐ也射手の數は不定烏帽子に行縢弓小手をさし短刀を指也云々猶子細多し中比細川武藏三位高國卿最期に伊勢の國司北畠大納言へおくられし歌に「犬追物今一たひと思ひこしあらましはたゝ徒にこそ

那須野を取こめて草をわかつて狩けるに　○御狩人那須野夏野は心せよ高草かくれおれすふす也 爲家

追つまくつついさくりにつけて　疏につけてとは犬の足のはこびを云也　周防前司忠兼犬追物秘記云さくりに乗て追とは犬の尻に立て馬をはしらするを申也と云々

約束かたき石と成て　約束增韻曰圍繞束縛也又言語要結戒令ニ撿束一皆曰ニ約束一矣

放下僧

牧野左衛門何某が子小次良は父の敵刀禰の信俊を討んとて出家せし兄をいさめ共に思ひたち國々を

めくる然るに兄の出家禪宗にて敵をねらふそのいとまには諸人に向て禪法をとき或は放下(ハウカ)をして往來の人の目を悅ばしむ是敵をうたんはかりごと也依レ之放下僧とは名付たり終に相州瀨戸の三島三本杉の本にて信俊に行あひ本意をとげ父のあたを報せし也禪の法問に放下着と云事有言は一切をはなち捨て無我の心になる所を放下着と云也碧岩等に見えたり此放下の二字を取て放下僧といへり又世にうたひまひあやおりなどするを放下と云事は此時より名付たる歟

加樣に候者は下野國の住人牧野左衛門何某が子に小次郎と申者にて候扨も親にて候者は相模國の住人刀禰信俊と申者と口論し忿なううたれて候　牧野左衛門何某幷に刀禰信俊　此等氏姓未レ考但新飯の草紙に武士の高名せる事共あまた集めたる中に此謠の趣を委しく記せりと云其外に慥なる證文見當らず追而可レ考　下野國は鉢木に相模國は景清に注す

甲斐なく　融に注す

又兄にて候者は幼少より出家仕あたり近き會下に候　會下とは禪宗の檀林の下の寮にすむ所化を指て會下の僧と云　下學集云會下者以ニ參禪參學一爲レ本法閣商量而立レ法矣

出家の字味は兼平に注す某は鉢木に注す

親の敵をうたぬ者は不孝の由を申候　禮記曲禮曰父之讎弗ニ與共戴レ天兄弟之讎不レ反レ兵交遊之讎不レ同レ國矣公羊傳曰子不レ報ニ父讎ニ非レ子也矣子たる者は必父の敵を討べし親の敵と共に生をならべて天を可レ戴事にあらずと也

唐土(モロコシ)の事にや有けん母を惡虎(アクコ)にとられ其敵をとらんとて百日虎臥野邊に出てねらふ或夕暮の事成りしに尾上の松の木がくれに虎に似たりし大石の有しを敵虎と思ひつがへる矢なればよつ引て放つ此矢則いはほにたち忽血流れけると也　韓詩外傳曰楚熊渠子夜行見ニ寢石一以爲伏虎射レ之沒レ金飲レ羽視レ之石也因復射レ石矢摧無レ迹矣漢書曰李廣守ニ北平一出獵見ニ草中石一以爲虎射レ之中沒レ鏃視レ之石也明日復射レ之石不レ能レ入矣後周書曰李遠嘗校ニ獵莎柵一見ニ石叢薄中一以爲伏虎射而中レ之鏃入寸餘就視乃石也矣　私云石を虎と見て射たる事はあれ共母虎にとられて石を射たると云事本文曾て是なし　今

昔物語云唐土に李廣と云人あり一の虎李廣が母を害せり人有て李廣に告李廣弓箭を取て虎の跡を尋て山野に追ひ至て見るに虎臥たり李廣喜て是を射る見れば虎に似たる石也李廣が念力つよきが故に石に箭のたちたる也下略 此謠は此物語に依て作ると見えたり然共虎李廣が母を害せると云事更になし惣てなき事もあるやうに取つくろひて書は物語のならひなる由定家卿も仰られしと云々〇思ふに大木は石に立矢も有物をなと我慰のとおらさるへき

此 此人のもて遊候は放下にて候程に　唐土にも此類ありて或は棗の上をはしり刀を呑などする事隋より以前には是を百戲と名つく杜氏通典　日本にて是を田樂或は放家共云也

彼 彼者禪法にすきたる由申候程に　彼者とは刀禰信俊を指て云也禪知度論曰善言ニ思惟修ニ矣婆沙論曰此云ニ善習ニ矣阿毘曇論曰何名ニ禪答曰以ニ斷結正觀ニ名ニ禪矣　梁恵遠大師禪經修行方便經序曰夫三業之興以ニ禪習ニ爲ニ宗矣　禪法傳來は既に記す

行 行脚居島に注す有明のつれなき此歌花筐に注す

瀬戸の三島に參らばやと存候　相州瀬戸明神在ニ街道之北ニ三島明神勸ニ請于此ニ社領百石鳥居額曰正一位大山積神宮裏有ニ延慶四年辛亥四月廿六日沙彌寂尹ニ門左右ニ有ニ春督長像ニ安阿彌作　社家說云當社賴朝卿治承四年四月八日豆州三島明神を勸請云々但東鑑に賴朝鎌倉に入給ふは治承四年十月六日と有尋ぬべし

面 面白の我等が有樣やな僧俗二つの道を離れ　放下僧は出家なれ共敵をねらふ所存を思へば出家にも非ずもとより俗にてもなしと懺悔忘たる也

落 落花一樣の春をあらず白雲青山におほふとか流水山上の秋にして紅葉をあらそふいはれあり　敵をうたん一念あるゆへに春の花の散をも忘らず恬然として白雲の青山におほふかと見る也流水山上の秋とは紅葉の山水の流れにうつりて色をあらそふぞと云心歟等證文ありや追而尋ぬべし

朝 朝の嵐夕の雨けふ又あすのむかしそと　是は無常のたとへ也心明也　山家　あすありと思ふ心にはかられてけふをあたにも暮しつる哉西行

歌 歌方は夕顏に注す沙門は田村に注す

十 十力の數珠を手に縡ひ　十力とは佛の德也菩薩に

も十力あり大論曰佛果十力者一是處非處力二業力三定力四根力五欲力六性力七至處道力八宿命力九天眼力十漏盡力矣又云問佛有十力菩薩有不答有一發一切智心堅固力二不捨衆生大慈力三具足大悲力四信一切佛法精進力五思行禪定力六除二邊智惠力七成就衆生力八觀法實相力九入三解脫門力十無礙智力矣十力の沙汰法界次第の事卷に詳也今予案數珠はかぞふる物なれば十の數に寄て十力の數珠とはつゞけたり數珠は道明寺及盛久に記す

忍辱二諦の衣を着　忍辱の衣は法花經に説り葵上に記す衣は自然居士に注す

罪障懺悔の袈裟　懺悔は實盛に注す袈裟は葵上に注す

柱杖に團扇をそへて持れたり　團扇は拂子に等し蚊虻を拂ひ暑氣をさけんがため也柱杖は熊坂に注す

夫團と串は動く時には清風をなし靜かなる時は明月を見す明月清風只同性の内にあれば諸法を心が所作として　是は太極の意を以て團の一句を述たり團扇は太極の團なる形也動く時は清風をなしとは陽の生ずる義也靜なる時は明月を見ずとは陰を生ずる義也此動靜の本體を指て太極其無極共云也佛法に取ては太極は是眞一法也動靜流行する處萬法也此心を以て諸法を心が所作としてとは云也　太極圖説曰無極而太極　太極動而生陽動極而靜々而生陰靜極復動一動一靜互爲其根分陰分陽兩儀立焉矣朱子曰太極者本然之妙也動靜者所乘之機也矣

夫弓と串は本末に烏兎の姿をかたどり日月を爰に顯し　或云弓書云弓の本彇をば烏に象り末彇をば兎にかたどる是如四足弓地天泰の理日月の兩表也云々盛長私記云末彇は日中の三足の烏を表す本彇は月中の兎を表す云々　日烏五經通義曰陽以一起故日行一度陽成於三中有三足烏又云日火精陽氣也外熱內陰象烏黑也矣月の兎は朝良に注す

淨穢不二の秘法を表す　傳大士錄曰淨穢兩邊俱不依無心捨離於生死涅槃無心亦不追上下略　私云上の日月と云詞に淨穢不二とむすぶ事いぶかし追而考ふべし

されば愛染明王も神通の弓をはり方便の矢をつまよつて　愛染明王者　金剛法經曰身色如二日暉一住二熾盛輪一三目威怒視首髻師子冠利毛忿怒形鈎安在二於師子頂一於二其左一拜二持金鈴一右手執二五峯杵一執二左金剛弓右金剛箭一如二衆生一光射成二能大染法一佛像圖彙注大論曰以二智惠箭一仰射二解脱虛空一以二方便後箭一射二前箭一不レ令レ墮二涅槃之地一菩薩雖レ見二涅槃一直過更期二大事一矣　壒

四魔の軍を破り給ふ　四度見聞云摧二三世之怨敵一繼二慈悲昨一即破二四魔之軍一矣　大論曰魔有二四種一煩惱魔五衆魔天子魔死魔矣

ひかぬ弓はなさぬ矢にてゐる時はあたらず鹿もはづさゞりけり　或云夢窓國師の歌に「たてぬ的引ぬ弓にて放つ矢のあたらぬ鹿もはづれざりける　引ぬ弓はなさぬ矢とはたとへば愛染の弓矢觀音の弓箭彌陀の利劍不動の利劍など皆是方便のたとへ也大論云引二禪定弓一放二智惠箭一破二諸煩惱賊一得二解脱一矣彌陀の利劍は彌陀の名號を劍にたとへ極重の惡人成其念佛の劍をもて諸の罪過をきると云心をあたらす鹿もはづさざりけりとはいへり

さて放家僧は何れの祖師禪法を御傳へ候そ　禪法傳來の初は世尊迦葉に付屬有て迦葉より阿難に傳ふ二十八代にして達磨に至る梁武帝普通年中に南天より海に浮て廣州に至る後に嵩山少林寺に住し惠可に傳ふ是中國禪の始め也日本にては傳敎慈覺入唐の時北宗の禪を傳へて歸朝有しか共其法ひろまらず後鳥羽院文治三年榮西入宋して黃龍の流を汲て禪宗を極め建久二年に歸朝して是をひろむ是日本禪宗流布の始也　又云臨濟曹洞の東流の事臨濟は榮西の傳ふる處曹洞宗は後堀河院貞應二年釋道元入唐して曹洞の流を受て安貞元年八月に皈朝す越前永平寺の開山曹洞宗の祖也此外も唐僧來朝して一寺の祖師となる多し次第に此法世にひろまれり　私云此放下僧はいづれの祖師の禪法を御傳へ候ぞと尋ねたるなり

敎外別傳にして云もいはれず說もとかれず言句に出せば敎におち文字を立れば宗體をそむく　正宗記云其所謂敎外別傳者非レ謂下黃卷赤軸開書聲字色縱然之有レ狀者直與二實相無相一上也矣或云只能自性を了徹して文字にかゝはらず佛味祖味に染汚せず

向上の一路を踏過し佛道の機に落ざる底のもの始て得べし又必しも文字を學し佛祖の言句を亂を數者とし文字を知ざるを敎外別傳不立文字の禪と云には非ず夫敎外別傳の宗旨をいはゞ佛祖の始て建立する處の法に非す本より人々具足し箇々圓成して諸佛難生の本分の事也云々

座禪の公案何と心得候へき　坐禪は當麻に注す
禪林寶訓註曰公案者乃喩ニ公府之案牘ニ乃至乃聖賢一期之趣天下通塗之理案者聖賢之正文也乃至佛祖機緣目レ之曰ニ公案ニ矣

入ては幽玄の底に動じ出ては三昧の門にあそぶ
當流に幽玄の底に動じとうたふはよろしからず下掛には徹しとうたふこれ然るべし　幽玄の底とはさとりの地所を云也是自利也三昧の門にあそぶとは三昧の門は修行門也あそぶとはおこなふ處也是利他也言心は入ては玄妙の底に徹し出ては修法三昧の門に止行するの儀也三昧善界に注す

自身自佛はさていかに　自身自佛とは自己の本體を云也　或は自身是佛即身即佛等皆禪法に沙汰する處也

白雲深き處金龍おどる　碧岩曰白雲深處金龍躍碧波心裡玉兎驚矣　同抄云金龍日玉兎月矣

生死に任せば輪廻の其生死をはなれば斷見のとが
凡夫は六道の生死に住し輪廻やむ事なし二乘は生死をおそれ利益の心なく無常空に着するが故に斷見のとがあり　惠心云若謂ニ無者即妄語若謂レ有者邪見不レ可ニ以レ心知ニ不レ可ニ以レ言辨ニ矣

さて向上の一路はいかに切て三段となす　向上の一路とは法門の一等高き所を云也　碧岩曰向上一路千聖不傳矣切て三段とは碧岩に一刀兩段と有夢中問答云古人云たとひ一法の涅槃にすぎたるあり共斬て三段となすべし云々

岩ねの山のいはつゝじ色には出し　(夫)問は此いはでの岡の岩つゝし紅ぞめの我衣手に爲家　岩根の山は近江國の名所也(新千)岩根山やまおひにすれる小忌衣袂ゆたかにたつぞ嬉しき匡房

南無三寶　南無は實盛に注す三寶とは佛法僧の三寶也これ佛家に云處也自然居士に注す此外三寶に三有孟子曰諸侯之寶三土地人民政事矣是を儒家の三寶と云也　老子曰我有ニ三寶ニ一曰慈二曰儉三曰

不レ爲二天下先一慈故能勇儉故能廣不三敢爲二天下先一
故能成レ器長矣是道家の三寶也六韜曰大農大工大
商是謂二三寶一矣是兵家の三寶也
されば大小の根機をきらはず持戒破戒をえらはず有
無の二徧に落る事なく皆成佛するためし有故に草木
も發心の姿をあらはしぬ　是は一切に差別なく平等
一致の意也ト觀に一色一香無非中道を釋し法花に
諸法實相と說り此文の心也草木も發心ノ姿とは參問
語錄云禪客問二南陽國師一青々翠竹盡是眞如鬱々黃
花無レ非二般若一下略山姑及卒都婆小町に此意出たり
柳は綠花は紅は山姑に注す青陽は田村に注す
谷の戸出る鶯の氷れる泪とけそめて　○古雪の中に
春はきにけり鶯の氷れる泪今朝やとくらん二條后
雪消の水の歌方にあひ宿りする蛙の聲聞ば心のある
物を　玄義曰蠅墓上二荷葉一唱二正覺一蜩蟬鳴二黃樹一
轉二法輪一矣謠の心是にてつゞけたり歌方は夕顏に
注す格物論云蛙蝦蟆也數種有二螻蟈一有二蟾蜍一蝦蟆
皮上腹下有二黑斑點一脚短能跳接二百虫一解作二鳴
吽一螻蟈即夜鳴腰細口大皮蒼黑色俗名二田雞一蟾蜍ハ
形大背黑無レ點其腹下有二丹書八字一頭有二肉角一蝌

蚪蝦蟆子也形圓有レ尾聞二雷震一則尾脫而脚生矣○
後撰我宿にあひやとりして栖蛙よるになれてや物は悲
しき
目に見ぬ秋を風にきゝ　○古秋きぬと目にはさやか
に見えね共風の音にぞ驚かれぬる敏行
稻葉の雲の夕時雨　匠材集云稻葉の雲はいねのほ
なみの躰也雲のなびくに似たる也云々○續拾民やすく
田面の庵の秋風に稻葉の雲は月もさはらず
たゝずむ月を山に見て指を忘るゝ思ひあり　圓覺
經曰修多羅敎如二標レ月指一若復見レ月了二知所レ標畢
竟非レ月一切如來種々言說開二示菩薩一亦復如レ是矣
圭峰注曰見レ月須レ藉二指端一悟レ心須レ假二佛敎一因レ
指見レ月見レ月忘レ指因レ敎筌レ心悟レ心忘レ敎存レ指則
失二眞月一執レ敎則失二本心一意令二證レ實忘一レ標矣
浦の湊の釣舟は魚をえて筌をすつ　ゐ　說文曰野王按
筌捕レ魚竹笥也矣莊子外物篇曰筌者所二以在一レ魚得
レ魚而忘レ筌蹄者所二以在一レ兎得レ兎而忘レ蹄言者所以
在レ意得レ意而忘レ言吾安得二夫忘レ言之人一而與レ之
言哉矣

峰の嵐や谷の聲夕の烟朝霞皆是三界唯心の　柳は
緑花はくれないといへるに等し　說郛弓第一百
韻紀云谷韓者盧谷接物之聲也矣　東坡曰溪聲便是
廣長舌山色豈非ニ清淨身一矣　古德曰一切色是佛色
一切聲是佛聲矣

面白の花の都や　面白は三輪に注す花の都は田村
に注す

東には祇園清水落くる瀧の音羽の嵐に地主の櫻は
清水寺音羽地主は田村に注す　祇園社　神祇式云
山城國愛宕郡八坂鄕祇園神三座矣諸社根元記云中
間大政所（牛頭天王妻 龍鳴尊垂跡）東間八王子（三女五男）西間（稻田姬矣 本御前）　帝王
編年記云神輿三基大政所波利女少將井矣舊記云祇
園牛頭天王初垂ニ迹於播磨明石浦一而移ニ廣峰一其後
移ニ北白河東光寺一其後陽成院御宇移ニ感神院一託宣
云我天竺祇園精舍守護神故號ニ祇園社一矣慈惠大師
傳云天延二年甲戌以ニ感神院一附レ師蓋斯神也素盞
烏尊而在レ昔則號ニ廣峰一在レ尾則稱ニ牛頭天皇一當ニ
陽成院御宇一來化ニ京師一且託レ兒曰我護ニ祇園精舍一
之神也因以爲レ名矣祇園緣起云天竺北有レ國名ニ九
相一其國有レ園名ニ吉祥一其園中有レ城城中有レ王名ニ
牛頭天皇一又名ニ武答天神一娶ニ娑竭羅龍王女一爲レ后
生ニ八王子一其眷屬八萬四千六百五十四神矣牛頭天
皇の御事委く簠簋(ホキ)內傳に見えたり○千早振神のそ
のなる姬小松萬代ふへき初めなりけり　後拾　經衡

西は法輪嵯峨の御寺まはらばまはれ水車の輪のりせ
んせきの川波　法輪寺は號ニ智福山一始めは葛井寺
といへり弘法大師の法嗣釋道昌開基也一日道昌安
座虛空藏菩薩現ニ衣袖上一昌乃裁レ袖圖レ之置ニ法輪
寺一今本尊是也眞言宗僧守レ之矣法輪寺は大井川の
西にあり依て西は法輪と續けたりさがの御寺は百
萬に注す　水車の始は瑯邪(ラフヤ)代醉(タイスイ)二十二卷云魏馬鈞
始作ニ水車一矣帝王編年記云天長六年己酉五月廿七
日官符曰諸國可レ造ニ水車一之由被レ仰ニ下之一矣本朝
蒙求云中納言良峰安世天長六年五月奉レ勅諸州の
民に敎て水車を造らしむ（嘯文）徒然草云龜山殿の御池
に大井川の水をまかせられんとて大井の土民に仰
て水車を造らせられけり云々應仁記云臨川寺の水
車はめぐる跡なくなりはてゝ昔のさがの舊都深き
野となりにけり云々私云嵯峨に臨川寺とて有夢窓
國師の開基也此所水石の景象他に勝れたり今臨川

寺の前に石堰あり臨川石堰と云を略してりせんせきとは云也ゐせきと云は山川にくゐを打て石をつみかさね水をせくを云也　唐韻云堰埭壅水以土遏水也矣　竹を編て小石を盛涯にをく名蛇籠是もゐせき也○大井川法の輪かくる水車我いくめぐり浮沈むらん○大井川浪をゐせきに吹留て氷るは風の結なりけり

河柳は水にもまるゝ　河柳は川岸の柳を云川そひ柳ともいへり遊行柳に注す

しだり柳は風にもまるゝ　垂柳　獨梩柳と書　詞林三知抄云しだれ柳は糸柳の事也云々　詩經小辨篇曰萋彼柳斯矣○百敷の大宮人のかざしたるしだり柳は見れどあかぬかも　人丸

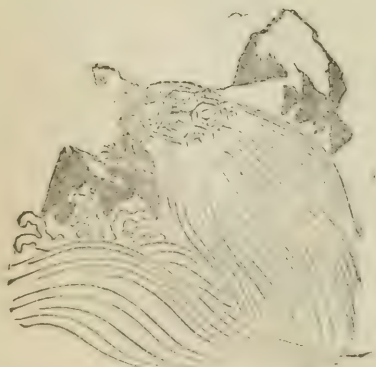
ふくら雀は竹にもまるゝ　雀の子は親よりもふくらかに見ゆれば雀の子をふくら雀と云也

茶臼は礱にもまるゝ　說文曰臼舂也古者掘地爲臼其後穿木石矣　韻端曰唐陸宗元云日午夢覺無餘聲山童隔竹敲茶臼矣　備討集云昔一條京極有祇陀院寺此門前有石匠能切礎琢磨而出好磨一副之祇陀院矣或云伏見城山之石密理堪爲茶磨矣三才圖會云轉磨唐曰磑矣

筑子の二つの竹のよゝをかさねて　筑子は今のありおりの竹を云也むかしは南の端にきゞこの形を作る依てこきりこといへり○月見つゝうたふはうかのこきりこの竹の夜聲のすみわたる哉　今是をあやおりと云はあやをおる手もとに似たるゆへに云也

名は末代にとゞめけり　屋島に注す

謡曲拾葉抄卷十五

三輪

大神社者在大和國城上郡所祭之神一座素盞嗚尊御子大己貴神也　神代卷曰大國主神亦名大物主神亦號國作大己貴命亦曰葦原醜男亦八千戈神亦曰大國玉神亦曰顯國玉神云々　大己貴神之幸魂奇魂今欲何所住耶對曰吾欲往於日本國之三諸山故即營宮彼處使就而居此大三輪之神也矣　舊事本紀曰大己貴神駕天羽車飛於虛空偏求妻時下于茅渟縣陶邑大陶祇之女活玉依姫其往來非人之所知其女初孕父母怪問曰誰人來乎女答曰有神人自屋上來共雙枕於是欲顯見之著針于苧玉卷懸于神人裳認其絲見之明旦從從往尋見出自鑰孔經節渡山入吉野山留於三諸山其所結之絲三丸翦遺故號曰三輪山矣　江談云玄賓去洛陽赴他國聞道來會女人脱衣與之女人得之詠和歌「みつの輪は清く淨そ唐衣くると思ふなえつとおもはじ已上　此謡は此

江談の說にもとづきて作る成べし童蒙抄云昔伊勢國あふきの郡の人深山に入て鹿まちする程に風吹雨ふり氣色たゞならずして來る者あり形黑く長高し目はてれる星のごとし獵師是を射あてつ其後雨風やみて歸りぬ夜明て血の跡につきて尋至るに遙なる山中に少しはなれて野中に塚有其内に入其塚の前に神女有て此獵師をまねきて云汝が射たりつるものは此塚に住む鬼也我此鬼にとられて年來此塚にすめり汝此鬼を殺べしと獵師柴を集め塚に入て火をつけて燒殺しつ其後此神女を具して家に歸り相住事三年とみ榮え又兒一人うむ其後此男白地にありきけり其間に女も子もうせぬ男歸りて泣悲しむ事限なし此女常に居たりける所を見るに三輪の山本杉たてる門と計書付たり是によりて大和國に尋行て三輪明神の社に參り此女にあふべきよしを祈る程に其社の御戸押開きて見え給ふ兒も同じく見ゆとなん是より三輪の祭を伊勢のあふきの郡の人おこなふ也文略　詞林采葉云三輪に尋と云事は古今集歌に「戀しくはとふらひきませ我宿は三輪の山本杉たてる門此歌は三輪明神住吉大明神に

奉給ふと申傳たれば三輪は女體にておはしますと見えたり雖レ然拾遺抄に住吉明神の御託宣とて「住吉のきしもせさらん物ゆへにねたくや人にまつといはれぬ此歌は住吉明神女體にて三輪へ奉給ふと申す乎然而住吉四所明神の内一社神功皇后にておはします共又玉津島にておはします共申はかの讀給ひけるにこそ中略　三輪明神の女體男體の物語南都有之或は伊勢國あふきの郡にて獵師の妻と成て男子をうみ給ひけり共或は人の女通て室殿に糸入られて志るしに付たりける三つの苧玉木みわ社建たりければ三輪と申めり下略　奥義抄云此三輪明神は社もなくて祭の日は茅の輪を三つ作り其岩の上に置てそれを祭る也社のおはせぬをあやしとて里の者共集りて造たりければ鳥百千出來てその森をふみこぼちてその木共をば各くはへてゆきうせにけり其後神のちかひと志りて造らずとぞ云々　舊事本紀云上皇初代時大己貴大神問ニ吾魂大國魂大神ニ方神欲レ住ニ何處ニ時魂神答ニ躬神ニ曰吾欲レ住ニ大和國三諸岡ニ故造ニ祠於山腹ニ令レ栖レ之至崇神天皇遷於山麓ニ而栖矣　詞林采葉云伊勢のあよきめの獵師の尋ね來りける時は社内に母子ともにおはしまして御戸をひらきて見え給ひけり共申せば社なしとも申べからずと云々　私云日本紀舊事本紀童蒙抄等の説を見るに上古には社ありと見えたり

是は和州三輪の山陰に住居する玄賓と申沙門にて候三輪神社は道より北の方山の麓にあり拜殿の上にひきゝ山ありて杉多し參詣の人是に向て拜す後はは大きなる茂山也玄旨聞書云みわの山にはあまたの別名有三室山三諸山神岡山神かき山神遊山神南備山などよめる皆此山の名也万葉に見えたり云々玄賓は弓削氏にて河内國人也興福寺の宣教に志たがひて稟ニ傳唯識ニ潜に伯州の山中に入て心靜に住給ふ折節桓武帝不例によりて詔に志たがひて都に入法力を以て御疾忽に平愈なる又山に歸り給ふ大同帝詔して輦下に引返し僧官の勅を下し給はんとの聞え有しによりて備中の湯川寺に逝去弘仁帝は其行迹を貴で詔問志きりに不レ絶每年布を贈て音信給ひき去程に弘仁九年六月に寂す年八十餘釋書文略長明發心集云むかし玄敏僧都と云人有りけり山志な寺のやんごとなき智者なりけれど世をいとふ心深くして更に寺のましはりをこのます三輪河のほ

とりにわづかなるいほりをむすびてなんおもひ入つゝすみけると云々江談云弘仁五年玄賓任ニ律師一辭退之歌に「三輪川の清き流れに洗ても衣の袖は更にけがれじ此歌古事談には平城の御時大僧都辭退の歌と有又云辭ニ大僧都一歌に「外國は山水淸し事多き君が都はすまずまされり已上和州は田村に注す沙門同レ上

檜あかの水　　檜は大原御幸に注すあかの水は井筒に記す

三輪の山本道もなし檜原の奥を尋ねん　　明神三輪山の麓にましますゆへに三輪の山本といへり檜原は三輪山の北の奥をいふ也又山陰に玄賓僧都のすみ給ひし跡あり岩陰也　新拾　かさしをる跡共見えぬ梢かな檜原重なるみわの志け山　津守國夏

老少不定　　楊貴妃に注す

なす事なくて徒にうき年月を三輪の里に　　白氏文集曰事々無レ載身也老醉郷不レ去欲ニ何歸一矣　東關紀行云齢は百とせの半に近づきて髮の霜漸に冷しといへ共なす事なくして徒に明しくらすのみに非ず下略○徒に秋のよな〳〵月見しもなす事なくて身ぞ老にける爲定

僧都　　頼政に注す

山頭夜戴ニ孤輪月一洞口朝吐ニ一片雲一　此詩は在ニ百聯抄解一山頭と云につきて月を戴くといひ洞口といふによりて雲をはくとうけたり孤輪とは月につかふこと葉也

山田もる僧都の身社悲しけれ秋はてぬれは問ふ人もなし　　續古今集雜上僧都玄賓の歌也　同書云備中國湯川と云寺にてと云々　此謠には悲しけれとあれ共續古今には哀れなれと有　古今榮雅抄云玄賓僧都世を遁れて備中國に行て山田をもるわざをして民共にしたがひておはしける名に田を守るものをそうづといひならはせりと云々御傘云古今相傳なき人はかゞしをそうづと云と思へり板にて水を田に入る物也そうはそゆる也つは水也それを玄賓僧都の我身になぞらへて讀給ひし也云々　そうづは竹にてこしらへて水一盃みちておのれとはねかへす音に鳥獸おどろき去也添水と書云々

山影入レ門推不レ出月光鋪レ地掃還生　此詩も百聯抄解にあり詩の心明に聞えたり

鳥聲長にして老生と閑なる山居　此句百聯抄にも

見えず何れの語ぞ追而可レ考心は老人の心しづか
なるをいへり
柴のあみ戸を押ひらき　　〇人とはゝ柴のあみ戸を（建保二年歌合）
・押あけていつか都の秋をこたへん有家
かくしも尋ねきりしきみ罪を助けてたび給へ　　樒
をつむと云かけたる歟かくしもはかくはかくのご
とくなど云斯の字也しもは出葉也きりしきみは切
樒と云事歟樒は摘などゝこそいへきると云縁なし
一説きりしきみは來りし君と云義也たの字を略し
ていへりきりしのしの字にて句をきるべし君は僧
都を指て云也
下樋の水音も苔に　　〇庵むすぶ山の下樋もかけ（草根）
つかす己と水の行にまかせて
上人　　遊行柳に注す
其上我庵は三輪の山本戀しくはとは讀たれ共　古
今集雜下題しらずよみ人しらず「我庵は三輪の山
本戀しくはとふらひきませ杉立る門神中抄云新撰
には戀の部に入たり世人是は三輪明神の御歌と申
めれど慥にしりがたし其由もしるされず只三輪の
山のほとりに住ける人の讀りけるなめり此歌を本
にて驗の杉と云事をよみならはしたるにこそ云々
松はしるしもなかりけり杉村計立なる　　〇我宿の
松はしるしもなかりけり杉村ならは尋きてまし此
歌は今昔物語廿四云大江匡衡稻荷の禰宜が娘をか
たらひて愛し思ひける間妻の赤染が許へ久しく來
らざりければ赤染是なんよみて稻荷の禰宜が家に
匡衡か有ける時つかはしける云々　玄々集には能
因法師が歌と有
寄て見れば衣の妻に今色の文字すはれり讀てみれは
歌也　みつの輪の歌衣の妻に金色文字にてすはれり
と云事證文未レ考江談にも是なし追而尋ぬべし
三の輪は清く淨きぞ唐衣くると思ふな取と思はし
世傳此歌は三輪明神の御神詠といへり　江談には
得つと思はじと有くると思ふなとはくるゝとおも
ふなとなり　傳教釋云天地開初三輪神現三輪者身
口意三業也　心正則三業自正所謂三輪清淨也矣
或云此歌を三輪淸淨の偈共又は三輪空寂の布施共
云也三輪空寂とは施者受者施物此三を三輪と云空
寂とは施す人も受る人も何共心に思はず無心なる
所を空寂と云也云々　此心をくると思ふなえつと

[illegible]じとの神詠也　法全記云供二養自他一四法身不二受而受其納受矣

千早振神も願の有ゆへに人の値遇にあふぞ嬉しき　三輪明神の御神詠といへり追而尋ぬべし千早振は明神に注す値遇は盛久に注す

罪を助てたび給へ　標　三輪明神に罪有事更に本説なき事也是は童蒙抄に神女鬼にとられて年來塚の中にすめりといへる此説に依てかく作る成べし上に注す

是は三元神道の　妙成とは稱美の詞也三元神道三妙神道と云あり或は天元神變神妙地元神通神妙人元神力神妙といへる此等の義に依て妙成神道と謂つ成べし　名法要集云神道有二三種一一者本迹緣起神道某神某社化現降臨勧請以來就二緣起之由緒一構二一社之秘傳一以二口決之相承一二者兩部習合神道以二胎金兩界一習二內外二宮一以二諸尊一合二諸神一三者元本宗源神道元者明二陰陽不測之元々一本者明二一念未生之本々一宗萬法歸レ一源諸緣開二基吾國開闢以來唯一神道是也矣

女體と三輪の神　三輪の神は大己貴命にして男躰なれ共女躰におがまれさせ給ふと也衆生の氣にしたがひて蛇身にも化し女躰共あらはれ給ふべし三輪明神を女躰男體と云事は古來其異義まちまち也それはとぶらひきませ杉立る門と云歌につきていへる也此うたひに女體と作るは江談の説に本づきて云也

ちはや掛帶引かへて　標　千早は袖のなき羽織のやうなる物也凡長貳尺計也神事を行時神官着二用之一大和錦又は練衣布にても是を認る也又巫の舞衣をもちはやと云是には袖有一説云ちはやと云は天鈿女命茅萓を身にまとひ岩戸の前にてうたひまふ是に表して其服をちはやと云也云々　掛帶は富士太鼓に注す

たゞ祝子が著すなる　祝子は祝言をよむ役人也令義解云祝者爲二祭主一贊辭者也國司於二神戸中一簡定取申二太政官一若无二戸人一者通二取庶人一也矣烏帽子は卒都婆小町に注す狩衣は松風に注す

中にも此敷嶋は人うやまつて神力ます　和州に磯嶋と云名所有櫻井三輪の方より長谷へゆけば慈恩寺村あり其北に芝原有是しき嶋の地也欽明天皇の

[illegible]明の宮の舊迹也古歌に磯嶋の大和とつゝけたり今按に大和國をいはんとて中にも此しき嶋と云此和歌を敷嶋の道といへり此うたひは明神の神詠又古今集の歌を以て作る也和歌は神國の風儀たり依て人うやまつて神力ますとはつゝけたり　御成敗式目云右神者依二人之敬一増レ威矣

五[illegible]は田村に注す足引は檜垣に注す

大和國に年久しき夫婦の者あり　◎袖中抄云昔大和國に男女相住て年來に成にけれと晝とゝまりて互に見ゆる事なかりけれは女の恨て年來の中なれといまたその形を見る事なしと恨けれは男うらむる[illegible]まことことはり也但し我形を見ては定ておち恐らんかいかにといひけれは此なからひ年をかそふれはいくそはくそたとひその形見にくゝ共ねかはくは唯見え給へといへはしかなりさらは我その櫛笥の中におらんひとりひらき給へといひて歸りぬいつしかあけて見れはちいさきくちなわわだかまりてみゆおどろき思ひてふたをおほひてのきぬその夜又來てわれを見ておとろき思へり誠にことはり也我も又きた覽事耻なきにあらんずといひ契りてなく〳〵別れさり又女うとましなから戀しからん事をなけき思ひて苧まきあつめたるをへそといへりそのへそにはりをつけてそのはりを狩衣のしりにさしつ夜ぁけぬれはその苧をしるべにて尋行て見れは三輪明神の御ほくらの内にいれりその苧の殘りみわげのこりければ三輪の山とは云也といへり云々　私云是は日本紀崇神天皇卷の倭迹々姫命の事に能相似たり略レ之

八千代をこめし玉椿かはらぬ色を頼みけるに　八千代椿の事鐵輪に注す〇君か代は春に春ある時なから八千世こめたる玉椿哉（拾玉）〇玉椿かはらぬ色も夏きては青葉わか葉そ峰にさやけき（水日集）

有夜の睦語に　匠材集云むつことはむつまじき也夜分也〇むつことをかたりあはせん人も哉浮世の夢のなかはさむやと（明石卷）

うは玉のよるならでかよひ給はぬは　うば玉共むば玉共ぬは玉共云也古歌にうは玉の夜共或はうは玉の髮共夢共もつゝけたり烏玉黑玉野干と書　万葉仙覺抄云ぬは玉共うは玉共いへるは夜を云也う

は玉とは黑き玉と云心也夜は黑き色なれはうは玉と云へし中略　烏玉共黑玉共書てうは玉ぬは玉共和するは此心也野干玉と書てうは玉とよめるは狐は百歳過ぬれば妖艶の女と化する也百年を過ぬれは其儀老女となるが故にうはと訓ずべし然るを喜撰式には幾をむは玉と云夜をはぬは玉といふ夢をはぬるたまといふと別々に書わけたりと下略

實も奏ははつかしのもりて餘所にや　羽束師杜は山城淀の西にあり三井寺に記す　爰は只はつかしきといふ諷詞にてつゝけたり

鎭は高砂流石は安達原小手卷は二人靜に注す

むすふやはや玉のをのが力にさゝかにの糸くり返し行程に　熊野三所の內速玉男の神を爰につゝけたる歟但此處へ早玉の神を出す事更にその緣なし爰は只玉の緒とつゝけて上にむすふと置たり玉の緒は命也又さゝかにの糸とつゝけたりさゝかには蜘蛛也關寺に注す　藥師寺公義集云僧正宗緣がもとにて歌よみ侍りし時寄ニ神祇一祝ニ君を守る神をあかむる契のみ絕ずや代々に結ぶはや玉

先は岩戶の其初隱し神を出さんとて八百萬の神遊是ぞ神樂の始めなる　素盞嗚尊の玄はご無狀とて天照太神天石窟に入給へは國の內常闇となる八十萬の神たち愁ひ迷ふ中にも高皇産靈神天兒屋根命太玉命思兼命猿田彥手力雄命數々のはかり事をめくらし給ふ天鈿目命以ニ眞辟葛一爲レ鬘以ニ蘿葛一爲ニ手繦一以ニ竹葉飫憩木葉一爲ニ手草一持ニ著鐸之矛一石窟の前にして作ニ俳優一相與歌舞又庭燎をたき玄りくへ縄をはり常世長鳴鳥を集へて互に長鳴せしむ是皆神樂の起り也日本紀及ひ古語拾遺文略　●兼邦百首 かく山の峰の榊葉折かさし立舞袖を神もうくらん　●新拾 思兼たばかり事をせさりせは天の岩戶はひらけさらまし

天の岩戶を引立て神は跡なく入給へは常闇の世とはやなりぬ　神代卷云天照太神入ニ天石窟一閉ニ磐戶一而幽居故六合之內常闇而不レ知ニ晝夜之相代一于レ時八十萬神會ニ合於天安河邊一計ニ其可レ禱之方一矣　●續後撰 常闇に天照神を祈てそ月日とともに後はさかゆる　橘仲遠　天の岩戶は天上を指て云也岩戶とは堅固の義也　伊勢外宮の後の山を高倉山共高佐山共日鷲山共いへり此處に石窟あり高倉の岩屋と名つく

是を俗に天の岩戶といひならはせり　元長神祇百首註云豐受の宮の御前の山を高佐山と云又高倉山共加利佐加峰共申也云々　按此岩屋は伊勢津彥の住給ふ所也と云り　(元長神祇百首)いせつ彥の岩屋を殘す深山邊の若踏分て誰かよふらん　但此石窟につき說多し倭姬世記云天日別命伊勢多賀佐山の嶺に造二石宅一住給ふと云々石窟本緣記云高庫藏者名曰二天小宮一亦名二天磐座一是也云々　神宮雜記云春日戶高座神伊勢津彥神等石窟也云々今案初め伊勢津彥此岩屋に住しを天日別命の下知にして立去し事諸集に詳に記せり然るに此所を俗に天の岩戶といひ高天原共いへるは其謂れなきに非す右の石窟本緣等の說を以て天の岩戶共云也　(元長百首)末の世に天の日鷲の神わざの殘るも遠き白和幣哉日神磐屋に籠座時諸神種々の神事し給ひ日鷲の神始て白和幣を作り給ふ也此等の義に依て天の岩戶に表し或は神樂の緣を以て此山を日鷲山共名付たる也

神樂を奏して舞給へは　文選銑注曰奏者作樂之物號也矣　弘決云奏者爲也凡爲二樂音一皆稱爲レ奏矣

天照太神その時に岩戶を少し開き給へは　兼邦百首抄云天照太神岩戶に籠らせ給ひし時思兼の命遠慮深き神にてさま〲の事をはかり給ふ御神樂を奏し其神の子手力雄命を天の岩戶の戶わきにそへ置太神御神樂を何事ぞと思召て戶をそと細目にあけてのぞき給ふ其光かゝやきて諸神のかほしろ〲と見えたり天のこやねの命猿田彥うすめの命舞かなて給ふあはれあなたのしとの給ふかゝる所に手力雄戶ひらをやぶりてなけくだし給ふ是信濃國戶隱山となれり太神の御手を給ひ引出し奉り御後へしりくへをまはしはり給へは返り給ふ事不レ叶しりくへとは左繩の御しめ繩也云々「岩戶出し光の影のかはらぬやしりくへなわのしるし成らん

又常闇の雲晴て日月光りかゝやけは　(續千)久堅の天の岩戶の山の端に常闇晴て出る月影　俊光

面白やと神の御聲のたへなる　舊事神祇本紀云此時天光寶光相合視二乎羣神一面新白珍素仍宜二面白一矣　古語拾遺云當二此時一上天初晴衆俱相見面皆明白伸レ手歌舞相與稱曰阿波禮(言二天晴一也)　阿那於茂志呂(古語事長切　皆稱二阿那一言衆面明白也)　已上

思へば伊勢と三輪の神一躰分身の御事　三輪明神を言霊といひ又天照太神は陰神にして御名を豊岡姫と號す此事の義に依て一體分身と云歟大貴己神は天照太神の甥也浮屠の説に三世の諸佛は釋迦一佛の分身也と云がごとく天照太神は地神最初の神故諸神皆太神の分身にて非すと云事なし

今宵は岩倉やその關の戸の夜もあけ　天の岩戸是は上に付て岩倉や其關の戸とつゞけたり　平安[illegible]云抑天照太神天岩戸に籠ましませし時の[illegible]くたるを今北岩藏と云岩戸の左右の戸われ其左は東岩藏となり右は西岩藏となると云々　拾[illegible]云石藏王城四方有レ之矣　臥雲日件錄云岩藏在西方ニ南以ニ男山ニ爲ニ岩藏ニ矣　勅撰名所和歌抄岩倉山東北愛宕郡西乙訓郡以上三箇所矣　私云北岩藏は畑枝の北松が崎の西にあり東岩藏は南禪寺の東也西岩藏は良峰の北也南岩藏今其所定かならず又一説に南は大和國の名所に見えたりといへり追而可レ尋

かく有難き夢の告さむるや名殘成らん　今爰に夢の告とうたふ事いぶかし此謡の始終を見るに夢の沙汰曾てなし

龍田

龍田大明神社者在ニ和州平群郡龍田町北方ニ號ニ新宮ニ　諸社根元記云大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社又云龍田比古龍田比女神社二座矣神代卷云伊奘諾伊弉冊尊共生ニ大八洲國ニ然後伊弉諾尊曰我所生之國唯有ニ朝霧ニ而薫滿之哉乃吹撥之氣化ニ爲神ニ號曰ニ級長戸邊命ニ亦曰ニ級長津彦神ニ是風神矣神祇普天圖云風神謂志那都比古神廣瀬龍田同神也矣　日本紀云天武天皇治四年四月遣ニ小紫美濃王小錦下佐伯連廣足ニ祠ニ風神于龍田立野ニ矣　詞林采葉抄云龍田と云事古老傳曰昔此處に雷神落てあがる事をえず童子となりたりけるを農夫が養て子とす比しも旱なりけるに隣の村にはふらされ共農夫が田の上に夕立時々そゝぎ稲花成熟し秋の收思ひのまゝにしてけり其後此童子暇を乞て小龍となりて天に昇依レ之此作田を龍田と云けるをやかくて所の名とす然者龍田は正字也立田は假字也云

々
おしへの道も秋津國數ある法を納めん　數ある法とは世尊一代聖教種々ある事を云也秋津國とは日本の總名豐秋津洲を云也　日本紀云神武天皇三十一年夏四月乙酉朔天皇登ニ嗛間岳（ホツマノヲカ）ニ廻ニ見國狀ニ猶如ニ蜻蛉（アキツノ）之臀呫ニ由レ是始有ニ秋津洲之ニ名矣あきつとは蜻蛉と云虫の名也日本の國の狀此虫の形に似たるとて此國を秋津洲とは云也釋日本紀云西者額方也東者腹方也南北者兩羽也仍日本國東西長南北狹之間似ニ彼虫形ニ矣○（續後撰）あきつはの姿の國に跡たるゝ神の守りや我君のため

是は六十餘州に御經を納る聖にて候　廻國修行の聖は如法經を國々に納る事也如法經とは法華經を云也慈覺大師大唐傳來の法華經を於ニ比叡山ニ書始め給ふ其經を受取て今も國々に納る也是廻國修行の所作也　六十餘州十二代景行天皇御宇始分ニ日本ニ爲ニ三十三箇國ニ亦三十四代推古天皇御宇聖德太子亦分爲ニ六十六箇ニ（太子傳下卷）　聖の字義は遊行柳に注す

又是より龍田越にかゝり河内國へと急候　龍田越は和州より河内國へ越る道也立石越の北にあり十三越と云嶺より東の方に塚十三あり故に名つく河內國は采女に注す

奈良の都は玉葛に注す有明は高砂に注す

西の大寺を餘所に見て　南都西大寺を云也法花寺の西五町にあり孝謙天皇の勅願也孝謙帝を高野の天皇と號す依て高野寺共云也又仁明天皇此寺を兜率天宮共仰られきと類聚國史に見えたり實敏僧都此寺に住で三論宗をひろめられしよりながく傳へたり拾芥抄云西大寺高野天皇天平勝寶元年創レ之至ニ天平神護元年十七年ニ造畢矣帝王編年記云稱德天皇天平神護元年造ニ西大寺ニ安ニ置七尺金銅四天像ニ三躰如レ意鑄畢今一躰至ニ七箇度ニ未ニ鑄得ニ爰天皇立願曰依ニ此功德ニ永離ニ女身ニ可ニ成佛ニ者我手不レ可レ燒涌レ銅指ニ入手ニ之處敢不レ燒此時天王像成畢天皇有ニ夢想之告ニ兜率天衆四人來云八月四日可レ奉レ迎云々天皇臨レ期上ニ生兜率天ニ給事不レ違ニ夢告ニ此寺以ニ銅瓦ニ葺レ之而貞觀皐解落畢其後用ニ土瓦ニ也矣○さりともと西の大寺賴む哉そなたの願ひともしからしを

[illegible]暮過し秋篠や外山の紅葉名に殘る　秋篠は和州添下郡西大寺の北也此處に秋篠寺とて有善珠僧正の開基也本尊は藥師如來光仁桓武兩帝の勅願所也已上書略　今眞言山伏住して三寶院に屬す外山里は秋篠の西也後水尾院詠歌大概抄云秋篠の外山の里は伊駒の嶽のふもとにあり云々名木の楓有總而外山と云は高き山の外につゞきたる小き山を云也たとへば富士山に足柄箱根を外山と思ふへし但高き山の前の小き山をも云べけれ共それにては感情なし遠くより見たる氣色を外山と心得へし　師說○新古秋篠の外山の里や時雨らん生駒のたけに雲のかゝれる西行

龍田の河に着にけり　龍田の町を西へ出れは川有是龍田川也砂河也此川上を平群谷（ヘグリダニ）と云生駒嶽の麓より出る川也立野の西に紅葉川とて小溝有是を龍田川と云はあやまり也

立田川紅葉みたれて流るめり渡らは錦中や絶なん

古今集及大和物語に奈良の帝の御歌と有古今秘書云文武の人丸を御供にて龍田川遊覽の時よみ給へる御歌と云々　奈良の帝とは文武の御事也古今序に秋の夕立田川に流るゝ紅葉を帝の御目に錦と見給ひと有は此歌の事也　阿古根浦口傳云此歌は大同二年八月十二日平城天皇龍田川に行幸侍き川上に紅葉錦を張たることくにて面白きに水神水より出て皇に向てよめる歌也それを帝の歌とは申也實は水神の歌也と云々

紅葉の歌は帝の御製　帝とは奈良の帝也右の龍田川の歌を云也御製とは天子の御詠を云也万葉集に御製歌（ミツクリノウタ）とよむ也當流にぎよせい（ゴセイ）とうたへ共歌書にては御製ととなふる也

家隆の歌に龍田川紅葉をとづる薄氷渡らはそれも中や絶なん　此歌壬生二品の中に入歌の心は右の奈良の帝の歌を本歌としてわたらば氷のくだけて中や絶なんと也　家隆卿從二位大納言藤原號二壬生二宮位內卿一母信通卿女也新古今の撰者五人の內也寂蓮の聟也　百練抄云嘉禎三年四月九日庚寅今日從二位藤原家隆薨和歌仙也臨終正念年八十矣

龍田川錦織かく神無月　しくれの雨をたてぬきにして古今集冬の部の卷頭題不レ知よみ人不レ知とある歌也榮雅抄云かみな月の時雨のあめをたてぬきにして龍田川に錦をおりかくると也此時雨のあめ

は落葉と聞ゆ云々　万葉仙覺抄云此歌の上の五文
字さほの山とあらで大伴家持が歌也と云々十口抄
には延喜の御歌と有又古今實枝抄には聖武天皇の
御歌也と有
あやうきは薄氷を踏理りのたとへも今に云られたり
その程につきて物のおそれつゝしむ事をたとへ
ていへり　詩經小旻篇曰不ニ敢暴レ虎戰々兢々如レ
臨ニ深淵一如レ履ニ薄氷ニ不ニ敢馮レ河人知ニ其一ニ莫レ
知ニ其他一矣
是社頭にて候　　神巫共書說文曰巫祝以レ舞降レ神也
矣　周禮曰男曰レ巫女曰レ覡又曰司巫掌ニ群巫之政
令一若國大旱則師レ巫而舞雩矣
宮めぐり申さうするにて候　　經の中に右遶三匝右
遶七匝とて佛家佛を禮する儀式に或は三返或は七
返佛を右にめぐる事あり今天台宗等の行道是なり
此抄に神社宮めぐりする事も佛家より起れりと記
せり　百錬抄云建長元年十月廿二日己未春日社御
宮廻也上皇御東帯矣　雲玉集　浮雲の宮めぐりする時雨に
も月さしむかふみかさ山哉

霜降月　　霜月の異名也○風寒み霜降月の空よりや　藏玉
　雪氣と見えて曇初けん
當國三輪の明神の神木は杉なり三輪に注す
當社は紅色にめで給により紅葉を神木とあがめ參ら
せ候　　立田姫は秋を染る神と云故にかくいへり奥
に記す　又或說云龍田明神の御神體は一葉の紅葉
也云々
和光同塵は結緣の始め八相成道は利物の終り　止
觀第六曰和光同塵結緣云始八相成道以論ニ其終一矣
決云和光下釋ニ現身一也同ニ四住塵一處々結レ緣作ニ淨
土因一爲ニ利物之始一衆生機熟八相成道見レ身聞レ法
終至ニ實益一矣　和光同塵とは佛の光を和けて迷ひ
の塵に交るを結緣の始とす終に八相成道して佛に
なし給ふを利物の終りと云也利物は利益也八相成
道の事委く白鬚に注す　老子經曰和ニ其光一同ニ其
塵一矣　此意は我智惠の光を隱して不レ顯云ニ和光一
世に隨ひ塵俗の中に混じて時を云るを同塵と云也
止觀の文の意とは少しかはれり
下紅葉　　紅葉狩に注す
塵に交る神こゝろ和光の影の色そへて　　神書鈔云

明ニ和光同塵之神化一故開ニ一切利物之本基一矣（拾玉集）ならぬみくつも捨てす照すこそ塵に交る光なりけれ

此度は幣取あへぬ　舊抄に詳也略レ之〇此度はぬさも取あへす手向山紅葉の錦神のまに〳〵（古）

神さびは蟻通に注す名におふは江口に注す

我はまことは此神の龍田姫はわれなりと　昔より秋の紅葉に立田姫をむすひて多く歌によみ來れり　神社考云級長戸邊者女神而級長津彦者男神也故今名曰ニ龍田姫一是也矣獻江入楚云春は佐保山の神より事おこりさほ山の花の色によせて春を染る神といひ佐保姫秋は龍田山の神より事おこりて紅葉を詠するゆへに秋を染る神と云也龍田姫共に神の名也云々童蒙抄云春つかさどる神をさほ姫と云夏つかさどる神をつゝひめと云秋つかさどる神を立田姫と云冬つかさどる神をつた姫と云云々　万葉集春の歌に立田姫をよめる「わかゆきは七日に過し立田姫夢此花を風にちらすな　佐保姫は春を染る神と云は春は五色に取ては青色也さほと云はあをきと云心也故に春を染る神と云也俗にあおきと云をまさをと云に同し花山丞相定誠和歌世俗詞云「卯花の初雲さほききえけみかな（杉原發句）此さほきと云事あをきといふ事也云々さほ姫は青き姫といへる事なりあとさと相通なり

神は非禮を受給はす　正直を本とし給へは非禮非義を受給はぬ也　論語八佾篇朱子註曰神不レ享ニ非禮一矣　性理字義曰神不レ歆ニ非禮ニ不レ祀ニ非族一矣南秋江鬼神論曰神不レ享ニ非禮一也鬼神是理非ニ其理一而祭レ之必無ニ得レ享之理一矣

和光同塵おのつから光もあけの玉垣　あけとは丹塗也玉は美稱の詞也或は瑞垣井牆皆同し事也宮殿のめくりに設る也〇和くる光をあけの玉垣はちかひ嬉しき住吉の神（拾玉）

我劫初よりこのかた神代を指て云也劫初は白髪に注す

御代を守の御矛を守護し　御矛とは天瓊矛也或は天逆戈共いへり委く此次に注す

紅葉の色も八葉の葉即ち矛の葉さき成へし　紅葉の葉を矛のはさきに見たてたる也

及の驗僧の法味にひかれて　平家物語に文字を及

の驗者といへり行ひ正しく飛鳥もいのり落すほとの僧を云也法味とは佛法の深き味ひなり
抑瀧祭の御神とは則當社の御事也　抑は高砂に注す瀧祭神は瀧宮共號す伊勢御裳濯川の落合と云所の岸に石組の宮にておはします此宮は殿もなく下津底にましますす水神也天の逆矛を治め給ひし所也此瀧祭の神と龍田の神と同體なりと云事也坂士佛伊勢太神宮參詣記云瀧祭の神とて河の洲崎に松杉なとの一村たてる計にて御社もましまさす神體は水底に御座とかや承る是則龍宮なり云々　倭姬世紀云伊勢國瀧祭神無二宮殿一在二下幸底一水神也一名澤女神亦名二美都波神一矣　色葉字類抄云瀧祭神社在二太神宮北川邊一但無二御殿一矣　神皇正統記云伊弉諾伊弉冊所レ探レ海之天瓊矛者納二于瀧祭仙宮一瀧祭神與二龍田一同體故號二龍田神一曰二天御柱國御柱一者以レ守二天逆戈一也矣　神祇本源云瀧祭神與二廣瀨龍田神一同體異名水氣神也故廣瀨龍田神名號二天御柱國御柱一是天逆戈守護緣也矣
昔天祖の詔未明か成御國とかや然れは當國寶山に至り天地治る御代のためし民安全に豐なるも偏に當社の御ゆへ也　神皇正統云天祖國常立尊伊弉諾伊弉冊の二神に勅して宜く豐葦原千五百秋瑞穗の地あり汝往てをらすべしとて即天の瓊矛を授け給ふ二神此矛をさづかりて天の浮橋の上にたゝすみて矛をさし下してかきさくり給ひしかは滄海のみありき其矛のさきより滴り落る潮こりて一の島となる是を磤馭盧島と云中略大日本國靈山なりと云二神此島に降居て即國の中の柱をたて八尋の殿を化作て共に住給ふ中略又瀧祭の神と申は龍神也其神瓊矛を預て地中に納めたり共云一には大和の龍田神は此瀧祭と同體にます此神の預り給へるにより天柱國柱と云御名有共云中略龍田も靈山近き所なれば龍神を天柱國柱と云るも深秘の心有へきにや已上全文略　私云右の正統記に磤馭盧島大日本國靈山也といへる此靈山は金峰葛城峰を云と見えたり伊弉諾伊弉並尊天祖國常立尊より詔を承て即天の瓊矛をさづかりて滄海をかきさぐり給へは彼矛のしたゝりおのころ嶋となる今の金峰葛城峰是也即此島に殿を作りて住給ふ瀧祭神と立田神とは同體にしてかの瓊矛を預て今に守護し給ふと也此謠に天

祖とは國常立尊を云也立田も葛城も同國なればすへ明かなる御國とかやとはつゝけたり然れは當國寶山に至り天地おさまる御代のためしとは寶山は葛城也葛城を神祇寶山と云也葛城の謠に注す今の金峰葛城は昔おのころ嶋にして天の瓊矛を下し給ふ靈地なれはかくいへり民安全に豊なるも偏に當社の御ゆへ也とは當社は立田を指て云也かの逆戈を守護し給ふ御神なれはかくつゝけたり　舊事陰陽本紀曰去來諾尊去來冊尊奉ㇾ詔起ニ高天原ニ立ニ於天浮橋上ニ以共計謂之云有ㇾ物若ニ浮膏ニ其中蓋有ㇾ國以ニ天元瓊矛ニ探ㇾ之獲ニ是滄海ニ則投ニ下其矛ニ因措ニ探滄溟ニ而引ニ上之ニ時自ニ矛末ニ滴瀝潮鹽凝化ニ爲一島ニ名曰ニ磤馭島ニ今金峰葛城山日枝山是於ㇾ是二尊天ニ降其島ニ化ニ竪八尋殿ニ共住ニ同宮ニ也文略

梢の秋の四方の色　　梢の秋は九月の異名也佛原に注す

年毎に紅葉はなかる立田川湊や秋のとまりなる

古今集冬の下貫之歌には紅葉ばなかすと有又留りはなるらん也詞書云秋のはつる心を立田川におもひやりてよめると云々湊や秋とは九月盡の心也

山も動せす海邊も波しつかにて　○動きなき大和島ねの外迄も猶しつかなるよもの波風（康正元年内裏歌合　准后）

然れは代々の歌人も心を染て紅葉はの龍田の山の朝霞　凡龍田の紅葉とは必楓の木にかきらず萬木の紅葉をいへるなるべしむかしより立田をよめる歌多けれ共楓の紅葉をよめる歌見えず今は龍田山神南山或は立田川のあたりにも楓の木は見えず本宮の前に楓二三株あるのみ也立田川の上平郡谷の奥に楓の木少しありといへり

今朝よりは立田の櫻色ぞこき夕日や花の時雨なるらん　此歌新古今集にありといへ共是なし詞林采葉抄に内大臣の歌と計有一説弘長百首にあり共いへり追而可ㇾ尋歌の心は秋の紅葉を櫻の花にいひかへて夕日は花のために時雨成らんと也

神なびの三室の峯やくづるらん立田の川の水はにこれる　拾遺集物名にむろの木とよめる高向草春歌也歌の心明也神南山は龍田の町の西川下にあり其下の村を即神南といへり三室の岸は神南山の側なる岸也或説に立野の西に山の崩れたる所あり是を三室の岸と云はあやまり也古今實枝抄云神南の森

は大和の龍田大明神より南なる故に神南比森とい
ふ云々　攝州丹波山城に同名有
眞如の月は山姥に注す紅葉重は雲林院に記す神樂は
三輪に注す時うつり事さりては關寺小町に注す
白和幣　白和幣靑和幣とて神にさゝぐる幣帛を云
也　神代卷曰下枝懸靑和幣白和幣相與致其祈禱
矣古語拾遺云令長白羽神植麻以爲靑和幣令
津咋見神植穀木以爲白和幣矣　色葉字類抄
云白丹寸手木綿也靑丹寸手麻也神祭具矣　神代直
指抄云靑にぎて白にぎて靑白はにぎての色を云靑
は麻の色白は木綿の色也和幣はにきはやはらく心
也幣の柔和なるをほめていふ云々
（家白集）○花さけは天のかく山しらにきて靑にきてともち
る櫻かな
謹上再拜　纔通に注す久方は羽衣に記す
月も落くる瀧祭　月も落くるとは入方の月を云也
又落くる瀧共つゝけたり
颯々は高砂に注す神風は野宮に注す夕附鳥は湯谷に
注す御祓は松風に注す小忌衣は高砂に記す
神はあからせ給ひけり　神代卷を考ふるに神あか
りかんがゝりの二義有神あがりと云は神の死し給
ふやうの事を云也　神代卷云伊弉諾尊神功既畢靈
運當遷矣　功成事遂てかくれ給はんの意也此說爰
にあひかなふ歟又かんかゝりと云は神託を云也神
代卷云顯神明之憑談顯神明之憑談此云歌牟鷄
可梨矣　纂疏云憑依也託也天鈿女假他神之託宣
而讚日神之至德矣

當麻

和州當麻寺は二上が嶽の下丸子山の麓にあり號
二上山萬法藏院禪林寺本堂は觀音也曼陀羅堂と
云勅額有是に新曼陀羅あり本堂の後に寶藏有中將
姫の眞の曼陀羅是に納めり當寺は用明天皇第四の
御子麿古の（聖德太子の御弟なり）御建立也其初めは推古天皇の
御宇二十年河內國山田鄕に御建立ありて萬法藏院
と號す今の當麻の地は昔役行者の家地也天武天皇
白鳳二年麿古親王の御夢の告に依て今の地に移し
給ふ天武帝役行者の地なる事を聞召て行者に勅有
て伽藍となし給ふ同十年春二月寺旣に成就す故
禪林寺其後天平寶字年中右大臣豐成の女中將姫

此寺に入て爲レ尼一心に佛道に趣き我眞の彌陀をおがまずんば寺を出まじとちかふ有時一人の比丘尼來り語云我汝が爲に彌陀如來を拜しめん須レ集ニ百駄蓮莖ニ中將尼帝へ奏し給へは詔して蓮莖を送らしむ其時化尼自折レ莖取レ糸穿ニ新井ニ濯レ之五色燦然其後又ひとりの女來り問ニ化尼ニ曰糸は成や答て云成り化女得レ糸於ニ殿之西北角ニ織レ之初更より初て四更に成就す其幅一丈五尺以ニ藁三把ニ浸ニ油二升ニ爲レ燭化女捧ニ授化尼ニ化尼與ニ中將尼ニ淨土の衆相悉く備はり中將尼大きに悅び節なき竹を求て爲レ軸而後化女忽然と見えす化尼作レ偈禮レ圖曰往昔迦葉說法所佛事新起又有レ故感ニ君懇志ニ我來レ此一至ニ道場ニ永離レ苦中將尼問云善哉善知識いづくより來り給ふぞ又さきの女は誰とかいふ答云我は西方の敎主也先の女は觀音大士也と言巳て空を凌て西の方に去給ふ中將尼自レ是精修益つとむ寳龜六年三月十四日安座念佛して終り給ふ年廿九歲と云々（元亨釋書及當麻緣起全文略）考ふるに當麻をたいまともたえまとも云はもとあやまりなり昔はたきまとゝなへたり履中紀に當麻古事記に當岐麻當藝麻と有萬葉十一にたきつこゝろといふを當都心と書りきといと相通なれはたいまといへり雪玉集云中將姬二上山に草庵し給ひ正身の彌陀來迎なくは畢命を期とせんとて念佛三昧に入寥々たる窓の前に月の光さしあらはれて老尼一人來り給ふにあやしみおほして中將姬「南無阿彌陀佛をのみぞよぶこ鳥あやしやたれそ二上の山尼かへし「二上の雲路遙によふこゑをしるへに分し山窓の月

敎へうれしき法の門ひらくる道に出ふよ　敎とは諸佛の敎化也法の門とは佛法修行の門也依てひらくる道とつゝけたり善導云廣開ニ淨土門ニ矣○（新千）敎おくその品々の法の門ひらくる道はひとつ也けり　後伏見院

是は念佛の行者にて候我此度三熊野に參り下向道に趣候　此行者は遊行の聖也先熊野に參詣有てそれより諸國を弘通し給ふ也委く誓願寺に記す行者の名義葵上に注す三熊野は舟橋に注す　撰擇集云念佛行者觀音勢至如ニ影與レ形暫不ニ捨離ニ矣

大和路は田村に注す紀の路の關は蟻通に注す

こや三熊野の岩田川　こやとはこれやの中略なり

岩田川は紀州牟婁郡岩田庄岩田村の東八町計に
あり源栗栖川の庄兵生村より出て朝來組富田組を
經て海に入と云々○續拾岩田川渡る心の深ければ神も
あはれと思はさらめや花山院

二上山の麓なる　二上山は丸子山の上にあり二上
が嶽共云又大坂山共いへり葛城山につゝきたり河
州へ越るさかひ也北に雄嶽と云あり高し南に雌嶽
と云有ひきし兩山ならひたるゆへに二上が嶽と云
也又越中に同名有○夫木君か代は二上山の峯におふる
みどりの松も生かへるまで

一念彌陀佛即滅無量罪共とかれたり　觀經曰稱ニ
佛名ヲ故於ニ念々中ニ除ニ八十億劫生死之罪ヲ矣　寶
王論云一念ニ彌陀佛ヲ即滅ニ無量罪ヲ矣

八萬諸聖教皆是阿彌陀共ありげに候　此文古來よ
りいひつたふるといへ共經論に曾てこれなき由也
依てありけに候とあやふみたる歟誓願寺に注す

釋迦はやり彌陀はみちびく　柏崎に注す

唱ふれは佛も我もなかりけりなむあみた佛の聲はか
り　是は一遍上人の御歌也留りは聲はがりして

涼しき道は賴もしや　匠材集云涼敷道とは極樂の
事納涼の體にあらすと云々觀經曰地獄猛火化爲ニ
清涼風ト矣　彌陀三昧經曰稱ニ南無阿彌陀佛一百遍ヲ
變ニ大地獄ヲ成ニ清涼地ト矣

濁りにしまぬ蓮の糸の五色にいかでそみぬらん
○古今蓮葉の濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあ
さむく遍昭　謠の意は此歌に蓮葉の濁りにしまぬ
とよめるに何とて五色にはそまりたるぞと也元亨
釋書云化尼自折レ莖取レ糸穿ニ新井ニ濯レ之五色燦然
矣蓮葉の歌は誓願寺に注す

わきて超世の悲願とて　超世悲願とは世にこへた
る彌陀の願也無量壽經曰我建ニ超世願ヲ必至ニ無上
道ニ矣　同鈔云超ニ世流布諸佛本願ニ是名ニ超世ト
矣

五の雲は　五障の雲也梅枝に注す○山家けふや君おほ
ふ五の雲晴て心の月をみかき出らん

晴やらぬ雨夜の月の影をだにしらぬ心の行衛をや西
へと計賴らん　○玉葉彌陀賴む人は雨夜の月なれや雲
晴ね共西へこそゆけ　此歌百万に注す

實や賴めは近き道を何はるゝと思ふらん　觀經
に去此不遠と說り又唯心の淨土己身の彌陀共いへ

り
末の法萬年々經るまでも餘經の法はよもあらじ
慈恩大師云 末法萬年餘經悉滅彌陀一教利レ物偏増
矣此意彌陀經及無量壽經に說り誓願寺に注す　末
法萬年の沙汰は東岸居士に注す
又いつの世を松の戸の明れは出て暮る迄　いつの
世を待といひかけたり草庵の心也新古今增抄云松
の戸とは櫻戸なとの類にて松のある故也又松の木
にて作りたると云說もありと云々
法の場　誓願寺に注す
又是成池は蓮の糸をすゝきて淸めし其故に染殿の井
共申とかやあれは當麻寺是は染寺又此池は染とのゝ
染寺は號二石光寺一當麻へ入らんとする四町計前に
あり昔天智天皇の御時其地夜な〳〵光あり見れば
三つの大石あり形似二佛像一勅して三石をきさみ
作二彌勒三尊像一其上に殿閣を作りて是を安置す
釋書全文略 染殿の井は染寺の前にあり彼蓮の糸を染し
水也といへり○にこりにはしまぬはちすの糸なれ
と猶色々のそめとのゝ池　雪玉集
色々様々所々の法の見佛聞法あり共　此曼陀羅に
極樂九品の體をあらはしたれはそれをいはんとて
色々様々とはつゝけたり見佛聞法は軒端梅に注す
白糸の唯一筋そ一心不亂　白糸の思ひみたるゝな
と古歌にもよめり一心不亂は彌陀經の文なり
彌陀一教　上に記す
扨又是なる花櫻常の色には替りつゝ是も故ある寶樹
と見えたり　役小角の殿の前に本の櫻の樹を植て
誓云佛法破滅せは此櫻枯なんと有しがそれより以
來枝葉しけりて今の世に至てかの地にありと釋書
にのせたる此櫻染寺の前にあり蓮の糸をかけてほ
されし櫻なりといへり度々植かへたる成へし花櫻
は小鹽に注す寶樹は極樂の七重寶樹をふくませ
り
草木國土成佛　芭蕉に注す
法の潤ひ種そへて　西方要訣云仰惟釋迦啓レ運弘
益二有緣一敎闡二隨方一並霑二法潤一下略
ひ櫻　袖中抄云考二本草幷食療經等一全無二火櫻一也
蕪茅と書てひきさくらと讀り若これを略してひさ
くらと云歟又くれない櫻をあかきにつきてひ櫻と
云か櫻色とは白をばいはすしてあかきを云をは櫻

のみの色を云と申せど朱櫻と書てかば櫻とよめり
色もすわう色也それをひ櫻と讀るにや云々○梓弓(アツサユミ)
春の山邊に煙たちもゆ共見えぬひ櫻の花
西吹秋の風ならん　發　西は方角にとりては秋也依て
西吹秋とつゝけたり謡の心は西方淨土をいへり
抑此當麻の曼陀羅と申は人皇四十七代の帝廢帝天皇
の御宇かとよ　西譽曼陀羅抄には人皇四十六代孝
謙天皇の政也と有此曼陀羅には觀無量壽經の一部
始終を悉く蓮の糸にて織あらはせるもの也諸說多
し口傳等有レ之扨本朝に三曼陀羅あり一には當麻寺
の曼陀羅今爰に記する處也二には超勝寺の曼陀羅
是釋淸海法師の爲に化人の著す處也傳記は釋書に
あり三には智光の曼陀羅即是夢中の所見を圖する
處也三箇の繪相各異にして理は共に同し曼陁羅新
云ニ輪圓具足ト四曼義云輪圓者如下車輪轂輞輻具而
後成ニ一輪ヲ闕ニ一物ヲ者不ㇾ輪故云ニ具足ト矣　毘盧遮
那經疏曰漫茶羅者名爲ニ聚集ト今以ニ如來眞功德ヲ集
在ニ一處ニ乃至十方世界微塵差別智　即輪圓輻湊翼ニ
輔大日心王ヲ使ニ一切衆生普門進趣ト是故說爲ニ漫荼
羅ト也矣帝王編年記云淡路廢帝諱大炊天　武天皇孫

一品舍人親王第七子也母曰ニ丈夫人ト山背上總守從
五位上當麻眞人女也天平五年癸酉誕生天平寶字元
年丁酉立爲ニ皇太子ト二年戊戌八月一日庚子即ニ位
于大極殿ニ御年二十六御宇六年都ニ平城宮ニ云々天
平神護元年乙巳十月崩御年三十二奉レ葬ニ淡路國三
原郡ニ號ニ淡路廢帝ト矣
横佩(ヨコハキ)右大臣豐成と申し人　帝王編年記云天平神護
元年十一月廿七日右大臣從一位藤原朝臣豐成薨春
秋六十二淡海公嫡孫武智麿一男後人號ニ難波大臣ト
又稱ニ横佩大臣ト此大臣女號ニ中將姬ト織ニ當麻曼陀
羅ヲ時之願主也矣　左右大臣は融に注す
其御息女中將姬此山にこもり給ひつゝ　中將姬は
當麻寺の實惟法師を師として髮をおろし善心尼共
妙意共云又改名して號ニ法如尼ト紫雲庵と云庵をむ
すんで念佛し給ふ紫雲菴は當麻寺の東の方に小堂
あり尼寺也是を紫雲庵と云也中將姬死去の所也古
今著聞云天平寶字七年六月十五日蒼美をおとして
いよ〳〵往生淨土のつとめ念比也云々　中將姬は
極ト能書也弘法大師此姬の筆法をまなひ給ひしと
いへり　今案中將姬は豐成の女押勝は豐成の弟也

初め押勝が橘の奈良丸を讒せし時に兄の豊成も縁座せられて筑紫へ移され給ひぬ中將姫は豊成流人の息女といひ謀叛人押勝が姪なれは旁々身の憚ありて當麻寺に身を隠し尼となれり世に傳ふ繼母の讒には非す中將姫の母は百能とてかくれなき貞女也豊成死去の後も禁中に仕て内侍所の神職をつとむ續日本紀云桓武天皇延暦元年四月尚侍藤原百能薨六十三豊成妻矣

稱讃淨土經毎日讀誦し給ひしが　うたひには讀誦とあれども縁起には書寫とあり讀誦の字義は田村に注す　稱讃淨土經は羅什三藏が譯せる阿彌陀經の事也それを唐の世に玄奘三藏の飜譯し給ひしを稱讃淨土經と云也中將姫の時分はいまだ阿彌陀經は世にひろまらずして稱讃淨土經を世におこなはれし故に是を用ひられし也

然らすは畢命を期として此草庵を出しと　善導云念々相續畢命爲レ期者十即十生百即百生矣

一向に念佛三昧の定に入給ふ　三昧は善界に記す一向に名號を唱へ或は淨土を觀念すれは自妄念にさへられすして正念になるを念佛三昧と云也　天台觀經疏云般舟經云衆生問レ佛何因緣得レ生二此國一彌陀佛答以レ修二念佛三昧一得レ生二我國一也矣　五會讃云然念佛三昧是二無上深妙禪門矣

所は山陰の松吹風も涼しくてさなから夏を忘れ水の　忘水在二和州山邊郡一又攝州及播州に同名あり　匠材集云忘水は野中に有水也たえて又有故也すこしの水を云云々○山陰や闇き岩まの忘水絶々見えてとふ螢かな　玉葉　藤原爲理

心耳を澄す　白毫に注す

稱名觀念の床の上座禪圓月の窓の内　稱名觀念とは念佛を唱へ觀念に入なり正念分明なる床の窓のまとかなる月の光りさす也白河法皇行二殺生禁斷一願文云式部大輔敦光觀念窓中心築二三明之月一座禪床上眉垂二八字之霜一下略會物集見タリ謠の續き此文によく相似たり

守護國界經曰世尊既坐二菩提道場一毘盧遮那の學性を成せんと欲するに更に能はず時に無量化佛虚空に遍滿し同音に告て云汝今宜く鼻端に當て滿月輪の中に[illegible]字觀を作事を想へし是觀を作已て後夜の分に於て必阿耨菩提を得と告給ふ唵字は是毘盧遮那の眞言一切の陀羅尼の母也是より一切如來

を生し一切の菩薩を生ず世尊此教へに隨つて
[梵字]字觀を作其時無明を除き明了豁然正覺を成
ず取意　爰に座禪圓月の窓の內とつゞけたるは是
等の心成べし三千威儀經曰坐禪有二十事一一當二隨レ時
謂四時也二得二安床一謂禪床也二敷座毛座也四閑處
謂山間樹下也五得二善知識一謂好伴也六善檀越謂不二
外求一也七善意謂能觀也八善藥謂伏意也九能服藥
謂不レ念二萬物一也十得二善助一謂畜二禪帶一也矣
寥々とある折節に　說文曰寥々空虛也廣韻曰寂寥
也或作レ𡨷又作レ漻矣　齊王融曰羅纓徒有レ䖬蟭螟
巳寥々矣　文選左大仲詩曰寥々空宇內矣　廣雅曰
寥深也濟注曰虛靜也矣
忽然は野宮に注すよふこ鳥たつきもえらぬ山中には
山姑に注す
それこそ我名なれ聲をゑるべに來れりと　散善義
曰勸專稱二彼佛名一化佛菩薩尋レ聲到矣　觀念法門
曰時無量壽佛觀音勢至應レ聲來現住二立空中一矣
きらいの御袖もゑほる計に見え給ふ　歸命禮拜と
云詞を略して歸禮の御袖と云歟又綺羅衣共書べし
二月中の五日にてゑかも時正の時節なり　時正と
は春秋共に彼岸の中日を云晝夜の時當分なれば
云也此時は日も正東より出て直西に入時なればと
て日想觀といふ淨土の觀法も此折節に修する事也
家集
〇とにかくにめかれぬ物を夜晝の同し時なる花と
月とを
化尼化女　化尼は西方の阿彌陀如來化女は觀音菩
薩也　何とて勢至菩薩は化來ましまさゞるぞ答云
曼陀羅の願主中將法女即大勢至の化身也と口傳
花ふり異香薰じ音樂の聲すなり　往生要集云無量
樂器懸處二虛空一不レ鼓自鳴皆說二妙法一復如意妙香
抹香無量香芬馥遍滿二於世界一矣　薰の字義は說文
曰薰煙上出也矣增韻曰氣蒸也通作レ燻矣王融詩云
香宇薦二嘉薰一矣　孟郊歌曰南風之薰兮矣
誠は此尼が登りし山なる故に尼上の嵩とは申也
是は謠の作者の文歟追て尋ぬべし
老の坂　二上の嶽のあたりにありや重て尋ぬべし
奇特　說文曰奇異也亦非常詞特獨也專也　亦云二挺
立特一矣無量壽經曰世尊住二奇特法一矣
歌舞の菩薩　誓願寺に記す
微妙安樂の潔界の衆となり　微妙とは極樂の莊嚴

を云安樂とは阿彌陁の淨土を云也潔界とはいさぎよき世界也衆とは極樂の菩薩聖衆ノ事也

本覺眞如の圓闕に座せり　本覺眞如共にさとりたる處を云圓闕とは圓滿せる宮殿也さとりを滿足する處を座するとは云也　宗鏡錄云眞如本覺不レ守二自性一以二無性一故但隨レ緣轉如レ云三法身流二轉五道一矣　智旭師云或有下時即呼二本覺一爲中眞如上或復有下時即呼二眞如一爲中本覺上矣

爰を去事遠からすして　實盛に注す

法身却來の法味をなせり　中將姬稱讚淨土經に依て安樂國に往生して澄法性身娑婆界に還來て佛事をなし給ふと云事を法身却來の法味をなせりとは云也

盡虛空界の莊嚴は眼は雲路にかゝやき轉妙法輪の音聲は聽寶刹の耳にみてり　往生要集云盡虛空界之莊嚴眼迷二雲路一轉妙法輪之音聲聽二滿寶刹一矣是は彌陁の淨土の莊嚴を賛せる文也謠には雲路にかゞやき　有本文には雲路に迷ひと有盡虛空界とは極樂世界廣大無邊なるを云莊嚴は極樂のかざり也眼雲路に迷ひとは極樂の結搆なる有樣を拜み眼も見とれて雲路にまよひ方所も覺えぬ體也轉妙法輪の音聲とは極樂の彌陁はとけ常に說法し給ふ無量壽經には請轉結輪と說給ふ寶刹とは寶の國也彌陁の御聲十方佛土へ聞へ其德無量也又正覺大音響流十方と說給ふ也

蕭然とある曉の心　蕭然とはしづか成心也盛久に注す曉の心とは人の心はかならず曉淨淸になる也佛家に後夜の法事をいとなみ曉に閼伽水をくむも皆淨心なる時を云也

光陰の心おしむへしやな時は人をもまたさる物を此意あふむ小町に記す

唯心の淨土經　淨土經とは右に記する稱讚淨土經也唯心の淨土は實盛及び柏崎に注す

いたゝきまつれや〳〵　戴き奉らん也尊敬する心也神祇などに用る詞也（寶治百首）彥星のゆきあひの空に手向していたゝきまつる此夕かも　蓮性

爲一切世間說此難信之法是爲甚難　彌陀經曰爲二一切世間一說二此難信之法一是爲二甚難一矣　此文の意は念佛の法を指て難信の法と云初心の愚夫其心未練なるが故に此一法を行ずるも猶苦ありと思ふ故

に難信と云也
實も此法甚しければ信する事も難かるべしや　上の文をうけてかくつゞけたり　無量壽經曰諸佛經道難レ得難レ聞若聞二斯經一信樂受持難中之難無レ過二此難一矣

慈悲加祐令心不亂　稱讃淨土經曰臨二命終時一無量壽佛乃至來二住其前一慈悲加祐令二心不一レ亂矣　慈悲をせいひといふ事如何尋ぬるに南都の學侶慈悲をせいひととなふるといへり

十聲も一聲そ誓願寺に注す梟鐘の響墨田川に注す光明遍照十方の衆生忠度に記す水馴棹兼平に注す

さをなくるまの夢の夜は　匠材集云さをなぐるまとは機織ひの事也と云々　機織梭をなぐる間と云事也細川玄旨聞書云はたを織梭をばさと云也さをなぐる間といふは其梭をかなたこなたに取わたすまのなきを光陰のみじかきにたとふる也萬葉十三長歌に投左乃遠離居而と讀り云々○何事も思ひ捨たるみそ安きさをなくるまの夢のうき世に爰には御法の舟とつゞけたれば舟の棹にいひかけたり

海人

世に大織冠物語といへる古き草紙あり此謡は彼物語を以て作る也且又讃州四渡寺の縁起にも見えたり但淡海公の妹高宗皇帝の后に立せ給ふと云事本説更になし案ずるに鎌足の御子不比等は其母海人なる故に淡海公と號すといへる異議説などによりてかく世に云つたふ歟四渡寺縁起に委く有といへ共信用しがたし日本紀十三云允恭天皇十四年秋九月天皇獵二淡路島一時麋鹿猿猪盈二于山谷一炎起蠅散然終日不レ獲二一獸一於レ是獵止以卜矣島神祟曰不レ得レ獸者是我心也赤石海底有二眞珠一其珠祠レ我悉當レ得レ獸爰集二處々泉郎一令レ探二赤石海底一海深不レ能レ至レ底唯有二一海人一曰二男狹磯一是阿波國長邑之海人也勝二諸海人一是腰繋レ繩入二海底一差頃出曰海底有二大蝮一其處光諸人皆曰島神所レ請之珠有二是蝮腹一乎亦入探レ之爰男狹磯抱二大蝮一泛出乃息絶死二浪上一既下レ繩測二海底一六十尋則割レ蝮實眞珠在二腹中一其大如二桃子一乃祠二島神一獵多獲レ獸唯悲二男狹磯入レ海死一則作レ墓厚葬其墓猶今存矣　私云世に傳

ふ處は此日本紀の説を以て云なるべし又唐土にも是に相似たる事あり輟畊錄云廣東采レ珠之人繋二縄于腰一沈二入海中一良久得レ珠撼二其縄一舶上人挙二出之一中略名云二烏蜑戸一矣　大明一統志及廉州志云唐の廉州と云所の海中にして蜑人常に長き縄を腰に繋て籃を携て水底に入蚌を拾ふて籃に入て即縄を振動す舟人急に引挙若一線の血ありて水の上に浮ぶは蜑既に悪魚に遇て食れたる也かの大蚌の腹に眞珠あり大小有て大なるは貢物に充て小なるを出し販て業とす文略

出るぞ名殘三日月の都の西にいそがん　三日月は夕陽に及て程なく山に入ゆへに出るぞ名殘とはいへり又月の都とつゞけたり月宮殿は明衣に注す

天地の開けし恵み久堅の天兒屋根の御譲房崎大臣とは我事也ハ　天つちは玉井に注す久堅は羽衣に注す天兒屋根命は天帝の臣也津速産霊神孫興台産霊御子也春日大明神第三神殿也藤原卜部中臣等先祖也舊事本紀云天道根命又天物梁命這神傳二宗源道一矣神代巻云日神居二天石窟一時中臣遠祖天兒屋根命則以二神祝一祝レ之於レ是日神方開二磐戸一而出焉矣●

朝な〳〵照日の光ますことにこやねのみことといつかわすれん　仲遠（新勅撰）　房崎は淡海公不比等子也參議従三位氏長者母右大臣大紫冠蘇我四維目古女也始著二黒漆冠一天武帝白鳳十一年壬午誕生聖武帝天平九年四月十七日薨春秋五十七葬儀准二大臣一同十月七日贈二左大臣正一位一天平寳字四年八月七日贈二太政大臣一是北家祖也矣　藤氏系圖に兒屋根命より房崎迄二十四世也　爰に房崎大臣とつゞけたるは悪し房崎御存命の時は大臣に非ず薨去なりて後大臣とおくり給ふ也左右の大臣は融に注す

扨も自が御母は讃州志どの浦房崎と申所にて　房崎の御母は上に記す讃州は屋島に注す四渡の浦は三木郡也房崎の浦は當所の惣名也　房崎誕生の所といへり是等四渡寺の縁起に見えたり

奈良坂や歸り三笠の山　春日龍神に注す

山かくす春の霞そうらめしき　此歌安宅に注す

三笠山今ぞさかへんこの岸の南の海に急かんと

●補陀落の南の岸に堂立て今ぞさかへん北の藤浪（新古今神祇）

新古今詞書云此歌は興福寺の南圓堂造りはじめ侍る時春日のえのもとの明神よみ給へりけるとなん

云々・清輔雜談集に南の岸に家居して〻と有補陀落は觀音の淨土也玉葛に注す藤原氏に南家北家なと有閑院左大臣冬嗣興福寺の南の岸に南圓堂を立て不空羂索觀音を安置す冬嗣は北家におはしませは其家の繁榮を志めして今ぞさかへん北の藤浪と侍るぞ　袋草子に南圓堂の壇つく翁の此歌をよむ明神變化と有

津の國のこや日の本の始なる淡路の渡りすへ近く

津國は高砂に注すこやとはこれやの中略也又攝州に昆陽と云名所有忠度に注す　神代卷云伊弉諾伊弉冊尊始遘合爲二夫婦一及レ至二產時一先以二淡路洲一爲レ胞矣　是に依て日の本の始めなる淡路とはつゞけたり淡路國は高砂に注す

鳴門の沖に音する　は泊り定めぬ　あま小舟　●たれぞ此鳴門のおきに音するはとまりさだめぬあま小舟哉　此歌むかしよりいひ傳ふよみ人未レ考

鳴門は阿波にあり大鳴門小なるとゝて南海へ渡る舟の往來大難所のせと也　日本紀に海人漁人と書辨色立成に泉郎と書伊呂波字類抄に海士蜑と書日本紀云神功皇后自西征九年秋九月遣二吾瓮海人烏麻呂一出二西海一矣　又云譽田天皇五年秋八月庚寅朔令二諸國一定二海人及山守部一矣

又あれを見れば男女の差別は志らすひと一人來り候

惣じて蜑は色黑く髮赤くして男共女共見分たぬ也

海士の刈藻に住虫にあらね共　藤戶に注す

是は讚州志渡の浦寺ちかけれ共　志渡の浦は三木郡也寺とは四渡寺屋嶋寺八栗寺長尾寺大久保寺など皆此近邊也

あまの丶里の海士人にて候　あまの丶里は四渡寺の寅卯の方也あまの里共いへり海人が墓あり高一丈五尺この比切たてし石也　私云房崎の浦あまの里など云は彼古き物語及四渡寺緣起に此うたひの趣あり後に所の名によぶ成べし　此謡に作る海士の墓に非ず日本紀に阿波國の海人男狹礒が墓なるべし上に記す

實や名におふ伊勢をのあまは　匠材集云伊勢おのあまは只あま也おに心なしと云々　或云伊勢男と書おはおとこ也と云々隱岐百首注云いせおの海士と云は日には七十五度海にいれば袂かはくまもなし云々名におふは江口に注す

内外の山　伊勢の外宮内宮を云白樂天に記す
濱荻は阿濟に注す須磨及若木の櫻は忠度に注す
鹽海かけて流れ蘆の世をわたるわさなれは　○新六人なみに扱も世渡る流れ蘆のうきふし〳〵はうきになしつゝ為家
此浦のかつきの海士にて候　海中の物を取てかづきあぐる故にかづきの蜑と云也　倭名抄云本朝式云伊勢國等潜女和名加豆岐米矣
あたらしきたましまと書て新珠島と申候　新珠島はめぐり二町計但し日本紀には眞珠と書
玉中に釋迦の像ましますす何方より拜み奉れ共同じ面なるに依て面を向ふに不㆑背と書て面向不背の珠と申候　盛衰記十四云重衡奈良の堂舍佛閣を燒興福寺の本尊は丈六の釋迦三尊也是皇極天皇の作らしめ給眉間の水精は唐土より渡る此玉左に見るにも右に見るにも釋迦の三尊の影うつり給ふ也此御頭の中に大織冠の平生御髻の中にいたゞき給ひし銀の三寸の釋迦の像をこめたり帝王編年記云和銅七年興福寺供養本尊者釋迦三尊像也中略　大織冠御髮中令㆑奉㆑載㆓銀釋迦三寸像㆒此丈六首中奉㆑籠也眉間玉樣々倒三尊影正令㆑寫給彼不思議子細筆難㆑盡㆓筆端㆒矣　神明鏡云嘉暦二年南都七大寺衆徒確執の事共有て及㆓合戰㆒興福寺へ押寄て燒拂けるに淡海公の御時本尊の御首にこめ給ひし龍宮より求し面光普變の珠も此時失ぬ此寺燒ける攝州水田新庄司左衛門即ち狂になりて圓明院の前の川に入てあら熱や悲しやと呼はりて狂死に死けり昔より度々の回祿に燒ざりし此玉燒けるこそ不思議なれ云々
今の大臣淡海公の御妹は唐土高宗皇帝の后に立せ給ふ　淡海公の御妹高宗皇帝の后に立給ふと云事曾而沙汰なき事也高宗皇帝は唐高祖より三代にして我朝孝徳天皇白雉元年に當て即位有淡海公とは時代相違せり　高宗皇帝は唐第三主諱治字爲善太宗九子母爲㆓文德皇后㆒在位三十四年壽五十六唐書文略　淡海公不比等は大織冠鎌足子也母車持國子君之女也元明元正二帝時任㆓右大臣㆒養老二年任㆓太政大臣㆒辭不㆑受同四年庚申八月三日癸未薨葬㆓佐保山㆒春秋六十二詔贈㆓太政大臣正一位文忠公㆒追又爲㆓淡海公㆒矣續日本紀云天平寶字四年八月廢帝勅曰太政大臣

藤原朝臣勳績蓋二於宇宙一朝賞未レ充二人望一宜レ依二太公故事一追以二近江國十二郡一封爲二淡海公一矣不比等は史と書史官たりし時の名也不比等と書は假字書也然るをふひとうと音を引てよぶはあやまり也云々

興福寺　帝王編年記云元明天皇和銅三年右大臣正二位藤原朝臣不比等建二興福寺一云々同七年甲寅興福寺供養本尊者釋迦三尊像也云々大織冠於二山背國宇治郡山階陶原家一建二立之一時名二山階寺一淡海公於二奈良都一建二立之一時改レ額號二興福寺一矣　拾芥抄云不比等和銅三年造二山階寺一是也又云一守長者宅矣　和州寺社記云日輪山興福寺は名二厩坂寺一云々園太暦には忍辱山興福寺と有詞林采葉云興福寺は淡海公不比等の御願累代攝祿の氏寺也南圓堂を建立せしに千體の觀音の像を銀にて奉レ鑄底に埋て其上に立給ひしに春日明神老翁と現て北の藤波の詠をなし給ひしより以降陛下輔佐の臣として藤門四家相別れ末代迄榮させ給ふ事不レ可レ有レ限

華原磬泗濱石面向不背の玉　寺　或云花原磬は南圓堂の西北正法院にあり面向不背の玉泗濱石は西金堂にあり此二物は人の見る事なし云々　私云上に記する神明鏡に嘉暦二年興福寺を燒拂ひけるに面光普變の珠も此時失ぬと有追而尋ぬべし　釋名曰磬罄也聲堅罄々然矣説文曰磬樂石也矣周禮曰磬氏爲レ磬矣白虎通曰磬夷則之氣象二萬物之成一是堯王臣無句造所其音磬々然立秋樂也矣　書禹貢曰泗濱浮磬注孔安國曰泗水中見レ石可二以爲一レ磬矣　拾遺記瀛洲上有二青石一可二以爲一レ磬其輕如二鴻毛一矣　白氏文集曰華原磬々々々古人不レ聽今人聽泗濱石々々々今人不レ擊古人擊矣　私云世に泗濱石は硯也といへり然らば泗濱石にて作たる硯歟右引所の書には泗濱の石を以て磬を作ると有猶尋ぬべし

自大臣の御子と生れ惠開けし藤の門　日本紀云天智天皇八年内大臣鎌足改二中臣姓一爲二藤原氏一矣是より子孫皆藤原氏と云也依て惠開けし藤の門とはつゞけたり　詞林采葉云陛下輔佐の臣として藤門四家相別る云々　今昔物語云不比等の御子四人あり　所謂武智麿房崎式部卿宇合左京大夫麿也武智麿は祖の御家の南に住給ふ故に南家と名付たり房崎は北に住給へば北家と名つく　式部卿を式家と名づけ左京太夫を京家といへり南家式家京家

此三家は末に至り皆おとろひ給ふ北家は今に繁榮し給ふ也文略●秋津島治る門ののとけきをつたふる北の藤なみの陰（拾愚草）
此身殘て母しらず　木實殘て葉はしらずといひかけたり
ある時亡心かたりていはく　亡心はと書は惡し傍臣可レ然
はゝき木　墨田川に注す
雨露の恩にあらすやと　紀叔望内宴進レ花賦云迎レ春乍變將レ希二雨露之恩一矣　文集第二云君恩若二雨露一君威若二雷霆一矣
喩は日月の庭たづみにうつりて光陰をます如くなり
匠材集云にはたつみは雨水の庭にたまるを云也
又いさらしみづ共いへり云々　文選南都賦曰潢潦獨臻註呂延濟曰潢潦雨水也矣（去木）二説文曰潢積水池也潦雨水也矣○君も見よ庭たつみにも秋の夜の月はへたてぬならひ有かは　●
事もおろかや我君の　我君とは房崎を指ていへり但我君といふはよろしからず若君といひて然るべし我君といへば天子の事也

ゆかりに似たり紫の　朝顔に注す
水鳥のおしうの名　御主に鴛と鴦とを兼ていへり
子細あらじと領掌し給ふ　領掌はうけつかさどる也領承共書　字彙云領統理也承レ上令レ下謂二之領一矣
千尋の繩を腰につけ　韻會云六尺曰レ尋矣　司馬法曰八尺曰レ尋矣
夲はひとつに雲の浪煙の波をしのきつゝ海漫々と分入て直下と見れ共底もなくほとりもしらぬ海底に
白氏文集第三云海漫々直下無レ底旁無レ邊雲濤煙浪最深處人傳中有二三神山一上下略　漫々は白髭に注す
○雲の浪煙の波を立へたて逢見ん事のかたくも有哉（續古　一條院皇后宮）
八龍は春日龍神に注す鰐は玉井に注す
南無や志渡寺の觀音薩埵の力を合てたひ給へとて大悲の利劍を額にあて　南無は實盛に注す　觀音大悲は三井寺に注す薩埵は自然居士に記す志度寺本堂南向號二補陀落山燈盛光院一行基菩薩所レ開本尊十一面觀音立像五尺二寸此尊像二十七代繼體天皇十一年江州朽木谷有二一靈木一流出到處皆爲レ祟故諸

人不二敢取一漸流著二此浦一時有二園子尼一舉置二岸上一推古三十三年南海補陀洛之觀音來現以二其靈木一造二尊像一其後行基開二此山一安二置其像一故號二補陀洛一後略 大悲利劍者 千手陀羅尼經曰若爲レ降二伏一切魍魎鬼神一者當レ於二寶劍手一矣 法花普門品曰或過二惡羅刹毒龍諸鬼等一念二彼觀音力一時悉不二敢害一矣

龍宮のならびに死人をいめはあたりにちかづく惡龍なし 按ずるに是は大海に死尸を宿さずといへる古語に依てかくつゞけたる歟 涅槃經三十三曰譬如二大海有二八不思議一何等爲レ八一者漸々轉深二者深難レ得レ底三者鹹味四者潮不レ過レ限五者有二種々寶藏一六者大身衆生在レ中居住七者不レ寄二死屍一八者一切萬流投至不レ増不レ減矣 華嚴經二十九曰譬如下大海以二十相一故名爲中大海上無レ有二能壞一何等爲レ十一漸次深二不レ受二死屍一下略

光明赫奕たる玉を取出す 赫奕とは光明顯盛之皃也 說文曰赫火赤貌矣 廣韻曰赫發也明也亦盛貌矣 說文曰奕大也一曰容也盛也矣 婁子野賦曰赫奕疊煥陰臨爵律矣

明てくやしき浦島が 扶桑略記云雄略帝時丹後國與謝郡有二水江浦島子者一釣二篭水江一化爲レ女於レ是浦島子與レ女到二常世國海神之都一蓋龍宮也浦島子不レ老不レ死其後欲下歸二故里一省中父母上時神女授二與玉匣一曰欲二再來一此者必勿レ開斯箱一浦島子還レ郷見レ之知者無二一人一驚怪問レ人人答曰聞昔浦島子者遊レ海遂不レ返於レ是始知三其到二蓬萊一而急將レ赴二神女所一向海不レ知レ在二何許一也浦島子悵然憂レ之忘二神女言一而少開二玉匣一紫雲忽出發二於常世國一浦島子大悔其貌俄爲二老翁一遂死于レ時天長二年也從二雄略御宇一生レ此蓋三百四十餘年矣○夏の夜は浦島か子の箱なれやはかなく明てくやしかるらん 中務 拾

魂去二黃壤一一十三年埋二骸於白沙一經二日月一算二冥路昏々是は何れの古語に本付てつゝけたるぞ未レ考 黃壤の二字謠には江上と書り黃壤然るべし黃壤は黃泉也十三年忌の事諸文未レ考 或說に國俗亡者の十三年に當て追善をなすは十二支終て又初而向ふ心也といへり又一說に胎藏界の十三院に喩て十三回忌の追善をいとなむ共いへり云々

いさとぶらはん此寺のこゝろざしある手向草 此

寺とは志渡寺を云也志渡寺の志の字をうけてこゝろざしあるとはいへり　詞林采葉云万葉集に白浪の濱松かえの手向草と云歌の注に云此手向草は松の枝ゝ縣たるさかり苔と見えたり古今集の物名のさがりごけ同物歟又云女蘿とてつたのごとくにてかゝりたるもの也云々万葉仙覺抄云手向草は非二女蘿一別に松蘿とてこれありと云々　万古源集云手向草は松を云也神前などにも一盛の花は曲なし松は常葉の物なればいつも手向によしと也云々或云手向草は必草木に不レ限何にても佛神に手向るものを云也云々

花の蓮の妙經色々の善をなし給ふ　自レ是以下の詞に法花の文を出さんとてかくいへり

寂寞無人聲　法花法師品曰寂寞無二人聲一讀二誦此經典一我爾時爲現二清淨光明身一矣

五逆の達多は天王記莂を蒙り　五逆罪の提婆達多も妙法の功力に依て天王如來と云記莂を蒙りたると也五逆の達多は熊坂に注す　提婆品曰成二等正覺一廣度二衆生一皆因二提婆達多善知識一故告二諸四衆一提婆達多却後過二無量劫一當レ得二成佛一號曰二天王如來一略上下　記莂とは印可と云に等し　光明文句曰記者記二成道事一也授二劫國數量一名爲レ莂矣　華嚴疏曰記者錄也別謂分別矣　釋名曰莂種概移蒔之謂矣

八歳の龍女は南方無垢世界に生をうくる　提婆品曰文殊師利言有二娑竭羅龍王女一年始八歳智惠利根善知二衆生諸根行業一云々　爾時龍女有二一寶珠一價直三千大千世界持以上レ佛佛即受レ之云々　當時衆會皆見下龍女忽然之間變成二男子一具二菩薩行一即往二南方無垢世界一坐二寶蓮華一成二等正覺一三十二相八十種好普爲二十方一切衆生一演中說妙法上矣　三大部補注云心得レ應レ眞故云二無垢一正順二本覺一名曰二南方一矣

續古 ○わたつ海の底の玉藻に宿かりて南の空を照す月影　定家

深達罪福相遍照於十方微妙淨法身具相三十二以八十種好用莊嚴法身天人所戴仰龍神咸恭敬　提婆品讃佛偈也深達二罪福相一遍照二於十方一微妙淨法身具レ相三十二以二八十種好一用莊二嚴法身一天人所二戴仰一龍神咸恭敬と訓讀する也　文句云罪福者約二七方便一傳作今偈深達二無罪福一入二一實相一名爲二深達一也十

方即十方界同以實惠朗之故言遍照也云々微妙淨法身具三十二相者深得法身之理即備相好如大品明欲得一切法當學般若如得如意珠也二乘但得空空無相好也矣止觀曰深達圓中如鏡故能遍照名爲深達以深達故具一切相矣弘決曰智稱法身故名深達即指法身爲諸相本故云法身具三十二矣　三十二相八十種好は文句及科註等に見えたり略之止觀曰相爲大相海好爲小相海矣　金光明經疏記曰大相謂三十二相小相謂八十種好皆稱海者若大若小悉無有邊故皆是法界全體顯現故一々相無非法海矣

天龍八部人與非人皆遙見彼龍女成佛　提婆品曰爾時娑婆世界菩薩聲聞天龍八部人與非人皆遙見彼龍女成佛普爲時會人天說法心大歡喜悉遙敬禮矣　多義集云八部者一天二龍三夜叉四乾闥婆五阿脩羅六迦樓羅七緊那羅八摩睺羅伽矣　此内乾闥婆阿脩羅緊那羅の三種は春日龍神に記す　天は名義集云梵語云提婆此云天法華疏云天者天然自然勝樂勝身勝故論云清淨光潔最勝最尊故名爲天矣　龍は梵語云那迦此云龍　別行疏云龍有四種一守天宮殿持令不落人間屋上作龍像之二興雲致雨三地龍決江開瀆四伏藏守轉輪王大福人藏矣八龍は春日龍神に注す　夜叉は　名義集云梵音也此云勇健亦云暴惡舊云閱叉能飛騰空中什曰秦言貴人亦言輕健有三種一在地二在虛空三天夜叉地夜叉矣迦樓羅は梵語也文句云此云金翅翅翮金色兩翅相去三百卅六萬里頸有如意珠以龍爲食矣　摩睺羅伽は名義集云梵音也亦云摩呼羅伽此云大腹行什曰是地龍而腹行也下略　人與非人者　緊那羅云人非人也　什曰緊那羅梵語秦言人非人似人而頭上有角人見之言人耶非人耶因以名之矣　天台云諸經人非人者此乃結八部數備矣

毎年八講朝暮の勤行(ゴンギヤウ)　八講とは法花八講也法花の法門を論ずる專也一日に八度講ずるに非ず一日に朝座夕座二度有一度に一卷を講じて四日に終る八卷を八度に講ずる故に八講と云也　膾餘雜錄云延曆十五年法華八講會始石淵寺勤操矣　志度寺の八講は行基初而行るゝ由緣起に見えたり毎年十月海士人(アマヒト)のためにとて法事ありとぞ大職冠藤原內

大臣鎌足公和州高市郡人父天兒屋根命二十一代小德冠中臣御食子卿母號大德冠女大津夫人名橘夫人在胎聲聞外孕十二月推古天皇甲戌八月十五日誕生于時天智天皇八年己巳十月十六日年五十六而薨葬大和國十市郡倉橋山多武峰矣　稱大職冠者天智天皇八年十月遣東宮大海皇子於内大臣家授大職冠正一位號也矣　大職冠は冠の名也天智御宇に二十六階の冠を作り其第一を大織冠と云織の冠に繡を縁にたちいれたり是をきる人の袍は濃紫也　此冠を賜る故に大織冠の鎌足と云也

融

源融公は五十二代嵯峨天皇第十二御子也母は號大原全子貞觀十四年八月廿五日大納言より左大臣に任ず年五十一仁和三年に至從一位寛平七年八月廿五日に薨ず年七十三御館を河原院といへり依て河原左大臣と申也　拾芥抄云河原院六條坊門南萬里小路東八町云々融大臣家後寛平法皇御所本四町京極西號東六條院矣　愚見抄云河原左大臣六條川原にいみじき家つくりて池を堀水をたゝへて毎月潮三十石ばかりはこび入て海底の魚貝等をすましめたり陸奥國鹽がまの浦をうつして海士の鹽屋に煙をたてゝもてあそばれけるとなん東六條院と云所也云々伊勢物語集注云日々に難波より潮をくみてはこびし也是により攝州尼崎より十五町西の方に東新田と云村の道ばたに融大臣の社あり云々　本朝文集云夫河原院者弘仁先朝第十二皇子左丞相融卿之甲第也相府在世之間窮風流之體擅遊蕩之美疊山累巖卓木比其枝鑿池湛水魚鳥戲其波調管絃於仙臺翫文籍於月殿寛平法帝脱屣之後遊覽焉勝地再逢主幽境重得時厥後早改蓮府之號爲花界之砌矣　今昔物語云大臣うせ給ひてのち宇多院は此河原院に住せ給ふ有夜西の對の塗籠をあけて人の參るやうにおぼして見させ給へば緋の裝束したる人の太刀はき笏取て二間計退て畏て居たりあれは誰と問せ給へば爰の主に候翁也と申融大臣かと問せ給へばしか候此所は我家也院爰に住給ふがゆへに所せく也如何すべからんと申せば院聞召我おし取て居たら

ばこそあらめおとゞの子孫の我にくれたればこそ此所にすむなれいかにかくはうらむるぞとたかやかに仰られければかいけすやうにうせぬ文略

是は東國方より出たる僧にて候

千里も同じ一足の　大惠書曰欲レ行二千里一一歩爲レ初矣老子經曰千里之行始二於足下一矣又卒都婆小町に記す

六條河原院　拾芥抄云六條東淳風坊西光德坊矣

陸奥はいづくはあれど鹽がまの浦こぐ舟のつなでかなしも　是は古今集大歌所の歌也古今榮雅抄云陸奥はいつくもおほかれど鹽がまの浦こぐ舟のつなでを見る計哀にもうらがなしき事はなしと也此かなしもは面白かりと云心也定家卿もこの悲しもは悲歎のかなしきにあらず面白かりといふやうのこと葉なりといへり云々

水の面に照月なみをかぞふれば　此歌三井寺に注す

老かさなりてもろ志らが　夫婦諸共に白髮になるを云也

汐なれ衣袖さむき浦わの秋の夕かな　汐なれ衣は汐汲の着なれし衣を云浦わは萬葉に浦回と書入海のまろく輪のごとくなるをいへり○後撰鈴鹿山いせをの蜑の捨衣汐なれたりと人や見るらん　長秋詠藻○四方の海蜑の鹽屋も數そひて浦わの千鳥ちよよばふ也

融大臣　職員令曰左大臣一人掌下統二理衆務一舉上持綱目一惣判庶事上云々　百寮訓要抄云左大臣はもろ〳〵の政を奉行す左大臣とは一の上の宣下と云事あり第一の臣下なれば太政官のうちの事を悉く汐汰する也昔は文才なき人の大臣に任ずる事なき也中古以來は譜代とて無才無能の人々も任ずる也右大臣はつかさどる事左大臣に同じ又任ずる人も同事也左大臣參せざる時は何事も右大臣の行べし又左大臣のなき時は右大臣も一の上の宣旨をかふむるなり云々　日本紀云孝德天皇大化元年六月十四日天皇即レ位以二阿陪倉橋一爲二左大臣一又以二蘇我山田石川麿一爲二右大臣一矣　伊呂波字類抄云皇極天皇三年甲辰始置二左右大臣一又云孝德天皇御宇被レ置二左右大臣幷内大臣百官八省一矣

陸奥の千賀の鹽かまを都の中に移されたる　五條

高倉に鹽竈町と云有又五條の下上德寺の内に鹽釜明神とて小社有其外本覺寺太子堂など皆河原院の跡也　續後拾遺集云河原左大臣の家にまかりて侍けるにしほがまと云所のさまをつくれりけるを見てよめる業平「鹽かまにいつかきにけん朝なきに釣する舟は爰によらなん　鹽釜明神在二奥州宮城郡千賀浦一所レ祭神六座也所レ謂太王命武甕槌命經津主命與玉太田猿田彦神也社領千四百石　神中抄云鹽竈宮此神は田村將軍討夷之時五萬八千人之兵粮をかしきたる竈也千賀のおほがまとぞいふ云々　都土產云その日くるゝほどに鹽がまの浦に行つきぬ神體はやがて鹽釜にて渡らせ給ふ云々　舊事本紀云神武天皇二年春二月長髓彦神爲二天孫尊一被レ襲而棄二大倭國一往二於陸奥國一故中國順伏道長髓彦神元人神尸化嶽山祇神兒在二陸奥國一燒レ鹽施レ民后稚櫻宮御代依二住吉神催保一前二韓軍先一能擊二敵有異神韓怨一其長高其力强其威巍其氣猛故倶二洲輪神一司二軍船一有レ功仍爲二陸奥鎭守一今鹽釜神是也矣　續後撰　我思ふ心もしるく陸奥の千賀の鹽かま近付にけり

名に流れたる　櫻川に注す

さてはあれなるは笆が島候か　笆が島は奥州の名所なり　古今榮雅抄云しほがまの浦の沖に籬島はありいとおもしろき所也云々私云奥州千賀の鹽がまの景を河原院の地にうつすといふに付て笆が島を爰に取出したり○家よる波の數をもしらす也にけり笆が島のまちりけれ共無盛あの笆が島の杜の梢に鳥の宿しさへづりて待門にうつる月影までも孤舟に歸る身の上かと思ひ出られて候　皆是河原院の景氣をいへり賈島詩鳥宿池邊樹僧敲月下門とあるにてつゞけたり唄の心は笆の杜の梢に鳥の宿し囀るはかの賈島が詩の文句にうつりかなふと云心也今爰にうたふ詞は僧のいへる詞なれば僧は敲月下の門と云詩を取出したり孤舟に歸る身の上かとは三躰詩に五湖歸去孤舟月とあり此詩同じ水邊の月を詠せし詩なればかれこれ取合てつゞけたるなるべし

何と只今の面前の氣色か御僧の御身にしらるゝとは若も賈島が詞やらん　河原院の氣色今御僧の身にしらるゝとは皆賈島が詩の詞ぞとも也賈島字浪仙范陽人來二洛陽一韓愈敎爲レ文初爲二浮屠一名無本後去二

浮屠一舉ニ進士一累舉不レ中レ第文宗時爲ニ病輒詩一刺ニ
公卿一以レ暌ニ牛肉一得レ疾卒年六十五 新唐書
島は宿す池中の樹僧はたゝく月下の門推（ナス）も敲（タヽク）も故人
の心今日前の秋景にあり　詩人玉屑云賈島初赴レ
舉在ニ京師一一日於ニ驢上一得レ句云鳥池邊樹僧敲月
下門始欲レ着ニ推字一又欲レ着ニ敲字一煉レ之未レ定遂於ニ
驢上一吟哦時々引レ手作ニ推敲之勢一時韓退之吏部權
京兆島不レ覺衝至ニ第三節一左右擁至ニ尹前一島具對ニ
所レ得詩句一云々韓立レ馬良久謂レ島曰作ニ敲字一佳矣
遂與並レ轡而歸矣　ケ樣の詞も皆河原の事によそ
へて今目前の秋の景氣ぞと也

霧の篭の島がくれ　霧のまがきは朝貌に注す○秋 新續古
霧の篭か島のへたてゆへそこ共見えす千賀の鹽か
ま　實量

嵯峨の天皇の御字に　帝王編年記云五十二代嵯峨
天皇諱神野桓武天皇第二皇子母同ニ平城一延暦五年
丙寅九月七日誕生大同元年丙戌五月十九日立ニ太
子ニ 年廿一 同四年己丑四月一日受レ禪同十三日戊子
即ニ位大極殿ニ御年廿四御字十四年都ニ平安宮一云々
承和九年壬戌七月十九日崩御年五十九矣

眺望　はるかに詠る心也記月令曰可ニ以居ニ高明一
可ニ以遠眺望一矣　日本紀云登ニ高岳一遙眺ニ望大海一
矣

あの難波のみつの浦よりも日毎に潮を汲せ　難波
のみつとは敷津高津難波津是を三津と云也皆名所
也敷津は住吉にあり新後撰集に「住吉の松の岩根
を枕にて敷津の浦の月を見る哉　高津は大坂と天
王寺の間にあり今俗に高津と云 新勅撰に 一荒にける高
津の宮の時鳥たれに難波の事かたるらん　難波津
は大坂の北の中島のあたりに古今集伊勢か歌に難
波なる長柄の橋もつくる也とよめり新拾遺に難波
と昆陽（コヤ）野とをよみ合せたり又續拾遺ニ難波潟田蓑
の島とつゞけたり此說によらは天王寺のあたりよ
り北の方中島までを難波といふ成べし　又云御津
共書仁德天皇の都ある所の津なれば御津と書也伊
勢物語に難波津を今朝こそみつの浦毎にとよめる
は水也又古今におしてるや難波のみつにやく鹽の
とよめる此歌も水也三津御津水この三說あり　又
云萬葉に大伴の三津ニよめるは攝州也拾遺に三津
の濱邊とよむは近江坂本にありおくろ崎三津の小

島と云は奥州也已上伊勢集注古今栄雅抄云みつとは玄きつえなつなにはづ也と云々追々尋ぬべし　朴津は住吉郡住吉村にあり夫木一足引の山の高根にのほりてそ朴津の海は近く見えける能因　潮四聲字苑曰海水朝夕來去波涌也矣抱朴子曰天河與地河海水相搏蹙五水相蕩激涌而成潮矣周處風土記云海神上朝於天鯨鯢迎送海神出入於穴令水進退爲潮矣

炎て鹽をやかせつゝ　本朝事始云昔者筑前國建賀部有熊鰐斯人始燒鹽矣舊事本紀云長髓彦神在陸奥國燒鹽施民矣是等日本にて鹽をやくはじめ歟本草曰諸州煮海水作之謂之海鹽天生曰鹵人造曰鹽黄帝臣宿沙氏初煮海水爲鹽其法海邊堀坑上布竹木覆以蓬簟積沙于上毎潮汐衝沙鹵鹹淋于坑中水退則以火炬照之鹵氣衝火皆滅因取海鹵貯盤中煎之頃刻而就其煮鹽之器漢謂之牢盆今或鼓鐵爲之南海人編竹爲之上下周以蜃灰横丈深尺平底寘于竈背謂之鹽盤矣又曰戎鹽生土中傘子鹽生于井石鹽生于石木鹽生于樹蓬鹽生于草又光明鹽今階州出一種石鹽生山石中不由煎煉自然成鹽色甚明瑩彼人甚貴之云即光明鹽也矣

君まさで煙たえにし鹽かまのうらさびしくも見え渡るかな　古今集哀傷部貫之歌也詞書云河原の左のおほいまうちぎみの身まかりて後彼家にまかりて有けるに鹽がまと云處のさまを作れりけるを見てよめると云々今昔物語廿四云今は昔河原院に宇多院住せ給ひけるに失させ給ひければすむ人もなくあれたりけるを紀貫之土佐國よりのぼりて行て見けるに哀れなりければよみけると云々堯恵抄云君まさでとは君ましまさで也うらさびしとは稍閑と書うらめづらしうらがなしなど云うらとは心をも云也心の内のさびしきに鹽がまの浦を兼たり云々榮雅抄云君なく成て煙絶にしかば鹽がまの浦さびしく見へ渡ると也云々此歌の上の五文字和漢朗詠集に君なくてと有

貫之は蟻通に注す老の波は高砂に注す

かひも渚の浦千鳥　甲斐なきと云詞は竹取物語云磯上中納言といひし人つばくらのこやす貝をとらんとて巣にのぼりかの貝をにぎりておりんと玄

給ふ時のけさまに落て人々あさましがりてかゝへ奉れり叔貝を見んとて手をひろげ給へるにつばくらのふるくそをにぎり給へりそれを見給ひてあなかひなのわざやとのたまひしより思ふにたがふ事をはかひなしといひけると云々

音羽山音に聞つゝ相坂の關のこなたに年をふるかな
古今集戀一在原元方歌也榮雅抄云思ふ人を音に聞つゝあはで年をふると也音羽山はおとにきくといはんため也關のこなたにふるとはあはざる戀也云々古今實枝抄云朱雀院御時延喜二年四月一日春宮の御方の歌合によめる歌也云々

音羽山相坂の關歌の中山清閑寺は田村に注す今熊は湯谷に注す

まだき時雨の秋なれば紅葉も青き稲荷山　紅葉も青き稲荷山とつゞけたるは和泉式部の古事にて云り湯谷に注すまだきは榮雅抄云はやき也速の字也云々但爰のまたきはまだしき也おそき心也　古今に「我袖にまたき時雨の降ぬるは君が心に秋やきぬらんとよめるはまだしき也又伊物にまだきに鳴てせなをやりつゝとよめるははやき也歌によりてかはるべし稲荷は賴政に注す

名にしおふは江口に注す綠の空は櫻川に記す

藤の杜　在二紀伊郡伏見北一神祇拾遺云藤杜舍人親王矣　續日本紀云天平寳字三年六月追尊舍人親王二稱二崇道盡敬皇帝一矣　藤森弓兵政所記云當社者舍人親王之廟也親王者天武帝皇子持新田部皇女舍人其諱也天平七年十一月乙丑親王薨壽六十歲葬二于山背國深草山麓藤尾一即今藤森也贈二太政大臣一奉二崇道盡敬天皇一天皇疆識淸雅達二於神道一渉二於冊書一蒐二輯日本紀三十卷一又得二弓兵神妙之法一其兵ノ秘而在焉毎歲仲夏端午日騎射走馬甲冑帶レ刀把二弓矢一操二戈矛一祭レ之矣

夕ざれは野邊の秋風身にしみて鶉鳴なり深草の里
千載集秋上俊成卿歌也東野州云伊物に野とならば鶉となりて鳴おらんと云歌をとれりと云々闕疑抄云俊惠がたゞ秋風ばかりにておかで身にしむといふがあしきと難じたりしを俊成の聞て是を風の身にしむと思ひては曲なし伊勢物語の鶉となりての歌も身にしみて深くおもふと申されたると也おもしろき事也云々　夕ざれとは夕になればと云心也

或は春され秋され冬され共よめり万葉仙覺抄云春されとは春にしなればといふ心也云々　慈鎮和尙古今集注云ゆふされはゆふさり也ゆふぐれと云同事なり云々　鶉禮記曰三月田鼠化爲レ鴽矣淮南子曰蝦蟆化爲レ鶉矣本草時珍曰鶉性醇竄伏ニ淺草ニ無ニ常居ニ而有ニ常匹ニ隨レ地而安又頭細而無ニ尾毛有ニ斑點ニ甚肥雄者足高雌者足卑其性畏レ寒其在ニ田野ニ夜則羣飛晝則草伏矣

木幡山伏見の竹田淀鳥羽も見えたりや　木幡山は釆女に注す鳥羽はそとは小町に記す伏見は紀伊郡也東は六地藏村南は宇治川の末西三栖芹川村北は限ニ深草里ニ竹田は紀伊郡也在ニ伏見西北ニ古文書云ニ眞竹庄ニ矣淀は今は屬ニ紀伊郡ニ勅撰名所和歌抄云淀川東は久世郡西は乙訓郡云々　淀川は鴨川桂河宇治川木津川此四大河淀の津にて落あふ是より下を淀川と云也　慈鎮和尙古今集注云淀とはよとみを云水の流もやらでよどむ也ぬるくとゝまれる也川淀ともよめり淀川、中も桂川鴨川宇治川木津河等おちあひてふかければよどみてぬるくながるゝ故に名付きたりけるにこそ云々○四方の川は淀の流（拾玉）に落あひてひとつ渡になりにける哉　慈鎮

詠めやるそなたの空は白雲の　○（浮舟）詠めやるそなたの雲も見えぬまで空さへ暮る比のわびしき

大原や小鹽の山もけふこそは　小鹽に注す

松の尾の嵐山も見えたり　嵐山は西行櫻に注す

山城國葛野郡松尾神社二座者延喜神祇式曰一座市杵嶋姫是素盞嗚尊御子也一座大山咋神也此神比叡山日吉社爲ニ一體ニ矣神書抄云加茂玉依姫取所丹塗矢化爲神松尾明神是也矣鎭坐云文武天皇大寶元年秦都理始造ニ立神殿ニ矣　今所レ祭七座松尾社宗像社月讀社櫟谷社三宮衣手社四大神矣　○（新後撰）名も古るし色をもかへぬ松尾の神のちかひは末の代のため

太上天皇

ひまもおしてる　ひまもおしきとつゞけたりおしてるは忍照淵光普照と書喜撰式云臨海をおしてるといふと云々　紫雅云海の面のきらめきたるをおしてると云うしほてるといふべきを略しておしてると云也云々万葉集におしてるや難波堀江とよめり或抄云日本紀に仁徳天皇十一年夏四月詔有て難波の浦に堀をいくつもほらしめ給ふ是を難波堀

江といへり此堀江よりあまたの舟を押出すと云事をおしてるや難波堀江とはつゞけたり云々
輿に乘じて身をばげに忘たり秋の夜の長物語よしたや　盧山惠遠法師の許へ陶淵明陸修靜の二人訪來て輿に乘じて遠法師忘て禁足をやぶり二人を送り出て虎溪を過たり此等輿に乘じたる事也委く紅葉狩に注す又王子(ワシ)猷が故事は姨捨に注す
持や田子の浦　田子(タゴ)を云かけたり續日本紀十八に駿河國多胡浦濱と有蒲原より淸見寺までの濱邊の惣名といへり又越中に同名有
あづまからげの鹽衣　一條禪閤御說云あづまからげはかゝげ也かゝげをからげとよみあやまる也云々揭と書韻會曰褰レ裳渡レ水由レ膝以下曰レ揭矣　爾雅曰淺則揭揭者揭レ衣矣　○賤のめが東(アヅマ)からげのあさ衣ふたまた河原さぞ渡るらん（新後拾）
汲は月をも袖にもち志ほの　十五日の鹽を望鹽(モチシホ)と云（草根）にほの海や望鹽ならぬ浪の上に今宵滿たる月の影哉
汐曇り　汐のさしくる時は空くもる也（家集）宵の間の月にうかりし鹽くもり晴るゝひかたに更る影哉（普蓮院）
磯枕苔の衣を片敷て岩根の床に　磯枕は水邊の旅也梶枕の類也野にては草枕と云（夫木）此比は苔の衣を片敷て岩根の枕ふしよからまし
月宮殿の白衣の袖は羽衣に注す三五夜中新月色は三井寺に注す
千重ふるや雪をめくらす雲の袖　千重は降かさなるを云也雪をめぐらすは舞の曲に廻雪と云名有依て雪をめくらすと云り文選洛神賦曰飄颻兮若ニ流風廻一レ雪矣（　）ふるをのみあかぬ計そ諸共に雪をめくらす袖の色々（爲孝）
さすや桂の枝々に　沈休文詩云秋風生ニ桂枝一矣三井寺に記す
光りを花とちらすよそほひ　古今物名桂の宮をよめる源ほとこす歌也上句は秋くれは月の桂のみやはなると有榮雅抄云秋は諸木の實なる時なれど月の桂の實はならず光りを花のやうにちらす計をと也云々爲家古今抄云桂の宮桂川のほとりに有と云山城國大井川の邊桂內親王の山庄也云々　井蛙抄云桂の宮山城歟桂川の邊也今も桂宮院と申所有寛

平法皇中宮のませし所也云々

爰にも名にたつ白川の　③　白川は山城愛宕郡也奥州にも白川といふあれば爰にもとはいへり

面白は　三輪に注す曲水は養老に注す

そも明月の其中にまだ初月(ハツキ)の宵々に影も姿もすくなきは　明月とはあきらかなる月也初月は三日月を云也　性理大全十二皇極經世書云月體本黑受ニ日之光一而白注沈括曰月本無レ光猶ニ一銀丸一日耀レ之乃光初生日在ニ其旁一故光側而所レ見纔如レ鈎日漸遠則照光稍滿大抵如ニ彈丸一以レ粉塗ニ其半一側視レ之則粉處如レ鈎對視レ之則正圓也矣

それは西岫に入日のいまだ近ければ其影にかくさるゝ　三日月は日に近し入日に對して影をかくすゆへに形もほそく影もうすき也西岫とは西山の交也倭名抄云陸詞云岫山穴似レ袖矣又峡の字をくき共やまあひ共訓ず岫の字と同じ心也

たとへば月のある夜は星のうすきがごとゝ也　日月に大光なればそのあるうちは小光の星の影うすき也古語云朝陽雖レ不レ侵ニ春ニ殘(ユンミ)星光一矣

青陽の春の初には霞む夕の遠山黛の色に三か月の影を舟にもたとへたり　遠き山の端に三日月のほそく出たるを眉に見たてたり文集云宛轉双蛾遠山色矣卒都婆小町に注す青陽田村に注す又三日月を舟にたとふるは百聯詩云月送ニ天涯一猶レ去レ舟矣　⑲

空の海に雲の波たち月の舟星の林にこぎかへる見ゆ人丸

又水中の遊魚は鈎とうたかふ雲上の飛鳥は弓の陰共おどろく　明太祖高皇帝詩曰誰將ニ玉爪一指ニ長空一萬里山河一様同缺レ水有レ鈎魚怯レ鈎卿レ山無レ箭鳥疑レ弓矣新撰朗詠集云菅家詩白露如レ珠月似レ鈎矣唐史云李白謁ニ宰府一板上題云海上釣レ鰲客　李白相問以ニ何物一爲ニ鈎線一曰以ニ虹霓一爲レ絲　明月爲レ鈎矣　王褒詩云俯觀雲似レ蓋低望月如レ弓矣　又菅家文草或は百聯詩などに此事出たり略レ之

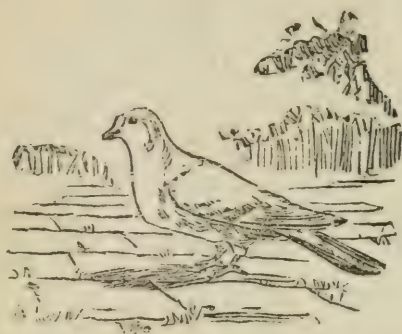
一輪もくだらず萬水ものぼらず　一輪は月也月くだらず水のぼらず本來の境界をそのまゝいへり天台云月降不レ降水昇不レ昇矣刊定記曰一月不レ降百水不レ昇矣

雲となり雨となる　巫山神女の古事也委く夕顔に注す葵巻云雨となり雲とやなりにけん今はしらず

と打ひとりごちてと云々〇雲となり雨となるてふ
半空の夢にも見えよ夜るならす共有家

光陰　日月の影を云也古語云光陰如レ箭月似レ弓矣
翰墨全書曰光陰箭往其速矣

謡曲拾葉抄巻十六

三井寺

三井寺は號二園城寺一又云二三院三王院一山號名二古仙靈崛伏藏地佐々名實長等山本尊は彌勒天智天武持統三代之勅願大友皇子之建立也矣天智天皇初欲レ創二伽藍一求二勝地一未レ得七年二月三日の夜天皇の夢に一ノ沙門來て奏曰西北之山に有二靈崛一と夢覺て後彼方を見給ふに光明細くあがり高さ十餘丈則行幸有て御覽有に有二屋廬一傍に瀧あり有二優婆塞一經行念誦す其容儀非二常人一于レ時出迎て白レ帝曰此地は古仙靈崛伏藏地佐々名實長等山といひ已て不レ見帝感喜して立二精舍一號二崇福寺一曰二志賀寺一其後又天皇欲レ營二精舍一大友太政大臣に勅して移二崇福寺一今の園城寺之地に建て安二丈六勒彌像一天皇有レ夢又勅二大友一還遷二本地一彼跡新に欲レ建二御願寺一時大友其功不レ終薨ず其子大友與多承二願命一奏聞して天武天皇三年甲戌より同十五年營作して建二園城寺一天智帝御持尊の金銅の彌勒を納二丈六木像内一爲二

本尊云々當寺に有閼伽井天智天武持統三代の即位の時香水に奉りし故名御井寺又智證の時三帝の三と三部灌頂の三と慈尊三會の三と此三處の三を取て改御井名三井寺（已上釋書壒嚢抄文略）〇新拾　絶ぬべき三井の流の法の水みをはやながらいかで汲まし　靜仁法親王

南無や大慈大悲の觀世音さしも草さしもかしこき誓ひの末　此狂女觀音を信仰して三井寺の觀音へ參詣する也三井寺の觀音は三井寺の境内南方南院と云有號正法寺敎待律師の開基本尊如意輪坐像五尺二寸智證大師の作也南院は俗に高觀音と云　名義集云觀世音梵語云阿那波婁吉低輸文句云婆婁吉低稅平等覺經名盧鴿棲亙此云光世音矣大慈大悲とは觀音の慈悲よのつねにかはりて廣大なるが故にかく云也　天台頂法師觀音玄義云初以大悲拔苦後以大慈與樂矣　正觀音經曰三世諸佛大慈悲集一體觀世音八寒八熱奈洛迦大悲一人代受苦矣　觀世音とは世の音を觀ずると云心也觀音は耳根圓通の菩薩なれば衆生の音聲を觀じて助け給ふ也さしも草は田村に注す南無の字義は實盛に注す

一稱一念猶賴みあり　一たびとなへ一たび念ずる也觀音品曰聞是觀世音菩薩一心稱名觀世音菩薩即時觀其音聲皆得解脫矣

甲斐は融に注す枯たる木にだにも花咲ば田村に注す

少し睡眠の内にあらたなる靈夢を蒙りて候は　睡眠は二字共にねぶるとよむ也　說文曰睡坐寐也矣　增韻云今睡眠同稱矣　靈夢は奇特なる夢也夢は正しからぬものなれど佛の事など夢中に見るはいかにも正夢也と菩提心論にみえたり　法華曰若於夢中但見妙事（下略）

江州園城寺　江州は田村に注す

又今夜は八月十五夜明月にて候程に　八月十五夜を名月とて賞する事和漢に久し　或云婁宿に當りて必清明也婁宿は金狗の姓也故に金氣のさはやかなるが水上の月に和して金水相生の時節なれば清明なる事實もなる義也世に翫事大かた李唐の世より盛にして詩人文人其詠多し但古樂府に嫦娥怨の曲あり漢人の中秋の月なきにより此曲を作ると有然れば漢の世よりある事と見えたり歐陽詹が月

を慕ぶ詩の序に四時の中惟々秋のみ清明なる事をかけり　本朝文粋第八云 紀納言 八月十五夜者天之秋月之望也更闌人定雲淨明十二經中無ㇾ勝ニ於此夕之好一下略　續古今集天暦帝御製に「月毎に見月なれと今月の今宵の月に似る月ぞなし

●講堂は經論聖教講釋論義などする所を云也　七堂伽藍の内也　安樂行品曰若經行處若在ニ講堂中一不ニ共住止一矣　東坡絶句云今夜生公講堂月滿庭依ㇾ舊冷如ㇾ霜矣　三井寺の講堂及び經藏は尊氏の建立といへり云々

類ひなき名を望月の今宵とて　宗砌連歌の發句に「たぐひなき名を望月の今宵かな○あふげ猶秋の一よのたぐひなき名を望月のきよき光を 永日集　万葉仙覺抄云もち月とはもはむかふ詞ちは詞の助也と云々唐にはあながち十五日を望月とはいはず月の大小によりてかはる也日は西の山の端にかゝり月は東に出てたがひに望みあふを望月とはいへど日本にてはなべて十五日を云也　事物異名云十五望十六ハ既望註云昏時日月東西相對シ如ㇾ望也矣　釋名曰望ハ月滿ルノ之名也月大十六日小ニハ十五日矣

雪ならば幾度袖を拂はまし花の吹雪と詠じけん志賀の山越うち過て　是は古歌なり下句は花の雪吹の志賀の山越よみ人未ㇾ考追て尋ぬべし　嵯峨物語云花の雪の御負に散かゝりければ志賀の山ごへならねど是も花の雪吹は拂ひもあへずと立歸りうちへみたるけはひいふばかりなくものにもにぬ云々此歌を以てつゞけたる成べし志賀の山越に山中村の東の端に石橋有それより東南へ行道有是を志賀の山越と云也又石橋より北志賀東坂本へ行道あり是今道越と云北國へ越る道也古今爲家抄云志賀の山越とは北白河より三井寺に出る道也と云々　袖中抄云しがの山ごへは北白川の瀧のかた原より登りて如意の峰をこへてしがへ出る路也經頼卿ノ記ニ云後一條院の御時慶上人紅葉逍遥のために志賀の山ごへすといへりと云々

詠めの末は湖の湖照ひえの山高み　江州湖は竹生島に注すひえの山は衆平に注す　廣雅云湖大池也矣にほてる は湖を云ホ照其書又汐海は潮照と云也元來おしてると云もにほてるといふも日の光り

海にさしうつるを云也世に天氣よきを日和といへるも此心也○（新拾）湖照やひえの山風さゆる夜の空より氷る有明の月

上見ぬ鷲のお山　比叡山を云也鷲は諸鳥にすぐれ勇猛の鳥なる故に上見ぬ鷲といふなり○（藻鹽）又はよも羽を並ふる鳥もあらじ上見ぬ鷲の雲の通路

あの鳥類や畜類だにも親子の哀れはしるぞかし　譚子畋漁篇曰夫禽獸之子レ人也何異有二巣穴之居一有二夫婦之配一有二父子之性一有二死生之情一烏反レ哺仁也隼憫レ胎義也蜂有レ君禮也羊跪乳禮也雉不二再接一信也孰究二其道一萬物之中五常百行無レ所レ不レ有也矣

○（六百番）立雉のなるゝ野原や霞つゝ子を思ふ道や春まよふらん　定家

子の行衛をも白糸の亂れ心や狂ふらん　心は亂やすき物なれば糸にたとふる也　釋名曰心者纖也纖細微也矣　後拾遺序云つくばねのつく〲／＼と白糸のおもひみだれつゝと云々

都の秋を捨てゆかば月見ぬ里に住やならへると

○（古）春霞たつを見捨て行雁は花なき里に住やならへる　伊勢

田舎も住よかるべし　ゐなかとは稲の中と云心也○（夫木）夏くれば賤が麻衣解分る片田舎こそ心安けれ　仲正

歸ればさゞ浪や志賀辛崎のひとつ松　さゝ浪は志賀といはん枕詞也　万葉集に樂々浪神樂聲浪と書日本紀に狹々浪と書唐韻曰泊瀞淺水皃矣　匠材集云さゞ波はこまかにたつなみ也云々　詞林采葉云彼仙人佐々名實長等と答しより志賀辛崎の外湖水の邊の山海を神波とよめる也袖中抄云さなみさゝなみさゞらなみは同詞の廣略也云々　唐崎は云二三津濱一日本紀に可樂崎と書　神道密記云唐崎神社ハ江州志賀郡三津濱住居人皇三十五代舒明天皇御宇女別當社口傳有レ之一云松精神也琴御館姉女祭レ之矣　神祇拾遺云唐崎女別當社件社は日吉大宮鎮座の初此松に金鏡顯れ給ひて二年計齋奉後女別當導奉て山の麓に殿作て祭り奉る也云々　或云松の下に小社華表あり傍に有二別當寺一云二松房一毎六月晦日には都鄙の參詣多し祓の神也と云唐崎大明神と云額有堀田上野守所願有て掛ると云々　本朝古事因縁云唐崎の一松一株をいふ

のみに非ず松の葉も一葉なり仍得二一松名一云々
佐々木日記云辛崎の松は元龜年中兵亂にかゝり枯けるに天正十七年三月佐々木官領義郷山門無動寺山にて一枝も不レ伐松を取寄て唐崎の洲崎を高くつきて植給ふ松の下に別當明神の社を建立し給ふ義郷詠歌に「八千代ふれ只辛崎の一つ松植し我身は雲かくるとも」尊朝法親王辛崎松の記云こゝに新庄駿河守直頼は大津の御城郭を預り給ふそのはらからに松菴東玉雜齋直壽とて二人ありこのかみのうしろみにて相そはれしが彼松の事より〳〵くやみて弟の雜齋いで栽ばやと家中の者にいひて風情ある松を尋られしにからうじてほり求て植られめぐりに埒ゆひいかさまにもげに〳〵しく往來の人めをとゞめぬ于レ時天正十九年辛卯の年秋の末人もぬさとりかはし皆祓してそれが中によめる「おのつから千年もふへしから崎の松にひかるゝみそぎなりせば」已上右兩義いづれ歟是なる尋ぬべし

花薗の里をもはやく杉ま吹　　早く過るといふに杉間吹風といひかけたる花園の里はしがの山越に近し　或云花園は昔天智天皇大津の宮の御時四季に花咲梅櫻をうへ池をほり水をたゝへて遊覽の地とし給ふ是をしがの花園と云也袖中抄云志賀の花園と云事平等院僧正集には春秋の花ぞのありといへり云々○さゞ浪やしがの花ぞの見る度に昔の人の心をぞしる　祝部成仲

桂は實のる三五のくれ　　李嶠一夜百詠月詩曰桂生三五夕蓂開二八時矣三五は十五夜を云也珊瑚も八月十五夜に實生と也其生ずる岩を桂と云月影に依て實のるといへり　謝靈運南樓中遲レ客詩曰期在二三五夕一善註曰三五謂二十五日一矣　禮記曰月者三五而盈也矣

三五夜中新月色二千里外故人心　　此詩は在二白氏文集十四一樂天八月十五夜の曉禁中にて文友元愼が事を思ひ出して此詩を作る新月とは八月十五夜のあらたなるを云也上句は今宵の月いはんかたなく當意をありの儘にいへり下句に二千里外とはかの元愼がある所遥に遠くへだてたるを云故人とは朋友の事を云今宵の月見るにつきてへだゝりたる朋友の心思ひ出て作れる也

水の面にてる月なみをかぞふれば　　拾遺集秋部源

順歌也下句は今宵ぞ秋のもなかなりける　詞書云屛風に八月十五夜池有家に人あそびしたる所と云々月なみは月次也もなかは最中也一年の月の次第をかぞへ見れば今宵ぞ秋の最中にてあると也日本紀に中央と書　童蒙抄云もなかとよめるを時の人和歌のこと葉と覺えずと難じけるを歌がらのよければえらみいれると云々

月は山風ぞ時雨ににほの海　是は二條攝政後普光園寺殿の連歌の發句也古筑波集に入心は風の音を時雨と聞しに月は山にあるなれば只時雨ににたる物よと也石山月見の記云藤原公條又尋ありきしに倉の坊とて月の爲にはいかなる名と覺えし中略後普光園攝政の月は山風ぞ時雨のと有し連歌の會席も此坊とぞ申傳へける云々　一說日吉社法樂の時也共云々

波も粟津の杜みえて　粟津の杜粟津が原は膳所と勢田との間にあり打出濱のならひ也親長卿記に淡津と書或云日吉の祭に此所より粟の神供を奉レ備依て名二粟津一彼神供を膳所にて調進する故に膳所と云也

海こしのかすかにむかふ影なれど月はますみの鏡山　鏡山は守山と武者との間にあり山下に鏡の宿有三井より三里も東なれば幽にむかふとはいへり昔天智天皇と大友の皇子と戰ひの時鏡の大君討死す則此所に葬故に名二鏡山一取意日本紀　ますみの鏡とは神代卷云以二左右手一持二白銅鏡一矣　神明とは晝夜不變の光りを云也即かみとはかゞみの中略也口決云神盧如二明鏡之照二萬物一矣新撰後撰　ますみの鏡とはますぐに見ると云心也〇曇なき月もますみの鏡山名にあらはれて見ゆる夜半哉山階入道

山田やばせの渡し船の夜はかよふ人なく共月のさそはゝおのつから舟もこかれていつ覽舟人もこかれ出らん　山田矢橋は東近江也粟津の向也衆平に注す枯杭集云月の夜舟と云物語に昔は近江の湖水に舟なくして渡海なかりしが舟のいできし來由を尋ぬるに志賀の邊に月と云遊女有けり心ざまやさしかりけるがある秋のはじめつかたともし火をそむけて枕引よせかしらをかたぶけける所にいつく共なくあてなる男水干に立ゐぼしきて傘てほのめく事も侍らで近づき參らする事社打つけに覺し侍らめ

など聞えければ女房もむねつぶれていみじき人の此あたりには誰にかおはすらんあやしさよと思ひけれどあひきやうづきてかたらひよれば女も心よはくして夢の內なるうたゝねの情の枕かはしけりそれより此人暮ればかよひ互の心も淺からずその年も暮てあくる二月半にもなりぬかゝる所に山田と矢橋の間に數百年を經たる楠木あり所の守護より此木を切て舟に造り湖水のかよひをせばやと江人共一同に然るべしとて吉日を待程に旣にあすとぞ定めにける去程に月は此程まれ人の見えざるはいかなる事やらんとよな〳〵待ける折節此人夜更て來り泪を流していふやう今は何をか包べき我は山田に年經たる楠木也御身と契りを結びて千年の思ひをなしけるに生死無常のかなしみは草木迄ものがれず我を舟に作るべしとて旣にあすきられぬべし浮世の形見に男子を一人腹內にのこせりたとへば舟に作りて千萬人よりて引共うごくまじもてあつかふ折節御身出て此若を此所の守護になし給はゞ舟を自由にかよはせんといひ給へ其時人々然るべしといはん時御身はむかふに立給ひて扇にてまねくべし其時舟は心安く走るべしさもあらば御身と若が行衛は草の蔭迄まもりなんとてけすがことくに失にけりかくて人々よりて彼楠木をこそ切にけり女房は月みちて產の紐をときて玉のごとく成男子をうみける去程に舟いできければ守護を初て人々乘ぞめせんとて此舟をおしけれ共はたらかず人々大きにあやしみさては龍宮のとがめの有けるか高驗の僧たちを請じて祈かぢすれ共動くべうも見えず如何せんとあぐみゐる所に月出て申やう此若を此所の守護となし給はゞ舟をば自由に渡海させんと申ける人々聞てふじきの申事哉とて聞給ふに初終りを申けるされば希代の事ぞとて此若守護の子にすべき契りをなしてさて月にまねかせければ此舟みつばのそやを射るより早く走りける社ふしぎなれさるによりて山田矢ばせの渡し舟の夜るはかよふ人なく共月のさそはゞおのづから舟もこがれ出らんとは三井寺にも作れる也まことに希有なる事なりとぞ云々

おもしろの鐘の音やな　　釋名曰鐘空也空內受レ氣多故聲大矣　白虎通曰鐘之爲レ言動也陰氣用レ事萬

物動成矣
五經通義曰鐘秋分之音也矣　爾雅曰大鐘謂二之鏞一其中謂二之剽一小者謂二之棧一矣　山海經に炎帝孫伯岐鼓に依て鐘を作る又伯岐鼓延をうめり此人始て鐘を作る世本に黄帝の工人倕作レ鐘周禮に鳧氏作レ鐘呂氏春秋に黄帝伶倫に命して十二鐘を鑄さしむと云々巳上文略

清見寺の鐘をこそ常は聞馴しに　清見寺は駿河也寺は南向也山陰也號二巨鰲山求王院一禪院也當寺は聖一國師之弟子關聖法師開基也近世爲二妙心寺派一也云々清見寺の鐘は本堂の前にあり○清見瀉磯うつ波も聲そへて遙におくる入相のかね爲尹

さゝ波や三井の古寺鐘はあれと昔に歸る聲は聞えず
是は新撰歌枕に定聞歌也　神社考云文保二年三井寺回祿山徒取レ鐘不レ鳴衆人以二多力一撞レ之其音如二蒲牢之吼一山徒惡レ之轉二無動寺岩下一碎破片散聚拾而遺二三井寺一一日小蛇來舉レ尾敲レ之經レ宿鐘如レ故無レ兆矣　或云三井寺之鐘文保の比不レ鳴其後久敷鳴けるが又文祿元年に此鐘鳴やむと云々此等の說によりてむかしにかへる聲はきこえじとよめる歟

誠や此鐘は秀鄉とや覧の龍宮より取て歸りし鐘なり
帝王編年記云下野押領使秀鄉魚名大臣五代孫下野權大丞村雄子武藏守從四位下號二田原藤太一矣　世傳秀鄉は朱雀院の頃の人　秀鄉系圖云住二近江國俵庄一以レ故號二俵藤太一矣　或は龍宮より俵を取來る故に云二俵藤太一云々　三井寺の鐘の事二說有延喜の比秀鄉は龍神の爲に江州三上山の蜈を射殺す龍神悅て秀鄉を龍宮にいざなひ其恩報に俵一つ鐘一つ都合十種の寶物を送る此事舊記に詳也　載二江談一昔粟津冠者云者江州粟津建二廣江寺一佛殿諸堂雖二成就一無二釣鐘一欲レ鑄レ之爲レ求レ鐵往二出雲一乘二西海之船一惡風吹而欲二舟覆一忽小童乘二小船一來謂二冠者一云移二是船一我是小龍王也汝使レ見二龍宮一舟人莫レ恐二風波之難一倚レ舟可レ待レ我言已將二冠者一去童子云我眷屬爲二大龍一多被レ食畢汝知二精兵一敵可二此來一爲レ我可レ亡レ之無レ裡來冠者帶二弓箭一射二殺彼大蛇一小龍悅曰以レ何報レ之冠者云我願レ得二釣鐘一小龍則與レ鐘積二送小船一來二元之大船邊一冠者歸二粟津一釣二彼鐘廣江寺一移二星霜一寺破壞住僧一人于レ時鎮守府將軍清衡以二黄金百兩一買二取之一寄二附三井寺一

其比三井寺與二叡山一不快之時也廣江寺山之末寺貢二鐘三井寺一非二本意一仍山起廣江寺僧沉二湖水一 已上文略

龍女か成佛　海人に注す

夜庾公が樓に登しも月に詠ぜし鐘の音や　庾公は晉庾亮也字云二元規一秋の夜月に乘じて南樓に登て月を愛せし事を云り但月に詠ぜし鐘の音と云事はいまだしらず追て尋ぬべし　和漢朗詠集謝觀白賦曰曉入二梁王之苑一雪滿二群山一夜登二庾公之樓一月明二千里一矣　晉書曰庾亮鎭武昌諸佐吏殷浩之徒乘レ月登二南樓一懽飲不レ覺亮至將二起避一レ之亮曰諸君且住老子於二此與一亦不レ淺遂據二胡床一與二浩等一談詠矣

有詩に云團々として海嶠を離れ漸々として雲衢を出此後句なかりしかば明月に向て心をすまいて今宵一輪滿清光何れの所にかならん此句をまふけてあまりの嬉しさに心亂れ高樓に登て鐘をつく　團々は月圓き皃也(カタチナリ)說文曰團圜也矣　廣韻曰圓也矣　增韻曰聚也矣　海嶠は說文曰嶠山銳而高也矣　增韻曰山道矣　漸々は廣韻曰進也矣　咸韻曰流貌矣　雲衢は爾雅註曰衢交道四出矣一輪は月の名につかふ詞也堯山堂外紀曰李先主初有二禪代意一忽夜半寺僧鐘鐘滿城皆驚且將レ斬レ之僧對曰夜來偶得二月詩一曰徐々東海出漸々上二天衢一此夜一輪滿清光何處無先主喜而釋レ之矣　江隣幾雜志(コウリンキガサウシ)曰南唐一詩僧賦二中秋月一詩云此夜一輪滿至來秋得二下句一云清光何處無喜躍半夜起撞二寺鐘一城人盡驚李後主擒而訊レ之且道二其事一得レ釋矣　謠に作る處本文とは異也

人々いかにととかめしに是は詩狂と答ふか程の聖人成したに月には亂るゝ心あり　此詩を作り悅び踊て心狂亂し半夜に起て寺の鐘をつく人々驚き捕レ之罪せんとしけれ共詩の德に依てゆるさるゝ事を得たり詩狂とは詩人の物狂と云義也聖人とは三十六人の詩聖の類をうけていへる歟但し聖人とは詩人の稱美せる詞と見えたり

煩惱の夢を覺すや法の聲も靜に　止觀五曰三夢中眠夢辟夢譬二無明煩惱一未レ眠譬二法性一矣夢を煩惱にたとふる事多く說り略レ之

初夜後夜晨朝入逢(ジンジヤウイリアヒ)　是は晝夜六時の內中夜と日中とを略して殘の四時を云也初夜は戌の刻後夜は寅の時晨朝は朝夜あけ也入逢は日沒也晝夜の鐘の音を四句の偈に響くと云事は湯谷に注す

先初夜の鐘をつく時は中略月も數そひて百八煩惱の眠りの　六時の鐘をつくに此謠に中夜と日中とを略して殘の四時をいへり先初夜の鐘といふより月も數そひと云迄に百八の數に合するといへるに二義有一義には初夜は五つ後夜は七つ也五七三十五とす晨朝は六つ入逢も六つ也六々三十六とす日中は九ッ中夜も九ッ也是は二九十八とす四句の偈を四つとす今宵八月滿月なれば月も數そひと云を十五とす都て百八となる也又一義には晝夜十二時として其時々々の數を其儘にてかぞへつもりて月も數そひと云を壹月三十とあけて一百八と都合する也

諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂　是は雪山の半偈の文也　涅槃經曰我於ニ過去身ニ爲ニ童子ニ於ニ雪山ニ修行求レ道時聞下羅刹於ニ大林中ニ宣中說半偈上我當詣レ彼作ニ如レ是言ニ善哉聖者何處得ニ此半如意珠ニ乃至爲レ我宣ニ說四句ニ云ニ諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂ニ我以レ身施ニ羅刹ニ如レ故現ニ帝釋形ニ矣此四句偈の意は此娑婆の依報は生住異滅し正報は生老病死する故に諸行無常と云然れば生ある者は皆滅する故に是生滅法と云生滅も滅して後は寂滅にして無ニ蹤跡ニ所を樂とす此意を寂滅爲樂とは云也○常ならぬ世にふる果は消ぬとやけに身を捨し雪の山人爲家

菩提の道の鐘の聲　名義集曰肇師云道之極者稱曰ニ菩提ニ後代諸師皆譯爲レ道大論翻爲ニ佛道ニ矣　菩提の道は源氏供養にも記す

百八煩惱の眠の　四教義集註曰眼耳鼻舌身意六根對ニ聲色香味觸法六塵ニ各有ニ好惡平三種不同ニ則成ニ十八煩惱ニ又六根對ニ六塵ニ好惡平三種起ニ苦受樂受不苦不樂受三種ニ復成ニ十八煩惱ニ共成ニ三十六種ニ更約ニ過去未來現在三世ニ各有ニ三十六種ニ總成ニ一百八煩惱ニ也矣　大論に見惑八十八使に思惑の十使十纏の惡と三ついひ合て百八煩惱とする也

五障の雲は梅枝に注す眞如の月は山姑に注す

夫長樂の鐘の聲は花の外につきぬ又龍池の柳の色は雨の中に深し　朗詠集云李嶠詩長樂鐘聲花外盡龍池柳色雨中深矣詩の意は長樂の鐘時にしたがひて是をうつ其聲遠くひらきて花の本に盡龍池の柳春雨に染られて色うるはしく見ゆるとなり長樂は漢

高祖の建給へる宮名也史記に見えたり龍池は武陵
記云謝承爲ニ武陵郡守一時有ニ黃龍一見ニ於郡東水中一
拜表上賀因號ニ龍池一矣
其外爰にも代々の人詞の林のかねてきく　其外古
歌にもうたふ流有爰にもと云時は前にもろこしの
詩をいひたれば次に日本をいひ出んとて爰にもと
云也又古歌にもと云時は詩と歌とを對していへり
詞の林は歌也　古今眞字序云夫和歌者託ニ其根於
心地ニ發ニ其花於詞林一者也矣　文選表曰搴ニ中葉之
詞林一酌ニ前脩之筆海一矣〇集め置詞の林散もせて
千年かはらじ和歌の浦松 續千 法皇御製　私云或説に林の
鐘は六月の異名也是をいひかけたりと云はよろし
からずといへり然れ共林のかねてきくとつゞけた
るは謠の作者六月の異名をいへる歟只鐘の緣にて
かれこれ取合つゞけたる成べし
名も高砂の尾江の鐘　高砂に注す
こもりくの初瀨も遠し　和州の名所也古歌に隱口
の初瀨隱江の初瀨或はかくらくかくれくなどつゞ
けたり初瀨の枕詞也　詞林采葉云隱口此訓かくら
くかくれくこもりえこもりく先達古訓如レ斯其中
にかくらくは字の訓なる故尤有ニ其謂訓一こもりえ
更に不ニ相叶一乎疑らくは口の字草にして大なるが
江に混ずる歟返々至ニ淺智一之故也所詮此所に山の
口より入て奥深き故に籠口の初瀨と云者乎就レ中
万葉集に眞名假名こもりくと書處多し己母理久乃
初瀨己毛利久乃波都世又隱來隱國作は隱久と書云
々　万葉仙覺抄云はせは長谷とかけるが正字也は
と云にながしと云心有せはせばき也さればはせと
云はながくせばしと云事也然るをはつせといへる
津は詞の助也上の諷詞にこもりくと置るははつと
云詞恥る義にかよへばこもりくのはつといへる云
々　詞林采葉云抑初瀨とは此川を百瀨川と云名あ
り長谷寺詣に渡る所最初の瀨なる故に初瀨と云な
るべし云々
難波寺名所多き鐘の音　難波寺は攝州天王寺を云
也富士太皷に注す天王寺の鐘樓は講堂の後蓮池の
側にあり此鐘無常院の鐘と號す高野山參詣之記云
藤原公條あかつき難波寺の鐘とて心もすますべきを
日比のつかれにやきかざりしを紹巴おどろかしけ
りいぎたなき慚愧のおもひをなせり「かへるへき

道しるべして假枕ゆめとの近きかねの聲々

山寺の春の夕暮きて見れは入相の鐘に花そ散ける

新古今集春部に能因法師歌也　詞書云里にまかりてよみ侍りけると云々一本に上の五文字山里のと有東野州云入相の鐘に花の散しには非ず入相のなる比に花ぞ散けるとの心成べし云々増抄云山里の春の夕暮はいかなるものぞときて見れば別の事はなしたゞ入相のかねに花のちる計なると也此歌は古曾部のうへの金龍寺にてよみけると也金龍寺のつきがねのしもくの部に櫻木を植てしもくのあたるやうにして入相のかねをつくに花の散心にして置たる誠にことやうの事也と云々

妹背は高砂に注す衣々は千壽に注す

待宵に更行かねの聲きけはあかぬ別れの鳥は物かは

新古今集戀三小侍從歌也心は別れの鳥は悲しき物なれば待宵に更行鐘聞えゆく悲しさにくらべては物にもあらずと也物かはとは物の數かはと云に同じ此歌故に待宵の侍從とは名付たり盛衰記云後徳大寺左大將實定卿は舊都の月を戀て八月十日あまりに福原より上りて河原の大宮に尋ね入侍從にしのび通ひ給ひければ侍從曉の名殘をおしみて待宵の歌をよめる也是より待宵の侍從とはよばれけり其後又大宮へ行給ひてかの待宵の侍從などよび出て物語などして歸られける折供の藏人を召て侍從が何とやらん名殘おしげに見えつる汝行てともかくもいひてこよと宣へば藏人歸りて歌よみける「物かはと君かいひけん鳥の音の今朝しもいかに戀しかるらん　女房とりあへず「またば社更行鐘もつらからめ別を告る鳥の音ぞうき　藏人歸りて此由を申ければ大將御感有てやさ藏人と云けるを此歌世に披露の後は物かはの藏人とぞよばれける文略又云或說に侍從は八幡檢校竹中法印光清女也母は建春門院の小大進の局が腹に儲たりと云々長門本平家物語云彼小侍從と申はもとはあはの局とぞ申ける高倉院の御時侍從になされたり後には皇太后宮に參りせいのちいさかりければ小侍從とぞめされける母は鳥羽院の御内に小大進の局とぞ申ける文略　通念集云小侍從後には筑後國上妻郡司黑木の何某に嫁す云々今物語云此藏人は內裏の六位などへてやさし藏人といはれけるもの也此大

納言も後徳大寺左大臣の御事也云々　今に徳大寺殿家老に物かはを名のる也今の家老を物かはの紀伊と云也

又は老らくのねざめほどふる　　匠材集云老らくは只老也らくは置字也云々見るをみらくといひ戀ふるを戀らくといひ思ふ事をおもへらくなどいふ類也萬葉集にかくよめる多し證歌略レ之○老らくのねさめよいかにこしかたはいまたにしのふよるの枕を□慶

月落烏啼て霜天滿て冷しく江村の漁火もほのかに半夜の鐘のひゞきは客の舟にやかよふらん　三體詩云月落烏啼霜滿レ天江楓漁火對二愁眠一姑蘇城外寒山寺夜半鐘聲到二客船一矣　是は張繼楓橋夜泊と云題にて作れる絶句也言は張繼と云者楓橋と云所に到て夜泊けるに月落烏も鳴霜天に滿る時江楓の漁火を見て少し眠けるに姑蘇城外の寒山寺の鐘の聲客の乘たる舟に聞ゆると云義也此詩に烏啼とあるを謠には烏啼てと云也是は錦繡段に張繼再到二楓橋一と云詩に烏啼月落寒山寺と作る此詩を爰に取合作ると見えたり大明一統志八云蘇州府楓橋在二府城西七里一面レ山臨レ水可二以遊息一矣　又云蘇州府姑蘇山在二府城西四十里一姑蘇臺在二其上一矣　亦云蘇州府寒山寺在二府城西一十里一矣

蓬窓雨したゝりて　　蓬窓は船の笘の窓也　草根集に泊雨滴蓬といふ題にて「しられまし音せぬ笘の雨そゝぎ窓打浪にあらくもらすな

是は駿河國清見が關の者にて候　　舊事本記云珠流河國造志賀高穴穗朝世以二物部連祖大新川命兒片堅石命一定二賜國造一矣大和本紀云駿河國は昔は沼流河と書也其故は葛波河の湊に漂沼あり彼沼隨二波打一此方彼方へ行く然るを駿河と云事は此河早き故に駿の字を付也富士の南海にゆられ浮んで平地不レ定時浪の打よせて此國に置けば仍打よする駿河共號す云々清見が關は浪の關共云依て萬葉に浪の關守とよめり北は山南は海也關は清見寺の門前を云更級記云清見が關は片つたかは海なるに關屋ともあまたありて河までくぎぬきしたり云々萬葉仙覺抄云浪の關守と云事は清見が崎と云所今はくきか崎となん申かの崎の鹽みちて浪の高き時はゆゝしくとをりにくかりければ浪の間をとを

らんとて立とゞまりて波をかぞへて過ければ浪の關守といふと云々　江府紀行云小堀遠江清見が關に到りぬ寺に登りて見るに後は山高く聳へ岩松無心といへ共山風吟し石走る瀧の音にしらべを合せたる廣長舌に同じ前には海上渺々として霧にこもれる松原は帶のごとくにてうかむ釣の小舟は浪間に見えかくれ下略　清見が關はいつの頃置れけるぞ未レ考舊記に田村將軍東夷征伐の時高丸駿州清見關迄攻登りとあり　丙辰紀行云延暦の比奥州の逆賊高丸駿河國まで責入此關に陣を取しを坂上將軍打破て高丸奥へ逃退し事久しければかたりもつたへ侍らず云々　雪玉集云昔清見長者と云もの諸國の人淺間明神へ參詣の道に關をすへし程に清見が關と云云々　或人云清見寺より東二十町計薩埵峠は清見が關の舊趾也と云又云むかし關守が持たる武具今に清見寺にあり云々

正しくは我子の千滿殿ござめれ　　ござめれとはごさは御座也めれは出葉也御座候なれと云義也　鵶鷺記云眞玄さては我をきらふござんなれと太平記云仁木細川の人々是を聞てさてはゆゝしき大事ごさんなれと云々

言語道斷　安宅に注す

我子の面ぶせなれど　　面ぶせとは面目なき心也枕草子云雨にぬれたるなどおもてぶせなりと云々帚木卷云うとき人に見えば面ぶせにやおもはんとはゞかりはぢてと云々○松風かさせ共老もかくれぬ此春は花の面もふせつへらなる

妾はさすがはづかしのもりて餘れる泪かな　　此所へ羽束師杜を出す事は只恥しきと云諷詞計にてつゞりけたり　羽束師杜は在二山城國乙訓郡古河村北一色葉字類抄云羽束師坐高御産日神社山城國乙訓郡十九坐内矣　延喜式同レ之

玉葛

或云玉蔓ハ其蔓引レ地葉似二忍冬葉一而厚春開二小花一色靑綠可レ愛云々　玉葛とは源氏の卷の名也源氏の君の歌に「戀渡る身はそれならて玉葛いかなる筋を尋來ぬらん　河海抄云以二此歌一爲二卷名一云々　玉葛の内侍は致仕の大臣中將といひし時夕顏

の上にかよひ給ひて生れ給ひし御子也内侍三歳の時御母は河原院にて果給ひし事夕顔卷に見えたり四歳に成給ふ時めのとの少貳つくしの任國に下りしに中將と夕顔の上義絶の後なれば都に殘し置參らせんも覺束なく覺えければ姫君を具して筑紫に下り十歳の比任果て登るべきに少貳重く煩ければ子三人有けるに都へともなひ父君にしらせ申べきよし念比に遺言してむなしく成ければ登り給ふ事も月日へにけりおとなしく成給ふにつけて御母夕顔よりもまさりてうつくしかりければ筑紫の國の人せうそこする方おほかりける中に太夫の監とて肥後國にいきほひ有もの來り三人の子供をかたらひ玉葛をむかへ取べき事を賴みけるに次郎三良は大夫の監にたのまれしに太郎ひとり父の遺言をまもり母と心をひとつにして夜にげ出て都に登り九條に宿をもとめて住けれ共たづきなき住居なれば御身の幸をいのるへき爲に玉葛を友なひ初瀨へまふで宿をかりてやすませけるに夕顔のめのと右近といひしもの夕顔なく成給ひて後源氏の御方に置れしに玉葛の御行ゑ知せ給へとて是も初瀨へまふで侍るとて同じ宿にとまりめぐりあひて共に都へかへり右近は源氏の御方にまいりて姫君に尋ねあひし事を申程なく六條院へむかへ給ひ其殿のうしとらの町に住せ給ひ東の御かたを御うしろになし置給ひ後にひげぐろの大將の室となれり委く玉葛卷に見えたり

是は諸國一見の僧にて候我此程は南都に候ひて

僧は田村に注す南都は奈良の都也　今の北都に對して南都と云也元明天皇より桓武天皇まで七代奈良に都し給ふ今の町には非ず興福寺の西二條村に昔の都の跡方八町あり田圃の字に九條の名殘れり內裏の跡に松あり今も田を作らす○舊さくならの保安百首都の跡とては石すへのみぞ形見成ける源仲正　詞林采葉抄云慶雲四年六月十七日文武天皇於藤原宮崩同七月十三日母后元明天皇即位同五年五月改元爲和銅同二年始建那羅都同三年遷都至桓武天皇延曆二年八代居平城宮同三年遷山城國綴喜長岡同十三年遷平安城然者自藤原宮遷都以來皇后是七代者也云々　大和本記云持統文武二代は藤原の宮に住給元明元正聖武孝謙廢帝稱德光仁七

代は奈良に住給ふ上下略　私云奈良の都は或は十代或は九代說々不レ同也但七代の說用レ之歟
靈佛靈社　和州には奈良に不レ限神武天皇より以來代々舊都あり依て神社佛閣名所舊跡等多し
又是より初瀨まふでと志て候　長谷寺在ニ和州城上郡一號ニ豐山神樂院長谷寺一　帝王編年記云神龜四年丁卯三月廿日長谷寺供養行基菩薩爲ニ導師一此寺者二丈六尺十一面觀音像也奉レ立ニ石上一御衣木楠木也此木者洪水之時自ニ近江國高島郡三尾山前一流出也村閭之民以ニ其木一用レ薪之輩悉以亡失又疫病盛也トニ筮其處此木之祟一也仍引ニ棄大津邊一猶於ニ彼所一如レ此常成ニ雷響一時人號ニ霹靂木一諸人不ニ安堵一又引ニ棄長谷川邊一畢德道上人聞ニ此事一存ニ靈木之由一奏ニ申天皇一即宛ニ賜税稻三千束一造ニ此像一畢德道者播磨國人也母逝去之後偏流ニ浪山林一遂止ニ住大和國城上郡長谷山一夢中靈神忽現曰此峰地底有ニ盤石一本自以來不レ顯宜可レ顯德道悅不レ語レ人于レ時雷響水流見ニ其跡一縱廣正等方八尺石其面如レ掌德道悅奉レ立ニ此石一上古老傳云南閻浮提地底有ニ盤石一枝分ニ三方一一者摩伽陀國之中心金剛座也三世諸佛如來此石成ニ正覺一一者指ニ南海補陀落山一也指ニ東一枝一此觀音座也本自有ニ菩薩之行定跡一如レ形奉レ立ニ此像一寸法相叶無ニ相違一云々
ならの葉の名におふ宮の古事を　古今集雜下云貞觀の御時万葉集はいつばかりつくれるぞと問せ給ひければよみて奉りける文屋有季（フンヤ）「神な月時雨降をけるならの葉の名におふ宮の古事ぞこれ　万葉集は平城天皇の御時撰定有て世に流布すならの葉の名におふ宮とは平城帝を云也古事とは万葉集をいへり名におふは江口に注す
礒上寺（イソノカミテラ）　井筒に記す
法の印や三輪の杉山本行ば程もなく　後拾〇杉村といひて印もなかりけり人も尋ぬ三輪の山本
舟の泊りやはつせ川　はつせを泊瀨共書ゆへに舟の泊りやとはつゞけたり委く此次に記す
舟人もたれを戀ふとか大島のうらかなしげに　此歌の留り聲ぞ聞ゆる也此歌は玉葛の君筑紫よりのぼり給ふ時大宰少貳の娘おもとゝ云女舟の内にてよみし歌也　玉葛卷にあり歌の心は我身こそ思ひは有物を舟人は何の思ひ有ぞと也大嶋は筑前國鐘

の御崎の近所也岷江入楚
暮てゆく秋の泪か村時雨　光明峯寺攝政家歌合○紅のはつしほいそく
衣ての秋の泪や時雨なるらん成實
みなれ棹　業平に注す
猶うき船の楫をたえ　新古○由良のとを渡る舟人梶を
たへ行ゑもしらぬ戀の道哉好忠
名に流れたる　櫻川に記す
あま小舟泊瀬の川とよみおける　海士小舟初瀬と
つゞけたる古歌多し万葉仙覺抄云海士小船泊瀬は
つと云は西國には小船謂二之波都一依而海士小船泊
瀬とはつゞくる也或は又泊瀬の泊の字はとまりと
よめば舟の泊りの諷詞にて海士小船泊瀬とつゞく
る成べし云々　萬○あま小船初瀬の山に降雪のけな
かく戀し君か音する
又其類ひもなみ小舟　なみとはなきの出葉也無の
字也
日影も匂ふ　右近に記す
奥物深き谷の戸に　こもりくの初瀬などいひて初
瀬は谷深き所也三井寺に注す

かくて御堂に參りつゝ補陀落山もまのあたり　補
陀落山は觀音の淨土也長谷寺を補陀落山と見る也
此義寄處なきにしも非ず右の帝王編年記に其意具
に見えたり名義集云補陀落山梵語曰二補陀落迦一或
云二補涅洛迦一此云二海嶋一又云二小白華一矣　西域記
云秣刺耶山東有二布呾洛迦山一山頂有レ池其水澄レ鏡
派出二大河一周流繞レ山二十匝入二南海一池側有二石天
宮一觀自在菩薩往來遊舍矣　周應賓普陀山志卷二
曰補陀落伽山在二呉國東海中一今屬二定海縣一矣　佛
祖統紀五十四曰補陀山唐宣宗此山在二大海中一去二
鄞城一東南水道六百里矣　大悲經曰所謂補陀落迦
山觀世音宮殿矣
二本の杉の立ところを尋ねずは古川野邊に君を見ましや
玉葛卷に玉葛の君に右近めくりあひてよめる歌也
古今○初瀬川古川野へに二本有杉年をへて又も逢見ん
二本有杉河海抄云此歌を以てよめり云々三光院御
説云けふ初瀬にまふで侍らずは何として逢奉るべ
きと也云々私云玉葛は元來頭中將の子也源氏君
是をあらためずして我子になし置給ふ依て此歌の
二本の杉は中將と源氏の君とふたりの事をふくむ

にや
光源氏　葵上に注す
玉葛の内侍(ナイシ)　内侍の事玉葛巻にはなし行幸巻の末より其沙汰ありて次の蘭(フヂバカマ)の發端に尚侍のかみ御宮仕の事と書出せり令義解云内侍司尚侍二人典侍(スケ)四人掌侍四人矣百寮訓要抄云尚侍は執柄の女など是に任す女御更衣同程の事也近代は此官に任ずる人まれ也典侍は大中納言の女是に任ず紅葉の織物の禁色をゆるさるゝ也上﨟女房也掌侍は公卿殿上人諸大夫の女も是に任せらるゝ第一の内侍を勾當と云也云々
右近とかや見奉りてよみし歌なり　右近と云女は夕顔の君のめのと也夕顔果給ひて後源氏の御方に置給ふ也謡の本文にて聞へたり
猶夕皃の露の身の消にし跡は中々になに撫子の形見もうし　篝木巻に夕顔の上頭中將へつかはし給ふ歌に「山賤のかきほある共折々に哀れはかけよなてしこの露　此歌により玉葛のおさなき時の名をなでしこといふ也玉葛を夕顔の形見とみると也

心つくしの木の間の月　古○木間よりもりくる月の影みれは心つくしの秋はきにけり　此歌阿古木に注す
猶しほりつる人心のあらき浪風たちへたて　肥後の大夫の監と云者たけき男なるが玉葛に心をかけし事をいへり上に記す
便となれは舸(ハヤフネ)にのりをくれじと　玉葛巻の詞也花鳥餘情云はや舟は艫を多く立るを云舟の兩方のせがひに八丁も十丁もむかでの手のごとくたてゝおせばとくはしる也海ぞくの舟は艫をおほくたてゝこぐによりてはやくはしるといへり云々萬葉にあしはや小舟と有　はこや刀自物語云女をば馬には得のせ奉らじはや舟作るべしと云々　四聲字苑云舸高尾舟一云戰士可レ乘之輕舟也矣　後撰○大嶋に水をはこびしはや舟の早くも人に逢見てし哉　朝綱
松浦潟唐士船をしたひしに　松浦さよ姫の事俊寛に注す　新拾○松浦潟唐土かけて見渡せは浪ちも八重の末の白雲
浮嶋を漕離れても行かたやいつくとまりと　玉葛巻にあり此歌の留りしらすも有かな是は玉葛上洛

の時ともなひて登りし豐後の介かいもうと兵部の君と云者一所に登りけるが別れをおしみてよみし歌也是等大宰の少貳が子也岷江入楚云浮島は駿河の名所なれ共此歌にては名所にあらず只うき所をこぎ離れて都へ登れども行末いかゞしらずと也云々或云肥前國松浦の坤の麓に鏡宮あり其十町計西に大河あり南より北に流る名二松浦川一其邊を云浮島云々

ひゞきの灘もすき　玉葛巻云ひゝきの灘もなだらかにすぎと云々玉葛筑紫をにげ出給ひしに跡よりはやく來る舟あればかの監が追來るかとおそれてよめる歌に「浮事に胸のみさはく響にはひゞきの灘もさはらさりけり同巻にあり兵部歌共玉葛の歌共古來說々有岷江入楚に玉葛の歌然るべきかと云々　三光院御說云ひゞきの灘は備前國にあり云々　万葉にひぢきの灘とよめり袖中抄云ひぢきの灘は播磨にあり俗說にはひゞきの灘共云と云々或云響洋筑前海中道鐘水崎等北海也相傳一丈許鐘沈二于海底一有レ之故名二鐘水崎一因其近邊稱二響洋一矣

かくて都の中とても我は浮たる舟の内　同巻に玉葛の歌に「行さきも見えぬ波路に舟出して風に浮たる身こそ浮たれ　岷江云此歌玉葛の身の上によそへたる尤哀也行末とても風波にまかせたるなりと云々

猶やうきめを水鳥の陸にまどへる心地してたづきもしらぬ身の程を　同巻云此君都に登り九條に宿をかり住給ひけれど都の內といへともはる〴〵しき人の住たるわたりにもあらずあやしきいちめ商人の中にていぶせく世中を思ひつゝ秋にも成行まゝにきしかた行さきかなしき事おほかり豐後の介と云たのもし人も只水鳥の陸にまどへる心地してつれ〴〵にならはぬ有樣のたづきなきを思ふ云々　水鳥の陸にまとふと云事也色々說あれ共三光院の御說は水鳥は水を得たるもの也それか陸に住たるやうなるとの義計にて別の事なしと云々玄旨云只よるべもなき姿を陸にまどへるとは云也云々

○うちもねす陸にやまとふ水鳥の池の夜床はこほるあらしに　通茂

足引の大和路や唐土迄も聞ゆなる初瀬の寺にまふで

つ
足引は檜垣に注す　大和は田村に注す　玉葛卷云初瀨なん日本のうちにはあらたなるしるしあらはし給ふと唐土にだに聞へあんなり云々　吉野拾遺云當寺御本尊は吾朝の貴賤をすくはせ給ふのみにあらずもろこしまでも御りやく深きためしもありけんかし云々○初瀨山唐土迄もあはれみのひろきをわきて賴むとぞきく後相原　長谷寺緣起云唐僖宗皇帝の后馬頭夫人形見にくき事を歎きけるに仙人の敎により東に向て日本の長谷寺の觀音をいのり給ひしに夢中にひとりの僧東方より來りて瓶水を面にそゝぐと見て忽に容貌端正に成也是に依て乾府三年七月侍女を引卒して明州の津に出向ひて十種の寶を奉らる云々彼寶物の中に佛面帳とて錦に觀音の像を織たる戸帳有游行上人へ靈夢有て彼レ遣其後上人堺に泊れけるに初瀨の僧來て其戸帳を取歸しける其夜又吉有て終に上人へ送り歸すと云々文略又吉備大臣入唐の時長谷寺の觀音住吉明神にいのり申て野馬臺をこそみけるに靈瑞あるよし江談に記せり　◎
年も經ぬいのる契りは初瀨山尾上の鐘のよその夕暮

新古今に祈不レ逢戀と云題にてよめる定家卿の歌也玄旨抄云祈つる契りは果てあはぬ年を經たるよと云心を契りは泊瀨山といへり入相の鐘は戀のしるべなれば我たのみつる夕暮ははてゝ後よその戀のしるべとなりたると也云々

法の衣の玉ならは班女に注すこもり江三井寺に注す

初瀨川はやくもしるや　玉葛卷に右近玉葛にめぐり逢し時杉の立とを尋すはとよみしに玉葛の返歌に「初瀨川はやくの事はしらね共けふの逢瀨に身さへながれぬ　花鳥云はやくの事はとは昔の事を云それを水のはやきにこと葉をかりていへり右近にあひて昔の事をきけば身もながるゝほどになみだ袖をぬらすと也云々

法の人　出家を云也

たとひ業因重く共照さざらめや日の光り　普賢經云衆罪如二霜露一惠日消除云々

大慈大悲　三井寺に注す

法の燈あきらかに　般若經四百八卷曰諸佛弟子依二所說法一精勤修學證二法實性一由レ是爲レ佗有レ所二宣說一皆與二法性一能不二相違一故佛所レ言如二燈傳一レ照矣

是を法のともし火とは云也　發心集云法燈永斷者以レ何照二迷情一矣　榮花物語に云法〻燈をかゝげ佛法のいのちをつかせ給ふと云々（玉葉）明らけき法の灯なかりせは心の闇のいかて晴まし

戀渡る身はそれならて玉葛いかなる筋を尋きぬらん　玉葛卷に源氏の君の歌也本文には身はそれなれどと有花鳥云戀渡るは夕顏の上の事いかなる筋とは誠は我子にあらぬ事也云々　弄花云身とは源氏の身也いかなる筋とは玉葛のいかに尋ね來給ふらんと也誠の御子ならねば也云々

つくもがみ我や戀ふらし面影に　そとは小町に注す

立やあだなる塵の身は（謠）　古今集短歌に塵につけとやちりの身につもれる事をとはるらん上下略　榮雅抄云塵の身はいやしく數ならぬかろき身也云々
六帖○風の上にありか定めぬ塵の身は行ゑしらすも成ぬべらなる

はらへど〳〵執心の長き闇地や　法花經曰衆生處々着矣事々につきて執心深く長き闇地にまよふ也長き闇地は唯識論の文の心也安宅に出たり

黑髮あかぬやいつのね亂れがみ　髮の垢とつゞけたり（家）黑髮のあかぬ事なし今は身の總ゝ亂れぬ願ひ計に實隆

ねみたれ髮はねくたれ髮共云采女に注す

うかりける人を初瀨の山おろし　下句はげしかれとはいのらぬ物を千載集戀二源俊賴歌也詞書云權中納言俊忠の家に戀の十首の歌よみ侍ける時いのれ共逢ざる戀といへる心をよめる云々定家卿云近代秀歌に此歌の躰まことに及ぶまじきすがた也と云々

うらみは人をも世をも　（拾遺愚草）○身をしれは人をも世をもうらみねと朽にし袖のかはく日そなき

或はわき返り岩もる水の思ひにむせび　胡蝶卷に柏木右衛門頭の中將といひし時玉葛に心をかけ文つかはしける歌に「思ふ共君はしらしなわき返り岩もる水に色し見えねは（謠）

こがるゝや身より出る玉と見るまで　後拾遺に和泉式部きふねにまふでゝよめる「物思へは澤の螢も我身よりあこれ出る玉かとぞ見る

螢に亂れつる陰もよしなや恥かしや　是は兵部卿

の宮玉葛へ文つかはし給ひて御返事ありし後西の對へ宮のわたり給ひし時源氏の君直衣の袖に螢を多くつゝみ玉葛のましますに御几帳をあげて螢をはなちかけその光りにて宮に玉葛を見せたてまつらんとし給ひし事也螢の巻に委し澤菴和尚此心をよめる一見し人の是や思ひの玉葛螢みたるゝよひの面影

此妄執をひるかへす心は眞如の玉葛　妄執をひるがへしたるが故に心は玉のごとく明らけきなり依て眞如の玉とつゞけたり眞如は江口に注す　新撰朗詠集云以言詩眞如珠上塵厭レ禮忍辱衣中石結レ緣矣

櫻河

櫻河は常陸國筑波山より流るゝ末也櫻名所也　井蛙抄云古歌枕に櫻川は常陸國と云々　玄旨百人一首抄云みなの川の末は櫻川に落る云々　但常州の人にとへば水上を櫻川と云すそをみなの川といへり此所山の上に明神の宮居あり櫻の木多し依而名づくと云々今案萬葉集第十六巻に櫻兒と云名有此謠に云櫻子事には非ず爰にいふ櫻子は木花咲耶姫の氏子なれば櫻子と名付といへりこれ謠の作者の文なるべし

ケ樣に候者は東國方の人商人にて候我久敷都に候ひしが　都の字義は高砂に記す

此度は筑紫日向に罷下りて候　國造本紀云筑志國造志賀高穴穗朝御世阿倍臣同祖大彦命五世孫田道命定二賜國造一矣　日本紀纂疏云筑紫州者地之形似二木菟一和名曰二都久一俗謂二耳附一之鳥也矣舊事紀云謂筑紫島身一而面四毎レ面有レ名筑紫國謂二白日別一豐國謂二豐日別一肥國謂二速日別一日向國謂二豐久士比泥別一後世復分爲二九國一即西海道也矣日向は景清に注す

此文と身の代とを櫻の馬場の西にて　文は湯谷に注す身の代とは身を賣し代物を云櫻の馬場は日向國兒湯郡咲屋姫の神社の邊にあり

獨ふせやの草の戸の　布施屋と書ひとり伏とつゞけたり此ふせやは谷のふせや賤のふせやなど云躰成べし布施屋の事角田川に注す　拾玉○軒近き梅のあ

ありかを袖にしめてひとりふせやと人にいはれし

神も木花開耶姫　地神三代天津彦火瓊々杵尊后也大山祇神之女磐長姫妹彦火々出見尊母也神代巻云天津彦火瓊々杵尊天ニ降日向之高千穂峰一自レ其到ニ吾田長屋笠狭之碕一時彼國有ニ美人一名曰鹿葦津姫一皇孫問ニ此美人一曰汝誰之女子耶對曰妾是大神娶ニ大山祇神一所レ生兒也皇孫因而幸之即一夜而有レ娠矣一書云彼國有ニ美人一名曰ニ鹿葦津姫一亦名神吾田津姫亦名木花之開耶姫矣　古事記云名ニ木花知流耶姫一矣瓊々杵尊二人の女を召給ふに姉の磐長姫は貌醜ゆへにめさず妹の木花開耶姫は形うつくしく則召て一夜にして孕めり姉の磐長姫大きに慙て詛て云天孫我を召兒をうめらば兒の壽永く磐石のごとくにあらん今既に妹を召其生兒必木花のごとくにして移落なんと云々神代巻下

すみうかれたるふる里の　玄旨聞書云古郷はすみし所を立はなれたるをいふすみながらも年久しくなりてやぶれたる家をもいふと云々

標狩　右近に注す

是は常陸國礒邊寺の住僧にて候　礒邊寺在ニ常州眞壁郡一行基の開基本尊ハ藥師如來也常陸國國造本紀云新治國造志賀高穴穂朝御世美都呂岐命兒比奈羅布命定ニ賜國造一矣　大和本紀云常陸國とは此國は鹽さし滿て民の家居煩ありき常此國を常陸地となさばやとて彼國を常陸の國と宣仍其より後は鹽遠く上らず民安穏也故に常陸といへり下略　萬葉仙覺抄云常陸國と云事風土記云往來道路不レ隔ニ江海之津湄一郡郷境堺相ニ經山川之峰谷一庄近通之義以即名稱矣これは國中道路不レ隔ニ江海一くがのみちあひつゞける故にひたちと名づくと見えたり又万葉に衣手のひたちとつゞくる事は倭武尊巡ニ狩東夷之國一幸ニ過新沼之縣一取ニ遣國造毘那良珠命一新令レ堀レ井流泉淨澄尤有ニ好愛一時停乘レ輿翫レ水洗レ手御衣之袖垂泉而沾依ニ漬袖之義一以爲ニ此國之名一矣

師弟の契約をなし申て候　師匠弟子の契約也師とは周禮曰爲ニ人之長一訓ニ物之規一名ニ師長一矣　弟子遺教經節要云學居ニ師後一故言レ弟解從レ師生故稱レ子矣

筑波山このもかのもの花ざかり　筑波山は在㆓常陸筑波郡㆒海邊之山也山峰有㆓筑波權現㆒號㆓稲村權現㆒男躰女躰兩宮有㆓間之山㆒號㆓雄筑波女筑波㆒桓武天皇朝德一上人當山開基而後萬巻上人勸㆓請權現㆒爲㆓鎭守㆒云々　詞林采葉云天照大神此山の嶺にて紫の筑琴を彈せ給ふに至㆓水波曲㆒鹿島の浦波乘㆑雲飛登る此山の嶺に着たり依而云㆓波山㆒而因㆑琴名㆓筑波山㆒云々古今秘抄云筑波山は茂たる山にて木葉かさなり付たる樣なれば付葉山と云又此山の峰に大池有常に波たちやます依て筑㆑波山と云也と云々　或云此山昔深山にして日光もれず故に月木葉山と云々袖中抄云このもかのもとはこのおもかのをもと云也おもとはおもて也山はこなたおもてかなた面あればいへり又小鹽に注す

雲の林の陰しげき　花を雲にたとへたれば花の木のたちならびたるを雲の林とは云也

綠の空もうつろふや　童蒙抄云樓炭經曰須彌山は四寶のなせる處也中略東面は黄金西は白銀北は水精南面は瑠璃也この南瞻浮州の空は碧瑠璃にて綠に見ゆる也云々

面白は三輪に注すけしからずは角田川に注す

花ちれる水のまに／＼とめくれは山にも春はなく成にけり　古今集春下深養父歌也詞書云彌生の晦日かたに山を越けるに山川より花の流れけるをよめると云々古今榮雅抄云谷川に花のちり水にしたがひて流れ出るを求ゆけば山には其色もなくさびしく見ゆるを春もなく成たると也まに／＼は隨意と書云々

櫻花散にし風の名殘には水なき空に波ぞたつ　古今集春下貫之歌也本歌には散ぬる風のと有又留りは波ぞ立ける詞書に亭子院の歌合の歌と有榮雅抄云花の散ぬるか風にさはきて空に波のたつと見えたる也云々

散は泪の川やらん　泪川は伊勢の名所なれ共爰は只泪計をいへり泪川の事浮舟に注す

思ひ亂るゝ心づくしの海山越て箱崎の浪立出て須磨の浦又は駿河の海過て常陸とかや迄下りきぬ　西國を出て東國迄遠く來るは子を思ふ故なるべし源氏常夏巻に近江の君が歌に一常陸なる駿河の海の須磨の浦浪立出よ箱崎の松　此歌をもてつゝけた

り箱崎は筑前也夕顔に注す　須磨は攝州也駿河
國は三井寺に注す
名に流れたる櫻川とて　名に流れたるとは古き名
所の其所とて今につたへ殘りしを云也無名抄云昔
の事共尋ね侍しついでに井手の山吹とて名に流れ
たるをと云々〇（夫木）風吹は浪ら幾重の櫻川名に流れた
る水の春かな（後九條内大臣）
あまざかる鄙の長路に衰へば　あまさがる鄙は道
明寺に注す〇（古）思ひきや鄙の長路に衰へて蜑のなわ
たきいさりせんとは（篁朝臣）
おもわすれは箱崎に注す冬籠しては難波津の歌をも
てつゞけたり難波に注す渇仰は加茂に注す
我故郷の御神とは此花咲屋姫と申て御神體は櫻木に
て御入候　故郷とは櫻子が故郷也日向國を云也神
の御名を木花開耶姫と申ゆへに御神躰を櫻木とは
いふ成べし木花開耶姫神社在₂日向國兒湯郡₁號₂
妻萬宮₁　社前に川有櫻川といへり木花開耶姫は
神代に初る日向國にあらはれ給ふ御神也依レ之當
所にしづめます成べし
名におふは江口に注す貫之は蟻通に注す

常よりも春へになれは櫻川波の花にそまなくよすら
め　彼撰集に貫之歌也詞書云櫻川と云所ありと聞て
と云々波の花とは水草の花を云也櫻花の川水にち
り浮みたるを波の花と見たてたる也
霞うながす信太の浮嶋　うながすとは促と書說文
云促迫也矣　廣韻云近也速也至也矣　增韻云短也
催也矣琵琶行云促レ絃轉急（上下略）
信太の浮嶋は常陸也信太は郡の名也常陸國風土記
云黑坂命征₂討陸奥蝦夷₁事了黑坂命遇₂病身₁死葬
具儀赤旗青幡交雜飄颺雲飛虹張瑩₂野耀₁レ路時人謂₂
之幡垂國₁後世言便稱₂信太國₁（文略）
うかべ〳〵水の花　水の花は水草の花をいへ共爰
にては櫻の花の川にちりうかぶを云也
こざめれは　三井寺に注す
花のみかさは白妙の　みかさとは水かさ也水のか
さみたるを云也白妙は田村に注す
花の下に歸らん事を忘れ水の　白氏文集十三云花
下忘レ歸因₂美景₁樽前勸レ醉是春風矣忘れ水は和州
及攝州の名所なれ共是は上の詩の語をうけて忘れ
水とつゞけたり

水流花落春在レ鎮月冷風高鶴不レ歸　證文未レ考

岸花紅照レ水洞樹翠含風　舊抄に杜子美が詩也云々

山花開似レ錦澗水湛如レ藍　碧岩九云僧問ニ大龍一色身敗壞如何是堅固法身龍云山花開似レ錦澗水湛如レ藍矣

一樹の陰一河の流れ　千壽に注す

年を經て花の鏡となる水に散かゝるをや曇といふらん　古今集春上伊勢が歌也詞書云水のほとりに梅花さけりけるをよめると云々榮雅抄云鏡は古くなれば曇物なれど是は年を經て花の鏡となる水は花の散かゝるは曇にて有と也云々

散ぬれば後はあくたになる花と思ひしる身も　古今集物名にくたにをよめる遍昭歌に「散ぬれは後はあくたになる花を思ひしらすもまとふ蝶かな榮雅抄云散て後は芥になりぬる花をそれ共思ひしらずしてまとふ蝶にて有と也くたには苦丹也山門無動寺にありと云蔦の葉のちいさきに似たりと云一説くたには岩藤也くたんとて紫色に花咲也橋藻と書云々

梢よりあだに散ぬる花なれば落ても水の哀れとは　古今集春下菅野高世歌に一枝よりもあだに散にし花なれば落ても水の淡と社なれ　詞書云東宮の雅院にて櫻の花のみかは水に散て流れけるを見てよめると云々歌の心は花はあたに散ものなれば落ても水の淡となるはことはりぞと也十口抄云古今集首尾終て延喜帝もかくれさせ給ひそれより廿年計後に此歌古今集に入れり崩御の後なれば此歌無常の理あるに依て感心を催す故に入れりと云々

先だゝぬ悔の八千度　榮雅抄云古語に後悔不レ立レ前流水不レ歸レ源と云心也と云々○先たゝぬ悔の八千度悲しきは流るゝ水の歸りこぬなり　閑院

百千鳥花になれゆくあたしみははかなき程にうらやまれて　六帖の歌也本歌に花になれぬると有又留りはうらやまれぬるとも有百千鳥は古今の傳受也

霞をあはれみ露をかなしめる心なり　古今假字序云鳥をうらやみ霞をあはれみ露をかなしむ心こと葉おほくさま〳〵になりにけると云々榮雅抄云霞をあはれびとは霞の風にはれやすき事をいひ露をかなしぶとは露のはかなくさゆる事をいふいづれ

もおもしろかりと云やうの詞也露をかなしぶは悲歎のかなしびにあらず霞露をおもしろくながめ愛しもてあそぶと云心也霞露をあはれびかなしぶ、によりて心詞さま〴〵になりおほく歌のなれるといふ云々

常陸帶のかごと計に散花をあだになさじと水をせき　新古戀　吾路の道のはてなるひたち帶かこと計りもあはんとそ思ふ　讀人不知　東野州云かごとはちかごと又少しの事又かこつけ又かこちたる事などに云也此歌のかごとは誓言と少しの事とをかけてよめる也云々袖中抄云かごと計と云事さま〴〵に申せり帶にはかごと云物のあればかごといはんれうにひたち帶とはいへる也云々扨此謡のかごとも少しと云事也少し計散花にてもあだになすまじと也又木花開耶姫の御神木共うたへば誓言共いはるべし奥義抄云常陸國鹿島明神の祭の日彼所の女緣をうらなはんとて苧を帶にして一つにはけさうする男の名を書一つには我名を書て神前にて祝言を申て帶を折反して名をば隱し末を木に結び合するなり惡かろべき緣なればはなれ〴〵にむすばれよかるべきにはかけ帶のやうに結びつながるゝそれを肩にかけて歸るとぞ云々　當社祭年中有二七十五度一中有二常陸帶祭一其日書二記男女名於布帶一置二神前一社人取授レ之相見以定二婚姻一云々

花のしがらみかけまくもかたじけなしや　花のしがらみとは川に花の多く散たるをしがらみと見たてたるなりしがらみは紅葉狩に注すかけまくもは難波に注す（千）櫻ちる水の面にはせきとむる花のしからみかくへかりけり　能因

風もよぎてふき　○（古）春風は花のあたりをよぎてふけ心つからやうつろふと見ん　好忠

花によるべの水せきとめて　袖中抄云よるべの水とは神社に瓶を置てたまれる水を云也神にはよりと云事あり此かめの水に神のたちより給ひて神水とて呑つれば有事無事の慥にあらはるゝ心なりと云々定家卿說云よるべには緣也たよりの水也神社に限べからずと云々○住吉歌合　月影は寒にけらしな神垣のよるべの水につらゝいる迄　清輔

あたら櫻の科は　此歌西行櫻に注す

花もうし風もつらしちればぞさそふさそへはぞちる
雲玉集○花もうし嵐もつらし諸共にちれはそさそふさそへはそちる中郎將　連歌發句○花そうきちれはや風のさそふらん行助

霞の間にはかば櫻　拾　源氏野分卷云霞のまよりおもしろきかば櫻の咲みだれたるを見る心地すと云々　增鏡云花といはゞ霞のまのかばざくら猶にほひおとりぬべくと云々　榮雅抄云かには櫻はかば櫻也はね字をにとつかへりかむばさくら也きぬの色おもて蘇芳にてうらうす色なるをかば櫻といふ花の色少しあかゝるべきにこそ云々徹書記物語云かばざくらは一重ざくらなりと云々○拾淺みとり野べの霞はつゝめ共こほれて匂ふかば櫻かな讀人不知

雲と見しはみ吉野の川淀たきつ波の　吉野の花を雲と見ると云事二人靜に注す玄旨抄云川淀は水のよどみてしづかなる所をいふと云々

もしくす魚やかゝらまし　くず魚は鮎也國栖魚と書昔吉野川の奥に國栖人と云者あり毎春天子へ若菜又鮎の魚を奉りし也依て鮎を國栖魚といへり帝王編年記云應神天皇十九年戊申冬十月幸ニ吉野宮一國樔人來朝以醴酒献ニ于天皇一吉野國樔是時始已上日本紀同レク亦日本紀第三神武天皇記云披レ磐而出者天皇問レ之曰汝何人對曰臣是磐排別之子此則吉野國樔部始祖也矣　今案吉野の國樔應神の御時始て出たりといへ共既に神武の御時まみえたりとあれば是始め成べし

櫻魚　是も鮎也櫻の盛りの時分の小鮎を云也

雪も波もみながらに　みながらは皆なから也○古紫の一もとゆへに武藏野の草は見なからあはれとそ見る

しらぬひの筑紫　白樂天に注す

おもだて　面形と書貌たちの事也

子は子なりけり鶯の　續世繼云菩提樹院と云寺にある僧房の池の蓮に鳥の子をうみたりけるを籠に入て飼けるに鶯の子時々入て物くゞめなどしければ鶯の子也けりと知てけれ共子は大きにて親にも似ざりければあやしく思ひける程に子のやう〳〵おとなしくなりて時鳥と鳴ければ昔よりいひつたへたる古き事まこと也と思ひある人よめる「親の

今は床しき時鳥早鶯の子は子なりけり京極太夫頼政と書て歌よめる人のさる事ありと聞て態尋來て其鳥の籠に結び付られ侍ける歌「鶯の子に成にけり時鳥いつれの音にかなかんとすらん

二世安樂の緣　誓願寺に注す

浮舟

浮舟とは源氏宇治十帖の內第七之卷の名也浮舟の君の歌に「橘の小島の色はかはらしをこの浮舟そよるへしられす　花鳥餘情云以レ歌爲二卷名一云々　浮舟君は桐つぼの帝の第八の宮宇治のうばそくの宮の御女也母は中將の君とてさぶらひけるに宮しのびて物のたまひし程に此浮舟生れ給へり又手習の君共東屋の君共云也此君のこと腹の姉君を宇治の大姫君とて薫大將心がけ給ひけれ共逢給はでうせ給へばいかで此君に似たる人も哉とおほして妹の浮舟を尋て宇治に置給へり然るを匂兵部卿の宮此君をみそめ給ひしより御心にかゝり宇治へおはして薫大將のまねをして一夜逢給へりそれよりしのび〳〵にかよひ給ふ此事大將ほの聞給ひて都へむかへ給はんとおぼして其用意あり又兵部卿の宮も薫より先に京へむかへんとの給ひけれは浮舟の心にも二夫にま見えし事をはぢ給ひて我と身をいたづらになして宇治の川に身をなげ給はんと覺しける夜更て出給しを物の氣さそひてつれ行しを長谷の觀音の御まもりめあるゆへにや命つゝがなくて木の根に臥居給へりしを橫川の僧都母いもうとゝ打つれはせよりの下向に宇治に宿りし夜是を見付て小野へつれ歸り加持などして本生になり給へりそれより僧都の敎化にあづかりて尼にぞなり給ふ委く浮舟卷にあり

是は諸國一見の僧にて候我此程は初瀨に候ひしが是より都に登らばやと思ひ候　一見の僧は橫川僧都になぞらへていへり手習卷云其比橫川になにがしの僧都とかいひていとたうとき人住けり八十あまりの母五十計のいもうとありけり古き願ありて初瀨にまふでけると云々河海抄云なにがしの僧都とは惠心僧都遁世の後橫川に隱居し給ひて號二橫川僧都一母の事妹安養の尼の事相似たりと云

云此妹の尼を手習巻に小野の尼といひて手習の君をやしなひし人也

初瀬山夕こへ暮し宿もはや檜原の餘所に三輪の山　初瀬は三井寺及玉葛に注す三輪檜原は三輪に記す

新古○初瀬山夕にこえ暮て宿とへは三輪の檜原に秋風そふく禪性法師

しるしの杉も立別れ　　手習巻に手習の君の歌に

「はかなくて世にふる川のうき瀬には尋もゆかし二本の杉花鳥餘情云此二本の杉は匂宮薫大將の二人の事をいへり云々毗江入楚云此説不レ用レ之矣

狛の渡りや是はやみ　　狛は山城相樂郡也　大狛下狛とて有大狛は平尾村の南木津の渡の北を云下狛は木津川の西飯岡の南に下狛村あり兩村川を隔て云也家○山城の狛のわたりをみてし哉瓜つくりけん人の栖根を兼盛

柴つみ舟のよる波も猶たつきなき浮身かな　　浮舟と云事也柴舟の浪にゆられよるべなき礎のたつきなきがごときの我身にたとへていへりたづきは便り也　浮舟巻云宇治橋の遥々と見渡さるゝに柴つみ舟の所々に行ちがひたるなど云々

うきは心の科ぞとてたが世をかこつ方もなし　浮舟の君二夫にまみえし事をはぢらひ給ひ我身のせんかたなき事をいへり上に記す

宇治の橋柱　　頼政に注す

思ひ草葉末の露を　　思ひ草は百万に注す金○思ひ草葉末に結ぶ白露のたま／＼きては手にもたまらす

老行末はしらま弓もとの心を歎くなり　　弓に本はづ上はづと云事あればもとの心をとつゞけり

續千○ひくかたはあまたあり共梓弓もとの心のかはらすも哉藤原利行

月日もうけよ行すゑの　　新古○大空にちきる思ひの年もへぬ月日もうけよ行末の空

神に祈のかなひなば頼を掛てみしめ縄長くや世をも祈らまし　　夫○神垣に千とせをかけてみしめ縄長く久しき御代を祈らん

同じ女の身なれ共數にもあらぬ浮身なれば　東屋巻云數ならぬ身に物思ひの種をやいとゞ任せて見侍らんと云々數ならぬと云詞源氏供養に注す

光源氏の物語　源氏供養に注す
里の名をきかじといひし人も社あれ　椎本巻云うらめしと云人もありける里の名のなべてむつましうおぼさるゝと云々玄旨抄云里の名とは宇治をいへり喜撰が我庵はの歌をふくみて宇治をうき事にいへりと云々浮舟巻に浮舟の君の歌に一里の名を我身にしれは山城の宇治の渡りそいとゝ住うき此歌新拾遺に題しらず紫式部と有
橘の小島が崎を見渡せ　浮舟巻云これなん橘の小島と申て云々　橘の小島がさきは頼政に注す○補續古の香や猶幾らん橘の小島によせし夜半の浮舟
河よりをちの夕煙　椎本巻云故大殿しり給ふ所は河よりおちにと云々河海抄云をちとは遠き心也或は又あなたと云心にも用る也云々　をちの里頼政に注す
山は鏡をかけまくもかしこき世々に　浮舟巻云山は鏡をかけたるやうにと云々　是は兵部卿の宮浮舟をつれ給ひ川向の家に至り給ひし時の詞也又あげまきの巻に四方の山鏡と見ゆると有　紫式部日記云雪深き山を月の赤きに見渡されたる心地しつきら／＼と鏡を掛たるやう也云々掛まくもは難波に注す○草根天の戸の雪に明るや玉手箱山は鏡をかけてむかへは
取分此浮舟は薫中將のかりそめにすへ給ひしななり名なりと心得べからず南なりと心得べし薫中將は源氏の御子也母は朱雀院の女三の宮也實は柏木が子也かほると云名は其身おのづからにほひたるゆへにかほるといふ也匂宮巻云そこはかといづこなんすぐれたるあなきよらとみゆる所もなきがたゞいとなまめかしうはづかしげに心のおくおほかりげなるけはひ人ににぬ也けり香のかうばしさぞ此世のにほひならずあやしきまでうちふるび給へるあたりとをくへだゝる程の追風もまことに百歩の外もかほりぬべき心地しける云々
人がらもなつかしく　東屋巻云人のさまいとらうたげにと云々　浮舟のさま也薫の心也又浮舟巻云人がらのまめやかにおかしうもありしかなと云々
心ざまよし有ておほどかにすこし給ひしを　浮舟巻云こめき大どかにたを／＼と見ゆると云々細流云おほどかとは大やうなる事をいへり云々藏江云大やうにけだかきかたは浮舟にはなしと也云々

物いひさがなき世の人の　浮舟巻云物いひさがなく聞えいでたらんにもと云々○拾爰にしも何匂ふらん女郎花人の物いひさかにくき世に遍昭

兵部卿ノ宮なん忍びて尋おはせしに繼ぬふわざのいとまなき　兵部卿は今上の三の宮也母は明石の中宮也源氏ノ御孫也浮舟巻云木丁の帷子打かけて押やりたる火ふかうともして物ぬふ人三四人居たり云々玄旨云三四人をさうしにんとよむ也と云々兵部卿は匂兵部卿其匂ふ宮共云也此宮はかほる中將としたしき友にて中將の身の匂へるをうらやみてよろづの香ヲ身にとめ給へり依て其名とす匂宮巻云兵部卿の宮なんこと〴〵よりもいどましくおぼしてそれはわざとよろづのすぐれたるうつしをしめ給ひと云々　職原云兵部卿一人近代多爲ニ公卿已上兼官ニ四位不レ任レ之或又親王任レ之凡八省中中務式部親王官也兵部時々任レ之下略注云公卿兼官例左大臣藤原道平建武元年十二月十七日兼ニ兵部卿ニ于レ時内覧矣職員令云兵部省卿一人掌ニ内外武官名帳考課選叙位記兵士以上名帳朝集禄物假使差ニ發兵士ニ兵器儀仗城隍烽火事ニ矣　百寮訓要抄云兵部卿は親王も任す又納言以上可レ然公卿も任る也是も殊更親王の官にてあれば、の執する也武官の事を成敗する職也されども又將軍などの樣に武藝にたづさはる事はなし只武官の事を奉行するばかりなり云々

かいまみしつゝ　伊勢物語云其里にいとなまめいたる女はらから住けりこの男かいまみてけりと云々玄旨抄云垣のひまより見たる心也萬葉に垣間見日本紀に覗其私屏伊物眞名本に間と書○夫きぬ〳〵の音社忍へなか垣の我かいまみや人のしるらん爲尹

有明の月澄のぼる程なるに「水の面も曇りなく　浮舟巻云有明の月澄のぼりて水の面も曇りなきにと云々　椎本巻云有明の月いとはなやかにさし出て水の面もさやかにすみたる也と云々　有明は高砂に注す

汀の氷ふみ分て道は迷はすと有しも淺からぬ御契り也　浮舟巻に匂兵部卿の歌に「峰の雪汀の氷ふみ分て君にそまどふ道はまどはす　岷江云峰の雪汀の氷に苦勞したる道は事の數ならず浮舟を思ふ心の切なるをいひたてたる也云々　浮舟返し「降み

たれ汀にこほる雪よりも半空にてそ我はけぬへき

ひとかたは長閑にてとはぬほどふる思ひさへはれぬ詠とありしにも　ひとかたとは薫大將のかたを云也浮舟卷云かの心のどかなるさまにて見んと行末遠かるべき事をの給ひわたる人もいかゞおぼさんといとをしううきさまにいひなす人もあらんこそ思ひやりはづかしけれど丶云々　岷江云是は浮舟の心に薫の事を思ふさま也云々又同卷に薫の歌に「水增る遠の里人いかならんはれぬながめにかきくらす比　岷江云宇治のわたりをいへりながめは永雨をもたせたり云々

此世になくもならばやと　手習卷云心づよく此よに失なんと思ひたちしをおこがましうてと云々

わらはが栖は小野の者都のつてに問給へ　小野は山城國愛宕郡也若狹の境也宇治郡醍醐村の北に同名有河海抄云小野は大原也仍比叡坂下と云也云々伊物集注云叡山の西坂本に小野と云所二所あり其一は松が崎のあたりより東の山際までを云今一は小野九郷とも大原九郷共云村の名ありて小野は惣名也大原と云も名所なれ共九郷の惣名にて別に大原と云所はなし云々

かくれはあらし大ひえの杉のしるしはなけれ共　諸社根元記云大宮號ニ大比叡一二宮號ニ小比叡一矣
〇(續古)大ひえや杉立陰を尋ぬれはしるしも同し三わの神垣

横(ヨ)川の水の澄かたき　横川は比叡山の北也號ニ楞(レウ)嚴(ゴン)院ニ本尊は彌陀觀音也三塔の一也〇(同)思ひ出る雲井の月の俤も横川の澄してそみる

ひえ坂と尋ね給ふべし　以上のこと葉横川のひじりの御母いもうとなど小野に住給へり此事をふくませたり手習卷云ひへ坂本に小野といふ所にぞすみ給ひけると云々河海抄云小野は大原也仍而比叡坂本と云也云々比叡山の西坂本也

なき影の絶ぬも同じ涙川　涙川は伊勢の名所なれ共爰はたゞ泪の絶ぬとつゞけたる諷詞にていへり杜甫詩云猶有ニ涙成レ河經天復東注矣　梅聖兪詩云獨護ニ慈母喪ニ涙與ニ河水一流河水經有レ竭涙痕常在レ昨矣手習卷に浮舟の歌に　身をなけし泪の川の早き瀬にしからみかけて誰かと丶めし

うき名もれんと思ひわび　浮舟巻に浮舟の歌に「歎きわひ身をはすつ共なき影に浮舟流さん事を社思へ　岷江云名の殘らん事のくちをしきと也身を捨たり共うき名は殘らんとなり云々

明暮思ひわづらひて人皆ねたりしに妻戸をはなち出たれば風はげしう川浪あらう聞えしにしらぬおとこのよりきつゝいざなひ行と思ひしより心も空に成果て　手習巻云いといみじと物を思ひなげきて皆人のねたりしに妻戸をはなちて出たりしに風はげしう川浪あらう聞えしをひとり物おそろしかりしかばきしかた行さきも覺えですのこのはしに足をさしおろしながらも行べきかたもまどはれて歸り入らんも中空にて心づよく此世に失なんと思ひ立しをおこがましうて人に見付られんよりは鬼も何も食ふて失てよといひつゝつく〴〵と居たりしをいときよげなる男のよりきていさ給へおのが許へといひていだく心地のせしを宮と聞えし人のし給ふとおぼしゝほどより心地まどひにけると云々　是は浮舟の君小野にて物の氣のきて本性に成て以前の事をおもひ出せし事也宮と聞えし人とは匂宮の事をいへり

あふさきるさの事もなく　八雲御抄云あふさきるさはとするもかくするも也云々　孟津抄云あふさきるさとは行さまくるさま也云々　詩關雎篇曰參差荇菜左右流レ之矣　朱子曰或左或右言無レ方也矣

古○そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらすあふさきるさに

我かのけしきも淺ましや　匠材集云我かのけしきは我か人かなどうたがふ事也云々　桐壺巻云いとゞなよ〳〵とわれかのけしきにてふしたればいかさまにかとおぼしめしまどはる云々　細流云あるかなきかのけしき也正躰もなき躰也云々　孟津抄云我か人かなどゝうたがふほどによはき心也云々

古○あまひこの音信しとぞ今は思ふ我か人かと身をたとる世に

橘の小島の色はかはらしを此浮舟ぞよるへしられぬ

浮舟巻に浮舟の君の歌也此歌により浮舟と名づくる也委く上に記す岷江云夕顔上のうはの空にや影や絶なんといへるにかよひたるさま也はかなきさまなる歌也云々匂宮の歌に「年ふ共かはらん物か

橋の小島の崎にちぎる心はといふ歌の返し也

頼しまゝの觀音の慈悲　小野にて加持して浮舟の物の氣を人にかりうつせしに物のけのいはく此人は心と世をうらみ給ひて我いかで死んと云事を夜晝の給ひしに便を得てくらき夜ひとり物し給ひしを取てし也されど觀音のとざまかうざまにはぐゝみ給ひければ此僧都にまけて奉りぬ今はまかりなんとのゝしる　手習卷に委し

初瀨のたよりに横河の僧都に見つけられ　横川の僧都の事上に記す浮舟の君物の氣にとられ此院の庭の木陰に居給ひしを尼君初瀨にこもり給ひし夜觀音の告申させ給ふ事ありとて小野にともなひかへりいのり加持して二たび本性に成給ひし也手習の卷に委し

僧都は賴政に注す加持物の氣は葵上に注す都卒は白鬚に記す

角田川

世傳班女の謠に作る吉田少將此墨田川に作る吉田の何某同人也且又美濃國野上の宿の遊女花子も此謠に作る狂女是も同じ人也子二人あり兄は梅君弟を松君といふ父の少將は身まかりぬ弟松君は天狗にとらはれ兄梅君はひと商人にさそはれて路頭の土となる母の心はいはん方なく哀れなる事共也角田川と云に付て伊勢物語に名におはゝいさ事とはん都鳥と云歌幷に詞書を以て此うたひを作るなるべし墨田川は諸抄共に下總國と記せり但し宗祇抄には武藏國にいれり案ずるに隅田川は古來下總葛飾郡といひ傳へたり當時は武州豐島郡に屬す木母寺の鐘の銘に見えたり此謠に武藏國角田川と作るは尤なる歟扨此河は入間川の流れの末也一名三尾戸川と云上總にては戸根川淺草にては淺草川或は葛西の渡共云也所によりて其名かはれり堯惠北國紀行云きさらぎの初鳥越の翁艤して角田川にうかびぬる東の岸は下總西の岸はむさしにつゞけり利根入間の二河おちあへる所に彼ふるき渡あり東の渚に幽林有西の渚に孤村あり水面悠々として兩岸にひとしく晩霞曲江に流れ歸帆野草をはしるかと覺ゆ下略　梅若塚在二河東岸下總之地一梅林山木母

寺とて有本尊は阿彌陀也かの柳の木は枯て朽木殘れり毎年三月十五日此寺において大念佛あり又河のこなた武州の地淺茅原總泉寺の前に母の塚あり云二妙龜山一此所に鏡の池と云所有母梅若丸を尋來り終に此池に身を投じて死すといへり今は池もなし万葉集十四辨基法師歌に「亦打山夕越行て廬崎の角田川原にひとりかもねん　待乳山もいほ崎も下總也又角田川に同名あり井蛙(セイア)抄に駿河國にありと云云「都鳥こゝにもあれやいほ崎の角田川原も名にそかはらね「いほ崎の古奴見(コヌミ)の濱のうつせ貝藻に埋れて幾代へぬらん　古奴見濱は駿河の名所也角田川は清見寺の西のきは山あひより流れ出る小川也所の人はたうち川共いふ已上伊物集注　更級記云武藏とさがみとの中にゐてあすた川といふ在五中將のいさ事とはんとよみける渡りなり中將の集にはすみだ川とあり舟にてわたりぬればさがみの國になりぬ云々

是も相模國に同名ある歟追而尋ぬべし

是は武藏國隅田川の渡し守にて候　先代舊事國造本紀云无耶志國造 志賀高穴穗朝世出雲臣祖 名二井之宇迦諸忍之神狹命十世孫兄多毛比命定二賜國造一矣　大和本紀云武藏國當國秩父當耆其勢如二鎧武器立一日本武尊藏二此山一爲二東征祈禱一所持兵具納二埋岩藏一故名二此國一曰二武藏一矣　渡守の始は桓武天皇延暦年中勅二諸國津渡處一設二舟橋一爲レ式又仁明帝承和中爲二往來人一東海東山西道河津處置渡舟一見二續日本紀及國史一

末も吾妻の旅衣ひもはるばるの心かな　伊勢物語にはるばるきぬる旅おしぞ思ふと云歌をふくませたり杜若に注す吾妻の字義は碭谷に注す

雲霞あと遠山に越なして　紀齊名詩云山遠雲埋二行客跡一矣と云をふくませたり

いく關々の道すがら國々過て行程に　京より武州迄に關所有事は所謂山城相坂關勢州鈴鹿關遠州新居關伊豆箱根關同足柄關駿州清見關等也此内新居箱根の二關は近世をかるゝ也相坂鈴鹿足柄清見は上古にありし關にて今は名のみ殘れり

名におふは　江口に注す

けしからず　或云けしからずと云詞はまれなる事には非ずたとへば夏あつく冬寒きをけしからずと

云はよし何にても風與珍しき事をけしからずとは
意得へからず不怪と書てけしからずとよめり云
々
人の親の心は闇にあらね共子を思ふ道に迷ひぬる哉
後撰集雜一兼輔朝臣歌也歌の心明に聞えたり大和
物語に堤中納言の歌也詞書云堤の中納言の君十三
の御子の母御息所をうちにたてまつりけるはしめ
に帝はいかゝおほしめすらんなどいとかしこくな
げき給ひけり扨帝によみて奉り給ひけると云々
きくやいかにうはの空なる風たにも松に音するなら
ひありとは　是は水無瀨殿戀十五首歌合に宮内卿
左勝の歌也新古今集戀の部に入　東野州云待に松
をよする事歌のならひ也心なき風たにもまつと云
名を知て音信侍るにわか思ふ人の是程まて心をつ
くし待になるとはぬとかこつさまなるへし云々
自讃歌註云待の字を松にかよはしたる也つれなき
人をかこち出る也或云寄レ風戀と云題也云々
眞葛が原の露のよに　新古今集に慈鎮和尚歌に「
我戀は松に時雨の染かねて眞葛が原に風さはく也
上にうはの空なる風だにも松に音するとつゝけた
れは此歌を爰にふくみて眞葛が原とはいへり
是は都北白川に年經てすめる女なるが　白川は南
禪寺の北より西へ流れて三條鴨川へ流れ合也此の
流れを限りて北の地を北白川といひ南の地を南白
川と云といへり又此邊に大白川小白川と云所も
有
逢坂の關　田村に注す
爰やかしこに親と子の四鳥の別れ是なれや　四鳥
の別れとは　家語第五曰孔子衛國に在て昧旦是に
哭する者あり孔子顏回に問答云此聲死別に非ず生
て別れたる者也と孔子何を以てか是を知るや答云
桓山の鳥生二四子一羽翼既成將レ分二于四海一其母か
なしむ聲是に似たりと其後人を以て尋ぬるに不
レ違文略白氏文集六十六曰形雖二異類一心則同歸四鳥
分飛聽レ音既稱レ有信矣
尋る心の果やらん武藏の國と下つさの中にある角田
川にもつきにけり　心の果やらんとは新古今集に
通具が歌に「武藏野はゆけ共秋の果そなきいかな
る風の末に吹らん　と云歌をふくみていへり　伊
勢物語云猶ゆき〳〵て武藏國としもつふさの國と

の中にいと大きなる河ありそれを墨田川と云下略下總國は遊行柳に注すしもをさをしもつふさとよむなり此謠にはふの字を略したり惟清抄云つ文字清へき事なるに濁りて讀つけたり三光院は清て讀給ふ云々　九禪抄云ふ文字うと聞ゆるやうによむべしと云々古今堯惠抄云他家說云業平は不レ下其時ニ二條后其外樣々密通の咎に依て既に遠流の議定有しを二條后の兄國經基經流罪の由を披露して彼二臣の間に隱しおかる國經は武藏守基經は下總守中略二人の國守の今の白川の流れ法勝寺のほとりへ流れたる河を指て兩國の中にあて丶角田川と號す此說當家不レ用　云々冷泉流伊物注云武藏國としもつさの國に至と云は長良中納言武藏守にて吹田河の北に家をつくりて住けり國經は下總守にて南のはたに家作して住けりそれを武藏下總の中と云也すみたとは吹田也いとみと同響なるが故にすみだと云也云々　新撰歌枕云貞觀七年四月廿九日吾妻へ遠流宣旨定られて后の御兄長良卿の三男堀河關白照宣公基經朝臣に被ニ仰付一けるを彼人ゆかしく情ある人にてあつまのはてまて流し遣さん事あやなくおぼえければ業平の母伊登内親王の長岡におはしける所へ忍やりて御門には東へ流し侍る由を奏す云々　猶異說多し

なふ〳〵　江口に注す

ワキ「都の人といひ狂人といひ面白う狂ふて見せ候へ狂ずは此舟にはのせまじいぞとよ女「うたてやな隅田川の渡し守ならば日も暮ぬ舟にのれとこそ承はるへけれ　伊勢物語云渡守はや舟にのれ日も暮ぬと云にのりて渡らんとするに皆人物わびしくて京に思ふ人なきにしも非ず上下略今案此物語の渡守は無心にして我所作をいそくさまなり依てはや舟にのれ日も暮ぬと云也此謠の渡守は面白う狂ふて見せよ狂はずは舟にのせましいと云に依て角田川の渡守ならばはや舟にのれ日も暮ぬといふべけれと此物語の詞をうけて狂女のこととふる也○いそけ共ひとりふたりを渡守程なき舟に日も暮ぬへし堯空○日も暮ぬはや舟渡せ角田川宿りもとめぬ旅はものうき爲满　十口抄云はや舟にのれ日くれぬ御家の本には日の字なし堯孝法印の本には有飛鳥井黃門の書給へる本にはなし天子の御前にて日くれぬと云

事心すべき事也と云々九禪抄云日も暮ぬといふ詞
御前にて除てよまぬを暫とす照日の暮るといふを
忌の故實也云々
形(カタ)のことくは關寺小町に注す業平は杜若に注す
名にしおはゝいさ事とはん都鳥我思ふ人はありやな
しやと　伊勢物語に業平墨田川にて讀る歌也古今
羇旅の部に入詞書前後に見えたり闕疑抄云此鳥を
とへば都鳥といへり我故郷の名にて一入なつかし
く思へり都と云名をかこちて名にしおふ事ならば
都の事を問へし我思ふ人は心もかはらてありやな
しやと也云々惟清抄同レ之
あれに白き鳥の見えたるは都にては見馴ぬ鳥也　物
語云さる折しも白き鳥のはしとあしとあかき鴫の
大きさなる水の上にあそびつゝいをゝくふ京には
見へぬ鳥なれは皆人見しらす渡守に問ければ是な
ん都鳥と云をきゝて云々○事とはんはしと足とは
赤かりし我すむ方の都鳥かも阿佛　丙辰紀行云都
鳥は角田河の物なれは好色の人とりて家に飼て侍
るを見るにまことにはしと足とあかき鴫の大きな
る此鳥蛤(ハマクリ)を好みてよく食ける也と云々宵柏閑書云
都鳥はせなかは黑く腹は白し鴫のやうにて大きな
る鳥也云々
あれこそ沖のかもめよ　鳧は廣韻云野鴨也矣　和
名迦毛兇狀鷗に似て鴨より少さく青白色の羽有て
雜り斑也背の上に華文をおび喙短く尾長し脚卑し
て掌紅し數百爲レ群江湖の沙上にあり天を蔽て群
飛其音風雨の至が如し見ニ陸機詩疏一
昔に歸る業平も有やなしやと事問しも都の人を思ひ
妻　物語云皆人物わひしくて京に思ふ人なきにし
も非す云々是は業平山河をへたてゝかゝる墨田川
に至り都には二條の后をはしめ其外の人々を今此
所に來て思ひ出る也○(續古)都鳥何事とはん思ふ人あり
やなしやは心こそしれ太上天皇
問へ共〱答へぬはうたて都鳥ひなの鳥とやいひて
まし　ひなとは鳥の子を云也　爾雅云鳥子生須ニ
其母一而食謂二之鷇一鳥子生能啄レ食謂二之雛一矣　字
林云哺而活者曰レ鷇燕雀之類是也自啄者曰レ雛雞
雉之類是也矣但爰は物をとへ共答へぬ故に田舍の
鳥にて有ぞと也(玉葉)鄙は田舍也○事とへと答へぬ月の
角田川都の友と見るかひもなし
升きおふ堀江の川のみなぎはに來居つゝなくは都鳥

かも
万葉集第廿家持歌也詞書云天平勝寶八年三月二十日江邊作歌云々　是は攝州難波堀江に都鳥をよみ合せたる也仙覺抄云舟きおふとは舟よそひなどいふも同じ事也みなぎはゝみぎはなり云々
それは難波江　讓に注す
角田川の東遙思へは限りなく遠くもきぬる物かな
物語云大きなる河ありそれを角田川と云その川のほとりにむれいて思ひやれはかぎりなく遠くもきにけるかなとわひあへるに云々　九禪抄云業平の旅行の離愛にも留まらずかしこにもやすらはず遠國にいたり都は日々に遠くなるに剰此大なる川をわたりて舊里もいとゝ遠くへたゝらん事を歎き思ふへし故に大なる川と書る辭に意あり以下の詞いつれも哀也云々○新拾限りなく遠くきにけり角田川事とふ鳥の名をしたひつゝ御製
舟こぞりてせばく共　物語云とよめりけれは舟こぞりてなきにけり云々業平のよめる名にしおはゝの歌をきゝて舟の中の人おしなへて泪をながすと也俗字本に畢ト書万葉に悉と書九禪抄云舟中悉と云不也畢レ世事レ時なといふも皆といふ心也云々

諸の心は舟に人こずみたる體也物語の說とは異也
遠例　煩也心地例ならぬ也例にたかふとよめり
ひれ伏儀は俊寛に注す吉田何某は傳記不レ知言語道斷は安宅に注す
道のほとりの土と成て春の草のみ生しげりたる
白氏文集云古墓何代人不レ知二姓與一レ名化作二路傍土一年々春草生矣○拾遺貫外塚古て其世もしらぬ春の草さらぬ別と誰したふらん
あるはかひなきはゝきゞの見えつかくれつ　○新古その原やふせやに生るはゝき木の有とは見へて逢ぬ君哉是則　此歌を注せは袖中抄云はゝき木とは庭はく箒也基俊云作の木は美濃信濃兩國の境その原ふせやと云所にある木也遠くみれは箒をを立たる樣にてたてり近くてみれはそれに似たる木もなし然れはありとはみれどあはぬ物にたとへ侍る云々
布施屋考二國史一仁明帝御宇東海東山兩道作二渡舟一及二浮橋一又建二布施屋一矣　陽成帝御宇爲レ救二百姓濟度之難一於二越後國古志郡渡戸濱一建二布施屋一已上文略

私云布施屋と云は舟及橋を作りて往來の人の難を救ひ彼舟橋或は此所を守りて居る人の住家を布施屋と云也信濃に限らすいつくにも有へし

人間愁の花盛り　　苦界の衆生花の咲がごとく愁歎のやむ時なし文字曰有二榮華一者必有二愁悴一矣

無常の嵐　　付法藏經曰猶爲二無常風一濁流而不レ住矣性靈集報二四恩德一表白云無常之風忽扇四大瓦解矣三敎指歸云無常暴風不レ論二神仙一矣　鴉鷺記云朝に榮花を開もの暮に無常の風に傷昨日累金に誇ともから今日有漏の露に化す上下略　名義集云梵音薩迦耶薩此云二無常一荀卿曰趨舍無レ定謂二之無常一矣攝大乘論曰無常有二三種一一念々壞滅無常二和合離散無常三畢竟如是無常矣　唯識疏釋云無常有二二義一一有生滅體是無常二無他常故名二無常一矣

生死長夜の月の影　　唯識論の文の意也安宅に注す

鉦鼓をならし　　鉦鼓は元樂器の內也倭名抄云鉦鼓兼名苑曰鉦一名鐃金鼓也越王勾踐造也矣題額聚閣贊云鐘鼓道俗拍鉦也聲似レ合二鐘鼓一故名天台云臨終聞レ鐘增二其正念一矣

鳧鐘　　鐘の異名也周禮云鳧氏鑄レ鐘矣

南無や西方極樂世界三十六万億同號同名阿陀佛　　龍舒淨土文卷四曰釋迦佛在世時有二翁婆二人一用穀一斗一記レ數念二阿彌陀佛一願レ生二西方一佛云我別有二方法一令三汝念レ佛一聲得二多穀之數一乃敎以念二南謨西方極樂世界三十六万億一十一万九千五百同名同號阿彌陀佛一皆以二稱穀一校レ之一合千八百粒此數乃千二石之數佛自以レ此敎二二老人一則其功德甚大可レ知矣

今一聲こそきかまほしけれ　　拾遺集夏部に公忠朝臣歌に「行やらて山路暮しつ郭公今一こゑのきかまほしさに　右詞書云北宮のもぎの屏風にと有又公忠家集詞書に北宮の御くし上の屏風に山をこゆる人の郭公を聞たる所と云々

いよ〳〵思ひはます鏡　　增鏡十寸鏡と書神代卷云以二左右手一持二白銅鏡一矣　古今榮雅抄云ます鏡は眞澄鏡を略したゝ也云々「うつりけん昔の影や殘とて見るに思ひの增鏡哉新少將

しのゝめの空もほの〴〵と明ゆけは　　東雲は安宅に注す天明谷々と書鴉鷺記に惹野々々と書ほのと云時は夜明なんとする時を云也世に東しらみと云

時をいへりぼのと云時は日の出になるきざしを云也〇月清ほの〴〵と花は外山にあらはれて雲に霞の明はなれ行

草茫々　井筒に注す

淺茅が原　武藏にあり

謠曲拾葉抄卷十七

百萬

嵯峨大念佛緣起云招提寺圓覺上人字道御和州服部人父號ニ殖松廣元一十五歳而出家十八歳時登ニ招提寺戒壇一隨ニ證玄和尙一受ニ具足戒一應長元年辛亥九月廿九日八十九歳而寂されば上人の德風世に聞へ高く後宇多院より圓覺上人の號を賜ふかくて上人いとけなくて迷ひ子となれり老母かなしひのあまり國々を尋まはる上人も母に逢んため都所々に道場をかまへ專融通念佛をひろむ貴賤道俗集りて念佛を受持する者幾千万と云數を忘らず參詣の人十万に滿ぬれは爲に供養をなせり故に時の人十万上人とぞいへり上人常に生て別れし母を忘たひ愛宕山に詣て是をいのる或時嵯峨淸凉寺において道俗貴賤を集て彼念佛をすゝむ其中に一人の僧有て云汝母に逢ん事を思はゝ播州に至るべしと云て見えず是偏に愛宕の示現ならんと思ひてやかて上人播州に行印南野のあたりを過とて傍をみれは盲たる

老女ありあやしみてこしかたの事を語り給ふに是上人の母にてぞ有けるやがて古郷にいざなひ孝養いと念比にぞし給ける兩眼盲たるをかなしみて觀音に祈給へは忽に兩眼明かにぞ成給ひける母にめくり逢給ひし時は上人五十年の比也文略　私云此謠に百万と云は彼十万上人の母也十万の母なるがゆへに百万とはいふなるべし　又云南都猿澤の池の北三條の西に百万の辻子と云所有其所に百万か墓あり

竹馬にいさやのりの道まことの友を尋ねん　法の道といひて誠の友とつゝけたり此母も子ゆへにひかれて信心をおこしまことの道に入也　華嚴經曰以㆓童兒婦人㆒爲㆓知識㆒矣　論語曰友㆑直友㆑諒矣竹馬とは童子の通名也　後漢郭伋傳曰伋行㆑縣有㆓群兒㆒騎㆓竹馬㆒矣　知禮記云竹馬兒童所㆑戲也矣　橘正通賛㆓在衡㆒詩云君是當初竹馬童矣　袋草子云壬生忠見いとけなる頃内裏より召事あり乘物なくて參りかたきのよしを申處に竹馬にのりてまいるへきよし勅定あれは歌を進上す「竹の馬はふしかけにしていとよはし今夕かけに乘て參らん

是は和州三芳野の者にて候　和州は田村に注す三芳野は御芳野共書　或曰三芳野と書時は吉野に藏王權現三所にまします故也又御芳野と書時は昔吉野に皇居有し故に御の字を書也云々　古今實枝抄云三吉野とは三所あり上吉野中吉野下吉野此三所を三吉野と云也云々

是に渡り候おさなき人は南都西大寺のあたりにてひろひ申て候　おさなき人とは百万の子十万上人也後に圓覺上人と云也但母にめくり逢給ひし時は上人五十計の頃といへり此謠にはおさなき人と作れり西大寺は龍田に注す

又此頃は嵯峨の大念佛にて候程に　毎年三月六日より十五日迄十日の間是をつとむ無二集云弘安二年嵯峨大念佛始矣或曰三所大念佛は後一條院寛仁年中惠心僧都の弟子定覺上人の始め給へり其後破滅而二百七十年以後龜山院文永年中に明鏡律師如輪上人千本の念佛を再興す此念佛に本付て招提寺の圓覺上人弘安の比嵯峨壬生に始らるゝ也と云々山門横川記云釋定覺攻田氏肥之後州之人也居㆓台嶺㆒三十年源信之徒行㆓止觀妙理㆒雖㆑然常修㆓金剛

密宗禪門等一矣寛仁之始爲二法界四生一音亂名號大念佛開二發三所一焉破滅之後乃明鏡律師如輪繼レ之故以レ覺爲二念佛始祖一矣

南無阿彌陀佛　名義集云梵音阿彌陀淸淨平等覺經翻二無量淸淨佛一無量壽經翻二無量壽佛一稱讚淨土經云其中世尊名二無量壽及無量光一矣　止觀曰若唱二彌陀一即是唱二十方佛一功德正等但專以二彌陀一爲二法門主一矣南無の字義は實盛に注す

彌陀賴む人は雨夜の月なれや雲晴ね共西に社ゆけ　此歌は玉葉集釋敎の部に入詞書云（西行法師）眞如堂にまうでゝ超世の悲願のたのもしき事を思ひなから我身の業障おもき事をおそれ思ひてまとろみて侍ける夢にけたかき御聲にてつけさせ給ひけるとなん云々　或云山門常行堂の本尊に玄給はんとて慈覺大師一刀三禮に作り給ふ阿彌陀西行夢に告させ給ふ歌也今眞如堂の如來是也彼緣起に雨夜の星なれやと有玉葉集えらべる時月なれやと直し入と云々

あみたぶやなまうだと　なまうだとはなむあみだ也なまうは南無なりだはあみたの上略也　釋氏要覽曰南無或云二那摩一或曩謨皆梵音訛也矣　曩（ナーウ）謨は東寺にはなうまくとよみ山門にはなもとゝなふる也止觀九曰一稱二南謨一燒二一捻香一奉レ獻二一華一如レ是小行必得二作佛一矣

これかや春の物狂　春は陽氣につれて心もうきたち物くるひのやうになるとなり　庭訓往來云諸家之狂仁如レ雲似レ霞遠所之花者乘物僮僕難二合期一上下略 といへるに等し

亂れ心が戀種の力車に七車つむ共つきし　詞林採葉云戀草は草には非ず戀の數也種也惣而思ふ事の數をよめり云々　力車とは物をあまたつみてひく車也七車とは七つに不レ限只多き心也（萬葉）戀種を力車に七車つみて戀らく我心から（廣河女王）

朧月のうす曇り　朧月はおぼろ月也　韻瑞云朧月出貌又ほのか共訓ず

猶三界の首かせかや　涅槃經曰居家如二牢獄一妻子如二枷（カサ）鎖一財物如二重擔一親戚如二怨（ガン）家一矣佛本行經曰愚癡之被二其纏縛一如三犬著レ枷不レ得二自在一矣三界は景淸に注す

牛（い）車のとことはにいつくをさしてひかるらん

牛の車或は小車の牛とつゝけたるは世にくるしめる事の枕詞也　車に床と云あり又とこしなへの心をいひかけたり　經律異相云天竺の女人提葷が身を燒て天に生せんとせしに辨才法師が見て汝身を燒共いかでか罪ほろびん牛が車を苦しひ車をくだく共又新に車をかくるがごとく罪のほろびぬ間は盆なしと取意（月淸）道の邊に過ける牛の跡みれは心のつみもたくひ有ける

荊棘（ヲドロ）は山姑に注す烏帽子は卒都婆小町に注す

又眉根くろき亂墨　黛（マユズミ）のくろく墨みたれたる也

うつし心か村鳥うかれと人はそひもせで　現心（ウツシコヽロ）はうつゝ心也　萬葉に現心と書日本紀に現人と書葵巻云身を捨てやいかにせんとうつし心ならず覺え給ふ折々もあれはと云々〇（古）いて人はことのみそよき月草のうつし心は色ことにして　私云うつゝと云は本性なる心を云現心なくうつゝなくなと云時は本性なきを云也此謠にうつし心と計いへるはよろしからす世にうつゝと云詞を夢のやうに心うるはあやまり也　村鳥うかれと人はとつゝけたるはうかれ鳥をいひかけたり蟬丸に注す

南無や大聖釋迦如來我子にあはせ狂氣をもとゝめ安穩に守らせ給ひ候へ　法華譬諭品曰是時長者見諸子等安穩得出矣大聖者造立形像福報經曰佛者大聖人爲衆生說法矣妙經句解曰三乘所證名小聖人如來圓極名爲大聖矣釋迦如來は奥に記す

奈良の都　玉葛に注す

妻には死して別れ　女の詞に夫を指て妻には死して別れといへり苦しからす柏崎に注す

誠信心私なくは　涅槃經曰如來佛性者名大信心矣華嚴經賢首品曰信爲道元功德母長養一切諸善法斷除疑網出愛流開示涅槃無上道矣摩訶經曰無信人者如朽木不榮不行佛法者如枯木都花不開無信心者如破器受物矣

忝も此御佛と羅睺爲長子と說給へは　此御佛とは嵯峨の釋迦如來を指ていへり羅睺は釋尊悉達太子といひし時の子也母を耶輸陀羅と號す　授學無學人記品曰我爲太子時羅睺爲長子我今成佛道受法爲法子矣文句曰淨梵王子佛父摩耶子佛母羅睺子佛子也但十宛十非千佛入界出人間爲父母而生無左非眞佛矣名義集云羅睺羅梵語也什曰

阿脩羅食レ月時名二羅睺羅一秦言二覆障一謂レ障二月明一也羅睺羅六年處二母胎一所二覆障一故因以爲レ名西域記云羅怙羅舊曰二羅睺羅一又曰二羅云一皆訛略也此云二執日一矣　長子とは家督をゆづり或は總領たるを云也說文曰兄長也矣

我子にあふむの袖なれや　親子逢とつゝけたり鸚鵡の袖とは衣裳に鸚鵡の形を繡付るを云也　遊仙窟云判二緋裙腰鸚鵡子一矣　あふむの鳥はあふむ小町に注す

午羊徑衡に歸り鳥雀枝の深きにあつまる　杜子美詩云牛羊歸二徑險一鳥雀聚二枝深一全集言は牛羊は日くれ我住家を忘れずさかしき道に歸り鳥雀も枝深き己がねぐらに歸り集ると云義也私云母の子を尋ぬるといへる諷詞にて此詩を爰に出したり本文とは少し相違あり

雲水の身　殺生石に注す

比目の枕しき波の　比目とは目をならぶと讀(ヨメ)ば枕をならぶると云詞をうけて比目の枕とはつゝけたり爾雅註疏卷六釋地篇五方部云東方有二比目魚一焉不レ比不レ行其名謂二之鰈一疏言東方水中有レ魚其形狀似二牛脾一鱗細紫黑色一眼兩片相合兩目相比乃得レ行故曰二比目魚一云二不レ比不レ行者比合也言一片不レ能レ行須二兩片相合乃行一故云二不レ比不レ行也云二其名謂二之鰈一者言鰈爲二比目之名一也一名比目魚一名鰈郭云江東又呼爲二王餘魚一矣

奈良坂のこのてかしはのふた面とにもかくにも佞人(ネジケヒト)の　萬葉集第十六博士消奈(セナ)行文太夫誘二佞人一歌一首「奈良山の兒手柏(コノテガシハ)の二面にとにもかくにも佞人かも　詞林采葉云この手柏は柏のもえ出る時は兒の手のごとくにして文の有を云也面もうらも同し樣也ねぢけ人とはうらゝかならぬ人の心を云也云々歌林良材云佞人(ネヂケヒト)とは口きゝがましき人を云然れは柏の葉の風にふかれておもて裏の見ゆるにたとへたる也云々宗祇云手のうらをかへすと云事也云々　私云この手柏は異說多し或は手まりの花を云共又女郎花を云共いへり　詞林采葉云範永朝臣大和守にて下りけるに奈良坂のほとりにて白き花のいみしく咲たるをもて行合たりけるを國の民の中にともしたりけるが是を見てゆゝしく咲たるこのてかしは哉と云けるを聞て馬をとゝめていか

に云ぞと問ければ此咲たる花は犬とち共申物也そ
れを此國にはこの手柏と申也と云ければ範永朝臣
めでゝ其男に物など取せて故を聞ければ彼花の葉
兒の手のやうなれば申也といへり云々　佞人は說
文曰佞巧讇高材也双ニ女信省一徐曰女子之信近ニ於
佞一也矣　韻會曰僞善曰レ佞矣　軍林寶鑑曰佞人
內則賢人外退賢人內則佞人外退佞人不レ退則國裂
人二而敵奮レ威賢人不レ退則國全人一而奮レ威矣
なき跡の泪こそ袖のゑからみ隙なきに　ゑからみ
は柵と書紅葉狩に注す○思ふより泪の袖のゑから
みは風のかけてや露こほるらん 草根
思ひ重なる年波の　○ゑのへ共立もかへらぬいに
しへをいとゝ重て暮る年波爲家 家
流るゝ月の影おしき　○更にけり伏見の澤にうつ
ろひて流るゝ月の宇治の川風爲尹 千首
西の大寺の柳陰みとり子の行衛白露の　柳のみと
りといひかけたり西の大寺は南部西大寺也龍田に
注す○さりともと西の大寺賴む哉そなたの願ひと 夫木
もしからしを殷富門院古今集春上云西大寺のほとり
の柳をよめる僧正遍照「あさ綠糸よりかけて白露
を玉にもぬける春の柳か稱名院殿大和紀行云西大
寺にまいりかの遍照の糸よりかけてと讀る柳村々
見えわたり上下略　或云西大寺の柳の跡は寺より東
ほそき流れのほとりといひつたふ也云々　童蒙抄
云小兒をみとり子と云事は兒七八歲に至までは春
の生盆とす靑きは是春の色也此故におさなき兒の
衣の色とす童子をは靑衣と唐の文にも作れるは是
也と云々　」
一かたならぬ思ひ草　萬葉仙覺抄云思ひ草は瞿麥
を云又茅を云共あれど是も戀種のたくひにて思ひ
の數思ひの種なるべし云々一說思ひ草は龍膽を云
と云々　和歌世俗詞云思ひ草はなてしこと云一說
たゝ心の思ひを用るの說也云々○道の邊の尾花か 萬
もとの思草今更何の物か思はん　歌林良材云此歌
の思草は思の草には非す只草を云成へし云々
あをによし奈良の都を立出て　あをによしとは奈
良と云ん爲の枕詞也袖中抄云淸輔云あをによしな
らとは物の色を云には丹靑を旨とする也されは畫
圖をも色々あれど丹靑と云也黃色は丹が色の薄也

黒紫は青が色のこき也而平城(ナラ)の新都のめてたきをほむとてあをによしならとは云也云々萬葉仙覺抄云青丹吉ならとつゝくるは神に手向る幣の中に青和幣白和幣と云ふ事有あをにと云はあをにきてをいへる詞也ならとつくる事はかのにきてはならならとまとはるものなれはあをによしならとはいへるなり然るに楢の木は若枝若葉何れの木よりしなやかにておのつから風吹来れはまとはれやすけれは青によしならとはよそへつゝくる也云々新勅○青によしならの都の黒木もて作れる宿はをれとあかぬかも

歸り三笠山佐保の川をうち渡りて　　三笠山は春日山を云也春日龍神に注す　佐保川は奈良の今新在家町の石橋を云也源は春日山より出て西は眉間寺(カンジ)の南のふもとを流れ行也但此説あやまりといへり或説に轉害町の北般若寺の下に橋あり此川を云也云々新拾○三笠山麓をめくるさほ川のさして祈し身を頼む哉長能

山城に井手の里玉水は名のみして影うつす面かけ

山城國は通小町に注す井手の里は釆女に記す　山城と云は長池玉水都て此邊を山背と云也山城國の内にて又此あたりを山城とは云也此類國々にあり河内國の内に河内と云所有和泉國に和泉と云有伊賀に伊賀あり安房に安房あり餘は畧レ之影うつす面かけとは母の子を尋ね給ふに身もやつれあさましく成給ふをいへり　又云昔橘諸兄公井提寺の四面の廻廊のめくりに山吹を殖廊の内に水を湛て花さかせて水にうつして見るへきやうをかまへたる我一期の後我を思ひ出さは此水へ来て見よ影をうつして見せんといへり和歌色葉及ヒ惟清抄文略　是等の詞を取て影うつす面かけとはつゝけたり委く釆女に注す井手の玉水は相樂郡也玉水町の入口東の方に古井有是を玉水といへ共誠は別に有井手の内水無と云所に玉井寺とて有堂の前に古池有是を玉の井と云也玉水玉の井同事也袖中抄云井ての玉水とは山城よりならへ行道にゐでの清水とてめてたき水の道つらにある也ゆきゝの人是を手にむすひつゝ飲む此水をは玉の井と云それを井手の玉水とは云歟云々○うかりける心をしらて山城の井ての玉水何頼みけん前左大臣

かくて月日をおくる身の羊のあゆみひまの駒　摩耶經偈曰譬如栴陀羅驅羊就屠處歩々近死地人命亦如是矣又說法句經及心地觀經等屠處といひて畜を屠殺す處へ羊を引て行に一足々々が皆死する地にちかづくことく世の無常人の命も又々かくのことく也栴陀羅梵語也漢語云屠者畜を殺す其所作をなす者を云也日本の穢多の類也屠所は畜をきる所也說文曰屠刳也矣廣韻曰屠殺也裂也矣隙の駒は史記列傳魏豹曰人生一世間如白駒過隙耳索隱曰莊子云無異騏驥之馳過隙則謂馬也小顏云白駒謂日影也隙壁隙也以言速疾若日影過壁隙也矣是も無常の喩也譬は日月の早く過るは馬の早く行を物の透間より見るがごとく程なきをいへり〇新勅程もなくひま行駒を見ても猶あはれ羊の歩をそ思ふ　源有房

都の西と聞へつる嵯峨野の寺に參りつゝ　花鳥餘情云棲霞觀は左大臣融公山莊也後に寺に成て栖霞寺と云今淸凉寺の東にある阿彌陀堂是也淸凉寺は其西にある寺也法橋上人奝然申請て釋迦堂を建立云々小右記云奝然永延元年八月十八日奏請以愛岩山號五臺山建一伽藍號大淸凉寺安白旃檀釋迦像未遂夙心長和五年逝高弟盛算法師重奏以棲霞寺內釋迦堂號淸凉寺勅許矣　扶桑略記云寬和三年二月十一日入唐僧奝然歸朝摺本一切經論幷靈山第三傳釋迦等身立像十六羅漢繪像持來矣

花のうき木の龜山や　苔龜の浮木をいへり實盛に注す龜山は山城葛野郡也天龍寺の上嵐山の北にあたる也號靈龜山又龜の尾山共云也　文粹云前中書王文曰見此山形以龜爲躰矣　顯注密勘云かめのお山は龜山也龜の尾に似たれば龜のお山と云べきを略して龜山と云也云々〇新拾かめ山の岑立こへて見渡せは淸瀧川をおとす筏士　後嵯峨院

雲に流るゝ大井川　雲に流るゝとは此邊の山の景氣をいへり又花の浮木の流るゝにも云かけたり大井川は源出自大悲山北丹波の關保津鳥羽龜山を流れて南の方さかの大井川に入也昔此川に始て井堰を置是井堰の初め也　類聚國史に大堰と書〇玉葉五月雨に浮木流れて大井川くだす筏の數そそひぬる　公雄

誠に浮世のさがなれや　さかは惡と書佛原に注す
新古○今はさは浮世のさがの野邊を社露消果し跡と忍
ばめ俊成女
盛り過行山櫻　草根○ちらぬさも枝に青葉の數そひて
盛り過行花の色哉
嵐の風松の尾　嵐山をいはんとて嵐の風といへり
松の尾は神社也融に注す嵐山は西行櫻に注す
小倉の里の夕霞　小倉の里は上さが二尊院の後に
有小倉山は大井川の東龜山につゝく也定家卿の舊
跡は常寂光寺の前に有小倉山庄の跡には小き社を
建たり新後拾○住うさにしばし小倉の宿かへて見るにも
霞む春の夜の月公雄
立こそつゝけ小忌の袖　松の尾の社人など袖を連
ねて釋迦堂へ參詣する體を云り小忌は高砂に注す
二佛の中間　卒都婆小町に注す○とく生れさら
すはしはしやすらはて二佛の中にあふそ悲しき
性空上人
毘首羯磨が作りし赤栴檀の尊容やかて神力を現して
此尊容に付て三說あり　造像功德經の說には上界

の帝釋天王釋尊を請し奉りしに依て佛忉利天に登
り一夏三月の間御母摩耶の爲に說法し給ふ時に下
界の優塡王佛の御留守をかなしみて國中の工匠に
如來の形像を作らしめんと有毘首羯磨天降て香木
を撰て佛像を作る手斧の音高くして忉利說法の會
座に聞ゆと云々　觀佛三昧經の說には三月安居の
內金を以て佛像を鑄時に佛天より歸り此金佛に向
て我入滅の後汝佛事をなすへしと宣ふ此金佛のは
たらき生て居給ふ如來と少しもかはる事なしと云
々佛國記には佛忉利天に登り母摩耶の爲に九十日
說法し給へるを波斯匿王佛を拜んと思召て牛頭栴
檀にて佛像を作らしむと云々　右三說同じからず
毘首羯磨は正理論云昔云　毘濕縛羯磨此云種々工
業西土工巧者多祭此天矣　赤栴檀は蟬丸に注す
天竺震旦我朝三國に渡り有難も此寺に現じ給へり
優塡王の栴檀の像は後漢明帝永平年中に漢土に渡
るといへり或は鳩摩羅炎三藏彼佛像を負奉りて龜
玆國等の四國を經るに彼國にて死す其子羅什三藏
又此像を負て漢土に渡しける也或は龜玆國の四國
の王次第に本佛を留て寫し渡し奉る共云り　法苑

珠林云漢明帝時天竺法蘭師將二書釋迦倚像一是優田
王栴檀像師第四作也矣猶異說多し　日本傳來之事
は人皇六十四代圓融院御宇天元五年壬午東大寺の
奝然上人蒙二宣旨一入唐して太宗大王にまみゆそれ
より淮南の楊州開元寺に至て件の佛の事を問佛閣
有て靈佛なし住持の僧に問へは數百年以前より帝
に有と答上皇滋福殿に安置して每日有二禮拜供養一
明年正月蒙二宣旨一拜二佛像一即願ひ奉りて內裏西華
門の外座禪院にして博士張榮をやとひて共に寫し
きさむ佛の夢想有て新佛を殘し本佛をいさなひ奉
りて歸朝す于レ時一條院御宇永延元年丁亥二月十
一日に入洛す先佛を蓮臺寺に安置す其後正曆二年
に嵯峨に移します云々（塵囊抄文略）　天竺は梵語名二印度一
唐言レ月名義集云五印度之境周九萬餘里三垂二大
海一北背二雪山一北廣南狹形如二半月一劃レ野區分七十餘
國時特暑熱地多泉濕成光子曰中天竺東至二震旦一五
萬八千里南至二金地國一西至二阿拘遮國一北至二小香山
阿耨達一亦各五萬八千里矣　震旦は梵語也　名義
集云或云二眞丹栴丹一琳法師云東方屬レ震是日出之
方故云二震旦一樓炭（ロダン）經曰葱河以東名爲二震旦一以三日

初出二耀於東隅一故得レ名也矣
安居の御法と申も御母摩耶夫人の孝養の爲なれば
釋尊は御母摩耶の孝行の爲に忉利天に登り一夏三
月の間說法し給ふ其時世尊の云前生の母今帝釋の
后なる事を文殊をして告させ給へ共后御請なしさ
て告云我子の悉達ならば此湩出て御口に入へしと
宣ふ其儘雨の乳流れ出て白糸をはへたる如にして
如來の御口にいれり摩耶の悅び身にあまりて母子
の對面有けり（見二釋迦譜及摩訶摩耶夫人記一）　安居は南山云形心攝レ
靜曰レ安要期住レ此曰レ居矣　名義集云夏有二三時一初
四月十六日是前安居十七日至二五月十五日一名二中
安居一五月十六日名二後安居一矣摩耶夫人は伽毘羅
衛國善覺長者女也春日龍神に注す　孝養とは孝行
に保養するを云　觀經曰孝養父母矣　善導玄義云
佛尙自收レ恩孝二養父母一矣
南無釋迦牟尼佛　名義集云釋迦牟尼梵語摭華云
此云二能仁寂默一寂默故不レ住二生死一能仁故不レ住二
涅槃一本起經曰翻二釋迦一爲二能仁一本行經譯二牟尼一
爲二寂默一能仁是姓寂默是字姓從二慈悲利レ物字取一
智惠冥レ理以レ利レ物故不レ住二涅槃一以レ冥レ理故不レ

住ニ生死ニ矣　智旭遺教經解曰能仁則具ニ大慈悲ニ不レ住ニ無爲ニ寂默則具ニ大智惠ニ不レ住ニ有爲ニ矣

優曇花の花待えたり　實盛に注す

かの御本尊はもとよりも衆生の爲の父なれは　御本尊とは嵯峨の釋迦を指て云也法花化城喩品曰今佛出ニ於世ニ乃至爲ニ衆生之父ニ矣

母もろ共にめくりあふ法の力そ有難き　法花藥王品曰如ニ子得レ母矣　阿含經曰諸佛慈悲爲レ力矣

㊄たらちねを誠の道にすゝめ入てこはいか計嬉しかるらん　祝部成仲　續後拾

朝日もみつの車路を都に歸る嬉しさよ　みつの車とつゝけたるは法花譬喩品に羊鹿牛車の三車をいへり軒端梅に注す　朝日もみつといへるは日の滿とつゝけたり朝日の滿るは四ッ時を云成へし　車路はさがの車路をいへり材木町より東かたひらが辻を通り太秦と常盤との間を行て又北へ三町計あがりて妙心寺の前を通りそれより下立賣通へ出る也今是をさがの車道と云也

柏崎

越後國柏崎は米山の禁也海邊なり昔柏崎殿といひし人知行し給ひし所なり柏崎殿の系圖未レ考今其所に寺あり號ニ香積寺ニ本尊藥師也禪宗也前に小橋ありこうろぎの橋といへり　堯惠北國記行云柏崎といへる所近夕こえ侍るに村雨打そゝきぬ一樹もる露はおけとも柏崎下葉に遠き秋の村雨

夢路もそひて古里に歸るや現なるらん　夢の世を經る身の今古里に歸るも現そと也古里に經と云詞をいひかけたり

越後國は山姥に注す鎌倉は鵜飼に注す文は湯谷に記す

雪の下　相州鶴が岡の御下の在所と云也　宗長紀行云鶴が岡なぎさの松雪の下のいらかは誠に石清水にも立まさるらんとおほへ侍ると云々　又越後に同名有

山の中をも過行は　山の内は鶴岡の西也粟船本郷倉田戸塚の邊までを山の內の莊なり仁治元年十月十九日前武州の泰時御沙汰として山內の道を作ら

る又昔首藤刑部丞俊通始而山内に居宅す故に山内を家號とす見二首藤系圖一東は建長寺西は圓覺寺此間を山の内と云也

碓氷の峠打過て　碓日嶺は坂西より坂東に入る境にある山也信濃と上野の堺也さのみ險難にはあらす大和本紀云日本武尊東夷を隨て後信濃國神御坂を越て都へ御上有し時中略彼橘姫沈み給ひし東海の方を見やり蹲居て嘆き給ふ處を蹲居の峠と號すと云々万ひなくもり笛吹の坂を越しだに妹か戀しく忘れえめかも

さめ〴〵と泣は藤戸に注す見みえんは千壽に注す信濃國は業平に注す

命つれなく候はゝ　伊物眞字本に顏強と書　通鑑四十九卷曰強面猶レ言二顏厚一矣

信濃國善光寺　號二阿彌陀院百濟寺一今昔物語云信濃國伊奈郡宇沼村に建立す推古天皇十年壬戌年草創其後當國水内郡芋井郷に移給はんとの勅有て皇極天皇二年壬卯善光寺造營成と云々文略　帝王編年記云欽明天皇十三年壬申十月百濟國聖明王渡二釋迦金銅像一是則日本國佛法最初也同年又同王獻二阿彌陀佛像長一尺五寸觀音勢至像長一尺此像信濃國善光寺佛是也大臣大連奏云和國者開闢已來以レ神爲レ宗今改二拜蕃神一臣恐國神之怒即以二佛像一流二弃難波堀江一放レ火燒レ寺於レ是天無レ雲雨降忽火災自レ天降燒二內裏一矣當寺緣起云往昔百濟國より日本攝州難波浦に自然と來現まし〳〵けるを信濃國本田善光取あげ負奉り我國へ歸り寺を建て安置し我名を寺號として善光寺と云也文略　玉葉集に此御佛の御歌に「伊勢の海清き渚はさもあらはあれ我はにこれる水にやとらん

妻には死して別れ　是は柏崎殿の御だい所の詞也柏崎殿の果給ふ事を妻には死して別れといへり女の方より男を妻といふ也古來より其例多し古今集雅抄云妻は夫妻にわたると云々　伊勢武藏野はけふはなやきそわか草のつまもこもれり我もこもれり伊勢物語集註云此歌の妻は業平を指て云也男を女は妻と云男を妻と云證歌は萬葉三山上憶良か歌に「とをつ人松浦小夜姫妻こひにひれ振しよりおふる山の名此歌は日本紀云三十代欽明天皇の時大伴佐提彦遣唐使たる時に其妻松浦姫別れをしたひ濟

行舟を山にのほりて見おくりし是より比禮振山と云也又後撰に在原秀方が娘の右近が人のおとこをあひしりてつかはす「唐衣かけてたのまぬ時そなき人の妻とは思ふ物から　又和泉式部歌に「今朝はしも思はん人は問てまし妻なき閨のうへはいかにと已上　私云右いつれも男を指て妻とよめる也

白糸の亂れ心やくるふらん　三井寺に注す

實や人の身のあたなりけりと誰かいひけん空事や又思ひには死なれさりけりとよみしも理りや　本歌未レ考○雪玉思ひには死なれぬとなと歎けんうきためにとてなからふる身を

うき身は何とならのはの柏崎をは狂ひいで越後の國府につきしかは　栢は柏也依てならの葉の柏崎とつゝけたり國府は頸城郡にあり國司のある所を國府と云也こふ共となふる也又府中共云大學序に國都と云是也越後の柏崎より善光寺へ參るには同國國府へ行て國府より信濃の善光寺へ參る也柏崎より國府まて十二里國府より善光寺へ十二里也

いつ迄草のいつまてと　班女に注す○壁におふる堀川院百首いつ迄草のいつまてかゝれすとふべきしのはらの里

松風遠くさひしきは常盤の里の夕そや　松風に常盤をむすひたり

子ゆへに身をこかしたは野邊のきしまの里とかや　野邊の雉子とつゝけたり鳥類の子を思ふ事三井寺に注す

ふれ共つもらぬ淡雪の淺野　淡雪の淺きと云かけたり袖中抄云あは雪とはきえやすき雪也と云々日本紀に沫雪と書釋日本紀云其弱如二水沫一故云二沫雪一矣一説あは雪は春の雪といへり然れ共萬葉第八に「しはすにはあは雪ふるとしらぬかも梅の花咲つゝみてあらて　顯昭云あは雪は冬も春もよむへしと云々

桐の花咲井の上の山を東に見なして西に向へは善光寺　右常盤の里きしまの里淺野井の上いつれも國府より信濃へ越る間に有往て尋ぬへし國府より善光寺は坤にあたる也依て西に向へは善光寺とは云り　竇鞏(トウキャウ)詩に烏鵲(ウジャク)爭飛井上桐と作れり又李白詩に金井梧桐と有是等の詞にて桐の花咲井の上とつゞけたり　禮記云三月桐始華者也矣陶隱居本草注

云桐有二四種一青桐梧桐崗桐椅桐梧桐者色白有レ子者也椅桐者白桐也三月花紫亦堪レ作二琴瑟一者是也矣

極重悪人無他方便唯稱彌陀得生極樂　此文は往生要集及六道講式に出たり極重の悪人は他の方便なし唯彌陀をとなへて極樂に生ずる事を得ると訓讀する也彌陀の本願はかゝる悪人なり共念佛すれは極樂に往生すと云心也是觀經の説相也　壒嚢抄云後一條院御宇に出離疑なく往生指レ掌肝要の文を可三擇進一由諸宗に勅ある處に各同心にして此文を進ると云々文略

此善光寺の如來堂の内陣こそは極樂の九品上生の臺なるに女人の參るまじきとの御制戒とはそもされば如來の仰ありけるかよし人は何共いへ　女人は非器のものなれは御堂近く參る事如何と思へ共彌陀は女人悪人を深くあはれみ給ふ故に第十八の本願に十方衆生とちかひ又三十五願にも女人往生の願を迄ちかひ給ふからはよし人は何共いへくるしかるましとの事也九品上生とは極樂九品の内上品上生を云也觀經に説り

釋迦はやり彌陀は引導一筋に　善導大師觀經疏に二河白道と云事有南は火の河北は水の河各ひろさ百歩二河の中間に一つの白道あり闊さ四五寸計譬は人有て西に向て行とす時に群賊悪獣きそひ來て殺んとしけり忽に東の岸に人の勸むる聲有て曰仁者決定して此道を尋て行け若住らば即死せんと又西の岸に人有て喚言汝一心正念にして直に來れ我汝を護んと此言は衆生娑婆の火宅を出離して西方極樂に往生なさしめん事を譬ていへり彼東の岸に人の勸むる聲有てと云は釋迦已に滅し給ひてゟ由敎法有て佛道を尋べきに喩ふ又西の岸に人有て喚とは彌陀の本願に衆生を迎取らんとちかひ給ふに喩ふ是を此謠に釋迦は遣彌陀はみちひくとはいへり文略　新後撰（爰にやりかしこによはふ道はあれと我心より迷ふとを忘れ　順空上人

去レ此不レ遠は實盛に注す光明遍照十方は忠度に注す

此寺の常の燈かけ頼む　常の燈とは善光寺の常燈を云也當寺縁起云昔油の料盡て燈明を掲ざりしかは如來放二光明一照二家内一善光祈誓して云願は移二此光明一成二燈明香火一末代に傳へなば利益衆生の

結縁誠に功徳はかりかたしと申ければ光明則佛の御頂に歸り入給ひて亦眉間より放レ光香につき油にともりて照させ給ふ末代迄消る事なく不斷の光りとなりける云々文略

形見こそ今はあたなれは松風に注す後生善所は盛久に注す

弓は三ッ物とやらんを射そろへ　美人草云三ッ物とは流鏑馬笠掛犬追物之事也但近年流鏑馬まれなる間犬笠掛歩立をも云也又五物と云は流鏑馬笠懸小笠懸犬追物かちたちの事也云々　盛長私記云諏訪大夫盛澄云秀郷騎射傳云人王六十一代朱雀院御宇承平元年辛卯俵藤太秀郷日來射藝を嗜されは騎射の修練を世上に施さん事を思ひ上野國一宮の神事の時始て流鏑的を興行す馬場は二町或は三町其有に相隨ひ四年の如き的を五ヶ處に立て日無鏑を以て射的立の役人五人ありされは流鏑馬は秀郷を以て起本とす云々　島津周防守忠兼秘記云笠掛の始は右大將の御時にもろ〳〵の作物品々極られき中にも遠笠掛犬追物此御代より始也云々犬追物は殺生石に具に記す吉田流弓秘傳云三物を射そろゆるとはまきはらまとさし矢手前を是三ついそろゆるならは上々の射て也此上にてはいんかゆるしいたし可申也是を三物いそろゆると云也云々説多し尋ぬへし

歌連歌の道も達者成し上　歌道の起は蟻通及び關寺小町に記せり連歌の始は日本武尊東征し給ふ時兎玖波の句を詠吟あり是を連歌の始とする事新式其外家々の秘書に記せり是より伊勢物語にも見え拾遺集にも撰ひ入られたり後鳥羽院の御代に隆レ之然れ共昔はたヽ一結五句十句云捨計にて百韻千句など云事はなかりし也　日本紀云景行天皇御宇日本武尊東征給時自日高見國還西南方歷常陸至甲斐國居于酒折宮時擧燭而進食是夜以レ歌之問侍者曰「珥比麼利菟玖波塢須擬氐異玖用加禰菟流諸侍者不能答言時有秉燭者以續王歌之末而歌曰「伽餓奈倍氐用珥波虛々能用比珥波苦塢伽塢即美秉燭人之聰而敦賞上下略　竹林抄序云夫連歌は日本武尊の筑波の言葉にはしまりて花山の法皇の殘れるを拾ふ和歌集に入られしより以來基俊俊頼も此道を翫ひ定家家隆も彼風を好たふによ

りて芦原の世々に傳はりて柳の糸のより〳〵に絶
すそ有ける云々菟玖波集序云連歌はつゝまやかに
旨廣くして文の心にわたり歌の樣に叶へり日本武
尊は夷の亂れを和げて筑波根の事忘けきわさを顯
はし云々
よろひ直垂取出し　鎧と直垂と二つを云に非す鎧
の下にきる直垂をよろひびたゝれと云也ひたゝれ
のひの字濁りてとなふる也男女裝束記云鎧直垂と
云は當時着二用之一直垂也袖與レ袴之裾をくゝりて
其上に鎧を着用する也直垂は錦金襴等を以相調へ
先規着レ之是はすそくゝり袖くゝり共に有レ之云々
直垂に屋島に注す
へりぬり取て打かつき　或云緣塗は烏帽子之事也
昔烏帽子綃にてこしらへて其緣をぬりたる故に緣
塗ともいへり云々　長門本平家物語云惟能は緣塗
の烏帽子に引柿の直垂打掛て云々
夫一念稱名の聲の中には攝取の光明をまち聖衆來迎
の雲の上には　一念稱名とは彌陀の名號を一返と
なふる事也觀經疏云或一念成就即得二往生一矣攝取
の光明は是も觀經の文也聖衆來迎とは二十五の菩
薩其外無數のほさつの來り迎ふ也謠の心大原御幸
に注す
白虹地にみちてつらなれり　說文曰虹名二螮蝀(テイトウ)一狀
似レ蟲矣釋名曰虹攻也純陽攻レ陰之氣矣　尙書考靈曜
鄭玄註曰日旁氣白者爲レ虹矣　蔡邕月令章句曰虹
以二日西一見二於東方一矣　周書異記曰周穆王四位五
十二年壬申二月十五日中略天陰雲黑西方有二白虹十
二道一南北通貫連夜不レ滅穆王問二太史扈多一曰何徵
也扈多對云西方有二大聖人一滅度遶相現耳矣　文選
曰昔者荊軻慕二燕丹之義一白虹貫レ日太子畏レ之矣
源氏賢木卷云白虹日をつらぬけり太子おぢたりと
云々
熟(ツラ〳〵)世間の幻相を觀ずるに飛花落葉の風の前には有爲
轉變をさとり　是二乘の悟也飛花落葉とは春の飛
花秋の落葉是無常觀の境也支佛獨覺根性の國王無
佛世に出て飛花落葉を見て忽に厭離の心おこり悟
を開く事大論に詳也榮花物語本ノ雫(シヅク)卷云春の花のち
るを見て無常をさとり秋の木の葉のおつるを見て
うれへと云々　寄花述懷和歌之序云正徹　夫飛花落
葉の春秋は盛者必衰の此世を觀じ云々　新撰朗詠

集云英明無常詩　昨日開來今落去因レ花多覺二世無
常一矣熟の字は安宅に注す
電光石火の影のうちには生死の去來を見る事　寶
王論云人生在レ世如二石火電光一矣　淮南子曰人生二
天地之間一如二擊レ石見レ火電光過レ隙矣　金剛經曰
一切有爲法如二夢幻泡影一如レ露亦如レ電矣　白氏文
集云蝸牛角上爭二何事一石火光中寄二此身一矣
そひ果もせぬ道芝の露の浮身の置所誰にとはまし旅
の道狹衣　〇續古待つる草の原さへ霜枯て誰にとはまし道
芝の露い消ぬへき露の浮身の置所いつれの野邊の
草葉成らん殷富門院大輔
悲しみの泪眼に遮り　二人比丘尼云いやましのお
もひくさやるかたなくかなしひの泪まなこにさへ
きり云々
思ひの煙胸にみつ　おもひのひを火にいひかけた
り〇草根下たえすもゆる思ひも晴やらす絶ぬ煙や胸に
みつらん
三界に流轉して　惠琳云流轉梵言二僧娑洛一此云二
流轉一謂於二六趣一循環往來不レ絶矣　悲華經曰流二
轉三界中一恩愛不レ能レ斷矣　往生禮讚云信下知自身
是具足煩惱之凡夫善根薄少流二轉三界一不上レ出二火
宅一矣
三界は景清に注す
眞如平等の臺に至らんとだにも歎かすして煩惱のき
つなに結ぼゝれぬるぞ悲しき　本心本覺の妙理を
あきらめたらは其悟りの臺に至るへし然るに其事
を歎かすして煩惱のきづなにまとはるゝ事のかな
しきと也眞如は江口に注す
罪障の山高く生死の海深し　容觀二十二云罪障山
高以レ刀不レ能レ斬煩惱海深以レ手不レ可レ測矣　惠心
十戒卑下心云邪見山高生死海深無レ可レ出レ道　上下
略　往生禮讚初夜偈云煩惱深無レ底生死海無レ邊度レ
苦船未レ立下略　弘決云海喩二生死無邊一矣
身三口四意三の十の道　東岸居士に注す
されは初の御法にも三界一心なり心外無別法心佛及
衆生と聞時は是三無差別何うたかひの有へきや
華嚴經曰三界唯一心々外無別法心佛及衆生是三無
差別矣　此文の意舊抄に委く記せり略レ之　初の御
法とは花嚴を云也世尊一代聖教の內花嚴を最初に

説給ふ故に之かいふ也
己身の彌陀如來唯心の淨土成へくは　かやうにつ
ゝきたる文は三部經等にも是なし觀經に去此不遠
と云文にもとつきてかくいへる歟　寶鑑云十
界十如三種世間互具互顯則安養國土捨レ此何求非二
但淨土唯心一畫地獄亦唯心也矣此事實盛にも注
す
此寺の御池の蓮　善光寺の御池也今はなし
唯願はくは影頼む聲を力の助け船　聲を力とは他
力本願也　清淨覺經曰阿彌陀佛與二觀世音大勢至一
乘二大願船一汎二生死海一就二此娑婆世界一呼二喚衆生一
令下上二大願船一送着中西方上矣
金の岸に至るへし　極樂淨土は黄金を以て地とし
給也彌陀經曰池底純以二金沙一布レ池矣　新古今集釋
教俊成卿「古への尾上の鐘に似たる哉岸うつ波の
曉の聲と云歌の詞書に云曉至て浪の聲金の岸によ
する程と云々○夫澄まさる池の心にねかわれて金の
岸に浪そよりくる
抑樂を極むなる教へあまたに生れ行道樣々の品なれ
や　樂を極むなるとは極樂と云事なりおしへあま
たに生れ行道樣々の品とは觀經の九品の修行の道
さま〳〵ある事を云也抑の字は高砂に注す
寶の池の水　觀無量壽經曰隨二世尊後一即得二往生一
七寶池中一矣　又曰乘二寶蓮華一隨二化佛後一生二寶池
中一矣○草庵昔より玉の泉の流こそつゐに寶の池にい
るなれ
功德池の濱の眞砂　彌陀經曰極樂國土有二七寶池一
八功德水充二滿其中一矣　八功德水とは一澄淨水清
くすめり二淸冷其水ひやゝかにしてぬるき事なし
三甘美水あまし四輕軟水かろく谷迄も登り葉をあ
らひすゝきて本のことく池に有也五潤澤よく物を
するほす也六安和水おほくして物を損せす七除飢
渴かはきをやめ飢をたすかる八長養諸根のみ終れ
ば定て諸根四大をよく養ふ　已上稱讚淨土經取意
○月清終にわかねかふ檀は極樂の八功德池のはちすな
りけり
數々玉の床臺も品々の樂を極め　大本曰講堂精舍
宮殿樓觀皆七寶莊嚴自然化成矣無量壽如來會曰彼
等衆生處二華胎中一猶如二園苑宮殿之相一矣
量なき命の佛成へし　無量壽佛を云也實盛に注す

（續撰今）〇たのもしな此世つきても量なき命ある國にうつる行末　貞空

若我成佛十方の世界なるへし　無量壽經三十五願曰設我得佛十方無量不可思議諸佛世界其有女人聞我名字歡喜信樂發菩提心厭惡女身壽終之後復爲女像者不取正覺矣　是女人往生の願也又十八願に十方衆生と誓ふ是女人は十方衆生の外ならん哉又善導釋に若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺ともいへり此謡に若我成佛とつゝけたるは善導の釋によれり

本願あやまり給はすは今の我らかねがはしき　無量壽經曰如是大願誠諦不虛超出世間矣善導釋云當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生矣　是等本願あやまりなきの心也

白雲のたなひく山や西の空の　（新古）〇爰にありてつくしやいつこ白雲のたなひく山や西に有らん　大納言旅人

曉かけて燈のよき光そと仰くなりや　善光寺の如來を頼みたてまつる心なり

見しにもあらぬ面わすれ　万葉集に面忘れいかなる人のするものそと云々　俗に貌を見わすれたるといふに同し（後拾）〇契り有て此世に又は生る共面かはりて見もや忘れん　實方

その原やふせやにおふる箒木のありとは見えてあはぬ君かな　新古今集戀部に是則歌也詞書云平定文歌合にと云々委しく墨田川に注す

蟬丸

蟬丸は宇多天皇の御子式部卿敦實親王の雜色也云々又蟬丸盲目にては非すと云或説云世の人盲目と云は誤りなり後撰集に是やこのと云歌の詞書に相坂の關にてゆきゝの人を見てと有盲目ならは見る事有べからずと云々此説に依て蟬丸盲目にて非ずと云事諸抄に記せり但一條禪閤東齋隨筆に蟬丸は式部卿敦實親王の雜色也盲目にて琵琶を得たりと有又今昔物語に蟬丸賤き者也といへ共年來宮の彈給ひける琵琶を聞て上手には成にけりそれが盲に成にけれは會坂には居なりけり是より後盲目の琵琶は世に始ると云々　私云後撰集詞書にゆきゝの人を見てといへるみるの字に覩見の二ツあり見の

字は眼を以て見る也觀の字は心に觀念してみるの心也蟬丸盲目にして會坂にすみ食を往來の人に乞より〳〵絃歌してたのしみ往來の人の音なひを聞て會者定離の理を觀念しけるをゆきゝの人を見てと云歟今昔物語廿四云今は昔源博雅朝臣と云人有延喜の御子兵部卿親王の（一説光明）子也常に琵琶を善す村上の御時殿上人にて有ける其比逢坂の關に盲菴造て住けるあり名を云（二）蟬丸（一）蟬丸は宇多法皇の御子式部卿敦實の雜色也此御子管絃の長たる故蟬丸びはなん微妙に彈ける博雅此道を好み蟬丸が菴巽樣なれは不（レ）行して京に來て住かしと云やりける盲是を聞て一世中はとてもかくても過してんみやもわらやも果しなけれはとよみけれは博雅猶心にくゝ思ひけり琵琶に流泉啄木と云曲あり此盲のみ知たる也是を習えんと其後三年の間夜々に會坂の菴に行て今やひくらんと竊に立聞しけれ共更にひかざりけるに三年と云八月十五夜に行てうかがふ蟬丸ひとりびはを彈し今夜心あらん人來れかし物語せんと獨言云けれは博雅立出て云やう此三年爰にかよふ幸今夜汝に逢ぬ盲悅び互に物語なとして彼流泉啄木の秘曲を傳ふ博雅是を習ひえたり文略　世繼云博雅三位と云ける人もびはの上手也又童にておさなくおはしけるに木幡に盲たる法師の世にあやしけなるにびはは習ひけり秘調のえもいはぬみつ有けりそれを隱してえしらずとて敎へさりけれは心うく思ひ夜な〳〵みそかにおはしつゝ前栽の中に居たり若かくしたる手をや引と覺えけるに大方引さりけり已に百夜になれは其曉に心を澄して此法師起出て九月（ナガツキ）計の月の夜比打詠めつゝ隱しつる手共みつなからこそ引たりけれ引果させて前栽の中より出たり法師いと淺ましと思ふ此月比かよふ事百夜に成ぬるよしをいふに心さしの深きを哀れかりておしむ手皆おしへつ扨後此僧いつち共なく失にけり文略　今案今昔物語には博雅と蟬丸との事を載たり世繼には博雅と木幡の盲僧との事を記せり扶桑隱逸傳には右の世繼の說のおもむき也又遯史に記せるは今昔の說と等し又江談には今昔の筆法と同しくして蟬丸とはなし只逢坂の目暗とあり

定めなき世の中々にうき事や賴みなるらん　浮事

もつらき事も本定めなき世の中なれはおのつから
うき事を頼みとする也中々と云詞は大方なましゐ
とつかふ詞なれ共爰は只世の中とつゝけたる計也
新古　○あすか川明日の淵瀨をしらぬ社定なき世の頼也
けれ一條太政大臣女
是は延喜第四の御子蟬丸の宮にておはします　紹
運鈔に延喜の御子三十五人ある其中に蟬丸と云名
曾てなし平家物語及盛衰記に重衡海道下に爰は昔
延喜第四の皇子蟬丸と有又博雅三位の事もつゝけ
たり此海道下の詞に依て延喜第四の御子蟬丸とは
作るならん關明神社在ニ江州志賀郡會坂一所レ祭之
神一座蟬丸也矣　貞德百人一首抄云蟬丸延喜の御
子のよし關明神の緣起にも有と也盲目にてありし
とて祭も夜渡し奉ると也然共時代相違の事にて延
喜の御子とはいひがたしと云々無名抄云會坂に關
の明神と申は昔の蟬丸のかのわらやの跡をうしな
はすしてそこに神と成て住給ふ成へし今も道過る
便にみれはむかし深草の帝の御史にて和琴ならひ
に良峰宗貞良少將とて通ひけん程の事迄おもかけ
にうかひていみじくこそ侍れ云々今案今昔物語及

東齋隨筆に蟬丸は宇多の御子敦實親王の雜色と有
然るに無名抄の說は深草の帝の御史にて和琴ならひに
宗貞かよひけんと有深草の帝は五十四代也宇多天
皇より六代以前なれは大きに相違せり延喜は竹生
島に記す
實や何事も酬有ける浮世哉前世の戒行いみじくて今
皇子とは成給へ共襁褓の內よりなどやらん兩眼盲ま
し〳〵て　大集經曰瘖瘂者誹謗中來盲聾者不信中
來矣　因果經曰爲レ人愚癡不レ解ニ道理一者死中ニ得ニ
人身一聾盲瘖瘂乃至諸根不具足不レ能レ受レ法矣　襁
褓は淮南子曰成王幼有ニ繦緥之中一矣　玉篇曰襁褓
負レ兒衣也矣　張華博物志曰繦織レ縷爲レ之廣八寸長
丈二以約ニ小兒於背上一矣　韋昭漢書注曰緥者ニ今時
小兒腹衣一矣　李奇曰繦以ニ絡布一爲レ之絡負ニ小兒一
矣孟康云繦小兒被也矣　いみじきは景淸に注す
蒼天に月日の光なく闇夜に灯暗うして五更の雨も止
事なし　太平記卷廿一云只中流に舟を覆して一壺
の浪に漂ひ暗夜に灯消て五更の雨に向ふがことし
と云々　爾雅曰春爲ニ蒼天一矣　詩傳曰蒼ハ天以レ體
言レ之矣　李巡曰御觀ニ天形一穹隆而高其色蒼々故

曰ニ靑蒼ー矣　莊子曰天之蒼々其正色矣　文選古詩云黃鶴摶ニ蒼天ー矣　又九空に依て云時は淮南子に東方を蒼天と云九空とは八方と中央とを云也　五更は天皷に注す

御ぐしをおろし奉れとの　髮をそぎて法體の身となるを云也御ぐしは御髮と云義歟おろすとは剃義也　榮花物語云おくしおろして尼になし奉らせ給ふと云々

綸言出て歸らねは　綸言は號令共命令共いひて上より下に仰付らるゝ事也　漢書曰號令如レ汗出而不レ反者也矣　禮記緇衣篇曰子曰王言如レ糸其出如レ綸王言如レ綸其出如レ綍故大人不レ倡ニ游言ー矣

足よは車は湯谷に注す篠目は安宅に注す

歸らん事もかた糸のよるへなき身の行衛　歸らん事も難しといひかけ糸をよるとつゝけたり片糸は總して糸は二筋をもてより合するもの也よりあはせざるを片糸と云也

浮木の龜の年をへて盲龜の闇路　實盛に注す

如何に淸貫　大納言淸貫は醍醐天皇の臣也帝王編年記云大納言藤淸貫卿横佩大臣五代孫參議保則子母在原業平女延長八年庚寅六月廿六日淸貫希世兩人於ニ淸涼殿ー爲ニ雷霹靂火ー被レ燒死矣

去にても我君は堯舜より以來國を始め民をあはれむ御事なるに　我君とは延喜帝を指て云也堯舜の御代に比していへり　千載集序云延喜のひじりの御代には古今集をえらはれ天暦のかしこきおほん時には後撰集をあつめ給ひと云々　帝堯者號ニ放勳陶唐ー（索隱曰堯謚也放勳名陶唐國名也）父帝嚳母陳鋒氏女慶都孕十四月而生ニ堯於丹陵ー年十六而即レ位都ニ平陽ー在位九十八年壽一百十七歲矣　虞舜者（索隱曰虞國名在ニ河東太陽縣ー舜謚也）曰ニ重華都君ー父瞽叟母握登舜年二十而以レ孝聞五十攝ニ行天子事ー五十八堯崩六十一代レ堯踐ニ帝位ー都ニ蒲阪ー踐ニ帝位ー三十九年南巡狩崩ニ於蒼梧之野ー葬ニ於江南九疑ー壽一百歲或百十歲矣（史記五帝本紀注文略）

實や后宮髻を切半斷に枕すと唐土の西施が申けるもかやうの姿にて有けるぞや　后宮は西施を云也越王勾踐の后西施吳王夫差へ行時別れにおよんで髻を切と云事歟證文未レ考　孔曄會稽記曰勾踐索ニ美女ー獻ニ吳王ー得ニ諸曁縣北羅山賣薪女西施ー容貌美也矣　或云越國中選ニ美女五十人ー其內一人美女

名ニ西施ニ西海濱漁家女也其容妖艶年方十四歳使ニ
文種ニ献ニ呉王ニ矣　半斷は半きる也半はよみ也斷
は音也音と調とをつゝくる事湯桶詞とて惡し但春
日影向の時供奉の臣に中臣連時風と云有是もとき
かせと云へきをときふうととなふる也古來より和
朝の文にかやうの類多し
簑といふものを參らせ上候　三國の時劉馥合肥を
守る草苫數千をあみて城を覆ひしを軍士取て簑衣
とす古今事文類聚　神代卷云素戔烏尊遂ニ去根之國ニ于レ時
霖也結ニ束青草ニ以爲ニ笠簑ニ矣　是和漢簑の始
也
是は雨により田簑の島とよみ置つるみのと云物か
古今集雜上云難波へ罷ける時田簑の島にて雨に
あふてよめる貫之歌に一雨により田簑の島をけふ
ゆけはなにはかくれぬ物にそ有ける又拾遺集に入
古今榮雅抄云雨のふるに田簑の島にけふゆけは名
にはかくれすしてぬるゝと也名にはかくれぬは田
簑と云名を難波によせたり云々田簑は攝州西生郡
也　宗祇名所集云天王寺より西乾の方よりの海邊
也海道より南也云々補甲抄には天王寺のかたはら
と有一說佃村にあり共いへり尋ぬへし
同しく笠を參らする　古今原始云漢高祖以ニ竹皮ニ
爲レ冠民間效竹冠文略　是笠を戴く始め也又傘は後
魏の時其制あるよし事物紀原に見えたり　韻會曰
有レ柄曰レ簦無レ柄曰レ笠矣　下學集云戴レ頭謂ニ之笠ニ
持レ手謂ニ之傘ニ矣　舊事紀云天照大神紀伊忌部遠
祖手置帆負神をして笠をつくらしめ給ふ文略　是和
漢笠の始め也
是はみさふらひみかさと申せとよみ置つる笠と云物
よなふ　古今集第十九東歌「みさふらひ御笠と申せ
宮城野の木の下露は雨にまされり　榮雅抄云御侍
御笠參らせよと申せ宮城野の木の下露は雨ふるに
まさりたると也宮城野は萩もおほく露ふけき所也
笠は侍の役也雨よりも露のまさりたるに非す雨の
ふれは水のまさるといふかことし宮城野は西のか
たは山陰にて露のふけき所也奥州郡の名也
又此杖は御道ふるへ御手にもたせ給ふへし　莊子
曰神農曝然放レ杖矣大戴禮に武王の杖の銘有神代
卷云陽神乃投ニ其杖ニ曰自レ此以還雷不敢來是謂ニ岐
神ニ矣是和漢杖の始也
實々是もつくからに千年の坂をも越なんと彼遍昭が

讀し杖か　古今集第七賀部云仁和の帝のみこにおはしましける時に御おばの八十の賀に白銀を杖に作れりけるを見てかの御おばにかはりてよめる僧正遍昭「千早振神のきりけんつくからに千とせの坂もこへぬへら也　榮雅抄云神のきりたる杖をつくゆへに千年の坂もこゆべきと也杖をほめんとて神やきりけんと云也云々卜部兼邦百首抄云「すへ神のきれる杖とて八百萬年はつく共つきしとそ思ふすへ神は皇御孫尊を云也杖の事神道にふなとゝ云也是道祖神の一の神躰也云々遍昭は雲林院に注す

夫は千とせの坂ゆく杖　坂行に榮へゆくをいひかけたり

逢坂山の關の戸さしのわらやの竹の　逢坂の關は田村に注す○玉葉しゐてやは猶過行ん逢坂の關のわらやの秋の夕暮

かゝる浮世に逢坂のしるもしらぬも是みよや　後撰集第十五雜一云相坂の關に庵室を作りて住侍けるに行かふ人を見て蟬丸「是やこの行も歸るも別れつゝしるもしらぬも逢坂の關　百人一首には行も歸るも別れては有　玄旨抄云歌の心面は旅客の往來のさま也下心は會者定離の心也と云々　素性集に此歌有詞書に相坂にて庵室に住侍ける時に道行人を見てと有素性歌と云事いぶかし

行人征馬は賴政有明は高砂琵琶は千壽に注す

是は延喜第三の御子さかがみとは我事也　延喜の御子に蟬丸或はさかがみと云事本說曾而なし

夫花の種は地に埋て千林の梢に登り月の影は天にかゝつて萬水の底に沈む是等をは皆何れをか順とみ逆なるといはん　是は何れの古語にてつゝけたるそ未ㇾ考心は明に聞へたり順逆の字は卒都婆小町に注す

我は皇子なれども庶人にくだり　說文曰庶屋下衆也矣　五帝本紀曰自ヨ従窮蟬一以至ニ帝舜一皆微爲ニ庶人一矣　庶人とは常の平人を云也

髮は身上よりおひのぼつて星霜をいたゞく　星をいたゝくと云詞は君に夜より夜迄仕る心也又夜をこめて旅行の體をも云或は又家業にいとまなきをもいへり涑水迂書曰四民之中惟農最苦農夫寒耕熱

耘耨レ體塗レ足戴レ星而作戴レ星而息矣　書言故事云早行日ニ戴レ星而行一事出ニ呂氏春秋一矣　〇詞花年を經て星をいたゝく黒髪の人より霜に成にける哉　能宣

連歌前句　道は出てもおそき鳥の音　〇付句　霜星をいたゝきつかへさき立て叱　但謠に星霜をいたゝくとつゝけたるは其義理かなはす今爰に注する處謠の心とは異也

柳の髪をも風は梳るに　此詩實盛に注す　春風や柳の髪を梳らんみとりの眉も亂る計に　亀山院

抜頭の舞かやあさましや　抜頭の舞は拾芥抄云抜頭乞食調也矣　體源抄云抜頭小曲古樂又作ニ髮頭一此曲天竺樂也波羅門傳來隨一也　舞作者不レ詳一說云沙門佛哲傳レ之置ニ唐招提寺一云々　古老語云もろこしの后物ねたみをし給ひて鬼となれりけるを以ニ宣旨一樓にこめられけるが破出給ひて舞給ふ姿を摸して作ニ此舞一云々

うきねに鳴かかも河や　ねに鳴鴨といひかけたりうきねは藤戸に注す〇金　逢事もなこえにあさる芦鴨のうきねに鳴と人しるらめや　攝政左大臣

末白川を打渡り粟田口にも着しかは今は誰をか松坂や　白川は墨田川に注す松坂は盛久に注す　粟田口上粟田下粟田あり共に愛宕郡也粟田山は屬ニ宇治郡ニ三條白川橋の東より山際迄目ニ粟田口一

音羽山は田村に注す山科の里は頼政に注す

松虫鈴虫きり〳〵すの　松虫はきり〳〵すに似てひげあり鈴虫は形西瓜のさねのことく色黒し首小くひけ牛白く二條あり松虫鈴虫共に有レ尾は雌也不レ鳴金鐘蟲月鈴兒と書　本草綱目云莎雞居ニ莎草間一蟋蟀之類似レ蝗而班有ニ翅數重一下翅正赤六月飛而振レ羽有レ聲人或蓄ニ之樊中一矣　三才圖會云莎雞其狀頭小而羽大有ニ青褐兩種一率以ニ六月一振レ羽作レ聲連夜札々不レ止其聲如ニ紡レ絲之聲一人家養レ籠暖則數年居矣

心は清瀧川と知へし　清瀧川は賀茂に注す〇玉葉　世々をへて濁にしみし我心清瀧川にすゝきつる哉　岡屋入道

逢坂の關の清水に影見えて今やひくらん望月の駒　拾遺集秋部貫之歌也　詞書云延喜の御時月次の御屛風にと云々歌の心は望月は信濃也月の清水にうつるを添てよめり　愚秘抄云大貳高遠歌に一相坂

の關の岩かどふみならし山たちいづるきり原の駒と侍る逢坂の關の清水の歌兩首を詠あはせて見侍るに一二返迄はきり原の歌勝りて聞へ侍るが三四返にもなれは事の外に清水の歌勝りて聞へ侍るは如何なる事にか其不審をとはんとて公任の許に參られける公任卿云貫之歌はさせるふしもなくなひらかにいひくたせり霧原の歌は詞の餘情工み也去程に一二返迄はまさりて聞ゆれど聞ざめする成へし文略

望月の駒は兼平に注す

走井は竹生嶋髮はおとろは山姑水を鏡は井筒に注す

第一第二の絃は索々として秋の風拂レ松疎韻落第三第四の宮は　白氏文集三樂府五絃彈文曰第一第二絃索々秋風拂レ松疎韻落第三第四絃冷々夜鶴憶レ子籠中鳴第五絃聲尤掩抑瀧水凍咽流不レ得矣　五絃とは五絃の琴也彈はひくとよむ也昔は五絃の琴を用ゆ禮記云舜作二五絃琴一以歌二南風一矣　右五絃彈の句の心は其五の絃の聲を形容せり索々とは亂たる也秋風の松を拂ふ聲に似たると也疎韻落とはひゝきのもろき心也冷々とはすさましき貝也夜の鶴の子思ふて籠中になかんやうに物哀れなる聲也掩抑とはとゝこほる義也瀧の水なとの氷にむせんで心よくも流れぬやうなりといへり　本文に第三第四絃とあるを謠には第三第四の宮は我蟬丸とはつゝけたり

我蟬丸がこらへも四のおりから也　上の句は五絃の琴の文なれ共第四の宮は我蟬丸と云て四のをとつゝけたり四の緒は琵琶也四絃あれは云也〇玉葉四のをのこらへにつけて思ひ出よ半の月に我も忘れし

世中はとにもかくにも有ぬへし宮もわらやもはてしなけれは　新古今集雜下蟬丸歌也とてもかくても同じ事と有今昔物語にはとてもかくてもすごしてんと有玄旨抄云とてもかくてもとはとしてもかくしてもと云義也心はあたなるしはしの假の世は貧富共に同し事也宮殿も茅屋も終にあり果るならひならねばとの心也云々

博雅の三位にてましますか　從三位皇太后宮權大夫源博雅朝臣延喜御孫兵部卿光明親王御子也母時平公女也矣　古今著聞云博雅卿は上古に勝れたる管絃者也けり生れ侍ける時天に音樂の聲聞ゆ其比東山に聖心上人と云ありあやしみて庵室を出て樂

の聲につきて行ければ博雅の生るゝ所に至にけり生れおはりて樂の音とゝまりぬ子息二人あり一人は信義笛の上手也一人は信明琵琶の上手也文略

夕附の鳥　湯谷に注す

それ旃檀は二葉よりかうはしといへり　撰集抄云せんたんは二葉よりかんばしく梅花はつほめるに香有と云々二葉とは初て生する形也○家隆二葉より匂ふ林に入袖もかくやは花の散をつゝまん實隆　正法念經曰此洲有レ山名曰二高山一高山之峰多有二牛頭旃檀一若諸天與二修羅一戰時爲レ刀所レ傷以二牛頭旃檀一塗レ之即愈以下此山峰狀如二牛頭一於二此峰中一生中旃檀樹上故名二牛頭一矣　華嚴經曰摩羅耶山出二旃檀香一名曰二牛頭一若以下塗レ身設入二火坑一火不上レ能レ燒矣慈恩傳曰樹類二白楊一其質涼冷蛇多附レ之矣

一樹の宿りは千壽つらなる枝は弁辨慶に注す

淨藏淨眼　法華妙莊嚴王品曰有レ王名二妙莊嚴一其王夫人名二淨德一有二二子一一名二淨藏一二名二淨眼一矣　過去に雲雷音宿王花智佛と云佛法花經を說給ふ時淨藏淨眼の兄弟有て其佛の許におゐて諸の佛道を行じき父妙莊嚴王の外道の法を信ずるをかなしみて前に母を勸め後に父の前にて種々の神變を現じて佛道に歸せしめ佛の弟子となし出家して皆法花經をたもちて成佛せり淨藏淨眼は即ち藥王藥上の二菩薩也

早離速離　淨土本緣經曰於二南天竺一有二一梵士一曰二長那一妻名二摩那斯羅一生二二子一觀二音招二古相一使レ見二二子一告言別二離父母一不レ久兄號二早離一弟名二速離一至二早離七歲速離五歲一母起二重病一死求二他女一爲レ婦于レ時擧レ世飢若長那語レ妻言我闇從レ是往レ北七日有レ山有二甘菓一行而取レ菓獨往去後二七日不レ還時妻生二異念一二子倶乘レ船渡レ海到二絕島岸一語二二子一曰汝先下戲レ濱我暫有二船中一料二理餘糧一汝下欲レ求二草菓一二子下馳二東西一母密乘二本船一還二古鄕一二子到二本濱一見レ之無二攀及母一二子晝夜悲哭時憶二念生母遺言一發二無上道心一誓曰欲レ救二我一切衆生苦患一終死中略爾時長那者今釋迦母摩那斯羅者阿彌陀早離者觀世音速離者勢至是也文略

應神天皇の御子難波の皇子宇治の命　應神は弓矢幡に注す難波の皇子は仁德帝を申也宇治の命は仁德の御弟也兄弟たがひに位を辭し給ふ事難波に注

す
たかひに即位謙讓の　　謙讓とは謙はへりくたる也
讓はゆるづる也位につき給ふ事を互に退き讓る也
說文曰謙敬也矣　廣韻曰謙讓也矣　增韻曰謙致レ
恭也不ニ自滿一也矣　易註曰卑退爲レ義屈レ己下レ物也
矣漢藝文志曰易レ之嗛々前相如傳嗛讓而未レ發矣
說文曰讓相責讓一曰讓也矣　廣韻曰退讓也矣　禮
記曲禮曰退讓以明レ禮註云應レ受而推曰レ讓矣　史記
曰孝文帝初即レ位謙讓未レ遑也矣即位は花筐に注す
よるべの水は櫻川に注す世は末世に及とても日月地
に落ぬは安宅に注す
王氏を出てかく計八臣にだにまじはらて　　王姓の
貴き身として臣下にさへまじはらぬ也　史記夏本
紀曰皆不レ得レ在ニ帝位一爲ニ人臣一矣
錦の茵　　關寺小町に記す
嶺につたふ猿の聲袖をうるほす村雨の音にたぐへ
て琵琶の音を　　長明道記云猿の聲に袖をうるほす
と云々　琵琶行曰大絃嘈々如ニ急雨一小絃切々如ニ
私語一矣今は逢坂に猿なし昔は山近く猿の聲玄け
るなるへし○相坂の山の峰にて鳴なるはましらの

み社あはれ也けれ　猿をましらと云は梵語也　名
義集云梵音摩斯吒此云ニ獼猴一矣　たとらと通韻也
又ましと計も云也○右京大夫家集夜もすから歎きあかせる曉に
ましの一聲聞そ悲しき親長
わら屋の軒のひま〳〵に時々月はもりなから
あばらやの透間より月影の指を月もるとは云也○
續拾手にならす扇の風も忘られてねやもる月の影そ涼
しき
夕鳥うかれ心はうば玉の　　諸鳥あた物語云夕鳥ふ
たつからすうかれからすと云々　藻鹽草云村烏や
もめ鳥うかれ鳥のよたゝなくといへり云々　うは
玉は三輪に注す
我黑髮のあかでゆく　　あかてゆくはあかぬと云に
髮の垢をいひかけたり玉葛に注す
會坂の關の杉村　　續拾○相坂の關の杉村雪消て道ある
御代と春はきにけり衣笠內大臣

俊寛

法勝寺執行俊寛僧都村上天皇第七皇子二品中務具平親王六代後葉京極源大納言雅俊卿孫仁和寺法印寛雅子也矣　其頃東山鹿谷に彼是集居て平家亡すべき密談既に顯しかは清盛いかつて其輩を捕へそれ〳〵の罪に計らはる中にも丹波少將成經平判官康頼俊寛三人を治承元年三月廿八日鬼界が島へ流す是より先康頼は周防のむろずみと云所にて出家す法名を性照と號す各島に至て歸洛をねかふ里人云爰を去る事五十餘町にして高山あり號二鷲岳一爰に神有夷三郎と申すそこを岩殿と云此神をいのれば靈驗ありと申けり康頼入道成經兩人彼神に詣て歸洛をいのらんといへは俊寛不信の人にて用ず神高天原に跡をたれ給ひしより以來日本大小神祇三千七百餘所吉備大臣の神明を記すに上は一萬下は粟三石と其數を擧其中に硫黄島の岩殿と云神なしとて同意せず或文に一瞻一禮諸神祇正受蛇身五百度現世福報更不來後生必墮三悪道（此文の心は邪神を一禮するも地獄に落ると云事也）と見えたりと云時俄に暴風ふき地震山岳をかたぶけ石巖くづれ海に入僧都重而詠二古詩一岸崩殺レ魚其岸未レ受レ苦風起供レ花其風豈成レ佛「崩つる岸も我身もなき物を有と思ふは夢にゆめ見る　と詠して同心なけれは兩人あきれ果て俊寛を伴はすひたすら只二人熊野三山を此島になそらへ日々にいのりて終に歸京の神感に預し也僧都口にはいとさかしう禪法をはきちらせど心は甚未練にて成經性照赦免の時も我をつれゆけとて足ずりをしけれ共かなはざるなり（盛衰記平家物語全文略）　長門本平家物語云彼僧都の俗性を尋ぬれば忝も村上の先帝の七代後胤官位を云ば權少僧都大伽藍寺務八十八ヶ所の領をつかさとり給ひしかは宗門平門を立て三百餘人の所從眷屬にいねうせられてこそ過られしが白河殿御坊鹿の谷の山庄京極殿の宿所塵もすへしとみがゝれおほされし物をまのあたりにかゝる樣にならせ給ふこそとかく云計もなかりけれ云々同巻云少將のしうと平宰相の領肥前國賀瀨の庄と云所にあり折節に付て忍び〳〵に相訪はる太政入道の聞給はん所を恐て思程こそなけれ共かたのごとく衣食をおくられけれは康頼も俊寛もそれにかゝりて日

をおくりけりと云々　同巻云かくして二三日ぞ有ける九月半の比彼庵の下にて終にはかなくなりにけり有王丸は主の骨を頸にかけ高野の山に上りつゝ奥院におさめ置則ち法師に成て主の菩提を吊ける云々　或云龍造寺家日記云肥前國鹿瀬の庄に法勝寺と云禪寺有開基は俊寛也成經康頼赦免の時僧都を殘し置んも不便なりとてひそかにつれ來り鹿瀬の庄に住しめけるが爰にて死せりと云々　肥前國人語云當國鹿瀬庄法勝寺に俊寛が墓所幷に影像ありと云々

是は相國に仕へ申者にて候　盛衰記云治承二年七月上旬六波羅殿より流人赦免の使として丹左衛門尉基安万里の波濤を凌ぎ八月下旬に薩摩の地に着九月上旬に硫黄島に渡ると云々文略　相國は清盛公を云也佛原に注す

さても此度中宮御産の御いのりのために　中宮とは高倉院の后清盛公の女建禮門院を云也安德天皇生れさせ給ふ時の事也　盛衰記云中宮五月にて御帶賜御座て六月廿八日吉日とて御着帶あり御懷姙の事定まらせ給ひけれは御産平安王子御誕生の御祈のために非常の大赦をおこなふ于レ時治承二年十一月十二日に皇子平安に御誕生ある也云々文略　中宮職職原注云中宮天子后也上古三宮之惣名曰ニ中宮一三宮太皇太后宮皇太后宮皇后宮也中宮之居曰ニ常寧殿一在ニ清涼殿北一也矣續日本紀云光仁帝天應元年夏五月始置ニ中宮職一矣

非常の大赦おこなはるゝにより　大赦は天子御不豫御祈禱の時或は飢饉の年にある事也七十以上の者に米一石八十以上の者に貳石九十以上の者に三石給はる也殺盗放火の者も助らるゝといへ共私に錢を鑄似せ銀を志たる者は殺るゝ法也大赦は唐土にては帝舜の時始て行はるゝ事史記に見えたり日本にては孝德天皇二年三月始而行はるゝ也と日本紀にあり云々

國々の流人赦免ある　流罪の事堯舜の時より始る也尚書云流ニ共工于幽州一注流遣而遠去如ニ水之流一也放ニ置之於此一不レ得ニ他適一也矣續日本紀云聖武天皇神龜元年定ニ諸流配遠近之程一也文略　配流之事は禁秘抄云先被レ定レ罪後於レ陣宣下可レ然人有ニ詔書一大内記或儒辨草レ之上卿奏レ之只凡人口宣上卿

宣下也罪沙汰近流遠流次第有レ之檢非違使向二彼家一或具二武士一被レ遣レ之矣又云召二返流人一宣下後彼家差レ使召返也矣

中にも鬼界が島の流人の内　　鬼界島は在二薩摩沖一五島七島とて十二島あり其惣名を鬼界が島と云長門本平家物語云鬼界は十二島なれは口五島は日本に隨へり奥七島は未我朝に隨すと云り中略　口五島の内少將をは三の泊の北流黄島にすておき康頼をはあこしきの島に俊寛をは白石にぞ捨置けり彼島は白鷺多くして石白く水の流に至迄波白くぞ見えていさきよし故に白石島と云ける也云々（盛衰記とは少し相違有）或云世傳昔輕大臣爲二遣唐使一時支那人飲二之不言藥一頭戴二灯臺一而燃レ火即名レ之爲二灯臺鬼一其子參議春衡又爲二唐使一尋レ時齊明天皇二年丙辰歳也入二于支那一帝殊貴重及二于夜一出二鬼灯一鬼灯遥見二春衡一知二我子一流涕噬二指頭一血書曰汝我子也春衡見レ之遂求二灯鬼一歸二日本一之日沒二颯州硫黄邊一名二其所レ葬之地一曰二鬼界一矣

丹波少將成經　　大職冠末葉新大納言成親嫡子至二參議正三位一母參議親隆女也已上大系圖　此人は其頃若年たれはさまての科もなけれ共父成親の縁座により て遠流の罪にあたれり　長門本云万里の波濤を凌ぎ歸り二度召仕れ父大納言の家を繼て雲上につらなり宰相の中將に成て後には祖父跡中納言迄なられしこそ有難は人思ひけり云々

平判官康頼　　桓武天皇後胤從五位下平判官入道性照は島より赦免あり歸洛して東山双林寺に籠居て寶物集を作る頼朝出世に召出され義朝の廟所野間の内海に遣し御堂の承仕法師となる則爰にて寂す長門本云康頼は元は阿波國の住人中略諸道に心得たる者にて君にも近召仕れ參せて檢非違使五位尉迄成にけり云々　又云康頼は薩摩方へ下りなん後は二度召返されん事難しとて津の國駒の林と云所にて出家す「古の花の衣をぬきかへて今そきそむる墨染の袖　と打詠て法名性照と名のれり云々（平家物語とは相違あり）　寶物集云俄に他國へ罷にしかは又爲事もなき儘におこなひの間には素盞嗚の三十字知さりしおしあつめたりしを風の便にや都の方へ吹傳へたりけるを恐懼人見給ひて哀れとや覺しけん數多の中に一人召還されたりしかは目に見えぬ

鬼神の心をも優猛き武士の心にも哀れと思ふは此歌也と古今の序に侍るも實もと覺えて云々　平判官康頼嶋にて卒都婆に書付流しける歌に「さつま潟奥の小島に我はありと親には告よ八重の鹽風とよめるは此時の事也委しく長門本に見えたり此歌千載集に入」

神をいはふが島なれば願もみつの山ならん　硫黄島に三熊野を勸請し歸洛をいのるが故に神を祝ふが島とは云かけたり三の山とは熊野三山をいへり硫黄島は鬼界十二島の内也此所常に天晴る事なし雷鳴わたり雨ふり長に山燃て硫黄と云もの滿充故に硫黄が島と名つく

是は九州薩摩潟　國造本紀云薩摩國造纒向日代朝伐ニ薩摩隼人等一鎮レ之仁德朝代日佐改爲レ直矣　大和本紀云昔地神の代に隼人の神彼國を颯と蹴割て通し所を薩間と號す今其所を颯間門と云て廣さ五六十町長さ百餘町なる口有也後萬ニかな書に薩間國と書也云々　九州は高砂に注す○はや人のさつまの迫門を雲ゐなる遠くも我はけふみつる哉

我等都にありし時熊野參詣三十三度のあゆみをなさんと立願せしにその半にも數たらて　盛衰記云抑性照三十三度熊野參詣の宿願有て十八度迄は參て今十五度を殘せり當來得道のために岩殿の御前にて果さばやと存ずと云々○熊野は舟橋に注す

此島に三熊野を勸請申都よりの道中の九十九所の王子迄　長門本云八十餘所の王子々々參詣過て本宮淨淸殿の御前に參詣しつゝ本地阿彌陀如來にてましますと云々盛衰記同レ之　縁起には九百九十九所と有案するに王子社は紀州大和和泉河内攝州山城に有別而和泉國に多く祭レ之　或云熊野九十九所王子者中古天子數世幸ニ于熊野一毎ニ休息所一遙ニ拜熊野一地也熊野社家説云九十九所王子都熊野神伊弉冊尊也王子當レ作ニ祖神一或云王次次猶レ謂レ宿君王之所レ宿也　按社家説最是也然世用ニ王子字一者何乎願念天照太神在ニ熊野一號ニ若一王子一然則亦有ニ合ニ祭伊弉冊尊天照太神一者上歟矣

三熊野の浦の濱ゆふひとへなる　濱木綿はおもとに似たり俗濱をもとと云海邊に生す七八月に白花開く莖高く延て梢に數花集り開く卷丹（オニユリ）の花の形に似たり秋結レ實花咲たる跡に數顆みのる大さ如ニ胡

桃ノ内に無レ核白肉あり〇萬葉四御熊野の浦の濱木綿百重なる心思へどたゝにあはぬかも人丸　詞林采葉此歌注云此濱木綿は紀伊國の御熊野には非ず志摩國眞熊野の浦より大臣の大甞の時献する事舊例也是をもて雉の別足をつゝむとこそ申す眞熊野の浦此國の名所なる事万葉集第六大伴家持歌に「みけつ國志摩のえてらん眞熊野の少舟に乗ておきへこくみゆ　此濱木綿の姿は芭蕉のことくにてくきをへげばいくつともなくかさなりたるもの也此心を新撰六帖に「かさぬとは何思ふらん濱ゆふのへがれのみ行我世かなしも　此濱木綿に戀る人の名を書て枕にすれは必す夢に見ゆとなん「かきつくる浦の濱ゆふ何として夢には人を見せ始めけん光俊紀伊國御熊野にもよめり藤原季家歌に「御熊野やいくへか雪のつもるらん跡だに見えず浦の濱ゆふ已上　此唄の御熊野は紀州をいへり

眞砂を取て散米に　盛衰記云康頼入道は小竹を切て串とし浦の濱ゆふを御幣に挾み萈草（カリカヤ）と云草を四手にたれ清き砂を散供として名句祭文を讀上て一時の祝言を申云々　惣而散米とは神事をおこなふ時神前にまき散す米を云たとへは切麻のことし今婦女の類神社參詣の時米を手向をおはなしと云散米の義也昔天竺に二人の童子有二人を名ニ闍耶一亦一人を名ニ毘闍耶一世尊の威容を拜し實心に恭敬して細砂を執て鉢に褁し以て供ニ養世尊一此功徳に由て滅後百年に成ニ阿育大王一雜阿含經

白木綿花の御祓して　花を白木綿になぞらへたる也又濱ゆふも兼たり御祓は松風に注す〇新撰吉野川河波早く御祓して白ゆふ花の數まさるらし前關白

暗きよりくらき道にぞ入にける　此歌鵺に注す

玉兎晝眠雲母地金雞夜宿不萠枝　舊抄云祖師頌也云々略レ之

寒蟬抱ニ枯木一鳴盡不レ回レ首　この語は在ニ梅花無盡藏一和名抄云兼名苑云寒蜩一名寒蜇一名蟪似レ蟬而小青赤月令曰寒蟬鳴是也矣

道迎の其爲に一酒を持て參りて候　みちむかへと云べきをたうむかへといへるたうは音むかへはよみ也音と讀と一つにとなふるは惡し蟬丸に注す道迎と云事證文いまだしらず世に伊勢參宮の下向に酒迎と云事有爰にいへる道迎は是等の類なるべ

し但酒迎は伊勢參宮に不レ限何方にてもする事と
見えたり　親長卿記云明應二年十月八日於二畑枝
八幡拜殿一有二一獻一中納言右中辨已下男女來坂迎
催レ興及レ晩歸畢矣　伊呂波字類抄云受領下向境
迎矣

そも一酒とは竹葉の此島に有べきかと立寄見れはや
是は水なり　竹葉は酒の異名猩々に記す　字彙云
古考無レ酒以レ水行レ禮矣

釃酒にてなとなかるへき　字彙云釃涿レ酒矣　涿
とは酒を地にまく也祭の始に用二鬱鬯一之酒地にそ
ゝきて以て祭レ神事也見二禮記一

長月紅葉狩に注す彭祖が七百歳は養老に注す

重陽　九月九日云二重陽一九は陽數なれば陽を重ぬる
と書依而重九陽九九々陽數節共云也　魏文帝與二
鍾繇一書曰歲往月來忽復九月九日九爲二陽數一而日
月並應俗嘉二其名一以爲レ宜二於長久一故以享宴高會
矣　又此日菊をもてあそび或は菊酒をくむ也　世
風記云費長房從レ囊盛二茱萸一以繫レ臂登レ山飲二菊花
酒一以免二災厄一矣又云漢武帝此日佩二茱萸一食レ餅
飲二菊花酒一令二人長壽一矣

ぬれてほす山路の菊の露のまに　古今集秋下素性
法師歌也下句いつか千とせを我はへにけん詞書
云仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる云
々　古今榮雅抄云仙家の菊を分る人の露に衣のぬ
れたるをほす間に千年を經たゝ事のあれはいつか
千年を我はへぬへきぞと繪に書る人にいへる心也
云々

配所　韻會云流二刑隷一謂二之配一矣　流罪の輕重に
依て遠近の國あり依レ之配所と云也　類聚國史八
十七卷刑法部云聖武皇帝神龜元年三月庚申定二諸
流配處遠近之裡一伊豆安房常陸佐渡隱岐土佐六國
爲レ遠諏訪伊豫爲レ中越前安藝爲レ近矣

京都にありし時は法勝寺法成寺只喜見城の春の花
俊寛僧都は法勝寺の執行たり爰に法成寺を出す事
は法勝寺法成寺皆近ければかくつゝけたる歟
法勝寺は舊在二愛宕郡岡崎村一今岡崎村の藪の中に
諸堂の名有九重塔の跡在二村南一號二塔壇一當寺中興
の祖は天台淨土慈威和尙也　歷代編年集成云承曆
元年丁巳十二月十八日法勝寺供養行幸願伊房塔
公經此地忠仁公別業也矣　百練抄云承曆二年六月

十三日被レ始ニ白河御願事ニ法勝寺件所故宇治大相國累代別業也左大臣師實傳領献ニ公家ニ矣扶桑略記云承保四年十二月十八日供ニ養法勝寺ニ建ニ七間四面瓦葺金堂一字ニ奉レ安ニ置金色三丈二尺毘盧遮那如來像一體ニ矣　古事談云寺號覺尋僧正大毘盧舍那寺と名付たりけるを菩提坊の僧都濟覺改レ之爲ニ法勝寺ニ云々　法成寺は拾芥抄云近衛北京極東御堂關白治安二年七月供養矣　榮花物語云寬仁四年二月より道長公此寺を催し立給ひて治安二年七月十四日御堂供養し給へりと云々文略　扶桑略記云治安二季壬戌七月十四日入道大相國供ニ養法成寺金堂ニ其記云建立道場號ニ法成寺ニ瓦葺金堂草創已成其內安ニ置三丈二尺金色大日如來ニ一々蓮花上百體釋迦又金色二丈釋迦如來同藥師文殊彌勒彩色九尺梵天帝釋及四大天王ニ下略喜見城邯鄲に注す

五衰は羽衣に注す涙川は浮舟に注すはや舟は玉葛に記す

減色の秋なれや　草木秋紅葉して散つくるを云也
白氏文集十五旅望詩云萬物秋霜能壞レ色四時冬日最濶年矣

都より赦免狀を持て參りて候　長門本云七月上旬に丹波少將返さるへき事一定に成にけり其狀云
爲ニ中宮御產御祈ニ依レ被レ行ニ非常大赦ニ薩摩方硫黃島流人前少將藤原朝臣成經幷平判官康賴法師可レ令ニ歸參ニ之由御氣色所レ候也依執達如レ件
治承二年七月三日

時を感じては花も涙をそゝき別れを恨ては鳥も心を動せる　杜子美詩云感レ時花濺レ涙恨レ別鳥驚レ心矣　其節に至て何事にても感ずる事ある時は花にも泪をそゝき人の別の恨る折は鳥の鳴を聞にも心を驚かすと云心也花にも鳥にももとにの字をそへて見るべし

天地を動し鬼神も感をなす　軒端梅に注す

もしも禮紙にや有らんと卷返して見れ共僧都とも俊寬ともかける文字は更になし　長門本云僧都手水うかひなとして三度拜て先奉書を披て見られけれは爲ニ中宮御產御祈ニ依レ被レ行ニ大赦ニ成經康賴可ニ歸參ニと有けれ共俊寬と云一行もなかりけり僧都我身ははや漏にけるよと思ふより泪双眼に浮て生たる心地もせす若ひがめかとて又見れ共俊寬と云

文字はなし又見れ共二人とこそ書れたれ三人とはよまれずせめてのかなしさにひろげては卷まきてはひろけ奥へみつはしへ見つ取ては置おきては取つして臥倒ておめきさけびかなしみの泪を流す云々　禮紙は書札の奥と口とにあり是に可レ書やうはなけれど俊寛計御免なき事を歎くあまりに若も禮紙にやとくり返し見たる也　禁秘抄云禮紙に進而申と書事は總而せぬ事也只指さけて可レ書是をかくへしと云々

公の私と云事のあれば　　其政道よろつ筋目のみなれど御事忘けき故間々私の御沙汰も有と云義をかく申ならはす歟公は禮記曰大道之行ニ天下一爲レ公矣　孝經序註引ニ白虎通一云公者通也公正無レ私之意也矣

せんかた浪にゆられなから只手を合て舟よなふ

盛衰記云僧都は漕行舟の舷に取付て一町餘出たれ共蒲汐口に入けれはさすかに命や惜かりけん渚に歸りて倒ふし足すりをしておめきけり稚子の母を慕て泣かなしむがごとく也云々　爰の前後俊寛が足摺と云也足ずりは蹉跎と書文選にふしまろぶとよむ也長門本云土佐國足摺御崎と申は昔理一と申僧補陁洛山を拜んと誓て理賢と云弟子を殘して只一人舟に乘て行理賢は聖人に捨られ補陁洛山を拜むへからさる事をかなしみ名殘おしく戀てあまりたへかたさに倒臥足摺しておめきかなしむ足摺地をうがち身をかくす計に成て死す魂去つて聖人の供して補陁洛をおかみ奉りき姿は此所に留り垂跡足摺明神と號す本地觀音にてまします文略

もとの渚にひれふして松浦さよ姫も　長門本云未漕わかれぬ舟なれ共泪にくれてこきもえぬと見えければ岩の上に登りて舟をまねきけるは彼松浦さよ姫が唐舟を慕ひつゝひれふりたるに何れか又劣るへき云々　肥前國風土記云松浦縣之東三十里有ニ帔搖岑一最頂有レ沼計可半町俗傳云昔檜前天皇之世遣ニ大伴紗手比古一領ニ任那國一于レ時奉レ命經ニ過此處一於レ是篠原村有ニ娘子一名曰ニ乙等比賣一容貌端正孤爲ニ國色一紗手比古一便娉成レ婚離別之日乙等比賣登ニ此峯一擧レ帔招因以爲レ名矣　ひれとは昔は女房の裝束に裙帶領巾とて有帔或は肩巾此には比禮と云領もひれとよむ又肩の字を用たり皆人ひれは袖の

やうに思へと袖にはあらず云々　東宮切韻帔曰靈王翠帔以二翠羽一餝レ之領巾也矣　遊仙窟註云領巾帔子單曰二領巾一狹曰二帔子一春著二領巾一秋著二帔子一婦人頭餝也矣　高僧傳曰竺法惠遇レ雨著二油帔一矣　已上萬葉仙覺抄
萬○とをつ人松浦さよ姫妻戀にひれふりしよりおひし山の名　枕草子云さうふのかつら赤紐の色にはあらぬをひれくたいなどしてと云々　此謠は平家物語盛衰記長門本等をもて作りし也見合知へし

景清

盛長私記云惡七兵衛景清は上總介忠清三男五郎兵衛尉忠光弟也西海において平家滅亡の時盛嗣忠光景清此三人は命まつたうして重而頼朝兄弟を討んと議して陸にあがつて遂電す云々　長門本平家物語云建久六年三月十三日大佛供養有上總惡七兵衛景清鎌倉殿へ降人に參けれは和田左衛門尉義盛に預らる昔平家に候せし樣に少も口へらす義盛に所をも不レ置一座をせめて盃先にとり或は緣のきはに馬引よせのりなとしけれはもてあつかひて他人に預させ給へと申けれは常陸國住人八田右衛門尉知家に預らる後には大佛供養の日をかそへて同七年三月七日にてありけるに湯水を止て終に死にける云々　梅村隨筆云景清平族滅後逃二攝州水田邑一匿二伯父大日房僧能忍所一能忍欲レ爲二買酒一私語二侍者一令二往買一レ酒景清疑下耳語喁々而以爲上白二己於東一即拔レ刀刺二斃能忍一而犇世憎レ殺二其伯父一號二惡七兵衛一矣　攝州川邊郡高濱有二三寶寺一當寺景清伯父名二大日坊一者住居寺也　或云惡の字を名の頭に置事伯父の大日と云僧を殺せし故に惡七兵衛となつく惡源太義平も伯父の木曾義賢を殺したる故に惡の字を付たるといへり又右衛門督藤原信頼を名二惡右衛門一宇治左大臣頼長を號二惡左府一內大臣師通の子家政を稱二三條惡宰相一左馬守義朝の子常盤腹の一男阿野法橋全成を云二惡禪師一此等皆逆心ありし人なる故に惡の字を付たる歟又源氏物語に右大臣の息女弘徽殿の女御を惡后と云父右大臣も惡大臣といふ是も心よからぬ人なれはかいふといへり

消ぬたよりも風なれば露の身いかに成ぬらん

新後撰 あたし野や風待露を餘所に見て消ん物共身をは思はず　次第の心此歌のおもかけにかよふべきや

是は鎌倉龜が江が谷に人丸と申女にて候　此謠に作る處證文いまた見ず平家物語盛衰記盛長私記長門本等に曾而沙汰なし　鎌倉及谷の字意は鵜飼に注す　龜が江が谷は龜が谷共云也扇か谷と山の内との間也龜か谷の中央に龜谷山壽福寺と云寺有梅が谷泉か谷なと皆龜か谷の内也景清が女人丸が塚とて今龜か谷巽荒神の後畠の中に有

日向國宮崎とかやに流されて　日向國宮崎は在ニ佐土原之南ニ神武天皇初皇居之内裏跡在レ宮又此所有ニ惡七兵衛景清之墓ニ石碑建ニ水鑑景清大居士建保二年甲戌八月十五日ト矣　神代卷云天津彦火瓊々杵尊天ニ降日向之高千穂峰ニ矣此高千穂峰は今の宮崎是也地神皆此地に住給ふ神武帝即位の初には神代の跡をつき此宮崎に皇居す此時天下いまた封境も定まらず東征の後大和國橿原に都を定め給へり巳上　日向國は奥に注す

相摸の國を立出て　先代舊事國造本紀云相武國造志賀高穴穂朝武刺國造祖神伊勢都彦命三世孫弟武彦命定ニ賜國造ト矣　大和本紀云足輕明神は昔狩人にて御座けるが寵愛の妻に別れ形見に一の鏡を殘す悲傷のあまり彼鏡を見るに亡妻の形相摸也其鏡を祭て神とす神のある國を名ニ相摸ト云々

誰に行衛を遠江げに遠き江に旅舟の　國造本紀云遠淡海國造志賀高穴穂朝以ニ物部連祖伊香色雄命兒印岐美命ト定ニ賜國造ト矣　大和本紀云遠江國は遠津と書り其故は近江國に都ありしまでは彼名なかりけり其後此處を近江に遠き國なればとて遠江と號す云々

三河に渡す八橋の　杜若に注す

松門獨とぢて年月をおくり自清光を見されは時のうつるをもわきまへず　松門とは柴の戸なと云心也　文選曰謝靈運攀レ崖照ニ石鏡ト牽レ葉入ニ松門ト矣　唐詩張籍句獨向ニ雙峰ト老松門閉雨涯草根矣○松の戸を又閉はてん住佗し浮世の中の門出はしつ

衣かんたんにあたへされは　たんの字濁時は寒暖と書清時は寒單と書兩義共に心は同じ　孟蘭盆經疏曰或無ニ襦袴ニ單寒苦辛矣

膚はき骨とおとろへたり　髐骨は骨はかりのやうにやせたるを云也髐の字は左良波布と訓ず　莊子曰之レ楚見ニ空髑髏一髐然有レ形註曰髐然空虛而堅固貌矣

乞食　卒都婆小町に注す

秋きぬと目にはさやかに見えね共風の音にそおとろかれぬる　古今集秋部巻頭藤原敏行朝臣歌也詞書云秋立日よめると云々歌の心明也一禪御說云さやかは明也さたか也云々袖中抄云あざやかにと云を略してさやかにと云さやかは淸の字を書あさやかは鮮の字を書也云々

實三界は所なし只一空のみ　三界者欲界色界無色界を云也　俱舍論曰欲界衆生具ニ三事一故名ニ欲界一睡眠欲食欲婬欲也色界天人有ニ淨妙色一故名ニ色界一身相端嚴等是也無色界天人無レ有ニ形色一唯有レ心故名ニ無色界一矣三藏法數曰一空者謂一切諸法皆無ニ自性一若色若心若依若正乃至聖凡因果之法雖ニ種々不同一求ニ其體性一畢竟皆空經云如ニ瓦器中空寶器中空俱同一空無二無別一是也矣

そゞろに哀れを催すなり　三體詩云停レ車坐愛楓林晩矣　文選鮑明遠蕪城賦曰驚砂坐飛李善注曰無レ故飛曰ニ坐飛一呂向注曰坐飛謂ニ忽然而飛一矣　伊物眞字本に蕭と書河海抄に無端と書九條稙通公伊物抄云すゝろ漢書に辛の字をよませたり又不慮とも辛目とも書辛勞也云々匠材集云そゝろは思ひの外也心ならずと云心也云々古歌にそゞろ共すゞろ共よめり心は同じ　愚秘抄云すゞろとよめる歌は難波人芦火たくやに宿かりてとあれば芦のすといはんためにすゝろとはつくる也すとそと同音也芦もなく之のもなからんにすゝろとよまん事有べからず云々○山家山里の外面の岡の高き木にそゞろがましき秋の蟬かな

我一年尾張國熱田にて遊女と相馴　これ等の證文未レ考　遊女は江口に注す　國造本紀云尾張國造志賀高穴穗朝以ニ天別天火明命十世孫小止與命一定ニ賜國造一矣　大和本紀云日本武尊東夷を隨へ薨じ給ふ以前に大神宮より給し村雲の劍を先立て大神宮に返し給しが薨御の事を此劍承て伊勢國より飛來尾張の海邊なる楠木に掛て火を出して嘆く故に楠木燒倒れて田に入しかは田水湧て如ニ熱湯一依

レ之其所を熱田と號す其劒を件の楠木に入て納奉り其所を祝ひ奉り熱田大明神是也彼劒は素戔烏尊の時出雲の大蛇の尾より取たりし劒也則かの蛇の尾の針也故に彼所を尾針と號す後尾張と書云々
長の字は班女に注す盲目は蟬丸に注す愁傷は松風に注す息女は井筒に注す言語道斷は安宅に注す
日向の勾當と名をつき給ひ　景清日向に住るに依て日向の勾當といへり　勾當は關白家にもあり又僧官にして眞言に勾當專當とてあり　禁秘抄云掌侍六人正四人權二人權自二上古一有レ之此內以二一內侍一爲二勾當一矣　職原注云內侍則指二掌侍一也此四人內第一曰二勾當內侍一今長橋局是也矣　大全云勾當專當在二眞言家一今世天下盲目長曰二檢挍一其次曰二勾當一是各別事也昔無二其例一自二公方家時一始レ之矣
某の字義は鉢木に記すなふ〳〵は江口に注す
かしましく　囂と書說文曰囂聲也氣出二頭上一矣孟子盡心篇曰囂々然人知レ之注囂々自待無欲之貌矣
千行の悲涙袂をくたし萬事は皆夢のうち　菅家後集云離レ家三四月落涙百千行萬事皆如レ夢時々仰二彼蒼一矣
日向とは日にむかふ　國造本紀云日向國造輕島豐明朝御世豐國別皇子三世孫老男定二賜國造一矣　日本紀云景行天皇十七年春三月幸二子湯縣一遊二于丹裳小野一時東望之謂二左右一曰是國直向二於日出方一故號二其國一曰二日向一也矣　大和本紀云崇神天皇の御代夷國征罰の時御船の面に火を向濟し方を火向と云しを後に火の字を改て日の字に書たり又彼國は東向の國にて朝日に向故に日向の國共云也云々
梓弓　屋島に注す
御扶持あるかた〳〵に　扶持はたすけたもつと讀也孟子曰守望相二助疾病一相扶持矣　史記年表曰蔡義年八十衰老常兩人扶持乃能行矣○新千山里に只假初の薄かきふちする人もなき我身かな信實
偏にめくらの杖を失ふに似たるべし〳〵　陳同甫集云別去惘然若二盲者失一レ杖矣　筆のすさみ云老鶴の巢をはなれ盲目の杖をうしなへるにことならす云々　體源抄序云盲目の杖をうしなひ幼少のめのとにはなれたらんがごとく侍らん時悔ともたれか可レ習哉云々

片輪なる身の癖として　長阿含經曰二肘二膝頭頂謂二之五輪一輪者圓轉之義也亦云二五體一矣　此五つ圓にして上下めくりてんずる事車輪のことし依而五輪と云此五つの所全からざれは片輪也　字彙云畸物體不二備具一謂二之畸一矣　或はかたくな共云頑と書但爰の畸は盲目をいへり　癖韻會曰腹病也矣　増韻曰嗜好之病矣　晉書曰王濟有二馬癖一和嶠有二錢癖一杜預有二左傳癖一又王福時署レ兒癖矣

腹あしくよしなき云事　腹あしくとは腹立る心也腹たゝしきとも云腹くろともいふ又いきまく共いへり　藻鹽につのふくれ共云云々

口社開けれ共人の思はく一言の内に忞る物を　古語云蚍因二一寸一知二其大小一人依二一言一知二其賢愚一矣論語曰不三以レ人廢レ言子貢曰一言以爲レ知爲二不知一言不レ可レ不レ愼矣　史記曰愚惑之人豈能以二一言一而知レ之哉矣

山は松風すは雪よ見ぬ花のさむる夢のおしさよ扨又浦はあら礒によする浪も聞ゆるは夕鹽もさすやらん　景清盲目なれ共人の一言を聞て其心を知といへるをたとへて山に風の吹を聞ては雪の降事を忞り浪のよする音を聞ては夕鹽のさすやらんと思ふ目にみね共其おとなひを聞て世の境界を知と云る事也

さすが　安達原に注す

短慮を申て候　短慮は氣のみしかき事なれ共爰はおもはくの淺き心に見るべし又卑下の心もこもれり庭訓往來云短慮未練之仁矣

一門の舟のうちに肩をならへ膝をくみて　杜工甫詩云等級敢比レ肩矣　漢馬援文曰更欲下低レ頭與二小兒曹一共二槽櫪一而食併レ肩側中身于怨家之朝上乎矣

武略　盛久に注す

名をとりかちの舟にのせ　取楫(トリカチ)共母[illegible](トリカチ)共書船の右を父梶(ヲモカチ)といひ左を母梶と云太平記巻七云船頭實に嬉しけなる氣色にて取梶面梶取合せて片帆にかけて馳たりけり云々○くる鷹や水のおもかちとりかぢに聲も姿も沖の友舟　消遙院

麒麟も老ぬれは駑馬(ドバ)におとるか如く也　此麒麟は聖代に出る所の麒麟に非す騏驎麒麟音同じきといへ共文字聊相違せり騏驎は善名馬をいふ也戰國策曰騏驎之衰也駑馬先レ之矣史記刺客傳曰田光曰臣聞騏驥盛壯之時一日而馳千里至二衰老一駑馬先

レ之矣　說文曰驥馬驪文矣爾雅曰輔無レ角一曰翼矣
韻會曰有ニ隱驎一馬色駁矣　爾雅隱驎今之連錢驄一
曰白馬黑脊矣駑馬は韻會曰下乘也矣　文選註云駑
劣馬也矣

いで其頃は壽永三年三月下旬のこと成しに　東鑑
盛長私記長門本に元曆二年三月廿四日合戰の日と
有元曆は後鳥羽院の年號壽永は安德天皇の年號也
此時安德天皇西海に御座ゆへに壽永三年と云也西
海の軍の事委く屋島に出たり　百練抄云壽永は養
和二年五月廿七日改元依ニ飢饉兵革病事三合一也矣
藻鹽草云いてとは世俗にいてやなと云詞也又い
てそよ人を共いへり是を宗祇云我心をおこしてつ
かふ詞也と云々又發言の義也　萬葉に先乞と書爰
にては扨と云心也

能登守教經　屋島に注す

去年播磨の室山備中の水島鵯越に至る迄一度も味方
の理なかりし事　平家物語云壽永二年閏十月木曾
方大將矢田判官代義淸海野彌平四郎行廣を先とし
て都合其勢七千餘騎備中國水島に寄向ふ平家の大
將軍には新中納言知盛能登守教經其外千餘艘の舟
に乘て同水島に着て互にいどみ戰ふ源氏終に打負
行廣討れぬ義淸は海に沈む殘る軍兵我先にと敗走
す　又云其後平家は木曾を討んとて大將軍に知盛
重衡侍大將に惡七兵衛景淸など都合二萬餘騎播磨
の室山に陣をとる十郎藏人行家は平家と軍して木
曾と中直せんとて其勢五百餘室山に馳向ひ互に合
戰す行家か軍兵散々に切立られわづか三十騎に打
なされ高砂より舟に乘て和泉國ににげ去平家は室
山水島兩度の軍に勝ていよ〳〵勢つきにけり　盛長私記
同レ之　東鑑云壽永三年二月七日九郎義經相ニ具三浦
十郎義連已下勇士一自ニ鵯越一被ニ攻戰一間平氏失ニ商
量一敗走或策レ馬出ニ一谷之館一或掉レ船赴ニ四國之地一
矣　私云水島室山二ヶ度の合戰は平家に利を得た
り鵯越一の谷の館は鷲尾三郎經春を案內者として
義經責落し平家負たり此謠に一度も味方の利無り
しと作るは相違なるへし長門本云平家室山水島兩
度の軍に打勝てこそ會稽の恥をはきよめけれ云々
播州室山は海邊也室津の後の山也備中の水島は南
方の出島也凡東西十二三里鵯越は攝州矢田部郡也
鐵拐峰の半腹北より南に開き出る所也自レ是播州

三木室山に至る夢野長田兩村の間に本道有東鑑云鵯越一谷後山也此山猪鹿兎狐之外不レ通險阻也矣
偏に義經かはかりことといみしきに依てなり　いみしきはよき事にも悪しき事にもつかふ也ほめたる詞也或抄云いみじは美の字を書よろしき心也云々伊勢物語云神さへいといみじうなり雨もいたうふりければ云々　又云内へまいり給ふにいみじうなく人あるを聞つけて云々集註云いみじうは强事也云々眞字本に忌敷と書
義經　判官　三穂屋　甲　何れも屋島に注す
鞆同銅同錣同鍜同頓頂承巾と書或は分鞆　饅頭鞆日根野なとゝて品々有所々緘たるを熊懸と云
飛かゝり甲を追取えいやと引程に鞆はきれて　前後のつゞき平家物語の趣也委く屋島に注す
旨月の闇き所の燈あしき道橋と頼へし　法華藥王品曰如二闇得一レ灯矣　此文をふくませたり

謡曲拾葉抄卷十八

阿漕

阿漕が浦は勢州阿濃郡にあり　勢陽雜記云阿古木津城下ヨリ五六町巽濱邊に古墳一堆榎一本あり是をあこぎの明神と云海人の俗語ならしむかし納所村より太神宮へ御供調進の時此浦にて贄の作肴漁せりそのゆへに伊勢おのあまの世をわたるいさりを禁戒しけるにあこぎといふあま人よる〳〵しのびてあみをひき渡世ともしからざるとなりかくてしのび〳〵のたび重りければ人めあまりついにあらはれ罪科におこなはれて此浦の波間にしつめられけるとかや其怨靈たゝりをなす事あるによりて十の祖宜より社を祠て後悪靈雅氣のさたも鎭けると云々罪せられしは七月十六日と云々それより毎七月十六夜はかの幽靈あみひきけるとて伊勢の浦にはいまにおいてその夜にかきりて漁を斷絶すと云々

心づくしの秋風に木の間の月ぞすくなき　古今集

秋上題しらずよみ人しらず「木の間よりもりくる月の影みれば心つくしの秋はきにけり　雲玉集云此歌の注に云諸人の耳にふれてしらぬなるべし藤原の守つくしへながされてよむ心づくしは物の分別にまどふ事也月と秋とは時をちぎりたれど木のまよりもりくる月は東より出るに秋は西より來ると分別にまどふ延喜聖帝の御代にあひあふものなれど讒によりて配流となる時代にあはぬと心つくし取合てよめる菅家の御事まで思ひあはせ奉ぬ明王の代にこそ讒塞と云ことはあれ云々

是は九州日向の國の者にて候　九州は高砂に注す日向國は景清に注す

伊勢太神宮　白樂天に記す

日に向ふ國の浦舟漕出て八重の汐路をはる〳〵と

日に向ふとは日向國をいへり八重の鹽路とは海のひろきを云也八十島などゝいふに同じ○新後撰詠めわひ行ゑもしらず物ぞ思ふ八重の汐路の秋の夕暮鎌倉右大臣

淡路潟かよふ千鳥の聲聞て　淡路は高砂に注す

金○あはち潟かよふ千鳥の鳴聲にいく夜ね覺ぬすまの關守源兼昌

須磨の浦關の戸共に明暮て　忠度及松風に記す○續拾すまの浦や關の戸かけて立波を月に吹こす秋の塩風爲氏

是は早伊勢の國あこきか浦に着て候　先代舊事國造本紀云伊勢國造橿原朝以天降天牟久怒命孫天日鷲命初定賜國造矣　或云伊勢國は天上より天降給ひし十八神の內伊勢津彥と申神太神宮より先立て此國におはせしが此國を太神へ渡し給ひて黑雲にのり信乃國阪方郡へ飛去給ふ伊勢津彥の住給ひし國なるが故に伊勢國と名づくと云々

古き歌に伊勢の海あこぎが浦に引網も度重なれは顯にけり　六帖の歌をかやうに云かへたり夫木集にも入

彼六帖の歌に逢事も阿漕が浦に引網も度重なれは顯やせん　歌の心はあこきが浦の物語にてつゞけたり心明に聞えたり六帖には下句數かさならは人もしりなんと有此謠にかのあこぎと云あま人のよめる歌と作れり追而尋ぬべし　六帖に十二卷あり

詞林采葉集云六帖は貫之が女のために集たり仍而

號二紀家六帖一云々　袋草紙云六帖和歌四千六百九十六首此中長歌九首旋頭歌(セントウカ)十七首但本々不定也貫之女子所二爲之一故號二紀家六帖一兼盛重之等歌載レ之矣

物の名も所によりてかはりけり　勢陽雜記云　筆のすさみにあり　前句連歌　草の名も所によりてかはるなり　付句　難波のあしはいせの濱荻　救済法師　萬葉仙覺抄云伊勢國には葦を濱荻と云也攝津國にはあしといひあづまにはよしと云也と云々　住吉歌合判者俊成卿奥書云この神風伊勢島には濱荻と名づくれど難波わたりには蘆とのみいひあづまの方にはよしと云なるがごとしと云々　周禮に橘(タチハナ)淮(ワイ)と云所にては人呼で枳(カクタチ)と云也胡(コク)國には名珠を玉環と云楚國にはくさり鼠といへり和漢共に物の名のその所々にてかはりよぶ事多し　勢陽雜記云濱荻は二見鄕三津村の南の入江にあり五鈴川のすへ也昔は鷺が森を中島になしたる入江に濱荻有しと也近來鷺が森兩道より堤築其中を田地とし三津村より耕作しけり其田の中に纔半段計荻を殘し侍るゝと名高き致景の所もかくおさましくなり侍る也此後はかたもなく風の音さへなくならん事心あらん人はいかでかかなしまざらんや爰なる蘆は異やうにて左まきに皮を見せてありと云々　難波の蘆は西成郡に屬す或は河邊郡尼が崎のめぐり島々に生たるも莖葉同じく片葉也云々

藻鹽やく煙も今は絶にけり月見んとてのあまのしわざに　續後撰秋の中太上天皇の歌也上句に鹽かまの浦の煙は絶にけりと有詞書十首歌合に海邊月といへる心をよませ給けると云々歌の心はしほがまの煙絶たるは今宵あまの月を見んとてのしわざにてあるらめと也

敷島は三輪に注す苦(クルシミ)の海は藤戶に注す娑婆は田村に注す

名にしおふは江口に注す

訶責のせめを隙なくて　涅槃經曰訶二責家法一貪欲獄縛也矣　訶責のせめとつゞけたるは重言なれ共和朝の文において此例多しあふむ小町に注す

錦木(ニシキ)の數つもり千束の契りしのふ身の　袖中抄云陸奥國のえびすはおとこ女をよばんとする時文をやる事はなくて一尺計なる木をまだらに色どりて

その女の家の門に立るにあはんと思ふおとこなれはそのにしき木を程なくとりいれつおそく取いるればしいて競立て千束をかぎりに立ればまことに心ざしありけりとてその時にとりいれてあふといへりにしき木とは色々にまだらなれば云也「錦木は千束になりぬ今社は人にしられぬねやの内みめ錦木の事見袖中抄無名抄等其外説多し略之

憲清(ノリキヨ)と聞えしその歌人の忍妻あこぎ〳〵といひけんも　佐藤兵衛憲清の系圖は西行櫻に注す　或云古き物語云佐藤兵衛憲清ある宮女にしのびけるに又あはんといひければあこぎとのたまひしを憲清此あこぎと云事をしらずして年月をおくりけり其後出家して修行す伊勢國に至りぬ牛の稻をくひけるを男見てあこぎと云けり西行此男に近付かのあこぎが浦の物語を聞て年比の心とけにけりと云々　今案あこぎと云詞は六帖の歌を本として度かさなる事の枕詞となれり然るに西行伊勢に至りて初てあこぎと云事をしり日頃の心とけたりと云事いぶかし西行法師は歌道の達人なれば六帖の歌を知ずと云事有べからず惣て物語はなき事をもあるやうに作るもの也と定家卿も仰られしとなん盛衰記第八云扨も西行發心のおこりを尋ぬれば源は戀ゆへとぞ承る申も恐ある上﨟女房を思ひかけ進たりけるをあこぎの浦ぞと云仰を蒙て思ひきり官位は春の夜見はてぬ夢と思ひなしたのしみ榮へは秋の夜の月西へと准(ナゾラ)へて有爲の世の契りを遁れつゝ無爲の道にぞ入にけるあこぎは歌の心なり「伊勢の海あこきか浦に引網も度重なれは人も社しれと云心は彼阿漕の浦には神の誓にて年に一度の外は網を引ずとかや此仰を承て西行が讀ける「思きや富士の高根に一夜ねて雲の上なる月を見んとは此歌の心を思ふには一夜の御契は有けるにや重て聞食事の有ければこそ阿漕とは仰けめ情なかりける事共也云々。

責一人に度かさなるぞ悲しき　周書秦誓上曰百姓有レ過在二予一人一蔡注曰過廣謂責也矣　鵜鷺記云骸は路徑をふさぎ血は野原をひたせし過責一人に歸する酬百劫千劫にもつくしがたく覺え候上下略

値遇は盛久に注す一樹の宿りは千壽に注す

値遇を少し松陰にうらふれ給へ墨衣　　　うらぶれと
いへる詞にあまたの心あり　匠材集云うらぶれは
くたびれ〻云事也と云々萬葉仙覺抄云人のねのう
らぶれをれはとよめるはうらみをればと云心也と
云々　瓢江入楚云明石卷にしなひうらぶれとよめ
るは物おもひなづむ心也云々　神中抄云しなえう
らぶれとはなげき物おもふと云事也或はうらぶる
とはうれふと云詞共申すと云々　古今榮雅抄云秋
はきにうらふれおれは莕引のとよめる注にうらふ
れは馴をればと云心也云々　私云阿漕が浦をいひ
かけてうらぶれどはつゞけたる此謡のうらぶれは
なれ給へと云心也又休息の心も有右の榮雅抄の説
爰に相叶ふ歟

海邊もはるゝ村霧に　村霧とは霧の村々立を云○分千首
て猶只一村の夕霧や野中の森をこめて立らん爲尹

すはや手繰の網のつな　すはやと云詞は楊貴妃に
注す網は手にて繰よする物なれば手ぐりの網と云
或は大網はろくろを以てくりよする也

俄にはやてふき　はやてははやち共云暴風と書玉
井に注す

しき浪も立そひ　しき浪とは重波共云匠材集云し
き波はしきりに立波也云々　日本紀云是神風伊勢
國則常世之浪重浪歸國也矣○わたつ海によせては拾遺愚草
歸る敷浪の始もはてもしる人ぞなき

法の中にも一乘の妙なる花の紐ときて　法花經の
功德をいはんとて妙なる花と云也法花經を一乘妙
典といへり一乘の字味は兼平に注す

苔の衣の玉ならは終に光りはくらからし　新古今
增抄云苔の衣とは出家の衣也と云々　衣の玉とは
法花五百弟子受記品に說り班女に注す

蜑のかるもにすむ虫の我からとねをこそなかめ世を
はうらみじ　古今集に入藤原直子の歌也藤戸に注す

御膳の贄の網はまだひかれぬよなふ　周禮曰以レ
禽作二大贄一以等二諸臣一孤執二皮帛一卿執レ羔大夫執
レ雁士執レ雉庶人執レ鶩工商執レ鷄矣　鄭玄注曰贄之
言至所二以自賁一矣　左傳曰男贄大者玉帛小者禽鳥
女贄不レ過二榛栗棗脩一矣　私云和朝にてはなべて
鳥獸魚等をそなふるを贄と云也袖中抄云にへと云
はくひ物につきたる名也おほやけに奉る物をも御
贄といふ又わたくしにくひ物する所をもにへとの

と云但にへはおほくは魚にことよりたる名なめり魚いれたるおけをばにへおけと云にへとのと云もしるあはせなどする所也と云々

よき隙なりと夕月なれは　古今榮雅抄云夕月夜は月始の月也源氏についたち比の夕月夜とかきたればば月の大小により一日二日の夕より出現する事分明也十日あまりの比までも暮天に出る月を夕月夜とよみならはせり中略顯昭云夕月夜は西の山の端に見ゆるをいふといへるを定家卿云西の山端にかぎらす但東山より出ず夕陽にかはりて空に見ゆるを云也上絃などまてゝは誠にをぐらくほのかなり云々

あこの海あこきが鹽木こりもせて　あこの海あこぎとつゞけたり萬葉仙覺抄云あこの海は伊勢の名所也と云々〇萬時津風ふるまくしらすあこの波あさけの鹽に玉藻かりてそ衣笠前内大臣〇續古伊勢の海蜑の藻鹽木こりもせて同しうらみに年そふりぬる龜山殿七百首〇いせの海淸き渚伊勢の海淸き渚のたま〳〵もの夕波にひろはぬ玉はほたるなりけり忠守

只罪をのみもち網の　坐罟モチアミと書提罟ヨツテより大きなるもの也三才圖會云坐罟板罟提罟其三制俱相似惟坐罟稍大矣　もち網は池塘江湖の中舟をつなぎ或は作レ架漁人あみを引上る也

うしみつ過る　因果　舟橋に注す

火車に業つむかす苦しめて　法事讃曰無量刀林當レ上而下火車爐炭十八苦事一時來迎矣〇拾火の車けふは我門やり過てあはれいつちにめくり行らん

目の前の地獄も誠なり　榮花物語玉臺卷云人の心のうちに淨土も地獄もありといふはまことにこそあめれと云々

紅蓮大紅蓮　焦熱大焦熱　うたふに注す

源氏供養

世傳安居院法印の書る表白といへる一卷の書あり此唄は此表白を以て作る成べし然るに源氏物語は一部皆寓グウゲン言とはいひながら下心には世の人の色にそみ香にめで給ふ事を名をかへ品をかへて作る也此物語を天台の四門に表し或は不可說の物語共い

へりされば源氏の君をはじめ世の人々の爲且は作者式部の追善菩提の爲にとて彼一巻の表白を書るといへり依レ去此斋をば源氏供養とは名付るものならし　光源氏物語は紫式部作也河海抄云此物語のおこりに説々ありといへ共西宮左大臣安和二年太宰權帥に左遷せられ給ひしかば藤式部おさなくよりなれたてまつりて思ひなげきける頃大齋院（選子內親王村上女十宮）より上東門院へめづらかなる草子や侍ると尋申させ給ひけるにうつぼ竹取やうの古物語はめなれたればあたらしくつくりいだしてたてまつるべきよし式部に仰られければ石山寺に通夜して此事をいのり申けるに折しも八月十五夜の月湖水にうつりて心のすみわたるまゝに物語の風情空にうかびけるをわすれぬさきにとて佛前にありける大般若の斷紙を本尊に申受てまづすまあかしの兩卷を書はじめけり是によりてすまの卷に今宵は十五夜なりけりとおぼしいでゝとは侍るとかや後に罪障懺悔のために般若の一部六百卷をみづからかきて奉納しける今に彼寺にありと云々光源氏を左大臣になずらへ紫上を式部が身によそへて

周公旦白居易のいにしへをかんがへ在納言菅丞相のためしをひきて書出しける成べし云々　孟津抄序云光源氏物語は寛弘の始にいできて康和の末にひろまりにけるより世々のもてあそびものとして所々のまことゝなれりと云々日本の至寶萬法いづれか是にもれんや殊更敷島の道の深義は一部にきはまり侍るとなれば意味ふかし（下略）　花鳥餘情云源氏物語は式部が父爲時が作也其女も加筆也と云々又宇治殿物語にも越前守爲時源氏は作りたる也こまかなる事共を女にかゝせたりとぞ云々　然共紫式部が作と云事諸抄に出たり殊に三光院殿說に爲時が書とは非也と云々　又順德院も御同說也と云々紫式部は勸修寺元祖良門より五代越前守藤原爲時女母は攝津守爲信女堅子と號す河海抄云紫式部は鷹司殿の宮女也相繼て上東門院に陪侍す後に右衛門佐宣孝に嫁して大貳三位辨局を生云々　袋草紙云紫式部と云名二說あり一には此物語の中若紫の卷を作る甚深きの故此名を得たり一には一條院御乳母の子也上東門院にたてまつらしむるとて吾ゆかりの者也哀と思食と申さしめ給ふのゆへ此

名あり武藏野の義也云々「紫の一もとゆへに武藏野の草はみなから哀とそみる　河海抄云式部舊跡正親町以南京極西頬今の東北院の向也此院は上東門院の御所の跡也云々又云式部墓所は雲林院白毫院の南にあり小野篁が墓の西也宇治寶藏日記にも紫野にあるよし見えたり云々

衣も同じ苔の道石山寺に參らん　苔の衣といひかけたり新古今增抄云苔の衣とは出家の衣也と云々陸詞切韻云苔水衣也矣　石山寺は田村に注す●（拾玉）山川に流れ久しき谷陰に苔の衣をきぬ岩ぞなき

是は安居院の法印にて候　◎世傳安居院法印は叡山竹林房法印聖覺の事也といへり今案安居院法印を聖覺と治定する事いぶかし聖覺は澄憲の子也澄憲をも既に安居院の法印とよびし也大系圖云澄憲少納言入道信西第十三之男母高階重仲女也號二安居院法印一平治元年配二下野國一建仁二年八月六日入滅矣　安居院と云所は一條北小路の外大宮通の東也昔此所に安居院とて有今は絕て町の名とす澄憲は東塔北谷竹林院に住す彼安居院は竹林院の里坊なり依て澄憲を安居院法印と號す山僧筆記云澄憲從二丹後已講珍仁一受レ法安居院洛陽住房山上東塔北谷竹林院其房也矣私云世に澄憲を安居院法印とよびし又聖覺も安居院法印とよびし也此謠の安居院は聖覺を指て云歟追て尋ぬべし　法印は職原抄云准二四位殿上人一大和尚位矣　清和天皇貞觀六年二月始法眼法橋法印等の僧位を定らる三代實錄に見えたり

觀世音は三井寺に注す花の都は田村に注す白川は角田川に注す音羽の瀧は田村に注す有明は高砂に注す

影もあなたににほの海　にほの海は近江の水海を云也惣て湖をにほの海といへり沙海の日和よきをおしてるといひ水海の日和よきをにほてると云也或說云此湖に鳰鳥多くすむゆへに鳰の海と云也云々　本草綱目云鸊鷉湖溪多似レ鳧而小大如レ鳩蒼白文多レ脂其膏塗二刀劍一不レ鏽其脚如二鴨脚一而連レ尾不レ能二陸行一常在二水中一人至卽沈矣●（新拾）にほの海やひえの山風さゆるよの空より氷る有明の月（僧正慈能）

さゝ浪やしか辛崎の一松は三井寺に注すなふ〳〵は江口に注す

我石山にこもり源氏六十帖を書しるし　細流云凡此物語は天台の本疏に擬すと云也然らば天台の本疏は六十卷也今此物語は五十四帖也不審あるに似たりされ共五十四帖にて六十卷に當る甚深の義ある由故寂光院申されしを未ニ尋窮一六十卷に書たるよりもかへりて深重の妙理ある事也云々一云源氏物語は六十帖といへ共五十四帖也其所謂は第二十六卷を雲隱の卷と號す幷の卷五帖あり共に名のみ殘りて此卷なし依て五十四帖にて終れり云々

なき跡迄の筆のすさみ　筆のすさみとは慰む心也手すさみ口すさみの類也　長六文云風すさむは荒き心なり雨降すさむは雨の晴たるを云也駒もすさめずとよめるは用儀なり戀などにすさむるは捨る事也云々　詞林三知抄云風すさむはあるゝ事也風吹すさむといへばやみたる事也雨乾はつよくふる事也ふりすさむといへばやみたる事也駒もすさめすは草などはまぬ事也手すさみはもてあそびたる事也と云々●拾遺愚草いつ我も筆のすさみはとまりゐて又なき人の跡といはれん

供養　慈恩大師通賛云供養者進レ財行レ供有レ所ニ攝資一爲レ養矣　弘決云以レ下薦レ上爲レ供以レ卑資レ尊曰レ養矣　勝天王般若經曰以レ法供ニ養如來一名ニ眞供養一矣

はづかしや此身は浮世の土となれ共名をは埋まぬ昔の下　白氏文集云遺文三十軸軸々金玉聲龍門原上土埋レ骨不レ埋レ名矣○續後撰埋れぬ名をたにきかぬ昔の下に幾度草の生かはるらん慈鎮

夢にうつろふ紫の色ある花も一時の　袖中抄云くれなゐ紫共に色かへりて物にうつるものなりと云々

枯野の萩もとのあらましする通らは　是は古歌にもと荒の小萩とよめる詞をつゞけたり枯野は冬也もとあらの小萩とは去年の古枝に咲るを云也小萩と云て今年生じたる萩よりも枝さしもすくみこは〳〵しきそれが中に大小あればちいさきをもと荒の小萩とよめり一說秋ふかくなりて下葉の散すきたるをあら萩と云也岷江入楚　後水尾院詠歌大概抄云もとあらの萩は古枝よりまばらに生出たるを云又下葉のちりたるを云也畢竟本のあらくすきたる也もとあらの櫻本あらの竹などよめり云々○

月清
棹鹿も分こぬ野邊の古郷にもと荒の小萩枯まくもおし

起もせすねもせてあかす此夜はの　　〇伊勢起もせすねもせてよはを明しては春のものとてなかめ暮しつ

光源氏の跡とはん　　源氏君は太上天皇の御子也母は桐壺の更衣とて某の大納言と申せし人の娘也源氏三歳の時御母におくれさせ給ふ七歳の比より學問始給ふに博學にて渡せ給ふ也此君を高麗人見奉りて玉のごとくに光り給ふとて光源氏と名付し也十二歳にて元服其時源氏の姓を給はり人臣になし給ふ御子三人あり夕霧大將明石の姫君薫大將也一生好色をたのしび五十餘歳にて終せ給ふ也是物語の趣也光源氏と云名は葵上に注す

何をか布施に參らせ候へき　　布施は梵語云二檀那一法界次第云奉言二布施一有二二種一一者財施二者法施財施者所謂飲食衣服田宅六畜奴婢珍寶一切己之所有資身之具及妻子乃至身命屬レ他爲二他財物一故云二捨身一猶屬二財施一有二所須一者悉能施與皆名二財施一也法施者若從二諸佛及善知識一聞レ說二世間出世間善法一若從二經論中一聞若自以二觀行一故知以二清淨心一爲レ人演說皆名二法施一矣

哀れ胡蝶のひと遊び夢の內なる舞の袖　　莊子が古事をふくませたり舟橋に注す拾芥抄云胡蝶樂高麗壹越調曲也矣　體源抄云胡蝶樂延喜六年八月太上法皇覽二童相撲一之時忠房朝臣作レ之敦實親王作レ舞矣　花鳥云蝶は宇多院の御時つくられし舞也李部王記に見えたり云々　童部のひたいに作りやまふきをかざり蝶の羽をきてまふ也云々

それ無常といつは目の前なれ共形もなし　　唐因明正理論曰本無今有暫有還無故名二無常一矣無常の事墨田川に注す

一生夢のことし誰あつて百年をおくる　　白玉蟾集云人生無二百年一能有二幾一日一况百年三萬六千日矣此意盛久及邯鄲に注す

槿花一日唯おなし　　朝顏に注す

爰に數ならぬ紫式部　　數ならぬとは人にかずまへらるゝ程の人ゝ云事也無官の人のいふは勿論にてよろしからず卑下の言葉也耳底記云貴人ならぬ人の數ならぬなどよまぬもの也そのゆへはなんでもなければ也數ならぬなとゝよむは貴人高位の人の

事也久我大將殿愚庵と名を御付ありたるを稱功院
わらひ給ふ也愚極といひて唐日本に二人の名僧有
至極の智者なるが故也云々
今逢かたき緣に向て心中の所願を起し一つの卷物に
寫し　逢がたき緣とは式部の幽靈安居院法印にあ
える事を云也一つの卷物とは彼表白を云也此表白
は世に安居院の法印の作といへり又或說に一條禪
閤兼好公の作ともいへり何れか是なる
無明の眠をさます　大乘義章云言ニ無明一癡闇之
心體無ニ惠明一故曰ニ無明一矣　止觀曰無明只是法性
如ニ融レ氷爲レ水覺ニ無明眠於中一矣
南無は實盛に注す抑は高砂に注す
成等正覺　如來の十號の內に等正覺（トウシヤウガク）と云號有　一
如云平等開ニ覺一切衆生一成ニ無常覺一故號ニ等正覺一
矣法界の衆生を悉平等に助け給ひ自もさとりを得
給ふを等正覺と云也
抑桐壺の夕の煙すみやかに法性の空に至り　是は
表白の發端の詞也但表白には抑と云字なし　桐壺
とは源氏物語の最初の卷の名也卷の詞に源氏の御
母桐壺の更衣むなしく成給ひ例の作法に納め奉る
を母北の方おなじ煙にものぼりなんとなきこがれ
給ひてと有此詞により桐壺の夕の煙とはつゞけた
り法性の空とは煙は空にのぼるものなれば法性を
空にたとへて成佛得脫する事を空に至るといふな
り　止觀云如中道草離ニ二邊水一出纒池月處ニ法性
空一矣　榮花物語云見佛聞法の緣源き心地してかな
しくなんあふぎてみれば法性の空はれぬと云々
桐壺は大內の淑景舍を云也五舍の一つ也拾芥抄云
淑景舍東二桐壺或南北各五間四面矣桐壺とは桐
を植らるゝ故にしかいふ也禁秘抄云桐近年不レ見
但荒廢之間每レ庭有レ桐矣　私云藤壺も藤を植らる
ゝの名也梅つぼ梨つぼ等も同し
帚木の夜のことの葉は終に覺樹の花散ぬ　表白に
は終に覺樹の花をひらかんと有帚木は源氏の卷の
名也夜のことの葉とは卷の詞に雨夜のしづかなる
に源氏若頭中將右馬頭式部など女の上中下の品々
をかたる是によりて夜のことの葉とはつゞけたり
是を品定共云也此品定の上中下を法花の三周の說
法と見る也故に覺樹の花をちらせる也ちるとは花
の落るに非ずこと葉の花をちり／＼にくばる也覺
樹は菩提樹也釆女に注す
空蟬のむなしき此世をいとひては　空蟬に卷の名

也源氏君中川の宿にて空蟬の寢間へしのび入給へ共薄衣をぬぎてのがれ出しゆへ蟬のもぬけにたとへて彼女の名をうつせみと云也〇空蟬のみをかへてける木の本に猶人からのなつかしき哉 源氏空蟬巻

夕貞の露の命を觀し　夕顔に注す

若紫の雲のむかへ末摘花の臺に座せは　表白に若紫の雲のむかへをえて末摘花の臺に座せしめんと有若紫もすへつむ花も卷の名也若紫の雲のむかへとは紫雲の心也聖衆來迎の心によせたり末摘花の臺とは九品蓮臺の心也 新千 おろか成身はしもなから紫の雲のむかへをまたぬ日はなし

紅葉の賀の秋の落葉もよしやたゝ　表白に紅葉の賀の秋の夕には落葉を望て有爲をかなしびと有紅葉の賀は卷の名也說文曰賀以レ禮相ニ奉慶ー也矣字彙云以ニ禮物ー相慶曰レ賀矣　賀をつとむる事自身にする事には非ず外より賀し申事なり花の賀紅葉の賀とて賀の字を濁りて唱ふる事淸て云時は匂ひの香にまぎらはしきゆへに濁りてとなふる也　岷江入楚云凡賀とは其年の滿數を賀して行末の實筭を祈る心也春するを花の賀と云秋するを紅葉の賀と云也それならぬ御遊を花の宴月の宴と云べき也賀とはいふべからずと云々　愚見抄云賀の年をとしみと云也年滿也と云々　稱名院云賀は四十歲にて始て是をがする也四十の四文字を忌て五八の賀と云也云々　岷江云天皇御賀始は仁明帝嘉祥二年三月興福寺大法師等奉レ賀ニ天皇寶算滿ニ四十ー太上天皇御賀始淳和帝天長二年十一月奉レ賀ニ太上天皇五八御齡ー也矣

適佛意にあひなから榊葉のさして往生を願へし　表白云適佛敎にあふひなり榊葉のさして淨刹をねかふべしと云々榊は卷の名也野宮に注す榊にさすといへるえん也

花散里に住とても愛別離苦の理まぬかれかたき道とかや　表白云花散里に心を止むといへ共愛別離苦の理をまぬかるゝためしなしと云々花散里は卷の名也愛別離苦は八苦の中の一也　法花譬喩品曰愛別離苦是故會者定離矣釋迦譜曰苦中之甚莫レ若ニ恩愛離別之苦ー矣 花散里 ●橘の香をなつかしみ時鳥花散里を尋てそとふ 源氏君

唯すへからくは生死流浪の須磨の浦を出て　是表白の詞也須磨は卷の名也源氏君須磨へ流浪し給へ

る心をいへり耿楚侗曰生不レ知二來處一死不レ知二去處一便至二流浪顛倒一矣大惠書云流二浪生死一不レ得二自在一矣　須磨の浦は津國の名所也忠度に注す

四智圓明のあかしの浦にみをつくし　一明石も澪標(ミヲツクシ)も巻の名也　四智者一大圓鏡智あきらかにさとりたる時は鏡中にゐろ／＼の色像うつり見ゆるがごとし二平等性智一切の萬法を觀ずる時は是非の相をたてず平等一理とさとりしる智惠也三妙觀察智よく萬法を觀じて無礙自在に濟度利益するを云四成所作智因中の本願力を以て其なすべき事を終に成就圓滿するを云也此四智の事佛地經及唯識論等に見えたり具なる義略レ之圓明とは此妙智によく達する故に圓明と云なり心地觀經曰諸相好一々遍二滿十方界一四智圓明受二法樂一矣一流に種智圓明とうたふあり種智とは一切種智とて佛の三智の一也大品般若經曰一切種智是諸佛智矣　表白には四智圓明と有されば此謠は表白を以て作るなれば四智とうたふへし本文にあひかなへり　澪標とは江海の深き所に木を立て深き淺きの程をしる也みをぎ其云り萬葉に水咫衝石と書河海抄云國史難波江始立二澪標一注云澪は水の深き所也標はしるし也と云々　みをつくしを戀の詞にいひかけたる時はみをつくしのつの字淸也此謠のみをつくしも淸てうたふが然るべき歟 明石の浦は播磨の 名所也 安達原に注す〇源氏みをつくし戀るしるしに爰迄もめくり逢ぬるえにはふかしな

唯蓬生の宿なから菩提の道をねかふへし　表白云蓬生の草村を分て菩提のまことの道を尋んと云々蓬生は巻の名也　郁伽長者經曰修二習無上菩提之道一皆因二出家一得二無上道一矣〇拾いかてかは尋きつらん蓬生の人もかよはぬ我宿の道

松風の吹とても業障の薄雲は晴る事更になし　表白云松風に業障の薄雲を拂はざらんと云々松風も薄雲も巻の名也業障の薄雲とは佛性法身は月の如し是をかくすを業障の雲と云也業障を雲にたとへ或は露霜にたとふる事多し

秋の風消すして紫磨忍辱の藤袴　表白云慈悲忍辱の藤袴をきと云々　藤袴は巻の名也蘭を袴によせたり蘭は秋草也雲林院に注す佛の御姿は紫磨黄金のはたへの上に慈悲忍辱の衣を着し給ふ也故に紫

磨忍辱の尊容と云也紫磨は孔融聖人優劣論曰金之精者名曰二紫磨一猶二人之有一レ聖也矣　續博物志云華俗謂二上金一爲二紫磨金一夷俗謂二上金一爲二楊邁金一矣　忍辱は葵上に注す○同し野の露にやつるゝ蘭(ふぢばかま)哀れはかけよかこと計も

上品蓮臺に心をかけてまことある七寶莊嚴の卷柱の本にゆかん　㊧　表白云上品蓮臺に心をかけて七寶莊嚴の眞木柱のもとに至らんと云々　卷柱は卷の名也　上品蓮臺とは極樂の九品の內の上の三品を云也　七寶は無量壽經曰金銀瑠璃珊瑚琥珀硨磲碼碯矣　彌陀經曰金銀瑠璃玻瓈硨磲赤珠瑪瑙矣　恒水經曰金銀珊瑚眞珠硨磲明月珠摩尼珠矣　其外佛地論大論等を見るに七寶にかはりあり略レ之大本曰講堂精舍宮殿樓觀皆七寶莊嚴化自然化成矣　まき柱とは源氏物語には只眞木の柱也爰は色々にかざりて卷たる柱也觀經の上品に行者の臨終には淨土の宮殿もむかひ來る事を說給ひし故に今俗に來迎柱と云也

梅か枝のにほひにうつる我心　表白云梅がえのにほひに心をとゞむることなくてと云々　梅がえは卷の名也○色につき匂ひにめつる心共梅かえよりやうつりそめけん　玉　俊成

藤の裏葉に置露のその玉葛かけしはし權の光たのまれす　表白云淨土の藤の裏葉をもてあそぶべしと云々又云乙女子が玉葛かけても猶たのみがたしと云々　藤の裏葉も玉葛も朝顏も卷の名也謡の心は藤の裏葉に置露の玉とうけて扨かつらを藤かづらに取なしたり露の玉かづらを掛てしばしの間ながむる心はあやうき命ぞと也依て朝顏の光賴まれずとはつゞけたり○雨ふれば藤の裏葉に袖かけて花にしほるゝ我身と思はん　新拾　俊賴

朝には栴檀の陰にやどり木名も高き　㊥　表白云朝には栴檀の陰にやどり木とならんと云々やどり木は卷の名也栴檀は蟬丸に注すやどり木とは一の木に又外の木のやどり生るを云也倭名抄云毛詩注蔦寄生矣　本草寄生一名寓生　和名夜止里木矣(やとり木)やとり木と思ひ出すは木のもとの旅ねもいかにさびしからまし

司位(ツカサクライ)をあつまやのうちにこめて　表白云つかさくらゐをあづまやのうちにのがれてと云々　あづま

やは巻の名也宇治十帖の内也四阿は浮舟あづまよりのぼり給ふ時の宿也薫中將の歌を以て巻の名とせり但司位を四阿の内にこめてとは薫中將などの昇進の心をこめたるにや四阿は葵上に注す

たのしび榮へと浮舟にたとふへしとかや是も蜻蛉の身成へし　表白云たのしび榮へを浮舟にたとふべし是も蜻蛉の身也云々浮舟も蜻蛉も巻の名也浮舟とはよるへなくはかなきたとへなり浮舟に注す岷江入楚云かげろふは詩にも色々にいひて一樣ならず遊絲又野馬などいへりされど莊子にも野馬は塵埃也といひて天地の氣のごとくなるもの也或は陽炎共云是も日光の煙のやうに見ゆるを云也或は又能因歌枕には春の空にとぶ虫をいへる也軒端にあそぶかげろふとは是歟もゆる春日とよめるは陽炎也軒端にあそぶとははかなき虫也朽木の雨の雫の陰氣に生じてちら〳〵と見ゆるものはるればなくなるもの有列子にいへるもの也是も虫也と云々

夢の浮橋を打渡り　表白云夢の浮橋の世也と云々夢の浮橋は源氏一部の終の巻の名也一名法の師共云也岷江云此巻を夢の浮橋と題する事詞にも歌にもなし凡夢の浮橋とつゞけたる事是より始る歟夢の渡の浮橋かとある歌に付ていへるかと云々此巻源氏一部の眼也と諸抄に記せり此物語の志色にふけり是を書るにあらず只無常迅速の理を明し盛者必衰の理をしらしめんが爲也夢とはむなしき心有無の說法いづれも夢にあらずと云事なし

身の來迎を願へし南無や西方彌陀如來狂言綺語を振捨て紫式部が後の世を助け給へと諸共に鐘打ならして廻向も既に終りぬ　表白云朝な夕なに來迎引接をねがひ南無西方極樂彌陀善逝ねがはくは狂言綺語の誤をひるがへし紫式部が六趣苦患をすくひ給へ南無當來導師彌勒慈尊必轉法輪の緣として是をもてあそばん人は安養淨刹にむかへ給へと也と云々狂言とはたはふれたる詞綺語はかざりたる詞也白樂天云願以二今生世俗文字之業狂言綺語之誤一飜爲二當來世々讚佛乘之因轉法輪之緣一（見二白氏文集七十一卷一）此心は口にまかせていひたきまゝに俗語の文字をつゞりて詩などを作るかやうの詞も其語をひるがへして當來世には成佛の緣となさんと也今此謠も樂

天に比して式部が源氏物語一部寓言ながら成佛の爲と廻向する也今物語云ある人の夢にその正體もなきもの影のやうなるが見えけるをあれは何人など尋ねければ紫式部なりそらごとをのみ多くし集めて人の心をまどはす故に地獄におち苦をうくる事いとたへがたし源氏の物語の名を具してなもあみだ佛と云歌を卷毎に人々によませてわがくるしみをとふらひ給へといひければいかやうによむべきにかと尋ねけるに「きりつほにまよはんやみもはる計なもあみた佛と常にいはなん　とぞいひけると云々　寳物集云紫式部が虚言を以て源氏物語を造りたる罪によりて地獄に墮て苦患忍びがたき故に早く源氏物語を破り捨て一日經を書て弔へしと人の夢に見えたりけるとて歌よみ共寄合て一日經書て供養しける下略

我も生れん蓮の花のえんは賴もしや　花の宴は卷の名也　花鳥餘情云村上天皇康保二年三月植ニ櫻樹於南殿ニ有ニ花宴ニ詠ニ古詩ニ誦ニ新歌ニ矣　此例を以て花の宴と作りなせると也云々　國史云弘仁三年二月辛ニ神泉苑ニ有ニ花宴ニ矣是始也委く上に記す

實や朝は秋の光り夕には影もなし朝顔の露稻妻の影

朝は秋の光りとは朝顏をいはん爲也夕には影もなしとは稻妻をいひ出ん爲也何れもはかなきたとへ也　稻妻はいなびかりの事なり　淮南子云陰陽相薄感而爲レ雷激而爲レ電矣　莊子云有レ聲曰レ雷無レ聲曰レ電矣　萬寳全書云大暑前後有レ電早稻薄收晩稻必大熟矣　私云稻の實のるをはらむといふに付て電を稻妻とも稻の殿共いふ也〇壬生二品詠むれは風吹野邊の露にたにやとりも果ぬ稻妻の影

いつれかあだならぬ定めなの浮世や　あだならぬとはよろしからずあたならんといひて然るべし

紫式部と申は彼石山の觀世音かりに此世にあらはれてかゝる源氏の物語り　河海抄云紫式部は觀音の化身也と云々岷江同レ之　順德院御記云源氏物語は不レ可レ說の物也更に凡人の所爲に非すと云々　法成寺入道關白奥書云此物語世に皆式部が作とのみ思へり老比丘筆を加るところと云々　水鏡云紫式部が源氏物語作り出して侍るは更に凡夫の所行とは覺え侍らず日本紀を初とし諸家の日記に至るまで

明かに悟りもちて時の人日本紀の局と號し侍りけり下略

鵜飼

世傳云甲斐國山梨郡石和(イサ)川は殺生禁斷の所なるに夜毎にしのび出て鵜をつかひけるものあり里人是をとらへてつみにしづめたり聖人不便におぼしめされ法花經一部一石に一字づゝあそばして御とふらひ有けりかの鵜つかひは申に及ばず一石一字の川水をのめるうろくずまで皆解脫を得ずといふ事なかるべしと云々

是は安房の淸澄より出たる僧にて候　此僧は日蓮上人を云也　安房の淸澄は淸澄寺とて上人の師の房をいふなり　傳云日蓮姓者三國氏房州東條之鄕小湊之人也父者貫名左衛門重忠母者淸原氏夢日光耀ニ胸上ニ因孕後堀川院貞應元年二月十六日產童名善日丸矣稚頻悟也歲十二投ニ于淸澄山道喜ニ爲ニ弟子ニ嘉禎三年十月十八歲剃髮受戒號ニ日蓮ニ三十二歲發ニ大道利生之志ニ唱ニ七字之妙號ニ始建ニ法華宗ニ道喜妬レ之同群之刺史與ニ東條左衛門景信ニ相議追ニ淸澄ニ日蓮出レ寺來ニ相州名越松葉谷ニ營ニ草宇ニ盛立ニ法華宗ニ進ニ題目ニ時人或信或毀時去歲風雨洪水荐饑死日蓮以爲天災係ニ我宗之廢棄ニ作ニ安國論一卷ニ就ニ宿谷左衛門最信ニ獻ニ時賴ニ當ニ是時ニ時賴崇ニ禪法ニ不レ信ニ他法ニ且書中見レ有ニ我宗輕慢之文ニ怒以ニ日蓮流ニ豆州伊東崎ニ被レ赦之後入ニ甲州身延山ニ構ニ一宇ニ弘安五年壬午十月出ニ身延山ニ移ニ武州池上ニ居頃之寂年六十一ニ骨納ニ身延ニ矣　安房國は舊事紀云安房國志賀高穴穗朝御世天穗日命八世孫彌都侶岐孫大伴直大瀧定ニ賜國造ニ矣　續日本紀云元正天皇養老二年五月甲午朔乙未割ニ上總國之平郡安房朝夷長狹四郡ニ置ニ安房國ニ矣　大和本紀云安房國此國は海手上たる處又水上に白き物を云レ泡此國は水より上に白く見ゆる故に安房といへり假名書也淡國也云々

甲斐國は梅枝に注す行脚は屋嶋に注す

行するいつとしら浪の安房の淸澄たち出て　白浪の淡とつゞけたり安房國の住をふくめり

六浦(ムツラ)の渡り鎌倉山やつれ果ぬる旅すがた　六浦

は鎌倉八景の內也金澤の近所也東鑑に六連(ムツラ)と書鎌倉九代記に六面と書專光寺の東の民村也村の西北より流れ出る川を六浦川と云なり鎌倉は一在所々をやつと云やつは谷也依てやつれ果ぬるとつゞけたり相州鎌倉は北南へ遠き所也東は山西は海也谷々に構ニ民屋ヲ岩石を切通して塀とす入口有ニ七處ニ郷有ニ七郷ニ　詞林采葉云鎌倉とは鎌を埋む倉と云詞也昔大職冠未鎌足と申せし比宿願の事ましますにより鹿嶋參詣の時此由比の里に宿し給ひける夜靈夢を感じ年來所持し給ひける鎌を今の大藏の松岡に埋み給ひけるより鎌倉と云文略　貞德百人一首抄云或說に鎌足誕生の時狐鎌を枕上にをく鎌は天津兒屋根命の鎌也狐は鹿嶋明神也鎌足は勝軍地藏也此鎌を埋む地を鎌倉と號す是より鎌倉の武威代々也云々　東關紀行云源親行　抑鎌倉のはじめを申せば故右大將家と聞え給ふ水尾の御門の九の世のはづえをたけき人にうけたりさりにし治承のするにあたりて義兵を揚て朝敵をなびかすより恩賞しきりに瀧山の跡を續て將軍のゆるしを得たり營館を此所にしめ佛神をそのみぎりに崇め奉るより

このかた今繁昌の地となれり云々

都留(ツル)の郡　都留の郡は甲斐國也郡內絹出る所也童蒙抄云甲斐國のつるの郡に菊おひたり山ありその山の谷より流るゝ水菊をあらふ是によりてその水をのむ人はいのち長くして鶴のごとし依て郡の名とせりかの國の風土記にありと云々　新千 ●信か爲命かひにそ我は行つるのこほりに千代はうる也

生澤(イサワ)忠岑　同國山梨郡也伊澤(イサワ)共石和共書同

鵜舟にともす篝火の後の闇路をいかにせん　後の闇路とは殺生の罪を犯ゆへに後の世は如何あらんと思ひやる也　拾葉抄云諏訪勍驗歌に鵜舟にともす篝火も後の闇路を照すべき光や和光のしるべならん上下略　漢書陳勝傳云夜篝レ火矣　倭名抄云漁者以レ鐵作レ篝盛照レ水矣　或云鵜は孝德天皇の御時よりつかひ始ると云々いかにせんと云詞は善知鳥に注す ●千早瀨川みをさかのほる鵜飼舟先此世にもいかゝ苦しき崇德院

遊子(ユウシ)伯陽(ハクヤウ)は月に誓つて　朝顏に注す　藻鹽草云鵜月の夜比をいとひ闇に成夜を悅へは

をつかふは暗夜のわざ也されば月をいとふといへりと云々○風月影に鵜舟のかゝり指かへて曉闇の夜川こく也爲藤

今は先非をくゆれ共　まへかたのあやまりたるをくやむ也莊子曰蘧伯玉行年六十而知ニ五十九年非一矣傳心法要云枉用ニ三十年功夫一今日方省ニ前非一矣

此御堂にとまりて候　石和村に鵜飼山遠妙寺とて有身延派也生澤川に近し此御堂とは遠妙寺を云也

見申せは早拔群に年たけ給ひて候か　拔群とは衆人にぬけ出るを云也陸士衡謝ニ平原内史一表曰擢レ自ニ群萃一註呂向曰言レ拔ニ於羣衆之中一矣　白氏文集六十二曰才高拔レ俗行茂出レ群矣　高僧傳曰惠岸法師婁貞挺特有ニ拔群美一矣

かゝる殺生のわざ勿躰なく候　下學集云勿躰勿无也勿躰之二字即无ニ正躰一義也然日本俗云レ无ニ勿體一者大失ニ正理一也子細可レ思レ之矣　今案君父を蔑にし神明を侮等をもつたいなしといへり然るに無ニ勿體一と書は重言也無ニ物體一と書べし古き和書を見るに多く無ニ物體一とかけり

岩落　生澤川のすその里を云也

一夜けしからずせつして候ひしよ　せつしてとは攝の字を書歟攝はおさむと訓舊抄には接の字を書いぶかし但制してといふをあやまりたる歟けしからずと云詞は墨田川に注す

一殺多生の理に任せ　たとへばひとつを殺して多きを助くる也　七書尉繚傳曰殺ニ一人一而三軍震者殺レ之殺ニ一人一而万人喜者殺レ之殺レ之貴レ大賞レ之貴レ小當レ殺而雖ニ貴重一必殺レ之是刑上究也矣

柴漬（フシツケ）にし給へば　藻鹽草云ふしつけとは水に柴をきりつけてそのあたゝまりに魚をあつめて取也柴ならね共只木の枝をも水につくる也罧涔書日本紀に柴と書てふしとよめり云々　說文曰罧積ニ柴水中一以聚レ魚也矣　爾雅曰謂ニ之涔一註今作レ罧者積ニ柴水中一魚得レ寒入ニ其裏一藏隱因以薄圍ニ取之一矣　但爰にて柴漬といふはすまきにして水にしづめたるを云也○夫泉河水のみわたの柴漬の柴間の氷冬はきにけり

抑は高砂言語道斷は安宅罪障懺悔は實盛に注す

是は他國の物語　當所にて其所の事を語るに是は他國の物語と云はよろしからず案ずるに爰は殺

生の罪により地獄に墮する物語なれば是は墮獄の物語と云義なるべし

しめる松明ふり立て　水邊なればかくいへり松明の作りやうさまゞゝあり　篠才藏傳云五里松明は櫟を貳尺五寸に切細に割油をぬりて干つけ其上を醬酒にて生腦をとき七返塗ては干付塗ては干かはらけて細繩にて揺籠はどに結束火口を細に割かけ硫黃を生にてとき火にて煮とろかし火口へ塗べし明の火にてもほくちにても其儘火を付ともす爲也又風雨の時用心の松明は櫻の皮を厚くへぎ硫黃の粉を醬酒にてとき煮て三返程塗ては干付々々長さは二尺程にして太さは七八寸廻にして古つぎを繩にして所々結びそれへも生腦と松脂とを塗干付て持也云々其外楯松明水松明の秘方あり略レ之何れも軍陣の時是を用ゆる也

藤の衣の玉たすき　玄旨新古今抄云藤衣に二義有一には服衣一には山賤などの麁相なる衣をいふ云々　万葉集にしほくむあまのふぢ衣と詠り是は賤き者のきる衣也賢木卷云ふぢの御ぞにやつれ給へるにつけてもと云々是に服衣也河海抄云藤の御ぞは服者着物也云々明星抄云藤の皮にて織れる布也云々爰にうたふ藤衣は麁相なる衣を云也玉だすきは玉は美稱の詞也一說にたとへば肩などを玉のやうに一にぎりくゝりたるを玉だすき共云也（峯白集）紫の糸しておれる藤衣たれ山かつのものといひけん

島津巢おろし荒鶚ども　㊌鶚は島及津に巢をくむ也依て鶚を島津鳥と云也楊貴妃に注す巢おろし荒鶚とは巢よりおろして始てつかふをいへりまたつかひなれぬ鶚をあら鶚と云なり万葉仙覺抄云押紙云眞鳥とは鶚の一名也眞鳥は海の鶚をいふ河鳥は河の鶚也云々

おとろく魚を追廻し　魚を取具におひまはしと云もの有其形繩をあみて兩の端を長き竹にむすび留て二人して彼竹を持て川に入り魚をよせ集也是をおひまはしと云也三才圖會に罔する處是也提網と書音于追也於二淺川一追二樹小魚一也云々

漲る水のよどならばいけすの鯉やのぼらん　よどは水のよどみたる所を云　文選江賦注云澱與レ淀古字通如レ淵而淺處也矣下心は山城の淀をいひかけたり此所鯉の名物なれば也いけすは籞に青魚をすにいけておけばいけすと云也　唐韻曰籞池水中

編ニ竹籬一養レ魚也矣　陶朱養魚經曰凡魚遠行則肥池中養レ魚者慮ニ其瘦一聚ニ石於池中一作ニ九島一魚繞レ之日々行千里矣　鯉魚本草曰三十六鱗魚之貴者也矣
新千●たえてしも浮世の網にかゝるみのいけすの魚をよそにやは見ん爲廣
六帖●淀川にいけてつなける鯉を見よ誰も此世は哀いつ迄
玉島河にあらね共小鮎さはしるせゝらぎにかたみて魚はよもためし　神功皇后三韓征罰の時肥前國松浦玉島川にて鮎をつり給ふ事日本紀に見えたり女郎花に注す　玉島の里は松浦郡濱崎の驛より南の方半里計にあり玉島川其前にながれ濱崎に至りて海に入此川玉島里の邊にて兩派ありて一は七山と云所の上よりなかれ一は平原村と云所の上より流れ出る但し平原の流れは七山の流れよりも小し故に日本紀に是を小川といへり玉島里の下にて二の川合て一になりて流る小川の側に神后の鮎を釣給ひし所あり始は深き淵なりしか近き頃洪水出て沙土うつまりて淺くなりぬ神后の上りて魚をつり給ひし石とて河中に方三尺計の石あり此玉島川の年魚は他所にかはりて脐多く吻クチハキキ黄にして味ひ甚美也

小鮎は春也若鮎共云　鮎は本草曰鰔魚矣　崔禹錫食經曰鮎魚貌似レ鱒而小有ニ白皮一無レ鱗春生夏長秋衰冬死故名ニ年魚一也矣　さばしるはさは早き也早く走也一說さは助字也
拿白集○大井川さはしる鮎をたかためにくひの八千度あなう世中　せゝらぎは瀉サヽラキ湲濁書溝或は小川の事成べし俗にせゝなぎと云はあやまり也　太平記云せゝらきの水に馬の足冷してと云々　白氏文集悟眞寺云去レ山四五里先聞ニ水瀉湲一自レ茲捨ニ車馬一始渉ニ藍淡灣一矣　文選謝靈運詩云石淺水瀉湲云々注瀉湲水流貌又云石中水流貌矣
風雅●玉島や落くる鮎の河柳下葉うちちり秋風そ吹
家隆

妙なる法の御經を一石に一字書付て　妙なる法とは妙法花經を云也鵜飼の石とて一字づゝ經文を書たる石生澤川より今に出る也文字それ〲にかはれり世に題目石と云也或說に日蓮上人爲ニ平大納言時忠卿菩提一石書ニ法華經文字一投ニ于生澤川一と有尋ぬべし

夫地獄遠きに非ず眼前の境界惡鬼外になし　正法念經曰閻羅獄卒非ニ實有情一以ニ衆生妄業力一故見レ

之矣　般舟讃曰罪人臨終得二重病一神識昏狂心倒亂
地獄芬々現二眼前一矣榮花物語玉臺巻云人の心の內
に淨土も地獄も有といふまことにこそあめれ云々
されば鐵札數を盡し金紙をよごす事もなく　閻魔王
宮にて重罪の者を鐵の札に記し地獄に遣し善人を
ば金の札にしるして善所へおくり給ふをいへり彼
岸經曰俱生日夜筆二記犯科一告二帝釋一於二時正時一
幸二善法堂一讀二之鐵札一矣　又曰俱生日夜筆二記善
根一告二帝釋一帝釋於二時正時一幸二善法堂一讀二之金
札一矣　涅槃經曰樹下七佛在而彼岸七日間修レ善人
來押二金印一惡人來押二鐵印一閻羅帝釋殿納レ是而其後
修二善根一時七佛持二出此印一而於二十王前一讀二歎罪好
惡一矣　隨求陀羅尼經曰帝釋告曰是人罪不レ可レ量算
數一善金札無二一善一惡鐵札不レ可二計盡一速阿鼻地獄一
可二逐遣一上下略
無間の底に墮罪すへかつしを　名義集云梵語阿鼻
此云二無間一觀佛三昧經云阿言レ無鼻言レ救矣　往生
要集云火焔和雜無レ有二間隙一所レ受苦痛亦無二間隙一
故名二無間一矣　俱舍論曰此南閻浮提下過二二萬由
旬一有二無間地獄一深廣亦二萬由旬獄底去レ此四萬由

旬矣　成論曰明二五無間一下略
一僧一宿の功力に引れ　法苑珠林五十四云引二賢
愚經一云正令得下滿二四天下一寶上其利猶復不レ如下請二
一淸淨沙門一就レ舍供養得レ利殊倍上矣　大論廿二曰
鞞婆尸佛時作二一房舍一以レ物覆レ地供二養衆僧一九十
一劫天上人中受二福樂果一足不レ踏レ地矣
弘誓の舟は藤戸法花の御法の助け舟は兼平實相は江
口眞如の月は山姑に注す
奈落に沈む惡人を　名義集云梵語捺落迦或那落迦
此云二不可樂一亦云二苦具一矣　三界義云梵云二捺洛
迦一此云二苦器一造二惡業一人墮二苦器中一受二諸苦一故
云二苦器一矣
妙の一字は扱いかにそれはほうひの詞にて妙なる法
と說れたり　ほうひのひの字淸てうたふは惡し濁
りてうたふべし褒美也　法花玄義云所レ言妙者褒二
美不可思議之法一也矣　是は法花經を釋したる詞
也大會に記す
經とはなとや名つくらんそれは聖教の都名にて
玄義曰經者外國稱二修多羅一聖敎之都名也矣　都名
とは都は惣而と云心也　釋氏要覽曰經梵音云二修

多羅修妬路秦恒曉一矣　善導玄義曰言ㇾ經者經也能持ㇾ緯得ㇾ成二疋丈一有二其丈用一經能持ㇾ法理事相應定散隨ㇾ機義不二零落一矣　法花玄義曰經者緯義如下世網經以ㇾ緯織ㇾ之龍鳳文成上矣

ふたつもなく三もなく唯一乘の德によりて　　法華方便品曰十方佛土中唯有二一乘法一無ㇾ二亦無ㇾ三矣妙樂記曰無二者通教云半滿相對也但空不但空也但名ㇾ半不但名ㇾ滿矣文句曰無三者藏中之三也三者隨文云聲聞緣覺菩薩也矣　一乘の德とは文句曰純說二佛法圓教乘一矣　一佛乘の事兼半に記す●家ふたつなく三なき法と聞時は五つのさはりあらしとそ思ふ

和泉式部

慈悲の心をさきとして　淨慈要語云與ㇾ樂之謂ㇾ慈拔ㇾ苦之謂ㇾ悲矣　大論曰言ㇾ慈者意存二柔和一被二他所備一不ㇾ生二瞋恨一言ㇾ悲者意存二饒益一善順二物情一矣

實往來の利益こそ他を助へき力なれ　往來の利益とは如來出世の御利益なるべし他を助べき力とは方便品に十如是と云あり其內の如是力とある力也

善知鳥

善知鳥は鶚共書異名よな鳥と云其子をひな鳥といへり人其子を取時は恨みなげきて鳴涙くれない也萬葉集歌に「ますらおのえんひな鳥をうらふれて泪も赤く落すよな鳥　或說云うたふとは鳥の名に非ず雁の子を親の呼聲を云也其故は雁は砂の中に巢を造り子を產置て我さへ其所を覺えざる程に隱し置は獵者の搜さん事を恐るゝ也斯て親鳥餌を與んとて空より其子を呼聲人の歌うたふに似たれば雁をばうたふと名付たりやすかたとは巢の中に子は養れやすらかに居侍ると云事にてやすかたとは云也古歌にも此心をよめり云々　或書云善知鳥は其形方目に似たり味脚も方目に似て頭は鳧のごとし嘴の上に肉角あり赤色也云々　增運古今假字序注云うたふやすかたの子を每年太神宮へ奉る也三角柏に備て神供に參らする也うたふやすかたはかるの子の事也一說黑鴨の子也共此鳥取事子細あり略ㇾ之云々　右說々同じからず何れか是なる

是は諸國一見の僧にて候我いまた陸奥そとの濱を見す候程に　僧の字義は田村に注す陸奥は自然居士に記す卒都濱は索規濱も十三濱も書津經の海邊の惣名也青森の近所の濱に村あり名ニ安濤ー善知鳥多し

立山禪定申さはやと存候　禪定は佛原に注す立山權現は在ニ越中國新川郡ー所レ祭神伊奘諾尊麓大宮也自レ此至ニ絶頂本社ー凡十三里八町　緣起云當權現文武天皇大寶三年三月十五日教興聖人蒙ニ御示現ー開レ之矣　歌にはたち山とよめり

扨も我此立山に來て見れはまのあたりなる地獄の有樣　立山は至てするど也地獄は麓の谷にあり　地獄谷有ニ地蔵堂ー八大地獄各有ニ十六別處ー共百三十六地獄血池水色赤如レ血處々猛火燃起北有ニ劍山ー岩石崎如ニ鋒刄ー云々今昔物語十四云起中國立山と云處に昔より地獄有と云傳へたり其所の樣は原の遙に廣き野山也其谷に百千の出湯有深き穴の中より涌出す巖を以て穴を覆へるに湯荒く涌大なる巖動く熱氣滿て人近付見るに極て恐し又其原の奥の方に大なる火の柱有常に燒て燃ゆ又其所に大なる峰あり帝釋嶽と名付たり是天帝釋冥官の集會し給ひて衆生の善惡の業を勘へ定ける處也といへり其地獄の原の谷に大なる瀧あり高さ十餘丈白布を張に似たり是を勝妙の瀧と名づく然るに昔より傳へて云日本國の人罪を造て多く此立山の地獄に墮といへり云々又云越中國に書生と云者有此者の妻死して立山の地獄におつる事有略レ之　宗祇同國雜記云かくて立山禪定し侍りけるにまづ三途川に至ておもひつゞけゝる「此身にて渡るも嬉しみつせ川さり共後の世にはしづまし　翌日下山のつゐでにもろ〳〵の地獄をめくりけるに熱湯の熾火炎どおり〳〵にあさましかりければ「しての山その品々やわきかへる湯玉もつみの數を見すらん

山路にわかつ衢の數　四方へ行道ある所をちまたと云也說文曰四達謂ニ之衢ー矣　爾雅曰衢交道四出矣

惡趣の嶮路　惡趣は江口に注す　嶮路はさかしき道也

慙愧の心時過て山下に社はくだりけれ　懺悔を山下にいひかけたり慙愧懺悔は實盛に注す

なふ〳〵　江口に注す

乍去うはの空に申てはやはか御承引候へき　やはかとは異本義經記に八百度(ヤハカ)と書　鴉鷺記云しかれ共御所存の一理とう／＼仰られ候へやはか御説破候上下略　太平記巻十七云敵の中へわり入裡ならば何なる新田殿なり共やはか怺(コラヘ)へ候やと云々　やはかはうたがひの心也爰にいふやはかはいかで共そもや共いへる詞也古歌にやはとつかふ出葉多し曉筆抄云てる日のくれしけふにやはあらぬ人の心のあかれやはせぬ是はいづれもいかでと云心也吹風を鳴て恨みよ鶯はわれやは花にてだにふれたる是はやはかと云心也是歌におほし云々

今はの時迄(アリキヌ)　かぎりの時也今般と書

木曾の麻衣の袖をときて　木曾は信州也兼平に注す童蒙抄云麻衣は信濃國木曾郡にをりいだせるなりと云々風雅〇思ひたつきその麻衣あさくのみ染てやむへき袖の色かは兼好

木の目も萠る遙々と　春草木の芽出るをもゆると云也春は陽なれば火のもゆると云詞を取てかくいへり又染色に萠黄と云も草木のもえ出る色に似たれば云也

母が思ひをいかにせん　連歌式目云いかにせんと云詞はたとへば上に置時はいかにせん下に置時はいかゞせんとつかふ也云々　雪玉集云二條家にはいかにせん中の五文字の時はいかゞとさたあり冷泉家には儀を以てすいかにとはもてあつかふ心也いかゞせんとは力およばぬといふ心也云々

四手の田長のなき人の　無名抄奥義抄童蒙抄等には郭公をしでの田長といへり　古今集藤原敏行朝臣歌に〇いくばくの田を作ればか郭公しでのたをさを朝な／＼よぶ　袖中抄云此歌の注にしでの田長とはしづのたをさと云也郭公は勸農の鳥とて過時不熟となくと云り時すぎばみのらじと云義也それがほとゝぎすとなくとは聞ゆると云りたをさは田つくるもの也しづのを也されば ほとゝぎすいくらばかりの田をつくればたをさはつとめてことにはよぶぞとよめる也云々綺語抄云ほとゝぎすはしでの山より童にてくる也しでの山こゆるあいだ田など作る故にしでの田長とは云傳へたり云々拾〇しでの山越てきつらん時鳥戀しき人のうへかたらなん伊勢　袖中抄云寂蓮入道はほとゝぎすしての山

より來といふ事は慥に經の說也中略 可レ考レ之云々
十王經曰閻魔卒縛二三魂一至二關樹下一二鳥棲掌一名二
無常鳥二一名二拔目鳥一我汝舊里化成二鶹鶫鳥一示二
怪語一鳴二別都頓宜壽一我汝舊里化成二鳥々一示二怪
語一鳴二阿和薩加一矣　或云四手と書は假字書也し
では繁也衣しでうつなどよめるもしげく打也此鳥
の鳴時田を作る營み闕鋪折也田長は農人也然れば
營みしげき田長と云事也云々
いさや形見の身の代衣まどをにおれる藤袴　身の
代衣は自然居士に注す閭遠はおさのあらきを云也
夏立けふの薄衣一重なれとも　○單なる薄き袂の
唐衣今朝たちかへて夏はきにけり爲經
南無幽靈出離生死頓證菩提　通小町に注す
陸奥のそとの濱なるよふご鳥なく成聲はうたふやす
かた　定家卿の歌也夫木集に入歌の心は子に餌を
あたへんとて親鳥の子をよぶといふにつきて喚子
鳥といひかけたりよぶこ鳥は古今集の傳受三鳥の
內也云々
一見卒都婆永離三惡道　卒都婆小町に注す
造立供養　供養は源氏供養に注す

紅蓮大紅蓮なり共名號智火には消ぬへし　紅蓮大
紅蓮の氷なり共佛の智惠の火には消ぬべしと也
紅蓮大紅蓮は八寒地獄の內也三界義云鉢特摩者此
云二紅蓮地獄一此地獄受苦過レ前故色變爲二紅赤一皮
膚分裂或十或多似二紅蓮華色形一摩訶鉢特摩者此
云二大紅蓮地獄一彼身分極大紅赤皮膚分裂或百或多
也更過二於前一故名二大紅蓮華地獄一也矣
焦熱大焦熱なりとも法水にはかたし　焦熱の焰な
りとも佛法の水には勝ましきと也　三界義云炎熱
地獄亦名二焦熱地獄一謂彼獄卒以二諸有情一置二無量
由旬三熱大鐵熬上一左右轉レ之表裏燒如二魚灸一又以二
大鐵串一於レ下貫レ之徹レ頂而出反覆炙令二彼諸有
情一諸根毛孔口中悉皆焰起上中略極熱地獄者亦名二大
焦熱地獄一以二三支大熱鐵串一自レ下貫レ之徹二其兩肩
髆及頂一而出レ之由レ此從二眼耳鼻口毛孔一猛焰流出
又以二三熱鑠一遍裹二其身一又倒擲如レ前三熱滿二灰
水一大鐵鑊中煎二煮之一其湧沸令二此諸有情隨一下略法
水者喩也無量義經云譬如二水能洗二垢穢一乃至其法水
者亦復如レ是能洗二衆生諸煩惱垢一矣
衆罪如草露惠日の日に照し給へ　觀普賢經曰衆罪

如草露惠日能消除矣　心はもろ〳〵の罪は草露のごとしめぐみの日によく消し除くと也○長秋詠藻露霜と結へる罪の悔しさを思ひとく社朝日也けれ俊成

所は陸奥のおくに海ある松原のしづえに交る汐芦の　おくに海あるとは陸奥そとの濱をいへり　しづえは流枝共下枝共書也木竹などの下枝也　汐芦は潮のさし引する所にある芦也○六帖汐芦の交れる草のしか草は人皆しりぬ我下思ひ人丸

籬か島の笘屋形　〻籬が島は奥州也融に注す笘屋形は笘にて葺たる家也水邊也

横障の雲　惠日の光をさゝへる雲也

津の國の輪田の笠松や　攝州矢田部郡にあり兵庫の町はづれより二町程南にあり古き松は枯て今は後植の木也津國は高砂に注す◉しつえ迄かゝれる蔦は紅葉して錦をはるは和田の笠松季經

箕面の瀧津波も我袖に　攝州豐嶋郡 箕面寺は號ニ箕面山瀧安寺ニ役行者の開基辨才天御座也瀧 は堂より半里計去て山中にあり高十六丈瀧の頂に瀧穴あり伊呂波字類抄云攝津國之北豐嶋郡之山有ニ聖跡ニ所謂箕面寺是也有ニ瀧三所ニ最上者雄瀧也第二者瓔珞瀧也第三者雌瀧也文略釋書云役小角嘗住ニ攝州箕面山ニ山有レ瀧小角夢人ニ瀧口ニ謁ニ龍樹大士ニ覺後搆ニ伽藍ニ自レ此號ニ箕面寺ニ爲ニ龍樹淨刹ニ矣◉草根箕面山瀧吹ちらす嵐ゆへ近き岩木はむら雨そふる

松島や小島の笘屋うちゆかし我はそとの濱千鳥

松島は在ニ仙臺之東ニ松が浦島共云天下無双の景地也此所に五坊有其隨一を松島山瑞岩寺と號す小島は此磯のめぐりにある小き島を指て云也古歌にをじまの磯とよめり　松島は傳云昔天仙爰に天降松を植て島をなす故に松島といふ云々　事跡考云陸奥國松島此島之外有ニ小島若干ニ殆如ニ盆池月波之景ニ境致之佳與ニ丹後天橋立安藝嚴島ニ爲ニ三處奇觀ニ矣　古今榮雅抄云松島やおしまとつゞきたる時はをじますむ也云々◉新立歸り又もきて見ん松島や小島の笘屋浪にあらすな俊成◉　うちゆかしを奥ゆかしとしの字濁りてうたふ流も有西行法師松島の景を見て是よりまだおもしろき所あらんとて行は欲心也とて歸りし處を名付て西行もとしと云依て奥ゆかじとはいへり云々◉山家陸奥のおく床しくそ思ほゆるつほの石ぶみそとの濱風

往事渺茫都似レ夢舊遊零落半歸レ泉　此詩は白氏文集十七卷にあり樂天の友元稹に澧水の邊にて別て後五年して夷陵ト云所にて遇て三宿語明して別に送れる詩也上句は若きかり成し昔の事はかすかにして夢の樣に覺ゆると云心也下句はもと遊なれたりし人々多くは方々に落ちり別て半は又黄泉に行うせたりと云也○渺茫は花寔に注す零落はおちぶれたる也黄泉は楊貴妃に注す○（拾遺員外）見しは皆夢のたゝちにまよひつゝ昔は遠く人は歸らず

士農工商の家にも生れず　士は武士農は農人工はたくみ也鍛冶工玉工佛工の類也商は商人也　穀梁傳曰古者有二士人一有二商人一有二農人一有二工人一矣漢書食貨志曰士農工商四民有レ業學以居レ位曰レ士闢レ土殖レ穀曰レ農作レ巧成レ器曰レ工通レ財鬻レ貨曰レ商矣文選西都賦曰士食二舊德之名氏一農服二先疇之畎畝一商修二族世之所一レ鬻工用二高曾之規矩一矣　六韜曰太公曰國有二三寶一大農大工大商農一二其鄕一則穀足工一二其鄕一則器足商一二其鄕一則貨足矣

又は琴碁書畫をたしなむ身共ならず　琴は羽衣に注す碁は博物志曰堯造二圍棊一以敎二丹朱一一云舜以二子商均愚一故作二圍棋一以敎レ之矣　海篇犀貂曰圍棋局方而靜子員而動象二天地一子分二黑白一陰陽又也縱横各一十九路蓋天數終二于九一地數終二于十一十九者天地二終之數也三百六十一著象二周天之數一三百六十配二三百六十日一其一則五度四分度之一也矣　書は尚書序曰伏羲氏始畫二八卦一造二書契一矣　說文曰蒼頡初作レ書依レ類象レ形故謂二之文一其後形聲相益即謂二之字一矣　畫は易通卦驗曰宓犧方牙蒼精作レ易注造レ易爲レ政無レ書以畫二其形一矣　世本曰史皇作レ圖矣　北夢瑣言曰宋韓昭司二禮部尚書宮職一亘二其伎藝一琴棊書畫算法射禮皆雖涉獵無二一事勝者一李台瑕是笑曰韓昭破如二襪線一無二一條長一文略

遲々たる春の日も　日永くのどけき事也　白氏文集四云遲々兮春日玉甃暖兮溫泉溢矣　詩經出車篇曰春日遲々矣

秋の夜長し夜ながけれ共漁火白うして眠る事なし　○文集三云秋夜長夜長無レ眠天不レ明耿々殘燭背レ壁影下略

九夏の天も暑を忘れ玄冬の朝も寒からず　九夏は夏九十日也玄冬は冬也梁元帝纂要云冬曰二玄冬一矣

心明に聞えたり
鹿を追猟師は山を見すといふ事あり　此心萬事に通ずべしたとへば一物に心をうつせば前後のよしあしも見えぬもの也
淮南子云逐レ鹿者不レ顧レ兎又曰逐レ獸者目不レ見二太山一嗜欲有レ外則明所レ蔽矣
忘草の追鳥高縄を　忘草は梅枝に注す草の生とつゝけたり追鳥狩は冬也雪の日鳥の餌にかつえたるを追まはして鳥を取也高縄は縄にもちを付て一間計高くはりて鳥を取也是を高縄と云也
末の松山は班女に注す抑は高砂に注す筑波根は櫻川に記す
袖に浪こす沖の石　○千我袖は汐干に見えぬ沖の石の人こそしらねかはくまもなしさぬき
千賀の鹽がま身をこがす　鹽に注す○風身をこがす契り計は徒に思はぬ中のちかの鹽がま四條
木々の梢にもはかなき浪の浮巣をも　水鳥は水上に巣を作る事あり　袖中抄云にほと云鳥の巣は波の上に作り置てあだなれば頼政もにほの浮巣のゆられきてとよめり云々或云蘆のくきをたよりにて巣を作る云々○壬生二品三島江の鳰の浮巣も亂れ蘆の末葉にかゝる五月雨の頃
平砂に子をうみて落鴈の　うたふは鴈にて砂中に子をうむと云に付てかく云り此鳥に不レ限砂原に鳥の子をうむ事有日本紀應神天皇卷に見えたり略レ之　謠の詞は瀟湘の八景の内平砂落鴈をつゞけたり　東福寺桂悟詩云飛鳴何處晩相呼影落二平砂一迷二有無一舍鳥隨レ陽靑老矣失レ群棲泊一江湖矣○玉章の外にも鳥の跡見せて濱の眞砂に落る鴈金業雅
はかなや親はかくすとすれどうたふと呼れて子はやすかたと答へけり扨そとられやすかたシテうたふ同親は空にて血の涙をふらせはぬれじとすかみのや
新撰詞枕云そとの濱といふ所にうたふやすかたと云鳥侍るが此濱のすなこの中にかくして子をうみおけるを獵師母のうたふがまねをしてうとふ〳〵とよべはやすかたとてはひおるを取ぞと申其時母鳥來りてあなたこなたへ付ありき鳴なり其涙の血のこき紅なるが雨のごとくふる也有歌に一子を思ふ泪の雨の血にふれははかなき物はうたふやすかたと讀りとる人此血をかゝりつればそんじ侍るゆ

へに血をかゝらじとてみのかさをきる也といへり
歌に「子を思ふ泪の雨の蓑の上にかゝるもかなし
やすかたの鳥とよめり云々　鴉鷺記云子を思ふ泪
の雨の蓑の上にうたふとなけはやすかたの鳥こそ
我も又からくれなひの袖の露上下略　○草根我そ今身をう
たふ鳥紅の泪の蓑を君きたれとて　保元物語云為朝
島の名を問給へば鬼が島と申然れは汝等は鬼の子
孫かさん候扨は聞ふる寶あらば取出せよ見んと宣
へば昔は正しく鬼神なりし時は隱蓑隱笠浮履劍な
ど云寶有けり其頃は船なけれ共他國へも渡りて日
食人のいけ贄をも取けり今は果報盡て寶も失形も
人に成て他國へ行事も不レ叶と云上下略

かくれかさかくれみのにもあらされは　○拾隱蓑か
くれ笠をもえてし哉きたりと人にしられうるへき
平公誠　寶物集云隱蓑と云物こそ能寶にて有べけれ
食物衣物欲きと思はゞ心に任せて取てんず人のか
くれていはん事をも聞又床しからん人の隱れんを
も見てんずされば是程の寶やは有べきと下略
紅葉の橋の鵲か　　紅葉の橋は朝顏に注す　淮南
子曰鵲副色黑白雜駁而大如レ鴉長尾而觜尖背綠
色腹白文略
罪人を追立鐵の嘴をならし羽をたゝき銅の爪をとき
立て眼をつかんて　往生要集云爾時便有ニ鐵觜大
鳥一上ニ彼頭上一或上ニ其髑一探ニ啄眼精一而噉ニ食之一矣
猛火の煙にむせんて　性靈集云報ニ四恩德一表白云
地獄猛炎發ニ殺生之業一矣
おし鳥は東岸居士に注す娑婆は田村に注す
にけんとすれとたちえぬは羽ぬけ鳥のむくひか
袖中抄云池に鳥をはなちかふにはかひつくる程は
はねをぬく事ありと云々○萬世中をうしとやさしと
思へ共とひたちかねつ鳥にしあらねは
うたふはかへつて鷹となり我は雉とそ成たりける
格物論曰鷹鷙鳥金眼鈎觜鐵爪劍翮善擢搏矣　月令
曰仲春鷹化爲レ鳩七月鳩化爲レ鷹矣　廣雅曰一歲名ニ
之黃鷹一二歲名ニ之撫鷹一三歲名ニ之青鷹白鷹一矣
爾雅曰雉絶有レ力皆最健鬪類有ニ數種一青質五色曰ニ
鷂雉一長尾走且鳴曰ニ鷮雉一黃色自呼曰ニ鳴雉一似ニ山
雞一而小冠曰ニ鷩雉一五色備成レ章曰レ暈矣　張華曰
雉必是蛇化開視側有ニ蛇蛻一矣　雜々拾遺云天正年
中秀吉公日本悉く撿地あり西の國は南度撿地にあ

へり細川幽齋奉行せらる其時光明寺の住持某幽齋の歌にてよめる「御狩野の我は雉子とそ成にけりけん〳〵地にてほろ〳〵となく　幽齋感じて殿下の御まへはからひて當寺の領内計赦免ありと云々

のかれかたの丶狩場の雪吹に　交野を云かけたり
交野は河内也禁野也禁野とは天子の御狩場を云也
神功皇后四十七年百濟國始貢レ鷹　又仁德天皇四十二年依網屯倉(ヨサミノミヤケ)阿弭古獻二異鳥一以レ之授二百濟國人一令レ養レ之以二韋緡一著二其足一以二小鈴一著二其尾一居二腕上一而來レ獻能馴天皇幸二百舌鳥野一而遊獵多獲レ雉是本朝鷹狩始也矣（高光集）〳〵立雉のうはの空なる心にものかれかたきは此世也けり○（新續古）御狩せし狩場の跡も今は世に哀かたの丶雪の降道崇德院　鷹飼の濫觴は仁德天皇四十三年に始る由孟津抄に見えたり

犬

禮記註疏曰大曰レ犬小曰レ狗矣　春秋考異曰狗三月而陽生二於三一故狗各高三尺矣　格物論曰犬家畜以吠守矣　本草綱目云狗叩也吠聲有レ節如レ叩レ物犬字象二卷尾懸蹄之形一矣

あら心うたふやすかた　心うしとつゞけたり

花筐

此謠は人皇二十六代武烈天皇崩御なり給ひ應神帝五世の孫繼體天皇御即位につかせ給ふ事を作る也花筐とは花かご也伊物眞名本に筐筥と書或は簀(カタミ)トモ籠(同)トモ書何れもかたみ共あじか共讀り三才圖會云竹器無レ係爲レ筐有レ係爲レ籃矣詩注云方曰レ筐圓曰レ筥矣古今榮雅抄云花筐と書花などつみいる丶籠を云中略花は籠をほむる詞也云々日本紀に籠の字をかたまと點せりみとまと五音相通也又かたみに殘すなどいへりかたみは文字かはれり萬葉に形見と書唐書に信と書伊物眞名本に念記と書

是は越前國あぢまのと申處に御座候大跡邊の皇子に仕へ申者にて候　大跡邊は繼體天皇をいへり但し大跡邊と云事是あやまり歟日本紀に繼體天皇を男大迹天皇と有古事記には袁本杼と有又名二彥太尊一委く奥に記すあぢまのは越前國今立郡にあり味眞と書日本紀に皇子の住給ひし處は越前國高向邑と有越前國は山姑に注す○（萬）あぢまのに宿れる君か歸りこん時のむかへをいつとかまたん

武烈天皇の御代をあちまのゝ皇子に御讓りあり御迎の人々の罷下り御供申今朝とく御上洛にて候　あちまのゝ皇子とは繼體天皇を申也　日本紀云九年春正月丙寅臣連等越前に至て法駕(ミコシ)を備て繼體を迎へ奉り深く辭退あれ共大伴金村など云者頻にすゝめ申により同正月甲申行二至樟葉宮一二月辛卯朔日御位につき給ふなり取意神皇正統記云武烈かくれ給ふて皇胤絶にしかば群臣うれいなげきて國々にめぐり近き皇胤をもとめ奉りけるに此天皇王者の大度ましまして潜龍のいきほひ世々にこえ給ひけるにや群臣相議て迎へ奉り三たびまで謙讓し給ひけれど終に位に即給ふ上下略　二十六代武烈天皇諱小泊瀬稚鷦鷯仁賢帝太子也母曰二春日大娘皇后一頻造二諸惡一人咸畏怖設二壇場於泊瀬列城一元年在二己卯一立二春日娘子一爲二皇后一治二天下一八年十二月崩二于列城宮一經二三年一葬二于傍丘盤杯陵一日本紀文略

去間此程御寵愛有て召つかはれて候照日の前と申御かた　繼體天皇の御后八人有中に照日の前と云名なし寵愛は説文曰寵愛也恩也愛惠也憐也恩也又寵也尊也書畢命曰席レ寵惟舊矣　左傳曰原吾甚愛レ之矣

玉章は井筒に注す菓は鉢木に注す文は湯谷に注す

我應神天皇の孫苗を繼なから　悉く奥に記す應神天皇は弓矢幡に記す

天照太神の神孫なれは　異朝にては氏なき者も我威勢を以て國をしたがへ國王となる例あり和朝にては世々の帝神代の流れをつぎ万々歳の末迄も天照太神の神孫にておはしまさずと云事なし○玉葉我國は天てる神の末なれは日の本としもいふにそ有ける後京極

頼め只袖ふれなれし月影のしはし雲井にへたてありとも　此歌何れの集にも見えす謠の作者のよめる歟

ひとり殘りて有明のつれなき　古今集戀三壬生忠峯歌に「有明のつれなくみえし別より曉計うき物はなし顯昭云女のもとより我は明ぬとて歸るに有明の月はあくるもしらずつれなくみへしその時より曉はうく覺ゆると云る心也と云々　玄旨云扶桑葉林集には此歌あはずして歸る戀と有他流にはあふて別るゝ戀といへり云々宗祇云此歌古今戀の三にあり此歌の前後あはざる戀の歌共也其中に只一

首あふて別るゝ戀の歌可レ入事如何惣別古今は部立を肝要とせり依て當流にはあふて別るゝ戀の心を不レ用と云々一禪御説云後鳥羽院より定家家隆兩人のもとへ八代集の中に面白き歌は取分何れぞと勅問有しかば有明のつれなくの歌を兩人同心に申されしと云々

君の惠みも高てらす　　高てらすは高く照すなり万葉に高光と書藻鹽草云たか照是は帝の御事也日によせて可レ説云々君の御慈悲のひろき事を云也

（萬）○高光我が日のみこの万代に國しられまし嶋の宮はも

紅葉の御幸はやめん　　繼體天皇都を和州玉穂にうつし給ふは秋九月也紅葉の折なれば紅葉の御幸とは云也御幸は大原御幸に注す

忝も此君は應神天皇五代の御末大あとへの皇子と申しが當年御即位治りて繼體天皇と申なり　　帝王編年記云二十七代繼體天皇（男大迹天皇　更名彦太尊）應神天皇五世孫彦主人（ヒコアルシ）王子也母曰二振媛一活目天皇五世孫女也天皇庚寅歳誕生本住二丹波國桑田郡一丁亥春正月大伴金村大連曰方今皇種絶无二繼嗣一天下何處繫レ心其譽田天皇五世孫倭彦王今在二丹波國一宜三迎嗣位一即遣レ人奉レ迎於レ是倭彦王懼然失レ色遁二匿山中一仍更議備二法駕一奉レ迎二天皇於越三國縣一（越前國坂井郡）二月大連奉二璽於天皇一天皇固辭不レ受大連伏レ地固請乃即二皇位一時年五十八御宇廿五年自二丁亥一至二辛亥一都二磐余玉穂宮一（大和國十市郡云々）是年二月天皇崩二磐余玉穂宮一時年八十二冬十二月葬二攝津國島上郡三島藍野陵一矣應神天皇五代の御末とは應神帝第九の御子を隼總別皇子と申其子を大大迹王と申其子を私斐王と申其子を彦主人王と申其御子繼體天皇也是を五代と云也即位はしよくゐとよむとなふる也一條禪閤兼良大嘗會抄云即位と云は天子受禪の後まさしく南面の位につかせ給ひて初而百司萬氏に龍顏を見えさせ給ふよし也下略懷中抄云御代をつぎ給ふ皇子内々にて御位に即せ給ふを踐祚と云踐祚とは祚を踐とよむ也紫宸殿へ出御成て天下の人々に知せ給ふて式々に位に即せ給ふを即位と云扨日本の神々へ即位の由を告給ふ事を大嘗會と云御即位七月より内なれば大嘗會年内にあり七月より以後なれば大嘗會翌年に執行れ侍る也云々　神武天皇元年經二始

帝宅於和州畝傍橿原二五十二歳而即レ位治二天下一七十六年矣　文龜三年御歌合爲廣判詞云抑御即位のおこりを申ば神武天皇橿原宮に御位につかせ給をこそ濫觴とも申べきと云々

日の本の名もあひにあふ大和國や玉穗の都に　　大和は日本の惣名なれ共和州一國の名によぶ也大和は田村に注す日の本とは日本は日の出る所に近き國なれば日本と云也　元々集云日本國自二大唐一而所レ名也斯國自二大唐一東方萬餘里居二于東極一日出二東方一昇二于扶桑一已近二日所レ出故云二日本一也仍又號二扶桑國一也矣日本紀纂疏云陰陽二神始生二日神一故以二日本一爲レ名矣玉穗の都は和州十市郡にあり

富草の種もさかゆく秋の空　　古今打聞云とみ草とは稲を云也一説稻をも云り云々但爰にては稲を云也依て種もさかへゆく秋の空とつゞけたりさかゆくは榮へ行也○打聞あすよりは外面の小田に袖ぬれてとみ草の早苗こへつへら也同

秋にはいつも鴈金の南へわたる天津空　　楚辭曰雁雍々而南遊矣　詩人玉屑云鴈飛二南浦一砧初斷矣漢武帝秋風辭曰秋風起兮白雲飛草木黄落兮鴈南歸矣

聲をしるへのたよりの友と我もたのむの鴈金こそ伊勢物語の歌に　　女「三吉野のたのむのかりもひたふるに君かかたにぞよると鳴なる「男返し我方によると鳴なる三吉野のたのむのかりをいつかわすれん袖中抄云此たのむのかりと云事人々のいへるおもむきふたやうあり其後は東國に鹿狩する人のたのもしかりとてかたみによりあひてかりをして其日取たる鹿をあるかぎりむねとおこなひたる人にとらする也さて後の日かたみことにて互にするをたのむの鴈とは云也俊頼は田のおものかりといへり末になくなるとよみたればかりがねと社聞えたれ鹿狩とは覺えずといへり中略故左京兆云是を鴈金と云人は鹿狩をすて鹿狩と云人は鴈を思ひはなつによりて心えられぬ也三吉野のたのむのかりと云は鹿狩也そのかりを雁によそへて鳴とはよむ也と心うるにたがふべかふべからず古歌はかやうにそへよめる常の事也藤の花をよめる貫之「さほさせとふかきもしらぬふちなれは色をは人もしらし

とぞ思ふ　ふちなればと云迄は淵也いろをばと云は藤にそへたり淵藤の聲のあがりさがりもすみにごりもかはりたれどそへたりまして狩と雁とは何事もかはらねばそふるにたよりあり已上　伊勢物語の詞書略レ之

其上名にあふ蘇武が旅雁玉章をつけし　名におふは江口に注す漢書に蘇武胡國にとらはれし時雁の足に文を付て古郷に言傳たる事有是より文を鴈書雁札と云り蘇武が事千壽に注す善友太子の父文を雁に付て遣す波斯國にて太子にあふて届て歸りし事報恩經及賢愚經に見えたり古今榮雅抄に鴈書とは雁のとひつらなるが文字に似たれは云共云り紀在昌題二蘇武一詩云賓雁繋レ書秋葉落矣○秋風に初鴈金ぞ聞ゆなるたか玉章をかけてきつらん　古　友則

宿かりかねの旅衣　家　○かきつらね歸る越路に日は暮ぬ雲のいつくに宿をかりかね

君がすむこしの白山しらね共　古今集離別藤原兼輔歌也下句は雪のまに〳〵跡は尋ん詞書云大江千古がこしへ罷けるむまのはなむけによめると云々歌の心は越の白山は知ね共雪のまに〳〵君が跡を尋ねんと也まに〳〵は間々也

足引の山　檜垣に注す

白雲の高間の山のよそにのみ見てややみなん　新古今集戀の巻頭題不レ知よみ人しらず「よそにのみ見てややみなん葛城や高間の山の峰の白雲　玄旨抄云我心をかくる人をばよそにのみ見てややまん扨いかゞあらんとふかく思ひ入たる様なるべし云々　榮雅抄云此歌は寛平の姫宮の河内國に住給ふを常にもあひ奉らであるをかつらきの雲になすらへよめる云々

雲井はいつく御影山　和州高市郡八木村の北に御影山とてあり初瀬へ行道也一説勝手の右にあり共いへり此御影山は大内を指て云歟　万葉に高知や天の御蔭の天知や日の御影の水こそときはに云々是により大内を御影山と云也

近江は田村及はぬ戀は松風忍ふの摺衣は小鹽黒髪のあかさりしは玉葛野くれ山くれは邯鄲長月は紅葉狩またきは融に注す

非形をいましめ面々に御幸の御先を清めけり　非形とは悪黨者に限らす異形の者を云也御先を清め

とは御先を警固するをいへり或は御先拂ひ(サキハラヒ)先聲(サキゴヘ)など云も是に同じ警蹕隱聲此等さきごゑと　文選西征賦曰昔明王之巡幸固清レ道而後往矣周禮註曰天子行在所レ至清レ道以虞ニ非常一矣黄圖曰天子當レ出先令ニ道路一掃酒清淨上矣

鄙人は田村渴仰は賀茂世には末世に及といへと日月は地に落すは安宅あら金の土は田村に記す

花筐のかごとゝやおほすらん　花筐の籠といひかけたり惣てかことゝ云詞はかこつけかねことちかごと少しの事かこちたる事など詞のつゞきにより心かはれり爰のかごとは少しの事或はかゝりそめの事にいへり櫻川に注す

天長地久　難波に注す

陸奥の安積(アサカ)の沼の花かつみかつみし人を　此歌は古今集戀の四によみ人不レ知と有下句はかつみる人に戀や渡らん　榮雅抄云かつみる人に面影身にそひ忘れかたければ戀や渡らんとなりかつみる人にといはんとて花がつみといひつゞけたりと云々　能因歌枕云かつみとはこもを云こも花を花がつみと云々　榮雅抄云實方中將陸奥守になりて下りけるに五月五日にいかにあやめはふかぬぞと尋ねるに國にさぶらはずと申すさて安積の沼のかつみを刈てふくべしとてふかせられたりける後五日にかつみをふく也と世にかたり傳へけり六條右府子息皇后宮亮信雅朝臣かの守になりて下りて京に歸りて申されける陸奥にあやめこよなくおほかり彼中將の後にや出來けん又かつみふく事やひが事ならんしらずといへり云々

戀種は百万しのふもちすりは小鹽水の月を望む猿は善界に注す

いかなれは漢王に李夫人の御別れを歎き給ひ　漢王とは漢孝武帝を云也史記孝武本紀曰孝武皇帝者孝景中子也母曰ニ王太后一孝景四年以ニ皇子一爲ニ膠東王一孝景七年栗太子廢爲ニ臨江王一以ニ膠東王一爲ニ太子一孝景十六年崩太子即レ位爲ニ孝武皇帝一矣裴駰曰武帝以ニ景帝元年一生七歳爲ニ太子一爲ニ太子一十歳而景帝崩時年一十六矣李夫人は武帝の寵愛の后也見ニ漢書九十七外戚傳一略レ之白氏文集曰漢武帝初喪ニ李夫人一夫人病時不レ肯レ別死後留ニ得生前恩一君恩不レ盡未レ已甘泉殿裏令レ寫レ眞丹青寫出竟何益不レ言

不レ笑愁ニ殺人一亦令ニ方士合ニ靈藥一玉釜煎練金爐焚九華帳深夜悄々反魂香降ニ夫人魂一夫人魂有ニ何許一香煙引到ニ焚レ香處一既來何若不ニ須臾一縹緲悠揚還滅去矣○草根何かせん煙のうちの面影の消てむなしき後のおもひは

朝政は楊貴妃に注す神さひは蟻通に注す

夜の御殿も徒に　よんのおとどととなふる也年中行事注云夜御殿と申は天子の御寢所也劒璽を置るゝゆへにいづれも灯をけたずと云々　禁秘御抄云夜御殿四方有ニ妻戸一南大妻一間也帳同ニ清涼殿一五間四面疊御座敷也御枕有ニ二階一奉レ安ニ御劒神璽一下略○正治院百首すへらきの夜のおとゝの明方にほのぼの殘る春のともし火家長

塵の鏡の影を恥て　塵の鏡とは衰へたる身を鏡にうつしたる也　梁鄱陽王詩云塵鏡朝々掩寒衾夜々空矣○草根影や見ん鏡の上にゐる塵をあらふ泪の雨はふりきぬ

終に帝に見え給はずして去給ふ　漢書曰初李夫人病篤上自臨ニ候之一夫人蒙レ被謝曰妾久寢レ病形貌毀壞不レ可レ見レ帝云々婦人貌不ニ修飾一不レ見ニ君父一矣

帝深く歎かせ給ひつゝ其御貌を甘泉殿の壁に寫し我も畫圖に立そひて明暮歎きたまひけり　漢書曰李夫人少而蚤卒上憐閔焉圖ニ畫其形於甘泉宮一矣　甘泉殿は孝武帝の宮殿也　大明一統志三十二曰西安府甘泉宮在ニ涇陽縣甘泉山一本秦林光宮漢武增廣レ之又名ニ雲陽宮一矣畫圖は繪圖の事也

りせうと申太子の　李夫人がうめる子を昌邑王といへ共りせうと申太子はしらず史記及漢書に沙汰なし王子年拾遺記云李少君致ニ李夫人於紗幕中一矣此言は李少君とは仙人の名也以ニ方術一李夫人が貌を武帝に見せしむと云儀也祭するに李少君と云名をかりて此謡にりせうと申太子とつゞけたる歟

李夫人は本は是上界の嬖妾くわすい國の仙女なり　此事何れの傳にも曾て見えず李夫人は李延年と云者の妹也李延年は身に才あり又舞をよくす有時我妹の李夫人が形のうるはしきことをうたひてまひけり其歌云北方有ニ佳人一絶世而獨立一顧傾ニ人城一再顧傾ニ人國一とうたひければ武帝李夫人が美なる

事を聞て后になされけり見二漢書一　說文云嬖便嬖愛也集韻卑也妾也人賤而得レ幸曰レ嬖矣孟子曰嬖人臧倉矣嬖の字の意は才德なくして君の心にかなふ義也

泰山府君にまうさく

元是閻魔天の太子也人の延命を祈るに泰山府君の法を修する也　預修經曰閻魔天子大山府君矣搜神記大全云泰山五嶽東嶽一名天孫嶽此嶽神天帝孫也掌二人魂魄一也昔赫天氏裔孫彌綸仙女感レ夢生二二子一長名二金蟬氏一次金虹氏金虹氏即東嶽帝君神農氏時爲二天府都宮一號二府君一漢明時封二泰山元帥一掌二人民貴賤之分祿壽行削後及地獄簿一矣　冥報記云天帝統二御六道一是謂二天曹一閻羅王者是謂二地府一如二人間天子一泰山府君如二尙書令錄一五道太神如二六部尙書一矣

下學集云泰山府君本地地藏菩薩也在レ天云二輔星一在レ地曰二太山府君一矣兼邦百首抄云素戔烏尊魂魄二つの靈魂は天にあがりて太山府君となり魄は地中に入て閻魔王となり衆生の善惡をしるし給ふ然れば衆生の延命を祈るには太山府君を祭る云々今昔物語に安倍清明泰山府君の法をいのりて人の命を延し事あり略レ之三塔順禮記云藤原公條昔櫻町中納言は花の盛りの日數を延んとて春は泰山府君を祭らせ給へる同じ心とぞ覺えし云々

九花帳のうちにして反魂香を燒給ふ

九花帳は楊貴妃に注す反魂香は十州記云聚窟洲在二西海中州一此土有二大樹一似二此國楓一名二反魂樹一伐二取其樹一於二玉釜中一煮二取汁一更以二微反熱一煎レ之如二黑錫一令レ可レ丸名二火驚精香一亦名二震靈丸一矣山海經曰障州巽海祖洲上多出二反魂香不死草一矣傳聞錄曰祖洲在二東海中一北方一万里去二西岸一七万里地生二不死草一又名二養神芝一其狀如二瓜苗一可二長數尺一人死三日以レ草蓋レ面即活採服レ之代令三人長生一秦始皇獲二此草一遣レ使問二北郭鬼谷先生一試レ之果驗有矣　寶玉集云反魂香はかならず明月の前にたきぬと也云々

夜更人しつまり

後漢書列傳五乘敘書曰臣夜人定後矣艶詞云藤原隆房夜ふけ人靜りて後なれば月西に傾を見るに付てもかきくらす心地していと絕がたし云々〇草根門毎に立きく宿はさよ更て人しつまりぬ誰にとはまし

あるかなきかにかけろへば　〇世中といひつる物（後拾）かかけろふのあるかなきかのほとにそ有ける

猶いやましの思ひ草葉末に結ふ白露の手にもたまらて　いやましはいよ〳〵ます也思ひ草は百万に注す〇思ひ草葉末に結ふ白露のたま〳〵きては手にもたまらす（金）後成

漂渺悠揚としては又尋ぬへき方なし　前後の續き上に記する白氏文集を以てつゞけたり木玄虚海賦曰郡仙縹眇餐玉清涯李善注縹眇遠視之皃矣悠揚幽貌矣

古き衾古き枕ひとり袂をかたしく　長恨歌云鴛鴦瓦冷霜花重舊枕故衾誰與共矣　匠材集云古き枕哀傷也いにしへの妻にならべし枕也今は戀也古き莚古き衾は何れも戀也云々　〇古き枕古き衾のうつり香もかはらて殘る別れかなしも（うない松）

花のかための名をとめて戀しき人の手馴し物を形見と名付そめし事此時よりそはしまりける　此事曾て出生なき事也

御かごとましまさぬ　此かごともかりそめの義也かりそめには覺しめさぬと云心也

還幸　大原御幸に注す

謡曲拾葉抄巻十九

鞍馬天狗

貴布禰社說云暗布山は則貴布禰山也云々山城國愛宕郡鞍馬山は獅子頭山共松尾山共號す大和本紀云天武天皇大友皇子に被レ襲給て山代國を通り給し時皇子軍を待請て射奉る矢御背に立けり其處を矢背と云追掛奉る間彼山の奥に楯籠せ給ふに御馬の鞍置ながら被レ繫故に此所を鞍馬と云なり云々崑玉集鞍馬山は闇山也水は幽陰の物なれば闇といふなり水の神のまします所ゆへくらまやまと云云々鞍馬寺は從四位上藤原伊勢人年比の願望に勝地を得て伽藍を建立して觀音の像を安置せんと思ひ延曆の比或夜の夢に城北の山中に入て一人の翁に遇翁の云此地は無双の勝地也汝練若を營み利益無量ならんといへり夢中に問云翁は誰人ぞ答云王城の鎮守貴船明神と聞て夢さめぬ然共其所をえらず于レ時伊勢人常に乘用する白馬有是に鞍を裝てあゆませて行とまる處かの勝地ならんと一人の童子を副て跡を見せしむ則城北に向て行深山に入て茅亭の中に駐此所夢中に見えつる勝地にたがはず又茅亭に毘沙門の像あり則爰に一宇を造る鞍置馬の地なるが故に鞍馬寺と號す然るに伊勢人常に觀音を安置せんとの願望なるに今毘沙門を安する事猶此願を不レ果或時夢中に童子來て云觀音と多聞は本是同體也たとへば般若と法花との如しと示す于レ時夢さめて後疑ひを開くといへ共遂に一堂をかまへて觀音を安置す鞍馬寺の西觀音院是也（今昔物語 元亨釋書）（已上文略）河海抄云鞍馬寺は昔は四十九院ありけり佛法盛地也云々　水鏡云延曆十五年藤原伊勢人きふねの明神の御をしへにてつくり奉りし也云々

加樣に候者は鞍馬の奥僧正が谷に住居する客僧にて候

・僧正谷は在二鞍馬寺西北四五町許一　河海抄云鞍馬貴船の間に僧正が谷と云所有藥師不動尊靈驗の地也云々　眞言傳云（權僧正 壽演）鞍馬寺の僧正谷稻荷山の僧正峯なども此僧正行ひ給ける跡とならん申傳へ侍ると云々客僧とは此謡に牛若兵法の師と作る也是天狗也但し牛若の兵法は陰陽家法眼鬼一が家に兵書有を牛若ひそかに取出して傳來し給へり委く奥に記す

文を持て參候　文の字は湯谷に注す
一筆令ニ啓上一候　啓上は說文曰啓敎也徐曰啓發敎ニ道之一也矣　廣韻曰啓開也矣　宋武帝紀曰馳レ使啓上矣
けふ見すはくやしからまし花盛り咲も殘らす散もはしめす　定賴卿の歌也心はけふは花の眞盛りにて一花も咲殘したるはなく又一花もいまだ散そめず永德御百首と也○けふこすはかひなからまし散もせす咲も殘らぬ山櫻かな爲達卿
花さかは告んといひし山里の使は來り馬に鞍　是は古歌也留りは馬にくらをけ也作者未レ考
鞍馬の山の渦櫻手折枝折をしるべにて奥も迷じ咲つゞく　袖中抄云雲珠櫻は唐鞍の雲珠に似たれば鞍馬の緣に云也云々　手折枝折とは山深く入時歸るさに道に迷はじとて所々に木の枝を折かけ或は紙など結ひ置て道のしるしとするなり富士の山をし折山と名付るもむかししをりして入けるよりの名也と云々師說　周伯溫曰禹貢隨レ山栞レ木　謂下隨ニ所レ行林木一斫ニ其枝一爲中道識上也矣　或云しをりは六帖に木部に入れたれは山道の傍の木の枝などをひき手折置て我かへるさま又は人の爲のしるべとすればしるへをりといふ略歟○歌枕高たつくらまの山の渦櫻手折をしてな折そわづらふ顯季
狠藉は雲林院に注すさすがは安達原に注す
遙に人家を見て花あれは即入　雲林院に注す
本尊は大悲多門天　今昔物語云夢中に童子來て云觀音と多門は本是同體也たとへば般若と法花との如しと示す云々　法華普門品曰應下以ニ毘沙門身一得度者即現ニ毘沙門身一而爲說上レ法矣此等の意にて大悲多門天とはつゝけたる歟毘沙門天は　法華義疏曰云ニ北方天王一多門恒護ニ佛道場一常聞ニ說法一故云ニ多聞一也矣　大論曰秦言ニ多聞一主ニ夜叉及羅刹一矣　索隱云福德之名聞ニ四方一故亦謂ニ普聞佛一令ニ掌擎ニ古佛舍利塔一矣　金光明經曰多聞名ニ種々聞一居ニ水精山一矣　般若斫揭羅軌曰著ニ七寶金剛甲胄一左手執ニ三戟一右手托レ腰一云踏ニ夜叉羅刹二鬼一擎レ塔持レ鉾或金色或靑黑或白色也矣
慈悲　三井寺に注す
花の本の半日の客月の前の一夜の友　證文未レ考尋ぬべし心は聞えたる通也

松虫の音にだにたてぬ　　古今假字序云松虫のねに友をえのひ云々　上の詞をうけてつゝけたり

誰をかも知人にせん高砂の　　此歌高砂に注す

戀草　　百萬に注す

花に三春の約あり　〻三春とは春三月を云也心なき花も其時の約束をたかへす咲と也

人に一夜をなれそめ後如何ならんうちつけに　　事文類集云齊國の人他國に行時其妻に杜丹草一莖を附與て曰我留主の間汝不義の行あらは此花忽に枯なん貞節を守らは此花榮えなんといひて他に趣く數歳の後寒中に家に歸れは杜丹俄にして花開く以て妻の貞心を顯せるのみ取意　唄の詞是にてつゝけたる歟なれそめてのての字清濁のかはり有兩說共に用ゆ　うちつけはやがてと云也玉井に注す

心空になら柴のなれはまさらて戀のまさらん　　萬葉集十二卷柿本人麿歌に「御狩する狩場の小野のならしはのなれはまさらて戀こそ優れ　此歌新古今に入て留りは戀ぞまされると有ならし葉は楢の木也なけれはといはん序歌也又鷹の尾にならし羽と云有波多野筑後守鷹抄云鷹をうしろむけて尾の左より一枚目を大いしうちと云二枚めを小いしうちと云三枚めをならをと云四枚めをならしばと云五枚めをたすけおと云六枚めをうはおと云也云々

中にも安藝守清盛が子共たるにより　　清盛が子共とは世に傳ふ宗盛を指て云也湯谷に注す　太政大臣平清盛　〻桓武天皇第五皇子一品式部卿葛原親王九代後胤讃岐守正盛孫刑部卿忠盛朝臣嫡男也仁安三年十一月十一日五十一歲而出家法名號淨海養和二年閏二月四日死行年六十四　巳上大系圖　長門本平家物語云清盛は仁安三年十一月十一日歲五十一にて病に犯れて存命の爲に忽に出家入道す法名淨蓮程なく改名して淨海と號す云々公卿傳云久安二年二月二日任正四位下安藝守矣

一寺の賞翫他山の覺え時の花たり　　一寺とは鞍馬寺を指て云也鞍馬寺の人計賞翫するに非ず他山の人迄も賞翫すると也時の花とは清盛か子共の榮花なるを當山の花になぞらへてかくいへり

面目　　安宅に注す

わ上﨟　　わとは我也わ殿原わ御前わぬしなといふに同し上﨟は志賀に注す此わ上﨟は牛若を指て云

也

常盤腹には三男毘沙門の沙の字をかたとり御名をも沙那王殿とつけ申す　左馬守義朝には八男常盤腹には三男となり　常盤は大宮太政大臣伊道公女近衛院の中宮の雜仕也人和源氏宇多左衛門尉が女なり三人の子共を助んが爲に清盛の妾となる也三男とは一男は阿野法橋全成惡禪師と號す童名今若丸住二醍醐一二男愛智圓成童名乙若丸三男は義經也義經記云左馬頭の殿の子共嫡子惡源太二男進朝長三男兵衛佐四かば殿五郎はけんじの君六郎は卿の君七郎は惡禪師の君われはさまの八郎とこそいはるへきに保元の合戰に伯父ちんせいの八郎名を流し給ひし事なれはそのあとをつがん事よしなし末になる共若しかるまし我はさまの九郎といはるべしと云々　異本義經記云常盤清盛に馴て息女を産で後一條大藏卿長成朝臣の妻室に成てこゝにても子共出來たり牛若は暫く繼父長成朝臣の方にて育立七ツの歳鞍馬寺の阿闍梨東光房圓忍の弟子になり翌年二月鞍馬寺に入十四歳にて圓忍の弟子禪林房阿闍梨覺日が附弟に成て改名遮那王丸と云清盛

兼て常盤が子共法師になせと宣ひたるにより兄二人も法師になしてけり牛若も十三の年得度させ給へと母の常盤も繼父長成朝臣も宣ひければ圓忍も良智房快圓も然るへき事の由宣ひしに禪林房覺日兎角延して十六歳迄得度なかりし事禪林房色に愛着せし故也とそ云々

見る人もなき山里の櫻花外の散なんのちぞさかまし古今集春上伊勢が歌也詞書云亭子院歌合の時よめる云々　歌の心は人めまれなる山里の櫻に外のちりなん後にさけとおしへたる也云々

哀猿雲にさけんては腸をたつとかや　朗詠集云謝觀清賦五夜之哀猿叫レ月矣　白氏文集曰猿過二巫陽一始斷レ腸矣　斷レ腸とは至て悲しき心也實に悲き時はきものきれたるやうなり　世說曰晉桓溫入レ蜀至二三峽中一部伍中有下得二猨子一者上其母緣レ岸哀號行百餘里不レ去遂跳上レ船至便即絕破視二其腸中一腸皆寸々斷公聞レ之怒命黜二其人一矣

愛宕高雄ノ初櫻比良や横河の青櫻吉野初瀨の名所を　愛宕（アタゴ）高雄（タカヲ）は善界に注す比良は竹生島に注す横河は兼平に注す吉野初瀨は玉葛及三井寺に記す　初櫻

遅櫻は花の名に非す其年の時節により或は其所の土地によりて花に遅速有を云也

大天狗　天狗の事和漢共に文字同じきといへ共心は大きに異也唐土の天狗は所レ謂史記天官書曰天狗如二大奔星一有レ聲其下止レ地類レ狗所レ墮及二炎火一矣博聞錄曰陰山有レ獸狀如レ狸首白也名二天狗一食レ虵矣山海經曰天門山有二赤犬一名曰二天狗一其光飛レ天流而爲レ星長數十丈其疾如レ風其聲如レ雷其光如レ電矣杜子美天狗賦曰上揚二雲猜一下列二猛獸一中略　天狗嶙峋兮氣獨二神秀一色似二狻猊一小如二猿狖一矣　此等を考れは天狗は畜生の類と見えたり　日本の天狗は所レ謂先代舊事神祇本紀云服狹雄尊猛氣滿二胸腹一而餘成二吐物一化成二天狗神一姫神而威强其軀人身頭獸首也鼻長耳長牙長獸也左右不レ隨レ意則太怒甚荒雖二大力神一乃懸レ于レ鼻挑二於千里一雖二强堅刀戈一輙咋卦二於牙一壞以作二段々一中略自推二名乎目一名二天逆每姫尊一矣又同天皇本紀云神武天皇十二年癸巳朔日戰二長髓彥神一于レ時金色鵄來而救二天孫皇師一天孫悅而問曰汝勝神也從二何處一來鳶神奏曰吾是日宮三軍幡也天照太神勅二令吾一曰往救二天孫一令化レ鳶來吾住二此國一山背國怨兒山吾住處可住仍住二其山一領二天狗神一文略　私云天狗神と書てあまのさこがみともさはりかみとも訓ず是天狗の始也又相國寺横川の愛宕山勸進帳序は天竺日良唐土善界日本太郎房と記し今昔物語に震旦の天狗智羅永壽と書たれ共此等皆日本にて沙汰したる事也其外古き物語に天狗の事あけてかぞへかたし天狗は魔魅の類也或は慢心の人死して魔界に墮て天狗となる也花鳥餘情云天狗本朝に用る所は天魔の類にいへりと云々

著兵法の大事を傳へて平家を亡し給ふへきなり　傳云夫兵法發起の所は唐土にては沈起吳子序に黃帝より始る我朝にては神代より事起ると云共人師の流々漫にして其得失不同也兵法と云に治るは兵亂るゝは法也心は兵智は法也不變は兵隨緣は法也是兵法の大極也山河虛空草木土石立居に至迄皆兵法と見る也云々異本義經記云都一條堀川に陰陽師鬼一法眼と云者あり希代軍書を持是醍醐帝延長元年五月從三位中納言大江維時遣唐使に大宋國へ遣されし時龍取將軍に逢て傳來の軍書也黃石公張良

に傳る所の兵書と云々維時七代の後式部大輔匡時告に依て鞍馬寺へ奉納有し秘書也鬼一夢想を請奏聞を經下し預るといへり義經是を聞給ひ甚執心し都へ上り搆て見ばやと思ひ立給ふとにや安元二年二月平和泉を出給ひ都一條大藏卿長成朝臣の方へ上着有て後四條の聖門坊をして一條堀川鬼一法眼が方へ來り給ふ法眼衣の下に葛の袴銀にて柄鞘卷たる刀を指女二人に介錯せられ座に居り御曹司を席に招き詞細なりといへ共兵書を深く秘して不レ出是に依て義經法眼が娘と密通して彼秘書を娘に偷出させ寫取悉く其指要を納得すと云々　北院御室守覺法親王左記云愛聊依レ有二所思一密招二義經一記二合戰軍旨一彼源廷尉匪二直之勇士一也張良三略陳平六奇携二其藝一得二其道一者歟矣

扨も沙那王か出立には膚には薄花櫻のひとへに

衣色目云薄花櫻は面は白くうらはくれない也二月に着二用之一云々　或人俊成卿に薄花櫻と云詞歌にはくるしかるましきと尋しに俊成云さやうの詞をこのめは歌邪路に入也かならす無用と仰られけり其後又定家卿へ尋けるに定家卿「紅の薄花櫻ほの〳〵と朝日いさよふ小初瀨の山　と書て是を父に見せ給へといへり俊成重而見給ひて是はめてたしと申されける歌はつゝけやうにてよくもあしくも成ものとそ師說

絹紋沙の直垂の露を結んて肩にかけ

絹紋沙は竪横共にねりたる花の紋ある紗也藻鹽草に絹紋の綾と有直垂に紐あり是を露と云よろひの下にきる時はむすびあぐる也　男女裝束記云直垂之露の事山科家には五所に付る高倉家には三所に付る家々故實有レ之也惣地紗腰當は小精好也露の事形如レ此但大樹公御好之由外に如レ此袖に露かゝりは無レ之候よし云々　直垂は屋島に注す　異本義經記云義經烏帽子に小結して絹紋紗の直垂白き大口金作りの太刀虎の革の尻鞘入て兒立なれは眉取て墨齒黑にして時に年十八歲麗質婦人の如し云々

筑紫には彥山の豐前房

筑紫は櫻川に注す彥山靈仙寺は釋迦彌陀觀音御座也以爲二三社權現一開山善正大師也此山豐前豐後筑前三ケ國にかゝりたる大山也十の谷四十九の靈窟あり第一の窟を玉屋

と名つく凡當山三岳鼎のことく峙三神跡を垂北岳は天忍骨命神名帳云豊前國田川郡天忍骨命是也南岳は伊弉諾尊中岳は伊弉冊尊也祭禮二月十五日云々

四州には白峰の相撲房　四州は屋島に注す　綾松山白峰寺は在二讃州阿野郡一本此山弘法大師所レ開也本尊立像觀世音御長三尺三寸智證大師之作也山中別構二崇德天皇神廟一其左立二千手大士堂一右立二天狗相撲房祠一云々

大山の伯耆房　伯耆國大山大智明神者大己貴命也稱德天皇時有二神託一因勅建レ社矣　諸社根元記云伯耆國川村郡大山神國坂神度々神社矣　今昔物語云伯耆國大山權現地藏菩薩の垂跡大智明菩薩云々撰集抄云伯耆國大山の大智明神は御本地地藏菩薩にておはします昔俊方といへる弓取野に出て狩しける程に鹿多く射とゝめにけり然るに我持佛堂に千體の地藏をすへ奉りける五寸の尊像に矢を射立て鹿と見えつるは皆地藏にてぞおはしける俊方淺ましくかなしくて地藏に取付てなきおめきけれ共更にかひなしやかて手つからもととりきりて吾家を堂に作り永く殺生をとゝまりにける去程に稱德天皇の御時社を祝ひ奉れと云御託宣侍りてやかて堂を社になし大智明神と申侍る文略

飯綱三郎富士太郎　此等は其所々にすむ天狗也

大峰の前鬼が一黨　役行者の召仕の鬼也　吉野緣起云藏王堂内左右二役行者像一脇士二人基現基覺廼是前鬼後鬼也云々　或記云和州伊駒嶽有二二鬼一夫曰二赤眼一婦云二黄口一彼生二五子一即名二鬼一鬼次鬼助鬼虎鬼彥一殺人不レ知二其數一小角十六歲登二彼嶽一以二兕力一縛二諸鬼一中略　永成二行者使令一而小角改二二鬼名一號二夫前鬼婦後鬼一也云々

葛城高間　葛城に注す

如意が嶽我慢高雄の峰にすんて　[illegible]　我慢高しとつゝけたり如意嶽高雄山いつれも善界に注す

人の爲にはあたご山　人の爲には讐といひかけたり　天狗によそへていへり舊事本紀に怨兒山と書

如何に沙那王殿只今に天狗を參らせて候に稽古のきはをはなんほう御見せ候そ　異本義經記云遮那王早足飛越なんとし給ふに外の人よりも身も輕く有しそ十四歲の秋の頃より惡僧なと集木太刀にて打

合給ふに手利にて四五人を只一人して打勝給ふとにや常に毘沙門堂へ參り給ひて直に貴布禰へ詣給ふ事あり何の頃よりか夜毎に潜と貴船へ參り給へり或夜禪林房と同門薬和泉律師と示し合せ跡に付て行たるに遮那王先本堂へ參り其よりも貴船へ詣て給ふ折節空かきくもり最闇に人十人計の聲して山の上かと思へは谿の底にあり又管絃の音聞ゆ禪林房も和泉も魂を冷し叢を漸く匍匐て寺に歸しと云り遮那王僧正が溪にて大天狗に兵法を習ひ給ふと寺中沙汰しあへり或時覺日密に遮那王殿に此事を尋しに卿も宣ふ事もなく只貴船へ夜毎に詣づと計答られしと也云々　平治物語云晝は終日學問を事とし夜は終夜武藝を被ニ稽古一たり僧正が谷にて天狗とよな／＼兵法を習と云々去れは早足飛越人間の業と不レ覺上下略　稽古とはいにしへをかんかふると云事也　尙書曰堯典曰若稽ニ古帝堯一矣　後漢書桓榮曰今日所レ蒙稽古之力也矣　文選東都賦曰憲章稽古註向日憲法也言法ニ其舊章一考ニ其古事一矣

高祖の臣下に張郎と云者黄石公に此一大事を相傳す

高祖本紀曰高祖沛豐邑中陽里人姓劉氏字季父曰ニ太公一母曰ニ劉媼一其先劉媼嘗息ニ大澤之陂一夢與レ神遇是時雷電晦冥太公往視則見ニ蛟龍於其上一已而有レ身遂產ニ高祖一高祖爲レ人隆準而龍顏美ニ須髯一左股有ニ七十二黑子一仁而愛レ人喜レ施意豁如也時十二年四月甲辰高祖崩ニ長樂宮一矣　皇甫謐曰高祖以ニ秦昭王五十一年一生至ニ漢十二年一年六十三矣　留侯世家曰留侯張良者其先韓人也大父開地相ニ韓昭侯宣惠王襄哀王一父平相ニ釐王悼惠王一悼惠王二十三年平卒卒二十歲秦滅韓良年少未レ宦ニ事韓一韓破良家僮三百人弟死不レ葬悉以ニ家財一求下客刺ニ秦王一爲レ韓報上仇以ニ大父父五世相一レ韓故良嘗學ニ禮淮陽一東見ニ倉海君一得ニ力士一爲ニ鐵椎一重百二十斤秦皇帝東游良與レ客狙擊ニ秦皇帝博浪沙中一中ニ副車一秦皇帝大怒大索ニ天下一求レ賊甚急爲ニ張良一故也良乃更ニ名姓一亡匿ニ下邳一良嘗間從容步游ニ下邳圯上一有ニ一老父一衣レ褐至ニ良所一直墮ニ其履圯下一顧謂レ良曰孺子下取レ履良愕然欲レ毆レ之爲ニ其老一彊忍下取レ履父曰履レ我良業爲取レ履因長跪履レ之父以レ足受笑而去良殊大驚隨目レ之父去里所復還曰孺子可レ敎矣後五

日平明與レ我會レ此良因怪レ之跪曰諾五日平明良往父已先在怒曰與二老人一期後何也去曰後五日早會五日鷄鳴良往父又先在復怒曰後何也去曰後五日復早來五日良夜未レ半往有レ頃父亦來喜曰當レ如レ是出二一編書一曰讀レ此則爲二王者師一矣後十年興十三年孺子見レ我濟北穀城山下黃石即我矣遂去無二他言一不二復見一旦日視二其書一乃太公兵法也下略太平廣記三百九十八曰帝堯時有二五星自レ天而賓一一是土之精墜二於穀城山下一其精化爲二圯橋老人一以二兵書一授二張子房一云讀レ此當レ爲二帝王師一後求二我於穀城山下一黃石是也子房佐レ漢功成求二於穀城山下一果得二黃石一焉子房隱二于商山一從二四皓一學レ道其家葬二其衣冠於黃石一焉下略

抑武略　抑は高砂に注す武器は盛久に注す

源平藤橘四家　源氏は弘仁五年五月八日嵯峨天皇皇子信勅賜二源姓一是號二嵯峨源氏一又清和天皇第六皇子貞純親王御子正四位上總介鎮守府將軍經基始賜二源姓一是云二當家源氏元祖一也日本後紀取意　平氏は桓武天皇之皇子一品式部卿葛原親王孫從五位下上總介高望王天長二年始賜二平姓一續日本紀取意　藤氏天智天皇八年十月內大臣鎌足連改二大中臣姓一爲二藤原氏一日本紀取意　橘氏は聖武天皇天平八年十一月葛城王始賜二橘姓一續日本紀

清和天皇の後胤　帝王編年記云人皇五十六代清和天皇諱惟仁號二水尾帝一文德天皇第四皇子母太皇太后藤原明子號二染殿后一攝政忠仁公女嘉祥三年庚午三月廿五日癸卯誕生同年十一月廿五日戊戌立爲二皇太子一二歲天安二年戊寅八月廿七日乙卯受禪同十一月七日甲子即二位于大極殿一時年九歲御宇十八年元慶三年己亥五月八日落餝法名素眞同四年庚子十二月四日崩二於圓覺寺一春秋三十三同七日奉レ葬二粟田山陵一矣　義經系圖は屋島に注す後胤は舟辨慶に注す

煙波滄波の浮雲　張均云驚花翻二舞日一垂柳拂二煙波一矣　李白云明晨掛二帆席一離恨滿二滄波一矣

會稽をすゝかん　舟辨慶に注す

鵺

近衛院仁平三年四月鵺と云怪鳥來て御殿の上に覆

へば帝おびへなやませ給ふ頼政に勅有て怪鳥を射殺す其形頭は猿胴は狸尾は蛇手足は虎鳴聲鵺にぞ似たりける依レ去宇治左大臣頼長仰を承て獅々王と云御劔を給はる比は卯月十日餘りの事なれは雲井に郭公二聲三聲おとづれければ左大臣「郭公名をも雲井にあぐるかなと仰られければ頼政右のひざをつき左の袖をひろげて月を少しめにかけつゝ「弓張月のいるにまかせてと仕り御劒を給り罷出彼變化の物をは空舟(ウツボ)に入て流されけるとぞきこえし　又七十八代二條院應保の頃鵺と云化鳥禁中に鳴て帝をなやませ奉る先例にまかせ頼政に仰付らる五月廿日あまりの夜鵺一聲鳴て去形見えさりけれ共頼政策に大鏑を取て鵺の方へ射る又小鏑を射上れば鵺と並て射落しける此度は大炊御門右大臣公能に仰付られ御衣を給はりて「五月やみ名をあらはせる今宵哉と仰られければ頼政「たそかれ時もすぎめと思ふにと仕り罷いづ已上平家物語全文略　長門本平家物語云鳥羽院御時ぬゑと申化鳥竹の御つぼに鳴事たび重りければ天聽をおどろかし奉る上下略

私云頼政たそかれ時もとよめる時也　今案鵺出來る事平家物語には近衛院の御時と二條院の御時と兩度の説を載たり又盛衰記には二條院の御時の事を載て近衛院の御時の沙汰是なし亦長門本には鳥羽院の御時とあり説々不同也但此唄は平家物語の近衛院のぬえの説を以て作る成へし　又云頼政鵺を射る事平家物語盛衰記長門本等にありといへ共家々の日並實錄等に見えす　台記云康治三年四月廿五日今日寅刻鵺鳴便泰親占曰吉也矣　同五月廿六日傳聞今日午刻東三條乾角杜樗無レ風折仆木口徑四尺九寸去レ地四尺許或說前日夕杜內有二數人語聲一或說自二艮角杜木一如レ煙氣揚入二雲中一未刻京師雷電暴雨所々有レ颷破二人屋一或說此颷出レ自二東三條杜內一木折時未レ有レ颷是夜有二人魂一自レ艮向レ坤其體太甚矣　同六月十八日丑刻計聞二鵺聲一天明就レ寢翌日召二泰親一令レ占二鵺事一曰可レ愼火事口舌間曰可レ避レ所否泰親曰今不レ可レ避者傳聞今年所々此鳥鳴云々泰親曰今日問二此鳥怪一七人矣　案レ之康治は近衛院の年號也此謠に東三條の森の方より黑雲一村立來てとうたふは此台記のすに相似たり但頼政事はなし

世を捨人の旅の空こしかたいつく成らん　次第の

意明也世捨人は松風に注すこしかたは呉服に注す
三熊野は舟橋及ひ百萬に注す紀の路の關は蟻通に記す
猶行末は和泉なる篠田の森を打過て　國造本紀云和泉國造元河内國靈龜元年割二置茅野監一則改爲レ國矣　類聚國史云元正天皇靈龜二年四月甲子割二河内國大鳥日根和泉三郡一始置二和泉監一矣　拾芥抄云天平寶字元年割二河内國一置二和泉郡一矣　本朝地理志略云國中多二清水一故號二和泉一矣　大和本記云和泉國とは彼國には清水多く出る處なれば和泉國と號す泉は水の名なれば也云々　和泉國和泉郡國府清水并八幡社縁起云神功皇后征二新羅一之年此清水一夜涌出故此地名二和泉郡一三韓悉平皇后歸レ自二新羅一詣二紀伊國一下二御舟一覧二此水一賞レ之矣清水上有二八幡社一號二并八幡一或曰二水内社一下略　私云和泉は本郡の名也郡の名を以て國の名とせり
信太森は和泉郡信太郷にあり神社あり號二信太大明神一延喜式神名帳聖神社云々　今同郷中村森田氏之居地有二老楠一云従レ古賞二于世一千枝楠也云々

六帖◯いつみなるしのだの杜のくすの木のちえに別れて物を社思へ
松原見えし遠里の愛住の江や難波潟芦屋の里に着にけり　遠里小野は攝州住吉郡住吉より東也世俗にをりをの共うりうの共云也　住江は高砂に注す難波潟は西成郡に屬す芦屋の里は雲林院に注す松原見えしとは住吉の松原をいへり　續千◯住江の松は久しき郭公遠里小野の一聲もかな　新後拾◯難波江やすくも燒火も打しめり芦屋の里に春雨そふる　知家
是ははや津の國芦屋の里に着て候　津の國は高砂に注す　兎原郡芦屋住吉兩河の間に鵺塚と云あり此唄に作る處是也俗傳云近衛院の御宇頼政矢に射落されし化鳥艫(ウツホノネ)に入て西海に流す此浦に流れ寄浦人取レ之是に埋む號二鵺塚二云々
籠鳥は檜垣に注す旨龜の浮木は實盛に記す
泪の浪の椌舟(ウツボ)　平家物語に彼變化の物をは椌舟に入て流されけると有　盛衰記には清水寺の岡に被レ埋たりと有
埋れ木の人しれぬ身　古今序の詞なり關寺小町に注す

古き歌にも芦の屋のなたの鹽やきいとまなみつけの小櫛はさゝすきにけり　伊勢物語の歌也つけの小くしもと有詞書云昔男津國むはらの郡芦屋の里にしるよしていきて住けり昔の歌に云々　牡丹花抄云上句は明也つけの小櫛もさゝすとはいやしき者のいとまなきゆへ髪けづる事もなき由也云々

愚見抄云萬葉第三石川の少郎が歌に「しかの蜑はめかり鹽やきいとまなみくしけのをくし取もみなくに此歌をあしのやの歌にかきなしてむかしの歌といへるにや但し新古今集には業平朝臣の歌と載られ侍り昔はくしにて髪をあげたり男も女もともにしけるにや云々

近衛院の御宇　百練抄云七十六代近衛天皇諱躰仁鳥羽院第六皇子母美福門院權中納言長實女也永治元年十二月七日受禪以二關白忠通一爲二攝政一同廿七日即位三歳在位十四年久壽二年七月廿三日崩二近衛皇宮一春秋十七年來御不豫也矣　御宇之字義は田村に注す

扨も近衛院の御在位の時仁平の頃ほひ主上夜な〳〵御惱あり　仁平は近衛院の年號也相續三年也百練抄云久安七年正月廿六日改元依二去年風水一也矣

主上は舟辨慶に注す　此謠從レ是以下平家物語の詞をすくにつゝけたり

東三條の森の方より　本朝文粹江匡衡詩云洛城有二一形勝一世謂二之東三條一矣　拾芥抄云東三條一條院誕生所或重明親王家二條南町西南北二町忠仁公家貞信公大入道傳領長久四年四月晦日燒失矣　古事談云東三條者重明親王之舊宅也親王夢日輪入二家中一見給而無二指事一過畢爲二大入道殿御領一之後前一條院所下令二誕生一給上也矣

即公卿僉議有て　公卿とは攝政關白及三公を公と云大中納言散一位及三位以上を卿と云參議は四位といへ共卿也是を都て公卿と申也又卿相共云也

變化　山姥に注す

賴政其時は兵庫の頭とぞ申ける　賴政は賴政に注す職原云兵庫寮頭一人五位諸太夫任レ之助六位諸太夫任レ之允六位侍任レ之矣　職員令云左右兵庫寮頭一人掌下左兵庫儀仗兵器安置得所出納曝凉及受レ事覆奏事上矣　令義解云昌泰元年改二左右兵庫一爲二兵庫寮一也矣　百寮訓要抄云兵庫寮は兵器を納らるゝ所也是を掌どる人を兵庫頭兵庫助兵庫權助

などいへり兵庫頭は四位五位是に任ず武官にてあれば其器を撰はるべし云々

猪早太唯一人　或云猪早太は猪鼻早太高直と號す領ニ遠江國猪鼻一故曰ニ猪鼻一多田源氏太田伊豆八郎廣政子也仲政爲ニ養子一矣　鎌倉小草紙には猪早太廣直と有又早太が子を猪鼻力王丸と云　平家物語云遠江國住人猪早太にほろの風切はいたりけり矢おはせて只一人ぞ具したりけると云々盛衰記云丁七唱早太二人を相具したりと云々

我身はふたへの狩衣に山鳥の尾にてはいたりける尖矢二筋　ふたへの狩衣はふたへは二重と云事歟又は二藍を云歟二藍と書てふたへとゝなふる也　眡江入楚云二藍は青花赤花二色にて染をいふ云々惣而藍染は夏の裝束に用る由錺抄に見えたり山鳥の尾にて矯(ハグ)とは尖矢の羽本式は鷹若は眞羽也或又筈の左右を山鳥の羽にて矯也美人草云山鳥の尾矢に付る事はとかり矢かふら矢かりまたからの小羽に付る也其外皆山鳥の尾にて矢はぐ事有へからず但じんどうなとは略儀なれ共くるしからす是は近年じんどうにつけ來る也云々　尖矢は鋒矢と書伊呂波字類抄云利鴈矢と書腸觚(ワタクリ)のある根を挿たるを云也尖根共云也　一云化鳥を射矢は山鳥の羽に脯の三十三有て星の九つ有を用ゆと云々　盛衰記云水破と云矢を黒鷲の羽を以てはぎ兵破と云矢を山鳥の羽にてはぎたり此矢にて鵺を射る云々文略

重籐の弓に取そへて　或云繁籐(シゲトウ)滋籐(同)と書是は八張弓の内四足弓の事也三十六の籐二十八の籐の弓を云也是を本式の重籐として是より籐を色々に略して其品多し其中に鵺重籐と云も有此名は其時より名付來るもの歟綾小路神明の什物に頼政鵺を射たりし弓有云々

南無八幡大菩薩　弓八幡に出たり

よつひきひやうど放つ矢に手こたへしてはたとあたるえたりやおうと矢さけびして　或云よつひきとは身をよせて引と云事也弓の習に身にふせよせて身をすぐにする事をいふひやうとは矢のよび聲也中時は手こたへ共矢こたへ共云也はたは將也中るを云一手の神頭にて四季の挾物を射てはひやうはたと射てと云はづしたるをひやうすつとはつしてと云又えたりやをうと矢さけびしてとは早くかけ

聲をする時を云美人草に前をきの物を射ても矢こたへをして馬の足を出すへし矢こたへをするには犬追物の時のことく左へ首を作りてをうとかけ聲をする也云々

九刀ぞさいたりける　　此刀は志津三郎兼氏作也と古き銘盡に記せり盛衰記云早太に骨食と云太刀を懐にさゝせたりと云々

頭は猿尾は蛇足手は虎のことくにて鳴聲鵺に似たりけり　　平家物語云頭猿軀は狸尾は蛇手足は虎と云々　盛衰記云頭は猿背は虎尾は狐足は狸音は鵼也實に希代の癖物也云々　倭名抄云唐韻云鵼海籥云鵺鳥名也漢語抄云沼江怪鳥也矣　或云鵺此鳥晝伏夜出故名レ鵺矣　山海經云單張之山有レ鳥狀如レ雉而文首白翼黃足名曰二白鵺一矣　拾芥抄云鵼鳴時の頌の歌に「よみぢ鳥我かきもとに鳴つなり人迄聞つゆく玉もあらし　匠材集云よみつ鳥は怪鳥なりと云々〇山家さらぬだに世のはかなきを思ふ身に鵺鳴渡る明ほのゝ空

水の柏にあらは社沈むはうかふ縁ならめ　　日本紀に御綱葉延喜式に三綱柏國史に三角柏又古歌に水の柏ともみつゝ柏ともよめり〇續古思ひあまりみつの柏に問事の泪にうくは泪也けり小侍從　歌林良材云三角柏とは三葉柏と云也伊勢太神宮にて三の柏を取てうらなふ事有是をなぐるにたつはかなふたゝぬはかなはぬ也扨たつを取て袖に包て悦ふ也俊頼卿歌に「神風や三の柏に事とひてたつをま袖に包てぞくる伊勢皇太神宮舊書云山谷水變二成甘水一浸二潤苗稼一得二其全稔一故有二風水祭一名曰二柏流一也豐年浮流凶年則沈覆云々四月七月祭レ之矣

あひ竹は遊行に注す實相は江口に注す讀誦は田村に注す

一佛成道觀見法界草木國土悉皆成佛有精非精皆共成佛道　　都而此文は諸法實相の意也是は中陰經の文也と實地坊證眞の記し畢給へ共彼經に無レ之由也一休水鏡云此文は釋迦出山の語也云々

五十二類も我同性の涅槃にひかれて眞如の月の　是も上の文と同じ心也　大經曰我說二一切衆生悉有二佛性一矣　經律異相曰一切萬法無レ非二諸法實相一矣　五十二類者諸の大比丘を初め菩薩人天龍王鬼神飛鳥樹林神象王仙人四天魔王自在天まて五

十二類也悉く涅槃經序品に說り涅槃は安宅に注す
眞如の月は山姥に記す
うしみつはかり　　舟橋に注す
玉體をなやまして　　海人藻芥云玉體寳壽は帝王太上天皇に限て言事也后宮等を不レ可レ言也云々　　前漢桓榮傳曰願君愼レ疾卅餐重愛ニ玉體一矣　　枚乘七發曰太子玉體不レ安注言レ玉美レ之也矣
おびえたまはらせ給ふ事も　　是はおひえ給ふと云詞也万葉の長歌に「やすみ玄ゝ我大君の夕ざれはめしたまへらし明暮は問たまへらしかみやまのとセツシヤウ云々　　平家物語におひえ魂極せと有是は絕入の事也
落々磊々と地にたふれて　　落々韻會曰不ニ相入一也矣　　磊說文曰衆石也或作レ礧一云擊也石轉突也又推レ石自レ高而下也矣　　尾韻曰儡然不ニ安定一貌矣　　杜詩云淸水石礧々矣　　月菴法語云生死去來棚頭傀儡一線斷時落々磊々矣
天爵　　田村に注す
獅々王と云御劒を賴政に下されけるを　　雜々拾遺云獅々王の御劒は賴政子孫太田の家につたはり件の太刀は備前助平が作也怪鳥を亡せし御恩賞に賴政に下されし也云々
宇治の大臣給りてきさはしをおり給ふに　　大職冠鎌足公十七世孫宇治惡左大臣賴長は智足院入道忠實次男法性寺關白殿弟母は土佐守盛實女也保元々年七月十四日於ニ奈良坂一流矢にあたりて薨ず年三十八云々　　きざはしは堦と書倭名抄云考聲切韻堦登レ堂級也兼名苑砌一名階矣　　大臣は融に注す
郭公名をも雲井にあぐるかな　　賴長の當座の發句也賴政の高名を郭公によそへられたり
弓張月のいるにまかせて　　弓を射るに月の入を兼たり何れも平家物語に出たり弓張月者詩經天保篇曰如ニ月之恒一矣　　孔氏云八日九日月體大率正半昏而中似ニ弓之張一而弦直一謂ニ之上弦一矣　　釋名曰弦月月之半名也其形一旁曲一旁直若レ張ニ弓弦一矣
大和物語云亭子院の御時みつねを召て月を弓はりといふ事はいつれの心ぞ其由をつかふまつれと仰ければみはしのもとに侍ひてつかふまつりける「照月を弓張としも云事は山へをさしていれはなりけり

淀川のよどみつ流れつ　淀川は融に注す○淀川の古よとむと人は見るらめと流れて深き心ある物を

宇渡野も同じ芦の屋の　宇渡野も芦の屋も攝州也淀川の流れのすへ也宇渡野は芦の名所なれは同し芦のやとはつゝけたり江口に注す

冥よりくらき道にそ入にける遙に照せ山の端の　拾遺集哀傷部和泉式部歌也留りは山の端の月詞書云性空上人の許によみてつかはしけると云々歌の心は法花化城喩品に從レ冥入ニ於冥ニ永不レ聞ニ佛名ニ此文を上の句に置て遙に照せと性空へ願へる心也無名抄云式部第一の歌と云々　從レ冥入ニ於冥ニと云文は東岸居士に注す

善界

今昔物語二十卷云今は昔天竺に天狗有けり天竺より震旦に渡りける道に海水一筋に諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂と音しければ天狗是を聞て大きに驚き海の水かく甚深の法文をば可レ唱と恠み思ひて此本體を知ていかでか不レ妨して有んと思ひて水の音に付て震旦に尋來りて聞に猶同し樣に鳴震旦も過て日本の境の海にして聞に猶同し樣に唱ふ其より筑紫の波方の津を過て文字の關にして聞に今少し高く唱ふ天狗彌恠て尋來る程に國々を過て河尻に尋來りぬ其より淀川に尋入は今少し增て唱ふ淀より宇治川に尋入ば彌增りて聞ゆ河を上て尋行に近江の湖に尋入たるにいよ〳〵高く唱ふれは猶尋ぬるに比叡山の横川より出る一ツの川に尋入に此文をきびしく唱ふ水の上をみれば四天王及諸の護法此水を護り給ふ天狗是に驚き怖れて近くも不レ寄暫有て天童の近くおはするに天狗恐れ乍ら寄て此水かく甚深の法文を唱ふるはいかなる事ぞと問天童答て云此河は比叡山學問する僧の厠の尻也かく止事なき法文を水ゝ唱ふる也依而天童まもり給ふ也と天狗是を聞て妨んと思ふ心忽に失て思ふ樣厠の尻だに甚深の法文を唱ふ況此山の僧の貴き有樣思ひやるにいはん方なし我此山の僧と成てんと誓を發して失にけり其後宇多法皇の御子に兵部卿有明親王と云人の子と成て其上の腹にやどりて生したる誓のごとく此山の僧と成て名を

云ニ明救ニ延昌僧正の弟子となり後僧正まで成て淨土寺の僧正と云けりと云々　同巻云今は昔震旦に天狗あり云ニ智羅永壽ニ此國に渡り此國の天狗に尋會て語云我國に德行の僧數あれ共我等が進退に掛ざる者はなし然れは此國に渡て修驗の僧共有と聞に其等に逢て一度か競せんと思ふ如何あらんと此國の天狗是を聞て答云我も妨えつ然れは近來可レ妨者共あり敎へ申さんトて震旦の天狗をいざなひて比叡山の嶽の石卒都婆の許に來る此の天狗の云樣我は人に見えられたる身なれはとて谷の方の藪にかくれて居たり震旦の天狗は老法師の形と成て道行人を妨けんと石卒都婆の傍に曲り居けり暫有て餘慶律師山の千壽院より腰輿に乘て內の御修法行ひに下り給ふを見て深く怖れて南の谷に尻を逆樣にして隱れたり扨律師過給へは天狗又もとの石卒都婆の許に居て暫有て又飯室の深禪權僧正腰輿に乘て下り給ふ具したる童の杖を提て彼老法師を見て散々に打拂て過ぬ日本の天狗來て震旦の天狗に向て云遙に震旦より渡て一人も不レ妨甲斐なくして返らんは震旦の爲に面目なかるべしと恥しめて

又もとの所にかくれて居ぬ暫あれは横川の座主慈惠大僧正小童部二三十人計座主の左右に立て渡給ふ時に童部十人計立歸て彼怪き老法師を見て頓て捕て打踏汝はいつくの者ぞ申せ〱と責給ふ老法師答云震旦より罷渡たる天狗也此所を渡り給はん人見奉らんとて此所に候ひつるに初め渡り給ふ餘慶律師は火界の咒を滿て通り給ひつれは輿の左右火のもえて見えければ逃て罷去き次に渡給ふ飯室の僧正は不動の眞言を唱へ給ひ制多迦童子の鐵の杖を持て渡給へは妨へきやうもなく恐れて罷かくれにき今度渡給ふ座主の御房は只止觀と云文を心に案じて登り給ふを深くもかくれすしてかくとらはれ奉りて悲き目みつるものといへは童部聞て重き罪ある者にも非す兎角道逃してよとて童部一足づヽ腰を踏て過給ふ老法師腰打おられて大きにさけぶ此國の天狗是を見てあなあさましの有樣哉とて北山の鵜の原の湯屋につれゆきて養性などさせて震旦へ返しやりけりと文略眞言傳同之 此謡は今昔物語を以て作るもの也　善界の名は愛宕山緣起にあり今昔には天狗の名を智羅永壽と有

雲路をしのぐ旅の空出る日の本を尋ねん　出る日の本とは日本を云也白樂天に注す

是は大唐の天狗の首領善界房にて候　大唐とはもろこしの惣名也愛宕山縁起に唐土の善界と有今昔物語には震旦の天狗と有首領とは棟梁の心也天狗は鞍馬天狗に注す

偖も我國に於て育王山青龍寺般若臺に至るまで

育王山は大明一統志四十六曰浙江寧波府阿育王山在二府城東五十里一舊名二鄮山一晉大康中幷州人劉薩訶得二阿育王塔於此一因名二阿育王山一矣　般若臺は佛祖統紀六曰慧思禪師傳云師居二南岳一至二叢密處一曰此古寺也吾三生嘗託二居此地一因指レ人掘レ之果有二僧用器皿及堂宇之基一即築レ臺爲レ衆說二般若經一矣　廬山記云慧遠法師寵二廬山一一時名德十八賢士集二立般若臺一誓同修二淨土一矣　青龍寺に天台山を云也春日龍神に注す

誠や日本は粟散遍地の小國なれ共神國として　仁王經に世間の帝王に五種有事を說謂四輪王の外を皆粟散王と名く棲復鈔云小王是粟散王粟者喩散者多也小王數多猶如二散粟一矣日本を小國といへは日本も粟散の內也と云事也太子傳云百濟日羅再二拜聖德太子一曰敬禮救世觀世音傳灯東方粟散國矣　神國とは神皇正統記云大日本は神國也天祖初て基をひらき日神ながく統を傳へ給ふ我國のみ此事あり異朝には其類なし此故に神國と云也云々　神道由來記云吾國者神靈共二天地一顯坐故國謂二神國一道謂二神道一天竺漢土者月與レ星之儀也故謂二月氏辰旦一日大陽月陽之耦生星陽之散氣也三光皆出二我國一矣

名にしおふ豐芦原の國津神青海原にさしおろす天の瓊矛の露なれや秋津島根の朝ぼらけ　豐芦原は日本の惣名也　神代卷云豐芦原千五百秋瑞穗之地矣國津神は地祇と書り界の諸神を云也鐵輪に注す青海原は海の惣名也滄溟と書天の瓊矛の露なれやとは神代卷云伊奘諾尊伊弉冊尊立二於天浮橋之上一共計曰底下豈無レ國歟廼以二天瓊矛一指下而探之是獲二滄溟一其矛鋒滴瀝之潮凝成二一島一名レ之曰二磤馭盧島一矣纂疏云天瓊矛者天神之寶戈也瓊美稱也矛兵器戈也刺レ賊之具也瓊矛者神明之本衆物之祖也矣　秋津島根とは是も日本の惣名也龍田に注す　朝開は朝朗共書貞德云ぼらけはひらくと云事也開の字也ほと

ひと相通也云々古今榮雅抄云朝開は夜のほの〴〵とあくる也云々

先承及びたる愛宕山に立越　愛宕山は手向山朝日峯と號す拾芥抄云愛宕護在ニ山城國葛野郡一矣　延喜式及三代實錄に丹波國桑田郡と有　舊事本紀に怨兒三代實錄に阿當護延喜式に阿多古或愛太子と書　大江匡房帝都記云平安帝都は大上の名跡をあらはせる國也西に八咫の嶺あり日神岩戸を出させ給ふその御光の指向ふけしき八咫の鏡にあらはれけるを名付てやたの峯と云後世にあたこ山と云云々　阿多古神社所レ祭ニ一座伊弉諾尊火彦靈尊也火彦靈ハ伊弉諾ノ御子云ニ軻遇突智尊一豐葦原卜定記云戊亥ニ當天王都守護神明坐ス即天神第七陰神也火災於永久退牟爲也止天若宮仁和火產靈於置玉奈利偏仁帝都靜謐基也云々

阿多古山緣起云昔文武大寶中役小角欲レ上ニ此山一有ニ雲遍上人者一住ニ菴於嵯峨之奧一小角同行至ニ清瀧一瀧上雲起山中雷鳴雨降如ニ車軸一不レ可レ進也二人秘咒密言以祈禱也日俄而天晴少焉地藏龍樹富樓那毘沙門愛染放レ光有ニ大杉一天竺日良唐土善界日本太郎房各將ニ其眷屬一現ニ大杉之上一中略　告ニ二人一曰我昔靈山會場受ニ佛付屬一成ニ大魔王一領ニ此山一言訖不レ見二人因號ニ杉樹一爲ニ清瀧四所明神一瀧上安ニ千手大士一置ニ五岳一鎭ニ其地一謂朝日峰大鷲峰高雄山龍上山賀魔獄山是也朝廷有レ旨立ニ神廟朝日峰一雲遍上人爲ニ開山ト一副一光仁帝勅ニ慶俊僧都一中ニ興此山一和氣清丸所レ建也號ニ愛宕山大權現一以ニ此山一爲ニ鎭護國家道場一文略　神祇拾遺云當社久代平安城北隅ト東隣也光仁天皇御宇天應元年釋慶俊奉レ遷ニ今之靈地一矣　私云此說いぶかし右之緣起及其外舊記に載る處往昔今の愛宕を指て云成らん尋ぬべし　世傳當社の本地勝軍地藏といへり此事不レ詳今考に勝軍地藏の事は洛東清水寺の緣起に延鎭沙門田村東夷征罰の爲に勝軍地藏勝敵毘沙門の法を祈ると有勝軍地藏の名是より始るとみへたり尋ぬへし　舊事神祇本紀云天人熊命勝勇神也不レ能レ殺レ之白ニ由於天祖一時天祖詔曰理非不レ可レ遁即勅下ニ天咒一天人熊命化成ニ軍幡一天照太神取レ之便爲ニ三軍纛幡一而當立ニ天門前一中略其後此三軍幡磐余彥天皇時化ニ金色鳶一爲ニ勝軍瑞一今在ニ山背國怨兒山一大神田神魔爲神是天狗神爲レ障爲レ怨其

事元也矣　同神武天皇紀云十二月癸巳朔丙申皇師遂前撃ニ長髓彦神一戰不レ能ニ所二子レ時忽然天陰雨氷乃有ニ金色靈鵄一飛來止ニ皇弓弭一其鵄光曄煜狀如ニ流電一矣由長髓彦神軍卒皆迷眩而不ニ復力戰一時天孫悅而勅問曰汝奇鵄神子勝神也從ニ何處一來鳶神奏曰吾是日宮三軍幡也天照太神勅ニ令吾一曰往救ニ天孫一令化レ鳶來吾住ニ此國一護ニ軍戰業一天孫問曰欲レ住ニ何處一即應奏曰山背國怨兒山吾住處可住矣天孫勅曰好汝隨意仍住ニ其山一領ニ天狗神一矣

太郎房に案内を申さはやと存候　太郎房一名榮術太郎と云也愛宕奥院は太郎房の社といへり　神社考云弘法弟子眞濟見ニ染殿皇后一迷而遂死爲レ魅眞濟之靈爲ニ大天狗一是愛宕山太郎坊也矣　染殿は忠仁公の娘文德帝の后也右の緣起に文武大寶年中に役小角此山に登て日本の太郎房現ニ大杉之上一と有文武帝は文德より百五十年餘以前也眞濟が靈天狗太郎房と成と云事時代大きに相違せり此事續礫集に書り

菓は鉢木に注す天地開闢は白鬚に注す

比叡山あれ社日本の天台山候よ　春日龍神及ひ兼平に注す

夫天台の佛法は權實二教にわかち　夫台家の心は三乘の方便を名付て權教とし一乘の眞實を名付て實教とす　止觀曰非レ權而强說爲レ權非レ實而強說爲レ實矣

又密宗の奥義を傳へ顯密兼學の處なるを　此山は顯教と密教と兩方を兼て學ぶ也顯とは一代聖教の中陀羅尼藏を不レ說經法を顯教と名づく密とは或陀羅尼藏を說經を密教と云也　三身問答云爲ニ淺略機一所說名爲ニ顯教義一爲ニ深秘機一所說以爲ニ秘密義一矣　二教論云佛有ニ三身一教則二種應化開說名曰ニ顯教一言顯略逗レ機法佛談話謂ニ之密藏一言秘奥實說矣　傳教大師云顯密雖レ異大道無レ爽矣

蟷螂が斧とかやは木曾に注すさすがは安達原に注す

猿猴が月にあひをなし　是おろかなるたとへ也　僧祇律曰佛告ニ諸比丘一過去世時波羅奈城有ニ五百獼猴一見ニ樹下有レ井井中見レ月共執ニ樹枝一手尾相接入レ井取レ月枝折一齊死矣　月影に命をかふる猿よりも沈はてぬる我身也けり土御門

我慢增上慢心の　法苑珠林曰依ニ業報差別經中一具說ニ十業以得ニ阿修羅報一一身行ニ微惡二口行ニ微

惡ニ三意行ニ微惡ー四起ニ於憍慢ー五起ニ於我慢ー六起ニ於增上慢ー七起ニ於大慢ー八起ニ邪慢ー九起ニ於慢々ー十廻ニ諸善根ー向ニ阿修羅趣ー下略

大聖の威力　大聖不動の威勢の力也

正しく火性三昧に入給ひて一切の魔軍を焚燒せり　聖無動尊秘密陀羅尼經曰於レ是金剛手菩薩入火生三昧ー其光普照ニ無邊世界ー火燄熾盛焚ニ燒諸障ー矣　又曰出ニ大智火ー焚ニ燒一切魔軍ー矣　慈覺大師蘇悉地經疏曰言ニ護摩ー者是西天語此即焚燒義也矣

外には忿怒の相を現ずといへ共内心慈悲の御惠み　聖無動經曰雖レ破ニ魔軍ー後與ニ法樂ー雖レ現ニ忿怒ー内心慈悲上下略

凝然不動の理を顯し　凝の字はとゝまると訓ず凝然は不レ動貌也　傳敎云不變眞如凝然常住矣

但住衆生心想之中　聖無動經曰是大明王無ニ其所居ー但住ニ衆生心想之中ー矣

見佛聞法　軒端梅に注す

三惡道を出なから猶も鬼畜の身をかりて　三惡道とは地獄餓鬼畜生也是を三塗共いへり鬼畜とは鬼は餓鬼也畜は畜生也　私云天狗は三惡道の內畜生道也然るを三惡道を出なから猶も鬼畜の身をかりてとつゝけたるはよろしからず又云世に慢心の人天狗になるといへり此輩に天狗を魔道の類 作れり　緣起云我昔靈山會場受ニ佛付屬ー成ニ大魔王ー領ニ此山ー矣

いつか般若の智水を得て火性三昧の焔を遁れはつべき

般若は佛の三德の一也佛の智惠也法界次第云般若秦言ニ智惠ー照ニ了一切諸法ー皆不可得能通ニ達一切ー無閡名爲ニ智惠ー矣智水とは智惠の水也大惠書云以ニ般若智水ー滌ニ除垢染之穢ー矣　白氏文集云以ニ智惠水ー永洗ニ煩惱塵ー矣　火性三昧は上に出たり三昧は又云ニ正定ー　遠法師云夫稱ニ三昧ー者何專レ思寂レ想之謂也矣　是界卷物云いや火界の焰にこかれて羽の色のたかひたるは立田の山の紅葉かやせかいはうつ〳〵云々

世中は夢か現かうつゝとも夢共しらずありてなければ　此歌は古今集雜下によみ人しらずと有或抄云是は八條のおほい君の歌也と云々

いよ〳〵我慢の旗矛のなびきもやらでいたづらに慢心をひるかへし佛法にいらぬをくやむ也　太平記卷二云久しく山門澆瀉の風に隨はゝ上慢の幢高

ふして遂 天魔の掌握中に落ぬべし云々
降魔の利劒を待こそはかなかりけれ　降ニ伏諸魔
王一と云語を略して降魔といへり不動經及諸經に
見えたり　利劒は不動の利劒也　不動十界私記云
不動明王十界所具尊王也十界之中第四劒修羅又云
利劒形寶形也是云ニ不二劒一矣
雲の梯　右近に注す
我名やよそに高雄山　高雄山は在ニ鳴瀧西北一里
許一帝都記云平安帝都は天上の名跡をあらはせる
國也乾に高尾楸尾と云所あり是も高天原の首尾也
と云々高雄山神護寺は　神皇正統記云河内國に寺
を立て神願寺と云後に高雄山に移し立今の神護寺
是也云々本尊は檀像の藥師佛御長五尺五寸也色葉
字類抄云高雄寺者號ニ神願寺一其後弘法大師改ニ神
護寺一當寺者應神天皇御願寺云々荒廢中絶之後和
氣清麿八幡大菩薩有ニ示現一興隆又經ニ年序一之後
爲ニ弘法大師卓跡一傳ニ置眞言教於此寺一本朝傳ニ眞
言一第一番也矣
東を見れは大比叡や　大比叡とは比叡山也兼平に
注す小比叡は西塔と横川との中間也○跡（年拾）たる丶神

代をとへは大ひえや小ひえの杉にかゝる白雲（法印成運）
横川の杉の梢より　横川は比叡山の北也大原より
は東也三塔の隨一首楞嚴院是也（新千）風渡る横川の杉
の下陰に心の水を手に結ふかな（公澄）
南につゝく如意が嶽　昔此所に寺あり云ニ如意寺一
今は絶たり本尊は觀音今三井寺の内にあり又瀑あ
り云ニ如意瀑一此嶽より直に園城寺におもむく是を
如意越と云也　帝都記云平安帝都は天上の名跡を
あらはせる國也東にあたりて如意の嶽あり日神岩
戸を出させ給ひて其御光顯れ出たりけるを八百万
の神悅て皆意の如く也と宣しより名ニ如意山一云々
鷲のお山　比叡山を云也
勅をうけ我立杣を出なから急も同じ名に高き大内山
の道ならん　今昔物語に餘慶律師山の千壽院より
腰輿に乘て内の御修法行ひに下り給ふと天狗見て
深くおそれてかくれたりと有是を以てつゝけたり
我立杣は叡山を云也兼平に注す大内山は内裏を指
て云也
あれに見えたる下り松の　下り松は愛宕郡一乘寺
村の藪里にあり壽永の比大納言資方の娘子を捨給

ひし處也但し今昔物語に天狗比叡山の石卒都婆の許にかくれ居たりとあれは只爰はさがりたる松と見るへし
雲となり雨となるは夕顔に注す抑は高砂に注す
いかに御房今更何の觀念をかなせる　此觀念は天台の一念三千一心三觀の觀心成へし具に止觀に見へたり今昔物語に座主の御房は只止觀と云文を心に案して登り給ふと有此謡には餘慶律師飯室の深禪横川の座主慈惠大僧正此三人を一つに作たる也
それ若作障碍即有一佛魔境と說り　若作ニ障碍一即有ニ一佛魔境一と訓讀する也言は觀念の時若魔來て障をなす其魔境にも一佛を具す 無ニ魔佛異一何怖レ魔耶是を魔佛一如の觀と名つく如レ此觀念する時は魔大きに怖レ之魔は本斥レ佛也今觀ニ一如一故魔必退散する也修習止觀云正心不レ動知ニ魔界如即佛界如一若魔界如佛界如一如無ニ二如一如レ是了知則魔界無レ所レ捨佛界無レ所レ取佛法自當ニ現前魔境自然消滅一矣　止觀八曰知下魔界如佛界如一如無ニ二一如一平等一相上不下以レ魔爲レ戚以レ佛爲レ欣安ニ之實際一若能如レ是邪不レ干レ正惱亂設起魔來甚善也

欲界の内に生るゝ輩は悟の道や其儘に魔道のちまたと成ぬらん　今世に悟道せりと云人ありといふとも末世欲界の凡夫なれは眞のさとりを得ると云人まれなるへし皆慢心の心出て返て魔道のちまたならんと云事也欲界は景清に注す
本より魔佛一如にして　首楞嚴經曰如ニ魔界一如ニ佛界ニ不レ二矣　淨名經曰魔界佛界一如矣
是界卷物云日羅坊云諸法實相と觀すれは峰の魔界も佛界なり万法一如ととく時は谷の鬼神もれいゑんなり云々
凡聖不二なり　仁王經曰法性大海凡夫聖人不レ撰レ二矣傳大士錄云凡聖兩途非ニ二處一生死涅槃常共和上下略 宗鏡錄云未レ有ニ無心境一曾無ニ無境心一凡聖通論都有ニ幾境一矣
自性清淨天然うこきなき是を不動と名付たり　動なきとは不動明王の本體寂靜の義也　底哩經曰不動者是菩提心大寂靜義也矣　大疏九云不動者即是心淨菩提之心也矣　不動尊憑鈔云此尊名字有ニ五種ニ一常住金剛二聖無動三風動四風童五不動矣
自性清淨者占察經曰一實境界者謂衆生心體從レ本

以來不生不滅自性清淨矣　旭師疏云自性清淨者妄見ニ垢染ー垢染自性恒清淨也矣

聽我說者得大智惠うむたらたかんまん　葵上及安達原に注す

矜羯羅制吒迦　不動明王の使者也聖無動經に出たり八大童子執曰矜羯羅形如ニ十五歲童ー着ニ蓮華冠ー身白肉色ニ二手合掌其二大指與ニ頭指ー間橫持ニ一股杵ー天衣袈裟微妙嚴飾制吒迦亦童子色如ニ紅蓮ー頭結ニ五髻ー左手執ニ縛曰羅ー右手執ニ金剛棒ー順惡之者故不レ着ニ袈裟ー然以ニ天衣ー纏ニ其頭首ー矣　此二童子の祭樣幷に功德の次第は陀羅尼秘密法に出たり略レ之

十二天　日天月天帝釋天伊舍那天焔摩天羅刹天水天風天火天地天多聞天大梵天是を十二天と云也聖無動經に出たり

明王諸天　明王とは五大明王を云也卅辨慶に注す諸天は右の十二天其外辨天大黑天等多し

東を見れは山王權現南に男山西に松尾北野や賀茂の　山王は兼平に注す男山は弓八幡に注す松尾は融に記す北野は老松に注す賀茂はかもに注す

山風神風吹はらへは　神風は伊勢の枕詞也此所にて神風とつゞくる事よろしからす野宮に注す

力もつき弓の八島の浪の　つき弓は槻の木にて作る弓也八島は日本の惣名也力も盡るといひかけ弓の矢島とうけたり

大會

十訓抄云後冷泉院の御時比叡山西塔の僧都に出て歸るさに東北院の大路に童部五六人あつまり老たる鳶をしばりて羽をぬかんと云彼僧いと不便に思ひ持たる扇に替て鳶を助けて去ぬ其先の道のかたはらなる籔より法師出て只今は御憐により命たすかり忝と云僧覺えすといへは法師の云東北院のあたりにての事なり思ひあたり給ふへしと云其時天狗としりぬ其者云樣何にても望あらはかなへんと僧の云我七十になりて更に望なし但世尊の御說法の體を見せ侍る事可レ成かといへは我小道の通を得たり安き御事なりしはらく目をふさき佛の御聲聞ゆる時目をひらき給へかまへて貴く思ひ給ふ

なといひて峰へ上ると思へは說法聞へたり山は則靈山となり地は又瑠璃となる七重の寶樹あり如來獅子の座にまします佛弟子天龍八部微妙の音樂を奏す其時覺すゑらす合掌しけれは護法天童あまくたり給ひかほとの僧をいかてケ樣にはたふらかすと云て不殘追ちらし給ふと云々付法藏經云世尊四世の祖師毱多尊說法の時美麗の女性白象に乘て來る聽衆彼女を見て說法をきかず剩彼女尊者へ華鬘をなけかけければ御首にまとひけり其時尊者も花鬘を彼女になけ給へは女の首に纒ふ初めは花鬘と見えつるが死骨蛇となり其臭き事たとへんかたなし女大きに苦しみけふより後障をなすべからす我は魔也一切の魔にも申付て障をなさしと云于レ時尊者の花鬘はなく成にけり其後魔云何にても御望あらはかなへ參らせんと尊者の云然らは釋尊御說法の有樣拜みたきと也其時やすき御事也去レ乍たとへありかたく思召共必拜し給ふなと約して魔は林の中へ入よと見えつるが忽花ふり音樂聞え大地ふるひて如來出給ひ一切の御弟子天龍八部悉く頭を地につけうやまひ奉る其時法花經を說給ふ尊者もあまりの忝さに座具をのべ禮拜し給へは霞を風の吹拂ふごとく皆消失たり魔が云かまへて拜し給ふなと申つるにとて殘おほかる有樣と云々已上取意

夫一代の敎法は五時八敎をけつり　けつりと云こと葉いぶかし追而尋ぬへし　一代の敎法とは釋尊一代の聖敎を云也四敎義云以二五時八敎一判二釋東流一代聖敎一罄無レ不レ盡矣　一云考二一切經一開元錄に載する處一千一百二十四部五千四十八卷見行入藏也或記云其實數は一千一百二十三部五千四十七卷云々五時及ひ八敎は此次に記す

敎內敎外を分たれたり　敎內とは世尊の御法を聞て得道するをいへり敎外とは口辨にかゝはらす或は佛一枝の花を拈すれは迦葉見て其道をさとし或は明星を見て悟道し給ふの類也禪家に敎外別傳と立る是なり

五時と云は華嚴阿含方等般若法華　華嚴三七日阿含十二年方等十六年般若十四年法花八年但涅槃經も此內に攝す以上是を五時と云也　華嚴集解云具云二大方廣佛華嚴經一大方廣法也佛人也華嚴譬也矣法華玄義曰華嚴經者擬三題言二華嚴一是万行莊二飾修因一之義矣　佛祖統記曰別行玄記云華嚴譬也諸地

因華莊ニ嚴果德ー矣　阿含有ニ四阿含ー法華文句云更開レ四謂增一長中雜增一阿含明ニ人天因果ー長阿含破ニ邪見ー中阿含明ニ深義ー雜阿含明ニ禪定ー矣　文句記云阿含梵語此翻ニ無比法ニ三轉法輪相甚深無ニ可レ比法ー故矣　輔正記云肇師長阿含序所ニ以通稱ニ阿含ー者此譯爲ニ法歸ー謂万善淵府摠持園苑衆法所歸故矣　唯識論云阿含者謂諸如來所說之敎也矣　方等佛祖統紀云四敎並談曰レ方四機但被曰レ等矣集解云方者廣也等者平等也今之方等者四敎俱說事方等也矣　私云四敎者藏通別圓也　般若具云ニ摩訶般若波羅密經ー法華玄義云般若尊重智惠輕薄何得ニ用レ輕翻レ重矣集解云般若此云ニ智惠ー般若尊重智惠輕淺故存ニ梵音ー矣　法華具云ニ妙法蓮華經ー集解云亦以ニ其經題ー立レ時法即妙法　華謂蓮華矣　玄義序云所レ言妙者妙名ニ不可思議ー也所レ言法者十界十如權實之法也蓮華者譬ニ權實法ー也矣　又云發ニ秘密之奧藏ー稱レ之爲レ妙示ニ權實之正軌ー故號爲レ法 指ニ久遠之本果ー喩レ之以レ蓮會ニ不二之圓道ー譬レ之以レ華聲爲ニ佛事ー稱レ之爲レ經矣　法華涅槃同時之事玄義云涅槃稱爲ニ醍醐ー此經名ニ大王饍ー故知二經俱是醍醐矣

涅槃經者集解云 涅槃者具云ニ摩訶般涅槃那ー此翻ニ大滅度ー大即法身滅即解脫度即般若矣

四敎とは是藏通別圓たり　四敎とは化儀の四敎化法の四敎と云事有化儀の四敎とは頓敎漸敎不定敎秘密敎を云化法の四敎とは三藏敎通敎別敎圓敎を云也是を合て八敎とす右の注長々しければ略レ之四敎義及集注に見えたり

遮那敎主の秘藏をうけ　遮那敎主とは大日如來を云也兼平に注す　秘藏は鉢木に記す

五想成身の峰を開きしより以來　峰とは靈鷲山を指て云歟菩提心論云五相成身者一是通達心二是菩提心三是金剛心四是金剛身五是證ニ無上菩提ー獲ニ金剛堅固身ー也然此五相具備方成ニ本尊身ー也其圓明則普賢身也亦是普賢心也矣　十八會指歸云於ニ初品中ー說下毘盧遮那佛受用身以ニ五相ー現成中等正覺上五相所謂通達本心修菩提心成金剛心證金剛身佛身圓滿矣〔拾玉〕三惡の家には何かかへるべきいてにし物を五相成身

鷲のみ山を移すなる一佛乘ノ峰には眞如の惠日まとか也　鷲のみ山は天竺ノ靈鷲山を云春日龍神に注す一佛乘の峰は比叡山を云也兼平に注す眞如は江

口に記す惠日とは佛の智惠明か成を云也法花經云
惠日破二諸闇一矣
鳥三寶を念して風常樂とおとつるゝ　三寶とは佛法僧の三寶を云り然るに三寶を念じてといへるは心得ず念とは觀念の義也鳥の三寶を觀念する事はあるべからず且又鳥三寶といへるもいかゞ鳥も微妙の法問をとなへ風常樂とおとづるゝとあらば然るべし但三寶と云るにも寄所ある歟按ずるに惣而比叡山等の深山に三寶鳥といふ鳥あり一佛法僧とさえづると世にいひ傳へたり即ちうたひに作る所ひえい山なれば是等の義を取合て鳥三寶とはいふならん　世傳佛法僧鳥は號二三寶鳥一比叡山及高野醍醐等の深山に鳴と云り鶉鷺記云佛法僧と云は鳥の類と云說ありと云々或抄云形類二鸜鵒一多入レ夜則鳴其聲如レ謂二佛法僧一云々通念集云佛法僧の鳥の事は靈窟閑林のうちにて曉かた一夏の間啼と也雄佛法となけば雌僧と聲をあはするなりと云々藤原敦光記云下野國二荒山有二佛法僧一矣　山城國宇治醍醐山有二佛法僧一見二醍醐寺雜錄一又松尾性靈集云によみ合せたる古歌もあり證歌次に記す　於二高野山龍光院一後夜聞二佛法僧鳥一弘法大師詩　寒林獨坐草堂曉　三寶之聲聞二一鳥一一鳥有レ聲人有レ心　惟心雲水俱了々　日本紀略曰延喜六年右大臣光修二法花八講一佛法僧鳥來鳴矣　又云延喜十八年右大臣忠平於二五條家一限二五日十座一講二說法花經一佛法僧鳥來二鳴樹上一矣

我國は御法の道のひろければ鳥もとなふる佛法僧かな　新六帖
松の尾の峰えつかなる曙にあふきてきけは佛法僧なく　光俊

極樂には水鳥樹林ともに說法をとなふるなり比叡山に佛法最初の地なれば鳥の鳴聲風の音皆法身說法と聞なすと也　常樂とは佛果に常樂我淨の四德と云事有我淨を略して常樂をいへり　名義集云光明玄云法身般若解脫是爲レ三常樂我淨是爲レ德　無二二生死一爲レ常不レ受二一邊一爲レ樂是八自在爲レ我三業淸淨爲レ淨矣○觀念の心しすめは山風を常樂我淨とこそ聞ゆれ　權僧正智辨

月は古殿の燈をかゝけ風は空廊の箒となつて　心明に聞えたり榮花物語云淨妙寺願文山嵐朝掃レ庭溪月夜擧レ燭上下略

苦路を歩みよるべの水　よるべの水に社頭にある水也櫻川に注す爰はたゞあゆみよると計の諷詞にてつゞけたり

我せんかんの窓に向ひ　禪閑と書歟玄づかに座禪の心歟

東北院　軒端梅に注す

刹那にかなへ申へし　楞伽云刹那時不レ住名爲二刹那一矣　倶舍云時之極少名二刹那一壯士一彈指頃六十五刹那矣　仁王云一念中有二九十刹那一一刹那經二九百生滅一毘曇翻爲二一念一矣已上名義集

但釋尊靈鷲山にての御說法の有樣　釋尊靈鷲山にて般若心經無量壽經觀無量壽經及法花經を說法し給へり釋尊は百万に注す　說法は自然居士に注す

返す〳〵も約諾　約諾は約束也字彙云諾承領之辭也又以レ言許レ人曰レ諾矣

夫山はちいさき壤を生ずかるがゆへに高き事をなし海は細き流れをいとはず故に深き事をなす　管子曰山不レ辭二土石一故能成二其高一矣文選李斯上書曰泰山不レ讓二土壤一故能成二其大一河海不レ擇二細流一故能就二其深一矣

佛の御聲あらたに聞ゆ　法界次第云佛所レ出聲凡有二詮辨一言辭淸雅聞者無レ厭聽レ之無レ足能爲二一切一作二與樂拔苦因緣一矣大論曰佛音聲所レ到無レ有二限數一如二密跡經中所說一目蓮試二佛音聲一極至二西方一猶聞二佛音一若二如對レ面矣

大地は金瑠璃　金銀瑠璃七寶を地とする事法花經及諸經に多く說り略レ之　往生要集云彼世界以二瑠璃一爲レ地矣

木は又七重寶樹と成て　阿彌陀經觀經等には七重行樹と說り觀經曰一々樹高八千由旬又曰樹葉縱廣正等二十五由旬云々

釋迦如來獅子の座にあらはれ給へは　獅子座は大論云問云何名二獅子座一爲二佛化作一爲二實獅子一爲二金銀木石作一耶答云是號二獅子座一非レ實也佛爲二人中師子一凡佛所レ座若牀若地皆名二師子座一夫獅子獸中獨步無レ畏能伏二一切一佛亦如レ是於二九十六種外道一切人天中一一切降伏得レ無レ所レ畏故稱二人中師子一矣拾玉〇位山うき世に社はくたる共師子の座にゐる身共成なん

普賢文殊　普賢は江口に記す文殊は卒都婆小町に注

す
龍神八部　青日龍神に注す
加葉阿難の大聲聞　無量壽經曰十方來諸菩薩衆長老阿難諸大聲聞一切大衆聞二佛所說一靡レ不二歡喜一矣迦葉は梵音言二摩訶迦葉波一文句云此翻二大龜氏一其先代學レ道靈龜負二仙圖一而應從レ德命レ族故云二龜氏一時人多以レ姓召レ之其實有レ名名二畢鉢羅一父母禱二樹神一而生子故名二畢鉢羅一言レ大者若約二所表一或因二智大德大心大一故稱二大迦葉一若約レ事釋者佛弟子中多レ名二迦葉一如二十力三迦葉等一於二同姓中一尊者最長故標レ大以簡レ之矣　阿難は大論云秦言二歡喜一佛成道時斛飯王家使來白二淨飯王一言貴弟生レ男王心歡喜言今日大吉語二來使一言是男當三字爲二阿難一擧レ國欣慶又名二慶喜一亦翻二無染一雖レ殘思未レ盡隨レ佛入二天人龍宮一見レ女心無二染著一故矣聲聞は要覽云聲聞者瑜珈論曰諸佛聖敎聲爲二上首一從二師友所一聞二此聲敎一展轉修證永出二世間一小行小果故名二聲聞一矣
空より四種の花ふりくたり　四種の花とは法花序品云是時天雨二曼陁羅華摩訶曼陁羅華曼殊沙華摩訶曼殊沙華一矣　名義集云梵音音二曼陁羅一此云二適意一又云二白華一又梵音言二曼殊沙一此云二柔輭一亦云二赤華一矣
如來肝心の法門を說給ふ　肝心の法門とは釋迦如來法花經を說法し給ふをいへり
僧正其時たちまちに　職原鈔云僧正准二參議一矣一云後醍醐院時大僧正准二二位大納言一正僧正准二二位中納言一權僧正准二三位參議一矣　職原鈔聞書云僧正者僧綱統領也勘二知諸大寺僧中政務一僧綱中僧正最規模也昔者任二僧正一例者以二勅使一任レ之參議勤二勅使一少納言辨官等來讀二宣命一以任レ之近代不レ然多以二口宣一任レ之矣　日本紀云推古天皇三十二年四月十七日高麗沙門觀勒任二僧正一是日本僧正始也矣　續日本紀云孝謙天皇御宇唐律宗鑑眞來朝建二和州招提寺一爲二勅願所一爲二鑑眞大僧正一矣
大恩敎主　安宅に記す
台嶺　比叡山を云也比叡山は唐土の天台山に准する故に台嶺とは云也春日龍神に注す
震動に春日龍神に注す帝釋は梅枝に注す天狗は鞍馬天狗に記す喜見城邯鄲に注す

有つる大會ちり／＼に成てぞ見えたりける　大法會とて諸佛大衆說法の場に集るを云也說文云會合也矣　增韻云聚也矣　周禮云時見曰ㇾ會矣　從ㇾ地涌出品曰今此之大會無量百千億是諸菩薩等皆欲ㇾ知二此事一矣

もぢり羽になつて　もぢり羽は羽のよれたるを云歟後西園寺入道實兼卿百首に「取とらす鳥はにかさし嶺きはをもぢりてこゆる鷹のはるき羽

春日龍神

釋明惠上人元號二成辨一後改二高辨一姓平氏紀州在田郡石垣吉原村人也父重國高倉院武者所也母藤原宗重女也生二承安三年癸巳正月八日一九歲從二高尾山上覺一讀二倶舍頌一十九從二興然一稟二兩部密法一自ㇾ爾止二北上栂尾一盛唱二賢首宗一寬喜四年壬辰正月十九日唱二彌勒號一而寂年六十矣眞言傳云建仁二年冬の頃殊に西天を戀慕して渡天の事を談ず同三年正月廿六日春日大明神或女に託して渡天の事をとゞめ給ふ諸神皆上人を守護すといへ共我と住吉大明神と殊に相離れず願は我國を去て遠行する事なかれ此事を制せん爲に來る處也上人申云教訓に依て早く思ひ留るべき也と又仰られて云必春日山に參詣して三日が間居住すべしと云則神の告によりて社壇に參詣するに鹿膝を屈して上人に向ふ寶前に座して睡眠の間社壇忽に靈山淨土と成て釋迦如來諸大眷屬炳然と現じ給ふと見ると云々　古今著聞云高辨上人釋尊の遺跡をおがみ奉らんとて弟子十餘人を相具して天竺へ渡り侍らんと思はれける頃春日大明神にいとま申さんとて彼社に詣給ふに鹿六十頭膝を折て地に臥上人を敬けり其後生所紀州湯淺郡にむかはれけるに上人の伯母について春日御神託云我佛法を守護せんが爲に此國に跡をたれり上人我國を捨ていづくへか行んとすると宣ひければ上人云此事難ㇾ信神託まことならば驗を見せしめ給へ于ㇾ時伯母云汝疑事なかれ春日山へ來し時鹿敬ひを見ずや我汝が首に上りて不ㇾ放我を敬故に上人に向ひ鹿膝を折辨云乍ㇾ去速に凡夫の振舞ならざらん事をしめし給へと于ㇾ時女飛上り萱屋の梁に尻掛て座せり其面色如二瑠璃一口より白き淡

をたるその淡芬々たり時に上人信仰稽禮し年來花嚴經の中に不審なる處問奉りしに悉く解脫し給ふ上人涕泣隨喜して渡天の思ひをとゞまり給ふ云々文略

月の行衛もそなたそと日の入國を尋ん　　次第の詞に入唐渡天の心をふくませたり月の行衛日の入國とは月氏震旦の二つをいへり

是は栂尾の明惠法師にて候　　栂尾は在二槇尾山東一扶桑略記云北山有二幽邃堂一號二度賀尾寺一矣　元天台尊意の開基也後鳥羽院の頃明惠上人再興レ之給ひて號二高山寺一中尊は盧舍那佛運慶の作也寶藏の西の方に社あり住吉春日大明神の繪像也宅間法眼が筆也栂尾は釋書に梅尾と有本朝事跡考云高雄西北曰二梅尾一栂與レ梅字通用矣嵯峨集云東上雪村諱友梅至二梅尾一此山名我諱字也矣湖海新聞に梅を木母といへり昔は梅と栂と字訓相通じけると見えたり法師は江口に注す南都は玉葛に注す

我入唐渡天の志あるにより　　入唐の始は釋惠濟沙門惠先共に入唐留學せられ三十四代推古天皇三十一年七月に歸朝し給ふ是入唐の始也又日本より渡天の始は眞如法師也已上釋書に記せり大唐より渡天の始は晉の法顯也安帝の隆安三年に渡天せられし由譯經圖記にあり

春日の明神に參らはやと思ひ　　春日社在二大和國添上郡春日鄕一所レ祭之神四座第一武甕槌命鹿島神也第二齋主命亦曰二經津主命一香取神也　第三天津兒屋根命春日神是也第四姬太神天照太神之分神　神社考云神護景雲元年六月二十一日武雷命自二常陸國鹿島一出求二棲處一駕二白鹿一持二榊枝一爲レ鞭到二于伊勢國名帳郡一中臣連時風秀行者侍從十二月七日入二於大和國阿倍山一同二年正月九日至二三笠山一告二事於三神所一於レ是齋主命者自二下總國香取一來天兒屋根命者自二河內國枚岡一移姬大神者自二伊勢國一而從來共於二三笠之山一而太二立宮柱於底磐根一以奉二崇四所大神一春日註式及公事根源同レ之

愛宕山樒か原をよそに見て　　愛宕山は善界に注す樒が原は水尾山よりいでゝ愛宕山の中程西の方也さがより北也丹波の境也相國寺御塔供養記云樒が原をはる〴〵と分入せ給ひけん御袖の露けさも思ひやられ侍る云々方輿集○愛宕山樒か原に雪つもり花つ

む人の跡たにもなし曾禰好忠

月に双の岡の松　双の岡は在二仁和寺南法金剛院西一一の岡二一の岡三の岡とならびある故に名づく

兼好法師集に双の岡に無常所をまふけてあはれ幾世のとよみし所なり　類聚國史云嘉祥二年三月乙亥行二幸双岡一矣　○新續古松のみや双の岡の麓寺軒端の

月も影もらぬまて

奈良坂越て三笠山春日の里に着にけり　奈良坂は般若寺の北にあり是南都の北の口也或說云今此奈良坂は古歌によめる奈良坂に非ず今南都の西にある日蓮宗喜見院の前の坂是即昔の奈良坂也其所を今も坂と云也秀吉公豐後橋をかけ巨椋堤をつき給ひしより今の般若寺の北の坂を通る也其昔は喜見院の前より柞の杜を過藪の渡を越し也云々顯注密勘云春日山は總名也三笠山は別也云々　春日山の下にひきゝ山を三笠山といふと見えたり春日の里は奈良の町をいふ也奈良は日本紀に那羅と書續日本紀に寧樂と書又奈良と云事は　日本紀第五云崇神天皇御宇武埴安彥謀反逆興レ師登二那羅山一而軍之時官軍屯聚而躙二跙草木一因以號二其山一曰二那羅

山一矣

夫山は動さる形を現して古今に至る神道を顯し日月地におちず地水天にのぼらず山海も動せさるは國常立の神徳也是神道の根元也　神代直指沙云天地山海草木人物器財迄も一物も此國常立尊ののりうつりおはしまさずといふ事なしとこしなへに立給ふ故に末世人代迄も日月も地におちず四時も時をたがへず人物も斷絕せぬは此國常立尊の神徳にあらずやとこしなへにたつといふも是ぞ神道の根本也云々　○宗良親王千首昔たれ作りなしけん動なき山又山の岩のすかたを

久堅の天兒屋根の世々とかや　久堅は羽衣に注す

天兒屋根は海人に注す

月にたつ影も鳥居の二柱　二柱とは陰陽二神をいふ也　兼邦百首抄云凡鳥居は陰陽の二をあらはせり昔は柱二本計たちてかさ木なしと云々　或云伊勢神宮に立る所の鳥居を二柱の鳥居と云也云々委く野宮に注す○兼邦百首見てもしれ誰も生れし二柱これ天地の姿ならすや

四ところの神　春日の四所を云也上に記す

すめる水屋の御影まて　水屋明神は春日の末社也所ﾚ祭三座素盞嗚命稻田姬南海神女也 諸神記云外院自ニ本社ー乾方ニ町去御座水屋明神ー所所謂牛頭天皇是也矣社家説云每年四月五日能あり世に水屋の能と云濫觴は伏見院の御宇世中疫病になやまされけるにさらば此社をなだめ奉らんとて神樂を奏し舞曲をなしぬればそのしるしありしより恒例となれり云々〇夫木春日山水屋の水の末迄も神にまかせて身を賴かな

塵にまじはる神心は龍田に注す枝をならさぬは高砂宮つこは田村上人は遊行柳さすがは安達原に注す

されば上人をは太郎と名付笠置の解脫上人をは次郎と賴み　されば上人とは明惠を云也神社考云春日大明神託宣曰明惠房解脫房我太郎次郞也或時此兩人詣ニ春日社ー鹿折ﾚ膝而伏明惠欲ﾚ渡ニ天竺ー神託而留ﾚ之矣　和論語云明惠上人と解脫上人をば春日大明神第一第二の弟子なりと常に稱歎し給ひしに或時明神此二人に御對面有しに明惠には直に逢給ひ解脫には翠簾を隔て逢給ひぬ明惠上人不審に思ひ奉り何とて解脫は我よりは智德も高く學力も勝れしに直に逢給はぬやといへば明神仰られしは我に隔る心なし唯解脫が慢心我を隔つる也、仰られける是より解脫房正直けんごの大道に入ておのれか智見を拂ひすてし云々　笠置寺在ニ山城國相樂郡ー鹿鷺書本尊彌勒也　帝王編年記云天智天皇ニ年甲子天人降造ニ笠置石像彌勒ー矣〇今昔物語云笠置寺は天武天皇の皇子大友皇子の草創也本尊は彌勒也有時皇子山に出て狩し給ふ時駿馬に乘て鹿を追て馳す俄にして鹿見えず于ﾚ時東西を忘ニて本の處に歸らん事を不ﾚ得我命を助け給へと山神にきせいして本の處に歸る皇子の着給へる笠を脫て此處に殘し置重而尋ね行て彌勒の像を此處の岩屋に雕付給ひてそれより爰を笠置寺と云皇子の笠をぬぎ置給ひし處なるゆへに笠置とはいふなり文略

解脫房貞慶は姓は藤氏左大辨貞憲子也母夢に高僧來て自稱して云ニ貞慶ー懷に入と見て孕既に誕して生長す興福寺にて出家して號ニ貞慶ー彼笠置の窟に住す建保元年二月三日寂す年五十九と釋書文略　次郎太郎と稱する事郞は男子の稱號也又官の名也白

居易詩云莫レ擧二二郎吟太苦一矣　唐明皇を三郎と稱す張易之昌宗兄弟を五郎六郎と云安祿山は李林甫を稱して十郎とす唐書に見えたり又太子傳に蘇我臣入鹿時の人稱二太郎一云々

左右の眼雨の手のことくにて　兄弟を左右の眼にたとふる事は日本紀云伊弉諾尊至二筑紫日向小戸橘之檍原一而祓除焉然後洗二左眼一因以生神號曰二天照太神一復洗二右眼一因以生神曰二月讀尊一矣　兄弟を兩の手に喩る事は後漢王脩曰兄弟者左右手也矣晋書邵續曰兄弟如二左右手一矣

今は春日のお山社即靈鷲山成へけれ　靈鷲山　名義集云梵語云二耆闍崛山一大論云耆闍名レ鷲崛名レ頭是山頂似レ鷲增一佛告二諸比丘一此山久遠同名二靈鷲一矣淨影云此翻爲二靈鷲山一多有二仙靈一居二住此山一並有二鷲鳥一遊二集此山一名二靈鷲山一亦反名爲二鷲頭山一以二諸鷲鳥居二此山頂一名二鷲頭山一亦此山頂像似二鷲頭一故名二鷲頭山一矣

奈良坂の此手を合せて禮拜する　奈良坂やこの手柏の歌を兼たり百萬に注す

三笠の杜の草木の風も吹ぬに枝をたれ　法花傳云國清寺智顗禪師以二身血一書二寫法花經一而國清寺眞身堂納レ之四隣之草木向レ堂低文略

問はむさしのゝはてしなの心や　新古武藏野は行共秋の果そなきいかなる風の末に吹らん通具

此歌は東の武藏野をよめる歌なれ共奈良に武藏野と云所あるにて此歌を爰にふくませたり　澄月歌枕云武藏塚は春日社の南にありと云々　和州寺社記云武藏野は水谷戌亥の方の芝を云由今は松おひしげりて見えがたし云々　能因歌枕云此武藏塚は大納言武藏守安世卿の墓所也云々古今榮雅抄云春日野に武藏の國司の墓を作りそこを武藏野といへり云々

天台山を拜へくは比叡山に參るへし　比叡山は天台をうつす天台大師滅後二百餘歲に我朝に再生して傳教大師とあらはれ給ふ佛法流布の山なれば云也　山家要略云天台山之靑龍寺准二天竺靈鷲山一叡山亦准二靑龍寺一矣　比叡山兼平に注す　衡州天台山　章安山記云本稱二南岳一周靈王太子子晋居レ之魂爲二其神一命二左右公一改爲二天台山一也矣　弘決一云台者星名其地分野應二天三台星一故以名矣　黄輿記

云天台山高一萬八千丈周八百里矣

五臺山の望あらば吉野筑波を拜すへし　吉野金峯山は　釋書云我是牟尼應化藏王菩薩也此所曰二金峯淨土一矣　詞林採葉云金峰山昔五臺山片端乘レ雲飛來矣　筑波は常陸國也春日第一社武甕槌命常陸の鹿島より春日山に影向有上に記す此等を以てつゝけたり　大明一統志云五臺山在二五臺縣東北一百四十里一環五百餘里五峯高出二雲表一頂皆積レ土因謂二之臺一世傳有二文殊師利所レ居之地一曰二清涼山一即此也矣

昔は靈鷲山今は衆生を度せんとて大明神と示現し此山に宮居し給へは　神明鏡云笠置解脱上人春日參詣の時明神直に幽なる御聲にてしめし給ふは我滅後於二正法中一現二大明神一廣度二衆生一云幷御詠云「我をしれ釋迦牟尼佛世に出てーー已上

我をしれ釋迦牟尼佛世に出てさやけき月のよを照すとは　續古今集神祇部に入詞書云是は春日大明神の御歌となん云々同序云春日の明神は三十一字を以てさやけき月の夜を照す光をそへ給ふ云々　又鹿島問答に筑波山の空淨上人鹿島に社參せられけるに明神上人の夢に此歌を告させ給ふと有春日鹿島一躰なれば此說も用ゆへし

慈悲萬行の神德の　神祇正宗云第三殿春日明神是天兒屋根命也號二慈悲萬行大菩薩一矣　神社考云舊記云春日祠初在二山上一空海以二其參詣不レ便而改二移于今所一又云春日大明神或號二慈悲萬行大菩薩一矣　兼邦百首抄云かやうに菩薩號など懸字に書て掛たる時は魚鳥を神供にそなへすと云々

小機の衆生の益なきを悲ひ給ふ御姿瓔珞細輭の衣をぬき麁弊の散衣を着しつゝ　小機とは小乘の機を云也機の字は兼平に注す釋尊初而花嚴經を說給へ共凡夫小乘の機類は得道の心なく更に其辨もなかりしかは所詮此所を立去んとて皆逃走て鹿野苑と云所に行ぬ其時佛出世の本懐のむなしき事を悲ひ給ひて花嚴法界圓融の道理を皆押かくして瓔珞細輭とて結講なる衣をぬき麁弊散衣とて麁相にして破たる衣を着、彼鹿野苑に入てあさ〳〵敷小乘の法門を說小機の衆生を皆引導し給ふ也是即四阿含經の說相也法花云即脫二瓔珞細輭上服一更着二麁弊垢膩之衣一矣

四諦の御法を說給ひし鹿野苑も爰なれや　春日野を鹿野苑になそらへたり春日明神は本地釋迦如來にてましますと云事を此謠に云かけたり和州寺社記云春日第一殿武甕槌神本地釋迦如來也矣　五大院云春日大明神鹿苑釋迦垂迹故以レ鹿爲ニ使者一矣

四諦者　釋氏要覽云一苦諦二集諦三滅諦四道諦毘婆沙論云逼迫流轉是苦相生ニ長能轉業一是集相寂靜止息是滅相出離還滅是道相又云一切如來宣說開ニ示四諦法一拔ニ濟有情一出ニ離生死一故欲ミ顯ニ要由一自勤ニ修道一不ニ由レ他修一故矣　琅耶代醉云龍舒心經註云苦謂ニ一切生老病死之類一集謂ニ一切聚集骨肉財帛之類一滅謂ニ壞滅一道謂ニ修行一此名ニ四諦一經云見レ苦斷レ集因レ滅修レ道矣　鹿野苑は名義集云舊曰ニ波羅奈一訛也中印度境婆沙云有レ河名ニ波羅奈一去レ其不レ遠造ニ立王城一或翻ニ江遶城一亦云ニ鹿苑一矣　鹿野苑は中天笠の波羅奈國に波羅痆河とて有此河の東北十餘里を過て鹿野寺有又大きなる林有其中に塔有是なん佛の昔鹿王となりてはらめる鹿の身替にたち給ひし所と也故に鹿野苑と申也見西域記及法苑珠林

草根○行て見ぬ鹿の園生の秋の花むなしき露を月みかくらん

春日野に起臥は鹿のそのならすや　和州寺社記云春日野は御旅所の前をいふよし云々同略緣起云春日野の鹿は南都八景之一也云々○新千さほ鹿の起臥わかずつかへきて春日の野へに秋もへにけり

西の大寺は龍田に注す七大寺は非筒に注す

御法の花も八重櫻の都とて春日野の　・奈良の都の八重櫻をいひかけ又法花八卷をもふくませたり徒然草云八重櫻は奈良の都にのみ有けるを此頃ぞ世に多く成侍るなる云々大和寺社略緣起云八重櫻東圓堂後有ニ古櫻樹趾一也矣　或云奈良の都興福寺東圓堂の前にある八重櫻一條院の比天下の名花とて女院より召けるに衆徒惜て不レ献を志やさしく尤也とて却而寺領を給はりし事ありとぞ云々

三笠の山に五天竺をうつし　五天竺者○東天竺有ニ一國一鳩留國○南天竺有ニ七國一橋沙羅國毘舍離國舍衞國罽賓國乾陀衞國沙陀國婆提國○西天竺有ニ一國一婆羅奈國新譯經云婆羅痆斯國有ニ萬六千國一○北天竺有ニ一國一鳩彌國僧伽陀國健拏掘闍國○中天竺有ニ四國一迦夷羅國摩竭陀國迦羅乾國鳩尸那國已上見ニ西域記一

摩耶の誕生　名義集云梵語云二摩訶摩耶一西域記云唐言二大術一或云二大幻一晋華嚴摩耶夫人荅二善財一言我已成二就大願智幻法門一得二此法門一故爲二盧舍那如來母一於二閻浮提迦毘羅城淨飯王宮一從二右脇一生二悉達太子一顯二現不可思議自在神力一本行經云備レ時太子誕生適滿二七日一其太子母摩耶夫人遂便命終矣

伽耶の成道　名義集云伽耶梵語此云二山城一去二菩提道場一約二二十里一西域記云城甚險固城西南五六里至二伽耶山一下略

鷲峰の說法　鷲峰とは靈鷲山也於二此山一般若經無量壽經觀無量壽經及法花經を說法し給へり

雙林の入滅　雙林とは娑羅双樹を云也湯谷に注す佛二月十五日夜半子の時に枸尸那城跋提河の邊双樹のもとにて入滅し給ふ也遺敎經云於二娑羅雙樹間一將入二涅槃一矣　名義集云後分云東方一雙在二於佛後一西方一雙在二於佛前一南方一雙在二於佛足一北方一雙在二於佛首一入二涅槃一已東西二雙合爲二一樹一南北二雙亦合爲レ一二合皆悉垂覆二如來一其樹慘然皆悉變白矣

我は時風秀行そとてかきけすやうに失にけり　此二人は春日影向の時供奉の人也　帝王編年記云神護景雲二年戊申春日大明神自二常陸國一垂二跡大和國三笠山一仕人二人時風秀行始以二彼流一爲二當社執行預一矣　神明鏡云時風秀行我等は何にか可レ侍と申御神榊の枝を投二西南一是か落着たらん所に可レ住と仰らる尋行見るに同郡左京八條二坊五坪有二處居一今の辰市也云々　或云奈良に辰市社とて二座あり俗に鴻の宮と云これ時風秀行の靈社也云々諸社根元記云神護景雲元年六月廿一日伊賀國名帳郡夏身鄉一瀨仁天御休浴以レ鞭爲レ驗立給成レ樹生自レ其渡二御同國薦生中山一數月御時風秀行等仁燒栗各一賜天宣云汝等子孫無二斷絕一可二我仕一者其栗乎殖牟留必可二生付一因レ之始號二中臣殖栗連一矣

時に大地震動するは下界の龍神の參會か　一震動に有二數種一所謂龍神動金翅鳥動帝釋動など大論に見えたり周書異記云昭王二十四年甲寅之歲四月八日佛誕生之時山川大地咸悉震動矣　涅槃經曰二月十五日臨二涅槃時一出二種々光一大地震動聲至二有頂一光徧二三千一矣　又世尊法花經を說法し給ふ時六種震

動す今略レ之
すは八大龍王よ難陀龍王跋難陀龍王娑伽羅龍王和修吉龍王德叉迦龍王阿那婆達多龍王　此六龍王に摩那斯優鉢羅の二龍を加て八大龍王と云也難陀跋難陀梵音也　文句云難陀此云二歡喜一跋此翻レ善兄弟常護二摩竭提國一雨澤以レ時國無二飢年一瓶沙王年々爲二一會一百姓聞皆歡喜從レ此得レ名矣　慈恩云第一名レ喜次名二賢喜一此二兄弟善應二人心一風不レ鳴レ條雨不レ破レ塊初令二人喜一後性復賢令レ喜又賢故以爲レ名矣娑伽羅梵語此云二鹹海一名義集云從レ海標レ名矣和修吉梵語名義集云此云二多頭一矣　德叉迦梵語名義集云此云二現毒一亦云二多舌一矣　阿那婆達多梵語名義集云此云二無熱一從レ池得レ名矣　阿含云雪山有レ池名二阿耨達池一其中有二五柱堂一龍常居レ此矣　摩那斯梵語名義集云此云二大身一或云二大意一或云二大力一矣　科註云本住二無邊身法門一亦爲二大體一耳也矣　優鉢羅　梵語名義集云亦云二優婆陀一此云二黛色蓮華一又青蓮華龍依レ此住從レ池得レ名矣

百千眷屬引つれ〳〵平地に波瀾を立て　眷屬は妙玄云天性親愛故名レ眷更相親順故名レ屬矣　望西樓云眷屬六親之外名爲二眷屬一矣　波瀾文選云陸士衡樂府詩紺覆若二波瀾一呂向註瀾大波矣　碧巖五十五頌下語云平地起二波瀾一矣

其外妙法緊那羅王又持法緊那羅王　法華序品曰有二四緊那羅王一法緊那羅王妙法緊那羅王大法緊那羅王持法緊那羅王矣　名義集云緊那羅梵語亦名二眞陀羅一此云二疑神一什曰秦言二人非人一似レ人而頭上有レ角人見レ之言二人耶非レ人耶一因以名レ之亦天伎神也小不レ及二乾闥婆一新云二歌神一是諸天絲竹之神矣文句云舊云法緊奏二四諦一妙緊奏二十二因緣一大緊奏二六度一持緊奏二前三一矣　又云智者大師云今言奏二四教法門一矣

樂乾闥婆王樂音乾闥婆王　法花序品云有二四乾闥婆王一樂乾闥婆王樂音乾闥婆王美乾闥婆王美音乾闥婆王矣　名義集云乾闥婆梵語或云二犍陀羅一淨名疏云此云二香陰一此亦陵レ空之神不レ噉二酒肉一唯香資レ陰是天主幢倒樂神在二須彌南金剛窟一住什曰天樂神也處地十寶山中天欲レ作レ樂時此神身有二異相一出然後上レ天矣　文句云樂者幢倒伎也樂音者鼓節絃管也美者幢倒中勝品者美音者絃管中勝者也矣

婆稚阿修羅王羅睺阿修羅王　法花序品曰有四阿修羅王婆稚阿修羅王佉羅騫馱阿修羅王毘摩質多羅阿修羅王羅睺阿修羅王矣名義集云婆稚梵語正名跋稚迦此云團圓今誤譯云被縛或云五處被縛或云五惡物繫頸不得脱爲帝釋所縛經音義云居修羅前鋒爲帝釋所縛因誓得脱故名矣　文句云羅睺此云障持擧手掌障日月世言日月蝕矣　華嚴曰如羅睺阿修羅王本身長七百由旬化形長十六萬八千由旬於大海中出其半身與須彌山而正齊等矣

恒沙の眷屬引つれ〳〵是も同しく座列せり　恒沙とは恒河の沙を云也　西域記云恒河亦曰恒沙矣章安云諸經多以恒河沙爲量者有四義一人多織之二入者得福三八河中大四是佛生處矣　袾宏疏鈔云恒河在西域無熱池側香山頂上有無熱惱池流出四河恒河在南廣四十里沙逐水流至爲微細佛近彼河說法故凡言多常取爲喩矣　座列は韻會云列行次也位序也又行列也矣　論語云陳力就列矣

龍女成佛は海人に注す白妙は田村に注す和田の原海原は海の惣名也蒼界に記すさほの川は百万に注す

烽の野守も出て見よや　古今集春上よみ人志らす

一春日野の飛火の野守出て見よ今いくかありて若菜つみてん　古今寳抜抄云此歌淸和御時内裏歌合によめりと云々袖中抄云とふ日のゝもりと云詞につきて兩義あり一には飛火の野守といひ一には飛火野の杜といふ義也中略又とふ火と云事は國史云天智天皇三年於對馬壹岐筑前等置防與烽　和銅五年正月廢高安烽始置高見及大和國春日烽以通平城也　延暦十五年山城大和兩國相共使所置彼烽燧矣　奥義抄云昔は國々に早く聞すへき事あれは所々に大なる火をたてけれは次第に見つきつゝ是を立て遠き國にも一日のうちに志らせける也その野をまもる者を飛火の野守と云也云々童蒙抄云昔唐土に軍せし時大なるたい松を山の峯ことに立て軍をこりつれは次第に火をともしつゝ一月に行ほとなれと一日に志る是を烽燧と云昔奈良の京の時あつまよりいくさ來らんとせしに彼烽をあけたりしに此春日野をたてはてにして守る人を

置きたりきそれより飛火野といふ也云々　詞林采葉云攝津國阪靡と淡路の岩屋との渡の舟を互に呼とてゑるしの烽を立るとなん申す顯輔卿ゐはちと云女のもとへつかはしける歌に「いかにせん飛火も今はたてわひぬこへも及はぬあはち島山　玉傳深秘抄云春日大明神始て御影向の時八代命を侍者に具し給へり夜半に奈良の里に着給ひしに道くらかりかりければ命の口より火を出し給へり此火飛て空にあかる消やらすして其火折々飛けれは聖武天皇の御宇に佐丸宿禰と云者を野守に定め被レ置けりそれを飛火の野守と云也云々

猿澤の池は采女に注す千尋は海人に注す

謠曲拾葉抄卷二十

葵上

此謠は源氏葵卷を以て作る者也彼卷を葵と稱する事は花鳥餘情云源典侍が歌に「はかなしや人のかざせる葵ゆへ神のしるしのけふを待ける　源氏君の返しに「かざしける心ぞあだにおもほゆる八十氏人になへてあふひを　依而以二此歌一爲二卷名一云々　葵上と申は引入大臣の御子也母はきりつぼの帝同腹の御妹三の宮と申て源氏の御ためにしうとめ也源氏十二歳の御時清涼殿の東のひさしにて御元服の事あり則引入大臣加冠し給ふ其夜大臣の姫君を源氏君の御そひふしになし給ふ是葵上の御事也源氏廿一歳の御時懷姙し御子を生給ふ夕霧の大將是也御產の前よりものゝけつきてなやみ給ひ平產の後少し御心地よかりしに八月廿日あまり俄にかくれ給ふ御年もいまだ廿五歳なればいとわかしこの物の氣といへるは六條の御息所の生靈也是加茂の物見の車あらそひよりいよ〳〵恨み深きゆへ

なり委く葵巻に見えたり
是は朱雀院につかへ奉る臣下なり　爰に朱雀院と云は暦代の帝を申に非ず是は源氏物語に作る處を以て爰に朱雀院とは出せし也物語の趣を考ふるに朱雀院は桐壺帝の御子也母は右大臣の息女弘徽殿の女御號ニ悪后一然れば桐壺帝御位おりさせ給ひて今此時は朱雀院の御代なるが故にかく作る也葵巻發端の詞に世中かはりて後萬物うくと有此臣下は誰人を指て云哉玄らず　帝王編年記云六十一代朱雀院諱寛明醍醐天皇十一皇子母皇太后藤穏子昭宣公三女也延長元年癸未七月廿四日丙寅誕生同十一月十七日丁巳親王宣旨同三年乙酉十月廿一日庚辰爲ニ皇太子一同八年庚寅九月廿二日壬午受禪同年十一月廿一日於ニ大極殿一即位御宇十六年都ニ平安宮一天暦六年壬子三月十四日出家法名佛陀壽同年八月十五日御年三十同廿日葬ニ来定寺一下略　臣下とは大臣以下を云也君に仕へて下にあると云心也書經伊訓篇曰臣下不レ匡其刑墨具訓ニ于蒙士一矣　說文曰臣牽也事レ君也象ニ屈服之形一矣　通論曰臣心常牽ニ於君一也矣　孝經註曰臣者堅也厲レ志自堅固也矣　禮記解曰人在ニ一下一爲レ下矣

扨も左大臣の御息女葵上の御物のけ以の外に御座候程に　左大臣は源氏の御しうと引入大臣を云也系圖には左大臣と計有葵巻云みずほうやなにやなど我御方にておほくおこなはせ給ひ物の氣いきすたまなど云もおほく出きてと云々物の氣はいきす玉を云也窮鬼（イキスダマ）　生靈（同）と書遊仙窟云窮鬼故調レ人注人夢魄與レ鬼通矣　左右大臣は融に注す息女は井筒に注す

貴僧高僧を請し申され大法秘法醫療さま〳〵の御事にて候へ共更に其驗なし　驗有どもあまた集り晝夜おこたらず御祈加持數をつくす故に物の氣あらはれし事など有御祈の驗にや御子は平に生給ふ御息所の方にはあながち我靈の行とはおぼさねど護摩の香など身にしみて御衣ぬきかへ湯あみなどし給へ共此香さらず葵巻取意

爰に照日の神子とてかくれなき梓の上手の候　此事葵巻になし是等は謡の作文なるべし　神子は鈿女命をはしめとす　神代巻曰天鈿女命天石窟戸前顯神明之憑談矣　纂疏云憑依也託也天鈿女假ニ他

神託宣而讃ニ嘆日神之至徳一也矣　梓とは梓の木にて弓を作る也神子弓をならし靈をよする也依而神子を梓と云也　上手者下學集云起ニ於園碁一而云矣後漢百官志曰尚方令一人六百石本注曰掌ニ上手工ニ作ニ御刀劒諸好器物一矣　說纂琴條云有ニ甘棠一亦爲ニ上手一矣

天淸淨地內外淸淨六根淸淨　宗源傳に散米して此文をとなふる也天淸淨地淸淨者名法要集云天有ニ元氣圓滿神道一加ニ天五行一爲ニ六神道一地有ニ一靈感應神道一加ニ地五行一爲ニ六神道一矣　以ニ此意一稱ニ天地淸淨一也矣　內外淸淨六根淸淨者同集云內淸淨不亂而隨ニ神事一祭ニ天神一又外淸淨云ニ散齋一定ニ神事云ニ致齋一神事正當日如ニ格式文一守ニ六色禁法一一心當日ニ件前後之間精進潔齋祭ニ地神ニ六根淸淨祓集說六根眼耳鼻舌心意也六物發出之底根含牙之底又云根卽心也祓文曰仁諸乃不淨乎見天心仁諸乃不淨乎不レ見下五根准レ之淸淨有ニ內外之二一內守レ心之義外脩レ身之義下略

寄人は今ぞよりくる長濱のあし毛の駒に手綱ゆりかけ　先代舊事詠歌本紀云御託歌「寄神者今底寄兮來長濱于蘆毛之駒于手綱搖懸師開書云寄人は客神共降童共云或は生靈死靈を祈る時彼靈のかゝりに童子を備へ置て祈つけ降參さする事也或は靈を人形に作りわらにて馬などこしらへかの人形をのせていのり終りて後川へ流す事も有此歌も是等の事をよめると見えたり長濱は近江かいづくにもあれ只所の名とみるべし降童の事此法唐土にも有事也弘法大師の付法傳にも見えたり云々　鴉鷺記云神子此歌をとなへて靈をよする也取意

三の車に法の道火宅の門をや出ぬらん　是は法花譬喩品の文の意也委く軒端梅に注す

夕顏の宿のやれ車やるかたなき社かなしけれ　夕顏の事此所に出ましき事也但此夕顏君をも御息所ねたみ給ひて取ころし給へばかれこれ取合作る成べし（禪林寺殿七百首）思ひやるかたのなき社悲しけれやふれ車のかゝる我身は爲氏

浮世は牛の小車の廻るや報ひなるらん　是は譬喩品の文の意とは別の事也百萬に注す

凡輪廻は車の輪のことく六趣四生を出やらす　行者用心集云解脫云爲ニ此身一造ニ無量惡業一經ニ歷六

趣四生ニ如ニ車廻レ庭ニ矣　六趣とは六道也安達原に注す四生者倶舍論曰諸有情類有ニ四種生ニ卵生胎生濕生化生如ニ孔雀等ニ生レ從ニ卵𣪘ニ如ニ牛馬等ニ生レ從ニ胎藏ニ如ニ飛蛾等ニ生レ從ニ濕氣ニ如ニ諸天等ニ諸根頓具無而欻有是名ニ化生ニ矣　十二因縁經曰有ニ四種生ニ一腹生謂人及畜生胎生二寒熱和合生謂蟲蛾蚤虱濕生三化生謂天及地獄四卵生謂飛鳥魚鼈矣○玉六の道四のちまたの苦みをいつかは入て助けはつへき　行圓

人間の不定芭蕉泡沫の世のならひ　隨願往生經曰此身如ニ芭蕉ニ中無レ有レ實矣　維摩經曰是身如レ泡不レ得ニ久立ニ是身如ニ芭蕉ニ中無レ有レ堅矣○夫木風吹はあたにやれゆく芭蕉葉の哀れと身をも頼へき世か　西行家○河波の瀧津早瀬にめくる泡の消る待間も定めなの世や　師兼

きのふの花はけふの夢と驚かぬこそ愚なれ　白氏文集十九云昨日榮華今日衰轉似ニ秋蓬無ニ定處ニ長ニ於春夢ニ幾多時矣　陳孔璋詩云昨花今日塵埃昨友今日讎敵矣

忘のひ車の我委　忘のひ車とて別にありや　岷江入楚忘のふ時は網代車にのると云々

蜻蛉　源氏供養に注す

梓の弓のうらはつに立よりうきを語らん　本弭末弭とて弓の末を末弭(ウラハツ)と云也梓の占をいひかけたりたちよりといふによりましの事をいへり

四阿のもやの妻戸に居たれとも　梁塵愚抄云四阿は御所造なとの四方に軒ありてあまだりの四方におつる屋也と云々　匠材集云門柱四有を四阿といふいやしき家に非ずと云々或云もやは母屋と書母を置所をいへり又云もやは本屋也おもやを上略してもやと云也と云々○夫木人妻はあな煩はし四阿のもやのあまりもなれしとぞ思ふ　催馬楽　四阿のまやのあまりの雨そゝき我たちぬれぬとのとひらかせ　四阿のもやともまや共つゝけたりまともと五音相通なれは同し心歟梁塵愚抄云雨下と書てまやとよめりまやは臺屋作りの兩方に雨水の落るをいふと云々倭名抄云辨色立成雨下(マヤ)和名萬夜矣　妻戸とはやり戸にはあらて左右二枚の戸を各妻あはせにひらきとつるやうに忘たるをいへり人かた殿舍のはしはしにあり然りといへ共一枚ひらきの妻戸といへるも有

誰共見えぬ上臈の破れ車に召れたるに青女房とおほしき人の　青女房は官なき女也青侍と云に同じ上古には歯に鐵漿を付たるを鐵漿付士と云下臈は歯の白かりければ白歯者といへりかやうの類也　應仁記云天下の成敗を官領に任せず只御臺所香樹院春日の局なと云て不レ辨二理非一不レ知二給公事一青女房僧比丘尼たちのはからひとして上下略　管見記云永享五年三月十日青女等參二嵯峨念佛一矣　上臈は志賀に注す

轅は野宮に注すさめ〴〵は藤戸に注す婆婆は田村に注す電光は柏崎に注す御息所は野宮に記す

雲上の花宴　源氏巻の名に花の宴と云有源氏供養に注す

仙洞の紅葉の秋の夜は月にたはふれ　紅葉の賀月の宴をふくませたり是は院の御遊にいひかけたり賀の事は源氏供養に注す仙洞とは藐姑射山を云也仙人此山に居住す荘子逍遙遊篇に見えたり帝おりゐさせ給ふ院の御所を此仙宮にたとへて仙洞といへり　海人藻芥云仙洞とは尊號蒙らせ給ひて後に申也未宣下なき時は院と申也太上天皇の宣下をは尊號とは申也云々八雲御抄云はこやの山仙洞をいふと云々　下學集云姑射山指二仙洞一也姑射山仙人之所レ居也祝以謂二院居一也矣　本朝文粋十一云源順嵯峨院者我先祖太上皇之仙洞也下略

衰へぬれは槿の日影待間の有様なり　〇玄のゝめ堀川百首に起つゝを見ん槿の日影待間の程しなけれは

物うき野邊の早蕨のもへ出そめし思ひの露　野相公詩　紫塵嬾蕨人挙レ手碧玉寒芦錐脱嚢朗詠集　上句に紫塵と云は早蕨は紫の塵のゐたるやうなれば也嬾の字一説わかきと讀り但し物うき可レ然歟堀河院百首に修理太夫顯季卿早蕨を詠ずる歌に「紫の塵打拂ひ春の野にあざる蕨の物うけにして物うしと云意は早蕨の手をにきりたる様にていつとなくある氣色のいとものうけに見ゆる也下句は蘆の角組出たるは青き玉に似たれは碧玉の寒き蘆と云初て水中より指出たるは錐の袋を貫て指出たるに似たると也　撰集抄云野相公逝去の後唐より樂天の詩共をおくれりけるにものうき蕨人手をにきる寒き蘆錐ふくろをたつすと云詩侍り心は少も篁の詩にたかはず詞は聊あひかはれり時の秀才の人々申けるは篁の句猶めてたしとぞほめ聞へける

と云々
思ひえらずや世中に情は人の爲ならす　〇夫情あれ
は情は人の爲ならす人を思ふは身をおもふ也
我人の爲つらけれはかならす身にもむくふ也　〇
新古なけかしな思へは人につらかりし此世なからのむ
くひ也けり皇嘉門院尾張
何を歎くぞ葛の葉のうらみは更に盡すまし　玄旨
抄云葛は初秋よりうらを返すもの也是をうらみと
いふ云々　新宮撰歌合釋阿判云葛の葉のうらみな
とは枯はてぬをもやよむへからんと云々〇新古葛の葉
のうらみに歸ゑ夢の世を忘れかたみの野邊の秋風
うはなりうちの御振廻　日本紀に神武天皇御謠に
宇破奈利とよめり　伊呂波字類抄云　後妻ウハナリ　同後女
同嫐と書　倭名抄云顏氏云後妻必惡二前妻之子一矣
史記呂后本紀曰七年正月太后召二趙王友一友以二諸
呂女一爲レ后弗レ愛愛二他姫一諸呂女妬怒去讒二之於太
后一矣
瞋恚のほむらは身をこかす　大莊嚴論曰　身如二乾
薪一瞋恚如レ火未レ能レ燒レ佗先自焦レ身矣
水くらき澤邊の螢の影よりも　許渾詩蒹葭水暗螢
知レ夜楊柳風高雁送レ秋朗詠集　新千〇夜光る玉とぞ見ゆ
る水暗き蘆邊の浪にましる螢は後宇多
光る君とぞ契らん　光る君とは源氏の君をいふ也
桐壺卷云猶匂はしさはたとへんかたなくうつくし
けなるを世の人光る君と聞ゆ云々　又云光る君と
云名はこまうどのめできこへてつけ奉りけるとぞ
云々此君を右大辨の子のやうにして鴻臚館におい
て唐土の相人に見せしめ給へは其器量を見奉りて
ほめ奉りけるとぞ已上桐つほの卷　河海抄云亭子院
第四皇子敦慶親王號二玉光宮一好色無双之美人也又
光孝天皇御子式部卿是忠親王はしめは源氏にて光
源中納言と云又仁明天皇の御子西三條右大臣を光
と云又日野の系圖に左大臣高明公を光源氏と云こ
れらを下にふくみて書る也云々
蓬生のもとあらさりし身と成て　古歌にもとあら
の小萩と續きたれ共蓬生のもとあらと續けたる事
見えす是に元非ざる身とつゝけたる風調なるへし
蓬生卷〔尋ても我こそとはめ道もなく深き蓬の本の心を
葉すへの露ときへもせは　月清〇蓬生の末葉の露の情

かへり猶此世にとまたん物かは
夢にたに歸らぬ物を我契り昔語りに成ぬれは
新後拾 現共夢共わかでこしかたの昔語りに成ぞはかなき
猶も思ひは增鏡　墨田川に注す
横川の小聖を請して來り候へ　葵卷云山の座主なにくれとやんごとなき僧ともしたりがほにあせをしのこひつゝ上下略　是はかの物のけをいのる事也したりがほとは祈すましたる體を云也是を此唄に横川の小聖と作りなせり
九識の窓の前十乘の床のほとりに瑜伽の法水をたゝへ三密の月を澄す處に　九識の窓とは深窓に靜に座して思惟觀法する體也　九識者一眼識二耳識三鼻識四舌識五身識六意識七末那識八阿賴耶識九菴摩羅識也大乘には有二八識九識異論一小乘には但立二六識一又釋摩訶衍論には立二十識一實地坊玄義私記第五に委く記レ之十乘とは座レ床觀行する也十乘者一觀不可思議境二起慈悲三巧安止觀四破法遍五識通塞六修道品七對治助開八知次位九能安忍十無法愛也見二止觀第五一是皆觀行なる故に云二十乘床一也太平記卷十一ニ云延暦寺第十三の座主法性坊尊意贈僧正四明山の上十乘の床の前に照二觀月一淸二心水一御座しけるに上下略　瑜伽の法水三密の月は皆喩也瑜伽梵語此云二相應一瑜伽師地論釋云謂一切乘境行果等所有諸法皆名二瑜伽一矣　三密は菩提心論曰所レ言三密者一身密者如下結二契印一召中請聖衆上是也二語密者如下密誦二眞言一令二文句了々分明一無中謬誤上也三意密者如下住二瑜伽一相二應白淨月圓滿一觀中菩提心上也矣修驗抄云三密者一身密二語密三意密云二之三業一也又云敎勤二三密一行滿二六度位一矣
行者は加持に參らんと　行者は釋氏要覽云經中多呼二修行人一爲二行者一矣　加持は即身義云加持者表三如來大悲與二衆生信心一佛日之影現二衆生心水一曰レ加行者心水能感二佛日一名レ持矣　百法問答抄云加持者何義耶答云加者加被也謂結二無義文詞一以二神力一加二被自所證妙理一也持者攝持攝二受內證功德一故也矣　大日經曰神變加持矣
役行者の跡をつぎ　安宅に注す
胎金兩部の峰をわけ　百因緣集云大峰名二胎金兩峯一也矣　又云熊野山胎藏界因曼荼羅金峰山金剛界果曼荼羅矣　一云比叡山東塔は金剛界西塔に胎

藏界横川は蘇悉地峰に表すと云々此うたひの聖は横川より出たれば此説爰にあいかなふ歟　金胎兩部傳來之事金剛界は三寶感應錄曰昔金剛薩埵親於ニ毘盧舍那佛前一受ニ金剛界大曼陀羅法義一後數百歳傳ニ於龍猛菩薩一又數百歳之後傳ニ於龍智一龍智愼傳ニ持之一如ニ瓶水移レ器傳ニ金剛智一下略　佛祖統記云東夏以ニ金剛智一爲ニ始祖一不空爲ニ二祖一慧朗爲ニ三祖一不空弟子有ニ慧果者一日本空海入ニ中國一從レ果學皈レ國盛行ニ其道一矣　胎藏界は三寶感應錄曰毘盧遮那如來説ニ大悲胎藏曼陀羅王一救ニ護一切衆生一金剛手傳ニ受佛敎一經ニ數百年一傳ニ付中印度世無厭寺達摩掬多一多謹傳弘付ニ斛飯王五十二代玄孫釋善無畏一々々開元七年從ニ西國一將ニ曼陀羅圖一來ニ此國一於ニ玄宗皇帝朝一爲ニ國師一翻ニ譯大敎曼陀羅一設ニ大道場一本朝傳敎大師貞元廿一年如ニ越州龍興寺一逢ニ順曉阿闍梨一受ニ此善無畏密敎一矣　右兩部ノ傳來は明州諸軍事榮陽鄭審則題記に見えたり又宋高僧傳に委し

篠懸　葛城に注す

不淨を隔る忍辱の袈裟　忍辱袈裟者法華法師品曰如來衣者柔和忍辱心是也矣　袈裟は名義集云具云ニ迦羅沙曳一此云ニ不正色一從レ色得レ名章服儀云袈裟之目因ニ於衣色一如ニ經中壞色衣一大淨法門經曰袈裟晉名ニ去穢一大集名ニ離染服一賢愚名ニ出世服一眞諦雜記曰袈裟是外國三衣之名名含ニ多義一或名ニ離塵服一由レ斷ニ六塵一故或名ニ消瘦服一由レ割ニ煩惱一故矣　此等文は隔ニ不淨一之心也　忍辱者天竺云ニ羼提一此曰ニ安忍一法界次第云秦言ニ忍辱一內心能安ニ忍外所辱境一故名ニ忍辱一矣　大論曰善心有ニ二種一有レ麁有レ細麁名ニ忍辱一細名ニ禪定一未レ得ニ禪定一心樂能遮ニ衆惡一是名ニ忍辱一矣

赤木の珠數の平形　赤木の珠數は梅の木或は紫檀にて作るを云也平形天台宗かくる也　粒の形は藤の實のことし眞言の平形は粒少しちいさく粒の角まろき也　修驗抄云最多角念珠形一々劒崎表ニ智劒一智者智惠也菩提也是則無明斷破義也矣

東方に降三世明王下略　五大明王は舟辨慶に注す

曩謨三曼多縛曰羅赧戰拏摩訶盧灑那娑婆吒耶吽怛羅吒唅袊是は不動の慈救の咒也不動經に出たり又大日經にも出たり

聽我說者得大智惠知我心者即身成佛　安達原に注す

あら〳〵おそろしの般若聲や　上來の誦文を聞て怨靈のおそれ去也御經讀誦の聲に魔魅の退散する事和漢共に多し大般若波羅蜜多經第五百七十八般若理趣分日菩薩摩訶薩摧二伏一切魔怨一矣

鐵輪

調伏祭　或云古老云天下に軍おこる時は諸寺に仰て調伏の法と云事をおこなはるしらぬ人は調伏と云事人をいのりころす事とおもへりさにはあらす敵の惡心をとゝのへ善心に起伏なさしむる祈禱の事也法力を以て邪道をふせき善心になさしむれはおのつからやむもの也もろこし唐の代にも不空三藏調伏安鎭の法をおこなひ給ふ事有と云々　太平記劍之巻云嵯峨天皇の御宇に或公卿の息女あまりに嫉妬深くして貴船社にまふてつゝ七日こもりて申やう歸命頂禮貴船大明神願は七日こもりたるしるしには我を生なから鬼神になしてたび給へねたましと思ひつる女取殺さんとぞいのりける明神哀どやおほしけん誠に申處不便也まこと鬼になりたくは姿を改て宇治の川瀬に行て三七日ひたれと示現有女房悅て都に歸り人なき所にこもりて長なる髮をば五つにわけ角にぞ作りける顏に朱をさし身には丹をぬり鐵輪をいたたき三つの足には松をともし松明をこしらへて兩方に火を付て口にくはへつゝ夜更人しづまりて後大和大路へ走出南を指て行けれは頭より五つの火もえあかり眉ふとくかねくろにして面赤く身もあかけれはさなから鬼形にことならず是を見る人きも魂をうしなひたふれ臥死せすと云事なかりけりかくのことくして宇治の川瀬にゆき三七日ひたりけれは貴船の社のはからひにていきなから鬼となり又宇治の橋姫とは是成へしさてねたましと思ふ女其ゆかり我をすさむ男の親類上下をもえらます男女をきらはす思ふ樣にぞ取失ふ文略　世傳洛陽堺町松原の邊に鐵輪塚とて有昔嫉妬深き女有死して此所に葬るといへり慈鎭和尚記云美濃國の婦嫉妬のあまりに髮を五つにわけ飴をぬりてかため角のやうにし紅の袴を着し即身の鬼となり己が夫寵愛の女を取ころしある堂

の内に住ていとけなき子牛馬の死したるを取くらひたり云々

日も數そひて戀衣貴船の宮に參らん　衣をきるといひかけたり此明神に戀をいのる事は和泉式部の古事より始ると見えたり貴船社在二山城國愛宕郡鞍馬北可二一里一所レ祭神二座　諸社根元記云貴船社高龗水神也矣　廿二社註疏云城州貴船社二座船玉命與二高龗一也矣　神代卷曰伊弉諾尊斬二軻遇突智一爲二三段一其一段爲二高龗一矣　神皇正統記云水德神題國狹槌尊矣　廿二社本緣云此神加茂別處也矣河海抄云貴布禰は鞍馬寺の鎭守也云々　舊事天皇本紀云履中天皇二年灘津國波花浦神倚一神乘二青船一一神乘二黄船一天皇遣二木菟臣一問二御名及由一乘二黄船一神答曰吾是皇母玉依姫也吾主二雨風一潤レ國養レ土吾船止處造レ祠祭レ吾必有二國益一雨風悉皆吾父神王祖所レ掌也欲レ祭レ吾者先祭二八海八龍大王一言畢船之予レ時過二灘津國一至二山城國一上二菟道河一移二神鴨河一至二山奧岸一御船止仍造レ社奉レ齋故云二黄船宮一船化レ龍登レ雲矣　乘二青船一神神母豐玉姫也　至二五瀨國一造二大祠一崇レ之奉レ齋二豐龍大神一文略　同神社本紀云柴垣宮天皇時龍女大神乘二黄色舟一降臨也上宮玉依姫大神中宮櫃原宮大神下宮葺不合大神矣

蛛の家にあれたる駒はつなくとも二道かくる人は頼まじ　是はいにしへよりいひつたふる古歌なれ共よみ人定かならす何れの集にも見及はす　藻鹽草に此歌の上句ありて下句なし　徒然草云建治弘安の頃は祭の日の放免のつけ物にことやうなる紺の布四五端にて馬を作りて尾髮にはとうしみをして蛛の井かきたる水干に着て歌の心などいひて渡りし事常に見及ひ侍しなんとも興ありてしたるこゝちにてこそ侍しかと下略私云歌の心なといひて渡りし事とあるは此歌の事を云成へし　古今六帖云「人の心をいかゝ頼まんと云句に在原しけはる「けのすへにはねつゝ馬はつなぐとも云々　是も此歌の心にひとし

たゝ我からの心なり　藻に住虫にわれからといふあり證歌藤戶に注す

糺の河原は賀茂に注すかひなきは融に注す

みぞろ池　在二上賀茂東鞍馬大路傍一　野府記に美度呂池と書　太平記に澗呂池と書一說御菩薩池

其書也昔行基此所におこなひ給へは此池に彌勒はさへ現じ給ふと云々　野府記美度呂池　山槐記美○家名土呂池　親長卿記美曾呂池　太平記洫呂池　○をきけは陰たに見えしみそろ池すむ水鳥の有そあやしき和泉式部

市原野　通小町に注す

月遲き夜の鞍馬川　鞍馬川は水上若狹より出て樓門の前を流れ末は畑枝を經て鴨川に入也○後拾住なる丶都の月のさやけきに何かくらまの山は戀しき齋院中務

御身は都より丑の時參を召る丶御方にて渡候か

丑の時は夜の八つ也此時は人間は不レ及レ申鳥類畜類はふ虫のたぐひ迄もよくゐぬる時也此女姿をかへ人に見とがめられじとて此時にかよふ成へし伊勢物語に業平齋宮にかよひ給ふ時もねひとつよりうしみつまてと有

雨ふり風となるかみも思ふ中をはさけられし　古今集戀四よみ人志らす「天の原ふみと丶ろかしなる神も思ふ中をはさくる物かは　此歌をもてつ丶けたり　古今棠雅抄云空ふみと丶ろかしおそろしく鳴神も思ふ中をはさくる事はなきをうへはなこやかなる人の中をいひさくるは猶鳴神にまさると也さくるは僻(サクル同)共離共書云々

清明のもとに立越夢の樣をもうらなはせはやと存候

從四位上安倍清明は仲麻呂九代孫父は大膳大夫益材と號す　帝王編年記云安倍清明一條院時人也嘗天文曆數事昔者一家兼ニ兩道ニ而賀茂保憲以ニ曆道ニ傳ニ其子光榮ニ以ニ天文道ニ傳ニ弟子清明ニ自レ此已後兩道相分矣　讃州地志云清明讃岐國香東郡由佐之產也矣　今昔物語に清明は賀茂忠行が弟子と有

茅の人形を人尺に作り　茅萱を以て作る人形也祓する時は撫物といへり源氏物語なとにあり人尺とは其人の長に人形を作る也

三重の高棚五色の幣　三重の高棚は未レ考　但五色の幣に對して云歟　或云五色幣は紙を五色に染て幣五本に作る也是を五行幣共云五行幣は其頭紙の象　青　赤　黄　白　黒　如レ此云々

肝膽を摧き祈けり　肝は五臟の一つ膽は六腑の一つ也五臟も六腑も摧け破る丶程に心に入て祈る也

往生要集云志雖レ春ニ肝膽一力不レ堪ニ水菲一矣安國論云摧ニ肝膽一彌逼ニ飢疫一矣

謹上再拜　蟻通に注す

夫天開け地かたまりしより以來伊弉諾伊弉冊尊天の磐倉にしてみとのまくはひ有しより男女夫婦のかたらひをなし陰陽の道なかくつたはる　神代卷曰二神於是降ニ居彼島一因欲ニ共爲夫婦產ニ生洲國一便以ニ磤馭盧島一爲ニ國中之柱一上下略　爰に天の磐倉にしてみとのまくはひ有しとつゞきたる本文曾て是なし　伊弉諾伊弉冊尊は天神第七代目の神也　舊事本紀云天帝去來諾尊又天降雄亦神生雄矣　天后去來冊尊又天降姬亦國生婦矣　纂疏云伊弉諾伊弉冊第七代耦生神伊奘者猶レ言ニ去來一和語也諸父冊母也此二神往ニ來於二儀之間一而爲ニ造化之父母一矣　古今榮雅抄云伊弉諾と書てたねをまくとよみ國土のたねとなるべき姿をあらはす伊弉冊と書てたねをおさむとよめり兩神みとのまぐはひ有て一女三男をまうけ給ふと見えたり云々　天の磐倉は神代卷に天磐座と書　直指抄云天は天上を云磐は磐石のかたきがごとく帝位の不隘を云堅固の義也くらは座の字也高御座の事也荒造抄には天上厚座と書てあまのいはくらとよめり云々みとのまぐはひとは男女のまじはりを云なり　舊事本紀云夫婦始相婚合成ニ生產事一是夫婦別其法元也矣　日本紀に遘合神合爲夫婦と書　舊事本紀に會將交通と書王仁云交通指ニ兩氣和合一矣　萬葉和歌難儀抄云みとのまぐはひと云事あまたあり昔賤のおが人の内に宮仕ゑけるが同其殿の内の下女に彼男心をかけて彼女の臥床へはひかゝりけり此女の栖家には殿の募を引廻してねにけり彼男まくの下よりはひよりけり其時よりみとのまぐはひと云事仁倫にもありけりその折女の歌に「君はやな人傳ならぬことの葉のみとのまくはひまては思はず　私云此歌萬葉集に入或云みとのまぐはひとはみとのは身と身とゝ云義也夫婦を指て云まぐはひと云にまくばひまぐあひと云る兩義有まくばひとはまきはゆると云義也昔は男女の交合をまくといへり子の種をまく心也はゆるとは子の生ずるを云也又まぐあひとはまは助字也まの字に心なしぐあひとは夫婦和合の體を云交合せし處物のぐあひを合せたるごと

くと云義也云々

魍魎鬼神　説文曰蝄蜽山川之精物也矣淮南子曰魍魎狀如二三歳小兒一赤黑色赤目長耳美髮矣　左傳注疏曰川澤之神也矣　千手陀羅尼經曰爲レ降二伏一切魍魎鬼神一者當レ於二寶劒手一矣　山川木石などに天然と魂出來てかたちを現ずる事有是を魍魎と云也鬼神は二字共にたましゐとよむ也軒端梅に注す

大小の神祇　延喜式神名帳に載る處三千一百餘社也此中に伊勢石清水を宗廟とし春日熊野賀茂松尾等を社稷とす社稷は勅願所に名づけ宗廟は天子の祖神也亦家々の祖神あり藤氏には春日橘氏には梅宮等のごとし是宗廟社稷を大といひ又廿二社をも大と云也　其外村里山野の間禿倉小社其數を志らず是を名づけて小と云也　神名帳頭注云定二日本國中大小神社鎭坐一事人皇六十代醍醐天皇治七年延喜五年十二月廿六日宣下於二山城國愛宕郡如意峰神祇齋場所一奉レ安二鎭三千一百卅二座之神體一同月廿八日奉レ渡二神體於六十餘州一矣天下諸神奉レ授二神號一之時以二神代正印一被レ定二神宣事一延喜已來聖斷也矣　帝王編年記云天神地祇惣三千一百三十二座大四百九十二座 小二千六百四十座　神祇とは神は天神とて天より降給ふを云或は一度王位をたもち給ふをも神と云也祇は地神と訓ず臣下を祝ひ或は無位の神を祇とす春日などは祇の最上也周禮曰大宗伯掌二天神地祇之禮一然天神曰レ神地神曰レ祇也矣　孔安國孝經傳曰天精曰レ神地爽曰レ祇

諸佛菩薩明王部天童部　諸佛菩薩は蓮花部上首觀音也明王部は五大尊を云也舟辨慶に記す天童部は諸天の中には四天或は大黑天辨財天等也

九曜七星　九曜は日曜星月曜星木曜星火曜星土曜星金曜星水曜星羅睺星計都星矣大日經に九曜を九執と有或云九曜は北斗の七星に加二金輪星妙見星一爲二九曜一矣

七星は北斗也委く湯谷に注す

二十八宿　春秋傳曰二十八宿分在二四方一方有二七宿一共成二一象一虫獸在レ地有レ象在レ天東蒼龍西白虎皆南レ首北レ尾南朱雀北玄武皆西レ首東レ尾從レ角起而左旋矣　東宮蒼龍七宿　角　亢　氐　房　心　尾　箕　南宮朱雀七宿　井　鬼　柳　星　張　翼　軫　西宮白虎七宿　奎　婁　胃　昴　畢　觜　參

北宮玄武七宿　斗牛女虚危室壁
宿の字　説文曰宿止也矣　瑯琊代醉曰馬永卿曰二十八宿謂二之二十八一又謂二之二十八次一次者舍也皆有二止宿之宿意一矣　或は又宿の字を秀の音に用ゆ
二十八宿の事委く大集經に説り

身の毛よたつておそろしや　百緣經曰大衆嘿然身毛竪矣淸淨覺經曰善男子善女人聞レ説二淨土法門一心生二悲喜一身毛爲竪如二拔出一者當レ知此人過去宿命已作二佛道一也矣〇琴の音のことぢにむせぶ夕暮は毛にいよたちぬそゞろ寒さに　至ておそろしき時又感に堪ておもしろき時など身の毛のたつ事あり心もちかはるべし

それ花に斜脚の暖風に開けて同しく暮春の風にちり月は東山より出て早く西嶺にかくれぬ　朗詠集慶保胤微雨自レ東來と云題にて作る詩に斜脚暖風先扇處暗聲朝日未レ晴程矣　斜脚は雨の足の横に降を云也暖風は東風の心也暗聲は雨の聲也くらく降たるさま也朝日亦東の心をいへり

因果は車輪のめぐるがごとく　此意舟橋及江口に注す

玄づみしは水の青き鬼　水は青き色なればかくいへり鬼形となるも念に應じて其色かはるべし一休水鏡に五色の鬼とつゞけたり　三國傳記に信州に善阿彌と云ものゝ其妻終に青鬼となりて天へあがりて失にけりと有

我は貴船の河瀬の螢火　物思ふと云緣にていへり證歌班女に注す貴船川は貴船の社の左を流れて末は鞍馬川に入也

玉椿の八千代二葉の松の末かけて　久しきたとへ也玉椿は玉は美稱の詞也玉椿の八千代とつゞくる事は莊子逍遙遊曰古有二大椿一八千歲爲レ春八千歲爲レ秋矣〇八千代へん君か爲とや玉椿葉かへをすへき程は定めし新勅後法性寺入道〇末遠き二葉の松に引別れいつか木高き陰を見るへき薄雲

思ふおもひの泪に玄つみ　思ふおもひとは思ふが上にもまだ深く物おもふ也證歌天皷に注す

起てもねても忘れぬ思ひの　伊勢物語云むかし男ふして思ひ起ておもひ思ひあまりて云々　伊物集注云此段好色なる人は二六時中の間造次顚沛にも物を思ふの外に世上の萬事を忘れはてぬる事を書

り云々謠の心是に等し

あしかれと思はぬ山の峰にたにおふなる物を人のなけきは　詞花集雜上和泉式部歌也詞書云男を恨てよめる云々歌の心は峰に木の生る事をそへて也惡かれと思はぬ所にだに人の歎きおふ物をましてよかれとしも思ひ給ふまじければ歎き侍ると恨む心なるべし

笞(シモト)をふりあげ　倭名抄云笞音知和名之毛度矣　說文曰笞擊也矣　孝經注曰古用ニ肉刑一漢文帝始除レ之斬ニ左趾一者笞五百當レ劓者笞三百率多死景帝又定レ律笞五百曰ニ三百一笞三百曰ニ二百一委見ニ前漢書刑法志一矣　今案木の枝をしもとゝ云標楚(シモト同)と書古歌にしもとゆふ葛城山とよめり犯人を打杖をしもとゝ云は木の枝に似たれば也

うはなり　葵上に注す

うつや宇津の山の夢うつゝとも　(伊物)駿河なる宇津の山邊の現にも夢にも人に逢ぬ也けり

みてくら　御幣也みは貴詞也ては手也くらは座也我手に持たる幣は神のやどる座也

三十番神　諸神記云明ニ七種番神一第一天地擁護卅番神第二內侍所三十番神第三王城守護三十番神第四吾國守護三十番神第五禁闕守護三十番神第六法花守護三十番神第七如法經守護三十番神矣天地擁護卅番神及內侍所卅番神深秘之由也王城守護卅番神青龍朱雀白虎玄武之八神王城之四面封レ之擁ニ護之一吾國守護卅番神第一天神與ニ地神一第二日高與ニ太元一第卅番夜司與ニ晝司一委細略レ之禁闕守護卅番神一日熱田二日諏訪卅日吉備也委細略レ之法花守護卅番神大比叡小比叡聖眞子客人八王子右之五神山門鎮護之靈神也此五神六日宛守ニ護此經一如法經守護卅番神一日伊勢二日石淸水晦日氣比也委細略レ之(已上諸神記文略)　釋良正勸請の三十番神は右之禁闕守護番神に同じ當宗日蓮へト部兼益より相傳良正の趣に等し委く番神問答に有

惡鬼の神通通力自在のいきほひ絶て　神通者　瓔珞經曰神名ニ天心一通名ニ惠性一天然之惠徹照無礙故名ニ神通一矣大涅槃經に六神通を說り法花經に十八神變を說り鳥獸鬼神の通は名ニ報得通一又業通共分通共いひて佛ぼさつの神通とは別也　自在者　唯識論曰有ニ十種一一壽自在二心自在三莊嚴四業五生

六解脫七欲八神力九法十知矣　八十華嚴三十八曰一命二心三身四業五生六願七解八意九知十法矣或は又八つの自在あり阿含大經等に說り

あしよは車　湯谷に注す

目に見えぬ鬼とそ成にける　古今假字序云目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ云々　是にてつゞけたり

安達原

奥州名取郡安達原に黑塚と云有草村の中に黑塚とて柏の木の村立て其跡殘れり此謠を黑塚共いへり拾遺集雜下に陸奥國名取郡黑塚と云所に重之が妹あまたありと聞ていひつかはしける平兼盛歌に

「陸奥の安達が原の黑塚に鬼こもれりといふは誠か大和物語には此歌の下句きくは誠かと有又詞書に平兼盛みちの國にて閑院の三の御子の御むすめにありける人黑塚といふ所に住けるそのむすめ共におこせたりけると云々或云閑院は淸和天皇の御子貞元親王と號す此三の御子を兼信と申其子を重之といふ也鬼とは女を云　寶積經曰女人地獄使能斷二佛種子一外面似二菩薩一內心如二夜叉一矣龍猛大士曰外面似二菩薩一內心如二羅刹一矣　加樣の語によりて女を鬼と云也云々今案古き物語に此謠の係あり されば此謠は兼盛が歌及彼古き物語にもとづきて作る成べし

旅の衣は篠懸の露けき袖やしほるらん　篠掛は葛城に注す

是は那智の東光坊の阿闍梨祐慶とは我事なり

東光坊の阿闍梨祐慶とは那智の聖と見えたり傳記未レ考那智は舟橋に注す 阿闍梨者慈覺大師蘇悉地經分別阿闍梨品疏曰言二阿闍梨一者周法師云此梵短聲也翻爲二正行一以下此人能化二弟子一之行上故涅槃經第八云阿闍梨者義何謂於二世間中一得レ名二聖行有者一也長聲呼云二阿遮利耶一翻二軌範師一矣　伊呂波字類抄云阿闍梨淸和天皇御宇貞觀元年己卯始置レ之或書文德天皇御時被二始置一可レ尋矣

それ捨身抖擻の行體は山伏修行のたよりなり　捨身は自然居士に注す山伏は安宅及舟橋に注す

抖擻者頭陀也釋氏要覽云梵語杜多漢言二抖擻一謂三

毒如レ塵能坌ニ汚眞心ヲ此人能振掉除去故今訛稱ニ頭陀ト矣

熊野南瀧州國は皆釋門の習なり　　昔は熊野山伏六十餘州をめぐり法花經を一國に一所宛納し也是佛道修行のためなるが故に釋門の習とはいへり釋門とは釋氏と云がことく佛道を修行する人は皆釋尊の門葉なりと云心にて釋門とは云也

行脚　　屋島に注す

我本山を立出て　　惣而山伏に本山當山とて有ニ學護院御下の山伏を本山と云三寶院御下を當山と云也但爰にて本山といふは熊野を指て云也

分行末は紀の路かた鹽崎の浦をさし過て　　鹽のさすといひかけたり南紀云鹽崎浦は紀州牟婁郡鹽崎の庄上野村の西南六町計海濱を云也又潮の御崎共云也云々　○山家小鯛引網のうけ繩よりめくりうきしわさある鹽崎の浦

錦の濱の折々は　　錦を織といひかけたり又錦の浦共云南紀云錦の浦は紀州牟婁郡那智の庄濱の宮村の南の海濱長十二三町計を云也　日本紀云神武天皇獨與ニ皇子手研耳命ト帥レ軍而進至ニ熊野荒坂津ニ亦名丹敷浦因誅ニ丹敷戸畔ヲ下略　又同國牟婁郡長島の庄長島村の東一里計に同名有

朝けの風は身にしめ共　　朝けは朝影也○拾秋立ていくかもあらねとこのねぬる朝けの風は袂凉しも

あら定めなの生涯やな　　老子曰生猶如レ涯矣　韻會云涯水際也矣　莊子曰吾生有レ涯矣　無題詩集云周光詩生涯七十少ニ餘喘ヲ矣

よしや旅寢の草枕今宵計の假ねせん　　草枕とは旅體也　古今實枝抄云旅の草枕と云事は大方賤き人の習には馬の草などを枕にする事ありされ共漢書注には漢高祖項羽と軍せし時項羽草を結びて枕としけり其意を倫寧遠行記昔項羽深野旅寢結レ草爲レ枕過ニ幾夜ヲ今倫寧遠行旅泊檝片敷逕ニ二月ヲと書たり中略されば草枕と云事是より始たる事也云々

○玉葉草枕只假初に迷ひ出て哀れ幾夜の旅ねしつらん

さすが思へは　　さすがと云詞はたとへば才智なる小人を見てはさすが何某の子にてなどゝつかふ也又一筋に思ふ心の又思ひなをしてさすがに思ひはてじなどゝもつかへり或云さすがは有槃の字也槃約束留滯也かくるつなぐとゞまるなどよむ一方に

よりはてずかけてをく也又云さすがは滯りたる義
也流石共書也石にとゞこほりて流れのさきへゆか
ぬ義也云々
こと草もましるかやむしろ　　ことぐさは雜談と書
匠材集云ことぐさは常の詞也云々澤庵和尙東關
記云草津と云草津と云所に一夜ねて「まかなくも
人の心のたねなれは言くさつきぬ敷島の道　萱莚
は萱にてあめるむしろ也（千）あさてほす東乙女の萱
莚しき忍ひてもすぐす比哉　俊頼
草の庵のせはしなき　　せはしなきはせばき也偏と
書
さん候是はわくかせわとて　　籰かせわは機の道具
也說文曰籰收レ糸者也字亦作レ䌯矣　伊呂波字類抄
云籰と書䉀は有ニ横木ー杖也形如ニ工字様糸を跂
木に絡也但數輪とあれは繰車をいへり
さらば通夜いとなふて御覧せ候へ　　糸の縁にてか
くつゞけたりいとなみとはいとまなき也家業にい
とまなきをいとなみと云也
麻草の糸をくりかへし　　麻草は麻の苧也俗に眞苧
と云也徒然草の薄の事をふくませたり　　躬恆秘藏

抄云ますほの糸と云は尾花を云也出たる時ますわ
うなる也云々雲玉集ますほの糸はすわう染の糸也
ますほのすゝきもほのあかきを申登蓮が雨夜に三
十里の道を行てきゝしも是也云々〇花薄ますほの
糸をくりかけてたへすも人をおもほゆる哉　俊頼
昔を今になさはや　　しづや〳〵の歌にてつゞけた
り二人靜に注す
まづ生身を助てこそ佛身をねかふたよりもあれ
今生を助て佛身をねがふと云事山伏の法にかなは
ず修驗抄云修驗意自身即無作三身覺體自心即一念
法界內證也矣　又云山伏者大日遍照智身即身即佛
覺體也矣　或又三種即身を談じ又捨身求ニ菩提ー事
を述たり但此阿闍梨愚なる者の機にしたがひてか
くおしへ給ふ成べし
心たに誠の道にかなひなは　　此歌班女に注す
唯是地水火風の假にしはらくもまとはりて　　圓覺
經曰我今此身四大和合所レ謂毛髮爪齒皮肉筋骨腦
髓垢色皆歸ニ於地ー唾涕膿血涎沫津液痰淚精氣大小
便利皆歸ニ於水ー煖氣歸レ火動靜歸レ風四大各離今妄
身當レ在ニ何處ー矣　大論偈曰地水火風質能變除ニ不

淨一傾レ海淨二此身一不レ能レ令二香潔一矣
生死に輪廻し五道六道にめくる事只一心のまよひなり　五道とは地獄餓鬼畜生人間天道を云也是に修羅を加へて六道と云也　一遍上人法語云花をおしみ月を詠てもおこりやすきは輪廻の妄念なり云々
心地觀經曰有情輪廻生二六道一猶如二車輪一無二始終一矣　玉葉○こしかたは忍はるれ其六の道めぐりし跡にかへらずも哉
人更に若き事なし終には老と成物を　和漢朗詠集云小野篁詩云人無二更少一時須レ惜年不二常春一酒莫レ空矣
抑そも五條あたりにて夕顏の宿を尋しは日影の糸の冠きしそは名たかき人やらん　名高き人とは源氏君を指て云也源氏君夕顏の宿を尋ねし時日蔭の糸の冠を着し給ふといふこと源氏物語の本文に曾て是なし夕貝の宿の事夕顏に注す日蔭の糸は日蔭のかづらとて草にかたどり糸にて冠の巾子に結付る也かつらの長さ組たて一丈二尺計細丸く組也平治秘記云日蔭䰅結二冠巾子一結目在二纓上一以レ糸造レ之小枝少々在レ之前方二筋後方二筋垂也色々有矣
纓江入楚云小忌衣きる人は日影の糸を冠にさくる也日影のくみ共云也云々古今榮雅抄云さがり苔の注云さがりこけは岩にさがりたる苔也日蔭のかづら共云神まつる時昔は此苔をとりて舞人神子などのかづらにし又袖にもかざりけるとなん今も日蔭の糸とて草にかたどりて糸にて結ぶ也云々一奥山の日蔭のかつらかけてなとつれなき人になひき初けん
賀茂の御アレ所にかさりしは糸毛の車と社きけ　是は賀茂の葵祭の事を云也御生所は本宮の乾の方なり或は假寢野邊共云齋院假殿の舊蹟也葵祭に注連を引所なり花鳥餘情云みあれは玉依姫の別雷神をうみ給ふ所をいふにや御生共書則かたちを顯はし給へる故に御形共かけり云々河海抄云賀茂祭前日於二垂跡石上一有二神事一號二御形一御阿禮者御生也矣　注進略記云加毛神日向襲峰に天降坐て瀬山背の岡田に移り天の岩船を漕よせ現形ましゝける其所を御生所と云云々○門撰千早振かものみあれの葵草引つゝきても渡るけふ哉齋院一原抄大全云糸毛車者内親王内命婦四衣以上之處レ乘之車也軒下背レ

庇曰ニ庇差一以ニ白糸一裝ニ車屋上一曰ニ絲毛一矣　海人藻芥云糸毛車賀茂祭日典侍乘レ之渡ニ一條大路一也矣○（草根）うしや猶戀路の思ひめぐらすも糸毛の車みあれ佗つゝ

思ひあかしの浦千鳥音をのみひとりなきあかす

明石の浦は播州の名所なれ共爰は只思ひあかすと計の諷詞にてつゞけたり○（新古）つく〲と思ひ明石の浦千鳥浪の枕になく〱そきく

詞林采葉云明石浦とは赤石と云事也日本紀に神功皇后三韓を征して都へ歸ますに仲哀天皇の御子鹿弭坂王忍熊王二柱の王は御弟譽田天皇太子に立給ふ事をそねみて播磨國に先皇の山陵を築まねをして此浦に赤石を運びて島を造らしめ假廟を棧敷として皇太子を入奉り此棧敷を落破て討奉らんとはからひ給ふに赤き猪來て鹿弭坂王を忽にくひ殺しつ忍熊王は軍を引て山背に渡り其れより江州瀨田の渡りにて討れ給ふ云々赤石を運て積し所なれば赤石浦と云也已上

膿血たちまち融滌し　膿血は說文曰膿腫血也矣釋名曰血滅也出ニ於肉流而滅々一也矣　融滌は說文曰融炊氣上也徐曰鎔也氣上融散也矣　廣韻曰滌淨也矣周禮註曰以レ水和而沸レ之矣　九相詩云膿血忽流爛壞膓矣

臭穢　みちて肪脹し　臭穢は禮記註疏曰臭通ニ於鼻一者謂ニ之臭一矣　正義曰專以ニ惡氣一爲レ臭矣　廣韻曰穢惡也矣　增韻曰汚也矣　肪脹は說文曰肪肥也矣　說文曰脹腹大也矣廣韻曰脹滿也矣　九相詩云朝見ニ肪脹爛壞臭一矣

膚膩こと〲く爛壞せり　膚膩は韻會曰膚皮也矣說文曰膩上肥也矣　爛壞は說文曰爛熟也矣　說文曰壞敗也矣　廣韻曰自破也矣

胸をこかすほのほ　胸は心の臟也心は火也○（源氏）ひとりゐてこかるゝむねの苦しきに思ひあまれるほのほとぞみて

咸陽宮の煙は紅葉狩に注す鬼一口は通小町に注す

東方に降三世明王南方に軍吒利夜叉明王西方に大威德明王北方に金剛夜叉明王中央に大日大聖不動明王　右五大明王は委く舟辨慶に注す

唵呼嚕々々旃荼利摩登枳　是は藥師の眞言也

唵阿卑囉吽欠蘇嚩訶　是は大日の咒也　大日經三

悉地出現品曰阿味囉𤙖欠矣　義釋六具緣品下曰阿鑁覽𤙖欠矣　唵字は如來のにして三身をふくめり秘藏記云唵字有二五種義一歸命二供養三驚覺四攝伏五三身矣　守護經云唵字毘盧遮那佛之眞身一切陁羅尼母又中央大日義可レ思レ之矣　蘇嚩訶は決定之義也悉曇藏曰娑嚩訶悉婆訶云也

𤙖怛羅吒干𤚥　是は不動の呪也葵上に出たり

見我身者發菩提心聞我名者斷惡修善聽我說者得大智悳知我身者即身成佛　右は不動明王の本誓二頌といへり又舊抄に聖無動經の文也とあれ共無レ之谷響集云此文經軌中無レ有二正文一依二薄草決一小野僧正仁海後朱雀帝長曆中奉レ勅取二諸經軌所說之要一集所レ頌也矣

明王の繫縛にかけて　〽なわを以てしばり付緣をむすび終に佛になし給ふと也　弁辨慶に注す

熊坂

異本義經記云熊坂張樊と云盜人加賀國熊坂の者とぞ美濃國赤坂の宿にて夜討して牛若丸に討れしといへり傳曰張樊事十三の歲伯父の馬を盜み市に出て賣しより鍛練したるとにや二十一の歲法師になり張良の張の字と樊噲の樊の字を取て張樊と名のる國々の盜者を集め其將たるの由云傳へり由利太郎藤澤入道柳下小六淺生松若三國九郎壬生小猿など云者其頃の盜人といへり云々　雜々拾遺云熊坂太郎は賀州の者也浪々して盜賊の魁首となり髮を薙て張範と名のる承安年中牛若にうたる此張範七歲の時父と共にある福僧の土用ぼしする處に行藏のかぎをぬすむ住持見つけて追かけ取かへす時張範鍵を持ながらころびて鍵をしめりたる土におしいれ形を付置のちに其形にあはせて相鍵をこしらへ庫に入て財追を盜みそれより面白き事に思ひひたもの追はぎ强盜せしと云々或云美濃國青野原に小松原あり東へ下れば道より右の方也其中に高さ十間計の松一本あり是を張樊が物見の松といへり此松に登りて東西四五里が程を見すまし人馬の足のはこびを見て荷物それ〲の樣體をさとりて手下の者にいひつけて其物をうばひとらしむと云々

うしとはいひて捨る身の行衞いつとか定むらん
續後拾 ○老か世に物忘れして忘のふ哉うしといひつゝ捨
し昔を藤原爲德
是は都方より出たる僧にて候　都の字義は高砂に
注す又僧は田村に注す
近江路なれや湖の粟津の杜も見え渡る瀨田の長橋打
過て　近江國及び瀨田長橋は田村に注す水海は竹
生島に注す粟津の杜は三井寺に記す
野路篠原に夜をこめて　野路篠原一所に非ず野路
は大津と草津の間にあり篠原は草津と守山の間に
あり續古○霰降野路の篠原ふし侘てさらに都を夢にだ
に見す式子內親王
名こそ青野が原なから色付いろか赤坂の里も暮行日
影哉　秋の景氣をいへり青が野原は濃州不破郡也
垂井より五町計東なり赤坂は垂井より一里十二町
有張樊が義經に討れしは赤坂の宿にての事也とい
へり○千家いふき山さしも待つる郭公靑野が原をやす
く過ぬる爲尹　○古しへも泪をともにちらしてき赤
坂にしも名を流しけん後頼　一條禪閤兼良美濃道

記云六日の早朝垂井をたちぬ道すがらの名所共多
く忘れ侍り青野が原を過侍れば昔ものゝふ有しが
うち死したる所とかやいへり「たゝかひの昔の庭
もにはとりのあかさかこえて思ひ出つゝ
なふ〳〵　江口に注す
あれに見えたる一ト木の松の少しこなたの萱原こそ只
今申古墳なれ　一木の松は彼張樊が物見の松をい
へり上に記す古墳とは古き墓也張樊を葬たる墓也
說文曰墳墓也方言冢秦晉之間謂ニ之墳一矣　禮記註
曰土之高曰レ墳矣
往復ならねは申也　往復とは往て復ざると云詞也
死したる人なれば名を申にも及ばざると云心也
宗德經五大第十三曰事大爲レ冬世氣往復上下略盤谷
序云繚(メグリ)而曲如ニ往而復一矣　山谷注云回旋往復矣
持佛堂に參り　庭訓往來云可レ立ニ檜皮葺持佛堂一
矣　源氏橋姬卷云持佛の御かざり計をわさとせさ
せ給ひて云々
安置忘給ふへき繪像木像のかたちもなくて　日本
紀云用明天皇元年自ニ百濟國一奉ニ畫工白加一是畫工
之始也矣　舊事本紀云欽明天皇十四年五月於ニ和

泉國茅渟海中一奇異樟木天皇奉レ問二於五十大神及三輪太神一而令レ作二佛像二軀一今在二吉野寺一放光樟像是也吾國造二佛像一是始也文略　帝王編年記云天平八年丙子二月始置二造佛像司一矣

大長刀　長刀は日本の武具歟倭名抄云唐令曰銀装長刀和名之路加禰都久利乃奈加太遅矣　長門本平家物語に薙刀と書

柱杖にあらざる鐵(カネ)の棒　柱杖は禪家に用ゆる也左樣の相應したる道具はもたで出家に似合ぬ鐵の棒はいかにととかめたる也　十誦律曰佛聽レ蓄レ杖其猶用レ鐵爲二堅牢一故斯蓄行李之善助也矣　毘奈耶曰佛聽レ蓄二柱杖一有二二因緣一一爲二老瘦無力二二爲二病苦嬰身一故矣

さん候此僧はいまだ初發心の者にて候か　初發心とは初めて菩提心を發起する也大論曰若初發心時誓願當二作佛一已過二諸世間一應レ受二世供養一矣　四教儀集解曰初發心者初住位中開二發本性三因一成二三身一也故正因發成二法身一也了因發成二報身一也緣因發成二應身一也是八相果非二妙覺一也矣

垂井青墓赤坂とて其里々はおほけれ共　垂井は青野村のこなたにあり青墓は青野村の東に有いづれも不破郡也昔は垂井赤坂と同く宿驛也今は小里也大和本紀曰日本武尊伊吹山の大蛇の難を去り給はん爲に迹へ歸り給て又清水に御足を冷し給ふ此水は初めは少し有けるが尊御足を冷し給ひし時より此井に水滿足せり仍而其處を足井共號す云々一條禪閤美濃道記云あふはると云は垂井よりこなた也名寄に青墓の里といへるは此事にや云々○詞花 昔見し垂井の水はかはらねとうつれる影そ年をへにける　隆經 ○拾玉 一夜見し人の情そ立かへる心をやとるあふはかの里

こやすの杜　青墓の近所にあり歌見えず

山賊夜盜の盜人等　說文曰賊敗也害也矣　左傳曰殺レ人不レ忌爲レ賊又毀レ則曰レ賊矣　說文曰盜私利レ物也矣　左傳曰竊レ賄爲レ盜矣　義寂梵綱經疏曰竊取名レ偷顯奪名レ劫盜通レ二也矣古歌に盜人を白波綠林とよめり是は唐土に白波谷と云所あり又綠林は盜賊の籠れる山の名也綠林は前漢十五主王莽が時天鳳四年丁丑臨淮娘耶其外荊州より起二綠林兵一是則人の物を侵奪て飢饉を懸とする民衆數萬

人綠林山の中に陰れ居て盜竊をなすそれより盜賊の名とせり日本の山賊のごとし　白波は後漢靈帝の末に黄巾の餘黨郭太等復起ニ西河白波谷ニ遂破ニ河東ニ百姓流ニ轉三輔ニ號爲ニ白波賊ニ是より白波を海賊の名とせり　八雲御抄云盜人の下にしら波みどりの林と有

下女やはしたのもの迄も　伊勢物語云ふるさとにいとはしたなくてありければ云々　愚見抄云半の字をはしたとよむと云々　肯聞云强の字をはしたなしとよむよはき物につよくあたる事をはしたなしと云心也常にも女の物いひこはぐ〳〵しきをはしたなきと云此義によく叶へり云々　寶澄云此女ぬしもなくいつかたへもつかぬ體を云也當時宮仕女を御はしたものといふもいづかたへもつかでゐる心也云々　名目抄云半物（ハシタモノ）と書史記云妾と書

支證なき手柄　證據なき手柄也

似合ぬ僧の腕だて　此語は妙樂大師の十五無益の一也十連鈔云可レ嫌物事法師之腕立夜行之高聲出仕之長刀文略

佛も彌陀の利劒や　山姥に注す

愛染は方便の弓に矢をはげ　放下僧に注す

多聞は鉾をよこたへて　鞍馬天狗に注す

されは愛著慈悲心は達多が五逆に勝れ　執心にての善根は提婆が五逆よりも惡きと也名義集云提婆達多亦名ニ調達ニ亦名ニ提婆達兜ニ法苑云齊云ニ天熱ニ以ニ其生時人天等衆心皆驚熱無性ニ攝論云唐云ニ天授ニ亦云ニ天與ニ謂從レ天乞得故矣　五逆者隨身鈔云一殺レ父二殺レ母三殺ニ阿羅漢ニ四出ニ佛身血ニ五破ニ和合僧ニ此小乘五逆罪也大乘五逆罪者一破ニ壞堂寺ニ焚ニ燒經藏ニ二謗ニ三乘ニ三於ニ一切出家人ニ若有戒若持戒若破戒打罵呵責四殺父殺母出佛身血破和合僧殺阿羅漢五撥ニ無因果ニ也此云ニ五無間業ニ矣　提婆達多は阿闍世太子をすゝめて父母を殺さしめみつから花色比丘尼をころし佛の御足より血を出し和合の僧をやぶれりかゝる惡人なりしか其法花の會座にして成佛し給ふ也

方便の殺生は菩薩の六度にまされりとか　慈悲の爲にする殺生は功德になると也　菩薩戒經曰以ニ憐愍心ニ而斷ニ彼命ニ矣　菩薩六度者六波羅密也一檀婆羅密二尸波羅密三羼提波羅密四毘棃耶波羅密

五禪定波羅密六般若波羅密以ニ唐言ー譯レ之 即布施持戒忍辱精進禪定智惠是也名義集、及法界次第に見えたり

されは心の師とはなれ心を師とせされと古き言に知れたり　南本涅槃經二十六曰 願作ニ心師ー不レ師ニ於心ー身口意業不ニ與レ惡交ー矣　宗鏡錄曰寧作ニ心師ー不レ師ニ於心ー若師レ心則墮ニ六趣ー而不レ返作ニ心師ー則冥ニ一道而常歸矣　章安疏曰願作心師有ニ二解ー一云只是前後兩心前心起レ惡後心隨レ流者此非ニ心師ー前心起レ惡後心能止是則心師ニ解以レ假ニ人制心ー不レ隨ニ心作ー所作假レ人人是心師今明太近上文云諸佛所レ師所レ謂法也心緣ニ於法ー法爲ニ心師ー淺深自在矣
新撰六帖 ○おろかなる心の師にはなりぬ共思ふおもひに身をばまかせじ

一夜ふす小鹿の角の束のまも　新古 ○夏野ゆく小鹿の角のつかの間も忘れすそ思ふ妹か心は　玄旨抄云小鹿とは鹿の總名也されは共別而ちいさき鹿をいへり束の間とはその角の生はじむる頃は手一束計有也つかとは少しの間と云事也云々　宗祇云夏の鹿は角生初てみじかくて一束なるをいふと云々

松の下伏夜もすから　松の下伏は松の下に伏也
東家十三代看 ○おのつから夢もむすはて明せとや春も一夜の松の下臥

東南に風立て西北に雲靜かならす　是は天の氣泰平ならぬ事をいへり　史記天官書曰風從ニ南方ー來大旱南西小旱西方有レ兵西北小雨趣レ兵矣項羽本紀曰大風從ニ西北ー而起折レ木發レ屋揚ニ沙石ー矣　謠のこと葉是等を以てつゝけたり

夕闇の夜風はけしき山陰に　是盜人の兼てこのむ時節也或は夜討などもかやうの時をうかゞふといへり

有明比は高砂に注す朧夜は賴政に注す

弓手や馬手に心をくばつて　弓手は左馬手は右也東鑑に弓手馬手と書　盛衰記に弓手妻手と書丹生津媛記云矢手ニ取持云々或云弓手矢手と書るが可レ然云々

扨も三條の吉次信高とて金をあきなふ商人有て每年數多の寶をあつめて高荷を作て奥へ下る　此謠に吉次信高と作るなり異本に三條橘次季春と有太平記には五條橘次末春と有說々不同也世傳妙心寺

の北に木辻村と云あり是橘次季春が住し所なる故に此所を木辻と云といへり一本に大宮の西橘次が許と云々舊跡定かならず高荷を作るとは橘次が荷物也奥とは奥州也奥州は金の多く出る所なれば橘次種々の代物を以て金にかへ是をあきなふ依て金商人と云也　異本義經記云三條橘次季春と云金商人あり後堀彌太郎景光は此季春といへり毎年奥州へ下る秀衡が方へも出入と也遮那王橘次が參詣毎に昵給ふと云々平治物語云堀彌太郎者義經赴二奥州一時所レ伴金商人吉次者也云々

河内の覺紹磨針太郎兄弟はおもて打には並なし　是より以下此者共等張樊が手下の盗人也表打とは劒術の達者なるものを云也　河内國は釆女に注す

三條の衛門壬生の小猿　　壬生は在二大宮西四條南一寶幢寺と號す又心淨光院共小三井寺共云也本尊は地藏菩薩也定朝の作也毎年三月大念佛あり又此所の人民集り狂言をつとむるなり其中に猿の綱を渡る事あり狂言あまたある中に是を最上とす是になぞらへて盗人の名を壬生の小猿と呼也壬生は氏の時は淸てとなふべし名所の時は濁るべし

火ともしの上手分切　是等盗人の上に遣ふ詞成へし

扨北國には越前の淺生の松若三國の九郎　　越前國は山姥に注す三國も淺生も越前也淺水共書あさむつとよめり俗にあさふづと云也盗戒をよめる歌に〇夫あさむつの橋の忍路渡れ共とゝろ〳〵となるそ佗しき

加賀國　　佛原に注す

しれもの　　源氏箒木巻云しれものゝ物語せんと云々花鳥餘情云しれものとはされものといふがごとしと云々　孟津抄云しれものは癡の字也云々　万葉集に愚人本朝文粋に白物左傳注に白痴不慧禮記に愚者と書

ひきはも四方に道多し　　熊坂先達而ひきはの道を考へ置事あつはれ盗人の大將深き思案たるべし

見れは宵より遊君すへ數百のあそひ時をうつす

橘次富貴なれば樣々のあそびをつくし酒もりして一座亂れたる體なり義經記に委し

目の中人に勝れたるか　西晋書列傳十三云王戎幼而頴悟神彩秀徹視レ日不レ眩裴楷見而目レ之曰戎眼爛

々如ニ厳下電一矣

牛若殿　義經の稚名也一本云保元三年夏母常盤の夢に大威徳明王牛に乗て來り彼牛忽に利劔と化す此利劔を賜はると見て懐胎す于レ時平治元年二月二日洛北紫竹の里にて誕生ある依而牛若丸と號す云々

機謙は　千壽に注す松明は鵜飼に記す

勢はやうやく神もおもてをむくへき樣ぞなき　やうやく神は行厄神を云歟簠簋云行疫神は人死を受るの日遊行する神也云々　沙石集云行疫神の異類異形なる數を不レ知來て或山僧に障礙をなす時に此僧圓頓止觀の文を誦しければ鬼神悉く退散すと云々文略　今案　唐韻曰厄災也又阻難也困也矣漢書曰一元之中陽厄五陰厄四陽爲レ旱陰爲レ水矣註云一元四千五百歳爲ニ一元一矣　是世の人の年の阨難をもいへり陰陽二の中陽厄尤勢つよかるへし依レ之陽厄神とは云也

獅子奮迅虎亂入飛鳥の翔の手をくたき　是は兵法の手の名也　法華涌出品曰諸佛師子奮迅力矣大般若五十二曰師子奮迅三昧者於ニ諸垢穢一縱任ニ棄捨一如ニ師子王自在奮迅一奮迅振ニ毛羽一狀矣　大明法數曰師子奮迅者借レ譬以顯レ法如ニ世師子奮迅一爲ニ二事一故一爲ニ奮ニ除塵土一二能前走却走捷疾異ニ於諸獸一此三昧亦如レ是矣　或云兵法書に源義經虎亂飛鳥翔の秘術を書せり今の戸田山崎が兵法の手也云々　一云新陰流兵法に燕飛と云手あり又神道流に鳥飛と云手あり是等飛鳥の翔の手と等し云々

其外手をひ太刀を捨具足をうははれ　張樊を初め手下の者共判官殿に切立られ心爰にあらされば手に持たる物も忘れ皆肝をけしたる躰成べし　具足とは武具の總名也　鵯鶯記云五百騎がまつさきにすゝむで目にあまる程の大具足共閃かし立てかけいれば云々

盜も命のありてこそあらしようやひかんとて　あらしようとはあらはやうと云に同じあらおもしろなどいへるあら也しようは枝葉也本の義に非ず末の沙汰也と云事なり依て枝葉と書太平記に荒枝葉ト有謠の意は橘次が荷物に目をかけず其外にぬすむべき寶はいくらも有べし根本の命がありてこそなれあらしようやとはいへる也枝葉の字漢文にも

佛書にもいでたり記表記云子曰君子不ㇾ以ㇾ辭盡ㇾ人故天下有ㇾ道則行有㆓枝葉㆒天下無ㇾ道則辭有㆓枝葉㆒矣

うしろめたくもひきけるが　　伊勢物語云昔男色このみなりける女にあへりけりうしろめたくやおもひけんと云々愚見抄云うしろめたくは無㆓心元㆒(ウシロメタ)なりと云々　眞字本に後目痛と書　古今秘抄に影護と書河海抄に(同)影護と書○(續後拾)嵐ふく太山の里の女郎花うしろめたくも歸る今日哉藤原元眞

物々しその冠者が　　冠者とは少年ならずよき程の若者を云也桐つぼの巻に源氏元服の後冠者君といへり元服して俗體の定まりたる程の若き人を冠者といふべし又官者と書てみやづかひとよむ職原抄に官者は藏人所の內侍を云也太子のそばにつかはるゝをいふ但爰にては冠者の方を用ゆへし　物々しとは一物ある人を云也○(山家)山深みこくらき嶺の梢より物々しくも渡る嵐か

折妻戸をこたてにとつて　　一枚折の妻戸或は二枚折の妻戸と云あり葵上に注す

たかひにかゝるを待けるが　　總而兵法軍術にも勝負の時敵の位を見る事肝要也兵法口傳に不ㇾ待不ㇾ掛長短間と云事あり此等をふくませたり

いらつて熊坂さそくをふみ　　さそくは早速と書歟又左足とも書歟兵法に先左の足より踏出すを習ひとする也　いらつとは兵法傳云敵に向時虛實を見て進退取捨の心得あり一切の勝負いらつ方は虛也不ㇾ動方は實也牛若は不動心に住して神變不思議の兵法の達者也一年五條の橋にて千人切せし時辨慶と渡りあひ終に辨慶を志たかへ主從の契約ありて牛若君をはる〳〵鞍馬山迄おくり奉る辨慶長刀を横たへうしろに付そひ參しに牛若終に後を見むき給はす恐れ給ふ事なし辨慶是を感せし也牛若は兵法の達人なれは地住の足下なとゝいふ秘術にも至り給へる歟まして熊坂などがいらつてかゝる長刀の手掌の物を取より安して終に熊坂討れたり

爰の面廊　　面廊とは權現造りの拜の屋を云也爰にては座敷へ行所の廊をいふ成へし

かけろふ稲妻水の月かや姿は見れ共手にとられず

かけろふは源氏供養に注す　七書尉繚傳曰輕者如

レ莚猗レ敢若レ驚矣（萬）目には見て手にはとられぬ月の中の桂のごとき妹をいかにせん

夕つけも告渡る　　湯谷に注す

鉢木

正五位下相摸守平朝臣時頼桓武天皇十代後胤北條遠江守平時政九代後葉也父修理亮時氏と號す母は秋田城介景盛女松下禪尼と號す天下の副將軍として古今無双の賢將たり建長八年十一月廿三日相州山内の最明寺にて落餝あり法名を覺了房道崇と改む世に最明寺殿と云り山内最明寺は絶て其跡に禪興寺を道崇の建立也則此所に最明寺殿を葬る也東鑑云弘長三年十一月廿二日戌刻入道時頼年卅七西明寺の北亭にて卒す臨終の儀着二衣袈裟一登二繩床一座禪し聊動搖の氣なし頌云業鏡高懸卅七年一槌打碎大道坦然と同廿三日に葬禮す文略　時頼入道の政道理非分明にして奉行頭人評定の輩聊私のはからひなかりしかは聖風二たびあらはるゝかと万民安堵の思ひをなしけりされ共諸國の守護人地頭等邪欲非道のみ有て訴論更に决せざれば時頼入道是を歎き世に惡逆私欲の者或は謀反の輩死罪を蒙る事自致所といひなから私德うすく政道に叶さる故也今は嫡子時宗成長して政務にうとからす廉直の男なれは政を預けんにさのみあやうかるましとて其身一室にとぢこもり出入の人々は靑砥左衛門藤綱二階堂入道なにかし只二人に極て文應二年秋の末俄に死去と號し給ひ二階堂一人召具しひそかに鎌倉を忍のひ出六十餘州を修行し給ふ事三ヶ年在々所々を廻給ふ其跡にて時頼の葬送追善まめやかに取おこなひ給ひ扨廻國の後鎌倉へ歸て家人の惡事を正し給へは諸人舌をふるひておそれけるとぞ（北條九代記取意）

此行衛定めぬ道なれはこしかたいづくならまし

こしかたは越る方なり次第の心明かに聞えたり

是は一所不住の沙門にて候　　一所不住とは最明寺殿廻國修行の身の上を云也沙門は田村に注す

信濃國は兼平に注す鎌倉は鵜飼に記す信濃なる淺間の嶽に立煙は業平歌也杜若に注す

大炊山とものの里離れ坂　　何れも信濃の內也上野へ

行道也
碓日川　橋有左ニ妙義山へ行道あり碓氷峠は信濃と上野の堺也柏崎に注す
下す筏の板鼻や佐野のわたりに着にけり　板鼻は上野也板が鼻共云安中より三十町あなた也板鼻より佐野迄は十七里餘有佐野へ行道は高崎より廿町計東にあり道より西に佐野村有舟橋を渡せし川に橋をつなぎし木也とて近き比迄有しといへり今はなし恒世が舊宅佐野にあり　新古今増抄云筏とは木をからみ合て舟のごとくして山川を流す也それを棹にてさしくだす人を筏士と云也云々惣而所の名に鼻と云は高くさし出たる處を云也山城に山鼻竹が鼻丹波に猪の鼻など所々に多し　大原紀行云こゝをしも山鼻と云事は大原の道に分ゆくに山の有はしめにて河原にさし出て高く見ゆる故に人によそへて山ならは鼻ならんと云成べし云々
急候程に上野國佐野のわたりに着て候　上野國は舊事本紀云上毛野國造瑞籬朝皇子豊城入彦命孫彦狹島命初治二平東方十二國一爲レ封矣下毛野國造難波高津朝御世元分二毛野國一爲二上下一豊城命四世孫奈良別初賜二國造一矣大和本紀云上野下野とは彼兩國の中間に佐野笠懸野とて二の野原あり其野中に一河あり渡瀬と號す又佐野の中河とて是あり此野を一方に寄れは國狹き故に彼兩野の中なる渡瀬河を境て兩國に分つ仍河より西をは上野と云河より東をは下野と號するなり又野の西を上に付野より東を下に付しかは上野下野といへり但野の字をつけとよむは本文には非すつけのよみは假名書のよみ也又義よみにてつけと云也云々　或云昔は上毛野下毛野とて毛の字を添たり毛とは有レ田云レ毛後毛の字を除といへり　字彙云毛草也矣穀梁傳曰凡地之所レ生謂二之毛一矣
あふつたる雪哉いかに世にある人の面白う候らん
面白うとは雪の色によせていへり　徒然草に雪の面白う降たりし朝と書るに等し　色葉字類抄云鈆粉ユキ　玉塵同　恒組同と書　説文曰雪冬雨矣大戴禮曰天地積二陰温一則爲レ雨寒爲レ雪矣五經通義曰陽則散爲二雨水一寒則凝爲二雪霜一皆從レ地而升者也矣　面白と云詞は三輪に注す
雪似二鵝毛一飛散亂人被二鶴氅一立徘徊　此詩は白氏

文集三十三卷にあり鶴とは鳥の名也格物論曰鶴有二蒼白二色一綠眼黃喙紅掌矣　詩の心は雪の降は鶴毛の散亂れたるに似たると也鶴氅鶴の毛也雪に逢人鶴氅を被たるやうなると景氣をのべたり徘徊とはたちもとおるとよめり　韻會云徘徊不レ進貌矣漢高后紀曰徘徊往來矣

袖せはき細布衣陸奥のけふの寒さをいかにせん

「陸奥のけふの細布ほとせはみむねあひかたき戀もする哉　奥義抄云みちのくにのけふの郡より出くる布なりはたばりせはき布なればむねあはずとはいふなりと云々　無名抄云けふの細布と云は陸奥に鳥の毛して織ける布也多からぬ物にておる布なればはたはりもせばくひろも短ければ上にきる事はなくて小袖なとのやうに下にきる也されはせなか計をかくしてむね迄はかゝらぬよしをよむなり云々綺語抄云みちのくのみつきものとてはたはりせはくていやしき布ありといへり文略

是より十八町あなたに山本の里とてよき泊りの候

十八町あなたとは日光へ行道を指て云也山本の宿共云也　貞享三年丙寅正月廿四日御會「立のほる煙そ去るへ此あさけ雪に道なき山本の里幸仁

値遇は盛久に注すなふ〳〵は江口に注す

駒とめて袖打拂ふかけもなしさのゝわたりの雪の夕くれヶ樣によみしは大和路や三輪が崎なる佐野のわたり　新古今集冬部に定家卿歌也　東野州云此歌は萬葉の降くる雨か三輪が崎の歌をとれり雨さへくるしと讀るにいはんや雪の夕はといひさしたる歌也と云々自讃歌注云萬葉にくるしくも降くる雨か中略と云歌をとりて袖うちはらふかけもなしとかへ雨を雪にかへてよめり此歌を本歌をとれる歌の本といへり云々私云此歌の佐野のわたりは上野の佐野には非す大和也依て大和路や三輪が崎なるさのゝわたりとつゝけたりさのゝ舟橋と云時は上野也さのゝわたりと云時は大和也　萬葉集第三長忌寸奥麻呂歌に「苦しくも降くる雨か三輪の崎さのゝわたりに家もあらなくに　五代集歌枕云三輪が崎は大和國云々萬葉仙覺抄云此三輪の崎は近江歟近江に三和社あり云々　詞林采葉云近江大和兩說不レ決云々　一說三輪が崎は和州三輪山の南の尾さき也佐野の渡りも此河といへり

是は東路の佐野のわたり　後撰〇東路のさのゝ舟橋かけてのみ思ひ渡ると知人のなき 源等

一樹の陰の宿りは千壽に注す草枕は安達原に注す

夢より霜や結ふらん　拾遺愚草〇夢路迄人めはかれぬ草の原おきあかす霜にむすほゝれつゝ

折節是に粟の食の候ほとに　粟の食はわひしき食物也　公孫弘傳云身食二一肉一脱二粟飯一矣　又云晏嬰相レ齊時食二脱粟飯一矣

惣而此粟ノ串物は古へ世にありし時は歌によみ詩に作り　和漢共にむかしの文に粟飯の事多し神代卷にも粟飯の沙汰あり案ずるに上古の文を見るに米の沙汰はなくして只粟を用たり昔は米を粟といひたる歟 文粹第一源順詩花色如二蒸粟一下略　女郎花に注す

萬〇千早振神の社しなかりせは春日の野邊に粟まかましを

實や盧生が見し榮花の夢は五十年その邯鄲の假枕此詞邯鄲に注す

夢にも昔を見るならは慰事も有へきに　世傳最明寺殿粟飯少し聞召誠にねふり給はんも夜さむにて目もあはされば二階堂にひそかによみ聞せ給ひける「白妙の雪に心はなくさまて浮事つもる旅枕かな

某が秘藏にて候得共　書註曰某名也臣諱レ君故言レ某凡不レ知レ名與下不三敢行二其名一者上皆曰レ某矣祖庭事苑云某如三甘木上指二其實一也然猶レ未レ足三以定二其名一矣秘藏涅槃經疏曰隱故名レ秘覆故名レ藏矣

仙人につかへし雪山の薪かく社あらめ

是は世尊因位の時雪山において仙人につかへ給ひし事をいへり　仙人者　釋名曰老不レ死曰レ仙仙遷也遷入レ山也故制レ字人傍山也矣　楞嚴經曰有二十種仙一皆壽千萬歲數盡復入二輪廻一爲レ不三曾了二得眞性一與二六道衆生一同名二七趣一是皆輪廻中人也矣　寒山詩云饒汝得二仙人一恰似二守レ尸鬼一矣　雪山者　西域記云揭職國雪山王城西北二百餘里至二大雪山一山頂有レ池請レ雨祈レ晴隨レ求果レ願云々山谷高深峯巖危險風雪相繼盛夏合レ凍積雪彌レ谷蹊徑難レ涉山神鬼味暴維妖祟群盜横行殺害爲レ務矣

窓の梅の北面は雪封してさむきにも

和漢朗詠集云藤原篤茂詩云池凍東頭風度解窓梅北

面雪封寒矣
見じといふ人社うけれ山里の折かけ垣の梅をたに
○山里の折かけ垣の梅の花いかなる人の見しとい
ふらん　菅家
家櫻きりくべてひさくらになすぞかなしき
連歌俳談抄云家櫻は都又居所なとの櫻也と云々
一説山にあるを山櫻といひ里にあるを家櫻と云也
と云々　ひさくらは當麻に注す
新古 ○垣こしに見るあた人の家櫻花散計行ておらはや
圓融院
松は本來煙にて薪となるも理りや　松の煙とは元
來松は諸木の中に殊に煙の多きもの也依て和漢共
に松の油煙を以て墨に作る也詩にも歌にも松の煙
を詠するは遠山の松の青きを煙にたとへて松の煙
とつゝくる也證文略レ之
或説に春みとり立比松かさのやう成もの生じて長
ては白き粉の風に散亂するを松の煙といへり是は
俗説ならん百練抄云寛元四年七月四日北野一夜松
此四五日烟立給矣
みかきもり衛士のたく火はおためなり　玄旨百人

一首抄云御垣守は內裏の御垣を守る者也衛士は左
衛門の下につかふ士也左衛門は外衛の御垣を守る
也夜は火をたきて守る役也云々
詞花 ○御垣守衛士のたく火の夜はもへて晝はきへつゝ
物を社思へ　能宣
是社佐野源左衛門常世がなれる果にて候 ワキ それは
何とてヶ樣の散々の躰には御成候ぞ　源左衛門常
世は上州佐野住人俵藤田秀鄉末孫三良政常子也云
々常世が古城は當國天明と云所にあり佐野の近所
也一説に源左衛門が居城は奥州にありともいへり
又下野國平井村に太平權現と云社有當社は常世が
靈を祭ると云々
最明寺殿ヶ樣に尋給ひし時常世が答申けるは佐野
藤太常俊と申者我爲には伯父なるが一族共をかた
らひ有夜ひそかに某が父を殺し佐野三郎こそ狂氣
になりて自害せし旨申上一族として某を追出し本
領を押領せられヶ樣の身と成果ぬ親の敵とねらひ
候へ共かれらは多勢我はひとりにて候へは力及ば
ず打過候と申上る也
ワヤ なふそれは何とて鎌倉へ御上り候て其御沙汰は候は

ぬそシテ一運の盡る所か最明寺殿さへ修行に御出候上は候　最明寺殿さへ御逝去にて評定衆は閑居なればたとへ御訴訟申ともいかで其甲斐候へきと常世がいひたる也此唄に最明寺殿さへ修行に御出候とうたふは相違せり

沙汰者音義曰沙汰則如下沙中濤ニ洗其金一取中精妙上矣杜子美上ニ韋左相一詩沙ニ汰江河濁一集註曰沙汰以レ篩貯レ沙去ニ其細一而存ニ其大一曰レ汰矣心は沙を汰ヨリて細なるを去り大なるをおさむることく理非分明に辨ふるを云也

着到につき　着到書樣之事　曾我簡見抄云闘勢着到の口に年號月日何之闘勢着到之覺と書て誰殿幾千騎幾百騎誰殿幾十騎と書也

只頼め我世中にあらんほと　囲村に注す

けうかる法師なり　是は最明寺殿の詞なるを自身に法師といへるは不埒也案するに謠の本文に法師と書は誤也芳志也芳はかうはしきと訓ず志はこゝろさし也言心は常世が深切の饗應を稱美していへる詞也又けうがるとはけうは希有と書まれにあると云義也

公方の緣になり申さん　公方と云詞は最明寺殿時代にはなき事也或云應安七年九月將軍義詮の御子義滿公は自ニ西國一歸洛し給ふ則天下泰平に依て永德元年の春後圓融院初て將軍の亭へ行幸成て義滿を任ニ太政大臣一自レ是號ニ公方一其後三十八歲にて入道し號ニ鹿苑院道義一文略　武家を公方と云事是より始る也

東八ヶ國の大名小名　坂東八ヶ國は盛久に注す大名小名と云は大人の名譽を崇呼で大名と云也異朝にては諸侯を大名と云見ニ左傳一莊子曰語ニ大功一立ニ大名一此朝廷之士也

糸毛の具足　常の糸を以て威したる具足也糸を毛と云也昔は革を以て只今の糸のことくおどしたる也是を糸にて綴したる故に糸毛と云也糸の色二色にておどしたるを二毛といひて嫌ふ事也

うて共あふれとも　唐韻曰障泥鞍飾也矣　西京雜記曰玫瑰鞍以ニ綠地錦一爲ニ蔽泥一後稍以ニ熊羆皮一爲レ之矣　延喜式曰凡羆皮障泥聽ニ五位以上一着レ之矣

足よは車　湯谷に注す

きら星のごとくなみ居たり　王勃滕王閣序曰雄州
霧列俊彩星馳臺隍枕㆓夷夏之交㆒上下略
目をひき指をさしわらひ　日本紀云美女之睐矣同
私記注云睐視良也矣
さび長刀やうように横たへ　或説にやうようは揚
腰と書おちぶれたる常世なれは腰ほそくなるとい
ふ事歟此説よろしからすやうようの字要用と書て
然るへしさびたる長刀にても時の要に用たる成へ
し
塵添壒囊抄云太刀刀のさびと云字は精の字をさひ
とよむ又銹をもさひに用ゆ順和名には鐵漿と書て
かねのさびとよめり云々
神妙　舟辨慶に注す
いで其時の鉢木は梅櫻松にて有しよな其返報に加賀
に梅田越中に櫻井上野に松枝合せて三ケの庄　い
での字は景清に注す加賀國は佛原に注す越中は山
姑に注す上野は上に記す私云加賀國に梅田と云所
有又上野に松井田と云所有坂本より二里あなた也
但し越中に櫻井と云所いまた不㆑知追て尋ぬへし
唄の心は梅櫻松の枝を切くべてあてまいらせし其
返報に三ケ國の庄を賜し也依て梅田とは梅枝也え
だのえの字を略して梅だと云り櫻井とは櫻え也え
は枝也櫻えを櫻井ととなへたり又松井田を松枝と
いひかへたり皆木の枝になそらへていへり唄の作
者奇妙の文法也
子々孫々に至る迄　詩楚茨篇曰子々孫々勿㆑替引㆑
之矣爾雅曰子之子爲㆑孫孫之子爲㆓曾孫㆒曾孫之子
爲㆓玄孫㆒矣　曾孫を夜志和呉と訓す
安堵　史記高祖本紀曰諸吏人皆案㆑堵如㆑故註應劭
云案次第堵牆堵也矣　文選曰百姓安㆑堵四民不㆑反
㆑業註呂延濟云堵墻也安㆓墻堵㆒不㆑失㆓家業㆒矣家に
墻をしまはして盗賊も亂にいらざるやうにしたる
を安堵すると云也
悦びの眉をひらきつゝ　愁はしき時は聚眉とて眉
一處による也悦時は眉の間のぶる也　夕顔卷云お
のれひとりえみのまゆをひらくと云々
蜻蛉日記○數々に君がたよりて引なれば柳のまゆは今ぞひ
らくる
かみつけや佐野の舟橋取はなれし　舟橋に注す和
論語云康元々年十一月廿三日時頼出家して最明寺

道崇と申けるが何事も天下の政者相摸守に讓給ひて萬心の儘におはしける時諸國をめぐりて人の邪正をみかみつかたに訴あけぬ事も衰へたる身には多かるらんとて同年十一月十五日の夜斗藪の聖となり諸國を廻給ひしに攝津國難波の津にして人の知行押領せられし後家の所に宿をかり給ひしが彼後家が歎く事有しをよそなから委く聞て我かく斗藪の聖と成て諸國をめぐるは此事也といと哀れに覺して曉方に宿を出られしが彼後家が夫の位牌のうらに一首の和歌を書て出給ひし「難波潟汐干に遠き月影の又もとの江にすまさらめやは

同年十二月廿一日鎌倉に歸り給ひて相摸守殿へ申させおはしまして彼後家をめし出し夫の本領を下し給ふと也（巳上畠山土岐佐々貫家日記）

猩々

周の國の傍羊唖と云所に禹鳳と云者始て市を建て酒を賣常に正直にして利潤をとらず然るに夜々來て酒を買もあり姿常の人にあらす面色紅にしてうるはしく頭は荊棘のことし又酒を飲事限りなし禹鳳問云汝はいづくの者名は如何と問ければ何をか愼むへき大海の頭に住猩々と云者也明夕潯陽の江の邊に來て我を待べしといひて失ぬ教のことく潯陽の江に來て見れは彼化生の者浪間近く來て大きなる瓶を抱て濱邊にすへおきうたひ舞て酒をのむ其後此瓶に篠を相そへて禹鳳にあたへけり家に歸りて彼瓶を見るに清々たる酒壺中にたゝへたり篠の葉を門の邊に立て此酒をうれ共〳〵つきず飲人齡をのべ病をいやす事かきりなし禹鳳たのしひさかへ羊唖の市にきはひにけりと云々（巳上庭訓往來之抄寸注文略）

•

本草綱目云時珍曰猩々出二哀牢夷及交趾封溪縣山谷中一狀如二狗及彌猴一黃毛如レ猨白耳如レ豕人面人足長髮頭顏端正聲如二兒啼一亦如二犬吠一成レ群阮汧曰封溪俚人以二酒及草屐一置二道側一猩々見則呼二人祖先姓名一罵レ之而去須後相與嘗レ酒着レ屐因而被レ擒檻而養レ之將レ烹則推二其肥者一泣而遣レ之西胡取二其血一染二毛罽一不レ黯刺レ血必箠而問二其數一至二一斗一乃已矣

禮記云猩々能言郭義恭廣志云猩々不レ能レ言山海經

云猩々能知二人言一三書不同矣
是はもろこしかね金山の麓　かね金山とは唐土に徑山といふもあれは此きん山は金の字の金山にてあるぞと云事也大明一統志卷十一云中都鎮江府金山在二府城西北七里江中一宋周必大筆錄此山江環繞每大風四面勢若二浮動一唐有二裴頭陀一於レ此開レ山得レ金賜二名金山一矣
私云一統志を見るに唐土に金山と云所凡十六ヶ所有今爰にうたふ金山は何れ歟是なる
楊子の里にかうふうと申民にて候　楊子の里は楊州府の楊子江を云歟庭訓抄には羊畦とあり又かうふうも高風と有　一統志卷十二云中都楊州府楊子江在二儀眞縣南一經二通泰二州一入二于海一矣　私云金山は在二鎮江府一楊子江は在二楊州府一然るを金山の麓と云事相違せる歟但一統志の圖を見るに楊州府鎮江府相並ひたり猶尋ぬへし
扨も我親に孝あるにより　爾雅云善事二父母一曰レ孝矣　孟子曰仁之實事レ親是也矣曾子曰孝慈者百行之先莫レ過二於孝一孝至二於天一則風雨順レ時孝至二於地一則萬物化盛孝至二於人一衆福來臻矣

楊子の市に出て酒を賣ならば　說文曰市買賣所レ之也又凡買易買賣皆曰レ市矣　史記云神農氏教二人日中爲レ市交易而退矣　宋吳處厚靑箱雜記云嶺南人呼レ市爲レ虛、巷市之所二在有一人則滿無レ人則虛而嶺南村市滿時少虛時多故謂二之虛一矣　柳文云趂二虛人一矣　神代卷云一書云天照太神天磐戸に入給へは夜晝のわかちなきゆへ八十萬の神を天の高市に神つどへにつどひ給ふと云々　是諸神集會の義也此等日本の市のはしめならん
時去時來りけるにや　史記封禪書曰時去時來々則風肅然也矣
今日は潯陽の江に出て彼猩々をまたはやと存候
一統志卷五十二云潯陽江在二九江府城北一源自二岷山一至二此下流四十里一合二彭蠡湖水一東流入レ海矣
老せぬや藥の名をも菊の水　古露なから折てかさゝん菊の花老せぬ秋の久しかるへき　興風
見きときく名もことはりや秋風の　壽慶連歌の發句に
「秋の月名もことはりの光かな
秋は春より三季にあたれは名も斷や秋とはつゝけ

たり　酒を三季と云は冬春夏也或は三寸三木共書
也
古酒記云三季とは酒は冬木を作り春こそ時に濁り
夏清り依て三季といふ云々　江次第抄云酒訓ニ三
寸ニ者飲レ酒則邪風去ニ皮膚一三寸矣　岷江入楚云三
季とは冬作りて春熟し夏のむ也仍三季と書又三寸
とは酒をのめば邪氣三寸身にちかつかず寸をきと
云は馬なとをも四寸五寸と云也又三木とは杜康と
云者の妻男の外へ行ける間に男の日々の飯を蘭木
のみつまたにそなへ置けるに雨露にうるほひ酒と
成ける也是を樹伯に祭る云々　日本紀私記云神酒
和語ニ三和矣　呂氏春秋云狄儀作ニ酒醪一變ニ五味一矣
戰國策云昔狄儀作レ酒而美進ニ之於禹一矣
博物志云杜康造レ酒矣　魏武帝云何以解ニ我憂一惟
有ニ杜康一注杜康善造レ酒康以ニ酉日一死故酉日不ニ飲
レ酒會レ客矣　今案黄帝内傳に酒の事あり又素問に
も出たり酒と云事は昔よりあれ共米穀を制して作
るは狄儀杜康が始めたりと見ゆ
舊事紀云素戔烏尊脚摩乳手摩乳をして八醞八甕の
酒を釀さしむと云々　神宮雜例集云神戸人夫進ニ
神田一以レ稻作ニ神酒一矣此等日本にて酒の始め也酒
をさけ共さか共さゝ共となふるは皆音相通也　萬
葉仙覺抄云酒をさかと云はさかゆと云詞也酒宴は
皆人さかへたのしむゆへ也と云々

ことはりや白菊のきせわたを温めて　きせ綿とは
菊の霜おほひなり　源氏幻卷云九日綿おほひたる
菊を御覽じてと云々　枕草子云菊の露もこちたく
そぼちおほひたる綿などもいたくぬれと云々世諺
問答云一條冬良公御記に菊にわたをきする事いつ
れの頃より始るとも見え侍らす只菊をもてあそふ
のあまり寒霜をふせがんとの心指と覺え侍る云々
新六帖〇垣ねなる菊のきせわた今朝見ればまたき盛の花
の咲けり

月星は隈もなし　隈の字は阿（クマ）とも曲とも隩とも書
或は山隈川隈といへり山隈とは山の尾のまかりた
る所を云川隈は岸のまかれる所を云或は水のよど
む所也　説文曰隈水曲隩也矣　爾雅云厓内爲レ隩
厓外爲レ隈矣　月星は隈もなしとは曇りなき也
塵添壒囊鈔云月のくまなきと云は曇るをくまと云
海の曲たる所をくまと云も影に成所の名也阿の字

をは庭曲と釋し隈の字をは水の曲也といへり云々

新續社歌合〇くまもなき月は氷と見えなからさゝ浪よする志かの唐崎眞敎

蘆の葉の笛を吹　笳は阿志布惠と訓す　廣韻曰笳北方之人卷ニ蘆葉ヲ而吹矣　事物紀原曰杜摯笳賦序云昔伯陽避レ亂入レ戎懷レ土遂建ニ斯樂ヲ矣　漢舊錄曰胡人卷ニ蘆葉ヲ吹レ之故曰ニ胡笳ト亦曰李伯陽入ニ西戎ニ所レ造矣　李陵答ニ子卿ニ書曰側レ耳遠聽胡笳互動牧馬悲鳴晨坐聽レ之不覺淚下矣　笳は胡人の吹所依て胡笳と云也

波の皷　白樂天に記す

秋の調　律の調也呂を春とし律を秋とす又沙陁調平調大食調等是秋の調子也　〇こゑのふるをねにたてよとや今宵さは秋の調の聲のかきりを猿衣

萬代迄の竹の葉の酒　文選註曰竹葉酒也矣　百詠註云宜城出ニ竹葉酒ヲ矣　本草綱目云竹葉酒治ニ諸風熱病ニ淸レ心暢レ意淡竹葉煎汁釀レ酒飮矣故實名目云昔竹葉を三本の木のうつほの雨水に漬して酒を作り出せり其三本の木は杉の木也今酒屋に椙葉を出すは此故也又酒を見きと云は三本の木の義也竹葉と云も是也と云々

或云漢朝に劉石と云者繼母我實子には善飯食をあたへ劉石には糟糠の飯をあたふ劉石是を不レ食して木の股に捨自然に雨水落積て後芳しかりけれは劉石試レ之其味美也竹葉を折て指覆國王に獻す因酒を云ニ竹葉ニ云々

家〇竹の葉にまくきの菊を折そへて花をふくめる玉の盃隆季

入江にかれたつ足もてはよろ〳〵と　枯たつ蘆といひかけたり　〇難波江や波こそ春のわか葉より枯たつ蘆そ見えてすくなき光雄

謠曲拾葉抄 終

室松岩雄
古內三千代　校
保持照次

明治四拾貳年貳月五日印刷
明治四拾貳年貳月拾日發行

定價金參圓也

著作權所有
不許飜刻複製

校訂編輯者　室松岩雄

發行者　東京市麴町區飯田町五丁目八番地　目黑和三郎

印刷者　東京市神田區三崎町三丁目一番地　小西幸吉

印刷所　東京市神田區三崎町三丁目一番地　日本印刷株式會社

發行所　東京市麴町區飯田町五丁目八番地　國學院大學出版部